
闇を狩る少年

竜王 & 竜姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇を狩る少年

【Nコード】
N6527N

【作者名】
竜王&竜姫

【あらすじ】
少年は少女に出会いある約束をする。
仲間のため、自分のため、彼は進み続ける。
彼の進む道にあるのは仲間の笑顔か泣き顔か…

現在更新速度低下中です。

闇を狩る少年 竜馬の技（前書き）

今までに出てきた竜馬の使用した技です。

新しい技が出たら追加されます。

ネタバレが含まれます。

それが嫌な方はここで戻ってください。

闇を狩る少年 竜馬の技

無々の形状名 刀シユベアマモトファー 手甲ツインシユベアタイサー 双剣ダブルヒストウザウサヤ ナ이프 双銃 大鎌

体術

・閃天華せんてんか
掌底。

基本的には片手で打ち込む。
両手の場合は威力が激増する。

・閃天裂華せんてんれっか
左右にいる敵に同時に？閃天華？を打ち込む。

・死刺連撃ししれんげき
敵の四肢を突いて一時的に動かなくする。

・轟天裂覇こうてんれっぱ
敵の腹部に踵落としを打ち込み地面に叩き付ける。

・淵冥脚えんめいきゃく
片足を軸に敵に蹴りを放つ。

・白式 白蓮びやくしやく びやくれん
掌に浸透系の気を込め敵に打ち込む。

喰らった場合破裂し粉々になる。ただし肌に直接触れなければ意味は無い。
右手でのみ打ち込める。

・黒式 黒蓮

掌に非浸透系の気を込め敵に打ち込む。喰らった場合外装（服や鎧、及び爪や肌等）が爆ぜる。

左手でのみ打ち込める。

・無式 終蓮

右手に？白蓮？、左手に？黒蓮？を込めて敵に打ち込む。
喰らった場合、？白蓮？で内部を？黒蓮？で外部を破壊され消滅する。

片手だけが当たった場合はその込めている技だけ発動する。

・旋風閃天掌

旋風を纏った掌底を打ち込み敵を吹き飛ばす。

付与効果として掌底を受けた敵は旋風で切り刻まれる。

剣術

・斬光狼影刃

斬り上げた後にすかさず斬り下ろしに変え素早く斬る。

・瞬華終刀

上下左右から6連続で敵に斬りかかる。

・劫竜火灰塵

焰を纏った刀で横薙ぎに斬ってから縦に切り裂く。
その後地面に突き立て自分を中心に火柱があがる。

・絶竜氷双撃

冷気を纏った双剣で五回連続で切り裂く。

斬撃と同時に氷の礫しづてが飛び、敵に突き刺さる。

鎌術

・死神の葬送曲デス・オブ・ロンド

大鎌に魔力を込め刃を巨大化させ薙ぐ。

・竜雷閃空鎌りゅうらいせんくわん

大鎌に込めた刃状の雷を飛ばし敵を斬る。

威力を調節すればスタンガン程度まで下げられる。

・竜雷閃空鎌・散りゅうらいせんくわん ちり

? 竜雷閃空鎌? の発展形。

大鎌に込めた刃状の雷を飛ばし敵の近くで弾けさせる。

弾けた雷は周囲に雷を撒き散らし敵を攻撃する。

カートリッジを使用する魔法

・紅蓮グレイゲン 紅椿ロートカメリエツレン 紅蓮ヘにっばき

カートリッジを1つ消費する。

刃の形状の無々に焔を纏わせる。

『華』の一つ。

・蒼穹ウエルキン 蒼蓮華ブルーロートウスそつきゅう 蒼穹あおれんげ 蒼蓮華

カートリッジを1つ消費する。

双剣の形状の無々に冷気を纏わせる。

『華』の一つ。

・翠旋ミドリロタチ 翠撫子アディアンタ 翠旋あひせん 翠撫子みどりなでしこ

カートリッジを1つ消費する。

手甲の形状の無々に旋風を纏わせる。

『華』の一つ。

ゲーベドゥナゲーヴァエンツィアズグレイ

・黄雷 黄竜胆 黄雷 黄竜胆

カートリッジを1つ消費する。

大鎌の形状の無々に雷を纏わせる。

『華』の一つ。

モメントンナクラムソクカメリアムン

・瞬炎 紅蓮椿 瞬炎 紅蓮椿

カートリッジを2つ消費する。

刀の刀身が砕け焰によって刀身が形成される。

『彩華』の一つ。

インステント四イキウスアズユールシムンヒョウソウキョウレン

・瞬氷 蒼穹蓮華 瞬氷 蒼穹蓮華

カートリッジを2つ消費する。

双剣の刀身が砕け冷気による刀身が形成される。

『彩華』の一つ。

インステントヌチケムタチオンディアムン

・瞬風 翠旋撫子 瞬風 翠旋撫子

カートリッジを2つ消費する。

手甲が砕け両腕に旋風が巻き起こる。『彩華』の一つ。

モメントンナヌイカニングゲーヴァアムン

・瞬雷 黄雷竜胆 瞬雷 黄雷竜胆

カートリッジを2つ消費する。

大鎌の刃が砕け雷による刃が形成される。

『彩華』の一つ。

れんぎ ひゃっかりょうらん

・連技 百花繚乱

『華』の技を3連続で放つ技。

組み合わせは自由に行える。

ユリッドフアクトウ・ド・ドウルストウ
・怒りし狂神

カートリッジを消費して様々な効果を発動する。
最初のカートリッジロードで理性が無くなる。

・奇跡ノ光刃

？怒りし狂神？が竜馬に会わせて最適化された魔法。
カートリッジを消費して様々な効果を発動する。
竜馬の？護りたい？？救いたい？と言う思いの強さに比例して強くなり少しでも？憎しみ？？怨み？と言った負の感情があれば発動出来ない。

ロウレイヌ・クリンゲル
・途切れぬ刃

ナイフのカートリッジ魔法。
カートリッジをロードし全く同じナイフを生成する。
生成されたナイフのカートリッジは生成時に基となったナイフのカートリッジ数と同じになる。

砲撃魔法

・ゼロ・ブレイカー
物理ダメージ。

一分毎に当たる範囲が十分の一ずつ狭くなる。
威力と速度は上昇していく。
最初の範囲は10万km。
非殺傷不可。

・インフィニティ・ブレイカー
魔力ダメージ。

一分毎に当たる範囲が十倍ずつ広がる。威力と速度は上昇していく。

最初の範囲は1m。

結界破壊効果。

殺傷不可。

・アンノウン・ブレイカー

上記の二つの砲撃を合成したもの。

掛け声は『夢幻万壊』

変身魔法

・不死鳥転身ふしちょうてんしん

呪文「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

変身時の名称はフェニックス。

赤髪に紅瞳。

髪は腰ぐらいの長さ。

背中には茜色の翼が生えており両手首からは炎が出ている。

声が異常に綺麗な声になる。

変身中は不老不死。

変身中は焔が扱える。

ただし焔で与えたダメージは次に変身する時に全て返って来る。

・魔狼転身まろうてんしん

呪文「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

変身時の名称はフェンリル。

白銀髪に紅瞳。

両腕と両足の膝から下が毛皮に覆われている。

白銀の狼の耳と尻尾が生える。

動体視力と聴力の上昇と防御力の低下。

一度相手の影を踏めばいる場所を把握できる。

リミッターが3個付いている。

リミッター名は『レージング』『ドローミ』『グレイプニル』

・竜魂転身りゅうこんてんしん

呪文「ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、怒れる竜。

破壊の主にして暴君の象徴よ。其は強大にして凶暴なり。『竜魂転

身』」

変身時の名称はヴリトラ。

黒髪に金瞳。

髪は腰ぐらいの長さ。

背中には漆黒のドラゴンの翼が生えており両腕は竜鱗に包まれ鋭い爪が生えている。

炎、氷、雷、風の4つの属性を操ることが出来る。

魔力のコントロールがしやすくなる。

フェニックス時の魔法、技

・治癒の焰ちゆのほのお

病気や怪我を一旦自分に移し治療する魔法。

よほどの傷でない限り外傷などが移った事は分からない。同時に治す人数が増えれば増えるほどに怪我は重複する。

・守護天翼しゆごてんよく

フェニックス時の翼を広げ自身と翼で覆える範囲のモノを護ることができる。

ただし、発動中は外部が見えない。

・陽炎かげろう

焰によって偽の自分を作りだし囷にする。

その間に敵の背後などに移動し油断している敵を攻撃する。

・廻向天坏命メグリムカイシテンツイノミコト

呪文「輪廻の輪に囚われし傀儡よ。今、この時においてその戒めとなりし糸から解き放たれよ。天の坏に注がれし神水は傀儡に自我を与える。汝が望みを叶えしは我が望みなり。命は再び新たな地にて生を得る。焰は生命を司り哀しき記憶を忘れたまえ。御霊よ、新たな旅路へと向かいたまえ。願わくは汝らの旅に幸福あることを……」

死者の魂を癒やし、浄化させる技。

魔力を多目に使用すれば対象の記憶を維持したまま転生させることが可能。

ただし、1度発動するために使用する魔力の最低量はSSS+。

この技を複数人に同時に使用した場合、転生先は同じになる。

また、転生する先は竜馬にも分からない。

フエンリル時の魔法、技

・影槍えいそう

影から槍を生やし突き刺す。

影から離す事は出来ない。バージョンツヴァイでは影から完全に分離し空中に停止させることが出来る。

・影樹槍えいじゆそう

影から槍を生やし突き刺す。

突き刺さった槍から敵の体内に向けてさらに槍が生えていき樹の様に敵を内部から切り裂く。

・影道 かげみち

影に潜り移動する。

一度踏んだ人間の影なら自由に行き来出来る。フェンリルのリミッターが2つ解除されていれば次元間も移動できる。

・影黄泉 かげよみ

影を底無し沼の様にして沈める。

・影爪 かげつめ

両腕に影を纏わせ巨大な爪にする。

・影刃 えいじん

持っている武器に影を纏わせ刃を作りだす。
基本的にはナイフの形状の無々に使用する。

・影分身 かげわけみ

自身の影から自分とほとんど同じ力を持つ分身を創りだす。
分身2体までなら竜馬を含めEXランク、3体目以降はSSS+、SSS、SS、……と分身が増える毎にそれぞれの魔力は減少していく。

また、分身が変身魔法を使うことも可能。
分身が破壊されたとき分身の残った魔力は他の分身と竜馬に分けられる。

・影見 えいけん

近くの影を操り画面のようにして対象の様子を見る。
ただし時間軸が不安定なため同じ時間かを調べる必要がある。

・影蔵 かげくら

影の中に武器、道具、人などを収納する。
影の中に物を入れた状態でフェンリルを解除しても中の物に影響は
なく再び変身すれば取り出すことができる。
また、影さえあれば何処からでも取り出すことができ、武器の射出
も可能。

・シャドウ・ブレイカー

影に潜り敵の影から砲撃を放つ。

掛け声は『隠密影撃』

・影の乙女 シャドウメイディエン

？影槍 Ver??と？影道？を組み合わせた技。
自分に向けて飛来する？影槍？を自分に当たる直前に？影道？で自
分と敵の位置を交換し？影槍？を突き刺す。

ヴリトラ時の魔法、技

・多重炎牢結界 インフェル

魔法陣を出現させる。

魔法陣の内部の温度が上昇していく。

魔法陣内では火球、火槍、火檻、火柱等が創れる。

熱風を起こすことも可能。

・多重氷牢結界 コキユートス

魔法陣を出現させる。

魔法陣の内部の温度が低下していく。

魔法陣内では氷球、氷槍、氷檻、氷柱等が創れる。

吹雪を起こすことも可能。

・多重風牢結界シルフィード

魔法陣を出現させる。

魔法陣の内部は常に強風が巻き起こる。

魔法陣内ではカマイタチ、真空等が起こせる。

・多重雷牢結界ポルテニクス

魔法陣を出現させる。

魔法陣の内部は常に雷が奔っている。

魔法陣内では雷球、雷槍、雷檻、雷柱等が創れる。

・無限天牢結界アスガルド

『多重 牢結界』を全て合成した魔法。

完全に球体の結界で内部には魔力球が無数に浮遊しており操作できる。

？結界破壊？の効果以外では破壊は不可能。

・聖戦ジハード

？無限天牢結界？内部の魔力球が中心に集まり爆発を引き起こす。

爆発の衝撃は結界に押し止められるので何度も内部に衝撃を押し返す。

・電磁加速砲レールガン

ロウレイヌ・クリンゲル

？途切れぬ刃？と？多重雷牢結界？を組み合わせた技。？途切れぬ

刃？によつて増殖するナイフを？多重雷牢結界？の雷で撃ち放つ。

命中した場合、対象が無機物なら溶解、生き物なら感電＋燃焼する。

・極雷の大槍レール・ザ・グングニル

ロウレイヌ・クリンゲル

？途切れぬ刃？と？多重雷牢結界？を組み合わせた技。

？途切れぬ刃？によつて増殖するナイフを二本同時に？多重雷牢結

界？の雷で撃ち放つ。

命中した場合、対象が無機物なら熔解、生き物なら感電＋燃焼する。
？電磁加速砲？より威力、スピードが格段に上昇する。

・獄雷レイル・ザ・クアトロ・ゲンゲニルの死連槍

100本の？極雷の大槍？を25本ずつ収束させ、？極雷の大槍？
よりも威力、スピード、大きさ、全てにおいて上の雷の槍を創り上
げる。

「？極雷の大槍？抹殺移行キリンゲンソフト」とは？極雷の大槍？を収束させるため
の始動キ！。

オリカ設定（前書き）

タイトル通りオリカの設定です。

新しいオリカなどが書いてあります。

増えるかもしれませんが。

オリカ設定

・紅魔 - 十六夜咲夜 血 戦士族 / チューナー 4
1 ターンに1度、次の相手ターンのドロワー、スタンバイ、メイン、バトルフェイズの内1つをスキップする事が出来る。
その後、自分の手札を二枚選択して墓地に捨てる。
この効果は自分のターンでのみ発動できる。
このカードは？紅魔 - レミリア・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

ATK 1900 DEF 1500

・紅魔 - レミリア・スカーレット 血 悪魔族 / シンクロ 12
チューナー + チューナー以外の悪魔族2体以上
自分フィールド上にこのカードが存在している時、発動した魔法、罫、効果モンスターの効果の対象を自分が選択できる。
対象をとらない効果や自分フィールドや相手フィールドに適用される効果の場合、効果を無効にするか選択し無効にする場合、破壊するか破壊しないかを選択する事が出来る。

このカードが墓地に送られた時、自分フィールド上にコウモリトークン（悪魔族・闇・星1・ATK/DEF1000）を出せるだけ特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時に1体でもコウモリトークンが残っている場合、コウモリトークンを全てリリースしこのカードを墓地から特殊召喚する。
この効果を使用したターンのエンドフェイズに自分の手札を全て捨てる。

ATK 2800 DEF 2500

・紅魔 - 小悪魔 血 悪魔族 / チューナー 4

このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る。
この効果を使用したターン自分はバトルフェイズを行えない。
このカードは？紅魔 - パチュリー・ノーレッジ？のシンクロ素材にしか使用できない。

ATK 1300 DEF 1500

・紅魔 - パチュリー・ノーレッジ 血 魔法使い族/シンクロ
12

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上
1ターンに1度、手札を墓地に送り効果を発動する。
墓地に送ったカードによって以下の効果を得る。

炎属性・相手に1500ポイントのダメージを与える。

水属性・デッキからカードを2枚ドローする。

風属性・相手のフィールド上のカードを3枚まで手札に戻す。

地属性・相手の手札を2枚墓地に送る。

光属性・このターン相手は魔法・罫・モンスター効果を1度だけしか発動できない。

闇属性・フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

魔法カード・自分の墓地のカードを3枚選択しデッキに戻しシャッフルする。

ATK 2500 DEF 500

・紅魔 - 紅美鈴 血 戦士族/チューナー 4

このカードがカード効果によって手札に加わったとき特殊召喚できる。

ただしそうした場合、自分フィールド上のモンスターを1体破壊する。

その後手札を1枚選択し墓地に捨てる。

このカードは？紅魔 - フランドール・スカーレット？のシンクロ素材

材にしか使用できない。

ATK 1900 DEF 2000

・紅魔 - フランドール・スカーレット 血 悪魔族 / シンクロ
12

チユリーナー + チユリーナー以外の悪魔族2体以上

このカードが攻撃した場合ダメージ計算後に相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

このカードが墓地に送られた時、自分フィールド上にこもりトークン(悪魔族・闇・星1・ATK/DEF1000)を出せるだけ特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時に1体でもこもりトークンが残っている場合、こもりトークンを全てリリースしこのカードを墓地から特殊召喚する。

このカードが攻撃したターンのエンドフェイズに自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

ATK 4500 DEF 2000

・ルナティック・ソウル 狂気の魂 罨カード

自分フィールド上に?紅魔 - フランドール・スカーレット?が表側表示で存在する時、自分フィールド上にセットされているカードと手札を全て除外し発動する事が出来る。

手札に?紅魔 - フランドール・スカーレット/ルナティック?がある場合手札を除外しなくても良い。

自分フィールド上の?紅魔 - フランドール・スカーレット?を墓地に送り自分の手札、デッキ、墓地から?紅魔 - フランドール・スカーレット/ルナティック?を特殊召喚する。

このカードは相手の魔法、罨、モンスター効果によって無効化されない。

・紅魔・フランドール・スカーレット/ルナティック 血 悪魔
族 12

このカードは？ルナティック・ソウル狂気の魂？の効果でのみ特殊召喚できる。

このカードと戦闘を行ったモンスターは効果を無効にして破壊する。
このカードは魔法、罠、モンスター効果、戦闘によっては破壊されない。

このカードがフィールドから離れる時、必ず手札に戻り自分の墓地から？紅魔-？と名の付いたシンクロモンスターを墓地から3体まで特殊召喚しさらに墓地から？ルナティック・ソウル狂気の魂？を手札に加える。

ATK 5000 DEF 3500

・魅了 魔法カード

自分フィールド上に《紅魔・レミリア・スカーレット》または《紅魔・フランドール・スカーレット》が存在する時発動する事が出来る。

このターンのエンドフェイズまで相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロール得る。

・紅魔の絆 罠カード

自分フィールド上に《紅魔・レミリア・スカーレット》1体しか存在しない時発動する事が出来る。

自分のデッキ、墓地から「紅魔」と名の付くモンスターを1体ずつ自分フィールド上に特殊召喚する。

自分のターンでしか発動する事が出来ない。

・紅魔の門番 罠カード

相手モンスターが攻撃宣言した時に発動することができる。

自分のデッキから《紅魔・紅美鈴》を墓地に送り相手モンスターからの攻撃を無効にしバトルフェイズを終了させる。

その後、デッキからカードを1枚ドローする。

・紅魔の怒り カウンター罠カード
自分フィールド上に《紅魔 - パチュリー・ノーレッジ》が存在する時発動する事ができる。
効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。
ただしこのカードは相手ターンのメインフェイズでしか使用できない。

・あくまで悪魔 魔法カード
自分フィールド上に悪魔族のモンスターが存在する時に発動する事が出来る。

自分の墓地に存在する闇属性・悪魔族・攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚する。

・犬耳 魔法カード
自分フィールド上に？紅魔 - 十六夜咲夜？が存在している時に発動する事が出来る。
自分フィールド上の？紅魔 - 十六夜咲夜？を墓地に送り手札、デッキ、墓地から？犬咲夜？を特殊召喚する。

・犬咲夜 血 獣戦士族 8
このカードは？犬耳？の効果でしか特殊召喚出来ない。
このカードが表側表示で存在している限り攻撃対象に選択されない。

ATK 500 DEF 500

・メイド召集！ 速攻魔法カード
自分フィールド上に？紅魔 - 十六夜咲夜？が存在している時に発動する事が出来る。

自分フィールド上にメイド妖精トークン（悪魔族・光・星2・ATK/DEF1000）を4体特殊召喚する。

このカードを発動したターン自分は特殊召喚を行えない。

・昼寝 魔法カード

自分フィールド上に？紅魔 - 十六夜咲夜？？紅魔 - 紅美鈴？が存在している時に発動する事が出来る。

ライフを3000回復し？紅魔 - 紅美鈴？を破壊する。

・吸血鬼の施し 魔法カード

ライフを半分払い発動する事が出来る。

手札が6枚になるようにデッキからカードをドローする。

フォーチュン・オブ・スカーレット・ムーン
・運命の紅き月 罠カード

自分フィールド上に？紅魔 - レミリア・スカーレット？が表側表示で存在する時、自分フィールド上にセットされているカードと手札を全て除外し発動する事が出来る。

手札に？紅魔 - レミリア・スカーレットノムーン？がある場合手札を除外しなくても良い。

自分フィールド上の？紅魔 - レミリア・スカーレット？を墓地に送り自分の手札、デッキ、墓地から？紅魔 - レミリア・スカーレットノムーン？を特殊召喚する。このカードは相手の魔法、罠、モンスター効果によつて無効化されない。

・紅魔 - レミリア・スカーレットノムーン 血 悪魔族 1 2

このカードは？フォーチュン・オブ・スカーレット・ムーン運命の紅き月？の効果でのみ特殊召喚できる。

1ターンに1度相手のドロー、スタンバイ、メイン、バトルフェイズの内1つをスキップする事が出来る。

自分フィールド上にこのカードが存在している時、発動した魔法、罠、効果モンスターの効果の発動を無効にするかしないかを選択でき、効果の対象を自分が選択できる。

このカードがフィールドから離れる時、必ず手札に戻り自分の墓地

から？紅魔 - ?と名の付いたシンクロモンスターを墓地から3体まで特殊召喚しさらに墓地から？フォーチュン・オブ・スカーレット・ムーン運命の紅き月？を手札に加える。

ATK 4000 DEF 3500

・ニュー・ウイーク新たな一週間 畏カード

自分フィールド上に？紅魔 - パチュリー・ノーレッジ？が表側表示で存在する時、自分フィールド上にセットされているカードと手札を全て除外し発動する事が出来る。

手札に？紅魔 - パチュリー・ノーレッジ/ウイーク？がある場合手札を除外しなくても良い。

自分フィールド上の？紅魔 - パチュリー・ノーレッジ？を墓地に送り自分の手札、デッキ、墓地から？紅魔 - パチュリー・ノーレッジ/ウイーク？を特殊召喚する。このカードは相手の魔法、畏、モンスター効果によって無効化されない。

・紅魔 - パチュリー・ノーレッジ/ウイーク 血 魔法使い族

1 2

このカードは？ニュー・ウイーク新たな一週間？の効果でのみ特殊召喚できる
1ターンに1度、手札を墓地に送り効果を発動する。

墓地に送ったカードによって以下の効果を得る。

炎属性・相手に2500ポイントのダメージを与える。

水属性・デッキからカードを3枚選択し手札に加える。

風属性・相手のフィールド上のカードを2枚までデッキに戻す。

地属性・相手の手札を見て3枚選択し墓地に送る。

光属性・このターン相手は魔法・畏・モンスター効果を発動できない。

闇属性・フィールド上に存在するカードを2枚除外する。

魔法カード・自分の墓地のカードを5枚選択しデッキに戻しシャッフルする。

このカードがフィールドから離れる時、必ず手札に戻り自分の墓地

から？紅魔 - ? と名の付いたシンクロモンスターを墓地から3体まで特殊召喚しさらに墓地から？^{ニュー・ウィーク}新たな一週間？を手札に加える。

ATK 3500 DEF 2500

・おやつの時間 } sweet time } 永続魔法カード
自分のターンのスタンバイフェイズに？紅魔・レミア・スカーレット？もしくは？紅魔・フランドール・スカーレット？のどちらかを選択する。

選択したモンスターの攻撃力分ライフを回復する。

選択したモンスターは次の自分のスタンバイフェイズまで効果を発動できず攻撃もできない。

・吸血鬼の晚餐 速攻魔法

自分フィールド上に？紅魔・レミア・スカーレット？が表側表示で存在している時発動する事が出来る。

自分フィールド上に存在する？キラ・トマト？を1体リリースすることで、デッキからレベル4以下のモンスター2体を特殊召喚することが出来る。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃することはできずこのターンのエンドフェイズに破壊される。

・吸血鬼の結末 永続魔法

自分フィールド上に？紅魔・レミア・スカーレット？または？紅魔・フランドール・スカーレット？が表側表示で存在する時発動する事が出来る。

このカードがフィールド上存在する限り、「コウモリトークン」と「こづもりトークン」は特殊召喚することは出来ない。

またこのカードはカード効果で破壊することができない。

・吸血鬼の開放 通常魔法

自分フィールド上に？吸血鬼の結束？が存在する時発動する事が出来る。

自分のエクストラデッキから？紅魔・レミア・スカーレット？または？紅魔・フランドール・スカーレット？を自分フィールド上に特殊召喚する。ただしこの効果での特殊召喚はシンクロ召喚として扱う。

・紅魔の砦 通常罫

自分フィールド上に？吸血鬼の開放？が存在する時発動する事が出来る。

このターン自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘及びカード効果では破壊されない。

その後、自分の墓地から、チューナーモンスター1体を選択して守備表示で特殊召喚することが出来る。

ただしこの効果で特殊召喚したチューナーモンスターはシンクロ素材に使用することが出来ない。

・まじゅつぼうぎょけつがい 魔術防御結界 通常罫

自分フィールド上に、？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？が表側表示で存在するとき発動することができる。

自分フィールド上に存在するモンスターの守備力はエンドフェイズまで400ポイントアップする。

その後自分のデッキから罫カードを2枚まで自分の魔法&罫カードゾーンにセットすることができる。

この効果でセットした罫カード1枚につき500ポイントのダメージを受ける。

・虹の光 通常罫

自分の墓地に？紅魔・紅美鈴？が存在するとき発動することができる。

このターン自分が受ける相手の効果モンスターの効果によるダメージを0にする。

発動後、自分の墓地に存在する？紅魔・紅美鈴？を自分フィールド上に特殊召喚し、自分ライフを1500ポイント回復する。

・ 魔術破壊 通常魔法

自分フィールド上に？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？が表側表示で存在するとき発動することができる。

相手フィールド上に存在する表側表示の魔法・罠カードを全て破壊する。

・ 紅魔の希望 通常魔法

自分フィールド上に？紅魔・？と名のついたモンスターが5体存在するとき発動することができる。

相手フィールド上のモンスターをすべて破壊し破壊したモンスター1体につき500ポイントのダメージを与える。

このカードを発動したターン、バトルフェイズは行えない。

このカードを発動した場合、相手プレイヤーは魔法・罠・効果モンスター¹の効果が発動する事はできない。

・ 紅き月の解放 通常魔法

手札にこのカードしか存在せず、自分のフィールド上に、？吸血鬼の結束？しか存在しない時発動することができる。

自分のデッキから、？^{フォーチュン・オブ・スカレット・ムーン}運命の紅き月？を墓地に送り、自分のデッキ、または墓地から？紅魔・レミリア・スカーレットノムーン？を召喚条件無視して特殊召喚する。

このとき相手フィールド上にモンスターが存在するときこのターンのエンドフェイズまで相手が発動した効果モンスターの効果は無効する。

・フォー・オブ・アカインド 通常魔法

自分のフィールド上に？紅魔・フランドール・スカーレット？が存在する時に発動することができる。

以下の効果から一つを選択する。

？相手のフィールド上のカードを全て破壊する。

？相手の手札を全て破壊する。

？相手のライフに？紅魔・フランドール・スカーレット？の攻撃力の半分を与える。

？自分のライフを4000払いこのカード以外のカードを全て破壊する。破壊した相手のカードは全て除外される。

このカードを発動したターン自分はバトルフェイズを行えずエンドフェイズに？紅魔・フランドール・スカーレット？は破壊される。

・お仕置き 通常魔法

自分フィールド上に？紅魔・紅美鈴？が表側表示で存在している時発動する事が出来る。

デッキから？紅魔・十六夜咲夜？を自分フィールド上に特殊召喚し、お互いのプレイヤーはカードを2枚ドロウする。

その後？紅魔・紅美鈴？を破壊する。

・紅魔コール 通常魔法

自分のデッキから紅魔と名のついたカードを1枚手札に加える。

？紅魔コール？は1ターンに1枚しか発動できない。

・ルナダイヤル 通常罫

自分フィールド上に、自分フィールド上に？紅魔・十六夜咲夜？が表側表示で存在している時発動する事が出来る。

このターン、自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘では破壊されない。

バトルフェイズ終了時デッキからカードを1枚ドロウする。

・魔力加速術 通常魔法

自分フィールド上に？紅魔・小悪魔？が表側表示で存在するとき手札から発動することができる。

自分フィールド上に存在するモンスター1体リリースする。

デッキからカードを3枚ドローし、その後手札から2枚捨てる。

・神槍スピア・ザ・グングニル 通常魔法

自分フィールド上に？紅魔・レミリア・スカーレット？が表側表示で存在し？吸血鬼の結束？が存在するとき手札から発動することができる

相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

この効果で破壊したモンスター1体につき500ポイントのダメージを相手ライフに与える。

このカードを発動したターン？紅魔・レミリア・スカーレット？は攻撃宣言できない。

・魔法防御結界 通常罫

自分フィールド上に？紅魔・小悪魔？が表側表示で存在するとき発動することができる。

相手モンスターの攻撃を無効にしバトルフェイズを終了する。

その後自分フィールド上のモンスターを1体破壊する。

次のターンのスタンバイフェイズ、墓地に存在するこのカードを除外することで、自分フィールド上に存在するモンスター1体選択しエンドフェイズまで攻撃力を1200ポイントアップする。

・大魔術の呪文式 通常魔法

自分の墓地に存在する？紅魔・小悪魔？とレベル4モンスター2体をゲームから除外する。

その後自分のエクストラデッキから？紅魔・パチュリー・ノーレッツ

ジ？を自分フィールド上に特殊召喚する。（この特殊召喚はシンク
口召喚として扱う。）

・吸血鬼の威圧 カウンター罠

自分フィールド上に？紅魔 - レミリア・スカレット？または？紅
魔 - フランドール・スカレット？が表側表示で存在する時発動す
る事が出来る。

相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

・気力回復 通常罠

自分の墓地に？紅魔 - 紅美鈴？が存在するとき発動することができ
る。

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

・紅魔の結束 通常魔法

自分フィールド上に存在する？紅魔 - ？と名のついたモンスター1
体選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド
上に表側表示で存在する？紅魔 - ？と名のついたモンスターの攻撃
力の合計分アップする。

・霊天使 オール・ノーレッジ 光 天使族 6

このカードがアドバンス召喚に成功した時、このカードをアドバン
ス召喚するためにリリースしたモンスターと同じ属性の相手の場の
モンスターを任意の枚数選択しコントロールを得る事が出来る。
コントロールを得たモンスターが自分の場に存在している限りこの
モンスターは破壊されない。

ATK 2600 DEF 1900

・紅魔 - 紅き月の少女達

スカレット・ガールズ

ランク12 血属性 悪魔族 ATK/6000 DEF/3500
0 エクシーズ

レベル12 『紅魔』と名の付くシンクロモンスター×3

このカードは上記のエクシーズ素材でのエクシーズ召喚でのみ特殊召喚できる。

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除くことで、以下の効果から1つ選択し、発動する。

次の相手ターンのドローフェイズ・メインフェイズ1・メインフェイズ2をスキップする。

自分のデッキ・手札・墓地に存在する『紅魔』と名の付くレベル4モンスター3体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

相手フィールド上の魔法・罫カードを全て破壊する。この効果の発動時、相手は魔法・罫・モンスターの効果を発動できない。

・紅魔 - スカレット・サーヴァント 紅き月の従者達

ランク4 血属性 戦士族 ATK/2700 DEF/2000

エクシーズ

レベル4 『紅魔』と名の付くモンスター×3

このカードは上記のエクシーズ素材でのエクシーズ召喚でのみ特殊召喚できる。

自分フィールド上の『紅魔』と名の付くシンクロモンスターが戦闘またはカードの効果でフィールドを離れた時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除くことで元の表示形式でそのモンスターを特殊召喚する事ができる。

・蛇川乱太 星7 攻撃力3000 防御力2500

このカードが守備表示モンスターを攻撃したとき、このカードの攻

撃力が攻撃対象にしたモンスターを超えていた場合、その超えている差分ダメージを与える。

このカードが攻撃したターンのエンドフェイズに、このカードをリリースすることで、デッキ・手札・墓地から蛇川乱太^{ラストモ}last modeを特殊召喚する

・蛇川乱太last mode 星8 攻撃力3500 守備力3000

このカードは蛇川乱太の効果でしかフィールドに召喚できない。

このカードが場にあるとき、罨カードの効果は無効化する。

このカードが攻撃するとき、相手に500ポイントのダメージを与える。

なお、この効果は墓地に駆動疾風または相山遼がない場合は発動できない。

このカードが攻撃したターンのエンドフェイズに、このカードをリリースすることにより、蛇川乱太^{エンドモード}end modeをデッキ・手札・墓地から特殊召喚する

・蛇川乱太end mode 星9 攻撃力4000 守備力3500

このカードは蛇川乱太last modeの効果でしかフィールドに召喚できない。

このカードが攻撃するとき、500ポイントのダメージを相手に与える。

なお、この効果は墓地に神咲紅葉・参太空いずれかのカードがなくてはならない。

蛇川乱太・蛇川乱太last mode・蛇川乱太end modeを^{ワールドエンドモード}ワールドend modeを手札・除外することにより、蛇川乱太worldend modeを手札・デッキ・墓地から特殊召喚する

・蛇川乱太worldend mode 星10 攻撃力4500

守備力4000

このカードは蛇川乱太endmodeの効果でしか特殊召喚できない。

このカードが攻撃するときに、フィールドにフランドール・スカーレットまたは都山修太がいるときに、相手に500ポイントのダメージを相手に与える。このカードが破壊されるときに、フランドール・スカーレットの攻撃力を10000にしてもよい

・参太空 星6 攻撃力2300 守備力2000

このカードは、氷の用途の効果でしか召喚できない。

このカードが場にある限り、十六夜咲夜と名のついたカードの攻撃力は2300になる

・氷の用途 魔法

参太空と名のついたモンスターをデッキ・手札・墓地から特殊召喚する。

・駆動疾風 星6 攻撃力2400 守備力2300

このカードは、速さの用途の効果でしか召喚できない。

このカードが場にある限り、レミリア・スカーレットと名のついたモンスターの攻撃力は3000となる。

・速さの用途 魔法

駆動疾風と名のついたモンスターをデッキ・手札・墓地から特殊召喚する。

・都山修太 星6 攻撃力2500 守備力2400

このカードは、砲撃の用途の効果でしか召喚できない。

このカードが場にある限り、紅魔・小悪魔と名のついたモンスターは破壊されない

・砲撃の使途

都山修太と名のついたモンスターをデッキ・手札・墓地から特殊召喚する。

・神咲紅葉 星6 攻撃力2600 守備力2500

このカードは、雷の使途の効果でしか特殊召喚できない。

このカードが場にある限り、パチュリー・ノーレッジと名のつくモンスターは破壊されない。

・雷の使途

神咲紅葉と名のついたモンスターをデッキ・手札・墓地から特殊召喚する。

・相山遼 星6 攻撃力2700 守備力2600

このカードは炎の使途の効果でしか召喚できない。

このカードが場にある限り、紅美鈴と名のついたモンスターは破壊されない。

・炎の使途

相山遼と名のついたモンスターをデッキ・手札・墓地から特殊召喚する。

・worldendの儀式 魔法

蛇川乱太 worldendmodeがフィールドにある場合、人工神 蛇川乱太をデッキ・手札・墓地から特殊召喚してもよい

・人工神 蛇川乱太 星10 攻撃力5500 守備力5500

このカードはworldendの儀式の効果でしか召喚できない。

このカードがフィールドにある場合、モンスターカードの扱いを全

て通常モンスターにしてもよい。

このカードが守備表示の場合、破壊されず戦闘ダメージもプレイヤーは受けない。

このカードが攻撃表示の場合、フィールドのモンスターの攻撃力を500上げてよい。このカードが破壊された場合、蛇川乱太とworldendの儀式を墓地からデッキに加え、シャッフルする。

・ウイング 魔法 三枚

デッキ・手札・墓地から駆動疾風/ウイングモード 参太空/ウイングモード

神咲紅葉/ウイングモード 都山修太/ウイングモード 相山遼/ウイングモードを特殊召喚する。

・駆動疾風/ウイングモード 星8 攻撃力3500 守備力3500

このカードは、ウイングの効果でしか召喚できない。

フィールドに駆動疾風と名のつくモンスターがいる場合、墓地にあるウイングと名のつくカードとフィールドの駆動疾風をデッキに戻し、シャッフルする。フィールド上に、レミア・スカーレットと名のつくモンスターは攻撃力が4000になり、破壊されず、破壊された場合、デッキに戻す。

・ソニックシールド 罨 3枚

相手のモンスターが攻撃するとき発動してもよい。

フィールド上に、駆動疾風と名のつくモンスターがいなければ発動できない。

そのモンスターの攻撃を無効にして破壊する。

そして、自分はカードを一枚ドロウする。

・参太空/ウイングモード 星8 攻撃力3500 守備力3500

このカードは、ウイングの効果でしか召喚できない。

フィールド上に参太空と名のつくモンスターがいる場合、墓地にあるウイングと名のつくカードとフィールドの参太空をデッキに戻し、シャッフルする。

フィールド上に、紅魔と名のつくモンスターがいる場合、そのモンスターは攻撃力を500ポイント上げ、破壊されないようにする。

・アイストラップ 罠 3枚

相手が罠カードを発動したときに発動してもよい。

フィールド上に参太空と名のつくモンスターがいなければ発動できない。

相手の罠カードの発動を無効に、破壊する。

このときに、自分墓地に？紅魔-？と名のつくモンスターがいればデッキに戻し、シャッフルする（シンクロモンスターはエクストラデッキに戻す）

・神咲紅葉ノウイングモード 星8 攻撃力3500 守備力3500

このカードはウイングの効果でしか召喚できない。

フィールド上に神咲紅葉と名のつくモンスターがいる場合、墓地にあるウイングと名のつくカードとフィールドの神咲紅葉をデッキに戻し、シャッフルする。

フィールド上に蛇川乱太と名のつくモンスターがいる場合、自分プレイヤーはダメージを受けない

・サンダークラッシュ 魔法 3枚

フィールド上に神咲紅葉と名のつくモンスターがいる時にしか発動できない。

相手フィールド上のカードを一枚破壊する。

そして、墓地のカードを三枚デッキに戻してもよい。

そのとき、墓地に、アイストラップ・ソニックシールド・サンダー
クラッシュ・キャノンブレイバー・フレイムテンペスタと名のつく
カードをデッキに戻し、シャッフルしてもよい。

・都山修太ノウイングモード 星8 攻撃力3500 守備力3500

このカードはウイングの効果でしか召喚できない。

フィールド上に都山修太と名のつくモンスターがいる場合、墓地に
あるウイングと名のつくカードとフィールドの都山修太をデッキに
戻し、シャッフルする。

このカードが攻撃するときに、相手に500ポイントのダメージを
与える。

・キャノンブレイバー 装備魔法 3枚

フィールド上に都山修太と名のつくカードがある場合でしか発動出
来ない。

都山修太にこのカードを装備することにより、自分フィールドにあ
るカードの破壊を無効にすることができる。

・相山遼ノウイングモード 星8 攻撃力3500 守備力3500

このカードはウイングの効果でしか召喚できない。

フィールド上に相山遼と名のつくモンスターがいる場合、ウイング
と名のつくカードとフィールドの相山遼をデッキに戻し、シャッ
フルする。

このカードが守備表示の場合、自分フィールドにあるカードは破壊
されない。

・フレイムテンペスタ 速攻魔法 3枚

フィールド上に相山遼と名のつくモンスターがいる場合しか発動で
きない。

相手フィールドのカードを一枚破壊し、墓地のカードを一枚デッキに戻す

・スネークバイト 魔法 三枚

墓地にある、蛇川乱太・神咲紅葉・参太空・駆動疾風・相山遼・都山修太と名のつくカードを全てデッキに戻し、シャッフルする。

・ウイングリターン 魔法 三枚

墓地にある、ウイングと名のつくカードを全てデッキに戻し、シャッフルする

・ワームホール・リターン 魔法 3枚

墓地にある、蛇川乱太・神咲紅葉・参太空・駆動疾風・相山遼・都山修太と名のつくカード・紅魔と名のつくカード・ウイングと名のつくカード・ソニックシールド・アイストラップ・サンダークラッシュ・キャノンブレイバー・フレイムテンペスタと名のつくカード全てをデッキに戻す。(シンクロモンスターはエクストラデッキに戻す)

・究極を司る者 星1 攻撃力・守備力300

チューナーモンスター

このカードがフィールドにあり、蛇川乱太lastmode・endmode・worldendmodeと名のつくモンスターがいる場合、このカードは破壊されず、プレイヤーは戦闘ダメージを受けない

・究極神 蛇川乱太 星11 攻撃力・守備力6000

チューナーモンスター 究極を司る者+蛇川乱太lastmode・

endmode・worldendmodeのチューニングでしか召喚できない。このカードがフィールドにいる場合、フランドール・

スカーレットと名のつくモンスターの攻撃力・守備力は3000になる。このカードが破壊されるとき、相手のライフに6000ポイントのダメージを与える。

・狂乱の舞台 クレイジー・スクレイパー フィールド魔法

蛇川乱太と名のつくカードと相手フィールドにあるモンスターが召喚された場合、そのカードに絶望カウンターを6つおく。絶望カウンターは、置かれたモンスターが攻撃することに一個減る

絶望カウンターの効果

？蛇川乱太の絶望カウンターが無くなった場合、蛇川乱太をリリースしてデッキ・手札・墓地から人工神 蛇川乱太を召喚する

？相手モンスターの絶望カウンターが無くなった場合、そのモンスターは破壊され、相手プレイヤーのデッキの上から一枚を墓地に送る

プロローグ（前書き）

この小説は初めて書いたものです。
主人公は基本的に鈍感です。
それでも良ければ読んでください。

プロローグ

何も無い世界そんな世界で女の子が一人泣いていた。
俺は彼女になんて泣いているのか聞いた。

「ねえ、なんで君は泣いているの？」

「ッ!?!?…それは…私があんなものを創ったせいで皆が苦しんじゃうから」

そう言っただけで彼女はまた泣き出してしまった。

俺はただ泣きやんでほしくて、

「…なら俺が君の創ったものを壊せば泣きやんでくれる?」

「そんなこと出来るの?」

そんなことが出来るかどうかは分からない…でも、

「俺は君の泣き顔は見たくない!」

それ出来るかどうかじゃない、俺がやりたいんだ

プロローグ（後書き）

短いですがプロローグです。

ちなみにこの少女の出番はしばらくありません。

約束は守らないといけない？（前書き）

はい と言つ訳で竜王です。

とりあえずこの小説は私がノートに書き留めているものです。
おかしい点などは教えてくれると嬉しいです。

それでは本編をどうぞ！

約束は守らないといけない？

side???

目が覚めると自分のベッドの上だった。

「何だ今の夢？え〜と時計時計」

時計を見ると7時45分を指していた。
はっ!?7時45分!?

「やべえ!!!遅刻する!!!!!!」

俺は急いで制服に着替えかばんを持ち玄関を開けた。
朝飯?食ってる暇ねえよ!!!

俺が歩道を走っていると猫が前を通り過ぎた。

「今の黒猫じゃねえか。不吉だな」

黒猫はそのまま道路を横切ろうと進んでいった。
轢かれないよな?

「っておい!!!いきなり轢かれそうになってんじゃねええええええ!
!!!」

俺は黒猫を助けるために道路に出た。

黒猫は無事に歩道に戻せたが俺は車に轢かれ痛みを感じる間もなく
気を失った…

「…き…く…」

誰かが読んでいる…

「起き…く…い！」

厭だ俺は寝ていたい…

「起きてください！」

「いい加減起きろー！！！」

バキィッ

俺は誰かに思い切り蹴られた。

ものすごく痛い…

「あだあつ！？う？…ん？白？」

「え？？つつつきゃああ！！！」

蹴られた痛みで目を覚ました俺が最初に見たのは、白パン「ゲフンゲフン」もとい倒れている俺を見下ろす4人の少女達だった。

「え…と？君たちはいったい？」

状況がつかめず俺は質問をした。

「人にものを尋ねるときはまず自分の名前をいうものですよ」

メガネをかけた少女にそう言われた。

ん？この4人どっかで見た気が…？なんだっけ？

「俺は竜馬。魔神まがみ 竜馬りゅうまだ」

「私の名前はアウスです。竜馬様」

アウスか…ん？アウス？いやまさかな…

「あたしの名前はウィンだよ。よろしくねお兄ちゃん」

へ？お兄ちゃん？いやそれよりもウィン！？

「私の名前はエリアです。よろしく竜馬さん」

あれ？顔が赤い。まさかさつき見たのってエリアの…

「あたしの名はヒータだ。よろしくな竜馬！」

アウス、ウィン、エリア、ヒータとなるとやっぱり！！

竜馬「俺のデッキの霊使い達じゃねえか！！」

そうこの4人は「地霊使いアウス」「風霊使いウィン」「水霊使いエリア」そして「火霊使いヒータ」に描かれている少女達だった。

アウス「気付かなかったんですか？」

ウィン「えゝ お兄ちゃんひどい」

エリア「私も、その、少し悲しいです」

ヒータ「見てすぐ分かれよバカ竜馬」

うう、軽く凹む。

ウィン「じゃあお兄ちゃんも目を覚ましたし出発しよう！」

竜馬「は？出発ってどこに??」

霊使い「s「「「えっ?」「」「」

つーかここがどこかも知らねえし。

アウス「なにを言ってるんですか竜馬様。壊すんでしょう?闇?を」

アウスはなにを今さらという風に言った。

闇を壊す?そんなこといつ...あ!もしかして!!

竜馬「あの夢があつ...!!あれ?そーいや俺車に轢かれてたよな...
どうなってるんだ?」

ウィン「実はあの約束を守るにはあの世界で死なないといけなかつ

たのごめんねお兄ちゃん」

そっかまあ約束は破れないしな。まさか死ぬとは思わなかったが…
壊すのが？闇？なんてものだとは知らなかったが行くしかないか。

竜馬「行くのは良いとしてどこに行くんだ？」

ウイン「まず最初に行くのは魔法の世界。お兄ちゃんの世界みたいに
言っと、？魔法少女リリカルなのは？の世界だよ あ！着いたよ」

目の前を見ると大きな穴があった。

ウイン「んじゃ行つくよ」

そう言っつてウインは俺の手をとった。

へ？何で急に手を握って…まさか！

竜馬「え！ちよっちよっど待て」

ウイン「せゝのっ！」

竜馬「うわあああああゝゝ！！！！」

俺はウインに手を引っ張られ穴に落ちて行った。

ここはあの不幸な少年のセリフを言わせてもらっ！！！！

竜馬「不幸だあああああゝゝ！！！！！」

約束は守らないといけない？（後書き）

とりあえずここで区切ります。

セリフの量など気になるところは多いですがここでおしまいです。

次はどんな目にあうのか
闇を狩る少年続きます。

親バカとシスコンって結構きついな

side???

「不幸だああああー！！！！」

「にやつ！？何々！？」

私達が学校から帰っていると大きな声が聞こえてきました

「何かしら？うるさいわね」

「なのはちゃん見に行ってみない？」

すずかちゃんが見に行くかを聞いてきました。

興味が無いって言ったらウソになっちゃうかな…

なのは「うん、見に行ってみよう！アリスちゃん、すずかちゃん」

アリス「分かったわ行ってみましょう」

すずか「そうだね」

アリスちゃんとすずかちゃんに聞くと2人とも行くと言ってくれました。
した。

そして私達は声のした方に向かいました。

すると男の子が1人倒れていました。

アリス「何？何でこんな所で寝ているのよ？」

すずか「寝てるんじゃないかって気絶してるんだと思うよ？」

男の子に目立った傷はありませんでした。

どうしよう？

こんな時は…お母さんに電話で聞いてみよう

なのは母「もしも高町です…あらなのは、どうしたの？」
なのは「お母さん実は、男の子が倒れてたの！」

その後お父さんに迎えに来てもらって家に連れて行くことになりました。

side out

side 魔神竜馬

ワインに手を引かれ穴に落ちた俺は周りを見て驚いた。
いつの間にか周りの景色が穴の壁面から空に変わっていたからだ。
つてか流石に死ぬわっっ!!

竜馬「アウス、ワイン、エリア、ヒータ誰か助けて…って誰もい
ねええええ!!」

徐々に近づく地面…っか俺にどうしろと!?

side out

side 高町なのは

お父さんが迎えに来て家に帰った後男の子は居間に寝かせて私は部
屋で本を読んでいました。

何であの子は倒れていたのかなあ？

「うわあああー!!!!」

なのは「にゃっ!?!何々!?!」

いきなり叫び声が聞こえました。

なのは「何?何があったの!?!」

居間に私が行き男の子に聞くと男の子は一瞬驚いた表情をしましたが、すぐに元に戻りました。

「あっああ、ちょっと怖い夢を見てね…ここは？」

なのは「ここは私の家だよ。あなたの名前は？」

side out

side 魔神竜馬

気がつくところかこの家の居間に寝ていた。

ここはどこだろう？んっ？

足音が聞こえたのでそっちを見ると女の子がやって来た。

「何？何があつたの！？」

あれ？この子ってなのはじゃないか！

なんでここに？

あつなのはが見てる…

竜馬「あっああ、ちょっと怖い夢を見てね…ここは？」

なのは「ここは私の家だよ。あなたの名前は？」

竜馬「俺の名前は竜馬。魔神まがみ 竜馬りゅうまだよ」

あれ？なんで俺の目線がなのはの少し上程度なんだ？…まさか！

竜馬「高町…」

なのは「なのは！名前で呼んで！」

高町と呼んだら怒られてしまった。

竜馬「分かったよ。なのはこれで良いか？」

なのは「うん!！」

なのはは満面の笑みで喜んだ。
可愛いと思ったのは内緒だ。

竜馬「なのははこの家に全身が見える鏡って無い？」
なのは「鏡なら私の部屋にあるよついて来て」

俺はなのはについて行き部屋に向かった……はずだった。

「」なのはの部屋に行くだとおおおっ!！」

その言葉を最後に俺は再び気を失った。

親バカとシスコンって結構きついな（後書き）

今回よりここは霊使い達に任せます。

ヒータ「ふざけんなっ！このクソ作者あああー！ー！ー！」

ぐふあああああ！ー！ー！

作者ヒータに殴られ5m程中を舞う。

ウィン「あゝあ、飛んでっちゃった」

エリア「少し自業自得な気もするけど」

アウス「とりあえずここは締めましょう」

アウスが皆をまとめてゆく。

エリア「えっと、こんな作品ですが」

ウィン「読んでくれてありがとうね」

ヒータ「感想とか送ってくれると嬉しいぞ」

アウス「それでは最後に作者からどうぞ」

はっ！…もう最後！？

こんな作品ですがこれからもよろしく願います。

闇を狩る少年続きます。

よくよく考えたら俺住むところ無いじゃん！

side???

大声が聞こえて居間に向かうとなのはと助けた少年が話をしていた。

なのは「鏡なら私の部屋にあるよついて来て」

何いつ！！なのはの部屋に行くだとおおおおっ！！
許してはおけん！！

私は恭也にアイコンタクトで合図をして少年に襲いかかった！！

恭也・士郎「なのはの部屋に行くだとおおおおっ！！」「」

少年は驚いた表情をしていたが私と恭也の攻撃を受けて気絶した。
ふっこれで悪い虫は消えた。

side 高町なのは

私が竜馬君を部屋に案内しようとしたらお父さんとお兄ちゃんが思い切り蹴っ飛ばしました。

竜馬君が気絶しちゃった。どうしよう？

お母さん「あらあら、士郎さんに恭也？何をしてるんですか？」

お父さん「とつ桃子！？こっこれはその…」

お母さん「言い訳は無いですよ！」

お母さんはそう言ってお父さんとお兄ちゃんを連れて行ってしまいました。
ました。

竜馬君早く起きてよ〜

side out

side 魔神竜馬

え〜と…状況の説明を求めます。

俺となのはと美由紀・椅子に座っている

桃子さん・土郎さんと恭也の前に立っている。

土郎さんと恭也・正座をしながら魂が抜けてる。

俺が気絶してる間に何があった!?

桃子さん「分かりましたかっ!?!今後こんなことは無いようにしてくださいね!」

土郎さん・恭也「はいつ!?!」

すげえ…あの2人が恐怖してるよ……

怒らせないようにしよう…うん、絶対に。

というか桃子さん達より目線が下だから俺の予想は当たってたらしい。

俺、年齢が9歳ぐらいになってるわ……背も低くなってるし。

竜馬「なのは、お前のお母さんすげえな…」

なのは「にゃはは。でもいつもは優しいよ?」

まっその辺はよく知ってるけどな。

美由紀「ねえ君お家に連絡したいんだけど電話番号は?」

竜馬「電話番号?あるわけないよ家が無いし」

当たり前だ俺はこの街どころかこの世界にすらいなかったんだから…俺のこの言葉に一瞬空気が凍りついた。

竜馬「んっ?どうかした?」

美由紀「えっじゃあ君どこに住んでるの!？」
竜馬「適当に野宿でもしようかと…」

俺何かおかしいこと言ったか？

何か高町家全員で話し合ってるし…何で？

side out

side 高町桃子

まったく土郎さんと恭也には困ったものね。

なのはが関わるとすぐに暴走して…

美由紀「ねえ君お家に連絡したいんだけど電話番号は？」

確かに子供が倒れていたんですものご両親も心配してるわね。

男の子「電話番号？あるわけ無いよ家が無いし」

………えっ!？

家が無い!？どついう事!？

男の子「んっ?どつかした?」

美由紀「えっじゃあ君どこに住んでるの!？」

男の子「適当に野宿でもしようかと…」

野宿!？だめよそんな危ない!!

私はあわてて皆を集めました。

美由紀「えっと…とりあえずごめんなさい」

桃子「いいわよ。それよりどうしましょうっ」

なのは「家に住ませるとか？」

あら、なのはいいアイデアじゃない。

士郎さん「私は反対だ。いきなりなのはの部屋に行こうとした奴だ」

恭也「俺も反対。」

まったくこの2人は…

桃子「さっきあの子に攻撃したのは誰だったかしら？」

士郎さん・恭也「うっ！」「」

これで大丈夫ね。

さてあの子に話しましょう。

side out

side 魔神竜馬

どうやら家族の話し合いは終了したらしい。

でも士郎さんと恭也はなんか落ち込んでいる。

何があっただらう？

桃子さん「あなた家に住みなさい」

竜馬「へっ！？」

ここに住め！？なんで！？そりゃ願っても無いことだけど…良いのか？

竜馬「良いんですか？」

なのは「もちろん！！！」

うおっ！？びっくりした

なのはが突然大きな声を出した。

竜馬「分かりました。ありがとうございます」

こうして俺は高町家に居候することになった。

士郎さん・恭也「」なのはに何かしたら許さん！」「」

よくよく考えたら俺住むところ無いじゃん！（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃんまた気絶してたね」

ヒータ「その内毎回気絶するようになったりしてな」

アウス「ありえますね。ですがそれでは飽きてしまいます。ここは何か別のことも考えておかないといけませんね」

アウスは冷静に分析した。

エリア「気絶しないって言う選択肢は無いの？」

エリアはおずおずといった様子で言った。

ウィン「無さそうだね」

ヒータ「無いだろ」

アウス「ありえませんか」

3人はほぼ同時に言った。

エリア「そっか残念です」

そして霊使い達は雑談を続けた。

見た目は子供、頭脳は…

side 魔神竜馬

竜馬「いらっしやいませ」

俺は今翠屋でウェイターをしている。

高町家に住まわせてもらってる代わりに店を手伝っているのだ。

桃子さん「竜馬君、入口を掃いて来てくれないかしら」

竜馬「はい、わかりました」

ちなみに学校には行ってないよ？

住民票とかそういうの無いし…

竜馬「さてと、掃除掃除」

「掃除掃除、じゃねえよっ！このあほっ！…！」

竜馬「あだあっ！？」

掃除をしようとすると思いきり殴られた。

結構痛いぞ…っーか誰だ…よ…ってえ

竜馬「ヒータ！…今までどこにいたんだよ…！」

ヒータ「後書きの所だよ」

は？後書きの所？どこだよそこは…

ヒータ「まあメタ発言は置いて、お前何やってるんだよ？」

何をやってるかと言われても見ての通り、

竜馬「店の手伝いだが？」

ヒータ「そういう事を聞いてるんじゃないやねえよ!!」

怒りっぱいなあカルシウムをちゃんと採ってるのか？

小魚や牛乳をちゃんと採れよ？

ヒータ「まあ良いや、これを渡しに来たんだよ」

そう言つてヒータは金色の腕環を放り投げた…と言つか投げつけてきた。

竜馬「ふんぎやつ!!……いつてえなあ。んで？これは何？」

ヒータ「ん？ロストロギアって呼ばれてる物だけど？」

ふんロストロギアか…はい!?ロストロギア!?

竜馬「何でんなもん持つてんだよ!？」

ヒータ「だつてお前武器ねえじゃん」

確かにそうだけどロストロギアを武器に選ぶなよ…
まあ良いか持つて来てくれたんだしな。

竜馬「ありがとな、ヒータ」

ヒータ「べつ別に感謝されることでもねえよ!じゃあなっ!!」

ヒータは顔を真っ赤にして行つてしまった。

あれはツンデレなのか？

竜馬「お?なのはにあれは…アリサとすずかだな」

俺が掃除を再開しようとするとなのは達の姿が見えた。

side out

side 月村すずか

昨日見つけた男の子はなのはちゃんの家に住むことになったそうです。

アリサちゃん「なのは！あんたの家に行くわよ」

なのはちゃん「え？どうしたの急にアリサちゃん」

急にアリサちゃんが言いました。

アリサちゃん「あいつがどんな奴か見に行くのよ！」

ああそれで私も少し気になるし行こうかな。

すずか「私も行くよ」

なのはちゃん「わかったじゃあ家に行こう！」

そして私達は翠屋に向かいました。

男の子「おかえりなのは」

なのはちゃん「ただいま竜馬君」

翠屋につくと昨日の男の子が掃除をしてました。

男の子「なのは、そっちの2人は？」

なのはちゃん「私の友達のアリサちゃんとすずかちゃんだよ」

なのはちゃんが私とアリサちゃんを紹介しました。

アリサちゃん「アリサ・バニングスよ。よろしく」

すずか「月村すずかです。よろしく」

男の子「アリサにすずかだね。俺は魔神まがみ 竜馬りゅうまだよ。よろしく」

私達は自己紹介を終えました。

私は昨日から気になっていたことを聞きました

すずか「魔神君は何で昨日倒れていたの？」

魔神君「竜馬で良いぞ。それがよく覚えてないんだよ。気が付いたらなのはの家の居間だったから……」

そっかいつの間にか気絶してたんだ…

アリサちゃん「んで？竜馬アンタ何やってるのよ？」

竜馬君「翠屋の手伝いだけど？」

あれ？そういえば竜馬君学校に行っていないのかな？

アリサちゃん「そうじゃなくて学校はどうしたのよ！」

竜馬君「あんなところ行く必要ねえよ」

それってどういう事だろう？

あっ！アリサちゃんが教科書を取り出した！

アリサちゃん「じゃあこの問題を解いてみなさいよ！」

side out

side 魔神竜馬

はつきり言っただけならめんどくさい事になった。
しょうが無いつき合っただけか…

アリサ「自動車で50? 走った時、4時間半かかった。時速は何キロ?」

竜馬「時速約11.1?」

アリサが問題を出したが俺はすぐに答える。
元々俺は18歳ですよ? 余裕余裕

アリサ「なんですぐに答えられるのよ!」

竜馬「頭がいいからだろ?」

俺のこの言葉が逆鱗に触れたらしくアリサは激しく起こった。

竜馬「なら俺のだす問題を解けたら俺の負けにしてやる」

アリサ「いいわよ! 出してみなさい!」

よし結構難しいのにしてやろう…

竜馬「え」と、整式 $P(X)$ を $X-2$ で割ると4余り、 $X+1$ で割ると-5余る。このとき、 $P(X)$ を $(X-2)(X+1)$ で割った余りを求めよ。」

さしてこれが解けるかな?

アリサ「ごめんなさい無理です!」

早っ!!! 全然考えてねえ!!!

アリス「まさかこんな伏兵がいるとは思わなかったわ……」

ちなみになのはとすずかは目を回しています。

まあ平和な事に越したことは無いけどな。

つーかそろそろユーノが出てくるよな。

まっ良いか。

見た目は子供、頭脳は…（後書き）

（霊使い達の雑談）

アウス「ツンデレでしたね」

ウィン「ツンデレだったね」

エリア「ツンデレですね」

ヒータ「うっうるさい！それ以上言つな！！」

ヒータはツンデレの称号を手に入れた！！

ヒータ「ふざけんな！！！！」

いってえええええ！！！！

やつあたりで殴られた！！

腹部が痛いのでとりあえずここまでです。

闇を狩る少年まだまだ続きます。

主人公紹介…って俺聞いてないよ!?(前書き)

主人公の紹介です。

主人公のロストログアに関しては次回紹介します。

主人公紹介…って俺聞いてないよ!?

名前 魔神 竜馬 (まがみ りょうま)

年齢 189

誕生日 12月21日

性格 仲間至上主義 鈍感

外見 灼眼のシャナのシャナを黒眼黒髪で短髪にした感じ

魔力 EX 色は藍色

能力 ????

約束を守ることは大切だと考え死んで転生してしまったことを受け入れる。

年齢が戻ったのは事故。

仲間を大切にし仲間に害があると認識すると敵と見なす。

魔力の集束が苦手でディバインバスター並の魔力を溜めるのに5分、スターライトブレイカー並の魔力を溜めるのに10分かかる。

恋愛に関しては鈍感。

竜馬「つーか俺こんなことをやること自体知らなかったんだが…」

そりゃそうだ教えてねーもん

竜馬「はっ？なんでだよ」

だってもうそろそろお前忙しくなって休めなくなるぞ？

竜馬「まじで!？」

うんまじ、本気と書いてまじと読む位にまじだ。

竜馬「じゃあ俺帰ってゆっくり寝るわ」

おう!今の内に休んどけ!

と言う訳で主人公の紹介はここまでです。

ロストロギアや主人公の魔法なども追々紹介していきます。

ではまた、ノシ

主人公ってだけで結構チートだよな…

side???

誰でしょう？とても強い魔力を持っている。

この方が私のマスターでしょうか…

「貴方が私のマスターですか？」

「へ！？今話しかけたのはお前か！？」

「はい、貴方はこの私ゼロ・インフイニティ？虚無と無限？のマスターですか？」

side out

side 魔神竜馬

びつくりしたなあ魔法発動体になりそうだなあって思ってるときに突然話しかけてくるんだから。

まあヒータに貰ったものだから…

竜馬「ああ、俺がマスターだ…なあ呼びやすく無む々で良いかな？」
無々「無々ですか…かまいません今後ともよろしくお願いします」

虚無と無限って呼ぶとモノ扱いをしているようで厭いとなのだ。

そう言えば…

竜馬「無々お前の能力って何だ？」

無々「私の能力ですか？私の能力はマスターの魔力を使ってマスターの考えた武器になるというものです。今までのマスターは私の魔力消費量に耐え切れずに死んでしまいましたが、貴方なら大丈夫でしょう」

ふん結構応用が効きそうな能力だな。

これなら何とかかなりそうだ。

竜馬「ありがとう無々。ちなみに俺の魔力ってどれくらい？」
無々『わかりません。私に魔力測定をする機能はありませんから』

魔力量が分からないんじゃ俺の強さが分からないな…
まあ良いかなるようになるだろ。

side out

side 高町なのは

「誰か、僕の声聞いて…力を貸して…魔法の…力を…」

これって夢だよな

く？くくく

なのは「うん」

携帯が鳴ってる止めなきゃ…

なのは「なんか変な夢見ちゃった…うん」

私は伸びをして蒲団から降りて制服に着替えました。

なのは「おはよ〜」

お母さん「あらなのは。おはよう」

お父さん「おはよう、なのは」

朝のお手伝いをするのは私の仕事です。

お母さん「はいこれ。お願いね」
なのは「は〜い」

私はお母さんからコップを受け取りテーブルに並べます。
竜馬君はまだ寝てるのかな？

なのは「お母さん竜馬君を起こしてくるね」
お母さん「分かったわお願いね」

竜馬君は私の部屋の近くの部屋を使っています。
お兄ちゃんとお姉ちゃんは道場で練習しています。

なのは「竜馬君ももうすぐ朝ごはん…が…」

私が扉を開けると竜馬君は着替えをしてるところでした。

なのは「にゃっ！？ごっごめんさい！」

竜馬君「まあ別に良いけど、ノックするようにしてくれ」

次からは気をつけるようにしないと…

なのは「竜馬君もうすぐ朝ごはんができるって」

竜馬君「分かったすぐ行く」

そして朝ごはんを皆で食べました。

食事中竜馬君と話づらかったよ〜

竜馬君「あ！桃子さん、土郎さん今日図書館に行きたいので仕事を休んでいいですか？」

お母さん「良いわよ。行ってらっしゃい」

お父さん「毎日手伝ってるからなあ、今日ぐらい良いだろ」

ふうん竜馬君は今日図書館に行くんだ…

学校が休みなら私もついて行きたかったな…

主人公ってだけで結構チートだよな…（後書き）

（霊使い達の雑談）

ヒータ「今回はロストロギア？虚無と無限？についてだ」

ロストロギア　虚無と無限

管理局では一級指定搜索物として手配されている。

性格は真面目で優しい。

性能　持ち主の魔力を常時吸収し持ち主の想像した武器に変化する。

変化中は魔力吸収もストップする。

魔力切れを起こすと？虚無と無限？に吸収されてしまう。

竜馬は魔力量が多いため魔力切れは起こさない。

しかしその分普通の魔力は限りなくゼロに近くなるまで吸収されている。

ヒータ「まあこんなところだな」

エリア「これって結構危険な物なのでは…」

竜馬「無々を物扱いするな」

エリア「竜馬さん！？ごつごめんさい！」

ウイン「ヒータちゃんよくこんなの持ってたね」

竜馬「確かに…何でだ？」

それは適当に遊んでたら偶然拾ったんだよ。

ヒータ以外「……」　本当！？「……」

ツンデレ「本当だ…っておい名前が違う…！」

ぐふぁあぁあ…また…同じ所を…

作者ボディーブローを受け倒れる。

竜馬「え〜と？闇を狩る少年続きます…これで良いのか？」

普通広い街でエンカウトする確率って低くね!?

side 魔神竜馬

俺は図書館に行って本を読む…そう思っていた。

「待てー！ー！！！ソレを渡しなっ！！！」

「待ってください！ソレを渡してください！」

どうしてこうなった!?

確か10分ほど前に…

～～回想～～

図書館つてこつちだったよな？

ん？何だあれ？

竜馬「え〜と…No…??という事は…」

「すみません。その宝石を渡してください」

「早く渡さないとぶん殴るよ」

俺がジュエルシードを拾うと不意に声が聞こえ、金髪ツインテールの少女と獣耳を付けた女性が空から降りてきた。

あれ？フェイトとアルフつてもう海鳴市に来てるんだっけ？

まあ良いやここはおかしい点を指摘してみるか。

竜馬「人が空を飛ぶなんてあり得るのか？映画の撮影ですか？」

フェイト「あっ！どうしようアルフっ！人前で魔法使っちゃった！

！」

アルフ「気にすんなって思いつきり殴って記憶を飛ばせばオツケー

さ」

おいおい物騒この上ないな…逃げるか。
俺は回れ右をして走った。

フェイト「あつ！待ってください！」
アルフ「どこ行く気だい！逃げるんじゃないよ！」

待てと言われて待つバカはいません！！
フェイトは安全だよ？でもアルフが危ねえんだよ！！
そして現在に至る。

～～～回想終了～～～

って現実逃避してる場合じゃないな。どこに逃げるか…
無々はまだ見せたくないし、かと言ってこのままじゃ捕まるのも時
間の問題だし…
そうだ！あそこがあつた！！
俺は方向転換して森に向かった。

side out

sideフェイト・テストロツサ

ジュエルシードを持つている男の子は急に方向を変えて森に向かっ
て走りだしました。

母さんのためにも早く渡して貰わなくちゃ！

アルフ「フェイトあいつ逃げ足速いな！」

アルフから念話が来ました。
確かに私達が全力で走ってるのに追いつかないなんてすごいな。
あれっ？いつの間にか男の子がいなくなってる…

フエイト「アルフっ！あの子はっ!？」
アルフ「なっ!?!いないっ!?!どこだっ!?!」

結局それから周辺をしばらく探しましたが男の子は見つかりませんでした。

side out

side 魔神竜馬

森を走っている時に念話が聞こえてきたのでその隙を突いて木陰等を利用して逃げ切りました。
体力が死ぬ前のままで助かった。

竜馬「さて、気を取り直して図書館に向かうか」

それから俺はさほど時間をかけずに図書館に着きました。
やっぱりでかいよなこの図書館。
さっさと中に入って本を読もう。

竜馬「流石はでかいだけあって色々な本が有るな…ん?あそこに居るのは…」

俺が本を探していると車いすに乗った少女が上の方にある本に手を伸ばしていました。

実際に見て思ったが、何で誰も手を貸さないんだよ!!

「んっしょ…もうちょい…あっっ!!!?!」

少女は本を取る事には成功したが手を滑らせてしまい本が顔に向かって落ちて行く。

反射的に俺は動いていた。

竜馬「危ねえっ!!」

少女の顔に向かって落ちて行く本を掴み顔にぶつかるのを阻止する。
少女は怖かったのか目をギュッと閉じていた。

「……………あれ？ウチ何で無事なんや？」

いつになっても衝撃が来ない事を不審に思ったのか少女は恐る恐る
と言った様子で目を開いた

竜馬「危ないから次からは人を頼れよ」

俺は掴んだ本を少女に渡しながら言った。

「あっ！ありがとうございます！」

竜馬「まあ気にすんな」

side out

side???

びっくりしたでほんまに…

本が落ちてくる思っで目を閉じたのに衝撃が来いひんから目を開く
と知らない男の子がキャッチしてるんやもん。

「危ないから次からは人を頼れよ」

男の子はそう言いながら本を渡してきました。
かっこええなあ…はっ!？お礼言わな!

「あっ！ありがとうございます！」

「まあ気にすんな」

そつや！自己紹介しなあかんやん！

「ウチは八神はやて言います。よろしく」

「俺は竜馬。魔神まがみ 竜馬りょうまだ。よろしくなはやて」

いきなり名前で呼んでくるとは思わんかったわ！

はやて「竜馬君か…いつも図書館ここに来てるんか？」

竜馬君「いや、今日は休みを貰ってここに来てるんだ」

休み？という事は竜馬君は働いとるんか！ウチと同じくらいのはずやのこ…

はやて「竜馬君家はお店かなんかをしてるんか？」

竜馬君「いいや、居候させてもらってる家が喫茶店をやってるんだ。

翠屋って言う店んだけど知らない？」

翠屋か…つまりそこに行けば竜馬君に会える言う事やね！

今度行ってみよ。

side out

side 魔神竜馬

図書館ではやてと話しているといつの間にか帰る時間になりはやてと別れて翠屋に帰ろうとした。

フェイト「あつ！見つけた！！」

アルフ「早く渡しな！！」

何でさ…何でこんな広い街でもう1回エンカウトしなきゃなんねえんだよ。

何？俺呪われてるの？

そんなことを考えながら俺はまた逃げ出しました。

追伸

フェイトとアルフから逃げ切る事には成功したが翠屋に戻ってから桃子さんによる

O H A N A S I I がありました。

もう2度と受けたくないです。

普通広い街でエンカウントする確率って低くね！？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃん今回は走ってばかりだね」

ヒータ「しかもフラグも設立したしな」

エリア「ヒータさん？何で不機嫌なんですか？」

ふふふ…ヒータも実は…

ヒータ「うるせえっ！！何も言っなっ！！！」

熱っ熱っ！炎で焼くのは止めて！

アウス「作者が燃えてしまったのでここまでです。まあすぐに復活するでしょう。それではこの辺で、闇を狩る少年続きます」

夜の散歩は危険がいっぱい!?

side 魔神竜馬

なのは「という訳で、そのフェレットさんをしばらく家で預かる訳にはいかないかな〜って」

士郎さん「フェレットか？」

なのはが現在ユーノを高町家で預かれないかを交渉中である。

今日塾に行く途中で傷だらけのユーノを見つけたので聞いているのだ。

俺はフェイト達から逃げていたのでその現場を見てはいないが…

士郎さん「ところで何だ？フェレットって」

士郎さんのこの言葉になのはがテーブルに突っ伏した。

「というか普通知ってますよ？」

恭也「イタチの仲間だよ父さん」

美由紀「だいぶ前からペットとして人気の動物なんだよ」

恭也と美由紀がフェレットについて士郎さんに説明した。

桃子さん「フェレットってちっちゃいわよね？」

竜馬「まあ普通に小さいですね」

桃子さん「なら、かごに入れてなのはがちゃんとお世話できるなら良いと思うけど、恭也、美由紀どう？」

桃子さんが、フェレットを飼う事を恭也と美由紀に聞いた。

俺としては居候している身なので何も言えないのだが…

恭也「俺は、異存ないけど」
美由紀「私も」

まあこの2人は基本なのは甘いからな。

桃子さん「竜馬君はどうかしら？」

竜馬「俺ですか？俺は居候の身なんで特には何も」

まさか俺にも聞いてくるとは思わなかった。
っ！かなのはがすごい笑顔だし。

士郎さん「だそうだよ」

桃子さん「良かったわね」

なのは「うん！ありがとう！！」

その後いつも通りの晩御飯が始まりました。

そしてジュエルシードの思念体となのはのバトルの時間が近づく…

side out

side 高町なのは

「聞こえますか？僕の声が聞こえますか？」

私がメールを送り終えて眠ろうとすると声が聞こえてきました。
！昨夜の夢と昼間の声と同じ声！

「聞いてください。僕の声が聞こえたあなたお願いです僕に少しだけ力を貸してください！」

あの子が喋ってるの？

「お願い！僕の所へ！時間が…危険が…もう！」

声が聞こえなくなった途端私は布団に倒れこみました。
なんだか疲れたよ。

でも今の声助けを求めてたんだよね？
なら行かなきゃ！

「何やってるんだ？なのは」

なのは「にゃっ！？竜馬君！？」

私がパジャマから服に着替えて部屋から出ると竜馬君がいました。

なのは「えっと…その…」

竜馬君「フェレットが気になるのか？」

えっ！？何で分かったの！？

竜馬君「まあ良いけどな…気を付けるよ」

よく分からないけど行かせてくれるんだよね？

なのは「うん！行ってくるの！」

そして私は急いで動物病院に向かいました。

side out

side 魔神竜馬

念話が聞こえたので部屋の前で張っていたらなのはがこそこそと出てきた。

「つかユーノ緊急事態だからってあの音量はうるさいぞ？」

竜馬「何やってるんだ？なのは」
なのは「にやつ！？竜馬君！？」

俺が声をかけるとなのははびっくりして振り返った。

絶対にこの声で皆起きるよな…

なのは「えつと…その…」

竜馬「フェレットが気になるのか？」

俺は物陰に隠れている士郎さんと恭也に聞こえるように言った。

実際ほとんど見えてるし娘の事になると周りが見えないからなあ
の2人。

竜馬「まあ良いけどな…気を付けろよ」

お前はこの後初戦闘があるんだからな…まあサポートだけはしてやるよ。

なのは「うん！行ってくるの！」

そう言っとなのはは家から出た。

さて追いかけてよとして2人を止めるために桃子さんに報告しておくか…

side out

side???

すごい！この子の魔導師としての素質は圧倒的だ！

呪文が少し不思議な気もするけど…

女の子「リリカルマジカル」

「封印すべきはいまわしき器ジュエルシード！」

女の子「ジュエルシードを封印！」

『Sealing Mode・Set up』

女の子の持つレイジングハートから桜色の羽が生える。

桜色のリボン？がジュエルシードの思念体に向かって伸びてゆく。

思念体「GUOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO」

あっ！危ない！

ジュエルシードの思念体が最後の悪あがきなのか女の子に向かって攻撃を仕掛けた！

「危ないっつ！…！」

ダンッダンッダンッ！！

不意に藍色の光が見えたかと思うとジュエルシードの思念体の攻撃は全て撃ち落とされていた。

周囲に人がいる気配が無いという事は狙撃！？

しかもあんなに正確に打ち抜くなんて…

女の子「あっあれ？終わったの？」

考え事をしている間にジュエルシードの封印は終わったらしい。

「はいあなたのお陰でありがとう…」

あっ安心したら急に力が…

夜の散歩は危険がいっぱい!? (後書き)

〔霊使い達の雑談〕

アウス「はい、今回は巻で淫獣と噂のユーノ・スクライアが登場しました」

エリア「えっ!? 淫獣!?!」

ヒータ「まあ、女湯に入ったりしてたしな」

ウィン「この作品ではどんな扱いかな?」

さあ? その時の気分でしょ。

ウィン「ふ〜んそっか」

まあ今回はこの辺で、闇を狩る少年続きます。

ヒータ「あつ! 今回作者を攻撃してねえ!」

別にしなくて良いよ!

魔法って何でもありだよな…えっ？俺もっ！？

side 魔神竜馬

さてと、サポートのために準備するか。

竜馬「無々、能力発動！形状はスナイパーライフル。結界展開！」
無々『了解しました。能力発動、防音結界展開』

俺が無々に言うとなんかはすぐさまスナイパーライフルの形状に変化し周囲に結界が張られた。
え〜と？動物病院はどこだったかな？
ん？あの桜色の光は…

竜馬「見つけた！もうすぐ封印だなサポートは必要ないかな？……
！？」

スコープを覗いて様子を見ると桜色のリボン？がジュエルシードの思念体を包むところだった。
しかし最後のあがきと思念体はなのはに攻撃を仕掛けていた。

無々『このままでは直撃してしまいます！』
竜馬「ちっ仕方がねえ！」

俺はそう言って銃を構えた。
実際は撃った事が無いから無々に調整してもらっているが…

無々『スナイパーショット』
竜馬「シュート！……！」

ガンツガンツガンツ！

俺はトリガーを引きなのはを攻撃しようとする思念体の腕？を打ち抜いた。

つーか無々の命中精度やべえ！

竜馬「あつユーノが気絶した。ってことはもうすぐ帰って来るな。無々能力を終了してくれ結果も」
無々『分かりました。防音結界解除』

ガラスが割れるかのような感覚とともに周囲の結界が消えた。
そして無々も元の腕輪に戻っていた。
と言つかもつやること無いし………寝るか。

side out

side 高町なのは

ふええ〜昨夜は大変だったよ〜

いきなり魔法だとか変なお化け？とも戦っちゃったし……

家に帰ったらお兄ちゃんとお姉ちゃんに見つかって注意されちゃったし。

そつといえば竜馬君が教えちゃったのかな？

だとしたら後でお話があるの！

アリサちゃん「なのは！昨夜の話聞いた？」

アリサちゃんが話しかけてきました。

昨夜ってなんのことだろう？

なのは「えっ？昨夜って？」

すずかちゃん「昨日行った病院で車の事故か何かあったらしくて……

壁が壊れちゃったんだって」「
アリサちゃん「あのフェレットが無事かどうか心配ね……」
すずかちゃん「うん……」

それって昨夜私が戦った痕だよ
でもそんなことは言えないし……

なのは「あっえーとね……その件はその……」

とりあえず私は魔法の事は隠して昨夜のことを2人に話しました。

side out

side 魔神竜馬

朝なのはとユーノの念話が聞こえたので軽くユーノに注意しておいた。
た。

竜馬「念話をするなら相手にだけ聞こえるようにしておけよ？ユーノ・スクライア」

ユーノ「！？えっ！？あなたは誰ですか！？どうして僕の名前を！？」

色々と聞いてきたので勝手に念話を打ち切った。

っ！か音量がでかくてうるせえし。

カランカラン

おっ！お客さんだな

俺はお客を席に案内するためにドアに向かった。

竜馬「いらっしやいます……っちはやてじゃないか！」

はやて「おはようさん。昨日ここで働いてるって聞いたから来てみたんよ」

なるほど、まあこの店は良い所だしな。
来たくもなるか。

はやて「（それに竜馬君に会いたいし）」

竜馬「ん？なんか言ったか？」

はやて「う、ううん！？なんも言っへんよ!？」

気のせいかな？

なんか聞こえた気がしたんだが…まあ良いか。

竜馬「さて、何を注文しますか？」

はやて「あっじゃあ、この苺のショートケーキで頼むわ」

竜馬「分かりました。しばしお待ちください」

俺はそう言って桃子さんに注文を言いに行った。

桃子さん「竜馬君あの子と知り合いなの？」

竜馬「はい、そうですけど」

桃子さん「ならこれを持って行った後休憩にしてあの子とお話してください」

桃子さんはそう言いながら俺にケーキを渡してきた。

まあはやてと会話をするのも楽しいし良いか。

竜馬「お待たせしました。苺のショートケーキです。」

はやて「お！ありがとうございます」

俺ははやての前にケーキを置き目の前の席に座った。

はやて「あれ？竜馬君仕事はええんか？」

竜馬「ああ、休憩を貰ったからはやてと話でもしようかな〜って思
つてな」

俺がそう言うとはやてはしばらくの間ポカンとしていた。

面白いなこの顔。

俺がはやての顔を見ていると不意にはやてが復活した。

はやて「そ、そうなんやつ！よし話そ話そ！！」

竜馬「おう！！」

そして俺とはやては休憩時間の間話し続けた。

魔法って何でもありだよな…えっ？俺もっ！？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「今回は特に平和だったね」

エリア「平和に越したことは無いですよ」

アウス「そうですね」

次回はまた戦いがあるけどな…

ヒータ「つーかあたし等本編に全然出てないよな」

うぐっ痛い所を突いてくる！

ヒータ「まあ良いけどさ」

エリア「今回は私が締めますね。闇を狩る少年続きます」

ヒータ！？言ってることとやってることが違う！

痛っ痛っ蹴るなよ！

小学生に対して本気でやるのは大人げない？

side 魔神竜馬

俺は今河原のサッカー場に居る。

士郎さんに頼まれて助っ人として来ているのだ。

なのは「あっ！このままじゃ負けちゃうの！」「

士郎さん「そうだな…よし竜馬君出てくれ！」「

本当に俺が出ることになるとは思わなかったが…

まあ出るからには本気でやるか。

竜馬「はいっ！」「

そして試合が終わり翠屋に皆集まった。

試合の結果？聞かないでよ。

こっち高校生、あっち小学生結果は丸わかりでしょ？

メンバー「……」ありがとうございます「……」

おっそろそろ解散か？

ということともうすぐ発動だな。

なのは「！？」

んっ？なのはも気付いたかな？

でも放つて置くのか…このままじゃ後悔するってのに。

そのままなのはは部屋に行ってしまった。

side out

side 高町なのは

!?これは!!

ユ一ノ君「なのは!!」

なのは「気付いた?」

ジュエルシードが発動した!?

もしかしてさっきのが?

ううん…そんなこと無いよね?

とにかく急がなきゃ!

私は家を出てマンションの屋上に向かいました。

なのは「レイジングハート…お願い!」

RH『Stand by・Ready・Set up』

レイジングハートが光って私は魔法少女の服に変身しました。

変身が終わって周りを見ると大きな木がありました。

木は町中に広がっていて大変なことになっています。

なのは「ひどい…」

ユ一ノ君「たぶん人間が発動させちゃったんだ」

えっ?それってどういう事?

ユ一ノ君「強い思いを持ったものが願いを込めて発動させた時ジュ

エルシードは一番強い力を発揮するから」

!!やっぱりあの時の子が持ってたんだ…

私気付いてたはずなのに…

こんなことになる前に止められたかもしれないのに…

ユ一ノ君「なのは…」

「何を悩んでいるんだ！お前が今するべきことは後悔することなのか！」

いきなり念話が飛んできました。

なのは「でも、私のせいでこんなことに…」

「だとしても後悔より先にあれを封印するべきだろうが！自分のせいだと思っならなおさらな！」

そっか…それもそうだよね。

RH『Area search』

私はレイジングハートを回して魔法陣を描きました。

なのは「リリカル！マジカル！探して！災厄の根源を！」

side out

side 魔神竜馬

やれやれ念話で活を入れることになるとは思わなかったぞ。

俺は今近くのビルの屋上に居る。

無々『マスター、これからどうしますか？』

無々が聞いてきたので俺は答えた。

竜馬「ん？封印が終わってからののはに会いに行くかな」

おっ！封印魔法を込めた砲撃を撃つんだな！
そろそろ移動の準備をしておかないとな。

竜馬「無々そろそろ行くぞ」
無々『分かりました』

side out

side ユーノ・スクライア

なのはの魔法によってジユエルシードの封印は出来た。

僕にも使えない遠距離魔法…

この子は…いつたいどれくらい魔法の才能を持っているんだ？

なのは「…いろんな人に迷惑かけちゃったね」

ユーノ「えっ？」

見るとなのはは寂しげに夕焼けを見ていました。

ユーノ「な、何言ってるんだ？なのははちゃんとやってくれてるよ
！」

なのは「…私気付いてたんだあの子が持つてること、でも気のせい
だって思っちゃった」

なのははそう言ってしゃがみこんでしまった。

僕はなんて声をかけたら良いんだろう…

「自分が駄目な奴だと思っなんてなのははらしくないな」

えっ！？誰かいたのか！？

いきなり声が聞こえたので僕となのはは同時に振り返った。

そこに居たのは魔神 竜馬だった。

竜馬「なのは一応言っておくぞ？反省はしろ、でも後悔はするな。後悔ばかりしていると前に進めなくなっちまうぞ」

そう言っ彼は行ってしまった。

彼は何を知っているのだろうか…

まるで全てを知っているかのような、そんな雰囲気醸し出していた。

なのは「後悔はするな…か。そうだね後悔ばかりしても解決しないもんね」

そう言っなのはと僕は家に向かった。

小学生に対して本気でやるのは大人げない？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃんのかっこいいセリフがあったね」

ヒータ「そ、そうでも無いだろ…」

エリア「ヒータちゃん何で顔が赤いの？」

アウス「しかもレコーダーを持っていますね。何を録ったんですか？」

ヒータのために俺がセットしたからなばっちり録れてるぞ。

ウィン「何を録ったの？」

それはな竜馬の…

ヒータ「それ以上言うんじゃねえ！！！」

ぐふおおおつっ！！！！！！

飛び蹴りが来るとは予想外だったぜ！！！！！！

アウス「まあ何を録ったのかは大体理解しましたが」

ヒータ「うううう」

エリア「ヒータちゃんの顔が更に真っ赤に！？」

ウィン「とりあえずここまでだよ。闇を狩る少年続くよ」

side 魔神竜馬

どうやってアリシアを生き返らせるか…

俺はそんな事ばかり考えていた。

アリサ「聞いているの!! 竜馬!!」

竜馬「うおっ!? 何だよアリサ」

びっくりした…いきなり怒鳴りつけて来るんだもん。

するとアリサは怒りながら言った。

アリサ「明日すずかの家に猫を見に行くからあんたもどっ? って聞いたのよ!!!」

へっ!?! てことはなのはとフェイトの初戦闘か…

まあ言っておいて損は無いな。

竜馬「分かった。俺も行くよ。邪魔じゃ無ければな?」

すずか「邪魔なんかじゃないよ!」

今度はすずかが大きな声を出した。

っーか近いんだから大きな声を出さないでくれ。

ん? なのはが何だかこっちを見ている…

何かやったっけ?…あゝやったな。

大方昨日俺がマンションの屋上に居たことが気になっているのだから。

念話で何か言うか? いやまだ何もしないで良いな。

side out

side 高町なのは

昨日家に帰ってからよく考えてみたの。

そしたら竜馬君があのマンションの屋上に居たってことは私が魔法使いだってことがばれてるかもしれないってことが分かったの！！

なのは「ユ、ユユ、ユーノ君！！もしかして私が魔法使いだって竜馬君にばれてるのかな！？」

ユーノ君「落ち着いてなのは。彼の声を聞いてなんとなくだけど昨日の念話の声に似ている気がするんだ。もしかしたら彼は魔法使いかもしれない」

竜馬君が魔法使い！？

でもそれなら何でも言ってくれないんだろう？

ユーノ君「昨日彼は全てを知っているかのように言っていた。だから彼が魔法使いだという可能性は高いんだ。なのは、彼を見張ってみよう」

竜馬君を見張るのか…

本当に魔法使いならもっと仲良くなれるかな。

魔法使いじゃ無くて普通段竜馬君が何をしているのかは気になるし…

なのは「うん！分かったの！」

こうして私は竜馬君を見張る事にしました。

side out

side 魔神竜馬

さて俺は今猫に囲まれている。

すずかの家が猫屋敷なのは知っていたがこれ程とは思わなかった。

アリサ「すごい量の猫が集まって来たわね。竜馬1人に」
すずか「多分この家の猫が全部集まって来ているんだと思うよ」

アリサとすずかが何か言っているが俺は猫の相手が忙しくて何も言えない。

つて言うかすずかそれ本当!?

黒猫「にゃ〜ん」

白猫「にゃ〜にゃ〜」

俺が椅子に座ると黒猫と白猫が俺の膝の上に乗って来た。

猫って可愛いよな。

あつもちろん犬も可愛いよ?

俺は動物が好きなんだ…悪い?

竜馬「なのは、ユーノが追われてる」

なのは「えっ?あつ!ユーノ君!」

見ると俺の近くに居たトラ猫の愛がユーノを追いかけていた。
捕まえて食う気か?

ファリン「はい皆さんお待ちしました〜」

あつ!?!ファリンが来たという事は…

ユーノそっちに行くんじゃないやねえよ!!

俺は猫を膝の上から降ろし立ち上がった。

ファリン「えっ?ひゃあ〜!?!あああ〜…」

ファリンは目を回して倒れそうになる。
しょうが無いな。

竜馬「よいしょっと…大丈夫ですか？」

ファリン「ふえ？…ひゃああ〜！すみません竜馬君！！」

俺はファリンが倒れるのを止めるために抱き寄せてティーカップ等
が乗ったお盆を受け取った。

ファリンは少し目を回していたがすぐに元に戻った。

竜馬「気にしないでください。んっ？」

視線を感じたので振り返るとなのは、すずか、アリサの3人が笑顔
でこつちを見ていた。

*注意・3人とも目が笑ってません！！！！

何だろっ俺が悪いのかな！？

竜馬「3人とも何を怒ってるんだ？」

なのは・すずか・アリサ「「別に怒ってなんか無い(の)(よ)

(わよ)」「」

いやいや絶対に怒ってるだろ。

side out

sideファリン・K・エーアリヒカイト

はあ…また失敗しちゃった。

でも竜馬君には助けてもらっちゃったなあ。

私を軽々と抱き寄せて……………

あゝあ、私も猫になって竜馬君の膝の上に…

はっ！私はいったい何を考えているのでしょうか!？

side out

side 月村すずか

何だろうファリンのドジがいつもより多い気がする。
やっぱり竜馬君が抱き寄せたのが原因かな。

アリスちゃん「しっかし相変わらずすずかの家は猫天国ねえ」
なのはちゃん「でも子猫達可愛いよね」

アリスちゃんとなのはちゃんが猫について聞いてきました。
ちなみに竜馬君は猫に包まれていて見えなくなっています。

すずか「うん!…里親が決まってる子もいるからお別れもしなきゃ
ならないけどね」

なのはちゃん「そっか…ちょっと寂しいね」

うん…悲しいけどね。

竜馬君「何言ってたんだ?もう絶対に会えないって訳じゃ無いだろ?
会いに行けよ」

不意に猫をどかして竜馬君が言いました。

竜馬君：「そっかそれもそうだよな。

会いに行けばいいんだよね！」

すずか：「そうだね！ありがとう竜馬君！！！」

〈霊使い達の雑談〉

ウィン「お兄ちゃんって猫に好かれてるんだね？」

猫どころか生き物全てに好かれているぞ。

アウス「それは、すごいですね」

ヒータ「私が近づくと猫が逃げるんだが」

エリア「動物は優しい人に懐くって言いますよね」

ぷっ（笑）

ヒータ「笑うな！！！！！！」

ごしゃあああっつ！！！！！！！！

ぎゃああああああああっつ！！！！！！！！！！

炎を灯した拳で殴るなああああっつ！！！！！！！！！！

痛っ熱っ痛っ熱っ誰か炎を消してえええええ！！！！！！！！！！

ヒータ「作者は後でまた復活するだろ。んじゃ闇を狩る少年続くぞ

！！」

原作とずれると修正が大変である

side 魔神竜馬

俺の言葉によつてすずかはや元気になった。

あれ？灰色のトラ猫が居ない。

たしか名前は…夢だったか？

竜馬「すずか、灰色のトラ猫が居ないぞ」

すずか「えっ！？夢が！？どこに行っちゃったんだろう」

おお！夢で合ってた！

と言うか夢が居なくなつたつてことはジュエルシードが発動するつてことか。

ユーノ「なのはっ！」

なのは「すぐ近くだ！」

だから念話を周囲に聞こえないようにしろつつの。

原作通りならユーノが走つて行くんだよな。

んでもつて巨大化した猫が出て来るんだつたっけ？

なのは「ユーノ君！？」

アリサ「あれれ？ユーノどうかしたの？」

なのはの膝の上からユーノが降りて森に向かって走つて行った。

なのは「うん。何か見つけたのかも、ちょっと探してくるね」

すずか「一緒に行こうか？」

なのは「大丈夫。すぐに戻つて来るから待っててね」

そう言っただけなのは森に向かった。

side out

side 高町なのは

なのは「！発動した！」

ユーノ君「ここだと人目が、結界を創らなきゃ」

結界？それってどうやって創るの？

なのは「結界？」

ユーノ君「最初に会った時と同じ空間。魔法効果の生じてる空間と通常空間の置換進行をずらすの。僕の少しは得意な魔法」

そう言っただけユーノ君は魔法を発動させました。

そして私達は結界の中に入りました。

ユーノ君「これで結界は大丈夫」

なのは「ありがとうユーノ君。！…あの光はもしかして！」

見ると森の向こう側が光っていました。

あつちにジュエルシードがあるのかな？

「あれ？あなたはだれ？」

不意に向こうから女の子が出てきました。

こんな子居たっけ？

てゆうかこの子からジュエルシードの気配がするんだけど…

竜馬君「おゝいなのはユーノは見つかったか」

えっ？あの声は竜馬君？なんで結界の中に！？

side out

side 魔神竜馬

さて俺も行くかな。

竜馬「アリサ、すずか。俺もユーノを探してくるわ」

アリサ「別に大丈夫じゃない？」

竜馬「本当にそう思うか？」

普段のあれを見て大丈夫だとは思えないぞ。
するとアリサは目をそらして静かに言った。

アリサ「……………行った方が良さそうね」

竜馬「だろ？」

そして俺は森に向かって歩き出した。
つーか結界に入らねえとな。

竜馬「無々この結界に入れるかな」

無々『この結界ですか？…入ることは出来ますね』

なら入るしかないな。

俺は結界に触れて中に入った。

と言うか結界に入る時の感覚ってサランラップを切るみたいだな。

竜馬「おゝいなのは〜ユーノは見つかったか〜」

おっ！いたいたってあれ！？巨大猫はどこだ？

と言っかあの女の子は原作に居なかったよ!?

「あっ!竜馬!良かった見つけた!」

はいっ!?!何で俺のことを知ってるんだ!?

ん?あの子のあれは…猫耳!?

もしかして……

竜馬「まさか…夢?」

夢「そうだよ」

おいっっ!!!!原作と違うぞおおっっ!!!!!!!!
っ!かこの後フェイトが来るんだよな?

竜馬「いやまてまて夢は猫だろ?」

夢「うん!でも宝石のお陰で人間になれたの!」

ジュエルシードが原因か…どうしよう。

なのは「竜馬君…その子と知り合いなの?」

竜馬「あ、ああ。そうみたいだ」

だからなのはその目が笑って無い笑顔は止めてくれ。

そうだ!なのはにどうするか聞いてみるか。

竜馬「なのは、この子は夢が宝石のお陰で人間になった姿らしいんだがどうしたら良い?」

なのは「えっ!宝石!?!もしかしてそれって…」

気付いたみたいだな。

原作とずれると修正が大変である（後書き）

（霊使い達の雑談）

エリア「これって原作と違うんだよね？」

ウィン「そうらしいよ？」

いや〜面白くしたくてね〜つい。

ヒータ「つい、じゃねえよ」

アウス「原作とずれると修復は難しいですよ？」

だよ〜今も結構悩んでるんだよね〜。

ヒータ「なら原作崩壊をしてるんじゃないやねえよっ！！」

はい。マジですみません、ホントすみません。

エリア「謝ってますので許してくださいね」

アウス「はあ…闇を狩る少年続きます」

魔法少女が変身する時ってどうなってるの？

side 魔神竜馬

最悪だ：原作と違って夢は巨大化せずに人間の姿をしている。

これじゃあジュエルシードを封印した後に夢が死んでしまうかもしれない！！

フェイト「もう一度言いますその子を渡してください」

くそっ！どうする！？

俺は夢を後ろに隠すように移動した。

フェイトは俺の行動を見て拒否と取ったのか魔力球を作りだし撃ってきた。

なのは「レイジングハート！！」

RH『Wide Area Protection』

いつの間にかなのはは変身しており障壁を張ってくれた。
っ！か簡単に人の前で変身するなよ。

竜馬「なのは！その姿は…コスプレ？」

なのは「にゃっ！？違うよ！」

俺が軽くふざけるとなのははガクっとしていた。

まあ良いや。それよりも今のなのはじゃフェイトには勝てない…
どうすれば……

竜馬「つてえ！！危なっっ！！」

俺が思考の海に潜っているとフェイトの放った魔力球がこっちに飛んできた。

とりあえずは…逃げるか！

竜馬「夢っ！逃げるぞー！」

夢「うん！分かった！」

俺は夢の手を取り森の奥に向かって走った。
フェイトが追いかけてようとしていたがなのはがそれを止めている。

side out

side 高町なのは

竜馬君と夢ちゃんには逃げられたみたいだね。
でも撃ってきた女の子は行かせないよ！

「同系の魔導師。ロストロギアの探索者か」

えっ？どういう事？

ユーノ君「間違いない…僕と同じ世界の住人…そしてこの子はジュエルシードの正体を…」

女の子はレイジングハートを見て言いました。

「バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス」
なのは「バルディッシュ？」

もしかしてあの子が持つてるデバイスの名前？

「ロストロギア…ジュエルシード」

BD『Scythe Form Setup』

いきなりあの子の持っているデバイスの形が変わって魔力で出来た刃が出てきました。

「申し訳ないけど通してもらいます」

そう言って女の子は切りかかって来ました。

RH『Evasion Flier Fin』

レイジングハートがすぐに加速用魔法を使って助かりました。私は空に飛びあがって避けました。

BD『Arc Saber』

あの子のデバイスがそう言うにあの子はデバイスを振りかぶりました。

どうする気だろうか？

「はあっっ！」

そう言って女の子は魔力でできた刃を飛ばしてきました。

RH『Protection』

レイジングハートはすぐに障壁を展開してくれたお陰で私にダメージはありません。

でも爆発のせいで周りが見えない…どうしよう？

ユーノ君「なのはつつ!!」

大丈夫だよユーノ君。

私は爆発から抜け出しました。

すると女の子がすぐに切りつけてきました。

私はとつさにレイジングハートで防ぎました。

!?!?!危ないなあもう

なのは「何で?!?!何で急にこんな?」

「答えても…多分意味は無い」

女の子は悲しそうな目で言いました。

そして私と女の子は距離を置きました。

BD『Device Mode』

女の子のデバイスがそう言って形を変えました。

RH『Shooting Mode』

レイジングハートも姿を変えました。

RH『Divine Buster, Stand By』

BD『Photon Lancer, Get Set』

私と女の子は構えました。

きっと私と同じ年くらい…きれいな瞳ときれいな髪…だけど…この子…

夢ちゃん「きゃあああー!!」

えっ！？今の声は！？

side out

sideフェイト・テストロツサ

今の声はさっきの子？

ここを狙えばあの子は倒せるよね。

私は魔力を溜めました。

フェイト「…ごめんね」

BD『Fire』

私はフォトンランサーを撃ちました。

ごめんね、こんな隙を突くやり方で…

そして私は男の子と女の子を追いかけて森の奥に向かいました。

魔法少女が変身する時ってどうなってるの？（後書き）

（霊使い達の雑談）

エリア「今回はほとんど原作に近いですね」

おう！でも戦闘シーンの再現が難しいんだよ。

アウス「勉強不足…と言う事ですか？」

YES！

ウィン「でもこれから頑張ろうよ！」

ヒータ「この作者に出来るのかよ」

ひ、酷い…

作者、隅っこに行きのの字を書く。

ヒータ「わ、悪い！言いすぎた。大丈夫だってうまくなれるって」

エリア「頑張っていきましょっ？ねっ」

…分かった。頑張るよ。

と言う訳で闇を狩る少年続きます。

仲間を傷つける奴には制裁を！！

side 魔神竜馬

さて俺と夢は現在絶賛逃亡中です！

向こうから爆発音とかしてるから戦っていることは分かるんだが…
なのはじゃフェイトにはまだ勝てない事が分かり切っている。

夢「竜馬！どこまで逃げるの？」

竜馬「分からん！…っとストップだ夢！」

いきなり地面が揺れだした。

地震か？だけど何か違和感が…

竜馬「うおっ！？何だ！？」

突然地面から槍が飛び出してきた。

そして槍を追うようにして人の形をした何かも飛び出してきた。

コイツは…

竜馬「暗黒界の尖兵ベージじゃねえかよ！！何でこんな所に居るんだよ！！」

どうなってるんだ！？コイツは遊戯王のモンスターのはず…

俺が考えていると念話が不意に飛んできた。

「聞こえますか竜馬様！」

竜馬「アウスか！？どうなってるんだ！？暗黒界の尖兵ベージが出てきたぞ！？」

俺が念話で状況を伝えるとアウスは少し沈黙をして答えた。

アウス「先程突然？闇？の気配が出現しましたので…おそらく、ページは？闇？が作った手駒でしょう。」

竜馬「マジかよ…こいつはどうしたら良い？」

ちなみにこの間も俺と夢はページから逃げるために走っている。

アウス「出来れば倒してください」

竜馬「分かった出来るだけやってみる」

そして俺は念話を切った。

さて無々の力で戦いますか。

竜馬「無々。能力発動。形状は双銃」

無々『了解しました。能力発動』

そして無々はすぐさま双銃に変化した。

銃の形はデザートイーグルで色は少し黒く染まっていた。

竜馬「うらああっ！！！！」

ドドドドドドンッ！！！！

俺は照準をページに合わせて撃ち続けた。

これなら倒せるだろう。

ページ「Gurururu・GaaaaAAAAaaa！！！！」

突然ページが吠えたので撃つのを止めた。

するとベージの背後から二つの影が飛び出してきた。

夢「ひっ！りよ、竜馬！これって！！」

おいおい、今度はこいつらもかよ…

現れたのは暗黒界の斥候スカーと闇の住人シャドウキラーだった。

竜馬「マジでふざけんよ！！」

俺はそう言つて再び銃を放った。

しかし相手は3体どうしても捌ききれない。

！！しまった！シャドウキラーが夢のほうに！！

竜馬「夢！逃げろ！！」

夢「えっ！？」

俺は夢に向かって叫んだが既に遅く夢の目前にシャドウキラーはいた。

夢「きゃあああー！！！」

俺が夢の所に向かおうとするとベージとスカーが邪魔をした。

そして俺が見たのはシャドウキラーのナイフに刺されて倒れる夢の姿だった。

ジュエルシールドがナイフに刺さっていた。

竜馬「！！！！！」

ゆ、夢？おい、起きろよ、倒れてるなよ、早く逃げろよ。

おい、まさか…死んだのか？

死んだ？誰が？夢が？何で死んだ？刺された？何で？誰に？こいつ等に？

そうか…こいつらか…こいつ等のせいで俺の仲間が死んだのか。
俺の仲間を殺した…つまりこいつ等は敵…もっとも忌むべき敵。
俺の意識は真っ黒に塗りつぶされて行つた。

竜馬「殺す、殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す

殺す全て殺す!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

side out

sideフェイト・テストロツサ

私は悲鳴の聞こえた方に飛んで行きました。

しばらく飛んでいるととても強い魔力を感じました。

誰!?この魔力は誰なの!?

フェイト「早くジュエルシールドを回収しなきゃ」

BD「Yes, Sir」

そして私は魔力を感じた方向に向かいました。

私が悲鳴のした所に着くとそこには……………

「死ね、死ね死ね死ね死ね!!!!!!皆死んでしまえええええ!!!!!!
!!!!!!」

叫びながら銃を撃ち続ける男の子が居ました。

一緒に逃げていた女の子は少し離れた所で倒れていました。

!?…あれは、血!?

フェイト「いったい何があったの!?!」

私はただ男の子に恐怖を感じて動けなかった。

!?何?あの翼!?

見ると男の子の背中から茜色の翼が生えていた。

その翼はとても美しくそしてとても恐ろしく感じた。

「燃え尽きるおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

男の子が翼を羽ばたかせると炎が巻き起こり3体の化け物を包んで行った。

そして炎が消えると何も残って無かった。

フエイト「すごい…」

「畜生、生き返ってくれよ…夢…」

男の子は地面に膝を付き悲しそうに言った。
すると翼が女の子を包みこんだ。

「！？何だ？これは…」

翼が光を放ち開いて行った。
すると…

「…にゃあ〜お」

女の子が猫になって動いていた。

「夢！？生き返ったのか！？良かった。本当に良かった」
「にゃうっ？」

そして男の子は猫を連れて森の外に向かって行った。

ジュエルシードは近くの気に引っ掻かっていたので回収した。

あの男の子の翼は何だったんだろう？

そんな思いが私の中に残っていた。

仲間を傷つける奴には制裁を！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

霊使い達「……」

霊使い達が全員震えています。
そこまで怖かったか？

霊使い達「……怖い（よ）（です）（わ！）」

はっはっはまあ良いじゃん。
仲間のためなんだから。

霊使い達「……それでも怖い！！」

はあ…これじゃあ何もしゃべれないな。
しかたない闇を狩る少年続きます。

死なずの鳥と癒しのか(前書き)

はい、作者こと竜王です。

気付けばいつの間にかお気に入り件数が10件になっていました。

びっくりです！ありがとうございます！！

死なずの鳥と癒しの力

side 魔神竜馬

全てが敵。

そう認識して俺は双銃を撃ち続けた。

竜馬「死ね、死ね死ね死ね死ね！！！！皆死んでしまえええええ！！！！！！！！」

こいつ等のせいで夢は死んだ！

この3体の屑どもに！

だから殺す！

不意に俺の頭の中に呪文が浮かび上がって来た。

「ゼロ・インフィニティ…契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』…」

何だ？この呪文は…

まあ良いこいつらを消せるなら唱えてやるよ！

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

俺が呪文の詠唱を終えると突然背中から茜色の翼が生えてきていた。不思議とこの翼に恐怖は感じず、この翼の扱い方が手に取るように分かったのである。

こいつはちょうど良いこれでお前らを消してやるよ…

竜馬「燃え尽きるおおおおお!!!!!!!!!」

俺は翼を羽ばたかせて炎を巻き起こした。

炎がベージ、スカー、シャドウキラーを包みこんでゆく。

やがて炎が消えるとそこには何も残っていなかった。

そして俺に残ったのは自責の念だけだった…

竜馬「畜生、生き返ってくれよ…夢…」

俺はそう言っただけで倒れている夢の所に行った。

すると翼が俺の意識とは別に勝手に動き夢を包んで行った。

竜馬「!?なんだ?これは…」

何が起きてるんだ?

俺は何もしていないはず…

俺が考えている間に翼が光を放ちながら開いて行った。

夢「…にやあゝお」

翼が完全に開くとそこには元の猫の姿に戻った夢が居た。

竜馬「夢!?生き返ったのか!?良かった。本当に良かった」

夢「にやう?」

いつの間にか翼は消えていた。

夢が生きているなら良いか。

竜馬「よし!さすが達の所に戻るぞ夢」

夢「にゃんっ」

ジュエルシードが木に引つ掛かっている事には気づいていたが特に必要無いので放っておいた。

途中でユーノと倒れているのはに出会ったので背負ってすするか達の所に向かった。

結局その後も猫に集まられたりして大変だった。

それにしても、あの時頭に浮かんだ呪文は何だったんだろう…

side out

sideフェイト・テストロツサ

私は昨日あったことをアルフに話した。

アルフ「死んでいた女の子を猫にして生き返らせた？」

フェイト「うん。確かに死んでいたと思うよ」

アルフ「悪いがフェイト、死んだ者は生き返らないんだよ？」

それは私も知っている…でも確かに生き返っていた。どうしたら信じてくれるのかな？

アルフ「とにかく次のジュエルシードを探そうよ」

フェイト「…そうだね、アルフ」

私は一旦あの男の子のことを考えることを止めた。

今はとにかくジュエルシードを集めないと！

side out

side 魔神竜馬

俺は今、海鳴市にある山に居る。

昨日使った呪文を調べるためである。

竜馬「無々。能力を使って魔力を使えるようにしてくれ」
無々『了解しました。能力発動』

無々は小さなナイフに変化した。

これなら邪魔にならないという無々の配慮かもしれない。

竜馬「よし！え〜っと確か…ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

このとき俺は忘れていた…

この呪文は俺が殺戮をしている時に出てきたことを…

竜馬「ぐっ!?があああああつつつ!?!?!?!?!?」
無々『マスター!?!?』

突然俺は炎の中に閉じ込められたかのような錯覚にとらわれた。
熱いっ!体が焼けるようだっ!消えてくれっつ!?!?!
誰かつ助けてくれっ!

いつたいどれぐらい経っただろう…
何も感じない…
周りには何も見えないここはどこだ？

『……ター』

誰か呼んでいるのか？

『マ…タ…』

この暗闇から出してくれるのか？

『マスター！！！！』

俺は大きな声で呼ばれて眼を開いた。
そこは山の中で呪文を唱えた場所だった。

無々『良かった。目を覚ましたのですね』

竜馬「ああ、呼んでくれてありがとう。助かったよ」

無々は泣き出しそうな声で言った。

俺は立ち上がって自分の体を見た。

すると、外見がすっかり変っていた。

まず髪が伸び腰ぐらいの長さになっており色は赤色。

背中には茜色の翼が生えており両手首からは炎が出ていた。

竜馬「これは…」

無々『気付いてないかと思いますが瞳の色が黒から紅色に変化しています』

まじで！？それってまんまシャナじゃん！！

と言うかこの力は本来癒しの力だったんだ…
なのに殺戮の力として使ってしまった。

だからあんな苦痛を受けたのか。

竜馬「ん？この能力は…」

え〜と何々…蘇生の炎？

効果は…っておい！？

竜馬「よっしゃああ！！これでバッドエンドが回避できる！！」

あれ？何か声が物凄く綺麗だった気が…まさかね？

でも一応確認はしておかないとな。

竜馬「無々、ちょっと良いか？」

無々『何ですか？』

竜馬「いや、俺の声が何だか変わってる気がするんだよ」

気のせいだよな？

無々『はい。確かにその姿になられてから声が変わっております』

うわ〜気のせいじゃ無かったよ…

でも待てよ？この姿になってから？

なら元の姿に戻れば戻るのか!？

竜馬「とにかく試すしかないな! 『転身』リリース!」

俺がそう言くと俺の姿は元に戻った。

声も戻ってるよな？

竜馬「あ〜あ〜うん戻っている!」

良かったあの声のままじゃ落ち着かないもんな。

そして俺は無々を元に戻し翠屋に戻った。

死なずの鳥と癒しの力（後書き）

（霊使い達の雑談）

今回は竜馬の新しい技『不死鳥転身』について話すぞ

ウィン「あの呪文ってなんで出てきたの？」

それは竜馬の仲間を守りたいっていう強い思いが作り上げたんだよ。最初は守りたいっていう思いと敵を殺したいっていう思いが混ざっちゃったせいで翼しか出てこなかったんだだけだね。

ヒータ「なら竜馬が受けた苦痛は何が原因何だ？」

本編でも言った通りこの力は癒しの力だ。

でも竜馬は殺戮つまりは敵を殺すことに使ってしまったんだ。

あの苦痛は相手に与えた苦痛、だからあれはこの力で傷つけた相手のダメージがそのまま自分に帰って来ているんだ。

アウス「竜馬さまの声が変わってしまったのはなぜですか？」

ああそれは悪魔のフェニックスをイメージしているからだよ。

霊使い達「……フェニックス？」「……」

フェニックスはとても綺麗な声でしゃべると言われているからね。

霊使い達「……なるほど」「……」

エリア「あの…夢ちゃんが生き返ったのはなぜですか？」

それはこの力本来の力を竜馬が無意識のうちに使っていたからだよ。
この力は助けたいという願いが元になっているからね。

今回はここまで闇を狩る少年続きます。

いい湯だな…え？おっさん臭い？ほっとけ！（前書き）

！！！！

PVを見る方法を今日初めて知ってびっくりしました。

だって、15、369アクセスですよ！？

しかもユニークは3、688人ですし！

一瞬夢を見てるのかと思いましたよ…

本当にありがとうございます。

いい湯だな…え？おっさん臭い？ほっとけ！

side 魔神竜馬

何だろうな…この状況は。

説明しよう！今俺は車に乗っている。

ここまでは良いんだ。

でも、前の席からなのはがすごい表情でこっちを見ているんだよ…
何でこうなったんだっけ…

〜回想〜

士郎さん「さて、今日から温泉に行くぞ」

はい！？まじで？この連休に行くんだっけ？

なのは「はい！」

竜馬「はあ、分かりました」

なのはは嬉しそうに言った。

って言うかジユエルシートがあるんだよな…

桃子さん「アリサさん家やすずかさん家も行くのよ」

なのは「本当！？」

知ってましたけどね…

まあ、ジユエルシートが発動するまではのんびりしますか。
そして車に乗る時…

なのは「竜馬君！一緒に乗ろう！」

「ずか」「ずるいよなのはちゃん！私も！」
アリサ「竜馬の隣は私よ！！」

「何で3人とも俺の隣がいいんだ？
あつ俺が前の席に行けばいいか！
さてと前の席に行くか…」

俺は前の席に乗るために移動をしようとした。
あれ？体が動かない…何で！？
見ると3人がそれぞれ服を掴んでいた。

…あの、3人とも服を掴まないでください。

なのは「竜馬君？どこに行こうとしてるのかな？」
ずか「私の隣じゃ厭なの？」
アリサ「絶対に前の席はダメよ！」

なのは、その表情は怖いから！
ずか、泣き落としは止めてくれ。
アリサ、それ命令だよね！

竜馬「あゝだったら3人でジャンケンでもしてくれよ」

そして3人はジャンケンを行いアリサとずかが俺の隣になったのだ。

〓〓回想終了〓〓

あれ？これって自業自得ってやつなのか？
でも俺はこの3人にフラグを立てた覚えは無いぞ！？

「士郎さん」「もうすぐ着くよ」

へ？回想している間に着いちゃったのかよ。
周りの景色を見ておくんだった。

side out

sideユーノ・スクライア

どうしようどうしよう僕は男湯に行きたかったのに！

なのは「ユーノ君、温泉入ったことある？」

ユーノ「う、うん…その…公衆浴場なら入ったことあるけど…」

これも全部竜馬のせいだ。

竜馬がアリサに僕のことを洗うように言ったせいで僕はこんなことに！

なのは「にへへ温泉は良いよ」

ユーノ「ほ、本当？」

僕はすっかり振り向いてしまった。

そこで見てしまったのは、高町家の女性陣とアリサ、そして月村家の女性陣の裸だった。

ヤバイ！とてつもなくヤバイ！！

僕はそのまま男湯に逃げようとしたがあっさりとアリサに捕まり女湯に入ることになってしまった。

side 魔神竜馬

よしよし、計画通りに淫獣フラグが立ったな。

俺は男湯に入りながら笑った。

実際あのフラグはユーノ自身が逃げればいくらでも回避できるのだ。
それをしなかった時点であいつは淫獣だ。

竜馬「いい湯だな」
士郎さん「そうだね」

って言うか士郎さんの傷跡って結構多いよな。
お！恭也も入って来た。

恭也「父さんに竜馬おっさん臭いぞ」

失敬な！実年齢は18歳で体はまだ9歳だ！！
その後俺はゆっくりと温まって男湯から上がった。

side out

side 月村すずか

アリサちゃん「あゝ気持ちよかったわね」

すずか「そうだね」

なのは「竜馬君はまだ入っているのかな？」

そう言えば竜馬君は出てないみたい…

温泉が好きなのかな？

たしかここって10歳以下ならどっちにも入れるんだよね？
今から男湯に行こうかな…

「はゝい。おちびちゃん達」

え？この人は誰なんだろう…

「君かね？家の子をアレしてくれちゃったりしたのは？」

女の人はなのはちゃんの前でそう言いました。

どういうことだろう？

「あんま賢そうでも強そうでもないし…ただのガキンチョに見えるんだけどねえ」

アリサちゃんが女の人となのはちゃんの間に入り込みました。

アリサちゃん「なのは、お知り合い？」

なのはちゃん「う、ううん」

お知り合いじゃないんだ…じゃあこの人はいつたい？

あれ？いきなり驚いた表情であつちを見てる。

誰か居るのかな？

私達は振り返りました。

そこに居たのは竜馬君でした。

「あんたはっ！まあ良いアレを渡しな！！」

竜馬君「だが断る！！欲しかったら捕まえてみな！！！！」

そう言つて竜馬君は走つて行きました。

一瞬遅れてあの女の人も走りだしました。

あの人とお知り合いなのかな？

いい湯だな…え？おっさん臭い？ほっとけ！（後書き）

（霊使い達の雑談）

アウス「温泉ですか良いですね」

ウィン「あれ？ユーノに淫獣フラグが立ったね」

ああ、なんとなく面白そうだしな。

エリア「言い切りましたね」

ヒータ「言い切ったな」

別に良いじゃん。

アウス「良いですけど。私達も温泉に入りたいですね」
ウィン「そうだね」

はいはい、そんな君達にはこれをプレゼント！！

エリア「何ですか？これは…」

ヒータ「竜王温泉にご招待？」

と、言う訳で行ってらっしゃい。

霊使い達「」「」「ありがとう（）」（な）」「」「」

さてとそろそろ締めるか。

闇を狩る少年続きます。

紅眼赤髪の討ち手…その名を！えっ？言わなくて良い？（前書き）

感想来ないな

紅眼赤髪の討ち手…その名を！えっ？言わなくて良い？

side 魔神竜馬

俺は今鬼ごっこをしています。

鬼・頭から犬耳、腰から犬尻尾を生やしたコスプレ痴j「誰が痴女だ！！」…

もとい、フェイトの使い魔アルフです。

竜馬「勝手に考えてることを読むなよ！！」

アルフ「うるさい！！良いからさっさとアレを渡しな！！！」

あゝうるさいうるさい。

とにかく俺は走って逃げている。

ってゆうか軽くめんどくさくなってきたな…

どうしよう？

竜馬「どうしたらいいと思う？」

アルフ「知るか！！っーか何であたしに聞くんたい！！！」

俺がアルフに聞くとアルフは怒鳴り返してきた。

そんなに怒らなくてもいいのに…

side out

side アルフ

まったくなんて速さだい！

あたしが追いつけないなんてどんな足をしてるんだっての！！

アルフ「フェイト！この間のガキを見つけたよ！！！」

フェイト「本当！？アルフ！！ジュエルシードを渡してもらわなく

「ちゃー!!」

「そうだねフェイト! さっさと捕まえないとな!!
あたしは前を走っているガキを追いかけた。」

「あゝ飽きたわ…じゃあな!」

アルフ「なっ!?!」

いきなり魔力を感じたかと思うとガキは消えていた。

アルフ「すまないフェイト。逃がしちゃったよ…!」

フェイト「大丈夫だよアルフ。その旅館に居ることは分かっているんだから」

あたしは汗をかいたので温泉に入るために女湯に向かった。
…にしてもあのガキは何なんだろうねえ。

side out

side 魔神竜馬

俺がアルフとの鬼ごっこを終えて歩いているとなのは達には捕まった。

なのは「竜馬君…さっきの人とお知り合いなの?」

「さっか「綺麗な人だったね…どんな関係なの?」

アリサ「話すのと話させられるの…どっちが良い?」

だからなのは! その眼は怖いっつーの!!

「さっかも何だか眼のハイライトが消えてるし!!」

「それとアリサ? それは自白か拷問かの二択ってことか?」

3人「…早く答えて!!」

竜馬「はいつ!!え〜とまずなのは質問からな?あの人とは知り合いだよ。んで次にすすずか、単純に言う友達?かな。アリサ、自分で話したんだから良いよな?」

俺はすぐに答えた。

その答えを聞いて3人は納得をしたのだろうか?

3人「*「「*とりあえず今日は一緒に寝よう!!*「「「*
竜馬「はっ?何で!?!」

俺は3人が言ったことが理解できなかった。

一緒に寝るって?
だっていきなりだよ?

竜馬「ちよつ3人とも…っっていないし!」

気付くと3人はいなくなっていた。
いつの間に居なくなっただんだ?

竜馬「……部屋に行きたくねえ」

s i d e o u t

s i d e 高町なのは

私は今とてもご機嫌です。

何故かというジャンケンで勝って竜馬君の横で寝る権利を手に入れたからです!

!?!…この感覚は!

ユ一ノ君「なのは!」

なのは「うん!ジュエルシードだね!」

私は着替えてユーノ君と一緒に外に出ました。

なのは「レイジングハートお願い！」

RH『Stand by・Ready・Setup』

私の服装が変化しました。

たしかあっちの方から…

あっあの子は！！

side out

sideフェイト・テストロツサ

私の目の前でジュエルシードが発動しています。

すごい光です。

アルフ「うっは〜すごいねこりゃあ。これがロストロギアのパワー

ってやつ？」

フェイト「ずいぶん不完全な不安定な状態だけどね」

それでもすごい魔力に違いは無いんだけど…

アルフ「あなたのお母さんは何であんなものを欲しがってるんだろうね？」

フェイト「さあ？分からないけど今は関係ないよ。母さんが欲しがっているんだから手に入れないと」

とにかく封印しないと…

フェイト「バルディッシュ！起きて！」

BD『Yes Sir』

バルディッシュが杖の形になりました。

BD『Sealing Form・Set up』

バルディッシュから黄色の羽が生えて封印をする形状に変化しました。

フエイト「封印するよ！アルフ！サポートして」
アルフ「へいへい」

side out
side 魔神竜馬

さてと、なのはも行ったし俺も行くかな。
俺は外に出て言った。

竜馬「無々。能力発動。形状は日本刀」
無々「了解しました。能力発動」

無々はそう言つてに日本刀に変化した。
あとは、変装の意味も込めて…

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。
不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死
鳥転身』」

俺は呪文を唱えて変身した。
そして翼を羽ばたかせ空を飛びなのは達の所に向かった。

アルフ「それにさあ、あたし親切に言ったよね？良い子で無いとガ

ブツと行くよって」

竜馬「なら俺はガブツとやられちまうな」

俺の一言によつて全員がこつちを向いた。

フェイト「何者ですか…その翼は…」

アルフ「フェイト！あいつについて何か知ってるのかい!？」

まあ分かるわけ無いよなほとんど違う姿なんだし。

竜馬「さて、その宝石を渡してもらおうか」

4人「「「「!？」」「」」

俺のこの言葉を聞いて4人は戦闘態勢を取った。

そしてフェイトがバルディッシュを構えて言った。

フェイト「お断りします!!」

side out

side 第三者視点

竜馬が空中で静止をしておりフェイトがバルディッシュの魔力刃で切りつけた。

竜馬はそれを防ごうともかわそうともしないでまともに受けた。

ザグンツツツ!!!

フェイト「えっ!？」

フェイトは防ぐかわすかするだろうと思っていたらしいがその予想は裏切られ魔力刃は竜馬の…

…首を切り落とした。

フェイト「そんな！？嘘っ！？」

フェイトは起こった事実が受け入れられないのかバルディッシュを落とし頭を抱えた。

今まで人を殺したことは無かったのか震えていた。

そしてなのは達もそれは同じで目の前で人が死ぬなんてことは経験したことが無くただ呆然としていた。

竜馬「くくく…」

4人「「「「!?」」」」

突如切られたはずの首が笑いだした。

それは9歳の少女達にどれほどの恐怖を与えるのだろうか。

フェイト「そんな…確かに私がこの手で…」

なのは「く、首が…」

そんな中で主を守ろうとする意識からなのかアルフが最初に正気に戻った。

アルフ「どうなってるんだい!! あんたは死んだはずだろっ!!」

「!」
竜馬「ああ、確かに俺は死んだその女の子の手によってな」

竜馬の言葉を聞きフェイトの方が大きく跳ねた。

竜馬「…でも俺は今?^{フヘニックス}不死鳥?なんだよ」

竜馬の首がそう言つと突然首が燃え上がった。

ユーノ「な!?!いきなり燃えだした!?!」

なのは「ど、どど、どうなってるのユーノ君!?!」

なのはは慌ててユーノを掴み思い切り揺らしている。
やがて炎が消えるとそこには何もなかった。

フェイト「どうなっているの?」

フェイトのつぶやきに答えられる者はいなかった…

ただ1人を除いて…

竜馬「それは、こういうことだよ」

s i d e o u t

s i d e フェイト・テストロツサ

何が起きているの!?

あの子は私がこの手で殺した…

でも目の前で首がしゃべっていきなり燃えだした。

フェイト「どうなっているの？」

答えられる人はいないだろうもしいるのならそれは神か悪魔か…

竜馬「それは、こういうことだよ」

突然後ろから声がかけられ私達は振り向いた。

ありえない…最初に思ったのはこの一言だった。

なぜならそこに居たのは…

私がこの手で首を切り落とした子だったのだから。

紅眼赤髪の討ち手…その名を！えっ？言わなくて良い？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃんがゾンビになっちゃった〜！」
ヒータ「どうなってるんだ作者っ！〜！」

分かりました答えますよ。

あっ！そうそう霊使い達は温泉に入っているので服は着てないよ？
こう、裸にタオルを巻いて隠してる感じです。

エリア「そんな説明はいりません！〜！」

エリアが顔を真っ赤にしながら叩いてきた。

エリアだから痛いとかより可愛いという感じだ。
つと竜馬が生き返った理由だったな。

それは『不死鳥転身』の付与効果が原因だ。

霊使い達「〜」付与効果？「〜」

ああ、この能力の付与効果を前回説明し忘れててね。

『不死鳥転身』この力の付与効果は不老不死。

この力を発動している間はどんな攻撃を受けても死ぬことは無いんだ。

ただし空間を開けて封印されたりすると意味が無いんだ。
それとこの力って結構魔力消費が激しいんだよね。

アウス「そう言う事でしたか」

おう！まっこの位かな。

闇を狩る少年続きます。

霊使い達の入浴シーンはそれぞれ考えてみてください。
その内書きたいと思っています。

前にも言ったけど夜中に出歩くと危険だよ？

side 高町なのは

あの子はいつたい誰なんだろう…

あの女の子とはお知り合いみたいだし…

「さて、その宝石を渡してもらおうか」

4人「「「「「！？」」「」「」

あの子もジュエルシールドが目的なの！？

あっ！あの女の子がバルディッシュを構えて言いました。

「お断りします！！」

そして女の子が飛んでいるあの子に切りかかりました。

そして…あの子の首が飛びました。

…えっ！？首が飛んだ！？

「そんな！？嘘っ！？」

私の目の前で人が死んだ…

怖い…生きていない人…冷たい体…

「くくく…」

4人「「「「!?」」」」

突然あの子の首が笑いだしました!?

死んでなかった!?!でも首はつながって無い!

何で!?!何でなの!?!

「そんな…確かに私がこの手で…」

なのは「く、首が…」

私は恐怖で動けませんでした。

「どうなってるんだい!!あんたは死んだはずだろっ!!!!」

「ああ、確かに俺は死んだその女の子の手によってな」

責めるような口調であの子の首が言いました。

「…でも俺は今?フェニックス不死鳥?なんだよ」

首がそう言い終えると突然燃えあがりました!

ユーノ君「な!?!いきなり燃えだした!?!」

なのは「ど、どど、どうなってるのユーノ君!?!」

私は驚きユーノ君を掴んで聞きました。

しばらくすると炎が消えて何も残っていませんでした。

今のは幻だったの?

「どうなっているの?」

不意に女の子がつぶやきました。

あの女の子も何が起こったのか分からないみたいです。

「それは、こつこつことだよ」

いきなり後ろから声が聞こえてきました。

それは、まるで笑うような、そしてバカにするような声でした。

side out

side 魔神竜馬

俺は飛んだ首を燃やして体を再構築した。

そして4人の後ろから声をかけた。

竜馬「それは、こつこつことだよ」

その声に反応して4人は振り返った。

まるで死人が蘇った所を見たみたいな顔をしているな…
つて本当にそうだったか。

フェイト「今までののは幻術だったんですか？」

フェイトはいぶかしむように聞いてきた。

幻術か…そう思うのも無理は無いよな。

竜馬「いいや、現実には在ったことだよ」

俺のこの言葉に4人は驚いていた。

まあ、首が飛んだのに生きてるんだもんな。

竜馬「…フェイト・テストロッサ。お前の母親に伝言だ」

フェイト「!?!?どうして私の名前を!?!」

俺が念話をするとうフェイトが驚いていた。
気にせず伝言だけ伝えるか…

竜馬「貴様の夢は俺が叶えられる。叶えて欲しくば俺を呼べ…ちやんと伝えるよ」

俺は一方的に伝言を伝え念話を切った。
そしてジュエルシードを拾い俺が帰ろうとするとユーノが叫んできた。

ユーノ「それを、ジュエルシードをどうする気だ!!」
竜馬「うるさい、答えるつもりはない」

その後もユーノは何かを叫んでいたが無視して飛んで行った。
ちなみになのは怖くて何も考えられなくなっていたようだ。

sideout
sideフェイト・テストロツサ

何だったんだろうあの翼の生えた子は…

あの翼には見覚えがあった。

この前のジュエルシードの時に銃を撃っていた男の子の背中から生えていた物に似ているのだ。

フェイト「でも、あんなに髪は長くなかったし黒髪黒眼だったよね？」

アルフ「どうしたんだい？フェイト」

フェイト「ううん…何でもない」

アルフはドッグフードを片手に聞いてきた。

ドッグフードって犬用のご飯だよね？
アルフはオオカミのはずだけど…

フェイト「今日はもう寝よう」
アルフ「そうだね、おやすみフェイト」

そして私は眠りに就いた。

side out

side 高町なのは

あの子はいつたい何だったんだろう…

たしか…フェニックスさん？

首が無くなっちゃったと思ったらいつの間にか元に戻ってるし…

あっ！もう一つ気になることがあったの！！

あの後旅館に戻って眠ろうとしたら竜馬君の浴衣が汚れていることに気付いたの！

ユ一ノ君「この汚れはいつたい？」

なのは「竜馬君…もしかして竜馬君が…」

まさかね…竜馬君がフェニックスさんのわけ無いよね？

そんな不安を胸に私は眠りに就きました。

前にも言ったけど夜中に歩くと危険だよ？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「良い温泉だね」

ヒータ「そうだな」

エリア「そうですね」

アウス「そうですね」

4人は温泉に浸かっていた。

ウィン「ねえねえ流しっこしようよー！」

エリア「良いですね」

ウィンが温泉から上がり言った。

その体にはタオルを巻いておらずその幼き裸体を晒していた。そしてエリアも上がった。

こちらはタオルを巻いており小さな胸の膨らみを隠していた。

アウス「ヒータ泳がないください」

ヒータ「ちえっ」

アウスは温泉に浸かっており全身は見えないが霊使い一の胸が浮いている。

一方ヒータは注意されたことに不貞腐れ静かに浸かっている。

彼女は人目を気にしないのかタオルを持っていなかった。

そして彼女達は温泉を楽しんで行った。

以上が霊使い達の入浴シーンです。

お気に入り誰ですか？

私はウィンが一番です!!

分かりあえない気持ちと子を思つ母

sideフェニックス（魔神竜馬）

さて俺の目の前ではフェイトとなのは、アルフとユーノのバトルが行われてる。

てゆうか俺すごく場違いだよな。

あつ変身はしてるよ？

フェニックス「おい…ジュエルシードを渡してもらおうか」

俺の言葉を聞いて俺が居ることに気づいたらしい。

ちよつと寂しいぞ…

フェイト「あなたは！「母さんから伝言です。叶えられるなら叶えてみなさい。だそうです」」

フェニックス「ふむ…後で行くでしょう」

フェイトからプレシアさんの伝言を聞き俺は方針を決めた。

プレシアさん…いやプレシア・テストロッサお前の願いはお前次第だ。

俺は素早くジュエルシードを回収し、その場を離れた。

ちなみに魔力を軽く暴走させて時元震を起こしておいた。

管理局には来てもらわないとな。

魔力暴走が出来たのは無々に出来るかどうかを聞いたからだよ？

sideout

sideプレシア・テストロッサ

まったくどうしてこんなに回収が遅いのかしら。

やっぱりあんな子じゃダメなのね。

「プレシア・テストロツサだな…」
プレシア「!?!? 誰っっ!?!」

不意に後ろから声がかかった。

この場所には結界を張っておいたはず!

「俺か?…フェニックスとでも呼べ」

プレシア「フェニックス? あなたがあのだげけた伝言を言ったのね」

振り向き声の主を見るとそれは少年だった。

少年は瞳は紅色、髪は長く腰まであり赤く、両手首から炎が出ていた。

だが一番眼が行くのは彼の背から生えた茜色の翼だろう…

フェニックス「ふざけた伝言かどうかはともかく、お前の願いはアルハザードでも叶えられんぞ」

プレシア「何ですって!」

私の願いが叶わないですって!

私は怒りで魔力を放出した。

フェニックス「この程度か…ならばお前が俺を殺せたらお前の願いを叶えてやるよ」

プレシア「良いわよ…食らいなさい!!」

私は得意の雷を起こして少年に攻撃した。

この威力なら何も残らないでしょうね…

事実、煙が晴れるとそこには何も残っていなかった。

プレシア「ふ、ふふ、あはははは！！死んでしまえばふざけたことも言えないでしょうっ！！」

フェニックス「…ああ、そうだな。死んでいればな」

少年の声が聞こえたかと思うと突然炎が巻き起こった。

私は眼をつぶり防御の体勢をとった。

side out

sideフェニックス（魔神竜馬）

いや〜びっくりした。

いきなり全身を吹き飛ばされたからな。

これ死にはしないけど痛みはあるんだぞ。

フェニックス「ふん。どうした？化け物でも見るような眼をして…」

プレシア「そんなバカな！？確かにちゃんと殺したはず！！」

あゝ説明だりい。

めんどくさいから魔力を少しだけ解放するか。

プレシア「ひっ！！………な、何者なの…貴方は…」

静かにはなったけどやりすぎたか？

フェニックス「良いか、フェイトをこれ以上傷つけるな！お前の娘だろ」

俺がこう言つとプレシアは静かに言った。

プレシア「あの子は私の娘なんかじゃないわ」

娘じゃない、か…ヤバイ切れそうだ。
俺は怒りを抑えながら言った。

フェニックス「だが、あの子はお前を母親だと思っているぞ」
プレシア「関係無いわ。あの子は偽物それだけよ」

プレシアの言葉に俺は切れた。

フェニックス「いい加減にしろ！！あの子は……フェイトはお前が生み出したんだろ！！それを娘じゃないだどつ！！ましてや偽物だどつ！！ふざけんな！！理由はどうあれお前はフェイトを生み出した！その時点でお前はフェイトの母親でフェイトはお前の娘なんだよ！！！！」

俺は一息でここまで怒鳴った。

だがプレシアは少し怯んだだけだった。

プレシア「それでもあの子は…」
フェニックス「一つ言っておく、お前のもう一人の娘アリシアは自分が生き返った時に自分のせいで妹が辛い目にあっていたことを知って喜ぶと思うか？」

俺がアリシアの名を言うとプレシアの雰囲気に変化した。

プレシア「何故アリシアの事を！？それにあの子は人工生命体、人じゃないのよ」
フェニックス「だからどうした」

プレシアの言葉を俺は切り捨てた。

フェニックス「人工生命体で人じゃない？それがどうした！！フェイトはフェイトでしかないんだよ！！他の誰でも無いんだ！！！分かったか！」

俺が言い切るとプレシアは黙ってしまった。

フェニックス「しばらくしたらフェイト達が帰ってくるはずだジュエルシードは少ないが怒るなよ。それとケーキをお前のために買ってくるはずだから皆で食べな…そうそうこれはお前にやる」

そう言っただけで俺はジュエルシードをプレシアに渡した。

プレシア「貴方は…どうしてここまでするの？」

プレシアさんがおずおずと聞いてきた。

どうしてするか…か。

そんなことは決まっている。

フェニックス「俺がしたいからだ」

俺はそう言っただけで海鳴市に転移した。

side out

sideフェイト・テストロツサ

ジュエルシードは少ないけど母さんに届けなきゃ。

そう思っただけで私は時の箱庭に転移した。

アルフ「にしても本当にケーキ何かを食うのかねえ」

フェイト「分からないけど…お土産だよ」

私達は母さんのいる部屋に向かった。

フェイト「じゃあアルフ、ジュエルシールドを渡してくるね」
アルフ「気を付けてね」

アルフを外に待たせて私は部屋に入った。

フェイト「ただいま母さん」

母さん「ジュエルシールドは？」

母さんはいつものように聞いてきた。

フェイト「今回はこれだけしか…」

私はそう言いながらジュエルシールドを渡した。

母さん「これだけ？…まあ良いわ次は頑張りなさい」

フェイト「えっ!？」

怒られると思っていたけど怒られませんでした。

すると母さんは私の手を見て言いました。

母さん「それはいったい何？」

フェイト「えっとこれはその母さんにとってケーキを…」

私はケーキを前に出しながら言いました。

母さん「そう、ならお茶にしましょう。アルフを呼んでらっしゃい」
フェイト「はい」

私は急いでアルフを呼びに部屋の外に向かった。

この時私は涙を流していたのでアルフに誤解され母さんを殴ろうとするアルフを止めるのが大変でした。

分かりあえない気持ちと子を思つ母（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃんがまた怒つたね」

エリア「はい、でも今回も人のためでしたね」

そりゃあそつだ、あいつは仲間を大切にしているからな。

ヒータ「でもフェイトはまだ仲間じゃないぞ？」

関係無いな、あいつが仲間だと認識するのは基本的に会話をした奴が第一条件だし。

アウス「なるほど。最初の追いかけてこをした時点で仲間だと認識していたんですね」

そう言う事。

ちなみにお前等も大切な仲間だとさ。

霊使い達「くくくく／／／／」「くくく」

真つ赤になつてまた締めらんねえな…

闇を狩る少年続きます。

戦う力を求めるのは愚者か賢者が…

side???

「みなどう？今回の旅は順調？」

「はい。ですが以前の不可解な時元震はいまだに解明されていません」

以前いきなり起こった時元震…

発生場所は管理外世界…地球。

魔法技術はゼロのはずよね。

「失礼します。リンディ艦長」

リンディ「ありがとね。エイミィ」

エイミィは私の前に紅茶を置いた。

リンディ「そうね。魔法技術ゼロとは言え時元震はちょっと厄介なものね」

時元震は小規模でもとても危険な物そんなものが自然に起こり得るのかしら…

リンディ「危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと。ね？クロノ」

クロノ「大丈夫。分かっていますよ艦長。僕はそのために居るんですから」

クロノなら大抵の魔導師は勝てないでしょうし大丈夫よね。

side out

side 魔神竜馬

時刻は夕方、翠屋の手伝いも終わり俺はジュエルシールドが発動するのを待っている状態だ。

竜馬「無々。能力発動。形状はナイフ。結界展開」

無々「了解しました。能力発動、結界展開」

俺は無々に結界を張ってもらってちよつとした練習をした。

竜馬「無々。新しい呪文を創るべきかなあ？」

俺はふと思ひ浮かんだことを聞いた。

無々「突然何ですか？」

無々は俺に質問してきた。

俺が先に聞いたのに…

竜馬「いやな??不死鳥轉身?はさ、回復専門で攻撃すると与えたダメージが全部帰って来ちゃうんだよ」

無々「なるほど、でしたら攻撃用の呪文が必要かもしれませんね」

無々も必要だと思うか…

攻撃系ならどんなのが良いだろうか?

不意に俺はアルフ「つまり狼が思ひ浮かんだ。」

竜馬「狼、か…まあ良いかな。」

狼とくればフェンリル魔狼だよな。

フエンリルっぽい呪文か…狡猾とか？

竜馬「とりあえずこれで良いか。ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

俺はとりあえず思いつきで呪文を言ってみた。すると全身を光が包み俺は目を瞑った。時間にして大体1分ほど経っただろうか…急に光が消え目が開けられるようになった。

竜馬「なんだこりゃ？」

俺は自分の体を見て思った事を口に出した。なぜなら俺の体は？不死鳥転身？のときのようにすっかり変わっていたのだから…まず目についたのは両腕と両足の膝から下が毛皮に覆われていたことだった。

そして白銀の狼の耳と尻尾が生えていたのだ。

無々『マスター瞳が紅色、髪の色が白銀に変化しています』

竜馬「マジかよ…っ！かこの力思いつきで創ったのに結構強いな」

？不死鳥転身？の時と同じくこの力の使い方が頭に入ってきたのである。

ヤバイこの力だけでクロノ倒せるわ…

竜馬「まっとにかく練習だな。え〜と…影爪」

俺がそう言うと俺の影が変化して俺の手足に付着し爪に変化した。

これなら戦いやすいかな？
でも、無々が持てない…

竜馬「この技はあまり使えないな…つとジュエルシールドが発動したか」

俺は結界を解除してジュエルシールドの元へ向かった。

sideout

sideフェイト・テスタロッサ

私がジュエルシールドの元に着くとすでにあの子…なのはがすでに居た。

あの木の化け物がジュエルシールドだね。

私は魔力球を創りだし撃ちこみました。

化け物「G u u u u u a a a a a a a a a a」

私が撃った魔力球が全て防がれてしまいました。

アルフ「わゝお。生意気にバリアまで張るのかい」

フェイト「今までのより強いね。それにあの子もいる」

私が言うとあの子はこちらを見ました。

化け物「G u r u a a a a」

突然木の化け物が攻撃をしてきました。

ですが…いきなり影から槍のような物が飛びだし攻撃を撃ち落としました。

「あゝあ…こんな雑魚相手に苦労すんなよな」

不意に私の影から声が聞こえてきました。
そして影から何かが出てきました。

フェイト・アルフ「?!?」

「驚くなよこの程度で、さてアレを殺すか」

私の影から出てきたのは白銀の髪に狼の耳と尻尾を付けた男の子でした。

アルフ「何者だい！あんたは！！」

「何だ…分からないのかまあ良い俺はフェンリルだ」

分からない？知っている子なのかな？

アルフ「どうでもいい！あんたは何のために来たんだい！！」

フェンリル「うるさいな…先にあっちを終わすぞ…影槍」

フェンリルがそう言って指を鳴らすと木の化け物の影からさっきの槍のような物が飛び出し木の化け物を貫いて行った。

フェンリル「これでジュエルシードの封印は完了だ」

気がつくとフェンリルはジュエルシードの元に行って封印をしていた。

side out

side 魔神竜馬

ジュエルシード封印も終わったし後はKYを叩き落とすだけだな。

そろそろ来るか？

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

思ったけどこいつならジュエルシードが発動する前に封印できたんじゃないかねえ？

そう思ったが俺は何も言わずにいておいた。

戦う力を求めるのは愚者が賢者か…（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「KY出たね」

エリア「出ましたね」

ヒータ「いつからこいつはKYなんだろうな？」

アウス「生まれた時からでわ？」

クロノはKYって言うレツテルが剥がれることは無いな。

ヒータ「んで？魔狼転身？の効果は何なんだ？」

え〜と影を自由に操れる。

付与効果はスピードの上昇。

他にもまだあるけどこれはまた後でだな。

エリア「何故ですか？」

今説明するとネタばれになるかもしれないから。

アウス「そうですか」

んじゃこの辺で、

ヒータ「闇を狩る少年続くぞ！感想とかをくれるとこいつが喜ぶから送らなくても良いぞ」

ちよっ何でそんなこと言うの…！

力の差が分からないと早死にするよ？

sideクロノ・ハラウン

なんなんだあいつは！

影から現れたかと思っただけならすぐに木の化け物を倒してしまった。

クロノ「艦長！クロノ・ハラウン出ます！！」

艦長（母さん）「分かりました」

僕は艦長に許可をとり現場に轉移した。

そして僕が現場に着くと影から現れた少年はこちらを見ていた。まるで来ることが分かっていたかのように…

クロノ「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

僕がそう言つと少年が笑った。

「くつくくく…何故今さら来たんだ？」

クロノ「どつという意味だ」

僕は少年を睨みつけながら言った。

「お前等が最近この世界を見張っていたのは知っている…なら何故ジユエルシードを早くに回収しなかった」

クロノ「なっ！？それは…」

僕は言葉に詰まった。

ジユエルシードを回収しなかった理由それはこの世界、地球が管理

外世界だった事と魔法技術がゼロだったからである。

side out

sideフェイト・テストロッサ

フェンリルが管理局の人を言いくるめてます。

アルフ「フェイト！今のうちに逃げるよ！！」

フェイト「分かった！」

私達が逃げようとしていると管理局の人が攻撃をしてきました。

「待て！！」

当たる！！私はそう思い目をつぶりました。

……………あれ？衝撃が来ない？

恐る恐る目を開くと私達の前に……

……フェンリルがいました。

side out

sideフェンリル（魔神竜馬）

つたく危ねえよなあ……

俺はクロノの撃った魔力球を全て叩き落とした。

フェンリル「ほら、さっさと行け」

フェイト「あ、ありがとございます」

さて、フェイトも行ったし……ちょっと切れますか！

俺は素早くクロノの背後に回り込み掌底を打ち込んだ。

フェンリル「？閃天華？」
クロノ「がっはあああ」

おお飛んでく飛んでく。
でもまだこれからだ。

俺は飛んで行ったクロノに追いつき追撃を放った。

フェンリル「？死刺連撃？？轟天裂覇？」
クロノ「ぐああああつ！！がふうつ！！！」

俺の攻撃でクロノは地面に叩きつけられ気絶した。
ちなみに放った技は死刺連撃が相手に連続で突きを放つ技。
轟天裂覇が相手の腹に踵落としを叩きつける技だ。

フェンリル「死なないだけ良かったな……」

side out
side 高町なのは

何が起きたんでしょう……
いきなりフェンリルさんが消えたかと思うと時空管理局の人が吹き
飛んでいました。

フェンリル「？死刺連撃？？轟天裂覇？」

そんな言葉が聞こえたかと思うと時空管理局の人が目の前に落ちて
きました。

何ででしょう……フェンリルさん、すごく怒っている気がする。

フェンリル「死なないだけ良かったな……」

えっ！？本当に時空管理局の人を死なせちゃう気だったの！？
怖いけど聞かなくちゃ…

なのは「あの、フェンリルさん。ジュエルシードをどうする気ですか？」

フェンリル「んあ？何だ…お前も気付かないのか」

気付かない？私も知っている子なのかな？

「申し訳ないけど、話を聞いてもらってもいいかしら」

突然空中に大きな画面が現れました。

誰でしょう？女の人映っています。

side out

side リンディ・ハラオウン

私は正直驚きました。

私の息子クロノはそこいらの魔導師には負けなと思っていたのだけれど…

「艦長！あの少年にリミッターの様な物が3個程付いています」

リンディ「何ですって！？」

3個もリミッターが付いていながらクロノを倒してしまうなんて！

リンディ「彼らと話がしたいわ。繋げてちょうだい」

「分かりました。」

私が話をするために繋げると白い服の女の子は驚き、男の子はまる

で知っていたかのようにしていました。

リンディ「申し訳ないけど、話を聞いてもらってもいいかしら」
「何の用だ…リンディ・ハラオウン」

！？私の名前を知っている！？

何者なの彼は…

リンディ「ジュエルシードと貴方のその魔法について聞きたい事があるの」

「ふむ…ならば日を改めて明日の…午後3時にこの公園に集合しろ」

side out

sideフェンリル（魔神竜馬）

管理局は原作をvividまで呼んで機動6課が気に入っただけだった。

他に気に入ったのはハラオウン家とエイミィ、ぐらいだっただかな？
ならなぜクロノを攻撃したかって？

力の差を見せるためだよ。

それにいくらリンディでも友達を利用されるのは厭だからね。

リンディ「分かりました。ではまた明日」

そう言ってリンディは消えた。

なのははと言うと話について行けずにポカーンとしていた。

フェンリル「明日の午後3時だ。お前等も来い」

なのは「へ？は、はい！」

俺がなのはに聞くと驚きながらも返事をした。

って言うかマジでこいつ気付いてないわ。

フェンリル「さらばだ…影道」

俺はなのはの影に触れ潜っていった。
影を利用した転移魔法だ。

side out

side 高町なのは

ふえええええ！？

フェンリルさん私の影の中に潜ってっちゃった！！
どうなってるの！？

ユ一ノ君「彼はいつたい何者なんだ？あんな魔法聞いたことが無い

…」

なのは「そうなの！？」

本当にどうなってるの！？

あ！そう言えばさっきの女の人がフェンリルさんの魔法について聞いてたの！！

明日行けば分かるのかな？

力の差が分からないと早死にするよ？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃんの魔法にリミッターが付いてるよ？」

気にしなくて良いぞ。

あれは意味があるから。

ヒータ「なら良いけどよ」

エリア「竜馬さん強かったですね」

アウス「あの呪文一つであそこまで強くなれるのでしょうか？」

書かれてないけど実は修行してたんだよ。

最近は土郎さんと恭也に戦わないか聞かれてるらしいし。

ヒータ「バトルマニア戦闘狂か」

そう言う事。

じゃあ締めは…アウス！

アウス「分かりました。それでわ閻を狩る少年続きます」

交渉はごちらが有利になるように進める(前書き)

孝様よりおかしい点を指摘されたので訂正します。

交渉はこちらが有利になるように進める

sideフェンリル（魔神竜馬）

さて後20分で集合時間だ。

俺はフェンリルの姿で公園の木の影の中にいる。

影の中って結構落ち着くんだよ。

俺の正体はなのは達にはばらしておくか。

その方が楽だし…

フェンリル「ん？…リンディ達が来たか」

影から覗くとリンディ・クロノの2人が来ていた。

俺も出るとしよう。

フェンリル「時間より少し早いが来たようだな」

2人「！！！？」

まあ、いきなり影の中から人が出てきて話しかけたら驚くよな。
そんな中でクロノが最初に我に返った。

クロノ「君はいつたい何者なんだ！」

フェンリル「まあ待て。まだ後2人が来ていない」

sideout

その頃のなのははと言つと、

ユーノ「なのは！早くしないと間に合わないよ！…」

なのは「じゃあああ！…！もっと早く起こしてよおおおおお！…！…」

そんなことを叫びながら全力疾走していた。

side 魔神竜馬

なのはが来たのは決められた時間から15分遅れてからだった。

クロノ「ところで君たちはいつまでその姿なんだ？」

ユーノ「あ！それもそうですね」

フェンリル「俺も元の姿に戻るか」

そしてユーノがまず元の姿に戻った。

ユーノ「ふう…なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

なのは「ふえええ！？ユーノ君って男の子だったの！？」

騒がしいな…よし次は俺だな。

フェンリル「『転身』リリース！」

俺の体は光に包まれ元の姿…魔神竜馬の姿に戻った。

ユーノ「！？君は！！！」

なのは「へ！？えっ！？竜馬君がフェンリルさんでユーノ君が男の子で！？にゃああああ！！！！どどういう事なの！？」

なのはが落ち着くまで更に10分消費した。

そしてユーノの口からジュエルシードを回収している理由を聞いた。

リンディ「立派だわ」

クロノ「だけど同時に無謀でもある！」

最初はユーノ1人だったしね。
だがそれは後から介入してきた組織が言う事では無いな。

竜馬「ならば回収せずに悪人の手に落ちるのを見てるってことで良
いんだな？」

クロノ「そんな事は言っただろ！！管理局に言えば良かった事
だ！！」

俺の言葉にクロノが噛みついた。

こいつ結構キレやすいよな…

リンデイ「ところで貴方は何故ジュエルシードを集めるのかしら？」

竜馬「んあ？ああ俺か。俺がジュエルシードを回収する理由か…特
に無いな」

俺がそう言つと全員が驚いた表情をした。

ユーノ「理由もなくジュエルシードを回収してたのか！！」

竜馬「うるさいぞ淫獣」

いきなり耳元で大声を出されたのでつい言ってしまった。

まあ、事実だったし良いか。

その一言で周りの空気が凍りついた。

side out

side 高町なのは

なのは「えつと…竜馬君？それってどういう事？」

竜馬君「まだ分からない？そいつ温泉で女湯に入ったじゃないか」

そう言えばそうなの!!

なのは「ユーノ君？ちよつと良いかな…」

ユーノ君「ちよ！あ、あれは竜馬がアリサに言ったからであって僕の意志は…」

竜馬君「でも逃げようと思えば逃げられたる？」

その言葉を聞いて私はレイジングハートを準備しました。
逃がさないよ？ユーノ君

私はユーノ君を連れて少し遠くに行きました。

side out

side 魔神竜馬

はい、遠くで叫び声や砲撃音が聞こえるけど気にせず次に行こう。

竜馬「んで…聞きたいことは終わりか？」

リンディ「はい。これよりロストログア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます」

リンディははつきりとした口調で言った。

その言葉になのはとぼろクズ（ユーノ）は驚いた。

クロノ「君たちは今回の事は忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮らすと良い」

なのは「でも、そんな…」

なのはは不満らしく声を出した。
まあいきなり出てきた組織に自分がやって来た事を止めさせられたら不満だよな。

クロノ「時元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらおうレベルの話じゃない」
なのは「でも…」

と言うかここまで言われたら大体の奴はあきらめるぞ？
結構頑固だよな。

リンディ「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。
今夜一晩ゆっくり考えて3人で話し合ってから改めて話をしましょっ」

リンディはいかにも当然かの様に言った。
こいつ等は気に入っているけどこの手口は気に入らない。

竜馬「ならもう帰るか？なのは、ユーノ」
リンディ・なのは・ユーノ「…えっ!?」「」

俺が立ちあがるとリンディが慌てて止めた。

リンディ「待つてくれないかしら？貴方にはまだ聞きたい事があるの」
竜馬「そうかい。だが答える気は無い。仲間を利用しようとする奴にはな」

俺がそう言うとリンディの表情が変わった。

リンディ「どういう事かしら?」
竜馬「はあ…クロノ!」
クロノ「なんだ?」

俺がクロノの名を呼ぶとクロノは不思議そうに返事をした。

竜馬「お前さつき民間人に介入してもらうレベルじゃない、そう言ったよな？」

クロノ「あ、ああ」

クロノは肯定した。

この時点で俺の勝ちは決まった。

竜馬「それなのになぜ改めて話し合う必要がある？」

リンディ「そ、それは……」

リンディは口ごもりながら言った。

俺はさらに追撃を放った。

竜馬「答えは単純。危機感をあおれば俺達が協力すると思ったからだろう？違うか？リンディ・ハラオウン」

俺がこう言つとリンディは完全に黙ってしまった。

交渉はこちらが有利になるように進める(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

エリア「竜馬さん交渉が得意なんですね」
ウィン「すごいね」

あれは得意なんじゃなくて、ただ原作の気に食わない部分を指摘しているだけだぞ。

ヒータ「じゃあ原作知識が無かったら？」

協力しちゃうんじゃない？

アウス「原作知識があつて良かったですね」

本当にな。

んじゃあ今回の締めは……エリア！

エリア「わ、私ですか！？え、えと闇を狩る小年続きます……これで良いんでしょうか？」

協力させてもらっくんじゃない協力してやってるんだー！

side 高町なのは

えつと…竜馬君が色々話をしてリンディさんを喋れなくしてしまいました。

私には何の話なのかさっぱりです。

なのは「えつと竜馬君？どういうことなの？」

竜馬君「分からないのか？」

竜馬君は呆れたように言いました。

そ、そんな表情しなくてもー！

なのは「う、うん」

竜馬君「なのは、お前は協力させてもらおうと思って無かったか？」

そうだけど何かおかしいのかな？

なのは「ダメなの？」

竜馬君「ああ、協力させてもらっことは相手のルールに縛られるんだ。それに対して協力してあげるといっことは相手のルールに縛られないんだ。これだけですごい違いだろ？」

えつと…つまり協力させてもらっちゃダメで協力してあげたら良いのかな？

うっこんがらがってくるよー

竜馬君「まあ、俺の言う通りに今はしてろ」

なのは「分かったのー！」

竜馬君に任せておけば大丈夫だよな。

side out

side 魔神竜馬

さて、なのはに説明も終わったし後はリンディのみ。

竜馬「で？リンディこれで終わりなら俺達は帰るぞ？」

リンディ「……確かに協力を促すように導きました。その事については謝罪します。そして時空管理局提督、管理局艦船『アースラ』艦長としてお願いします。私達に協力してください」

リンディは謝罪をし協力要請をしてきた。

ふむ、後は俺の条件を呑ませるだけだな。

竜馬「良いでしょう。ですが条件があります」

リンディ「条件ですか……」

俺の言葉にリンディは悩むような表情になった。

竜馬「そこまで難しくはありませんよ。ただこの事件の犯人を無罪にしてほしただけですから」

リンディ「それって結構難しいわよね？」

クロノ「と言うか君の言い方だとまるで犯人を知っているみたいだな」

突然クロノがよこやりを入れた。

まあ、実際知ってるしね。

竜馬「おう、知ってるし知り合いだ」

4人「「「「!!?!?」「」「」」

俺の一言で全員が俺を見た。

普通は知ってるわけ無いから当然か。

クロノ「な!? そいつはいつたいたい誰なんだ!!」

竜馬「教えるかアホ」

俺の言葉にクロノの怒りの臨界点は最大値を超えた。

クロノ「君と言う奴はあああああ!!」

S2U『St a i n g e r S n i p e』

そしてクロノが攻撃をしてきた。

っーかこいつ短気だな。

竜馬「はあ…無々。能力発動。形状は大鎌。結界展開」

無々『了解しました。能力発動、結界展開』

無々は俺とクロノを結界に入れた。

『転身』はしなくても良いよな?

竜馬「よっ!はっ!そりゃっ!」

俺はクロノの攻撃を簡単にかわしていく。

と言うかこの程度かよ。

クロノ「まだまだ!!」

竜馬「あゝめんどくせえな…撃ち落とすか」

俺は大鎌に魔力を込め始めた。
そのままかわし続けること5分。
俺は魔力の集束が苦手なのでディバインバスター並に5分程かかるのだ。

竜馬「それじゃこれで終わりだな。死神の鎌」
クロノ「なに！？うわあああ！！！！」

俺の溜めた魔力は刃の形状をして飛んでいきクロノに命中した。
一応加減はしたけど大丈夫かな？
あ、気絶してる。

竜馬「まあ良いか。無々。モードオールリリース」
無々「了解しました。モードオールリリース」

無々がそう言う俺とクロノは結界の中から解放された。
いきなりクロノが気絶しているからかリンディは驚いていた。

竜馬「それでリンディ。俺の条件は呑めるのか？」
リンディ「…分かりました。その条件を呑みます」

俺の問いにリンディは肯定を示した。
そこでリンディは思い出したかのように言った。

リンディ「ところで貴方の能力について聞きたいのだけれど」
竜馬「俺の能力か…単純に言うとな変身魔法だぞ？」

俺が余りにもあっさりと答えたのでリンディは少し驚いていた。
そんな中ユーノが疑問を口にした。

ユーノ「でも、あんな魔法は聞いたことが無い」
竜馬「そうだろうな。俺が創ったんだし」

side out

sideリンディ・ハラオウン

魔法を創ったですって!?

そんなこと私達でも難しいのに…この子はいつたい。

竜馬さん「それで質問は以上か？」

リンディ「え、ええ」

私はこの少年に少しだけ恐怖を感じていた。

自分の力で魔法を創り出す技術。

戦闘になると途端に測定不能になるその魔力。

そして私の考えを瞬時に見抜き自分が有利になるように持っていく
技術。

とても少年とは思えない。

竜馬さん「そんじゃ帰るか。行くぞなのは、ユーノ」

なのはさん「うん」

ユーノさん「分かった」

そして3人は帰って行きました。

さて、私も帰りましょう…クロノをどうしようかしら？

私は少し考え迎えを呼ぶ事にしました。

協力させてもらっんじゃない協力してやってるんだ!! (後書き)

〈霊使い達の雑談〉

ウィン「今回は、ぶっちゃけ話だって」

ヒータ「なんだそりゃ？」

エリア「この作品の内容について話すそうです」

アウス「それなら私達がいつもやっている気がしますが……」

いーや今回はこの作品自体についてだ。

4人「……作品自体?」「」「」

おう、実はな死神デスサイスの鎌って技は本当は無かったんだよね。

それと前回の?閃天華??死刺連撃??轟天裂覇?この三つも出す気は無かったんだけど出しちゃったんだよね。

ヒータ「そう言っつぶっちゃけ話か!」

YES!

ヒータ「そのネタはもう良い!!!」

結局殴ってるんだからいつSぶるわばああああ!!!

ウィン「やっぱりこうなるんだね」

エリア「そうですね」

アウス「私達もですけどね」

ウインは俺の嫁!という訳で今日はウイン!

ウィン「えっ！？いきなり告白された！？闇を狩る少年続きます。
うゝ恥ずかしい／＼／」

やっぱ可愛いな。

何故助けるか？俺がしたいから！

side 魔神竜馬

交渉から10日が経ちジュエルシードは俺達が3個フェイト達が2個回収した。

つーか10日間で5個見つけれられるならさっさとやれよ！

竜馬「そついやそろそろだな」

リンディ「？何がそろそろなのかしら？」

俺のつぶやきにリンディは反応した。

竜馬「いや、こつちの話ですよ。あ！そつだ、俺ちよつと出ますね」
リンディ「そつ、分かつたわ」

俺はそう言つて海鳴市に戻つた。

なのは達はまだアースラにいるよ？

竜馬「無々。能力発動。形状は日本刀」

無々『了解しました。能力発動』

無々は日本刀に変化し俺の魔力が使えるようになった。

今さらだけどリミッターみたいだな。

竜馬「そんじゃあやりますか。ゼロ・インフィニティ契約に従い、
我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠
にして終焉なり。『不死鳥転身』」

俺は呪文を唱えフェニックスに変身した。

そついやこの姿の事を誰にも言つて無かつたような…まあ良いか。

竜馬「これで良いな。後は…海にGO!!」
無々『いきなりボケないでくださいよ…』

俺の言葉に無々が反応した。

そして俺は海に向かって飛んで行った。

side out

sideフェイト・テスタロツサ

私は今海の上にあります。

ここに残りのジュエルシードがあるはず。

フェイト「アルカス、クルタス、エイギアス、煌めきたる天陣よ。
今導きの元降り来たれ。バルエル、ザルエル、ブラウゼル…」

私の呪文に反応するように魔法陣から雷が降ります。

フェイト「撃つは雷。響くは轟雷。アルカス、クルタス、エイギア
ス…」

もうすぐ呪文の詠唱が終わる。

これが終わればジュエルシードが手に入る。

フェイト「はああああああ!!!!!!」

私は海の中のジュエルシードに向けて放ちました。

すると海の中のジュエルシードが暴走し竜巻が起りました。

フェイト「見つけた。残り6つ…」

これを手に入れて母さんに喜んでもらうんだ！

side out

side 魔神竜馬

発動したか…

フェイトの元にさっさと向かわないとな。

俺は急いでフェイトの元へ向かった。

竜馬「つーが無茶するよな。フェイトも」

無々『マスターもですよ』

あはは…耳が痛いな。

っと見つけた！！

竜馬「フェイト！アルフ！」

俺が声をかけると2人は驚き戦闘態勢をとった。

フェイト「何の用ですか…」

アルフ「邪魔するんじゃないよ！」

まったく、こんなになつてまで発動させるなよ。

竜馬「はあ、治癒の焰」

俺はフェイトに近づき能力を使った。

するとフェイトは炎に包まれた。

アルフ「フェイト！！あんたフェイトに何をしてるんだい！！！！」

竜馬「うるさい、ちょっと黙ってる」

しばらくしてフェイトを包んでいた炎が消えた。

フェイト「すごい…体力も魔力も回復してる」

フェイトの言葉にアルフは驚いてこちらを見た。

アルフ「いったいどういうつもりだい？」

竜馬「別に？ただやりたい事を行っているだけだよ？」

俺の言葉にアルフは呆れたのかポカンとした。

フェイト「あ、あの、ありがとうございます」

竜馬「どういたしまして」

フェイトは律義にお礼を言った。

と云うかなのは達もそろそろ来るかな？

竜馬「とりあえずはアレを抑えるか」

そう言っつて俺は竜巻に近づいた。

別に全部壊しても良いんだけどさやっぱ見たいじゃん。

2人の協力封印はさあ…

竜馬「んじゃ竜巻の上の方を切っていけば良いかな？」

俺は竜巻の上の方に向かうと無々を構えた。

っつて言うか俺マジでシヤナッばい。

竜馬「オラオラオラオラ！！」

竜巻を完全に破壊しないように手加減をして俺は攻撃をした。
お！やつと来たか。

side out

side 高町なのは

えっと…どういう状況なんでしょうか

私が海の上に着くとフェニックスさんが竜巻を切っています。

フェニックス「やつと来たか。なのは封印をフェイトと協力してやつて来い」

なのは「ふえ！？何で私の名前を！？」

突然フェニックスさんが私の名前を言いました。
私の名前は誰も教えてないよね？

フェニックス「まだ気付かないのか？俺だ、俺」
なのは「もしかして…竜馬君？」

私はまさかと思いつつも言いました。
するとフェニックスさんは笑いながら言いました。

フェニックス「正解だ。やつと分かったのか？」
なのは「ええええええ！？本当に竜馬君！？」

本当に！？フェニックスさんも竜馬君だったの！？
じゃあ温泉の時も……

竜馬君」と、さっさとアレを封印するぞ」

なのは「え？あ、うん」

とにかくジュエルシードの封印が終わったからお話してもらおうの……！
私はレイジングハートを構えながらそう心に決めました。

何故助けるか？俺がしたいから！（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「もしかしてお兄ちゃん危ないフラグが立った？」

ヒータ「O H A N A S I フラグだな」

お話と言う名の肉体言語ですね分かります。

エリア「でも？不死鳥？なら関係無いんじゃない？」

アウス「ですが痛みはあるので結構つらいですよ」

そう、？不死鳥？はただ死なないってだけだしな。

今回の締めは…ツンデレことヒータ！！

ヒータ「ツンデレって言うな！！っと闇を狩る少年続くぞ！待て作者っ！！！」

ヒータ、作者を追いかけて全力疾走する。

仲間がいれば何とかなる…はず！

side 魔神竜馬

さて俺は封印のために竜巻を破壊してジュエルシードを露出させるか。
とりあえずたたっ切れればいいか？

竜馬「それじゃあフェイト、なのは。竜巻を壊すから封印よろしく」

フェイト「え？はい」
なのは「分かった」

そんじゃ行きますか。

俺は日本刀の形状の無々を構え魔力を乗せて竜巻に向かって行った。

竜馬「はああああああ！！！」

無々に乗せた魔力が巨大な刃を形成した。
つて言うかこれわざわざ日本刀にしくなくてもよかった気が…まあ良
いか。

竜馬「つせい！！！」

俺は横薙ぎに無々を振って竜巻を全て一気に切り捨てた。
フェイト達は俺の後ろにいるよ？

アルフ「なんつー威力だい…」
フェイト「すごい…」

ユーノ「あんな事までできるのか…」

なのは「あはははは……」

何か後ろで言ってるけど気にしない。

竜馬「ほれ2人とも封印、封印」

俺の言葉にフェイトとなのはは慌てて準備をした。

フェイト「サンダー……」

なのは「デイベイン……」

2人は封印魔法を砲撃の様に見つつもりらしい。

あれ？あきらかにオーバーキルじゃね？

……ま、いつか。

フェイト「レイジイイイイ……！！！！！！」

なのは「バスタアアアア……！！！！」

2人の砲撃が命中しジュエルシードは全て封印された。

つーか原作通りだとプレシアの攻撃があるんだが……

なのは「友達に……なりたいんだ」

このシーンは見れて良かったかな。

つと一応周囲の警戒をしておくか。

俺が周囲を警戒していると突然巨大な魔力を感知した。

竜馬「まさか……本当に無駄だったのか？プレシア・テストロッサ……」

俺は誰にも聞こえないように小さくつぶやき魔力が集束している場

所を見た。

そして俺達の上に降り注いできたのは………

∴ 巨大な氷塊だった。

プレシアじゃなかった。

それが分かっただけで俺はとても嬉しかった。

なのは「にゃあああああ!? 何これええええええええ!!!!」

フェイト「また別の魔導師が!?」
ユーノ「僕の手じゃ防ぎきれない!」
アルフ「くそっ!逃げ切れないよ!」

つと喜んでる場合じゃないな。

竜馬「全員近くに来い!!」

俺はフェイト達を近くに呼び寄せた。

壊しはしないよ?

生きていようとなくなろうとダメージが全部俺に帰って来るんだから。
ただ……防ぐだけ!

竜馬「いくぞ!!…守護天翼!!」

翼が俺の言葉に呼応するかのように巨大化し全員を包みこんだ。

side out

sideフェイト・テスタロッサ

この子はなんなんだろう?

敵のはずの私を回復したり…

今も私とアルフを助けてくれている。

不意に大きな音が聞こえました。

フェニックス「ぐっ!!結構きついな!」

なのは「大丈夫!?竜馬君」

竜馬?それが本当の名前?

するとフェニックスが突然叫びました。

竜馬「なのは！ユーノ！フェイト！アルフ！今のうちに転移しろ！」

私達「……えっ！？」「」「」

転移しろ？フェニックスを見捨てろってこと？

……何だろう……何だか……今転移するのはヤダって思う。

竜馬「早くしろっっ！！！」

竜馬は辛そうにしている。

うん……私はフェニックスを……竜馬を見捨てたくない！

フェイト「ヤダ……」

竜馬「えっっ！？」

私の言葉に竜馬は驚いていました。

反対されるだろうな……でも、私は竜馬の役に立ちたい！

フェイト「フェニックスさん……いいえ竜馬！私をこの中から出して！！！」

竜馬「なっ！？危険なんだぞ！！！」

そんなことは百も承知だ。

竜馬は私の決意が変わらない事が分かったのかこう言った。

竜馬「分かった。だが！無理だと思ったたらすぐに転移しろ！」

フェイト「うん！！！」

そして私は竜馬の翼の中から出た。

外に出て上を見ると巨大な氷塊がまだ半分以上残っていました。

フェイト「竜馬は私達をこんな物から守ってくれてたんだね…」

私は氷塊の横に回り込み魔法の準備をした。

side out

side 魔神竜馬

フェイトが翼の中から出て行った。

アルフ「フェニックス！！何であの子を出したんだ！！」

不意にアルフが怒鳴った。

その表情は怒りに満ちていた。

竜馬「あの子の…フェイトの意志を尊重しただけだ。それに外の方が安全だしな」

アルフ「そうなのかい？」

どちらも嘘は言っていない。

なぜならフェイトが行きたいと言ったのだし、ここは今は安全だが俺が力を抜くとすぐに潰されてしまう。

だったらまだ安全なうちに外に出した方が安全なのだ。

竜馬「ほれ、さっさと転移しろ」

軽口を言っているが結構やせ我慢だったりする。

死ぬことは無いが疲労は溜まるのだ。

それにこの技は防いだ質量によってダメージを受けるのだ。

なのは「なら私達も外に出て手伝うよ！」

ユーノ「僕も君の負担を少しは軽くできるはずだよ」
アルフ「あたしはあの子の使い魔だ。あの子を手伝うよ」

こいつ等は…

竜馬「ああ、分かった！行って来い！！」

ユーノは俺の横に来て障壁を張った。
そしてアルフ、なのはの2人は外に出た。

side out

side 高町なのは

私が竜馬君の翼から出ると氷の塊は最初の4分の1位まで小さくな
っていました。

なのは「フェイトちゃん！！私も手伝うよ！！」
アルフ「フェイト！！大丈夫かい！！」

見るとフェイトちゃんはバルディッシュを鎌の形にして氷を切っ
ていました。

私も頑張るの！！

なのは「デイベイイイイイン……バスタアアア……！！！！！！」

私のデイベインバスターで氷の塊は大分壊れました。
あと少しかな？

竜馬君が持ってくれると良いけど…

なのは「とにかく急いで壊さなきゃ！！」

side out

side リンディ・ハラオウン

なんて子たちなの…

エイミィ「あの子たち皆Aランクを簡単に越えていますよ？」

リンディ「本当!？」

あの子たちが味方でよかつたわ。

私は内心でとても安堵していました。

side out

side 魔神竜馬

あの後なのはの砲撃やフェイトの斬撃、そしてアルフの拳撃によって氷塊は全て破壊された。

ユーノも障壁で手伝ってくれたので俺への負担はそこまで無かったが結構疲れたらしい。

竜馬「ありがとうなフェイト」

フェイト「ノノノノ」

俺はそう言ってフェイトの頭をなでた。

フェイトは赤くなりながらも黙ってなでられてた。

なのは「じゅゅ……」

…物凄くなのはが見ています。

なんだろう？

竜馬「どうかしたのか？なのは」

なのは「私だつて頑張つたもん!！」

…あゝそう言う事が。

竜馬「そうだな。ありがとうなのは」
なのは「はにゃ／＼／＼／＼」

しばらくの間俺はなのはとフェイトをなでていた。

仲間がいれば何とかなる…はず!! (後書き)

〜霊使い達の雑談〜

ウィン「いいなあ〜」

ヒータ「どうしたんだ？」

エリア「フェイトさんとなのはさんが竜馬さんになでてもらって
たのでそれでしょうか？」

アウス「十中八九それですね」

俺がなでてやろうか？

ウィン「いいの？」

おう！

作者ウインをなでる。

ウィン「はふう〜」

可愛いなあ〜

ヒータ「で？今回の締めは誰なんだ？」

じゃあ俺がやるよ。

闇を狩る少年続きます。

ウインは可愛いなあ〜

ウィン「はにゃ〜」

ヒータ「今回はこれで終わりかよ!!」

優しい人ほどとても脆くそしてとても強い

side 魔神竜馬

さて、闇が出てこない内にやることやつとかないとな。

前回、時の箱庭に行った時は無々が転移してくれたんだが…

毎回同じじゃ飽きるよな。

竜馬「と言う訳で、無々。能力発動。形状はナイフ」

無々『なにがと言う訳なのは知りませんが。了解しました。能力発動』

そして無々はナイフに変化した。

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

俺は呪文を唱えてフェンリルに変身した。

次は…転移だな。

竜馬「影道」

近くの影に触れて俺は転移した。

side out

side プレシア・テストロツサ

あの少年が現れてから20日程経った。

不思議なものね、あの少年に怒鳴られてからフェイトに対して愛しいと思うようになるなんて。

アリシア…あなたの妹は元気になっているわよ。

「プレシア・テストロツサ…」

プレシア「!? 誰!?!」

私が物思いに耽っている和不意に声がした。

振り帰ってみると狼?の耳と尻尾を生やした少年がいた。

プレシア「貴方は誰!?!いつの間にここに進入したの!?!」

「ああ、すまんこの姿の事を言つて無かつたな。ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥轉身』」

少年が呪文を唱えると見る見るうちにフェニックスの姿に変化した。こんな呪文があるの!?!

プレシア「あなただったのね。何の用かしら?」

フェニックス「フェイトの事を娘として見てるかどうかの確認だな…」

そう言つてフェニックスは私を真つ直ぐに見た。

ちよつとかつこいいつて思ったのは内緒よ?

side out

side 魔神竜馬

俺はプレシアを真つ直ぐに見つめ言った。

竜馬「プレシア。お前にとってフェイトは何だ?」

この質問の答えによつては俺はプレシアと戦わなければならなくな

る。

プレシアは静かに答えた。

プレシア「あの子は…アリシアの代わりに創りだした人形、アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形…」

戦う事になってしまっただけか？

プレシア「だけど…」

竜馬「？」

何だ？プレシアの纏う空気が明るくなっている？

プレシア「あなたの言葉を聞いて、そしてフェイトと話をして気付いたわ。あの子は…フェイトは私の娘だと。たとえ人工生命体だとしても私が生み出したのだから私はあの子の母親なんだと」

俺はこの言葉を聞いて泣きそうになった。

良かった。望んだ中で最高の言葉が聞けた。

竜馬「その言葉が聞けて良かったですよ。これであなたの望みを叶えられる」

プレシア「私の望みを叶える？…まさか！」

プレシアは少し考えて俺が何を言っているのかを理解したようだ。

プレシア「でも…そんなことが出来るの？」

竜馬「大丈夫ですよ。俺はフェニックスですので」

side out

side プレシア・テストロツサ

私は驚いた。

なぜなら彼は…フェニックスはアリシアの蘇生が出来ると言っているのだから。

プレシア「分かったわ。ついて来て頂戴」

そして私はフェニックスをアリシアのいる部屋に連れて行った。

アリシアの前に来ると不意にフェニックスが顔を横にそらしながら言った。

フェニックス「…すみませんが。服を着せてもらってもいいですか？」

ああ、アリシアが裸でカプセルの中にいたからなのね？
意外と純粹なのね。

私はカプセルからアリシアを出し服を着せた。

プレシア「これで良いかしら？」

フェニックス「はい。大丈夫です。じゃあやりますね。蘇生の炎」

突然アリシアが炎に包まれた。

本当に大丈夫なのかしら…

プレシア「アリシア…」

私はただ見守るしかできなかった。

side out

side 魔神竜馬

人を生き返らせるのは結構キツイ。

それが俺の感想だった。

なぜならちよつとでも気を抜くと魔力が暴走してしまうからだ。でも、やり遂げるんだ。

フェイトが不幸になってしまっただから…

突然魔力が弱くなっていった。

まさか…失敗したのか!?

俺は不安に押し潰されそうになりながらアリシアの様子を見た。すると……

アリシア「んっ…お…母…さん？私…私…私…その子は？」

少女は目を開き喋りかけてきた。

成功して良かった。

俺はそう思ったのを最後に気絶した。

蘇生をするのに精神的に疲労がピークだったらしい…

優しい人ほどとても脆くそしてとても強い（後書き）

（霊使い達の雑談）

エリア「竜馬さんがアリシアさんの裸を見ましたね」

ヒータ「あいつの場合は事故だろ」

でも原作知ってたならアリシアが裸なのは分かり切ってたと思うけどな。

アウス「つまり竜馬様は知っていながら何もしなかったんですね？」

ウィン「お兄ちゃんって精神年齢19歳だったよね」

じゃああいつはロリコンなんだな？

ヒータ「んな訳あるかああああー！！！！」

エリア「落ち着いてよヒータさん」

と、とりあえず今回の締めは…そういや全員やったんだよね？
じゃあ…全員で！！

アウス「無茶ぶりをしますね。」

ウィン「まあ良いじゃん。やるうやるう！」

さあ早くやるう。

エリア「じゃあ私から、仲間を助ける少年」

ウィン「次はあたしだね 幸福と不幸は隣り合わせ」

アウス「私ですね。次に待つのは、希望か絶望か」

ヒータ「最後はあたしだな。全ての仲間を助けられるのか」

闇を狩る少年続きます。

仲間の幸せは俺の幸せ

side プレシア・テストロツサ

私は目の前の出来ごとに驚いた。

なぜなら死んでいたはずのアリシアが生き返ったのだから…

アリシア「お母さん？」

プレシア「アリシアッ！！良かった。本当に良かった」

不意にフェニックスが倒れました。

見ると気絶をしていました。

アリシア「お母さんその子は？」

プレシア「分からないけどどこか休める所に運びましょう」

私は魔法でフェニックスを浮かべてベッドに運びました。

なぜ急に気絶をしたのかしら…

アリシア「この子…大丈夫だよね？」

プレシア「ええ絶対に起きるわ」

私はアリシアを連れて部屋から出ました。

side out

side 魔神竜馬

…ここは…どこだ？

周りには何も無い…

無限に広がるかのように光も闇も無い虚無の空間が続いていた。

竜馬「誰かいないのか？」

「誰だ…我が空間にいる者は…」

俺が声を出すと返事が返って来た。

その声は男性の声の様であり女性の声の様でもあった。

そして幼くも聞こえ年老いた老人の声の様にも聞こえた。

竜馬「俺は魔神まがみ 竜馬りょうまだ。お前の名は？」

「我が、我の名は魔獣ジャバウオック」

ジャバウオック…魔獣か…

ジャバウオックが名前を言い終わると不意に竜の翼をもった人物が現れた。

竜馬「って女の子かよっつ!!!」

ジャバウオック「何だいきなり大声を出して」

思いつきり突っ込んでしまった。

だって名前からしてドラゴンとかみたいなのを想像するだろ普通。

竜馬「ああ、すまん。でここはどこなんだ？」

ジャバウオック「ここは…忘れられた世界だ」

ジャバウオックが静かに言った。

竜馬「俺は何でこんな所にいるんだ？」

ジャバウオック「さあな、いつの間にか主ぬしはいたのだ」

どういう事だ？俺はアリシアを生き返らせて…

俺は考え込んでいた。

ジャバウオック「主はこの世界にずっといられるのか？」

竜馬「どうだろうな…もし帰れるなら帰るが」

ジャバウオック「…そうか」

ジャバウオックはさみしそうに言った。

竜馬「何だ？」

ジャバウオック「いや、また1人になるのだと思ってな」

こいつは…ジャバウオックはこの世界で一人ぼっちだったのか。それは…とても辛く寂しいんだろうな。

竜馬「…なら俺と一緒に来るか？」

ジャバウオック「良いのか？」

ジャバウオックは驚き俺を見た。

竜馬「ああ、お前は俺の友達だ」

ジャバウオック「友？我は主と友なのか？」

ジャバウオックは少し考えた。

俺にとってこいつはすでに友達なんだよな。

ジャバウオック「…ありがとう。我に友が出来るとは思って無かった。ありがとう我が友、竜馬」

ジャバウオックが俺に礼を言った。
すると空間に突然ひびが入った。

竜馬「!?!何が起こったんだ!?!」

side out

side ジャバウオック

今までこの世界には我しかいなかった。

故に友もおらず孤独だった。

そんな我に初めて友が出来た。

魔神 竜馬、我の初めての友。

主の言葉、とても嬉しく思うぞ。

ジャバウオック「落ち着け、どうやらこの世界も限界だったらしい」

竜馬「どういう事なんだ?」

この世界は我がいるから存在した。

だが、我に友ができ我の心に光が宿った。

ジャバウオック「この世界は我と一心同体言うなれば我の心だ」

竜馬「?????」

竜馬はよく分からないようだ。

まあ良いこれは起こるべき事なのだから…

ジャバウオック「単純に言うところの忘れられた世界が我の心で、今変化が起こっているのだ」

竜馬「そうなのか…」

大体は理解できたようだな。

さて次に出来る上がるのはどのような世界なのか…

そんな思いを胸に我と竜馬は強い光に包まれた。

side out

side プレシア・テストロッサ

私はガラスが割れたかのような音を聞いた気がした。
今の感覚は何かしら？

プレシア「フェニックスはどんな状態かしら」

私は椅子から立って竜馬が寝ている部屋に向かった。
部屋に入るとフェニックスの姿が変化していた。

そして彼の横には先程までいなかったはずの少女が倒れていた。

フェニックス「…ん？ここは…」

プレシア「起きたのね。フェニックス」

彼が起きたので話しかけた。

プレシア「あなた体は大丈夫なの？突然倒れて…それにその子は？」

フェニックス「プレシア？…ああ、大丈夫だ。こいつは俺の友達、

ジャバウオックだ」

ジャバウオック「…む？ここは…竜馬！ここはどこだ？」

フェニックスが少女を紹介してくれた。

ジャバウオック「って確か魔獣だったような気が…」

フェニックス「ところで、アリシアは大丈夫か？」

プレシア「ええ、あなたのお陰で…ありがとう」

私は思っていた事を素直に言った。

するとフェニックスが言った。

フェニックス「これで…俺がすべきことは1つになったな」
ジャバウォック「どういう事だ竜馬？」

ところでさっきから気になっていたんだけど…

プレシア「竜馬って何かしら？」

フェニックス「ああ、言って無かったな。俺の本当の名前だ」

と言う事はフェニックスと言うのは偽名だったのね。

プレシア「なら、あなたの本当の名前を教えてちょうだい」

竜馬「分かった。俺の名前は魔神 竜馬だ」

魔神 竜馬…良い名前ね。

仲間の幸せは俺の幸せ（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「オリキヤラ登場！！」

エリア「ジャバウオックさんですか」

アウス「どんな方なんでしょうか？」

ヒータ「教える作者」

はいはい。

名前 ジャバウオック

年齢 不明

誕生日 不明

性格 純粹

外見 東方のレミア・スカーレット

魔力 SSS 色は紅色

忘れられた世界の主。

初めて友達になった竜馬のことが好き。

口調は本人曰く気付いたらなっていたとのこと。
竜馬のためになら何でもやると意気込んでいる。

ウィン「フェイトちゃんのライバル？」

エリア「そうなりますよね」

ヒータ「って言うかレミアかい!!」

アウス「東方が好きなんですか？」

おう、東方のスカレット姉妹が特にお気に入りなんだ。
とそろそろだな今回は…アウスだな。

アウス「分かりました。闇を狩る少年続きます」

オリキャラ紹介…む？我が？（前書き）

前回の後書きで少しだけしたジャバウオックの詳細プロフィールです。

更にプロフィールの後にジャバウオックの過去話を挿入します。
興味が無かったら読まなくてもいいよ？

オリキャラ紹介…む？我か？

名前 ジャバウォック・サタナキア

年齢 不明（年齢と言う概念が無かったため）

誕生日 本人曰く覚えていないとのこと

性格 純粹

外見 東方のレミア・スカーレットを金眼紅髪にした感じ

魔力 SSS 色は紅色

能力 アリス・イン・ブロウケンワールド
壊れた世界へようこそ
ブロウケン・ゴット・ウエボン
壊れた神器

忘れられた世界の主。

口調は気付いたらなっていたとのこと。

初めての友達の竜馬が好きで竜馬のためなら何でもすると意気込んでいる。

幻想郷が出身だが能力が危険すぎるため地霊殿にも入れずやむなく紫によって空間ごとずらされて封印されていた。

能力の効果は壊れた世界へようこそが自分の周囲の空間を強制的に自分の心情風景へと変化させていく力。

現在は友達や竜馬がいるこの世界を無くしたいと思っているので特に影響は無い。

フロウクン・ユッケ下・ウエボン
次に壊れた神器、こちらは至って単純な能力だ。
あらゆる神話に出てくる武器・防具・道具などを多少能力を劣化さ
せて創りだすという力である。

次からはジャバウォックが封印されるまでの物語です。
読みたくなかったらここで戻るを押してください。

side 第三者視点

そこは人里離れた山奥の辺境地。
ここには妖怪等の人外のものが多く住んでいるが、わずかながら人
間も住んでいる。

この地の名を人や妖怪たちはこう呼んだ…

…幻想郷と。

あるとき幻想郷に正体不明の妖怪が現れたという噂が立ち始めた。
村人たちの目撃例は様々だった。
例えば1人が、

「妖怪の姿はとても大きな竜だった」

と言つと途端に他の目撃者が、

「いや、牛の頭をした巨人だった」

と、いった風に目撃者の見た姿は全てバラバラだったのだ。こんなに違うのだから村人は皆、違う妖怪だったのでは？と思っていた。

しかし目撃者の話を聞いて行くと一つだけ一致している所があったのである。

「その妖怪に会った時ガラスが割れるような音を聞いた」

「ガラスのような物が割れた音を聞いたと同時にその妖怪に出会った」

このように皆、妖怪に会った時にガラスが割れるような音を聞いているのだ。

この事に気付いた幻想郷の天狗：射命丸文は自分の新聞にこう書いた。

正体不明の妖怪にご注意を！！

この妖怪は出現する時にガラスが割れるような音がします。

この音を聞いたら周囲を注意してみましよう。

もしかしたら正体不明の妖怪の正体が分かるかも！？

森によく現れるらしいです。

side out

side???

まったく、こんな記事を書くなんて…

天狗もヒマなのかしらね。

私は新聞を置きお茶を飲んだ。

「お〜い霊夢〜この記事読んだか？」

霊夢「うるさいわよ魔理沙」

私が縁側でのんびりしていると白黒魔法使いこと霧雨 魔理沙が空から降りてきた。

魔理沙「良いから、良いから。この記事を見たか？」

霊夢「この記事でしょ。正体不明の妖怪？くだらないわね」

私はそう言っつて再びお茶を飲んだ。

「それでも無いわよ？」

霊夢「今度はアンタなの？」

私はお茶を置き横を見た。

そこには傘を持ち空間に腰かけている隙間妖怪と呼ばれている女性、八雲 紫がいた。

霊夢「何の用よ」

紫「この記事に出ている妖怪について調べてほしいのよ」

紫は私が置いた新聞を指差し言った。

霊夢「何で私が…」

紫「報酬は出すわよ？」

霊夢「やらせていただきます!!」

魔理沙「早っつ!!!」

魔理沙が何か言ってるけど関係無いわ！

霊夢「で？森に行けばいいの？」

紫「ええ、気を付けてね」
魔理沙「あたしも行くぜ！」

魔理沙が勝手に付いて来たけど報酬は私の物よ!!
そして私達は森に向かった。

side out

side???

ここはどこなのだろう…

ただ覚えている事は我の名がジャバウォックだと言っただけだった。
最近よく出会う物はいったい何なんだろうか…

「あんたが正体不明の妖怪ね！」

「結構弱そうだな？」

また何かが来たようだ。

その物は片方が白と紅に包まれており、もう片方は白と黒に包まれていた。

ジャバウォック「何者だ…」

「それはこっちのセリフなんだけどね」

白と紅に包まれた物が答えた。

「とにかくこいつを倒しちまえばいいんじゃないのか？」
ジャバウォック「なるほど主等^{ぬし}は敵か…」

我は白と黒に包まれた物の言葉を理解し戦闘の体勢をとった。

side out

side 八雲紫

何かしら？空間に違和感が…

発信源は…森ね。

霊夢達が行ったから大丈夫なんでしょうけど何だか厭な予感がするわね。

紫「行ってみるしかないわね」

私は空間の隙間に入り霊夢達の所に向かった。

霊夢達の所に着くとそこは別の空間になっていた。

紫「霊夢！？これはどういう事なの！？」

霊夢「紫！？何だかあの妖怪の周囲の空間がどんどん変化しているのよ！！」

何よその能力は！？

私は驚いてその妖怪を見た。

「主も敵か…」

私の事を見て妖怪は言った。

私の事も敵と見なしたみたいね。

このままじゃこの幻想郷までこの空間が包んでしまいそうね。

紫「霊夢！この妖怪は思ったより危険だわ！別の空間に封印するかから手伝ってちょうだい！」

霊夢「分かったわ！でも報酬は貰うわよ！！」

霊夢は返事をした。

まあ今回は私も予想外だったわ。

紫「スペルカード？色と空の境界？？波と粒の境界？」

私はスペルカードで空間に隙間を創り出した。
これで準備は万端ね。

side out

side ジャバウオック

紫「霊夢！準備が出来たわよ！！」

霊夢「OK！！行くわよ！！」

何やらやるつもりらしい…
だが我は負けぬぞ…

ジャバウオック「何でもいい倒すだけだ…」

霊夢「あんたをね！！スペルカード？夢符『夢想亞空穴』？」

突然白と紅に包まれた物が何かを放って来て我は吹き飛ばされた。
後ろを見ると空間に亀裂が出来ており我はその亀裂に吸い込まれた。

ジャバウオック「ここはどこだ？」

「ここは何も無い忘れられた世界」

突然背後から声がかかった。

ジャバウオック「主は…」

そこには先程戦った敵の1人がいた。

「あなたの力は危険すぎた。だからこの世界に封印するわ」

ジャバウオック「…そうか。我は孤独に生きるしかないという事だな…」

「そうなるわね。じゃあさようなら」

そう言つて敵は消えて行つた。

そして我の孤独の生活が始まつた。

side out

side 第三者視点

その後ジャバウオックは忘れられた世界に封印された。

ジャバウオックは最初は明るい世界でのんびりとしていた。

しかし、時間が経つにつれ孤独の心に囚われていきそれに伴い忘れられた世界も闇に染まつていった。

オリキャラ紹介…む？我か？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「ジャバウオックちゃんって悲しい子だったんだね」

エリア「そうですね」

ヒータ「でももう大丈夫だろ？」

アウス「何故ですか？」

そりゃあ竜馬と友達になったんだから悲しい事はなくなるだろ？

アウス「それもそうですね」

そんじゃあ今回は…エリア！

エリア「は、はい！闇を狩る少年続きます。ふう、びっくりしましたよ」

家族が一つになる時

side 魔神竜馬

あれ？そういえばジャバウオックに名字を聞いてないような…
ちなみに今俺達はプレシアの家の部屋におりプレシアは紅茶の準備
をしている。

竜馬「なあジャバウオック。お前の名字ってなんだ？」

ジャバウオック「私の名字？そんなものは無いよ。我はただのジャ
バウオックだ」

名字が無いのか。

でもそれだと色々不便だよな。

竜馬「…じゃあ俺が付けてやろうか？」

ジャバウオック「良いのか!？」

俺が聞くとジャバウオックは驚いて聞き返した。
そんなに驚く事か？

竜馬「おう！そうだな…サタナキアとかどうだ？」

ジャバウオック「サタナキア…うん気に入った。これより私の名は、
ジャバウオック・サタナキアだ」

ジャバウオックはとても喜んでいた。

するとプレシアが紅茶を持って部屋に入って来た。
後ろにアリシアもいた。

プレシア「あら？竜馬、ジャバウオックちゃんは何を言んでいるの

「？」

プレシアは喜びのあまり動き回っているジャバウォックに疑問を持たらしい。

竜馬「ああ、名字が無かったんで俺が付けてあげたんですよ」

プレシア「それであんなに喜んでいてるのね」

俺はプレシアが用意した紅茶を飲んだ。

アリシア「あの…お母さんから聞きました。私がここにいるのはあなたのお陰だって、ありがとございます」

アリシアが俺にお礼を言った。

後はこの事をフェイトに伝えるだけだな。

竜馬「気にするな。それと敬語は要らない分かったか？アリシア」

アリシア「分かった！えつとあなたの名前は？」

そう言えばプレシアに言った時はアリシアはいなかったんだな。

竜馬「俺の名前は竜馬。魔神まがみ 竜馬りゅうまだよ」

アリシア「うん！竜馬っ」

アリシアは敬語が苦手だったのかな？

敬語を使わなくていいって言った途端笑顔になったし…

竜馬「プレシア…この事はフェイトに伝えたか？」

プレシア「あなたが起きたから今から伝えるわ」

そうか：なら心配はいらないな。
ん？そっぴいゃジャバウオックの住む所どうしよう？
まっ何とかなるだろう。

竜馬「プレシア、俺達はこれで帰る。まだやるものが残っているから家族で話す事が終わったらここに連絡してくれ」

俺はそう言ってプレシアに携帯の電話番号を書いた紙を渡した。

プレシア「分かったわ。必ず連絡する」
アリシア「またね竜馬！」

そして俺達は無々に海鳴市に転送してもらった。
とりあえず高町家に行くか。

竜馬「それじゃあジャバウオック。これから俺が厄介になっている家に行くから付いて来て」
ジャバウオック「分かった」

side out

side ジャバウオック・サタナキア

我は竜馬に付いて行っている。
む？竜馬がなにやら歌っておるな。

竜馬「~~~~~」
ジャバウオック「竜馬、その歌は何だ？」

我が聞くと竜馬は歌うのを止めて言った。

竜馬「俺のお気に入りのお歌の一つだよ」

ジャバウォック「ふむ、続きを歌っておくれ」

我がそう言つと竜馬は再び歌いだした。

竜馬「はいよ……」

そして竜馬はしばらくの間ハミングをしていた。
間奏とやらだったかな？

竜馬「……」

再び竜馬はハミングをおこなった。
もう一度間奏なのか。

その後も歌を竜馬は歌い続けた。
む？竜馬が止まった？

ジャバウォック「どうしたのだ？竜馬」

竜馬「ん？歌もちょうど終わったし目的地に着いたしね」

ここが竜馬が目指していた所か。

side out

side 高町なのは

えっと、さつき竜馬君が帰って来たんだけど知らない女の子が一緒にいます。

あの子は誰でしょう？

お父さん「で？竜馬その子は誰なんだ？」

竜馬君「この子は俺の友達でジャバウォック・サタナキアです」

じゃ、ジャバウオ？
なんて言ったんだろう？

お父さん「それでサタナキアちゃんはどうして家に？」
竜馬君「いや今日友達になったんですけどジャバウオックも家が無
いらしくてどうしたらいいかを聞きたくて連れてきました」

この子も竜馬君と同じで家が無いの？
何だか可愛そう…

お母さん「ならこの子も家に暮らす？」
竜馬君「良いんですか！？」

あれ？なんで竜馬君が驚くの？
と言つかさつきからこの子何も喋って無いの。

お母さん「ええ、竜馬君の友達なら大歓迎よ」
竜馬君「ありがとうございます。ほらジャバウオックも言え」
ジャバウオックちゃん「我を住まわせてくれてありがとうございますま
す」

…ジャバウオックちゃんって結構変わった喋り方をするんだね。
そして私の家に住む人が増えました。

家族が一つになる時（後書き）

（霊使い達の雑談）

ヒータ「竜馬は歌がうまいんだな」

アウス「そうですね」

気に入った歌はほとんど覚えるようにしてたからな。

エリア「すごい記憶力ですね…」

ウィン「ほんとだね」

あとゲームの攻略法とかも覚えてたかな？

ヒータ「そんなのもあるのかよ」

まあ、軽く無駄だよな。

今回の締めは…ウィンだな。

ウィン「は〜い 闇を狩る少年続きます これで良い？」

おう、十分だ。

作者ウインをなでる。

ウィン「はにや〜／＼／＼／＼」

アウス「またこんな終わりですか…」

真実を聞く時そして家族の絆

side プレシア・テストロツサ

竜馬が転移したので私はフェイトを呼んだ。

フェイト「どうかしたんですか？母さん」

アルフ「くだらない用事じゃないだろうね？」

プレシア「あなたに本当の事を伝えようと思ってね」

私がそう言つとフェイトは首をかしげた。

この事を伝えるのは今となつてはとても辛いけど言うしかないわよね。

プレシア「アリシア。来てちょうだい」

私はアリシアを呼びました。

アリシアを見るとフェイトとアルフの表情が変わりました。

アルフ「フェイトが…もう一人!？」

フェイト「私!？」

やはり驚くわよね…

でも真実を伝えると約束したからにはちゃんと伝えないと。

プレシア「この子の名前はアリシア。フェイト、あなたのお姉ちゃんよ」

side out

side アルフ

どういう事だい!?

アリシア!?

何故こんなにもフェイトとそっくりなんだい!

アルフ「どういう事だいプレシア!?!」

あたしの質問にプレシアは静かに答えた。

プレシア「フェイト。あなたはこの子のクローンだったのよ」
フェイト「!?!?!」

あたしはこの言葉に耳を疑った。

フェイトがクローン!?

フェイトはショックで目を見開いていた。

フェイト「私が…クローン?」

プレシア「ええ、そうよ。あなたはアリシアのクローン」

プレシアは肯定した。

アルフ「ふざけんなよプレシア!?!何だってそんな事を言うのさっ
!?!?!」

あたしは怒鳴りながらプレシアを思い切り殴った。

フェイトの事を偽物だと言ったのだこいつは!?!

アリシア「お母さん!?!」

プレシア「良いのよアリシア。私は殴られて当然なんだから…」

プレシアは近づこうとするアリシアを止めた。

殴られると分かってて言ったのか？

アルフ「何を考えてるんだい？」

プレシア「私は今までフェイトに酷い事をしてきた。罪滅ぼしのつもりではないけれどフェイトの事を思っている真っ直ぐなあなたの拳を受けようと思ったのよ」

そう言っつてプレシアは立ち上がった。

プレシア「フェイト…」

フェイト「！！」

プレシアに呼ばれてフェイトは肩を震わせた。
まだ何かあるのかい。

プレシア「あなたはアリシアの代わりだと思っていた。…でも、竜馬の言葉で気付かされたわ」

フェイト「竜馬が！？」

フェイトは竜馬の名前が出た事に驚いた。

あいつこんなところにも来てたのかい…

プレシア「ええそうよ。あなたを生み出したのは私。その時点であなただけ私の娘で私はあなたの母親だつてすごい剣幕だね」

プレシアは少し顔を引き攣らせながら言った。

竜馬の奴どんな表情してたんだよ…

side out

side フェイト・テストロツサ

最初私は自分がクローンだと信じられなかった。
でも母さんの口から竜馬の名前が出てきて驚いたなあ…
それに竜馬が私のために怒ってくれたみたいだし。

母さん「それでね私も分かったの」
アルフ「何にだよ？」

アルフ、話の邪魔しちゃダメだよ…

母さん「フェイト、あなたはアリシアのクローンなんかじゃないわ。
あなたは私の大切な娘よ」

私はこの言葉を聞いて涙が出てしまいました。

母さん「フェ、フェイト！？どうしたの！？」
アルフ「どっか痛いのかい！？」

私の涙に驚いて母さんとアルフが聞いてきました。

フェイト「だ、大丈夫です。この涙は辛いものじゃないから…」

この涙は嬉しいから出ているものだから…

それを聞いて母さんとアルフは安心したらしくホッとしていました。

side out

side アリシア・テストロツサ

私が目覚めてから驚いたのは妹がいる事でした。

アリシア「あなたが私の妹？」

「！？…はい」

私は妹に声をかけました。

この子の名前は…フェイト？だったかな。

フェイト「あなたが私のお姉ちゃん？」

アリシア「うん！私はあなたのお姉ちゃんだよ。よろしくねフェイト」

私がこう言つとフェイトは笑顔になってくれました。

そう言えばさつき竜馬の名前に反応してたような…もしかして。

アリシア「フェイト…もしかしてあなたも竜馬の事を？」

フェイト「！…お姉ちゃんも？…でも負けないよ！！」

やっぱりフェイトも！

でも私だって！

アリシア「負けないよ！」

フェイト「私だって！」

side out

sideプレシア・テスタロッサ

あらあら、私の娘達は竜馬に夢中ね。

プレシア「アルフ、アリシアとフェイトどっちが結ばれるかしらね？」

アルフ「あんだ、いきなり雰囲気変わったね…」

アルフが何やら驚いているわね？

何かおかしかったかしら…

私とアルフはその後アリシアとフェイトの様子を見守っていました。
こんな日が来るとは思ってたわ。

プレシア「そうだね。竜馬に連絡しなきゃ」

私がそう言つとアリシアとフェイトが喜んでいた。

真実を聞く時そして家族の絆（後書き）

（霊使い達の雑談）

アウス「今回は竜馬さまが帰った後の話ですね」

エリア「こんなことがあったんですね」

ウィン「フェイトちゃん、お母さんと仲良くなれて良かったね」

ヒータ「でもアリシアもフェイトも竜馬の事が好きなんだな…」

おう！だって片や命の恩人。

そしてもう片方はいつも助けてもらっている。

これだけあれば十分でしょ？

ヒータ「そうかも知れんが…」

ああ、お前のライバルが増えるのか。

ヒータ「／／／／それを言うなあああ！！！！」

まさかのライダーキックに炎を灯したバージョン！！！！

アウス「またですか。ん？これは…今回の締めはヒータですね」

ヒータ「もう私か。闇を狩る少年続くぞ！」

やっぱりヒータはツンデレ風に言うべきじゃ…

ヒータ「うっさい！！！！」

ぐふああああ！！！！！！

癒しと断罪

side 魔神竜馬

昨日の夜プレシアからフェイトに話したと電話があった。

その時何やらプレシアの声に雑じって何かが聞こえた気がしたが…

竜馬「まあ良いか。ジャバウオック、お前は どうする？」

ジャバウオック「む…我はこの手伝いをするので無理だ」

ジャバウオックは悔しそうに言った。

なら俺だけで行くか。

竜馬「そうか、じゃあ行ってくるな。無々、頼む」

無々『了解しました。目標、時の箱庭。転移します』

無々はそう言って転移魔法を発動した。

side out

side プレシア・テストロツサ

私は結界の中に突然何かが現れたのを感じた。

おそらく竜馬ね。

プレシア「アリシア、フェイト。竜馬が来たみたいよ」

アリシア・フェイト「…本当!!」

私が言くと2人ともとても喜びました。

紅茶の準備が必要かしら？

プレシア「どっちが竜馬を迎えに行くのかしら？」

アリシア・フェイト「私！」

2人共なのね。

プレシア「分かったわ。竜馬は大広間にいるはずだから2人で迎えに行きなさい」

アリシア・フェイト「はい」

2人はそう言っただ広間に向かって行った。

竜馬の言っていたまだやることって何かしら？

私の病気は治るはずはないし…

アリシア・フェイト「連れて来たよ」

竜馬「おっすプレシア」

私が考えている間に来たようね。

プレシア「いらっしやい竜馬。それであなたの言っていたやる事って？」

竜馬「ああ、お前の病気を治す」

竜馬は私が先程考えていた内容が分かっているかのように言った。

side out

side 魔神竜馬

俺の言葉にプレシアは驚きフェイトとアリシアはポカンとしていた。やっぱりその事は教えてなかったのか。

竜馬「無々。能力発動。形状はナイフ。ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。」

其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

俺は無々の力を発動し変身した。

後はこれをプレシアに放つだけ、と…

竜馬「治癒の焰」

プレシア「!?!?これは!?!?」

プレシアは突然炎に包まれた事に驚いていた。

フェイトは一度受けた事があるからか落ち着いていたが…

アリシア「お母さん!?!?」

フェイト「大丈夫だよお姉ちゃん。あれは傷つける炎じゃないから」

フェイトの言葉にアリシアは落ち着いて炎を見た。

しばらくして炎が消えプレシアは驚いていた。

プレシア「体の不調が全部無くなった!?!?」

竜馬「ああ、癒しの力だ」

治癒の焰この力は一度使っているから説明は要らないだろう。

プレシアに説明しなくてもいいよな?

竜馬「『転身』リリース!」

俺は元の姿に戻った。

そしてプレシアに言った。

竜馬「んじゃ次は時空管理局に行くぞ」

プレシア「!?!?でも、私は」

プレシアは躊躇しているようだ。
まあ、犯罪者扱いを受けてるしな。

竜馬「大丈夫だ。俺を信じろ。それに約束を破るような奴なら俺が叩き潰す」

プレシア「…分かったわ。あなたを信じましょう」

プレシアは俺の目を見て言った。

そして俺達はアースラに転移した。

あ、無々は発動しておいてあるよ？

side out

side リンディ・ハラオウン

そろそろジュエルシードを集めている人の正体を知りたいわね。

竜馬さんに聞こうかしら…きっと答えてくれないわね。

「艦長！！この艦内に転移反応が！」

リンディ「本当！？総員警戒態勢！！」

こんな時にいったい何が！？

「艦長、映像映ります！！」

映像が映ると私達は驚いた。

なぜならそこに映っていたのは竜馬さんと犯罪者プレシア・テストアロツサだったのだから。

竜馬さん「リンディ・ハラオウン出てこい！話がある！！」

竜馬さんが大きな声で私を呼んだ。

クロノ「応じる必要はないですよ。ここで局員全員で行けば確実に確保できる」

クロノはそんな事を言っているけど絶対に無理ね。

私は彼がリミッター付きでクロノに勝った事を伝えてない。言えばショックを受けると思ったからだ。

リンディ「いいえ、私が行くわ。それに彼…竜馬さんがいるのも気になるし」

クロノ「艦長!!」

私はクロノの制止を無視して会いに行った。

side out

side 魔神竜馬

俺が待っているとリンディが現れた。

リンディ「竜馬さん、何かあったのかしら？」

竜馬「ああ、色々と伝える事があってな」

俺はリンディに来た理由を伝えた。

リンディ「そう、アリシアさんを生き返らせるためにジュエルシートを…」

クロノ「だがそれでも犯罪だ」

何でいるんだよクロノ!

竜馬「俺が一番最初に条件を出したはずだ」

リンディ「分かっています。彼女達は無罪にします」

クロノ「だが、プレシア・テストロツサ彼女は犯罪者だ」

うるせえよクロノ…

竜馬「だがその犯罪者になる原因は時空管理局だろうか!!」

リンディ・クロノ「?!?」

俺の言葉に2人は驚いたらしい。

まあ実質的にこいつ等は無関係ないし知ってるわけ無いよな。

クロノ「どういう事だ!!」

クロノが食ってかかって来たので俺はプレシアが犯罪者になるまでの顛末を言った。

その間リンディとクロノは驚愕の表情をしていた。

癒しと断罪（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃんが真実を話しているね」

エリア「ええ、この事を隠してプレシアさんを犯罪者に仕立て上げる管理局に私も流石に怒ってます」

ヒータ「なあ管理局潰しちゃダメか？」

アウス「無駄でしょう。いずれ同じような組織がまた出来てしまうはずですよ」

だろうな、だからまだ行動しても意味が無いんだ。

ヒータ「ちっ悔しいな」

その気持ちは分かるが今はまだ抑えろ。

今回はここまでだ。

闇を狩る少年続きます。

管理局の上の奴らに神の鉄槌を！！！！

友達になろう！…平和だな

side 魔神竜馬

俺がプレシアが犯罪者になった原因を言うとリンディとクロノは黙ってしまった。

プレシアに至っては俺が何故その事を知っているのかも気にならないようだ。

クロノ「…その話が本当なら何故彼女は何も言わなかったんだ？」

竜馬「管理局の奴らがその証拠を全て消したんだよ。それにそっちは組織だ。もみ消すのだから簡単だろう」

クロノの疑問に答えるとリンディは言った。

リンディ「分かりました。プレシア・テストロッサの指名手配を解除します」

俺はこの言葉に心の中でガッツポーズをとった。
そこで俺は聞きたい事があった事を思い出した。

竜馬「ありがとうリンディ・ハラオウン。ところでこれは別件なんだが、最近地球で高魔力反応は無かったか？」

リンディ「高魔力反応ですか？いえ最近は何も」

最近は？闇？が出ていないようだな。

一応言っておくか。

竜馬「高魔力反応があった場合すぐに俺に連絡してくれ」

リンディ「分かりました」

つとそう言えばフェイトとなのはを友達にしなくちゃな。
なのはを呼ぶか？

…翠屋のケーキを食べさせたいしこつちが行くか。

竜馬「んじゃあここの用事は終わったから次に行くぞ」
リンディ「あら、行っちゃうの？」

このままいたらリンディ茶が出そうだったな。

竜馬「ああ、フェイトとアリシアに関係があるからな」
アリシア「私達に何かあるの？」

アリシアが聞いてきた。

その後ろでフェイトもこちらを見ていた。

竜馬「大丈夫だ。お前らには友達を紹介しようと思ってな」

side out

side ジャバウオック・サタナキア

竜馬が出かけて大分経った。

我の仕事？

そんなものを書いてもつまらぬだろう。

我はただ運ぶ物を運んで現在は掃除をしている。

む？近くで転移魔法が発動したようだ。

ジャバウオック「竜馬が戻って来たのか？」

しばらくして竜馬がプレシア達を連れて翠屋に来た。

ジババウオック「帰って来たのか竜馬」

竜馬「いや、フェイトとアリシアになのはを紹介しようと思ってな」

そう言つて竜馬は翠屋に入つて行つた。

我も掃除を終わらせて中に入るか。

side out

side 魔神竜馬

美由紀「ちよつと竜馬君！この子たちは誰！？」

翠屋に入ると休日だったので美由紀となのはが店員をやつており美由紀が聞いてきた。

なのはは驚きの余り固まっている。

竜馬「俺の友達とその母親です。俺が払うんでケーキをください」

美由紀「いつの間にお金を持っていたのよ……」

美由紀はそう言いながらもケーキを出してくれた。

竜馬「ほれ、4人で食べてくれ」

アリシア・フェイト「はい」

アルフ「ありがとうな！」

プレシア「私達のは私が……」

やっぱりプレシアは本当は優しいんだな。

俺はプレシアが払おうとするのを止めた。

竜馬「ダメだ。これは俺から4人へのプレゼントみたいなものだからな」

俺がそう言つとプレシアは頷いてケーキを食べた。
さて、なのはを正気に戻すか。

竜馬「おいなのは、いつまで固まっているんだ」
なのは「はっ！！竜馬君！！何で竜馬君がその子と一緒にいるの！？」

突然大声でしゃべるなよ…

竜馬「友達だからだ。お前にも紹介しようと思つてな」
なのは「本当っ！？」

なのはは嬉しそうに言った。
アリシアとフェイトを呼ぶか。

竜馬「アリシア、フェイトちょっと来てくれ」
アリシア・フェイト「分かった」

俺が呼ぶとアリシアとフェイトは来てくれた。
つてフェイト…

竜馬「フェイト、ほっぺにクリームが付いてるぞ」

俺はそう言つてフェイトのほっぺからクリームをとって舐めた。

フェイト「ノノノノ」

アリシア「フェイトだけずるい！！」
なのは「竜馬君…ちよつと良い？」

3人がそれぞれ違う反応を返した。

と言っかなのは怖いよー！

竜馬「とりあえず紹介するぞ？なのは、アリシアとフェイトだ。アリシア、フェイトこっちはなのは。全員俺の友達だ」

俺がそう言っとなのは、アリシア、フェイトは顔を見合わせ顔きあった。

何か通じるものがあつたのか？

なのは「私の名前は高町なのは。よろしくね」

アリシア「私はアリシア・テストロッサ。よろしく」

そう言っとなのはとアリシアは握手した。

次はフェイトだな。

フェイト「私はフェイト。フェイトテストロッサ」

なのは「私の名前は前言ったよね」

そう言っつてフェイトはなのはと握手した。

やっぱりこいつ等は友達にならないとな。

なのは「ねえ…もしかしてアリシアちゃんとフェイトちゃんも…」

アリシア「うん…」

フェイト「なのはも？」

3人は何か話しているようだな…

俺は別の所に行くか。

ジャバウォック「竜馬、今日は何をしていたのだ？」

不意にジャバウォックが話しかけてきた。
まあ、隠す事でも無いか。

竜馬「ちよつとプレシアの罪を消してきた」
ジャバウォック「そうか」

反応が薄い何かあったのか？
その後ジャバウォックはなのは達の所に行った。

side out

side ジャバウォック・サタナキア

竜馬はまた人助けをしてきたのか：

ジャバウォック「なのは、アリシア、フェイト。3人とも竜馬の事が好きなのか？」

3人「。。。／／／／／」

この反応を見る限りそのようだ。
だが我も負けぬぞ。

ジャバウォック「ならば我等はライバルと言う奴だな。我は負けぬぞ」

我は3人に宣戦布告をした。
すると3人の表情が変わった。

なのは「私だつて負けないよ！」
アリシア「私も！！」
フェイト「私だつて！！」

ふむ、我はやはりこ奴らも好きだな。
我に対して普通に接してくれている。

竜馬「どうかしたのか？」

ジャバウォック「なんでもないよ」

竜馬「そうか、なら良いけど」

竜馬は我の言葉を聞いて戻って行った。

やはり竜馬は鈍感なのかな。

ジャバウォック「では、ここに竜馬争奪戦を開会するぞ」

友達になろう！…平和だな（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「何かすごい大会が始まったね」

エリア「ここにも参加しようと思っっている人がいますよ」

ヒータ「竜馬争奪戦、どうしよう出ようかな。でも…」

珍しく顔を赤くして悩んでいるな。

こういう表情だと可愛いんだけどな。

アウス「そうですね。普段は基本ツンですから」

まあ、今回もこれ以上進まなそうだし締めるか。

今回は…アウスよろしく！

アウス「はい。闇を狩る少年続きます。…私も何か面白い事を言った方がいいのでしょうか？」

いや、アウスは突っ込みに回ってくれヒータだと死ぬ！！

俺の怒りに触れた物の末路

side リンディ・ハラオウン

さて、ジユエルシードも全て回収したし、やる事はもう無いわね。でも、竜馬さんが言っていた魔力反応って何のことなのかしら？

なのはさん「リンディさん。訓練室を貸してください」

リンディ「あら、今日も訓練？いいけど体を壊さないでね」

なのはさんが訓練室を借りに来たので私は許可をした。

それにしてもなのはさんは良い子ね。

竜馬さん「！！：リンディ、これから俺は少し出る。俺の魔力反応が出て記録しないでくれ」

そう言っただけで竜馬さんは素早く転移してしまいました。

さっきラジオを聞いていたようだったけれど何かあったのかしら？それに一瞬だけど竜馬さんの表情がとても恐ろしく見えたし。

リンディ「：竜馬さんの魔力反応があったら記録には残さずに映像だけ映してちょうだい」

「「「はい！！」「」「」

流石に気になるし：記録に残さなきゃ大丈夫よね？

side out

side 魔神竜馬

俺は怒りを感じていた。

先程聞いていたラジオから流れてきた緊急ニュースでアリサ・バニ

ングスと月村すずかが誘拐されたというニュースが入ったからだ。

竜馬「何が、“心配無いですよ”だ！何が、“金を払って解決”だ！！ふざけるなよ！！！」

無々『落ち着いてくださいマスター。怒りに吞まれては魔力が暴走します！』

ラジオから聞こえてくる言葉は自分達には関係ないと言った風な言葉ばかりだった。

無々から声をかけられ少しだけ落ち着いた。

だが、誘拐犯達への怒りはまだ完全には消えなかった。

竜馬「無々。能力発動。形状はナイフ」

無々『了解しました。能力発動』

無々はナイフに変化した。

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

俺は呪文を唱えフェンリルへと変身した。

この姿の能力なら簡単にアリサとすずかを助けられるしな。

竜馬「行くぞ！影道！」

俺は近くの木の陰に入り転移した。

side out

side 月村すずか

私達は誘拐されて廃ビルの一室に閉じ込められています。

アリサちゃん「あゝもう！早く解放しなさいよ！！」
すずか「落ち着いてよアリサちゃん」

アリサちゃんが私の周りを走っています。
でも、アリサちゃんの気持ちも分かるかな…

「なんだ、意外と元気だな」
すずか・アリサちゃん「「!?!?」」

いきなり声が聞こえてきました。
この声はどこから聞こえるの？

「助けに来たぞ。2人共…」

突然影の中から男の子が出てきました。
え？マジック？

アリサちゃん「な！？誰よアンタ！！」
「別に良いだろそんなこと…それぞれの家に送ればいいな？行くぞ
！影道！」

その言葉を聞いた瞬間私は自分の家にいました。
何があつたんだろう？

アリサちゃんも家に着いたのかな？

すずか「あの子…竜馬君と声が似てたな…」

side out

side 魔神竜馬

アリサとすずかを家に送ったし、後は塵芥の掃除だな…
俺はそう思い部屋から出た。

「何もんだ、てめえ!!」

竜馬「五月蠅い」

俺はナイフの形状の無々で斬り刻んだ。
こんな奴らに生きる価値もない…

「何だ今の悲鳴は!!」

「あつちから聞こえたぞ!」

更に2人程塵芥が来たようだ。

「何者だ貴様は!!」

「まあいい、死ね!」

竜馬「五月蠅い! 五月蠅い!!」

塵芥どもが何かを言っているが関係無いこんな物の言う言葉なんて
理解したくもない。

俺は1人の首を斬り刎ねもう1人の両腕を斬り落とした。

「ひっひひひひひ!!」

両腕を無くした物が何か化け物でも見るかのような目で俺を見てい
る。

ちよつど良い、後何人いるかを聞いておこつ。

竜馬「おい、後何人いる? さつさと答える」

「ひっ！あ、後20人だ。た、頼む殺さないでく……」

塵芥が人数を答えた後に何か言っていたようだが俺は殺した。後たった20人か……

せいぜい逃げ回ってくれよ？

竜馬「最初は一番下の階からだな……影道」

side out

sideリンディ・ハラオウン

正直私は後悔した。

何故こんなものを見てしまったんだろう。

クロノ「酷い……」

リンディ「でもこれが彼の怒りに触れた物の末路……」

私達の目の前では竜馬さんが誘拐犯を1人、また1人殺していく映像が流れていた。

この映像はここでしか見る事が出来ない。

私達は映像のショックの余り誰かがこの場所に入って来ている事に気付かなかった。

フェイトさん「りょ……う……ま？」

なのはさん「竜馬……君？……リンディさんこの映像って……！」

いつの間にかフェイトさんとなのはさんがいた。

この2人には見せちゃダメだったわ。

リンディ「映像を切って……！」

私の言葉に反応して映像が消えた。

side out

side 高町なのは

私とフェイトちゃんが部屋に入った時リンディさん達は映像を見ていました。

そしてその映像を見た時私達は自分の目を疑いました。

何故なら映っていたのは人を殺している竜馬君だったからです。

その後すぐに映像は消されてしまいました。

なのは「リンディさん！今の映像はどういう事ですか！！」

リンディさん「…あの人は彼の逆鱗に触れたのよ」

リンディさんは静かにいました。

その後も私は色々聞きましたが答えてくれませんでした。

side out

side 魔神竜馬

誘拐犯を…否、塵芥共を殺し続けて遂にリーダーを見つけた。

こいつ以外の塵芥共は全て殺してきた。

つまりこいつで最後なのだ。

リーダー「何者なんだてめえは！たった一人で俺達を潰したのかよ

！！」

竜馬「五月蠅い、喋るな、空気が汚れる」

こいつが俺の友達を危険な目に会わせた原因なのだ。

ただでは殺さない。

竜馬「お前が原因で…お前は殺さない、影槍」

リーダーの右足の親指を小さな槍が貫いた。

竜馬「お前がいた所為で…楽には殺さない、影槍」

リーダーの左足の親指を小さな槍が貫いた。

竜馬「お前が生まれた所為で…簡単には殺さない、影槍」

リーダーの右足の甲を小さな槍が貫いた。

竜馬「お前と言う存在がいた所為で…地味に殺さない、影槍」

リーダーの左足の甲を小さな槍が貫いた。

竜馬「お前は俺の怒りに触れた…お前は死なせない、影槍」

リーダーの右足を大きな槍が貫いた。

竜馬「お前は俺の友達を危険な目に会わせた…お前は楽には死なせない、影槍」

リーダーの左足を大きな槍が貫いた。

リーダーは倒れそうになるが槍が刺さっており倒れる事は出来なかった。

リーダー「殺せつ殺してくれ!!」

竜馬「断る。俺に下等な願いをした…お前は苦しめ、影槍」

リーダーは殺してもらおうと懇願こんがんしたが意味は無かった。

リーダーの右手に槍が突き刺さった。

竜馬「俺に汚い物を見せた…お前は許さない、影槍」

リーダーの左手に槍が突き刺さった。

これでリーダーは動く事が出来なくなった。

竜馬「お前は生きる価値も無い…永久に苦しめ、影槍」

リーダーの両肩を槍が貫き腕がギリギリぶら下がっている状態になった。

竜馬「喜べ俺の手で殺してやる。無々。形状変化。大鎌」

無々はナイフから大鎌に変化した。

竜馬「死神の鎌！！…影樹槍！！！」

俺はリーダーの首を切り落とし、影から樹の様に枝分かれした槍を出現させ体を貫いた。

俺はリーダーの体から噴き出した血の雨を受けて立っていた。

後は証拠の隠滅だな。

そう思い俺は廃ビルの外に出た。

竜馬「さて、影黄泉」

廃ビルの影から手の様な物が出現し廃ビルを引きずり込んでいった。

side out

数日後、突然消えた廃ビル！！
誘拐された2人謎の帰還！！
と言ったニュースが流れていた。

俺の怒りに触れた物の末路（後書き）

♪ 霊使い達の雑談♪

竜馬「なあ、今回の俺って悪役みたいだな」

気にすんな。仲間の敵は俺の敵、だろ？

竜馬「そうだけども…」

はいはい。今回の締めはお前だからよろしく

竜馬「分かったよ。闇を狩る少年続く。これ言う必要があるのか？」

単純に言う気分だ！！

あくまで悪魔で

side 魔神竜馬

今日、俺はリンディに呼ばれてアースラに来た。
何だか怖い人を見るような喋り方だったが…
何かあったか？

リンディ「竜馬さん。大きな魔力反応が3個ありました！」

竜馬「本当か！！場所は！？」

リンディ「場所は…海鳴市の海の上よ」

海鳴市の海上？

もしかして最後のジュエルシードがあった所か？
つーか海の上だったらフェニックスじゃないとな…

竜馬「分かった。俺はすぐにそこに行く。誰も近づけるな」

俺はそう言つてアースラを後にした。

side out

side リンディ・ハラオウン

竜馬さんは私から話を聞くとすぐに行つてしまいました。

そう言えば誰も近づけるなどは言っていたけど教えるなどは言われ
てないわよね。

リンディ「エイミィ、この事をプレシアさん家となのはさん達に伝
えてちょうだい」

エイミィ「分つかりましたあ！」

そう言つてエイミィは皆に連絡をしました。
いったい何があるのかしら…

リンディ「大きな魔力反応があつた場所を常に監視しておいてちょうだい」

「「「「はいつ!」「」「」

何事も無ければいいけど…

side out

side 魔神竜馬

さて、海鳴市に戻つたしさつささで行くか。

竜馬「無々。能力発動。形状は大鎌」

無々「了解しました。能力発動」

無々は大鎌に変化した。

竜馬「次は、ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。

『不死鳥転身』」

俺は呪文を唱えてフェニックスに変身した。

後は飛んで行くだけだな。

竜馬「無々、海上に着いたら大型の結界を張つてくれ」

無々「了解しました。ですが必要なんですか?」

無々は疑問を口にした。

一応逃げられないためにも必要だが…

竜馬「一応の保険つてところだな」
無々『そうですか』

その言葉で無々は納得したらしい。

side out

side 第3者視点

竜馬は空を飛び海上に着いた。

そしてそこにいた物を見て驚いた。

竜馬「何でよりによってこいつ等なんだよ……」

そこにいたのは…

…3体の悪魔族だった。

悪魔達の名前は左から、偉大魔獣・ガーゼット、暗黒界の軍神・シルバ、暗黒魔族・ギルファー・デーモンの3体だ。

ガーゼット「ナニヤラムシガアラワレタゾ」

シルバ「キニスルナスベテヲコワスノダカラ」

デーモン「ソレモソウダナ」

3体は人間がギリギリ聞きとれるような声でしゃべっていた。

竜馬「こいつ等を倒すしかないのか…ギルファー・デーモンの能力がきついな」

竜馬がつぶやいた。

ギルファー・デーモンは破壊された時相手に装備し攻撃力を下げる厄介な能力がある。

side out

side 魔神竜馬

どうする？

まずギルファー・デーモンは後回しだ。
となるとシルバかガーゼットか…

竜馬「考えても仕方ないな…行くぞ…！」
3体「…」コザカシムシガ…！」

俺は大鎌を振りシルバを狙った。

こいつ等はでかい分動きは遅いはず…！

竜馬「食らえ…！」

シルバ「アマイワツ…！」

シルバは俺の振った大鎌を手に付いている刃で防いだ。
そう簡単には行かないか…

ガーゼット「オチヨ…！」

竜馬「なっっ!?!」

不意にガーゼットが上から殴りつけてきた。
俺はとっさに回避した。

竜馬「あつぶねえ…!」

そう言えばギルファー・デーモンはどこに行った!?

デーモン「モエツキロ!」

竜馬「げっ!?!」

俺がギルファー・デーモンを探していると下から声がした。
見るとギルファー・デーモンが巨大な火球を生成し投げつけて来ていた。

竜馬「だが断る!」

俺は大鎌を振り火球を切り捨てた。
つて言うかやつぱり3体1はきついな…

竜馬「だけど、俺がやるしかないんだよな…!」

俺は自嘲気味に言った。

そうだ、俺がやるしかないんだ。

この俺の仲間のいる世界を守るためには…

竜馬「俺が…この世界を守るんだ!」

俺ははつきりと言い切った。

「「「なら、私達も手伝うよ!」!」!」!」

突然3個の声がした。

この声は…

あくまで悪魔で（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウイン「？闇？が出たね」

エリア「それも3体ですか…」

アウス「しかもそれぞれ推定Aランク相当らしいですよ？」

ヒータ「最後に出てきた声は誰なんだ？」

3人の声、これは皆が知っている人だな。

ヒータ「竜馬は大丈夫なのか!？」

さあ？

俺の気分次第？

エリア「死ぬ事はないでしょうが」

そうだな、まあ今回はこの辺で…

締めは…俺か。

闇を狩る少年続くぞ!!

仲間は守るものが、共に戦うものか…

side ジャバウオック・サタナキア

アースラの一室にてエイミィから連絡を受けたとき我は憤りを感じていた。

ジャバウオック「何故1人で行った！竜馬！！」

リンディ「竜馬さんはあなた達を危険な目に会わせたくなかったのかもしれないわ」

リンディの言っていることも竜馬の考えていることも分かってはいた。

だが、それでも我は納得が出来なかった。

リンディ「これより、竜馬さんの所に行く事は禁じます」

ジャバウオック「！！」

何だと…？

竜馬の元へ行くなと言つのか？

ジャバウオック「何故だ！！」

リンディ「それが竜馬さんの願いだからです」

竜馬の…願い…

…ならば。

ジャバウオック「ならば我はこれより独断にて竜馬の元へ行く！！」

side out

side 高町なのは

竜馬君、どうして1人で行っちゃったの？

なのは「竜馬君…どうして？」

エイミイさん「竜馬君はあなた達を危険な目に会わせたくなかったのかもしれないよ」

エイミイさんは静かにそう言いました。

竜馬君が仲間を大切にしているのは知っていた。

エイミイさん「艦長から…これより、竜馬さんの所に行く事は禁じます。だそうだよ」

なのは「そんな…！」

どうして!？

竜馬君が1人で戦っているのに!!

なのは「どうしてなんですか!!」

エイミイさん「それは、竜馬君がそう言っていたからだよ」

竜馬君が…？

私達を危険な目に会わせないように？

…それでも!

なのは「守ってもらっただけじゃダメ!!高町なのは、指示を無視して現場に向かいます!!」

side out

sideフェイト・テストロッサ

竜馬：「また1人でやるの？」

フェイト「竜馬：「何で？」」

クロノ「彼なりに君達の事を考えての行動じゃないか？」

クロノはゆつくりと言いました。

でも、私は彼の行動がとても辛かった。

クロノ「母さ：艦長から、これより彼の元に向かう事を禁じる。このことだ」

フェイト「お姉ちゃん」：「えっ!？」

どうして!？

竜馬1人に全てを任せるの!？

お姉ちゃん「どうして竜馬の所に行ったらダメなの!！」

クロノ「彼が誰も近づけると言ったんだ」

竜馬が：「？」

アルフ「あいつ：「また無茶するつもりじゃ」

プレシア「彼ならあり得るわね」

それが竜馬の願いなの：「？」

私達を傷つけないように：「？」

…だけど。

フェイト「竜馬がなんて言おうと私は竜馬を助けに行く!!」

side out

side アリシア・テストロツサ

本当は私も行きたかった。

でも、私にはデバイスがまだ無い。

アリシア「今回はフェイトに譲ってあげるよ…」

私はフェイトのお姉ちゃんなんだから我慢するんだよ。

フェイト、絶対に竜馬を助けてきてよ…

side out

side 第3者視点

ジャバウォック、なのは、フェイトこの3人は竜馬を思い海上に向かった。

ジャバウォック「なのは、フェイト。主等^{ぬしら}も竜馬の元へ？」

なのは「うん!」

フェイト「そうだよ!!」

3人は途中で合流し海上へ向かった。
すると、突然結界が発動した。

ジャバウォック「これは…」

なのは「結界…?」

フェイト「でも誰が…?」

3人は不思議に思いながら少年の元へ急いだ。
そして竜馬を見つけた。

竜馬の周囲には悪魔の様な生き物が3体おり竜馬は3体の攻撃を
防いでいた。

竜馬「だけど、俺がやるしかないんだよな…」

竜馬は静かにそう言った。

この言葉を聞いて3人は何かを決意したらしい。

竜馬「俺が…この世界を守るんだ!!!」

竜馬がはつきりと言い切った。

その言葉に呼応するかのように3人は言った。

3人「……なら、私達も手伝うよ!!!」

ジャバウオックに至っては一人称等が変化していたが気持ちが高ぶ
っていた為である。

3人の言葉を聞いて竜馬は驚愕の表情をしていた。

side out

side 魔神竜馬

何故だ!?

何故こいつ等がいる!?

ガーゼット「ムシガサラニフエタゾ」

シルバ「ダガサホドキニスルリヨウデモナカロウ」

デーモン「スベテヲコワスソレニヘンカハナイ」

標的に加えられた!!
畜生!来ちまつたもんは仕方が無い!!

竜馬「ジャバウオック、なのは、フェイト。手伝え!!帰ったらお説教だぞ!!」

俺はそう言って再びシルバに斬りかかった。

シルバ「アマイトイッテイルダロウガ!!」
ジャバウオック「お主ぬしがな!!」

シルバが俺の攻撃を防いでいる間にジャバウオックが背後から斬りつけた。

ジャバウオックの持っている剣けんそれは彼女の能力によって創られた武器。

その名を…フラガラッハ。
能力は劣化しており斬った相手の治癒能力をほぼゼロにするだけだが切れ味は十分である。

シルバ「ヌウウウ…ムシドモガアアア!!」
ガーゼット「ワレニモヨコサヌカ!!」

再びガーゼットが頭上から攻撃を仕掛けてきた。
俺はそれを大鎌で防いだ。

フェイト「アナタにはこれで十分です!!」

いつの間にかフェイトがガーゼットの横に行き鎌の形状のバルディッシュで斬りつけた。

その攻撃はガーゼットの腕に当たり腕を斬りおとした。

ガーゼット「ガアアアアアアッ！！！」

ガーゼットは痛み之余り叫んだ。

デーモン「ムシハスベテモエツキルガイイ！！」

見るとギルファー・デーモンが火球を生成し放とうとしていた。
さっきよりでかい！！

なのは「させません！！！」

なのはの声が聞こえたかと思うと桜色の砲撃がギルファー・デーモンの火球に直撃した。

そして火球は爆発しギルファー・デーモンは炎に包まれた。

デーモン「グワアアアアアッ！！！」

デーモンは炎に包まれ苦悶の声をあげた。

仲間がいるとここまで戦況が変わるのか…

竜馬「こりゃあ訂正だな…こいつ等は守る対象じゃない。一緒に戦う仲間だな」

仲間は守るものか、共に戦うものか…（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「すごいねコンビネーションが」

エリア「今の所は圧倒してますしね」

アウス「ガーゼットと言うモンスター…まだ何かある気が…」

ヒータ「不吉な事を言うなよ」

あながちはずれでもないな…

ヒータ「どういう事だ作者！！」

まだ秘密

今回の締めは…ウィンだ！！

ウィン「はいはい。闇を狩る少年続くよ」

やっぱり可愛いよね。

「！！！！」

次に仕掛けたのはジャバウオックの攻撃ではなくなのは砲撃だった。

シルバはなのはのデイバイン・バスターを受け右腕と右足を失った。

シルバ「コザカシムシドモガアアアア！！」

デーモン「ナラバコレヲクラエ！！」

ギルファー・デーモンは竜馬の上に周りこみ炎を灯した拳で殴りつけてきた。

しかしそれを他の2人が許すはずが無かった。

ジャバウオック「甘いわ！！」

フェイト「やらせません！！」

ジャバウオックが右腕を切り落としフェイトが左腕を切り落とした。これによりギルファー・デーモンは右腕に治ることのない傷を負った。

デーモン「コンナムシドモニイイイ！！」

ガーゼット「ワレガイルコトヲワスレテイタナ！！」

不意にガーゼットが背後から黒い塊を無数に飛ばしてきた。

竜馬「ちっ！！各自自分で対処しろ！！」

竜馬はいち早く反応し3人に言った。

3人はそれぞれ切り捨てたり魔力球で撃ち落としたりしていた。

ガーゼット「ム…コノテイドデハダメカ」
竜馬「当たり前だ!!」

竜馬がガーゼットの近くに虚空瞬動をし言った。
いつの間にか無々は双銃の形状に変化しておりその銃口はガーゼットの腹部を捉えていた。

竜馬「喰らえ!!」

竜馬は引き金を引き連続で撃ち続けた。

ガーゼット「ヌオオオオ!!コノムシガアアア!!」

ガーゼットの腹部には無数の穴が開いた。

side out

side 魔神竜馬

すげえな…

俺はジャバウオック達のコンビネーションに驚いていた。

ジャバウオック達は俺がやってほしい事や俺の行動が分かっているかのように動いてくれる。

そのお陰で俺は安心して戦えるのだ。

竜馬「ここまで楽になるとはな…」

実質俺の攻撃よりもジャバウオックとフェイトによる斬撃、なのはこの砲撃の方が効いているのである。

竜馬「まあ良いか。無々。形状変化。双剣」

無々『了解しました』

無々は双銃から双剣に変化した。
さてシルバを最初に殺すか。
そして俺はシルバに向かって行った。

side out

side クロノ・ハラオウン

彼のデバイスはいつたいていどうなっているんだ！！
僕は彼らの戦闘映像を見て思った。

クロノ「母さ…艦長！彼のデバイスはいつたいてい！？」

艦長「そう言えば聞いていないわね」

艦長はゆっくりと言った。

エイミー「でも、デバイスがあんなに形状を持っているのもおかしいよね」

クロノ「ああ、普通なら3通りあれば多い方なのに彼のはすでに4通り確認されている。しかもまだ形状があるらしい」

あんなデバイスが存在することが不可能なのだ。

通常なら形態の量が多すぎてデータの容量がオーバーしてしまうのだから。

彼が創ったのかとも思ったが彼はデバイスの製作に関する知識がほとんど無いのでこれは無いと考える。

クロノ「そして極めつけは以上に消費する魔力」

艦長「彼のデバイスが起動していない状態でも魔力を吸収していることね？」

そうデバイスは普通魔力の消費が無いはずなのである。
だが彼のデバイスは異常なほど魔力を吸収している。

クロノ「もしかして…エイミー！ロストロギアに金色の腕輪が無い
か調べてくれ！」

エイミー「竜馬君のデバイスがロストロギアかもしれないってこと
？」

クロノ「ああ」

僕の言葉を聞いてエイミーは検索を開始した。

side out

side 魔神竜馬

俺の攻撃によりシルバは左腕、左足を失っていた。

シルバはもうすぐ殺せるな…

竜馬「虫に殺される気分はどうだ？」

シルバ「ワタシハシナヌ！！」

シルバは口を開き魔力球を撃ってきた。

だが甘い！！

竜馬「お前は終わりだ！！」

俺は迫る魔力球を切り捨てシルバの首を切り落とした。
するとシルバの体が霧のように消えていった。

デーモン「シルバ！！オノレヨクモワガドウホウヲ！！！！」

ジャバウオックと戦っていたギルファー・デーモンはシルバが消え

た所を見て叫んだ。

その時をチャンスと見たのかジャバウオックはギルファー・デーモンの翼を切り落とした。

side out

sideフェイト・テスタロツサ

私となのはは協力して敵と戦っています。

さつきは不意打ちで腕を切れたけどとても強い!!

なのは「フェイトちゃん！準備できたよ!!」

フェイト「分かった」

なのはの砲撃の準備が終わったので私は離れた。

そして桜色の砲撃が敵に当たった。

フェイト「これで終わった…?」

竜馬「気を抜くな!!」

竜馬の声を聞いて慌てて当たった所を見るとほとんど無傷で敵は飛んでいました。

「コノテイドカ…サキホドハユダンシテイタガコンドハソウハイカ
ンゾ」

敵の言葉を聞いて私は動けなくなりました。

これが…恐怖。

「シヌガイイ！」

敵は私に向かって攻撃を仕掛けてきました。

私はつい目を瞑ってしまいました。

竜馬「気を抜くなつて言つたる！」

side out

side 魔神竜馬

俺はフェイトとガーゼットの間に入りガーゼットの攻撃を防いだ。

フェイト「竜馬…？」

フェイトに怪我は無く無事だった。

結構ギリギリだったぞ？

ガーゼット「ヨクモジャマヲシテクレオツテ！」

竜馬「仲間は助けて当然！！」

俺はそう言つてガーゼットの左腕を切つた。

後はこいつを殺してラストにギルファー・デーモンを殺せばオツケ
ー！！

俺がガーゼットに近づき殺そうとすると不意に脱力感に囚われた。

竜馬「何だ！？急に力が…」

ジャバウオック「竜馬！こちらは終わったぞ！！」

見るとジャバウオックがギルファー・デーモンを倒していた。

この脱力感は何ルファー・デーモンの効果か！！

竜馬「くっ！こんな時に！！」

ガーゼット「ギルファー・デーモンノオカゲデタスカッタナ。ワレ
ハココデヒカセテモラウ！」

俺の状態を理解したガーゼットは逃げて行った。
くそ！説明をしておくべきだった！！
俺達は一旦アースラに戻った。

戦闘と気付かれた事（後書き）

（霊使い達の雑談）

ヒータ「おい！ジャバウオック！！」

エリア「落ち着いてくださいヒータさん」

アウス「まあ今回は竜馬様の説明不足もありますが
ウイン「???ミスしたってこと？」

そう言う事だ。

ヒータ「でもよー！！」

竜馬の説明不足、これが原因だ。

それに次回はちよつとややこしくなるしな。

お前等も一応出番を考えているぞ？

4人「」「」「本当に（ですか）（か）！？」「」「」

おう！そうそう今回の締めはヒータな。

ヒータ「あいよ。闇を狩る少年続くぜ！！出番か」

喜んでるしよかったかな？

抑えられた力と新たな技

side エイミー・リミエッタ

私はクロノ君に言われて金色の腕輪型のロストロギアがあるかを調べた。

金色の腕輪型は…とあった。

エイミー「クロノ君！見つけたよ！！」

クロノ君「見せてくれ」

私が見つけたロストロギアは管理局で一級指定搜索物として手配されている物だった。

ロストロギアの名を？虚無と無限？…

クロノ君「ふむ…彼のデバイスと酷似している。戻ってきたら調べてみてくれ」

エイミー「分かったよ」

私は了承した。

まさか竜馬君のデバイスがロストロギアかもしれないなんてね。

side out

side 魔神竜馬

アースラに転移する前にジャバウオックが謝ってきた。

ジャバウオック「すまなかつた竜馬。知らなかつたとはいえ我の所為で…」

竜馬「気にするな俺が伝えなかつたからだ」

俺はジャバウオックの言葉を遮った。

これは俺のミス。

誰も悪くは無いのだ。

ジャバウオック「しかし……」

竜馬「それと、お前等3人アースラに着いたら説教だったこと忘れてないか？」

3人「……!!」「」「」

俺の言葉によつて3人の表情は暗く変化した。少し前に軽く叱つたんだが……それが原因か？

竜馬「説教が厭ならなのはO H A N A S Iがいいか？」

3人「……説教でお願いします!!!!」「」「」

俺が代替案を出すと3人はそろつて説教を選んだ。つて言うかジャバウオック喋り方変わつてる。

竜馬「……仕方が無いな」

俺の言葉に3人は助かつたような表情をしていた。

そんなにO H A N A S Iが厭か。

竜馬「まあ良いか。無々。アースラに転移してくれ」

無々『了解しました』

無々の転移によつて俺達はアースラに飛んだ。

アースラに着くとクロノが立っていた。

竜馬「どうした？クロノ」

クロノ「君のデバイスを調べさせてくれ」

ああ、無々がロストロギアだとばれたのか。
無々が物扱いなのは気に入らんが。

竜馬「無々。良いか？」

無々「かまいません」

無々から了承を得たので俺は調べさせることにした。

side out

side 虚無と無限

どうやら私がロストロギアだと言う事がばれたらしいですね。

マスターに聞かれたので了承はしましたが…

あまり良い物ではありませんね。

調べた結果を見てクロノさんが驚いています。

クロノさん「竜馬。君のデバイス…いやロストロギアは管理局が管理する」

マスター「断る。無々を物扱いするな」

クロノさんの言葉にマスターが反応しました。

クロノさん「ロストロギアの不法所持は犯罪だぞ！」

クロノさんが再び強く言いました。

無々「私は別にかまいませんよ。ですが、後悔しないでくださいね？」

クロノさん「どういう事だ？」

私の言葉にクロノさんは疑問符が浮かんでいました。

無々『マスター。私を一旦はずしてください』
マスター「?」分かった。これで良いのか?」

私はマスターに言うてはずしてもらいました。

途端、私が先程まで吸収していた魔力があふれ出しました。

なのはさん「な、何これ!?!」

フェイトさん「すごい魔力!!!」

ジャバウオック「これは竜馬から!?!」

マスターからあふれ出した魔力が暴走を始めました。

エイミーさん「クロノ君!大型の時元震が起こりかけてるよ!!」

クロノさん「なんだって!?!どういう事だ!!!」

マスターの魔力がここまで上がっているとは思いませんでした。

無々『私は最初に言ったはずですよ。後悔しないで下さいと。マスター、もう良いです。私を付けてください』
マスター「おう」

マスターは私を腕に通した。

すると暴走していた魔力が沈黙して行った。

クロノさん「どういう事が説明してくれ」

無々『分かりました。まずマスターは異常に魔力量が多く魔力の操作が下手なので時元震が起こりかねません。ですので私が魔力を吸

収めているのです』

私の説明に皆さん驚いてマスターを見ました。

無々『次に魔力の操作が出来ないマスターが魔法を扱えるのは私というフィルターがマスターの魔力を抑えているからです』

マスター「そうだったのか。ありがとうな」

私の言葉にマスターはお礼を言いました。

私としては私を友人の様に扱ってくれている事が嬉しいのですが。

クロノさん「…分かった。ロストロギア？虚無と無限？は君に預ける」

マスター「だから物扱いするなっつーの」

side out

side 魔神竜馬

さて、無々の問題も終わったし次はお説教だな。

竜馬「ジャバウオック、なのは、フェイト？お説教だぞ」

3人「…はい…」

俺は3人の元に向かった。

竜馬「さて、3人とも？俺は近づかないように言ったはずだが？」

ジャバウオック「我は竜馬が心配で…」

なのは「守ってもらっただけじゃダメだと思って…」

フェイト「竜馬だけ戦わせたくなかったから…」

俺の質問に3人は答えた。

うん…この答えを聞くと説教できないな。

竜馬「はあ、確かにお前らには助けられたしな。今回の説教はこれだけにしてやるよ」

俺の言葉を聞き3人は喜んだ。
ん…新しい魔法でも考えるか。

竜馬「お〜いクロノ」

俺はクロノを呼んだ。

クロノ「なんだ？」

竜馬「新しい魔法を考えたいから訓練室貸してくれ」

クロノ「別にかまわないが、加減しろよ？」

よし許可が出た。

俺は訓練室に移動した。

竜馬「んじゃあ無々。能力発動。形状は杖。あ、ついでに結界も」
無々『了解しました。能力発動。結界展開』

無々は杖に変化し結界を張った。

やっぱり砲撃は撃ちたいしね。

竜馬「それじゃあまずは、魔力ダメージが無い砲撃をやってみよう」

俺は杖の先端に魔力を溜めていった。

10分程溜めて俺は撃った。

無々『魔力ダメージ無し。ですが物理ダメージが絶大です』
竜馬「やりすぎたかな？」

俺の目の前の空間が瓦礫に埋まっていた。
結界があるお陰で結界を解けば元通りになるが…

クロノ「何をやったんだ君は！！衝撃がこっちまで来たぞ！！」
竜馬「結界を張って砲撃を撃ったんだがやりすぎた」

突然クロノから連絡…と言うか説教が来た。
俺の言葉にクロノは呆れていた。
少し溜める量を抑えるか。

竜馬「とりあえずさっきのは…ゼロ・ブレイカーとでも付けておくか」

無々『先程の砲撃名はゼロ・ブレイカーですね。登録しました』

無々がゼロ・ブレイカーを登録したらしい。
次からは言えば撃つ準備が出来るのだろう。

竜馬「じゃあ次は、物理ダメージが無い砲撃でやってみるか」

再び俺は魔力を溜め始めた。

先程より小さいので5分ほどで撃ったが…

無々『結界大破。しかし物理ダメージはありません』

竜馬「5分だけでこれかよ…」

俺の撃った砲撃は結界を破壊しそのまま壁をすり抜け飛んで行ってしまった。

リンディ「竜馬さん！先程局員が突然倒れたんですが！！」
竜馬「すまん、物理ダメージの無い砲撃を撃ったら結界を破ってそのまま飛んで行った」

リンディから驚きの連絡が来た。

俺の言葉にリンディはクロノと同じように呆れていた。

リンディ「竜馬さん。砲撃の練習はアースラでしないでください。
お願いします」

竜馬「流石に俺もまずいと思うからもうやらねえよ」

リンディからの言葉…と言うより懇願を俺は受けた。
どこで練習したら良いんだろうか…

竜馬「今度ののは…インフィニティ・ブレイカーってところかな」
無々『今度の砲撃名はインフィニティ・ブレイカーですね。登録しました』

また無々が登録した。

つーことはこれも言えば撃つ準備が出来るのだろう。

竜馬「新技はこれまでかな？あと1つあったんだが試せないんじゃない
仕方が無い」

無々『ちなみに最後の1つの名前は？』

無々が最後の技名を聞いてきた。

竜馬「あゝ単純に言うつとゼロとインフィニティを合わせた集束砲撃
魔法何だが…名前は、そうだなアンノウン・ブレイカーってところ
カ

かな」

無々『不明UNKNOWNですか』

無々の言うとおりである。

ゼロ虚無と無限を合わせるのだからアンソウン不明なのだ。

竜馬「そつだ。んじゃジャバウオック達の所に行くぞ」

無々『はい』

そして俺と無々はジャバウオック達のいる食堂に向かった。

抑えられた力と新たな技（後書き）

（霊使い達の雑談）

エリア「すごい技が出てきましたね」

アウス「私達の出番がありませんでしたが…」

すみませんでしたあああああ！！！！

ウィン「いきなり土下座した！！」

ヒータ「当然だ。前回出番があるって言うておいて出さないんだから」

マジですいません。

出そうと思っていたら出すシチュエーションが思いつかないし出したら確実にヒータがジャバウォック達と戦う話になりそうだったから…」

ヒータ以外「……あ……」

ヒータ「そこで納得すんなよ！！」

とりあえず4人の出番はきっちり考えているから本当にすみませんでした。

アウス「分かりました。それで今回の締めは誰が？」

今回の締めは…俺の番みたいだな。

闇を狩る少年続きます。

ちなみに順番はアウス、エリア、ウィン、ヒータ、たまに竜馬、俺

です。

霊使いを出すのって結構難しい。

相手に許可をきっちり取るう

side 魔神竜馬

食堂に着くと全員で何かを話していたようだ。

クロノは俺が来た事に気付いたのか声をかけてきた。

クロノ「来たか。さて、さっきの衝撃の事を詳しく聞かせてもらおうか」

竜馬「あいよ」

クロノはさっきの砲撃の衝撃について聞いてきた
さっき言ったのにまだ聞くか…

竜馬「さっき言った通り俺が撃った砲撃の衝撃が結界を抜けてそのまま行ったらしい」

クロノ「君は本当に人間か？」

俺の言葉に再びクロノは啞然としていた。
失敬な俺は人間だ。

無々『ゼロ・ブレイカーの威力は絶大でしたから…生物には撃てませんね』

竜馬「確かにそうだな。ギリギリでインフィニティ・ブレイカーぐらいか？」

俺と無々の会話を聞いて全員が呆然としていた。

と、全員に一応言っておくか。

竜馬「全員に言っておく。しばらく敵は動かないはずだから俺は海

鳴市に戻って色々と準備をする。大きな魔力を確認したらすぐに伝えてくれ」

あの傷ならガーゼットもしばらくは休息するだろうしな。

なのは「準備って?」

竜馬「あくあいつ等を倒したら俺は別の世界に行くかもしれないから一応の準備だ」

俺の言葉に全員が驚いた。

なのは「別の世界に行くってどういう事!?!」

フェイト「私達の事が嫌いになったの!?!」

ジャバウォック「我を置いていくつもりか!?!」

アリシア「何で行っちゃうの!?!」

ユーノ「何のために別の世界に?」

クロノ「なぜ君は突然大事を言うんだ!?!」

アルフ「あたし等はあなたの仲間じゃないのかい!?!」

プレシア「私達はまだあなたにお礼をしてないのに…!」

リンディ「なぜそんな事に?」

次の瞬間、全員同時に言った。

って言うか何言ってるか分からねえ…

竜馬「聞きとれねえよ!?!」

俺が叫ぶと全員は黙った。

竜馬「俺は元々あいつ等を倒すために存在しているんだ。この世界にあいつ等がどれだけ居るかは俺も知らない。だから一応の準備だ」

俺はそう言っつて海鳴市に転移するために転送ポートに向かった。

side out

sideフェイト・テスタロッサ

どうしよう…

もしあの敵が竜馬の倒す最後の敵だったら…

母さん「彼にも色々事情があつたのね…」

アリシア「竜馬がどこかに行つちやうかもしれない!」

私はどうしたらいいんだろう?

竜馬がああ敵を倒せないようにする?

ダメ、そんな事できない。

別の世界…か。

フェイト「…もしかして。クロノ!!アースラって別の世界にも行ける?」

クロノ「行けなくもないが、それがどうかし…まさか!」

私の考えがクロノは分かったみたいです。

クロノ「しかし世界は無数にあるんだぞ?」

フェイト「竜馬に発信機を付ければ!」

私の言葉に皆がこちらを見ました。

発信機があれば竜馬を追えるよね!!

プレシア「なら、その発信機作りを私も手伝いましょう」

クロノ「分かった。だが彼に許可をとってくれよ?」

フエイト「うん！」

これで竜馬を追う事ができる！

side out

side 魔神竜馬

！？…何だろう？今寒気が…

現在俺は翠屋に着いた所だ。

竜馬「さて、土郎さん達に説明するか」

無々『そうですね』

そして俺は翠屋に入った。

翠屋に入るとはやてが席に座っていた。

はやて「今日は仕事じゃなかったんか竜馬君？」

竜馬「ああ、ちょっと重要な話があるからな…」

はやてがいるとは思わなかったがまあ良いか。

俺は土郎さんと桃子さんを探した。

竜馬「え〜と…居た居た。土郎さん、桃子さん。話があります」

土郎さん「まさか、なのはを嫁にし…」

桃子さん「土郎さん？黙っていてくれませんか？」

土郎さんが軽く震えているけど気にしない。

竜馬「土郎さん、桃子さん。俺は別の街に行こうかと思っています」

桃子さん「それはなぜですか？」

流石に本当の事はまだ言えないので俺は嘘を言った。

竜馬「いつまでも居候じゃ申し訳ないので…それに旅もしてみたいので」

士郎さん「そうか…なら最後に私と試合をしてくれないか？」

士郎さん！？

まあ最近よく聞かれてたけど…

竜馬「…分かりました。その試合を受けましよう」

そして俺と士郎さんの試合が決まった。

相手に許可をきっちり取るう（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウイン「桃子さんが怖かったね」

エリア「土郎さんの自業自得なんでしょうが……」

アウス「良いんじゃないですか？」

ヒータ「次回は竜馬VS土郎だ!!」

戦闘で魔法が無い描写は難しいんだよね……

まあやつちやったし頑張りますか。

今回の締めは…アウスだね。

アウス「難しいならやらなければいいでしょうに……闇を狩る少年続きます」

小太刀二刀御神流の剣士

side 高町士郎

最近の彼は剣士として戦いたい人物になっていた。
なのはと年も変わらないと言つのに…

士郎「いくよ、竜馬」

竜馬「はい、いつでもどうぞ」

私は木刀を構えた。

対して竜馬は小太刀を二本逆手に持ち前傾姿勢で構えていた。
前線で戦う姿だな…

士郎「まずは…斬!」

私は小太刀二刀御神流で基本の技である斬を放った。

竜馬「危なっ!!!」

竜馬は多少驚いてはいたものの小太刀を交差して防いだ。
これくらいは普通か…

竜馬「やりますね、次は俺の番ですよ!!」

私の攻撃を防いだ後竜馬は連続で斬りかかって来た。
ふむ、やはり良い攻撃をしてくる。

士郎「ならば…虎切!!」

竜馬「げっ!!」

私は居合いの構えをとり虎切を放った。
竜馬はギリギリしゃがんで回避をした。

side out

side 魔神竜馬

危なかった…

当たってたらやばかったな。

竜馬「喰らえっ！！」

俺はしゃがんだ状態から小太刀を土郎さんに向けて突いた。
まあ、この程度牽制位にしかないけど…

土郎さん「甘いつ！！」

予想通り土郎さんは小太刀を弾いた。

土郎さん「さらに…徹！！」

土郎さんが攻撃を放ってきた。

って言うかこれ防いでも意味が無い技じゃん！！

竜馬「なら、おらああああっ！！」

防いでも無駄だと知っているのだから俺はそのまま攻撃を放った。
俺の攻撃が土郎さんの攻撃に当たり軌道が反れた。

土郎さん「何っ！？」

竜馬「っせい！！！！」

士郎さんが驚いている隙に俺はさらに追撃を放った。
当たったか？

士郎さん「くっ！神速！！」

当たったかと思つた攻撃は対象を失はずれた。
ちっ神速を使つたのか。

竜馬「そう簡単にはいきませんか…」

士郎さん「いやいや大したものだよ。なのはと同年とは思えない
くらいだ」

俺は振り向きながら言つた。

士郎さんは神速を使い俺の背後に回つていたので。

竜馬「でも、俺が勝ちます」

士郎さん「さあて、できるかな？」

だが魔力が少量しか使えないのは不便だ。

士郎さんと戦うにはせめて、なのは並に魔力が使用できるようにし
て自身を強化しないと辛い。

現状付いて行けるのはフェンリルの時に速い動きを見る事に慣れた
からだ。

竜馬「そうだ：無々。能力発動。形状はワイヤー」

無々『了解しました。能力発動』

俺は無々に小声で能力発動を促した。

形状はワイヤーなので腕に巻きつけた状態だが。

これで魔力が使える。

竜馬「っしゃあー!!」

俺は魔力を全身に流し身体能力を上げた。

side out

side 高町士郎

竜馬の雰囲気が変わった。

これは気が抜けないな。

竜馬「せいっ!はっ!たあっ!」

竜馬が連続で攻撃を放ってきた。

だが軌道が甘い。

士郎「よっほっはっ。まだ甘いよ」

竜馬「まだまだ!斬光狼影刃!!」

なっ!?

突然竜馬は切り上げから切り落としに素早く代え攻撃してきた。
驚いた:こんな攻撃パターンを持っているとは...

士郎「だがこれでは簡単にかわせるよ」

竜馬「でしようね!!」

竜馬は攻撃を避けた私の後ろに回り込んで来ていた。
神速が使えるのか!?

竜馬「これで終わりです!!瞬華終刀!!」

私は更によけようとしたが竜馬が右、左、右、左、上、下、と連続で攻撃してきた。

最初の4撃までは防いだが残りの2発に当たり倒れてしまった。そして竜馬は素早く私の喉元に小太刀を突きつけた。

士郎「まさか、私が負けるとはね……」

竜馬「いえ、良い試合でしたよ。またやりたいですね」

竜馬にはバトルマニア戦闘狂の素質があるのかな？

私は立ちあがり竜馬と握手をした。

士郎「ああ、そうだね」

私を倒せるのだからなのはを渡しても良いのかもかもしれないな。気付けば私は笑っていた。

ああ、私もバトルマニア戦闘狂だったのかな？

そして私と竜馬は店の方に戻った。

小太刀二刀御神流の剣士（後書き）

～ 霊使い達の雑談 ～

いや～ 戦闘シーンが難しかった。

アウス「早速ですか…」

ウィン「そう言えばお兄ちゃんって魔力が使えなかったら士郎さんに負けてたの？」

ああ、竜馬は鍛えてはいたけど士郎さんに勝つには身体能力強化が無いとまだ勝てないからな。

エリア「まだ…と言う事は？」

ヒータ「いずれ勝つてことだな!!」

さあ？それは俺の気分次第だよ。

今回の締めは…エリアだよ。

エリア「はい。闇を狩る少年続きます。…私達これしか言ってませんね」

気にしないでくれ!!

平和な日々…この平和が続けばいいのにな

side 魔神竜馬

士郎さんとの試合が終わり俺達は翠屋に戻った。
次は魔力強化無しで勝てるようにならないとな。

桃子さん「お帰りなさい。で？どっちが勝ったの？」
士郎さん「いや、負けてしまったよ」

桃子さんの質問に士郎さんは軽く答えた。
実際、俺は強化が無ければ負けていた…

竜馬「ギリギリでしたよ」
士郎さん「謙遜をするなよ」

謙遜しているわけじゃないんだがな。
俺は座っているはやての元に行った。

竜馬「まあ、そんな訳で俺はこの街から出るんだ。縁が有ったらまた会おうな」
はやて「…分かった。次この街に来る事があつたら必ず家に来るんやでー!!」

俺の言葉にはやては頷いた。
？闇？がまた現れたらこの世界には来るよ…

竜馬「それじゃあ、士郎さん、桃子さん。今まで居候させていただきありがとうございました。またこの街に来た時は寄らせていただきます」

俺はそう言っただけで翠屋を後にした。

「闇？が出るまではアースラにでも厄介になるか。」

sideout

sideリンディ・ハラウン

竜馬さんが地球に行ってからアースラは慌ただしい状態です。

プレシアさん「ここをこうして…あー！！そこは踏まないでっ！！」
リンディ「何をしていますか？」

私は研究室で何かをしているプレシアさんに聞いた。

プレシアさん「娘達のために竜馬に付ける発信機を創っているのよ。
世界間の移動だから創るのが難しく…」

リンディ「そうですか。必要なものがあつたら言ってくださいね？」

私はそう言っただけで研究室を後にした。
発信機を創るなんてすごい発想ねえ…

sideout

side高町なのは

急に休みになつても何をすれば良いか分からないよ〜
いつそ竜馬君と模擬戦でも…

フェイトちゃん「なのはっ！！」

なのは「フェイトちゃん！？」

突然フェイトちゃんに声をかけられて私はビクリしました。

フェイトちゃん「なのは、これから竜馬の所に行こうよ」
なのは「竜馬君のところ？」

見るとフェイトちゃんの後ろにジャバウォックちゃんとアリシアちゃんがいきました。

フェイトちゃん「うん。皆で」

ジャバウォックちゃん「うむ。竜馬がどこかに行く前に思い出を、
と思つてな」

そっか…

うん、思い出も作りたいもんね！！

なのは「分かった！じゃあ竜馬君の所に行こう！！」

3人「「「おー！！」「」」

そして私達は竜馬君の所に轉移しました。

side out

side 第3者視点

竜馬はやる事が無くなったので公園にいた。

すると目の前に魔法陣が現れ中からは、フェイト、アリシア、
ジャバウォックの4人が出てきた。

竜馬「どうしたんだ？4人とも」

ジャバウォック「なに。我等との思い出を創りにな」

ジャバウォックはあっさりと言った。

竜馬「思い出と言われてもな…」

フエイト」と、とりあえず今日一緒にいてくれれば良いから!」

フエイトは耳まで真っ赤にしながら言った。

竜馬「でも、俺。これから適当に砲撃を撃ちに行こうと思っていたんだが」

なのは「あっ! 私竜馬君の砲撃見てみたい!」

なのはが竜馬の言葉に反応した。

竜馬「まあ別にかまわないけど…」

アリシア「それじゃあ皆で付いて行こう!」

結局、竜馬はなのは達を連れて山に向かった。

side out

side 魔神竜馬

さて、どの砲撃から撃とうかな?

ちなみなのは達には少し離れてもらっている。

竜馬「無々。能力発動。形状は杖」

無々『了解しました。能力発動』

そう言っつて無々は杖になった。

次は…

竜馬「そうだな…無々。インフィニティ・ブレイカー準備」

無々『了解しました。インフィニティ・ブレイカー発動準備』

無々は魔力を杖の先端に集め始めた。

平和な日々…この平和が続けばいいのにな（後書き）

（霊使い達の雑談）

ヒータ「あり得ない範囲だよな…」

エリア「あまり多様は出来ませんね」

ウィン「って言うか撃つ暇あるのかな？」

そこまで無いと思うぞ？

だって竜馬は集束が苦手だからな。

アウス「その点を克服できれば良いと言う訳ですね？」

まあな。

今回の締めは…ウィンだあああ！！

ウィン「分かった。闇を狩る少年続くからね？」

可愛いなあ本当に。

よくよく調べてみると俺の砲撃はヤバイ

side 魔神竜馬

あの後、何発か溜める時間を変えて撃つてみたら分かった事があった。

まず、ゼロ・ブレイカー…

この砲撃は物理ダメージ。

一分毎に当たる範囲が十分の一ずつ狭くなる。

威力と速度は上昇していく。

最初の範囲は10万km。

非殺傷不可。

次に、インフィニティ・ブレイカー…

この砲撃は魔力ダメージ。

一分毎に当たる範囲が十倍ずつ広くなる。

威力と速度は上昇していく。

最初の範囲は1m。

結界破壊効果。

殺傷不可。

…何だろうな〜

適当に創ったはずなのにこのチートな性能は…

竜馬「無々、どっちも余り使わないようにしよう」

無々「同感です」

俺はなのは達の所に向かった。

見るとなのは以外の3人は啞然としていた。

竜馬「どうしたんだ？」

ジャバウォック「…竜馬。さっきの砲撃はいつたい…」

どうやら俺の放った砲撃に驚いていたらしい。
まあ、俺も驚いたけどさ。

竜馬「いや、俺も適当に創ったものだからさつき色々撃ってみて驚いた」

フェイト「適当に創ってあの威力なの…？」

俺の言葉に3人はさらに驚いていた。

なのは？

なのはならさつきから何かを呟いているので正直関わりたくない。

なのは「…アレを…そしたら…うふふふ…」

はい、こんな感じですよ。

と言う訳で放置。

竜馬「んじゃあ、俺の練習は終わったしアースラにでも行くか」
3人「…分かった」

俺達はなのはを放置してアースラに向かった。

3人もなのはが怖かったらしい。

side out

side クロノ・ハラウン

先程、地球で時元震が起こりかける程の魔力を感知したので調べてみたら竜馬の砲撃だった。

実際、彼の魔力総量はどの位なのだろうか…

クロノ「彼が魔力を完全に操れるようになったら脅威だな」

僕は小さくつぶやいた。

side out

side 魔神竜馬

次の日

俺は余りにもヒマだったので無限書庫に向かった。

「暴れたりしなければかまいません」

と言われて少し傷ついた。

俺ってそこまで凶暴に見えるのか？

竜馬「まあ良いや。え〜つと、闇の書、闇の書」

実際この世界にまた戻ってくるとは思っていない。

何故調べるのかは救済方法を調べて残しておくためだ。

竜馬「でも、これやるとユーノの出番が減るんだよな」

…ま、良いか。

そして俺は闇の書について調べ始めた。

「そこまでする義理はあるのか？」

竜馬「!?!? ヒータか。別に無いよ俺がしたいだけなんだし」

不意に声がかかり俺は振り返った。

そこにはヒータが浮かんでいた。

ヒータ「そうかい…ああ、それとこの世界の？闇？は今んとこガ―

ゼットと何かだけだぞ」

何かって何だよ…

竜馬「あいよ。…そう言えば、俺が死んだ時に俺のバッグに入っていたデッキはどこに行ったか知っているか？」

ヒータ「デッキ？…ああ、あれか。あれならあたしが持っているぞ」

ヒータが持っていたのか。

道理で探しても無いわけだ…

竜馬「返してくれないか？一応俺の大事なものだから」

ヒータ「分かってるよ。ほれ、この中に全部入っているぞ」

そう言っつてヒータはリュックサックを出した。

竜馬「ありがとうな、ヒータ」

ヒータ「べ、別にお前の為じゃねえよ」

リュックの中を確認すると俺のデッキが9個全て入っていた。まあ、この世界じゃ使えないだろうけどな…

無々『！？…マスター！新しく形状が出てきました！！』

竜馬「はっ？」

新しい形状！？

さらに別の武器になれるのか？

竜馬「一応見てみるか。無々。能力発動。新形状」

無々『了解しました。能力発動。決闘』デュエル

…っえ！？

デュエル！？

俺が驚いている間に無々は形状を変えデュエルディスクになっていた。

竜馬「……もしかして。？地霊使いアウス？召喚」

無々『SUMMON』

俺が無々にカードをセットすると無々が機械の様な音声で言った。
するとカードが光った。

次の瞬間…

アウスが目の前に立っていた。

……マジで？

アウス「急に呼ばれたので驚きましたよ」

竜馬「こっちも呼べてビックリだよ」

アウスの言葉に俺は答えた。

ヒータ「何であたしじゃねえんだよ!!」

竜馬「あだあっ!!!!」

俺はいきなりヒータに殴られた。

何故ヒータじゃないかと言うと傍にいたから呼んでも分からないと思っただからだ。

ヒータ「ううう…竜馬はアウスが好きなのか？」

竜馬「ん？俺は仲間だと思っっているからなあ。ううん…まあ、(仲間として)好きかな」

俺は思った事を言った。

するとヒータは崩れ落ちた。

無重力で崩れ落ちるって器用だな。

ヒータ「竜馬はアウスが好き…竜馬はアウスが好き…竜馬はアウスが好き…」

何だろう…ヒータがすごく暗い。
不意にアウスが俺に服を引いた。

竜馬「何だ？アウス」

アウス「ヒータの事はどう思っているのですか？」

急に何なんだ？

ヒータの事？

竜馬「（仲間として）好きだが？」

アウス「そうですか…」

俺がそう言うときアウスは少し残念そうな表情をした。
そしてヒータは今度は赤くなっていた。

何か変な事を言ったかな？

ヒータ「そ、それじゃああたし等は帰るな！！」

アウス「それでは、また」

竜馬「おう、じゃあな」

結局ヒータは顔を赤くした状態で帰って行った。
何だったんだろうな？

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」
「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

竜馬「おわっ！？何だよいきなり！！」

名前が呼ばれると同時に俺にバンドがかけられた。

しかも4重で…

見るとジャバウォック、なのは、アリシア、フェイト、の4人が笑

顔で浮かんでいた。

4人とも目が笑ってません!!

竜馬「えっと…何を怒っているんですか？」

ジャバウオック「我等が竜馬を探していたと言っのに…」

なのは「竜馬君は知らない女の子と話していたんだね…」

フェイト「私達より仲が良いの？」

アリシア「さっきの子たちは誰!!」

その後、俺はジャバウオック達による？お話（尋問）？を受けた。
はっきり言ってもう受けたくない…

よくよく調べてみると俺の砲撃はヤバイ(後書き)

「霊使い達の雑談」

ヒータ「竜馬が好きって言ってくれた？」

アウス「私も言われましたけどね……」

ヒータが若干トリップしているな……

エリア「よっぽど嬉しかったんですね」

ウィン「みたいだね」

まあ、それは置いておいて。

竜馬の砲撃がやばすぎた。

ウィン「ゼロの方はともかくインフィニティの範囲が広がるのは辛いよ」

だよな

っと今回の締めは……ヒータだな。

ヒータ「ふふふ……はっ！あたしか!？」

ああ、そうだ。

だから早くしてくれ。

ヒータ「分かった。闇を狩る少年続くぞ。……ふふふ竜馬があたしを……」

ダメだこりゃ。

次回までに戻ってこいよ？

自分VS自分…勝負がつかないよな？

side 魔神竜馬

昨日のジャバウォック達による？お話（尋問）？はきつかった…
まあ、不死鳥フェニックスになってすぐに回復したけどさ。

竜馬「まだ出てこないよな？」

クロノ「何が出てこないんだ？」

！？…びっくりした。

突然クロノが後ろから声をかけてきた。

竜馬「いきなり背後から話しかけないでくれ」

クロノ「それは、すまない。で？何が出てこないんだ？」

こいつ全然すまないと思ってねえな…

…まあ良い。

竜馬「俺の破壊対象が、だ」

クロノ「？闇？…だったか？」

クロノは確認するように言った。

うる覚えかよ…

竜馬「ああ…」

クロノ「実際、今まであんな存在があること自体知らなかったぞ？」

別に気にする事でも無くね？

今日も別に出なそうだな…

竜馬「あ、そうだクロノ。訓練場を貸してくれ。肉弾戦の練習をしたい」

クロノ「砲撃を撃たなければかまわないぞ」

流石にもう撃てねえよ…

こんな所で撃つたらアースラが壊れるわ！

竜馬「あいよ。じゃあ行つて来る」

クロノ「映像に残しても構わないか？」

竜馬「あゝ…別に良いぞ」

俺はそう言つて訓練場に向かった。別に解析しても分かるわけ無いし。

side out

sideフェイト・テストロツサ

クロノから竜馬が訓練をするらしいから見に来ないかと誘われた。行つてみるとジャバウォック達もいた。

なのは「あ！フェイトちゃん！！」

フェイト「なのはも来たんだ」

なのはは待ちきれないと言つた風に画面を見ていた。私も興味があるし早く始まらないかな。

side out

side魔神竜馬

俺は訓練場に着いた。

ちなみに俺は素振り等をするわけでは無い。

竜馬「無々。能力発動。形状は双剣」
無々『了解しました。能力発動』

無々はそう言っつて双剣に変化し地面に突き刺さった。
双剣の形状は片方が日本刀で片方が西洋剣である。

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

俺は呪文を唱えフェンリルに変身した。
この能力じゃないと出来ないんだよな。

竜馬「さてと、…影分身」

俺はフェンリルの能力を使用した。
すると、俺の影から蒼眼金髪の俺が現れた。
とりあえず、フェンリルで良いか？

フェンリル「何の用だ？」

竜馬「ん？ちよつと模擬戦をしようぜ」

俺がそう言っつとフェンリルは嬉しそうに言った。

フェンリル「まじで！？よっしやあああ！…」
竜馬「んじゃ。やるぞ」

俺は双剣を手に取り言っつた。
つーかこいつバトルマニア戦闘狂だ…

フェンリル「おう!!…影爪」

やっぱ使えるのか…

フェンリルの腕に影が巻きつき一回り大きな爪が現れた。

side out

side 第三者視点

訓練場に轟音が響く。

竜馬の双剣とフェンリルの影爪がぶつかり合う音である。

竜馬「模擬戦はこうで無いとな!!」

フェンリル「楽しいぞ! 竜馬!!」

実際、まだ2人は遅く動いていた。

それでもフェイトがギリギリ目で追う事が出来る速さだが…

竜馬「フェンリル、歌うと言つのはどうだろう?」

フェンリル「お、良いなそれ!」

この間も竜馬とフェンリルは討ちあっている。

普通そんな余裕はないだろう…

フェンリル「んで? 何の歌にする?」

竜馬「そうだな…あの曲でどうだ?」

フェンリル「良いぜ!!」

どうやら歌が決まったらしい。

この間も討ちあっているため見ている方からすれば驚きものなのだが…

ジャバウオックちゃん「やはり、良い歌だな」

フェイトちゃんにも見えないんだ。

竜馬君「くくくくくくくくくくく」

フェンリル君「くくくくくくくくくく」

竜馬君・フェンリル君「くくくくくくくくくく」

2人の姿は見えないけどこれが良い歌だってことは分かる。

！！2人がぶつかり合った状態で停止してる！！

なのは「すごいなあ…」

クロノ「と言うか、模擬戦のレベルじゃ無いだろ…」

クロノ君があきれて言いました。

確かにそれもそうなの。

フェンリル君「くくくくくくくく」

竜馬君「くくくくくくくく」

ぶつかり合っている状態から2人は離れました。

2人共歌いながら止まっています。

フェンリル君「くくくくくくくく」

竜馬君・フェンリル君「くくくくくくくく」

2人同時に歌った瞬間2人共ぶつかり合いました。

また見えなくなっちゃった…

フェンリル君「〜」
竜馬君「〜」
竜馬君・フェンリル君「〜」

どこにいるんだろう？

私は画面を見渡しました。

でも、見えませんでした…

side out

side 魔神竜馬

長い間奏に入ったため俺たちは討ちあった。

竜馬「フェンリル、歌が終わったら終わりにするぞ」
フェンリル「分かった」

俺は討ちあいながらフェンリルに念話をした。
とそろそろだな。

竜馬「〜」
フェンリル「〜」

少し歌のペースが遅くなったので俺たちのスピードも落ちていった。
なのは達にも見えるだろう。

竜馬「〜」
フェンリル「〜」

次からまたペースが上がってきてくるんだよな。
もうそろそろでフィニッシュだな。

竜馬君「〜」
 フェンリル君「〜」

竜馬君・フェンリル君「〜」

俺たちは再びペースを上げていった。
 また誰にも見えなくなるんだろうな。

竜馬「〜」

フェンリル「〜」

竜馬君・フェンリル君「〜」

次がラスト！！

side out

side 第三者視点

2人の動きが最も速くなった。

竜馬「〜」

フェンリル「〜」

2人は止まり訓練場の右と左に立った。

そろそろ決着がつくのだろう。

竜馬・フェンリル「〜」

2人は歌いながら構えた。

最後の歌詞を歌うのと同時に攻撃をするのだ。

竜馬・フェンリル「………！！」

魔力を込めた双剣と影爪がぶつかり合った。
衝撃により訓練場が震えた。
煙が起こり何も見えなくなった。

side out

side ジャバウオック・サタナキア

何なんだこの戦闘は…

我は煙に包まれた画面を見ながら思った。

ジャバウオック「どうなったのだ…？」

フェイト「煙が晴れるよ！！」

フェイトの言葉に我は反応して画面を見た。

煙が晴れた画面に映っていたのは…

…笑顔で気絶している竜馬だった。

全力で戦えて満足したようだな。

私はつい笑ってしまった。

s i d e o u t

s i d e 魔神竜馬

あの後、俺はクロノに軽く怒られ訓練場のえぐれた地面等を修理する羽目になった。

疲れたがまたやろうかな…

自分VS自分…勝負がつかないよな？（後書き）

（霊使い達の雑談）

アウス「竜馬様は戦闘が好きなんですか？」

エリア「そういう風には見えませんが…」

竜馬は軽度の戦闘^{バトルマニア}狂だよ。

ウィン「お兄ちゃん。満足そうだったね」

ヒータ「そうだな」

まあ、今回は書いていて楽しかったし良かった。

今回の締めは…俺か。

闇を狩る少年続きます。

この歌は結構お気に入りなんだよね。

平和が終わる時…離れても仲間は仲間。

side 魔神竜馬

さて、今日はどうするかな…？

俺がそんな事を考えているとアラートが鳴った。

リンディ「竜馬さん！大きな魔力反応が出現しました！！」

すぐにリンディから連絡があつた。

竜馬「ついに来たか…場所はどこだ？」

リンディ「海鳴市の海上、前回と同じ位置よ！！」

まだ分かりやすいな。

俺は部屋から出た。

すると部屋の外にジャバウォック、フェイト、なのはの4人が立っていた。

竜馬「どうした？」

ジャバウォック「我等も連れて行け」

俺が聞くとジャバウォックが言った。

まあ、連れていかなかったら勝手に来るんだろうなあ…

竜馬「…分かったよ。ただし！危険だと判断した時はすぐに逃げろ！！」

3人「…うん（うむ）！！！！」

つと変身しないとな。

竜馬「無々。能力発動。形状は決闘^{デュエル}」
無々「了解しました。能力発動。決闘^{デュエル}」

無々は形状を変えデュエルディスクになった。

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

俺はフェニックスに変身した。

そして俺はジャバウォック達を連れて海上に向かった。

フェイト「竜馬、今回の敵が最後なの？」

竜馬「いや、まだあと一匹いるらしい」

フェイトの質問に俺は飛びながら答えた。

ヒータの言っていた何かが分かればな…

竜馬「見つけた!!」

俺は海上に魔法陣を敷いているガーゼットを見つけた。

あの魔法陣はいつたい…

ガーゼット「チツ…マタムシガラワレタカ」

竜馬「その虫に苦戦していたのはどいつだったかな？」

俺の言葉にガーゼットは忌々しそうに睨んできた。

!?!?!これはっ!?!?

俺は不意に魔法陣から厭な気配を感じた。

竜馬「その魔法陣は何だ!？」

ガーゼット「ワレラノアルジヲヨビダスタメノシルシダ」

こいつ等の主だと？

こいつ等は悪魔族。

悪魔族の長と言えば…

竜馬「…まさかラビエルか!？」

ガーゼット「サア、ドウダロウナア」

どちらにしろ呼ばせるわけにはいかないな。

竜馬「全員あの魔法陣を完成させるな!!!」

俺は3人に言った。

俺も召喚しなくては…

side out

sideフェイト・テストロッサ

あの魔法陣を完成させなければいいんだね？

私は接近してバルディッシュを振りかぶった。

フェイト「つはあ!!」

ガーゼット「ソノテイドノコウゲキデコワレルトデモオモツテイル
ノカ？」

バルディッシュが魔法陣にぶつかりると同時に弾かれました。

堅い!

竜馬「マスケド・ドラゴン? 仮面竜? を召喚!!」
無々『SUMMON』

不意に竜馬の声が聞こえたのでそちらを見ると竜馬の近くにドラゴンがいました。

なのは「にやつ!? 何あれ!?!」
ジャバウオック「味方なのか?」

なのは達も驚いています。
それよりも魔法陣を壊さないと!!

フェイト「サンダアアアアア……」

私の砲撃で壊す!!
私はバルディッシュを構えながら魔力を溜めた。

フェイト「レイジイイイイ……!!!!!!」

砲撃が当たり煙が起こった。
壊れたかな?

ガーゼット「マダダ…マダ、オワラヌ」

煙が晴れるとそこには自分を盾にして魔法陣を守る敵がいた。
ダメージで両腕が無くなっていたが…

side out

side 魔神竜馬

間に会うか?

決闘は一回召喚したら一分ほど召喚出来ないのだ。

竜馬「次は、？デブリ・ドラゴン？を召喚！！さらに？ワンショット・ブースター？を特殊召喚！！」

俺の目の前に白いドラゴンと黄色い機械が現れた。

これで準備は完了！！

竜馬「レベル3？マスクド・ドラゴン仮面竜？とレベル1？ワンショット・ブースター？にレベル4？デブリ・ドラゴン？をチューニング！！」

俺の言葉に反応し？マスクド・ドラゴン仮面竜？と？ワンショット・ブースター？が光の球になった。

そして？デブリ・ドラゴン？が4つの輪っかになり光の球が潜っていく。

竜馬「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、？レッド・デーモンズ・ドラゴン？！」

次の瞬間、光の球と輪っかがあった所に悪魔を連想させるドラゴンが現れた。

？デブリ・ドラゴン？だから？スター・ダスト・ドラゴン？だと思っただかな？

竜馬「さらにカードを3枚セット！！」

俺の近くにカードが一瞬現れたが消えた。

後は叩き潰す！！

竜馬「？レッド・デーモンズ・ドラゴン？で攻撃！！アブソリュール

ト・パワーフォース！！！！」

？レッド・デーモンズ・ドラゴン？がガーゼットに向かって攻撃を仕掛けた。

この攻撃が当たれば終わるはず！！

ガーゼット「…オソカッタナ。カンセイシタゾ」

ガーゼットが小さくつぶやいた。
間に合わなかったのか!!

ガーゼット「アルジヨ!ワガイノチ!ワガマリヨク!スベテヲササ
ゲマス!」

ガーゼットが大きく叫んだ。
すると、魔法陣が黒く光った。

竜馬「ちっ!!全員退避!!戻れ!?レッド・デーモンズ・ドラゴ
ン?!」

俺の言葉に?レッド・デーモンズ・ドラゴン?は攻撃を止め戻って
来た。

魔法陣から巨大な腕が現れた。

ジャバウォック「竜馬!!あれは何だ!?
なのは「にゃあああ!?!今度は何iiiiii!?!」
フェイト「竜馬……」

こいつらだけでも逃がした方が良いな。

竜馬「お前等は逃げろ!こいつの相手は無理だ俺がやる!」

すでにラビエルの上半身が出ていた。
急がないと間に合わない!!

ジャバウォック「何故だ!」
なのは「竜馬君!」

フエイト「私も戦う!!」

俺の言葉にジャバウォック達は反対した。

竜馬「時間がねえんだよ!! さつさとしろ!!」

今回ばかりはこいつ等を残せない。

だから俺は怒気を込めて言った。

その言葉を聞き3人は渋々戻っていった。

ラビエル「お前が我等を破壊している者が…」

竜馬「ああ、そつだ」

ラビエルが急に話しかけてきた。

ラビエル「何故、我等を破壊する？」

竜馬「約束をしたからな」

俺の言葉にラビエルは笑いだした。

何がおかしいんだ？

ラビエル「まあ、良い。お前を殺せば我等は破壊されなくなるだろう」

竜馬「確かにそつだな…」

ラビエルは魔力を溜め始めた。

撃つ気だな？

竜馬「ドロー!! 罫カードオープン!? バスターモード?」

？レッド・デーモンズ・ドラゴン？の体に鎧が装着された。
？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？にランクアップした
のだ。

それと同時にラビエルの近くに幻魔トークンが出現した。

竜馬「？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？の攻撃！エクス
トリーム・クリムゾン・フォース！！」

？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？が俺の言葉によつて
攻撃態勢をとつた。

攻撃力ではラビエルの方が上だ。

竜馬「さらに畏^{トラック}カードオープン！？ライジング・エナジー？」

このカードはモンスター^{アンティーク・ギア}の攻撃力を1500上昇させるカードだ。
俺は手札から？古代の歯車？を墓地に送つた。

これで？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？の攻撃力が上
回つた！

ラビエル「小賢しい！！我の糧となれ！！」

ラビエルは幻魔トークンを吸収し攻撃力を上げた。

これでは互角か…

？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？とラビエルの攻撃が
ぶつかり衝撃波が起こつた。

竜馬「やっぱアレを出すしかないよな…魔法カード^{マジック}？死者への手向
け？対象は？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？…」

俺は手札から？救世竜 セイヴァー・ドラゴン？を墓地に送つた。

？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？は破壊され効果で？
レッド・デーモンズ・ドラゴン？が特殊召喚された。
すまなかつたな？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？。

竜馬「手札から？きんかひょう金華描？を召喚！効果により墓地から？救世竜
セイヴァー・ドラゴン？を特殊召喚！！」

俺の近くに小さな白い猫と桃色の竜が現れた。

竜馬「レベル8？レッド・デーモンズ・ドラゴン？とレベル1？きん金
かひょう華描？にレベル1？救世竜 セイヴァー・ドラゴン？をチューニン
グー！！」

俺の言葉で？レッド・デーモンズ・ドラゴン？と？きんかひょう金華描？が光の
球になった。

そして？救世竜 セイヴァー・ドラゴン？が光の球を包みこんだ。

竜馬「研磨されし孤高の光、真の覇者となりて大地を照らす！光輝
け！シンクロ召喚！大いなる魂、？セイヴァー・デーモン・ドラゴン
？！！」

そして？レッド・デーモンズ・ドラゴン？がさらに進化した姿が現
れた。

竜馬「？セイヴァー・デーモン・ドラゴン？の効果発動！パワー・ゲ
イン！！」

？セイヴァー・デーモン・ドラゴン？の口から光が出てラビエルに当
たった。

ラビエル「ぐぬぬう…」

パワー・ゲインは相手の攻撃力を奪い自分の攻撃力に追加する効果である。

竜馬「行け!!?セイヴァー・デモン・ドラゴン?!アルティメット・パワーフォース!!!」

?セイヴァー・デモン・ドラゴン?はラビエルに攻撃をした。

ラビエル「ぐ、がああああああ!!!!!!」

?セイヴァー・デモン・ドラゴン?の攻撃によりラビエルは徐々に体が破壊されていった。

ラビエル「約束を守るか…それもよからう…我等を倒してみよ!!!」

その言葉を最後にラビエルは消え去った。

平和が終わる時…離れても仲間は仲間。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

? レッド・デーモンズ・ドラゴン? が出たー!!

ヒータ「うるせえっ!!」

あだあっ!!!

エリア「わざわざ叩かなくても…」

ウィン「何でそこまでテンションが高いの?」

竜馬が使っているデッキは俺が創ったデッキだからな!

アウス「ああ、それですか」

勿論、霊使い入り!!

今回の締めは…アウスだよ

アウス「私達が入っているんですね? 良かった。闇を狩る少年続きます。私達を入れてる人って余り見ないですよね?」

ああ、俺の知っている限りではな。

別れ…湿っぽいのは性に合わねえ!!

side 魔神竜馬

終わったか…

おそらくラビエルがヒータの言っていた何かだったのだろう…

竜馬「無々。アースラに転移してくれ」

無々『了解しました』

俺は無々に頼んでアースラに転移した。

アースラに着くと早速クロノが問い詰めてきた。

クロノ「竜馬!さっきのドラゴンはいったい何なんだ!!」

竜馬「?レッド・デーモンズ・ドラゴン?の事か?」

やっぱり聞いてくるよな。

説明だりい…

竜馬「簡単に言うと俺の召喚獣だ。以上っ!」

クロノ「以上じゃない!!」

うるさいなあ…

突然目の前にエリアが現れた。

エリア「竜馬さん。この世界の?闇?が無くなったので別の世界に行きますよ」

竜馬「分かってる。でも最後の挨拶はしてこないとな?」

そう言っただけ俺はリンディ達の元に向かった。

エリアは俺の後ろから付いてきた。

竜馬「お〜い、リンデ…」

ジャバウオック「竜馬！そ奴は誰だ！！」

なのは「また別の子なの？」

フェイト「竜馬…私じゃダメかな？」

俺が部屋に入り喋ろうとしたら3人に遮られた。
…キレていいよな？

竜馬「…3人とも？…人の話を最後まで聞くように言われなかったのか？」

俺は徐々に殺気を含めて言った。

ジャバウオック「…！！す、すまん！！」

なのは「…！！ご、ごめんなさい！！」

フェイト「…！！ご、ごめん竜馬」

すると3人はすぐに静かになった。
ふう、これで言える。

竜馬「これより全員に告ぐ！俺、魔神竜馬は只今を以って別の世界に向かう」

リンデ「つまり先程の巨人？が？闇？だったんですね？」

リンデの言葉に俺は頷き肯定した。

ジャバウオック「わ、我もついて行くぞ！！」

なのは「わ、私も！！」

フエイト「私もだよ!!」

すると3人が言った。

付いて来ても危険だから厭なんだよな…

竜馬「エリア、こいつ等を連れて行けるのか？」

エリア「不可能です。私達が送れるのは竜馬さんだけなので…」

エリアの言葉を聞いて3人は落ち込んだ。

あれ？そっぴやプレシアとアリシアはどこに行ったんだ？

プレシア「はあっ…はあっ…間に合ったようね？」

アリシア「お母…さん…足…速い…！はあっ…はあっ…」

突然プレシアとアリシアが急いで部屋に入って来た。

何を急いでいたんだ？

side out

sideプレシア・テストロツサ

竜馬に付ける発信機が完成した時に竜馬が別の世界に行くって聞いて私は急いで竜馬達のいる部屋に向かったのだ。

こんなに走るなんて久しぶりだったわ。

竜馬「何を急いでいたんだ？プレシア」

竜馬が言いました。

そう言えば竜馬に発信機の事を言って無かったわね。

私は呼吸を整えて言いました。

プレシア「あなたが別の世界に行くって聞いて急いできたのよ」

アリシア「わ…私も…だ…よ…」

アリシアは息も絶え絶えね？

竜馬「そうか…その手に持っている物はなんだ？」

プレシア「発信機よ。あなたを探せるようにね」

私は創った発信機を見せながら言った。

と言ってもこれはデバイスなどに読み込ませるものだけど…

プレシア「という訳で、これを付けなさい！」

竜馬「強制かよ!!! まあ、良いけど」

竜馬は軽く突っ込んでから了承しました。

アリシアが静かね？

アリシア「…竜馬、本当に行っちゃうの？」

見るとアリシアは涙目で竜馬を見ていました。

竜馬「ああ、これは俺がやるべき事なんだ。それに、またこの世界に？ 闇？ が現れたら俺はまた来るぞ？」

アリシア「…分かった」

竜馬の能力のフェンリルなら別の世界から来れるんじゃないかしら？
時空庭園にもフェンリルで来れたんだし…

竜馬「プレシア、発信機を付けてくれ」

プレシア「分かったわ、無々さんだっけ？ これを読み込んでちょうだい」

無々さん『分かりました』

私は無々さんに発信機を近づけた。
これで竜馬の事が追えるわね。

side out

side 魔神竜馬

なんかプレシアのキャラが変わってきてないか？

俺は無々が発信機のデータを読み込んでいるのを見ながら思った。

無々『データの読み込みが終了しました』

竜馬『お？終わったか…じゃあ、俺は行くな？エリア、頼む』

エリア『はい』

俺がエリアに言うところエリアは水で扉を創った。

俺は扉の前で一旦振り向き言った。

竜馬『一応行っておくぞ？お前たちは俺の大切な仲間だからな！』

そう言っただけ俺は扉をくぐった。

次の世界へ向かうために…

俺が扉をくぐるとそこは最初に俺が目覚めた所だった。
他の霊使い達がそこにいた。

ウィン「お兄ちゃん。お疲れ様」

アウス「次の世界に案内します」

ウィンとアウスが声をかけてきた。

ヒータは少し離れた所で顔を赤くしていた。

ヒータ「／／／／／」

風邪でも引いたのか？

アウス「本当に鈍感ですね…」

アウスが小さく喋ったが声が小さかったので聞きとれなかった。
そう言えば次の世界はどこなんだろう？

アウス「それでは次の世界に行きますよ」

竜馬「ああ、案内してくれ」

俺がそう言つとアウスが手を握つてきた。

…うえ！？

アウスさん！？

何で急に手を握つて来たんですか！？

そして何で顔を赤く染めているんですか！？

エリア「アウスも竜馬さんの事を…」

アウス「エリア！！」

エリアは何を言おうとしたんだろう？

アウス「着きましたよ」

竜馬「つーかまたこの穴かよ」

到着したのは前回おちた穴の数メートル先の穴だった。
また飛び降りろつてことだよな。

竜馬「まあ良いか。んじゃ、行つて来るか」

そう言つて俺は穴に飛び込んだ。

飛び降りてから10分後。

魔神竜馬はアパートの2階のある少女の部屋のベランダに引っ掛かって気絶していた。

ちなみに引っ掛かった時の言葉は、

竜馬「げふうつっ?!?!?」

であった。

別れ…湿っぽいのは性に合わねえ!! (後書き)

↳ 霊使い達の雑談

ヒータ「何で降りた先で気絶してるんだよ!!」

うるさいよ!

純粹で竜馬の顔も見れなくなってる子が!!

ヒータ「あ、あれはただ…あの…その…」

エリア「それにしてもまさかアウスがああなるなんて…」

アウス「エリア?その事は言わないようにと言ったはずでしたが?」

エリア、アウスに連れて行かれる。

何をやってるんだか?

ウィン「でも意外だったよ」

確かに。

っと今回の締めは…エリアだな。

ウィン「さつき連れてかれちゃったよ?」

じゃあ1人飛ばしてヒータで。

ヒータ「ああ、闇を狩る少年続くぞ。竜馬の顔を見たいのに!!」

難儀だよなあ…

ようこそ

荘へ！！…何人かは分かるかな？

side???

「うん…今日も良い天気かな？」

目が覚めて私はベッドから降りカーテンを開けました。

…っへ！？

ゆの「実は、ベランダに子供が引っ掛かってたの」
2人「ええっ!?!」

やっぱり2人共驚くよね…
でもどうしよう?

乃莉ちゃん「ところでその子供はどうしたんですか?」
ゆの「あ!そのままだった!」

乃莉ちゃんの言葉で私は思い出しました。
急いで中に入れないと!!

ゆの「宮ちゃん!手伝って!!」
宮ちゃん「ほい来た!!」

私は宮ちゃんに手伝ってもらって子供を中に入れました。
…この子って男の子?女の子?

「…んっ?」
宮ちゃん「あ、気がついたみたいだよ」

宮ちゃんが気付いて言いました。
うっん…この子はどっちなんだろう。

「っ痛てて…ここは…」
ゆの「大丈夫?」

side out

side 魔神竜馬

目が覚めて俺は驚いた。

俺を覗きこむように4人の女子高生が見ていたからだ。
「つか、？ひだまりスケッチ？の世界だな。」

竜馬「はい。とりあえずは大丈夫です」

ゆの「そっか、良かった」

俺の言葉にゆのは安堵していた。

乃莉「ところで何で君はゆの先輩の部屋のベランダに引つ掛かったの？」

乃莉が説明しにくい所を聞いてきた。

竜馬「え〜と…いつの間にか気付いたらこの部屋で目を覚ましたので…」

乃莉「そっか…」

俺の説明に納得がいったのか乃莉はそれ以上聞いてこなかった。
さらに言及されなくて助かった。

宮子「んで、君の家はどこに？」

竜馬「あ〜…ありません」

俺の言葉に3人は驚いたらしく固まってしまった。

宮子は特に何も感じないようでも普通にしていた。
高町家でも有ったよな。

竜馬「さて、とりあえず外に出るか」

そう言つて俺はゆのの部屋、201号室から出た。
あ、うめ先生みつけ！

竜馬「この世界にも？闇？があるんだよね…」

また遊戯王カードの悪魔族なのかねえ？
つて言うか野宿だよな

side out

sideゆの

…あれ！？

さっきの子は！？

ゆの「宮ちゃん！さっきの子は！？」

宮ちゃん「ん？さっき外に行つたよ？」

私達が固まっている間に外に行つたのかな？

と、とにかく追いかけないと！！

私は急いで玄関を開けました。

「あだあつっ！？」

ゆの「えっ？あつっ！ごめんなさい！！」

私が勢いよく玄関を開けるとさっきの子が立っ
ていて玄関がぶつか
ってしまいました。

うう、痛そう。

「何かあつたんですか…」

涙目で私に聞いてきました。

罪悪感が…

ゆの「えっと、君これからどうするの？」

「普通に野宿でも」と

野宿！？

ゆの「そんなの危ないよ！」

「と言われても家は無いし…」

うっん…どうしよう？

宮ちゃん「ひだまり荘に住むと言うのはどうでしょうか？」

「確か男子禁制のはずでは？」

ゆの「男の子だったの！？」

私の言葉に男の子はショックを受けたようでした。
気にしてたのかな？

「うっ…俺は男っぽく無いってことですか？」

宮ちゃん「どっちかって言う则可愛い方が強いかな？」

ゆの「宮ちゃんそれとどめ！！」

宮ちゃんの言葉を聞いて男の子はさらに落ち込んでしまいました。
ど、どうしたら？

「とりあえず、俺は行きますよ」

「あれ？ひだまり荘に子供がいる」

男の子がひだまり荘から出ようとしていると大家さんがいました。

ゆの「大家さん、この子家が無いそうなんです」
大家さん「はっ？？どついう事？」

side out

side 魔神竜馬

…なんだろう。

高町家と同じ事が起こりそうな気がする。
とりあえず行くか…

ゆの「宮ちゃん！その子押さえといて！！」

宮子「合点承知！！」

竜馬「えっ！？ちよっ！？」

ゆのの言葉で宮子が俺を羽交い絞めにした。
何気に宮子は力が強いからなあ。

ゆのは大家に俺の事を説明し始めた。

乃莉「何やってるんですか？宮子さん」

なずな「さっきの子ですか？」

いつの間にか乃莉となずなが来ていた。

宮子「いや、この子が野宿をするって言ったらゆのっちが反応しち
やっ…」

乃莉「そうなんですか…」

そうこうしているうちに大家への説明が終わったらしくゆのが戻っ
て来た。

大家「ゆのちゃんから話は聞いたよ。家が無いんだって？良いよ良いよ、ひだまり荘に住んじやいな」
竜馬「軽っ!!」

大家の言葉に俺はビツクリした。
だってひだまり荘は男子禁制のはずだぞ!?

ゆの「という訳で私の部屋において」

…なんだろう逆らわない方が良い気がしてきた。

竜馬「…はい。よろしくお願いします」

こうして俺はひだまり荘に住む事になった。

ゆの「そう言えば君の名前は？」

竜馬「俺の名前は竜馬。魔神竜馬です」

まあ、主要キャラの近くにいた方が楽かな？
俺はそう思い込むことにした。

ようこそ

荘へ!!! 何人かは分かるかな? (後書き)

↳ 霊使い達の雑談

ウィン「ひだまり荘って女子寮なの?」

俺はそうだと思っている。

エリア「確かに男子禁制とは書かれてましたし…」

アウス「竜馬さまが子供の姿だったからでしょうね」

じゃなきゃ今頃…

ゆの「ベランダに男の人が!!! 通報しなきゃ!!!」

竜馬、警察に連行。

なんて事になってたかもな。

ヒータ「って言うかお前なら絶対にやるだろ」

正解だ!!

正解者にはこれをプレゼント!!

ヒータ「なんだよこの紙袋…は…// // //!!??」

ウィン「何が入ってたの?」

それは秘密かな？

ヒータ「当たり前だ！！これ全部もらっても良いのか？」

当然だ。

今回の締めは…前回やらなかったエリア！！

エリア「やらなかったのでは無く、やれなかったなんです…」

気にすんな！！

エリア「はあ、闇を狩る少年続きます。…ヒータは何をもらったの
でしょう？」

ゆの姉って結構ドジだよな？

side 魔神竜馬

沙英「…ん。竜馬はゆのの部屋に住む事になったんだね？」

竜馬「はい、何故か逆らわない方が良い気がして…」

その後、ゆのの部屋に住む事を101号室に住むヒロと102号室に住む沙英に教えに行った。

ヒロ「よく大家さんが許可したわね？」

竜馬「ゆのさんが何かを言ったみたいなんです…」

俺は首を傾げながら言った。

実際ゆのはなんと云ったのだろうか？

沙英「まあ、何はともあれよろしくね」

ヒロ「たまにご飯を食べに来てね」

竜馬「はい！ありがとうございます」

そう云って俺は部屋を出た。

ん？というか今日は何曜日なんだ？

ゆの「あ、説明終わった？」

竜馬「はい。2人共優しい方ですね」

階段を上がるとゆのが部屋から出て来るところだった。

俺はヒロと沙英に思った事を言った。

ゆの「うん！2人共良い先輩だよ」

竜馬「そうですね。ところで今日は何曜日なんですか？」

俺は先程浮かんだ疑問を聞いた。

事実、曜日が分からないと行動しづらいのだ。

ゆの「今日？え〜と…日曜日だよ？」

竜馬「ありがとうございます」

日曜か…

まあ、修業は平日にやればいいから明日からだな。

ゆの「あ、そうだ竜馬君。何か必要なものってある？」

竜馬「ええまあ、一応ありますね」

この世界に来た時に持っていた物は全デッキと今着ている服、そして無々だけだ。

日用品を買いに行かないとな。

ゆの「じゃあこれから買いに行こうよ」

竜馬「良いんですか？」

俺はつい聞き返してしまった。

突然だったからなあ。

ゆの「良いよ良いよ一緒に行きよう！」

竜馬「じゃあご一緒させていただきます」

そして俺は買い物に行く事になった。

ゆのは何を買うに行くんだろう？

side out

side ゆの

私は竜馬君と一緒に買い物に行く事になりました。
なんだか弟が出来たみたいで嬉しいな。

竜馬君「ゆのさんは何を買いに行くんですか？」

ゆの「私？私は…何も考えてなかった」

私の言葉に竜馬君は笑いました。

そこまで笑う事無いのに」

竜馬君「す、すみません。でも、ゆのさんは優しいんですね」

私が頬を膨らませて竜馬君を見ると竜馬君は謝って来ました。
姉弟ってこんな感じなのかな？

ゆの「良いよ。じゃあアイムホームに行こうか」

竜馬君「分かりました」

side out

side 魔神竜馬

アイムホームか」

実際アニメを見ていてどんな店か気になってたんだよね。

竜馬「確か…妖精が売っているとか」

ゆの「竜馬君アイムホームに来た事があるの？」

俺の言葉にゆのが反応した。

結構小さな声だったと思うんだが…

竜馬「いえ、ちょっと聞いたことがあるだけです」

ゆの「そう?…あ、そうだ竜馬君。一緒に住むんだから私の事を姉ちゃんって呼んでよ」

やっぱりゆのの性格が多少違う気が…

精神年齢は俺の方が上なんだがなあ。

竜馬「分かりました。えっと…お姉ちゃん」

ゆの「なあに? 竜馬。あ、敬語は止めていいよ」

いきなりゆのが呼び捨てに変えてきた。

って言うかお姉ちゃんは流石に恥ずかしい。

竜馬「呼び方をお姉ちゃんじゃなくてゆの姉で良いかな?」

ゆの姉「うん! 良いよ!」

ギリギリでゆの姉が限界だったので良かった。

弟がほしかったのかな?

ゆの姉「あ、着いたよ」

竜馬「結構大きいんだね…」

想像していたよりアイムホームは大きかった。

もうちょい小さいかと思ってたんだけど予想外だな。

ゆの姉「それじゃあ、買い物に行こうか!」

竜馬「うん!」

そして俺とゆの姉は俺の日用品を買いにアイムホームに入って行った。

ちなみに金は俺が出したよ？
アースラで手伝いをして給料は貰っていたんだ。

ゆの姉って結構ドジだよね？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「そう言えば前回の締めってあたしだったような気が…」

ごめん！

素で間違えたの！！

だから嫌いにならないでください！！

ヒータ「マジ土下座してるぞ…」

エリア「でも間違えたのはダメですよ」

アウス「謝っているので良いのでは？」

ウィン「じゃあ、ケーキをくれたら許してあげる」

そんなものでよければ幾等でも！！！！

エリア「ホールケーキが大量に！？」

アウス「こんな時に作者の力ですか…」

嫌われたくないんだよ！！

俺はとにかく人に嫌われるのが厭なの！！

今回の締めはウィンです。

ウィン「ケーキをくれたから許してあげるよ 闇を狩る少年続くよ

）。えへへへ、ケーキ美味しい」

ケーキを食べる姿も可愛いなあ。

俺の知らない力とゆの姉の忘れ物（前書き）

孝様よりおかしいと指摘があったので今回の話で説明をしようと思います。

指摘されて初めて気付きました。

今後もおかしい点があった時は教えてくださると助かります。

俺の知らない力とゆの姉の忘れ物

side クロノ・ハラオウン

エイミィ「あ、クロノ君クロノ君！竜馬君がアースラに寝泊まりしていた時に取ったデータが解析されたよ」

クロノ「見せてくれ」

？虚無と無限？を普通に扱える理由や、彼の異常な魔力量の理由が分かるかもしれない…

そう思いながら僕は竜馬のデータを見た。

クロノ「？…どういう事だ？これは」

エイミィ「不思議でしょう？彼、竜馬君は毎日夜中の12時に魔力量が元の量に戻っているの」

毎日夜中の12時に魔力が回復する！？

彼のレアスキルなのか？

だが彼は何も言わなかった。

知っていて言わなかったのか知らなかったのか…

クロノ「まあ、どちらにせよ彼は要注意人物なのかもしれないな…」

僕はそう結論付けて仕事に戻った。

side out

竜馬のレアスキル。

それはミステス、坂井祐二の所持している宝具。

零時迷子によく似たレアスキルだった。

しかしその事を竜馬は知らない…

side 魔神竜馬

…何だろう？

重要な話があったような気が…

無々『どうかしたのですか？』

竜馬『いや、気のせいだろう。そろそろ止めるか『転身』リリース
！』

そう言つて俺は元の姿に戻つた。

さて、やることも無いしゆの姉の部屋で絵でも描こうかな…

？ひだまりスケッチ？の世界にいますのでスケッチブックを買つて来たのだ。

竜馬『ただいま…って誰もいないよな』

無々『お帰りなさい。マスター』

俺の言葉に無々が反応し答えてくれた。

竜馬『ありがとう無々。ただいま。そしてお帰り』

無々『ただいまです。マスター』

俺は無々にもお帰りと言つた。

そして俺は部屋に入つて行つた。

無々『マスター、どうやらゆのさんがお弁当を忘れて行つてしまつたようです』

竜馬『…みたいだな』

俺と無々は目の前に置いてある弁当を見つけて言つた。

竜馬「仕方が無い。届けるか」
無々『時間ももうすぐお昼ですからね』

そう言つて俺は弁当を手に取り部屋を出た。
ついでにスケッチブックも持つて行つた。
何か面白い物があるかもしれないからな。

side out

side 宮子

やっとお昼になつた

あたしは伸びをしてゆのつちの所に向かつた。

宮子「どうしたの？ゆのつち」

ゆのつち「あ、宮ちゃん。実はお弁当が見つからないの。家に忘れ
ちやつたのかも…」

ゆのつちはカバンを探すのを止めて言つた。

じゃあ今日は学食かな？

そんな事をあたしが考えていると教室のドアが開いた。

竜馬「ゆの姉、弁当忘れたよ」

宮子「おお、竜馬！」

ドアを開けて入つて来たのは竜馬だった。

ゆのつちは竜馬が来た事に驚いていた。

ゆのつち「竜馬！？どうしたの!？」

竜馬「ゆの姉、これ忘れてつたでしょ…はい」

そう言つて竜馬はゆのつちにお弁当を渡した。
ゆのつちが人呼び捨てにするなんて珍しいなあ。

宮子「わざわざ届けに来たんだ。えらいえらい」

あたしは竜馬の頭をなでながら言つた。

竜馬の頭つてなで心地が良いねえ。

ゆのつち「そう言えば竜馬はお昼食べた？」

竜馬「ただだけど？」

竜馬もお昼まだだったんだ。

宮子「じゃあ竜馬も一緒に食べようよ」

竜馬「良いんですか宮子さん」

んゝ何であたしには敬語なんだろう？

別に普通で良いのに。

宮子「良いよ良いよ一緒に食べよう。それとあたしに敬語はいらな
いよゝ」

竜馬「分かった。えっと…みや姉」

あたしもお姉ちゃんになつちやつた？

まあ、いつか。

side out

side 魔神竜馬

つい言つちやつたけど大丈夫だよな？

女の子を呼び捨てにするのは小学生位が限界なんだ。

精神年齢が18歳だから辛いんだよ。

ゆの姉が風呂から出る時は部屋の外にしているようにしているんだから…

竜馬「でも、俺は弁当なんて持ってきてないよ?」

みや姉「大丈夫。やまぶき高校には購買があるから」

みや姉が言った。

原作でそこまで見てなかったなあ…

まあ、今助かるから良いか。

竜馬「じゃあ、俺ちょっと買いに行つて来る」

ゆの姉「あ、じゃあ私が案内するよ」

そう言つてゆの姉が立ちあがった。

うっかり買いに行くなんて言っただけど場所を知らなかったので助かった。

ゆの姉「行こうか竜馬」

竜馬「うん!!」

side out

sideゆの

私は竜馬と一緒に購買に来ました。

やっぱり学食と違って人がそこまで多くないみたいです。

ゆの「あそこの受付で買ってくるんだよ」

竜馬「分かった行つてくる」

そう言つて竜馬はお昼を買いに行った。

私が待っていると向こうから沙英さんとヒロさんが歩いて来ました。

ヒロさん「あら？ゆのさん今日は購買で買つての？」
ゆの「いえ、今竜馬がお昼を買っているんです」

私はヒロさんの質問に答えました。
すると竜馬が戻って来ました。

竜馬「ゆの姉、お昼を買い終わったよ」
沙英さん・ヒロさん「ゆの姉!？」

沙英さんとヒロさんが突然大きな声を出しました。

ゆの「どうかしたんですか？」

沙英さん「ああ、ごめん。ちょっと驚いて…」
ヒロさん「ごめんね？ビックリしちゃって…」

私の質問に2人共答えてくれました。
でも何に驚いたのかな？

side out

side 魔神竜馬

竜馬「あ、沙英さん、ヒロさん。こんにちは」

沙英「こんにちは。竜馬はゆのの事をゆの姉って呼んでいるんだね」

俺は沙英に挨拶をした。

すると沙英が俺のゆの姉と言う呼び方について聞いてきた。

竜馬「はい、お姉ちゃんって呼んでと言われたのですが言いにくいのでゆの姉と」

沙英「ふ〜ん…私もそう呼んでくれないかな？もちろん敬語はいら

ないからさ」

沙英が突然そんな事を言ってきた。
別にかまわないけどさあ…

竜馬「分かった、これで良い？さえ姉」
さえ姉「うん。十分だよ」

何だかどんどん姉が増えているなあ。

ヒロ「あ、私も良いかしら？」

竜馬「分かったよ、ヒロ姉」

まさかヒロまで言うとは…

ヒロ姉「ありがとう竜馬」

なんだかなあ…

ゆの姉「あ、じゃあ私達は行きますね？」

さえ姉「うん、じゃあね」

ヒロ姉「またね」

そう言っただけでゆの姉は教室に戻って行った。
現状、姉が4人いる構図になってるよな。

俺の知らない力とゆの姉の忘れ物（後書き）

（霊使い達の雑談）

竜馬「今回は俺も参加するぞ」

ヒータ「!!」

エリア「あ、隠れちゃいました」

うんうん青春みたいだねえ。

ウィン「そう言えば初めて感想…と言うか指摘が来たんだよね？」

おう!!

感想や指摘を受けて俺はさらに上手く書けるように進化していくんだ!!

竜馬「指摘はなるべく来ないようにしろよ」

いやそれ無理。

俺の作品だからおかしい点はまだあると思うし…

俺は分からないけどさ…

アウス「そういう点も進化してくださいね？」

うん、そのつもり。

今回の締めは…竜馬だ。

竜馬「あいよ。闇を狩る少年続くぞ。…俺ヒータに何かしたかな？」

大丈夫だ。その内何とかなるから。

お昼を食べ終えて…

side 魔神竜馬

お昼御飯を俺、ゆの姉、みや姉で食べ午後の授業が始まった。
ひだまり荘に戻ってようかな。

「あら？ゆのさん、宮子さん。その子は誰ですか？」

そんな事を考えていると不意に声がかかった。
誰だ？…って吉野家か。

ゆの姉「あ、吉野家先生」

竜馬「吉野家さん？先生ですか。俺は竜馬です。ゆの姉がお弁当を
忘れたので届けに来たんですよ」

流石にいきなり呼び捨てはまずいし知らないふりもしないとな。

吉野家「ゆのさんの弟さんですか？」

みや姉「ううん、ゆのうちの部屋に住んでるの」

みや姉それ禁句！！

俺の予想通り吉野家は突然変な動きを始めた。

吉野家「何ですって！！ゆのさんと男の子が同棲！！ゆのさんはい
つからそんなふしだらな子に！！」

ゆの姉「そんなんじゃないですよー！！」

やっぱりややこしくなったなあ。

俺、特に出来る事無いし。

みや姉「ちなみにあたしもみや姉って呼ばれてるよ」

吉野家「宮子さんまで!？」

さらにめんどくさくなりそうな予感…

もう勝手に出てつても良いよね？

ゆの姉「どこに行くの？竜馬」

俺が教室から出ようとするとゆの姉に声をかけられた。

気付かれるつもりは無かったんだけどなあ。

竜馬「迷惑そうだからひだまり荘に戻って絵でも描こうかと」

ゆの姉「えっ？竜馬スケッチブックを持ってたの？」

俺の言葉にゆの姉が反応した。

まあ、ゆの姉がいない時に買ってきたからね。

吉野家「竜馬さん、でしたか？もし良かったら一緒に授業を受けませんか？」

竜馬「良いんですか!？」

突然、吉野家が言った。

と言つか最近では聞き返す事が多くなっている気が…

吉野家「かまいませんよ。今からやるのは美術の授業です」

竜馬「…じゃあお言葉に甘えさせてもらいます」

こうして俺は美術の授業を受ける事になった。

side out

sideゆの

竜馬が授業に参加することになりました。

吉野家先生「それでは今日は特別な参加者さんと一緒にこの私を生してもらおうと思います」

そう言つて吉野家先生は皆の真ん中に立ちました。

宮ちゃん「はい。先生その服難しいです」

吉野家先生「それじゃあこれは？」

宮ちゃんの言葉で吉野家先生は服を変えました。

さっきよりヒラヒラしてるよ

宮ちゃん「先生、さっきより難しいです」

吉野家先生「じゃあ今度はこっち」

また宮ちゃんの言葉で吉野家先生は服を変えました。

今度の服はさらにヒラヒラが増えていきます。

宮ちゃん「先生、何かの嫌がらせですか？」

吉野家先生「そんな！！難しいだなんてこれはもう脱ぐしか…」

突然、吉野家先生が服を脱ごうとしました。

流石にそれはダメエエエー！！

ゆの「止めに行かなきゃ！！」

竜馬「変わった先生だね…」

その後、私達はクラス全員で吉野家先生が脱ごうとするのを止めました。

いつもの事とは言え疲れた〜

ゆの「あれ？さっきから何を書いているの？」

私は竜馬に声をかけました。

竜馬の描いていた絵を見ると11人女の子と2人の男の子そして6人の女性と2人の男性が描いてありました。

ゆの「上手だね。この人達は誰なの？」

竜馬「俺の仲間達…かな」

それにしても女の子と女の子が多いなあ…

吉野家先生「あら、とても上手ですね」

不意に吉野家先生が声をかけてきました。
ビックリした〜

竜馬「ありがとうございます」

宮ちゃん「何々〜？どうかしたの〜？」

すると宮ちゃんも来ました。

宮ちゃん「おお、上手い！」

竜馬「ありがとう、みや姉」

side out

side 魔神竜馬

俺が描いていた絵はウィン、エリア、アウス、ヒータ、なのは、フ
エイト、アリシア、はやて、ジャバウォック、アリサ、すずか、ユ
ーノ、クロノ、桃子さん、美由紀、アルフ、プレシア、リンディ、
エイミィ、土郎さん、恭也の21人が並んでいる絵だった。

竜馬「次は…ひだまり荘の皆を書こうかな？」

俺は小さくつぶやいた。

それにしても吉野家が脱ごうとした時は驚いたなあ。
そして俺の参加した美術の授業は終わった。

お昼を食べ終えて…（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃんは絵が上手いの？」

苦手では無いとだけ言っておこう。

実際、竜馬は家事全般が出来るんだよ。

ただし！得意と言っ訳でもない。

まあ、つまりは器用貧乏だな！！

アウス「全くできないよりはマシですか…」

エリア「ヒータは家事が出来ますか？」

ヒータ「…黙秘権を発ど…」

ヒータは家事が苦手ではほとんど出来ないよ。

ヒータ「何で勝手に言うんだよ！！」

ウィン「やっぱり苦手だったんだ…」

アウス「やっぱりですね」

エリア「うんうん」

当然だろう？

ヒータ「何で全員で納得してんだよ」

いや、ツンデレは料理が得意か苦手かはっきりと分かれてるんだが、ヒータ。

お前の場合は後者で失敗してぼろぼろのクッキーを渡したりするタイプなんだ。

ヒータ「納得いかねえええ!!!」

まあ、俺の独断と偏見だけだな。

今回の締めは俺だ。

闇を狩る少年続くぞ。

？狩人？との邂逅

side 魔神竜馬

前回の授業から俺はしばしば学校に入る事が多くなった。
と言っても俺の気まぐれで行くかどうかだけだな。

竜馬「うーん：今日は魔力のコントロール練習でもするか」

無々『そうですね。マスターが魔力をコントロール出来るようになれば私が出力を抑える必要も無くなりますし』

… 戦闘訓練より最初に練習するべきだったかな？

竜馬「まあ良いか。無々。能力発動。形状は杖。結界も頼む」

無々『了解しました。能力発動。結界展開』

無々は杖に変化し結界を張った。

まあ、毎回張ってるけどさ。

竜馬「最初は魔力球の形成で良いのか？」

無々『問題ありません』

そうか、じゃあやるか。

俺は魔力を操り球状に固定をしようとした。

無々『……マスター、形状が……』

竜馬「ああ、失敗だよな」

俺が形成した魔力球は歪な形をしていた。

なのは達はこんな難しい事をしていたのか…

竜馬「でも、弱音は言ってられないよな」

無々『マスター、最初はボールの中に魔力を溜めるイメージです』

ボールの中に溜めるイメージか…

竜馬「こんな感じか？」

無々『何故か回転してますが大丈夫です』

次に俺が形成した魔力球は回転をしながらも球状をしていた。

でも1個創るのにこんなに時間がかかるんじゃ実践では使えないな。

竜馬「もっと練習しないとな」

無々『頑張ってくださいマスター』

その後も俺は魔力球を形成する練習を続けた。

side out

side はずな

なんだろう？

私はお昼を食べるために食堂に向かっています。

さつきからひだまり荘の方から光の球みたいなのが飛んでる。

はずな「不思議だなあ」

私は不意に呟きました。

誰も気づいてないのかな？

乃莉ちゃん「はずな？どうかしたの？」

はずな「えっと、あのね？ひだまり荘の方から光の球みたいなのが

飛んできたの」

乃莉ちゃんが尋ねてきたので私は答えました。
すると乃莉ちゃんはひだまり荘の方を見ました。

乃莉ちゃん「どこどこ?」

なずな「えっと確か…あれ?無くなっちゃった」

私が教えようと見ると光の球みたいなものは無くなってました。

乃莉ちゃんはちよつと悔しそうにしました。

あの光の球はなんだったんだろう?

side out

side 魔神竜馬

俺は練習を止め散歩に出かけた。

練習詰めも逆に悪い結果に繋がるからなあ。

無々『マスター?前方の人。魔力を感じます』

竜馬「前方の人ってあれか?」

無々の言葉に反応し俺は前を見た。

前にいたのは人形を手を持った1人の青年だった。

ん?どつかで見た気が…

「君が私達を狩っているんだね?」

「フリアグネ様が尋ねる必要はありません」

俺が考えていると不意に声をかけられた。

と言つかさつきフリアグネって言った?

見るとさつきまで青年が手に持っていた人形は空中に浮かびこちら

を見ていた。

フリーアグネ「そうかい？」

「そうです。こんな者にフリーアグネ様が声をかけるなど!!」

思い出した、こいつ等は紅世くせの徒ともの？狩人？フリーアグネとその燐子りんねのフリーアグネだ。

って言うか今度は？灼眼のシャナ？の紅世くせの徒とも達か？

竜馬「どちらにせよ戦うべき敵だよな」

マリアンヌ「待ちなさい。今日は挨拶だけです。あなたなど私1人で十分なのですから」

俺が戦闘態勢を取ろうとするとマリアンヌが遮った。

今回は挨拶…か。

マリアンヌ「それではフリーアグネ様、帰りましょう」

フリーアグネ「そうだね私のマリアンヌ」

そう言っつてフリーアグネとマリアンヌは歩いて行った。

結局、何だったんだ？

竜馬「…とりあえず当面の敵はあいつ等か」

俺はそう呟きひだまり荘に戻って行った。

つーか、ゆの姉達をあいつ等との戦闘に巻き込まないようにしないとな。

？狩人？との邂逅（後書き）

（霊使い達の雑談）

エリア「この世界の？闇？との初邂逅ですね」

アウス「？灼眼のシャナ？ですか」

うん。

一応、竜馬の外見とか基にしてる小説だし。

ヒータ「でもようフリアグネだっけ？あいつ弱そうだぞ？」

結構強いキャラだけだなあ。

あいつ結構色々な宝具を持ってるし…

ウィン「宝具って？」

簡単に言つと？灼眼のシャナ？に出て来る不思議な事象を起こす道具だな。

？魔法少女リリカルなのは？の世界ならロストロギアみたいな物だよ。

アウス「それを大量に持っているんですか？」

ああ、あいつはコレクターでもあるからな。

今回の締めは…アウスで。

アウス「もうですか？闇を狩る少年続きます」

人形との開戦

side 魔神竜馬

流石に翌日、攻めて来る訳は無いよな？
俺はやまぶき高校の屋上で考えていた。

竜馬「今日はここで練習しよう」
無々『何故ここなのですか？』

やっぱ気になるのか？

竜馬「実際、意味は無いな」
無々『無いんですか』

無々は呆れたようだ。
とりあえず練習するかな。

竜馬「無々。能力発動。形状は杖」
無々『了解しました。能力発動』

無々は杖の形状に変化した。
今日も魔力コントロールの練習だな。

竜馬「魔力球は一応創れるから今日は複数形成してみよう」
無々『頑張ってください』

と言われても最初は二つからだよな…
俺は目を閉じ球をイメージし魔力を固定した。

竜馬「……ッ!?……ふう……」

一瞬魔力が破裂しかけたがギリギリ抑えられた。コントロールが上手く行かずなのはデイベイン・バスター並に魔力を込めてしまったが……

無々『二つ形成するのに3分かかっています』

竜馬「まだまだ練習が足りないな……」

……そっぴや? 転身? の練習もしておかないときつくなるよな。
? 転身? してから魔力コントロールを練習してみるか。

竜馬「今回はフェンリルになるかな。ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

俺は呪文を唱えて変身した。

この姿ならリミッターが3個付いてるしまだコントロールしやすいはずだ。

竜馬「さて、……ふう!」

再び俺は魔力球を形成し始めた。

先程より魔力を抑えられているせいかコントロールがしやすく感じる。

無々『魔力球の形成に1分かかりました』

竜馬「……やっぱりリミッターが必要だよな」

ちよつと悲しいな。

確かにさつきより格段にやりやすくなったし込める魔力も抑えられたけどさあ。

竜馬「俺自身の力を俺がコントロール出来ないなんて…」
無々『頑張って行きましようマスター』

無々が慰めてくれている。

こう言う時、本当に嬉しいよ。

竜馬「そうだな。俺以外にコントロールする奴もいないしな」
無々『はい』

俺は再び魔力コントロールの練習を再開しようとした。
するとやまぶき高校の校庭に巨大な人形が出現した。

マリアンヌ「私達を狩る者に告げる。宣言通り私1人でお相手をお願いします。ここにいる人間達を殺されたくなければ出てきなさい!!」

まじで!?

今日、来やがったよ!!

ともかく殺させる訳にも行かないからな。

竜馬「無々、結界を頼む。それと形状はワイヤーにしてくれ」
無々『了解しました。形状変化。結界展開』

俺は屋上から飛び降りながら無々に言った。
結界を張っておけばまだ安心できるからな。

マリアンヌ「現れましたか…」

竜馬「ここには俺の守りたい人がいるからな」

俺はマリアンヌの目の前に着地し言った。

マリアンヌ、確かこいつはフリアグネのお気に入りで多種多様な宝具を扱う事が出来る…だったよな？

人形との開戦（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃんは何で屋上に行ったの？」

そりゃあやつぱり。

？なんとかと煙は高い所に上る？とか言うし。

エリア「なんとかつてもしかして…」

当然、竜馬の事。

ヒータ「…殺るぞアウス」

アウス「はいヒータ」

へっ？

ぎゃあああああああああ！！！！！！！！

エリア「作者さんはヒータとアウスの攻撃によって火だるまになりながら落石を避けています」

ウィン「別に言わなくてもよかつたんじゃない？」

エリア「そうですか？」

助けてくれええええええええええ！！！！！！

エリア「今回の締めは順番的に私なので言いますね？闇を狩る少年続きます」

ウィン「あ、ヒータちゃんとアウスちゃんの合体技が出た」

俺は人形遊びをする趣味は無い！！

side 魔神竜馬

俺は今、フリアグネの燐子りんねマリアンヌと対峙している。

と言っても巨大な人形だが。

とりあえず速攻で倒すか。

竜馬「…っせい！！さらに影槍！！」

俺は無々が変化したワイヤーを振って切り裂き影から槍を創りだして貫いた。

人形は両腕を失い左足に槍が突き刺さった。

マリアンヌ「思ったよりもやるみたいですね？」

竜馬「まだ余裕があるのか？」

両腕を無くしているのにどうやって攻撃をする気なんだ？

俺は訝しげに人形を見た。

マリアンヌ「ふふふ…人形が1つしか無いとは言って無いですよ？」

マリアンヌの声が聞こえたと同時に別の形の人形が大量に落ちてきた。
増援かよ。

竜馬「しゃあねえ。無々、形状変化。大鎌」

無々『了解しました。形状変化』

無々はワイヤーから大鎌に形状を変化した。

一対多ならこれだよな。

竜馬「行くぜ!!!!」

俺はそう言つて人形達の群れに向かつて行つた。

side out

side ならずな

どうしよう!?

私は今、教室にいます。

ならずな「何で誰も動かないの!?!」

教室を見回しても動いているのは私だけでした。

先生もクラスメイトも皆固まってしまつて動きません。

ならずな「それにさっきの声はいつたい?」

皆が固まってしまふ前に聞こえた声は何だったんだろう?

あの声が聞こえてから皆は固まってしまったから…

ならずな「確か校庭から聞こえたよね?」

私は原因を調べるために校庭に向かう事にしました。

怖いけど皆を元に戻すためだもん。

side out

side 魔神竜馬

俺はいつたい何体人形を切り裂いただろうか…

こいつ等対して強く無いくせに数だけが多い。

マリアン又「疲れてきたんですか？」

竜馬「…っ！誰がっ！！」

俺は近くにいた人形を鎌の一振りで薙ぎ払いながら言った。
畜生、数が多すぎる。

竜馬「だらああああ！！！！！！」

マリアン又「すぎだらけですよ」

俺の攻撃を人形達は避けた。

さらにマリアン又が投げたのか鎌に？武器殺し？の宝具？バブルル
ート？が絡みついた。

竜馬「っ！？しまった！！」

バブルルートによって鎌は奪われた。

なんてミスをしたんだ俺は！！

マリアン又「これであなは武器を失いましたね」

竜馬「…っく！！」

俺の周囲に人形達が集まって来た。

このままじゃジリ貧になってやられるだけだ！！

side out

side ならずな

私が校庭に行くとたくさんの人形と人形を切っている男の子がいました。

あの子はいつたい…

なずな「…あつ!?!」

私が考えていると男の子の持っていた鎌が鎖に絡められて投げ捨てられてしまいました。

このままじゃあの子が危ない!

なずな「ど、どうしたら?」

今、私のほかに動いているのはあの子と人形しかない。

なずな「…私が?」

無理!こんな事私には無理!!

でも…

私は男の子の方を見ました。

男の子は人形達に襲われていました。

なずな「…私がやるしかないのかな?」

今、あの子を助けられるのは動ける私しかない。

本当はすごく怖いけど…

なずな「…助けなくちゃ!!」

私はそう決意して鎌の所に向かいました。

side out

side 魔神竜馬

どうする!?!?

影爪を使うか？

いやダメだあれは無々を使用できない上に両手が変化してしまう。
ならばリミッターを外すか？

…否、まだ俺はリミッターを外した力を抑える自信が無い。

竜馬「…八方塞がりかよ」

ここは、一か八かで…

「えーい！！」

竜馬「！？」

声が聞こえたかと思うと近くに無々が投げられた。
いったい誰が…？ ってなずな！？

竜馬「まあ良い助かった。無々、形状変化。手甲」

無々『了解しました。形状変化』

無々は大鎌から手甲に変化した。

これならバブルルートで奪われる事も無い。

竜馬「無々。ゼロ・ブレイカーを2連で準備！！」

無々『了解しました。ゼロ・ブレイカー発動準備』

右手と左手の手甲に片方ずつ魔力が集束していった。
後は地道に潰していくだけ！！

竜馬「おらおらおら！！！！」

俺は人形を殴って1か所に集めて行った。

そして5分ほどかけて俺は人形を全て集め終えた。

竜馬「行くぜ!!ゼロ!...ブレイカアアアアー!!...!!」

俺は人形達に向けて左手のゼロ・ブレイカーを放った。

ゼロ・ブレイカーの範囲は10kmだった。

人形達はゼロ・ブレイカーを受けて崩れて行った。

竜馬「...後は本体だけだな」

周囲を見渡しながら俺は言った。

マリアンヌがあの中にいたとは思えないからだ。

俺は人形遊びをする趣味は無い！！（後書き）

～霊使い達の雑談～

ウィン「お兄ちゃんが危なかったね」

ヒータ「なすなニスアシスト！！」

エリア「影爪じゃダメだったのは何ですか？」

一応マリアン又は捕まえて敵の情報を聞き取ったからねえ。
影爪を使ったら捕獲じゃなくて破壊になっちゃっし。

アウス「加減をすればよいのでは？」

まだ無理なんだよね。

今回の締めは…ウィンです！！

ウィン「闇を狩る少年続く」

続く

ヒータ「キモッ！！」

仕方が無いから巻き込む！！

side 魔神竜馬

俺は右手にゼロ・ブレイカーを溜めながら周囲を見渡した。

竜馬「無々。マリアンヌをサーチ出来るか？」

無々『難しいですね。私自身がデバイスとは別物なので…』

無々は申し訳なさそうに言った。

竜馬「…気にすんな」

無々『はい』

俺の言葉に無々は短く返事をした。

とりあえず、なずなに魔法の説明をしておくか。

そう思い俺はなずなの近くに向かった。

side out

side なずな

男の子が人形を全部壊してからこちらに向かって来ました。
ちよつと怖いです…

「あの…」

なずな「は、はい！！」

男の子が喋りかけてきて私は緊張しました。

「良いですか？」

なずな「あ、大丈夫です…」

緊張を解くために私が深呼吸をしていると男の子がもう一回声をかけてきました。

今度は深呼吸したので大丈夫でした。

「…普通この空間では動けません。ですが、あなたは動いている。それはつまりあなたに魔法の素質があると言う事なんです。ここままで質問はありますか？」
「ならずな「魔法」ですか？」

説明を聞いて私はつい聞き返してしまいました。
今までにそんな事は一度も無かったからです。

「はい。そして今この世界には？闇？…つまり敵がいます。あなたは自分の身が守れるように魔法を覚えてほしいのです」
ならずな「私が魔法を覚える…？」

私が魔法を…？

side out

side 魔神竜馬

俺が魔法についてならずなに説明するとならずなは予想通り混乱していた。

まあ、これが普通の反応だよな。

竜馬「今はその事を覚えておいてください。影道」
ならずな「えっ…？」

俺はそう言って影に潜って行った。

この中からマリアンヌの影を探すのだ。

竜馬「……見つけた！！無々、ゼロから影に変更してくれ」
無々『了解しました。ゼロ・ブレイカーよりシャドウ・ブレイカーに変更します』

俺は無々に言ってゼロ・ブレイカーをシャドウ・ブレイカーに変更した。

これによりゼロ・ブレイカーで溜めていた魔力はシャドウ・ブレイカーの魔力に変更された。

シャドウ・ブレイカーは相手の影から砲撃を撃つ魔法だ。

竜馬「よし！！行くぜ！！隠密影撃！！シャドウ！！ブレイカーアアアアア！！！！！！」

普段なら影の外から撃つんだがマリアンヌに見つかるわけにはいかない。なので俺は影の中から撃った。

ちなみに？隠密影撃？とはシャドウ・ブレイカーの決め台詞みたいなものだ。

マリアンヌ「なっ！？キャアアアアアア！！！！！！」

シャドウ・ブレイカーが当たりマリアンヌは体が半分無くなった。これなら逃げられないだろう…

竜馬「よう。もう逃がさねえぞ」

マリアンヌ「くっ！すみませんフリアグネ様」

後は捕まえて少し話してもらっただけだな。

俺はマリアンヌに近づこうとした。

すると上空から光弾が降り注いだ…マリアンヌを避けて。

この攻撃は…？レギュラー・シャープ？か！！

フリアグネ「私の可愛いマリアンヌ。帰りが遅いのでまさかとは思ったが…やはり君1人でこんな奴の所に行かせるんじゃないかね」
マリアンヌ「フリアグネ様…」

ちっ！フリアグネが来やがったか…

竜馬「仕方が無いまとめて潰す！！」

フリアグネ「今すぐにでも君を殺してしまいたいけれどマリアンヌがかわいそうだ帰らせてもらおうよ」

俺の言葉を聞いてフリアグネが答えた。

逃がさねえ！！

竜馬「逃がすか！！無々、形状変化。双銃」

無々『了解しました。形状変化』

無々はすぐさま二丁の拳銃に変化した。

俺はすぐに構えたが既にフリアグネはいなかった。

竜馬「畜生っ！！」

無々『すみません。私の変化が遅いばかりに…』

俺が地面を思い切り殴ると無々が言った。

竜馬「いや、お前のせいじゃないよ。仕方が無いなずなの所に行くぞ」

無々『ありがとうございます』

俺はな^ずなが^いた^所に向^かつた。

仕方が無いから巻き込む！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

ヒータ「畜生つあたしがいれば！！」

エリア「…学校が壊れますね」

大正解だ！！

ヒータ「うるせえ！！」

あだだだだだだだだ！！！！

アウス「関節技ですか…」

ウィン「人が曲がらない方向に腕が曲がってるよ」

冷静に見てないで助けて！！

エリア「無理ですよ」

ウィン「ごめんね？」

アウス「黙秘権を発動します」

畜生おおおおおおお！！！！

あ、俺だった。

闇を狩る少年続きま…アツーーーー！！！！

腕がああああああああああ！！！！

ひだまり荘の住人に教えよう!!

side 魔神竜馬

竜馬「とりあえずこの結界を解くので元いた所に戻ってください」

俺はなずながいた所に戻って言った。

なずな「あ、はい。わかりました」

竜馬「ああ、それと。ひだまり荘に戻ったら201号室に来てください」

俺はなずなにそう言って屋上に向かった。

と言つてもジャンプして着地するだけだが…

そして俺は5分ほど待った。

竜馬「そろそろ良いかな？無々、結界解除」

無々『了解しました。結界解除』

俺が無々に言うと、無々は結界を解除してくれた。

さて、今日帰ってからが大変だな…

side out

side なずな

私は教室に戻りながら男の子の言葉を考えていました。

ひだまり荘の201号室ってゆの先輩の部屋？

なずな「…とりあえず急いで教室に戻らなきゃ」

私はそう呟いて歩く速度を上げました。

そして私が教室に着いて席に着くと同時に皆が動き出しました。

side out

side 魔神竜馬

俺がひだまり荘の屋根の上で寝ていると放課後のチャイムが聞こえた。

もう放課後か…

竜馬「…早いもんだな」

俺は屋根の上からやまぶき高校を見た。
ちらほらと帰る生徒達が出てきていた。

ヒロ姉「あら？何をしているの？竜馬君」

竜馬「ん？あ、ヒロ姉。ちょっと日光浴をね」

見るとヒロ姉が帰って来ていた。

俺は質問に答えながら屋根から降りた。

ヒロ姉「危ないんだから気を付けてね？」

竜馬「分かってるって」

ヒロ姉と話しているとさえ姉が帰って来た。

さえ姉「あ、ただいま。竜馬」

竜馬「お帰り。さえ姉」

なんかもう2人を姉って呼ぶのに慣れたなあ…
まあ、気にしないようにするか。

乃莉「あ、竜馬君」

竜馬「乃莉さん。お帰りなさい」

さらにそこに乃莉も帰って来た。
連続で帰ってくるんだよな。

竜馬「後は…ゆの姉、みや姉、なずなさんですね」
乃莉「みたいだね」

俺の言葉に乃莉が答えた。

聞いたつもりは無かったんだが…

ゆの姉「あ、ただいま竜馬」

みや姉「ただいま」

竜馬「お帰り。ゆの姉、みや姉」

そんな事をしているうちにゆの姉とみや姉が帰って来た。

…あれだ、噂をすれば影ってやつだ。

なずな「あ、竜馬君」

竜馬「お帰りなさい。なずなさん」

最後になずなが帰って来た。

魔法について悩んでいるのか多少困り顔だ。

ここで言っておいた方が良いかな？

竜馬「なずなさん、話があるんで良いですか？」

なずな「もしかして、授業中にあつた事？」

俺はなずなの問いに頷いた。

ひだまり荘の住人全員に教えた方が楽かな？
なずな「内緒事とか苦手そうだし…」

竜馬「すみませんが皆さんを呼んでくれませんか？一応皆さんにも説明をしたいので」
なずな「分かりました…」

そう言ってなずなはケータイを取り出した。
俺も準備をするかな。

ひだまり荘の住人に教えよう！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウイン「なずなちゃんに魔法を教えるんだね」

エリア「ひだまり荘の皆さんにも教える意味はあるんですか？」

んゝなずなつてさ、内緒話とか苦手そうないメージがあるんだよね。だから少しでも事情を知っている人を増やそうかと思ってるね。

ヒータ「人の事を見てはいるんだな」

アウス「意外ですね」

いんや、これはただの俺の憶測。

だから違うかもしれないの。

まあ、こんな所で今回の締めは…アウスね。

アウス「憶測ですか…闇を狩る少年続きます。確信は無いんですか？」

自信が無いからそこまで無いね。
でも頑張るからね？

ひだまり荘大会議！！

side 魔神竜馬

俺が色々と準備をしているとひだまり荘の住人が全員集まっていた。意外と速かったな。

ゆの姉「何かあったの？竜馬」

竜馬「ああ、皆さんに教えた方が良さそうだったからね」

俺の言葉に全員は顔を見合わせた。

さて、教えるかな。

竜馬「俺は、…魔法使いです」

俺がそう言うと全員が頭上に？マークを出していた。

まあ、当然だな。

みや姉だけ普通にしていたけど…

ゆの姉「えっ？魔法使い？」

さえ姉「まさかそんな…ありえないでしょ」

これが普通の反応だよな。

でも…

竜馬「なずなさん。あなたは今日、実際に見たでしょう？」

4人「……えっ!？」

なずな「あ、はい…」

やはりと言うか当然と言うか…

俺の質問にみや姉以外の全員は驚いた。

みや姉「ねえねえ、竜馬は魔法を使えるの？」

竜馬「一応ね。無々、能力発動。形状は杖」

無々『了解しました。能力発動』

みや姉が聞いてきたので見せる事にした。

無々が喋った時は全員驚いていたけど。

ヒロ姉「杖…？」

乃莉「腕輪が喋った…」

全員が驚きの余り固まっていた。

何人かが小さく呟いていたが…

竜馬「次に…ふっ！」

俺は魔力球を形成した。

暴走させるわけにはいかないので魔力は抑えているけど…

なずな「これって…」

乃莉「なずな？もしかして見た事があるの？」

なんか言ってるけど聞けない。

集中を切らすとすぐに消えてしまうからだ。

なずな「うん。昨日ひだまり荘の方で飛んでいたのを見たの」

乃莉「ああ、これを見たんだ」

そろそろ消しても良いかな？

なんか精神的に来るんだよね。

竜馬「…ふう。疲れた」

みや姉「あ、消えちゃった」

俺が魔力球を消すとみや姉が反応した。

面白かったのか？

さえ姉「…それで？どうして魔法の事を教えてくれたの？」

竜馬「実は…なずなさんに魔法の素質があるんですよ」

俺はさえ姉が聞いてきたので本題に入った。

実際にはあるはずが無かったんだがなあ。

ゆの姉「なずなちゃんに魔法の素質が…？」

竜馬「うん、だから自分の身を守るだけの魔法を教えようと思ってね」

まだこの世界には？闇？がいるからな。

乃莉「そんな危険な事が起こるの？」

竜馬「はい。あ、ゆの姉達は結界に入れないから安全だよ？」

だからこの事はなずなだけに教えればよかったんだが…

side out

side なずな

私が魔法を…

学校でも…あれ？

なずな「あの時にいたのは銀色の髪をした男の子だったよ？」
竜馬「ああ、それは俺の魔法ですよ」

魔法って何でもありなのかな？

でも私が結界に入っちゃったら危ないし…

なずな「…分かった。私、魔法を覚える」

私が出身の身を守るためにも。

それに毎回竜馬君に助けてもらう訳にはいかないしね。

ひだまり荘大会議！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

今回も別に戦闘は無かったな。

結構、人間の心情風景は書きにくい。

エリア「それは、まあ…人間ですから」

ウィン「難しく当たり前だよ」

ヒータ「私は何も言わねえぞ」

アウス「技術を上げてください」

なんか予想通りの答えだ。

今回の締めは…エリアだよ。

エリア「分かりました。闇を狩る少年続きます。この場所では普通に書けるんですね」

まあね、霊使い達だし。

魔法の才能：ありえないよな。（前書き）

え、昨日は色々あってあんな駄文になってしまいました。

これからもたまにあるかもしれませんがよろしくお願いします。

魔法の才能：ありえないよな。

side 第3者視点

ひだまり荘の住人に魔法の事を教えてから数日が経った。
結論から言つとなずなの魔法の才能は異常だった。

1日目

竜馬がなずなに魔力を流し魔力の感覚に馴らした。
なずなは2回目で魔力を感じ取り放出できるようになった。

2日目

魔力球の形成の特訓。
無々のアドバイスによりなずなはすぐに魔力球を5個同時に形成した。
竜馬はその日枕を濡らした。

3日目

障壁の形成。
なずなは魔力障壁を創る事が得意なようで練習はすぐに終わった。
ちなみに竜馬はこの日、フェニックスの姿をとっていた。

4日目

魔力球の形成の復習。
なずなの魔法の復習を行った。
いつの間にか10個同時に操っていた。
この日も竜馬は枕を濡らした。

side out

side 魔神竜馬

… はずなに魔力コントロールで負けた。

はずな「ど、どうしたの？」

竜馬「いえ、別に何も…」

無々『マスターは魔力コントロールが苦手で魔力球を2個創るのが限界なんです』

ちよっ！？無々!？

ごまかしたのに無々が勝手に言ってしまった。

はずな「えっと、ごめんなさい…」

竜馬「気にしないでください…」

… 落ち込んでても仕方が無いよな。

とりあえず今日の訓練をするか。

俺は自分にそう言って立ちあがった。

竜馬「じゃあ今日は障壁の訓練を復習します」

はずな「はい」

俺の言葉になずなは答えた。

と言っても、はずなは魔力障壁をすぐに形成できるだろうけど。

はずな「… 出来ました」

竜馬「え〜と… サイズも魔力も充分。強度の確認のため殴りますね？」

俺が聞くとはずなは頷いた。

魔力を少しだけ込めて…

竜馬「つせい!!」

思い切り障壁を殴った。

なずな「きゃあっ!」

竜馬「つて〜…うん。強度はばっちりですね」

なずなの創った障壁は俺の魔力を少し込めたパンチではびくともしなかった。

全力なら割れるかもしれないが強度確認が目的だからこれで充分なのだ。

なずな「竜馬君。手、大丈夫?」

竜馬「大丈夫ですよ。今日の訓練はここまでです」

俺はなずなに言った。

なずなは俺の手を少し見ていたが部屋に戻って行った。

竜馬「さて、何してんの?ゆの姉、みや姉」

みや姉「むくばれてましたか」

ゆの姉「ちよつと気になっちゃって…」

俺はひだまり荘の201号室から隠れているつもりで2人に言った。ほとんど丸見えだし訓練中も「痛そう」とか聞こえたからな。

竜馬「まあ、無々に結界張ってもらわなかったのが悪いんだけどさ…」

無々「次からは張りましようか?」

竜馬「いや、別に良いよ内緒にしているわけじゃないし」

ジャンプしながら俺は無々にそう言って201号室のベランダに着地した

ゆの姉「やっぱり凄いな。私も使えたら良いのに…」

竜馬「それは…その…」

ゆの姉には魔法の素質は無いはずだからなあ…

マリアンヌの時も動いてなかったみたいだし。

竜馬「…ごめん」

ゆの姉「あ、気にしなくて良いからね!？」

魔法は素質が無いと無理なのだ。

みや姉も素質は無いみたいだし…

みや姉「ねえねえ、早くヒロさんの所に行こうよ」

ゆの姉「え…あ、うん。行こう竜馬」

ゆの姉が俺に手を差し伸べて言った。

忘れていたけど今日はヒロ姉の所で皆で晩ご飯なのだ。

そして俺、ゆの姉、みや姉は101号室に向かった。

side out

side? 狩人? フリアグネ

…ふふふ。

マリアンヌの回復も終わったしそろそろ彼と戦おうかな。

マリアンヌをあんな目に合わせたお礼もしないと…

フリアグネ「ふふふ、はははは! 待っているんだね! !マリアンヌを傷つけた罪は重いよ! ! ! ! !」

あの私達を狩る者へ！！
彼さえ殺してしまえば何でもできるんだ！！！！

魔法の才能：ありえないよな。（後書き）

（霊使い達の雑談）

最後の方で出したフリアグネが無理やりすぎた…

「当たり前です！フリアグネ様はもっと上品なんですから！！」

ヒータ「あ、マリアン又だ」

ウイン「誰が呼んだんだろう？」

俺では無いぞ？

アウス「あ、私です。たまには敵でもと思いまして」

エリア「それでマリアン又を？」

無茶苦茶だな。

マリアン又「どちらかと言うとあなたの文の方が無茶苦茶ですけど」

痛い所を突いてくるなあ。

仕方ないじゃん、フリアグネなんて最初の方の敵なんだから喋り方なんて忘れたよ。

マリアン又「言い訳ですね」

ぐうぐうっ…

こ、今回の締めは…ヒータです。

ヒータ「あきらめる事実なんだから、闇を狩る少年続くぞ」

もっと文才が欲しい…

？狩人？VS？闇の狩り手？…戦闘は冷静に対処しろ！！

side 魔神竜馬

昨日、ヒロ姉の所で晩ご飯を食べている時に窓辺に人形が現れた。その人形が言うには…

人形「明日の正午、河原にて戦ってもらおうよ。覚悟をしておくんだね」

伝言を伝えた後、人形は動かなくなりゆの姉が貰っていた。

普通は気味悪がるだろ…

そして今日、俺は河原に向かった。

竜馬「正午まであと…10分か」

少し早く来すぎたか…

実際、俺はフリಾಗグネの戦い方を断的にだが覚えてはいるのだ

例えば？ダンスパーティ？で人形を爆破する。

もしくは、？レギュラー・シャープ？による攻撃か…

それぐらいしかフリಾಗグネには攻撃法は無かったはずだ。

“紅世の王”は俺にはいないので？トリガーハッピー？は意味は無いしな。

フリಾಗグネ「おや、もう来ていたのかい。余ほど早く死にたいらしいね」

竜馬「いいや、俺は死なない。俺がお前達を全て殺すんだからな」

考え事をしている間にフリಾಗグネが来た。

近くにはマリアンも飛んでいた。

竜馬「無々、能力発動。形状は日本刀」
無々『了解しました。能力発動』

無々は日本刀に変化した。

次に…

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。
不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死
鳥転身』」

俺は呪文を唱えてフェニックスに変身した。

深く考えずにこの姿になったが…

竜馬「？灼眼のシャナ？のフリಾಗグネ戦だよな…」

俺は苦笑しながら言った。

ま、ふざけるのはここまでだな。

竜馬「…行くぞ、フリಾಗグネ。お前を殺す！」

フリಾಗグネ「出来るものならね！！」

俺とフリಾಗグネ…？狩人？と？闇の狩り手？の戦いが始まった。

とにかく速攻で決める！！

竜馬「ったあああああ！！！！」

フリಾಗグネ「甘いよ」

俺が飛びあがり斬りかかるとフリಾಗグネは横に飛び避け？レギュラ
ー・シャープ？を放った。

斬りかかった姿勢で硬直してしまっており俺は避ける事が出来ない。

竜馬「つちい！！守護天翼！！」

俺は守護天翼を発動し身を守った。

これは周囲が見えなくなるから多用したくないんだが…

フリアグネ「ふ〜ん：そんな技があるんだ」

守護天翼を開くとフリアグネは移動していなかった。

もう少し注意深く行くか。

竜馬「無々、形状変化。双銃」

無々『了解しました』

無々は日本刀から双銃に変化した。

フリアグネ「変わった武器を使うんだね？」

竜馬「武器じゃねえ！！俺の、仲間だ！！！！」

俺はフリアグネの言葉に対して怒鳴りながら双銃を放った。

それに対してフリアグネは？レギュラー・シャープ？を使い弾丸を全て防いだ。

フリアグネ「すごいねただの弾で私の？レギュラー・シャープ？をここまで減らすなんて…」

フリアグネは軽口を言いながら俺に3分の2程欠けたトランプを見せた。

あれが？レギュラー・シャープ？の本体か。

竜馬「ちっ!!」

フリアグネ「私からも行くよ」

フリアグネはトランプをしまいハンドベルをとりだした。
「ダンスパーティー?かよ。」

でも、人形はマリアンヌだけのはず…

フリアグネ「その反応を見るとこれは知っているみたいだね」

竜馬「ああ、だがここには人形は無いぞ」

俺が言うとフリアグネは笑いだした。

フリアグネ「はははは、それはどうかな?」

フリアグネが指を鳴らすと不意に上空からマネキンが大量に落ちてきた。

マジかよ…

竜馬「めんどくせえな…」

まあ、全部避けてあのベルを壊せばいいんだけど。
さっさと撃ち抜くか。

フリアグネ「さあ、これからどうするんだい?」

竜馬「関係無い。お前を殺せば終わるのだからな!!」

俺は言いながら双銃を放った。

と言ってもマネキンによって簡単に防がれるが…
フェニックスじゃ攻撃力不足だな。

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

俺は呪文を唱えフェニックスからフェンリルに変身した。

竜馬「無々、ゼロ・ブレイカーを2連で準備してくれ」
無々『了解しました。ゼロ・ブレイカー発動準備』

双銃の片方ずつに魔力が集束していった。
あとは影の中で時間を稼ぐか…

竜馬「影道」

俺は影に潜った。

一心攻撃は出来るしな。

フリアグネ「影に潜るのか…」

竜馬「影槍。影槍！影槍！！」

フリアグネが何か呟いていたが気にせず攻撃を放った。
攻撃によってマネキンの何体かは破壊できたが全然減ってはいなかった。

竜馬「やっぱり無駄だよな」

無々『マスター魔力集束を始めてから2分が経ちました』

もう経ったのかよ…

でもこの程度じゃ足りないな。

俺はその一瞬のすきを突きゼロ・ブレイカーを放った。

？狩人？VS？闇の狩り手？…戦闘は冷静に対処しろ！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

ウィン「お兄ちゃん、の砲撃は当たったの？」

さあ？

明日になったら決めるよ。

ヒータ「今日決めるよ！！」

いや、早く決めてもねえ…

エリア「それもそうですが…」

アウス「今日決めても書けないから良いのでは？」

さっすがアウス！

よく分かってるうー

今回の締めは…ああ、俺が
闇を狩る少年続きます。

最近、デッキをさらに改良したんだ。

ヒータ「と言う事は出すんですね？」

うん。

絶対に出す！！

決着、そして…

side 魔神竜馬

竜馬「…やったか？」

俺はゼロ・ブレイカーが着弾した所を見ながら言った。
…あれ？

竜馬「これって負けフラグな気が…」

フリಾಗグネ「よくも…」

俺が考えていると不意に煙の中から声が聞こえた。
あの砲撃で無事なのかよ…

竜馬「ん？フリಾಗグネ1人？マリアン又がいないな」

フリಾಗグネ「マリアン又は…マリアン又は…お前の所為でえええええ
えつつ！！！！！！！！」

フリಾಗグネは叫んだと思っいたらいきなりナイフを取り出し斬りかか
って来た。

あんなものあつたか！？

side out

side 第3者視点

ここでフリಾಗグネが無事だった理由を答える。
時間をゼロ・ブレイカーが着弾する直前まで戻す。

～～～回想～～～

目の前に迫る砲撃。

突然の事にフリアグネは動けなかった。
するとマリアンヌはフリアグネの前に行き我が身を盾にした。

フリアグネ「!?マリアンヌ!」

マリアンヌ「フリアグネ様：勝ってください」

フリアグネは驚愕していた。

マリアンヌがいち早く動けるようになったのは主人を思ったためか…
そしてマリアンヌはゼロ・ブレイカーを受けて消えてしまった。
しかしフリアグネには砲撃はほとんど届いてなかった。

フリアグネ「マリアンヌ……」

フリアグネはマリアンヌが消えた場所を見ていたが不意に思い返した。

なぜマリアンヌが消えてしまったのかを…

そしてフリアグネは気付いた。

目の前にいる少年の所為でマリアンヌが消えてしまったのだと…

フリアグネ「よくも…」

その言葉には今まで以上に怨みや憎しみが籠められていた。

side out

side 魔神竜馬

俺はフリアグネの攻撃をかわしながら確認をしていた。

?灼眼のシャナ?の小説や漫画、アニメでもこんなナイフは出ていなかったからだ。

フリアグネ「うわあああああああ!!!!!!」

フリアグネは叫びながらナイフを振り回しているだけなので避ける事は容易いのだが…

流石に素直に斬られるわけにもいかないしな。

竜馬「…危なっ！？」

フリアグネ「ちっ！！」

俺が避けた先にさらに斬りかかって来たので驚いたが回避はできた。しかしナイフの効果が分からない以上うかつに攻められねえな…

無々『マスター！ゼロ・ブレイカーが暴発しそうです！！』

竜馬「なっ！？」

無々の言葉に驚き右手に持つ銃を見た。

溜めていた時間は大体…20分ぐらいだったか？

とにかくゼロ・ブレイカーが異常に魔力を持っていた。

フリアグネ「すきありだっっ！！」

竜馬「っ！？しまった！」

俺の注意が逸れた事を好機チャンスと見たのかフリアグネがさらに斬りかかって来た。

そして俺は左腕に攻撃を受けた。

竜馬「っ！？」

フリアグネ「ふ、ふふふ…はははは！！！斬られたな！これでお前は終わりだ！！」

斬られた部位が突然燃える様な感覚に包まれた。

決着、そして…（後書き）

（霊使い達の雑談）

ヒータ「おいつ作者ああ！！」

やっべ。

逃げねえと…

アウス「逃がしませんよ？」

へっ？

うおおおおお！？

エリア「ああ、またですか…」

ウィン「みたいだね」

ぎゃあああああああああ！！？！？

ヒータ「おらおらおらおら！！」

アウス「まだ終わりませんよ？」

死ぬっ！

まじで死ぬっ！！

エリア「たぶん大丈夫ですよ。えっと今回の締めは…アウスですね」
アウス「私ですか。まだ終わってないのに…」

ほ、ほら早く締めを言って！！

アウス「はい、闇を狩る少年続きます。これで終わりだと思わない
てくださいね?」
ヒータ「そうだ!!!」

い、いやだあああああ!!!!!!!

驚愕の変化！？…何でこんな事に。

side 第3者視点

竜馬「治…癒…の焰…」

竜馬がそう言った後、竜馬の体は焰に包まれた。そして左腕の傷は治療されていった。

「おい！人が燃えているぞ！！」

「早く消さないと！！」

結界が解けていたので人が集まって来た。人々は近くの川から水を汲んでかけた。

「何だこの火は！？」

「水をかけても消えない！？」

竜馬の体を包んでいる焰は魔力を込められているため普通の水では消えないのだ。

この焰が消える時は傷や病気が全部治った時か魔力を込められた水がかけられた時のみなのだ。

「「竜馬（君）！？」」

突然、白い服の少女と黒い服の少女が大きな声を出した。

まあ、ぶつちやけるとなのはとフェイトだけど…

なのは「フェイトちゃん！！急いでアースラに連れて行かないと！！」

フェイト「う、うん!」

なのはとフェイトは結界を張って竜馬をアースラに連れて行った。

side out

side 高町なのは

竜馬君はアースラの治療室にいます。

なのは「大丈夫かな…?」

ジャバウオックちゃん「何があつたのだ?」

フェイトちゃん「私達にも分からないんだ」

ジャバウオックちゃんの質問にフェイトちゃんが答えました。

竜馬君が倒れるほど強い敵がいたのかな…

エイミイさん「ふう…検査の結果が出たよ」

エイミイさんが治療室から出てきました。

なのは「エイミイさん! 竜馬君は!?!」

エイミイさん「落ち着いて聞いてね? 検査の結果…彼、竜馬君の左腕に魔力を毒の様な物に変えている物が見つかったの。取り除こうと魔法を使っただけけどその魔法も毒に変えちゃったんだ」

魔力を毒に?

それじゃあ竜馬君はどうなるの!?!

フェイトちゃん「手術は無理なの?」

エイミイさん「竜馬君が普段の姿なら出来ただけど…」

竜馬君はフェニックスの姿のままだったけど…
それがいけなかったの!?

ジャバウオックちゃん「竜馬の今の状態は？」

エイミイさん「今は焰も消えて眠っているからもうすぐ起きるはず
だよ…」

竜馬君「なんじゃこりゃあああああああ!?!?!?!?!」

ガツシャアアアアーン!!

エイミイさんに竜馬君の状態を聞いていると竜馬君の声と何かが倒
れるような音が聞こえました。

私達は急いで治療室に入りました。

4人「……えっ?」「……」

部屋に入って私達は思わず固まってしまいました。

何故なら私達が部屋に入って見た物は…

…女の子になっていた竜馬君だったからで
す。

side out

side 魔神竜馬

目が覚めて体に違和感を感じた俺は自分の体を確認してみた。

…何これ？

視線の先には二つの膨らみ。

竜馬「いやいや待って待て。ありえないよな？うん」

まさかと思いつながら俺は自分の胸を掴んだ。

結論だけ言おう。

…柔らかかった。

竜馬君「なんじゃこりゃあああああああ！！！！！！」

俺は息を思い切り吸い込み叫んだ。

近くにあった機材？も倒れたが関係ない。

すると、ドアが開いてなのは、フェイト、ジャバウオック、エイミ

イの順に入つて来た。

4人「……えっ?」「……」

当然ながら全員固まった。

とりあえず聞いておくか……

竜馬「……誰か俺がこうなつた原因を知らないか?」

ジャバウオック「す、すまぬ。我には分からぬ」

最初に元に戻つたのはジャバウオックだった。

エイミイ「ごめん。私もよく分からないよ」

竜馬「そうか……」

エイミイも元に戻つた。

なのはとフェイトは元に戻る気配が一向に感じられない。

竜馬「……あゝエイミイ。検査を頼んで良いか?」

エイミイ「あ、うん良いよ。あ、竜馬君に教えなくちゃいけない事があるからね?」

俺はエイミイに検査を頼んだ。

俺に教える事?

竜馬「まあ、良いや。検査をしに行くぞ」

エイミイ「はいはい」

俺とエイミイは検査室に向かった。

途中、アースラの局員に見つかつてしまった。

何、これ公開処刑？

検査室に到着した時の俺の表情は耳まで赤かったらしい…

驚愕の変化！？…何でこんな事に。(後書き)

〈霊使い達の雑談〉

ウィン「……これは」

エリア「……またですか？」

やっちゃったぜ

ヒータ・アウス「………」

ウィン「ふ、2人共？」

ヒータ・アウス「よくやつ(た)(てくれました)作者!!」

おう!!

あ、今の竜馬の写真もあるけど？

ヒータ・アウス「ください!!」

エリア「見事にハモりましたね…」

そうだな。

今回の締めは…エリアだね。

エリア「え？あ、はい。闇を狩る少年続きます。竜馬さんが女の子になった写真なんてどうするんでしょうか？」

気にするな。

知らなくて良い事はいっぱいあるんだ。

エリア「は、はあ……」

もしかしてフリアグネが持っていたナイフの効果か？
やっぱり喰らうべきじゃ無かったよな。

エイミイ「うん。それが竜馬君に教えなくちゃいけない事。竜馬君
の左腕に…魔力を毒の様な物に変えている物があったの」
竜馬「魔力を毒に？」

マジかよ…

それって結構やばいんじゃない？

竜馬「…ちなみにそれは左腕だけか？」

エイミイ「え？うん。そうだけど？」

エイミイは俺の質問に不思議がりながらも答えた。
左腕だけか、ならまだ何とかかなるかな。
フェニックスが解けてなかったのが幸いだな。

竜馬「無々、形状変化。日本刀」

無々『了解しました』

無追は双銃から日本刀に変化した。

エイミイ「りよ、竜馬君！？」

竜馬「危ないから部屋の外にいてくれ」

エイミイが驚いていたが気にせず俺は言った。
流石に今やるのはスプラッタな事だからな。

エイミイ「えっ！？何をするつもりなの！？」

竜馬「言っても良いけど聞いたら部屋の外に行ってくれ」

俺が条件を出すとエイミイは頷いた。

竜馬「今から左腕を斬り落として元に戻す」

エイミイ「へっ!?!」

エイミイは俺の言葉に驚き固まってしまった。
そこまで驚く事か?

竜馬「ほら、さっさと出た出た」

エイミイ「……」

俺は固まっているエイミイを部屋の外に追い出し鍵を閉めた。
後は俺の覚悟だな……

竜馬「さて、やるか……」

息を吸い込み左腕に日本刀をあてた。
正直、すごく怖い。

竜馬「……でも、今やっておかないと後で辛いからな」

覚悟を決め俺は右腕に力を込めた。

竜馬「……せーのっ!!」

そして俺は左腕を斬り落とした。

竜馬「ぎぎ!がああああああ……」

俺は痛みの余り叫んだ。
急いで治さねえと！！！！

竜馬「治癒の焰！！」

俺は痛みをこらえながら治癒の焰を使った。
すぐに俺の体は焰に包まれ左腕の痛みも治まった。

竜馬「…ふっ」

さて、後は斬り落とした左腕から魔力を毒に変えている物を取り出すだけだな。

俺は斬り落とした左腕を持ち上げた。

魔力が毒に変えられている所為か焰に包まれていない。

竜馬「無々、魔力が変化している所を言ってくれ」

無々『了解しました。大丈夫ですか？』

無々は心配そうに聞いてきた。

竜馬「大丈夫だよ。それで分かったか？」

無々『はい。二の腕の位置で魔力が変化されています』

二の腕か…

俺は日本刀を持ち机の上に置いた左腕の二の腕の部分を斬った。

二の腕からは機械の塊のような物が出てきた。

竜馬「他にはもう無いか？」

無々『特にはありません』

そうか、とりあえずこの機械は何かに使えるかな？
俺は機械の塊を拾いながら思った。
左腕は焰に包まれて燃え尽きた。

竜馬「つと再生したか」

俺の左腕があつた場所には新たに左腕が生えていた。
まだ、微妙に毒が残っているらしく違和感を感じた。

竜馬「生えかわつた腕にも毒があるのかよ……」
無々『ですが、魔力反応におかしな点はありません』

一応、朗報なのかな。
とにかく部屋から出るか。

おおまかな原因の判明。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

エリア「結局あのナイフの効果は何だったんですか？」

簡単に言うと斬った傷から魔力や存在の力を毒に変えるって言う効果だ。

まあ、俺が考えたオリジナル宝具だけど…
絶対におかしいよな。

ヒータ「当たり前だな」

アウス「当然ですね」

ウィン「あはは…」

まあ、気にせず行ってみよう!!
今回の締めは…ウィンです!!

ウィン「うん。分かった。闇を狩る少年続くよ」

続くよ

ヒータ「だからキモイっつってんだろっが!!!!!!」

気付けば夜になっていた…早く帰らねえと!!

side 魔神竜馬

俺が検査室のカギを開けて外に出ようとドアを開けるとドアに寄りかかっていたのかエイミイ達が転がり込んできた。

竜馬「…何をやってるんだ？」

ジャバウオック「いや…エイミイが、その…竜馬が腕を斬ると」

俺の質問にジャバウオックが答えた。

状況を言つとエイミイ、なのは、ジャバウオック、フェイトの順に山になっている。

なのは「本当なの竜馬君!？」

フェイト「そんなことしてないよね!？」

…うん、うるさいな。

事をでかくしたエイミイには制裁を与えておこう。

エイミイ「あ、あの竜馬君?何で手を開いたり閉じたりしているの…?」

竜馬「それぐらい分かるよな?」

俺はエイミイの頭を掴み再びアイアンクロ を行った。

エイミイ「またあ!?!だだだだだだだだだ!?!?!?!?!?」
フェイト「痛そう…」

アイアンクロ をエイミイに行っているとクロノがやって来た。

クロノ「…君たちは何をしているんだい？」

竜馬「見て分かるように制裁だが？」

俺の言葉にクロノは呆れていた。

そこでクロノは俺の体の変化に気付いたらしい。

クロノ「…竜馬？君は女の子だったか？」

竜馬「いいや。これは偶然の産物だ。たぶん治るはず…」

ちなみにこの会話中もエイミィにアイアンクロ を与えている。

クロノはエイミィをチラと見たがすぐに見なかった事になっていた。

竜馬「で？何かあったのか？」

クロノ「いや、エイミィの叫び声が聞こえたから来てみただけだ」

結構ヒマなのか？

つと、そうだ！

竜馬「クロノ！これ、何かに使えないか確認してくれ」

俺はクロノに俺の左腕から出てきた機械の塊のような物を投げ渡した。

クロノは不思議に思いながら受け取った。

クロノ「なんだい、これは？」

竜馬「よく分からんが、魔力を毒に変える機械らしいぞ？」

俺はクロノの疑問に答えた。

クロノ「はっ！？魔力を毒に変える！？」

竜馬「おう。と言う訳で頼んだ」

俺の言葉にクロノは呆れながらも了承してくれた。
何か物分かりが良くなつて無いか？

なのは「あ、あのさ竜馬君。エイミイさんが…」

竜馬「ん？」

なのはに言われてエイミイを見るとエイミイはぐったりとしていた。
やりすぎたかな？

エイミイ「……………」

竜馬「…返事が無い。ただの屍のようだ」

ドクエのように俺は言った。

俺はアイアンクロを解除しエイミイを床に置いた。

エイミイ「ま…まだ、死んでないよ…」

何だ生きてたのか…

竜馬「つまらねえな…」

エイミイ「ひどっ！！」

エイミイは思い切り起き上がって突っ込んだ。
元気だな。

なのは「ところで竜馬君はいつまで女の子なの？」

竜馬「さあ？体内の毒が無くなるまでじゃないか？」

俺の言葉を聞いてエイミーがガッツポーズをとっていた。
何か企んでいるのか？

竜馬「おい、エイミー…」

エイミー「私やる事があるからそれじゃあねー！」

俺が声をかけようとした瞬間エイミーは素早く立ち上がり通路の向こうに駆けて行った。

…嫌な予感がする。

フェイト「そう言えば竜馬はあの世界でどこに住んでいるの？」

竜馬「ん？ひだまり荘って言うアパートだけど？」

急にどうしたんだフェイトは？

…ん？

竜馬「なあ、今何時だ？」

ジャバウオック「む？時刻か？今は…6時だな」

6時！？

連絡も何もしてないからやべえ！！

なのは「ど、どうしたの！？」

竜馬「急いでひだまり荘に戻らなくちゃいけないんだよ！！」

俺はそう言っただけで転送ポートに向かった。

プレシア「あら？竜馬？」

竜馬「ん？おお、プレシアか」

転送ポートに着くとプレシアがいた。
何故か大量の服を持って…

竜馬「その服は？」

プレシア「ああ、それは…」

リンディ「あ、間にあつたのね？」

するとリンディまで現れた。

こちらにも大量の服を持って…

竜馬「リンディも…その服は何に使った？」

リンディ「この服？それは…」

リンディ・プレシア「あなたに着せるのよ」「

リンディとプレシアは見事にハモった。

…っ！か俺に着せる！？」

竜馬「何でそんな事に！？」

俺は疑問を叫んだ。

リンディ「いえね？あなた女の子みたいな顔立ちじゃない？でも男の子だったから…」

プレシア「それで今なら女の子だってエイミィに聞いてね？」

嫌な予感の正体はこれかああああああ！！！！

やばい、早くひだまり荘に戻らないといけないのに…

竜馬「えっと…今は急いでいるか…」

プレシア「こっちの服が良くないかしら？」
リンディ「この服はどうかしら？」

聞いてねえ！！

どうする！？

A・このまま逃げる。

B・おとなしく着せ替え人形になる。

C・全部を壊す。

竜馬「って碌な選択肢が無い！！」

マジでどうする！？

B・は時間がかかるから却下。

C・も壊すわけにはいかないから却下。

こっとなったらA・の逃げるしか…

プレシア「それじゃあ最初はその服ね」

リンディ「で、次にこの服ね」

俺が逃げようと体勢を整えていると2人がこちらを向いた。
えっ？遅かった？

プレシア「逃がさないわよ」

リンディ「転送ポートの機能を停止してちょうだい」

リンディの言葉で転送ポートは機能しなくなった。
あ、これ終わったわ…

side out

sideゆの

遅いなあ竜馬。

宮ちゃん「遅いね竜馬」

ゆの「そうだね」

宮ちゃんはお菓子を食べながら言いました。

ゆの「って宮ちゃん！晚ご飯の前にお菓子食べちゃダメだよ！」
宮ちゃん「いや〜お腹が空いてつい…」

私は宮ちゃんに言いました。

竜馬早く帰って来ないかな？

side out

side 第3者視点

竜馬・プレシア、リンディに捕まり着せ替え人形状態。

エイミー・着替えた竜馬の撮影係。

フェイト・エイミーの手伝い。

なのは・エイミーの手伝い。

ジャバウォック・服を持ってくる係。

アリシア・服を持ってくる係。

アルフ・肉を食べている。

実際の所かなりカオスな状況である。

気付けば夜になっていた…早く帰らねえと…！（後書き）

（霊使い達の雑談）

今日も今日とて竜馬が女の子。

ヒータ「お、おい！竜馬が着替えた写真は！？」

アウス「ありますか！？」

ん？一応あるぞ。

えっと…シヤナのコスプレとかチャイナ服とか。

エリア「すごい物がありますね…」

気にするな。

ウィン「私も着替えてみたいなあ」

お？じゃあいつか用意するよ。

ウィン「本当！ありがとう！」

はいはい。

今回の締めは…ヒータだね。

ヒータ「ん？あ、ああ。闇を狩る少年つづきゆぜ。／／／／／」

噛んだな。

アウス「噛みましたね」

ウィン「噛んだね」

エリア「噛みましたね」

ヒータ「う、うるさいうるさい／＼／＼／＼」

シンデレレ「！！」

知り合いが帰ってくるのが遅かったら心配するよな。

side 魔神竜馬

あの後プレシアとリンディに着せ替え人形にされて2時間ほど経った。

竜馬「…もう良いか？」

リンディ「え？…ええもう良いわよ」

疲れた俺はゴスロリ服の状態で聞いた。

本当に色々着させられたよ…

なのは「あ、リンディさんその写真分けてください」

フェイト「私も…」

ジャバウオック「我にも…」

疲れて崩れ落ちている俺をよそに3人が言った。
こいつ等…

竜馬「…まあ良いや。とにかく転送ポートを起動してください」

リンディ「分かったわ。起動してちょうだい」

リンディの言葉に転送ポートが起動した。

その間、全員で撮った写真を見ていた。

エイミィ「うん…私はこの服が一番かな？」

プレシア「私としてはこっちの服かしら」

うん、気にしないようにしよう。

俺は急いで転送ポートを使用した。

side out

sideゆの

結局8時になっても帰って来なかったな…

ゆの「何やってるんだろ？竜馬」

宮ちゃん「帰って来なかったね」

私と宮ちゃんが話しているとインターホンが鳴る音が聞こえました。
竜馬が帰って来たのかな？

なずなちゃん「あ、ゆの先輩。竜馬君は…？」

ゆの「なずなちゃん。まだ帰ってきてないんだよ」

玄関を開けるといたのはなずなちゃんでした。
そっか、今日の魔法の練習をしてないんだ。

なずなちゃん「そうですか」

ゆの「もうすぐ帰ってくると思うんだけど…」

竜馬「た、ただ…い…ま…」

突然、竜馬の声が聞こえてきました。

でもどこから？

なずなちゃん「あ！ゆの先輩！あそこに…」

ゆの「え？」

なずなちゃんが上を指差したので見てみると竜馬が飛んでいました。

…何故かゴスロリ服で。

竜馬「ごめんなさい。遅くなりました」

ゆの「そ、それより竜馬！？その格好は…？」

竜馬の着ている服は明らかに女の子物…

ってあれ！？竜馬に胸がある！？

ゆの「りよ、竜馬！？女の子だったの！？」

竜馬「いや、その…時間が経てば戻るとしか…」

竜馬が説明しづらそうに言いました。

時間が経てば戻る？

なずなちゃん「えっと…竜馬君？竜馬ちゃん？」

竜馬「出来ればいつも通りの呼び方で…」

なずなちゃんが疑問を口にしました。

確かに呼び方が気になるもんね。

宮ちゃん「お？竜馬帰って来たんだ」

竜馬「あ、ただいま。みや姉」

宮ちゃんも外に出てきました。

あ、私言っただけの事があった。

ゆの「竜馬」

竜馬「ん？なに？ゆの姉」

私が名前を呼ぶと竜馬はこちらを向きました。

ゆの「…お帰りなさい」

竜馬「ああ、ただいま。ゆの姉」

竜馬は納得したように私にかえしました。
とりあえず聞きたい事が山ほどあるよ…

ゆの「ところで…何で髪の毛が赤いの？それに長くなってるし…」

竜馬「えっと…これを解くと毒で辛い事になるんだよ」

毒！？

それって危ないんじゃない？

宮ちゃん「あ、そうだ竜馬。河原でこんなの拾ったんだけど」

竜馬「ちよっ！？これ！？」

宮ちゃんが万華鏡みたいな物を竜馬に渡していました。

今日、部屋にいなかったのは河原に行ってたからなんだ…

竜馬「これは危ないので俺が管理します」

宮ちゃん「え〜。私が見つけたのに〜」

竜馬は万華鏡をポケットにしまいながら言いました。

side out

side 魔神竜馬

みや姉が拾ってきた物には驚いたぞ？

だって？リシャッフル？持ってたんだぞ？

竜馬「っーかこの服どうしよう…？」

ゆの姉「そう言えば何でゴスロリ服なの？」

俺が思った事を口に出すとゆの姉が反応した。
余り言いたくないんだけどな…

竜馬「えつとね？ある人達によって着せ替え人形にされたんだよね」
ゆの姉「その写真つてもらえる？」

…ゆの姉もか。
リンデイとかに言えばいいのかな？

竜馬「後で聞いてみるよ」
ゆの姉「よろしくね!!」

翌日、ひだまり荘前を掃除しているとさえ姉、ヒロ姉、乃莉、なず
なに出会い4人も写真を欲しがった。
…まともなのはみや姉だけか。

知り合いが帰ってくるのが遅かったら心配するよな。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

竜馬「何でこんな事に…」

気にすんな

ウィン「あ、あははは……」

エリア「見事なorzですね」

ゴスロリ服でな。

アウスとヒータは…いた。

ヒータ「アウス！写真に収めるぞー!!」

アウス「分かってます」

何かこの2人どんどんダメになってる気がする。
ま、良いか。

今回の締めは…竜馬(女の子ver)だ。

竜馬「マジかよ…」

あ、キラッ をやってね。

ちなみに強制。

竜馬「…はあ、あいよ。闇を狩る少年続きます。キラッ」

今だ…!

写真を撮れ…!

ヒータ・アウス「おう（はい）！！」
ウィン「そのためだけにやらせたんだ…」

大正解！！

まあ、面白いじゃん。

エリア「そうですけど…」

と言っ訳で続け！！

遊びに来た仲間。

side 魔神竜馬

竜馬「…はあ。いつまでこの姿なんだろうな」

俺はゆの姉の服（黄色のワンピース）を着て言った。
服に関しては何も聞かないでほしい。

なのは「竜馬君まだ女の子だったんだ」

竜馬「なのはか…」

俺が201号室のベランダに座っているとなのはが目の前に現れた。
普通、魔法は隠すものだろうに…

竜馬「んで？何かあったのか？」

なのは「ううん。ちょっと退屈だったから遊びに来たの」

退屈…か。

まあ、ジュエルシードとかが終わったら後は12月だしな…
そっぴや闇の書の情報を伝えてなかったな。

竜馬「…まあ良いか」

なのは「何がなの？」

俺は知らず知らずの内に口に出していたらしい。

竜馬「で、遊びに来たんだっけ？」

なのは「うん!!」

つってもこの世界に何かがあるかは俺もよく知らないからなあ。
河原を散歩するとかぐらいか？

なのは「ところで竜馬君？今は女の子の姿なんだからその喋り方は
ちょっと…」

竜馬「女の子っぽい喋り方をしると？」

マジかよ…

めっちゃ首を縦に振ってるし。

竜馬「…はあ、分かったよ…じゃなくて、分かったわ。これで良い
？なのちゃん」

なのは「／／／／／はっ！う、うん！！大丈夫だよ！！」

何か挙動不審だったけど…

ちなみに呼び名を？なのちゃん？と言ったのは女の子っぽさをイメ
ージした結果だ。

竜馬「それでどこに行く？お…じゃなくて、私もこの世界はよく
知らないの」

なのは「うん…じゃあ一緒にお散歩しよう」

なのはは少し考えて言った。

お散歩ね。

竜馬「それじゃあ行こうかなのちゃん」

なのは「うん。竜馬ちゃん」

ちゃん付けかあ…

なずなにも言っただけだ。

竜馬「ちゃん付けは止めてくれない？」
なのは「え〜？可愛いのに〜」

その後、話し合いの結果。

周りに人がいない時だけちゃん付けで呼んで良いと言う事になった。
そして俺となのはは散歩に出かけた。

side out

side 第3者視点

なのはと竜馬がひだまり荘から出た時、2人の後をつける影が3つあった。

竜馬は気付いていたようだが敵意が無いため無視を決め込むようだ。
ちなみになのははまったく気付いていない。

なのは「竜馬ちゃんとお散歩〜」

竜馬「そうだね〜河原に行ってみる？」

なのは「うん」

2人が会話をしている間2人をつけている影の内1つが近くの木を
斬り倒した。

河原に着き2人は土手に寝転んだ。

なのは「気持ちいい〜」

竜馬「そうだね〜。このまま寝ちゃいそう」

この景色を見てみると仲の良い友達なのだが…

近くに3個の影が無ければ。

つけている影の内さっきとは別の影が近くにあった植物に電気を通して燃やした。

なのは「竜馬ちゃん？寝ちゃったの？」

竜馬「すう〜…すう〜…」

気がつけば竜馬は寝ていた。

なのは「…そうだ！」

なのは何かを思ったらしくごそごそと何かをしていた。

なのはがやっている事を見てつけている影の内、最後の一つが飛び出そうとしたが他の二つに抑え込まれていた。

そのまま平和な時間が過ぎて行った。

遊びに来た仲間。(後書き)

♪ 霊使い達の雑談♪

たまには平和な日をも思っ書いて。

ヒータ「私を出せよ!!」

お前は絶対に会話にならないだろうが!!

アウス「では私を出してくださいよ」

お前の場合は何だか暴走しそうな気がしたから。

ウィン「黄色いワンピースなんてよくあったね」

エリア「そうですねワンピースを着そうな人はいても黄色は持ってなさそうですし...」

ああ、あれ？

大家が偶然来てくれたんだよ。

4人「」「」「ああ」「」

そう言う事。

今回の締めは...俺か。

闇を狩る少年続きます。

最近面白く書けないなあ...

遊びに来た仲間。パート？

side 魔神竜馬

竜馬「…んっ。ふわあ〜…」

どうやらいつの間にか俺は眠っていたらしい。
んっ？

何だか違和感が…

なのは「あ、起きた？」

竜馬「…えっ？」

俺が目を開けると目の前になのはの顔があつた。

…はっ？

竜馬「えつと…何を…？」

なのは「竜馬ちゃんが寝てたから膝枕をしたの」

俺の質問になのは嬉しそうに答えた。

と、とりあえず起き上がるか。

竜馬「…なのは。そうされると起きれないんだけど」

なのは「別に何もしてないよ？」

俺が起き上がろうとするとなのはが肩を押さえた。

これじゃあ起きられねえ！！

しかも肩を押さえているからなのはの顔が近い！！

竜馬「いや、肩を押さえないでほしいんだけど…」

なのは「え〜：しょうがないの」

なのはは渋々ながらも肩を押さえる手をどかしてくれた。
それに伴いなのはの顔も離れて行った。

竜馬「…ふう。まったくなのはは」

なのは「えへへ〜：ごめんね？」

俺は起き上がりながら言った。

そう言えばつけている3人組は誰なんだ？

なのは「どうしたの？竜馬ちゃん」

竜馬「ううん、何でもないよ」

俺が考えている姿を見てなのはが聞いた。

とりあえずは敵意もないから放置していたけど…

竜馬「ま、大丈夫でしょ」

なのは「？」

俺は立ち上がりなのはの方を向いた。

竜馬「それじゃあ帰ろうか？」

なのは「うん、そうだね」

俺の言葉になのはは頷いた。

そして俺となのははひだまり荘に歩いて向かった。

side out

side 高町なのは

昨日は楽しかったな〜

私は昨日あった事を思い出して笑ってました。

ジャバウオック・フェイト・アリシア「…なのは…」
なのは「にゃ？どうかしたの？3人とも」

不意に名前を呼ばれたので後ろを向くとジャバウオックちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃんの3人がいました。
3人ともどうかしたのかな？

ジャバウオックちゃん「なのは、お主、昨日1人だけ竜馬の元に行つておつたな…」
なのは「え!？」

何でジャバウオックちゃんが知ってるの!？

フェイトちゃん「竜馬になのちゃんって呼ばれてたね…」
なのは「フェイトちゃんまで!？」

昨日は3人とも用事があるって言って無かつたっけ!？
何で昨日の事を知ってるの!？

アリシアちゃん「竜馬に膝枕をしていたね…」
なのは「見てたの!？」

アリシアちゃんも知ってたの!？
ど、どうしたら…

ジャバウオックちゃん「なのは…これから少し模擬戦に付き合ってくれぬか？」

フェイトちゃん「私も一緒に行つていい？」
アリシアちゃん「私もお願い」

そう言つてジャバウオックちゃんは私の手を引つ張つて行きました。
私の左右にはフェイトちゃんとアリシアちゃんが来ました。
あはは…私は今日、無事に帰れるのかな？

side out

side 魔神竜馬

結局、昨日の3人は誰だつたんだろうな…
まあ別段、害も無かつたし忘れるか。

竜馬「今日も平和だな」

とりあえず今日は昼寝でもしよう。
俺は伸びをしながらそう思った。

side out

side 第3者視点

竜馬が昼寝を始めてから2時間後。
ジャバウオック・フェイト・アリシアの3人が訪問して来て3人と
も散歩する事になった。

ちなみにこの散歩中に3人の呼び方を女の子の姿の時には変えるよ
うに言われた。

ジャバウオックが名字からとつてサーナ。

フェイトがフェイちゃん。

アリシアがシアちゃんになった。

遊びに来た仲間。パート？（後書き）

（霊使い達の雑談）

今回は昨日の続きだ。

エリア「平和な話じゃ無くなってませんでしたか？」

ヒータ「なんか、なのはが可哀想に思えてきた」

アウス「3体1ですからね」

うん…

書いていたら自然とそうなっちゃったんだよね。

ウィン「なのはちゃんが嫌いなの？」

いいや。

むしろ気に入っている方かな。

でもなぜかなっちゃうんだよ。

つと今回の締めは…アウスだ。

アウス「5、6人ですから回るのが早いですね。闇を狩る少年続きます」

でも人数増やすと出番が減るよ？

ヒータ「このままで頼む！！」

日常と歌。

sideゆの

竜馬が女の子になってから一週間が経ちました。

私と宮ちゃんは今、教室で吉野家先生の授業を受けています。

「~~~~~」

吉野家先生「あら？何かしら？」

どこかから歌の様な音が聞こえてきて吉野家先生は窓を見ました。
どこから聞こえて来るんだろう？

宮ちゃん「外から聞こえてくるね」

宮ちゃんがそう言って窓を開けました。

「~~~~~」

するとさっきよりもはっきりと聞こえてきました。
なんて言ってるんだろう？

吉野家先生「綺麗な歌声ですね…」

ゆの「先生この歌知ってるんですか？」

私の質問に吉野家先生は首を横に振りしました。

「~~~~~」

宮ちゃん「うん…屋上、かな？」

宮ちゃんが考えるようにして言いました。

ゆの「宮ちゃんそんなことまで分かるの？」

宮ちゃん「なんとなくだけどね」

宮ちゃんは笑いながら言いました。

「　　」

吉野家先生「屋上ですか？あそこは立ち入り禁止ですよ？」

私もその事は知っていました。

宮ちゃん「先生！見に行きませんか！！」

吉野家先生「誰が歌っているのかを…ですか？」

それは私も気になっていました。

「　　」

吉野家先生「…そうですね。皆さんが静かに移動して静かに見に行けるなら良いですよ」

私と宮ちゃんは喜んで手をとりあいました。

急いで見に行かなくちゃ！！

私達は静かに急いで教室を出ました。

side out

side 魔神竜馬

一週間たつても元の姿に戻らなかった。

フェニックスのままだから寝るとき翼が邪魔なんだよな…

現在、俺はやまぶき高校の屋上でレーヴァテイルの歌を歌っている。

竜馬は不思議そうに尋ねてきました。

吉野家先生「さっきの歌はあなたが？」

竜馬「はい。そうですよ」

吉野家先生が竜馬に尋ねてました。

そう言えばあの歌はなんて言ってたんだろっ？

ゆの「さっきの歌はどんな意味があつたの？」

竜馬「さっきの歌？…私は守護まもる意味があると思ってるよ」

…竜馬が私って言った!？

いったい何があつたの!？

竜馬「もう良い?それじゃあ私は行くね?」

宮ちゃん「え?でもそっちはフェンスだよ?」

そう言つて竜馬はフェンスに向かって行きました。

ゆの「あぶないよ?」

竜馬「大丈夫です。さようなら」

え?

ジャンプしてフェンスの上に…

竜馬はフェンスの上から飛び降りました。

ゆの「えっ?…」

私達は一瞬何が起きたのか理解できませんでした。

宮ちゃん「飛び降りちゃった…ね…」

ゆの「う、うん」

飛び降りた？

誰が？

竜馬が？

……………えっ？

ゆの「竜馬!？」

私は急いでフェンスに近寄って下を見ました。

見ると竜馬が翼を使って滑空している姿でした。

ゆの「よ、良かった…」

私は脱力してへたり込んでしまいました。

吉野家先生「あ、あの子は何者ですか!？」

宮ちゃん「うん…ひだまり荘の弟(妹)?かな」

吉野家先生の質問に宮ちゃんが答えました。

宮ちゃん、それ答えになって無いよ？

ゆの「帰ったらちゃんと怒らないと…」

私はそう心に決めました。

日常と歌。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

アルトネリコは良い曲が多いです!!

ウィン「それ本文でも言ってたよ」

俺は気にしない!!

ヒータ「本当にいつまで女の子なんだ？」

アウス「そうですね。もう一週間ですか」

もうそろそろじゃない？

特に決めてないし。

ああそれと竜馬の服装は基本的にプレシアとリンディが送って来て
いるぞ。

ほとんどがチャイナ服とかメイド服とかみただけだな。

ヒータ「その写真は既に撮っているぞ」

アウス「ですね」

知ってるよ。

今回の締めは…ウィンだよ。

ウィン「うん、闇を狩る少年続くよ」

そう言えば服を用意しないとな…

エリア「?…何か言いましたか？」

いや何も。

新たな敵との決闘！！

side 魔神竜馬

朝、俺は目覚めて自分の体に魔力を通して診る。
フェニックスの姿の時は魔力を焔に変えて診察の様な事を行えるの
だ。

竜馬「……ふう」

流石に一週間が経過したから毒の量も減ってきていたようだ。

竜馬「この量からして…お昼頃…か？」

俺は体内の毒の量から元の男の姿になる時間を見当付けた。
やっと元の姿に戻るのか…

竜馬「長かったな…」

俺は女の子になってからを振り返ってみた。

- 1 ・気絶から目覚めると女の子になっていた。
- 2 ・エイミーがふざけたのでアイアンクロ をした。
- 3 ・腕を斬り落として治した。
- 4 ・もう一度エイミーにアイアンクロ をした。
- 5 ・リンディとプレシアに着せ替え人形にされた。
- 6 ・なのは・ジャバウォック・フェイト・アリシアの4人とそれぞれ散歩した。
- 7 ・やまぶき高校でアルトネリコの歌を歌った。

竜馬「…うん。本当に平和だったな」

実際この姿の時に？闇？が出てきたら確実に負けるからな…
5.の事については忘れる事にしよう。

ゆの姉「あ、起きてたんだ。おはよう竜馬」

竜馬「おはようゆの姉」

俺が過去を封印しているとゆの姉が起きた。
今日はどうするかな？

side out

side???

「まったく俺達の敵がこんな所にいるのかよ…」

俺はアパートの前に立ちながら言った。

めんどくさい…

「ヘカテーの命令でなけりゃ早々に帰りてえな…」

愚痴を言っけていても仕方が無いか…

「さつさと終わらせてヘカテーの元に向かふとするか…」

俺はたばこを啜え直して封絶を張った。

side out

side 魔神竜馬

竜馬「これはっつ…!」

突然、周囲を濁った紫色の炎が囲んだ。
俺は急いで外に出てこの封絶を張った者を探した。

「ヘカテーからの命令でな。お前を殺させてもらっ
竜馬「やっぱりかよ…？千変？シユドナイ」

ひだまり荘を出た所に立っていたのは紅世くせの徒ともがらの？千変？シユドナ
イだった。

まだ元の姿に戻るのに4時間はかかるぞ！？

シユドナイ「さあ、さつさと死んでくれ」
竜馬「断るよ！無々、形状変化。形状は決闘デュエル」
無々「了解しました。能力発動。決闘デュエル」

ここで殺されて約束を守れないんじゃ俺はただの屑だからな！！
俺はデッキからカードを5枚引いた。

竜馬「ドロー！！カードを2枚伏せ竜馬？仮面竜？を召喚！！」
無々「SUMMON」

俺は？仮面竜？を召喚した。

シユドナイ「ふむ…ドラゴンか…だが、弱いな」

シユドナイは？仮面竜？を一瞥して腕を振るい破壊した。

竜馬「？仮面竜？の効果を発動！！デッキから？デブリ・ドラゴン
？を特殊召喚！！」

繋がるか？

竜馬「ドロー!!? 地霊使いアウス? を召喚!!」
無々『SUMMON』

アウス「私ですか。分かりました」

とりあえずは時間稼いだ。

竜馬「すまないアウス。レベル3? 地霊使いアウス? にレベル4?
デブリ・ドラゴン? をチューニング!!」
アウス「気にしないでください」

俺の言葉に反応しアウスが光の球になった。

そして? デブリ・ドラゴン? が4つの輪っかになり光の球が潜って
いく。

竜馬「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け! シン
クロ召喚! 現れよ、? ブラック・ローズ・ドラゴン?!」

次の瞬間、光の球と輪っかがあった所に薔薇を連想させるドラゴン
が現れた。

これで少しは持つか?

シウドナイ「ほう? 少しは良さそうなのが出てきたな...」

結構、余裕そうだな。

ここは...

竜馬「罫^{レシット}カードオープン!? ライジング・エナジー?」

俺は手札から? 古代の齒車^{アンティーク・ギア}? を墓地に送った。

これで？ブラック・ローズ・ドラゴン？の攻撃力は3900になった。

シウドナイ「力が上がったのか…なら！！」

シウドナイは右腕を異形の物へと変化させた。

そして？ブラック・ローズ・ドラゴン？と戦い始めた。

竜馬「今の内か。ドロー！！？火霊使いヒータ？を召喚！」

ヒータ「つとあたしか。大丈夫か竜馬」

ヒータが俺の心配をしてくれた。

竜馬「結構きつい方かな…」

ヒータ「大丈夫だあたし等がついてるんだそれに自分のデッキを信じる！」

自分のデッキを信じる。

それはいつもやってるかな。

竜馬「おう！俺はお前達を信じるよ！！」

俺はヒータにそう言ってシウドナイの方を見た。

今のところは五分五分か…

竜馬「このカードに賭ける！！ドロー！！？デブリ・ドラゴン？を召喚！！さらに？ワンショット・ブースター？を特殊召喚！！」

俺の目の前に白いドラゴンと黄色い機械が現れた。

竜馬「頼むぞヒータ！レベル3？火霊使いヒータ？とレベル1？
ワンショット・ブースター？にレベル4？デブリ・ドラゴン？をチ
ューニング！！」
ヒータ「任せろ！！」

俺の言葉に反応しヒータと？ワンショット・ブースター？が光の球
になった。

そして？デブリ・ドラゴン？が4つの輪っかになり光の球が潜つて
いく。

竜馬「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい
！シンクロ召喚！我が魂、？レッド・デーモンズ・ドラゴン？！」

次の瞬間、光の球と輪っかがあつた所に悪魔を連想させるドラゴン
が現れた。

こいつ等ならいけるだろ。

シュドナイ「別のドラゴンか…厄介だな」

シュドナイの表情が少し暗くなった。

残りの手札は1枚。

出来ればこれで終わってほしいが…

シュドナイ「仕方が無い。本気を出すか…」

そう言つてシュドナイは全身を異形の物へと変化させた。

そして？ブラック・ローズ・ドラゴン？を破壊した。

竜馬「？ブラック・ローズ・ドラゴン？！！くそっ！ドロー！！力
ードを1枚伏せて終了」

どうすればいい!!

攻撃力の増加だけならできるんだが…

シュドナイ「どうした？もう一匹も破壊してしまっぞ？」

見るとシュドナイの攻撃が？レッド・デーモンズ・ドラゴン？に迫っていた。

竜馬「畜生!!^{トリップ}畏カードオープン!?バスターモード？」

新たな敵との決闘！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

出たぜ！

俺が現実に使ってるデッキ！！

アウス「そう言えば使ってるんですけどね」

おうともさ！！

俺の一軍デッキですよ！！

エリア「私達が一軍ですか…」

ヒータ「結構ビツクリだよな」

俺はお前等がお気に入りなの！！

あ、ちなみに2軍はラビエル達の悪魔デッキだよ。
その内、他のデッキも出すから。

ウィン「頑張ってるね」

ありがとうウィン。

今回の締めは…エリアだね。

エリア「分かりました。闇を狩る少年続きます」

竜馬は勝てるかな？

ヒータ「どういう事だよ？」

いや、これ本当にデュエルして書いてるんだよね。
だから結果が分からない。

ヒータ「マジかー!!」

マジだー!!

決闘の結果。(前書き)

荒井スミス様より感想があったので人物のセリフの書き方を変更します。

これからもより良く書けるように努力いたしますのでよろしく願います。

決闘の結果。

side シュドナイ

俺の目の前で突然ドラゴンが消えた。

先程何かを言っていたが…

俺は奴の方を向いた。

「ん？少しだけ恰好が変わったようだな…」

見ると奴の目の前に先程のドラゴンが鎧を纏っていた。
だが、強さはそこまで変化していないようだな。

「まあ、関係無いか…」

アレを破壊して奴を殺せばいいのだからな…

side out

side 魔神竜馬

どうするか…

？レッド・デーモンズ・ドラゴン？を破壊されたくないだけで発動
したが…

「このままじゃ確実に破壊されるよな…」

セットしてあるカードは現状を打破できるものではない。

最後の一枚の手札も？ゾンビキャリア？だから何もできない。

「絶体絶命ってところか…仕方が無い！」

俺は飛びあがり？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？の上に着地した。

俺自身が危なくなるがこれなら破壊されにくくなるはず…

「ふむ…無駄な足掻きをするようだな？」

「うるさいよ。ドローー！！？マスクド・ドラゴン仮面竜？を召喚！！！」

俺が引いたカードは？マスクド・ドラゴン仮面竜？だった。

？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？の効果で破壊されてしまつかもしれないが…

side out

sideリンディ・ハラオウン

「艦長！竜馬君の周囲に巨大な魔力反応が！！」

「本当なのエイミー！？」

魔神さんの周囲に魔力反応…

…？闇？ですか。

「魔神さんの映像を映してください」

「分かりました…正面の画面、でます！」

私達が正面の画面を見ていると映像が映りました。

そこに映っていたのはドラゴンの上に立っている魔神さんでした。

「はっ…相変わらずめっちゃくちゃだね竜馬君は…」

エイミーが面白そうに言いました。

そう言えばまだ女の子なのね。

「どうしますか？なのはちゃん達に教えますか？」
「……いえ。やめておきましょう」

彼女達が行っては魔神さんが戦いにくいはずですし…

「エイミー、この映像は保存しておいてちょうだい」
「分かりました」

大丈夫。

魔神さんなら無事に勝てるはずですから…

side out

side 魔神竜馬

「そらっ！いつまで持つかなー！」

シユドナイが火球を連続で放ってきた。

？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？はこの程度ではビク
ともしないが…

「？仮面竜？は別だよね！！守護天翼！！」

俺は？仮面竜？の上に飛び移り翼を広げた。

一応は防げるがそう持たないな…

「くっ！ドロー！このカードは…カードを一枚伏せて終了」

俺は守護天翼で防いだ火球によるダメージを受けながらデッキから
カードをドローした。

引いたカードは？スターライト・ロード？だ。

このカードで？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？の効果

にチエーンすれば…

…また俺は？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？を犠牲にするのか？

約束をする前の俺はデュエルでいつも？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？を破壊して利用していた。
ラビエルの時もそうだ。

「…犠牲に…何かしねえ！！」

？スターライト・ロード？は別の時に発動する！！

「まだ耐えられるのか…なら、これならどうだ？」

シユドナイは大きな火球を生成した。

あれをぶつける気かよ…

「…？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？！！攻撃だ！エクストリーム・クリムゾン・フォース！！」

俺は？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？に攻撃するよう言った。

これでギリギリ防げるか？

「防ぐつもりか？面白い！」

そう言つてシユドナイは巨大な火球を放った。

？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？は巨大な火球に攻撃を仕掛けた。

「うわ！？」

？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？の攻撃と巨大な火球がぶつかり衝撃波が起こった。

防げたよな？

俺は？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？を見た。

「大丈夫か！？レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター？！！」

？レッド・デーモンス・ドラゴンノバスター？は鎧がぼろぼろになつていた。

だが、膝をつかずに立っていた。

「よかつた無事か…」

「油断大敵だ！」

俺が安堵しているとシユドナイが俺に攻撃を放ってきた。

やばっ！！

急いで避けようとしたがいきなりの事に驚き俺は動きが鈍り攻撃が直撃した。

side out

side シユドナイ

攻撃が当たり煙が巻き起こった。

ドラゴンが俺を睨んで唸っている。

「飼い主が殺されて怒ってるのか？」

ドラゴンは俺が言った言葉を理解したのか大きく吠えた。

「……大丈夫だ。怒るな、落ち着け」

今にも俺に攻撃してきそうだったドラゴンは動きを止め煙の方を向いた。

何だ生きていたのか…

「ほう？そんな状態でも生きているのか…」

煙が晴れて姿が見えた。

奴は左腕と両足を失っていた。

「あいにく…まだ死ぬ訳には行…かないんでね…」

あの姿でどうやって戦うと言っただけだ？

俺に殺されるだけだろう？

「そうか…だが、お前には生きていてもらっては困るんでな…！」

俺は奴の頭に向けて拳を放った。

拳が当たり奴の頭は粉々になり奴の体は力を失いくずれた。

「これで命令は終了だな…」

俺はタバコを啜えへカテーの元に向かった。

決闘の結果。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

今回は書き方を変えたつもりだよ。

「そこまで変わった気はしませんね」

「どうせ自己満足だって」

ひびい…

とりあえずは感想に書かれた事は取り入れて行くことと思ってるから。

「頑張ってくださいね？」

「頑張れ〜」

エリアとウィンだけだよ優しいのは…

今回の締めは…ヒータだ。

「あたしか、闇を狩る少年続くぞ。そういや作者!!! 竜馬が死んでるぞ!」

気にしないでくれ…

後で何とかするから。

「ならよし!」

敗北者の消失。

sideリンディ・ハラオウン

「えっ？」

私達は驚きの余り言葉を失った。

映像に映っていたのは強いと思っていた少年。

そんな彼が右腕と体を残して死んだ。

「艦長…これって…冗談ですよね？」

「…！！急いで確認のために人員を送ってちょうだい！！」

私は慌ててやる事を言いました。

するとジャバウオックさんが入って来ました。

「ジャバウオックちゃん！？見ない方が！！」

「む？…竜馬！？」

ジャバウオックさんは画面を見て固まりました。

彼女にとっても大切な存在だったのだから…

「…ジャバウオックさんあなたはなのはさん達にこの事を伝えてください」

「わ、分かった…」

ジャバウオックさんはいまだに事実を受け入れられないのか静かに部屋から出て行きました。

「艦長、現場に着いた様です！！」

「分かったわ。回線を開いてちょうだい」

エイミイは回線を開きました。

「艦長、現場に到着しました。ですが死体の様なものはありませんでしたよ」

「……え?」「……」

私達はクロノの報告に耳を疑いました。死体が無い?

「そんな!? 画面には!!! あら?」

「ありません…ね…」

私は画面を見て間抜けな声を出してしまいました。

画面には死体どころか戦闘があったという痕跡すら無くなってクロノが映されていたのだから…

「特には何も無さそうなので一時帰還します」

「そうね。戻って来てちょうだい」

どういう事なのかしら?

映像を見直してみるしかなさそうね。

「エイミイ、保存した映像を映してくれないかしら?」

「はい、分かりました」

エイミイは映像を再生しました。

確かに魔神さんの戦闘は映ってますね。

「魔神さんが死んだシーンまで飛ばしてくれないかしら」
「分かりました」

エイミイに言つて魔神さんが死んだ直後まで飛びました。

「ここから何が起きたんでしょうね？」

「分からないわ……」

魔神さんが死んで倒れているシーンになりました。

「……これと言つた特徴はなさそうね」

「そうですね……艦長これ……！」

エイミイが突然、大きな声を出しました。
何かあつたのかしら？

「どうしたの？」

「竜馬君の周りを見てください……！」

魔神さんの周り？

大きな影が有る位しか……

「……つて何かしらこの影？」

「さっき突然現れたんですよ」

こんな影を作るものなんてあつたかしら？

「艦長……！竜馬君が……！」

「え……？何これ……！」

気が付けば魔神さんが影から伸びた手によって影に引込まれていました。

そして魔神さんは影の中に完全に飲み込まれてしまいました。

「魔力反応はありませんでした…」

「どうなっているのかしら…」

私は嘆息して椅子に座りました。

side out

side 第3者視点

ヘカテーからの命令を遂行したシユドナイは？星黎殿？に到着した。

「命令は滞りなく遂行したぞヘカテー」

「そうですか」

シユドナイの言葉にヘカテーは素っ気なく返した。

そんなことも気にせずシユドナイはヘカテーの近くに行った。

「つれないじゃないか俺のヘカテー？」

「私はあなたのもではありません」

いつもの事なのかヘカテーは無表情に返す。

「まあ良いさ次に俺がやる事は何かな？」

「今はありませんので休んでいてください」

ヘカテーは静かに言った。

「そうか、ならここに居させてもらおう事にしよう」

「邪魔です。別の所に行ってください」

シユドナイは少し凹んだのか渋々部屋を出た。

そしてシユドナイが部屋から出るとヘカテーは瞑想を始めた。

ちなみにシユドナイは部屋の外からちらちらとヘカテーの事を見ていた。

敗北者の消失。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

え〜竜馬が消えてしまったためアウスとヒータの怒りがMAXです。

「いい加減にしるよな？」

「いい加減にしてくださいね？」

はい、2人共見事に目のハイライトが消失しております。

「今回の締めは作者さんらしいんですが大丈夫なんですか？」

「たぶん大丈夫だと思うよ？」

そう言えば今回は俺か。

闇を狩る少年続きます。

「さ、これで大丈夫だな……」

「じゃあ逝きましょうか……」

ぎゃあああああああ……!!

消えて行った記憶。

sideジャバウオック・サタナキア

我は竜馬が死んだ事をなのは達に伝えに行った。
なのは達は食堂にいた。

「…なのは、フェイト。…竜馬が死んだ」

「「えっ!?!」」

我がそう言つと2人は一瞬呆けてしまった。
それもそうだろう。

先日会つた時は元気だったのだから。

「じよ、冗談…だよね?」

「冗談では無い!!映像にも残っている!!」

フェイトの言葉を我は否定した。

我だつて信じたくは無いのだ。

「…アリシアはどうしたのだ?」

「お姉ちゃんなら母さんの所でデバイスの調整をしてるよ?」

アリシアのデバイスが完成するのか…

アリシアにも伝えねばな。

「分かった。行って来る」

そう言つて我はアリシア達のいる部屋に向かった。

side out

side 第3者視点

竜馬が影に飲み込まれて封絶が解かれると周囲の戦闘の形跡は全て無くなった。

シウドナイがわざわざ修復するとも思えないので何者かが修復したらしい。

そしてひだまり荘の住人達に小さな変化があった。

「あれ？私こんな服持ってたかな？」

ゆのは綺麗に畳まれている洋服を見て思った。

近くには吉野家が着そうな服もある。

その服は先日まで竜馬が着ていた服だった。

「ん？私こんな絵描いたっけ？」

宮子は絵を整理していて見覚えのない絵を見つけた。

絵に描いてあるのはひだまり荘の住人たちだった。

その絵は先日竜馬が授業中に描いた絵だった。

「あゝ！！話が続かない！！…あれ？この男の子…誰かモデルがいたようなの…？」

沙英は小説の執筆に追われていた。

しかし自分には覚えが無い登場人物がいる。

その男の子のモデルになったのは竜馬のフェンリル形態の耳と尻尾が無い状態だった。

「あら？私いつクッキーなんて作ったのかしら？」

ヒロは戸棚を開けて不思議に思った。
ヒロ自身には作った覚えが一切無いからだ。
そのクッキーはヒロが竜馬と一緒に作った物だった。

「あれ？パソコンに覚えのないデータが…」

乃莉はパソコンを起動して見慣れないデータを発見した。
データが作られた日は二日前。
しかし乃莉には覚えが無かった。
そのデータは竜馬が借りて作ったものだった。

side out
side ならずな

変な結界？みたいな物が現れた時、私は部屋の中で魔力障壁を張って
いました。
何だったんだろう？

「竜馬君に聞けば分かるかな？」

私は魔力障壁を解いてゆの先輩の部屋に向かいました。
部屋に着くとゆの先輩は部屋の掃除をしていました。

「どうしたの？ ならずなちゃん」

「あ、竜馬君に少し聞きたい事があって…」

ゆの先輩が訪ねてきたので答えました。
するとゆの先輩は不思議そうに首をかしげました。

「竜馬君？ つて誰？」

「え？」

ゆの先輩が竜馬君を知らない？

「その竜馬君がどうかしたの？」

「い、いえ。何でもないです…」

私はお礼を言っつて部屋から出ました。
どうしたらいいんだろう…

消えて行った記憶。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

ひだまり荘の住人が竜馬に関する記憶を失っています。
なすなだけは覚えていますが…

「何で記憶が消えたんだ？」

まあ、消えたっていうより封印されてるって方だけだね？
竜馬が影に飲み込まれただろ？
アレをやった奴が封印したんだよ。

「何のためにですか？」

竜馬に関する記憶があると不都合なんじゃないか？
ネタばれになるから言わんけど…

「ネタばれはダメですからね」

「そうそう」

分かってるよ。

今回の締めは…アウスだ。

「はい、闇を狩る少年続きます」

その少年が今不在だけだな。

「言わなくて良いんだよ！！」

生まれた安心と残された謎。

side 高町なのは

ジャバウォックちゃんから竜馬君が死んだと聞いて私達はリンディさんの所に向かいました。

「リンディさん！竜馬君が死んだって本当なんですか!？」
「……本当よ」

私の質問にリンディさんは静かに答えました。
そんな…

「…リンディ、先程の映像を映してくれないか？」
「ジャバウォックさん…分かりました」

リンディさんは機材を操作して映像を再生しました。
映像を見て私はある事に気付きました。

「フェイトちゃん、これ…」
「うん、だよね」

フェイトちゃんも気付いたみたいです。
リンディさん達は不思議そうにこちらを見てました。

「何か気付いたんですか？」
「はい！竜馬君は死んでません!!」

私ははつきりと言いました。

「えっ!?!? それはなぜですか?」

「竜馬がフェニックスの姿だったからです」

リンディさんの質問にフェイトちゃんが答えました。

それでもリンディさん、エイミィさん、クロノ君は分からないようでした。

竜馬君が言わなかったのかな?

「竜馬君がああ姿の時は不老不死らしいんです」

「それは本当なのか!?!?」

クロノ君が乗り出して聞いてきました。

私は驚きながらも首を縦に振りました。

「それにしても彼がここまでやられるなんて…」

ユ一ノ君は驚きながら言いました。

私もその事には驚いてるの…

「…と言う事はこれも魔神さんの能力なのかしら?」

「えっ?!?!?」

まだ何か起きるの?

リンディさんが言うのと映像に変化が起きるのは同時でした。

「何これ!?!?」

「これは…!?!?」

影から伸びた手によって竜馬君が影に引込まれていました。

影に入る力は知っているけどこんなの知らない!?!!

「これも竜馬君の力じゃないの？」

エイミーさんが聞いてきました。

私とフェイトちゃんは首を横に振りました。

「…だとしたらこれはいつたい」

「エイミーさん、この時に魔力の反応は無かったですか？」

ユーノ君はエイミーさんに質問しました。

何かあったのかな？

「それが魔力の反応は全然無かったんだよ」

「と言う事はこれは魔法以外の力ってことになるかな」

エイミーさんの答えにユーノ君は1人納得していました。

私にはよく分かりません。

side out

side ならずな

私は部屋に戻って考えました。

ひだまり荘の皆が竜馬君の事を忘れていたからです。

「何で皆忘れちゃったんだろう…」

私以外に竜馬君を覚えている人は誰もいませんでした。

どうして私だけ覚えていたのか不思議だけど…

「…とりあえず魔法の練習しなくちゃ」

私は部屋で魔力球を複数生成し始めました。
…上手くないかな？

「…そっか、いつもは見ていてくれる人がいたから…」

魔法を教えてくれる人がいるという安心感が無くなって私は魔力が
上手く操れませんでした。

これじゃ竜馬君に怒られちゃうかな？
不意にインターホンが鳴りました。

「はい、今開けます…」

玄関を開けると女の子が2人立っていました。
誰だろう？

「こ、ここで良いんだよね？」

「うん、間違っただけだよ」

2人は何かを話し合っていました。
小学生くらい…かな？

「…なにか用なの？」

「えっと、魔力反応があったので確認に来ました」

魔力反応…と言う事は竜馬君の知り合いなのかな？

「竜馬君の…友達？」

「「竜馬（君）を知ってるんですか!？」」

私が竜馬君の名前を出すと2人共反応しました。

生まれた安心と残された謎。 (後書き)

↳ 霊使い達の雑談

「なあ、最後の2人って…」

ああ、分かっているだろうけどフェイトとなのはだよ。

「ついになのはさんとフェイトさんがなずなさんと会いましたね」

「今後の展開的に大丈夫なんですか？」

アウス、そこは聞かないでくれ。

「それで苦労するのは作者さんだけだね？」

ウィンが笑顔で痛い所を！！

こ、今回の締めは…エリアです。

「分かりました。闇を狩る少年続きます」

…頑張らないとな

紅い館に呼ばれた少年。

side 第3者視点

全体的に紅色調をしている館の地下。

そこには大量の魔導書などが置かれていた。

「こあ〜!!!？」

突如静かなはずの図書館に叫び声が上がった。

叫び声を上げた主は悪魔の様な羽が生えていた。

いわゆる小悪魔と言っ奴である。

「…なによ。大きな声を出して」

「あ！パチュリー様！！」

パチュリーと呼ばれた少女はめんどくさそうに言いながら歩いてきた。

しかし叫び声のあった場所について不思議に思った。

「…小悪魔？この人間は…何？」

「す、すいませんパチュリー様！本の整理中に本が開いて中から出てきたんです」

パチュリーの問いに小悪魔は答えた。

小悪魔の近くには1人の人間が倒れていた。

「ちなみにどの本から出てきたか分かる？」

「えっと…おそらくこの本かと…」

小悪魔は恐る恐るといった風に本をパチュリーに差し出した。
本のタイトルは？影の書？

「この本ね…まあ良いわこの人間が起きるまであなた面倒を見てなさい」

「こあつ！？わ、分かりました…」

小悪魔は少し驚きながらも了承した。
そして小悪魔は倒れている人間…魔神竜馬を運んで行った。

「まさかレミイの言っていた事が今起こるなんてね…」

パチュリーは小悪魔に運ばれていく竜馬を見ながらつぶやいた。

side out

side 魔神竜馬

目が覚めるとそこは本が大量に置いてあった。
どこだここは？

「あ、目が覚めたんですね？」

俺が目を開けて部屋を眺めていると声をかけられた。
起き上がり横を見ると女の人がいた。

「はじめまして。小悪魔と言います」

「あ、どうも。魔神竜馬です」

女の人が挨拶をしてきたので俺もつい返してしまっただけ。
とりあえずここがどこなのか聞か…

「あの…ここはどこですか？」
「ここは大図書館です。すみません私の所為であなたはここに来てしまいました」

大図書館？

どっかで聞いた事があった気が…

「む…どうすればいいと思う？無々」

『私に聞かれましたも…』

「腕輪が喋った!？」

うっかり俺は無々に訪ねてしまった。
そりゃ驚くよな。

「ってあれ!？変身が解けてる!？」

『すみません。マスターの怪我が治ってから解かせていただきました』

無々は申し訳なさそうに言った。
何か理由があるのか？

『1週間の間、能力を発動したままだったので反動でしばらく能力が使いません』

「マジかよ…」

しばらくってどれくらいだろう？

…とにかくその間は体術しかないか。

「あら…起きたのね」

そう言っつて紫色の服を来た少女？がやって来た。
誰だ？

「私の名前はパチュリー・ノーレッジよ」

突然、少女？は名前を言っつてきた。

自己紹介か？

「俺の名前は魔神竜馬だ」

俺は自分の名前を言っつた。

…モヤシ？

「…今何か失礼な事を考えなかつたかしら？」

「イイエベツニ…」

何で分かつたんだ？

「ところで…パチュリー。俺は元いた場所に戻るのか？」

「ええ、可能よ」

俺の質問にパチュリーはあっさりと答えた。

とにかく戻らないとな。

「それじゃあ俺を元いた所に戻してくれないか？」

「ダメよ。今はまだその時じゃないもの」

はっ？

今はまだその時じゃない？

「どついう事だ？」

「あなたは会わなくちゃいけない子がいるのよ」

よく分からないが。

すぐには戻れないってことだな。

とりあえずは無々が能力を使用できるようにならないとな…

「あ、俺どこに住めばいいんだ？」

「それなら心配ないわ。この図書館の上には大きな館があるの。そこに住まわせてもらいなさい」

…地下の図書館、その上にある館、小悪魔、モヤS…じゃなくてパチュリー・ノーレッジ。

もしかして…

「東方…って言うかこの場合は紅魔館か…」

俺は東方についてそこまで詳しい方じゃないが今いる場所だけは理解できた。

確か紅魔館の主ってレミア・スカーレットだったっけ…

「何してるの？早く行くわよ」

「あ、ああ。すまん今行く」

俺はパチュリーに先導されて紅魔館の主の元に向かった。

色々ありそうだけど仕方がないか…

紅い館に呼ばれた少年。(後書き)

〈霊使い達の雑談〉

とりあえず竜馬の現状報告として書いた。

「幻想郷にいるのかよ」

「あそこは私達も入れませんね」

そうなのか？

精霊だから平気だと思ってた。

「うーん…結界があるんだけどそれが通れないんだよね？」

「難しいんですね…」

ふーん…

あ、そうそう。

竜馬はそこまで東方について知りません。せいぜい名前を数人知っているだけです。

「パチュリーは知らなかったのか？」

いや、あの時は東方だと思ってなかったからだよ。

今回の締めは…ウインだね。

「はいはい。闇を狩る少年続くよ」

何の服を持ってこようかいまだに決められないなあ…

館の主との邂逅。

side 魔神竜馬

俺はパチュリーに先導されて屋敷の中を歩いていた。

「~~~~~」

「ん?…この歌は?」

どこからか歌声が聞こえてきた。

耳を澄ましてみるとどうやら近くの鉄で作られた扉の向こうから聞こえているようだ。

「パチュリー、この部屋は?」

「ああ、この部屋。生きていたいなら近づかない事ね…」

パチュリーはそう言って歩き出した。

「いったい何なんだ?」

俺はパチュリーに置いてかれないように慌てて付いて行った。

「近づかない方がいい、か。…でも寂しそうな歌だったな」

俺は先程聞こえた歌に惹かれながらも歩いて行った。

気が付けばいつの間にか大きな扉の前に着いていた。

「少し待ってなさい。…それと勝手に動くとは危険だから」

「はっ?」

パチュリーは俺の返事も聞かずに扉の中に入って行った。

…どうやって開けたんだろう。

「さて、どうしたもんかねえ？」

『とりあえずは言われた通り動かないでいきましょう』

確かにそれもそうだな。

「じゃあとりあえず座って待つか」

俺は床に座った。

そう言えば無々はどのくらいで能力が使用できるんだ？

「なあ無々、どのくらい能力が使用できないんだ？」

『そうですね…おそらくですが二週間ほどです』

二週間か…長いなあ。

確かここって死亡フラグが多かった気がするんだよな…

「フェニックスじゃないとマジで死ぬからなあ…どうしようっ？」

『…頑張ってください』

無々は人間だったら目を逸らしているかのように言った。

まあ、俺も聞かれたら困るしなあ。

「おう、頑張るよ」

「良いわよ。入って来なさい」

扉が開いてパチュリーが俺を部屋の中に入れた。

中に入ると大きな椅子に子供が座っていた。

あれがレミリアだったよな？

「あなたがこの屋敷に住まわせてほしいって人間ね」

「あ、ああ。魔神竜馬だ」

俺を見てレミリアが言った。

パチエリが言っていた会わなくちゃいけない子ってのはレミリアの事か？

…まあ、おのずと分かるだろ。

side out

sideレミア・スカーレット

パチエが人間が本の中から出てきたって言った時は驚いたわね。適当に言ってみたでまかせだったのに…

「どうしようかしら…」

「何か言った？」

私の呟きにパチエが反応した。

と、とにかくなんとかしなくちゃ…

「あなたが来た事は運命だったのよ。良いわこの館に住みなさい魔神竜馬」

「…ありがとう。ところで君の名前は？」

しまった!!

相手が名乗ってるんだから私も名乗るんだった!!

「私の名前はレミリア・スカーレット。この館の主よ」

「そうか、じゃあ改めて…ありがとうレミリア」

結構、礼儀正しいのね…

「それじゃあ咲夜。魔神を部屋に案内してちょうだい」
「分かりました。それでは付いて来てください魔神様」
「あ、はい」

咲夜に連れられて魔神は部屋に向かった。

side out

side???

「誰か来たのかな…?」

私は鉄の扉を見ながら呟いた。
誰かが来ても私には関係ないね…

「どうせ私には会う事が無いんだから…」

もう一度歌おうかな…

それだけしかやる事がないし。

「　　?　　?　　?　　…」

私はもう一度歌を歌い始めました。
友達が出来たら楽しくなるのかな…

館の主との邂逅。(後書き)

「霊使い達の雑談」

「鉄の扉って何だったの？」

秘密ってことで…

まあ読者には分かるだろうけどさ。

「あたし等にも教えるよ！」

断る!!

「私としては竜馬様が死ななければいいですけど」

「それもそうなんですけど…」

そんな事は置いておいて。

今回の締めは…ヒータだ。

「闇を狩る少年続くぞ。というか今そんな事って言わなかったか？」

き、キノセイデス。

「何でカタコトなの？」

「あ、逃げた」

「待てコラ!!」

待つバカはいない!!!

魔法少女ひだまりなずな!?

sideなずな

2人の女の子に連れられて私はアースラ…だったかな？
…とにかくそこにいます。

「それじゃあ竜馬君はなずなさんの先生なんですね」
「うん、そうなるかな」

私達は話しながら歩いていきます。
あれ？
和室がある…

「ようこそアースラへ。座ってちょうだい」
「あ、はい」

私は女の人に促されて座布団に座りました。
綺麗な人…

「さて、私はリンディ・ハラウン。この艦の艦長をしています」
「私はなずなです」

そう言っつてリンディさんはお茶を淹れました。
…え？

リンディさんは突然お茶にお砂糖を入れ始めました。

「あなたも飲む？」
「い、いえ！結構です…」

勧められたので私は急いで断りました。
お茶にお砂糖はちょっと…

「なずなさん、あなたは管理局を知っていますか？」

「管理局…ですか？」

竜馬君は特に何も言っただけで無かったけど…

「いえ、知りません…」

「そうですね、私達管理局は魔法を使い世界の平和を守る機関です」

世界の平和を守る？

もしかして竜馬君も管理局の人だったのかな？

「それで私はどうしてここに？」

「それはあなたがいる世界が今とても危険なのであなたにも手伝ってもらいたいからです」

私達の世界が危険？

どうして？

「それでも私なんて…」

私は俯きながら言いました。

「魔神さんが負けてしまった相手でもですか？」

竜馬君が負けた！？

私は思わず顔を上げました。

side out

side クロノ・ハラウン

彼は今どんな状態なんだろうな？

そう言えば調査を頼まれていた物があったな…

「ちょうど良い所に、エイミー！」

「ん？あ、クロノ君。何か用？」

僕は目の前を歩いていたエイミーに声をかけた。

「魔神から調べるように言われていた物があるんだ、調べておいてくれないか」

「ああ、あの魔力を毒に変える機械だね？」

エイミーに機械を渡しながら僕は言った。

…ん？

「その書類は何だい？」

「あ、これはさっきの魔力反応のデータだよ。結構魔力が高いからびっくりしたよ」

ああ、さっきなのはとフェイトが連れてきた女性か…

どのくらいの魔力だったんだ？

僕はエイミーの持っていた書類を見た。

「…すごい魔力だな」

「でしょ？」

書類を見て僕は驚いた。

書類には推定魔力がAAAと書いてあったからだ。

「とりあえずその機械の調査は頼んだよ」
「はいはい。任せといて〜」

エイミイに確認をとり僕は訓練室に向かった。
竜馬に負けてから彼に勝つ為に訓練していたら日課になってしまっ
たのだ。

side out

side 魔神竜馬

…何だろう？

めんどくさい事が起こってる気がする。

俺は咲夜に案内された部屋でデッキを調整していた。

「…悪魔デッキからシンクロを抜こうかな？」
『ですが切り札に重い物が多くなりますよ？』

無々にも教えたので多少話し合いが出来るのだ。
切り札がきつくなるのか…

「とりあえずこれで良いかな？」
『大丈夫だと思われませう』

俺は悪魔デッキを一応だが改良させた。
たぶんただどビートダウンみたいな感じかな？

「…？…？」
「…また歌が聞こえる」

やっぱり寂しそうだな…

魔法少女ひだまりなずな！？（後書き）

（霊使い達の雑談）

結局、前回ヒータに捕まって現在正座中です。

「さて作者？言い残す事は？」

作者権限で不老不死になります！！

「ある意味で反則ですね」

「インチキ効果も大概にしろ！！」

ヒータがクロウみたいになった！？

「今回もぐだぐだになってますね……」

「いつもの事だよエリアちゃん」

あ、今回の締め俺だ。

闇を狩る少年続きます。

「……不老不死なら痛みを与え続けるだけだああ……！！」

げ！？気付かれた……！！

弾幕合戦！？

side 魔神竜馬

紅魔館に来て1日が経過した。

朝、咲夜に呼ばれて朝食を食べるために食堂に行くとレミリアがいた。

「あら、おはよう。よく眠れたかしら？」

「ああ、おはようレミリア。よく眠れたよ」

俺はレミリアに言いながら席に着いた。

…確か吸血鬼だったよな？

何で朝が早いんだろう？

「っとそう言えば昨日、寂しそうな歌が聞こえたんだがあれは？」

「…気にしないでちょうだい」

レミリアは答えにくそうに言った。

触れない方が良かった話題だったのか。

「結局、俺はいつ戻るんだ？」

「今のところは何とも言えないわね」

俺の問いにレミリアはワイン？（血？）を飲んで答えた。

…まだ先みたいだな。

「料理は口に会いましたか？」

「ん？ああ、とてもおいしかったです」

咲夜が聞いてきたので俺は答えた。
実際のところ血液関連の食事が出たらどうしようかと思っていたが
普通の食事でもおいしかったのだ。

side out

side 十六夜咲夜

お嬢様はあの人間をいつまでこの館に住まわせるのでしょうか？
あの人間の腕に付けている腕輪：
…厭な予感がしますね。

「あの、咲夜さん」

「何でしょうか？」

振り向くと魔神様がいました。
いったい何かしら？

「すみません、昨日見つけた鉄の扉がとても気になったので…」

鉄の扉というとフランドールお嬢様の部屋の事ですね。

「お嬢様が教えない事を私が教えるわけにはいかないのよ」
「…そうですね。失礼しました」

そう言って魔神様は歩いて行きました。
…あら？そう言えば美鈴メイリンに教えてなかったような？

「…まあ良いですね」

私はそう言って仕事に戻った。

side out

side 魔神竜馬

鉄の扉の事は教えてもらえなかったな…
俺は館から出て庭を歩いていた。

「む！？誰ですかあなたは！！」

「へっ？」

声が聞こえたので見ると中国服を着た女性がいた。
確か…紅^{ホン} 美鈴^{メイリン}だったっけ？

「そっか！侵入者ですね！！」

「え？いや、違…！！？」

何だかすごい勢いで勘違いされてる…

突然美鈴^{メイリン}の周囲に魔力球の様な物が出現した。

「行きます！！」

「話を聞けええええ！？！？」

美鈴^{メイリン}は俺の話も聞かずに攻撃してきた。
危なっつ！！

「華符『芳華絢爛』！！」

「ちよっ！？」

いきなり大量の弾幕が出現して飛んできた。
避け切れるか？

side out

side 第3者視点

美鈴メイリンのスペルカード華符『芳華絢爛』を竜馬はギリギリで回避していた。

これもフェンリルの時に早い物を見るのに慣れていた恩恵である。ちなみにBGMはゲツダンで有名なあの曲です。

「よっ！？はっ！っせい！！」

「まだまだ！！」

美鈴メイリンの弾幕を色々なポーズで避ける竜馬。

…ゲツダンの動画みてる気分になった。

「…勝負がつかないですね。なら！」

美鈴メイリンは弾幕を消して接近戦を仕掛けた。

「げっ！！」

「たあああああ！！！！」

弾幕が消え驚いた竜馬は美鈴メイリンの攻撃をまともに食らい吹っ飛んだ。

竜馬自身は反射的に後ろに飛んだためダメージはそこまで無いのだが…

竜馬が吹っ飛んだ先の噴水が壊れた。

「あ…噴水が…」

「いってえなあ…」

竜馬は水に濡れながらも立ち上がった。

噴水を壊したショックで美鈴メイリンは動けなくなっていた。

「今の内に…」

美鈴メイリンを放置して竜馬は逃げだした。

しばらくして美鈴メイリンの悲鳴が聞こえたのは言うまでもない。

P.S .

竜馬も一緒にいた事が美鈴メイリンの告白により発覚し竜馬も怒られることになった。

竜馬と美鈴メイリンは後日、2人で噴水の修理を行った。

弾幕合戦！？（後書き）

（霊使い達の雑談）

日向悠斗様、感想ありがとうございます。

「こんな駄作に感想が来てくれるだけでも嬉しいよな」
「本当ですね」

事実だから何も言えない…

「もっと感想が来るように頑張りましょう？」
「私達も頑張るからさ」

皆ありがとうね。

今回の締めは…アウスだね。

「闇を狩る少年続きます。私達も頑張りますけど作者さんも頑張ってくださいね？」

分かってるよ。

白黒の乱入！

side 魔神竜馬

さて、俺は今めんどくさい状況になっている。

「魔神！早くあいつを倒しなさい！！」

「出来るかな？」

どうしてこんな状況になったんだっけ…

～～回想～～

今日は本でも読むか。

俺はそう思い大図書館に向かった。

「あら…何か用なの？」

「いや、本を読もうと思ってな」

大図書館に着き俺はパチュリーに会った。

「そう、あまり大きな音は出さないようにね」

「分かった」

パチュリーに許可をもらい俺は本を読み始めた。
突然ガラスが割れる音がした。

「はあ…またなのね」

パチュリーは厭そうに呟いた。

また？

「何回か同じ事があつたのか？」

「…何回かなんて生易しい物じゃないわよ！！毎回毎回、勝手に侵入してきて本を持って行くし持って行かれた本は帰って来ないし！！」

…パチュリーがこんなに怒る奴ってどんな奴だよ。
物凄く関わりたくないなあ…

「魔神！！」

「おわっ！？何だレミリア？」

突然、名前を呼ばれたので驚いて見るとレミリアがいた。

「あなたも手伝いなさい！！」

「はっ！？」

俺はレミリアに手を引つ張られながら大図書館から出た。
何がどうなってるんだよ！？

「…レミリア、これは何だ？」

「美鈴メイリンよ。居眠りして魔理沙の侵入を許したから咲夜にお仕置きされたのよ」

俺の目の前にあるナイフが数本刺さっている物体をレミリアは美鈴メイリンだと言った。

…気にしない事にしよう。

「恋符『マスタースパーク』！！」

「はっ？」

俺の目の前を白い極太の砲撃が通過した。
見れば八卦炉を構えた白と黒の服を着た魔女？がいた。
そして現在に至る。

〜〜回想終了〜〜

…っか俺まだ魔力が使えないんだけどなあ。

「来ないならこっちから行くぜ！！」

俺が考えていると相手は魔力球の様な物を生成した。
反射的に俺は弾幕の薄い場所に行き回避した。

「危ね〜…」

とにかく魔力が使えない以上肉弾戦しかないな。
俺は相手に接近した。

「接近させるわけにはいかないぜ！！」

俺が接近しようとするすると相手は空に飛び上がった。
どうするか…
ん？

何かカードみたいなのが見えたような気が…

「魔符『スターダストレヴァリエ』！！！！」

「ちよっ！？マジか！！？」

俺は目を閉じ咄嗟とつに腕を交差して身を守る体勢をとった。

…
あれ？

衝撃が来ない？

「全く、勝手に諦めてもらっては困るわね」

「…え？」

俺が目を開けると目の前にレミリアの顔があった。

レミリアが翼で俺を守ってくれたらしい。

…って顔が近い！！

「？顔が赤いわよ？」

「き、気にしないでくれ…」

レミリアは美少女なので顔が近いと緊張するのだ。

…ロリコンだと思った奴出てこい。

「で？これからどうするの？ずっとこのままって訳にもいかないでしょう？」

「ああ、だから…」

俺はレミリアに作戦を伝え始めた。

side out

side 第3者視点

魔符『スターダストレヴァリエ』は徐々に消えて行った。
効果が切れて行ったのだ。

「レミリアが助けに入るのは反則だと思っただが…」
「彼は今この館に住んでいるよ。館の主として助けるのは当然で
しよ」

魔理沙の呟きにレミリアが答えた。

「…まあ良いさ。誰が相手でもあたしは全力で戦っただけだぜ！」
「勝てるかしらね？」

レミリアは不敵な笑みを浮かべていた。

魔理沙は竜馬の事も忘れてレミリアの方を向いた。

「チャンス到来！！」
「なっ！？」

突然、魔理沙の背後に竜馬が現れた。
魔理沙は驚いて反応が遅れた。

「？閃天華？」
「がはああああ！！」

竜馬は魔理沙の背中に掌底を打ち込んだ。
衝撃で魔理沙は吹き飛んだ。

「？轟天裂覇？」
「げぶっっっっ！！！！」

さらに竜馬は魔理沙の腹に踵落としを叩きこんだ。
地面に叩きつけられて魔理沙は気絶した。

「…やりすぎじゃない？」
「ああ、やりすぎた…」

レミリアの言葉に竜馬は同意した。

「それにしてもこんな作戦よく思いついたわね？」
「偶然だ偶然」

レミリアの視線は竜馬の背中に注がれていた。

竜馬の背中にはレミリアによく似た翼が付いていた。

この翼はレミリアが操る蝙蝠コウモリで創られている。

ここで竜馬が立てた作戦を教えよう。

- 1・レミリアの蝙蝠コウモリを竜馬が受け取る。
- 2・レミリアが魔理沙の注意を引き竜馬は移動する。
- 3・竜馬が自分の背中に蝙蝠コウモリを付ける。
- 4・空に飛び上がり魔理沙を倒す。

と言うものである。

穴だらけで作戦とは言えないが…

レミリアはこの日以降、竜馬の事を名前で呼ぶようになった。

ちなみに魔理沙はパチュリーが回収していった。

大図書館で何があったのかは知らない方が良さだろう…

白黒の乱入！（後書き）

（霊使い達の雑談）

銃王 海様、感想ありがとうございます。

「2日連続で来るなんてびっくりだな」

「嘘かと思いましたよね」

本当だよな。

まさかすぎて2度見したし。

「それでは尚なほのこと頑張らないといけませんね？」

「頑張ろう！おー！！」

おー！！！！

今回の締めは…エリアです。

「闇を狩る少年続きます。私達も頑張ります！」

俺も精進しないとな。

なずなの戦闘能力の調査。

sideクロノ・ハラオウン

僕は今、訓練室にいる。

なずなさんがどれくらい戦闘出来るかを調べるためだ。

「お、お願いします…」

なずなさんは緊張しているのかガチガチだった。

これじゃあダメだな…

「緊張しないでください」

「は、はい…」

大丈夫なのか？

なずなさんは少しだけ落ち着いたようだ。

「最初は魔力球を創れるだけ創ってください」

「分かりました…」

なずなさんの周囲に魔力球が展開されていく。

…ん？

「なずなさん…デバイスを持って無いんですか？」

「…デバイスってなんですか？」

なずなさんはデバイスを持っていなかった。

それでもなずなさんの周囲には魔力球が大量に展開されていたが…

「…竜馬は何も言わなかつたんですか？」

「はい、最初は杖の形の無々さんを借りていて慣れてきたら無々さんが無い状態で練習していたので…」

あゝ…

デバイスを用意できないから無々で代用していたのか。

「…分かりました。とりあえず魔力球を創って行ってください」
「はい…」

そう言つてなずなさんは魔力球を創って行った。

最終的に魔力球は50個程になった。

デバイスも無しにこれだけ創れたらもう才能としか言えないな…

「エイミー！データを記録してくれ」

「はいはい分かつてますよ」

僕はエイミーに言つてデータを保存させた。
もう魔力球は消してもらつても良いかな。

「なずなさんもう消していいですよ」

「あ、分かりました…あれ？」

魔力球を消そうとしてなずなさんは何やら不思議そうな声を出した。
あれ？つて何かあつたのか？

「どうかしたんですか？」

「えっと…魔力球が勝手に動きだしちゃいました…」

…はっ？

見れば魔力球がなずなさんの周囲を物凄い速度で動き回っていた。魔力が暴走しているのか！？

「ど、どうでしょう!？」

「…なずなさんは動かないでいてください。こちらが魔力球を全て撃ち落とします」

僕はS2Uを構えながら言った。

さてとりあえずは外側の軌道を通っている魔力球から撃ち落とすか。

「ステインガレー!!」

魔力光弾ステインガーを発射し僕は魔力球を撃ち落としていった。

10個程破壊したところで魔力球が突然停止した。

「チャンスかな…ステインガースナイプ!!」

僕は魔力光弾ステインガーを放ち一気に撃ち落とすことにした。最初はなずなさんの近くからだ。

side out

sideエイミー・リミエッタ

やっぱりクロノ君は凄いね〜

あんなに的確に魔力球を撃ち落としていくなんて。

「…そう言えば何で暴走してるんだろ？」

調べておいた方が良さそうかな…

私は機材を操作して魔力の暴走の原因を調べ始めました。

「う〜ん…特に暴走しそうな理由は無さそうなんだけどなあ？」
「あら？どうかしたの？」

私が画面を見て唸っているとプレシアさんが声をかけてきました。
プレシアさんなら分かるかな？

「実はなずなちゃんの魔力が暴走していて原因が分からないんです」
「魔力が暴走？…ちなみにその子はデバイスを持っているの？」

デバイス？

そう言えばさつきクロノ君が何か言ってたような…

「確か持っていないそうです」

「ならそれが原因ね。それにその子は今日ここに来たんでしょう？」
なら精神が不安定なんだから暴走して当然よ」

そうやってプレシアさんは歩いて行こうとしました。
ってちよつと待って！！

「な、ならどうすれば暴走は止まるんですか？」

「それなら簡単よ。魔力を暴走させた人間が気絶するか暴走した魔力を全て破壊するか…二択よ」

つまりなずなちゃんを気絶させるか魔力球を全て撃ち落とすかしか
無いってことか…

一応クロノ君にも教えておこう。

「クロノ君！」

「何だエイミィ！今忙しいんだ！」

なずなちゃんの魔力球は軌道などを変えて攻撃的に変化していた。
クロノ君はなずなちゃんの周囲にある魔力球を残り約15個程まで
減らしていました。
とりあえずちゃっちゃんと教えちゃおう。

「クロノ君、魔力の暴走を止める手段は魔力を全て破壊するか魔法
使い本人を気絶させるかの二択しかないって!!」

「そうか…なら魔力球を全て撃ち落とす!!」

クロノ君はそう言って飛んでくる魔力球を回避した。
頑張っつねクロノ君。

なずなの戦闘能力の調査。(後書き)

〔霊使い達の雑談〕

今回はアースラで起こっている事だ。
次回にも続くよ。

「そう言えばなずなの魔力光ってなにいろ何だ？」

なずなの魔力光？

純白の白だよ。

「髪の色と同じですか。安直ですね」

良いじゃん別に…

「竜馬さんはいつ頃戻ってくるんですか？」

さあ？

気分次第と言うか何と言うか…

「それじゃあ後は作者さんの努力次第だね」

うん。

今回の締めは…ウインだ。

「闇を狩る少年続くよ」

やっぱりウインには癒されるなあ…

デバイスの重要性は結構高い。

sideなずな

「ラウンドシールド!!」

私の前でクロノ君が魔力障壁を出して魔力球を防ぎました。

「だ、大丈夫!？」

「平気です。動かないでいてください」

私の周囲には私が創った魔力球が13個:
でも私が操るより断然早い。

「止まって…お願い、止まって…」

私は魔力球が止まるように願い続けました。

それでも魔力球は止まる兆^{きざ}しを見せませんでした。

「くっ!!ワイドエリアプロテクション!」

クロノ君は自分を囲むように魔力障壁を展開しました。

そこに魔力球が全方位からぶつかって行きました。

「なんて威力だ…持たない!!」

魔力障壁には徐々に罅^{ひび}が入って行きました。

このままじゃ!!

「だ、ダメー!!」

誰も傷つけない。

そんな思いが私の中で大きく脈打ちました。

「バレームエッジ!!」

そんな時不意に声が聞こえました。

見ると女の子が魔力球を6個破壊しました。

…私を連れて来てくれた女の子に似ている？

「大丈夫だった？クロノ」

「アリシアか…ああ、大丈夫だ」

アリシアちゃんって言うのかな？

それよりもクロノ君に怪我が無くて良かった。

「それで？これはどういう状況なの？」

「なずなさんの魔力が暴走してコントロールが効かないんだ」

アリシアちゃんはクロノ君に状況を聞きました。

そんな時、魔力球がアリシアちゃんに向かって行きました。

side out

side アリシア・テストロツサ

まったく私のデバイスの状態を見るために訓練室に入ったらクロノが攻撃されているんだもん。

驚いたわよ。

私は飛んでくる魔力球を避けながらしみじみと思った。

「よっ！ほっ！はっ！」

「身軽だな君は…」

クロノが何だか呆れてるけど気にしない。
とにかく魔力球を全て撃ち落とせばいいのよね？

「いくよラブリユス！」

「Yes Master」

ラブリユスは両刃の斧の形状をしている。
色はバルディッシュと同じ黒を基調としている。

「ドリシュヌスエッジ!!」

ラブリユスが私の言葉に反応して魔力の刃を形成した。
これで全部撃ち落とす!!

「たあああああ!!!!」

私の攻撃で魔力球はさらに4個破壊した。
残りは…3個ね。

「!!!気をつけるアリシア!!!」

「分かってるって!!」

突然、3個の魔力球が1つになりました。
サイズも大きくなって…

「それっ!!」

私はラブリユスを振りかぶって思い切り叩きました。

魔力球が真つ二つになりました。

「けっこう余裕だったね？」

「…まだだ!!」

クロノの声で魔力球を見ると魔力球は半分のサイズで2個動いていました。

ちゃんと攻撃したのに!?

「ラブリユス！撃ち抜いて壊すよ!!」

「Yes Master. Barrel Smasher」

ラブリユスは形を変えて刀の形状に変化しました。

「バアルスマツシャー!!」

そしてラブリユスの刀身から砲撃が放たれて魔力球に当たり爆発を起こしました。

うん、ラブリユスの調子は大丈夫だね。

あとは竜馬を手伝えるようになるまで練習するだけ！

side out

side ならずな

アリシアちゃんの砲撃のお陰で魔力球は全部無くなりました。

よかった誰も傷ついてない…

「…後で調査結果等を教えますので食堂等で待っていてください」

そう言つてクロノ君は歩いて行きました。

そう言えば私をここに連れて来た子たちの名前を聞いてなかったよ

うな…

食堂にいるかな？

私はそう考えて食堂に向かいました。

side out

side 第3者視点

「JJJJはどJJ…?」

初めてきたアースラの内部構造をなすなが知っているはずも無くならずな迷子になっていた。

P.S.

その後なすなはプレシアと偶然出会い食堂まで案内してもらった。
その時になすなのデバイスをプレシアが創ると約束をした。

デバイスの重要性は結構高い。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

銃王 海様より贈り物が来ました!!
ありがとうございます!!

「贈り物って何だったの?」

ヒータやアウスには言うなよ?
アースラ組に竜馬のポスターだ。

「確かに言っではダメですね…」

だろ?

とりあえずアースラ組は別室にいるから行ってくるね。

「はい」

「いつてらっしゃい」

↳ 別室

な「何で呼ばれたのかな?」

フェ「さあ?でも良い物があるって言ってたよ?」

ジャ「良い物かどんな物だ?」

アリ「いれば分かるんじゃない?」

ク「何故僕まで…」

ユ「最近出番が無いなあ…」

リ「皆お茶を飲む?」

リ以外「……………いりません!」「……………」
プ「皆、作者が来たみたいよ」

エ「何か持つてるね？」

アル「肉じゃないなら別にいらないよ」

おお、集まってる集まってる。

今回呼んだのはこれを渡すためだ。

アル・ク・ユ以外「……………」これは！！！！！！！！

竜馬のポスターだ。

1枚しかないからジャンケンで決めてくれ。

アル・ク・ユ以外の全員がジャンケンを始める。

（省略）

な「残ったのは私とフェイトちゃんだけだね…」

フェ「みたいだね…」

2人の後ろにはジャンケンで負けた人達が積み上げられていた。

ちなみに作者とジャンケンに参加していない3人は肉を食べたりお茶を飲んだりしていた。

な「最初は…グー！！」

フェ「ジャン…ケン…」

な・フェ「ポン！！！！」

なのは・パー

フェイト・チヨキ

フェイトの勝利！

フェ「やったあ！！」

な「負けた…」

それじゃあ勝ったフェイトに竜馬のポスターを進呈します。
おつかれさまでした!!

フェ「銃王 海様、ありがとうございます!!」

そろそろか？

今回の締めは…ヒータなんだが…
いないからフェイトで!

フェ「はい 闇を狩る少年続きます」

相当ご機嫌だな。

久々の能力発動だ！！

sideレミリア・スカーレット

ふう…

竜馬がこの紅魔館に来てから2週間が経ったわね。
今朝、何だか喜んでたけど何だったのかしら？

「あら？何かしらこれ？」

私は落ちていた紙を見つけました。
スペルカード…とは違うようね。

「どうかしたのですか？お嬢様」

「ああ、咲夜。こんな紙を見つけたのよ」

私は咲夜に見つけた紙を見せました。
咲夜なら知ってるわよね？

「何でしょうか？…どこかで見たような…」

「あ、そんなところにあったのか」

竜馬がこつちに来ながら言いました。

竜馬のものだったのね。

「竜馬、これは何？」

「ん？遊戯王カードっつーもんだ。このカードを40〜60枚の束
にして遊ぶんだ」

遊戯王カード…

とりあえずこれは返しておこうかしら。

「それで何でこれが落ちていたの？」

「ああ、昨日デッキを組みながら歩いてた時に落としてみたみたいでさ」

竜馬は頭を軽く掻きながら言いました。

女顔だから可愛いわね…

「あ、そうだ。良かったらモンスター達を見てみるか？」

「良いの？」

竜馬は笑顔で頷きました。

そして私は竜馬の後を追って中庭に行きました。

side out

side 魔神竜馬

「久々だけど行くぞ。無々、能力発動。形状は決闘^{デュエル}」

『了解しました。能力発動。決闘^{デュエル}』

無々はデュエルディスクに変化した。

さくして何を召喚するべきかな？

ん？レミリアが何だか驚いてるな。

「どうかしたのか？」

「どうかしたのかじゃないわよ！！今、腕輪が喋ったじゃない！！」

そう言えば行って無かったっけ。

「この腕輪は俺の相棒の？虚無と無限？の無々だ」

『よろしく願いますね。レミリアさん』

「よ、よろしく」

レミリアは驚きながらも無々に挨拶を返した。
そこまで驚く事かな？

「まあ良いや。ドロー！えつと？…？マスクド・ドラゴン仮面竜？を召喚！！」

俺の目の前に仮面を付けた赤と白の竜が現れた。
これならそこまで怖くないしおとなしいから大丈夫だろ。

「……………」

「あれ？どうしたレミリア」

驚くかと思っていたがレミリアは特に反応を示さなかった。
竜が普通にいるのか？

「お〜いレミリア〜…レミィ〜…レミレミ〜」

「…はっ！…りよ、竜馬！？この竜は何よ！…！」

何度か呼ぶとレミリアは反応してくれた。
どうやら驚きすぎてフリーズしていたらしい。

「俺の仲間だよ。おとなしいから落ちつけよ？」

「わ、私は落ち着いてるわよ！…！」

レミリアは必死に弁解していた。

これを見て落ち着いてると思うのは誰もいないと思うぞ？
その後も俺は様々なモンスター達を召喚しレミリアを驚かせた。

ク「僕としては別に…」
ユ「く、ください…！」

ユ「ノがすごい勢いで食い付いたな…」

ユ「これを使えば僕にも出番があるはず…！」

そう言う事か。

まあ良いや。

出番は考えておくよ。

今回の締めは来てるしユ「ノ」で。

ユ「うん！銃王 海さんありがとございませす！！闇を狩る少年続
くよ…！」

どんなふうに出番を出そうかな…

ク「…ふう、帰っていいかな？」

妹様との邂逅…と言うか死亡フラグだよな。

side???

?

何だろう？

外が騒がしいなあ…

「何かあったのかな？」

私は歌うのを中断して耳を澄ました。

何だか面白そうだな…

「見に行ってみよう」

私は自分の力を使って鉄の扉を破壊しました。
どこにいるのかな？

side out

side 魔神竜馬

なんだ!?

凄い爆発音がしたぞ!?

「まさかあの子が出てくるなんてね…」

あの子？

レミリアは知っているのか？

「気にしないでちょうだい。あなたに被害は出させないから」
「え？ちよっ!?!レミリア!?!」

レミリアはそう言っただけで俺の言葉を聞かずに飛んで行った。
いったい何なんだ？

side out

sideレミリア・スカーレット

フランが出てくるなんて予想外だったわ…

「お嬢様！フランお嬢様が！！」

「分かってるわ！急いでちょうだい！絶対に竜馬に被害を出しちゃダメよ！！」

私が飛んでいると咲夜と合流しました。

急いでフランを見つけて幽閉しないと！！

「あゝお姉さまだゝ」

「…っ！どうして部屋から出たのフラン！」

曲がり角を曲がるとフランがいました。

私の問いにフランは面白そうに答えました。

「だって面白そうな人間が来てるんでしょ？私も会いたいよ」

「あなたはその人間を殺してしまうでしょ！！」

フランは不貞腐れたように言いました。

「そんなことしないよゝただ少し遊んでもらうだけだもん！」

その遊んでもらうのが危険なのよ！！

「良いから部屋に戻りなさい！」
「やくだ！私も遊んでもらうの！！！」

そう言つてフランは飛んで行きました。
早く追いかけないと！！

side out

side 魔神竜馬

::!?

何だろっ死亡フラグが立つた気がする。

「…一応なつておくか。無々、形状変化。形状は双剣」
『了解しました。能力発動。双剣』

無々は日本刀と西洋剣に変化した。

「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥轉身』」

俺は呪文を唱えてフェニックスに変身した。

本当に何なんだろうな？この嫌な予感。

「見つけた！ えいっ！」

「へ？くぶっ！！！」

声が聞こえたので声のした方を向くと腹に何か突撃して来た。
いてえええええ！！！！！！

俺は後ろに吹き飛ばされた。

「げほっ…げほっ…な、何なんだいったい…」
「あなたがここに来ている人間ね。私と遊びましょう?」

俺が目を開けると目の前に赤と白のゴスロリを着た少女が立っていた。

えっと…名前なんだっけ?

「君は…いったい誰なんだ?」

「私?私の名前はフランドール・スカーレット早く遊びましょ」

スカーレット?

もしかして…

「レミリアの妹か?」

「正解」

フランドールは嬉しそうに答えた。

「そう言えば遊ぶって言うてたけど何をして遊ぶんだ?」

「えっとね〜弾幕ごっこ!」

弾幕ごっこってことは美鈴メイリンとか白黒魔女の時みたいな事が…
フェニックスだし死なないから良いか。

「良いよ」

「やったあ それじゃあいつくよ〜!」

そう言ってフランドールは飛び上がった。

今気付いたけど変わった翼だなあ。

「禁忌『クランベリートラップ』!！」

フランドールの周囲に様々な弾幕が出現した。
まあこの量ならまだ避けられるかな。

「まだまだいつくよ〜!！」

「げっ!？」

フランドールの言葉に呼応して弾幕の量が増えた。
避け切れるかなあ…

side out

side 第3者視点

フランの弾幕を竜馬は紙一重で避けていた。
そこにレミリアと咲夜がやって来た。

「遅かったようね…あら？竜馬の姿が違うわね」

「あの両手に持っている刀剣はどこから出したんでしょうか？」

レミリアは後で竜馬に聞こうと心に決めた。

ちなみに咲夜はあと片づけの心配をしていた。

「すごいね〜。ここまで避けられるなんて久しぶりだよ」

「フランドールこそ凄い量の弾幕を出してるじゃないか」

竜馬は双剣で弾幕を弾きながら言った。

「む〜…フランドールじゃなくてフランって呼んで!！フ・ラ・ン
!！」

「わ、分かったよフラン」

フランはむくれながら言った。

自分の名前をフルネームで言われるのが気に入らないらしい。

「うらああああっ！！！！」

竜馬は双剣を振るって弾幕を全て叩き落とした。

「きゃあっ！！」

叩き落とした弾幕がレミリアの近くに落ちた。

「危ないじゃない！！気を付けてちょうだい！！」

「す、すまん……」

竜馬はレミリアに謝った。

ちなみに中庭はすでにぼろぼろである。

「うーん、次は…禁忌『カゴメカゴメ』！」

フランが次に出した弾幕は竜馬の周囲を囲んで出現した。

「これは…避けられないな。無々、形状変化。大鎌」

『了解しました。形状変化』

無々は竜馬の言葉に反応して大鎌に変化した。

妹様との邂逅…と言うか死亡フラグだよな。(後書き)

〈霊使い達の雑談〉

今日も今日とて贈り物が来ました！

ありがとうございます！

「今回は何だったんだ？」

今回来たのはクロノに無限弾ライフルだ。

と言う訳でクロノ！

ク「今回は僕にですか。銃王 海さん、ありがとうございます。これを使えば竜馬に勝つための戦略が広がるかな…」

結構喜んでいるな。

魔力弾が撃てるみたいだから気に入ったんだな。

今回の締めはクロノで。

ク「分かった。闇を狩る少年続きます。ん？これはA・Sの時から使用可能なのか」

らしいな。

と言う訳でA・Sまでこのライフルは封印な。

ク「分かった。預かっていてくれ」

おう、それでは！！

決着とそれから…

sideフランドール・スカーレット

思った通り竜馬はとつても楽しい
今度はあの鎌で何をするのかな？

「行くぜ、フラン！」

そう言つて竜馬は弾幕を避けながら近づいてきました。
凄く凄く！

「それじゃあこれならどう？」

私は竜馬を囲むように弾幕を配置しました。
これなら避けられないよ？

「ちっ！…死神の鎌！！」
デスサイズ

竜馬は鎌を光らせて弾幕を全て斬り掃いました。
あんなこともできるんだ。

「面白い。面白いよ竜馬！」

「そうだな。確かにこの遊びは癖になりそうだ！」

やっぱり竜馬は私の事を分かってくれた！
でも！

「負けないよ竜馬！Q.E.D.『495年の波紋』！！」

私はそう言って一番強いスペルカードを使った。

side out

side 魔神竜馬

フランのあの言い方からしてこれが一番強いものなのだろう…
これを避け切れれば勝てるはず!!

「気合い入れて行くか!! 無々、形状変化。日本刀」

『了解しました。形状変化：全て斬り伏せるつもりですか?』

無々の問いに俺は無言で頷いた。

他に方法も無いしな!!

「いつけええええ!!!!」

フランの弾幕が正面、右、左から飛んできた。
結構凄い量だが避け切れるか?

「…まあ、避け切らなきゃ…勝ちは無い!!」

俺はそう言って弾幕に挑んだ。

side out

side レミア・スカーレット

私は竜馬とフランの戦闘に啞然^{あぜん}とするしかありませんでした。
フランとあそこまでやりあうなんて…

「凄い力ね…」

「お庭が…」

隣で咲夜が膝をついていました。
ぼろぼろになった庭がとてもショックだったらしい。

「後で竜馬にも手伝わせなさい？」

「…はい」

咲夜は静かに答えました。

紅魔館の外に被害が出なければいいけど…

「咲夜：美鈴メイリンはどうしたの？」

「門番をしているのではないのですか？」

咲夜は首を傾げながら言いました。

門番をしてもこんな音がしたら見に来るはずよね？

「…もしかして寝ている、なんて事は無いわよね？」

「…見てきます」

そう言つて咲夜は入口に向かいました。

おそらくまた、お仕置きね。

side out

side 魔神竜馬

クソ！！

避け切れねえ！！

「だらあっ！！」

俺は弾幕を切り捨てながら思った。

予想していたより弾幕の間隔が狭く速度もランダムで避けにくいの

だ。

「これなら私の勝ちかな」

「まだまだ!!」

フランが笑顔で言ったので俺は言い返した。
こんなもんじゃ諦めねえよ!!

「…はあああああ!!!!」

俺は日本刀の形状の無々に魔力を乗せた。
竜巻を斬った時のように!!

「何をするつもりかな？」

フランは興味深そうに見ていた。
弾幕にはぶつかっているが気にしない!!

「はあっ!!!!」

俺の掛け声とともに無々に乗せた魔力が巨大な刃を形成した。

「!?!?…そんなことまでできるんだ!! 凄いよ竜馬」

俺の形成した巨大な刃を見てフランは嬉しそうに言った。

side out

side 第3者視点

フランは嬉しそうに竜馬の形成した刃を見ていた。

竜馬は嬉しそうにフランの形成した弾幕を避けながらフランを見て

いた。

「フラン!!」

「竜馬!!」

「これで…終わり(だ)(よ)!!」

2人はそう言っただけで同時に自分達が今出せる全力で攻撃をした。竜馬は自分の形成した魔力刃で。

フランは弾幕を一つに集めて。

2人の攻撃はぶつかり合い凄まじい衝撃波を起こした。

その衝撃は幻想郷全土に広がって行った。

～博麗神社～

「暇ね」

少女が暇そうにしていると突然もの凄い衝撃が来た。

勿論ぼろぼろの神社がもつはずもなく屋根瓦が大量に飛んで行った。

「私ん家がー!!!」

少女は衝撃が来た方角を睨みつけた。

「…いい度胸じゃない。私ん家を壊した罪は重いわよ…」

～永遠亭～

「これを入れれば新しい薬が…」

赤と青の服を着た女性が薬品を扱っていた。するとそこに凄い衝撃が来た。

「きゃっ!?!」

女性は驚いて手に持っていた薬品の片方を落としてしまった。

「危ない!?!」

近くにいたうさ耳を付けた女性がすかさずキャッチしたので大事には至らなかったが。

「危なかったですね師匠」

「そうね…さっきの衝撃は何だったのかしら?」

女性は衝撃が来た方角を見ながら言った。

く妖怪の山く

「何か面白いニュースは無いですかね?」

カラス天狗の少女は飛びながらぼやいた。
そこに凄い衝撃が来た。

「ひゃあっ!?!」

衝撃で少女は少しだけふらついた。

それでも落ちる事が無かったのはカラス天狗のプライドが許さなかったのだらう。

「あややや…何でしょうかね今の衝撃は?確か…紅魔館からですね」

少女は衝撃が来た方角を見ながら呟いた。

「うーん…面白そうなニュースの気配がしますね」

少しだけ考えると少女は衝撃が来た方角に向かって飛んで行った。

side out

sideレミア・スカーレット

衝撃が収まって私は目を開けました。

竜馬とフランは？

「…満足そうに気絶してるわね」

2人を探してみると中庭の中心で2人は気絶していました。
後片付けは2人が起きてからね。

side out

sideフェイト・テストロッサ

はっ！

また竜馬を好きな子が増えた気がする！！

「ど、どうかしたの？」

「あ、いえ。何でも無いです」

私はなずなさんの言葉に反応し答えました。

今私はなずなさんのデバイスの調整の手伝いをしています。

母さんが作ったらしいんだけど…

『どうかしたのですか？』

「…何でも無いよバルディッシュ」

絶対に性能が異常な気がする。

私の目の前にはうけた近く of 魔力球と結界の中にいるなずなさんです。
これは勝てないよ!!

決着とそれから…（後書き）

～霊使い達の雑談～

再びですが贈り物が来ましたー！！
ありがとうございますー！！

「今回はな～に？」

今回はリモコン爆弾を100個セットだよ。

「すごい量だね～」

これは…そうだな

リンディとエイミィあたりに渡す事にしよう。
アースラの装備が少ないとか嘆いていた気がするし。

「そんな理由で良いんだ…」

良いの良いの。

今回の締めは俺だ。
闇を狩る少年続きます。

読者様がた今後ともよろしくお願いしますー！！

「よろしくお願いしま～す」

なずなのデバイスの性能は異常。

side プレシア・テストロッサ

…うん。

やりすぎちゃったかしら？

私はなずなちゃんとフェイトの練習試合を見ながら思った。

「プレシアさん。あなたいったいどんなデバイスを創ったんですか！？」

「え？ただ彼女に最適なように創ってその他に魔力を3%程込めれば魔力球を創れるようにした位かしら？」

他にももう一つだけ機能があるけど…

私がそう言うときクロノは啞然としていた。

やりすぎだったようね…

「私達もあれくらい出来るようになるうねレイジングハート」

『そうですね。頑張りましょう』

なのはちゃんとレイジングハートはライバル意識に燃えているようね。

ちなみにアリシアは部屋で新しい魔法を構築しています。

side out

side フェイト・テストロッサ

私は魔力球を避けながらなずなさんを見ました。

なずなさんは移動が出来ないみたいだね。

「いくよバルディッシュ」

『Yes Sir.』

私の言葉にバルディッシュは答えた。
とにかく動けないなら攻撃も当てやすいよね？

『Arc Saber』

「っはあー！」

私は三日月型の魔力刃を飛ばした。
これならあの結界を壊せるはず！

「…えっ!?!」

驚きの余り私は声を出してしまいました。
何故なら私の放った魔力刃に周囲に飛んでいた魔力球がぶつかり撃ち落とされたからです。

これをなずなさんがやったの!?!

side out

side なずな

な、何が起こったの？

私の方に飛んできた魔力刃を私が創った魔力球が勝手に撃ち落としました。

『自動迎撃モードを発動しました』

「あなたがやったの…?」

プレシアさんが創ってくれたデバイスがいきなり喋りました。
この子喋れるんだ…

『はい、あなたが私のマスターですね。私の名前を入力してください』

「私が名前を？」

名前：

鉄壁の盾：

「決めた：あなたは皆を守るための鉄壁の盾。アイギス」
『了解しました。デバイス名、アイギス。登録しました』

そう言つてアイギスは光り始めました。
えっ？何々！？

『Stand by・Ready・Set up』
「えっ？えっ？？」

気が付くと私の恰好は全然違う物に変わってました。
まず上が白とピンクのジャケット。
次にスカートが伸びて太もも近くまでの長さになりました。
そしてアイギスが大きな二つの盾になりました。
右の盾には三角形が上向きに描いてあり左の盾には三角形が下向きに描かれています。

side out

sideプレシア・テスタロッサ

あら、発動したようね？

私があのでバイスに入れたもう一つの機能。

それはデバイスによる魔力球操作、そして自動迎撃の設定を一つにまとめたもの。

「あれも設定した事なんですか？」
「ええ、そうよ。驚いたでしょう？」

呆れながら聞いてくるクロノに私は得意げに返しました。
だって面白そうだって思っちゃったんだもん。

「結界に使用されている魔力量が増えたんですけど!？」

「ああ、デバイスが起動したから強化されたのね」

元々なずなちゃんも魔力障壁を創るのが得意だったからその長所を
さらに伸ばしたのだ。

あのデバイスは創っていて結構面白かったのよね。

アリシアのデバイスを創ってから暇だったからちょうど良かったわ。

なずなのデバイスの性能は異常。(後書き)

「霊使い達の雑談」

贈り物が来ましたー！！

ユタ様ありがとうございます！！

「今日来たのは何だったんですか？」

聞いて驚くなよエリア。

アースラ組にロー・アイアスと竜馬の寝顔の写真だ。

「ちよっ！？それはっ！！」

びっくりだろ？

と言う訳で別室に行くってくるね。

「は、はあ。行ってらっしゃい」

「別室」

な「今回も呼ばれたね」

フエ「また竜馬関係かな？」

ジャ「今回は負けぬぞ！」

アリ「私も負けない！」

ク「僕は呼ばれる必要があるのか？」

ユ「エクスカリバーを早く使ってみたいんだけどなあ…」

リ「皆お茶を…」

リ以外「……………いりません！！」「……………」

リ「最後まで言わせてくれても…(泣)」

プ「今日も平和ね」

エ「そうですね」
アル「がっ…がっ…」

何でアルフは肉を食ってるんだ？

アル「ん？持ってきたんだよ。あげないからな」

分かってるよ。

今回読んだのはこれを渡すためだ。

ク「これは何だい？」

ロー・アイアスって言って投擲武器や、使い手から離れた武器に対して無敵という概念を持った概念武装だ。

光で出来た七枚の花弁が展開、一枚一枚が城壁と同等の防御力を持つ。

ただし通常武器には物凄く弱いから。

リ「それって結構凄くないかしら？」

まあ、スター・ライト・ブレイカー位なら防げると思うぞ？

エ「物凄い堅さだね…」

そうだな。

んで？

誰か欲しい人。

ジャ「我にくれぬか？これで竜馬を守るのだ」

その場合もう一つの贈り物を貰えないけどそれでも良いのか？

ジャ「…かまわぬ。この盾で竜馬を守れるのなら!」

そうか。

じゃあこれはジャバウオックの物だ。

ジャ「うむ。ユタ様、このような物をくださりありがとうございます」

それじゃあ残りの人にはこれね。

全員「……………」これは!……………」

竜馬の寝顔の写真だ。

これも一枚しかないぞ。

今回もジャンケンで決めてくれ。

～省略～

な「フェイトちゃんはポスターがあるからダメなの!」

フェ「きゃあああ!」

なのは、デイベインバスターを撃つなよ…

ユ「負けない!」

ク「僕だって!」

ユーノ、クロノお前等男だろうに何故竜馬の寝顔の写真を欲しが…

リ「ジャンケンをしていませんよね?」

そうだな。

ちなみにプレシア、アルフ、リンディ、ジャバウォックはこちらでのんびりとしている。

アリ「私が勝つー!!」

エ「そんな事はさせないよー!!」

↳さらに省略↳

アリ「最後は私となのはだね」

な「みたいだね」

クロノとユーノはアリシアとなのはのコンビネーションによって倒されていた。

アリ「最初は…グーー!!」

な「ジャン…ケン…」

アリ・な「ポンー!!」

アリシア・グー

なのは・パー

なのはの勝利!

な「やったのー!!」

アリ「負けちゃった…」

はい、それじゃあ勝ったなのはにこの竜馬の寝顔の写真を進呈します。

おつかれ!!

な「ユタ様、ありがとうございます!!」

それじゃあ今回の締めは…なのはで。

な「はい 闇を狩る少年続きます!!」

ご機嫌だね

バルディッシュから黄色の砲撃が放たれなずなさんの結界にぶつかりました。

これで結界が破れていなかったら私の負け…

「やった!？」

私は着弾と同時に上がった煙を見ながら言いました。

そして徐々に煙が晴れて行きました。

結界は…

…破れていました。

「今がチャンス!!バルディッシュユ!!」
『Scythe Form』

バルディッシュユは再び鎌の形状になりました。
今しかないんだ!!

「えっ?えっ?」
『自動迎撃モード』

なずなさんのデバイスが自動迎撃を開始したようです。
それでも私の速さには追いつけません。

「っはあ!!」
「きゃあ!!」

私はバルディッシュユを思い切り振りかぶってなずなさんを攻撃しました。

なずなさんは咄嗟に両手の盾で防ぎました。

side out
side ならずな
危なかった…

私はアイギスでフェイトちゃんの攻撃を防ぎました。

「大丈夫？アイギス」

『大丈夫です。それよりも一旦離れて距離を置きましょう』

確かに私は近くの戦いはできないもんね。

アイギスの言うとおり離れなくちゃ。

「させない!!」

私が離れようとするとならフェイトちゃんがそれを許しませんでした。どうしたらいいの!?

『マスター、二つの盾を向かい合わせて一つにしてください』

「え？分かった」

私はアイギスに言われたとおりに二つの盾を合わせました。するとアイギスがまた光り出しました。

『合成、All Defencer mode』

そう言っただけアイギスは私の周りに小さな盾として出現しました。私の事を守ってくれているの？

「ありがとうございます。行くよ!」

私はもう一度魔力球を創りだしました。これをフェイトちゃんに向けて放つ!

「くっ!?!」

フェイトちゃんは少しだけ辛そうに弾きました。
弾くだけじゃ私の魔力球は消えないよ!!

「えっ? きゃあっ!!」

弾いた魔力球が背後からぶつかりフェイトちゃんは倒れました。
これで終わり?

side out

sideプレシア・テストロッサ

フェイトが負けてしまったようね…

でもあのデバイスの性能は十分なようね。

「…それじゃあフェイトを起こして皆でお茶にしましょう」

私は皆にそう言って練習室に向かいました。

練習試合を終えて…（後書き）

～霊使い達の雑談～

感想と贈り物が来ました！！

ユタ様、銃王 海さんありがとうございました！

エリ「今回は何ですか？」

えつとまず最初に性転換薬。

次に竜馬の寝顔&パジャマ姿（少し着崩れしてる）の抱き枕。FF7のマテリア『かいふく』。だな。

ウィ「最初に凄い物があったね…」

大丈夫だ。

性転換薬はその内番外編で使うから。

それじゃあ贈り物を渡しに行ってくるね。

ウィ「行ってらっしゃい」

～別室～

…あれ？

今日は特に騒がしくないんだな？

な「あ、作者さん」

今日は何で静かなんだ？

な「クロノ君とユーノ君にちょっとお話があったから……」

そうか……

つと、なのは、フェイト、ジャバウォックの三人に竜馬の寝顔&パジャマ姿（少し着崩れしてる）の抱き枕が送られてきたぞ。

な「やったあ!!」

フェ「ありがとうございます!!」

ジャ「我にもあるのか!? 本当に感謝する!!」

三者三様だけど喜んでるな。

んでもって他7名。

この抱き枕が一つだけ余っている。

誰か欲しい物はあるか?

アリ「私に下さい!!」

ク「僕にくれ!!」

ユ「いや僕に!!」

他の4人は?

リ「流石に砲撃を撃たれたくないわ……」

プ「娘が持っているのを見ているだけで十分よ」

エ「あそこに入って行く勇気が無い……」

アル「腹が減ったねえ」

さいですか。

あ、それならこの『かいふく』マテリアを4人の内で決めてくれ。

4人「……分かった（わ）（よ）」「……」

さて、3人の方はどうやって決めるのかな？

…目の前を砲撃が横切ったんだが。

ク「ブレイズキャノン!!」

アリ「バアルスマツシャー!!」

ユ「カリブルヌス!!」

何やってるんだこの3人は…

ちなみになのは、フェイト、ジャバウオックは抱き枕を大事そうに持ちながら結界を張っていた。

プ「作者さん、『かいふく』マテリアなんですけど私が貰う事になりました」

あ、そうなの？

それじゃあ銃王 海さんにお礼を言っておいてくれ。

プ「分かったわ、銃王 海さんありがとうございます。大切に使用してもらいますね」

3人はどうなったかな？

アリ「…しよ、勝負がつかないね」

ク「そ、そうだな…」

ユ「右に同じ…」

疲れているみたいだな。

もうジャンケンで決めたら？

アリ「そうね、そうしましょうか」
ク「そうだな」

ユ「流石に疲れたからね」

そう言つて3人はジャンケンを始めた。

〜省略〜

23回目のあいこ。

アリ「あいこで…」

ク「しょ…!」

ユ「またあいこだ…」

〜さらに省略〜

51回目のあいこ。

ク「あいこで…」

ユ「しょ…!」

アリ「またあいこね…」

〜さらにさらに省略〜

108回目のあいこ。

ユ「あいこで…」

アリ「しょ…!」

ク「…!」

ユーノ・パー

アリシア・チヨキ

クロノ・パー

アリシアの勝利!!

アリ「やったあ!!」

ユ「負けた…」

ク「くっ…」

それじゃあ勝ったアリシアにこの抱き枕を進呈します。

アリ「ユタ様ありがとうございます!!」

それじゃあ今回の締めは…プレシアさんかな。

プ「私? 闇を狩る少年続くわ。これで良いのかしら?」

大丈夫大丈夫。

後始末はしつかりと！

side 十六夜咲夜

さて、竜馬様とフランドールお嬢様が起きて来るまでお嬢様にお茶を準備しなくては。

「さ、咲夜さん…このナイフを抜いて欲しいんですけど…」
「ダメです。すぐに門の警備に向かってください」

私は美鈴^{メイリン}に言って歩き始めました。
まったく…

居眠りさえしなければ刺されないというのに。

「咲夜お茶はまだかしら？」
「ただいまお持ちします」

美鈴^{メイリン}の事で頭を悩ませている暇は無いわね。
急がなくちゃ。

お嬢様に呼ばれて私は急いでお茶の準備をした。

side out

side 魔神竜馬

ん…？
俺はいつたい…？
何か乗っている？

「…むにゃ…えへへ？…」

！？

喋った!?

いったい何が…

俺は恐る恐る目を開けた。

「…何でさ」

俺の上にはフランが乗っていた。
どういふ事だよ。

「とりあえず上からどかすか…」

俺は起き上がりフランを上からどかした。
あゝ思い出した…

「最後の攻撃で相撃ちだったんだな…」

そう言えば中庭が滅茶苦茶になってたな。
早く中庭に行つて元通りにしないとな。

「…咲夜さんが怖いな」

俺は身震いをしながらも急いで中庭に向かった。

side out

side パチユリー・ノーレッジ

竜馬が来てからもう二週間と数日が経つたわね。
そう言えばさっきの轟音は何だったのかしら?

「ねえ、何があつたのか教えてくれないかしら?」

「こあ?実は妹様が部屋から出て竜馬様と戦つたようなんです」

ああ、フランが出てきたから轟音が聞こえたのね。
…竜馬と戦った？

「ちよつ！？それで竜馬は！？」

「へっ？無事ですすよ？妹様と相撃ちらしいですよ」

無事なのね、良かった。

あら？

どうして私は竜馬の心配をしているのかしら？

「不思議ね…？」

私は首を傾げました。

…小悪魔が何やらニヤニヤしているわね。

「何よ…」

「いえ、何でも無いですよ？」

それでも小悪魔はニヤニヤした表情を変えなかった。
とりあえず気に入らないから撃っておきましょう。

「日符『ロイヤルフレア』…」

「こあつ！？こあー！！」

本当に何なのかしらこの感情は？

side out

side 魔神竜馬

今、俺はフェニックスの姿で壊した中庭を修復しています。

…と言うか、

「散らかさないでくれないか？フラン…」

「え…」

俺は近くで壁に穴を開けているフランに言った。

何で穴を開けてるんだ？

「だって暇なんだもん！」

「…遊んだ後の後片づけをしないともう遊んであげないよ？」

聞いた感じではフランと遊べるのは俺を含めても数人しかいないらしいからな。

それを聞いてフランは壁に穴を開けるのを止めた。

「…これで良いの？」

「ああ、後は俺がこの中庭の修復が終わるまで待っていてくれ」

フランは渋々と言った表情で言った。

根は良い子だよな。

「うん…それじゃあ俺と一緒に歌う？」

「歌？…うん、良いよ！」

おそらくだが俺がこの館で聞いた歌はフランの歌だろう。だったらフランは歌が好きはずだからな。

「それじゃあいくぞ？」

「どんな歌？」

何だか元気づけられているような…
そんな歌…

「行くわよ咲夜」

「はい、お嬢様」

私は咲夜を連れて竜馬が歌っている所に向かいました。

s i d e o u t

s i d e パチユリー・ノーレッジ

「~~~~」

何か聞こえるわね…

「…どうしたのよ」

「あ、いえ。とても綺麗な歌だったのでつい…」

私はボーっとしている小悪魔に声をかけた。
歌？

「少しだけ聞きに行ってみましょうかね…」

私は大図書館から出て行きました。

後始末はしつかりと！（後書き）

今回は諸事情につき霊使い達の雑談はお休みです。

明日今日の方も合わせて書きますのでよろしくお願ひします。

「　　」

いつの間にか俺の歌のコンサートみたいになっていた。
フェニックスの声だからか？

「　　」

関係無いか。

とにかく歌を歌い続けるだけだしな。

「　　」

俺は翼を広げた。

飛び上がって歌うか。

「　　」

俺は空中を旋回しながら歌い続けた。

フランも飛び上がり一緒に旋回している。

「　　」

俺は下にいる人達に手を差し伸ばした。

すると下にいたレミリアやパチュリーたちが飛び上がって来た。

「　　」

そして飛び上がった全員で様々な軌道で飛行した。

見れば全員笑顔で飛んでいた。

「　　」

もうそろそろでサビに入るな…

「　　」

俺は自分の翼で自分を包んでいった。

「　　」

飛ぶのを止めた事によって俺の体は地面に向かって落ちて行った。

「　　」

地面にぶつかる直前に俺は翼を開き羽ばたいた。

「　　」

そして再び上昇した。

レミリア達は驚いた表情から安心の表情に変わった。

「　　」

俺は両手を組んだ。

見た目的には祈りをしているかのようなポーズだろう。

sideout

sideレミリア・スカーレット

「　　」

私達の中心で竜馬が歌っている。
いつの間にやら紅魔館の外の者達まで来ているわね。

「　　」

竜馬は組んでいた手を離して頭上に上げた。

「　　」

そして上げた手を地面に向けて一気に下ろした。
どうやらこの歌はこれで終わりのようね。

「…ところで何でみんな集まって来たんだ？」

竜馬は不思議そうに聞いてきた。
そこまで不思議な事かしら？

「あなたの歌が聞こえてきたからよ」

私がそう言つと竜馬は照れたように言いました。

「へたくそだったと思うんだが…」

「上手でしたよ。ねっ？パチュリー様」

「そ、そうね／＼／＼／」

竜馬の言葉に小悪魔が答えました。

パチエはどうして顔が紅くなっているのかしら？

「と、とりあえず地面に降りるか！」

そう言つて竜馬は降りて行きました。
結構楽しいのだけれど…

「竜馬！！今度は私の知つてる歌を教えてあげるから一緒に歌お
ん？良いぞ」

地面に降りてフランが竜馬に飛び付きました。
…何だかイライラするわね。

「どうかしたのか？レミリア」
「何でも無いわ…」

竜馬が突然声をかけてきました。
顔に苛立ちが見えたのかしら？

side out
side 魔神竜馬

レミリアからピリピリした空気を感じたんだが…
何だっただんたろうな？

「…なあパチュリー俺っていつまでここにいるんだ？」
「レミィに聞いてみないと分からないわね」

レミリアに？
後で聞いてみるか。
それにあまりのんびりしているとひだまりスケッチの世界が？闇？
に壊されちゃうしな。

歌ってどの世界でも共通だな。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

昨日はすみませんでした！！

ウィ「土下座をしていますので許してください」
ヒ「それより贈り物が来たんだろ？早く書けよ」

はい、銃王 海さんより『シールド』のマテリアと『バハムート』の召喚石。

そして、ユタ様より王の財宝を竜馬に、アースラ組に優特製ケーキセット(シヨート シフォン モンブラン ブランデー ロール チョコレート カステラ カトルカール ガトーシヨコラ シヤルロット フルーツ ブルーベリー ブッシュ・ド・ノエル)、^{アウテ}霊使い全員に前回貰った竜馬の抱き枕、ユーノに風王結界と全て遠き理想郷^リそしてアルトリアの戦闘服&私服(両方とも男物に直してある)、傷魔力回復剤を200個、お二人様限定温泉旅行二泊三日券(もちろん混浴もあるよ)邪魔が入らないようにこっちの世界への転送札、投影魔術が使えるようになる術式です。

ヒ「ユタ様ありがとうございます！！！！！！」

ア「ありがとうございます！！！！！！」

いきなり叫ぶなよ…

そして鼻血を拭け。

それじゃあ俺はこれを渡してくるから。

ウィ「いつてらっしや〜い」

（別室）

竜馬「今回は俺も呼ばれたな…」

よっ！

まずはお前に王の財宝と傷魔力回復剤を200個だ。

竜馬「マジか！ユタ様ありがとうございます！」

んじゃ次行くわ。

次にユーノ。

ユ「僕に？」

ああ、お前には、風王結界、アヴァロン全て遠き理想郷、アルトリアの戦闘服
& 私服（両方とも男物に直してある）だ。

ユ「アルトリアって誰？」

キニスルナ…

ユ「分かった。ユタ様ありがとうございます」

次は…アースラ組全員に渡すぞ。

全員「……………？」

優特製ケーキセット（シヨート シフォン モンブラン ブランデー
ー ロール チョコレート カステラ カトルカール ガトーショ
コラ シャルロット フルーツ ブルーベリー ブッシュュ・ド・ノ
エル）だぞうだ仲良く食べるよ？

全員「……………はい!」「……………」

後は…なずなに『シールド』を渡しておくか。

なず「え？私に？」

ああ、お礼を言っておいてくれ。

なず「銃王 海さんありがとうございます」

他には…

ってフェイト!?

フェ「え？」

あゝ踏んじやつたか…

フェ「え？え？」

今フェイトが踏んだのは投影魔術を使用できるようになる術式だったんだよ。

フェ「踏んじやダメなものだった？」

まあ良いか。

お礼をよろしく。

フェ「あ、ユタ様ありがとうございます」

『バハムート』は竜馬の訓練用で良いかな…
後はこのお二人様限定温泉旅行二泊三日券だな。
あっちの世界への転送札も一緒だからなあ。
これは番外編で使う事にしよう。
今回の締めは…竜馬だな。

竜馬「あいよ。闇を狩る少年続きます。と言っかこの傷薬、何か厭な予感がするんだよな…」

気にしない方が良いぞ？

(注意書きの事は言って無いしな)

竜馬「まあ良いけどさ…」

レミリアの企み…悪い事してるみたいじゃない!!

side 魔神竜馬

「なあ、レミリア」

「何かしら？」

俺はレミリアにいつになっただら？ひだまりスケッチ？の世界に戻るのかを尋ねた。

「絶対に戻らないといけないの？」

「ああ、約束をしてあるからな…」

名前も知らない少女との？闇？を破壊するという約束がな…

俺の言葉にレミリアは一瞬だけ悲しそうな表情をした気がした。気のせいかな？

「そう…貴方の言っている世界には明日戻れるわ…」

「本当か！ありがとうレミリア」

俺はレミリアの手を取りお礼を言った。

side out

sideレミリア・スカーレット

竜馬は嬉しそうに中庭に向かって行った。

本当は？影の書？を使えばすぐにでも戻れたのだけれど…

「最初は私のただの意地だったのに…」

いつの間にか竜馬を目で追っている。

不思議な感情が私の中を渦巻いている。

「何なのかしらね……」

出来るのなら私も竜馬に着いて行きたい。
でも、できない……

「私は紅魔館の主あかまじなのだから……」

竜馬が呼んでくれれば……

でもどうやって？

「ん？呼ぶ？…そうだ！！」

私はある事を思いつきました。
私だけじゃ違和感があるわよね？

「パチエ達にも言わなくちゃ！」

そう言つて私はパチエとフラン、そして咲夜、小悪魔、
美鈴メイリンを1つの部屋に呼んだ。

side out

side パチユリー・ノーレッジ

レミィに呼ばれて私達は集まりました。

「何をするのお姉さま？」

「竜馬の助けになる物を創ろうと思つたよ」

レミィは胸を張つて答えました。

竜馬の助けになる物ね…

「具体的には何を創るの？」

「竜馬の持っていたカードを一枚だけ借りてきたの、これと同じように私達の絵を描けば私たち自身が竜馬の助けになれるはずよ！」

そう言ってレミイは一枚のカードを取り出した。

スペルカードとは違うようね。

「何で急にそのような事を？」

「明日…竜馬を元の世界に戻すからよ…」

小悪魔の問いにレミイは答えにくそうに答えました。

そう…明日竜馬は行ってしまふのね。

「え〜〜！！！竜馬いなくなっちゃうの！？」

「…そうよ、だから私達でカードを創って竜馬に渡すのよ。そうすれば少なくとも竜馬は私達の事を忘れる事は無いわ」

フランが大きな声で不満を口にしました。

私としてはレミイの考えがそれだけには思えないのだけれど…

「ふ〜ん…分かった私も竜馬のためにカードを創る！！」

「…私もよ。竜馬には大図書館の整理とかも手伝ってもらったしね…」

私の中に少しだけ寂しいと言う感情が生まれていた。

何でかしら？

「それじゃあ皆で創るわよ！」

「「「はい(うん)(ええ)「「「」

レミィの合図と同時に私達は作業を始めた。

side out

side 魔神竜馬

…何で誰もいないんだろう？

俺は周囲を見渡しながら思った。

周りにいるのはメイド妖精達だけである。

「なあ、皆はどうしたんだ？」

「すみません、御教えることができません。それでは」

そう言つてメイド妖精は行ってしまった。

何かやってるのか？

「暇だな」

「暇なら私の取材を受けてくれませんか？」

！？

俺は慌てて声が出た方を向いた。

「どうも清く正しい射命丸です！」

「あ、どうも魔神竜馬です」

俺は反射的に名乗り返した。

カラス天狗か…

「別に良いですけど俺、明日にはここからいなくなりますよ」

「良いです良いです大丈夫です！」

凄い勢いで食い付いてきたな…
取材ぐらいなら暇つぶしくらいにはなるだろ。

「それでは最初の質問ですが、あなたはどうして紅魔館に？」

「あゝ…気が付いたらこの館にいたんですよ」

俺の答えを射命丸はメモ帳に記録していった。

「ふんふん気が付いたら紅魔館にいた、と。では次に、先日の衝撃波の様な物は貴方が起こしたものですか？」

「衝撃波？良く分かりませんが、その時フランと遊んでいたのが原因かと思えます」

そこまで凄い衝撃だったのか？

レミリアに聞かされても半信半疑だったんだが…

「！？ち、ちなみにフランさんと貴方どっちが勝ったんですか！？」

「え？引き分けでしたよ？」

俺の答えに射命丸は驚きながらメモをとっていた。

やっぱフランと引き分けるのは結構凄い事なのか？

「失礼しました…では最後に、貴方にとって紅魔館とは？」

最後に難しい質問が来たなあ…

でも、俺にとってはこう言うのが一番しっくり来るかな。

「そうですね…かけがえのない仲間達がいる場所…ですかね」

「…そうですねありますがとうございませう。この事は新聞にして幻想

郷中にはらまきますから」

俺の事が新聞の記事になるのか…
あ、なら…

「その新聞さ悪いんだけど一枚だけ取つといてくれないか？また俺が来た時に見たいからさ」

「それぐらい良いですよ それでは失礼しました！」

そう言つて射命丸は飛んで行つた。

多少の暇つぶしにはなつたかな。

「部屋に戻つてデツキの調整をするかな…」

そう言えばさつきレミアがカードを一枚貸してくれって言つたけど何に使うんだろ？

まあ、気にしても分からないか。

俺は部屋に向かつて歩き出した。

レミリアの企み…悪い事してるみたいじゃない!! (後書き)

〜霊使い達の雑談〜

今日も贈り物が来ました!!

銃王 海さんからマテリア『アルテマ』『フルケア』、デバイス擬人化プログラムです。

ユタ様から竜馬に魔力の収束を助ける指輪、皆のデバイスの強化プログラムです。

エリ「竜馬さんのチート度がまた増えましたね…」

気にしない気にしない。

リアルの友達のも言われた事だから。

アウ「そうですか」

んじゃ行ってくるね。

〜別室〜

竜馬「〜」

何で歌ってるんだ？

竜馬「のわっ!?!いつの間に来たんだよ!!!」

ついさっきだよ。

ほら、お前に魔力の収束を助ける指輪だ。

竜馬「お、これは助かるな。ん?おい竜王それは何だ?」

これか？

『アルテマ』と『フルケア』のマテリアだけど…

竜馬「どつちかくれないか？」

え〜？

…じゃあ『アルテマ』のマテリアをやるよ。

竜馬「よっしゃあ！！銃王海さん、ユタ様ありがとうございます！！」

良い笑顔だな。

写真に撮ってお礼として送るか。

竜馬「ちよっ!?!？」

はい、終わり。

んじゃ次に行ってくるな。

竜馬「待て竜王おおおお!!!!」

はい無視無視。

次はデバイス所持者達か…

なの「何なの？」

フェ「さつき竜馬がいなかった？」

アリ「これ何？」

クロ「僕にもなのか？」

ユ「えっ？僕も？」

「ならず「私にもですか？」」

「そう言う事だ。」

「ちなみにユーノはエクスカリバーがデバイスっていう扱いみたいだ。」

ユ「そうなんだ」

「じゃあお礼を言ってくれ。」

6人「……ユタ様ありがとうございます」「……」

「後残ったのは…『フルケア』のマテリアとデバイス擬人化プログラムだな。」

「デバイス擬人化プログラムは番外編で誰かのデバイスに使うとして…」

「『フルケア』はどうするか…」

ユ「どうかしたんですか？」

ん？

「そう言えばユーノってサポート系の魔法が得意だったよな？」

ユ「え？はい、そうですね？」

「ならちょうど良いな。」

「お前に、この『フルケア』のマテリアをやるよ。」

「これは対象の傷を全部治す事が出来る魔法だ。」

「びつたりだろ？」

ユ「うん！銃王 海さんありがとうございます…！」

つとこれで配り終わりかな。

今回の締めは…ユーノだ。

ユ、分かった。闇を狩る少年続きます」

番外編をいつ書こうかな？

？ひだまりスケッチ？の世界に戻る時…少し寂しいな。

sideレミア・スカーレット

私達のカードを創り始めて数時間が経ちました。

「…レミィ、カードはクレヨンで描くものじゃないと思うわよ？」
「あらそう？」

うん…それじゃあ絵具かしら？

パチエに言われて私はクレヨンを片付けました。

「美鈴？…何ですぐに寝ているんですか」

「す、すみません！つい…」

また美鈴メイリンが寝ていたらしいわね。

カードは創れたのかしら？

「お姉さま！こんな感じでどう？」

「…ちよつと絵が大きすぎないかしら？」

フランが私にカードを見せてきました。

描いたカードの絵が元にした物より大きかったからダメじゃないかしら？

「とにかく急いで創りましょう！！明日までに間に合わせるわよ！」

「……はい（うん）（ええ）」「」「」

私の号令に皆が返事をしました。

side out

side 魔神竜馬

うん……

「レッド・デーモンスのデッキが少しバランスが悪いな……」

「しかし他に適役のカードはありませんよ？」

そこが問題なんだよな……

試しに一軍のデッキを二つに分けてみたのだ。

そしたらスター・ダストとレッド・デーモンスのデッキに見事に別れスター・ダストのデッキの方が強くなってしまったのだ。

「……とりあえずはこのスター・ダストのデッキを一軍にしておくか」
『そうですね』

ちなみに他のデッキのカードなども使っているため一軍以外にBFデッキをばらしたりもした。

まあ、レッド・デーモンスのデッキも創ったから良いか？

「もう遅いから寝るかな。おやすみ無々」

『おやすみなさいマスター』

そう言っただけ俺は眠りに着いた。

あ、カード返してもらってないや……

明日で良いな。

side out

side 第3者視点

カードを創るために徹夜をしている紅魔館組。

そして明日？ひだまりスケッチ？の世界に帰るために眠る竜馬。

「パチエ、あとどれぐらいで出来るかしら？」

「後はここを描いてこれを貼るだけよ」

レミリアはパチュリーに聞いた。

パチュリーはカードに最後の仕上げをしラミネート加工のシールを貼った。

「お、お嬢様…もう寝ても…いい、いいですか？」

「うわ！？な、何よ美鈴おどかさないでちょうだい！！」

とてつもなく眠そうな美鈴の表情にレミリアは驚いた。

ちなみにフランは創り終えたと同時に眠ると言って部屋に戻って行った。

「私も流石に眠いわね…」

パチュリーも欠伸を噛み殺しながら呟いた。

「そうねカードも完成したし今日は終わりにしましょう」

「それじゃあおやすみなさい…」

そう言っつてパチュリーは大図書館にある自室に向かって行った。

「こあ！？ま、待つてくださーい！！」

その姿を見て眠りかけていた小悪魔は慌ててパチュリーの後を追いかけて行った。

「私も眠いわね…おやすみ咲夜」

「おやすみなさいませレミリアお嬢様」

そう言つてレミリアは部屋の電気を消して自室に向かった。

「…私は放置ですか？」

美鈴^{メイリン}は眠らないようにと固定された椅子に座りながら呟いた。
と言つても結局は寝ているのが美鈴^{メイリン}クオリティ（笑）

side out

side 魔神竜馬

さて、今日やつと？ひだまりスケッチ？の世界に戻るんだな。
シウドナイを倒さないといけないんだつたな…

「軽く鬱だわ…」

「何か言つたかしら？」

俺の呟きがどうやら聞こえたらしくレミリアが反応した。

「いや、何でも無いよ」

「そう…」

…ところで何で大図書館にいるんだ？

今、俺、レミリア、フラン、咲夜さん、美鈴^{メイリン}の5人は大図書館にいる。

パチュリーと小悪魔さんは大図書館で何か準備をしているらしい。

「来たようね…」

俺達を見つけてパチユリーは喋った。
ん？何だあの本？

「パチユリー、この本はいつたい？」

「この本から貴方が出てきたのよ」

この本から！？

俺は驚いて本を見た。

「その本を開けば竜馬、貴方が言っていた世界に戻るのよ」

レミリアが静かに言った。

そうか。

「あ、ちよつと待ってちよっだい！」

「ほあ？」

俺が本を開こうとするとレミリアが止めた。
何だろう？

「昨日借りたカードを返して無かったわ」

「そう言えばそうだな、ありがとう教えてくれて」

うっかり忘れていたな。

レミリアから俺はカードを受け取った。

「そ、それと…こ、このカードをあげるわ／／／／／」

レミリアは顔を紅くしながら何かを渡してきた。

これは…カード？

「私達だと思つて大切にしなさいよ／＼／＼」
「ああ、ありがとうな」

これを創るために昨日カードを借りに来たのか。
俺は受け取ったカードを6枚デッキケースに入れた。

「それじゃあ俺は行くな？」

「ええ、またいつか会える事を願うわ」

「また遊びに来てね？」

「お嬢様がたの事を忘れてくださいね？」

「来る時は連絡してくださいね？」

「あなたの事は忘れないわ…」

「一緒に本の整理などをしてくれてありがとうございます」

レミリア達6人に見送られながら俺は本を開いた。
そして俺は本に吸い込まれていった。

side out

side シュドナイ

「？千変？仕事です。魔力の高い人物を見つけて殺してください」

「了解した。行ってくるよ俺のヘカテー」

「私はあなたのものではありません」

つれないな…

俺は？星黎殿？から出た。

「魔力の高い人物…か」

そう言えば狩り手と戦った時に強い魔力を感じたな…

あそこに行けば良いだろ…

「確か…ひだまり荘とか言ってたかな？」

俺は進路をひだまり荘に向けた。

？ひだまりスケッチ？の世界に戻る時…少し寂しいな。（後書き）

（霊使い達の雑談）

今日も贈り物が来ました。

来過ぎて何だか申し訳ない気分です。

竜馬「ところで俺はなぜここにいるんだ？」

気にすんな。

贈り物はユタ様より竜馬にエターナルソード、明星二号、テイルズシリーズ全秘奥義集、そしてミラボレアス、バルカン、ルーツの素材で作ったコートとジャケット（夏用と冬用両方）色は黒、赤、白の三色を人数分。

次に銃王 海さんよりFFのクリスタルの炎、水、雷、草です。

竜馬「コートとジャケットか俺は赤かな。エターナルソードと明星二号か…明星二号って何だ？」

さあ？

検索してもロケットの名前が出たから…

竜馬「テイルズシリーズ全秘奥義集は俺が貰ってもいいよな？」

別にかまわないよ？

ただし、A'sになったらベルカの剣士にも読ませるよ？

竜馬「OK！んじゃ俺は行くな？」

待て！

お前にはまだいてもらおう！

竜馬「何でだよ？」

理由はこれだよ。

なの「あつちで色々あつたらしいね……」
ユタ様の所

フェ「私達でもした事は無いのに……」

ジャ「覚悟は良いか？」

アリ「拒否はさせないよ？」

全員すごくいい笑顔です。

眼は笑っていません。

竜馬「謀つたな竜王おおお！！！」

四人「……さあ逝こうか」「……」

お〜フェイトに至つては投影魔術を使っているな。

まあコートとジャケットは全員に配っておくから良いか。

つと次は…FFのクリスタル四つだな。

これは炎をアルフに水をクロノに雷をプレシアに草をなずなに渡すか。

アル「私はこれかい？」

クロ「僕はこれだな」

プレ「私はこれのようね」

なず「私はこれですか？」

それじゃ四人でお礼を言っておいてくれ。

四人「……銃王 海さんありがとう(な)(ございます)」「」「」
これで全部かな。

竜馬「なんじゃこりゃああああ……!!」

ん？何だ何だ？

竜馬「おい竜王！これはどういう事だ……！」

あゝ傷魔力回復薬を使ったのか。

竜馬「その反応……知ってたな？」

当たり前だ俺が注意書きを渡さなかっただけだからな。

竜馬「殺す……無々！能力発動、形状は杖！」

無々『了解しました』

やっべえ！

つてバインド！？

竜馬「ゼロ！インフィニティ！合成……！」

ちよっ！？

まだそれ本文に出して無い……！！

竜馬「アンノウン・ブレイカー……!!」

ぎゃああああ……!!

無々『…今回の締めは私が担当させていただきます。闇を狩る少年
続きます』

迫り来る？闇？…

side 第3者視点

「竜馬君は大丈夫かな…」

ひだまり荘の自室でなずなは呟いた。

現在この部屋にはなずな、なのは、フェイト、クロノ、ユーノの5人がいる。

「大丈夫だと思いますよ」

「彼は殺しても死なないような気がするからね」

クロノとユーノが答えた。

ちなみにユーノは贈り物で来たアルトリアの私服を着ている。

「クロノ君！！そつちに巨大な魔力反応が行ったよ！！これは…竜馬君が負けた？闇？だよ！！」

「……！！？」

突然エイミーから通信が入った。

竜馬が負けた？闇？…そう聞いてなのは達の表情は険しい物になった。

「あの…？闇？？が来たの？」

竜馬が戦っている物の名称を知らないなずなは不思議そうに聞いた。

「なずなさんは危ないので離れていてください」

「あの魔力障壁を張っていれば大丈夫ですから」

なのはとフェイトがなずなに言った。
5人が話しているとひだまり荘全体が封絶に包まれた。

「来たみたいだね…」

「とにかく部屋から出よう。ここだと被害が大きすぎる」

そう言つて5人は警戒しながらひだまり荘から出た。
その光景をシュドナイは笑みを浮かべながら見ていた。

side out

side シュドナイ

「ふむ、今回は魔力の高い人物を殺せと言う依頼だったな…なら、
どれを殺してもかまわないよな？」

俺は建物の中から出てきた5人を見ながら呟いた。
どいつも高い魔力を感じるな。

「何の用だ!!」

「ん？」

不意に黒髪の小僧が叫んだ。

「ここには貴様等を狩る者はいないはずだ!!」

「ああ、確かにいないな…だが依頼が来たのでね。魔力の高い人物
を殺せとね!」

質問を受けたら答えないとかな?

俺の答えを聞いて5人は警戒し始めた。

「と言う訳で…死んでくれ!!!」
「『『『『!!!』』』』」

俺は5人に向かって攻撃を放った。
これで死ぬなんて事は無いよな？

side out

sideユーノ・スクライア

敵が攻撃を放ってきた!

「インビシブル・エア
風王結界!!!」

僕は咄嗟に贈り物で来たインビシブル・エア風王結界を使い皆を守った。
凄い威力だ…竜馬はこれを防いでいたのか。

「ありがとうユーノ君」

「ありがとうユーノ」

なのはとフェイトが僕にお礼を言ってくれた。
クロノは何も言わなかったけど…

「私も…アイギスお願い!」

『Stand by・Ready・Set up』

なずなさんがデバイスを起動しました。
これなら少しは楽かな?

「デイベインシューター!!!」

「フォトンランサー!!!」

「えっと、シルクシューター!!!」

なのは、フェイト、なずなさんは3人同時に魔力弾を放った。
僕も行くのかな。

「いくよ！エクスカリバー約束された勝利の剣！！」

『Yes・Master.』

贈り物で来たエクスカリバー約束された勝利の剣を僕は構えた。
貰ったときは気付かなかったけどこの剣はデバイスだった。

「ステインガースナイプ！！」

続いてクロノも魔力弾を放った。

敵は僕達の魔力弾によって煙に包まれた。

「効いたのかな…？」

「分からないな…」

僕の呟きにクロノが答えた。

そして徐々に煙が晴れて行った。

「…この程度の威力か。つまらないな…」

「……！？」

煙が晴れて中から現れた敵は無傷だった。
そんな…

「無傷だと！？」

クロノは驚きの声を出した。

これはなのはのスター・ライト・ブレイカーを当てるしか…

『マスター!!!』

「え? きゃあつ!!!」

突然レイジングハートが声を上げた。

そしてすぐ後になのはの悲鳴も聞こえた。

「…まずは1人…か」

なのはのいた場所を見るとそこには倒れたなのはと敵がいた。

side out

side シュドナイ

はあ…

期待はずれだったな。

俺は足元の白い服の少女を見ながら思った。

「なのは!!!」

突然、西洋剣を持った少年が叫んだ。

一瞬の隙が命取りになると言うのに…

「2人目だ…」

俺は叫んだ少年の背後にまわり気絶させた。

殺してもよかったんだがその隙を突かれてはたまらないからな。

「なのは!!! ユーノ!!! …よくも!!!」

金髪の少女が怒りの表情で攻撃してきた。
結構、好みの顔をしているんだがなあ…

「戦場で怒りに身を任せるのは自殺行為…3人目と」

攻撃をかわし少女の腹に拳を打ち込んだ。

残りは2人か…

「冷静だな、怒りだすか、動揺するかと思ったんだが…」

「生憎あいにくとそんな事をすれば隙だらけになるんでね…」

なるほど。

盾を持った少女が動揺しないのはこの少年が言ったからか。

「ステインガレー！！」

少年は魔力弾を形成し飛ばしてきた。
意外と速いな…

「ぐうつ！？」

なるほど先程の魔力弾とは威力が違つと言う事か…
だが、そこまで強い物ではないな。

「僕では威力が足りない…」

「クロノ君！！」

隙ありだ！！

俺は少年に近づき気絶させた。

「4人目と…」

これで残るのはこの少女だけか。
少女はおびえた表情で俺を見ていた。

「あ、ああ…」

ん？
盾を合わせた？

『合成、All Defender mode』

盾が突然光り出した。
何が起きてるんだ？

side out
side ならずな

私は震えながらアイギスを一つにしました。

「こ、これで大丈夫かな？」

『マスターは私が守ります』

ありがとうございます。

「ほう？小型の盾を周囲に展開できるのか」

敵？は感心してアイギスを見ていました。

「だが…俺の前では無力だな」

「え？」

そう言って攻撃をしてきました。
でもアイギスが守ってくれる！

「甘い！！」

「きゃあっ！？」

いきなり手から別の手が生えて攻撃をしてきました。
ど、どうなってるの！？

「まだまだ！！！！」

「あ、アイギス！？」

『すみません防ぐ速度が間に合いません』

まだ私にはとどいてはいないけど攻撃がアイギスを抜けて飛んできました。

side out

sideシュドナイ

少しは面白く感じたかな…

「これで、終わりだ！！！！」

俺は腕から大量に手を生やして攻撃した。
小型の盾を抜け少女の体へと当たった。

「これで5人目と…」

まあ、最後の2人は面白かったな。
さてどいつを殺すか…

「めんどくさいから全員殺すか？」

俺は右腕に力を溜めていった。

…？

この魔力の感じは…

「まだ生きていたのか…」

俺が依頼を仕損じるなんてな…
確実に仕留めてやるしかないな。

迫り来る？闇？…（後書き）

（霊使い達の雑談）

今日も贈り物が来ました。

ありがとうございます！

アウ「今日は何が来たんですか？」

えつと銃王 海さんから風、土、光、闇、氷のクリスタルと竜馬に
メガフレアが飛んできています。

次にユタ様よりルールブレイカーが贈り物としてきました。

ウイ「…メガフレア？」

うん、メガフレア。

（どこかの星）

竜馬「いきなり飛ばされたけど何なんだ？」

無々『高エネルギー反応が飛んできます！』

高エネルギー反応？

厭な予感がするな変身しておくか。

竜馬「無々、能力発動。形状は手甲」

無々『了解しました』

これで準備はよし。

竜馬「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、怒れる竜…」

竜王「ストップ！それはまだ使用禁止だ！！」

いきなり竜王の映像が現れた。
使用禁止か。

竜馬「仕方が無い。ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

俺は諦めてフェニックスの姿になった。

竜馬「…あれが厭な予感の正体か」

空を見上げるとFFのバハムートのメガフレアがこちらに飛んで来ていた。

俺まだ女の子の姿なんだけどな…

竜馬「防ぎきる！！守護天翼！！」

メガフレアを俺は翼で防いだ。

重い！！

無々『マスター！このままでは破られます！』

竜馬「くっ！守護天翼！オーバークート！！」

竜馬の声がした直後にメガフレアは爆発を起こした。

～本部～

あちゃ～…

アウ「りよ、竜馬様が！！」

やっぱ無理だったかな？

あ、ルールブレイカーは王の財宝ゲイト・オブ・バビロンに入れておくか。

〜とある星〜

煙が徐々に晴れていった。

竜馬「し、死ぬかと思った…」

無々『充分死にかけてるような気がします…』

これを企んだのは竜王だな…

絶対に殺す！！

〜本部〜

何だ生きてたよ。

まあ、フェニックスだから平気で当然だよな。

エリ「ところでクリスタルはどうするんですか？」

ん…

竜馬に渡して魔改造してもらおうかな。

うん、そうしよう。

銃王 海さんメガフレアを竜馬にぶつけた結果は瀕死ひんしに近い状況になりながらも防ぎきるでした。

ユタ様、銃王 海さん贈り物ありがとうございます。

今回の締めは…久々にウインいつてみよう！

ウイ「本当に久々だね。闇を狩る少年続くよ！」

忘れていたわけじゃないからね？

敵には自分の罪の重さを感じてもらおう…

side 魔神竜馬

「…やっと戻って来れたな」

『本当ですね』

？影の書？に吸い込まれた俺はやまぶき高校の屋上にいた。
吸い込まれた先がもろにここだとは思わなかったな。

「…って何だよあれ！？」

俺がひだまり荘の方を見るとそこには濁った紫色の封絶が張ってあった。

シウドナイが来ているのか！！

「竜馬君！？戻って来たんだね！早くあの結界の中に行って！！皆倒されちゃったんだ！！」

「それは本当か！？」

シウドナイの狙いは俺を殺すだけのはずじゃなかったのかよ！！
考えててもしょうがない！！

「無々、能力発動！形状は手甲」

『了解しました。能力発動』

無々はすぐに手甲に変化した。

次は封絶への侵入だな。

「獅子戦吼！！！！」

俺は贈り物の1つテイルズシリーズの術技が全て載っている本で覚えた技を使用した。

封絶に罅ひびが入り小さな穴が開いた。

『マスター内部にて、なのはさん、フェイトさん、クロノさん、ユ
ーノさん、なずなさんが気絶しています』

無々がすかさず内部の状況を教えてくれた。

「分かった。中に入るぞ」

中に入るとなのは達は目立った外傷もなく気絶しているだけのようだった。

良かった。

「殺したと思っっていたんだがな…」

頭を掻きながらシュドナイが残念そうに言った。

「…聞かせる。何でこいつらを襲った」

「ふむ、まあいいか。？魔力の高い人物を殺せ？これが今回、俺に
来た依頼だ」

魔力の高い人物、それでなのはやなずなが狙われたのか…

…殺す。

そんな依頼をした奴も依頼を受けた奴も全て殺す！！

「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』！」

俺は呪文を唱えてフェンリルに変身した。

シウドナイは興味深そうに俺を見た。

「そんな技を持っているのか…面白いな」

速攻で殺す!!

俺は一気に距離を詰めて殴りかかった。

「ぐ!?!…速いな」

シュドナイは殴られた頬ほおを擦りながら呟いた。

この程度じゃ全然効かないか。

「ゲート・オブ・バビロン王の財宝!!」

俺は贈り物で貰ったゲート・オブ・バビロン王の財宝を発動した。

俺の周囲に様々な武器が展開されていった。

「武器だけが大量に有っても意味は無いぞ?」

「それはどうか!影道!さらに射出!!」

俺はゲート・オブ・バビロン王の財宝の中に収納していた武器を全て影の中に放った。

シュドナイはおかしなものを見るように見ていた。

「その余裕が命取りだ!!」

「何?…ぐつ!?!」

俺の言葉に疑問を抱いたシュドナイの背中に日本刀が刺さっていた。

side out

side 第3者視点

シュドナイの背中に刺さった日本刀、それは背後の影から飛び出し

てきたものだった。

「…何をした？」

「そんな事を聞いている余裕はあるのか？」

シウドナイの問いに答えず竜馬は言った。

その言葉に呼応するかのよう^{ゲート・オブ・バビロン}に周囲の影から王の財宝から射出された様々な武器が飛び出していった。

「くっ！？」

「ほら、避ける避ける！そんな調子じゃすぐに当たってしまうぞ？」

四方八方から飛んでくる武器をシウドナイは辛^{かる}うじて避けていた。

「すぐには倒れるなよ？俺の仲間を狙った罪はこんなものじゃないからな！！」

「ちっ！あまり、調子に乗らないでもらおうか！！」

シウドナイはそう言って飛んでくる武器を叩き落とした。しかし叩き落とした武器は影の中に吸い込まれていった。

「調子に乗る？いや、ただの事実だ…今回は本調子じゃ無かつたしな」

竜馬は小さく呟いた。

「それを！調子に乗ると！言っただ！！」

竜馬の言葉にシウドナイは反応した。

いつの間にかシウドナイは全身を異形の物に変化させていた。

「五月蠅い…」

目のハイライトが消えた竜馬はシュドナイに向けて魔神拳を放った。
どつやら反論されるのにいい加減キレたようだ。

「ぐあつ!?!」

魔神拳を受けてシュドナイは吹き飛んだ。
吹き飛んだ先には…

…気絶しているフェイトがいた。

「しまった!」

竜馬は自分のミスに気がき焦^{あせ}った。

敵には自分の罪の重さを感じてもらおう…。(後書き)

（霊使い達の雑談）

今日も贈り物が来ています！！

銃王海さんより、マテリア「かいふく」。

ユタ様より、副作用を強化した回復薬。

です。

ヒュ『かいふく』は2回目だな」

別に言わなくてもいいよね？

アウ「副作用の強化とは？」

えっと？

言葉使いが強制的に女言葉になり効果時間が三日だったぞ。

アウ「絶対に使ってください！出来れば本編で！」

分かってるよ。

マテリアは…竜馬の所で違法改造かな？

エリ「違法改造ですか…」

魔改造のが良かった？

ウィ「どっちでも同じだと思うんだけど…」

気にしない!!

今回の締めは…リンディでも呼ぶか。

リン「呼んだかしら？」

ヒ「早っ!!」

本当だな

リンディ今回の締めを頼む。

リン「分かったわ。闇を狩る少年続きます。おまけで私のお茶を…」

4人「それはダメ(だ)です(!!!)」「」「」

息ピッタリだな。

リン「…くすん(泣)」

大切な物を守るため…

sideフェイト・テストロッサ

うっ…

何が起きたの…？

「フェイトっ！！！！」

…今は竜馬の声？

どうして…？

「りょう…ま…？」

私はゆっくりと目を開きました。

side 魔神竜馬

「本当は人質なんてものは取りたくなかったんだがな…」

シウドナイはフェイトの首を掴みながら言った。

くそっ！！

俺のミスだ！

「フェイトを離せっ！！」

「なら、まずはその飛び回っている武器をしまってもらおうか？」

フェイトを前に出しながらシウドナイは言った。

「ダメ…だよ。竜馬…私の事は…良いから…」

「早くした方が良くぞ？」

ゲート・オブ・バビロン
俺は影の中の武器を全て王の財宝にしまった。

飛び回っていた武器が無くなったのを確認してシュドナイはこちらに歩いてきた。

「まったく…ここまで苦労するとはな!!」

「ぐっ!!」

そうやってシュドナイは思い切り俺を殴った。

そして俺は後ろに吹き飛んだ。

「おっと?反撃はするなよ?もうめんどくさいのはゴメンなんだ」

「……ちっ!!」

俺が殴りかかろうとするとシュドナイはフェイトを前に出し言った。
これじゃあ攻撃できない!!

「それでは、いくぞ!!」

そしてシュドナイはフェイトを尻尾で掴み攻撃を仕掛けてきた。

side out

side 第3者視点

シュドナイの攻撃を竜馬はギリギリで避けていた。

どうやらフェンリルの方がシュドナイよりも速いらしい。

「ふむ、いつまで避けられるかな?」

「くっそお!!」

しかしいくら速くても攻撃が出来ないので意味が無かった。

人質にされているフェイト。

この事実が竜馬にとって何よりも辛かった。

「いい加減にフェイトを離せ!!」

「そうだな…お前が死んだら離してやるよ」

シュドナイの言葉に竜馬は一瞬動きを止めた。

その一瞬のすきをシュドナイが見逃すはずもなく攻撃を叩きこまれた。

「があああああつっ!!!」

攻撃を受けた竜馬は血を吹きながら地面に叩きつけられた。

先程のシュドナイの攻撃、それは威力にしてみればなのはのデイバイン・シューター一発分程度である。

フェンリルの姿の時の弱点、それは防御力が極端に落ちる事である。

「がはっ…がはっ…」

「竜馬!!」

血を吐く竜馬を見てフェイトが叫んだ。

「どうした?こんな物なのか?」

「…さつき…言った…のは…本当…か?」

竜馬はシュドナイに血を吐きながら聞いた。

「お前が死ねばこの娘を解放すると言う事か?」

「そ…そうだ…」

シュドナイの問いを竜馬は肯定した。

「そうだな…お前が死ぬ直前にでも離してやる」
「そうか…」

竜馬はシュドナイの答えを聞いて下を向いた。

side out

side 魔神竜馬

俺が死ねばフェイトが助かるのか…

「さあ、さつさと死んでくれ!!」

そう言つてシュドナイは鋭い爪を使い攻撃してきた。
仲間を助けられるなら良いか…

「竜馬っ!!!!」

フェイトの叫び声が聞こえる。

安心しろ…絶対に助けるから…

そして…

…俺はシュドナイの爪に体を貫かれた。

大切な物を守るため…（後書き）

～霊使い達の雑談～

今日も来ました贈り物！！

ユタ様より、なのは、フェイト、アリシア、ジャバウオックに竜馬の寝顔の写真いりロケットペンダント。

銃王 海さんより、「ぬすむ」「みやぶる」「ひっさつ」「あやつる」

「へんか」「なげる」「ものまね」のマテリア、ヒュージマテリア「コマンド」。

をいただきました！！

なの「竜馬君が！」

フェ「私の所為で…」

アリ「私の出番は？」

ジャ「我はどこにおるのだ？」

質問は後で、まずは…はいこれ。

なの「こ、これは…！」

フェ「か、可愛い…！」

アリ「これは宝物だよ…！」

ジャ「…（ブー）」「鼻血を盛大に噴く。

あちゃ～ジャバウオックには刺激が強すぎたか？

マテリアは竜馬に言ってマテリアを使用できる武器を創ってもらおう。

それでは今日はここまでです！

今回の締めはジャバウォックにやってもらおう。

ジャ「……はっ！／＼。ロ／＼（／口。／や、闇を狩る少年続くぞ／／／／」

呆けている状態から戻ったな。

試しに顔文字入れてみたけど大丈夫でしょうか？

それだけだ。誰も殺さないとは言って無いぞ？」
「そんな…」

竜馬が約束をしたのは私を離す事だけだったの？
違う！

竜馬は私達が助かると思って攻撃を受けたんだ！！

「嘘つき…！」

「何の事かな？勝手に殺さないと解釈したのはお前たちだろう？」

敵の発する殺気の中あてられ私は動けません。

逃げなきゃいけないのに！！

s i d e o u t

s i d e 魔神竜馬

痛い…

悪かったな名前も知らない女の子…

約束守れないや…

「そ…でも…たは…束した…ずです…」

「元…俺…頼は魔…の…い人…を殺す…からな」

誰か何か言っているのか？

そう言えば俺が死んだらフェイト達は助かるんだよな？

だったら俺の命は無駄じゃないはずだ…

「ん？まだ息はあるんだな…」

そう言っただけ動かせない俺の顔をシュドナイが覗き込んできた。

フェイトは…？

「安心しろ。お前を殺した後にこいつ等も殺してやるから。そうすれば寂しく無いだろう?」

「……………」

シュドナイはそう言って周囲を見渡した。

俺との約束はどうしたんだ!!

「ああ、そうそう。きちんとあの娘は俺の尻尾から離したぞ」

ニヤリと笑いながらシュドナイは言った。

こいつは!!!!!!

俺の中に強大な殺意と怒りが湧いてきた。

「マスター!?!」

突然、無々が叫ぶように言った。

だが俺は自分の中の感情に支配されていった。

「ガ…ガガ…マ…スタ…-…」

無々の言葉にノイズが混じっていった。

「……………1st limiter レージング L??? in gr release .
…2nd limiter ドロウ Dr? mi r release …3r
d limiter グレイプニル Gleipnir r e l e a s e …」

無々から今まで聞いた事のない冷たい声が響いた。
そして俺は意識を失った。

side out

side シュドナイ

何だったんだ今の声は？

どうやらこいつの腕輪から聞こえたようだが…

「まあ良い、さっさと全員殺してしまおう」

俺は狩り手に向けて攻撃を放った。
この攻撃でこいつは死ぬ。

「ーッ！！！！！！」

突然、狩り手の体に変化が起きた。
だが何をしても無駄だ！！！！

「何っ！？」

気が付いたときには俺の右腕が消失していた。
どうなっているんだ！？

「
ツツ！！！！！！」

俺の背後で生き物の声とは思えない咆哮が響いた。

俺は振り向き驚いた。

そこにいたのは…

… 白銀の巨大な狼だった。
そして口には俺の右腕を^{くわ}啜っていた。

「何だそれは…」

ツ
ツ
ツ

「!!!!!!」

俺の問いに狼は咆哮で返した。

「どうやら人の言葉が理解できないらしいな…」

俺は狼に向かって攻撃を放った。

side out

side ジャバウオック・サタナキア

竜馬が戻って来た。

そう聞いた我は急いでリンディ達の元に向かった。

「リンディ!!」

「!!!!!!」

ツツツ

702

我が部屋に入ると同時にとてつもない咆哮が聞こえた。
何なんだこの咆哮は!?

「ジャバウオックさん」

「リ、リンディこの巨大な狼は何なんだ?」

我は画面に映っている白銀の巨大な狼を指差し言った。
狼は異形の姿をした者と戦っている。

「魔神さんです…」

「なっ!?!」

我は驚いてもう一度狼を見た。

この狼が竜馬！？

「どういう事だ！？」

「見せた方が早いわねエイミー！」

リンディはそう言って別の映像を映した。

その映像はとても凄惨な物だった…

我は映像を見終えて言葉を失った。

怒りと殺意に身を任せて…（後書き）

（霊使い達の雑談）

贈り物が来ています！

えっと…銃王 海さんからプレシアに電気玉。

次にユタ様からFF??の召喚獣全体の召喚石です。

ありがとうございます…！！

エリ「ポ モンですか？」

だな。

とりあえずプレシアを呼ぼう。

プレ「呼んだかしら？」

おう。

これが送られてきたぞ。

プレ「これは？」

電気玉って言って電気の威力をあげる事が出来るんだ。まさにピッタリだな。

プレ「本当ね。銃王 海さんありがとうございます」

うんプレシアは笑顔だとやっぱり綺麗だな。

写真に撮っておこう。

プレ「えっ／＼／＼／」

照れた顔も一緒に撮っておこう。

プレ「もうっ／＼／＼／」

ウィ「照れながら行っちゃったね」

そっだな。

召喚石は…番外編とか竜馬の修行とか色々と使わせてもらおう。

ユタ様ありがとうございます！

それじゃあ今回の締めは…

ヒ「あたしにやらせる！！！！」

ビックリしたなあ。

別に良いよ。

ヒ「よっしゃ！闇を狩る少年続くぞ！！」

（竜馬の状況を知らないな？）

大きな力は時として自身を滅ぼす…

side 魔神竜馬

ここは…どこだ？

気が付くと俺は何もない真っ白な世界にいた。

「俺は…！そうだシユドナイは！！」

しかし周囲には人どころか何も無い。
くそっ！！

「起きたか…」

「！？」

突然声がした。

だが人や音を発する物はどこにも見当たらない。

「探しても無駄だ。私はお前、お前は私だ」

「俺？」

どういう事だ？

「仕方が無いな…」

「！？」

突然目の前に俺にそっくりな奴が現れた。

「誰だ！！」

「私はお前だといっているだろうが…私の名前は竜馬だ」

…俺!?

「何でだ!?!?つかここはどこだ!?!?」

「ここは私の心の奥深く、つまりはお前の心の中だ」

そう言つて俺にそっくりな奴は歩きだした。
どこに行くんだ?

「今、お前の体は膨大な魔力によつて暴走を起こしている。見てみる」

目の前にウィンドウが現れた。

そこに映っているのはシュドナイと戦っている一匹の巨大な白銀の狼だった。

「勝っているなら良いんじゃないのか?」

「良いのか?このままだとこの男を殺した後にお前の言う?仲間?を食い殺してしまうかもしれないぞ?」

な!?!?

食い殺す!?!?

「どういう事だ!?!」

「はあ…フェンリルとは元来、危険な物なんだ。それを知らなかったとは言え魔法で創ってしまった。そして今のお前の体は膨大な魔力の所為でフェンリルその物へと変化してしまつたんだ」

…つまり今の俺の体はフェンリルの物で、仲間を食つてしまつと。

「ふざけんな！！さつさと俺を戻せ！！」
「それが出来れば苦労はしていない」

呆れたようにそう言う俺にそっくりな奴。

「それはどういう意味だ？」

「今、君の精神をあの体に戻したとしよう。するとどうなると思う？君の精神がフェンリルの精神に食われて消滅するんだ。分かったか？」

消滅！？

くっ！！

どうしたらいいんだよ！！

side out

side シュドナイ

ちっ！

「

ツツ！！！！」

「うお！？」

狼はいきなり俺の喉を狙ってきた。

くそっなんてやりにくい相手だ！！

「人じゃないだけでここまでやりにくくなるとわな！！！！」

「ツツツ！！！！」

狼は咆哮をあげた。

まるで面白いオモチャを見つけた子供のようつに。

「俺を完全に遊んでやがるな…」

この？千変？をオモチャ扱いか…
恐ろしいな。

「

ツ
ツ
ツ

！！！！！！」

「だが！タダでは死なぬ！！！！」

その首俺が死んでも切り裂いてくれる！！
俺は死を覚悟しながらも狼に挑んだ。

大きな力は時として自身を滅ぼす…（後書き）

（霊使い達の雑談）

ヒ「作者がいないな…」

エリ「銃王 海さんのクリスタルの洞窟にいるらしいですよ？」

アウ「長いですね…」

ウイ「とにかく贈り物が来たよ！！」

ウイ「えつと銃王 海さんから特製ポーションを9999個。

次にユタ様からミラボレアス、バルカン、ルーツの素材で作った服のパーカーです」

エリ「また色々と来ましたね」

アウ「パーカーは人数分ありますね」

ヒ「かつこいいいな」

ウイ「それじゃあ皆で…銃王 海さん、ユタ様、」

エリ「贈り物ありがとうございます」

アウ「大切に使用させていただきますね」

ヒ「…あたし言う事無いじゃん！！」

アウ「今回は私が締めます。闇を狩る少年続きます。これからも見離さずをお願いしますね？」

フェンリルを止めるために…

side シュドナイ

本気で行くしかないな…

俺は自身の武器？神鉄如意？を取り出した。

「まさか、使う事になるとはな…」

狼は興味深そうにこちらを見ている。

精神は子供ってわけか…

「
ツツツ！！」

「そう簡単にはやられない！！」

こちらを見ている狼が咆哮を上げた。

そして飛びかかって来た。

「
「そうそう同じ手は喰らわない！！！！」

「
ツツ！？」

俺は狼の攻撃を避け頭を叩き斬った。

…はずだった。

「なんだとっ!?!」

突如、斬ったはずの狼の体が影になり消えたのだ。
どういっ…まさか!!
俺はすかさず空中に飛び上がった。

「
ッッ!?!?!」

「危機一髪と言ったところだな…」

俺が空中に飛び上がるのと同時に俺が先程まで立っていた場所を巨大な口が現れていた。

どうやら影の中から俺を狙っていたらしい。

「

ッッ！！！！」

俺を逃した事が悔しいのか狼は唸った。
影にも潜れるのか…注意しないとな。

side out

side 魔神竜馬

フエンリルも影に潜れるのかよ!?

「俺はどうしたらいいんだよ！！！！」

「何も無い。諦める」

もう1人の俺はそう言った。

何なんだこいつは！！

本当に俺なのか!?

「私はお前だ。何度も言わせるな」

「!?!? 何で考えてる事が!?!?」

どうなってやがるんだ!!!

それはこう言う事だ。

「!?!?... 今のはお前が?」

「そうだ、言っただろう? 私はお前だ。お前の考えている事は私の

考え。お前の思っている事は私の思い…分かったか？」

俺はその言葉に改めて疑問を覚えた。

「なら、なら何でお前は？仲間？を助けようと思わない！！」

「…私はお前だ。だが、お前そのものだとは思つな」

どういう事だ？

「はあ…私はお前の心の中でも？心の闇？に近い部分を司しかさどっているんだ。だから？仲間？などと言う物には一切関心がない」

もう1人の俺はため息を吐きながら言った。

心の闇だと？

そこでは俺は？仲間？を見捨てているって言うのか！？

「ふざけんなよ！！」

「ふざけてなどいない。れっきとした事実だ」

俺の怒声にもう1人の俺は淡々と答えた。

とにかくフェンリルを止める方法を探さないと！！

「なんだ？まだ諦めてないのか？」

「当たり前だ！！俺は？仲間？を見捨てない！！！！」

俺はもう1人の俺に向かって言い放った。

「…そうか。1つ教えてやる。フェンリルを止める事が出来るかもしれない方法だ」

「本当か！？」

もう1人の俺は諦めたような口調で言った。
フェンリルを止める事が出来るのか!?

「あくまで仮定の話だ。絶対に、と言う確証は無いぞ…それでも聞くか？」

「…ああ、？仲間？を助けられる可能性が少しでもあるならな…」

もう1人の俺はフェンリルを止める方法を静かに話し始めた。

フェンリルを止めるために…（後書き）

（霊使い達の雑談）

ただいま）

ヒ「遅い！！」

エリ「誰ですかその方は？」

クリ「クリスと申します。よろしく申し上げます」

さて、挨拶も済んだし今日も贈り物が来ました！！

まずは、銃王 海さんから精神安定剤と妖刀「村正」を、

次に、フォウル様からインストールブック？黄昏の書？を、

最後に、ユタ様からユーリが使ってたニバンボシ（日本刀）を、
いただきました！！

アウ「基本的に竜馬様のものばかりですね」

だな。

と言つ訳でカモン竜馬！

竜馬「はいはい…やっぱりヒータが遠くに逃げた」

アウ「気にしないであげてください」

エリ「気にしてはダメですよ」

そんじゃあ、はいこれ。

竜馬「お、三種類の武器か。良いなこれ」

どうする？

今すぐに？黄昏の書？使う？

竜馬「ん〜。そうだな頼むよ」

了解。

インストールブック？黄昏の書？起動。

入力対象、？虚無と無限？。

インストール開始。

アウ「何で出来るんですか…」

説明書が付いてた。

無々『……？黄昏の書？インストール完了しました』

竜馬「お、終わったか」

これで無々の鎌が？万死ヲ刻ム影？になったから。

竜馬「かつこいいんだよなアレ」

そうだな。

つとお礼言わなきゃ。

竜馬「だな、銃王 海さん、ユタ様、フオウル様ありがとうございました！」

それじゃあ今回の締めは…クリスマス言ってみよう！

クリ「はい！や、闇を狩る少年続きます！い、言えましたよ竜王！」

うん、えらいえらい。

仲間？に近づく恐怖。

side シュドナイ

まったく…こんなに苦勞するとはな。

「…だが、なんだろうな。面白くなって来やがった」
「
ツツ!!」

俺の呟きが聞こえたのか地上で狼が大きな咆哮を上げた。
あいつは元から楽しそうだったがな。

「いくぞ!!」

俺は？神鉄如意？を構えて狼に向かって行った。

side out

side フェイト・テストロツサ

私の目の前で理解のできない事が何度も起こりました。

「ど、どうなってるの…?」

私の呟きに答えてくれる人は誰もいませんでした。

…い、今の内になのは達を助けなきゃ!!

「あ、あれ!？」

う、動けない!？」

どうして!？」

私はどうして動けないのか分からず驚きました。

「何で！？どうして動けないの!？」

周囲を見て私は気付きました。

私の足に絡みついている影の様な物に…

「何これ!？」

影!？」

もしかして竜馬が…?」

「でも、なんのために?」

狼を…いえ、竜馬を見ながら私は呟きました。

side out

side 魔神竜馬

「本当にそれが上手く行けばフェンリルを止められるんだな?」

「ああ、間違いない」

俺はもう1人の俺に確認をとった。

フェンリルを止められるかもしれない方法がまさか…

「まさか俺自身の精神とフェンリルの精神を混ぜることだなんてな

…」

「怖気づいたのか?」

もう1人の俺は笑いながら言った。

「怖気づく?…そうかもな。これで失敗してフェンリルが暴走した

「まだまだ俺の？仲間？が死んじゃまうからな…」

「ふん。そんな事を気にかけている暇もないだろう？」

…確かにそうだな。

今、俺がやれる事を最高の形で成功させるだけだしな。

「それじゃ、行ってくるか」

「ああ、行ってこい。お前にとって最高の結果になる事を願っているよ」

そう言ってもう1人の俺は消えた。

さて、行くか!!

俺はもう1人の俺に教えられた方向を向き歩き始めた。

？仲間？に近づく恐怖。（後書き）

（霊使い達の雑談）

贈り物が来ています！

ユタ様より、アスベルが使っている刀剣のレヴァンティンを、
銃王 海さんより、ポケモンの卵とマテリア『ぜんたいか』を、
いただきました！！

ヒ「ポケモン！？」

エリ「これですか！？」

ウイ「結構大きいんだね？」

いや、お前等が小さいんだけど…

えっとレヴァンティンと『ぜんたいか』のマテリアはゲイト・オブ・バ竜馬の王の財ビロン宝に入れておいて良いかな？

アウ「大丈夫だと思います」

そっか。

じゃあ今回の締めを…エリア言ってくれ。

エリ「分かりました。闇を狩る少年続きます？」

何で疑問形！？

続くからね！？

クリスは寝ています。

魂の共m…痛い痛い！！石を投げないで！！

side シュドナイ

「っせい！！はあっ！！」

「
ツッ！！」

俺の攻撃を狼は避けて行った。

流石にスピードはあちらの方が上か。

「
ツッ！？
ツツツ！？」

「む？なんだ？」

突然、狼が慌て始め…いや、苦しみ始めた？

「何が起きている？」

「ツツツ！！？」

狼が苦しむ姿を見ながら俺は呟いた。

side out

side 魔神竜馬

フエンリルの精神、それは純粋な殺意と獣の心だった。

俺は精神を混ぜた瞬間からとてつもない吐き気を感じた。

「ぐっ！！…はあ…はあ」

殺せコロセころせコロセ殺せころせ殺せころせコロセ……
そんな感情が流れ込み続けるのだ。

「があー!!…ぐうっ!!」

食い殺したい!引き千切りたい!!はらわたむきほ腸を喰りたい!!!
厭だ!厭だ厭だ!!

「止める!俺は人間だ!!」

人間?オモチャだ!!食べ物だ!!
違う!!

「っがあああああ!!!!!!!!」

俺は流れ込んでくる感情を吹き飛ばすために雄叫びおたけをあげた。

side out

side 第3者視点

フェンリルが苦しみ出してかえら2分ほど時間が経った。
そして突如、フェンリルは動きを止めた。

「止まった?いったい何が起こっているんだ?」

シウドナイは疑問を口にした。

しかし誰にも答えられる問題では無い。

今、フェンリルの中では竜馬とフェンリルの精神が混ざり合っているのだから…

「
ッッ!!」

「…動き出したか」

フェンリルが咆哮をあげた。

それはまるで自身が勝った時にあげる咆哮のようだった。

「何故止まっていたのかは分らんが、まあ良い。再開するぞ!!」
「
ツツ!!!!」

シユドナイの言葉に答えるようにフェンリルは吠えた。

そして1人と1匹の戦闘が再開された。

魂の共m…痛い痛い！！石を投げないで！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

今日も来ました贈り物！！

ウィ「何が来たの？」

えつと…フオウル様より？ロマンズギフト？を1枚、

ユタ様よりアイスコフィン（刀剣）を、

銃王 海さんよりマテリア『バハムート』 『バハムート改』 支援ヒ

ュージマテリア、それとデジタマ、

です。

アウ「デジタマと言う事はまた卵ですか」

エリ「ポケモンの卵とは少し違いますね」

そうだな。

えつと…デジタマをポケモンの卵の近くに置いて、マテリアとアイ

スコフインは竜馬の王の財宝ゲイト・オブ・バヒロンに入れて…

？ロマンズギフト？は…後で決めよう。

あ、記事でマテリアの召喚獣達を放そうと思いますので記事が出来たら来てください。

それじゃあ今回は俺が締めます。

闇を狩る少年続きます。

1人と一匹、獣同士の戦い。

side 第3者視点

シュドナイとフェンリル。

この1人と一匹の戦いは熾烈を極めていた。

「そらそらそら!!!」

「

ツッ!!!」

シュドナイの攻撃をフェンリルは易々と避けていく。

しかしシュドナイもそれ自体は分かっていたようで表情に変化はない。

もはやこの戦いに割って入れる者など、この封絶の中には存在しなかった。

「 ツッ!!!」

「む？」

フェンリルが突如、動きを止めシュドナイを見据えた。その行動を不審に思いシュドナイは動きを止めた。

「 ツツツツ!!!」

フェンリルが止まった理由、それは…

「何だと!？」

シュドナイの間横を一筋の砲撃がよぎった。

それはフェンリルの口から発射されたものだった。

「ッッ!」

「そんなことまでできるのか…」

外した事を悔しそうにするフェンリル。
相手の新たな攻撃法に驚くシュドナイ。

「ますます面白い!!」

しかしシュドナイが驚いたのは一瞬ですぐに喜びに変化した。
強い敵と戦えるのが嬉しいのだろう。

side out

side 魔神竜馬

殺せコロセころせコロセ殺せころせ殺せころせコロセ……
喰らえクラエくらえクラエ喰らえくらえ喰らえクラエくらえ……
人間とは何だ? 食べ物でありオモチャだ!

「…ス…!!!!」

喰らいたい! 腸はらわたを引きちぎり叩き潰したい!!
俺以外の何もかもがオモチャだ!!

「…スタ…!!…!!」

腕を食い千切りむ喰りたい!!
眼球を口に含んで舐めまわしたい!!!

「マスター!!!!!!」

「!?!」

俺は…

俺は今まで何を考えていた!?

『正気に戻りましたか?』

「あ、ああ。何で無々の声が聞こえるんだ?」

無々は安心したような声を出した。

ここは俺の心の中のはずじゃ?

『私にも分かりません。ですがおそらく、私自身もフェンリルの中に取り込まれたのではないかと』

「…そうか」

無々の予想を聞いてなんとなく納得出来た。

確かにありえそうだな。

「でもまあここに俺以外の人物がいるのはありがたいかな」

『私はデバイス…』

「それ以上言うな!」

無々の言おうとしている言葉を途中で止めた。

まだこんな事を言うのか。

「お前は俺の? 相棒? だ。それ以外の何物でもない分かったか?」

『…了解しました』

さて、平常心も取り戻した事だし…

「さっさとフェンリルの精神と融合して暴走を止めるか!」

『それしか方法は無いですからね…』

俺は立ち上がりフェンリルとの融合を再開した。

？仲間？がいるだけでさっきよりも融合がしやすい気がするな…

「絶対に成功させる！！！」

あんな殺意の意識何かに負けるわけには行かないんだ！！！！

1人と一匹、獣同士の戦い。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

え〜本日も贈り物が来ています。

ヒ「本当に書くたびに來てるから申し訳ないな」

ああ、それでは貰った物の紹介をば、

銃王 海さんよりマテリアが四組八個入る腕時計と精霊の卵を、
ユタ様よりモンハンの全モンスターを、
いただきました。

クリ「モンスター達はどうしたんですか？」

ん？

もう記事の召喚獣達の広場に放してあるよ。

クリ「そうですか」

精霊の卵をポケモンの卵とデジタマの近くに置いて、と。
卵が三つ並んでいるのって何だかシュールだな…

クリ「意外と大きいですからね」

腕時計は…

クリスいる？

クリ「良いんですか？」

ああ、本編に出るときに少しでも装備品があった方がよいしな。

クリ「ありがとうございます！銃王 海さんありがとうございます
！……」

うん、良い笑顔。

今回の締めは2人でやるか。

クリ「はい！！」

闇を狩る少年……

クリ「次回をお楽しみに！！」

クリ・竜王「それでは！！」「」

？千変？の最後…

side シュドナイ

俺と狼が戦い続けてだいぶ時間が経過した。
肩で息をしている俺とは対照的に余裕の様子
の狼。

「はあっ…はあっ…流石に辛くなってきたな…」

「ッッ…！！！」

まったくこっちの事を考えずに攻撃してきやがる！！
しかもどうやら俺との戦いに飽きてきているのか影に潜ろうともし
ない。

「ッッッ…！！！」

「くっ…そっ…！！！」

俺は体をひねり攻撃を回避した。

少し避け切れなかったのか脇から血が吹き出た。

「す…少しは…相手の…事も…考えるよな…」

「ッッッ

…！！！」

言葉が通じない事は知っているが俺は言った。
狼はそんな事もお構いなしに咆哮をあげた。

「…なるほど、もう俺との戦いには飽きたという事か…」

…なにも来ない？
私は一向になにも起こらない事に疑問を抱きました。

「……ひっ！？」

「……」

何故かお腹に開いた傷は塞がっていました…

?千変?の最後…(後書き)

〔霊使い達の雑談〕

本日も贈り物が来ています。

エリ「そう言えば銃王 海さんは修学旅行らしいですね?」

うん、記事に書いてあったし。

つと贈り物はユタ様からウラヌスシステムの少し劣化バージョンだよ。

ヒ「ウラヌスシステムって何だ?」

えっと、簡単に言つて『火事場の馬鹿力を発動させるシステム』だとき。

エリ「火事場の馬鹿力ですか…」

そっ!

火事場の馬鹿力!

そう言えばユタ様の所に行ったベルキュロスとドラキュロスは迷惑をかけてないかな?(黒い笑顔)

ヒ「ひいっ!!だ、大丈夫だと思うからその笑顔を止める!!」

3人「ガタガタガタガタ!!」(高速振動中)

はいはい。

それじゃあ今回の締めを…エリア。

エリ「は、はい。(震えている)や、闇を狩る少年続きます!」

俺の笑顔ってそこまで怖いかな?

戻ってきた世界。

sideフェイト・テストロッサ

竜馬…

私は目の前で眠っている竜馬の顔を覗き込みました。
今、私達はアースラの医務室にいます。

「竜馬…あなたは…」

戦っている時に敵が言っていた竜馬が？闇？って…
それにお腹に開いていた傷…

「どっなっているの…？」

誰にも答えられないのだろうけど私は呟きました。
早く起きてよ…竜馬。

sideout

side高町なのは

「いくよ！なのは！！」

「うん！！！！」

私は訓練所でユーノ君と特訓をしています。

この前、戦った時に一番最初に私が倒されてしまったから…

「こんなんじゃない…足りない！！」

「もっと、もっと強く！！！！」

私とユーノ君は同時に叫びました。

私達は弱い。

その事をこの前の戦いで思い知らされました。

あの時、竜馬が来なければ…私達は殺されていた。

「なのは!!」

「きゃあっつ!」

少し考え事をしていた所為でユーノ君の攻撃を避け切れずに当たってしまいました。

ユーノ君は心配そうにこちらを見えています。

「なのは?」

「だ、大丈夫!まだまだやるよ!!」

そうだ、こんなことで止まっているわけにはいかないんだから!!
再び私達は特訓を再開しました。

side out

side 魔神竜馬

…知らない天井…では無いな。

エ アネタをやるうにも知っている場所だったのでできなかった。

「ここは、アースラの医務室だったよな」

あゝ…元の姿になった後、ホツとして気絶したんだっただな俺。
そう言えばシュドナイが言ってたな…

「俺が?闇?と同じ…か」

どういう意味なんだろうか?

俺は首をひねった。
ん？

「フェイト？」
「ん…」

今、気がついたがフェイトが眠っていた。
どうやら俺の言葉が聞こえたのか起きたらしい。

「おはようフェイト」
「ん？おはよう竜馬…？」

軽く寝ぼけているのかフェイトはオウム返しに言った。
…ヤバイ可愛いわ。

「……………！？」

どうやら頭が回転して来たらしく表情が徐々に変化していった。
…守れてよかったよ本当に。

「りよ！竜馬！！」
「なんだ？」

結構大きな声出したな。
何なんだいったい…

「ま、前の戦いの時のあれは何だったの！？」
「前の戦いの時のあれ？」

…あゝあれか。

フェンリルの暴走の事だな。

「あれは、俺の変身魔法が暴走して起こった事だよ。安心しろもう暴走させないから」

「そ、そうなんだ…」

何だか不満そうだな。

とりあえず俺はフェイトの頭をなでた。

「りよ、竜馬!？」

「ん? ああ、すまん。つい、な」

フェイトは顔を赤くした。

何だ?

風邪でも引いたのか?

… 今後の目標はフェンリルのリミッタのコントロールだな。

戻ってきた世界。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

… やつとシユドナイ戦が終わった。

ヒ「長かったな…」

ああ、もう少し短くなると思ったんだけどな。
つと今日も贈り物が来ているんだった。

ユタ様より「滅刀 光」をいただきました。

竜馬「だから俺が呼ばれてるのか」

そう言う事。

んじゃ、試し切りだ。

竜馬「あいよ…はあっ!!」

おお、鋼鉄の塊が真っ二つに。

あ、そう言えば昨日の後書きのウラヌスシステムの効果説明が間違
ってたんだった。

エリ「違ってたんですか!？」

うん。

実際は数々の武装を実体化させて放つ事が出来るらしいんだ。

アウ「全然違うじゃないですか…」

呆れないでくれ…
今回の締めは竜馬だ。

竜馬「あいよ。闇を狩る少年続くぞ。にしてもこの刀は良い物だな」

そうだな、ちなみに他に19種類あるらしいぞ？

竜馬「凄いな…俺も対抗してさらに武器を創るぞ!!」

おゝ燃えてる燃えてる。

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！（前書き）

今回は番外編です。

ユタ様よりいただいたお二人様限定温泉旅行二泊三日券を今回使用します。

さて、ここで1つ尋ねます。

あなたは番外編を？読みますか？？？読みませんか？？

読むんですね？

あなたの選択が良いものと信じて…

それではどうぞ。

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！

side 魔神竜馬

シユドナイ戦から数日が経過した。

俺は今、ひだまり荘で絵を描いている。

「…にしても、なずな以外の住人が俺の事を忘れているなんてな」

俺は呟いた。

パチュリーが言っていたが？影の書？は周囲の魔力の無い人間の記憶を封印するらしい。

その内戻るとか言ってたけど…

「…買い物に行くか」

絵を描くのを止め俺は外に出た。

ん？

ひだまり荘の入り口に行くと紙切れが落ちていた。

「くじ引き券？」

拾って見てみるとそれはくじ引き券だった。

ふん、今日が期限なのか。

「行ってみるかな」

暇潰しにも良いだろ。

俺はくじ引きが行われている場所に向かう事にした。

「えっと？ベリマートを右に行って…」

…だああああ！！！！！！

めんどくさい！！！！

何でこんなに入り組んだ場所でやってるんだよ！！

「はあ…イラついても仕方が無いか。っとここを右か」

どうやらくじ引きを引く所に着いたらしい。

…だいぶくたびれてるな。

「あ、くじを引きに来たんですね！！」

「！？」

いきなり背後から声をかけられた。

気配を感じなかったんだけど！？

「良かった。こんな場所なんで皆来る途中で帰っちゃうんですよ」

「ここでやらなきゃいいのに…」

白銀の髪に蒼色の目をした女性が寂しそうに言った。

あれ？どっかで見た覚えが？

「あ、私はバイトでクリスって言います。それではくじ引きをどうぞ！…」

「…分かりました」

気にしない方が良いんだろつなあ。

俺は促されるままくじを引いた。

「ん？これは…」

「！！当たりです！！大当たり！！お二人様限定温泉旅行二泊三日券をお渡しします！」

当たっちゃったよ…

拾ったくじ引き券なのに。

「まあ、良いか。ありがとうございます」

「いえ。これでやっと帰れます」

え？

それはどういう意味だ？

「それでは！」

「！？」

女性はいきなりドラゴンになって飛んで行ってしまった。
な、何だったんだ？

side out

sideプレシア・テストロツサ

ふゝ…

久しぶりの休暇ね。

「あれ？どうしたんだプレシア」

「あら竜馬」

本屋さんにいると竜馬が声をかけてきました。

「久々の休暇だから本でもと思ってね。あなたは？」

「ん？くじ引きをしてきた」

そう言いながら竜馬は券の様なものを取り出しました。

「それは？」

「大当たりでお二人様限定温泉旅行二泊三日券だとさ」

良いわね温泉。

「誰かと行くの？」

「いや、特に決めてないんだよな」

ふん…

娘達にチャンスじゃない！！

「竜馬、フェイトとアリシアのどちらかと一緒に行ってくれないかしら？」

「別に良いけど…」

早く連絡しなくちゃ！！

私は竜馬に二日後にアースラに来るように言って急いでアースラに戻った。

side out

sideフェイト・テストロツサ

何だか母さんが大慌てで帰ってきました。

「何かあったのかな？」

「さあ？けど凄く慌ててるね」

私とお姉ちゃんは不思議に思いながら母さんを見ていました。

「母さん、何があったの？」

「二日後に竜馬がここに来るのよ。温泉旅行に行くから」

温泉旅行！？

えっ？えっ？

「ど、どういう事？」

「竜馬がお二人様限定温泉旅行二泊三日券を当てていたのよ」

竜馬がつ！？

…あれ？

「お二人様？」

「そ、お二人様。だからどっちが行くかを決めないといけないのよ」

私とお姉ちゃんのどっちかしか…

それなら私が…

「私が降りるわ」

「えっ！？」

私が行くのを止めると言おうとしていたらお姉ちゃんが先に言っ
てしまいました。

どうして…？

「妹のために身を引くのも姉の仕事よ」

「お姉ちゃん…」

私は嬉しくてお姉ちゃんに抱きつきました。
母さんがカメラを構えていた気がしたけど気にしない！
それから私は温泉旅行に着ていく服を選んだり母さんに竜馬に迫る
方法を聞いたりしました。

side out

side 魔神竜馬

時間が経つのは早いな…

プレシアとの約束の日になった。

「えっと…ここだな」

俺はアースラのテストロッサ家の部屋に着いた。

「お〜い、来たぞ〜」

「あ、いらっしやい。フェイト、竜馬が来たわよ」

「う、うん／＼／＼／」

プレシアに言われて出てきたフェイトは顔が真っ赤だった。
服装が…

「似合ってるな、可愛いぞ」

「はう、／＼／＼／」

さらに赤くなつた？

何故だ？

「さてそれじゃあ行くか？」

「うん／＼／＼／」

えつと、どこだっけ？
俺は券を取り出し確認をした。

「え？」
「へ？」

突然、券が光り出した。
俺は咄嗟にフェイトの手を掴んだ。

side out

side アリシア・テストロツサ

光が収まると竜馬とフェイトがいませんでした。

「ど、どこに行ったの!？」
「今の光は転送魔法の…」

お母さんはさっきの光を分析していました。
するとエイミィから通信が入りました。

「プレシアさん！先程そちらの部屋から転移反応があったんですけど!!」

「ええ、竜馬がフェイトと一緒に飛んだみたいなのよ」
飛んだってことは別の世界に行ったってこと？
無事だよね？

「…転移先が割り出せません」
「…そう、でも三日後に帰ってくるわね」

そうだね。

「泊三日って言うてたし。
お土産期待してるからね!!!」

番外編 ドキッ!? 2人で温泉旅行!! (後書き)

♪ 霊使い達の雑談♪

.....。

ヒ「続くな...」

うん。

意外と長くなるわ。

つと贈り物の紹介しなくちゃ。

ユタ様から「滅刃 回」をいただきました。

竜馬「これは...」

気をつけるよ?

竜馬「ああ、この刀は簡単に人を殺してしまうからな。やむを得ない時にしか使わない事にする。ユタ様ありがとうございます」

さて、それじゃあ。

今回の締めを...アウスかな。

アウ「はい。闇を狩る少年続きます」

次回は番外編の続きです。

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！そのに（前書き）

昨日の続きです。

楽しんでくれると幸いです。

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！それに

side 魔神竜馬

「…海鳴市？」

俺が目を開けて言った第一声がこれだ。

何故なら目の前に広がる光景は海鳴市の光景だったのだから。

「海鳴市に来たの？竜馬」

「…良く分からないな。俺も海鳴市は知っているけど少しだけ違うんだ」

俺の言葉にフェイトは首を傾げた。

「簡単に言うとな？あそこの建物がある場所は温泉があつたはずなんだ。他にも色々あるけどな」

「ふん…」

と言うかフェイトも暮らしてたはずだよな？

…まあ良いか。

「とりあえず旅館に向かおう」

「うん」

俺とフェイトは歩きだした。

そう言えばずっと手を繋いだままだったな。

「あーご、ごめん！！／／／／／」

「ん？別に良いよ。俺から掴んだからな」

フェイトは慌てて言った。
別に気にしなくても良いんだけどな？
…そう言えば、クリスマス？

「…あーっつ！…！！…！！」

「な、何！？」

俺の叫び声にフェイトは驚いていた。
だが気にしない！

「そつだクリスマスだ！！つてことはこの券も…」

券の裏側などをくまなく探すとこんなことが書かれていた。

(ゆっくり楽しんで来てね！b y 竜王&クリスマス)

ゆっくり！？

オマケで絵まで描いてあった。

くそ！服装とかで全然クリスマスだと思わなかった！

「ど、どうかしたの？」

「いや、何でも無いよ…」

心配そうにフェイトが聞いてきた。
俺は軽く笑いながら言った。

「とりあえず行くか」

「う、うん。分かった」

今度こそ俺たちは旅館に向かって歩き始めた。

side out

sideフェイト・テストロツサ

さつき竜馬が言っていたクリスって誰だろう…
もしかして女の人？

「…!?!?」

竜馬が突然、小さく震えました。

「どうしたの？」

「いや、何だか寒気が…」

ふん…

まあ良いや。

後でクリスって人について聞こう。

私は心にそう決めました。

あ、また竜馬が震えた。

side out

side魔神竜馬

何だったんださっきの寒気は？
つと着いたみたいだな。

「結構でかいな…」

「そうだね。本当にここなの？」

不安だな…

一応確認を取るか。

俺とフェイトは旅館の中に入っていった。

「あ、あの…この券ってここであってますか？」

「あら？ええ、合ってるわよ」

どうやら本当にここらしい。

ん？あれは…

「優さんじゃないですか！」

「ん？ああ、来たんだな竜馬。そっちは？」

「フェイト・テストロツサです」

俺が旅館の中で見つけた人物は「なのはの世界から始まる最高神とその家族による異世界旅行」の優さんだった。

…あれ？来たんだな？

「どういう事ですか？」

「いや、俺が竜王に送ったからな、その券」

そう言う事が…

「竜馬、知り合い？」

「ああ、優さんだ。俺なんかよりもずっと強いぞ」

フェイトは会った事無かったもんな。

…優さんがいるという事はもしかして。

「「可愛いの見つけたっ……！……！……！」

「やっぱりいたああああ……！……！……！」

前、「なのはの世界から始まる最高神とその家族による異世界旅行」の後書きに行った時に俺はこの2人、なのはさんとフェイトさんにもみくちやにされたのだ。
俺は急いで向きを変えて走り出そうとした。

「きゃっ!?!」

「おわっ!?!」

いつの間にか後ろにいた女の子にぶつかってしまった。
誰だ?

「大丈夫か?レミリア」

「だ、大丈夫…」

優さんが心配そうに聞いた。
ちなみに俺は2人に捕まった。
ん?レミリア?

「レミリア・スカーレット!?!…でも俺が知ってるのより小さいな」
「失礼ね!?!」

実際、俺が知っているレミリアより頭一つ分小さいくらいだった。
もしかしてフランもいるのか?

「大丈夫?お姉ちゃん」

…いたよ。

優さんの後ろから歩いて出てきました。
こちらもやっぱ小さいな。

「さ、それじゃあ行こうか？」
「どこにですか!？」

なのはさんが俺に言ってきた。
何か目が怖いんですけど!!

「大丈夫大丈夫、痛くないから、ね？」
「いや、怖いんですけど!？」

フェイトさんも怖いんですけど!!

「優さん助けてって何をしてるんですか!？」
「いや、竜王に写真に収めておいてくれて土下座で頼まれたから」

優さんはカメラを構えていた。
そんなことのために土下座をしたのかあいつは!!

「「それじゃあ行こうか？」」
「助けてえええええ!!!!!!」

連れていかれた俺はなのはさんとフェイトさんに着せ替え人形にされた。

ちなみにフェイトは一連の出来事に啞然としていた。

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！そのに（後書き）

（霊使い達の雑談）

……なのはとフェイトの性格がおかしかったかな？

エリ「おかしすぎます！！！」

面白くしようとした結果こうなってしまいました。

ユタ様、不快にしてみましたっちらすみません。

ヒ「んで？贈り物は？」

今から紹介するよ。

ユタ様から「滅刃」シリーズに纏わせられる特殊結界を、

銃王 海さんから破壊の杖とチヨコボの卵を、

ロケットランチャー

White Seal様から「天上天下天地無双刀」「霸剛刀ク

ーネタンカム」「崩刀ウコトカムルバス」「鬼哭斬破刀・真打」「

氷刃【雪月花】」「飛竜刀【椿】」「飛竜刀【葵】G」「アトラン

ティカ」「ミラザージェスパノン」「夜刀【月影】」「ラストエクデ

イシス」「龍刀【劫火】」「龍木ノ古太刀【神斬】」「王牙刀【伏

雷】」「といにしえの秘薬、閃光玉、回復薬グレート、けむり玉、こ

やし玉をそれぞれ100ヶ程を、

バラランシヤ様から柗春人特製性転換キャンディ×1000を、

効能：男の娘の性別を完全に女性へと変えることが出来る。

普通の男の子や女の子が服用しても、特に効果は無い。

くどい様だが、男の娘限定だ。

服用数：1回1粒

持続時間：1粒72時間

いただきました!!

五人「……………」

どうした?

ヒ「多っ!!!!」

アウ「予想外ですね…」

エリ「意外すぎます…」

ウイ「すっごい!」

クリ「卵が四つ目ですね…」

俺も驚いてるよ。

クリ「あ…」

ん?

ぎゃあああああああ!!!!!!!!!!

ヒ「お?ゼロ・ブレイカーだな」

アウ「撃ったんですね…」

クリ「遅かった…」

エリ「とりあえず卵をいつもの所に置いて…」

ウイ「武器はお兄ちゃんの王の財宝ゲイト・オブ・パヒロンに入れておくね?」

し、死ぬかと思った…

あ、性転換キャンディは俺が持ってるよ。

本編で俺が竜馬に使うし。

アウ「絶対ですよ!!」

当たり前だ。

今回の締めを…ウィン言ってみよう。

ウィ「うん。闇を狩る少年続くよ!！」

意外にまだ続きます。

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！そのさんっ！（前書き）

はい、まだ番外編が続きます。

それではどうぞ。

番外編 ドキッ!? 2人で温泉旅行!! そのさんっ!

side 魔神竜馬

数時間後、俺はなのはさんとフェイトさんから解放された。

「つ、疲れた…」

「だ、大丈夫？」

フェイトが心配そうに聞いてきた。
とりあえず温泉に入るかな。

「フェイト、温泉に入ろうぜ」

「え? うん」

よし、決まりだ。

俺はフェイトと一緒に温泉に向かった。

温泉の中なら安全だろうしな…

side out

side 第3者視点

「それじゃあ後でな」

「うん、それじゃ」

竜馬とフェイトは温泉の入り口で別れて入っていった。

「あ、優さん」

「ん? 竜馬も入ってきたんだな」

竜馬が入ると優さんが先に入っていた。

「結構広いですね」
「ああ、そうだな」

2人は湯船に浸かってのんびりしていた。

「あれ？お父さん」
「ん？ああ、レミィか」

すると2人の向こうからレミリアがやって来た。
竜馬は驚愕の表情を浮かべた。

「どうしたんだ？竜馬」

「いや、何で普通に対応できるんですか！？ここは男湯じゃ！？」

優さんは驚いている竜馬に言った。

「知らないのか？ここは混浴だぞ」
「！？」

その言葉を聞いて竜馬はさらに驚いた。
ちなみに券には混浴と書いてあった。
よく見なければ気付かない大きさで…

「？…誰かいるんで…す…か…！？」
「な！？」

どうやら竜馬の声が聞こえたらしくフェイトがやって来た。
勿論、温泉の中なので衣服は無くタオルを巻いている。

「な、何で！？ここは女湯じゃ！？」

「見事に竜馬と同じ反応だね」

「そうだねお父さん」

フェイトの反応を優さんは面白そうに見ていた。

side out

side フェイト・テストロツサ

今、私の顔はゆでられたタコよりも赤いと思います。

「え？え？／／／／／」

「いや…あの…えつと…」

竜馬が慌てていますけど私は何も考えられません。

えつと…

私が声のした方に行ったら竜馬がいて、それで今ここは温泉の中で、私達は裸で…

「！？／／／／／」

「フェイトツ！？」

えつとえつとえつと…

う、うわあああああん！！！！

side out

side 魔神竜馬

「ちよつフェイト！？」

「／／／／／ツ／／！！！！」

突然フェイトがバリアジャケットを展開してバルディッシュを構え

て攻撃してきました。
危なっつ!!!

「む、無々！能力発動。形状は双剣」
『了解しました』

俺は無々に言つて双剣になつてもらつた。
ちなみに無々は様々な武器に変化できる代わりにバリアジャケット
が展開されません。

「ほら、腕輪が喋つただろ？」

「本当だ！凄いなお父さん」

のんびり親子の絆を深めてらっしゃるうつつうつ！！！
助けを求めようと優さんの方を見ると優さんはレミリアと楽しそう
に話をしていた。

「くっそ！落ちつけフェイト！！」

「……………」

とりあえず俺は腰にタオルを巻いてフェイトの攻撃を防いだ。
フェイトは何も聞こえていないのか返事をしなかった。

その後、フェイトは湯当たりを起こして気絶した。

…あのまま続けてたらヤバかったかもしれない。

side out

side 第3者視点

「温泉に入つてさらに疲れるとか…」

げっそりとした表情で竜馬は言った。

魔法陣から砲撃が放たれた。

その砲撃は狙い通りなら竜王へと当たるだろう。

そして竜馬は眠るために優さんに挨拶をして部屋に向かった。

side out

side 魔神竜馬

部屋に戻る途中でフェイトに出会った。

「大丈夫か？フェイト」

「う、うん／＼／＼／＼ごめん、いきなりで驚いて、その…」

どうやら湯当たりから戻ったらしい。

でも時間も遅いし眠るか。

「じゃあ、寝るか？」

「うん、そうだね」

俺は部屋に入って啞然とした。

「何で布団が1つ!？」

「／／／／／」

布団が1つしか無かったのだ。

何で!？

「と、とりあえず布団をもう1つ出そう」

「そ、そうだね! (ちよつと残念かな…)」

ん？

フエイトが何か言ったか？
俺は布団をもっつ出してそちらに寝た。

番外編 ドキッ!? 2人で温泉旅行!! そのさんっ! (後書き)

♪ 霊使い達の雑談♪

…番外編なのに長くてすみません。

エリ「予想外に長編ですね」

うん。

あ、贈り物の紹介をします。

ユタ様より「滅刃 捕」を、

銃王 海さんより掃除ロボット、竜の卵、魔力体(マテリアルなど)をふつうの人間にするカード30枚を、

いただきました。

アウ「また卵ですか…今度は竜の…」

良いじゃん面白いし。

ん?

ポケモンの卵が動いてるぞ?

ヒ「ああ、たぶん明日あたりに孵るな」

そうか。

掃除ロボットはリンディ。

リン「あら、嬉しいわね。銃王 海さんありがとうっ!」

卵はいつもの所♪

クリ「あ、竜王また…」

マジか!?

ウイ「逃げるの速いね…」

はっはっは!!…ぎゃあああああああ!!…!!…!!

ヒ「逃げる事は予想済みだったらしいな…」

エリ「滅刃 捕は竜馬さんの王の財宝に、ですね」

アウ「カードはどうしますか？」

ウイ「とりあえず作者さんの所に置いておこう。私たちじゃ分からないし」

3人「…そう(だな)(ですね)(だね)」「」「」

クリ「竜王は大丈夫かな…闇を狩る少年続きます」

い、生きていますよ…

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！そのよんっ！？（前書き）

番外編のはずなのに長くてすみません。

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！そのよんっ！？

side 魔神竜馬

…体が重い？

しかも動けない！？

「…むにゃ…竜馬…」

ん？

この声は…

俺は恐る恐る目を開けた。

「…やっぱりか」

俺の上にフェイトが寝ていた。

何でだよ…

「ん…」

「むぐっ！？」

フェイトの顔が近づいてき…！？

俺はフェイトに唇を奪われた。

「むぐっ！むぐっ！？」

「…んむ？」

ファーストキスが！？

俺のうめき声にフェイトがゆっくり目を開けた。

「…むぐう!!」

「……／／／／!?」

フェイトは慌てて離れた。

「ぶはっ…フェイト起きたか?／／／／」

「え?あう／／／／」

フェイトは顔を赤くした。

こっちが恥ずかしいわ!!!

「えっと…何で私は竜馬と…その…／／／／」

「その、お前が寝ぼけてな…／／／／」

と言うか上から降りてほしいんだが…

side out

sideフェイト・テストロツサ

うっ…／／／／

昨日の事よりも恥ずかしい…

「…と、とりあえず降りてくれないか?」

「あーっ、ごめん／／／／」

竜馬に言われて私は慌てて降りました。

今日はきつと竜馬の顔を見れないよ／／／／

「…あ、朝ごはんは何だろっな／／／／」

「な、何だろっ?／／／／」

竜馬の顔も赤い…
き、気まずいよう…!

side out

side 優・Z・哭堵 ゼーケフレヒト

いや、良い写真が撮れたな。

「これで竜王からの依頼は十分かな？」

「何やってるの？パパ」

ん？

振り返るとフランがいた。

「いや、受けた依頼の仕事をね」

「ふん…あ！ねえねえお風呂に行こ…！」

朝風呂かあ…

良いかもな。

「よし！それじゃあ行こうか」

「お〜」

俺はフランを抱っこし温泉に向かった。

写真は後で送るぞ、竜王。

side out

side 魔神竜馬

どどどどどしよどどどしよ…!!

マジで今、フェイトの顔が見れない／＼／＼／＼…!!

「どうかしたのですか？」
「ん？ああ、レミリアか」

俺が歩いているとレミリアが声をかけてきた。
単独行動をしているのか…

「いや、朝ちよつとな…」

「そうですか。お父さんに相談しますか？」

優さんに相談か、なんとかなるかな？

…いや待て、優さんの所に行ったらなのはさんとフェイトさんに会
つてしまう…！

「い、いや良いよ。ありがとうな」

「そうですか。フランはどこに行ったのかしら？」

迷子！？

探した方が良いのかな…

「探すの手伝おうか？」

「あ、ありがとうございます。お願いします」

さて、さっさと探すかな。

探している内に気分も落ち着くかもしれないからな。
俺はレミリアと一緒に歩き始めた。

…傍から見たらロリコンで誘拐犯か？

side out

side 第3者視点

「フランどこ？」

「どこだ〜?」

フランを探している竜馬とレミリア。
現在、旅館の2階。

ちなみに優さん達の部屋はこの階。

「可愛いのが2人組で!!!!!!」
「げっ!?!」

当然のようになのはに見つかった2人。

「あ、お母さん」

「レミィ！竜馬君を捕まえて!!」

なのはに言われて竜馬にしがみつくレミリア。
無下に引き離す事も出来ずに固まる竜馬。

「さ！2人共行こう!!!!!!」

「またかよおおおおお!!!!」

連れていかれる竜馬。

その日、1日をなのはに着せ替え人形にされて過ごした竜馬だった。
途中で優さんが加わりました。

番外編 ドキッ!? 2人で温泉旅行!!! そのよんっ!? (後書き)

♪ 霊使い達の雑談♪

おそらくですが明日で番外編が終わると思います。

エリ「やっとですね…!」

今日で4話目だもんな…

つと贈り物が来ています。

ユタ様から、なのはが撮った竜馬の女装写真セット(スク水、メイド服、猫耳メイド服等々)を1000枚組、

White Seal様から、飛竜の卵、コウリュウノツガイ、祭
囃子・晴嵐ノ調、双聖剣ギルドナイト、轟大剣【大王虎】、角王剣
アーティラート、ブリュンヒルデ、エンデデアヴェルト、ナナッソ
レイユ、大砲モロコシ、ブループロミネンス、レイジングテンペス
ト、夜砲【黒風】、老山龍砲・極、剣士用S・ソルZー式、天の山
菜組引換券×100を、

銃王 海さんから、「チョコボと魔法の絵本」に出てくるポップア
ツプデュエルカード一式とフェニックスの卵を、

いただきました!

ヒ「また多いな…」

アウ「卵が二つ追加ですね」

あ、そう言えばポケモンの卵はどうなった?

ウィ「今、孵るところだよ!」

マジでー！！

~~~~~?~~~~~?~~~~~ (ポケモンの卵が孵る時の曲)

おめでとう！

ヒンバスが生まれたよ！

ヒ「汚いポケモンが生まれたな……」

なっ！？

お前知らないのか！？

ヒ「なにを？」

まあ良いや。

とりあえず写真を配るぞ。

4人「コッコッ／／／／／／／／／／」

見事に全員が赤面しました。

クリ「天の山菜組引換券はどうするんですか？」

山菜じじいがいるんじゃないのか？

あ、今度はデジタマが動いてる。

アウ「何が生まれるんでしょう？」

さあ？

今回の締めは…クリスマスだ！

クリ「闇を狩る少年続きましたゆ!?!?...続きます// // //」

噛んだ!

微笑ましいなあ...

番外編 ドキッ！？2人で温泉旅行！！そのごっ！？（前書き）

今回で番外編は終わります。

長くなってしまいましたすみません。

次に番外編を書くときは気をつけます。

それではどうぞ。

番外編 ドキッ!? 2人で温泉旅行!! そのつづ!?

side フェイト・テスタロッサ

今日で温泉旅行も終りかあ…

少し残念かな。

私は布団から起きてそう思いました。

「…ん?…ふわあああ…お、起きてたのか../../../../」  
「う、うん../../../../」

横の布団で竜馬が起きました。

うう…恥ずかしくて顔が見れない../../../../

「あ、あのさ…昨日の事は事故だったんだから…その、お互いに忘れないか?」

「え?」

竜馬は言い難そうに言いました。  
忘れる…?

「いや…俺なんかとしちゃって厭だっただろ?」

「そんなこと…そんなこと無い!…!」

私は竜馬の言葉に反論しました。

side out

side 魔神竜馬

フェイトがいきなり大きな声を出したので俺は驚いた。  
な、何なんだ!?

「私…竜馬のこと…その…／／／／／」  
「？」

何で赤くなっているんだ？

俺なんかとキスしたら厭だろっに…

「失礼します。竜馬さん、お父さんが呼んでいます」  
「あ、うっ…／／／／／」

突然レミリアが入って来た。

フェイトは顔を赤くして固まってしまった。  
優さんが呼んでいる？

「わ、悪いなフェイト。後で聞かせてくれ」  
「う、うん…」

俺はフェイトに謝り部屋から出た。  
優さんが何かあったのかな？

「お、来たか竜馬」  
「どうかしたんですか？」

優さんは旅館の入り口にいた。  
いったい何の用だろう？

「いやな、そろそろお前等が元の世界に戻る時間なんだよ。だから  
お土産をと思ってな」

「そうですか…少し寂しいです」

そう言えば今日、帰るんだっとな。  
俺はここに来てからの事を思い返してみた。

「……着せ替え人形にされてばかりでした」

「あははは！まあ、良い思い出だな。これがお土産だよ」

笑いながら優さんは紙袋を差し出した。

中を見ると優さんが作ったケーキが入っていた。

「ありがとうございます！」

「おう、それじゃあフェイトちゃんを迎えに行ってきたな」

「はい！！！」

俺はフェイトのいる部屋に戻った。

部屋に入るとフェイトはすでに普段着に着替えていた。

「フェイト、もうすぐ帰る時間らしいんだ。準備は大丈夫か？」

「私は大丈夫だよ」

顔の色が元に戻ってるな。

フェイトの言おうとしていた事は何だったんだろう？

「…そうか、それじゃあ行こうか」

「うん」

俺達は旅館の入り口に向かって行った。

そう言えば…

「何でフェイトは寝ぼけてあんな事を…／／／／／」

「えっと…／／／／母さんから聞いて夢でちよつと…／／／／／」

俺とフェイトは2人して顔を赤くした。

あゝ…プレシアが原因か…

あの人は娘に何を教えているんだか…

「ん？来たな…」

「うっ…可愛いのとお別れだなんて…」

「今度は優君で…」

入口に着くと優さん一家がいました。

レミリアとフランは優さんの左右に手を繋いでいます。

「そろそろか、じゃあな竜馬、フェイトちゃん」

「はい、お土産までいただいてしまつてありがとうございます」

そして俺とフェイトは転送光に包まれた。

side out

side 第3者視点

竜馬達が戻ってくる少し前…

「ん？写真と動画が来てるの…」

なのはのケータイのメール着信音が鳴った。

「!？」

写真と動画を見てなのはは驚いた。

そこに映っているのはフェイトと竜馬のキスシーンだった。



「……帰ってきたらお話しなくちゃ」

目のハイライトが消えた状態でなのは言った。  
ちなみに他にプレシア、アリシア、ジャバウオック、リンディ、エ  
イミイ、クロノ、ユーノの所にも同じメールが届いていた。

side out

side 魔神竜馬

「戻ってきたな」

「そうだね」

俺とフェイトはアースラの訓練場に転送された。  
何故ここに？

「戻って来たんですね／／／／」

「ん？ああ」

…何故エイミイが照れているんだ？

「…2人共お帰り」

「おお、ただ…い…ま…!？」

振り返ると目のハイライトが消えた悪魔なのはがいた。

「ちょっとお話があるんだけど良いかな？良いよね。それじゃあ、  
お話しようか…」

「え？え!？」

フェイトは驚いていた。

何を言っても無駄だと思った俺は諦めた。



番外編 ドキッ!? 2人で温泉旅行!! そのつづ!? (後書き)

「霊使い達の雑談」

やっと番外編が終わりました!!!  
長くてすみません。

エリ「あのメールは誰が?」

White Seal様が送ってた。

アウ「そうですか」

それでは贈り物の紹介を、

ユタ様から、前回の写真の性転換バージョンと着物やパジャマの気崩れ等の写真、口調と声が女の子になったときの動画ちなみに動画の中に涙目&上目使いで「おねーちゃん」というものがある。を1000組、

銃王 海さんから、きれいなウロコとマナフィの卵を、

White Seal様から、草食竜の卵、霊刀ユクモ・真打、王牙弓【稚雷】、霊弓ユクモ【覇軍】、青熊豪斧【山祭】、剣士用ジョンオウS一式、スカギザ(装飾品込み)、撫子一式(女性剣士用)、桔梗一式(女性ガンナー用)、剣士用リノプロS一式、雷狼竜の碧玉、大地の龍玉、黒龍の邪眼、崩天玉、カレイドステッキ(ルビー)、カレイドステッキ(サファイア)を、

いただきました。

エリ「魔法少女の杖ですか?」

ん？ああ、これは一時的に預かってるものだった。

アウ「どうするんですか？」

竜馬に持たせてみようかと思ってる。

ウィ「あははは…」

卵がさらに二つ追加だな。

お、デジタマが…

コロモンが生まれた！！

ヒ「お！可愛いなこいつ」

進化すると凄いなだよなこいつも…

そう言えばモンハンの女性装備って竜馬も装備できるのかな？

…できそうだな。

うん、できるな。

写真とか動画は後で配る事にしよう。

今回の締めは…エリアだ。

エリ「闇を狩る少年続きます…番外編が終わりましたね」

ああ、次に書くときは短くなるように頑張るよ。

訓練は忘れずにやるうー！

side 魔神竜馬

俺はアースラの医務室で目を覚ました。  
前にも同じようなことがあったな…

「…なんでなのはは怒っていたんだ？」  
「それはこういうことだ」

！？

いつの間にか横にジャバウオックがいた。  
ジャバウオックはケータイを取り出した。

「それに何か…！？」  
「分かったか…」

ちよっ！？

何でこの画像が！？  
しかも動画まで！！  
ジャバウオックの出したケータイには俺とフェイトのキスシーンが映っていた。

「さ、それでは納得の行く説明をしてもらおうぞ？」  
「え、えっと…目が怖いんですけど…」

ジャバウオックの目はハイライトが消えていた。  
めちゃくちゃ怖い。

「その、これは…フェイトが寝ぼけていて、えっと…だから、その

事故なんだ…」

「ふむ…事故か…」

納得してくれたか？

ジャバウォックは思案顔になった。

「…まあ、今回は信じてやるう」

「ありがとう…」

渋々と言った表情でジャバウォックは言った。  
助かった。

「そう言えばフェイトは？俺と一緒になのはに会ったんだが…」

「フェイト？フェイトならそちらのベッドにいるぞ」

うえー！？

俺は慌ててもう一つのベッドを見た。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…」

「…何があつたんだ？」

フェイトは壊れた機械のように謝り続けていた。

どうやら悪夢を見ているようだ。

「いやな？竜馬がスターライトブレイカーを受けた後になのはの一方的なお話があつてな…」

よほど恐ろしかったのか震えながらジャバウォックは言った。  
気絶していて俺は助かったのか…

「すまなかつたフェイト」

「許して、許して、許して…」

俺は罵うなされているフェイトに土下座をした。

こんなもんじゃ謝罪にもならないだろうけど…

「さて、我はもう行くが主ぬしはどうする？」

「…ずっと医務室にいるのも迷惑だからな、俺も行くよ」

そう言つて俺は医務室から出た。

フェイト、本当にすまなかつた…

side out

side ジャバウオック・サタナキア

…竜馬が寝ている時から飛んでいるあの球体は何なのだろう？

竜馬は気にしていないようだが…

「竜馬、それは何なんだ？」

「それ？それつて何だ？」

気付いていないのか!?

竜馬の目の前を飛んでいるというのに…

「とりあえず俺は訓練室に行くからな？」

「そうか。む？…メールか」

竜馬はそう言つて訓練室に向かった。

つとメールが来ていたな。

「何々？…竜馬の周囲に飛んでいる球体はカメラです。欲しい写真

もしくは動画があればこちらにメールをしてください。そちらにお送りします。…なんだと!？」

竜馬の写真と動画!？」

これは欲しいぞ!!」

「とりあえずこのメールは保存だな…」

我は来たメールを保存した。

最初はどんな写真を貰おうかな

side out

side 魔神竜馬

…人権が無視されている気がする。

俺は訓練室に着いた。

「まあ、気のせいだろ…無々、能力発動。形状は大鎌」

『了解しました』

無々は大鎌に変化した。

それじゃあ、まずは…

「? 死神の鎌?」  
デスサイズ

俺は大鎌に魔力を乗せた。

「…誰かターゲットを出してくれ、数は設定無しで」

「分かりました。無制限ですね」

アースラの乗組員が返事をした。



そしてターゲットが出現した。

「あれ？これって傀儡兵くわいへいじゃねえか…」

ターゲットとして現れたのは、時の箱庭にいた傀儡兵だった。

「プレシアが協力したのか？…まあ、良いか」

俺は無々を振るい傀儡兵を破壊していった。  
ふむ、たまには素振り以外の練習も良いな。

「無々、大鎌をエクステンド。万死ヲ刻ム影」  
「エクステンド？万死ヲ刻ム影？」

万死ヲ刻ム影、これはフォウル様から頂いたインストールブック？  
黄昏の書？をインストールして無々の大鎌が変化したものだ。

？碎魂ノ凶手・改？が付いているので与えたダメージが使用者の体  
力と精神力に還元される。

ただし、長時間使用すると精神が浸食されるため危険。

「おらおらおら！！！！」

再び俺は傀儡兵を破壊していった。

攻撃するたびに自身の体力が回復している事が感じられるな。

「ぐっ！？」

100体を破壊したところで俺は頭痛を感じた。

早いな…もう精神が限界かよ…

「無々、エクステンド解除」  
『了解しました。コントロールアクション』

無々は元の大鎌に戻った。  
精神浸食が早すぎるのが今のところ最大の問題だな。

「次は双剣だな。無々、頼む」  
『形状変化、双剣』

無々は西洋剣と日本刀の双剣に変化した。  
それじゃあ行くか。

「せいっ！はっ！！たあっ！！」

俺は近づいてくる傀儡兵を破壊していった。  
そう言えば王の財宝ゲート・オブ・バビロンをもう少し使いなれないとな。

「使っておくか、王の財宝ゲート・オブ・バビロン！！」

俺の周囲に大量の武器が現れた。  
その中には過去に俺が創った武器や贈り物として来た武器なども含まれている。

「せーのっ！射出！！！」

周囲の武器を俺は飛ばした。  
飛ばした武器は地面に刺さるか傀儡兵に刺さるかをしていた。

「今度は、ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転

身』」

呪文を唱えてフェンリルに変身した。

フェンリルと王の財宝の組み合わせなら…  
ゲート・オブ・バビロン

「ふっ！…！」

俺は素早く動いて刺さっている武器を使い傀儡兵を破壊していった。  
ある傀儡兵は縦に斬り裂き、ある傀儡兵は頭部を突き破壊した。

「…疾風迅雷ってか？」

出ている全ての傀儡兵を破壊し終えて俺は言った。  
すると巨大な傀儡兵が現れた。

「強化版か…？」

『先程までのより性能が上の用です』

マジか…

傀儡兵は攻撃を仕掛けてきた。

「早っ！？」

さっきまでの傀儡兵のスピードを格段に上回っていた。  
こいつはめんどくさいな。

「刃が通るかも怪しいからな…！」

俺は傀儡兵の攻撃を避けながら考えた。  
スピードが速く硬度も高い。

通常の武器じゃ無理だな…

「ならば！影槍！！」

影槍を発動し傀儡兵の動きを止めた。

これでスピードは殺したな。

「後は？死神の鎌？！！」

俺は魔力を乗せた刃で傀儡兵を斬り裂き破壊した。  
これで終わりかな。

「ターゲットを出すのを止めてくれ」

「あ、はい」

ふう、少し疲れたかな…

つとひだまり荘に戻らないとな。

俺はひだまり荘に戻るために転送ポイントに向かった。

訓練は忘れずにやろう!! (後書き)

〈霊使い達の雑談〉

本編が更新できたー!!

それでは恒例の贈り物の紹介をします。

まずユタ様より、モンハンの装備女版一式(モンハンシリーズ全作の全装備。MHFで新しいのが出ればそれを自動転送)を、

銃王 海さんより、ギロチンとリヴァイアサンの卵を、  
いただきました。

ウイ「お兄ちゃんの周りに飛んでいるカメラは何？」

ん？ユタ様が飛ばしてくれた。

俺とユタ様のどちらかに頼めば写真または動画を撮れるようになってるZE

ヒ「入浴シーンを!!!」

アウ「トイレのシーンを!!!」

…どっちも変態的な要望をありがとう。

っとドラゴン、フェニックス、フェンリルの卵が動いてるぞ!?

エリ「おそらく明日か明後日に孵りそうですね」

ふん。

楽しみに待つかな。

それじゃあ今回の締めを…クリスマスだな。

クリ「分かった。闇を狩る少年続きます」

あ、いまさらですが感想を書いていただけだけでも嬉しいので無理に贈り物をしてくれなくても良いですよ。

それでは次回をお楽しみに！

俺の人権はどこに行ったのだろう…

side 魔神竜馬

…そうだ、久々になずなの能力を見てみよう。

そう思い俺はなずなを連れてアースラの訓練室に行った。

「と、言う訳で全力で結界を張ってください」

「う、うん。分かった」

なずなは結界を張った。

デバイスがあるお陰か強度が上がっているな。

「…ふむ、充分ですね」

『恐悦です』

なずなのデバイスのアイギスが言った。

俺に対してどんな情報が入っているんだ？

「それじゃあ魔力を込めて思い切り殴ってみますね」

「分かった…」

ちなみに今、俺は無々に大鎌になってもらっている。

俺は右手に魔力を込め始めた。

「せーのっ！！！！」

俺の拳と結界がぶつかり合って凄まじい音を出した。  
それでも結界は破れなかった。

「痛〜：うん。俺が殴って壊れないなら大丈夫です」  
「だ、大丈夫…？」

なずなは痛がっている俺の手を見て言った。  
この優しさが結界の堅さをさらに堅固なものにしているのだろう。

「大丈夫ですよ。この程度なら…」  
「そう？…なら良いんだけど」

と云うかさっきの俺の魔力込めたパンチってなのはのディバインバスター三発分ぐらいの威力があったと思うんだが…  
防御だけならまさに鉄壁か。

「…これなら安心かな」  
「？…何か言った？」

なずなには俺の咳が届かなかったようだ。  
まあ、聞こえても関係無いだろうが…

「ん？メール？」  
「どうかしたの？」

不意に俺のケータイにメールが届いた。  
これは誰のアドレスだ？

「えっと？…ゲート・オブ・バベル王の財宝にバリアジャケットの代わりを入れておいた。  
使うかわらないかはお前次第だ。…何だこりゃ？」

バリアジャケットの代わり？  
確認してみないと分からないな…



「<sup>ゲイト・オブ・バビロン</sup>王の財宝！んぐ…と、これか？」

俺は王の財宝から腕輪の様なものを取り出した。  
<sup>ゲイト・オブ・バビロン</sup>  
これがバリアジャケットの代わり？

「竜馬君、それ何？」

「分かりません。バリアジャケットの代わりらしいんですが…」

説明書とかも何も無いからなあ…  
着けてみるしかないかな？

「よいしょつと…別に何も起きないな？…！？」

いきなり腕輪が光り出した。  
何が起きているんだ！？

side out

side 第3者視点

しばらくして竜馬を包んでいた光が徐々に消えていった。

「もう！何が起きているの！！」

聞いた事のない声に無々となずなは驚いた。

「え！？だ、誰ですか！？」

『マスターはどこですか！？』

そこに立っているのは頭に角の様な物を着けている1人の少女だった。

そして竜馬の姿はどこにも無かった。

「え？2人共何言ってるの？私はここにいるじゃない」

なずなと無々の言葉に少女は言った。

ちなみに恰好はモンハンのキリン装備である。

『何を言ってるんですか！！私のマスターは男の娘です！！』  
「ふ〜ん…そんな風に私の事を思ってたんだ無々は…」

無々の言葉を聞いて少女は言った。

少女の無々と言う言葉を聞きなずなは言った。

「もしかして…竜馬君？」

「さつきから言ってるじゃない！」

なずなの言葉に少女は…否、竜馬は叫んだ。  
だが疑問は残る。

『…何故女の子の姿に？それに喋り方まで…』  
「え？……な、何よコレええええええ！！！！！！」

どつやら自身の恰好や喋り方に違和感を覚えていなかったらしい。

「うつつ…また女の子になってる…」

「と、とりあえずその服を脱いだら？」

落ち込む竜馬になずなは言った。

side out

side 魔神竜馬

何でこんな事になってるんだ…

「どうやったら戻るのかな…」

また勝手に女の子の喋り方になってるし!!

俺は頭を抱えた。

本当にもう戻ってくれよ!!!!!!

「きゃっ!?!」

再び腕輪が光った。

今度は何が起きるんだよ…

そして徐々に光が収まっていった。

「ん…あれ?戻っ…た…のか?」

光が収まると俺の姿は元の男の子の物へと戻っていた。

「よっしゃああ!!!!戻った!!!!」

『本当にマスターでした…』

驚いたような声を無々があげた。

全部この腕輪が原因か…

俺は腕輪を外そうとした。

「ん?…んん??」

外れない?

腕輪はまるで腕と一体化したかのように外れなくなっていた。

「マジかよ…」

俺はもう一度頭を抱えた。

side out

side 第3者視点

竜馬は、呪いの腕輪？を手に入れた！！

呪いの腕輪？

- ・ 装備者を強制的に女性体に変え女声になり、口調も女の子にする。
- ・ 発動した場合モンハンのキリン装備（女性剣士用）になる。
- ・ ??????
- ・ ??????

「…っーか何でキリン装備？」

竜馬の呟きは誰の耳にも届く事は無かった。



それじゃあ今回の締めを…ヒータ頼んだ。

ヒ「あいよ、闇を狩る少年続くぞ！！っつとそうだ昨日頼んだやつはどうなった？」

ちゃんと来てるよ。

はい、竜馬の入浴シーン。

んで、アウスに竜馬のトイレのシーン。

2人「ブウウウウウ！！！！」 (鼻血大噴出)

あ、刺激的すぎたんだな…

それではこれからもよろしく。

雇われし殺し屋：俺の後ろに立つな、とか？

side 魔神竜馬

朝、俺ははずなの部屋で目を覚ます。

未だにゆの姉達は俺の事を忘れているらしい。

「ん？…何か違和感があるな」

『どうかしたのですか？』

俺の呟きに無々が反応した。

「いやな？何だか変な魔力？みたいな物を感じるんだよ」

『変な魔力ですか。調べてみますか？』

うん…

まあ、一応頼むか。

「頼む」

『了解しました』

さてと、結果が出るまで俺はデッキの調整でもしていようかな。  
俺はデッキをいくつか取り出した。

side out

side リンディ・ハラウン

「艦長！謎の魔力反応があります！」

「それはどこですか？」

私はエイミィに尋ねました。

謎の魔力反応…また竜馬さんじゃないわよね？

「えっと…出ました。竜馬君がいるひだまり荘の周囲100kmです…！」

「…また、なのね？」

何故、彼の周りにはトラブルが集まるのかしら？

まさかだけど最近、別の世界で起きているリンカーコアが弱っている生物が増えているのも関係して無いわよね？

「どうしますか？一応なのはちゃん達を行かせますか？」

「…そうね。なのはさん達に竜馬さんの所に行くように言っちゃうだい」

前回みたいに竜馬さんが負ける事も考慮しておかないとね。考えたくもないけど…

side out

side 魔神竜馬

「む…ブラック・パラディンのデッキでも創るか」

ちなみに二軍は？死者への手向け？を？闇の護封剣？に入れ替えた。

「E・HEROと魔法使いのデッキを分解して…融合とアルカナナイトジョーカーを残して…」

「凄い量のカードだね」

え！？

いつの間にかなのは、フェイト、アリシア、ジャバウォック、クロノ、ユーノがいた。



…不法侵入じゃね？

「大丈夫だなずなさんには許可を取った」

「心読むなよ…」

クロノはあつさりと俺の心を読んだ。

まあ、許可が取ってあるなら良いけど。

「ところで…」

「ん？なんだアリシア」

不意にアリシアがケータイを取り出した。  
何だかまた厭な予感がするんだが…

「これって竜馬だよね？」

「！？…何でその写真が！！」

アリシアのケータイにはキリン装備の時の俺が映っていた。  
誰が撮ったんだ！？

「ア、アリシア…もし良かったらその写真を僕にも送ってくれないか？」

「あ、僕にも…」

クロノとユーノが言った。

え！？こいつ等何言ってるの！？

「え…仕方が無いなあ」

「…ありがとう…！！」

しかも勝手に決めてる！！  
俺の意見は！？

「…はあ。んで？どうしていきなり来たんだ？」

「あ、実はこのひだまり荘の周囲100？に謎の魔力反応があったんだって」

謎の魔力反応…

それってもしかして。

「無々」

『はい、ここを中心とした周囲100？の地中に謎の魔力反応があります』

地中？

えっと、この世界の？闇？に？千変？がいたから…

「…ッ！！全員早く部屋から出て空に上がれ！！！！」

「どうしたのだそんなに慌てて」

駄目だ説明している暇が無い！！

「無々、能力発動！！決闘」<sup>デュエル</sup>

『了解しました。能力発動。決闘』<sup>デュエル</sup>

無々はデュエルディスクに変化した。

急がないと！！

「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転

身」

「な!?!どうしたんだいきなり!?!」

ユーノが驚き叫んだ。

「五月蠅い!?!守護天翼!?!」

俺は翼を広げて6人を包みこんだ。  
6人とも突然の事に驚いている。

「竜馬君いきなりどうしたの?」

「敵がいるの?」

「でも、特に変な感じはしなかったよ?」

「何を慌てていたのだ?」

「これが竜馬の変身した力か…!」

「…もしかして、この変な魔力反応に心当たりがあるのかい?」

上からなのは、フェイト、アリシア、ジャバウォック、クロノ、ユーノの順である。

ユーノ正解だ。

「ああ、俺が知っている通りならこの変な魔力は奴だ」

「奴?奴とは誰だ?」

説明した方が良さそうだな。

「ここを中心とした周囲100?の地中に殺し屋、?壊刃?サブラクがいる」

「殺し屋だと!?!」

ジババウオックは驚いた。

まあ、これが普通の反応だよな。

なのは、フェイト、アリシアは良く分かっていると言った表情をしておりクロノ、ユーノは特に驚いた表情もせずに落ち着いていた。

「で？その殺し屋と今のこの状況にどんな関係があるんだい？」

「サブラクは最初に必ず広範囲攻撃を仕掛けて来るんだ。サブラクの攻撃は絶対に受けちゃいけない、奴の攻撃を受けるとその傷は治らなくなり血を流し続ける事になるんだ」

実際サブラクのステイグマは厄介だからな…

6人は俺の説明を聞いて驚いた。

「そんな…それじゃあどうしたら!？」

「…とりあえず結界を張らないとヤバいな」

結界の内部なら人間の数が一気に減るからな。

魔力が無いなら結界の中には入れないし。

「ど、どれくらいの大きさの結界を張ればいいの？」

「サブラクを包めるくらいだ。だから周囲100?を包んでくれ」

少しでもはみ出ていればそこから人を喰いやがるからな。

だが、ここにいる7人で張れるか？

「しかし、そんな巨大な相手をどうやって倒すんだ？」

「それは俺が戦う。お前等は結界の維持だけをしていれば良い」

この中でステイグマをなんとかできるのは俺だけだからな。

俺の答えを聞いて6人は驚いた表情をした。

「また無茶をする気!?!」

「俺しかできないから俺がやるんだ」

フェイトの問いに俺は答えた。

「だけどそれだけで竜馬が傷ついて良いって言う理由にはならないよ!?!」

「…良いんだよ。俺は仲間が傷つく所なんて絶対に見たくないんだ…」

アリシアは大きな声で言った。

それに対して俺は静かに言った。

この俺の言葉を聞いて6人は何も言わなくなった。

雇われし殺し屋：俺の後ろに立つな、とか？（後書き）

（霊使い達の雑談）

ふう、本編が少しは進んだかな？

エリ「微妙なところですね…」

アウ「ところでアリシアの所に来ていたあの写真と動画は何だったんですか？」

ユタ様を送ってた。

あ、それと実際に俺のデッキもリアルに改造中です。

ヒ「果てしなくどーでも良いな」

だろうな。

それじゃあ贈り物の紹介だ。

銃王 海さんから、Angel player、武装錬金カズキverを、

White Seal様から、神々しいオーラ漂う特別なポケモンのタマゴ3個、開山剣斧ユクモ、轟断剣、龍弓【天崩】、霸滅弓ク  
ーネレラカム、ディアソルテアロー、勝利と栄光の勇弓？、殲滅と破壊の剛弓？、黒鐵クロガネ、白銀シロガネ、鋼ハガネ、イグナイター、アニア謹製不幸の御札1000枚と、なのはにスペカ恋符『マスタースパーク』と星符『ドラゴンメテオ』を、フェイトにスペカ『幻想風靡』とMHP3のユアミー式とメモ『You、押し倒しちやいなYO！』（自分の欲求）に素直になれるような軽い暗示付き）を、なずにスペカ境界『二重弾幕結界』と『夢想天生』を、竜馬ラバーズ全員に『竜馬を一日（翌朝七時まで）独占（場合によっては拘束）できる券』を、



…あれ？  
何かこいつ等（フェンリル、フェニックス、ドラゴン）、全部メスじゃね？

エリ「みたいですね」

…じゃあ、名前をフェンリルが「リル」フェニックスが「ニクス」ドラゴンが「ラン」だな。

ヒ「安直だな」

良いじゃん別に。

今回の締めは俺がやるか。

つかの間の日常を感じていた竜馬。

しかし、すぐにまた戦いの世界へと戻されていく。

次の相手は癒す事の出来ない傷を作る者。

竜馬はどうやって戦うのか？

仲間達に被害は何も無いのか？

闇を狩る少年続きます。

ウイ「何？その言い方？」

なんとなく次回予告風に…



「…ふん」

…寂しい。

？壊刃？の脅威。

side 魔神竜馬

「とにかく急いで結界を張ってくれ」

「「「「「分かった（の）！！」「」「」「」

俺は6人に言った。

まだサブラクは攻撃をしてこない。

俺達はひだまり荘から出た。

side???

ふむ…

俺の戦い方を知っていたのか…

「だが、俺の攻撃に違いは無いな…俺の？ステイグマ？は…」

それにしても、俺の依頼主は面白い奴を敵にしているもんだ。  
俺は攻撃を仕掛けた。

side out

side 第3者視点

竜馬達がひだまり荘から出た直後。

ひだまり荘を中心として封絶が展開された。

「しまっ！！？」

竜馬は驚いたその茜色の封絶に…

しかし、他の6人は竜馬が何に驚いているのかが分からない。

「っ！間に合え！！守護天翼！！」

そう竜馬が言うのと同時に炎の濁流と無数の剣が竜馬達の足元から溢れ出した。

炎が翼を燃やし、剣が翼を斬り裂いた。

「な、何が起きてるの！？」

翼の中でなのはが叫んだ。

苦悶の表情をしながら竜馬は言った。

「誰も怪我はしてないよな…？」

「竜馬！！」

竜馬は翼を戻しながら言った。

周囲には既に炎も剣も無くなっていた。

「ほう…俺の攻撃をそんな物で防ぐのか…だが、その体ではもう碌に戦えまい…」

「…ッ！！サブラク！！」

竜馬の背後にマントを纏い、全身をくまなく厚手の革つなぎとプロテクターで覆い、長髪を立て、顔を長いマフラー状の布で隠した長身の男が立っていた。

「これくらい弱らせておけば充分か？依頼主よ」

サブラクは振り向き言った。

そこには三角形の錫杖を持った幼い少女が立っていた。

「駄目です。いずれ回復して私達の脅威となりえます。今ここで殺してください」

「?頂いたたくらの座?っ!?!?!」

竜馬は少女を見てさらに驚いた。

少女の名をヘカテー、バルムスケ 仮装舞踏会・トリニティ 三柱臣の巫女。

「俺のステイグマを受けて回復が出来るとは思えないんだがな…」  
「シウドナイの時に死んでいるはずの攻撃を受けて生きていたのですよ」

ヘカテーの言葉を聞いてサブラクは興味深そうに竜馬を見た。

side out

side 魔神竜馬

最悪だ!!

サブラクだけでも辛いつてのに!!

「全員逃げる!?!?!」

「? ? ? ? ? えっ!?! ? ? ? ? ?」

俺の言葉に6人は驚いた。

こいつ等がいたら危険すぎる!!

「早くしろ!?!?!?!」

「? ? ? ? ? わ、分かった(の)! ? ? ? ? ?」

そう言つて6人は離れていった。

後はこの傷をどうにかしないと…

「傷ついた体で仲間を逃がすか…まあ良い。俺はこいつを殺せば良いんだな？」

「はい、私はあちらを追います。こちらに来ないようにしてください」

！？

ヘカターの狙いは俺じゃないのか！？

「させるか！？神竜 ラグナロク？を召喚！！」

俺は手札からモンスターを召喚した。

装備しているデッキは先程調整を終えた？竜殺し？のデッキである。

「ッ！！」

「させん！！」

サブラクは？神竜 ラグナロク？を弾いた。

その間にヘカターはなのは達の所に行ってしまった。

…あ、ステイグマを治す方法を今、思いついた。

「ラグナロク！！俺の翼を噛み切れ！！」

「Guruu!？」

突然の事に？神竜 ラグナロク？は動揺していた。

「早くするんだ！！」

「Guruuuuuuu!!」

？神竜 ラグナロク？は俺に言われて俺の翼を噛み切った。

ぐっ！！！！

「がああああああ！！！！！！！」

痛みに俺は叫び声をあげた。

そして俺の翼は？神竜 ラグナロク？の口の中で燃え尽きた。

「何を考えている？」

「……こう言う事だよ！！ドロー！！」

俺はサブラクの問いに答えるかのように翼を広げた。

先程、？神竜 ラグナロク？に翼を噛み切らせた理由。

それはステイグマを受けた部分を斬り捨て新たに再生させるというものだった。

「微妙なところだな……？クイーンズ・ナイト？を召喚！」

俺の目の前に赤い鎧を着た女性が現れた。

とりあえず今は手数を増やすしかない！！

「俺のステイグマをそんな方法で破るか……だが、痛みはあるようだな……」

サブラクは一瞬驚いていたがすぐに冷静に判断した。

「行くぞ！！！！」

サブラクはそう言って？神竜 ラグナロク？に斬りかかった。

？神竜 ラグナロク？はあっさりと破壊されてしまった。

「くそっ！！！！ドロー！！！！」

モンスター達だけじゃ足りない！！  
そうしている間に？クイーンズ・ナイト？も破壊されてしまった。

「どうした！！その程度か！！」  
「んな訳あるか！！手札から魔法カードマジック？戦士の生還？を発動！！」

俺は墓地から？クイーンズ・ナイト？を手札に戻した。

「さらに魔法カード？二重召喚？を発動！！？クイーンズ・ナイト  
？？キングス・ナイト？を召喚！！さらに？キングス・ナイト？の  
効果によってデッキから？ジャックス・ナイト？を特殊召喚！！」

俺の目の前に三体の剣士が現れた。  
これならいけるか？

「魔法カード？融合？を発動！！？アルカナナイトジョーカー？を  
融合召喚！！」

三体の剣士は一人の剣士へと変わった。

「行け！！？アルカナナイトジョーカー？！！」

？アルカナナイトジョーカー？はサブラクに攻撃を仕掛けた。  
攻撃力なら充分にあるんだ。

「俺もやらないと！！つはあ！！！！」

俺はサブラクに向けて魔力球を放った。

魔力コントロールが苦手なため未だに三つ同時に出すのが限界+

変な回転が加わっている。

「くっ!? やってくれる!?!」

サブラクは辛そうに言った。

だがこの程度じゃ意味は無いな。

「ドロー!?! 来た!?! 手札から魔法カード? フュージョシカバリ融合回収? を発動!?!」

俺は墓地から? 融合? と? キングス・ナイト? を手札に戻した。

これでそろった!

「魔法カード? 融合? を発動!?!? 超魔導剣士 ブラック・パラデイン? を融合召喚!?!」

俺はこの? 竜殺し? デッキの切り札、? 超魔導剣士 ブラック・パラデイン? を召喚した。

これで勝つ!?!



？壊刃？の脅威。（後書き）

（霊使い達の雑談）

：サブラクの性格が上手くいきませんでした。  
不快にさせてしまったらすみません。

エリ「良かったらこれからも読んでくださいね？」

あ、明日は番外編です。

間隔が狭くてすみません。

それでは贈り物の紹介をします。

ユタ様より現像した前回のキリン装備の写真を霊使いたちに、なのはたちにユタ様特性サーチャーへの接続許可プログラムを、

銃王 海さんよりオリジナルマテリア「から」を、

フオウル様より増殖の拡張コード、再誕の拡張コードを、  
いただきました。

4人「可愛い！！！！」

気に入ってるみたいだな。

拡張コードは後で無々に使います。

マテリアは…王の財宝に入れておこう。  
ゲート・オブ・バビロン

それじゃあ今回の締めを…クリス言ってみよう！

クリ「あ、おはよう！闇を狩る少年続くよ…ふわあああ…」

眠そうだな…

明日は戦闘途中ですが番外編を入れます。

それでは…

番外編 HAPPY BIRTHDAY!! (前書き)

竜馬「…おい」

やりたくてやった。  
後悔はしていない。

竜馬「おいおい…」

番外編 HAPPY BIRTHDAY!!

side 魔神竜馬

「こんなもんかな？」

アースラの訓練室で俺は呟いた。

俺の周辺には機械の残骸のようなものが散らばっている。

「…そういえば今日って何日だ？」

『今日は12月20日ですね』

12月20日か…

「…明日が誕生日だな」

「」「」「」「ええええっっ!!?!?!」「」「」「」

通信で聞いていたのか…

そこまで驚くことなのか？

「まあ良いや。シャワーを浴びてサツパリしよう」

俺はシャワーを浴びにシャワー室に向かった。

side out

side 高町なのは

竜馬君の誕生日が明日だなんて!!

これは喫茶店の娘として聞き逃せないの!!

「明日が竜馬の誕生日なんだ…」

「これはお祝いをしなくちゃ…」

アリシアちゃんとフェイトちゃんが言いました。  
それなら…

「皆で竜馬君のお祝いをしよう!」

「賛成だ」

私の言葉にジャバウオックちゃんが言いました。  
よしっ!!

急いで準備しなくちゃ!!!

side out

side 魔神竜馬

…誰もいない。

俺がシャワー室から出ると誰もいなくなっていた。

「どっついう事だ?」

『…生体反応があるので皆さんは無事の様ですが』

生きているのか。

だったらこれは何かをしているって事か?

「…探してみるか」

「あら、竜馬さん。どうかしたんですか?」

俺が皆を探そうとしたらリンディが現れた。

「いや、皆がいなくなっていたから探してみようかと思ってな」  
「なのはさん達がですか?」

俺は頷いて肯定を示した。

…あえて目にしないようにしてたけど聞かないと駄目かな？

「その手に持っている服は何だ…」

「これ？…あなたに似合うかと思ってつい」

この言葉だけなら普通の服を連想できるんだが…

リンディが持っている服は何故かメイド服やチャイナ服、さらには首輪付きのスクール水着（女子用）等々見事にコスプレ物で女物ばかりだった。

「断」…」

「良いのかしら？断った場合この映像を全世界（次元間の）に放映するけど…」

リンディは俺の言葉を遮り動画を見せた。

何でリンディまで持つてるんだよ！！！！

その映像は俺とフェイトのキスシーンだった。

「どうしますか？」

「ぐっ！！…………分かりました」

俺は仕方なく着せ替え人形になる事にした。

…これって脅迫だよな。

この日、俺はリンディの着せ替え人形となり終えた。  
前にも同じ事があった気が…

side out

sideリンディ・ハラオウン

ふう

昨日はとても有意義に時間を使ったわね

「何だか艶々してませんか？」

「そうかしら？」

つといけないいけない。

早く準備を終わらせなくちゃ。

なんてっ たって今日は竜馬さんの誕生日ですものね。

「そう言えばケーキはどうするのかしら？」

「えっと…確かなのはちゃんか家で作るって言うてましたよ」

なのはさんが…

ならケーキの心配はいらないわね。

side out

side 魔神竜馬

…疲れた。

ちゃんと寝たのに疲れが抜けない…

「ん？…メールか…」

動きたくないな…

俺は起き上がり渋々ケータイを取った。

「何々？…アースラの食堂に来てください？」

めんどくさいな…

よし、ここは拒否のメールを…

「また来た…えつと？ちなみに拒否した場合あの映像を流出させます…!?!?」

俺はメールを読んですぐに飛び起きた。

だからふざけんなよリンディイイイイイ…!!!

「無々、能力発動。決闘<sup>デュエル</sup>」  
『了解しました。能力発動。決闘<sup>デュエル</sup>』

無々はデュエルディスクに変化した。

次は…

「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

呪文を唱えて俺はフェンリルに変身した。

「影道…!!!」

俺はすぐさま影に潜りアースラに向かった。

side out

side 第3者視点

アースラの食堂は見事なまでに彩られていた。後は主役の到着を待つだけである。

「来たぞ!!!リン…ディ…?」

竜馬が影のなかから現れた。



そして食堂の光景を見て啞然としている。

「これは…いつたい…？」

「ハッピー BIRTHDAY!!」

「

突然、竜馬の背後で大量のクラッカーが鳴った。

驚いて竜馬は振り返った。

「!?!?…皆どうして…？」

「今日はお主の命日?と言つやつなのだろう?だからお祝いをするのだ」

竜馬の問いにジャバウオックが答えた。

「ジャバウオックちゃん!命日じゃないよ!誕生日!誕生日!…」

「あ、あゝそれだ」

ジャバウオックの間違いをなのが修正した。

ジャバウオックにとっては誕生日などと言う物は存在せず気付けば生まれていたと言った状態なのだ。

「ありがとう、皆」

「それじゃあ竜馬君の誕生パーティーを始めよう!」

エイミーが高らかに宣言をした。

その日、竜馬は人生で一番楽しい誕生日を経験した。

オマケ

「紫！これを竜馬に届けてちょうだい！！」

「お願い〜！！」

すき間の妖怪に頼む2人の吸血鬼。

「別に良いけどそれをして私に何の得があるのかしら？」

「うぐっ…」

すき間妖怪に言われて黙ってしまう吸血鬼の姉。

「良いからちゃんと届けてよ〜！！」

「はいはい、これは付けておくからね？」

吸血鬼の妹に言われてすき間へと入っていくすき間妖怪。

「HAPPY BIRTHDAY…竜馬」

寂しそうに吸血鬼の姉…レミアア・スカーレットは呟いた。

その日の夜、竜馬の元へ謎の小包が届いた。

真っ赤なりボンで彩られた小包の中には赤とピンクのマフラーが入っていた。

形こそ歪いびつだが思いの込められたすばらしいマフラーが…

番外編 HAPPY BIRTHDAY!! (後書き)

〈霊使い達の雑談〉

今日は作者である私と竜馬の誕生日なので書きました!!

竜馬「そう言う事だったのか…」

ああ、似合ってるぞ。

その赤とピンクのマフラー。

竜馬「ありがとう、フランとレミリアにも何か送らないとな」

だな。

今日も贈り物をいただいています但明日まとめて紹介したいと思います。

それじゃあ今回の締めを竜馬頼む。

竜馬「おう、闇を狩る少年の？番外編？を読んでくれてありがとう  
ございます。これからも続きますのでよろしく願います」

途切れる事無き刃…

side 魔神竜馬

？超魔導剣士 ブラック・パラディン？と？アルカナナイトジョーカー？この二体がいれば大体の奴は倒せるんだが…

俺はサブラクを見ながら思った。

「…まったく、厄介すぎる相手だよ！！」

俺の前ではサブラクが？超魔導剣士 ブラック・パラディン？と？アルカナナイトジョーカー？の攻撃を全て防いでいる光景が広がっている。

「まだまだ！！！」

「いい加減に堕ちろよ！！！」

サブラクの言葉に俺は怒鳴り返した。  
くそ！！

こいつ自身の耐久力もそうだが戦闘能力もめんどくせえ！！

「ドロー！！！？見習い魔術師？を召喚！」

俺の近くに杖を持った1人の青年が現れた。  
とにかく俺も攻撃に参加しねえと！！

「はあああああ！！！！！！！！」

「ぬっっっ！！？」

魔力を拳に込めて俺は殴りかかった。

全力の魔力を込めているのでなのはのSLBを余裕で越えているだろうけど…

「ぐわああああ!!!!」

「ちっ…さっさと出てこいまだ終わってねえんだろ…」

サブラクは一瞬の隙を突かれて？超魔導剣士 ブラック・パラディン？に斬り裂かれた。

俺はその光景を見ながら言い放った。

「……知っていたのか。まあ良い、俺は死なないのだからな」

「そうかい…なら俺はお前を殺し尽くすだけだ。何度でも何度でもな!!」

俺は拳に込める魔力を上昇させながら言った。

side out

sideフェイト・テストロツサ

竜馬は大丈夫かな？

私はジャバウオツク、クロノと一緒に飛んでいます。

「アステル星よ」

「!?!」

何!?!

いきなり後ろから光の球が飛んできました。

「どうやら敵の様だな」

「フロクン・コシキ・ウエボンそうだな…？壊れた神器？レーヴァテイン!!」

クロノとジャバウオックは戦闘態勢を取りました。  
私も振り向き戦闘態勢を取ります。

「私達でこの子を倒さなくちゃいけないんだよね……」  
「ああ、そのようだな……」

私の呟きにジャバウオックが答えました。  
「闇？ だつてことは知っている。」

……でも、目の前にいるのは普通の女の子にしか見えない。

「魔力の高い人物……あなた達には死んでもらいます」

女の子は無表情に言いました。

「そう言う訳にはいかないな」  
「我の命は竜馬のための物だ！」

クロノとジャバウオックが言いました。  
……と言うかジャバウオックの言葉は告白だよな！？

「……ならば、無理やりにも死んでもらいます！……<sup>アステル</sup>星よ！！！」

そう言つて女の子は光の球を撃ち出してきました。

side out

side 第3者視点

竜馬、？ 超魔導剣士 ブラック・パラディン？、？ アルカナナイト  
ジョーカー？ の3人によつてサブラクは既に5回殺されていた。

？ 見習い魔術師？ は既に3体とも破壊されている。

しかしサブラクには一切疲労の色は窺えない。

「無駄だという事がまだ分からないのか…」  
「うるせえ！！俺の行動を勝手に評価すんな！！」

そう言い返す竜馬の表情にも疲労の色が見え始めていた。  
サブラクが休憩させる暇など与えるはずもなくさらに攻撃を放つてくる。

「ブラック・パラディン！！」

そしてサブラクの攻撃から竜馬を庇うために？超魔導剣士　ブラック・パラディン？はサブラクに斬られ破壊された。  
これで竜馬の？竜殺し？のデッキは切り札を失った。  
この状態でもう一度？超魔導剣士　ブラック・パラディン？を召喚できる可能性はほぼ0に近いだろう。

「くっそ！！だあああああ！！！！」

竜馬は拳に乗せた魔力をさらに上げて殴りかかった。

「怒りに身を任せて特攻か…浅はかだな。結局はその程度の奴だったという訳か…」

「ぐああああ！！！！！！！！」

サブラクは竜馬の攻撃をかわし斬りつけた。

この攻撃により竜馬は右腕に大きな切り傷を受けた。

「くっ！ジョーカー！！俺の右腕を斬れ！！」  
「なっ！？」

竜馬の言葉に？アルカナナイトジョーカー？は驚く。  
ステイグマを受けた部分を切り捨てて再生させる事を知らないのだ  
から当然である。

「早くしろ！！」

「…はあっ！！！！」

多少ためらいながらも？アルカナナイトジョーカー？は竜馬の右腕  
を斬り落とした。

「ぐぐぐぐぐぐ！！！！！！」

痛みに顔を歪ませながら叫ぶ竜馬。

この時、竜馬のデッキケースの中で6枚のカードが光を放っていた。



途切れる事無き刃：（後書き）

（霊使い達の雑談）

今日は昨日の分も含めて贈り物の紹介をします！！

まずはユタ様より架空戦闘装置、バースデーケーキ、サーチャーから送られてきた竜馬のコスプレ写真を、

銃王 海さんよりオリジナルマテリアの「POKEMON」、超特大フルーツケーキを、

フオウル様よりシヨップ『ドングリ』で人気のドングリバーガーを全員分、星ご自慢のメンマを一壺を、

White Seal様よりガーグアの金の卵、骨断刀【カゲタチ】、スコルピオダート、ダーティリボルバー、飛竜刀【双紅蓮】、ランドグリーズ、王牙琴【鳴雷】、王牙剣斧【裂雷】、海造砲【灰燼】、グラシデアの花束、獅子王クオレ・デイ・レオーネ、妖精王イル・マエストロ、冷艶鋸、蛇矛、全女性にキューティクルベリーの詰め合わせ（一人10個）、フェイトにハウツー本『五分で分かる！悦しい子供の作り方』『ニブいあんちくしょうをオトすには（強引編）』を、  
いただきました！！

フェー…子供の作り方／／／／

早速赤くなつてら。

つとキューティクルベリーを配らないと。

女性陣「……………」ありがとうございます……！

！……………」

全員同時だと流石に五月蠅いな……

それじゃあ皆でケーキを食べようか。

全員「……………はい……………」

ところで竜馬。

その花束は誰に渡すんだ？

竜馬「う…今それを言うか。えっと…」

竜馬以外「……………じ……………」

凄い凝視してるな（笑）

竜馬「あ、後で誰かにちゃんと渡すから…！影道…！…！」

あ、逃げやがった。

わざわざ影道まで使って…

まあ良いか、今回の締めは…なずな言ってみるか？

なず「え！？私…？闇を狩る少年続きますしゅ／／／／／」

最後の方を見事に噛んだな（笑）

現れし紅の魔たち…（前書き）

今日は足利短気大学のラ・ネッサンスに行ってきました！！

とっても楽しかったですよ！！

竜馬「うわ…日本語がおかしい」

気にすんな！！

竜馬「このバカは放っておいて本編をどうぞ」

バカ言っな！！

現れし紅の魔たち…

side 魔神竜馬

くっそ！！

ブラック・パラディンがやられちゃったからめんどくさくなって来  
やがった！！

「怒りに吞まれ…味方を1人失い…そして自ら仲間に腕を斬り落と  
させるか」

「うるせえ！！！」

サブラクの言葉に俺は怒鳴り返した。  
俺のミスなのは分かってるんだ！！

「そら、また隙が出来た…」

「！？」

サブラクは一気に接近して斬りかかって来た。  
避けられねえ！！

俺は咄嗟に腕を交差して防御の体勢を取った。

…？

斬撃が来ない？

俺は不思議に思い防御の体勢を解いた。

「なんだこれは！？」

サブラクの攻撃を防いでいたのは6枚のカードだった。  
これは…

「…レミリア達に貰ったカード？」

何故これが？

すると6枚のカードは3枚は邪神・幻魔皇デッキに、残りの3枚はエクストラデッキに入っていた。

「これは…？」

どういう事だ？

レミリア達に貰ったのは遊戯王カードでは無かったはず…

「…まあ良いか、ジョーカー！悪いがデッキを変えるぞ！！」

「はっ…承りました」

？アルカナナイトジョーカー？は恭しく挨拶をして消えていった。

この間サブラクは興味深げに見ていた。

そして俺はデッキを取り換えた。

「ドロー！！？メタボ・サッカー？を召喚！カードを一枚セット」

俺の目の前に小さな悪魔が現れた。

「…何をするかと思えば…そんな雑魚「tokを出すだけか…」

「こいつを雑魚だっと思ってると痛い目にあうぞ…」

こいつはこのデッキのキーカードなんだからな。

サブラクは訝しげに見ていた。

「そらそら…！！」

「……」

俺は時間を稼ぐために魔力球を放った。  
それをサブラクは何も言わずに叩き落としていく。

「そろそろか…ドロー!!?メタボ・サッカー?をリリースして?  
暗黒魔族ギルファー・デーモン?をアドバンス召喚!!」

小さな悪魔が消え赤と黒の悪魔が現れた。

さらに?メタボ・サッカー?の効果で俺の近くにメタボトークンが  
3体現れた。

「メタボトークン3体をリリースして?幻魔皇ラビエル?を特殊召  
喚!!!」

3体のメタボトークンが消え青い巨大な悪魔が現れた。

このデッキの切り札、?幻魔皇ラビエル?の最速召喚が成功した。

「な!?!なるほど確かに雑魚では無かったようだな…」

サブラクは一瞬驚いた表情をしていたがすぐに落ち着いた。  
こいつ等なら簡単には破壊されないだろ…

「だが、俺が死ぬ事は無い…いつまでその気が持つかな…」  
「だま黙れ!!」

そんな事は言われなくても分かっているんだからな!

…駄目だ落ち着け!

さっきの二の舞になってしまっただろうが!!

「ふん…冷静にしているな…」

「流石に同じ目には合いたくないんでね!!行け!!?幻魔皇ラビエル?!!天界蹂躞拳!!!!!」

俺はラビエルに攻撃を命じた。

…薙ぎ払えとか言えば良かったかな?

「そんな大振りな攻撃が当たるか!!!」

「だろうよ!!ドロー!!これは!?!」

俺が引いたカードは…

「咲夜さん…?」

?紅魔 - 十六夜咲夜?と記されたカードだった。



現れし紅の魔たち…（後書き）

（霊使い達の雑談）

今日の贈り物紹介！！

クリ「わ〜」（拍手中）

ヒ「なんかのコーナーか！！」

と、まあそんなツツコミはさておき、

銃王 海さんよりリインフォースII位の大きさのAngelBeatsの天使を、

ユタ様よりなのはたちに竜馬が腕を斬り落としたことの詳細と写真を、

いただきました。

ちなみに既に写真などは転送済みです。

エリ「…と、ところでこの天使さんはどうしたら？」

天使「私は天使じゃないわ…生徒会長」

…後書きのレギュラーに入れるか？

天使「良いの？」

と言うか大きさについて誰も聞かないんだな…

まあ、良いか。

大丈夫だと思っぞ？

ヒ「まあ良いんじゃないの？」

エリ「大丈夫です」

アウ「構いませんよ」

ウイ「あははちっちゃい」

クリ「何故、竜王の上に座っているんですか!!」

クリスだけ違う事を気にしているな…

天使「ちょうど良かったから…?」

別に良いけどよ。

よろしくな。

天使こと立華 奏。

奏「よろしく…」

クリ「竜王と仲が良いのが何だか厭だな…」

気にしない気にしない。

それじゃあ今回の締めを…奏、頼んだ。

奏「分かった…闇を狩る少年続きます」

…ガードスキルって使えるのかな?

奏「使えるわよ…?」

マジで!?

紅の館の住人たち…（前書き）

レミリアの効果を追加します。

紅の館の住人たち…

side 魔神竜馬

？紅魔 - 十六夜咲夜？…

もしかして…

「…やっぱり」

俺はエクストラデッキを見て納得した。

エクストラデッキに行ったカード達は全てシンクロモンスター扱いになっていたのだ。

「だから咲夜さんがチューナーなのか…」

…効果を読んで思った。

酷いなこれ…

「？紅魔 - 十六夜咲夜？を召喚！！」

「十六夜咲夜、呼ばれて参上しました」

俺の目の前に咲夜さんが現れた。

まあ、この人なら滅多に破壊されないだろうし。

「お久しぶりです、魔神様」

「ああ…悪いが挨拶は後にしてくれないか？」

俺はサブラクを睨みつけながら言った。

既に？暗黒魔族ギルファー・デーモン？が破壊されていた。

ラビエルが破壊されるのも時間の問題だろう。

「分かりました、あちらの方をお相手すればよろしいのですか？」  
「そうなんだが…大丈夫か？」

俺は咲夜さんに尋ねた。

実際、攻撃力では咲夜さんを超えているギルファー・デーモンが破壊されているのだからこの疑問は当然だろう。

「私の力では役不足ですね。ですので…」  
「？」

咲夜さんは悔しそうに言った。  
どうするんだ？

「ですので、お嬢様を出すために私をお使いください！」  
「レミリアを？」

確かにこの手札なら大概のレベルなら出せるが…

「良いのか？」  
「はい、お嬢様の為になるのでしたら」

俺の問いに咲夜さんはあっさりと答えた。

この覚悟なら大丈夫かな…

「分かった、？紅魔・十六夜咲夜？の効果を発動！！相手のドロー、スタンバイ、メイン、バトルフェイズの内1つをスキップする！！その後、自分の手札を二枚選択して墓地に捨てる」  
「時符？プライベートスクウェア？！！」

と言つてもこの効果はあまり意味は無いんだがな。

この効果を発動させる目的、それは手札を墓地に送るためである。

「墓地に送られた？暗黒界の尖兵ベージ？の効果を発動！！カード効果によつて手札から墓地に捨てられたとき墓地から特殊召喚する！！」

俺の目の前に槍を持った悪魔が2体現れた。  
墓地に捨てた二枚ともがベージだったのだ。

「行くぞ！！レベル4？暗黒界の尖兵ベージ？2体にレベル4？紅魔・十六夜咲夜？をチューニング！！」  
「お嬢様を頼みます！！」

咲夜さんはそう言つて光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

レミリアなのだからそれらしい召喚のセリフを言わないとな。

「紅に染まりし館の主よ、我が意に従いて現れよ！其は永遠に幼き紅い月！！シンクロ召喚！！現れよ、？紅魔・レミリア・スカーレット？！！」

「竜馬に呼ばれて登場よ！！」

…恥ずかしいな／／／／／

俺はレミリアのセリフを聞いて少し恥ずかしくなった。

「それで？何があつたの？」  
「あいつを倒したいんだよ」

俺はラビエルと戦っているサブラクを指差した。

と言っかラビエルと普通に戦ってるんだけど…

「あいつを倒せばいいのね？」

「ああ、俺も戦うけどな」

レミリア1人を突撃させるわけにはいかないからな。  
そして俺とレミリアはサブラクへと向かって行った。

side out

side 第3者視点

竜馬、レミリア、ラビエルの攻撃を徐々にだが避け切れなくなっているサブラク。

その隙を竜馬は見逃さなかった。

「今だ！！ラビエル！てんかいじゅうりんけん天界蹂躞拳！！レミリア！神槍？スピア・ザ・グングニル？！！」

「分かったわ！！神槍？スピア・ザ・グングニル？！！」

竜馬の言葉を聞いてラビエルは殴りかかり、レミリアはスペルカードを発動した。

ちなみに竜馬は魔力を込めた拳のみである。

「何！？ぐわああああ！！！！」

「これで大分削れただろ…」

ラビエルとレミリアの攻撃を受けて落ちていくマフラーを見ながら  
竜馬は言った。

竜馬は知っているのだサブラクが如何に巨大な力を持っているようにと  
限りがある事を…

つまりこの戦いはどちらが先に倒れるかで決着が決まるのである。

## 紅の館の住人たち…（後書き）

（霊使い達の雑談）

ふう、レミリアのシンクロ召喚のセリフを考えるのが疲れた。

ここでオリカの2枚を紹介します。

・紅魔 - 十六夜咲夜 血 戦士族 / チューナー 4  
相手のドロワー、スタンバイ、メイン、バトルフェイズの内1つをスキップする。その後、自分の手札を二枚選択して墓地に捨てる。  
このカードは？紅魔 - レミリア・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

ATK 1900 DEF 1500

・紅魔 - レミリア・スカーレット 血 悪魔族 / シンクロ 1 2  
チューナー + チューナー以外の悪魔族2体以上  
自分フィールド上にこのカードが存在している時、発動した魔法、罫、効果モンスターの効果の対象を自分が選択できる。

対象をとらない効果や自分フィールドや相手フィールドに適用される効果の場合、効果を無効にするか選択し無効にする場合、破壊するか破壊しないかを選択する事が出来る。

このカードが墓地に送られた時、自分フィールド上にコウモリトークンを出せるだけ特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時に1体でもコウモリトークンが残っていればこのカードを墓地から特殊召喚する。

この効果を使用したターンのエンドフェイズに自分の手札を全て捨てる。

ATK 2800 DEF 2500

ヒ「酷いチートだな…」



そうかな？

結構デメリットがでかいぞ？

奏「贈り物の紹介は？」

ああ、今からやるよ。

ユタ様より超低カロリーのケーキセットを、

銃王 海さんより竜馬の人権を無視したものがきたときにそれを焼き付くす装置を、

いただきました。

エリ「ケーキセット」

アウ「人権を無視した物を焼きつくす装置ですか」

まあ、焼かれないように加工しようかと思ってる。

ウイ「懲りないね…」

クリ「流石、竜王」

奏「それは良い事なの？」

さあ？

と言うかそろそろこの増殖と再誕の拡張コードを使わないとな…

ヒ「まだ使わないのか？」

もう少し落ち着いたらかな。

それじゃあ今回の締め俺がやるね。

闇を狩る少年続きます。

ちなみに残りの4枚のオリカも大概チートですよ（笑）



連なりし紅。

sideレミリア・スカーレット

…ふづ。

これで終わりなのかしら？

「竜馬、これで終わりなの？」

「いいや、まだ終わらないよ。そうだろ、サブラク」

竜馬は落ちていくマフラーを見ながら私の質問に答えた。  
あいつはちゃんと倒したはずじゃ…

「ふん…知っているならば聞く事ではないと思うのだが…」  
「なっ!?!」

マフラーが地面に着くと同時に敵に輪郭が戻った。

そんな!?!

吸血鬼なみの回復力じゃない!!

「竜馬!!こいつは…」

「こいつは吸血鬼じゃないぞ。ただ力が強大なだけだ」

竜馬は私が聞こうとしていた事を答えた。

吸血鬼じゃないの!?!

「とりあえず、ドロー!?!?キラー・トマト?を召喚!」

竜馬の目の前に顔の付いたトマトが現れた。

…おいしそづ。

「!?!?…レミリア。今、何か怖い事を考えなかったか？」  
「う、ううん!?何も考えてないわよ!?!」

軽く震えて竜馬が尋ねた。

心を読まれた!?!

side out

side 魔神竜馬

さっきの悪寒は何だったんだ?

まあ良い、今はサブラクだ。

「ラビエル! 攻撃を続けてくれ!」

俺はラビエルに攻撃するように入った。

とにかくサブラクを殺す方法を考えないと…

ラビエルがいつまでもつかも怪しいからな。

「レミリア、結果って張れるか?」

「結果?…私は無理よ。パチエならできるはずだけど…」

パチユリーかおそらくパチユリーも召喚できるはずだが…

「パチユリーのレベルも12なんだよな…」

エクストラデッキに行ったカードのレベルはレミリアを含めて3枚ともレベル12だったのだ。

今の手札では召喚条件が厳しすぎる。

「とりあえずは時間稼ぎをするしかないってわけか…」

俺は諦めてサブラクに向かって行った。  
勿論、拳に魔力を込めて…

side out

sideクロノ・ハラウン

何なんだこの少女は！！

攻撃がまったく当たらない！

「アステル  
星よ」

「くつつつ！！」

少女の攻撃を僕は辛うじてかわした。

くそ！！

「スティングァースナイプ！！！！」

「……………」

僕の攻撃を少女は無言でかわす。

「はああああああ！！！！！！！！！！」

「！？？」

少女が避けた先をジャバウオックが攻撃した。

これには予想外だったらしく少女は慌てて回避した。

「連続攻撃ならいけるかもしれないな…ジャバウオック、フェイト」

「分かった」

僕の言葉に2人は頷いた。

何回かは訓練でコンビネーションの練習をしたからいけるはずだ。

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト!!!!!!!!!!」

僕は魔力刃を一斉射出した。

それを少女は再び回避する。

「サンダーレイジ!!!!!!!!!!」

「!!!!」

回避した先をフェイトが追撃を放つ。

多少、驚いた表情をしたものの少女は回避した。

「たあああああ!!!!!!!!!!」

「ッ!!!!」

そこにさらにジャバウォックが攻撃を放つ。

少女は避け切れずに背中を斬られた。

「くっ!!!!」

「ちいっ!浅かったか!!」

斬られた事に驚き悔しげな少女と傷が予想より浅かった事に悔しげなジャバウォック。

これなら攻撃が当たる!!!

「ちょこまかと動きおつて……いい加減に倒れぬか!!!!」

「お断りします。<sup>アステル</sup>星よ」

ジャバウォックの言葉に反論して少女は再び攻撃を放ってきた。

その攻撃を桃色の光が撃ち貫いた。

「皆！大丈夫！？」

別々に分かれて逃げていたはずなのはとユーノが上空に飛んでいた。

連なりし紅。(後書き)

「霊使い達の雑談」

「ちょっと短いかな？」

竜馬「良いんじゃないの？」

「つとそう言えば貰って来た物があるんだった。

神に何度も殺された青年の春人君特製のフルーツタルト(ゼロカロ  
リー)とフルーツジュースのセットだ。

あっちの番外編で貰って来てさ。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

それと贈り物の紹介だな。

銃王 海さんからF F V E I Eのバスターソード、F I R S Tチー  
ムの証であるFと書かれた赤いリストバンド、ポケモンの卵を、  
フレイス様から遊戯王O C Gより最新パッケ1箱を、  
いただきました。

竜馬「卵か…次はイーブイだと良いな」

流石は可愛い物好き。

最新パッケは後で開けよう。

ヒ「ムグムグ…拡張コードは良いのか？」

食いながら喋るなよ…

無々、インストールブック？増殖の書？？再誕の書？起動。



入力対象、？虚無と無限？。  
インストール開始。

竜馬「…二つ同時かよ」

気にすんなよ。

無々『……？増殖の書？？再誕の書？インストール完了しました』  
竜馬「お、終わったか」

これで無々の双銃が？静力ナル翠ノ楽園？？来タリシ転生ノ刻？（  
外観はオーヴァンの冥銃剣・逢魔ケ刻）になつたぞ。

竜馬「まさかの銃剣を双銃にかよ…」

面白くて良いじゃん。

竜馬「まあ良いか」

銃王 海さん、フレイス様、バラランシャ様、フォウル様ありがとう  
づいづいいます…！！

竜馬「…で？誰が今日締めるんだ？」

お前。

竜馬「マジか…闇を狩る少年続くぞ。あ、この作者に攻撃を撃つて  
も良いから」

…来たとしたらこの？黄昏の鎌器ラグナロク？で叩き斬るけどな。

竜馬「まだ持ってたのか…」

大図書館、動く!!! ガンダムっぽいな。

side 魔神竜馬

手札は一枚、場にはラビエル、レミリア、キラール・トマト。  
そしてセットカードが一枚か…

「これに賭ける!!! ドロー!!!」

引いたカードは…

? 紅魔 - 小悪魔? だった。

「この効果は… いける!!!? 紅魔 - 小悪魔? を召喚!!!」

「こあ〜っ!!!」

… 気が抜ける登場の仕方だな。

小悪魔さんが驚いた表情で俺の前に現れた。

「あ、竜馬さん」

「どうも、とりあえずパチュリーを呼ばないといけないんでお願いします」

俺は小悪魔さんに挨拶をした。

さて、小悪魔さんの効果を使うか。

「? 紅魔 - 小悪魔? の効果を発動!!! このカードが召喚に成功したときデッキから閻属性のレベル4以下のモンスターを特殊召喚する!!!」

実際に思うんだが小悪魔さんがどうしてこの効果を持っているんだ

ろっ…？

まあ、パチュリーが出しやすくして良いけど。

「デッキから？ ジャイアント・オーク？ を特殊召喚！！」

俺の目の前に棍棒を持った緑の体のオークが現れた。

これでレベルは足りたな。

「レベル4？ キラー・トマト？ とレベル4？ ジャイアント・オーク？ にレベル4？ 紅魔・小悪魔？ をチューニング！！」

「頑張ります！！」

小悪魔さんはそう言って光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「大いなる図書館の主よ、我が意に従って現れよ！ 其は七曜の魔女！！ シンクロ召喚！！ 現れよ、？ 紅魔・パチュリー・ノーレッジ？  
！！」

「久しぶりね竜馬」

パチュリーは小悪魔さん程驚かずに言った。  
と言っか冷静だな。

「レミイがやった本当の理由はこれね…」

「ん？…どうかしたのか？」

パチュリーは静かに呟いた。  
つと、とにかく聞かないと。

「パチュリー、いきなりで悪いんだが結界を張れるか？ できれば内

部と外部を完全に切り離すタイプの…」

「結界の内部を隔離すればいいのね？ できるわ」

俺の質問にパチュリーはあっさりと答えた。

あまりにも簡単に答えたので拍子抜けを起こしている。

「そ、そうか。なら頼む。あいつと俺達を結界の中に閉じ込めてくれ」

「結界の中に？ 何故、私達まで中に行かないといけないの？」

サブラクを指差しながら俺は言った。

俺の言葉にパチュリーは疑問を投げかける。

「…あいつは地面に魔力を満たしているんだ。だから破壊されても地面の魔力を使ってすぐに回復してしまう。それで完全に内部と外部を隔離してしまえば…」

「破壊しても回復しないという訳ね…分かったわ。でも、この結界を創るのには時間がかかるの、それまでは持ちこたえてちょうだい」

パチュリーは申し訳なさそうに言った。

あいつを殺すためなら苦でも無いな。

「分かった、頼んだぞパチュリー」

「頼まれたわ…」

俺はパチュリーにそう言ってサブラクの方へと向かった。

レミリアとラビエルで押さえてる状態だしな…

side out

side 高町なのは

「この子とても強い!!」

「他に逃げた人ですか…」

「爆発が見えたから急いで来てみたけど正解だったの!」

フエイトちゃん達には目立った傷は無いけど、でも友達を傷つけるのは許さないの!!

私は周囲に魔力球を創りだしました。

「デイベインシューター!!シュート!!!!」

「っ!!」

女の子は驚きながらも避けました。

でも甘いの!!

「くっ!!」

デイベインシューターが女の子に背後から当たりました。少しだけ辛そうにしながらも女の子は飛んでいます。

「アステル  
星よ」

女の子はそう言って光の球を飛ばしてきました。  
避け切れない!!

side out

side 第3者視点

ヘカターの攻撃を受けて煙が巻き起こった。  
そして徐々に煙が晴れていく。

「大丈夫？なのは」  
「ありがとうユーノ君」

煙が晴れるとなのはは無事だった。  
ユーノが咄嗟に防いだようである。

「なのは、ユーノ！！全員で連続に攻撃をするんだ！！そうすれば勝てる！！」

クロノがなのはとユーノに言った。  
それを聞き頷く2人。

「分かったの！！」  
「分かった！！」

そう言ってレイジングハートを構えるなのはとエクスカリバーを構えるユーノ。

この6人の戦闘も終盤を迎えていた。

大図書館、動く!!! ガンダムっばいな。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

紅魔館組さらに2人登場!!!

以下が効果です。

・紅魔 - 小悪魔 血 悪魔族 / チューナー 4

このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る。

この効果を使用したターン自分はバトルフェイズを行えない。

このカードは？紅魔 - パチュリー・ノーレッジ?のシンクロ素材にしか使用できない。

ATK 1300 DEF 1500

・紅魔 - パチュリー・ノーレッジ 血 魔法使い族 / シンクロ

12

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、手札を墓地に送り効果を発動する。

墓地に送ったカードによって以下の効果を得る。

炎属性・相手に1500ポイントのダメージを与える。

水属性・デッキからカードを2枚ドローする。

風属性・相手のフィールド上のカードを3枚まで手札に戻す。

地属性・相手の手札を2枚墓地に送る。

光属性・このターン相手は魔法・罫・モンスター効果を1度だけしか発動できない。

闇属性・フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

魔法カード・自分の墓地のカードを3枚選択しデッキに戻しシャッフルする。

ATK 2500 DEF 500







竜馬「復活早っ！？何で！？」

お前の砲撃でなれた。

竜馬「……………」

それでは闇を狩る少年続きます！！

ウエ「っ、続きますよ／＼／＼／＼」

竜馬「…可愛い」

開かれし禁忌の扉。(前書き)

今回の話でヘカテーがオリジナルを含みます！

それが厭だと思っ人は前半を飛ばしてください！！

竜王でした！！

開かれし禁忌の扉。

sideへカテー

予想外でした。

ここまで強い者だとは…

「？トライゴン？…モードシュベアプト」

私はトライゴンのもち手の下の方から刀を抜きだしました。  
これを使わせるなんて…

「！？射撃だけじゃなかったのか！？」

「私は一度もそんな事を言っていないんですが」

わざわざ相手に自分の手口を見せるバカはいません。  
そう思いながら私は周囲に飛んでいる魔力球を切り捨てました。

side out

sideクロノ・ハラオウン

くそっ！！

完全に予想外だ！！

まさか接近戦が出来るなんて！！

「仕方が無い、フェイト、ジャバウォック、ユーノは接近戦をなのはは僕と一緒に射撃でサポートだ！！」

「…分かった（の）」「…」

とにかくそれぞれが得意な戦いをするしかない！！  
僕達は散開して戦闘を再開した。

side out

side 魔神竜馬

俺のフィールドの状態。

? 幻魔皇ラビエル?? 紅魔・レミリア・スカーレット?? 紅魔・パ  
チユリー・ノーレッジ?

セツトカードが1枚。

手札1枚。

「きつついなあ…ドロー!!」

俺はカードをドローしサブラクに殴りかかった。  
そこにレミリアの蹴りも加わる。

「ぐおっ!?!」

「ラビエル!! てんかいじゅつりんけん天界蹂躞拳!!」

サブラクが怯んだ隙にラビエルに攻撃をするように言った。  
ラビエルの攻撃が当たりサブラクは地面に叩きつけられた。

「パチユリー!あとどれくらいだ!!」

「もう少しよ!!」

俺の問いにパチユリーは答えた。

墓地にあと1枚闇属性がいれば良いんだから…

「? 暗黒界の斥候スカー?を召喚!!」

俺の目の前に赤いナイフを持った悪魔が現れた。  
こいつは破壊されなきゃ意味は無いんだよな…

「竜馬！！来るわよ！！」

「分かった！！」

レミリアの言葉に俺はサブラクを睨みつけた。  
もう復活か。

「レミリア！攻撃を撃ち込み続けてくれ！！」

「分かったわ！紅符？スカーレットマイスタ？！！」

俺の言葉でレミリアはスペルカードを発動した。

その攻撃にスカーも巻き込まれて破壊されたがそれもちょうど良い。

「？暗黒界の斥候スカー？の効果を発動！！自分のデッキから？暗黒界？と名のついたレベル4以下のモンスター1体を手札に加える。俺はデッキから？暗黒界の尖兵ベージ？を手札に加える」

これで墓地に7枚いった。

「魔法カード？終わりの始まり？発動！！墓地に7体以上闇属性モンスターがいるとき墓地の闇属性モンスターを5枚除外して自分のデッキから3枚ドローする」

ドローしたカードの中に？紅魔・紅美鈴？がいた。

こいつの効果なら…

「？紅魔・紅美鈴？の効果を発動！このカードがカード効果によって手札に加えられたとき特殊召喚できる。ただしそうした場合、自分フィールド上のモンスターを1体破壊する。その後手札を1枚墓地に捨てる」

「ジャオオオー！！！！！」

美鈴が叫びながら現れた。

ここでボケるなよ！！！！

俺は思い切り美鈴の頭を殴った。

「あだあ！？」

「美鈴の効果により、？幻魔皇ラビエル？を破壊。そして手札の？暗黒界の軍神シルバ？を墓地に送る。墓地に捨てられたシルバの効果を発動。シルバを特殊召喚」

あと必要なのは3！！

パチュリーはまだ掛かりそうだな。

「レミアア、少しだけ時間稼ぎをしてくれ！！」

「…ふう、分かったわ。そ、その代わり終わったら…その…／／／／」

レミアアが何かを言っていたが良く聞き取れないな。  
これで引いたカードによって出せるかが決まる！！

「ドロー！！！！」

引いたカードは…



「?メタボ・サッカー?を召喚!!!」

レベル3メタボ・サッカーだった!

「レベル5?暗黒界の軍神シルバ?とレベル3?メタボ・サッカー?  
?にレベル4?紅魔-紅美鈴?をチューニング!!!」  
「逝って来ます!!!」

ちよっ!?

字が違う!!!

美鈴はそう言つて光の輪になった。  
8つの光の球が光の輪を潜る。

「紅に染まりし館の禁忌よ、我が意に従いて現れよ！其は禁忌と万  
壊の申し子！！シンクロ召喚！！現れよ、？紅魔・フランドール・  
スカーレット？！！」

「やっほ〜」

フランが元気よく現れた。  
こいつの力なら充分だ！！

「フラン！手伝え！！」  
「？」

俺の言葉が理解できないようだ。  
だったら…

「今からあいつと遊ぶから一緒に遊ぶぞ！！」  
「！！分かった」

物は言いようだな。  
フランは嬉しそうに返事をした。

「竜馬！！いつでも発動できるわ！！」  
パチュリーが俺に言った。  
よし！！

「分かった！やってくれ！！」  
「了解よ！！次元隔離結界発動！！！！」

次の瞬間、俺達（俺、レミア、フラン、パチュリー、サブラク）はまったく別の空間にいた。そして地面からは変な魔力を感じる事も無くなった。

## 開かれし禁忌の扉。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

これで紅魔館組が全員出た！！

効果は以下の通りです。

・紅魔 - 紅美鈴 血 戦士族 / チューナー 4

このカードがカード効果によって手札に加わったとき特殊召喚できる。

ただしそうした場合、自分フィールド上のモンスターを1体破壊する。

その後手札を1枚選択し墓地に捨てる。

このカードは？紅魔 - フランドール・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

ATK 1900 DEF 2000

・紅魔 - フランドール・スカーレット 血 悪魔族 / シンクロ

1 2

チューナー + チューナー以外の悪魔族2体以上

このカードが攻撃した場合ダメージ計算後に相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

このカードが墓地に送られた時、自分フィールド上にこもりトークンを出せるだけ特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時に1体でもこもりトークンが残っていればこのカードを墓地から特殊召喚する。

このカードが攻撃したターンのエンドフェイズに自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

ATK 4500 DEF 2000



竜馬「次は…俺にも来てるよ…ユタ様から氷と雷の竜巻（半径一キロメートル）」

竜王「…よし、撃ち返せ」

竜馬「また復活してるし…まあいいか。無々、バットになってくれ無々『了解しました』」

竜王「っと、俺はフェンリルになっていよう」

竜馬「…来たか、せーのっ！！！！」

氷と雷の竜巻（半径一キロメートル）を撃ち返す竜馬。

竜馬「オマケだ。ゼロ・ブレイカー！！」

氷と雷の竜巻にゼロ・ブレイカーを乗せて送り返した竜馬。

竜王「…ひでえ」

ヒ「お〜いあたし等は避難してるから」

そう言って防空壕に入っていく霊使い達。

竜馬「俺も行こう」

竜王「俺一人かよ…」

降って来ている核を見ながら呟く竜王。

竜王「ちなみにこちらの核は銃王 海さんから飛んできました」

着弾し凄まじい爆発を起こす。

ヒ「うわゝすげえ威力だな…」

竜王「だな」

霊使い「……!?!?」「」「」

竜王「驚くなよ、ただ影を使って竜馬と入れ替わっただけなんだから」

アウ「と言う事はあそこに竜馬様が？」

竜王「正解 あ、銃王 海さんミニリュウの卵ありがとうございませす」

「ひどいほどにカオスだな…」

竜王「うお!?!?変な猫がいる!!!(言峰 綺礼の声に似ている?)」

「変なとは失敬な私の名前はネコアルク・カオスだ」

竜王「ふふん…締めを言うか？」

ネコアルク・カオス「ふむ、面白そうだな。言わせてもらおう」

竜王「んじゃ、頼むわ」

ネコアルク・カオス「闇を狩る少年続くにや。ただし次回はグレイ  
トカオスキヤットの話だ!!」

竜王「んな訳あるかアアアア!!!!!!」

ネコアルク・カオス「グフアアアアアア!!!!!!?????  
」

ネコアルク・カオスは星になった。



？壊刃？散りゆく時…（前書き）

レミアの効果を少しだけ追加しましたので？紅の館の住人たち  
…？の後書きを呼んでいただけると嬉しいです。

？壊刃？散りゆく時…

side 魔神竜馬

パチュリーのお陰でサブラクを結界に閉じ込められたか…  
周囲に変な魔力を感じないから上手く行ったのだろう。

「なんだこれは!？」

「どうでもいいだろ、そんな事は…」

サブラクを見据えながら俺は言った。

いきなり自分の魔力が消えたから慌てているのかサブラクは動揺していた。

「やるぞ！レミア、フラン、パチュリー!!」

「…分かった(わ)!!」

俺の言葉に3人は返事をした。

一気に行くぜ!!

「いっくよー 禁忌？クランベリートラップ?!!!」

「行くわ!!天罰？スターオブダビデ?!!!」

「食らいなさい。日符？ロイヤルフレア?!!!」

…俺が攻撃する必要無いかも。

レミア達のスぺルカードを見て俺はそう思った。

「ぬっっっっっっっ!!?」

それをギリギリながらも捌いていくサブラク。

敵とは言えすげえな…

「だけど、俺を忘れてもらっては困るかな」

俺はサブラクに向けて魔力球を放った。

side out

side サブラク

くそ！

地面に流しておいた俺の魔力が感じられない！！

「何！？ぐわああああ！！！！」

「よっしゃ！！」

飛んで来ている球を捌いている俺の顔に魔力球が直撃した。  
それを見てターゲットはガッツポーズをとっていた。

「おのれ！！」

俺は飛んで来ている球を避けながらターゲットに向かって行った。  
あの3人はこいつが出した者、ならばこいつを殺せば！！

「はああああああああ！！！！！！！！」

「！？くっ！！」

俺の攻撃を拳で止めただと！？

どういう事だ！？

「今の状態なら斬られねえんだよ！！！！」

「がはあ！！？」

ターゲットはそう言って俺の腹を殴りつけた。  
俺は腹を押さえながら距離を置いた。

side out

side 第3者視点

竜馬がサブラクの攻撃を拳で防げた理由。  
それは拳に込めた魔力によって薄い膜の様なものが創られていたからである。

「魔力をギリギリまで込めておいて良かった…」

ホツとしたような表情の竜馬。

どうやら膜が出来ていたのは偶然だったらしい。

「これで決めるぞ…無々、虚無<sup>ゼロ</sup>、三連装填」

『zero triple』

竜馬の目の前に魔法陣が三つ現れた。

三つの魔方陣は徐々に一つになっていく。

「やらせはせん!!」

その事に気付いたサブラクは竜馬の元へと急いだ。

しかしサブラクの行く手をレミリア、フラン、パチュリーの3人が塞ぐ。

「竜馬の邪魔はさせないわ」

「まだまだ遊ぼうよ」

「ここは通さないわよ」

フランだけ未だに遊んでいる気分だが……  
そうしている内に魔力の集束が終わったらしく竜馬が叫んだ。

「3人とも離れていてくれ!!」

その言葉を聞き咄嗟に離れる3人。

竜馬の目の前に有った魔法陣は既に一つになり収縮を始めていた。

「くっ……だが、当たらなければ意味は無い!!」

そう言つてサブラクは竜馬と一定の距離を置いた。

しかし魔法陣は既に視認する事も難しいサイズにまでなっている。

この状態になるともはや発射を察知する事も回避をする事も不可能であろう。

「トリニティイイイイ……」

だが、竜馬は無駄な賭けはしないつもりらしい。

放つ準備はしているがサブラクに近づいて行っている。

side out

side 魔神竜馬

もつと近くに!!

俺は翼を広げて一気に近づいた。

「ちっ!!」

サブラクは剣を投げてきた。

俺はそれをかわしていく。



？壊刃？散りゆく時…（後書き）

（霊使い達の雑談）

やっとサブラク戦が終わった。

あとはヘカテー達だ。

エリ「これまた長かったですね」

だな。

つとユタ様、ルシファー様感想ありがとうございます。

あとは…

竜馬「何でまた俺はいるんだ？」

ゲイ・バルカロール死滅の黒薔薇がお前に来てるからだ。

ゲイ・バルカロール死滅の黒薔薇

ランク：EX

種別：対星宝具

レンジ：

最大補足：1人

原典：なし

詳細：漆黑に輝く三叉槍。春人の固有特殊能力『ケミストリー宝具合成』を使用することでのみ創り出すことが出来る特殊な宝具で、惑星1つを易々と破壊することが可能なほどの威力を秘めている。

この宝具を防ぐ術は無く、1度放たれると攻撃対象を殲滅するまで追い続けると言つ最強で最狂で最凶な宝具。

ただし、この宝具使用者は全ての魔力を吸いつくされてしまい、さらに体力も限界まで奪っていく。







## 少女達の戦い。

sideジャバウオック・サタナキア

「はあっ!!」

「くっ!!? プロウクン・ゴッド・ウエボン壊れた神器? イージス!!」

? 闇? の少女の攻撃を我はイージスを創りだし防いだ。  
鉄壁とは行かずとも大抵の攻撃は防げるものだ。

「防がれましたか: アステル星よ」

「させない!! デイバイイイイイン: バスタアアアア!!!!」

少女の攻撃をなのはが全て撃ち落とした。  
今だ!!

「? プロウクン・ゴッド・ウエボン壊れた神器? グングニール!!」

創りだすのは槍。

何人も避ける事の叶わぬ必中の槍!!

範囲が決まっただけで槍の効果が無くなったわけではない。  
必中の範囲は500m程です。

「行け!! 全てを貫け!! グングニール!!」

そう叫び我はグングニールを投擲した。  
この距離なら確実に当たるはずだ!!

「何だと!？」

我は目を疑った。

何故なら我が投擲したグングニールを少女が防いでいたからだ。

「危なかったですね…」

「お主!どうやってグングニールを!！」

確かに我はグングニールを投擲したはず!!

ならば何故、こやつを貫いておらぬ!?

「来る場所が分かっているのならばそこを重点的に防げばいいだけです…」

そんなことで我が攻撃を防がれるなんて…  
つと今は悔しがつている暇は無い!!

「?壊れた神器?干将・莫耶!」  
クロクン・ウエキ

我は思考を切り替え二振りの剣を創りだした。

片や黒の刀身に亀甲模様、片や白の刀身に水波模様が浮かんでいた。

side out

side 第3者視点

防いだ槍が消え驚いた表情のヘカテー。

「…何をしたのですか」

「答える義理は無い!!」

そう言つて干将で斬りかかるジャバウオック。

この干将は fate シリーズの物とは違い普通の神話上の武器であるため引き寄せあたりはしません。

「ブレイズキャノン!!」

「アークセイバー!!」

さらにそこにクロノとフェイトの攻撃が加わる。

ジャバウオックは2人の攻撃が当たる直前に飛んで離れていた。

「やったのか？」

「分からぬ…我は手ごたえを感じたが…」

ユーノの問いにジャバウオックが答えた。

ヘカターは爆煙に包まれており様子が分からない。

「アステル  
星よ」

「何！？ぐわああああ！！！！！！！！！！」

煙の中から声が聞こえたと同時に魔力球が全方位に放たれた。

その攻撃はヘカターの持つ錫杖、トライゴンによって放たれるものだった。

「皆、無事か！！」

クロノが左腕を抑えながら叫んだ。

どうやら左腕に被弾したらしい。

「我は大丈夫だ！」

「僕もなんとか…」

ところどころに掠<sup>かす</sup>った跡が見えるジャバウオック。

障壁を張りなんとか無事のユーノ。

「こっちも大丈夫だよ！」

「同じく！」

障壁を張りフェイトを守っているのは。

右足から軽く血を流しながらもなのは張った障壁の中で返事をするフェイト。

「よし、なのは！君はスターライトブレイカーを準備してくれ！  
彼女を倒すにはそれしかない！！」

「分かったの！！」

クロノは全員の無事を確認した後になのはに言った。

ヘカテーを包んでいた煙が徐々に晴れていく。

「全員なのはのために時間を稼ぐぞ！！ステインガーレイ！！」

そう言ってクロノはヘカテーに向かって高速な光の弾丸を発射した。

## 少女達の戦い。(後書き)

～霊使い達の雑談～

ふう、疲れた。

贈り物の紹介をします。

銃王 海さんより幻想壊しの能力を追加したビーダマと、管理局の裏情報が書かれたCD、それに仮面ライダーWのベルトを、

いただきました。

そして、銃王 海さん、ルシファー様、ユタ様感想ありがとうございます。

竜馬「離せ～～～!!!!」

却下。

それではユタ様から終末の鎌・ラグナロクの攻撃が来ているので(真名解放済み)

詳細

この武器に触れるすべての物はなかったものとされる(生物には効果なし)

真名開放されると闇の斬撃を放つことが出来る

終末の鎌だけ合って攻撃力も高く人に対してはそのものの悪夢を夢で強制的に見せることも可能

竜馬「くっそ!!!!」(呪文省略)～フェンリル!!影道!!!!」





星、落ちる時…（前書き）

先に謝っておきます。

TE様すみません。

ハセヲでふざけすぎた気がします。

銃王 海さんすみません。

勝手に色々やっけてしまいました。

不快にさせてしまったらすみませんでした。

星、落ちる時…

side 第3者視点

「パチユリーまだか？」

「まだまだかかるわね…」

パチユリーの張った次元隔離結界に竜馬達は未だにいた。どうやら解除に時間がかかるらしい。

「竜馬く遊ぼう」

「ぐぶうつつ！！」

竜馬の腹部にフランが突撃した。

フェニックスの姿を解除していなかったためそこまでダメージは大きくは無いが…

「フ、フラン…腹に突撃しないでくれ…」

「え…」

鳩尾に直撃したのか苦しそうに竜馬は言った。

フランは不服そうだが。

「せ、せめて…腕とか…にしがみつくとかで頼む…」

「竜馬!？」

その言葉を最後に竜馬は倒れた。

予想以上にフランの突撃は危険なようだ。倒れた竜馬を見てレミリアが驚いていた。

side out

sideユーノ・スクライア

なんて強さなんだ…

僕等5人がかりで勝てないなんて…

アステル  
「星よ」

？闇？の女の子は魔力球を放ってきた。  
僕は咄嗟に障壁を創りなのはを守った。

「ステインガープレイド・エクスキューションシフト!!」  
「フォトンランサー!!」

クロノとフェイトが同時に攻撃を放った。  
しかしそれを女の子は避けていく。

「チェーンバインド!!」  
「喰らえ!!」

僕は女の子が逃げた先にチェーンバインドを放った。  
さらにそこにジャバウォックが攻撃を仕掛ける。

「くっ!!」  
「まだまだ!!」

女の子はチェーンバインドをかわしジャバウォックの攻撃を刀で防いだ。

ジャバウォックは双剣でさらに連続で斬りつけていく。

「これで！終わりだ!!？壊れた神器？ミヨルニル!!」  
フロウクン・ユット・ウエボン

ジャバウォックがそう言った瞬間ジャバウォックの持っていた双剣が消え大きな鎚になった。

そしてそのままジャバウォックは女の子に向かって振り下ろした。

「くっくっくっくっ！！！！」

女の子は少しだけ持ち堪えたが結局叩き落とされた。地面に叩きつけられ女の子は血を吐いた。

「がはっ…ぐふっ…げほっげほっ…」

「まだか！！なのは！！」

ジャバウォックがなのはに向かって叫んだ。確かにもう終わっても良いはず…

「もう少し…出来た！！高町なのは、おっきいのいきまーすっ！！！！」

『Starlight Breaker』

なのははレイジングハートを構えて言った。なら、僕はあの子の動きを止めよう。

「チェーンバインド！！」

僕は女の子にチェーンバインドを放ち動きを止めた。

side out

side 魔神竜馬

鳩尾のダメージから復活しました。

まだ解除に時間かかるらしいし…

「…歌うか、　　〜???〜愛してるを〜全力で絞り出せた日」

焦ってここで暴れても意味は無いからな。

「何も怖がらずに〜真っ裸になれた」

フランとレミリアはおとなしく聞いている。

「言いたい事は〜ごく単純で〜?愛してるんだ〜そばにいてほしいな」

この曲を選んだ意味なんて無い。  
ただ気に入っているだけだ。

「けど少し汚れて〜それを消すためにさらに汚して〜今では開き直って〜僕汚れてます」

人は一度汚れたら決して綺麗になれない。  
その汚れを認めて汚れないようにするのも開き直るのもその人の自由だ。

「胸に潜んでいる〜素敵な思い出達と鬼ごっこだ〜?僕はここ何年も〜鬼役で君を追っている」

そう、どんなに時間がかかっても良い。

俺は約束を守らないといけないのだから…

「離れないで〜慣れないで〜何度叫んでみても〜君の足音は〜僕

から遠ざかっていく？」

だから俺はどんなに汚れても約束を守り抜く。  
それで俺がどんなに嫌われ蔑まれても…

side out

sideクロノ・ハラウン

ユーノがバインドを張ったか。  
なら、大丈夫だな。

「フェイト！ジャバウオック！離れるぞ！！」

「分かった！！」

僕の言葉に2人は距離を置いた。  
これで終わりだ。

「全力全開！！スターライトオオオオオオ……ブレイカアアアア  
アアアア！！！！！！！！！！」

桃色の極太の砲撃が少女に向かって放たれた。  
少女は砲撃に飲み込まれた。



美波「逃がさない！！サモン！！」

ぬりかべ登場。

美波「どういう事よ！！」

竜王「ぷ（笑）」

6人「ㅋㅋㅋㅋブチッ」「」「」「」

竜馬「んじゃ、頑張れ」

竜王「逃げんな！！…ん？あれは…」

上空から大量のテラフレアと希望ホープ・エンド・と終末クロスフレイカーが交差する斬撃が飛んで来ていた。

詳細

真名開放をした終末の鎌ラグナロクと希望の剣フェルシオスを合成した希望と終末の剣を真名開放したときの斬撃

元々正反対の属性を持つ二つの武器を合成したため反発しあう力が斬撃として出てくる

下手をすると次元世界を7〜8個ほど消滅させてしまうほどの威力を誇る

竜馬「ぎゃあああああ！！！！！！！！！！」

竜王「飛んでるから当たったな…」

ルイズ「ちよっ！？私達にまで当たるじゃない！！！！」



竜王「敵味方問わずかい！？とそんな場合じゃないな？黄昏の武器？all fusion」

竜王の言葉に反応し？黄昏？と名の付いた武器が一つになる。

竜王「合成完了…？黄昏の極器？これで俺に攻撃は当たらないな」

7人「くくくくくくせこつ！」「くくくくく」

竜王「五月蠅い！！テラフレアで全滅してる！！だあああああ！！！」

希望と終末が交差斬撃に攻撃を仕掛ける竜王。

竜王「くっそ！！重い！！！！どりゃああああ！！！」

起動を少しだけずらし直撃を回避する事が出来た。  
と言っても半身が吹き飛んでいるが…

竜王「ふう…フェニックスになつてて良かった」

ちなみに竜王のフェニックスは竜馬の赤が青に紅が蒼に茜が藍に色が変化しただけ。

竜王「…OHANASHIしに来たのに全滅してるじゃん」

テラフレアでシャナ以外全滅中。（注、ぬりかべは消えていません）

シャナ「ひ、柀いいいい！！！！！！！！！！」

竜馬「なんだこのカオス」

竜王「とりあえず日を改めてもう一度来い…な？」

シヤナ「うゝ…／／／／」（泣）

シヤナは5人を抱えて転移した顔が赤く見えたのは気のせいだろう。

竜王「つともう1人来るんだったな」

竜馬「まだいんのかよ!？」

「お前の所為で!！」

竜王「危な!」

頭を動かし斬撃をかわす。

竜馬「あゝ、OK竜王が狙いだな。俺は行くぞ？」

竜王「ああ良いぞ。ちなみに先程、攻撃をしてきたのはTE様の？  
魔法少女リリカルなのは 白銀の英雄？の主人公ハセヲだ」

ハセヲ「お前の所為で俺はあんな恰好を!!!!!!!」

詳しくは白銀の英雄の「祝!!100万PV突破記念!人気投票  
発表会!!」を読んでください。

竜王「良いじゃん似合ってたぞ？」

ハセヲ「うるせえ!!!!!!」

双銃を構えるハセヲ。

竜王「ん〜…スケイスちよつと来い」

ハセヲ「はっ?」

バリアジャケットが消えスケイスが竜王の元に行く。

スケイス『何の用だよ』

竜王「いや、これをダウンロードしてくれ」

スケイス『これは…良いぜ』

ハセヲ「俺を無視して勝手に話すな!!」

竜王「これで良し。ほらよ」

ハセヲにスケイスを投げ返す。

ハセヲ「何をダウンロードしやがった…」

スケイス『秘密だ』

ハセヲ「ちっ!来い 来いよ!俺はここにいる スケエエエエ  
エエエイス!!!!!!」





悪ふざけつて度が過ぎると物凄く怖い。

sideパチユリー・ノーレッジ

自分で創った結界とはいえ解除がこんなに難しいとはね…  
えつと…構成術式の第二節を動かして…

「後は…フランちょっと来てちょうだい」  
「なぐに？」

私はフランを呼んだ。

「ここをあなたの能力で壊してちょうだい」

私は目の前の空間を指差しながらフランに言った。

「ここ？分かった」

フランの能力って結構酷いわよね…  
本人曰くキュっとしてドカーンらしいけど。

「せーのっ」

フランは手のひらを前に出して握りしめた。  
それと同時に空間に亀裂が入っていき割れていった。

「最初からフランが割ればよかったんじゃないか？」  
「その場合、全然違う空間に出るか次元のすき間をさまようかするけどそれでも良いの？」

竜馬の言葉に私は答えた。  
それを聞いて竜馬は驚いた表情をしていた。

side out  
side 魔神竜馬

ふう、やっと結界から出られた。

そう言えばなのは達の所にヘカデーが行ってたが…

「あいつ等なら大丈夫だよな」

「あいつらって誰よ!?!」

俺の呟きにレミアが素早く反応した。

そう言えば紹介して無かったっけ。

「俺の仲間達だよ。とりあえず向かうか」

レミアはじゃっかん不服そうだったが俺に付いてきた。  
フランとパチュリーは普通に付いて来てい…

「むきゅんっ!?!」

「だあっ!?!」

いきなりパチュリーが本で殴ってきた。  
角だから物凄く痛い…

「何すんだよ…」

「何でも無いわ。行きましょう」

そう言っつてパチュリーは本をしまった。

何だったんだいったい…

side out

sideフェイト・テストロッサ

なのはの砲撃が終わると女の子は消えていました。

「私ちゃんと非殺傷設定だったよね!？」

『はい、命中して消え去るなんて…』

なのはは驚いてレイジングハートに尋ねました。  
どうなってるんだろう？

『巨大な魔力が4人接近しています』

「本当なのバルディッシュ？」

巨大な魔力!？

1人なら竜馬だろうけど4人!？

『500m、400m、300m、250m、150m…』  
「速い!？」

どんどん近付いて来ている!!  
どこから!？

『50m、10m、1m!…』  
「どじこー!？」

1m!？

でも近くには誰もいないよ!？

「隙ありだ…」



「ひっ!？」

首元に冷たい物が当てられました。  
いつの間に!？」

「何をやってるのよ竜馬」

「いや、つい悪ふざけをね」

……え？

竜馬？

「悪かったなフェイト」

「りよ、竜馬なの？で、でも魔力の反応は4人って……」

私の首元から冷たい物が離されました。

振り向くと竜馬が悪戯いたずらっぽい笑顔を浮かべていました。

「そっちの3人の女の子達は誰？」

「ん？俺の仲間たちだよ」

そう言えばなのは達は？

良く見ればクロノ、ユーノ、なのは、ジャバウォックはお茶を飲んでいました。

「何で？」

「先に4人を捕まえて教えておいたから、フェイトにドッキリするって言ったら了承したぞ？」

……ふん。

私はゆっくりと4人の元に向かいました。

「お、フェイトどうだった？驚いただろう？」

「ごめんねフェイトちゃん」

ジャバウォックとなのはが私に気が付いて話しかけてきました。  
謝ってるからなのは許してあげよう…

「ど、どうしたのフェイト…？」

「何だか怖いんだが…」

ユーノとクロノが震えています。

ふふふ…

「 O S H I O K Iだよ…」

「 「 「ぎゃあああああああ……………!」 「 「 「

え？

何も起きてないからね？

絶対に気にしちゃダメだよ…

悪ふざけって度が過ぎると物凄く怖い。(後書き)

〈霊使い達の雑談〉

感想が来ております!!

銃王 海さん、ユタ様、ルシファー様ありがとうございます。

そして銃王 海さんよりぬこぬこナツクルをいただきました。

竜馬「ぬこぬこナツクル？」

おそらく、ねこねこナツクルだと思うんだが…

竜馬「まあ良いけど」

女体化して装備するか？

竜馬「やめてくれ!!!」

つとそう言えばお前に終末の鎌・ラグナロクの斬撃がまた来てるぞ。

竜馬「ざけんなっつーの!!!」(呪文省略)〈フェンリル!!!〉

影には逃げるなよ？

竜馬「どうせ出されるんだろ…だったら、影爪!!!」

竜馬の両腕に影が巻き付き爪になる。



番外編 今さらですが、あけましておめでと〜ございます。(前書き)

あけましておめでと〜ございます。

今回は正月と言う事で…

バトルロワイアルにします。

ちなみに本編とは関係ないです。

他にも贈り物でいただいた武器なども登場させます。

結構カオスになると思いますがそれが嫌だという方はここで戻るを押してください。

それでは、どうぞ。



「リベンジに来た模様です」

「今回は攻撃はお前だけだよな？」

「まあね、と言う訳で。〜（呪文省略）〜フェニックス！あ、俺に攻撃が当たった瞬間からバトルロワイアルは開始だから」

俺は呪文を唱えてフェニックス（色違い）に変身した。  
もうそろそろだな…

side out

side 魔神竜馬

何でこんな事になってるんだろっな…

…ん？

バトルロワイアル？

「おい！！怪我したらどうするんだよ！？」

「あ、それなら大丈夫。俺が治すから…」と来たか」

そう言っつて竜王は空を見上げた。

えっと、あれは確かWhite Seal様からの言詞鉄槌、神鳴  
流奥義斬魔剣・弐の太刀（防御無視）と秘剣・燕返し（回避不可）  
の合成技、必滅<sup>ゲイ・ボウ</sup>の黄薔薇、魔王砲撃をそれぞれ百発だったかな？

「それでは！！バトルロワイアル開s…ぎゃあああああああああ  
あああああああああ！！？！！？！！？！！？」

うわ、ゲロ。

竜王の状態を一応教えておこう。

まず体が粉々に切り刻まれながら砲撃で吹き飛ばされさらに槍に貫  
かれた。

単純に言っつとミキサーにかけられた肉を串で針山にしてさらに高温

の炎で燃やした感じ？かな。

「…頑張るか」

『ですね』

俺は先程見た物（竜王の残骸）を頭から振り払い無々にそう言った。  
と言っか、物凄くこちらを睨んでいる7人がいるんだが…

「なんですか…」

「リベンジに来たのよ！！」

俺の問いにシャナが答えた。

リベンジって前回は勝手にあつちが自爆しただけじゃん。

「ところで、何故1人増えているんですか？」

「…助っ人」

前回はタバサがいなかったのだ。

助っ人が、また自爆とかしないよな？

side out

side 第3者視点

会場の至る所で戦闘が行われている。

くクロノVSアリシアく

「負けてたまるか！！」

「絶対に負けない！！」

クロノは今までの経験から戦況を判断し戦っており。

アリシアは瞬間的な判断力の高さで互角に戦っている。



くなのはVSフェイトく

「そう言えばフェイトちゃんの本気で戦うの初めてかも……」

「そうだね、一番最初は私が不意打ちをしちゃったし……」

竜馬が介入しなければ戦っていたのだが……

2人は互いにデバイスを構えて戦闘を始めた。

くプレシアVSなずなく

「私の創ったデバイスの状態を見るにはちょうどいいわね（それに最近運動不足だったし……）」

「よ、よろしくお願いします……」

プレシアは明らかに私情も入っている。

対してなずなは緊張でガツチガチに固まっていた。

く咲夜VS美鈴く

「まったく、いつもいつも寝てばかりで……ここでお仕置きをしておきましょう」

「……ZZZZ」

戦闘と言うよりもお仕置きが始まりそうだった。

く非戦闘組く

「む……何で私はダメなの……!!」

「あなたが暴れたら会場が壊れちゃうでしょ」

むくれるフランをパチュリーが抑えていた。

非戦闘組はほかに霊使い達、クリス、レミリア、小悪魔、ジャバウオック、リンディ、エイミィ、ユーノ、アルフがいる。

side out

side 魔神竜馬

「とりあえず変身しないとな。無々、能力発動。形状は大鎌」  
『了解しました。能力発動』

無々は大鎌に変化した。

さて、どっちに変身するか…

「ん…ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥  
不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死  
鳥転身』」

俺は呪文を唱えてフェニックスになった。

竜王が最初に使っていたがあれは俺と色が違う俺のは赤系の色が主  
体だ。

「準備万端ってことね？」

「まあ、そうなるな…」

変身を終わるとハルヒが聞いてきた。

…と言うかハルヒの後ろに巨大な神人が見えるんだが。

「とにかく頑張るぞ」と王の財宝ゲート・オブ・バビロン

ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝を展開した。

まずは戦え無さそうなのから気絶させてくか。

「となると…こなた達からか」

「何を考えているかは知らないけどこっちから行かせてもらおうわ！

「！」

そう言つてシャナが斬りかかつて来た。  
「っ！早！！」

俺はギリギリで避ける事に成功した。

side out

side 竜王

…あゝ痛かった。

フェニックスのお陰で死なずに済んだな。

「っと、皆頑張ってるな。…一応武器を出しておこう？黄昏の剣器

・ラグナロク？」

俺の言葉に反応し右腕の腕輪が一つ光り金色の西洋剣に変化した。  
？黄昏？と名の付いた武器は全て腕輪や足輪状態で俺の四肢に3個  
ずつついている。

「さて、始まりました！！第一回？闇を狩る少年？バトルロワイア  
ル！！司会は俺、竜王がお送りします」

俺はマイクを持って非戦闘組の元に向かった。

さて、誰が勝つかな？

「何をやってるの？」

「いや、司会者をね。あ、誰が優勝すると思いますか？？永遠に幼  
き紅い月？ことレミリア・スカーレットさん」

俺はレミリアにマイクを向けた。



ハルヒが神人をけしかけてきた。  
めんどくさいなあ、もう…

「えつと…ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手!!」

俺の腕に赤い籠手が装着された。

「Boost!」

…あれ？

ブーストするの速くない？

「Boost!」

「まあいいか、ふっ!!」

俺は神人を思い切り殴り飛ばした。  
神人は思い切り吹き飛んで行った。

「あ…」

「「うわ（きゃ）あああああああ!!!!!!!!!!!!!!」」

神人が吹き飛んだ先にクロノとアリシアがいた。  
…すまん。

「せいっ!!」

「がふうっ!!」

ハルヒに素早く近づき拳を叩き込んだ。  
これで残り3人。

エクスプロージョン  
「爆発!!!」

「ぐっ!!!」

いきなり俺の周囲が爆発した。

この程度のダメージなら耐える事は出来るが…

「ルイズか…」

「私もいる…」

さらに俺に向かってカマイタチが大量に飛んできた。  
タバサもいたな。

「Boost!」

「きか…ねええええ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

俺はカマイタチを全て殴り破壊した。

「だあああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

前衛に出ていたタバサを殴り気絶させた後ルイズに掌底を打ち込み  
気絶させた。

ブーステッド・ギア  
つーか流石に赤龍帝の籠手の効果が自分に帰って来始めた。

自身の限界を超えた力に俺の体は悲鳴を上げていた。

「はあ…はあ…<sup>ゲイト・オブ・パヒロン</sup>王の財宝。天上天下天地無双刀、鬼哭斬破刀・真打」

俺の腕の赤い籠手が消え目の前に俺よりでかい太刀が二振り現れた。  
ラストはシャナだけだな…

side out

side 竜王

「あ、なのはとフェイトが同時に堕ちた」  
「あら、2人共結構強くなってたからね」

俺の呟きにリンディが答えた。

…目の前にはお茶があるが俺は飲まない。

「お嬢様、紅茶を淹れますか？」  
「ええ、お願い」

すでに美鈴をお仕置きし終えた咲夜はレミリアのメイドの仕事に戻っていた。

ちなみに美鈴は俺の後ろでごみくずのように扱われている。

「残りは…竜馬VSシヤナとプレシアVSなずな、だな」

と言ってもプレシアVSなずなはプレシアの運動が目的みたいな感じだな。

これは戦闘に加えなくていいかな。

side out

side 魔神竜馬

「はあああああああつっ！……！！……！！……！！」  
「くっくっくっくっくっ！……！！……！！……！！」

俺はシヤナの攻撃を天上天下天地無双刀で受け止めた。  
重い……！！

「くっそ……！！だらあああああ……！！……！！……！！……！！」

「くっ！……きゃあああああ……！！……！！……！！……！！」





「！」

まあ、レミリアの予想通りだったな。  
優勝賞品は……くくく（黒い笑顔）

「はい、優勝賞品のハウツー本『悦しいハーレムの作り方』」  
「ありがとう……って、は！？」

俺以外の全員が啞然としている。  
当然だな。

「これを、俺にどうしろと……？」  
「さあ？」

竜馬の質問を俺はあえてはぐらかした。

「は、ハーレムノノノノ」  
「りよ、竜馬のだったらノノノノ」

何人かは顔を赤くしているな。

「それではこの辺で！さようなら」

俺は手を振って後書きに向かった。

番外編 今さらですが、あけましておめでとございます。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

それでは贈り物の紹介をします。

銃王 海さんよりチョココロネを、

White Seal様よりピチユのタマゴ、でんきだま、エリ

ユシデータ、ダークリパルサー、ランベントライト、カウリングソード機殻剣V - S

W、スライ機殻槍G - Sp2、ベスフ機殻槍B - Sp、とつか聖剣グラム、とつか神剣十拳、

ケラヴノス神破雷、サンダーフェロウ、ヴェスパーカーノン、ゲオルギウス、エX

- Wi、カウリングロックエグジスト機殻杖EX - St、レイクイウエム・ゼンセ機殻剣フツノ、アルシヨントウ月天弓、アルシヨントウ鎮魂の曲刃、

コイレ・マルト無列、ロイズモイ・オフロ天地戯画・一丸、テストメント・アルマ大罪武装一式、アルシヨントウ聖譜頭装一式、アルシヨントウ銀鎖、アルシヨントウ戦乙

女の神鉄槌、地摺朱雀、道征き白虎、王賜剣一型(EX・コールプ

ランド)、王賜剣二型(EX・カリバーン)、竜馬にハウツー本『

悦しいハーレムの作り方』、竜馬ラバーズ全員に高町なのは著『高

町流 魔王のO・H A・N A・S H I 術』、ひみつ道具『きせかえ

カメラ』、ネギま!に出てきた『年齢詐称薬』一瓶、『の時

に使うゴム』一箱を各人にを、

いただきました。

…1人だから誰もつつこまないな。

ユタ様、銃王海さん、White Seal様、ルシファー感想ありがとございます。

そして、最後まで読んでくれた皆さんにこれからも?闇を狩る少年?をよろしく願います!!

それでは?闇を狩る少年?続きます!!

狂い咲く紅き華。

side 魔神竜馬

…背後で3人の叫び声が聞こえたけど気にしないでおこづ。  
まさかフェイトがO S H I O K Iするとはな。

「これでこの世界の？闇？は終わったのか？」

でも、何か嫌な空気みたいなのは感じるんだよな…  
それも地面からじゃ無くて空気中から…

「どうかしたの？竜馬君」

「なのはか。いや、何だか嫌な感じがするんだよ」

落ち着かない様子の俺を見て不思議に思ったのかなのはが聞いてきた。  
ん？

この感覚は…

「パチュリー、悪いんだが探查系の魔法を使ってくれないか」

「いいけど…何かあったの？」

俺の言葉にパチュリーは尋ねた。

憶測だから言いたくは無いんだがな。

「おそらくだよ、何も無ければそれまでだ」  
「そう…」

パチュリーは短く返事をして魔法を使った。

…そう言えば一枚だけカードをセットしたままだったな。  
確か…

「竜馬、反応があつたわ。西の方向に150mよ。でも…」  
「そうか、分かった。じゃあ行つてくるか」

俺は翼を広げて飛び上がった。

side out

side パチユリー・ノーレッジ

行つちやつたわね…

正しくは、ある地点だけ魔力が掻き消されたのだけれど…

「パチエ、竜馬はどこに行ったの？」

「さあ、探査の魔法に反応があつた場所に向かつたみたいだけど」

レミイが尋ねてきた。

あら？

「レミイ、フランが見当たらないよつだけど…」

「へ？…フラン！？」

私の言葉にレミイは驚き周囲を見た。

どこに行ったのかしら？

side out

side フランドール・スカーレット

えへへ

竜馬は気付いてないね

「1人だけで遊びに行くなんて許さないんだから」

私は竜馬に見つからないように追いかけている。  
あれ？

竜馬が消えた？

「何をやってるんだフラン？」

「！！…み、見つかつちやった？」

いつの間にか私の後ろに竜馬がいた。

私は振り返りながら聞いた。

「まったく、無々に誰かが追いかけてきているって聞いて戻ってみたら…」

「ごめんなさい…」

竜馬は呆れたような表情で言った。

戻らなきゃだめなのかな…？

side out

side 魔神竜馬

どうするかな…

パチュリーの言っていた地点はもうすぐそこなはず。

フランを戻していたら反応をした奴は逃げてしまっかもしれない…

「…仕方が無いか、一緒に来いフラン」

「良いの？」

俺の言葉にフランは不思議そうに聞き返した。

軽く涙目で上目遣い！！

これはロリコンじゃ無くても堕ちてしまっ！！

「あ、ああ／＼／＼は、早く行くぞ！！」

「うん」

俺はフランにそう言った。

さっさと敵さん出てきてくれえええ！！！

「：ねーねー、あそこの変な鎧は何かな？」

「変な鎧？：げっ！」

フランが指差した方を見ると隻眼鬼面の鎧武者がこちらを見上げながら歩いて来ていた。

「やっぱり天目一個かよ…」

「てんもくいつこ？」

フランは良く分からないと言った風に呟いた。  
これは、フランが危ないな。

「リバースカードオープン！！？亜空間物質転送…何だこれは！？」

何だこのカードは！？

俺がセットしたのは？亜空間物質転送装置？だったはず！！

「？ルナティック・ソウル狂気の魂？：？？」

効果は…

フラン専用のカードか…

「このカードが吉と出るか凶と出るかは分からんが使ってみるしかないな…リバーズカードオープン!!!? ルナティック・ソウル 狂気の魂?!!!」

俺は変化したカードを発動した。

狂い咲く紅き華。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

贈り物と感想が来ています!!

銃王 海さんよりどっかの人が使っていた喧嘩用の惑星を20個、  
いただきました。

竜馬「さ〜て攻撃が来るぞ〜。(呪文省略)〜フェニックス!」

竜王「まずは…ユタ様の所から竜馬に終末の鎌・ラグナロクの劣化  
版だな。つと俺も〜(呪文省略)〜フェニックス!!」

竜馬「あいよ…ゼロ!!ブレイカー!!!」

ゼロ・ブレイカーと終末の鎌・ラグナロクの劣化版がぶつかり合い  
爆発を巻き起こす。

竜王「…押し負けて竜馬が気絶したか。次は…バラランシャ様から  
竜馬に断罪の蒼薔薇、俺に死滅の黒薔薇だな」  
ゲイ・オンディーナ ゲイ・バルカロール

上空から徐々に迫って来ている。

竜王「とりあえず、?黄昏の武器? a l l f u s i o n」

竜王の言葉に反応し?黄昏?と名の付いた武器が一つになる。

竜王「合成完了…?黄昏の極器?やるか、だああああああああ  
あああああ!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!」



？黄昏の極器？を構えて死滅ゲイ・バルカロールの黒薔薇に突撃する。

竜馬「ぎゃああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」  
「直撃中」

竜王「ぐあっ！！」 直撃は回避したが体半分持ってかれた。

竜馬「……………」

竜王「まだ他にも来るんだけどなあ……？治療の焰？」

竜馬の体を炎が包み込む。

竜馬「…死ぬかと思った」

竜王「さてとそれじゃあ来てくれ！！」

銃王 海さんの所より吉井明久・坂本雄二・木下秀吉・土屋康太・  
島田美波・姫路瑞樹がやって来た。

竜馬「何で来たんだ？」

秀吉「さての、坂本が急に行くと言いだしての」

竜王「…ムツツリー二よ、ある写真をとっていつてくれないか？」

康太「被写体による…」

竜馬「何をやる気だ…」

竜王「レッツ変身!!」

竜馬の右腕の腕輪が光る。

光が消えると竜馬は女体化しておりキリン装備だった。

康太「むっ!!」 高速でシャッターを押し続ける

美波「あたしより胸が大きい!!」

明久<sup>バカ</sup>「可愛い…って僕の名前が違う!!」

瑞樹「明久君…」 黒いオーラ展開中

竜王「予想通りにカオスだな」

雄二「予想どおりなのか…」

竜王「……ムツツリーニ、雄二の名前でさっき撮った写真を霧島に  
?可愛い子?ってタイトルで送りつける」

雄二「んな!?土屋も頷くな!!」

康太「情けは人のためならず…」 再び写真を撮り始める

竜王「それじゃあ締めを…バカ言っただけぞ」

雄二「だ、そつだ明久言え」

バカ「僕がバカだっていうの!!って名前が完全にバカになってる

「!!」

竜王「はいはい…さっさと言っ」

明久「戻った。？闇を狩る少年？続くよ！！って姫路さん？その手に持っているバットはいつたい…」

瑞樹「こどもに可愛いなんて言うロリコンさんを治すんですよ」  
黒い笑顔)

明久「ぎ、ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

強者求めし者と遊び相手を求める者。

side 魔神竜馬

ルナティック・ソウル

「？狂気の魂？は自分フィールド上に？紅魔・フランドール・スカ  
ーレット？が表側表示で存在する時、フィールド上に裏側表示でセ  
ットされているカードと手札を全て除外し発動する事が出来る。手  
札に？紅魔・フランドール・スカーレットノルナティック？がある  
場合手札を除外しなくても良い」

今の俺の手札は0枚。  
セットカードも無い。

「そして自分フィールド上の？紅魔・フランドール・スカーレット  
？を墓地に送り自分の手札、デッキ、墓地から？紅魔・フランドー  
ル・スカーレットノルナティック？を特殊召喚する。このカードは  
相手の魔法、罠、モンスター効果によつて無効化されない」

俺はデッキから光るカードを引き抜いた。  
フランは興味深そうにこちらを見ている。

「デッキから？紅魔・フランドール・スカーレットノルナティック  
？を特殊召喚！！！」

「？…きゃ！？」

フランが突然光に包まれた。

光の中でフランの姿に変化が起きる。

「…あれ？…………おつきくなっちゃった？」

フランは光が消えてから自分の体を見回し呟いた。  
成長したのか？

「…酷いチート効果だな」

俺は？紅魔・フランドール・スカーレットノルナティック？の効果  
を見て呟いた。

つてフランの外見が変わっている！！

元々は9歳位だったのが今では18歳位になっている。

「っと天目一個を忘れてた。フラン、あの鎧と遊ぶか？」

「遊ぶの やったあ！！」

フランは喜んでいた。

体が成長しても心は成長していないらしい。

…と言うか、動くたびにフランの胸が揺れてるんですが。

「そんじゃあ、王の財宝。ゲイト・オブ・バビロン 天上天下天地無双刀」

俺は王の財宝から一振りの大太刀を取り出した。

確か天目一個には特殊な攻撃は効かないんだっただよな？

「行くぞフランー！！」

「うん」

フランにそう言って俺は天目一個に向かって行った。

side out

side 第3者視点

上空から向かってくる竜馬達に気付いたのか天目一個は動きを止め

竜馬達を見据えた。

「つわもの強者よ…」

感情の読めない無機質な声が周囲に響き渡った。  
この声为天目一個の声なのだ。

「あゝそび〜ましよ」

そう言ってフランは弾幕を形成し撃ち放った。  
しかし、天目一個は避ける事もせずに立っている。

「無意味…」

弾幕は天目一個に当たる直前に掻き消された。  
まるでそんな物は元から存在していなかったかのように…

「どっとなってるの？」

「やっぱりか、フランあいつには特殊な攻撃…つまりは弾幕や魔法  
そう言った物が一切効かないんだ」

フランの疑問に竜馬が答えた。

弾幕などが効かない、そんな能力は幻想郷にもあまり無いだろう。  
故にフランに残された攻撃方法は完全な肉弾戦のみとなってしまう。  
た。

「強者よ…我、倒しめる強者よ…」

「俺が行くか…」

天目一個の言葉を聞き竜馬が地面に降りた。

「一応名乗っておくぞ。俺の名前は魔神竜馬だ」

「我が名は…天目一個…我を倒しめる者に…この大太刀を受け渡す…」

そう言つて天目一個は持つている大太刀を持ち上げた。

side out

side 魔神竜馬

天目一個が所持している大太刀。

おそらくアレは贄殿遮那のはず…

「…闇を狩る者、魔神竜馬！！推して参る！！！」

ウダウダ考えてても始まらねえな。

俺は天上天下天地無双刀を構えて斬りかかった。

「強者よ…」

そう言つて天目一個は俺の攻撃を防いだ。

流石は史上最悪の？ミステス？だな。

「む…ずるいよ竜馬！！」

フランがむくれながら言つた。

だが気にしている暇は無い！！

「くっ！？」

俺は天目一個の流れるような連続攻撃をなんとか防いだ。

一瞬でも気を抜いたら殺られる!!

「強者よ…我を倒しめる強者よ…」

「だあああああああ!!!!!!!!!」

俺は天目一個に天上天下天地無双刀を突き立てた。

刃は天目一個の鎧を貫き抜けなくなった。

「…やった…のか？」

「……強者よ…まだ足りぬ…まだ我を倒しておらぬ…」

天目一個はそう言って斬りかかって来た。

天上天下天地無双刀は天目一個に突き刺さっており防ぐ物が何も無い。

「ちっ!!」

横に転がり斬撃をかわした。

まだ足りない？

こうなったらあの技を放つか？

「私も遊ぶ!!」

「は？んな!？」

フランが業を煮やして天目一個を思い切り蹴り飛ばした。

なんつー滅茶苦茶な…

「体が成長したからリーチが伸びたのか」

いや、それだけじゃ無く身体能力がさらに上昇してるな。



強者求めし者と遊び相手を求める者。（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ウイング様より白紙のカードを、

銃王 海さんより姫路さんと吉井さんが作った料理を三品づつ、

いただきました。

雄二「待て翔子。お前いったい何を…ぎゃあああああ…!!!!」  
目を潰された

翔子「浮気は許さない」

竜王「おゝ早速やってるな。銃王 海さんの所より霧島翔子・工藤

愛子・久保利行・木下優子がさらにやってきました」

利行「よ、吉井君！ぜひこの服を来てくれないか!!」

明久「ど、どうしたの久保君！？それにそれはメイド服だよ!？」

愛子「何をとってるんだい？ムツツリーニ君」 悩殺ポーズで康太  
に近づくと

康太「ブウウウウー!!!」 鼻血大噴出

「よっと、ってうわ!？」 康太の鼻血を被る

竜王「あ、銀河くん。こちらはウイング様の所の？遊戯王5Ds  
とある少年の復讐劇？の主人公、星風 銀河くんです。っとタオル  
ルタオル」

銀河「なんで鼻血を吹いてるんだ？」 タオルで鼻血を拭拭中

竜馬「アレが原因です」 愛子を指差す 竜馬は未だに女体化 +  
キリン装備

銀河「あゝ…」

瑞樹「明久君、良かったらこれを食べてください」

明久「（これは！！姫路さんの料理！！）」

竜王「あ、贈り物で来たやつだね。ん？あれは…」

「何だか凄いカオスになってるな」

竜馬「優さん。どうしたんですか？」

優「話し相手が戦う相手が欲しかったからダベリに来た」

竜王「お、じゃあ俺の？黄昏？の武器と戦おう！！」

竜馬「あ、ちよっ…行っちゃった」

優子「…あなた年はいくつ？」

竜馬「私ですか？体は9歳ですが…」

美波・優子「く、屈辱だわ!!!」

竜馬の女体化時の胸のサイズはCカップでもうすぐDカップになるという所。

銀河「いつもこんな感じなのか？」

竜馬「いえ、今回はゲストが多いだけです。と言つか元に戻りたい……」泣

秀吉「明久!? どうしたのじゃ明久!？」

明久「ナンデモナイヨ…ボクハゲンキサ。ハヤクアツチノカワヲワタロウヨ…」

竜馬「そう言えばカード紹介をして無かった」

ルナティック・ソウル  
・狂気の魂

自分フィールド上に? 紅魔・フランドール・スカーレット? が表側表示で存在する時、フィールド上にセットされているカードと手札を全て除外し発動する事が出来る。手札に? 紅魔・フランドール・スカーレットノルナティック? がある場合手札を除外しなくても良い。

自分フィールド上の? 紅魔・フランドール・スカーレット? を墓地に送り自分の手札、デッキ、墓地から? 紅魔・フランドール・スカーレットノルナティック? を特殊召喚する。このカードは相手の魔法、罫、モンスター効果によって無効化されない。

銀河「この時点で結構酷いような気がするんだが……」

竜馬「オリカなんてそんな物ですよ」

・紅魔・フランドール・スカーレット／ルナティック

このカードは？ルナティック・ソウル狂気の魂？の効果でのみ特殊召喚できる。

このカードと戦闘を行ったモンスターは効果を無効にして破壊する。  
このカードは魔法、罫、モンスター効果、戦闘によつては破壊されない。

このカードがフィールドから離れる時、必ず手札に戻り自分の墓地から？紅魔・？と名の付いたシンクロモンスターを墓地から3体まで特殊召喚しさらに墓地から？ルナティック・ソウル狂気の魂？を手札に加える。

ATK 5000 DEF 3500

銀河「…チート過ぎるだろ」

竜馬「私も思いました」

〈喧嘩用惑星〉

優「はあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

竜王「だあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

全力バトル中。

〈元の場所〉

凄まじい衝撃が返つて来た。

明久バカ「な、なにににに！？つてまたバカになつてる！！」

竜馬「…竜王が？黄昏の極器？を使ってるみたいですよ」

銀河「おいおい…ん？あれは…矢？」

竜馬「よつと、え〜と？」 矢をキャッチしついていた手紙を読む

「まだバトルが終わらなそうだから締めておいてくれ by 竜王」

雄二「はひほはへはへはひはっはは」 訳、最後まで投げやりだったな。

翔子によって猿ぐつわを啜えさせられている雄二。  
ちなみに美波と優子は地面に？最低でもD？と何度も書いている。

竜馬「あ〜それじゃあ、銀河くん締めをお願いします」

銀河「良いのか？闇を狩る少年続くぞ。俺が出ているのは？遊戯王5D's とある少年の復讐劇？だからそつちもよろしくな」

〈喧嘩用惑星〉

優「いやいや、家の娘たちが可愛いんだって！！」

竜王「そこは否定しない！だがしかし！！あえて娘では無く義理の妹にしてしまえばもっと可愛くなるんじゃないか！！」

戦闘とはまったく関係ない話で盛り上がっていた。

## 白き蓮と黒き蓮。

side 魔神竜馬

さて、どうするか…

天上天下天地無双刀は天目一個に刺さったままだし。

魔法を撃つても無効化される。

今はフランが肉弾戦をやっているからのんびり考えていられるがこれもいつまでも続くわけでもない。

「やっぱあの技を使うしかないのか？」

（回想）

紅魔館についてから三日目。

俺は魔力を使えないながらも戦闘の訓練をしていた。

「何をしてるんですか？」

「ん？美鈴か…一応魔力は使えなくても戦う練習を、と思ってね」

そう言えば…

俺は昨日咲夜さんに聞いた事を思い出した。

「美鈴、確か美鈴って気を使えるんじゃないか？」

「え？ええ。使えますよ」

これはちょうど良い。

気の使い方を教われれば魔力が無い時でも戦える。

「美鈴、俺に気の使い方を教えてくれ！！」

「私がですか！？かまいませんが気を扱えるようになるかはその

人の素質もありますよ?」

可能性があるなら充分だろうな。

「それでも良い、教えてくれ!」

「…分かりました」

この日から美鈴による俺の気の習得の修行が始まった。

・三日目

「気の流れに逆らってはいけません!!流れに身を任せるんです!」

「穏やかに、静かに、優しく…!」

美鈴の気を俺に流して気の感触を掴む修行。

・六日目

「気は万物に宿ります。自身の気を感じるのです」  
「自身の気…!」

慣れてきたら自分の中にある気を感じ取る修行。

・九日目

「気を放出し自身の体の強化!これが気の基本的な使い方です」  
「気を放出!!!」

気を放出し身体強化後、美鈴と組手。

・十日目

「こんなに短い期間でここまで取得できたことには驚きました。卒





飛びかかって来た妖怪の攻撃を避けて俺は踵落としを打ち込んだ。  
妖怪は頭を破壊されて絶命した。

「そこまで強くは無いのか、だったらまだ美鈴の方が強いかな…ん？」

みると他の三匹の妖怪が先程絶命した妖怪の肉を喰らっていた。  
そして妖怪達は肉を喰らうたびに体のサイズが大きくなっていった。

「まさか…!？」

「Syugyauu!!!」

体のサイズが大きくなった妖怪達は先程の妖怪よりもスピードが上がっていた。

仲間の肉を喰らって強くなっていくのかよ!!

「くっ!! さつさと… 砕ける!!」

「Gyaaaaaaaaa!!!」

目の前に近づいて来ていた妖怪を俺は気を拳に込めて撃ち抜いた。  
胴体を拳が貫通しこの妖怪も絶命した。

「さつきよりも強度が上がっている!？」

殴った感触を確認しながら俺は驚いた。

その間も二匹の妖怪が仲間の肉を喰らっていた。

「…もしかして蠱毒か? いや、あれは虫の妖怪のはず。こいつ等は明らかに獣だ」

俺は自身が知っている妖怪等の知識の中から当てはまりそうな妖怪を探した。

しかし、俺が知っている知識の中にはどれも当てはまらなかった。

「「Syagyaaaaaaaaaaaaaa!!!!!!!!!!!!」  
「」

二匹目の仲間の肉を喰い終えたのか二匹の妖怪は叫び声を上げた。  
幸いにもスピードは目で追える速さみたいだな。

「はあっ!!!」  
「Guggyuu!!!」

俺が掌底を打ち込むと多少は怯むものの大したダメージにはならなかった。

ちっ!

強度が異常に高くなってやがる。

「Gyaouuuuuuuuuuu!!!」  
「っせい!!!!!!」  
「Guggy?::Gugyaaaaaaaaaaaaaa!!!!!!!!!!!!」  
「」

気を放出しながら再び掌底を打ち込んだがダメージは与えられないのか噛みつきょうとして来た。





俺は瞬動術を使い妖怪に接近した。  
気を放出して打ち込む!!!

「っはあ!!!!!!!!!!!!」

「Gugyauuuu!!!!!!!!!!!!」

俺が掌底を打ち込むと妖怪の皮膚が爆ぜ爪が砕け牙が折れた。  
しかし妖怪は死なずに生きていた。

「さっきと違う!?!」

「Gyauuuuuu!!!!!!!!!!!!!!」

俺が驚いていると妖怪は俺を吹き飛ばした。  
体勢を立て直し俺は地面に着地した。

「何が違う?さっきと同じように放ったはず…これは…」

俺は地面を見て気付いた。

どちらも気を込めているのに右足は地面に触れているのに対して左足は気に阻まれて地面に足が触れていない事に。

「なるほど、浸透か非浸透って事か…だったら!」

再び瞬動術で俺は妖怪に接近した。

おそらくさっきのは非浸透型!!

だったら浸透型にすれば!!!

俺は気を放出して掌底を打ち込んだ。

「GYU!?GYUUGyagYUgYagYaadaadaadaa

aaaaa!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その瞬間、妖怪は苦しみ出して爆発した。  
これならオリジナル技としていけ……かな……  
緊張と疲労からか俺は意識を失った。  
最後に緑色の民族衣装を見た気がした。

次の日、俺は紅魔館で目を覚ました。

咲夜さん曰く凄まじい叫び声を聞いて美鈴が慌てて俺を探しに行き、妖怪の血を被って倒れていた俺を見つけたらしい。  
そして、俺は美鈴に見つけてくれた事のお礼を言い、昨日完成したオリジナル技を見せ卒業試験を合格した。

～回想終了～

あの技を打ち込めればおそらくは倒せるだろう。

「白式（やくしき） 白蓮と、黒式（くろしき） 黒蓮を……」

白き蓮と黒き蓮。(後書き)

〔霊使い達の雑談〕

感想と贈り物ありがとうございます!!!

銃王 海さんより海苔と落花生と酢飯をたくさんいただきました!!!

ユタ様、ルシファー様、銃王 海さん感想ありがとうございます。

竜馬「おそらく節分だね？」 未だに女体化+キリン装備

竜王「あれ？バカテスマンバーは？」

竜馬「え？雄二は翔子に引きずられて帰って行ってそれに続いて皆帰ったよ」

竜王「ふ〜ん。優も面白い話が出来たって満足そうに帰って行ったかな、お土産にケーキとかも渡して置いたけど」

「ケーキ!!!」

竜馬「きゃあ!？」

竜王「お、来たみたいだな。銃王 海さんの所より上条当麻、インデックス、土御門元春、青髪ピアス、姫神秋沙、吹寄制理、御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子、固法美偉が来ました」

インデックス「ケーキはどこかな!!!」

竜王「… 食いしん坊シスターだな。はい、ケーキ」

竜馬「何でウエディングケーキなの？」

元春「見ろかみゃん！！これが萌えだ！！！」 竜馬を指差す

青髪「これは萌えポイントがとてつも無く高いにゃー！！」

美琴・黒子・飾利・秋沙「……あなたの年は！！」「……」

竜馬「またですか！？体は9歳ですけど……」

くどいようですが竜馬の女体化時の胸のサイズはCカップでもうすぐDカップになるという所です。

美琴・黒子・飾利・秋沙「……うわ〜ん！！」「……」 号泣

涙子「隙あり！！」 竜馬の麒麟装備の腰部分を落ろす

竜馬「きゃああああ！！！！！！！！！！」

当麻・元春・青髪「……ブウウウウウウツッ！！！！！！！！」「……」  
鼻血大噴出

美偉「何をやっているんだか……」

竜馬「見ないで！！ゼロ・ブレイカー！！！！！！」 鼻血を吹いた  
三人に放つ

元春「行ってこい！！かみゃんガード！！！！」 当麻を押し出す



当麻「ふざけんな！！不幸だああああ！！！！！！」  
幻想殺し  
で防ぐ前に直撃

銀河「酷いほどにカオスだ」

竜王「…戻らなくていいの？銀河くん」

銀河「いや〜戻ったらめんどくさくなりそうで…」

竜王「ところで、それ鼻血？」

銀河「へ？」 鼻を抑える

竜馬「…見たの？」 涙目

銀河「い、いや！見てない！！」

竜馬「そっか…見たんだ…私の…見たんだ」 混乱中につき言葉が  
通じない

銀河「聞いてねえ！？竜王さんどうしたら!？」

竜王「…攻撃は防げないと思うからあつちに帰った方が安全かな」

銀河「わ、わかった！！それじゃあな！！」 大慌てで帰っていく

竜馬「逃がさないよ…」 追いかけていく

竜王「あゝあ…ついてっちゃったよ…ウイング様どうか銀河くんを

守ってあげてください」

インデックス「ごちそうさま」 ウェディングケーキを一人で  
完食

竜王「お、ちょうど良いや。インデックス、締めを言ってくれ」

インデックス「わかったよ。闇を狩る少年続くからね。ね、ね、他にも食べ物って無いの？」

竜王「はいはい」

と禁メンバーが帰ったのはそれから一時間後だった。  
何故かインデックスだけ残っているが…

## 月神の大太刀。(前書き)

書き忘れていましたが竜馬の気の総量は普通の人より多い位です。

魔力ランクで表すと普通の人がDランク、ネギまのラカンがEXランク、ネギまの刹那がSランクと言う解釈です。

なので竜馬の気はSランク、刹那と同じくらいです。



side out

side 魔神竜馬

やっぱりフランじゃ危なかったか。

「強者よ……」

「俺が…お前を倒してやるよ」

俺は気と魔力を流して体を強化した。

ネギまの咸卦法かんかほうではありません。

「強者よ…我を…倒して我が大太刀を…授けるに値するものよ……」  
「ああ…その大太刀、俺が貰い受ける!!!」

瞬動術を使い俺は一気に天目一個に接近した。  
ここに打ち込む!!!

俺は右手に浸透型の気を乗せて天目一個に打ち込んだ。

「爆ぜよ!!!白式びやくしき 白蓮はくれん!!!!!!!」

これで勝った!!!

俺は勝利を確信した。

「強者よ…まだ足りぬぞ…」

「な！？効いてない！？」

天目一個は一切ダメージが無いかのように斬りつけてきた。  
俺はそれをバックステップで回避した。

「強者よ…」

どういう事だ！？

この技は内部破壊の…！！

「…もしかして、だとしたら…！」

再び俺は瞬動術を使い天目一個に接近した。  
俺の読み通りなら…！！

俺は左手に非浸透型の気を乗せて打ち込んだ。

「砕けよ！！黒式こくしき 黒蓮こくれん！！！！！！」

打ち込まれた瞬間、天目一個の鎧がところどころ欠けていった。  
読み通りか！

天目一個はミスレス、故に肉体を持たない。  
つまりは内部は空洞、幾等いくらそこに浸透型の気を込めても破裂するはずもないのだ。

「これを打ち込み続けていけばいけるか！？」

「強者よ…我…仕合う…我を授けるに足る者と…」

天目一個は斬りかかって来た。

気と魔力によって加工されていても意味は無いんだよな…

「くっ！！だあああああああ！！！！」

俺は上から振り下ろされる大太刀を両手の平で挟み勢いを殺さずに地面に叩きつけた。

大太刀は自身の勢いで地面に深く突き刺さった。

「ここ！！黒式 黒蓮！！！！満開！！！！」

大太刀が地面に突き刺さった隙を俺が見逃すはずもなく俺は黒蓮を連続で打ち込んだ。

天目一個の鎧が徐々に爆ぜていった。

そして天目一個の腕から大太刀が離れた。

「…今度こそ勝った…のか？」

「強者よ…我を倒しし…強者よ…汝に我が大太刀…にえとのしよつが 贄殿娼娥を…授ける…」

贄殿娼娥!?

にえとのしやな

贄殿遮那じゃなくて!?

そう言つて天目一個は消えていった。

地面に突き刺さった一本の大太刀を残して。

「…貰つて行くぞ」

俺は地面に突き刺さった大太刀、贄殿嬢娥を引き抜いた。  
不思議な刀だ…  
持っている力が湧いてくるそんな気さえしてくる。

side out

side 第3者視点

「あれ? 竜馬は?」

3人に O S H I O K I を終えたフェイトがパチュリーに尋ねた。

フェイトの顔には決して返り血なんて付いていませんよ。

ええ、決して。

「竜馬なら変な魔力反応があつたからそっちに向かつたわよ」

「それなら終わったよ」

パチュリーの言葉が終わると同時に竜馬が現れた。  
勿論右手に大太刀を持って。

「あ、お姉さま」



「ふ、フラン！？何よその姿は！？」

成長しているフランを見てレミリアは驚いた。  
それもそうだろう。

先程いなくなっただと思っただら成長して現れたのだから。

「よくわかんない 竜馬が何かやったらこんな風になったの」  
「竜馬…何をしたの？胸まで大きくなってるし…まさかフランの胸をmondあの！？」

レミリアが混乱の余り暴走していつている。

さらにこの言葉を聞き何人かが暴走を巻き起こした。

「……竜馬（君） O H A N A S H I しましょう（しよう）  
か……」

「え！？何で！？」

その後、竜馬の悲鳴なんてものは聞こえなかった絶対に…  
もし聞こえたとしてもそれは幻聴です。

「……何も聞こえないよね（わよね）？……」

黒い笑顔で4人…レミリア、パチュリー、なのは、フェイトは言った。

## 月神の大太刀。(後書き)

〔霊使い達の雑談〕

本日も感想と贈り物をいただいております。  
嬉しい限りですよね。

銃王 海さんよりマテリア「まほうみだれうち」をいただきました。  
そしてユタ様、ルシファー様、銃王 海さん感想ありがとうございます。

インデックス「ガツガツガツ！！ムシヤムシヤムシヤ！！」

竜王「良い食いつぶりだな」

「ったくユタの野郎…」

竜馬「あれ？優さ…ん？」 未だに女体化＋麒麟装備

優「ああ、竜馬か。この格好じゃ分からないのか」

優はレミリアと同じ服装で身長もそれくらいだった。

竜王「どうしたんだ？」

優「ユタに飯を作ってくるように言われたんだよ」

インデックス「ご飯！！」

優「はいはい、んじゃあこっちに来てくれ」

優についていくインデックス。

「とっちや〜く〜!」

竜王「ん？銃王 海さんの所よりハルヒ組が来たか」

長門「本を読む所は…?」

竜王「ああ、こっちだ。ついて来てくれ」

長門「分かった」

ハルヒ「ここをSOS団の特殊基地にするわよ!」

竜馬「させないよ!〜!〜!」

古泉「にぎやかですねえ」

キョン「ああ、物凄く迷惑をかけている…」

みくる「はっつ…」 何故かメイド服

ハルヒ「良いじゃない!あたしが決めたのよ!」 看板を取り出す

竜馬「知りません!!却下します!!」 看板をたたき割る

竜王「何をやってるんだ?」

ハルヒ「ここを私達の特殊基地にするのよ!」

竜王「却下だ。帰れ」 指を鳴らす

ハルヒ「え? きゃあああああ! ! ! !」 足元に現れた穴に落ちていく

キョン「すみません。迷惑をかけました」

竜王「気にしないでいいよ。元凶は帰したし」

みくる「鈴宮さん大丈夫でしょうか?」

竜王「大丈夫だよ、あつちに届けるだけだから。あ、でもタライとかも一緒に落としたな」

古泉「…特大の閉鎖空間が出現したらしいです。では、行ってきます」

竜馬「行ってらっしゃい…」

当麻「インデックスはどこですか?」

竜王「ん? 迎えに来たのか。当麻、ステイル、火織」

ステイル「あの子はどこだい?」

竜王「あそこで飯を食ってるぞ」

火織「あの者は?」

竜馬「優さんです。料理が上手なんですよ」

当麻「とりあえず連れて帰りますね」

竜王「ああ、頼んだ」

その後ハルヒ組は自由解散、と禁組は優の料理を食べてから帰って行った。

優「フランとレミィにはどんな服が似合うかな？」

竜王「ん〜…可愛いからどんな服でも似合うんだよな…」

再びフランとレミリアについての話で盛り上がった。

ちなみに長門は本を読んでいるので残っている。

竜馬「…ぐだぐだだなあ。闇を狩る少年続きます。本当にいつ戻れるんだろう」泣

**訓練や模擬戦の重要性って結構高い。(前書き)**

先に言っておきます。

作者はリトバスを詳しく知りません。

後書きのリトバスキャラ達は自分なりにキャラ説明を読んで考えた喋り方ですので不快にしていまいましたらすみませんでした。

訓練や模擬戦の重要性って結構高い。

side 魔神竜馬

酷い目にあつたな…

俺を散々攻撃した後レミア、フラン、パチュリーは幻想郷に帰って行った。

何で勝手に想像された事で俺がこんな目に。

「つとそう言えば贄殿嫦娥か…にえとのじやうが」

あの後、俺なりに調べた結果。

贄殿遮那の遮那とは太陽神を意味していた。

だからもしかやと思ひ嫦娥を調べた結果、嫦娥は月神を意味していた。

「太陽では無く月、陰陽で言うなら陰か」

なぜ天目一個がこの大太刀を持っていたのか…

奴でこの世界の？闇？は終わったのか？

「考えてても終わらないな。よし、嫦娥の試し斬りでもするか」

俺は贄殿嫦娥を手に取りアースラに転移した。

他にも練習が必要な武器もあるしな。

side out

side 第3者視点

「お〜いいンディ。訓練室を使っても良いか？」

「…砲撃を撃たなければかまいませんよ」

リンディは顔を少し引き攣らせながら答えた。  
前回の竜馬の砲撃練習がトラウマのようだ。

「アースラ訓練室」

「それじゃあターゲットを出してください」  
「分かったわ」

竜馬の周囲に傀儡兵が現れた。

「せいっ！！たあっ！！！！」

一瞬の内に傀儡兵達は残骸へと変化した。  
贄殿嫦娥の斬れ味はそうとうの物らしい。

「気も魔力も乗せてないのにほとんど力を込めずに斬れるな……」

あまりの斬れ味に竜馬は驚いていた。

そして竜馬は贄殿嫦娥を地面に突き刺した。

「とりあえず嫦娥の試し斬りはこれ位で良いだろ。次は無々、能力発動。形状は双銃」

『了解しました。能力発動』

竜馬の言葉に反応し無々は2丁のデザートイーグルに変化した。

「次に：無々、双銃をエクステンド。静力ナル翠ノ楽園、来タリシ転生ノ刻」

『エクステンド？静力ナル翠ノ楽園？？来タリシ転生ノ刻？』

静力ナル翠ノ楽園と来タリシ転生ノ刻、これはフォウル様から頂い



たインストールブック？黄昏の書？の拡張コードをインストールして無々の双銃が変化したものだ。

まず、竜馬が右手に持っている翠色の銃剣。

こちらが増殖の拡張コードによって右手の銃が変化した？静力ナル翠ノ楽園？

次に、竜馬が左手に持っている蒼色の銃剣。

こちらが再誕の拡張コードによって左手の銃が変化した？来タリシ転生ノ刻？

「行くぜ！！」

竜馬は左右の銃剣で傀儡兵を突き、斬り払い、撃ち抜いた。傀儡兵を倒すごとに竜馬のスピードが徐々に上昇していく。

これは？無窮ノ輪廻・改？の効果である。

これまで倒した敵の数に応じてのステータスが上昇していくのだ。

「…撃つてみるか。はああああああああああ！！！！！！」

竜馬は傀儡兵達に向けて？静力ナル翠ノ楽園？の銃口を向けた。翠色の光の奔流が銃口に集まっていく。

「シード・ゼロ・ブレイカー！！」

翠色の奔流が止まり傀儡兵達に向かって翠色の砲撃がぶつかる。

竜馬の魔力光は藍色、既に変化が起こっている。

「片方撃つただけでこの反動かよ…これは」

竜馬は撃つた地点から50mほど後ろの地点にいた。砲撃の光が消え傀儡兵達に変化が起きた。

傀儡兵達の体を包むように植物が巻きついていく。

「これが、？静力ナル翠ノ楽園？の力なのか？」

そして傀儡兵達は植物によって握り潰された。  
まるで綿菓子でも潰すかのようにあっけなく。

「がっ！？」

竜馬は短い悲鳴を上げると頭を抱えた。

この2丁の銃剣も？万死ヲ刻ム影？と同じように精神浸食効果があるのだ。

「無々、エクステンド解除」

『了解しました。コントラクション』

竜馬の言葉で無々は元の双銃に戻った。

side out

side 魔神竜馬

これだけ訓練すれば大丈夫か？

「あれ？竜馬！！」

「ん？アリシアか」

俺が贅殿嫦娥を訓練室の床から引き抜くとアリシアが訓練室に入ってきた。

どうしたんだ？

「ねえねえ、模擬戦やってくれないかな？」

「模擬戦？」

「どうするかな…」

「まあ良いか。」

「良いぞ。無々、形状変化。手甲」

『了解しました』

無々は双銃から手甲に変化した。

「ありがと ラブリユス、セットアップ！」

『Yes Master』

そう言つてアリシアはバリアジャケットを装着した。

…フェイトとほとんど同じバリアジャケットなんだな。

「そんじゃあ行くぞ」

「いつでもどうぞ！」

まずは小手調べだな。

俺は一気にアリシアに近づき軽く拳を打ち込んだ。

「きゃっ！？…危ないなあ」

「模擬戦だろ？」

アリシアは斧の側面で俺の攻撃を防いだ。

これ位は防いで当然だな。

さてアリシアの攻撃はどんな技かな…

「行くよラブリユス！！バレームエッジ！！」

デバイスに魔力を乗せて刃を大きくしたのか…  
ふむ…威力は充分。

「だが、攻撃が単調だ。ふっ！！」  
「へ？きやあつ！？」

俺は斧の横に回り込み側面に掌底を打ち込んだ。  
アリシアは体勢を崩した。

「ほらな、ガードが甘くなる。閃天華！！」  
「きゃああああああああああつっ！！！！！！」

体勢を崩したアリシアの腹に俺は掌底を打ち込んだ。  
バリアジャケットはあるし気絶するぐらいだろ。

「ドリシユヌスエツジ！！」  
「！？」

アリシアが吹き飛んだ場所から魔力刃が飛んできた。  
意外だ気絶して無かったよ。

「まだ…終わって…無い…よ」  
「みたいだな、だが…」

…今は眠れ」

俺は瞬動術でアリシアの背後をとり手刀でアリシアを気絶させた。  
流石にこれ以上やったら模擬戦じゃなくなっちまうからな。

俺はアリシアを医務室に抱きかかえて行った。

何故かその光景をフェイト達に見つかり抱きかかえる羽目になった  
が…

訓練や模擬戦の重要性って結構高い。(後書き)

く霊使い達の雑談)

本日も感想と贈り物が来ております。

ルシファー様、銃王 海さん、White Seal様、ユタ様感想ありがとうございます。

そして、銃王 海さんより日向夏みかんを、

White Seal様より重弓ヘラギガス、漠浪弓【豊穰】、鹿角ノ剛弾弓、シユレムカツツエ、ウルクスレイ、王牙銃槍【火雷】、ソルダートアサルト、オルトリンデ、竹銃槍【タツオドシ】、マギアチャームIIベル、カラミティペイン、断牙刀【一太刀】、ゼファール、神剣シーラスティン、スーパー寶貝一式、のぞき猫、水の鑑、レストラシオン、フレイム・ゴースト、バーサーカー、祝福の雨、トル・ハート雷神の心臓、インフィニティ・シールド無限の土、グラビティ・ドライブを、なのはにフェイト・T・ハラオウン著『魔王と呼ばれる経緯』親友が語るエース・オブ・エースの過去』を

いただきました。

竜馬「つとそれよりも来たみたいですよ」  
未だに女体化+キリン  
装備

竜王「ガタガタガタ…」

竜馬「説明しましょう。現在、竜王に向かって来ているのはWhite Seal様が放った廃線『ぶらり廃線下車の旅』、少しばかり戯れようか?、逆行運河・創世光年を本来の100000倍の威

力・密度と別枠でトラウマスペルと名高い新難題『金閣寺の一枚天井』が来ています。ちなみに装備やボムは無しです。さらに!!!これは1日中続きます」

竜王「ひぎゃああああああggjyttrgdぜあえkjつふえ  
zdんきlkんjggdvhjft rszういっひhrつえzdf  
sdhhjhkbjftえqwccggひぐfyつえxせらcmhき  
ゆggjyつらqg...!!!...!!!...!!!...!!!...!!!...!!!...!!!」

フエイト「うわあ...」

竜馬「あれ？何でみんないるの？」

アリシア「竜王に呼ばれたんだけど...」

「こんにちは...」

竜馬「ん？タバサ、と言う事は来たんだ」

タバサ「うん...」

竜馬「銃王 海さんの所より、平賀才人・ルイズ・キュルケ・タバサ・ギーシュ・マルコリヌ・モンモランシー・コルベールが来ました」

才人「なんか女の子がいっぱいいるぞ？」

ルイズ「竜馬がいないようね？」

竜馬「ここにいますよ」

ルイズ「はっ!?!」

その後、状況説明に1時間ほどかかる。

「わふ〜 何だか広いとこに来たのです〜」

「危ないから走るなって」

竜馬「ん?今度は誰だろう?」

「わふ?」

竜馬「え〜と…White Seal様の所より、直枝理樹、棗恭介、井ノ原真人、宮沢謙吾、神北小毬、棗鈴、三枝葉留佳、能美クドリヤフカ、来ヶ谷唯湖、西園美魚、二木佳奈多、笹瀬川佐々美、朱鷺戸沙耶が来ました」

理樹「大丈夫なのかな?」

真人「気にする事は無い!!」

唯湖「可愛い子がいるわね」

竜馬「うわ…キャラが今までで一番多い」

なのは「竜馬君、何か飛んできたよ?」

竜馬「へ?…きゃあああああああああ!!!…!!!…!!!」

White Seal様の放った洋服崩壊ドレスブレイクが当たりキリン装備が



全て破ける

男キャラ達「ブウウウウウウツッ……………」　鼻血大噴出

何故かフェイト、アリシア、なのは、ジャバウォック、レミリア、パチュリーまで鼻血を出していたが…

竜馬「何で!? 見ないで……………!! ゼロ! インフィニティ!!」

涙目

二つの魔法陣が一つになる。

竜馬「アンノウン!!!! ブレイカアアアアアアアアアアアア!!!!」  
「……………」　男キャラ全員に向けて放つ

男キャラ+竜王「ぎゃあああああああああああああああああああ  
あああああああああああ!!!!!! ……………!!!!!!」

クド「わふ〜　綺麗な花火です〜」

竜馬「ひつく…ひつく…ひつく…」　泣きながらタオルを体に巻く

アルフ「そっぴいや腹減ったねえ。竜馬、肉でも食って元気だしな」  
肉をどこからか取り出す

竜馬「ひつく…ありがと…」　肉を受け取る

キュルケ「…ルイズ達よりおっきいのね」

ルイズ「……」 怒

「直しに来たよ……ってあれ？」

竜馬「あ…ニンフさん」 涙目

ニンフ「な、何事？」 男キャラ達が倒れている事に驚く

竜馬「私の裸を見たんです…」 涙目

ニンフ「あ…（やばい、涙目可愛いかも）」

竜馬「ところでどうしたんですか？」

ニンフ「それを直しに来たんだよ」 右腕の腕輪を指差す

竜馬「あ、ありがとうございます…！」

ニンフ「ちょっつと見せてね…」

住奈多「破廉恥ですね。あなたは露出狂ですか」

竜馬「好きでやってるわけじゃないのに…」 泣

ニンフ「あれ…どこにも以上は見つからないよ？ただ変な電波？  
みたいなのを受信してるけど…」

竜馬「電波？…もしかして」 竜王をみる

鼻血を出した女の子達「竜王&White Seal様GJ!!!」

「！」

ニンフ「とりあえず服装だけ復元しちゃうね」

竜馬「ありがとうございます……！」 喜びの余り抱きつく

ニンフ「（物凄く怖い視線が一気に集まったね……）」

竜馬「それじゃあ今回の締めを……」

佐々美「私がやりますわ……！」

竜馬「……無視して、ニンフさんお願いします」

佐々美「何ですって……！」

ニンフ「良いの？」

竜馬「はい、気にしないでください」

ニンフ「それじゃあ、闇を狩る少年続くよ。あ、私は？異世界を渡る？に出てるからそっちもよろしくね」

佐々美「本当に無視するなんて……！」

長門「……騒がしい？」 前回からずっと本を読んでいる

さよなら？ひだまり荘？…

side はずな

「竜馬君、それ何？」

「え？ああ、貰い物ですよ」

私の問いに竜馬君は答えました。

…普通、日本刀を貰う人はいないと思うんだけどな。

「ところで、その日本刀の鞘は？」

「無いんですよね…」

銃刀法違反で捕まっちゃうんじゃないかな？

私は竜馬君が持っている日本刀を見ました。

『魔力反応があります。場所は…魔神様の上です』

「え？…むぎゅ！？」

アイギスがそう言うのと同時に竜馬君の上に緑色の髪の毛の女の子が落ちてきました。

大丈夫かな？

side out

side 魔神竜馬

いたたたた…

何だいきなり…

「ってウインじゃないか。どうしたんだ？」

「あ、ごめんねお兄ちゃん。出る場所を間違えちゃった」

俺の上から降りながらウインは言った。  
ウインが来たって事はもしかして…

「お兄ちゃん、この世界の？闇？は全部無くなったよ。だから次の世界に送るね？」

「ああ、分かった」

そう言っただけ俺は立ち上がった。

「さして、次は何の世界かな？」

「ま、待って…」

俺が次の世界に向かおうとするとなすなが話しかけてきた。

「なんですか？」

「りよ、竜馬君はこの世界からいなくなっちゃうの？ゆのさん達の記憶が戻って無いし…それになのはちゃん達にも説明しなくちゃ…」

それもそうなんだがな…

俺はなすなの方を向いた。

「良いんですよ。元々、俺はこの世界の人間じゃないですし。それに記憶が戻らないのならその方が幸せな時もあります。なのは達は俺がいろんな世界に行くことも知ってますしね」

「そんな、でも…」

俺は笑顔で言い切った。

確かに俺の事を思い出してくれないのは寂しいが俺はイレギュラーだ。

むしろ覚えていない方が良いのかもしれない。

「そう言う事で。それでは」

「…うん。さようなら、私の強くて小さなお師匠様…」

そして俺はウインの創ったゲートを潜った。

…こんなことが起きないように他人と関わらないようにするべきかもな。

side out

side 第3者視点

「…行っちゃったんだよね」

静かになった部屋。

なずなの呟きに答える者は誰もいなかった。

「う…ひつく…ぐす…ひつく…」

なずなは泣いた。

もう学校から戻って来ても部屋に誰もいない寂しさに…

ご飯を作っても感想を言ってくれる弟の様な同居人がいなくなった事に…

「なずなさん！！今ここに魔力反応が！……！！？なずなさん！？」

空中に画面が現れリンディが映った。

リンディは泣いているなずなを見て驚いた。

「何があったんですか！？それに竜馬さんは！？」

「…竜馬君は…別の…世界に行くって…」

なずなはつつかえながらも答えた。  
その言葉を聞いてリンディは驚いた。

「まさかもう別の世界に行くなんてね…」

「もう…竜馬君には…会えないんですか…？」

不安そうな表情でなずなは尋ねた。

side out

sideリンディ・ハラオウン

「大丈夫よ。竜馬さんのデバイス…いいえ、相棒である無々さんには発信機が付いています。なので竜馬さんを見失う事はありませんよ」

「そうですか…」

私の答えを聞いてなずなさんは思案顔になりました。  
何を考えているのかしら？

「あの、私を…ツ…私を、時空管理局に入れてください!!」

「!?!?…良いんですか?時空管理局に入るという事はあなたはこの世界から出ていくという事なんですよ?それに命にかかわる仕事が入るかもしれません」

なずなさんの言葉に私は驚きました。

私の言葉を聞いてもなずなさんの決意の表情は変わる事はありませんでした。

「……………分かりました。なずなさん、あなたを魔導師としてアースラに迎え入れます」

「ありがとうございます！」

そこにいるのはおどおどとした雰囲気の全く感じられない強い少女でした。

彼女もまた竜馬さんに変えられた少女の1人の様ね…

side out

side 魔神竜馬

今度はいつたいどこに行くんだ？

ん？

何だか地面の感触が消えたぞ？

「は？…：…また落ちるのかよおおおおお！…！！…！！…！！…！！」

お！？

光が見える！！

出口か！！

「あああああああああ！！！！？！！？！！？」

出口に出たと思った瞬間、俺は誰かと頭を思い切りぶつけた。  
落下してきたせいで物凄く痛い！！

「何すんだてめえ！！」

「す、すまん…」

俺は頭を押さえながら謝った。

つて、ん！？

目の前にいる人間を見て俺は驚いた。



「…ローブ…赤毛…杖…吊り目…もしかして、ナギ・スプリング・フィールド？」

「ん？何で俺の名前を知ってるんだ？」

マジか…

と言うかナギって事は？魔法先生ネギま？の過去だな。

「…まあどうでも良いや。無々、近くに変な魔力は感じるか？」  
『いえ、特には感じられません』

そっか、とりあえずは宿探しだな。

何故かナギが驚いているな。

「どうかしたのか？」

「今、腕輪が喋らなかったか！？どうなってるんだよそれ！！」

ああ、無々に驚いてたのか。

と言うか今気付いたけど写真を撮るところだったのか。

「気にしなさんな。写真を撮るところだったんだろ？邪魔して悪かったな。無々、能力発動。形状は手甲」

『了解しました。能力発動』

無々は手甲に変化した。

さして、呪文を唱えてフェニックスになりますか。

「……なんだよ」

俺が呪文を唱えようとするとナギが俺の腕を掴んできた。

何で目を輝かせてるんだ！？

「お前強いだろ！！俺達の仲間になれ！！」

…あゝ、失敗した。

少なくともこいつ等の近くで無々の能力を使うんじゃないかった。

「めんどくさい。断る」

「良いじゃねえか！！…だったら俺と戦え！俺が勝ったらお前が俺達の仲間になる。お前が勝ったら俺達と一緒に写真に写る。これでどうだ？」

ナギはドヤ顔で言った。

は？

「お前が勝った場合は良いでしょう。だが何故、俺が勝ったら一緒に写真に写らなきゃならないんだ？」

「気にすんなよ！強い奴と戦えたって記念にするだけだから！！」

あまり関わりを持ちたくないんだがなあ…

仕方が無い。

「分かった。その条件で良い」

「よし！！アル！審判をやってくれ！！」

ナギは呆れ顔のアルビレオに言った。

「仕方がありませんね。分かりました」

確かこいつ等も苦勞してるんだよな？

？ネギま？の過去なんてそこまで詳しく覚えてないんだよな。

「それじゃあ始めるぞ!!」

「はいはい……」

俺は適当に返した。

悪いが初っ端から全力で行かせてもらっぞ!!!!  
果てしなくめんどくさいからな。

さよなら？ひだまり荘？…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます！！

銃王 海さんよりチキン南蛮99人前を、

いただきました。

ユタ様、ルシファー様、銃王 海さん、フオウル様感想ありがとうございます。  
ございます。

「かがみん！！あれが萌えというやつなんだよ！！」

「かがみん言うな！！」

竜王「お？銃王 海さんの所よりこなた、かがみ、つかさ、みゆき、みさお、あやの、ゆたか、みなみ、ひより、パトリシア、黒井が来ました」

ゆたか「おじゃまします」

竜馬「…装備が変わってるのは何で？」 何故かナルガX装備に変化している

装備が変わった瞬間に胸のサイズがAカップに変化。

竜王「あ、一応ここで言うっておこう。別に次の世界は？魔法先生ネギマ？ではありませんよ」

こなた「ネタばれってしちゃっていいの？」

かがみん「本人が言ってるんだし良いんじゃない？って名前がかがみんになってる！！」

黒井「なんや、モンハンの装備やん。ナルガ装備は回避率が高くて良いんやで〜」

「ブヒッ…」

つかさ「豚さん…？」

「豚じゃないブヒッ！！グランティブヒッ！！」

竜王「ああ、フォウル様の所から来てる・デス ランディだな」

デス「まったく、ハセヲといい何でおいらが豚に間違われなきゃいけないブヒか！！」

竜馬「ん？その腕輪は何？」

デス「これはフォウルが渡して来るように持たせたものブヒ」

そう言っつて竜馬に投げ渡す。

竜馬「わ、ありがと」

デス「その名前は？黄昏の腕輪？精神侵食を抑制する事が出来るブヒ。耳クソの様なお前でも30分は全力使用しても平気でいられるブヒ」

竜馬「……………」 黒いオーラ

竜王「…と言うか、お前本編であまり出番ないよな」 笑

みさお「おお！？何だか空気が怖いぞ？」

パトリシア「おー一触即発です」

デス「出番が無いとは失礼ブヒねッ！！真打ちは遅れて登場するものブヒよっ！！だから、そんな風に女体化したりして人気を取ろうとするなんて浅はかな事はする必要は無いブヒッ！！」

竜馬「無々、能力発動。形状は手甲…」 目のハイライトが消失  
無々『了解しました』

竜王「？黄昏の拳器・ラグナロク？発動…」 上に同じ

竜馬「閃天華！！」

竜王「死刺連撃！！」

竜コンビ「轟天裂覇！！！！！！」

2人のコンビネーション技を受けて吹き飛んで行くデス ランディ。

デス「ブヒイ〜〜〜〜！！！！！！！！！！」

竜馬「好きでこんな格好のわけじゃない！！」

竜王「誰が浅はかだ!!」

こなた「おゝ…名前の途中のと同じになったね」

竜馬「ふう、少しはスッキリしたかな」

竜王「だな。今回の締めは…つかさ言っただけよ」

つかさ「ふええ!?私!?え、えっと…や、闇を狩る少年続きますきやあつ!?!」

竜王「慌て過ぎてこけるなよ…」

こなた「それがつかさクオリティ」

つかさ「ふええ…」 泣

？闇の狩り手？VS？千の呪文の男？

side ナギ・スプリング・フィールド

何なんだこの子供は！！

俺よりも魔力が大きいんじゃない？

「あゝわくわくしてきた！！」

「はあ…とつとと終わるか…」

とつとと終わらせる？

とんでもない！！

こんな面白そうな戦いをすぐに終わしてたまるか！！

「行くぞ！！」

「くっ！？」

俺は拳に魔力を乗せて殴りかかった。

子供は腕を交差して防いだ。

「つてえなあ！！おい！！！！」

「うおっ！？」

子供は俺の攻撃を防いだ後に蹴り返してきた。

俺はそれをバックステップでかわした。

side out

side 魔神竜馬

俺はナギの唯我独尊っぷりに軽くイラついていた。

つたくめんどくせえ…



「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

俺は呪文を唱えてフェンリルの変身した。  
んあ？

ナギ達が驚いてるな。

「何だそれ!？」

「気にしないでくれ。俺に勝ったら教える。行くぞ!！」

そう言つて俺はナギに殴りかかった。

「ぐっ!?!があっ!?!?!」

「よっ!?!閃天華?!?!無々、ゼロ・ブレイカー、セツト」

『了解しました。ゼロ・ブレイカー発動準備』

ナギは素早くガードをするがさらにガードの上から掌底を打ち込んだ。

？閃天華？を受けてナギは後方へと吹き飛んだ。

俺の言葉を聞き無々はゼロ・ブレイカーの準備を始めた。

「……ナギつて魔法使いだよな？」

「がふっ…あ、ああ…」

俺の問いに呼吸を乱しながらもナギは答えた。  
そこまで威力は大きく無かつたはずなんだが…

「良いぜ。唱えてみるよ、お前の最大の呪文を」

「…その言葉、後悔するなよ？マンマンテロテロ、契約に従い、我

に従え、高殿の王…」

ナギは呪文の詠唱を始めた。  
手帳を見ながら…

「呪文ぐらい覚えるよ…つとこの姿だと俺が死ぬな。ゼロ・インフイニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

呪文を唱えて俺はフェンリルからフェニックスに変身した。  
さて、ナギの呪文の威力はどんなもんだ？

side out

side 第3者視点

「…彼は何者でしょうか」

竜馬とナギの戦いを見ながらアルビレオは呟いた。

「行くぜ、おらあ！！『千の雷』！！！！」

「防ぎきる！守護天翼！！！！」

呪文の詠唱が終わり魔法を放つナギ。

その魔法を避ける事もせず翼で身を守る竜馬。

そして竜馬を爆発が包み込んだ。

「おいおい、これじゃああの姿について聞けないんじゃないか？」

ラカンが呟いた。

「そうでしょうか？私としては彼はまだ何かを隠しているようにも

見えましたか……」

ラカンの言葉にアルビレオが答える。  
そして徐々に煙が晴れていく。

「……あたたた。でも結構平気だな。何でだ？」

煙が晴れるとほとんど無傷の竜馬が現れた。

「な！？何で無傷なんだ！？」

「さあ？俺にもさっぱり…もしかして」

そう言つて竜馬は背負っていたにえとのじょうが贄殿嫦娥を見た。

「確認は後で良いか」

その間もナギは呪文の詠唱を再び行っている。

「……百重千重と重なりて、走れよ稲妻『千の雷』！！！！！！」

「ゼロ！！！！ブレイカー！！！！！！！！」

魔法と魔砲がぶつかり合う。

拮抗し合う魔法と魔砲。

しかしそれも一瞬の事…

竜馬のゼロ・ブレイカーは『千の雷』を飲みこみナギに向かって飛んで行った。

そしてナギをゼロ・ブレイカーが撃ち貫き爆発を起こした。

？闇の狩り手？VS？千の呪文の男？（後書き）

（霊使い達の雑談）

本日も感想と贈り物が来ております。

ユタ様、ルシファー様、フオウル様、White Seal様、銃王 海さん感想ありがとうございます。

次にWhite Seal様より凶弓【小夜嵐】、凶剣【時雨】、凶針【水禍】、凶剣斧【白雨】、凶銃槍【瑞雨】、凶矛【凌雲】、凶琴【秋嵐】、凶鏡【妖雲】、凶扇【黒風白雨】、凶宝【翠嵐】、凶刀【催花雨】、凶剣【叢雲】を、銃王 海さんよりイーブイの卵を、

いただきました。

「ここはどこ？」

竜王「ん？ああ、ユタ様の所から来たんだね。ヴィヴィオとイクスヴェリアです」

ヴィ「あ、竜王さん」

イクス「初めまして」

竜馬「…ねえ、何でまたキリン装備なの？」 女体化+キリン装備

フェイト「可愛いと思うよ…！」

竜馬「またみんな来てるし」

「はづゝ お持ち帰り〜!!」

竜馬「きゃああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

竜王「お？今度は銃王 海さんの所からひぐらしの部活メンバーだな」

圭「何だか男は俺と竜王だけみたいだな？」

レナ「かあいよいよ」

竜馬「たすけて〜!!」

竜王「あ、忘れるところだった。竜馬、ちょっと行ってこい」指  
を鳴らす

竜馬「へ？きゃああああ!!!!!!!!」 足元に現れた穴に落ちる

〜部屋〜

竜馬「どこよこは…」

竜王『それじゃあ頑張れ〜』

竜馬「へ？」

上空から大量の弾幕が降り注ぐ。

〜雑談所〜

なのは「何がどうなってるの？」

レミリア「竜馬の服が破れてってるわよ!!!」

竜王「あれはWhite Seal様の送って来たスペカ『深弾幕  
結界 - 夢幻抱影 -』の5時間耐久コースだよ。効果は下の通り」

・難易度はルナシューターの中でもトップクラスの人が一分も経たず  
に匙を投げる程度

・デバイスその他の道具使用禁止

・気や魔力等による身体強化禁止（『動体視力の強化』等も含む）

・魔法や特殊能力等の使用禁止

・弾幕は相殺不能（竜馬の攻撃が一方的に負ける）

・装備は女体化＋キリン一式、ナルガー式等の露出と人気の高い女性  
性装備（出来ればキリンで）

・観客はラバーズが揃ってれば後はご自由に

・ボムなし

・ライフは

・弾幕自体の威力は五歳児のパンチ一発分程度

・ただし被弾すると服が少しずつ破れていく

・ぶつちやけ手で大事なところを隠す余裕なんてない

・マップになると被弾一回ごとにラバーズの誰か（ランダム）に竜  
馬と一夜を共に過ごす権利を進呈（竜馬に拒否権なし）

・上記の権利は貰った回数が少ない人優先

ラバーズ「White Seal様!!! 貴方は神ですか!!!!!!」  
「」

圭「うお！もうほとんど服が残って無いぞ!!!」

さとこ「見てはいけません!!」 指を鳴らす

圭「んぎゃ!!」 タライが落ちて来る

竜王「とりあえず今回はここまでだな。締めを…ヴィヴィオとイクスヴェリア言っで良いよ」

イクス「分かりました。闇を狩る少年…」

ヴィヴィオ「続きます」

竜王「あ、竜馬がどうなったかは次の後書きで書きますね」



間違えて落とすってあまりないと思う。

side 魔神竜馬

ゼロ・ブレイカーは当たったけど…

「絶対この程度じゃ倒れてねえよなあ…」

「……雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐『雷の暴風』!!!」

爆風を貫いて魔法が飛んできた。

「うお!?!がああああああああつっ!!!!!!!!!!」

俺は咄嗟に腕を交差して体を守った。

と言っても余りの威力に右腕が吹き飛んだが…

「へ…へへ。油断してるからだぜ」

「くっ!」

煙の中からとところどころから血を流しているナギが現れた。

俺は右腕を押さえながら地面に降りた。

「油断大敵…か。でもな、? 治癒の焰?」

「なっ!?!」

俺が焰に包まれた事に驚いたのかナギは大きな声を出した。

良く見れば離れたところで赤き翼のメンバー達も驚いていた。

「これでよしと…」

「なにい!?!腕が生えた!?!」

あゝこれも説明がめんどくさいな。  
ん？あれは…

「ナギ、一旦中断するぞ」

「えゝ？何でだよ！！」

俺の言葉にナギは不満そうに答えた。  
気付いてないのかよ…

「あれを見るよ。魔族たちが大量にここに向かって来てるぞ」

「魔族？…あゝあいつ等か。前に帝国を襲う計画を立ててた奴らだな」

と言う事はナギ達が狙いだな。  
どうすつかなあ？

side out

side 第3者視点

「このあたりだよな？赤き翼を見かけたっていうのは…」

「ああ、俺達の計画を邪魔してくれたんだ。借りはきっちり返さねえとな」

魔族達のリーダー格らしい2人？が話している。

「おゝおゝ。よくもまあ懲りずに来るねえ」

「…俺は関係ないよな？」

魔族達を見てナギは言った。  
その横で竜馬は呟いた。

「これは俺達も戦っているのか？」  
「良いんじゃないですか」

ラカンの問いに答える永春。  
既にやる気は十分のようだ。

「そんじゃあ行くぜ！！マンマンテロテロ来たれ、虚空の雷、薙ぎ  
払え『雷の斧』！！！！」

ナギは呪文を唱えて魔族達に攻撃した。  
そして赤き翼 + VS 魔族の戦いの火蓋が切って落とされた。

side out  
side 魔神竜馬

何でこうなったんだ…  
迫りくる魔族達の攻撃をかわしながら俺は思った。

「死ねええええええええ！！！！！！！！！！」

そう言つて腕を剣にして斬りかかってくる魔族の攻撃をしゃがんで  
避けた。

ナギ達は離れて広範囲殲滅呪文を使つたり巨大な剣を出したりして  
一掃している。

「死ね！！クソチビがあ！！！！！！！！！！」  
「ああん？…爆ぜよ！！白式 白蓮！！！！」

誰がクソチビだった？

俺は殴りかかって来た魔族の懐に潜り込み白蓮を打ち込んだ。

「ぎゃああああああ！！！！！！！！！！」

「……たくよお。ちょうど良いやお前らでストレス解消させてもら  
うよ」

白蓮を受けた魔族は叫び声を上げて内側から破裂した。

俺は破裂した魔族の血を浴びながら他の魔族達に笑顔で言った。

「さあ、皆で遊ぼうか……」

その後、俺は白蓮を打ち込み魔族を破裂させたり、ゼロ・ブレイカ  
ーで何匹も同時に消したり、フェンリルになり喉を斬り裂いたり、  
影槍で串刺しにしたり、影黄泉で影に引きずりこんだりしてストレ  
ス解消をした。

side out

side ナギ・スプリング・フィールド

「なんだ？魔族達が怯えながら走ってくるぞ？」

「あつちは確か……あの子供がいたはずだが……」

そう言えばさつきから叫び声が聞こえてたな。

行ってみるか。

そう思つて俺は師匠を呼んで子供の様子を見に行った。

「なんだよ……こりゃあ……」

「……まるで魔族よりも魔族らしいのう」

様子を見に行つた俺達が見た物はまるで地獄絵図だった。

逃げる魔族を追い次々と殺していく子供を見て師匠が呟いた。



「この世界に？闇？は無いつて事か？」

「そ…そうなんだ…間違えて道を…その…消しちゃってな？…だから…ごめん…」

ああ、だから落ちたのか。

俺はヒータの頭に手を置いた。

「気にするなよ。俺じゃ世界の移動はできないんだからさ、それに…結構ストレス解消も出来たし」

「これがストレス解消かよ…」

周囲を見てヒータは呆れたような表情に変わった。

ん？

ナギがこっちに向かってきたな。

「どうかしたのか？」

「どうかしたのかじゃないだろ！！何だよ魔族達に使ってた技は！！」

ナギはじゃっかん興奮気味に言った。

説明めんどくせえ…

「そう言えば写真を撮るんじゃないかったのか？」

「おお！そう言えば！！」

よし！

話を逸らせた！！

「じゃあな。俺は行くところがあるから」

「おや？あなたも写るんじゃないんですか？」

余計な事を言うなよアルビレオおおおおお！……！！  
ナギが目を輝かせてるし！！

「そうだったな！！ほら並んだ並んだ！！」

「くそ……ヒータ、悪いが少し待っててくれ」

「お、おう……」

その後、写真を撮り終えて俺はヒータの案内で本来の世界に向かった。

間違えて落とすってあまりないと思う。(後書き)

〈霊使い達の雑談〉

感想と贈り物ありがとうございます!!

ユタ様、バラランシヤ様、銃王 海さん、ルシファー様感想ありがとうございます。

そしてユタ様より竜馬の写真集(第一巻 戦闘編 第二巻 日常編 第三巻 風呂、トイレ、寝ている写真 第四巻 女装編)をヒロイン全員分を、

いただきました!!

竜王「つてあれ!?!何だか熱い…ぎゃああああ!!…!!…!!燃えるウウウウ!!」

魅音「ああ、柎の設置した人権保護装置だね。竜馬の人権を無視した物が届くと燃やすらしいよ」

フェイト「ああ…ん?あれは何?」

竜王「えつと…俺となのは達にアルテマジック・テラフレアを9999発…だそうだ」

なのは達「ええええええええええええええええええええええ!?!」

魅音「それじゃ、おじさん達は帰るよ。じゃあね」





竜馬「!?!」

「向こうの人をおどかさな!!」 スリッパで頭をたたく

竜王「ああ、銃王 海さんの所から来た唯・律・漣・紬・梓・憂・和・純・さわ子だな」

紬「何だか焦げくさいんですが…何かあつたんですか？」

竜王「気にしなくていいよ。っとそろそろかな」

「さあ!!勝負をするぞ!!」

竜王「?黄昏の縛器・ラグナロク?!」

「な!?!」

竜王「とりあえずはこれで能力と行動を封じておこつ。?神に何度も殺された青年?の主人公の春人君です」

竜馬「あれで良いの?」 春人を指差す

竜王「良いの良いのちゃんと許可は取ってるし、それに全力で戦ったらこの世界が崩壊するし。全力バトルはバトルロワイアルで充分だよ」

春人「これを解け!!」

竜王「…ゼウスとかに許可をもらったから怒りの矛先はあっちに向



竜王「竜馬だけ回復だな」

唯「憂くお腹が空いたよ〜う…」

憂「お姉ちゃん、すみませんキッチンってありますか？」

竜王「ああ、それならこっち　自由に食材とか使っていていいから」

憂「ありがとうございます」

竜王「あ、ちなみに前回竜馬はまっパになった後に3発受けたんでレミリア、パチュリー、アリシアが竜馬と一夜を共に過ごす権利を手に入れましたよ。それではこの辺で…あずにゃん言ってみよう」

梓「は、はい！？や、闇を狩る少年続きますにゃん！」　猫耳付き

竜王「梓と言えば猫耳だな」

泣き声に呼ばれて…

side 魔神竜馬

ヒータの案内で俺は本来向かうはずの世界に向かっている。  
ん？

「泣き声…？」

「どうかしたのか？」

俺が立ち止まったのでヒータが立ち止まって聞いてきた。  
聞こえないのか？

「いやさ、なんだか泣き声みたいなのが聞こえないか？」

「泣き声？……いや、聞こえないぞ？」

そんなはずは無いんだが…

こっ…すすり泣く声？

「ヒータ、行ってみても良いか？」

「…どうせ止めても行く気だろ？分かってるよ」

ヒータは呆れたような表情で言った。

そして俺達は道を少しだけ変えた。

side out

side 月村すずか

私は今、海鳴市の外れにある廃ビルの一室に閉じ込められています。  
学校から帰る時に黒い覆面をした人達に攫われてしまったからです。

「アリサちゃんは無事に逃げられたよね…?」

一緒に下校していた友達を私は思った。  
私より運動の出来る彼女なら逃げ切れたはずだ。

「1人…か…」

何も無く殺風景な部屋…

そして自由も無くいっ死ぬかも分からない…

「…う…う…アリサ…ちゃん…ひつく…なのは…ちゃん…」

何でこんな事になったのか…

どうして私はこんなにも弱いのか…

そんな自分に情けなくて私は涙を流しました。

「うるせえぞ!!ピーピー泣いてつとぶっ殺すぞ!!!!」

「ひっつ…ひつく…ひつく…」

私が泣いていると部屋のドアの向こうから怒鳴り声が飛んできました。  
た。

私を誘拐したうちの1人が見張りでいるようです。

「誰か…助けて…」

小さく誰にも聞こえないように私は言いました。

誰も答えてくれない事は分かっているはずなのに…

「…助けてやるよ。こんな薄暗い所は嫌だろ」

「!?!」

誰が!?!

返事も何も無いと思っていた私の言葉に答える人がいた事に私は驚いた。

「あ…あなたは…?」

「なあに…ただの悪鬼羅刹だ…」

そう言っただけ現れたのは私より少しだけ身長の高い男の子でした。ただし…顔には白い狼の様なお面を着けていました…

side out

side 魔神竜馬

まさか泣き声の主がずかだなんてな…  
ゲート・オブ・パピロソ  
王の財宝にお面があつて良かった。

「それじゃあ、少しの間ここで待っていてくれないか？道を作ってくるからさ」

「は、はい」

そう言っただけ俺は部屋のドアを開けた。

すると見張りの男が驚きながらも振り向いた。

「なにもんだてめえ!!!」

ドアを開けた俺に対して驚きながら聞いてきた。

お前等の仲間じゃ無い時点で分かっている事だろうに…

「…お前等の敵だよ」

「な!?!がふうっ!?!?」

俺は言葉を発すると同時に男の鳩尾を殴りつけた。

男は無様な声を上げて気絶した。

「今回は流石に殺さずに警察に突き出すかな…」

「なんだ今の声は!!!」



「見張りの奴の声だったぞ!!」

俺が呟くと廊下の角から2人の男が銃を持って現れた。  
さくつと終わるか。

「ふっ!!」

「ぐはあっ!？」

俺は瞬動術を使い片方の男に接近し腹を蹴りつけた。  
男は吹っ飛び壁に叩きつけられた。

「なに!？」

「…それは危険だから壊させてもらっぞ」

そう言っつて男の持つている銃を叩き落とし踏みつぶした。  
ちよつと良いこいつから情報を聞こう。

「おい、お前等は何人だ?そして、お前等のリーダーはどこだ?」

「なめんなよこのガキ!!」

どっちが舐めてるんだか…

俺は男の右足を思い切り蹴り骨を折った。

「ぐあああああああ!!?」

「早く答えるよ。今ならまだ生きてられるからさ…」

俺は倒れて叫ぶ男を見ながら冷やかに言った。

まあ、今回殺す気は無いけど。

だが男には充分に恐怖を与えられたらしくすぐに人数とリーダーの  
場所を教えてくれた。



泣き声に呼ばれて…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシファー様、White Seal様、銃王 海さん、ユタ様感想ありがとうございます。

そしてWhite Seal様より黒叡の指輪、来獣の指輪、アイルクルーノの鎌、ラツイエルの糸、エレミーオの櫛、クロウツイル再生の剣、崩壊の鐘、崩壊の鐘を打ち鳴らすもの、ミドガルズオルム、今夜、ブルー・クリスタル・スカイ、サンダラーズ・ホワイト、黒の剣、魔王の見える手、エーテル結晶、サウザンドアームズ千変万化、ヘブンスゲート、66、パーフェクトローズ、ロメオジュリエッタ、ラバーズ全員に『フラグ報知器』（竜馬が恋愛フラグを立てると知らせてくれる）、前回の竜馬が弾幕で脱げていく様子を映した写真、竜馬に『のろいのくびかざり』を、ユタ様よりなのはたちに前回の指輪を直接転送を、

いただきました！！

「あらん？ここはどこかしら？」

筋肉ムキムキで女言葉の男が現れた！！

「貂蝉トウセンよ」

竜王「ああ、White Seal様の所から来てたね…」

「すみません、失礼します」 雑談所の扉を開けて入ってくる

竜王「ん？今度は銃王 海さんの所から音無結弦・仲村ゆり・日向秀樹・直井文人・立華奏・野田・鳴海歩・ミズシロ火澄が来たんだな」

奏「お邪魔します」

ミニ奏「私がいる…？」 竜王の頭の上に着地

竜王「お、久々に起きてたのか」

日向「助けてくれー！！」

貂蝉「良い男ねえ」 日向を掴んでいる

竜王「つと忘れるとこだった。White Seal様のろいのくびかざり」は効果が18禁過ぎるので竜馬達にはまだ使えませんでした。ですので物語が進行して竜馬達が使用できる年齢になったら使用しますね」

ゆり「ねえ、何か降って来たわよ？」

竜王「ん？おお、柎の送って来たぷよぷよが来たんだな。よし…」コントローラを取り出す

音無「まさかそれで操作するのか？」

竜王「あつたり」 ぷよを並べていく

凄まじい量のぷよが積み上がっていく。

竜王「もう良いかな？ファイヤー！アイスストーム！！ダイアキュート！！ブレインダムド！！！！ジユゲム！！！！ばよえくん！！！！！！」

ゆり「連鎖してるわね……」

音無「……あれ？ぷよを送ったのって柸だったよな？じゃあお邪魔ぷよ達は柸に落ちてくのか？」

竜王「あ……とりあえずお邪魔ぷよが柸に落ちない事を祈るか……  
手を合わせる

ゆり「まあ柸なら大丈夫でしょ」

竜王「だと良いけど……じゃあ今回の締めを……ダブル奏で」

ダブル奏「「分かったわ……」」

奏「闇を狩る少年……」

ミニ奏「続くわ……」

日向「誰も助けられないのかよー！！！！！！！！！！」  
貂蟬に捕ま  
っている

竜王「死して屍拾うものなし」

友達が誘拐されて平静でいるのって結構疲れるんだよね。

side 魔神竜馬

俺は階段に向かっている。

足を折った男から誘拐犯の人数とリーダーの居る場所を聞いたからだ。

もちろん情報を聞き出した後に男は気絶させたが。

「残りは10人か…」

情報によればこの階の階段に見張りが残り3人。  
この下の階にリーダーと見張りで合計7人。

「…ッ!!」

あそこが階段か…

俺は角から階段を覗いた。

「あれか…」

階段の前には銃を肩に掛けて話をしている男が3人いた。  
今なら油断してるから制圧は楽勝か。

「推して参る!!」

「な!?!があ!?!」

俺は瞬動術で一気に男の1人に近づき腹を膝で蹴り抜いた。  
男は悶絶して崩れ落ちた。

「なんだ!？」  
「なにもんだ!？」

突然現れた俺に驚き男達は一瞬固まった。  
遅い!!

「?閃天裂華?!?!」  
「ぐああああ!?!」

俺は男達が硬直した隙を衝いて左右の男に掌底を打ち込んだ。  
男達は後ろに吹き飛び動けなくなった。

「さて、次だな…」

そう呟いて俺は下の階に向かった。

side out  
side 月村すずか

…さつきの子。  
何だか竜馬君に声が似てたような…

「気の所為だよね？」

私は不意に浮かんだ答えを頭を振って否定した。  
何で私はさつきの子を竜馬君だと思ったんだろう…

「竜馬君はもうこの街にはいないはずなのに…」

そう、彼は別の街に行ったってなのはちゃんが言ってたはず。  
こんな所に、それも私なんかのためにいるはずなんて無い。

「絶対にあり得ないよね…」

そして私はさっきの男の子が戻ってくるのを待ちました。

side out

side 魔神竜馬

これではリーダーだけか…

俺は気絶した男達を山のように積み上げた。

「つーか、全員銃持つてるんだな。どんだけ銃が簡単に手に入るんだよ…」

もちろん銃は全部破壊したが…

さて、リーダーはどこだ？

「こんなガキに俺達が全滅させられるとはな…」

「あんたがリーダーか…？」

俺はドアを開けて出てきた男に言った。

と言っただけ…

普通の人間よりでかいぞ？

「俺が他の奴らと同じだと思っちなよ…」

そう言っただけ男は構えた。

こいつだけは銃を持っていない…

つまりは銃を必要としなかったってことだよな？

「みたいだな…無々、能力発動。手甲」



『了解しました。能力発動』

俺の言葉に反応して無々は手甲に変化した。  
一気に決めるぞ!!!

友達が誘拐されて平静でいるのって結構疲れるんだよね。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

本日も感想と贈り物ありがとうございます。

蒼影様より竜馬のコスプレ写真(巫女服、ネコミミ装備、旧スク水、ブルマ+体操服、バニーガール、ブラックマジシャンガール、C、C、の拘束服、チャイナ服、シスター服、メイド服、スパロボOGのゼオラ)、蓮のコスプレ写真を、  
フレイス様よりデツキケースを、  
ユタ様より前回燃やされた写真集をなのはたちに直接転送を、

いただきました!!

竜馬「…蓮のコスプレ写真でも見てあの事は忘れよう」

竜王「デツキケースは良いじゃん　つとそう言えば爆弾が来てるんだよね…」

上空から大量の爆弾が落ちて来る。

竜馬「へ?ぎゃあああああ!!!」　爆発し麻痺状態

竜王「よっ!はっ!ほっ!」　ゲツダンの要領で避けていく

「やつほ〜!!」

竜王「ん?ああ、ユタ様の所の?異世界を渡る?から雷夏とファイアが来ました」　未だに爆弾を避けている

ファイア「何をやっているのだ？」

竜王「ん〜？爆弾を避けてるんだよ〜」

雷夏「面白いの？」

竜王「面白くなってきてるかな…っと危な〜！」　ギリギリで避ける

ファイア「ところでこの者はどうしたのだ？」　竜馬を指差す

竜王「爆弾に当たって麻痺してるんだよ」

雷夏「竜馬なら避けられたんじゃないの？」

竜王「心の傷があつたからねえ　っと終わりか、それじゃあ今回の締めをファイア。頼んだ」

ファイア「我に命令出来るのは優だけだ！〜！」

竜王「別に命令じゃ無くてお願いなんだが…！」

雷夏「じゃあ僕がやるよ！〜！」

竜王「そう？じゃあ頼ん…！」

ファイア「闇を狩る少年続くぞ！〜！」

雷夏「あ〜！！僕が言おうと思ったのに！〜！」

ファイア「知らぬ!！」

竜王「…優君も苦勞してそうだなあ」

俺は正義の味方じゃない…

side 魔神竜馬

ありきたりだけど一応は聞いておこうかな…  
構えながら俺は思った。

「…何故、あの子を誘拐した」

「何故だと？決まっている！金だ！あいつは月村の娘！！身代金を  
要求すれば多額の金が入るからな！！」

やっぱりか…

男の目には欲望しか映っていなかった。

「だから…お前みたいなガキの所為で失敗するわけにはいかない  
だよ！！！！」

「ッ！！」

そう叫んで男が殴りかかって来た。

俺は腕を交差して攻撃を防いだ。

速いっ！？

「まさかな…っせい！！」

「甘い！！」

俺は不意に浮かんだ考えを否定し蹴りを放った。

しかし男は俺の蹴りをバックステップで回避した。

「ふっ…その程度のガキに俺が倒されるとも思ったのか？この…  
力を手に入れた俺に！！！！！！」



そう言って俺は男に一気に近づいて行った。

…お前は粉々に殺す」





「さあ、こんな所は早く出て帰ろう」

「あ、はい…」

すずかは啞然とした表情で言った。

本当にここから出られる事に驚いているようだ。

「…あなたの名前は？」

「俺か？そうだな…白狼とでも呼んでくれ」

すずかの問いに竜馬は偽名を答えた。

そして竜馬はすずかを家に送り届けた。

side out

side 魔神竜馬

さうて、どこに住むかな。

なのはの家にまた行くわけにもいかないし…

「あの…白狼さん」

「ん？」

すずかが話しかけてきた。

何だ？

「あなたの家ってどこですか？後でお礼をしたいんですけど…」

「家？無いよ。それにお礼なんて気にすんな、俺は仲間を守るだけだから」

…って、あ…！

俺はうつかり言ってしまった事に焦った。

「仲間？…もしかして、竜馬君？」

「い、いや！？お、俺は魔神 竜馬なんかじゃないぞ！？」

ぎゃああああ！！！！

またもやイージーミス！！！！

「竜馬君だね。家が無いんでしょう？家に住みなよ、部屋も余ってるし」

「……はい」

もう逃げられねえや…

すずかは完全に俺の正体が分かっているし…

俺は狼のお面を取り外した。

「お世話になります」

「これからよろしくね」

俺はすずかに頭を下げて言った。

関わりを持たないようにしようと思った矢先にこれか…

俺は正義の味方じゃない…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

銃王 海さんよりダンジョンスター、FF7の世界のディスクを  
いただきました。

ユタ様、ルシファー様、銃王 海さん、ウイング様感想ありがとうございます。

「竜馬！！俺と戦え！！！」

竜馬「え、！？」

「いきなりそんな事を言う奴がいるか！！！」

竜王「あ、ウイング様の所の？遊戯王5D's とある少年の復讐  
劇？より銀河ちゃんとタクミ君です」

竜馬「いきなり戦えって…」

タクミ「お前の強さは俺達の復讐の脅威になりそうだからな！！！」

竜王「でもデッキの強さだと竜馬…って言うか俺のデッキってそこ  
まで強く無いと思ってるんだけどなあ。オリカ込みの三軍以外」

銀河「あのオリカ達は以上だろ…」

竜馬・タクミ「デュエル!!」

竜王「あ、デュエルしてる」

銀河「早っ!!」

竜王「そうだ、竜馬が打った？無式 終蓮？の説明しとこ」

銀河「男が完全に霧散してたやつだな？」

竜王「そうそうそれぞれ？無式 終蓮？は？白式ひやくしき 白蓮はくれん？を右手に、  
？黒式くろしき 黒蓮くくれん？を左手に乗せて同時に打ち込む技だ。相手が霧散したのは？白式 白蓮？によって内部が粉々に破壊されて飛び散った肉片などが？黒式 黒蓮？によってさらに粉々に粉碎される技です」

銀河「グロツ!!」

タクミ「？エンシエント・ゴッド・フレムベル？でダイレクトアタック!!」

竜馬「うわあああ!!」

竜王「あ、竜馬が負けた」

銀河「ちなみに竜馬が使っていたデッキは？」

竜王「えつと…？竜殺し？みたいだな」

タクミ「結構楽しかったな!!」

竜馬「ああ、またやろうぜ!!」

握手をする2人。

銀河「友情が芽生えてる?」

竜王「まあ、竜馬は基本的に誰とでも仲良くなるからな。そんなじゃあ締めを銀河君頼んだ」

銀河「おう、闇を狩る少年続くぞ!!俺達の?遊戯王5D'sとある少年の復讐劇?もよろしくな!!っつと忘れるとこだった竜馬に女体化解除できる腕輪」 竜馬に腕輪を投げ渡す

竜馬「あ、ありがとう 助かるよ」

**PV30万突破記念！！ 前半（前書き）**

先に言います。

結構長いです。

## PV30万突破記念！！ 前半

side 竜王

「さく始まりました。PV30万突破記念！！バトルロワイアルです！！司会は？闇を狩る少年？の作者、竜王と……」

「？魔法少女リリカルなのはStrikersの未来を変えるストーリードゥ？の主人公、ユウキ・ルナミスと……」

「？とある世界の少年少女？から中岡ミズキの……」

俺達はタイミングを合わせた。

「……3人でお送りいたします！！！！」

現在、俺達は3人でヤマツカミの上で司会中。

観客達はリオレイアやリオレウス、ラオシャンロン等の上に乗って観戦を行います。

竜王「それでは参加者の説明に行きたいと思えます！！」

上空に巨大な画面が出現する。

竜王「まずは……！私の？闇を狩る少年？よりいい……魔神竜馬、ジャバウォック・サタナキアアアアア……！！」

上空の画面に竜馬とジャバウォックが映し出される。

竜馬だけキリン装備の時の写真だが。

竜王「次に……！！バラランシャ様の所の？神に何度も殺された青年？よりいい……柊春人、リオラ・エスペラアアア……！！」





画面が変わり銀河君とタクミが映る。  
どうやらデッキの調整をしているようだ。

ミズキ「これで出場者の説明が終わりました!!」

コウキ「さあ、竜王さん。誰が優勝すると思いますか？」

竜王「ん〜…私的には竜馬に勝ってほしいんですけど…神と神を殺せる人間がいる時点で無理なんですよね〜」

実際、竜馬の能力って殆ど通用しないし…

ん？

あれは…グングニール！？

竜王「ぎゃあああああああ!!!」

ールが直撃した

「ええええええええええ!!」

グングニールが直撃した俺を見て驚く2人。

参加者の中でこれが出るのは…

竜王「優君、春人君、ジャバウオックの誰かか…」

コウキ「復活早っ!!」

まあ、良いか。

そんじゃあ開会式でもやりますか。

俺はマイクを手を取った。

竜王「観客の皆様!!!参加者の皆様!!!只今より30万PV突破記念!!!バトルロワイアルを開催します!!!!」

「ワアアアアアアアアアア!!!!!!!」

「!!!!」



圭「不意打ちは失敗か」

竜馬「あ、圭！！…最初の相手は圭か」

竜馬VS圭

〈湖の畔〉

「結構きれいな水だな」

『そうですね』

湖を覗きこんで優は呟いた。

ランダム転送が行われる直前にユニゾンをしていた為リラもいる。  
そこに巨大な火球が飛来する。

優「危ないな」

そう言って優はグラムで火球を斬り捨てた。  
火球が飛来した方向を見るとリオラが立っていた。

リオラ「最初の相手はあなたですか」

優「みたいだな」

優・リラVSリオラ

〈草原〉

「答えよ！ドモンよ！流派！東方不敗は！」

東方不敗がドモンに問いかける。

ドモン「王者の風よ！」

それにドモンが気合いを入れて答える。

東方不敗「全新!!」

ドモン「系裂!!」

2人は続けて叫ぶ。

「天破侠乱!!見よ!東方は赤く燃えているウ!!」

2人が同時に叫んだ瞬間、2人の背景が10秒ほど夕日に変化した。ランダム転送をしたはずなのに2人が一緒にいる理由は2人が草原に向かって走って来たからである。

「うわ、暑苦しい」

それを見ていた春人が呟いた。

春人自身はランダム転送先が草原だったのだが…

東方不敗「よしっ!いくぞドモン!」

ドモン「はいっ師匠!出るっ!!ガンダムッ!!」

ドモンと東方不敗の身体が黄金色に輝きだした。

光が消えると、ドモンの身体は白を基調としたガンダム、ゴッドガンダムに、東方不敗は黒を基調としたガンダム、マスターガンダムになっていた。

春人「まさか2対1か…?」

「俺が手伝うぜ!!」

そう言って現れたのはタクミだった。

ドモン「ガンダムファイトオオオ…レディ…ゴオオオオオオ!!」

ドモン・東方不敗VS春人・タクミ

（森・2）

「なんだこれ？」

銀河はドキド ノコを手に入れた。

「お主が最初の相手か…」

ジャバウオックが現れた。

「何それ…」

銀河の持っているキノコを指差しながら柊が現れた。

銀河「さあ？いる？」

ジャバ「いらぬ!!」

柊「いらぬ!!」

銀河はキノコを差し出した。

それに対してジャバウオックと柊は拒否を示した。

銀河「まあ、良いや。そんじゃ戦いますか」

ジャバ「うむ」

柊「オーケー」

銀河VSジャバウオックVS柊

side out

side 竜王

竜王「おゝ全員、戦闘開始するみたいだな」

ユウキ「もう完全回復ですか…」 呆れながら竜王を見る

画面を見ながら俺は言った。

何箇所かパワーバランスが偏っている気がするけど良いか。

ミズキ「あれ？何か飛んできてるぞ？」

ユウキ「えっと…あの魔力の色は…なのはさんですね」

なのは「あ、竜王さん良いですか？」

あれ？

少女じゃないって事は？魔法少女リリカルなのはStrikers  
〜未来を変えるスターロード〜？のなのはってことか？

竜王「どうしたんだ？」

なのは（Sts）「実はキリンちゃんが可愛かったから貰えないか  
と思って…」

キリンか。

ユウキ「古龍じゃダメなんじゃ無いですか？」

竜王「いや、結構いるから一匹くらいなら大丈夫だ」

なのは（Sts）「やったあ」

両手を上げて喜ぶなのは（Sts）

そしてなのは（Sts）は元の方に飛んで行った。

竜王「さて…バトルはどうなっているかな？」  
そう言つて俺は画面を見た。

side out

side 第3者視点

〈森・1〉

圭「はあっ!!」

竜馬「くっ!!?」

圭の攻撃を無々で受け止める竜馬。

竜馬「ちいっ!!!ゼロ・インフィニティ!!!契約に従い、我に宿れ、  
魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。

『魔狼転身』」

呪文を唱えて竜馬はフェンリルの姿になった。

圭「げっ…」

竜馬「ふっ!!!!」

スピードが上昇するフェンリルの姿になった事を嫌そうに見る圭。  
そんなことも気にせず、竜馬は一気に圭に近づいた。

圭「くっそ!!!一か八かだ!!」

圭は長剣を地面に突き立てた。

すると長剣が刺さった所から地割れが起る。

竜馬「うおっ!?!」

圭「今だ!!!」





リオラ「くっ！！（視力がもうヤバイ！！）」  
優「俺相手によくもった方が…」

そしてリオラはギャラクシー・ブレイカーに飲み込まれた。  
その後、気絶しているリオラの視力を優は回復させていた。

優・リラVSリオラ 勝者 優・リラ

（草原）

東方不敗「ダークネスツ！！フィンガアアアアアア！！！！！！  
！！！！  
タクミ「なんの！！？攻撃の無力化？！！」

東方不敗の乗るマスターガンダム（以下MG）の攻撃は時空の渦に  
飲み込まれ消えた。

ドモン「ゴッドスラッシュ！！タイフウウウウウン！！！！！！  
！！」  
春人「くっ！！ケミストリー宝具合成発動！ロンギヌス神殺しの魔槍＋天之尾羽張！！」

ドモンの乗るゴッドガンダム（以下GG）がゴッドスラッシュを構  
えてコマのように回転して突撃してくる。  
春人の持つ槍と刀が混ざり合って行く。  
そして一本の槍が現れた。

春人「コンフュート合成完了、ガイ・オンディーナ断罪の蒼薔薇！！」

現れた槍で春人はドモンの攻撃を防いだ。

東方不敗「やりおる!!やるぞドモン!!」  
ドモン「はい!!」

東方不敗とドモンが一か所に集まる。

タクミ「何をやる気だ？」

春人「分かん」

タクミが春人に尋ねる。

「「いくぞ!!流派東方不敗が最終奥義!!石破<sup>せきは</sup>!!てんきよおお  
おおおけえええええーん!!!!!!」

MGとGGの片手から自然の力が拳の形に形成され放たれた。

タクミ「げっ!?!?聖なるバリアー・ミラーフォース?!?!」

春人とタクミの目の前に攻撃を反射する鏡の壁が現れる。  
そして石破天驚拳がミラーフォースにぶつかる。

「「うおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!」  
!!!!!!!!!!!!」

東方不敗とドモンが叫ぶ。

ミラーフォースに徐々に罅が入っていく。

春人「くそっ!!<sup>ケミストリー</sup>宝具合成発動!天之尾羽張+神殺しの魔槍+破魔  
の紅薔薇!!」

春人の言葉に刀と槍が混ざり合っていく。

そしてミラーフォースが破られた。

タクミ「うわあああああああ……！！！！！！！！」  
春人「間に合え！！死滅の黒薔薇！！」

春人は死滅の黒薔薇と断罪の蒼薔薇をドモンと東方不敗に向けて放った。

凄まじい爆発が草原一帯を包み込む。

爆発が収まるとそこには倒れた4人がいた。

ドモン・東方不敗VS春人・タクミ 勝者 無し

（森・2）

ジャバ「壊れた神器？グングニール！！」

銀河「危な！？フレイムウイングマン！！」

ジャバウオックの攻撃をフレイムウイングマンが防ぐ。

柊「メガフレア！！」

ジャバ「くっ！？壊れた神器？イージス！！」

柊の攻撃をジャバウオックは槍を盾に変え防いだ。

その時、銀河の拾ったドキド ノコがポケットからこぼれ落ちた。

銀河「フレイムウイングマン！！スカイスクレーパーシュート！！」

ジャバ「壊れた神器？レーヴァンティン！！」

柊「アルテマジック・テラフレア！！！！」

3人の攻撃がぶつかる場所にドキド ノコがあった。  
攻撃が当たりドキド ノコが光輝く。



PV30万突破記念！！ 前半（後書き）

（霊使い達の雑談）

番外編が明らかに長くなるので区切ります。  
感想と贈り物ありがとうございます。

銃王 海さんより超電磁砲用のコインを、

いただきました。

ユタ様、銃王 海さん、ルシファー様、フレイス様感想ありがとうございます。  
ございます。

「遊びに来たわよ」

竜王「あ、ユタ様の所よりレン、紫、幽香が遊びに、アリスがデュエルしに来ました」

アリス「それじゃあ決闘<sup>デュエル</sup>！！」

竜馬「いきなり！？」 引きずられていく

「こんにちは」

竜王「こんどは銃王 海さんの所より柊と圭が来ました」

圭「ん？この人たちは？」

竜王「ユタ様の所のレン、紫、幽香だ。んであつちで竜馬とデュエ

ルしてるのがアリス」

「紫さんメールアドレスw…」

竜王「？黄昏の縛器・ラグナロク？」 ヨウキを黄昏の縛器・ラグナロクで縛り上げる

ヨウキ「何をするんだ!!」

竜王「…死にたいのか？」 レンと幽香を指差し言う

「紫に何かしたら…」

ヨウキ「!!」 首を高速で横に振る

圭「…竜王つええ」

柊「そう？」

竜王「俺は強く無いよ。最低限、俺の作品のキャラ達を守れるようにはなりたいけど…」

アリス「全員でダイレクトアタック!!」

竜馬「うわああああ!!…!!」

レン「あ、竜馬が負けた」

竜王「何のデツキだったんだ？」



言ってくれ!!」

柊「はいはい、闇を狩る少年……」

圭「PV30万突破記念バトルロワイアル……」

柊・圭「続きます!!」

アリス「ん〜…合計で2億9千しか与えられなかった……」

竜王「充分に鬼畜なダメージだぞ」



PV30万突破記念！！ 後半

side 竜王

竜王「あ〜やっぱり竜馬は負けたか」

ユウキ「予想してたんですか…？」

俺の言葉にユウキは尋ねた。

竜王「まあね、勝負に出てフェンリルを使ったのが敗因だよ。あれは、防御力が紙並に薄くなるから。だからあそこで使うべきはフェニックスだったんだ」

ミズキ「なるほど…ん？あ〜ちで爆発が起きましたけど…」

あそこは誰だっけ？

俺は画面を操作して映像を切り替えた。

竜王「ジャバウオック達か…ん？あ〜あそこには俺が性能を少し弄ったドキドノコを置いておいたんだった」

ユウキ「弄ったって？」

え〜と確か…

竜王「攻撃を寄せ付けるようになっていて、さらに攻撃を受けるとなのは、フェイト、はやてのトリプルブレイカー並の爆発を起こすぐらい？」

ミズキ「それちょっとじゃないです…！」

俺は笑いながら言った。

「粉碎 玉砕 大喝采!!!」

「助けて兄さアアアアん!!!!!!」

竜王「うおっ!?!銀レウス!?!」

ヤマツカミの上空をリオレウスの希少種が飛んで行った。  
誰か乗って無かったか?

ユウキ「流石はキャロ!気付いたな!」

竜王「あ、そっちのキャロね。あれ?じゃあもう1人は…」

もしやと思い俺は目で追った。

…やっぱりエリオか。

竜王「あれは放置で良いか」

ミズキ「と言うかどうにもできません」

つと倒れた奴等を回収してくるか。

ユウキ「どこか行くんですか?」

竜王「ああ、倒れた奴等を回収しにね。えっと?黄昏の刀器・ラグ  
ナロク?+?黄昏の刀器・ラグナロク? fusion」

俺の言葉に反応し刀とナイフが一つになる。

そして一本の刀が現れた刀身は透明で周囲に小型のナイフが飛んで  
いた。

竜王「合成完了 ?黄昏の刀刃?。んじゃ行ってくるな」

そう言っただ俺は影に潜って行った。

さて、最初は竜馬か。

圭「うおっ！？何だ！？」

竜王「倒れた奴らの回収だよ」

俺が影から現れると圭は驚いた。

すぐに俺は竜馬を担ぎあげた。

竜王「そんじゃ、頑張れ」

圭「あ、ああ」

ちよつと唾然としてたな。

まあ良いや。

次は銀河くんだな。

終「きゃあ！？」

ジャバ「何奴！？」

竜王「おいおい、倒れた奴らの回収だ。あ、ジャバウォック。竜馬が圭に負けたぞ、んじゃ」

銀河くんを担ぎ俺はすぐに影に潜った。

後は、リオラ、東方不敗、ドモン、春人、タクミか。

優「ん？竜王か」

竜王「…ちよつとつまらん。まあ良いか、リオラの視力を治したんだよな？じゃあ頑張れよ」

そう言つて俺はリオラを担ぎあげ影に潜った。

その後、全員を回収した後ヤマツカミの口の中に入れておいた。

ユウキ「良いのか？」

竜王「大丈夫だ、こいつは人を喰わないから。ね？」 黒い笑顔  
ヤマツ『!!』 微妙に震えている  
ミズキ「何をしたんだろう…」

気にしな〜い

side out

side 第3者視点

〜森・2〜

ジャバ「竜馬を倒しただと!!!!」

柊「へ〜圭やるじゃん」

怒りで震えるジャバウオック。

ジャバ「…この勝負、預けた!!」

柊「え!?!ちよっ!?!」

そう言つてジャバウオックは走つて行つた。

おそらく圭を探しに行くのだろう。

柊「え〜…」

そして立ち呆ける柊。

その後、柊は森の外に向かって歩いていった。

〜森・1〜

圭「どうすつかな〜」

相手がいなくなり暇な圭。

そこに一本の槍が投擲される。

圭「な!？」

圭はそれをすかさず長剣で叩き落とした。  
地面に落ちる直前に槍は霧のように消えた。

ジャバ「お主か…」

圭「…何だか怒ってるな」

ジャバウオックVS圭

〈草原〉

柊「ふ〜ん、結構良い所に出たかな」

優「ん? 対戦相手か」

柊が伸びをしていると優が歩いてきた。  
どうやらユニゾンを解除したらしく近くにリラがいる。

柊「うわっ…もしかして2対1?」

優「安心しろ。俺だけが戦うから」

そう言っつて優はリラを遠くに離れた。

優VS柊 観戦 リラ

side out

side 竜王

竜王「お、次の戦いが始まったな」  
ミズキ「みたいですね」

今度はあつちで何か変な光が起きたな…

竜王「今度は何だ？」

ミズキ「えつとあつちには…はてな謎先輩達が…」

確かあそこは…クシャルダオラがいたはずだな。  
見に行くか。

竜王「ちよつと行つてくる」

ミズキ「お願いします」

俺は再び影に潜った。

何をやったんだ？

友・海「ヘルプミー！！！！！！」

謎「…めんどくさい」

…本当に何をやった。

友と海がクシャルダオラに追いかけられていた。  
とりあえず俺は謎に近づいた。

竜王「何をやったんだ？」

謎「友にあの竜の目の前で電撃を撃ってもらった」

あゝそれが原因か。

フラメとシエリイは謎の近くで追われる二人を見ていた。

竜王「とりあえず止めるか。クシャー！！」

クシャ「Gururu…」

あ、駄目だ。

こいつ怒りで我を忘れてるわ。

竜王「しゃくない。？黄昏の刀刃？+？黄昏の大器・ラグナロク？  
+？黄昏の剣器・ラグナロク？ fusion」

俺は持っている？黄昏の刀刃？にさらに二つの剣を合成した。  
現れたのは色の無い一本の剣。

竜王「合成完了　？黄昏の剣神？さくつと！！」

そう言つて俺はクシャルダオラに閃光玉を投げつけた。  
クシャルダオラは光に怯み目を回した。

謎「…まぶしい」

友・海「目があ、目があああ！！！！」

ムスカ？

俺はその隙にクシャルダオラの尻尾を斬り捨てた。

クシャ「Guruaaaa!？」

竜王「落ち着いたかな？」

俺は振り向きクシャルダオラを見た。

するとクシャルダオラは怯えたようにこちらを見ていた。

竜王「ふう…もう暴れるなよ？」

クシャ「Guruu…」

もう大丈夫だろ。

俺は影に潜りヤマツカミの上に戻った。

side out

side 魔神竜馬

ん…ここは…

竜馬「…どこだここは…！」

何かの口の中みたいだけど…

周囲を見渡してみると他にバトルロワイアルに参加していた人達  
がいた。

春人「ん…竜馬か…」

竜馬「起きたんですね。ここはどこでしょうか？」

春人が目を覚ましたので俺は声をかけた。

竜王「やつほゝ 起きたみたいだな」

竜馬「は!？」

いきなり口が開き竜王が現れた。

春人「ここはどこだ？」

竜王「出れば分かるよ。付いておいで」

俺と春人は竜王に言われて口から外に出た。

竜馬「これは…ヤマツカミ?」

竜王「せゝかい」



よし、一発殴ろう。

俺は思い切り竜王の顔を殴り飛ばした。

side out

side 第3者視点

（森・1）

ジャバ「ちょこまかと避けるで無い！！！」

圭「断る！！！」

ジャバウオックの攻撃を圭は右へ左へ避けていく。  
ただ少しづつ掠っていつているが…

圭「ちっ！！はあっ！！！」

圭は長剣を振るい衝撃波を飛ばした。  
しかしそれをジャバウオックは容易く避けていく。

ジャバ「これで終いだ！！？壊れた神器？フロックン・ユツト・ウエホソゲイボルグ！！！」

ジャバウオックはグングニールを消しゲイボルグを形成した。  
そしてジャバウオックの手からゲイボルグが放たれた。

圭「槍だったら叩き落とせる！！！」

ジャバ「甘い！！裂れっせよ！！ゲイボルグ！！！」

叩き落とそうとする圭に迫る槍がジャバウオックの言葉を受けて無  
数に分裂した。

無数の槍に襲われ圭は遭えなく気絶した。

ジャバ「これで竜馬の敵はとれたな…！」

そう言つてジャバウオックは気絶した。  
？壊れた神器？を多用しすぎて疲労が来たのだらう。

ジャバウオックVS圭 勝者 無し

side out

side 竜王

竜王「お、ジャバウオックと圭は引き分けか」

春人「くっそ〜！！ガンダムが以外に強かったせいで！！」

悔しがってるな…

あ、そうだ。

竜王「竜馬、お前ジャバウオック達を回収して来い。あ、ジャバウオックは抱き抱えて来いよ」

竜馬「は！？何で？」

ジャバウオックにせめてものご褒美だつてのに…

竜王「良いから行ってこい！！」

竜馬「分かったよ…影道！！」

そう言つて竜馬は影に潜つていった。  
残りは優・リラVS柊か。

side out

side 第3者視点

草原

柊「くっ！メガフレア！！」

優「ガイ・バルローメ死棘の終末!!」

優の放った槍によってメガフレアは貫かれ霧散した。

柊「それなら!!」

そう叫んで柊はメガフレアを連続で撃ち出した。  
メガフレアは優に向かって飛んで行く。

優「だったら、デイスハーダ!!」

優は死棘の終末をしまい双銃を取り出しメガフレアを撃ち抜いていた。  
た。

さらに弾丸は柊の右足、左腕に当たった。

柊「くううううううううううう!!?」

優「諦めて棄権しろ」

腕と足を押さえる柊に優は言った。

柊「絶対に…諦めない!!アルテマジック・テラフレア!!!!!!」

柊は力を振り絞りアルテマジック・テラフレアを放った。

反動で左腕があらぬ方向に曲がってしまったが…

優「そうか…ギャラクシー・ブレイカー」

しかし優の放ったギャラクシー・ブレイカーがぶつかりアルテマジック・テラフレアは相殺した。

この衝撃で周囲10kmに衝撃波が巻き起こったが…

柁「くっ!?!」

優「最後だ、棄権しろ」

左腕を押さえる柁に優は双銃を構えながら言った。

柁「……ッ……棄権する……」

優「ふう……リラ、どうする?」

リラ「マスターが優勝するのですしたら私も棄権します」

優VS柁 観戦 リラ 勝者 優

side out

side 竜王

竜王「しゅくりょく!!バトルロワイアル優勝者はああああああ  
!!!!!!? 異世界を渡る? よりいよいよ!!!!!! 哭堵……優  
うううううううう!!!!!!」

俺はマイクを持ち叫んだ。

ユウキ「これでバトルロワイアルは終了ですね」

ミズキ「みたいですね」

さして全員集めるか。

〈全員回収中〉

竜王「それでは優勝者の優さん。記念撮影です」

文「笑ってください」

優勝者撮影ように射命丸を呼んで置いて良かった。

竜王「優さんには優勝トロフィーと作者が使用している？黄昏？の武器の弟武器である？蒼穹？の武器シリーズを授与します。種類は？黄昏？の武器と同じです効果は少しいですが弱くなっておりますが」  
優「ありがとうございます」

俺は優さんに優勝トロフィーと？蒼穹？の武器一式を渡した。  
後は…

竜王「参加者の皆さま！！参加賞の？黄昏？の武器の劣化番である？暁？の武器を一つだけ選んでください！！こちらも？黄昏？の武器と同じ種類があります。ただし？蒼穹？よりも弱いです」  
竜馬「いつの間にか創ったんだ…」

気にせずに行こう。

竜王「それでは皆さま！！ありがとうございます！！！！」

**PV30万突破記念！！ 後半（後書き）**

～霊使い達の雑談～

感想ありがとうございます。

竜王「いや～結構大変だったな」

ユウキ「そりゃそつでしょ」

竜馬「あ、そう言えばユウキとデュエルした事無かったっけ。デュエルしよう」

ユウキ「受けて立つー！！」

竜王「まあ待て、お～い来てくれ」

「何の用よ」

ユウキ「！！メールアドレスw…」

竜王「？黄昏の縛器 - ラグナロク？」 ユウキを縛り付ける

「大丈夫なの？」

竜王「大丈夫だ。こちらは俺の所の紫だ。前にも一回出てきただろ？」

紫「よろしく」

ユウキ「メールアドレスを!!」　もがきながら

紫「私と?」

竜王「交換してやれ。お前が好きなんだって」

紫「あら、嬉しいわね。良いわよ」

ユウキ「よっしゃあああああ!!!!!!!!!!」

竜王「ふう…あ、? 暁? で欲しい種類は感想に書いてください。ちなみに? 黄昏? とは違い解析などをしてても爆発はしません。さざえさんの三河屋のように届けに行きますんで。参加者が選んでくださいね? それでは闇を狩る少年続きます」

竜馬「ユウキ! 明日デュエルだ!!」

ユウキ「おう!!」

番外編 デュエル！！（前書き）

今回の話のデュエル描写などの大筋はフレイス様に考えてもらった物です。

私は少し手を加えただけです。

ですのでここで感謝の言葉を、

フレイス様、ありがとうございます。

それでは本文をどうぞ。



## 番外編 デュエル！！

バトルロワイアル後のフィールドに竜馬とユウキは向かい合って立っている。

2人はお互いにデュエルディスクを構えた。

ちなみに審判は竜王である。

「デュエル！！」

竜馬LP4000VSユウキLP4000

「俺の先攻ドロー！！」

先攻はユウキ、ドローしたカードを確認した後手札に加えた

「（俺の手札は……………バカな手札事故だと！？）」

ユウキは今まで手札事故をした経験が無いので、驚愕した

「（でも、良かったさっきドローしたカードは《手札抹殺》」

《てふだまっさつ手札抹殺》

通常魔法（制限カード）

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

「（これで…）魔法カード《てふだまじさつ手札抹殺》を発動！  
お互いに手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから  
捨てた枚数分のカードをドローする！」

\* \* \* \*

なのは「えっ！？一ターン目から手札交換！？」

ユウキの行動を見てなのはは驚いた。

それもそうだろう。

一ターン目に手札交換を行う者は滅多にいないからだ。

\* \* \* \*

「竜馬手札を全て捨ててもらおうか？」

「…ごめんユウキ」

「えっ、何が？」

「手札抹殺によって墓地に送られた《あんこくかい暗黒界の尖兵 ベージ》《あん暗  
こくかい黒界の軍神 シルバ》の効果発動！！」

「なんだと！？」

《あんこくかい暗黒界の軍神 シルバ》

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2300 / 守1400

このカードが他のカードの効果によって手札から墓地に捨てられた場合、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

相手のカードの効果によって捨てられた場合、

さらに相手は手札2枚を選択し、好きな順番でデッキの一番下に戻す。

《暗黒界の尖兵》 ベージ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1600 / 守1300

このカードが他のカードの効果によって手札から墓地に捨てられた場合、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「いでよ!!! 《暗黒界の軍神》 シルバ 《暗黒界の尖兵》 ベージ」

竜馬のフィールドに《暗黒界の軍神》 シルバ、《暗黒界の尖兵》 ベージが現れた

ちなみにモンスターの数はというと…ベージが2体、シルバが1体

3体は攻撃表示で召喚されていた

「さらにシルバの効果を発動！相手のカードの効果によって捨てられた場合、相手プレイヤーは手札2枚を選択し、好きな順番でデッキの一番下に戻す。」

「……………（暗黒界デッキとは思っていなかった）」

ユウキは手札を2枚デッキの一番下に戻した

これでユウキの手札は残り3枚。

「（くそ…手札事故は回避できても、相手にアドバンテージを与えてどうするんだよ。…………仕方が無い、このターンは守りに固めるか）俺は、《シールド・ウィング》を守備表示で召喚」

《シールド・ウィング》

効果モンスター

星2 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻 0 / 守 900

このカードは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない。

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

ユウキのターンが終わり竜馬のターンになる

「俺のターンドロー！」

（よしユウキが手札抹殺をしてくれたおかげで、シンクロ召喚がしやすくなった。だが…《シールド・ウイング》は1ターンに2度まで、戦闘では破壊されないモンスター）」

竜馬は手札を確認し、どうするか考えた

「（今俺の手札に、モンスターカードが無い…つまり、このターンユウキにダメージを与えることが出来ない今出来ることは、《シールド・ウイング》を破壊するしか道はない…）バトルだ！！」

竜馬の掛け声で暗黒界達は、攻撃態勢に入った

「行くぞ！ベージで《シールド・ウイング》を攻撃！」

ベージは、《シールド・ウイング》を攻撃を仕掛けるが、

《シールド・ウイング》はベージの攻撃を耐えた

「2体目のベージで《シールド・ウイング》を攻撃！！」

2体目のベージは、《シールド・ウイング》を攻撃を仕掛け、

《シールド・ウイング》はなんとか攻撃に耐えた

「シルバで、《シールド・ウイング》を攻撃!!」

シルバは《シールド・ウイング》を攻撃し、破壊した

「よし!! 《シールド・ウイング》を破壊したぞ!!」

竜馬は《シールド・ウイング》を破壊してよかったと同時に

ユウキの伏せカードは攻撃反応のカードじゃないと考えた

だが…

「畏発動! 《遺言の札》」

《遺言の札》  
ゆいごん ふだ

通常畏 アニメオリジナル

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターの攻撃力が変化  
または、

破壊された時発動する事ができる。

自分の手札が5枚になるように、デッキからカードをドローする。

ユウキはデッキからカードを5枚ドローする様子を見て、竜馬は驚

いた

「はあ！？なぜ手札が5枚なんだ？」

「《遺言の札》<sup>ゆいごんのふだ</sup>はモンスターの攻撃力が変化または破壊された時に発動できるカードだ。このカード効果により俺の手札が5枚になるようにドローする。」

「壊れカードをつかうんじゃないよー！」

「…審判アニメオリジナルカードを使ってもいいでしょうか？」

竜王「もちろんOKです！！」

竜王は親指を立てて言った

「だそつだ。」

「……………カードを2枚伏せてターンエンド」

竜馬は反論しても意味がないと諦めた

「俺のターン！！ドロー！！《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚！」

《サイバー・ドラゴン》

効果モンスター

星5 / 光属性 / 機械族 / 攻2100 / 守1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「このカードは相手フィールド上にモンスターが存在し、俺のフィールド上にモンスターが存在していない場合、特殊召喚することができる！さらに《ダーク・リゾネーター》を召喚！」

《ダーク・リゾネーター》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1300 / 守 300

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

\* \* \* \*

文「これは!？」

紫「来るわ、シンクロ召喚が!!」

射命丸の言葉を紫が引き継いで言った。

\* \* \* \*

「行くぞ！レベル5《サイバードラゴン》に、レベル3《ダーク・リゾネーター》をチューニング！」



ユウキの呼びかけに、《ダーク・リゾネ ター》は3つ緑の輪となり  
その中に《サイバードラゴン》が通る

すると、《サイバードラゴン》が透き通り、5つの星となる。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

そしてその星が1列になりユウキはシンクロ召喚をする

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、

ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。

このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》か…」

竜馬はどうやって倒そうか考えていた

「バトル！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で《暗黒界の軍神あんこくかい ぐんしんシルバ》を攻撃！！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》は《暗黒界の軍神あんこくかい ぐんしんシルバ》に向けて攻撃を仕掛ける

「アブソリュート・パワーフォース！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》は《暗黒界の軍神あんこくかい ぐんしんシルバ》を破壊し竜馬に700ポイントのダメージを与えた

「クツ…」 LP4000 LP3300

\* \* \* \*

「なんと先にダメージを与えたのはユウキ選手だ！！」

これに見ていたなのは達は驚きの表情を見せた。

\* \* \* \*

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド!!」

現在ユウキの手札3枚

リバースカード3枚

「俺のターン！（来た！）手札より《紅魔 - 十六夜咲夜》を召喚！」

《紅魔 - 十六夜咲夜》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守1300

相手のドローフェイズ、スタンバイフェイズ、メインフェイズ

バトルフェイズの内1つをスキップする。その後、自分の手札を2枚選択して墓地に捨てる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードは？紅魔 - レミリア・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

「行くぜ!!レベル4《暗黒界の尖兵ベージ》2体にレベル4《紅

魔・十六夜咲夜》をチューニング！！」

咲夜さんは光の輪になって

8つの光の球が光の輪を潜る。

「紅に染まりし館の主よ、我が意に従いて現れよ！其は永遠に幼き紅い月！！シンクロ召喚！！現れよ、？紅魔・レミリア・スカーレット？！！」

《紅魔・レミリア・スカーレット》

シンクロ・効果モンスター

星12 / 血属性 / 悪魔族 / 攻2800 / 守2500

チューナー＋チューナー以外の悪魔族2体以上

自分フィールド上にこのカードが存在している時、

発動した魔法、罫、効果モンスターの効果の対象を自分に変更することができる。

対象をとらない効果や自分フィールド上及び、相手フィールド上に適用される効果の場合、

効果を無効にするか選択し無効にする場合、破壊するか破壊しないかを選択する事が出来る。

このカードが墓地に送られた時、「コウモリトークン」

(悪魔族・血・星1・攻/守1000)を可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時このカードが墓地に存在し

自分フィールド上に「コウモリトークン」が1体以上存在する場合

「コウモリトークン」を全て破壊し、このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果を使用したターンのエンドフェイズに自分の手札を全て捨てる。

「攻撃力2800…だが俺のレッド・デーモンズの攻撃力3000！…この程度は問題ない」

「それはどうかな？」

「何？」

「手札から魔法カード、魅了を発動！！」

《魅了》

通常魔法

自分フィールド上に《紅魔・レミリア・スカーレット》または《紅魔・フレンドール・スカーレット》が存在する時発動する事が出来る

このターンのエンドフェイズまで相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロール得る。

「このカード効果で、ユウキの《レッド・デーモンズ・ドラゴン》のコントロールを得る」

「さあ、来なさい《レッド・デーモンズ・ドラゴン》」

レミリアは、魅了を使いユウキの《レッド・デーモンズ・ドラゴン》

をコントロールを得ようとしていた

「そうはさせるか、カウンター罠発動！！《マジックジャマ》」

《マジック・ジャマ》

カウンター罠

手札を1枚捨てて発動する。

魔法カードの発動を無効にし破壊する。

「手札を1枚捨てることで、魔法の発動を無効にし破壊する！」

ユウキが発動した罠によって1ターンキルは阻止することに成功したようだ。

「ならば、罠発動！《紅魔の絆》」

《紅魔の絆》

通常罫

自分フィールド上に《紅魔・レミア・スカーレット》1体しか存在しない時

発動する事が出来る

自分のデッキ、墓地から「紅魔」と名の付くモンスターを1体ずつ自分フィールド上に特殊召喚する。

自分のターンでしか発動する事が出来ない

「デッキから、《紅魔・小悪魔》墓地から《紅魔・十六夜咲夜》を  
守備表示で特殊召喚！」

「こあ〜」

「お嬢様ありがとうございます！」

《紅魔・小悪魔》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 悪魔族 / 攻1300 / 守1500

このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することが出来る。

この効果を使用したターン自分はバトルフェイズを行えない。

このカードは？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？のシンクロ素材にしか使用できない。

「さらに小悪魔の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することが出来る。いでよ《キラール・トマト》」

《キラール・トマト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 植物族 / 攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「さらに手札から魔法カード《死者蘇生》を発動！」

《死者蘇生》

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。



「蘇生されるモンスターは、《闇王プロメテイス》」

《闇王プロメテイス》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1200 / 守 800

このカードの召喚に成功した時、

自分の墓地に存在する闇属性モンスターを任意の枚数ゲームから除外する。

このターンのエンドフェイズ時まで、この効果で除外したカード1枚につき、

このカードの攻撃力は400ポイントアップする。

「レベル4《キラール・トマト》とレベル4《闇王プロメテイス》にレベル4？紅魔・小悪魔？をチューニング！！」

「行きますよ！！」

小悪魔さんはそう言って光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「大いなる図書館の主よ、我が意に従って現れよ！其は七曜の魔女！！シンクロ召喚！！現れよ、？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？！！」

《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》

シンクロ・効果モンスター

星12 / 血属性 / 魔法使い族 / 攻2500 / 守500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、手札を1枚墓地に送り効果を発動する。

墓地に送ったカードによって以下の効果を得る。

炎属性・相手に1500ポイントのダメージを与える。

水属性・デッキからカードを2枚ドローする。

風属性・相手のフィールド上のカードを3枚まで手札に戻す。

地属性・相手の手札を2枚墓地に送る。

光属性・このターン相手は魔法・罫・モンスター効果を1度だけしか発動できない。

闇属性・フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

魔法カード・自分の墓地のカードを3枚選択しデッキに戻しシャッフルする。

「そして、パチュリーのモンスター効果を発動！手札の《あんこくかい暗黒界の斥候せうこう スカー》を墓地に送り《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を破壊する！」

《あんこくかい暗黒界の斥候せうこう スカー》

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 500 / 守 500

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、自分のデッキから「暗黒界」と名のついた

レベル4以下のモンスター1体を手札に加える。

「何!？」

パチュリーは、呪文を唱え、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を破壊した。

「ここで、バトルといたいところだけど……小悪魔の効果でこのターンバトルフェイズを行うことが出来ない。俺はカードを1枚伏せてターンエンド!」

手札0

リバーズカード2

「俺のターン!……ターン終了だ」

\* \* \* \*

なのは「これは竜馬君が有利だね」  
「ジャバ」うむ。圧倒的だな」

なのはの言葉にジャバウォックは嬉しそうに答える。

\* \* \* \* \*

「俺のターン！」

「畏発動《和睦の使者》」

《和睦の使者》

通常畏

このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になる。

このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

「これで、俺の戦闘ダメージは0となる。」

「俺はパチュリーの効果発動する！手札の水属性モンスター、《スノーマン・イーター》を墓地に送りカードを2枚ドロウする！！これでターンエンド」

《スノーマンイーター》

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 0 / 守 1900

このカードがリバースした時、

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

「（どうする？このままじゃ絶対に負ける…あのカードが来たら逆転できるんだが…とりあえず俺のデッキを信じるしかない！）俺のターン、ドロー！魔法カード《デュアル・ゲート》を発動！」

《デュアル・ゲート》

通常魔法 アニメオリジナル

このカードと墓地にある同名カード1枚をゲームから除外する。  
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「このカードと墓地にある同名カード1枚をゲームから除外すること  
でデッキからカードを2枚ドローする！」

\* \* \* \*

文「えっと…どういう意味でしょうか？」

アリシア「同名カード…つまり墓地に存在する《デュアル・ゲート》  
《とさつき発動した《デュアル・ゲート》を除外することでカード  
を2枚ドローすると言っ意味だよ」

文「でもユウキさんの墓地には《デュアル・ゲート》のカードが無  
いんじゃない？」

アリシア「それが出来るんだよ…《マジック・ジャマ》によって墓地に送ったカードがこのカードだったんだよ」

文「えっ？いつの間に？」

どうやら9歳のアリシアは全ての墓地を把握している様子であった…

本当に9歳のなのだろうか疑問に思う。

\* \* \* \*

ユウキは《デュアル・ゲート》の効果でドロートしたカードを確認する

「！？（来た、キーカード！！だが…このカード…使ってもいいのかな？）」

ユウキはこのカードを使ってもいいのか考えるが…

「（まあいいか、勝つためにはこれを使わないと駄目だし）」

どうやら勝てばいいんだと思いこのカードを使用すること…

大丈夫なのか？

「俺は永続罫《無限牢》を発動する！」

《無限牢》

永続罨 アニメモリジナル

自分の手札を1枚捨てる事で、自分の墓地に存在するモンスター1体を

自分の魔法&罨カードゾーンに魔法カード扱いとしてセットすることができる。

このカードを墓地へ送る事で、

このカードの効果で魔法&罨カードゾーンにセットしたモンスターを自分の手札に戻す事ができる。

「手札を1枚捨てる事で墓地のモンスター1枚を魔法・罨カードゾーンに魔法カード扱いとしてセットする事ができる！俺は手札3枚墓地に送りこのカードをセットする！」

ユウキが見せたのは…先ほど《手札抹殺》によって墓地に送られたカード…

機皇帝のカードだった

《機皇帝<sup>マシン</sup>グランエル (インフィニティ)》

効果モンスター

星1/地属性/機械族/攻 0/守 0

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが

効果によって破壊され墓地へ送られた時のみ手札から特殊召喚できる。

このカードの攻撃力・守備力は自分のライフポイントの半分の数値分アップする。

1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

また、自分のメインフェイズ時に、このカードの効果で装備したモンスター1体を

自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚できる。

《機皇帝スキエル（インフィニティ）》

効果モンスター

星1 / 風属性 / 機械族 / 攻2200 / 守2200

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが

効果によって破壊され墓地へ送られた時のみ手札から特殊召喚できる。

1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を

装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

このカード以外の自分のモンスターは攻撃宣言できない。

また、このカードに装備されたモンスター1体を墓地へ送る事で、

このターンこのカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

《機皇帝ワイゼル（インフィニティ）》



効果モンスター

星1 / 闇属性 / 機械族 / 攻2500 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが効果で破壊され墓地へ送られた時のみ手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を

装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外の自分のモンスターは攻撃宣言できない。

また、1ターンに1度、相手の魔法カードの発動を無効にし破壊する事ができる。

「そして、《無限牢》のカードを墓地に送ることで、魔法&罨カードゾーンにセットしたモンスターを自分の手札に戻す事ができる！  
来い機皇帝よ！！」

ユウキは《無限牢》のカードを墓地に送り魔法&罨カードゾーンにセットしたモンスターを

手札に加え、竜馬に見せた。

\* \* \* \*

なのは「うーん…」

フェイト「どうしたのなのは？」

なのは「どうしてユウキくんは機皇帝のカードを3枚手札に加えたんだろう？」

フェイト「確かに…」

機皇帝は自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが

効果で破壊され墓地へ送られた時のみ手札から特殊召喚する事が

できるモンスターである。

だが、今ユウキのフィールド上にモンスターがないのにもかかわらずどうしてなのかと

考えた…

文「なんか…嫌な予感がしますね。」

\* \* \* \*

「（なぜユウキは機皇帝のカードを3枚手札に加えたんだ…）」

竜馬もなのは達と同様に考えていた

「なぜ機皇帝のカードを手札に加えたかわからないようだな…それを教えてやるうー!!」

そう言つてユウキは先ほど加えた機皇帝を再び墓地に送つた

「このカードは、手札から「機皇」と名のついたモンスター3体を墓地へ送つた場合のみ特殊召喚する事ができる!!」

「何!? そんなモンスターがいるというのか!?!」

竜馬は初めて見るカードに驚愕した

「いでよ《機皇神マシニクル》（インフィニティ）!!」

《機皇神マシニクル》（インフィニティ）  
効果モンスター

星12 / 光属性 / 機械族 / 攻4000 / 守4000

このカードは通常召喚できない。

手札から「機皇」と名のついたモンスター3体を墓地へ送った場合のみ特殊召喚する事ができる。  
1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。  
このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。  
また、自分のスタンバイフェイズ時に1度だけ、このカードの効果で装備したモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。  
この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

ユウキのフィールド上に出現したのは…大きいロボットが出現する

パチュリー「これは…」

レミリア「おもしろいことをしてくれるじゃない…」

咲夜「お嬢様、危険です！！私が必ずお守りします！！」

咲夜が言うセリフにユウキは…

「ふうん、十六夜咲夜さん、このカードはレミリアさんを破壊するロボットだ。たぶん守れないと思うがな…」

「何!？」

「ふーん、ならやってみなさいよ!! 私を破壊して頂戴!」

レミリアがユウキに向けて挑発をする

「ならお望みどおり…やってやるつじやないか!! 機皇神マシニクルの効果を発動!!」

ユウキの声にマシニクルがレミリアに方へ向いた

「1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を吸収することが出来る!!」

「何!?(レミリアはシンクロモンスター、さらに機皇神マシニクルの効果は装備カード扱いとして装備するから…コウモリトークンを自分フィールド上に特殊召喚できない!!)」

そしてマシニクルはレミリアにむけて触手に絡まった。

「クツ、放しなさい!!」

「お嬢様!!」

「レミアー!!」

仲間達の声援にレミアは脱出を試みるが、マシニクルに吸収されてしまった

「そんな…お嬢様…」

「…レミア…」

咲夜とパチュリーは主人を失い絶望をしていた

「このカードの攻撃力は、吸収したモンスターの攻撃力分アップする!!」

《ききしん機皇神マシニクル（インフィニティ）》

ATK4000 6800

「攻撃力…6800」

\* \* \* \*

文「あわわ!?レミアさんがロボットの中に入りましたよ!!…中はどうなっているのか後で取材を…」

マイクなどを準備する射命丸だったが咲夜とパチュリーに睨まれて口をつぐんだ。

\* \* \*

「バトル！！機皇神きこうしんマシニクルでパチュリーを攻撃！！」

マシニクルはパチュリーに向けて攻撃を仕掛ける

「これで終わりだ！！」

「そうはさせない！！畏発動《紅魔の門番》を発動！！」

《紅魔の門番》

通常畏

相手モンスターが攻撃宣言した時に発動することができる。

自分のデッキから《紅魔・紅美鈴》を墓地に送り

相手モンスターからの攻撃を無効にし

バトルフェイズを終了させる。

その後、デッキからカードを1枚ドロウする。

《紅魔・紅美鈴》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守2000

このカードがカード効果によって手札に加わったとき特殊召喚することができる。

ただしこの効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上のモンスターを1体破壊し

手札を1枚選択し墓地に捨てる。

このカードは？紅魔・フランドール・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

「デッキから《紅魔・紅美鈴》を墓地に送ることで相手モンスターからの攻撃を無効にする！！」

竜馬は、デッキから《紅魔・紅美鈴》のカードを墓地に送るとなぜか美鈴が竜馬のフィールドに出現した

「えっ！？何が起こったんですか！！」

咲夜「中国逝ってきなさい」

「逝ってきなさいってどういう意味ですか！？後中国は言わな…」

「ザ・キューブ・オブ・ディスペアー！！！！」

紅美鈴が何か言おうとしたが、マシニクルの攻撃を受けた

「きゃあああああああああ！？」



紅美鈴はマシニクルの攻撃を受け意識を失ってしまった

「なんとか攻撃を阻止したか…《紅魔の門番》の効果によりカードを1枚ドローする！」

「やるな、まさか紅美鈴さんが壁になるとは…予想外だ。」

「…（なんとか攻撃を阻止したが、どうすればいいんだ！？）」

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド…！」

手札0

リバーズカード1

どうすればいいのか考える竜馬だが…

とりあえずカードをドローすることに

「俺のターン…！手札より魔法カード《ミスフォ  
チュン》を発動  
！」

《ミスフォーチュン》

通常魔法

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

このターン自分のモンスターは攻撃する事ができない。

「この効果でマシニクルの元々の攻撃力、半分のダメージを与える  
!..!」

「何!?!」

竜馬が出した《ミスフォーチュン》の効果でユウキにダメージを与える

「クツ...」

ユウキLP4000 2000

\* \* \* \*

フェイト「凄い!?!ライフが逆転したよ!?!」

紫「一時はどうなるかと思っただけ...」

見ている者たちは喜ぶ者、ホッとする者など様々な反応があった。

\* \* \* \*

「《ミスフォーチュン》の効果により俺はこのターンモンスターで攻撃することはできない！！パチュリーを守備表示に変更！！」

パチュリー

ATK2500 DEF500

「カードを2枚伏せてターンエンド！！」

手札0

リバーズカード3

\* \* \* \*

なのは「何も打つ手が無いのかな？」

なのはは不安そうに竜馬を見ながら言った

フェイト「大丈夫、竜馬は絶対に勝つ！！だから…信じよう！！」  
なのは「…うんそうだね！！」

フェイトの言葉を受けなのはは力強く頷いた

\* \* \* \*

「俺のターン！！このスタンフェイズにマシニクルの効果を発動！  
！自分のスタンバイフェイズ時に1度だけ、このカードの効果で装  
備したモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力  
分のダメージを相手ライフに与えることができる！！」

「何！？」

「くらいな！！」

マシニクルは竜馬に向けて効果ダメージを与える！！

「じめんなさい竜馬！！」

レミリアは悔しげに叫んだ

「うわああああ！？」

竜馬LP3300 LP500

「……レミリアの効果で、自分フィールド上にコウモリトークンを  
特殊召喚！！」

DEF1000x3

「手札が1枚のとき、俺は魔法カード《オーロラ・ドロー》を発動  
！！」

《オーロラ・ドロー》  
アニメオリジナル  
通常魔法

手札にこのカードしか無い場合に発動する事ができる。  
デッキからカードを2枚ドローする。

「この効果でデッキからカードを2枚ドローする！！」

ユウキはドローしたカードを確認しマシニクルの効果を発動する。

「さらに機皇神<sup>きこうしん</sup>マシニクルの効果発動！！ターンに1度、相手の  
シンクロモンスター1体を吸収することが出来る！！俺はパチユリ  
ーを選択する！！」

ユウキはこれで勝ちだと思った…だが

「…これ待っていた！！ユウキ！！」

「何！？」

「カウンター畏発動《紅魔の怒り》」

《紅魔の怒り》

カウンター罠

自分フィールド上に《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》が存在する時発動する事ができる

効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

ただしこのカードは相手ターンのメインフェイズでしか使用できない

「俺のフィールド上にパチュリーが存在する時発動する事が出来るカードだ。このカード効果により…効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する!!」

「何!？」

「レミイの敵…取らせてもらっわ!!」

パチュリーは呪文を唱え機皇神マシニクルを破壊した

\* \* \* \*

アリシア「すごい!!マシニクルを倒しちゃった!!」

壊れていく機皇神を見てアリシアは嬉しそうに言った。

その後ろではなのはとフェイトが手を取り合って喜んでいた。

\* \* \* \*

「…マシニクルが破壊されただと!?!」

ユウキが驚愕している間咲夜はユウキを睨んでいた

咲夜「ユウキ、覚悟はいいかしら?」

「(やばい、俺の手札に召喚できるモンスターがない、クッ、ここは守るしか…)カードを2枚伏せてターンエンド!」

手札0

リバーズカード3

「俺のターン!!!スタンバイフェイズ時レミアアの効果を発動!!!このカードが墓地に存在し自分フィールド上に「コウモリトークン」が1体以上存在する場合「コウモリトークン」を全て破壊し、レミアアを墓地から特殊召喚する!!!」

「何だと!?!」

竜馬のフィールド上の「コウモリトークン」は全て破壊され…

再び竜馬のフィールド上にレミアアが出現した

レミアア

ATK 2800

レミリア「…さっきはよくもやってくれたわね（怒）」

「！？）や、やばい！！俺…殺される！！」

「咲夜とパチュリーを攻撃表示に変更！！」

咲夜

DEF 1300 ATK 1900

パチュリー

DEF 500 ATK 2500

「バトル！！レミリアで…」

「待ってください魔神様」

「？どうした咲夜」

咲夜「…私はユウキに向けてダイレクトアタックをしたいのですが…いいでしょうか？」



「えっ！？でもレミリアのダイレクトアタックで…」

レミリア「竜馬、今回は咲夜の言うことを聞いてくれないかしら？」

「…分かった、頼むぞ咲夜！」

咲夜「はい…！」

そう言ってユウキに向けてナイフを向け攻撃を仕掛ける

咲夜「さっきはよくもお嬢様を…」

「いや、どう考えてもマシニクルのモンスター効果で…」

咲夜「問答無用！！傷符《インスクライブレッドソウル》」

咲夜は両手のナイフでユウキを滅多斬りにした

「ぎゃああああああ…！」

ユウキ

LP2000 LP100

\* \* \* \*

なのは「やった！！次の攻撃で！！」  
フェイト「竜馬が勝つ！！」

2人は喜び竜馬を見た

\* \* \* \*

「これで終わりだ！！レミリアで…」

ダイレクトアタックと言おうとしたが…

レミリアは攻撃態勢を解いた  
パチュリーも同様に攻撃態勢を解く

「どうしたんだレミリア、パチュリー？」

レミリア「…やられたわユウキのフィールドをよく見て」

竜馬はレミリアの言うとおりユウキのフィールドを良く見てみると  
罠を発動していた…そのカードは、《閃光弾》だった

《閃光弾》  
せんこうだん

通常罠

相手フィールド上のモンスターが直接攻撃に成功した時に発動する

事ができる。

このターンのエンドフェイズになる。

「このカードはダイレクトアタックを受けた時発動できるカードだ！相手のターンを終了するー！」

「何だと!?!」

「助かったぜ、まさか咲夜さんが攻撃を仕掛けてくるとな…」

「クッ…レミアアの効果で俺の手札を全て墓地に送り、ターンエンド」

リバーズカード2

\* \* \* \*

「（このターンで…決めてやる!!!）俺のターン!!! 畏カードオープン《ロスト・スター・ディセント》」

《ロスト・スター・ディセント》

通常罠

自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、レベルは1つ下がり守備力は0になる。

また、表示形式を変更する事はできない。

「俺の墓地のシンクロモンスターを守備表示で特殊召喚する!!! 蘇れ《レッド・デーモンズ・ドラゴン》!!!」

ユウキのフィールド上に《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が現れ  
守備表示で特殊召喚された。

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》

DEF 2000 0

「この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、守備力は0になりレベルは1つ下がる!!!」

「（何を仕掛ける気だ?）」

「手札より《紅蓮魔竜の壺》を発動!!!」

《紅蓮魔竜の壺》

通常魔法 アニメオリジナル

自分フィールド上に《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が存在する場合、

デッキからカードを2枚ドローする。

「俺のフィールド上に《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が存在す

る時、カードを2枚ドローする！」

「（…何枚ドロー強化カードを入れているんだ…あのデッキ？）」

「さらに手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚！」

《ジャンク・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する

レベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「こいつは自分の墓地のレベル2以下のモンスター1体を特殊召喚できる！来い、《ドレッド・ドラゴン》！」

《ドレッド・ドラゴン》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻1100 / 守 400

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキからレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を手札に加える事ができる。

ユウキは新たなシンクロ召喚へと準備にかかる

「レベル7となった《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル2



エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》の攻撃力は俺の墓地に存在するチューナーの数×500ポイントアップする！！今俺の墓地に存在するチューナーは、3体！！よって攻撃力は…」

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》

ATK3500 5000

「攻撃力5000だと!？」

「さらにこのカードは相手の魔法・罫・効果モンスターの効果では破壊されない!!」

「!?(俺の伏せカードの一枚は、リアクティブアーマー《炸裂装甲》)」

リアクティブアーマー  
《炸裂装甲》

通常罫

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。  
その攻撃モンスター1体を破壊する。

「(これじゃあ…破壊することができない!!だが…このカードなら)」

竜馬は残り1枚の伏せカードを見ている間

ユウキは考えていた。

「（だが…もし通らなかつたら、この伏せカードを発動するしかない…）バトル！《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》でレミリアを攻撃…！」

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》はレミリアに向けて攻撃を仕掛ける

「くらえ…！バーニングソウル…！」

レミリア「今よ竜馬…！」

「畏発動…！《魔法の筒》マジック・シリンダー」



マジック・シリンダー  
《魔法の筒》

通常罠（準制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。  
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、  
そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「相手モンスターの攻撃を無効にしそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！！」

「何だと！？」

「《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》は効果で破壊することはできない。だったらライフダメージを与えれば俺の勝ちだ！！」

\* \* \*

なのは「やった！！竜馬の勝ちだ！！」

ジャバ「よくやった！！」

アリシア「…ユウキの場にはあと一枚伏せカードが…」

全員が喜ぶ中、アリシアだけが冷静に戦況を見ている

\* \* \* \*

ユウキ「(クツ…俺が負けるだと…くそこのカードを使うしかない  
！！) 畏発動！！」《シヨック・ウェーブ》」

《シヨック・ウェーブ》

通常罠 アニメオリジナル

自分のライフポイントが相手のライフポイントよりも少ない  
場合にのみ発動する事ができる。

フィールド上に存在するモンスターを1体を破壊する。お互いの  
プレイヤーはそのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。

「俺のライフが相手のライフポイントよりも少ない時発動する事が  
出来る！！フィールド上に存在するモンスターを1体を破壊し、お  
互いのプレイヤーはそのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける  
！！」

「何！？」

「俺は《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》を破壊する！！」

ユウキの罠によって竜馬とユウキはライフが0になった

「うわああああああ！？」

竜馬

LP500 LP0

「うわああああああ！？」

ユウキ

LP100 LP0

\* \* \* \*

竜王「結果はドローだな」

竜馬「くっそー！！セットカードの存在を忘れていた！！」

竜王の言葉に竜馬は悔しかった

ユウキは紅魔館組（フランを除く）に囲まれていた

ユウキ「えつと…なんでしょうか…？」

レミリア「いえね？ちゃんとお礼をしてなかったからね…」

ユウキの問いにレミリアは笑顔で答えた  
しかしその笑顔はとても寒い物を感じる

ユウキ「け、けけ…結構ですっつっつっつっ！……！！……！！……！！」

そう叫んでユウキは走っていった

レミリア「待ちなさいー!!」

さらにレミリア達はユウキを追っていった。

その後、ぼろぼろになったユウキの傷を紫が消毒している姿があった。

番外編 デュエル！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

ルシファー様、バラランシヤ様、銃王 海さん、フォウル様、ユタ様、フレイス様感想ありがとうございます。

そして最初にも言いましたがフレイス様、コラボのこの話を考えてくださってありがとうございます。

竜王「えつと…？ 暁の槍器 - バルドル？ が春人くんで、？ 暁の刃器 - バルドル？ がリオラで、？ 暁の弓器 - バルドル？ が圭で、？ 暁の双器 - バルドル？ が柊、んでリラはまだ不明と…」

竜馬「何やってるんだ？」

竜王「送る物の整理。あ、メガネを2つ見つけれなかったか？」

竜馬「メガネ？…見つけたけど3つだったぞ」

竜王「は？えつと？普通のが2つに…これって「見た目は子供、頭脳は大人」のメガネじゃん！…まあ良いや一緒に送っとこ。後は謎に閃光玉を…そうだな50個ほど送っておくか」

竜馬「おいおい…」

竜王「あ、？蒼穹？の武器の名前は？蒼穹の 器 - フィンブルヴェト？です。 の部分に刀や剣等の文字が入ります」

竜馬「大分チートな武器を創ってるが材料はどうしてるんだ？」

竜王「ん？銃王 海さんのクリスタルの洞窟で見つけたクリスタルとモンスター達から剥ぎ取ったアイテムを使ってるけど？」

竜馬「……もう良いや」

竜王「あ、そうだ。フランだけ進化があるのは可哀想と最近思いましてレミアアの進化を出したいなと思っております。フランだけと言った手前厚かましいと思います。レミアアの進化系のオリカを出しても良いでしょうか？」

竜馬「レミアアもかよ」

竜王「うん。フランも好きだけどやっぱり2人そろってこそだと思っただ」

竜馬「はあ…闇を狩る少年続きます」

竜王「それでは！！」

金持ちって凄い…

side 魔神竜馬

すずかの家に入ると早速猫が集まって来た。  
夢もいるな。

「そう言えば竜馬君って学校に行つて無いんだよね？」  
「ん？ああ、まあな」

ただ居候するのも失礼だから何か手伝おうかな？  
ん？  
部屋についたのか。

「それじゃあ竜馬君はこの部屋を使ってね。私はちょっと用があるから…」  
「分かった。ありがとうな」

そう言つてすずかは部屋から出ていった。  
…猫が物凄い部屋の扉を引っ掻いてるな。  
中に入れるべきなのか？

side out

side 月村すずか

竜馬君は学校に行つて無い。  
だつたら…

「ファリン、学校に連絡してちょうだい」  
「はい、お嬢様」

私はファリンにそう言いました。  
後は…

「学校の制服もお願いね」

「分かりました!!」

そう言っつてファリンは走っていきました。  
転ばなきゃいいけど…

「きゃっ!?!」

「…ファリン」

叫び声が聞こえたので見てみると早速ファリンは転んでいました。  
次はノエルに言っつて夕ご飯について言っつてこよう。  
竜馬君が暮らすんだもんね

side out

side 魔神竜馬

…：凄い豪華だな」

「でしょう すすかが…」

「お姉ちゃん!!」

忍さんが何かを言おうとしたがすすかが慌てて遮った。  
どうしたんだ?

「あ、でも俺マナーとか分かりませんよ?」

「気にしなくていいよ。自由に食べて」

俺の言葉にすすかは言った。  
それなら良かった。



「それじゃあ、いただきます」  
「いただきます」

そして月村家での最初の食事を俺は堪能した。  
結論から言つてとてもおいしかった。

「「ごちそうさまでした」」

本当にすごくおいしかったな。  
材料とか何を使つてるんだろう？

「それじゃあ私はちよつとやる事があるから行くわね？」  
「あ、はい」

そう言つて忍さんは歩いて行った。  
俺も何か手伝うか。

そう思つて俺は食器を手に取った。

「あ、竜馬君。食器なら私達が片付けますよ」  
「良いんですよ。何もせずに住まわせてもらうだけじゃ申し訳ないですし」

俺はファリンにそう言つて食器を運んだ。  
「つかキッチン広っ！！」

「…後で使わせてもらおう」

そう呟いて俺は食器を洗い始めた。  
何か歌おうかな。

「んゝ…あの歌で良いかな」

よし決定！！

俺は食器を洗いながら歌い始めた。

「ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ」

良い歌だよな。

「ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ」

よし、皿は洗い終わった。

「ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ」

次はナイフとフォークだな。

これはまだ洗いやすいかな。

「ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ」

もう洗い終わっちまった…

とりあえず歌を歌い終わすか。

「ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ」

これで一番は終わりだな。

区切りが良いし終わりにするか。

そう思い俺が振り返ると後ろにノエルさん、ファリン、すすかがいた。

「うお！？ど、どうしたんだ？」

「竜馬君の歌が聞こえたから」

あゝあつちまで聞こえてたんだ…

フェニックスの姿じゃない時の声で歌う歌はあまり聞かせたくないんだけどねえ。

「下手だっただろ？」

「う、ううん！！そんな事無いよ！！」

俺の言葉をすずかは首を振って否定した。  
嬉しいかな。

「つと一応全部の食器は洗い終わりましたよ」

「ありがとうございます。それではお2人共、明日がありますのでお風呂に入ってお休みください」

明日？

俺は学校に行つて無いから特に何も無いはずだが…  
まあ良いか。

「どつちから入るんだ？」

「私は別に一緒でも良いよ？」

俺の問いにすずかは普通に返した。

…とりあえず。

「つてい！！」

「いたあ！？」

俺はすずかの頭に向かって軽くチョップした。  
女の子がそう言う事を言うんじゃないよ…

「分かった。俺から入るよ」

「うっうっ…はい」

すずかは涙目で答えた。

強くやりすぎたか…？

その後、俺が入浴中にすずかが入って来る等の騒動が起こったが…  
俺はベッドよりも布団の方が落ち着くので申し訳ないが用意しても  
らった。

「…どうしてついてくるんだ？」

「だって竜馬君が寝る部屋って私の部屋だよ？」

……………はあ!？

「ほ、他の部屋は!？」

「散らかっているから誰も泊められないの」

おおっ…

俺はあまりの事実には眩暈を覚えた。

仕方なく今日はすずかの部屋に泊まることにした。

明日はどこかの部屋を綺麗にしようと思い強く決めた。

金持ちって凄い…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

銃王 海さんよりポケモンのいる惑星を、

いただきました。

銃王 海さん、フレイス様、ユタ様、バラランシャ様、遊戯王様、ルシファー様感想ありがとうございます。

竜王「えつと…リラに？暁の刃器 - バルドル？を送らないと。後は…」

竜馬「優さんとリオラからデュエルの申し込みが来てたな」

竜王「ああ、とりあえず書けるか不安だけど頑張りたいな」

竜馬「どっちから先にデュエルするか…」

竜王「ん〜…前に優とデュエルしたし今回はリオラからデュエルかな？」

竜馬「悩むなあ…」

竜王「それではこの辺で、闇を狩る少年続きます」

竜馬「ポケモンの惑星かあ…イーブイとかいっぱいいるかな？」

竜王「ミミロルとかも忘れられないな……」

小学校って懐かしい!

side 魔神竜馬

…どうなってるんだ?

朝、目を開けると布団に違和感を感じた。

横を見ると何故かベッドに寝たはずのすずかがいた。

「…なんで?」

えっと、確か昨日すずかは自分のベッドに寝てたよな?

それが何で俺の横に?

「朝ですよ。お嬢様」

そう言ってファリンが部屋に入って来た。

ファリンは俺の寝ている布団にすずかがいる事を確認すると何も言わずに部屋から出て行った。

「って待て待て待て!!!」

俺は布団から跳ね起き部屋から出てファリンを説得しに行った。

説明中にすずかが起きてきたので理由を聞くと夜にトイレに行った後にベッドに入ったら冷たかったからという理由だそうだった。

「さて、今日は…」

「学校に行くから早く朝ごはんを食べちゃおう?」

そう言ってすずかは俺の手を取り引っ張っていった。

……………学校!?

「待った。俺は学校に行かないはずだが？」  
「え？あ、竜馬君の制服はこれだから」

俺の話を聞かずにすかば制服を取り出し俺に渡した。  
人の話を聞いてくれ…

「それじゃあ早く朝ごはんに行こう」

俺はすずかに引つ張られて行つた。

頭が混乱した状態だったため何を食べたのか覚えていない。

side out

side 高町なのは

「なのは今日、転校生が来るんだって！」

「本当！？誰だろうねフェイトちゃんアリシアちゃん！」

転校生かあ…

どんな子が来るのかな？

「はい、皆席について今日は転校生を紹介します」

先生が来たので私達は席に着きました。  
するとクラスの子が手を上げました。

「先生、転校生って女の子ですか？男の子ですか？」  
「ん〜…男の娘かな？」

先生は少し悩んでそう言いました。  
男の娘？



「さあ、入ってちょうだい」

先生がそう言った瞬間クラスの皆は教室の扉を見ました。  
そして扉が開きました。

side out

side 魔神竜馬

…先生の俺の紹介がおかしいと思ったのは俺だけか？

男の娘って…

そう思いながら俺は教室に入った。

「「「「！！」「」「」

俺が教室に入るとなのは、フェイト、アリシア、アリサの4人が驚いていた。

まあ当然か。

俺自身もまだ驚いてるしな。

「魔神竜馬です。得意な事は…家事。以上」

「それじゃあ皆から竜馬君に質問はあるかな？」

先生がそう言った瞬間になのは、フェイト、アリシア、アリサの4人が手を上げた。

…答えたくねえ。

「それじゃあ…フェイトさん」

「竜馬は今どこに住んでるの？」

うお!?

男子生徒から凄い勢いで睨まれた！？  
ここまで人気なのかフェイトは…

「今は月村さんの家に居候しています」

「「「「本当なのですか（ちゃん）！！！！」」」」

4人はさすがに聞いた。

「うん。本当だよ」

さすがは普通に答えた。

さらに睨む勢いが上がったな…

「竜馬君は5人と知り合いなのかな？」

「はい、前にこの市にいた時に友達になりました」

先生の問いに俺は答えた。

友達…って言うか仲間と思ってるけどな。

「それじゃあ竜馬君の学校案内は5人に頼みましょう。席は…」

「私の隣が空いています！！」

そう言って手を上げたのはアリシアだった。

…何故そんなに勢いよく手を上げるんだ。

男子生徒からの睨む力がさらに上昇した気がした。

「そうね。それじゃあ竜馬君、アリシアさんの隣の席に行っちゃ  
うだい」

「分かりました」

アリシアの席はアリサの席を挟んだ先なので必然的にアリサとも隣になるな。

席に向かう途中で足をかけられたが気にせずに進んだ結果、足をかけた男子生徒が勢いよく転んだ。

なんだかなあ…

そして昼休みになった。

「竜馬！何であんたほとんどの授業を寝てるのよ！！」  
「全部分かるから」

アリサが大きな声で言った。

実際全部9年前に習ったものばかりだしなあ…

「あはは…それじゃあ皆でお昼にしようか」  
「そ、そうだね」

そうやってなのはとフェイトはお弁当を取り出した。

俺も喰うか。

俺はノエルさんに家を出る時に渡されたお弁当を取り出した。

「私も食べよう…あれ？」  
「どうかしたの？アリサちゃん」

お弁当を出そうとして固まったアリサを見てアリシアは尋ねた。  
どうしたんだ？

「…お弁当が無い…家に忘れたんだわ…」  
「おいおい…」

アリサの言葉を聞いて俺は呆れた。

「じゃあ無い。」

「?…竜馬君どこに行くの?」

「そのドジのためにお弁当を持って来てやるんだよ」

俺は立ち上がりフェンスに向かった。

そしてフェンスに上り立ちあがった。

「誰がドジよ!って言うかここは屋上…」

「んじゃ、行ってくる」

アリサの言葉の途中で俺はフェンスから飛び降りた。

何人が悲鳴が聞こえた気がするけど気のせいだろ。

徐々に地面が近づいてきた。

「はあっ!!!」

俺は気を込めた拳で地面を殴り勢いを殺した。

ん…次から高い所に転移したときとかこの手で行こう。

「っと確かアリサの家はあっちだったよな。ふっ!!!」

方向を確認すると俺は足に気を込めて瞬動術を使った。

それから鮫島さんにアリサのお弁当を受け取ってから学校に戻るのには時間はかからなかった。

ただ、戻って来た後に質問責めにされたが…

小学校って懐かしい。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、ルシファー様、バラランシャ様、銃王 海さん、蒼影様、  
フレイス様感想ありがとうございます。

そして

ルシファー様よりギザみみピチュー、なみのりピカチュウを、  
銃王 海さんより爆弾セットを、  
蒼影様よりごくるでんBOX、カード ヤプターさくらの『星の杖  
+さくらカード(蓮作)』を、

いただきました。

竜王「うお〜 ピチューとピカチュウだ」

竜馬「可愛いな」

「何か用かしら？」

竜王「お、来たな。何も聞かずにこれを持ってくれ」 星の杖を渡す

竜馬「プレシアに何をさせる気だ？」

プレシア「これを持てばいいのね？きゃっ!？」 光に包まれる

竜馬「どうなるんだ？」

竜王「ふんふんふん」

プレシア「どうなってるのよ…」

竜王「お、サンダーを封印した時のコスチュームだな。写真に撮っておこ」

竜馬「これはどういう事だ？」

竜王「ん？あれは蓮が作ったデバイスでバリアジャケットが原作で登場した服装がランダムで選択される代物だよ」 シャッターを連写中

プレシア「恥ずかしいのだけど／＼／＼」

竜王「気にしないで あ、欲しい人がいたら感想に書いてください送ります」

プレシア「ちょっ!?!」

「あゝ」

竜馬「ん？ああ、フレイス様の所から来たキャラだね」

キャラ「はい 前はバトルロワイアルだったのでちゃんと挨拶をしようよ」

竜王「あ、来たんだね。これあげるよ」 ブルーアイズの人形を渡す

キャラ「良いんですか！！ありがとうございます！！」

竜馬「本当にいつの間につけてるんだか…」

キャラ「あれ？あそこにあるのってなのはさん達の人形ですか？」

竜王「お、正解 全部創ったんだよ。そうだフェイトの人形を1つあげるよ」

竜馬「つーが無印からFORCEまで、さらには幻想郷のキャラ達の人形もあるのか…」

竜王「ユウキに紫の人形を送ろうかな？」

竜馬「そうしてやれば？喜ぶんじゃないね」

竜王「よし送っとこ。それじゃあ締めをキャラお願い」

キャラ「はい 闇を狩る少年続きます！！粉碎 玉砕 大喝采！！」

竜馬「ここでキャラが社長になったか…」

竜王「ん〜…ついでに社長の服をキャラサイズに仕立て直して…」

プレシア「私はいつまでこの服装なの／＼／＼／＼」

体育の授業って不思議と元気になるよな？

side 魔神竜馬

「体育だあああああ！……！！……！！……！！」

「うっさい……！！……！！」

俺が叫ぶと隣のアリサが殴ってきた。

甘い……！！

この程度で俺のテンションを下げられると思うな……！！

「んじゃ！先に外に行ってくる……！！」

「……」着替え早っ……！！」「……」

俺の言葉にフェイト以外の4人が反応した。  
フェイトも俺と同じく既に着替え終わっている。

「あ、私も行くよ」

「おっし、行くぞ……！！」

俺とフェイトは外に向かって行った。  
俺だけ半そで半ズボンで……

「……竜馬君。寒く無いんですか？」

「全然……！！」

先生の質問に俺は首を振って答えた。

実際には気で身を包んでいるため寒さとかは感じないんだけどね。

「今日はマラソンです。校庭を10周してください。終わった人か



ら自由時間です」

「え〜…めんどくさいわね」

先生の言葉にアリサは不服そうに答えた。  
そうか？

「それじゃあ、よ〜いドン！」

「ゆっくり行こうかすずかちゃん」

合図と同時になのははすずかにそう言った。  
そんじゃあ行きますか

「レディー…ゴ〜！…！！…！！」

「ちよっ！？竜馬！？」

俺はクラウチングスタートの体勢を取りながら全身に流す気を増幅した。

そして一気にトップに躍り出た。

side out

side 第3者視点

「あんなに飛ばして大丈夫なのかな？」

「バカなのかしら？」

どんどん加速して行っている竜馬を見ながらアリシアとアリサは言  
った。

なのはは竜馬の走る姿を見て啞然としていた。

「…速さでは負けない…！」

フェイトがライバル意識を燃やした模様。  
竜馬を追ってフェイトは加速していった。

「誰がバカだ!!」

「きゃあっ!?!」

後ろから声がかかった事に驚きアリサは悲鳴を上げた。

そこには一周(200m)を走り終え二週目に入った竜馬がいた。  
その後ろにはフェイトもいる。

「さっさと終わして遊ぶぞ」

「負けない!!」

そう言っただけで竜馬は走っていった。

フェイトも竜馬を追って行った。

2人が校庭10周を走り終えたのは全員が三週目に入った時だった。

side out

side 魔神竜馬

「…何するかな?」

「さあ?」

俺の言葉にフェイトは首を傾げた。

他のクラスメイト達はゆっくと走っている。

「ん…筋トレでもやっとうろう」

「あ、じゃあ私が数を数えようか?」

そうだな。

そう思い俺は逆立ちをした。

「そんじゃあ数えていてくれ」  
「分かった」

そして俺は倒立腕立てを始めた。  
「…か皆はいつになったら走り終わるんだろっな。」

「ふっ！ふっ！ふっ！ふっ！ふっ！…」  
「…10、11、12、13、14、…」

気無しだと結構負担が来るよな…

そのまま俺は何人が走り終わるまでやる事にしようと思った。

「…何やってるの？」  
「筋トレ」

「…100、101、102、…」

走り終わったアリシアが尋ねてきた。  
「そろそろ止めようかな？」  
「皆も終わって来てるし。」

「よっ」と…  
「…120、終わり？」

俺は勢いをつけて飛び上がり着地した。

「ああ、数えてくれてありがとな」  
「別に大丈夫だよ」

「さして大分人数もいるなあ…」

つと危な。

俺は顔面に向かって飛んできたサッカーボールを飛んできた方向に殴り返した。

「んぎやつ!!」

「あ…まあいつか、んで？何やる？」

悲鳴が聞こえてきたが俺は気にせず皆に尋ねた。  
ん？

「サッカーで勝負だ!!!!!!」

「…何でだ？」

どうやらさつき俺にサッカーボールを蹴ったのはこいつらしい。  
鼻から鼻血を出している男子生徒がそう言った。

「俺が勝ったらアリシアちゃん達を俺がもらう!!」

「…はあ。別に良いけどさ」

言葉とは裏腹に俺の心には小さな怒りが生まれていた。  
こいつ…アリシア達を物扱いしやがった…

「勝負方法は？」

「シュート3本勝負だ」

ふう…

冷静になれ。

たかがクソガキだ。

「ふふふ…これでアリシアちゃん達は俺の物」

「……………」

…無理だな。  
完全に切れたわ。

「俺から蹴るぞ」

「別に構わないよ」

俺はゴールに向かって行った。

く一本目く

「たあっ!!!!」

「ふんっ!!!!!!!!」

飛んできたボールを殴りガキの腕に叩きつけた。

「いつてえええええ!!!!!!!!!!!!!!!!」

「悪い、手元がくるった」

く二本目く

「っせい!!!!」

「甘いっ!!!!!!!!!!」

飛んできたボールを蹴り返しガキの足にぶつけた。

「ぐあああああ!!!!!!!!!!!!!!!!」

「悪い、足元がくるった」

く三本目く

「このっ!!!!!!!!」

「白黒！！無式！！終蓮！！！！」

ボールに終蓮を打ち込みボールは霧散した。

「なっ！？」

「ありゃ～…ボールが古かったんだな」

これで俺の勝ちだな。

俺はゴールから移動した。

「あ～…めんどくさかった」

その後、フェイト、アリシア、なのは、すずか、アリサ、他のクラ  
スメイト達と鬼ごっこを行った。

勿論、俺は捕まらなかったが。

体育の授業って不思議と元気になるよな？（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます！！

ユタ様、ウイング様、フレイス様、銃王 海さん、蒼影様、ルシフ  
アー様感想ありがとうございます。

ユタ様よりケーキセットを、

銃王 海さんより宮崎名物「冷や汁」を、

いただきました。

「遊びに来たぞ」

竜馬「あ、優さんにアムちゃん」

アム「こんにちは…」

竜王「可愛いな」

優「だよな」

「コンニチハッコンニチハッ」

竜王「ん？八口？」

「勝手に行くなよ…」

竜馬「あ、蓮。…ハヤテはいないよな？」

蓮「連れてきて無いよ」

竜王「ちっ！！」

竜馬「その舌打ちは何！？」

「お〜い竜馬〜！！」

竜馬「次は…タクミじゃん！」

タクミ「竜馬、これやるよ」

竜馬「これって3DSじゃないか！！良いのか？」

タクミ「ああ、その代わりに俺に瞬動術を教えてください！！」

竜馬「オツケー！広いところに行こう」

「あ、行っちまった」

竜王「ああ、銀河君も来たんだね（あれを渡さないとな）」

「」「俺達もいるぜ！！」「」 闇遊戯・十代・遊星

竜王「いや、分かっているから。そこに座っててくれ今お茶を持ってくるから。あ、蓮、ちよつと来てくれ」

蓮「ん？何だ？」



竜王「前に貰った星の杖であつただろ？あれを一度だけで良いから男にも使えるようにしてくれ」

蓮「出来なくもないが…」

竜王「じゃあ頼む！！」

蓮「分かった。杖はどこだ？」

竜王「あそこに置いてあるよ。あ、それとこれがプレミアアの写真だよ。ついでにハヤテの人形も」

蓮「ありがとう。と言つかいつの間につつたんだ？」

竜王「トークしまshowの時に会ったから作れるんだよ」

優「手伝う事ってあるか？」

竜王「あ、それじゃあケーキセットを配ってくれ」

優「分かった」

「ごんにちは〜！！」

竜王「ん？えつと後は…ティアナだな」

ティアナ「キャロの服を受け取りに来ました！」

竜王「オツケー、そのトランクに入ってるよ。後、ティアナにこ

れをあげよう」「

ティアナ「これは…ありがとうございます…！でもいつ作ったんですか？」

竜王「ユウキには何回か会ってるからねえ。だから作れるんだよ」

蓮「竜王さん一応改造が終わったよ」

竜王「おっし、銀河くん」

銀河「なんだ？」

竜王「さあ、これを持つんだ…！ちなみに拒否権は無い」

銀河「え…仕方が無い…うおっ！？」 光に包まれる

蓮「これをやるためだったのか？」

竜王「依頼されてたからね… っとこれは…タイムを封印した時の服装だな」

闇遊戯「ぷっ…くくく…に、似合ってるぞ…」

十代「あはははは…！！！」

遊星「…大丈夫か？」

銀河「…遊星以外ぶっ飛ばす」



## 完成と未完成

side 魔神竜馬

…今さら気付いたんだが。

フェイトが学校に通っている。シグナム達と遭遇した。つてことだよな？

「だとしたら…」

レイジングハートとバルディッシュにはすでにカートリッジシステムが付いているんだな。

「…か、闇の書：いや夜天の魔導書の管理者人格ってどうやって助けたら良いんだ？」

「…無限書庫に行くか。無々、能力発動。形状はナイフ。無々、頼む」

『分かりました。時空間転移、開始』

俺は無々に頼み無限書庫に転移した。

え〜と…夜天の魔導書、夜天の魔導書。

「つと、あつた」

夜天の魔導書。

主と共に旅をして、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージ。

歴代の持ち主の何人かがプログラムを改変したために破壊の力を使う「闇の書」へと変化したと思われる。

その改変により、旅をする機能が転生機能に、復元機能が無限再生

機能へと変化してしまった。これらの機能があるため、闇の書の完全破壊は不可能とされる。

また、真の持ち主以外によるシステムへのアクセスを認めない。それでも無理に外部から操作をしようとする、持ち主を呑み込んで転生してしまうという念の入りようである。ゆえにプログラムの停止や改変ができないので完成前の封印も不可能。

頁は全部で666頁あり、一人の魔導師や生物のリンカーコアを蒐集できるのは一度きりである。この666とは獣の数字または悪魔の数字とされており、悪や闇の象徴的数字でもある。

… e t c

「……どうでもいいほどに基礎情報しか載って無いな。他には……ん？」

俺は目の前を通過した本を掴んだ。

えっと……

「カートリッジシステムによる反動や性能の向上性について？」

なるほど。

なのはとフェイトが使用しているんだからここに本が有ってもおかしくは無いな。

「何々…カートリッジシステムとは、魔力を込めた弾丸型カートリッジをロードすることで、本来魔導師が有する魔力以上の魔力の運用を可能とするシステムであり、使用法は1．魔導師の保有魔力量増加、2．行使魔法の不足魔力の補填、3．魔法の発動に要する魔力供給時間の短縮、4．圧縮魔力を利用した魔法の行使、5．行使魔法への魔力供給量増加があげられる、か」

確かにある程度のカートリッジを持っていれば魔力の消費量を抑えられるからな。

問題は反動などが…

「1・取り扱いの難易度が高い、2・過剰魔力運用による行使者へのフィードバック、3・高出力によるデバイスの破損、魔法の暴発が主なデメリットか」

これの多用のしすぎでなのはは墜ちるんだよな。

だがデメリットに目をつぶれば異常なほどに強化が出来る。

「ためして損は無いよな。無々、お前にカートリッジシステムってとりつけられるか？」

『私は元々ベルカ式ですのでカートリッジシステムにおける基盤はあります。ですが私を扱える者がいなかったので結局取り付けられていませんが…』

無々は寂しそうに言った。

取り付けられていない…

つまりは未完成って事なのか。

基盤はある…って事は少し手を加えれば良いんだな？

「無々、カートリッジシステムが付けばお前は完全な状態なのか？」

『はい、私の形状変化自体はカートリッジシステムを補助するために付けられた能力なんです』

って事は今までの無々の能力は全力じゃ無かった。

…完成させるか。

「んで？必要な素材とかってアースラにあるかな？」

『…あちらの素材ではいくつか足り無い物があります』

足り無い物？

いっただいなんだ？

『……………無人世界…フェニキアクス、フローズヴィトニル、リグ・ヴェーダ…この三つの世界にある劫炎の鉄、流星の鋼、金剛杵です』  
「何故そんな素材が必要なんだ？」

無々の挙げた物は明らかに普通のものでは無かった。

『この素材はどれも魔力を微弱ながらに持っているんです。通常の素材では私の行使する魔力に耐え切れずに焼き切れるか崩れ落ちます』

「なるほどな…」

つまりは元から魔力を持っている素材ならば自分の使う魔力を流しても壊れないと。

無々の言葉を聞き俺は理解した。

「オツケーだ。まずはフェニキアクスに転移してくれ」  
『了解しました。時空間転移、座標フェニキアクス』

そして俺と無々はフェニキアクスに到着した。

…あちい。

「なんだこの世界は…」  
『フェニキアクス、この世界は常に高温が地面から発せられています。その高温ゆえか生き物は一切存在しません』

生物がないのは楽でいいな。  
そう言えば…

「この世界には何の素材があるんだ？」  
『この世界には劫炎の鉄です。地下の奥深くに埋まっているはず  
す』

地下か。  
だったら…

「無々、形状変化。形状は重剣」  
『了解しました』

無々はナイフから重厚な剣へと変化した。  
一気にいくぜ！！

「だああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」  
「！！！！！！」

俺は地面に向かって思い切り重剣を振りおろした。  
そして地面には50メートル位の深さのクレーターが出来上がった。  
さて、どこだ？

「……………あれか？」  
『はい、劫炎の鉄です』

よっしゃ  
俺は素手で劫炎の鉄を掴んだ。





無々はうっかりと言った調子で言った。  
それに対して俺は手に息を吹きながら言った。

「はあ…ゲイト・オラ・バヒロン王の財宝に入れてくか」

俺は王の財宝を発動し中に蹴りいれた。  
流石にもう触りたくない。

「んじゃ、次に行くぞ。フローズヴィトニルだ」  
『了解しました。時空間転移、フローズヴィトニル』

そして俺達は次の世界に向かった。

## 完成と未完成（後書き）

～霊使い達の雑談～

感想と贈り物ありがとうございます！！

銃王 海さん、ユタ様、フレイス様、ルシファー様感想ありがとうございます。  
ございます。

銃王 海さんよりリサイクルボックスを、

いただきました。

「やつほ〜」

竜王「あ、ユタ様。それにアインも、？異世界を渡る？等の作者の  
ユタ様とリインフォース・アインスが来ました」

アイン「優から逃げるために来たらしいんだ」

竜馬「あはは…」

ユタ「にしても広いな」

竜王「そうですか？あ、お茶です」

アイン「ありがとう」

竜馬「ん？…ちょっと俺用があるから。んじゃ！…！」



アイシ「もう慣れたな」

地下の迷宮…ってド ケエか！！

side 魔神竜馬

今度は寒っ！！！！！！！！

フロースヴィトニルに書いて俺が最初に俺が思ったのはそれだけだった。

「おい！！どうなってるんだよ！！」

『フロースヴィトニル、常に上空には雲があり光も差さない極寒の世界です。故にこの世界には自身の体温を維持できる毛皮の多い物、もしくは体温の変化が一切ない物しか存在しません』

俺は全身を気で包んで無々に聞いた。

極寒の世界かよ…

「んで？ここにはどの素材があるんだ？」

『ここにあるのは流星の鋼です。この世界にいる生物、ヴァナルガンドの皮膚がそう呼ばれています』

生き物の皮膚か。

どんな生き物なんだ？

「そのヴァナルガンド？そいつはどんな姿なんだ？」

『ヴァナルガンド、鋼鉄製の皮膚をもった狼の姿で基本的には集団で活動しており獲物を見つければ連携によって獲物をとらえ強いものから順に食するという生態を持っております。また、彼等がこの世界で活動できる理由は皮膚である流星の鋼がどんな状況でも15〜20 を維持するという特性があるからです』

…集団かあ。  
めんどくさそうだなあ。

「ん？獲物？つて事は…」

「……………G u r r u r r u r r u r r u ……………」

俺が振り向くと鋼鉄の狼が6匹いた。  
やっぱりか…

「速攻で殺す。無々、形状変化。手甲」

『了解しました。形状変化』

無々は俺の言葉により重剣から手甲に変化した。  
とりあえず皮膚を剥がせばいいんだよな。

「ふっ！！爆ぜよ！！黒式！！黒蓮！！」

「……………G y a u u u u u u ……………」

俺は素早く3匹のヴァナルガンドに近づき黒蓮を打ち込んだ。  
ヴァナルガンド達の皮膚は左右に剥がれていった。

「……………G y u ! ? G y a u u u u u u ……………」

「…ふん」

皮膚が剥がれ血が流れていたヴァナルガンド達は一瞬で凍りついた。  
こいつは楽でいいな。

「皮膚の下は別に寒さに強いわけじゃないんだな」

『むしろ皮膚に守られていたお陰で生きていただけですね』

俺と無々は冷やかに言った。  
ヴァナルガンド達は凍りついた3匹を見て逃げていった。

「お、ラッキー えっと、流星の鋼、流星の鋼…っとなった」  
『これで後は金剛杵だけですな』

俺はヴァナルガンドの皮膚…流星の鋼を拾った。  
ほんのりと温かい。

「これも王の財宝ゲイト・オラ・パヒロンに入れておこう。んじゃ、次が最後だな」  
『はい、リグ・ヴェーダです』

リグ・ヴェーダ、そこには金剛杵があるんだな。  
ちやっちやと行きますか！

「時空間転移を頼む」  
『了解しました。時空間転移、座標リグ・ヴェーダ』

俺と無々はリグ・ヴェーダに転移した。  
…？

「どうなってるんだ？」  
『リグ・ヴェーダ、ここは地球とほとんど同じ気候を持っており知能を持つ生命体が多数存在します』

知能を持つ？  
って事は会話ができる者がいるのか？

「だからこんなビルみたいなのがあるのか」



『おそらくこの世界の生命体がつた物でしょう』

ふうん、本当に知能を持ってるんだな。

まあ、どうでも良いか。

「で？金剛杵ってのはどこにあるんだ？」

『この世界の地下にこの世界が出来た時から存在している迷宮があります。その中にあると言われていきます』

迷宮？

しかも地下？

「まあ良いか、入口はどこだ？」

『ありません。どうやらこの世界の生命体が埋めてしまったようです』

うげ…

つまり掘れと。

「じゃあ無い。無々、形状変化。大鎚」

『了解しました。形状変化』

無々は手甲から巨大な鎚に変化した。

一発で穿つー！

「はあああああああああ！……………！……………！……………！……………！……………！……………！……………！……………！……………！……………！……………！」

俺は思い切り地面に向けて巨大な鎚を叩きつけた。

地面は衝撃で陥没し地下の迷宮への入り口が完成した。

『…生体反応が来ます。どうやらこの世界の生命体のようです』  
「めんどくさくなりそうだな。さっさと行くぞ」

そう言って俺は地下の迷宮の中に入っていった。

地下の迷宮…ってド ケエか！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物が来ております！！！！

銃王 海さんより耐火・耐冷の手袋を、

いただきました。

「来てあげたわよ…」

「ちよつシヤナ！！」

竜王「ん？ああ、銃王 海さんの所からシヤナ・坂井悠二・池隼人・

吉田一美・佐藤啓作・田中栄太・緒方真竹が来ました」

池「結構広いんだな」

一美「可愛い人形もあります」

竜馬「おいつす」

シヤナ「…お前、もう一度私と戦いなさい」

竜馬「は？まあ良いけど」

シヤナ・竜馬は訓練所に移動した。

観戦に悠二・啓作・栄太・真竹がついて行った。

一美「あの！！キッチン使っても良いですか！！」

竜王「ん？良いよ。一応調理器具とかは良い物を扱ってるからねえ」

「こんちゃ〜！！」

竜王「お、ハヤテか」

ハヤテ「竜王さん、これ届けに来たで」

竜王「あ、ありがとう」 星の杖（男でも使えるようにしました  
er.）を受け取る

ハヤテ「それで・竜馬君は？」

竜王「あつちでシヤナと戦ってる。と言つ訳で今の内に竜馬をどうするか決めよう」

ハヤテ「了解や」

「粉碎 玉砕 大喝采！！」

竜王「あ、キャラだ」

キャラ「竜王さん！どうですか！！」

竜王「うん！似合ってるぞ」 頭をなでる

キャラ「ありがとう〜いいます」

「ここだと普通なんですな…」

竜王「スバルか……とりあえずこれを着るんだ!!」

スバル「へ？は、はい」

ハヤテ「何を渡したんや？」

竜王「見れば分かる」

スバル「着てきたよ」

キャラ「お前は遊戯いいいいいい……!!……!!……!!……!!滅びのバースト  
ストリーム!!……!!」

スバル「え？きゃあああああ!!……!!……!!」

ハヤテ「あゝ遊戯の服を渡したんやね」

竜王「おう、予想通りだ」

「こんにちは……!!」

竜王「今度は、ヴィヴィオとアリシアだな」

アリシア「……これは何？」　スバルを指差す

竜王「秘密だ。ヴィヴィオは元気か？」

ヴィヴィオ「元気だよ!!」



お化けとか幽霊とかってキライ!!

side 魔神竜馬

「…暗いなあ」

迷宮の中をさまよいながら俺は呟いた。  
ギリギリ足元が見えるくらいの明るさなのだ。

「なんかこつ幽霊でも出そ…う…な…」  
「どうかしたんですか？」

俺の語尾が徐々に小さくなる事を不審に思ったのか無々は尋ねた。  
だが、俺に答えられる余裕は無かった。  
何故なら目の前に体が淡く光った人型の物が浮かんでいたからだ。

「マスター？」

「…む、無々？あ、あれは生き物だよな？なっ？」

俺は光る物を指差し震えながら無々に尋ねた。  
幽霊なんていない、いるはず無いもんな!!

「…いえ、生体反応ありません。あれは生き物ではありません」  
「……………」

無々の言葉を聞いて俺は聞きたく無かったと思った。  
つまりあれは生き物じゃないと…  
そして生き物でもないのに動いていると…

「いいいやああああああああああああああああああああ  
あ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

『ま、マスター!?!』

俺は大きな声を出して走った。

無々が驚いてるけど気にしない！

いや、気出来ない!!!!!!!!!!



side out

side 第3者視点

「無々!!!!形状変化!!!!!!双剣!!!!!!」

『りよ、了解しました』

無々は驚きながらも大鎚から双剣に変化した。

「ああああああああああああああああああああ!!  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

竜馬が叫ぶと右手の日本刀から気の刃。

左手の西洋剣から魔力の刃が伸びていった。

「お化けクライお化けクライお化けクライお化けクライお化けクライ  
お化けクライお化けクライお化けクライお化けクライお化けクライ  
お化けクライお化けクライお化けクライ!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!」

そう叫びながら竜馬は迷宮の壁を、床を、天井を斬り裂いていった。  
迷宮中に地響きが巻き起こる。

『と、止まってくださいマスター!!!!』

「イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ  
イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ  
アアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

無々の制止の声も聞かずに竜馬は暴走を続ける。

ついには地響きをあげて迷宮は崩れ始めた。

…そして

「はあっはあっはあっ……」

『落ち着きましたかマスター』

迷宮の残骸の中心に竜馬は立っていた。

s i d e o u t

s i d e ? ? ?



「こんな世界にも来てたのかよ…」

俺を攻撃してきた奴。

それは紅いゴスロリ服を着た少女…ヴォルケンリッターが1人。  
鉄槌の騎士ヴィータだった。

お化けとか幽霊とかってキライ!! (後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、フレイス様、銃王 海さん、バラランシャ様、ルシファー様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより竜馬のポスターを貰いました。

竜王「これは壁に貼るところ」

竜馬「マジか…」

「呼ばれたから来ました」

竜王「ん？なのはだな、エリオもいる。フレイス様の所から2人が来ました」

エリオ「バトルロワイアルで挨拶が出来なかったので来ました」

なのは「ところで紫さんは？用があるって聞いたから来たんだけど…」

紫「来たのね。それじゃあ早速だけど竜馬にSLBを撃つてくれな  
いかしら」

竜馬「はっ!?!」



なのは「私に竜馬君を撃つてほしかったただけなのかな？」

エリオ「僕は挨拶が出来たので良いですけど…」

竜王「あ、じゃあ2人にはとりあえず起動状態のデバイスの人形をあげるよ。他に欲しいって言う人がいたら後書きに来るように言っておいて」

なのは・エリオ「ありがとうございます」

「…大丈夫か竜馬」

竜馬「あ、ありがとうございます優さん」

竜王「ん？ユタ様の所より優と久遠が来ました。…ユタ様も来るはずだったんじゃない？」

優「うるさかったから凍らせてきた」

竜王「あゝ…とりあえず？治療の焰？を撃っておこう」

優「そんなことしなくても良いのに」

ゼウス「そう言えばお主も神じゃったな」

優「お前より上のランクだがな」

ゼウス「…ほう、やってみるか？」

優「俺は構わないが？」

竜王「……………？黄昏？の武器 all fusion」

ゼウス「ちょっ！？竜王！？何故わしに武器を向けるの！？」

竜王「合成完了…？黄昏の極器？絶対に暴れないでくださいね？」

黒い笑顔

優「笑顔なのがさらに怖い所だな」

久遠「お兄ちゃん、お腹が空いた」

竜王「あ、キッチンを使って良いですよ」

ゼウス「わ、分かったから！！暴れない！だからその武器を降ろして！！！」

竜王「なら良いですけど…？黄昏の縛器 - ラグナロク？」

ゼウス「なんじゃこれは？」 腕に巻き付いた鎖を見る

竜王「気にしないでくれ。ただそれがついている間は対象の能力をゼロにするだけだから」

ゼウス「それって今わしが攻撃を受けたらあっさりと死んじゃうってこと！？」

竜王「大丈夫大丈夫、帰るときには外すから」

ゼウス「それならば良いが」



竜馬「（春人がこの状況を聞いたらどう思うんだろ？）」

竜王「竜馬、そんな事は気にするな。それじゃ久々に締めを言え」

竜馬「心読むなよ…闇を狩る少年続きます」

竜王「つてゼウス！！ケーキのかすを床に落とすな！！！！！！」

久遠「おいしい」



「無々、形状変化。手甲」  
『了解しました。形状変化』

無々は双剣から手甲へと変化した。  
ハンマーや杖、棒などの弱点は!!

「対象に当たる直前に柄の方を止められる事!!」  
「何!？」

俺は突撃してくるヴィータのグラーフアイゼンの先端を避けて柄を  
思い切り打ち抜いた。  
グラーフアイゼンは勢いでヴィータの腕から吹き飛んだ。

「くそっ!!」  
「今の内!!ふっ!!!!」

ヴィータが飛んで行ったグラーフアイゼンを見ている隙に俺は瞬動  
術を使った。

∴名前を言っただけ無かったな。

「まあ、良いや。どこだ？」  
『この場所から…50mほどです』

あまり動いてなかったな。  
この距離じゃヴィータにすぐに見つかったらまずい。

「無々、能力解除」  
『了解しました』

俺の言葉に無々は手甲から腕輪へと戻った。  
これで魔力探査には引つかからないよな？

「さて、ゆっくりと探しますか」

俺はゆっくりと歩き始めた。

ん？

何だこの影は？

「無々、この影何だと思う？」

『この世界の生命体の様です』

…どんだけでかいんだよ。

影の中に俺が入っても余るぞ？

「えっと、この世界の生命体の身長と違って分かるか？」

『はい、と言うよりも後ろにいるんですから見たらどうですか？』

いやさあ、これで怒ってる顔とかだったら物凄く嫌じゃん。

そう思いながら俺は振り向いた。

「……………」

「……………」

どうしたら…

ものすっごい怒ってる表情だし…

「む、無々…どうして怒ってるんだと思う？」

『おそらくマスターの攻撃がこの者に当たったのではないでしょう  
か？角が片方斬れてますし』



俺は拾ったビー玉サイズの球体を見せた。  
これかよ…っーか小っさ!!

「まあ、良いか。無々、能力発動。形状はナイフ。無々、転移を頼む」

『了解しました。時空間転移、座標アースラ』

無々はそう言って時空間転移を行った。

そう言えばヴィータはどうなっただろう？

side out

side ヴィータ

くっそ〜!!…!!…!!

どこに行きたがった!!

「グウウウウウウ……」

「ん？何だよ」

何だこいつ？

鬼か？

「グワアアアアア……!!…!!…!!」

「なっ!?!」

鬼はいきなり攻撃してきた。

何しやがんだ!!!

「アイゼン!!カートリッジロード……!!」

『了解!ラケーテンフォーム!!』

一気に叩き潰す!!

「ラケエエエエエエーテン!!!!ハンマアアアアアアアア  
————!!!!!!」

「グギヤアアアアアアアア!?!?」

あたしは思い切り鬼の腕を吹き飛ばした。  
これで蒐集出来るか?

「お前はあいつの代わりだ。闇の書、蒐集」  
『蒐集』

あたしは鬼からリンカ コアを蒐集した。  
あいつからならもつと蒐集出来たと思うんだけどなあ…

『蒐集完了』  
「帰ってはやてと遊ぼう…」

そう呟いてあたしは轉移した。

記憶にない事は気にしない!! (後書き)

♪ 霊使い達の雑談♪

贈り物と感想ありがとうございます。

銃王 海さん、フレイス様、ユタ様、ルシファー様、バラランシヤ様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより霊が見えるようになる札をキャラ全員に、ユタ様より竜馬に封印符・悪霊を、

いただきました。

竜馬「なんだこの札……いやあああああ……!!……!!……!!」

ゼウス「幽霊が見えるようになったらしいの」

竜王「だからケーキのかすをこぼすなって。あ、竜馬。それ送ってきたのは圭だぞ」

竜馬「……………殺す」

「さっきの悲鳴は何?」

竜王「ん? ティアナとフェイトか。竜馬が幽霊を見たんだよ」

フェイト「幽霊が苦手なんだ」

竜馬「…して…後は…これを……………そして……………」





竜王「…エリクサーを一応送っておく」

「いきなり何を撃ってるんですか？」

竜王「ん？竜馬が幽霊を見たから。アインとセイが来ました」

セイ「どうも、なにやらにぎやかですね」

竜馬「お？アインさんにセイさん。こんにちは」

竜王「お茶を持ってこよう」

ティアナ「あ、そう言えばフレイスから質問が」

竜王「ん？何？」

ティアナ「いつも後書きに行って迷惑じゃないですか、と」

竜王「ん〜…別に迷惑じゃないよ。それに楽しいし はい、全員分のお茶」

アイン「ありがとうございます」

「我が来てやったぞ！！」

竜王「今度は…星菜、ライラ、桜花か。ケーキ食べるか？」

ライラ「食べるよ！！」

桜花「食してやらん事もないな」

星菜「いただきます」

ゼウス「あれ？わしを連れ戻しに来たんじゃないの？」

星菜「これを食べてからでも遅くは無いので」

桜花「私の行いを愚弄する気か！！」

竜王「暴れたらケーキを取り上げるからね？それじゃあどうぞ」

ライラ「いったただっきまゝす」

竜馬「…（理のマテリアルが2人いるけど大丈夫なのか？）」

竜王「気にするなよ。闇を狩る少年続きます！！ってライラ、かすをこぼすな！ゼウスもだ！！」

フエイト「…（お母さんみたい）」

ティアナ「…（お母さんだ）」

竜馬「…（お母さんだな）」

虚無と無限 (Nihilität und Unendlichkeit)

side 魔神竜馬

「ふゝ…アースラも久しぶりな気がするな」

無々の転移により俺はアースラに着いた。  
早速研究室に向かおう。

「  
}  
}  
}  
}  
}  
}  
」

移動しながら俺は歌い始めた。

「  
}  
}  
}  
}  
}  
」

えっと確かここを右に曲がるんだったよな。  
俺はうる覚えの道を曲がった。

「  
}  
}  
}  
}  
}  
}  
」

…あれ？  
行き止まり？

「  
}  
}  
}  
}  
}  
}  
」

俺は来た道をUターンした。  
どうやって行くんだったけか？

「  
}  
}  
}  
}  
}  
}  
」

俺は十字路の廊下で立ち止まった。

エイミイにでも聞こうかな？

「  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）」

どうするかなあ…

とりあえず歌いきろう。

「  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）」

ふう、これで歌い終わったな。

ん？

何で拍手が聞こえるんだ？

「え？」

周囲を見渡すとアースラの局員が何人かいた。  
聞かれてたのか…

あ、そうだ今聞けばいいじゃん。

「誰か研究室への道って知りませんか？」

「それならその角を曲がってすぐの部屋だよ」

俺の質問に男性局員が答えた。

そこかよ…

「ありがとうございます」

「いえいえ」

そう言っつて俺は研究室に向かった。  
研究室にはプレシアがいた。

「あら、アリシア達から聞いていたけど本当にこの世界にいたのね。  
どうしたの？」

「無々を完全な形にしてやりたくてな。協力してくれ」

プレシアの問いに俺は答えた。

side out

side 虚無と無限

プレシア・テストロツサ、彼女なら私を完成させられるでしょう。  
私が完全な物へとなればマスターの役にもっと立てるはずです。

「んで？無々、集めてきた素材だけどこれをどうするんだ？」  
『では、まず劫炎の鉄を小さくしてください。それをカートリッジ  
の芯にします』

カートリッジを先に作ってしまえばあとは容易い物ですからね。  
マスターは劫炎の鉄を取り出しにえとのじょうが贄殿嫦娥で小さく切りました。  
普通の刀なら熱で溶けてしまうのですが…やはり業物ですね。

『それぐらいで充分です。次は流星の鋼をカートリッジの形に加工  
してください』

「これは俺じゃ無理だな。プレシア頼む」  
「分かったわ」

そう言っつてプレシアさんは流星の鋼を持って隣の部屋へ行きました。

……何故か悲鳴に近い物が聞こえるのは何故でしょう。

まあ、どうでも良い事ですね。

『マスター、今の内に金剛杵を六分割してください』  
「六分割が分かった。はあっ!!」

マスターは金剛杵を上に掲げ六つに切り分けました。  
お見事です。

それと同時にプレシアさんが戻ってきました。

「これで良いのかしら？」

『はい、大丈夫です』

プレシアさんはカートリッジの形にした流星の鋼を持ってきました。  
後は組み合わせて加工するだけです。

『その流星の鋼の中に劫炎の鉄を入れてください。そして弾頭部分  
に金剛杵を取り付けたのち形を調整し外れないようにしてください』

「こづ…かな？」

「こづ…じゃないかしら？」

私の言葉にマスターとプレシアさんは頭上に？マークを出しながら  
組み合わせていきました。

『それで大丈夫です。あとはそれを外れないように加工すればカー  
トリッジは完成です』

「それじゃあもう一回頼む」

「オッケーよ」

プレシアさんはそう言ってまた隣の部屋に行きました。  
そしてやっぱり悲鳴の様な物が聞こえてきました。

「……なにで加工してるんだろ」  
『気にしない方が良い気がします』

マスターの呟きに私は答えました。

「そう言えば、どうやって無々を完成させるんだ？俺って無々が外れたら魔力が危ないんじゃないか？」

『大丈夫です。私がマスターにリミッタ を付けますから』

流石にここを中心として次元震が起きてしまっただけは私も壊れてしまいませんし。

何よりマスターも死んでしまいます。

「そっか、なら安心だな」

『はい』

そんな事を話している内にプレシアさんが戻ってきました。

「加工が終わったわよ。こんな色だけど大丈夫かしら？」

『大丈夫です。それと弾頭には触れないでください、魔力を吸収します』

管理局で言うSクラスの魔力があれば大丈夫ですが。

私の言葉にプレシアさんは驚いた表情をしました。

「そんな効果が必要なカートリッジなの？」

『ええ、それではプレシアさん私を完全な物にしてください』

私はマスターにリミッタ を掛けてプレシアさんの目の前に転移しました。



side out

side 魔神竜馬

『マスターおそらく時間がかかると思いますので待っていないくて結構ですよ』

「そうか？じゃあ、俺ちよつとなのはの家の人とかにでも会って来るよ」

俺は研究室から出て転送ポートへ向かった。

「次元転送、座標、海鳴市。転送開始」

転送ポートを使い俺は海鳴市へ転移した。

あ、無々がいないから戻れないや。

まあ良いや、一応王の財宝ゲイト・オブ・パレロンは使えるし。

「さ〜てまずは翠屋だな」

そう呟いて俺は翠屋に向かった。

あそこのケーキも久々に食べたいしね

「いらっしやいませ〜…あれ？竜馬君？」

「お久しぶりです。美由紀さん」

俺は受付をやっている美由紀に挨拶をした。

あれ？

恭也はどうしたんだ？

「久しぶりだね〜。元気だった？」

「はい。恭也は手伝って無いんですね」

俺の言葉に美由紀は笑った。

「あつたりまえだよ。だって今日、恭ちゃんは忍さんとデートだも  
ん」

「あゝ…なるほど」

美由紀の言葉に俺は頷いた。  
それじゃあ仕方が無いな。

「土郎さんと桃子さんは？」

「2人で出かけてるよ。まだ新婚気分みたい」

…まあ、2人らしいと言えはらしいかな？  
すると翠屋のドアが開いた。

「いらっしやいませ」

はっ!?

うっかり言ってしまった!!

「あれ？竜馬君？」

「おまえは!!」

入ってきたのははやてとヴィータだった…





蓮「謝りに来たんだろ」　ハヤテを捕まえる

ハヤテ「そうやった。竜馬君この前はごめんなさい」

竜馬「い、いえ…」　部屋の隅のカーテンの影に隠れている

蓮「そうだお土産の人形があるんだ。俺が作ったぱんにゃとキングぱんにゃのぬいぐるみ」

竜王「どうやって収納したんだ？」

ハヤテ「内緒や」

「強靱　無敵　最強！！！」

竜王「この声は！！キャロだ！！！」

竜王・キャロ「粉砕　玉砕　大喝采！！！！！」

「どつゆうこつちゃねん！！」　ハリセンで竜王の頭をひっぱたく

竜馬「あ、はやても来たんだ（今度ははやてが2人いるなあ）」

竜王「いたた、フレイス様の所からキャロとはやてが来ました」

キャロ「流石は竜王さんです！！！」

竜王「いやいや。あ、キャロにケリュケイオンの起動状態の人形をあげるね」



ユタ「お…俺にも……」

竜馬「やば!?? 治癒の焰?」

竜王・ユタ「死ぬかと思った」

橙「ごめんなさい……」

桜花「むう…今回は許してやろう! 寛大な我に感謝するが良い  
!!!」

「だれがオコリザルだあああああ!!!!!!」

竜王「あ、かがみんだ。銃王 海さんの所より柊かがみが来ました」

かがみ「りゅ〜お〜…だあれがオコリザルよ!!!」

竜王「……今のお前?」

かがみ「ぶちっ!!!!!!」

はやて「今のは竜王さんが悪いな」

竜王「気にしないい あ、あまり部屋は散らかさないでね? 片付けるのに苦労するから」

かがみ「(無視か!!!!!!!!!!)」 殴りかかる

竜王「危な!?! キヤロ、社長になっても良いけどあまり騒ぎすぎて

疲れて眠らないようにね？はやてがおんぶして帰る事になるから

キャロ「分かりました!!」

かがみ「（なんで!!あたらしらないのよ!!）」 連続で攻撃中

竜王「（?黄昏の拳器・ラグナロク?のお陰で楽だなあ）あ、ライラ!ピーマンを残すな。ゼウスはニンジンをはじかない!!」

キャロ「（お母さんみたいです!!）」

はやて「（昔のうちみたいや）」

蓮「（まるでお母さんだな）」

ハヤテ「（竜王さん、お母さんみたいや）」

かがみ「いい加減に当たりなさいよ!!!!」

竜王「オツケー!あだあつ!!」

竜馬「わざと当たったな」

竜王「気が済んだか?それじゃあ締めを頼む」

かがみ「（完全に竜王のペースな気がする...）闇を狩る少年続くわよ!」

竜馬「...（何で当たったんだ?）」



竜王「よいしょっと」 ?黄昏の剣器・ラグナロク?の装備を解除する

竜馬「(不可視のフィールドで攻撃を弱めてやがった!!)」

俺の名前って覚えにくいか？

side 魔神竜馬

「久しぶりやな〜いつ海鳴市に戻ってきたんや？」

「……………」

物凄い勢いでヴィータが睨んで来ている。  
どうした物か…

「4日前だよ。色々と一段落がついたから翠屋に来たんだ」

「そうなんか…うちの約束忘れてへんよな？」

約束？

ああ…あれか。

「この街に来たらはやての家に行くって約束だろ？覚えてるよ」

「なら、今から家に来いひん？」

今から？

俺は美由紀の方を向いた。

「ああ、気にしないで良いよ。お父さん達もいないんだからまた今度挨拶に来てよ」

「分かりました。それじゃあ行くか」

美由紀の言葉に頷き俺ははやてに言った。  
後で何か持って来て挨拶しないとな。

「ほなら、レッツゴー」

「……………」

やっぱりヴィータが凄い勢いで睨んでいる。

まあ、良いや。

どうせ今はリミッタ がついてるんだし魔力は分からないだろ。

side out

sideヴィータ

…あいつはあの時の奴だよな。

でも感じる魔力が全然無いぞ？

どうなってるんだ？

「なあ、はやて。あいつ誰だ？」

「ああ、ヴィータ達には言っておらんかったね。うちの友達の魔神  
竜馬君や」

まがみ…りや、りよ？

ああ、覚えにくい！！

「おい、まじん」

「……………俺か？」

あたしの言葉にまじんは聞き返した。

お前以外に誰がいるんだっての。

「…俺の名前を聞いてなかったのか？」

「覚えにくいんだよ！だからお前はまじんだ！」

あたしの言葉にまじんは呆れたような表情になった。

呆れてんな！！

「まあ、良いか。んで？お前さんの名前は？」

「あたしか？八神ヴィータだ」

あたしはまじんの質問に答えた。

そう言えば名乗って無かったんだっとな。

「2人共もう仲良くなったんか？」

「なあってねえよ！！！」

はやての言葉をあたしは否定した。

なんでこんな奴と仲良くしなきゃいけないんだよ。

「ヴィータ、主は<sup>あるじ</sup>はやての近くに微弱だが魔力反応があるのだが…何か知らないか？」

「シグナムか…いや、はやての友達つてのがいるんだ。ただ、そいつとは別の世界で一度会ってるはずなんだよ。今よりももっと大きな魔力を持って」

シグナムから念話が来たからあたしは答えた。

本当にこんなもんじゃ無かったはずなんだけどなあ…

「そうか、危険だと思ったたらすぐに連絡をしてくれ」

「分かった。つってももうすぐ家に着くけどな」

そう言っであたしは念話を切った。

一応まじんを見たが聞こえている様子は無かった。

「む？どうかしたのか？」

「何でもねえよ！！！」

まじんの言葉にあたしは怒鳴り返した。  
そしてあたし等は家に着いた。

俺の名前って覚えにくいか？（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、バラランシャ様、銃王 海さん、ユタ様、ルシファー様感想ありがとうございます。

バラランシャ様より死滅の黒薔薇のレプリカ×1を、

銃王 海さんより竜のウロコ、980円高性能テレビを、

いただきました。

竜馬「…春人に怒られるだろうな」

ゼウス「怖いからそれはわしに向けないでね!？」

「こんにちは〜!!!!!!」

竜王「元気な挨拶、と言う訳でフレイス様の所からスバルとリインフォース・ツヴァイが来ました」

ツヴァイ「こんにちはです」 竜王の頭に着地

スバル「リイン曹長それは失礼なんじゃ…」

竜王「気にしないよ〜。はい、スバルにはたくさん作った料理があるよ、ツヴァイにはクッキーね」



オンブレイカーを受ける

桜花「星菜があそこまで怒るのも珍しいな」

竜王「星菜、ちゃんと鍵をしめなくちゃ」

ライラ「竜馬が気絶してる内にプリン食べちゃおう」

竜王「あとで竜馬用にプリン作つとかなきゃ」 星菜、ライラ、桜花、ゼウス、橙、カオスの服をたたんでいる

スバル「もぐもぐ…がっがっ…（ティアの言うとおりお母さんみたいだなあ）」

ツヴァイ「…お母さんですか？」

ツヴァイ・竜王以外「（言っちゃった！！！！！！）」

竜王「俺が？ん…まあ悪い気はしないよ。一応、夢は保育士だし」

ツヴァイ・竜王以外「（以外な反応と以外な夢！！！！！！！！！！）」

ツヴァイ「そうですね。クッキーおいしいです」

竜王「それは良かった。締めは誰が言う？」

レン「僕が言っても良いですか？」

竜王「良いよ〜」



レン「それでは、んんっ。闇を狩る少年続きます」

スバル「おかわり!!」

竜王「作り甲斐があるなあ」

竜馬「……………（俺、放置？）」

星菜「自業自得です」

闇と？闇？…（前書き）

竜王「……………」

竜馬「どうした？」

竜王「……………」 紙を渡す

竜馬「ん？え〜と…PV数344704にユニーク数37449人  
！？」

竜王「驚いたよ…PV30万突破記念を12日前にやったのに  
…」

竜馬「え！？これドッキリとかじゃないの！？」

竜王「ああ、どうしよう。バトルロワイアルは前回やったし…フレ  
イス様が引き受けてくれたらデュエルになるけど…」

竜馬「流石に迷惑かな？」

竜王「あと、考えているのはそれぞれの作品から主人公を呼んで雑  
談会風にしようかなってくらい？」

竜馬「だとしたら質問の内容を考えないといけないのか…」

竜王「うん。どうしよう…」

闇と？闇？…

side 魔神竜馬

シグナムとウィータが念話をしてたけど…

まあ、どうでも良い事だったので気にしない事にしておいた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

はやてが玄関を開けるとシグナムが出迎えた。

一瞬物凄い目で睨んできたよ…

「こちらの者は？」

「うちの友達の竜馬君や」

はやての言葉にシグナムは微妙に警戒しながら俺を家に入れた。

リビングに行くとき青い狼…もといザフィーラ、そしてシャマルから警戒している視線を感じた。

「…でっかい犬だな」

「そうやる」

とりあえずはごまかして進めるか。

俺はザフィーラに近寄った。

「貴様、何者だ」

シグナムから念話が届いた。

とりあえず無視無視。

「さして、竜馬君。何をやるか？」

「久々にスマ ラでもやるか？」

そして俺とはやて、ヴィータでス ブラをやった。  
はやてやっぱつええ…

「あー！ー！！やられた！！！」

「はやて！手加減してくれよ…！」

「甘いでヴィータ。勝負は時として非常にならないといかんのや！  
！」

結果ははやてが圧勝して1位、次に俺とヴィータが同着の2位と言  
う結果だった。

つーかゲームやってる最中もシグナムの念話がうるさかった…  
あれが無ければきっと1位だったんだ。

うん、きつとそうだ。

「ところではやて。ヴィータ達はどうしてお前の家に住んでいるん  
だ？」

「えー！？え、えっと…その、そうや！あれや、遠い親戚なんよ！！！」

俺の質問にはやては面白いほどに動揺していた。

一応は聞いておかないとな。

「ふーん、じゃあそこで立っている人は？」

俺は座ろつともせずにごちらを見ている…いや、睨みつけているシ  
グナムを指差し聞いた。

「あれはシグナムや。剣術が強いんやよ」  
「じゃあ、あつちの人は？」

次に俺は椅子に座り紅茶を飲んでいるシヤマルを指差した。

「あつちはシヤマルや。絶対に料理させたらあかんで」  
「はやてちゃん酷い!!」

はやての言葉にシヤマルは軽く涙を浮かべた。  
最後に俺は近くににいるザフィーラを指差した。

「じゃあこの犬は？」

「これはザフィーラや、毛がふさふさで気持ちええよ」

これで名前を呼んでもおかしくは無いな。

「シグナム、シヤマル、ザフィーラだな。魔神竜馬です、よろしく」  
「まじん!!なんであたしの名前は呼ばないんだ!!」

俺の言葉にヴィータが叫んだ。

俺の名前は覚えにくくないと思うんだけどなあ…

「まじん？魔神まがみでは無いのか？」

「魔の神だろ、だからまじんだ!!」

シグナムの問いにヴィータは胸を張って答えた。

「はいはい、ヴィータもよろしくな」

「それで良いんだよ…!!？」

いきなり庭に爆音が響き渡った。  
何だ!?

「ココニ闇ヲ持ツ書物ガ有ルノカ」  
「何もんだてめえ!!!」

庭にいたのはまるで子供が粘土で作った人のような形物だった。  
グイータは怒鳴りつけた。

「すまん、はやて」  
「なんなんやいつたい…え？」

俺ははやてに謝り首に手刀を放った。  
はやては気絶した。

「貴様!!主に何をした!!!」  
「気絶させたただけだよ…見せたくないしな」

シグナムは俺の行動に怒鳴った。  
さて、あれはおそらく?闇?だな。

「ム?才前八…」

庭にいる物は俺に気が付いた。  
やっぱり関わらない方が良くもな…

「何も知らずに散って行け…白黒!無式 終蓮!!!」  
「ヤハリ才前八?闇ノ狩リト…」

何かを喋っていたが俺は気にせずに終蓮を打ち込んだ。

そして庭にいる物は完全に霧散した。

「な！？魔力を一切使わずに!?!」

「どうなつてやがるんだ…!」

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラは俺に向ける警戒の視線を強めた。

最悪だな。

「貴様、何者だ。管理局の者か」

「いいや、ただの狩人だよ…はやてに謝っておいてくれ、いきなり帰ってすまないってな」

そう言つて俺は瞬動術を使いはやての家から移動した。

あの？闇？…

いったいなんだったんだ？

言動からして闇の書…いや、夜天の魔導書を狙っている事は分かったが…

「さつさと帰るか…!」

ひとまず俺は月村家へ帰ることにした

無々はまだ完成しないのか？

闇と？闇？…（後書き）

～霊使い達の雑談～

感想と贈り物ありがとうございます！！

ルシファー様、フレイス様、バラランシャ様、銃王 海さん、ユタ様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより押したらタライが降ってくるスイッチを

いただきました！！

竜馬「ライラ！！俺のプリン食っただろ！！」

ライラ「気絶してるのが悪いんだよ！！」

竜王「子供かよ…よし、このスイッチを押そう」

ライラ「うわ！？」 白くてドロドロした物がかかる

竜馬「ちょ！？ライラ！？」

ライラ「うええええ…何これ…」

竜コンビ「（うわ！！エロッ！！！！）」

星菜「ライラ、何故ヨーグルトを被っているんですか」

ライラ「いきなり降ってきたんだよ。お風呂に行くよ」 服を脱



ぎだす

竜王「う、うわ！うわ！」 目を隠す

星菜「ライラ、洗面所で脱いでください」 ライラを押ししていく

「こんにちは、お邪魔します」

「お邪魔しまーす」

竜王「あ、フレイス様の所よりエリオとユウキが来ました」

ユウキ「スバルが喰いすぎたみたいで…すみませんでした」

竜王「気にして無いよ〜。はい、マンガ肉」 エリオとユウキの目の前を出す

「遊びに来たよ〜」

竜馬「あ、優さんにニンフさん。ユタ様の所から2人が来ました」

優「…凄い量を喰ってるな」 エリオを見る

竜王「スバルよりは少ないけどね〜」

ユウキ「久々にデュエルでもするか？」

竜馬「いいな！よしあっちでやろっ！」 訓練室に行く

ニンフ「あ、可愛い人形がいっぱいある」

竜王「そうだ、優が9歳くらいの姿の人形を作ろうかな」

優「作れるのか…」

エリオ「おかわりしても良いですか？」

竜王「まあね。あ、おかわりだね？あまり食べすぎるなよ？デザートがあるんだから」

エリオ「はい」

ゼウス「デザートがあるのか！」　今まで寝ていた

竜王「あるよ」

桜花「我也食してやらんこともないな」

竜王「全員分あるから。優とニンフも食べる？」

優「いただく」

ニンフ「ありがとう」

竜王「じゃあ、デザートは締めを言ってからかな。えっと…優頼んだ」

優「分かった。闇を狩る少年続くぞ」

エリオ「竜馬さんと兄さんは呼ばないんですか？」

竜王「全員分あるって言ったろ？取っついてあるよ」

（訓練室）

ユウキ「ショックウェーブを発動！！」

竜馬「また引き分けかあ」

竜馬・ユウキ LPO

竜馬「もう一度だ！！」

ユウキ「おう！！」

新たな力、カートリッジロード!!

side なずな

「え？竜馬君ならこの前来たよ？」

「本当ですか!？」

美由紀さんからそう聞いて私はとても驚きました。

今、私はアースラで生活をしていて時々翠屋で働かせてもらっている状態です。

「まあ、すぐにはやてちゃん家に行っちゃったけどね」

「はやてちゃん、ですか？」

誰だろう？

竜馬君の友達かな？

「なずなさん。明日、竜馬君に会いに行きますか？」

「そう…しよつかな」

なのはちゃんの言葉に私は頷きました。

竜馬君に私がアースラに乗っている事も教えとかないと。

side out

side 魔神竜馬

無々はまだ完成体にならないのか…

今日は…12月23日。

「はやてはもう入院したのか…」

はやての家に行ってから4日が経った。  
あの後、俺は何となくはやてやヴォルケンリッター達から離れて行動するようにしていた。

「お見舞い、か…」

原作を見ていたから入院する事等は知っているが…  
仲間が苦しんでいるって事は映像を見ている事よりも辛い!!

「明日の夜中、なんだよな…間にあってくれ、無々」

「竜馬君、なのはちゃん達が来たよ」

不意にドアを開けてすずかが入ってきた。  
なのは達が？

「こんにちは」

「おお、こんn……!?!」

うえ!?!?

なずな!?!?

「こんにちは竜馬君」

「な、なずなさん!?!何でここに!?!」

俺はなのはと一緒になずながいる事に驚いた。

なずなは？ひだまりスケッチ?の世界にいるんじゃない?!

「リンディさんに頼んだの」

「…そうですか」

リンディの名前が出た時点で俺はいくつか諦めた。  
あいつは何気に融通が効くからなあ…

「ところでどうしたんだ？」

「あ、実はねすずかちゃんの友達に入院してる子がいて皆でお見舞いに行こうって話になってるの。それで明日サプライズでプレゼントを持って行こうって話になって」

ああ…

ヴォルケンリッター達との再開か…

「それで作戦会議のためにすずかの家に来たの…!!」

アリシアは嬉しそうに言った。

おそらく俺が行くのは確定事項なんだろうな。

「そうか、すずかキッチン借りて良いか？」

「別に良いけど、何をするの？」

俺は自分の唇に人差し指をあて内緒と言ったポーズをとりキッチンに向かった。

久々にケーキでも作ろう。

side out

side アリサ・バニングス

昨日、しばらくしてから竜馬が持ってきたケーキは中々のものだったわね。

まあ鯨島の方がおいしいけど。

「…じ…のか…」

「なにを呟いているのよ」

すごく小さな声で竜馬が何か言っていたので私は聞いた。  
竜馬は一瞬表情を強張らせたけどすぐにいつもの表情に戻った。

「なんでもないよ……」

「なら、良いけど」

嘘ね。

言葉に元気が無さ過ぎるもの。

「……悪い、俺ちょっと用事があるから一旦抜けるな。これ頼む」  
「ちよっ!?!」

そう言っただけで竜馬は私に箱を渡して走って行った。  
何なのよもう!!

side out

side 魔神竜馬

俺は急いで屋上へと向かった。

原作を見たけどどこの屋上だったかは覚えてないからな……

「マスター、後1時間ほどで最終調整が終了します」

「分かった。終わったらすぐに俺のリミッタを外してこっちに転  
移してくれ」

1時間……

闇の書の覚醒する時間とほとんど同時か。

「待つしかないよな……」

「何をだ？」

！？

声がしたので俺はすぐに振り向いた。  
そこに仮面をつけた男が立っていた。

「…お前は」

「知る必要は無い。お前は我等の計画に邪魔な存在、今ここで死んでもらう」

そう言つて仮面の男は殴りかかってきた。

接近戦…つてことは…

「リーゼロッテか…」

こいつ等を殺す事は出来るけど…  
それをやっても意味は無いからな。

「はあっ！…！！！」

「ぐっつ！…！！！」

俺はロッテの攻撃を腕を交差させて防いだ。  
目で追う事はギリギリ出来るかな。

「今を防ぐか…やはり邪魔な存在になりそうだ」

「そりゃ、どうもっ！！！」

俺は受けた相手の拳を掴み引き寄せ掌底を打ち込んだ。  
掌底を受けたロッテは少しだけ後ろに吹き飛んだ。



「魔力を使わずにその動き…お前は化物か？」

「答える義理は無いだろ」

そう言つて俺は瞬動術を使い一気に近づいた。  
眠つてる！！

「何！？」

「だから気をつけろと言つただろっ」

俺は青色のバインドに囚われた。  
アリアが来たのか…

「もう時間なのか」

「ああ、闇の書を完成させる時だ」

ロツテとアリアはそう言って転移した。  
闇の書の完成…

「くそっ！！…無々、早く来てくれ」

そして街は結界に包まれた。  
向こうのビルの屋上に膨大な量の魔力が集束しているのが感じられる。

「デアボリック・エミッション…闇の書は覚醒したのか！」

不意に俺は魔力が溢れて来る事に気付いた。  
来たのか！！

『マスター』

俺の目の前に金色の腕輪が現れた。  
ところどころに銀色の装飾が増えている。

「無々！頼む！！」

『了解！！セットアップ！！』

俺の言葉に無々は光輝いた。

そして俺の服装が普段着から黒の上下に赤のコートに変化した。

無々は一振りの日本刀になっていた。

「バリアジャケットまで着いたのか!!」

『はい!そして私の正式名称はゼロ・インフィニティではありませんせん。Nihilitty Unendlichkeitニヒリティ・アンデリヒカイトです』

ニヒリティ・アンデリヒカイト?

……………ドイツ語か。

「なぜ今まで?ゼロ・インフィニティ?だったんだ?」

『私は未完成のまま転移を繰り返しました。故に完全なベルカ式デバイスでは無かったです、ですがプレシアさんが調べてくれたお陰で私は完全な物へとなる事が出来ました』

無々は嬉しそうに言った。

プレシアすげえな。

『さあ、マスター。言ってください!』

「ああ、分かっている!!カートリッジ!ロード!!!」

俺がそう言うつと鏢の上が動きカートリッジがロードされた。  
シグナムのレヴァンティンと同じ位置か。

「行くぞ!仲間を助けるために!!ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』!!」

呪文を言って俺はフェニックスになりなのは達の元に向かった。



竜馬「え？それって今、竜王が持つてるやつですか？」

優「なんだそこにあつたのか」 倒れている竜王の手から取る

「「こんにちは」」

竜馬「ん？ギンガとスバル？」

竜王「あ、いらっしやい。た〜んと食べてくれ」

ゼウス「復活早いのう」

星菜「ギャグ補正と言う奴ですか？」

ライラ「僕も食べるよ！！」

桜花「竜王！ケーキは無いか！！」

竜王「ライラも食べるのか。桜花、甘いものばっか食ってると虫歯になるぞ」

桜花「我に虫歯など…！！！」 歯を押さえる

竜馬「おいおい…」

竜王「つとさつさと作らなくちゃ。竜馬、銃王さんから貰った星から野菜とか持って来てくれ」

竜馬「早速か分かった。行ってくる」

ユタ「俺も何か食べて良いですか？」

竜王「どうぞどうぞ。まあ、優よりは下手ですけどね」

優「充分うまいと思うぞ？」

桜花「我はちょっと用事があるので失礼する！決して、決っっして歯医者に行くのではないからな！！」

竜王「はいはい、お金はある？ないなら渡すけど」

星菜「桜花はお金を持っていませんよ。すぐに使ってしまうので」

竜王「そうか、んじゃ一緒に行くぞ。闇を狩る少年続きます」

桜花「我は1人でいけるぞ！！」

ギンガ「（スバルの言う通りね）」

スバル「（でしょ？）」

竜王「はいはい。あ、竜馬が戻ってきたら言うておいてくれ。それとギンガ、スバル女の子なんだからがつがつと食べないようにね？」

ギンガ・スバル「（私達まで娘扱い！？）」

イカロス「今日もたくさんの方が来ましたね」

竜馬「あれ？竜王は？」

星菜「桜花を歯医者に連れていきました」

竜馬「ふうん…：ギンガ、スバル2人に竜王がデバイスの起動状態の人形だつてさ」

ギンガ・スバル「ありがとうございます」

竜馬「（そう言えば竜王は優さんの写真を見てたよな。もしかして人形を作れるようになってるのか？何回もあつてるし…）」

## 闇の覚醒、友にばれる時。

side ジャバウオック・サタナキア

「なのは！あれは何だ！！」

なのは達の元に行き我は尋ねた。

下手をすればあれはなのはよりも魔力が高いぞ！？

「ジャバウオックちゃん！あれは…私達の友達が闇の書、うっん。

夜天の魔導書に飲み込まれちゃったの！！」

「なんだと！？」

不意に別の結界が我等を包み込んだ。

これは…

「前と同じ閉じ込める結界だ！！」

「やっぱり、私達を狙ってるんだ」

アルフの言葉にフェイトが答えた。

「どうあっても我等を逃がさぬと言う事か」

「今、クロノが解決法を探している。援護も向かってるんだけどまだ時間が…」

ユーノは途中で言葉を区切った。

まあ、分かり切った事だ。

「なのはちゃん？」

「む？どうした？なのは」



ずっと夜天の魔導書を見ていたなのはに我となずなは尋ねた。

「!…大丈夫」

「ならば良いが…」

我となずなの言葉に一瞬驚いていたがすぐに表情が変わった。

「来るよ!!!」

夜天の魔導書がこちらに飛んでくるのに気づいたアリシアが叫んだ。  
とにかくあやつを止めねばな!!

フロクン・グレッテ・ウエボン  
「壊れた神器!レーヴァンティン!」

我等はそれぞれの武器を手に夜天の魔導書に向かった。

side out

side 魔神竜馬

結構遠いな…

空を飛びながら俺は思った。

まだなのは達の元に着かないのだ。

『マスター!高魔力反応です!この集束方法は……スターライトブレイカーです!!!』

「マジかよ!?!ん?げっ!?!!!」

無々の言葉に俺は驚いた。

不意に下を見ると2人の少女がいた。

「アリサとすずか、ここにいたのかよ…」

あれ？

アリサとすずかがここにいる。

つまりはスターライトブレイカーの着弾点ってここ！？

「じゃあ無い…無々、形状変化はできるか？」

『大丈夫です。形状が変化した場合カートリッジシステムの位置が変化するだけです』

良かった。

形状変化が無くなってたら嫌だからな。

「よし！無々、形状変化。形状は手甲」

『了解しました。刀から手甲』  
シユベアートミニファイ

そう言つて無々は手甲に変化した。

どうやらカートリッジは右と左で半分に分けてあるらしい。

「無々、あとどれくらいで撃ってくるか分かるか？」

『離れていますので難しいです。魔力反応が3つ接近中です』

魔力反応が3つ！？

もしかしてアリシアか？

『もうすぐ視認できるかと』

「分かった。方向は？」

『現在見ている方向で大丈夫です』

そうか…

俺は無々が言った通りに前を見た。

「来たな…」

凄まじい土煙をあげながらなのはが道路に着地した。

そしてその近くの信号機にフェイト、街頭にアリシアが着地した。

「あの！！すみません！危ないですからそこでじっとしててくださいー！！」

なのはは路地から出て走ろうとしている2人に声をかけた。

2人は立ち止まり声のした方を見る。

「なのは？」

「フェイトちゃん？アリシアちゃんも…」

そう言っただけでアリサとすずかは固まった。

そりゃそうだろうな。

「なのはー！！」

「うんー！！」

「そうだったー！！」

フェイトの言葉になのはとアリシアは思い出したように動き始めた。

「2人共！そこでじっとしてー！！」

『ダイフェンサープラス』

アリサとすずかの周囲に黄色の膜状のバリアが展開された。

俺も行くか。

「竜馬君!?!」

「俺も手伝うよ」

なのは俺が目の前に降りてきた事に驚いていた。

そして夜天の魔導書のスターライトブレイカーが発動した。

「なのは、フェイト、アリシアは自分とアリサ、すずかを重点的に守れ!!」

「竜馬は!?!」

俺の言葉にアリシアは驚きながら尋ねた。

「……………全員防御をしろ!来たぞ!!守護天翼!!!!」

「……竜馬(君)!?!」

アリシアの質問に答えずに俺はスターライトブレイカーの光を翼を使い防いだ。

ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう!!!!!!!!!!

「くっ……………全員無事か?」

「無事だけど!?!」

スターライトブレイカーの余波が収まり俺は全員に尋ねた。するとフェイトが涙目で怒鳴った。

「無事だけど……竜馬が無事じゃないよ……」

「……そんな事が、気にするな。俺は戦える、先に行くぞ」

そう言っただけ俺は夜天の魔導書の元に向かって羽ばたいた。

とにかくはやてを救うぞ…

side out

side 夜天の魔導書

私はいつまで破壊を続ければいいのだ…

もう壊したくない。

そう願っていると言うのに…

「茜色の翼を持った人間か…」

ふと私は思い出した。

過去に会った者の言葉を、

夜天の間は茜色の翼を持つ者のいる時代に集う光によって払われる。だが、お前は消えてしまうぞ？それでも尚、闇を払い破壊の運命から解放される事を願うか？

その者は寂しそうに私に尋ねて来たな。

決まっているだろうに、私は主を殺したくない。

そしてこの運命から解放されたいのだ。

「この時代に存在いるのか？」

私を止殺してめてくれる者が…

闇の覚醒、友にばれる時。(後書き)

〈霊使い達の雑談〉

贈り物と感想ありがとうございます。

ユタ様、バラランシャ様、銃王 海さん、フレイス様、ルシファー様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより使うとハルゲギニア行きの鏡がでる魔法陣を、

いただきました。

竜王「星菜、ライラ、桜花に伝言だよ。あんまり迷惑を掛けすぎると・・・帰ってきてからの春人式O S H I O K Iの間が増えるから、気をつけるよ(黒笑 だってさ)」

星菜「わ、分かりました」

ライラ「分かったよ!!」

桜花「う、うむ」

「遊びに来たぞ」

竜王「あ、ユタ様の所より夜空、藍、橙が来ました」

橙「こんにちは!」

藍・竜王「(可愛い!)」

夜空「つと竜王。ユタから渡されたから渡しておくぞ」

竜王「あれ？これって優のアルバムじゃね？」

藍「人形を作れと言う意味だと思われませう」

竜馬「つーか既にためしで何個か作ってたよな？」

竜王「まあ記憶を頼りに作ったから微妙だったけどな。でもこれで完璧に作れるよ」

「滅びのバーストストリーム！！！」

竜馬「へ？ぎゃああああああ！！！！」

竜王「来たか！！キヤロ！！」

竜王・キヤロ「粉砕 玉砕 大喝采！！強靱 無敵 最強！！！」

フェイト「キヤロが……」（号泣）

ゼウス「カオスじゃのう……」

キヤロ「流石です！！」

竜王「キヤロもな！！」 堅く握手をする

竜馬「うゝ……死ぬかと思った……」

キャロ「この威力でも生き残るとは…ゴキブリ並の生命力だな!!」

竜王「違うぞキャロ。凡骨にしてはやるではないか、馬の骨から犬の骨にランクをあげてやるう!!感謝するが良い!!…が正解だ」

キャロ「なるほど…!」

竜馬「どっちにしてもけなされてるよな…」

フェイト「キャロ…」 涙が床にたまり水溜りをつくる

キャロ「竜王さん!今日、泊まっても良いですか?」

竜王「…?」

キャロ「はい…!」

竜王「良いよ それじゃあ布団を準備しないと」

竜馬「い、いや。それは俺が準備するから竜王はキャロと遊んでてくれ…!」

星菜「(逃げましたね)」

桜花「(逃げたな)」

ゼウス「(逃げたの)」

夜空「(逃げたか)」



藍「（逃げましたか）」

フェイト「（キャラお願いだから元に戻って…）」

竜王「そんじゃあ締めをキャラ！」

キャラ「はい！闇を狩る少年続きます！！」

竜王「あれ？普通に締めるんだな」

キャラ「前に社長で締めましたので今回は普通で行きました！！」

竜王「……………フェイト」

フェイト「…はい？」 涙でぐしょぐしょ

竜王「はい、ハンカチ。それとキャラが普通の状態の人形ね」 小声

フェイト「ありがとうございます」

闇に吞まれる竜。

side 高町なのは

「な、なのは。今の子が竜馬って本当なの？」

アリサちゃんが私に尋ねてきました。

これは、教えても大丈夫だよな？

「うん。あれは竜馬君だよ」

「なのはちゃん、もしかしてだけど竜馬君って他にも白い髪の毛になれたりしない？」

え！？

すずかちゃんの言葉に私は驚きました。

「ど、どうして知ってるの!？」

「やっぱり。じゃああれは竜馬君だったんだ…」

すずかちゃんは私の言葉に納得したようでした。

私にはよく分からないの…

「なのは!! 民間人は見つかった!？」

「ユーノ君! 見つかったよ!」

不意にユーノ君から念話が来ました。

とにかく2人を安全な場所に避難させないと!!

「分かった! 今からその2人を安全な場所に転移するから動かないように言っておいて!!」

「分かったの!!」

私は2人の方を向きました。  
説明をする時間は無いよね。

「2人共!今から安全な場所に移動するから動かないでいて!!」  
「え、ちよっ!なのは!?!」

アリスちゃんがそう言うのと同時に2人の足元に魔法陣が現れました。

そして2人は転移しました。

「ばれちゃったね…」

「うん…」

「どうしよう…」

私の呟きにフェイトちゃんとアリスアちゃんは答えました。

「ユーノ君、2人を守ってあげてくれないかな?」

「アルフもお願い」

私とフェイトちゃんはユーノ君とアルフさんに念話で伝えました。

「でも、フェイト…」

「分かった。2人は僕とアルフ、なずなさんに任せて」

アルフさんは不服そうでしたがユーノ君はオツケーを出してくれました。

「行こう。なのは、フェイト」

「うん！」

私達は竜馬君の飛んで行った方向：闇の書産のいる場所に向かって飛び始めました。

side out

side 夜天の魔導書

「夜天の魔導書だな」

「お前は……」

茜色の翼……

この少年が私をこの運命から解放してくれるのか？

「お前が取り込んでいる主の友達だ。悪いが助け出させてもらっぞ」

「……不可能だ。主を取り込むのは私の意志では無い」

故に私は呪われた魔導書などと呼ばれるのだろうか……

私は目の前の少年を見ながら言った。

「……ってるよ……」

「何だ？」

何を呟いたのだ？

とても小さな声で少年は言ったので聞きとれなかった。

「分かっているよ！！お前が過去の持ち主に改変されたせいでこんな事になってること位！！！」

「何故、涙を流す？私とお前は初めて会ったはずだ」

少年は涙を流しながら叫んだ。

分からない。

この少年は何に涙を流しているのだ？

「まあ、良い…夜天の魔導書。止まらない事は知っている、だから殴つてでも止めさせてもらうぞ!!」

「…出来るのならな」

そう言つて少年は構えた。

side out

side 第3者視点

「刃<sup>も</sup>以て、血に染めよ。穿<sup>うが</sup>て、ブラッディダガー」

夜天の魔導書の周囲に20を超える血の色をした実体化する鋼の短剣が現れ竜馬に向かつて行つた。

「無々!!!!」

『了解!! 翠旋 ミドリロタチキマリディアンタウス 翠撫子!!』

竜馬の言葉に無々はカートリッジをロードした。  
しかし、空薬莢が排出されない。

「翠旋 すいせん 翠撫子<sup>みどりなでしこ</sup>!!」

風を纏つた無々で竜馬はブラッディダガーを全て殴り落とした。

「無々、どうして薬莢が排出されないんだ？」

「薬莢の素材に金剛杵が使用されているために何度でも魔力を込めれば使用できるんです。ですので普段私が吸収している魔力は全てこちらに向かいます」

竜馬は薬莖が排出されない事を無々に尋ねた。  
無々の説明を聞き竜馬は納得したようだ。  
不意に周囲から火柱が上がった。

「早いな…もう崩壊が始まったか…私もしき意識を無くす。そんな  
ればすぐに暴走が始まる」

「何!?!」

夜天の魔導書の言葉に竜馬は絶句した。

それは暴走に対する驚きでは無く、暴走するまでの時間の短さに驚  
いたものだった。

s i d e o u t

s i d e 魔神竜馬

もう暴走だと!?!

とにかく止める!!

「はあああああああああああ!!!!!!!!!!」

俺は右手に風を集めて夜天の魔導書に殴りかかった。

夜天の魔導書は夜天の魔導書本体を前に出した。

「お前も…我が内に眠ると良い…」

「しまっ!!!!!!」

俺は夜天の魔導書が人間を吸収できる事を忘れていた。

そして俺は夜天の魔導書本体に飲み込まれた。

「遊ぼうよお兄ちゃん!!」

「ん…あ、あれ!？」

ゆ、雪？

俺が目を開けると目の前には妹の雪がいた。

「どうなってるんだ？無々!…無々が無い!？」

「さっきから何を言ってるのお兄ちゃん？」

右腕を見ると金色の腕輪が消えていた。  
俺の様子を見て雪は不思議そうに言った。

「す、すまん。なんでもないよ」

「ふん、それなら良いけど」

そう言っつて雪は部屋から出ていった。

よく見ればここは死ぬ前の俺の部屋じゃないか!!

「何がどうなってるんだ？」

どうして俺はここにいるんだ？

誰かと戦っていてそれで…

「ッ…!!…思い出せない」

頭痛が起こり俺は考える事を中断した。

とにかく無々を探さないと…



闇に吞まれる竜。(後書き)

〈霊使い達の雑談〉

贈り物と感想ありがとうございます!!

銃王 海さん、ユタ様、フレイス様、ルシファー様、ウイング様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより青い目の白い竜のロボットを、

いただきました。

「ブルーアイズアルティメット・バーストストリーム!!!!!!」

竜王「来たな!身代わり!!!!!!」 竜馬を前に置く

竜馬「ちよっ!?ぎゃああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

海馬「ふうん、俺の攻撃を避けるか」

竜王「当たり前だ!!銃王 海さんの所より海馬瀬人が来ました」

キャロ「海馬さんですか!!!!!!」

海馬「誰だ貴様は!!!!!!」

キャロ「キャロ・ル・ルシエと言います!!!!!!」

竜王「海馬のファンだよ」

海馬「そうか、ならばこれをやるつ。カイバーマン変身セットだ」

キャラ「ありがとうございますー!!」

フェイト「キャラく迎えに来たよ」

キャラ「はーい!海馬さん竜王さんありがとうございますー!!」

海馬「気にするな」

竜王「またいつでもおいで」

キャラ「はい!」

「こんにちは」

竜王「お?ユタ様にステラ、あかり。ユタ様の所より3人が来ました」

あかり「こんにちは」

ユタ「竜王さん。優の人形ってありますか?」

竜王「もちろんありますよ。一応アルバムを見て最終調整を行ったので完璧です!」

ユタ「それって貰えます?」

竜王「良いですよ。おふざけで服装が色々とあるので全部渡しますね」

ユタ「と言うと？」

竜王「えっとレミリアの服、メイド服、戦闘服、スーカの迷彩服……等々」

ユタ「面白いですね。ありがとうございます」

ステラ「悪い顔ですね……」

「こんにちは……!!」

竜馬「ん？銀河？そっちは……」

「ウイングの？遊戯王GXの真紅色の転生者……？の主人公の神  
埼遊里だ」

竜王「それは？」

銀河「遊里の方が手作りお菓子で俺の方が紅茶です」

ライラ「おいしそうだね!!」

星菜「そうですね」

銀河「えっとこちらの子達は？」

竜王「バラランシャ様の所から来ている星菜、ライラ、桜花、ゼウ

スだよ」

桜花「……………」 手を伸ばそうとするが途中で引っ込める

竜王「桜花、ちゃんと歯を磨くなら食べても良いよ」

桜花「本当か!!」

ゼウス「（完全にお母さんのセリフなんじゃがのう）」

竜馬「それじゃあ皆で遊里のお菓子と銀河の紅茶でお茶にしよう！  
！」

全員「賛成!!」

竜王「じゃあ締めちゃうな。闇を狩る少年続きます!!」

竜馬「この紅茶美味しいな」

ユタ「…何気にスクール水着の優の人形もあるんですね」

竜王「今、思うとふざけ過ぎた」

ライラ「おいし〜!!!!」

竜王「つと忘れるとこだった。この次の世界を？IS？にするか？  
ネギま？にするか悩んでいます。？IS？なら1を、？ネギま？な  
ら2を選んでください。それでは!!」

偽りの現実、戻る記憶：

side 魔神竜馬

部屋から出てリビングに行くとき男性と女性、そして雪がいた。  
誰だ？

「竜馬、朝ごはんが出来てるから食べちゃいなさい」

「お母さん、お兄ちゃんったら寝ぼけてたんだよ！！」

お母さん？

そんな…まさか、ありえない！！

父と母は俺と雪を置いてどこかに行ってしまったはず！！

「どうしたんだ？竜馬」

「な、何でもない。いただきます」

そうやって俺は席に着き朝ごはんを食べた。

…美味しい。

「味噌の味付けを変えてみたんだけどどう？」

「おいしいよ」

俺の言葉に母はガッツポーズをとった。

不意にインターフォンが鳴った。

「誰だろ？」

そうやって雪は玄関に向かった。

しばらくすると雪は笑顔で戻ってきた。

「びつくりしたよ お兄ちゃんにあんなに可愛い友達がいるなんて  
」

「?????」

友達？

誰が来ているんだ？

「良いから早く玄関に行つてきなよ!!」

「あ、ああ」

雪に押されて俺は玄関に向かった。

玄関にいたのはフェイト、なのは、はやて、ジャバウォックだった。

「!?!?!ど、どうしたんだ？4人共」

「え？もしかして約束を忘れちゃったの？」

何故この世界にこの4人がいる!?

俺の言葉になのはは驚きながら言った。

約束？

「やっぱりなあ、忘れてるんやないかとおもったんよ」

「今日、すずかの家で誕生会があるんだよ」

はやてとフェイトが言った。

何故、はやては歩けるんだ？

「はやて、お前歩けないんじゃないか？」

「いややわ、いつの話をしとるん？竜馬君が」

くれたからやん」

』を壊して

何だった？

いきなりはやての言葉の中に聞きとれない言葉があった。

「すまん、はやて。何を壊したって？」

「せやから」 『やって』

また聞きとれない……  
どうなっているんだ？

「さ、早く行こう」

「あ……お、おい！」

俺はフェイトに手を引かれ家から出た。  
おかしい。

この世界にはなのは達はいないはず……

「ちゃんと歩くから手を放してくれ……！？」

「どうしたんや？ 竜馬君」

俺が話していると一瞬視界の端に火柱が上がっている風景が見えた気がした。

「な、何でもない」

そうやって俺は歩き始めた。  
見間違いか？

『……………！！！！』

？

誰かに呼ばれたような…

再び立ち止まり俺は周囲を見渡した。

『……夕……!!』

「どうかしたのか？竜馬」

立ち止まっている俺を見てジャバウォックが尋ねてきた。  
聞こえないのか？

「なんだか呼ばれている気がするんだよ」

「誰に？」

誰にと聞かれてもなあ…

『マスター……!!』

！？

この声は…

「まさか…無々か!？」

『よかった、ようやく声が届きました』

いきなり叫んだ俺を見て4人は驚いている。

無々がいるなら確認が取れる!!

「無々！ここはどこだ!!俺はいつたはどこにいる!!」

「りよ、竜馬？さつきから何を言ってるの？」

フェイトが不安そうに言った。



気にしている暇は無い!!

『こじは、どつやら』

『の内部の様です』

また聞きとれない!?

どついう事なんだよ!!

「竜馬君? さっきから何を叫んでるの?」

「.....」

何かがおかしい。

はやてが歩ける...

「…そうか、『夜天の魔導書』か」

思い出した。

俺は夜天の魔導書との戦いで取り込まれたんだった。

「思い出しちゃったんだね…」

寂しそうになのが言った。

「ああ、ここが俺が望んでいた平穏な生活のできる世界だってこともな」

そつだ、ここは俺の望みの世界。  
仲間達が傷つかなくいつも笑顔でいられる世界。

「そつか、竜馬は外に出るの？」

フェイトは俺に静かに聞いてきた。

「まあな、外には助けなきやならない仲間がいるからな。それにこの世界にいるだけじゃ約束を守れないからな」

あの子と約束した？闇？を全て壊すという約束が…

「ほな…皆でこれを渡さないといかんな」

そう言うってはやてが取り出したのは金色に銀の装飾のついた腕輪の一部だった。

無々の一部か!?

「そのようだな」

そう言うってジャバウオックも同じように取り出した。

そしてフェイト、なのはも同じように無々の一部を取り出した。

「分割されていたのか…? 足りないぞ?」

「最後のピースはその子から貰って」

4人のうち誰が言ったのかが分からなかった。

もしかしたら4人が同時に言ったのかもしれない。

俺は後ろを振り向いた。

「……雪?」

「気付いちやっただよね」

そこには家にいるはずの雪がいた。

「お兄ちゃん、どうして私を置いて死んじゃったの?」

「!?!?!」

そうか…今まで忘れていた…いや、考えないようにしていたんだ俺が死んでから雪は一人ぼっちになってしまった事を。

俺は雪の頭に手を置いた。

「…悪かった。こんな悪い兄貴で、この世界にいるお前は俺が生み

出した偽物のお前なんだよな？」

「うん、でもお兄ちゃんが悪いと思ってるから私はこの世界でも生まれたんだよ。完全に私を忘れていたら私は…ううん、私達家族は現れないもん」

雪は頭に置いてある俺の手を握った。

「お兄ちゃん。お兄ちゃんは外に助けたい人達がいるんだよね？だから…だから、この子でたくさんの人を助けてあげてね」

そう言っつて雪はポケットから無々の最後のピースを取り出した。

「おう！！任せてくれ！！」

「お兄ちゃん、外に行つて本当の私に会ったらちゃんと謝つてあげてね！！」

そう言っつて雪は消えていった。

約束はきつちり守るよ…

「無々、ここで聞いた事は誰にも話すなよ？」

『分かつております』

俺の言葉に無々は肯定した。

さあ、ここから脱出だ！！

「やるぞ！！無々！！！！」

『了解しました！セットアップ、モード刀シユベアート』

無々はバリアジャケットを展開し刀に変化した。

「ツヴァイ？カートリッジ！！モメントナクラムソソカメラ瞬炎 紅蓮椿」

無々はカートリッジを2つロードした。  
すると刀身が砕け炎の刀身が形成された。

「しゅんえん瞬炎 くれんつばき紅蓮椿！！！」

目の前の空間を斬り付けると空間に亀裂が走り砕けちった。

偽りの現実、戻る記憶…（後書き）

（霊使い達の雑談）

贈り物と感想ありがとうございます！！

ユタ様、ルシファー様、d a i i様、バラランシャ様、銃王 海さん、フレイス様感想ありがとうございます。

「遊びに来たわよ」

竜王「んあ？ユタ様の所より幽香とカオスが来ました」

カオス「眠そうだね？」

竜王「あゝ自由登校になったから結構夜更かししてね」

竜馬「義務課外の追試があるだろうに…」

幽香「駄目駄目ね」

竜王「うるせえやい！」

「こんにちは」

竜王「ああ、リオラ…ってズタボロだあああああ…！！！！！！」

竜馬「何があった…？」

リオラ「ここに来る途中で次元乱流に巻き込まれてしまって」

竜王「あゝ…とりあえず風呂に入ってくれ。服は代わりを出してお  
くから」

リオラ「ありがとうございます」

星菜「竜王さん、上空から何かが降ってきました」

竜王「へ？あたあ！？」

竜馬「これは…みかん？」

ライラ「おいし〜よ」

竜王「もう食ってるし…！」

ゼウス「目に染みるつづつ…！！…！！…！！」

竜馬「みかんの皮で遊んでんなよ…」

竜王「あれ？桜花は？」

桜花「ここにいるぞ」 テーブルの下

竜馬「何でそこに？」

桜花「ここならばみかんに当たらないのだ」

竜王「……………（なんだか和むから何も言わないでおこう）」

竜王・桜花以外「（竜王（さん）が慈愛に満ちた目で桜花（さん）を見てる…）」

「こんにちは」

竜王「フレイス様の所よりなのはが来ました」

なのは「あいたあ！？何でみかんが降ってるの？」

竜王「銃王 海さんの所で柊が降らせました」

リオラ「あの…お風呂はありがたかったんですけどこの服は…」  
メイド服装備

竜馬「おい、竜王…」

竜王「あ、間違えた。それは星菜、ライラ、桜花の誰かに着てもらおうと作ったものだった」

星菜・ライラ・桜花「着ません（ないよ）（ぬ）！！！！！！！！」

竜王「え…：しょうが無い、リオラにあげるよ」

リオラ「いりませんよ…！！」

なのは「にやははは…」

竜王「さ〜て締めをリオラ、萌え萌えキュン風にやってくれ。拒否権は無い！」







「そのままお休みを、我が主。あなたの望みは全て私が叶えます。目を閉じて心静かに夢を見てください」

「誰や…？」

私が目を開けるとそこには銀色の髪をした女の人が入っていた。私は何を望んでたんやっけ…

「夢を見る事。悲しい現実は全て夢となる、安らかな眠りを」

「そう…なんか…？」

「ほんまに私はそれを望んどるんか？」

side out

side 高町なのは

「闇の書さん！！竜馬君はどこですか！！」

「竜馬…？それが誰だか知りませんが、先程の少年は私の中で夢を見えています」

私の質問に闇の書さんは答えました。

「闇の書さんの中！？」

「なら、貴女を倒して竜馬とはやてを助け出す…！」

「その通り…！」

フェイトちゃんとアリシアちゃんが言いました。

そして2人はデバイスを構えました。

「竜馬君とはやてちゃんを助けた後できちんとお話させてもらおうからね…！！行くよ！フェイトちゃん！アリシアちゃん！」

「うん…！！」

私の言葉に2人は頷きました。  
絶対に助け出す!!

「そうですか。刃<sup>も</sup>以て、血に染めよ。穿<sup>うが</sup>て、ブラッディダガー」

闇の書さんの周りに20本以上の血の色をした実体化する鋼の短剣が現れました。  
撃たせない!!

「アクセルシューター!!!」

「プラズマランサー!!!」

「ドリシユヌスエッジ!!!」

私達はそれぞれ魔力球、槍のような魔力弾、魔力の刃を飛ばし短剣を撃ち落としました。

「ならば…闇に、染まれ。デアボリック・エミッション」

闇の書さんは手を上に掲げました。

あれはさっきの!?

「きゃあああああああああああ!!!!!!」

「くっくっくっくっくっくっくっくっく!!!!!!」

「うわあああああああああ!!!!!!」

闇の書さんの発動した魔法に私達は飲み込まれました。

辛うじて私達は魔法障壁で防ぎましたが障壁の上からでも凄まじい量の魔力が削られました。

「我が主もあの少年も覚める事のない眠りの内に、終わりなき夢を見る。生と死の、狭間の夢。それは永遠だ」

「永遠なんて…無いよ。皆変わって…変わってかなきゃいけないんだ」

立つのも辛い状態だけど私は言いました。

「私も…あなたも!!」

「私達は竜馬によって変わる事が出来た!だから、私達があなたを変える!!!」

フェイトちゃんとアリシアちゃんが互いに支え合いながら立ちあがりました。

不意にレイジングハート、バルディッシュ、ラブリユスが言いました。

『呼んでください。?エクセリオンモード?と』

『発してください。?ザンバーフォーム?と』

『言ってください。?リディアフォーム?と』

side out

side 第3者視点

「駄目だよ!!あれは本体の補強をするまで使っちゃ駄目だった!」

「バルディッシュもだよ!!」

「ラブリユス!!」

なのは、フェイト、アリシアは自身の持つデバイスの言葉に驚いていた。

しかし、デバイス達は頑かたくなに同じ言葉を繰り返す。

『呼んでください。マイマスター』

『発してください。マスター』

『言ってください。マスター』

デバイス達の言葉を聞きなのは達の表情に変化が起こる。

それはデバイス（機械）の意志が変える事が出来ない<sup>と</sup>理解し決意をした表情。

「お前達も、もう眠れ」

夜天の魔導書がなのは達に言った。

「いつかは眠るよ…」

「でもそれは…」

「今じゃ無い!!」

なのは、フェイト、アリシアは順番に言った。

そして3人はデバイスを構えた。

「レイジングハート？エクセリオンモード？ドライブ!!」

「イグニション」

「バルディッシュ？ザンバーフォーム？」

「イエスサー」

「ラブリュス？リディアフォーム？」

「インテレクテュス」

デバイス達はカートリッジをロードし形状を変化させていく。

レイジングハートは槍をイメージさせる形状に。

バルディッシュは魔力の刀身を持つ両刃の大剣に。

ラブリースは2つに分かれて魔力の刃を持つ双斧に。

side out

side 八神はやて

「私が本当に欲しかった幸せ……」

「健康な体、愛する者たちとのずっと続く幸せな暮らし、眠ってください。そうすれば夢の中であなたはずっとそんな世界にいられます。」

幸せな世界……？

私は女の人の言葉を首を振って拒否した。

「せやけど……それはただの夢や。私、こんな望んでない。あなたも同じはずや！違うか？」

「私の心は騎士達の感情と深くリンクしています。だから騎士たちと同じように私もあなたを愛おしく思います」

そこで女の人は一旦言葉を区切りました。

「だからこそ、あなたを殺してしまう自分自身が許せない」

その言葉を聞いて私はこの人が自分の意志で行っているのではない事に気付きました。

「あなたを蝕み、暴走し喰らいつくしてしまう自分が許せないのです」

「……覚醒の時に今までの事少しは分かったんよ。望むように生きられへん悲しさ、私にも少しは分かる！！シグナム達と同じや！ずっと寂しい思い、悲しい思いしてきた……」

私の言葉に女の人…ううん、闇の書は俯いた。

「…せやけど、忘れてたらあかん。あなたのマスターは今は私や、マスターの言う事はちゃんと聞かなあかん!!」  
「!!!!!!」

私と闇の書の足元に魔法陣が現れました。



闇を照らす星の光と雷の刃。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

贈り物と感想ありがとうございます。

ユタ様、ルシファー様、銃王 海さん、フレイス様感想ありがとうございます。  
ございます。

銃王 海さんより鳴海歩作「天使も星五つ！激辛麻婆豆腐」を、  
いただきました。

竜王「辛アアアアア！……！！！！！！！！」

「こんにちはー！！！！」

竜馬「あ、いらっしやい」

竜王「ようほほ。ゆははまのほほろよひ、よほはほほははひまひは」

夜空「………なんだって？」

竜馬「？ようこそ。ユタ様の所より、夜空と空が来ました？だそう  
です」

空「なにがあっちゃ……／＼／＼／＼あつたんですか？」

竜馬「激辛麻婆豆腐を食べてこうなりました」

夜空「どんだけからいんだよ……」

「こんにちは」

竜王「んぐんぐ…ふう。フレイス様の所よりティアナとユウキが来ました」

ユウキ「なんでタラコ唇？」

竜馬「気にするな。どうせ明日には治ってる」

ティアナ「ユ、ユウキ。ちょっと竜馬とデュエルしてきなさいよ」

ユウキ「ん？まあ竜馬が良いなら良いけど」

竜馬「良いよ。あっちでやるっ」

ティアナ「……これで良し。竜王さんチョコの作り方を教えてください」

竜王「おう！」

星菜「女性には大事なイベントが近いですからね」

ライラ「何かあったっけ？」

ゼウス「む？チョコ…2月…？」

桜花「貴様も竜馬達の所に行っておれ！」

ゼウス「わ、分かった!!」

竜王「空はどうする?」

空「あ、それじゃあ私も良いでちゅ／／／／…良いですか」

竜王「良いよ」。と言っても特別な事をするわけじゃないけどね?」

女性キャラ「?」

竜王「おいしいチョコを作るための秘訣は?好きな人?を思いながら作る事だからね まあ、俺の場合は?美味しく食べてもらいたい?って言う思いだけどね」

女性キャラ「す、好きな人／／／／／」

夜空「(…こいつ実は女なんじゃね?)」

竜王「…失礼な事を思わなかったか?」

夜空「気のせいだろ」

竜王「なら良いけど…にしても、まさか外部編が1話で終わらないとは思わなかった」

ティアナ「そうなんですか?」

竜王「ああ、話の筋を考えるのに苦労するからね」

星菜「先に作っておけばいいのでは?」

竜王「そんな暇は無いからねえ…そろそろ締めるか、ライラ言ってくれ」

ライラ「オツケー。闇を狩る少年続くよ」

竜王「…バレンタインには番外編を書こう」

桜花「きさまに書けるのか？」

竜王「さあ？俺自身、恋をしたこともないし。なのに恋愛相談はよく受けるけどね…何でだろ？」

星菜「不思議ですね…」

夜天の光が集う時…

side 八神はやて

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書なんて言わせへん。私が呼ばせへん」

「……………ッ」

私の言葉に女の人は涙を流しました。ここで悲しみを断ち切るんや。

「私は管理者や、私にはそれが出来る」

「無理です…自動防御プログラムが止まりません…管理局の魔導師達が戦ってますが…それも…」

女の人は涙を流しながら言いました。

「止まって…」

私の言葉に反応して魔法陣が光輝きました。

side out

side 高町なのは

「強い…」

「でも、負けられない!!」

不意に闇の書さんがまるで錆びたロボットのような動きをしました。いったい何が…？

「外の方！管理局の方！こちら…あの、そこにいる子の保護者、八

神はやてです」

「……はやて（ちゃん）！？」「」

突然のはやてちゃんからの念話に私達は驚きました。

「なのはちゃん！？それにフェイトちゃんにアリシアちゃん！？ほんまに！？」

「うん。なのはだよ、色々あつて闇の書さんと戦つてるの！！」

「はやて、大丈夫なの！？」

闇の書さんがまた動き始めています。

ですがさっきと同じようにぎこちない動きです。

「ごめん3人とも、なんとかその子止めたげてくれる。魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が発していると管理者権限が使える。今そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから！！」

止めるってどうやって…

「3人とも！分かりやすく伝えるよ。今から言う事を3人が出来ればはやてちゃんも竜馬も外に出られる！！」

ユーノ君から念話が来ました。

助ける事が出来る！！

「どんな方法でも良い、目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして！全力全開、手加減なしで！！」

「……さすがユーノ君！わっかかりやすい！！」

「本当だね！！」

「同感!!」

私達はデバイスをそれぞれ構えて闇の書さんを囲む形に移動しました。

闇の書さんの周りに触手の様な物が現れました。

「エクセリオンバスター、バレル展開、中距離砲撃モード！」  
『了解です。バレルショット』

レイジングハートの柄が伸び5枚の羽が現れました。  
レイジングハートから見えないバインドを衝撃波と一緒に放ちました。

「私達もやるよ。サンダーブレイド!!」

「勿論!ボルカニックブレイド!!」

フェイトちゃんとアリシアちゃんが触手をどんどん斬っていきます。  
ユーノ君とアルフさんはバインドで触手を抑えています。

「エクセリオンバスター、フォースバースト」

カートリッジを4つロードし魔力の塊を作りだしました。

「ブレイクシュート!!!!!!」

魔力の塊から4つの砲撃が放たれました。

砲撃は絡みあい1つになり闇の書さんに命中しました。

side out

side 八神はやて

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る。強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール。リインフォース」

そして凄まじい光が起りました。

「新名称リインフォースを認識。管理者権限の使用が可能になります。ですが、防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力がじき暴れ出します」

「まあ、なんとかしよ。いこか、リインフォース」

私は目の前に現れたリインフォースを抱き締めました。

「はい、我が主」

side out

side 魔神竜馬

…どうやら出られたみたいだな。

「「「竜馬（君）！！」」」

「ありがとな、助かったよ」

俺はなのは、フェイト、アリシアに言った。

さあ、後はフルぼつこだ！！

「無々、形状変化。形状は手甲」

『了解しました。刀シュペアードミニファアから手甲』

無々は日本刀から手甲へと変化した。

そっぴやカートリッジを使ったんだよな…



「残りのカートリッジは3発か？」

『いえ、飲み込まれている間に1つ分回復しましたので4発です』

そうか：

不意に凄まじい地響きとともに海上に闇のドームの様な物が現れた。  
あれが夜天の魔導書の闇か。

「ん？ジャバウオックとなずなさんは？」

「2人にはなのはの友人を守ってもらっているよ」

俺の言葉にユーノが答えた。

一応は呼んでおくべきだな。

「ジャバウオック、なずなさん。こっちに来てくれますか」

「分かったぞ！」

「わ、分かりました！」

これでよし。

突如眩い光が起こった。

光が収まると夜天の魔導書の守護騎士達がそろっていた。

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

なのはとフェイトは守護騎士の名前を呼んだ。

「我等、夜天の主の元に集いし騎士」

「主ある限り我等が魂付きる事無し」

「この世に命ある限り我等は御身の元であり」

「我等が主、夜天の王、八神はやての名のもとに」

守護騎士達が言い終えると光の球に罅が入っていき中からはやてが現れた。

「はやて!！」

俺が名前を呼ぶと一瞬驚いた表情をしたがすぐにはほほ笑んだ。

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース。セットアップ!！」

はやての言葉と同時にはやての持つ杖、シュベルトクロイツが光を放った。

そしてはやてのバリアジャケットは完全な物になりユニゾンにより目と髪の色は変化し背中からは4枚の黒い翼が生えた。

「…竜馬君? どうしてはやてちゃんの事を知ってるの?」

「え? 友達だから… って何でレイジングハートをこっちに向ける!？」

よく見ればフェイトとアリシアもそれぞれデバイスを俺に向けていた。

まだ、変身をしておらず無々に足場を作ってもらっているだけなので自由には動けないのだ。

「すまないな。水を差してしまうんだが、時間が無い簡潔に説明させてもらう。あそこの黒いよどみ、闇の書の防衛プログラムがあると数分で暴走を開始する。僕等はそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在2つある」

助かった！！

クロノの言葉に全員の意識はクロノに集中した。  
俺に向けられていたデバイス達も降ろされている。

「1つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。2つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシエルで消滅させる。これ以外に何か良い手は無いか？闇の書の主とその守護騎士に聞きたい」

ここは俺が不用意に何か言う必要は無いな。  
先に変身しておこう。

「ゼロ・インフィニティ…契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。」不死鳥  
「転身」

呪文を唱えて俺はフェニックスに変身した。

その間になのは、フェイト、はやてが闇の書の防衛プログラムを破壊する方法を思いついたらしくクロノは呆れていた。  
実際は思いつかないよな。

夜天の光が集う時…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、ルシファー様、バラランシャ様、銃王 海さん、フレイス様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより正宗、鳴海歩・吉井明久・泉こなた・姫路瑞樹・シヤマル・柊かがみ・高町なのは・上条当麻の料理を誰がどれを作ったかわからない状態で二品ずつを、

いただきました。

竜馬「どれを喰う？」

ライラ「僕はこれ！！……うん おいしい」

桜花「我はこれだ。……ふむ、まあまあだな」

星菜「では私はこれを。……おいしいですね」

ゼウス「じゃあ、わしはこれを……ぐはあ！！！？」 吐血

竜王「当たったな……」

竜馬「当たったね……」

「こんにちは」

竜王「お？ユタ様の所よりアインとリラが来ました」

アイン「何があつたんですか？」

竜馬「ロシアンルーレットです。手を出さない方が良いですよ」

リラ「何故そんな事に？」

竜王「さあ？あと、3個か……」

竜馬「ええい！！考えても仕方が無い！！これだ！！……ぎゃあああ  
ああ！！！！」 喉を押さえて転げまわる

「……………こんにちは」

竜王「テンション低いな。バラランシャ様の所よりリオラが来ました」

リオラ「あんな事があつたんですから低くて当然です！！」 涙目

竜王「もう、やんないよ……………たぶん」

リオラ「たぶんですか！？」

竜王「大丈夫大丈夫。似合ってるし、後は星菜、ライラ、桜花が着てくれたら嬉しいんだけどね」

星菜・ライラ・桜花「だから着ません（ないよ）（ぬ）……………！！！！」



竜王「おう、リイン？は今日帰るんだったよね？一応チョコの作り方を書いた紙を渡しておくね？」

リイン？「ハイです！」

竜王「それじゃあ作るうか」

キャラ・リイン？「はい！！！」

星菜・ライラ・桜花「（本当は女性では？）」

アイン「私達も見てくださいか？」

リラ「そうですね」

竜王「闇を狩る少年続きます！！それじゃあ、チョコを湯船で溶かして……」

キャラ「結構難しいんですね……」

リイン？「甘いです」

星菜「リオラと模擬戦でもしてきましょう」  
訓練部屋に向かう

ライラ「僕も！」

桜花「我はここで味見をする！」

竜王「そのあと歯はちゃんと磨いてね？」

闇が夜天に帰る時…

side 第3者視点

「実に個人の能力頼りでギャンブル性の高いプランだが…まあ、やってみる価値はある」

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合4層式…やったんやけど竜馬君の魔力が吸収されたせいで7層まで増えてまったんよ…」

竜馬を見ながらはやては言った。

はやての言葉に全員は呆れた表情をした。

「：お前1人で3枚もバリアが増えるのかよ。なんつーバカ魔力だ」  
「人数がいるから大丈夫だろ？」

ヴィータが呆れながら竜馬に言った。

竜馬以外の全員がその言葉に頷いていた。

「そうだね、まず私達がバリアを破壊して…」  
「バリアを抜いたら本体に向けて私達の一斉砲撃でコアを露出…」  
「そしたらユーノ君達の強制転移魔法でアースラの前に転送!!」  
「後はアルカンシエルで蒸発、と」

アリシア、フェイト、なのは、リンディの順に作戦内容を言った。

「さて、全力全開で思いつきりぶっ飛ばすか!!」

「その後でちゃんと説明してもらおうからね？」

なのはが竜馬に言った。

その言葉に竜馬は露骨に嫌そうな表情をした。



side out

side 魔神竜馬

あゝまた、O H A N A S H Iかあ…  
生きてられるかな？

「暴走開始まで、後2分!!」

「ッ!!」

エイミイの言葉になのは達の表情は硬くなっていく。

「あ、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん。シャマル」

「はい、3人の治療ですね。クラールヴィント、本領発揮よ」

『了解』

そう言つてシャマルはクラールヴィントにキスをした。  
回復魔法か。

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

シャマルがそう言つと足元に魔法陣が現れた。  
そして3人の傷が治つていった。

「湖の騎士シャマルと風のリング、クラールヴィント。癒しと補助  
が本領です」

そう言つてシャマルはほほ笑んだ。  
俺は自分で治せるから良いけどな。

「あたしたちはサポート班だ。あのうざいバリケードを止めるよ」

「うん」

「ああ」

アルフの言葉にユーノとザフィーラは答えた。  
不意に海中から闇の柱が生えてきた。

「始まる」

「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム…闇の書の、  
闇」

闇の柱が消えドーム状に膨れ上がったよどみが破裂した。  
原作と見た目が違うな。

防衛プログラムには鬼の腕や竜の翼の様な物が追加されていた。

side out

side 第3者視点

「チーンバインド!!」

「ストラゲルバインド!!」

アルフとユーノがバインドを使い触手を切り捨てた。

「縛れ! 鋼の軛!! だえええあああ!!!!!!」

ザフィーラはそう叫んで鞭の様に振り触手を一掃した。

「ちゃんと合わせるよ。高町なのは!!」

「ヴィータちゃんもね」

第一陣の攻撃が始まる。



レイジングハートを環状魔法陣が取り巻いた。  
そして巨大な魔力の塊が収束する。  
魔力の塊が4発のバスターとなり防衛プログラムを固定した。

「シューウウウウー！ー！ー！！！！」

4発のバスターの中央から最も威力の高いバスターが発射された。  
中央のバスターは最初に放った4発のバスターを飲みこみさらに巨大な物へと変化した。  
なのはのエクセリオンバスターによって2枚目のバリアも破壊された。

「次は我だ！！壊れた神器ブリューナク！！」  
フロウクン・ユット・ウエボン

ジャバウオックの手に一本の槍が現れた。  
そしてジャバウオックはその槍を投擲した。

「撃ち貫け！！！！」

ジャバウオックの手を離れた槍は雷へと変化し防衛プログラムのバリアに突き刺さった。

ジャバウオックのブリューナクによって3枚目のバリアが破壊された。

「わ、私？い、行くよアイギス！！」

『はい！！』

多少慌てた様子にならずなだったがすぐに攻撃の準備に取り掛かった。

「当たって、白の砲撃……」



シグナムのシュツルムファルケンによって5枚目のバリアが破壊された。

「私達だね」

「うん！」

アリシアとフェイトは頷き合った。

「アリシア・テストロッサとラブリユス・リディア……」

「フェイト・テストロッサとバルディッシュ・ザンバー……」

「「行きます!!!」」

2人はそれぞれのデバイスを振りかぶった。

ラブリユスとバルディッシュはカートリッジを3個ロードした。

「たあっ!!!」

「はあっ!!!」

2人はデバイスを振り衝撃波を放った。

途中にあつた触手達は切り裂かれていった。

「斬り裂け、斧神!!!」

『ライトニングアクス』

「撃ち抜け、雷神!!!」

『ジェットザンバー』

ラブリユスとバルディッシュの魔力によって形成された刃が同時にバリアを攻撃する。

アリシアの攻撃が6枚目をフェイトの攻撃が7枚目を破壊した。

そして2人の攻撃は勢いを殺さずに防衛プログラムを切り裂いた。

すると防衛プログラムの近くの海中から砲撃を放とうとする触手が生えた。

「盾の守護獣ザフィーラ。砲撃なんぞ撃たせん!!!」

そう言ってザフィーラが魔法陣を展開すると砲撃を撃とうとしていた触手達に青い魔力刃が突き刺さった。

「はやてちゃん!!!」

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

はやては魔法陣を中心に6本と、その中心から1本の7本の光の槍を放った。

光の槍が当たると防衛プログラムは石化し崩れていった。しかし崩れていくのも一瞬ですぐに再生を始めた。

「うわ…うわあ…」

「何だか凄い事に…」

その光景を見てアルフとシャマルが呟いた。

「俺達だな。闇の狩り手、魔神竜馬とその相棒、虚無と無限の無々

!!!」

『ツヴァイ行きます!!!? インステントスチリルタチオンティアンタウスカートリッジ!!! 瞬風 翠旋撫子』

無々はカートリッジを2つロードした。

すると手甲が弾け竜馬の両腕に旋風が巻き起こった。

「打ち砕く!!! しゅんぷう瞬風 すいせんなでしこ翠旋撫子!!!」

そう叫びながら竜馬は防衛プログラムの下に潜り込んだ。  
次の瞬間、防衛プログラムは空中に打ち上げられた。

「風よ、彼の敵を縛めよ!!!」

竜馬がそう言うと防衛プログラムの四肢を風が巻き付き固定した。  
そして竜馬は右腕に風を集めた。

「旋風閃天掌!!!!!!!」

空中に固定されている防衛プログラムの腹に竜馬は風を纏った掌底  
を打ち込んだ。

巻き起こる旋風によって防衛プログラムは切り裂かれていく。  
そして防衛プログラムは海に落ちた。

「行くぞデュランダール!!!」

『オーライボス』

クロノの言葉にデュランダールは答えた。

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ……」

クロノの言葉に呼応するかのようには海上が凍りついていく。  
防衛プログラムも徐々に凍りついていく。

「凍てつけ!!!!!!」

『エターナルコフィン』

防衛プログラムは凍結された。



しかし完全な凍結は不可能で動きを抑えるのが限界だった。

「行くよ！フェイトちゃん、アリシアちゃん、はやてちゃん、竜馬君！！」

「……うん（ああ）！！」「……」

そして5人は砲撃の準備に移った。

『スターライトブレイカー』

「全力全開、スターライトオオオオ……」

なのはの目の前に巨大な魔法陣が現れる。

「雷光一閃、プラズマザンバアアアア……」

フェイトはバルディッシュに雷を落とし帯電させた。

「斧刃降雷、ヴォルカニック！！」

アリシアはリディアフォームのラブリュスを1つに合わせた。そして目の前に魔法陣が現れる。

「ごめんな……おやすみな……響け終焉の笛、ラグナロク！！」

はやてはシュベルトクロイツを頭上に掲げて魔法陣を形成した。

『ゼロ・インフィニティ装填』

「夢幻万壊、アンノウン！！！」

竜馬は右手と左手の魔法陣を1つに合わせた。



「これで終わったか…」

後はリインフォースだが…

「はやて…!」

「はやてちゃん…!」

不意にはやてが倒れた。

ウィータが何度もはやての名を呼んでいる。

「はやて…! はやて…!」

闇が夜天に帰る時…（後書き）

～霊使い達の雑談～

贈り物と感想ありがとうございます。

バラランシャ様、銃王 海さん、ユタ様、フレイス様、ルシファー様感想ありがとうございます

銃王 海さんより前回の人+キヨン・樹啓蔵・シヤナの料理を、

いただきました。

竜馬「増えた！！！」

「来たぞ〜」

竜王「あ、ユタ様の所より優、夜空、カオスの3人が来ました」

夜空「さあ、竜馬！優！こっちにくるんだ！！」

優「は！？それとカオス姉さん何で腕を押さえるんだ？」

カオス「協力してるから」

竜王「他にもゲストが来るから先にあの部屋に行つてて

夜空「オツケーー！！」

「こんにちは〜」

竜王「おお、フレイス様の所よりティアナが来ました」

ティアナ「キャロが来てるらしいからね」

竜王「一応材料とかは準備してあるよ」

ティアナ「ありがとうございます」

星菜「あの、何故私達の目の前にこんな服が？」

星菜の前には猫耳メイド服

ライラの前には犬耳スクール水着

桜花の前にはゴスロリ服

竜王「ん？その服を着た写真を春人に送ろうかと思ってな。可愛いとか思ってくれると思うぞ？」

星菜・ライラ・桜花「「「分かりました(った)!!」「」」

リオラ「(……どうして僕の目の前にチアリーダーの服が?)」

竜王「っとティアナ？もうちょっと温度は低くな」

ティアナ「はい!!」

キャロ「相手がどんな手で来ようが……オレはいつでも」青眼「と共に闘つー!!」

竜王「……間違っていないがそこはフリードリヒにしてあげような？」



夜空「分かった。闇を狩る少年続くぞ！！さゝ続き続き」

ティアナ「チヨコって温度調整が難しいわね……」

竜王「焦がさないようにね？」

陽が昇り夜天が消える。

sideアルフ

「夜天の書の破壊!？」

「そんな!どうして!？」

クロノの言葉になのはとフェイトが反応した。  
魔神はどこかに行っていない。

「闇の書:いや、夜天の書の管制プログラムからの進言だ」

「管制プログラムってなのは達が戦ってた？」

あたしの言葉にクロノは頷いた。

「防御プログラム自体は破壊できたけど夜天の書本体はすぐにプログラムを再生しちゃうんだって。今度ははやてちゃんを浸食される可能性が高い夜天の書が存在する限りどうしても危険は消えないんだ」

ユーノが説明をした。

そんな:

「それじゃあシグナム達も!」

「いや」

フェイトが言った直後にシグナムが現れた。

「私達は残る」

「どう言う事だい?」



シグナムの言葉にあたしは聞き返した。

「防御プログラムと共に我々守護騎士プログラムも本体から解放したそうだ」

あたしの問いにザフィーラが答えた。  
そう言う事かい。

「それでリインフォースからなのはちゃん達にお願いがあるって……」  
「お願い……？」

シヤマルの言葉にあたし達は首を傾げた。

side out

side 魔神竜馬

「ヴィータ、はやての様子はどうだ？」

「まじんか、寝てるよ」

部屋から出てきたヴィータに俺は尋ねた。  
そうか……

「あたしは用があるから行くな」

「じゃあ、俺がはやてを家に運んでおくか？」

俺の言葉にヴィータは軽く頷くだけだった。  
そして俺は部屋に入った。

「俺の力じゃ何もできない……………」

はやてを抱きかかえると俺は部屋から出た。  
気の強化が無くて抱きかかえる事が出来る。

side out

side 八神はやて

ん……………

ここは……………

「起きたのか」

「竜馬君？…ッ！！」

不意に胸の部分が苦しくなりました。  
なんやこの苦しみ!?

「……………リインフォース？」

「はやて…今、お前は何を感じた？」

私の呟きに竜馬君は聞いてきました。  
今感じた物…

「リインフォースが…無くなってしまふような感覚や……………」

「それを感じてお前は どうしたい？会いに行くか？…それともこの  
まま終わりにするか？」

竜馬君は私の言葉を聞いて選択肢をあげました。  
そんなもん決まってる!!

「会いに行く!!そして説得するんや!!」

「分かった。無々、セットアップ」

『了解しました』

すると竜馬君の腕輪が小振りのナイフになりました。  
どうするんや？

「ゼロ・インフィニティ…契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死鳥の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。」不死鳥転身『」

竜馬君が呪文を唱えると防衛プログラムと戦ってた時の姿になりました。

「行くぞ」

「へ？え！？え！？」

いきなり竜馬君は私を抱きかかえました。  
まさか…

「きゃあああああああ！！！！」

竜馬君は私を抱きかかえたまま凄まじいスピードで飛びました。

sideout

side第3者視点

ベルカ式の魔法陣とミッド式の魔法陣が合体した中央にリインフォースは立っていた。  
レイジングハート、バルディッシュ、ラブリウスを起動状態で3人は構えている。

『設定する準備が来ています』

『スタンバイ』

「ああ、短い間だったがお前たちにも世話になった」

デバイス達の言葉にリインフォースは感謝の言葉を言った。

『気にせずに』

『会えてよかったです』

『良い旅を』

「ああ」

ヴィータがシグナムに抱きついた。

「リインフォース!!皆!!」

「くくく!!」「くくく」

はやての声に皆は声のした方を向いた。

そこには竜馬に抱きかかえられリインフォースの元に向かってくるはやてがいた。

「はやてちゃん……」

「はやて!!」

「動くな!動かないでくれ、儀式が止まる」

はやての元に駆けだそうとするヴィータをリインフォースが止めた。

「あかん!!やめて!!リインフォースやめて!!破壊なんかせんでええ!私が、ちゃんと抑える!!大丈夫や、こんなんでええ

!!」

涙を流しながらはやては叫んだ。

「主はやて、良いのですよ」

「良い事無い！良い事なんか何もあらへん！！」

リインフォースの言葉をはやては首を振って否定した。

「ずいぶんと長い時を生きてきましたが最後の最後で私はあなたに綺麗な名前と心をいただきました。騎士達もあなたのをばにいます。何も心配はありません」

リインフォースの言葉にはやては涙を流した。

「お前はそれで満足なのか？リインフォース」

「ええ、主はやてを守るために私が出る事ですので」

竜馬の問いにリインフォースは答えた。

その瞳には強い意志が見える。

「リインフォース！！」

「私は幸福な魔導書です。ですので心配をしないでください。主はやて、1つお願いが私は消えて小さく無力な欠片へと変わります。もしよければ私の名はその欠片ではなくあなたがいずれ手にするであろう新たな魔導の器に送ってあげてくれますか？祝福の風リインフォース、私の魂はきつとその子に宿ります」

はやてはその言葉を涙を流しながら聞いた。

そしてリインフォースは立ち上がり魔法陣の中央に立った。

「主はやて、守護騎士達、それから小さな勇者達ありがとう。そして、さようなら……」

そしてリインフォースは空へと帰っていった。  
2度とその姿を持つ事もなく…

side out

side 魔神竜馬

死んでしまった…

「…シグナム。悪い、はやてを頼む」  
「何？…分かった」

シグナムは訝しげに俺を見たが俺の顔を見るなり了承した。  
移動しよう…

「竜馬君!？」

「来るな!!!!!!」

「………!!?!」「………」

誰が名前を呼んだのかは知らないだが今は1人してもらおう。  
そして俺は山の奥に移動した。

「無々、結界を張ってくれ。絶対に壊れない結界を…」  
「…了解しました」

深く追求せずは無々は結界を発動した。  
これで良い…

「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

俺は素手で近くの木を殴りつけた。

気によって包まれているため拳は壊れずに木が吹き飛んだ。

「畜生！！畜生！！！！畜生！！！！！！畜生！！！！！！！！」  
『マスター……』

俺は木を、岩を、地面を殴り続けた。

いつの間にか指は折れ、拳は砕け、腕が壊れた。  
それでも俺は殴るのを止めなかった。

「俺が！俺が！！俺が！！！！何もできないばかりに！！！！！！！！！！」  
「！！！！」

なんでリインフォースを助けられなかった！？

俺が何もできなかったからか？

違う！！

俺に力が無かったからだ！！！！

「くけけけ…自分で自分を壊してるぞ？」

「バカだ…バカがいるぞ？」

不意に声が聞こえたのでそちらを見ると泥人形のような生き物がいた。  
うるせえ……

「こんなのが俺達を狩ってるってのか？」

「こんなガキが？」

うるせえ…

「この程度のガキなら手を使わずに殺してやるよ」  
「だよな」

うるせえうるせえうるせえうるせえうるせえうるせえうるせえ……  
俺は無々を手にとった。

「無々、形状変化。大鎌」

『了解しました』

無々はナイフから大鎌へと変化した。

「お？やる気か？」

「ひははは……俺達に勝てるんでも思ってるのか？」

おかしそつに泥人形どもが笑っている。

ぶち殺す……

「くけけけ……やれるもんならやって……み……ろ……？」

笑う一匹の腕を俺は斬りおとした。

簡単には殺さない……

「ひははは！！お前なに腕を切られてんだよ」

「ゆ、油断しただけだ！！」

2匹は驚きながらも逃げるそぶりは見せなかった。  
逃がさない、生かさない、殺さない……

「ひははは！！これでも喰らえ！！」

泥人形の一匹が俺に向かって腕を伸ばしてきた。  
俺はそれをかわし懐に潜り込み胴体を斬り落とした。



「くけけけ…お前だつてやられてるじゃねえか」  
「ひはは…結構強いぞ？」

絶対に逃がさない…  
今、俺の表情は鬼の様な形相だろう。

「…無々」  
『？カートリッジ。瞬間 黄雷竜胆』  
モメンタンナヌイガフンゲゲーヴァエンツィアン

大鎌が爆ぜ雷の刃が形成された。

「瞬雷 黄雷竜胆！！！！」

俺が大鎌を振ると雷撃が飛び周囲の木を全て燃やし尽くした。  
その光景に泥人形共は恐怖を覚えたらしい。

「に、逃げるぞ！！」  
「あ、ああ！！！！」

上半身だけの泥人形を抱きかかえて片手が無い泥人形は走り出した。

「竜雷…閃空鎌！！！！」

大鎌を振るい雷の刃を飛ばし泥人形共を真つ二つに斬り裂いた。  
まだだ…

「無々、エクステンド」  
『エクステンド？万死ヲ刻ム影？』



陽が昇り夜天が消える。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

贈り物と感想ありがとうございます。

ユタ様、ルシファー様、銃王 海さん、フレイス様感想ありがとうございます。

銃王 海さんよりじゃんタン二号を、

いただきました。

竜王「昨日からぶつ通しで撮影してるなあ」

星菜「竜馬ですので良いのでは？」 ナース服

ライラ「そっだよ」 セーラー服

桜花「うむ」 ドレス

「こんちゃ〜!!」

竜王「お、銃王 海さんの所よりこなた・かがみ・サイト・ルイズが来ました」

かがみ「豆まきをするためよ」

竜王「で？俺が鬼役？」

こなた「いや、あたし的にはかがみんが適役だと思ったんだけどね」

かがみ「ふざけんな!!」

竜王・こなた「(鬼だよなあ)」

サイト「いいから早くまこつぜ」

ルイズ「そうね」

竜王「星菜達もやる?」

星菜・ライラ・桜花「(や)ります(る)(る)」「」

こなた「ってあれ?なにやってんの?」

ライラ「へへへ」ゼウスに鬼の面を付ける

竜王「よし、やるか」

竜王・ライラ「鬼は外!!!!!!」ゼウスに向けて豪速球

ゼウス「んぎゃあああああああ!?!?!?!」

ルイズ「きゃあ!?!」何故か豆が爆発

「こんにちは」

竜王「お?フレイス様の所よりティアナとはやてが来ました」

はやて「何をやってるんや?」

竜王「見ての通り豆まき」

はやて「いや…私には老人に豆をぶつけて苛める光景にしか…」

ティアナ「あ、あの! 竜王さん、もう一度チョコを作っても良いですか?」

竜王「良いよ、はやてもいるし。それに紫も来てるみたいだしね」

紫「何で分かったのよ」

竜王「ん〜…勘?」

はやて「あははは…」

竜王「ちよつと俺は抜けるね。豆まきのあと片付けは俺がやるから気にしないで良いよ」

竜王・はやて・ティアナ・紫以外「はい」

はやて「こんなでどつや!」

竜王「す!」

紫「一応私もできたわよ」

竜王「なんで出来るのに家事を藍にまかせっきりなんだ?」

ティアナ「い、一応出来ました」

はやて「ん〜ちょっと混ぜが甘かったかな」

竜王「とりあえず締めておく。ゼウス頼んだ」

ゼウス「お、おう！闇を狩る少年続くぞ！！いた！いたたた！！豆が痛い！！」

悲しみの果て。

side シグナム

主はやてを連れてきた魔神の顔：

今にも爆発しそうな怒りと悲しみを無理やり抑えているかのような感じだった。

「竜馬君…」

「どうしたんだ？まじんの奴」

高町とヴィータが呟いた。

どうやら魔神の顔を見たのは私だけらしいな…

『結界反応あり』

「え！？それってどこだか分かる！？」

不意にテストロッサの姉のデバイスが言った。  
結界反応！？

「敵がいると言うのか！？」

『反応地点は……魔神さんの行った所です』

魔神の…ならば…

「分かった。誰もそこには近づかないようにしろ」

「どう言う事だ？シグナム」

私の言葉にザフィーラが反応した。

「その結界は魔神が張った物だ。見られたくない事をしているのだろっ、だから近づくな」

「どうしてそんな事が分かるの？」

シヤマルが聞いてきた。

私に主はやてを渡したのは冷静でいられるからか？

「先程の魔神の表情を見れば分かる。だから、決して近づくな……！？」

突然、轟音が響き渡った。

結界の内部にいて外部に音を漏らすか……

「な、なんや!？」

「ご安心ください。魔神が起こしている音です」

主はやてが驚いていたので説明をした。

それでもリインフォースの欠片を力強く握りしめています。

「そっか……竜馬君も悲しんでるんやね……」

「はい……」

主はやてはそう言って目を伏せた。

side out

sideプレシア・テストロツサ

「あああああああああああああ……!……!……!」

目の前には周囲を攻撃し続ける竜馬が映っている。



「竜馬、その悲しみは分かるわ…」

竜馬の今の状態はおそらく過去の私と酷似しているはずだ。故に竜馬がどれだけ辛いかもよく分かる。

「今度は私が助ける番かしらね」

そう呟いて私は竜馬の張った結界の中に転移した。

side out

side 魔神竜馬

『マスター、転移反応です』

「そうか…」

無々の言葉に俺は自分を壊す行動を一時的に止めた。  
誰だ？

「竜馬…」

「プレシアか…」

後ろから名前を呼ばれたので振り返るとプレシアがいた。  
何でここにいる…

「何の用だ…」

「あなたが悲しんでいたからちょっとね」

プレシアは俺を見ていった。

悲しんでいる…

「そんな事が何でお前に分かる…」

「分かるわ……………経験した事だもの」

そう言いながらプレシアは俺に近づいてきた。

そうか、プレシアも一度アリシアを失ったんだったな。

「今のあなたは過去の私と同じ、誰かを助けられなかったのは自分のせいだと傷つけ、どうしようもない感情が渦巻いている」

俺の目を見ながらプレシアは真っ直ぐに言った。

プレシアの言った事は殆ど当てはまっていた。

「…分かってるんだよ。…………でも!!!俺にもっと力があれば!!!」

「私もそう思ったわ…」

いきなりプレシアは俺を抱きしめた。

な、何を!?

「でもね…あなたには私と違うものがあるでしょう?」

「違う…もの…?」

プレシアの言葉を俺は繰り返した。

「あなたには仲間がいる。その仲間もあなたが助けたものじゃないの?私の娘達も、私自身も」

「……………」

仲間…

俺はプレシアの顔を見た。

「そうね、例えば私の娘達、そして私、次にジャバウォックちゃん、それになずなちゃん、そして今回助けたはやてちゃん達、他にもたくさんの人、ね？こんなにもたくさんの人をあなたは救っているのよ？」

「俺が…救った…」

「こんな…俺が…」

不意に涙が出てきた。

「！？こ、これは！その！！」

「…良いのよ。誰にも言わないから今だけは思いっきり泣きなさい」

俺の言葉を遮りプレシアはほほ笑みながら言った。

「泣いても…良いのか…？」

「ええ」

俺の目からは堰を切ったように涙があふれてきた。

「く…く…ふぐう…うわあああああああ！！！！！！！！！！」

「よしよし」

プレシアは泣く俺の頭に手を置き頭をなでた。  
でも気にする余裕は無かった。

「ごめん！！ごめんな！！リインフォース！！ぐううううううううう

！！！！！！！！！！」

「泣きなさい。泣いてスッキリしたら前を向いて歩きなさい」

そのまましばらくの間俺はプレシアの胸で泣き続けた。



悲しみの果て。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

贈り物と感想ありがとうございます。

ユタ様、銃王 海さん、バラランシャ様、ルシファー様、蒼影様、フレイス様感想ありがとうございます。

銃王 海さんよりギターを、

いただきました。

ティアナ「…今回は大分シリアスでしたね」

竜王「シリアスって結構書きやすいんだけどね」

はやて「何やつとるん？」 本編を教えていない

ティアナ「何でも無いです…」

「こんにちは」

竜王「あ、こんにちは。ユタ様の所より橙、藍、紫が来ました」

橙「チョコですか？」

ティアナ「うん、難しいんだ」

藍「なるほど、2月14日ですね？」

はやて「正解やー!!」

紫「ふん…」

竜王「（紫は興味が無いのか？）ん？」

「はろはろ」

竜王「銃王 海さんの所より島田・姫路・霧島・木下愛子・清水・  
工藤の六人が来ました」

島田「竜王！前の事は水に流すからチヨコ作りをさせて!!」

竜王「前の事？……ああ、あれか。別に良いぞ」

姫路「何があつたんですか？」

竜王「気にしないでやれ…」

霧島「早く作る…雄二のために」

竜王「オツケー。はやて、教えるの手伝ってくれ。出来たら藍も」

はやて「了解や」

藍「大丈夫ですよ」

「じにゃにゃちはー!!」

竜王「お？ハヤテか。蒼影様の所よりハヤテが来ました」

ハヤテ「あれ？竜馬君は？」

竜王「第二訓練部屋で鍛えてる」

ハヤテ「ほな、ちょこつと行ってくるわ」 ゲーム等を大量に持つ

竜王「おう、つと一応は俺も離れておこう」 第一訓練部屋に移動

「来ましたか…」

竜王「あれ？先に来てた？バラランシヤ様の所よりリオラが完全にキレた状態で来てました」

リオラ「これまでの事も全部あなたが悪いんだ。だからあなたを殺します」

竜王「んゝ春人と似た考えだ。やっぱ兄弟 つと？黄昏の武器？a fusion」

竜王の言葉に反応し？黄昏？と名の付いた武器が一つになる。

竜王「合成完了…？黄昏の極器？」

リオラ「準備完了ですね。死滅の黒薔薇、断罪の蒼薔薇、必滅の黄薔薇、破魔の紅薔薇！！！！！！」

竜王「4本同時投擲かよ…っせい！！」 全て叩き落とす

リオラ「なっ!?!」

竜王「ふ〜…一応ここは俺の領土せかいだぞ?俺が戦うには最適な場所なんだ。それにこの?黄昏の極器?は春人の最高の一撃?救済ゲイ・ヘルの白薔薇?にほんの少しだが打ち勝ってるんだぞ?」

詳しくは?神に何度も殺された青年?の「番外編:本編書こうと思っただけだなあ…….はあ(汗)」を読んでください

リオラ「そ、そんな……」

竜王「…しゃーない、お前のコスプレ写真とかはこっちにある奴全部燃やすよ。あ、でもバラランシャ様に何枚か送ったな」

リオラ「そっちは僕が回収します。絶対に燃やしてくださいね!」

竜王「はいはい…えっと、これと、これと、これ」 リオラのコスプレ写真の入ったアルバムを取り出す

リオラ「……こんなにあつたんですか」

竜王「ああ、合成写真とかもあるけどね(春人とリオラが抱き合ってる写真とか、獣耳を生やしたシリーズとかね)」

リオラ「…寒気がしたんですけど」

竜王「気にすんな。どうする?ここで燃やす?それとも持ち帰ってあつちで燃やす?」

リオラ「……持ち帰ってあつちで燃やす事にします。ここで燃やし



ても再構築されそうで」

竜王「まあ、できるっちゃあできる」

リオラ「はあ…それじゃ、失礼しました」 アルバムを持って帰っていく

竜王「じゃ〜な〜!!」

〜第二訓練部屋〜

ハヤテ「これでどうや!!」

竜馬「ちよっ!?!また負けたアアアアア!!」

ハヤテ「ふっふっふっ次はどれを脱いでもらおうか…じゅるり」

竜馬「うわあああああ!!!!!!」

竜王「……失礼しました」

竜馬「いや、助けるよ!!!!」

ハヤテ「観念するんや…」

竜王「え〜…仕方が無い。ハヤテ、蓮に言いつけるよ?」

ハヤテ「すみませんでした!!!!!!!!!!」 土下座

竜王「まあ、竜馬も気分転換が出来たみたいだから言わないよ。今度やるときは俺も混ぜてくれ」

ハヤテ「了解や!!」

竜馬「今はやらないのか？」

竜王「ああ、チョコ作りをサポートして来なくちゃいけないんだ」

竜馬「そうか」

はやて「竜王さん!!」

竜王「!?!?な、何!?!」

はやて「無理や!あの子は私らじゃ無理やああああ!!!!」

姫路を指差す

藍「実はチョコを作っている最中にいきなり濃硫酸を入れたり酢酸を入れたりと…」

竜王「やっぱりかあ…姫路」

姫路「はい。なんですか？」

竜王「あのな?料理には化学薬品を使わないんだぞ?」

姫路「そうなんですか？」

竜王「そうなの、そもそも……以下略」 姫路に料理に化学薬品を入れないと言う事を教えるのに4時間強使用

紫「勝手に締めちゃうわね。闇を狩る少年続くかしらね？」

橙「たぶん続きますよ」

ティアナ「（こんな環境でチヨコを完成できる私って…）」

## クリスマス会、魔法を話す時。

side 魔神竜馬

俺が泣き始めてどれぐらいの時間が経っただろうか…  
いつの間にか日は完全に沈み夜になっていた。

「落ち着いたかしら？」

「…ああ、すまなかった」

プレシアは俺が泣いている間ずっと頭をなでていてくれたのだった。  
母親ってのはこんなにも暖かいものなのか…

「…あなたは優しいわ。でも、その優しさが時として自分を傷つけてしまう…だから、今回の事を決して忘れずにあなたが強くなるための糧かてにしなさい」

俺の目を見てプレシアは優しく、そして力強く言った。  
ふと気がつくともプレシアの顔にも涙の痕があった。

「…あなたも優しいですよ。プレシア・テストロッサ、一緒に泣いているのだから」

「ばれちゃったのね」

俺の言葉にプレシアは子供の様に笑った。  
それにつられて俺も笑ってしまった。

「さあ、帰りましょう？」

「そうだな。すずかも心配しちゃう」

そして俺達は帰路に着いた。  
明日は魔法の事を話す日だ…

side out

side 第3者視点

「なのはとフェイト、アリシア、はやてと一緒にもうすぐ到着だつて、はやても含む4人で打ち明けたい事がある。ってさ」

そう言つてアリサはケータイをしまった。

竜馬はまだ泣いた痕が戻らないらしく顔を洗っている。

「昨夜のあれ。もしかしてはやても一緒だったのかな？」

「どうだろうね？ 竜馬君も泣いたみたいだったし…」

すずかは首を傾げながら呟いた。

すずかの言葉にアリサは驚いた。

「竜馬が泣いた！？ それでずっと顔を洗ってるのね？」

「うん。まだちよつと目が赤いみたいだよ」

そしてすずかの屋敷のベルが鳴った。

それと同時に竜馬も洗面所から出てきた。

「来たみたいだな」

「そのようね」

「みたいだね」

そしてなのは、フェイト、アリシア、はやて、竜馬はアリサとすずかに魔法の事を打ち明けた。

話を聞いた2人は最初は驚いていたが最後には納得していた。

「まさか、そんな事が起きてたなんて思わなかったわよ」

「普通は思わないもんな。それじゃあクリスマス会を始めるぞ!!」

そしてクリスマス会が始まった。

side out

side 魔神竜馬

昨日の悲しさが完全には消えているわけではない。

だが、こいつ等がいるのに1人だけ暗い訳にもいかないからな。

「無々、花火を上げるか」

『そうですね。セットアップ、形状は杖』

無々は杖に変化した。

「ゼロ・ブレイカー!!!!!!」

俺は上空に向けてゼロ・ブレイカーを放った。  
ゼロ・ブレイカーは上空で弾けた。

「うわ」

「綺麗だね」

アリサとすすかには好評みたいだな。

って何で3人はセットアップしてるんだ？

「デイバイン・バスター!!!!」

「サンダー・スマッシュ!!!!」

「バアル・スマッシュ!!!!」

なのは、フェイト、アリシアも上空に向けて砲撃を放った。  
それぞれの砲撃はぶつかり合い花火になった。

「おいおい……」

俺は呆れながら笑った。

そしてクリスマス会は終了したのは達は親に魔法のことを教えるために帰っていった。

クリスマス会、魔法を話す時。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

贈り物と感想ありがとうございます。

ルシフェル様、フレイス様、バラランシャ様、銃王 海さん、空刀様感想ありがとうございます。

銃王 海さんから板チョコを大量に、

いただきました。

竜馬「凄い量だな…」

竜王「作る人が来るんだよ」

「こんにちは」

竜王「来たか。銃王 海さんの所より中村ゆり・立華奏・シャナ・ルイズが来ました」

ゆり「いきなりだけどチョコの作り方を教えてちょうだい」

竜王「了解」

竜馬「楽しそうだな」

星菜「実質、楽しいのでしょう」



桜花「我等はあつちでゲームをしているぞ」

ライラ「あ、まってよ」

竜王「……シャナ。チヨコは最初に細かく切るもんだぞ？」

シャナ「う、うるさいうるさいうるさい！！知ってたわよ！！」

竜馬「…大丈夫か？」

「こんにちは」

竜王「ん？えつと…空刀様の所より蛇川乱太が来ました」

蛇川「どう言う状況なんだ？」

竜馬「ええと、チヨコが大量に来ていて竜王の料理教室が始まっているってところかな」

蛇川「滅茶苦茶だな」

「上上下下左右左右BA！！」

竜王「よっしゃ来たああ！！！！」

竜王・キャロ「下手者共！！せめて美食家の魚に喰われることを願え！！！！」

スバル「どう言う事！？」

竜王「大分良かったぞキャラ！」

キャラ「はい」

竜馬「どうやら今日も泊るみたいだな」

スバル「私は泊れないけどね」

竜王「落ち込むな。ほら、そっちのテーブルの食べ物全部食って良  
いから」

スバル「やったあ!!」

竜馬「…あつちでチヨコ焦がしてるぞ」

ルイズ「何で上手くないかないのよ!?!」

竜王「うわあ…しゃあないか。締めておいて」

蛇川「闇を狩る少年続くぞ、いつもこうなるのか?」

竜馬「ん…いつもよりは静かだな」

蛇川「おいおい、いつもどんぐらいなんだよ…」

## 欲望を持つ者。

side 魔神竜馬

魔法の事を打ち明けてから数日が経った。

ヒータ達が出来ないと言う事は？闇？がまだいると言う事だろう。

「…後何匹なんだ？」

もし、リインフォースの様に何も出来なかつたら…

俺は空を見上げた。

「いけないいけない！！！」

首を振って俺は先程考えた事を振り払った。

暗い考えばかりじゃそう言う結果ばかりになってしまう！！

「何やってるんだ？」

「ん？あれ？確か同じクラスの…陸奥<sup>むつ</sup> 高人<sup>たかと</sup>？」

声がり振り返るとそこには小学校のクラスメイトの高人がいた。  
何でこんな所にいるんだ？

「なあ、魔神。お前さあ、いつも高町達と一緒にいるよな」  
「そうか？」

俺に近づきながら高人は言った。

こいつとあんまりしゃべった事が無いんだよな。

「それでさあ…俺、いつも思ってたんだ」

「何をだ？」

さっきからこいつは何を言ってるんだ？

「何で…」

…俺よりも先にこの世界に転生者がいる

のかつてことだよ！！！！！！」

「！！！！！！！！」

高人はいきなり斬りかかってきた。

どこから武器を！？

「あははは！！やっぱり避けるかあ！！」

「お前…：転生者、なのか？」

俺は体勢を立て直し高人を見た。

よく見れば高人は武器をその場で出していた。

「投影魔術かよ…」

「ホント、予想外だったよ。最初のジュエルシード戦に俺が助けに入ろうとしたらどこかから狙撃だぜ！？笑えるだろ！！しかもフェイトを助けようと思ってたらお前がいるんだぜ？これで俺の計画はパーだよ！！」

高人は笑いながらそう叫んだ。

計画？

「計画ってなんだよ？」

「ふん！…まあ、お前は死ぬんだし教えても良いか。この時代でな？なのは達にフラグを立てておけばハーレムを作れるんだよ！！」

…：分かった。

こいつは下衆だ。

「無々…：セットアップ…：形状は大鎌」

『了解。Set Up』

俺は無々に静かに言った。

セットアップし俺の服装は黒の上下に赤のコートに変化した。

「なんだ？やる気か？無駄無駄、俺には神から貰った無限の魔力と？投影魔術？があるんだぜ？お前如きが勝てるわけ無いだろ？そもそも……」

「五月蠅いよ……塵芥が……」

高人が何かを言っていたが俺はそれを遮った。

俺の言葉に高人は青筋を浮かべた。

「何だ……と……？今、俺の事を言ったのか？」

「ああ、何度も言わせるな。五月蠅いんだよ、塵芥が……」

高人は無言で大量の武器を投影した。

叩き潰す……！！

「所詮お前の魔力はその程度だろ……俺に勝てるわけがないんだよ

……！！」

「……………」

高人の言葉に答えずに俺は大鎌で斬りかかった。

それを高人は投影した？干将・莫耶？を交差させて防いだ。

「ちっ……………」

「甘い……！！トレースオン投影開始……！！」

高人は？干将・莫耶？を消して一本の剣を出した。

まさか…

「エクスカリバー約束された勝利の剣!!!!!!」

「ゲート・オブ・バビロンだったら、王の財宝!!!!!!」

俺は王の財宝からにえとのじょうが贄殿嫦娥を取り出し約束された勝利の剣を斬り払った。

約束された勝利の剣は贄殿嫦娥に触れた瞬間に消え去り俺に力が流れ込んだ。

「おいおい？何だよその刀？俺の約束された勝利の剣が消えちまつたじゃねえか」

「……………」

あまり多用はできないな…

俺の容量を超えたら俺が死ぬ。

「ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死鳥の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

「やっぱりお前だよな？」

俺は呪文を唱えフェニックスの姿になった。  
もうこいつの言葉は無視しよう。

「無々、形状変化。形状は刀」  
『了解しました。大鎌ゼンジャから刀シユベアート』

俺の言葉に無々は太刀から刀へと変化した。  
右手に無々、左手に贄殿嫦娥を構えた。

「便利な武器だな。決めた、お前を殺して俺が使う」  
「……………」

無々を見ながら高人は…………いや、塵芥は言った。

side out

side???

…………とても強く、とても黒い願いと魔力を持った者を感じる。  
こいつを取り込めば私はもっと強くなれる…

「Gurururu……………」

私は唸り声をあげながら体を起こし魔力を感じた所に向かった。

喰らってやろう！

取り込んでやろう！！

私が強くなるために！！！！



欲望を持つ者。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

贈り物と感想ありがとうございます。

ユタ様、ルシフェル様、空刀様、銃王 海さん、バラランシャ様、フレイス様感想ありがとうございます。

銃王 海さんよりフラグが立ったときにお知らせしてくれる機械を、いただきました。

「こ、こんにちは」

竜王「あ、ユタ様の所よりバカップルこと蒼夜とシャルロットが来ました」

シャルロット「そ、それでいきなりですがチョコ作りを…」

竜馬「…どつする?」

蒼夜「俺はシャルロットを見てるよ」

竜馬「そっか、しゃあない。本編で出て来る新しい魔法を練習してるよ」

竜王「別に良いけど変身したまま出て来るなよ?」

竜馬「わーってるよ」 第三訓練部屋に行く

第一訓練部屋が武器の練習、第二が体術、第三が魔法、第四は3種類の複合練習です。

「こんにちはー!!」

竜王「いらっしやい、銃王 海さんの所より腹ペコシスターことインデックスとビリビリ中学生こと御坂美琴が来ました」

美琴「誰がビリビリ中学生よー!!」

星菜「すでに放電してますが…」

ライラ「じゃあ、僕も放電したらビリビリかな？」

インデックス「ねえねえ、お腹が空いたよ。チョコ食べても良いかな？」

竜王「それはダメ。とりあえずアメを食べててくれ」

インデックス「分かった」

「こんにちは」

竜王「これでそろったな。フェイス様の所よりティアナが来ました。ちなみに前回からキャラコがここに泊っております」

桜花「その説明は必要なのか？」

ゼウス「一応じゃろ」

ティアナ「あの、お願いします」

竜王「オツケー　それでは、竜王の料理教室」

♪3分クッキングの曲が流れる♪

キャロ「あの、私ハート型にしようと思うんですけど」

竜王「ハート型？えっと、確かここに型が…あつた。これに溶かしたチョコを流しこんで」

美琴「上手く固まらないんだけど…」

竜王「……まず、イラついて放電するのを止めような？その所為で溶けてるから」

インデックス「大変だよ！！チョコが消えちゃった！！」

竜王「口の端についでるそれは何だ！！！！」

シャルロット「えっと、渡す相手を考えながら…／／／／／／！！！！」

竜王「危ないから溶かしたチョコを振りまわさないで!？」

ゼウス「…大分カオスじゃのう」

桜花「だな……!?!?」　いきなりの爆音に驚く

星菜「なんですか？」

竜王「ああ、気にするな。竜馬だよ」

蒼夜「どんな練習してるんだよ…」

竜王「え〜っと新しい魔法だから…破壊能力と防御能力の共存ってところか」

ゼウス「よく分からぬのじゃが…」

竜王「本編で分かるよ。じゃあ、蒼夜締めて」

蒼夜「分かった。闇を狩る少年続きます、シャルのチョコはどんな味かな？」

シャルロット「出来てからの楽しみだよ／＼／＼／＼！！」

竜王「バカップルだよな。まあ、良いやA・Sの世界の次はISの世界です」

星菜「ネタばれですか？」

竜王「いや、アンケートの結果だよ」

星菜「そうですか」

？闇？襲来。

side 魔神竜馬

…考えこそふざけちゃいるがこいつは結構強いな。

飛んでくる？干将・莫耶？を叩き落としながら俺は思った。

「なんだよ？防ぐだけで手いっぱいか？それであんな大口が叩けるのか？」

「……………」

俺の様子を見ながら塵芥は言った。

塵芥はさらに？干将・莫耶？を投影し投擲してきた。

「疾<sup>ち</sup>つ！！！！」

俺は無々に魔力を乗せ魔力の刃を作りだし叩き落とした。  
きりが無いな…

「おお！？そんなことも出来るのか！？」

「……………」

塵芥は興味深そうに俺を見た。

不意に俺と塵芥を巨大な影が覆った。

「Guruuuu……………」

「なんだこいつ？お前の力か？」

塵芥は笑いながら俺に言った。

しかし俺はそれを気にしている暇は無かった。

「!!!!!!!!!!!!!!」

何だこれ……………

影の主を見て俺が思ったのはそれだけだった。

影の主の姿はドラゴンだったが発せられる雰囲気は生き物のそれでは無かった。

「まったく、この程度のドラゴンを呼んだくらいで俺に勝ったつもりか？」

「ッ……………逃げろ!!!!!!」

俺は塵芥に向かって咄嗟に叫んだ。

あれは駄目だ！

「何を叫んだ……」

「Grauuuuuu!!!!!!!!!!!!」

笑いながらこちらを見ていた塵芥の上半身が一瞬にして消えた。

否…喰い千切られたのだ。

「くっそ!!!!!!」

『マスター！ここは一旦逃げましょう!!』

無々の言葉に同意しドラゴンが塵芥を喰っている間に俺は逃げ出した。

ちいっ!!!!!!

不意打ち過ぎた!!!

「ここまで来れば大丈夫か？」

『移動していないようですので大丈夫かと』

そうか…

さっきのあれは何だったんだ？

そして近くにいるだけで聞こえて来る叫び声…

「まるで…まるで生き物の皮を被った力の奔流の様な…」

あれはなのは達に会わせたら駄目だ。

俺が倒さないといけない…

「…倒せるのか？この俺に？」  
『マスター？』

無々が心配そうな声を出した。

『……マスターは勝てます。なんたって私のマスターなんですから  
！！』  
「無々……そう、だな。俺はお前のマスターなんだ、あんな奴にく  
らい簡単に勝てるよな！！」

無々の言葉に俺は勇気が持てた。  
急いで俺は元の場所に戻った。

「…何だ戻ってきたのか」  
「ああ、お前を倒さないと安心できないからな」

ドラゴンは俺を見て呟いた。  
ドラゴンの近くには1つの血溜まりが出来ていた。

「私を倒す？…ふふ、面白い事を言う。まあ、良い強くなった私の  
力を試すのにちょうどいい」

強くなった？

塵芥を喰った事で力が上昇したって事か？

「無々、形状変化。大鎌」  
『了解しました。刀から大鎌』  
シユヘアートセンジャ



そう言つて無々は刀から大鎌に変化した。

「初っ端から軽く飛ばしてくぞ!!」

ゲーベドゥナゲーヴァエンツィアン  
『黄雷 黄竜胆』

カートリッジがロードされ大鎌は雷を纏つた。  
たたっ斬る!!!

レウイ  
「黄雷 黄竜胆!!」

「ほほう、雷で威力をあげるか」

自身の腕を斬り落とされたと言つのにドラゴンは薄く笑っただけだつた。

効いてないのか!?

「何を驚いている? 私が痛がるとでも思ったのか?」

「……まあな。お前は何者だ? 生き物じゃないよな?」

答えるとは思つて無いが一応ドラゴンに尋ねた。

「私か…お前ならとづくに分かつてると思つたんだがな……」

「何!?!?!? 闇? なのか?」

俺の言葉にドラゴンは笑いながら答えた。  
こんな物までいるのか…

「だったら…尚の事ぶち殺さないとな」

「出来るかな?」

? 闇? だと分かつたなら容赦無くいける!!

俺は再び大鎌を構えドラゴンとの距離を取った。

？闇？襲来。（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想ありがとうございます。

フレイス様、空刀様、ユタ様、ルシフェル様感想ありがとうございます。

竜王「ふ〜…次かその次あたりだな」

竜馬「？何が？」

竜王「お前の新魔法」

竜馬「マジかWWW」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所よりティアナと毒料理マスター・シャマルが来ました」

シャマル「誰が毒料理マスターよ！！！！」

竜馬・ティアナ「……………」 目を逸らす

竜王「さて、ティアナに回復術を教えるんだったよな？」

シャマル「流された…ええ、そうです」

竜王「じゃあ…ティアナ、ちょっと耳貸して」

ティアナ「？…はい。…ふんふん…！？ノノノノそ、そそそ、そんな事無理です！！！」 顔を赤くして悶える

シャマル・竜馬「（何を教えたんだろう…）」

「お邪魔します」

竜王「つと…空刀様の所より都山修太が来ました」

修太「…どうかしたんですか？」 ティアナを指差す

竜馬「さあ？竜王が何かを教えたらしいけど…」

ティアナ「聞かないで！！絶対聞かないで！！！」

竜王「…ふふ」

シャマル「本当に何を教えたんでしょう？」

「ごんちは…！」

竜馬「あ、優さん。メリーも？」

竜王「ユタ様の所より優とメリーが来ました」

メリー「ゆ、優！ちょっとあっち行っててくれ！！！」

優「何でだ？」

竜馬「あ、だったら俺の魔法の最終調整を手伝ってくれませんか？」

優「かまわないけど」

修太「僕も行つて良いですか？」

竜王「…一応言っておくけど竜馬のあれは未完成だから」

竜馬「まあ、どちらかと言うと暴走した俺を止める役目ですね」

星菜「…どんな呪文ですか？」

竜王「ん〜…まあ、種類だけなら良いか。変身呪文だよ、フェニックスやフェンリルの上位番だな」

ライラ「それって強いのか？」

竜王「ああ、性能が酷いかな。ちなみに変身後の名称はヴリトラだよ」

桜花「検索したらおおまかに分かりそうな名称だな…」

メリー「竜王！！チョコ作りだ！！」

竜王「オツケー。それじゃあ、チョコを湯せんで溶かして…」

ゼウス「これは締めてもかまわないんじゃないかな？」

星菜「そうだと思いますよ」

ゼウス「では、んん！！闇を狩る少年続くぞ！！」

桜花「また爆音がした…」

ライラ「どんな姿だろうね？」

## 七つの大罪

side 魔神竜馬

「はあっ！……！！！」

「ふっ！……！！！」

ドラゴンのブレスをかわしながら俺は雷の刃を放ち続けた。  
しかしドラゴンの体はしばらくすると元の完全な体に戻ってしまう。

「どうした？どンドン動きが鈍くなっているようだが？」

「うる…せえっ！……！！！」

ドラゴンの言葉をさえぎるために頭に向けて雷の刃を放つがドラゴンはそれを気にもせずを受けた。  
雷の刃によって頭は落ちたがそんな物は関係無いかのように体は動いていた。

「くっ…化物が…」

「ふん、化物…か、お前も私達と同じなくせに何を言う」

再びドラゴンの頭が生え俺に話しかけた。

俺が？闇？と同じ…

「！……確か、シュドナイもそんな事を」

「シュドナイ？……ああ、傲慢プライドの手下の名か」

俺の出したシュドナイと言う名にドラゴンは反応した。

傲慢！？

「どつ言つ事だ？」

「…知らないらしいな。お前が倒した？闇？の中には【七つの大罪】  
と言つ奴等がいるんだ。例えば憤怒ライスのラビエル、傲慢プライドの天目一個、  
そして暴食グラトニーの私だ」

七つの大罪…

ドラゴンは得意気に言った。

「…なら、なら俺は大罪を持っていると言つのか！？」

「ああ、お前には一番純粹で一番不純な大罪だ」

笑いながらドラゴンは言った。

俺が…？闇？…

「さあ、くだらぬ話はこれまでにして戦いを再開するぞ…！！」

「待て！！俺の…俺の大罪は何なんだ…！！」

飛び上がるドラゴンに向けて俺は怒鳴った。

「私に勝つたら教えてやるつ…勝てればな…！！！！」

「ぐつ！？」

そう言つてドラゴンは俺に向かつて飛びかかってきた。

俺は咄嗟に大鎌で防いだ。

「その言葉、忘れるなよ…！！無々、形状変化。双剣」  
『了解しました。大鎌から双剣』  
ゼンジャ ツインシユベアタ

無々は太刀から双剣に変化した。



『ウエルキン ブルーロートゥス  
蒼穹 蒼蓮華』

カートリッジがロードされ双剣は冷気を纏った。  
それを見てドラゴンは一瞬顔を強張らせた。

「そうまきゅう 蒼穹 あおれんげ 蒼蓮華！！！！」

「ちいっ！！！！」

俺の攻撃をドラゴンは悔しげにかわした。

かわした？

何故かわす？

体は再生できるはずじゃ…

「もしかして…無々！？だ！…！」  
ツウファイ

『分かりました。？カートリッジ！瞬氷 蒼穹蓮華』  
インスタント田イ英ウスアズユール

カートリッジが二つロードされ双剣の刀身が砕けた。  
そして冷気による刀身が形成された。

「瞬氷 蒼穹蓮華！…！」  
しゆんひやう せいゆうれんげ

「ぐぐぐぐぐぐぐぐ…！！…！！…！！」

冷気の斬撃によってドラゴンの傷口は凍りついた。  
やっぱり…！！

「くっ…ばれてしまいましたか…ですが…！！」  
「何！？」

ドラゴンはいきなり強風を巻き起こした。  
近付けない！？

「近寄れなければ無意味です…！」  
『マスター…！！』

不意に無々が叫び声をあげた。  
それと同時に俺に無数の何かが炸裂した。

「ぐあっ!?!」

「ただの風だと思わないように、私に勝たなければ聞き出せませんよ?」

ドラゴンは強風を巻き起こしながら言った。

何が飛んで来ているんだ!?

「がふうっ!?!?!」

『逃走を!!!このままではマスターの精神が!!!』

どうやら無々は死なない体による精神的苦痛を危惧しているらしい。不死の体に最も効果的なのは永続的に苦痛を与える事だからだ。

「がああああああ!!!!!!」

「いつまで持つかな?」

再び俺は見えない何かによって体を貫かれた。



きしたから絶対に壊れないよ」

空「絶対不壊は絶対不快WWW」

気温が10 近く下がる。

疾風「寒すぎんよ!!」 空をどつく

遼「寒い……」

紅葉「Wつけんな」

「今でもお前らの友情ごっごには……」

竜王「来たか」

竜王・キャロ「むしずが走るわ!!」

竜馬「意味が分からん!!」 竜王の頭をひっぱたく

「じゃははは……」

竜王「フレイス様の所よりキャロとなのはが来ました」

竜馬「どうして来たんだ？」

キャロ「貴様に話す理由なぞ無いわ!!」

竜王「キャロ、ちょっと耳貸して」

キャラ「はい」

竜馬「何で竜王だと普通なんだ…」 乱太に引きづられて第四訓練室に行く

キャラ「……！！？ティ、ティアナさんにもそれを言ったんですか！？／／／／」

竜王「ああ、どうする？出来る？」

キャラ「……よく考えてみます／／／／」

なのは「ティアナとキャラに同じ事を教えたんですか？」

竜王「まあね」

「こんにちは」

竜王「ん？ユタ様の所よりシャルロットと蒼夜が来ました」

シャルロット「チョコ作りをお願いします」

蒼夜「竜馬は？」

竜王「竜馬なら第四訓練室で乱太とバトル中、しばらくは危険だから近づかない方がよいよ」

蒼夜「なんだ…デュエルしようと思ったんだが…」

竜王「ん…なのは、悪いんだけどシャルロットにチョコ作りを教

えてやってくれないか？俺が蒼夜とデュエルする」

蒼夜「出来るのか？」

竜王「ふふふ…竜馬が使っているデッキは全て俺が作った物だぞ？まあ、紅魔館組のカードは無いから幻魔デッキだけどな」

蒼夜「オツケー。デュエル!!」

「こんにちは」

竜王「んお？ウイング様の所より真琴と銀河が来ました」

銀河「お？デュエルしてるのか？」

蒼夜「まあな」

真琴「あの、チョコ作りに参加したいんですが」

竜王「あゝ…蒼夜とのデュエルが終わったら教えられるからそれまでなのは教えてもらってくれ」

真琴「はい」

銀河「ところで竜馬は？エンジェルプレイヤーを持ってきたんだけど」

竜王「？二重召喚？を発動!!竜馬なら第四訓練室でバトル中だよ、危険だから近づかないように」

銀河「分かった」

竜王「？メタボ・サッカー？を召喚。そして？メタボ・サッカー？をリリースして？暗黒魔族ギルファー・デーモン？をアドバンス召喚。そして？メタボ・サッカー？の効果発動、？メタボ・トークン？を3体特殊召喚。？メタボ・トークン？を3体リリースして？幻魔皇ラビエル？を特殊召喚」

蒼夜「：1ターン目でそれかよ」

〈第四訓練室〉

無々『？カートリッジ。瞬雷 黄雷竜胆』  
モメンタンナズイオコンクゲイヴァエンツィアン

竜馬「瞬雷 黄雷竜胆！！」  
シツライ 黄ライオンリュウ

乱太「forth・win・shooter」

雷の刃と四つの属性ミックスした弾丸がぶつかり合った。

遼「乱太と互角かよ…」

空刀「蒼狼の形態が凄いい勢いで増えてるんだけど…」

紅葉「例えば？」

空刀「えっと…大鎚、ナイフ、杖、槍、銃剣かな」

空「杖はつえー！！」

竜馬・乱太「うるっさい！！！！！！」  
空に向けて攻撃を放つ





新たな力と俺の大罪…

side 魔神竜馬

「がああああああ！！！！！！」

ドラゴンの巻き起こす強風にまぎれる何かによって俺の体はボロボロになっていた。  
一度防がないと…

「守護天翼！！！！！！」

「ほう？」

俺は全身を翼で包み込み防御した。  
次に回復。

「治療の焰！！！！」

癒しの焰によってつけられた傷が全て回復していった。  
このままじゃいつまでも終わらないよな…

「この状態で新しい魔法を創れってことか……」

現状を打破できる魔法も能力も技も今の俺には無い。  
必然的に新しい魔法を創るという選択肢しかないのだ。

「フェニックスよりも、フェンリルよりも強い生き物……」

俺はどんな生き物があるかを考えた。

グレート  
「…なんだ、目の前にいるじゃねえか。  
暴食の姿、ドラゴンを見て俺は思った。」

「即席で創った呪文だから上手くいくか分からないがやってみる価値はある」

「何をしようともこの風の中から抜け出せるわけは無い!!」

ドラゴンは俺に向かって叫んだ。

この呪文が失敗したら死ぬか。

「賭けだ！！ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、怒れる竜。破壊の主にして暴君の象徴よ。其は強大にして凶暴なり。」  
『竜魂転身』！！！！」

俺の体は光に包まれた。

side out

side 暴食のドラゴン

何が起った！？

いきなり狩り手の体が光った！？

「何をするつもりだ！？」

風を止め私は問いかけた。

しかし返答は無い。

「答えよ！！！」

そう言つて私はブレスを吐いた。

そして狩り手はブレスによつて起こる爆煙に包まれた。

side out

side 第3者視点

巻き起こる爆煙。

そして爆煙を睨みつけるドラゴン。

「あぶねえな…」

「!?!?」

爆煙の中から竜馬の声があがる。

その声は先程のプレスによるダメージは一切窺えなかった。  
不意に強風が巻き起こる。

「なんだ…その姿は…」

煙が晴れ竜馬の姿を見てドラゴンは驚いた。

何故なら竜馬の姿が変化していたからだ。

まず目に付くのは背中の翼、先程の茜色の翼から変わり漆黒のドラゴンの翼へと変化しており、髪の色も赤から黒になり、瞳の色も紅から金色に変化していた。

そして両腕はドラゴンの腕の様に竜鱗に包まれ鋭い爪が生えていた。

「上手くいったかな…」

ドラゴンの問いに答えずに竜馬は呟いた。

side out

side 魔神竜馬

この魔法が使用できる技は…

うん、いける。

「さつさと終わって俺の大罪を聞かせてもらっぞ」

「させぬ…！」

俺がドラゴンに向かって進もうとしたらドラゴンは再び強風を巻き起こした。

これは…

「何!?!」

「……なるほど、強風に乗せて鱗を飛ばしていたのか」

強風の中飛んでくる物を俺が捕まえるとドラゴンは驚いていた。確かにこの鱗なら風に乗せて飛んできたから見えにくいか。

「しかしそれが分かった所で私の元にはこれまい!!」

「それは、どうかな!!多重氷牢結界コキュートス!!!」

俺とドラゴンを囲う様に魔法陣が現れた。

そして周囲の気温が下がっていく。

「何をした!?!」

「まだこれは起動効果だ。本当の効果はこれからだぞ!!」

俺の言葉が終わると同時に周囲に氷槍が出現していく。

氷槍は全てドラゴンを対象にしている。

「くっ……ぐっくっくっくっくっ!!!!」

ドラゴンは気温が下がることに動きが遅くなっていく。

そしてドラゴンは氷槍によってあらゆる方向から体を貫かれた。

「これで、俺の勝ちだな。教える、俺はなんの大罪を持っているんだ!!」

「ふ、ふふふ……やはり敵いませんね。お前の大罪、それは七つの大罪に無い物。最も純粹で最も不純、善であつて悪である。矛盾を含んだ大罪、その名を……?正義?ジャスティス」

体を氷槍に貫かれた状態でドラゴンは言った。

ジャスティス  
正義!?!

「何故だ！？何故、正義が大罪となる！？」  
ジャスティス  
「わからないのか？行き過ぎた正義は悪となる、そして別の正義を持つ者にとってさらに別の正義は悪となる。正義とは悪がいてこそ成り立つ、つまりお前の大罪は最も重い物なのだ」

驚く俺を面白がるようにドラゴンは言った。

「ふふふ、お前に興味が湧いてきました。傲慢と同じように私もお前の力になりましょう」  
プライド

そう言つてドラゴンの体は霧のようになり俺の体に巻き付いた。  
何が！？

「何をする！？」  
「お前の力になるだけだ。安心しろ、お前の精神を犯すような真似はしない……」

そして霧は全て俺の体に入つていった。  
ドラゴンの声は聞こえなくなった。

『マスター、マスターの魔力の総量が増加しました。私が吸収している状態でもAランク程の魔力があります』  
「うわ…それどんなチートだよ…」

無々の言葉に俺は頭を抱えた。  
俺は変身を解いた。

「さっきの変身の名は…ヴリトラにしよう」

ドラゴンの名前だからな…

ジャスティス  
俺が？正義？……

？闇？か…



新たな力と俺の大罪…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

バラランシャ様、フレイス様、妖気様、ルシフェル様、銃王 海さん、空刀様、ユタ様感想ありがとうございます。

妖気様より『ベツレヘムの星』と『アスカロン』を、

銃王 海さんよりモンスターボールを、

いただきました。

竜王「あ、昨日のゼロ戦は竜の羽衣だって」

竜馬「全然違うな…」

「失礼します」

竜王「あ、バラランシャ様の所よりリニスが来ました」

ライラ「あれ？リニス？どうしたの？」

リニス「あなた達を連れ戻しに来たんです！！あそこのバカを連れ戻すために来て何故一緒にずっといるんです！！」

星菜「それは…」

桜花「我に命令するか！！」

リニス「関係ありません！！帰りますよ！！」

ゼウス「わしの単位はバカなのか…」

ライラ「え〜…もつと遊びたいのに〜」

リニス「良いから行きますよ！！それでは、失礼しました」

竜王「あ、リニス。一応、これお土産代りに持ってって」

リニス「チョコですか？ありがとうございます」

そしてリニス、星菜、ライラ、桜花、ゼウスは帰っていった。

「こんにちは」

竜王「お、フレイス様の所よりティアナと紫が来ました」

紫「打ち合わせをしたいのだけど」

ティアナ「私は回復術を詳しく…／／／／」

竜王「オッケー。竜馬、一応お前もチョコ作れるんだから来たら教えてやってくれ」

竜馬「りょーかい」

空「チョコをちょこつと食べたい」

疾風「寒い！！！」

空刀「寒すぎ！！！！！」

「こ、こんにちは」

竜馬「あ、銃王 海さんの所より柊つかさが来ました」

つかさ「チョコを作りに来ました」

竜馬「オッケー、竜王は何か打ち合わせ中だから俺が教えるよ」

つかさ「よろしくね」

「こんにちはー！！」

竜馬「うお？ユタ様の所よりメリーとシャルロットが来ました」

メリー「あれ？竜王は？」

竜馬「打ち合わせ中、だから俺が教える」

シャルロット「あ、それじゃあお願いします」

修太「今日は平和で終わりなのかな？」

紅葉「チョコおいしい」

乱太「確かに」

竜馬「いやそれ材料だけど!？」

遼「気にしない…」

（竜王たち）

紫「それじゃあここでこれはどうかしら?。」

竜王「お、良いな。じゃあそれにさらにこれを…」

ティアナ「あう…／＼／＼／＼／＼／＼ 顔が真っ赤

紫「…ねえ、いつまであの状態なのかしら?。」

竜王「さあ?結構ウブだなあ。ただ今回はキスしろって言ったただけなのに」

紫「面白いから良いけどね」

竜王「だな、闇を狩る少年続きます」

「闇？と？光？そして別れ…」

side 魔神竜馬

俺が空を見上げていると不意に眩い光と漆黒の渦が目の前に現れた。  
何だ！？

「知ってしまったんですね…」

「自分の真実を…」

光と闇の中から1人づつ声がした。

「誰だ？」

俺は問いかけた。

すると徐々に光と闇が薄れていった。

「私は光霊使いライナ」

「俺は闇霊使いダルク」

現れたのは？光霊使いライナ？と？闇霊使いダルク？に描かれている少女と少年だった。

ウイン達じゃ無い？

「ウイン達はどうした？」

「彼女達はあなたが？正義？ジャスティスだという事を知りませんので」

俺の問いにライナが答えた。

あいつ等は知らないのか…

「お前が自分に？正義？がある<sup>ジャステイス</sup>と知ってしまったから俺達が来たんだ」

「どう言う事だ？」

ダルクが静かに答えた。

俺自身が？正義？だとしてもこいつ等には関係無いはず…<sup>ジャステイス</sup>

「あなたの中の？正義？…それは大罪であると同時に？闇？を掻き消す美德、つまりは？光？でもあるんです」

「だから、？闇？と？光？を司る俺とライナが来たんだ<sup>つかさど</sup>」

俺の考えが分かったのかライナとダルクは答えた。

？光？…？

「？正義？が闇と光？」<sup>ジャステイス</sup>

「ああ、だからお前は深く考え込む必要は無い。それと、この世界の？闇？は全部倒されたぞ」

ダルクは俺に向かってそう言った。

？闇？はついでなのか？

「それじゃあ、次の世界に送りますね？」

「分かった。…そうだ、アースラの奴らに伝言を頼めるか？」

俺の言葉にライナは首を傾げた。

「伝言…ですか？」

「ああ、【世話になった、俺は次の世界に行く】って伝えておいてくれ」

俺の言葉が終わるとライナは頷いた。

「分かりました、必ず伝えます。それではこの光に入ってください」  
「頼んだぞ」

俺はそう言っつて光の中に歩いて行った。

次はどこの世界だ？

sideout

sideライナ

「さてと、竜馬さんを送りましたし伝言を伝えに行きましょう」  
「マジで行くのかよ…」

私の言葉にダルクはめんどくさそうに言いました。  
闇を司っているんだから仕方が無い事ですけど…

「竜馬さんの時は素直なのに」

「あいつとはなんとなく気が合いそうなんだよ」

私の呟きにダルクは答えました。  
それは私もそう思いましたけど。

「とにかく伝言を伝えに行きましょう」  
「わーっつたよ」

そして私とダルクはアースラに向かって転移しました。

「誰だ!？」

転移した先は訓練室の様な場所でした。

そこには1人の少年が特訓中でした。

「君達は何者だ!!ここがアースラだと知っていてここに来たのか!!」

「うわ…いきなりめんどくさい」

少年の言葉にダルクが呟きました。

そう言う事を言っちゃ駄目な気がします…

「私達は竜馬様から伝言をいただいたんです」

「竜馬から?」

私の言葉を聞き少年は首を傾げました。

「それはどんな内容なんだい?」

「私達をこの艦の艦長に会わせてください。そこで伝言を伝えます」

少年は訝しげにしながらも私達を艦長の元に案内してくれました。  
ダルク、欠伸をしないでください。

「私がこの艦の艦長のリンディ・ハラオウンです。魔神さんからの伝言とはなんですか?」

「ライナです。伝言の内容は【世話になった、俺は次の世界に行く】  
だそうです」

私は竜馬さんから言われた伝言を伝えました。  
これで役目は終わりですね。

「ダルク、帰りましょう」

「ああ、さっさと帰って眠りたい」



リンディさん達が引きとめようと動いていましたが気にせず私達は  
転移しました。

？闇？と？光？そして別れ…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、銃王 海さん、バラランシャ様、空刀様、ルシフェル様、妖気様、ユタ様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより白金・金・銀・水晶・金剛・真珠を、

空刀様より竜馬にキーブレード、過ぎ去りし思い出、約束のお守りを、私にデスノート（リユーク付き）、デスノート（シドウ付き）、デスレイザーを、霊使いや、竜馬・リリカルなのは組・ジャバウオックに空刀ゲームムセンター招待券を、ユタ様より竜馬にIS蒼の翼の劣化版を、

いただきました。

竜馬「何もらってたの!？」

竜王「とりあえず一言、んん!!私は新世界の神になる!!!!」

「人間って……おもしろっ!!」

竜馬「なんで俺にも見えてるの!？」

竜王「あ、さっきこっさり触らせておいた」

「妙な事を……」

竜馬「さっきから喋っているのはリユークとシドウです」

リユーク「なあ、リンゴ持ってねえか？」

竜王「あるぞ、ほら」　リンゴを投げ渡す

「こんにちは」

竜王「お？フレイス様の所よりフェイトとはやてが来ました」

フェイト「リ、リンゴが空中に浮かんでる！？」

竜馬「あゝ…見えてないんだっ たな…」

竜王「んで？どうしたんだ？」

はやて「フレイスから質問や、ここに早苗さんは来ても良いですか？やって」

竜馬「早苗さんってーと…丁寧語って位かな？知ってるのが」

竜王「あとは守矢って位か…たぶん大丈夫だって伝えておいて」

はやて「了解や！所でなんでリンゴが浮いてるんや？」

竜馬「そこに死神がいるから」

フェイト「！！？」

竜王「ふふふ　（青ざめた顔も可愛いな）」　怯えるフェイトを見

て笑っている

「こんにちは！！」

竜王「あ、ユタ様の所よりシャルロットと蒼夜が来ました」

蒼夜「竜馬！！模擬戦をするぞ！！」

竜馬「オツケー！！ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、怒れる竜。破壊の主にして暴君の象徴よ。其は強大にして凶暴なり。

『竜魂転身』」

竜王「第四訓練室を使えよ」

シャルロット「そ、それじゃあお願いします」

リユーク「俺達はあっちの模擬戦を見てようぜ」

シドウ「ああ」

竜王「さて、はやてっていう強力な先生もいるから作っちゃおう！  
」！」

はやて「おー！！！！」

（第四訓練室）

竜馬「多重氷牢結界！！！！」

蒼夜「甘い！！！！」

周囲に出現した氷槍をソードビットで破壊していく蒼夜。

竜馬「ちっ！！IS蒼の翼！設定はOOダブルオー！！！！ガンダムエクシア！  
」

蒼夜「接近戦か！！」

（雑談所）

竜王「あっちはあっちで盛り上がってるみたいだな」

はやて「そうなん？」

シャルロット「蒼夜も楽しそう」

竜王「締めちやおう、闇を狩る少年続きます。本当はマテリアルズを出したかったなあ…」

フェイト「メタ発言は駄目だと思うけど」

竜王「さうて、次の世界の小説を友達に借りなくちゃ」

フェイト「持ってないの！？」

竜王「ああ、一度借りて読んで覚えてんだよ。それに今アニメでやってるし、まあ、明日は番外編だけど」

はやて「バレンタインネタやな？」

竜王「正解！」

## 番外編 バレンタイン！！

side 魔神竜馬

……何かあったのか？

教室に入り俺が最初に思ったのはそれだった。

「おはよ〜」

「あ、おはよう竜馬」

とりあえず俺は席に着き隣のアリシアに挨拶した。

やっぱり何かあったんだろ？

何か教室の空気が変な感じだし。

「竜馬！竜馬は甘いのと苦いのどっちが好き？」

「なんだいきなり？ん〜…どっちも好きなんだよな。それじゃあ、甘い方かな」

突然アリシアが尋ねてきた。

何なんだいったい？

「何の質問だ？」

「秘密だよ！！」

そう言ってアリシアはなのは達の所に歩いて行った。

……今気付いたけどアリシアと話してた時男子生徒がこっちを見てたみたいだな。

「…まあ、良いか」

そう呟いて俺は小説を開き読み始めた。

side out

sideフェイト・テストロツサ

「竜馬はミルクだつて!!」

「それなら家で準備しちゃうね」

お姉ちゃんという言葉になのはは答えました。

「それじゃあその間、竜馬はどうする？」

「クロノ君とかユーノ君、後はプレシアさん達に頼もう」

私の問いになのはは答えました。

私達は頷き合い席に戻りました。

side out

side 魔神竜馬

…どういふ事だ？

朝、起きる。

クロノから連絡が来る。

模擬戦をしろと言われた。

訓練室に来た。今ここ

「何でこんな朝早くから模擬戦をしないとならないんだ？」

「問答無用！強くなった僕の実力に驚くが良い!!」

何かキャラ壊れてね？

そう言つてクロノは無敵弾ライフルを取り出した。

銃王 海さんに貰った物だな…

「まあ、良いか…無々、セットアップ」  
『了解しました。セットアップ』

俺の服装はバリアジャケットに変化した。  
とりあえずあの技を試すのにはちょうどいいか。

「ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

「それじゃあ、始めようか!！」

そう言つてクロノは無敵弾ライフルを構えた。  
技の実験台になってもらうぜ!！」

「最初から飛ばしていくぞ!！」

そう叫びながらクロノはライフルをぶつ放した。

「危ねっ!！」

俺は放たれた弾を横つ跳びで回避した。  
着弾した地点は一瞬で凍りついた。

「外したか…」

「氷結弾かよ…」

死にはしないが喰らいたくは無いな。  
悔しそうにクロノは言った。

「……ん?クロノ?ちよつと良いか?」



「なんだい？」

俺は一旦ストップをかけた。

「それって非殺傷設定だよな？」

「何を言っているんだ？」

俺の問いにクロノは呆れたように言った。  
まあ、当然だな。

「殺傷設定に決まってるじゃないか」

「非殺傷じゃないのかよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

クロノの言葉に俺は思いつ切り突っ込んだ。  
驚きだよ!!!!!!

「どうせ君は死なないんだろ？だったら良いじゃないか」  
「良くない!!!!!!痛い事に違いは無いんだぞ!!!!!!」

クロノは堂々と言った。  
こいつ…

「さあ、模擬戦を再開しよう」

「……………終わったら説教だな」

そっ心に決め俺は構えた。

「それは無理だ。何故なら僕が勝つからね」  
「それはどうかな？」





どうなっている!?

僕の攻撃はちゃんと当たったはず!?

「どうということ…だ…?僕の攻撃が当たった瞬間に君の体が燃え尽きて消えて、いつの間にか僕の後ろに…」

「俺の技だよ。カウンター技、名を?陽炎<sup>かげろっ</sup>?」

陽炎…

カウンター技!?

そう言いながら竜馬は僕の首からナイフを外した。

「さて、と…」

「?」

竜馬はそう言って拳を握りしめた。

何をする気だ?

「普通は非殺傷設定だ!!!!!!」

「げふっつっ!?!」

最後に僕が見た物は眼前に迫る竜馬の拳だった。

side out

side 魔神竜馬

つたくよお…

フェニックスの姿だったから内臓がグチャグチャでも死にはしないが。

「まあ、意識して治癒を早める事も出来るけどな」

傷一つない腹部を押さえながら俺は呟いた。  
「陽炎？と組み合わせる以外に使い道は無いが…」

「竜馬、ちょっと良いかしら？」

「プレシア？別に良いぞ」

訓練室にプレシアが入ってきた。  
どうしたんだ？

「アリシア達が用があるって言ってるのよ」

「アリシア達？」

何の用だ？

俺は訓練室から出た。

「それとこれ、あげるわ」

「ん？チヨコ？何でまた…まあ、良いか。ありがとうな」

今日って何かあったか？

俺はプレシアからチヨコを受け取り礼を言った。

「んで？アリシア達は？」

「食堂にいるわ。ちなみにそれ、一応本命よ」

悪戯っぽく笑いながらプレシアは歩いて行った。  
本命？

まあ、良いや。

そして俺は食堂に向かった。

「竜馬君、これあげる！！」

「うお！？あ、ありがとう」

食堂に入るとなのはが俺に何かを渡して走り去っていった。  
これは…チョコ？

「アリシアとフェイト？俺を呼んだって聞いたんだけど…」

「あつ…／／／／／／」

俺が聞くとフェイトは赤面しアリシアは俯いてしまった。  
何なんだ？

「りよ、竜馬。これ！！」

「こ、これ…／／／／／／」

アリシアは勢いを付けて、フェイトはおずおずと俺にチョコを渡してきた。

2人も？

「ありがとう…所で今日って何かあったっけ？ってあれ？」

俺が顔をあげるといつの間にか2人はいなくなっていた。

その日がバレンタインだと知ったのは3日後にリンディに教えられた時だった。

番外編 バレンタイン！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、妖気様、フォウル様、銃王 海さん、フレイス様、ルシフェル様、空刀様感想ありがとうございます。

妖気様よりチャフグレネードを、  
銃王 海さんよりスタンガンを、  
空刀様より竜馬にはブラックロックシューターがつけているロックシューターを、私にバースト・レッグ・ドライブ・レーザーを五千発を、

いただきました。

竜馬「んで？攻撃が来たぞ」

竜王「だいじょーぶ！起きろ……？虚夢と夢幻？」

虚夢と夢幻「おはようございます」

竜王「それじゃあ早速」

竜王・虚夢と夢幻「イリュージョン幻影……！！」

竜馬「へ？バースト・レッグ・ドライブ・レーザーが消えた？」

竜王「消えたんじゃないよ。ただ……見えなくなって対象を強制的





「こんにはー!!」

竜王「うお!? 空刀様の所より蛇川乱太・駆動疾風・参太空・相山  
遼・神咲紅葉・都山修太・空刀様が来ました」

乱太「鍋を持ってきたぞ!!!」

空刀「あれ? 無事ですか?」

竜王「対象を強制変更しましたので無傷です」

修太「僕的能力とは相性が悪そうですね」

遼「たぶん最悪……」

↳別室

ユウキ「いったい何なんだよ? それに3人も来て竜王さんに迷惑し  
やないのか?」

キャロ「…ティアさん。どっちから渡しますか?」

ティアナ「変な遺恨は残したくないから同時に渡しましょう」

ユウキ「俺の話聞いてる?」

キャロ・ティアナ「ユウキ(お兄ちゃん)!!! これ!!!」

ユウキ「これは…チヨコ? 何で急に?」

キャロ「えつと…／＼／＼／」

ティアナ「今日が…その…／＼／＼／」

ユウキ「今日？今日は…二月十四日…ってまさか！！」

キャロ・ティアナ「／＼／＼／＼／」 顔を真っ赤にして頷く

ユウキ「え、ええと／＼／＼／＼あ、ありがとうございます／＼／  
／」

キャロ・ティアナ「ど、どういたしまして／＼／＼／」

（雑談所）

竜王「肉ばっか食うなよ…」

疾風「うるさいなあ！姑！？」

竜馬「いつもの事いつもの事」

シャルロット「こんな感じでどうでしょうっ」

竜王「…っん、上手だ。蒼夜に渡してきな」

シャルロット「ありがとうございます。それじゃ…！」

そう言ってシャルロットは帰っていった。

ハルヒ「む…」

竜王「どした？」

ハルヒ「上手くチョコが固まらないのよ」

竜王「えっと…温度が少し高いな。もう少し温度を低くしてかき混ぜながら溶かすんだ」

ハルヒ「分かったわ」

その後ハルヒはチョコを完成させ帰っていった。  
その間に鍋は完全に空になっていた。

竜王「今度はこっちできりたんぽ鍋でもやるか…闇を狩る少年続きます」

ティアナ「////////」

キャロ「////////」

ユウキ「////////」

竜馬「何があっただ？」

次の世界は…っていきなり戦闘!?

side???

「遠距離射撃型の私に近距離格闘装備で挑もうだなんて笑止ですわ  
!！」

そう言っつてセシリアはスナイパーライフルを撃つてきた。  
そんな事は言われなくても分かってるよ!!

「くっ!!！」

俺は攻撃を避けた。

これじゃ近付けない!!

「このブルーティアズを前にして初見でこうまで耐えたのはあな  
たが初めてですわね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃどーも」

セシリアの言葉に俺は答えた。

「ですが、そろそろフィナーレと参りましょう!!！」

そう言っつてセシリアはビットを飛ばしてきた。

あんなのもあるのか…

sideout

side魔神竜馬

「次の世界はどこだろうな？」

『分かりません』

俺の言葉に無々は申し訳なさそうに答えた。  
別に聞いたわけじゃないんだが…

「次の世界は？IS？の世界ですよ」  
インフィニット・ストラトス

「エリアか。他の3人は？」

背後から声がかかったので振り向くとそこにはエリアがいた。  
？IS??？

「3人は今お昼寝の時間なんです」

「ふん…今の時間はエリアが起きてるんだ」

俺の言葉にエリアはほほ笑んだ。  
と言うかお昼寝の時間があるんだ…

「もうすぐ出口ですね。それでは、頑張ってください」

「ああ、じゃあ行ってくる」

そして俺は光の道から出た。

ここは……グラウンド？

「試合を一時中断するー！」

「うおー!？」

いきなりの放送に俺は驚いた。  
何だ何だ!？

「おい！その少年！…どうやってここに入った!！」

少年？

ってーと俺の事か？

「…織斑、その少年を連れて来い」

「俺が!？」

放送の言葉に男の声が聞こえた。  
どこにいるんだ？

「はあ、おいその子」

「へ？」

上から声がしたので上を見上げると機械に体を包まれた男と女がいた。

なんだあれ!？

「何だそれ!？機械!？」

「?ISを知らないのか？」

俺の言葉に男は不思議そうな表情をした。

IS？

確かこの世界の名前も？IS？…

「まあ、良いか。ここは危ないから俺と一緒に来てk……………!？」

「何だ!？」

不意に爆音が響き渡りグラウンドの中央に土煙が舞った。  
何が起きている!？

『マスター!!魔力反応!おそらく?闇?です!!!!』

「いきなりかよ!!!」

俺は無々の言葉に土煙を睨みつけた。  
グラウンドの観覧席からは悲鳴が起きている。

「なんだよ…あれ…」

「…逃げてる。あれは俺の管轄だ…」

男の呟きに俺は静かに答えた。

土煙が消え徐々に？闇？の姿が見えてくる。

「マジかよ…」

土煙の中から現れたのは？蒼穹のファフナー？のファフナー・M<sup>マーク</sup>k  
X<sup>エルフ</sup>Iだった。

次の世界は…っていきなり戦闘！？（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、ユタ様、妖気様、銃王 海さん、空刀様感想ありがとうございます。  
うございます。

妖気様よりクロノに禁書で使われたゴーレム作成用のチヨークを、  
銃王 海さんよりクロノに非殺傷設定の無限弾短銃を、  
空刀様より私にオメガ・クロス・ランチャーを三億発、デスノート  
を常に身につけてないと爆発する爆弾を、竜馬に双剣・デイスカバ  
リ、片手剣 スネークバイト改（モンハン）蛇川改造済み、日  
本刀 蒼天ヲ目指ス麒麟を、

いただきました。

竜馬「さて？どうやって攻撃を防ぐんだ？」

竜王「こうやってだよ」

竜王・虚夢と夢幻「イリュージョン幻影！！！！！」

竜馬「なにをする気だ？」

竜王「ぎゃああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

竜馬「結局喰らってる！？」



竜王「あゝ痛かった」

竜馬「それだけ!？」

竜王「虚夢と夢幻で俺自身にある情報を上書きしたんだよ」

竜馬「ある情報？」

竜王「その情報はギャグ補正だ!!!」

竜馬「……………だから絆創膏1つでほとんど怪我が無いんだな？」

竜王「そーゆーこと　と来たみたいだ」

「どうして僕を呼んだんだ？」

竜馬「クロノ？」

クロノ「竜馬か」

竜王「ほら、お前に贈り物だぞ」

クロノ「ゴーレム作成用のチョコークに非殺傷設定の無限弾短銃？」

竜馬「お礼を言っておけよ」

クロノ「妖気様、銃王　海さんありがとうございます。これで僕は君に勝つぞ」

竜馬「やれるもんなら!!!」

リユーク「おい？何か光ってるぞ？」

竜王「あ、忘れてた…ぎゃあああああああああ!!!  
!!!!!!」

竜馬「え〜つと…デスノートを持っていないと爆発する爆弾だな」

「何をやってるんですか？」

竜馬「ん？フレイス様の所より紫、早苗が来ました」

紫「竜王と打ち合わせがしたかったのだけど…」

竜王「あ、来たんだ」

竜馬「まだギャグ補正っていう情報が残ってるのか？」

竜王「しばらくは付けたまんまかな。竜馬、締めておいて。紫、早苗あつちの部屋で打ち合わせをしよう」

早苗「はい」

紫「分かったわ」

竜馬「行っちゃった…闇を狩る少年続きます。何の打ち合わせなんだ？」

〈別室〉

紫「こんな感じかしら?」

竜王「いや…ちょっとまだ足りない気も…」

早苗「私が風を起こしてティアナさんのスカートをめくるハプニングはどうですか?」

紫「良いわね」

竜王「じゃあ、俺は屋台とかをやっておくか」

紫「私は盗撮かしら?」

いつの間にか治療の話からユウキとティアナのデートをどうやって盛り上げるかの話になっていた。

## 墜ちる11番目の妖精

side 魔神竜馬

なんだって到着してすぐに戦闘なんだよ…

しかも普通にMk・XIマークエルフでかいし。

「おい！！早く逃げろ！！」

「その子！！私達が時間を稼いでいる内に逃げなさい！！」

男と女が俺に向かって叫んだ。

「…かこいつ等誰だ？」

「……無々、どうする？」

『戦わせて勝てないという事を分かせてはどつですか？』

俺の問いに無々は答えた。

それもそうだな。

side out

side???

子供はゆっくりと歩いて行った。

何だったんだ？

それにさっきの声…

「来ますわよ！！」

「おう！！」

セシリアの言葉に俺はロボットを見た。

いつの間にかロボットの腕には槍の様な武装があった。

「俺が突っこむからお前は援護を頼む!!」  
「仕方ありませんわね!!」

俺はセシリアにそう言っゆきひらにて雪片弑型を構えた。  
とにかくさっきの子が逃げ切るまでの時間を稼がないとな。

side out

side 第3者視点

Mk・XIの攻撃を男、織斑一夏は雪片弑型で防いでいく。  
セシリアはその隙について援護射撃をしていくがMk・XIは流れるように避けていく。

「ああもう!!ちゃんと押さえてくださいません事!!」  
「こつちだつて精一杯やつてるよ!!」

セシリアは苛立ちながら叫ぶ。  
それに対して一夏はMk・XIの攻撃をかわしながら叫ぶ。

「くっ!!あんな大きな機からだ体でなんて速いんですの!!」  
「!!セシリア!!危ない!!」

悔しげに言うセシリアにルガーランスの切っ先を向けるMk・XI  
を見て一夏は叫んだ。  
驚きMk・XIを見るセシリアだったがその時にはすでにルガー  
ランスの刃が左右に開きエネルギーが溜まっていた。

「きゃあああああ!!!!」  
「セシリア!!!!」

そしてセシリアにレールガンが直撃した。

その攻撃が決定打となったのだらうセシリアのISブルー・ティアズはエネルギーを全て消費し待機形態になった。

「やっぱ、無理だよな。傷一つ与えられてない」

その光景を見ながら竜馬は呟いた。

そして無々を起動しバリアジャケットを纏った。

side out

side 魔神竜馬

セシリア…だっけ？

俺はそう呼ばれていた女の元に一応向かった。

「何をしているんです！！早くお逃げなさい！！」

「黙って安全な所に隠れてろ。そこにいられたら邪魔だ」

そう言い放って俺は離れた。

Mk・XI、確か汎用格闘型だったよな。

「んでもって今の装備品がルガーランスか…」

ただ、スピードが速いな…

スピードを殺すか同じスピードになるか…

「戦いながら決めるか」

そして俺は手甲どうしをぶつけ合いMk・XIに向かって行った。  
俺が現れた事に男は驚いていた。

「な！？何してるんだよ！！」  
「戦闘に集中しろ…」

俺は男の言葉を見殺ししてMk・XIの左腕をぶん殴った。  
堅いな。

「そんな攻撃が効く訳が…」

「織斑！！何故そこに少年がいる！！避難させるように言ったはずだぞ！！」

また、放送？

Mk・XIの攻撃を紙一重でかわしながら俺は思った。

「って言われても！！勝手にこっちに来たんだぞ！？」

「言い訳は聞かん！！」

放送でそう言われて織斑？は項垂れた。

さて、これぐらいあいつ等から離せば充分かな…

「無々！！？カートリッジ！！！！」  
ツウライ ツウライ

「？カートリッジ！！瞬風 翠旋撫子」  
インスタントヌメリ母タチオンティアンタウス

無々はカートリッジを2つロードした。

そして手甲が弾け俺の両腕に旋風が巻き起こった。

「吹き抜け旋風！！瞬風 翠旋撫子！！！！」  
しゅんぷう すいせんぬでしこ

両腕の旋風を足に移動させ一気にMk・XIの懐に潜り込んだ俺は足に移した旋風を両腕に戻しMk・XIを上空へと打ち上げた。その光景を男達は口を開けて驚いていた。

「風よ、彼の敵を縛めよ!!!」

俺は風を操作しMk・XIの四肢に巻き付け動きを封じた。  
∴あの技を試してみるか。

「無々、蒼紅黄の順番でやってくれ」  
『了解しました』

俺の言葉に無々は了承した。  
一気に行くぜ!!!

『ウエルキン ブルーロトウス  
蒼穹 蒼蓮華』  
『そつぎゅう あおれんげ  
蒼穹 蒼蓮華!!!』

無々は形状を変えカートリッジをロードし双剣は冷気を纏った。  
風による縛めの無くなったMk・XIに俺は斬り付けた。

『グーゲン ロートカメリエン  
紅蓮 紅椿』  
『くれん べにつばき  
紅蓮 紅椿!!!』

さらに無々は形状を変えカートリッジをロードし刀は炎を纏った。  
間髪をいれずに俺はさらに連続で斬り付ける。

『ゲーベドゥナゲーヴァエンツィアン  
黄雷 黄竜胆』  
『いっらい おつりんどつ  
黄雷 黄竜胆!!!』

ラスト!!!

最後に無々は大鎌に変化しカートリッジがロードされ大鎌は雷を纏った。



俺は雷を集中させ雷刃をMk・XIに向けて放った。

「鮮やかに舞え…連技 百花繚乱」

地面に着地し俺はそう言った。

そしてMk・XIは爆発し何も残らなかった。

「な、なあ…」  
「ん？」

声をかけられたので振り向くと先程戦っていた男がいた。  
何だ？

「お前はいつたい何者なんだ？それにさっきのロボットも…」  
「人に尋ねる時は先に名乗るのが筋じゃないのか？」

俺の言葉に男は気付いたような表情になった。

「すまなかった。俺の名前は織斑一夏だ」  
「俺の名前は魔神竜馬だ。質問に答えると、俺は旅人で狩り手。そしてさっきのロボットがここでの破壊対象だ」

男…一夏は驚きと不思議そうな表情が混ざった良く分からない表情になった。  
変な顔。

「ところで聞いて良いか？」  
「何だ？」

俺は疑問に思っていた事を尋ねる事にした。

「何で……………女子生徒が周囲にいつぱいいるんだ？」

「ああ、この学園に男子は俺一人しかいないからな」

俺と一夏の周囲には女子生徒が壁の様に集まって来ているのだ。

一夏は当然のように言った。

何だそれ？

ギャルゲー？

「それじゃあ、ISってのは何なんだ？」

「俺もそこまで良く分かって無いんだよな……」

次の俺の質問に一夏は頭を掻きながら答えた。  
どーすっかな…

「なあ、竜馬は旅人だって言ってたよな？住む所はあるのか？」

「住む所？無いから野宿かな」

不意に女子生徒達が左右に分かれた。

何この動き！？

軍隊！？

「貴様、先程の機体について詳しくそうだな。説明をしてもらおうぞ」

「千冬姉！？あだっ！？」

一夏が現れた女性の事を千冬姉と言うとその女性は一夏を思い切り殴った。

痛そうだな。

「学校では織斑先生だ。でだ、説明をしてくれないか」

「…別に構わないけど条件が1つある」

俺の言葉に女性は眉をひそめた。

「条件だと？」

「簡単な条件だと思うよ」

女性の言葉に俺はただ笑うだけだった。

この世界の主人公達は分かった。

後はそいつらを守るだけだしな…

## 墜ちる11番目の妖精（後書き）

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

銃王 海さん、ルシフェル様、空刀様、妖気様、バラランシャ様、フレイス様、ユタ様感想ありがとうございます。

銃王 海さんよりmp3プレイヤーを、

空刀様より私に

アルファ・ベータ・キャンノン

・cannonを三億発、竜馬にブレイブ

オーム、アースフォーム、コブラフォーム、麒麟ノ鎧を、

妖気様よりリンディに高級角砂糖を、

いただきました。

竜馬「んで？今回はどうやって防ぐんだ？」

竜王「とりあえず、防ぐか？黄昏の弓器・ラグナロク？+？黄昏の槍器・ラグナロク？+？黄昏の縛器・ラグナロク？fusion」

俺の言葉に反応し弓矢に槍と鎖が合わさっていく。

そして一つの弓が現れた矢は巨大で鎖が鏃に巻きついている。

竜王「合成完了？黄昏の轟弓？」

竜馬「……撃ち落とす気か？」

竜王「当然 槍の必中と矢の無限増殖+鎖の絶対不壊と効果無効だし。と言う訳で撃ち砕け？The END？エンド」

竜王が放った矢は途中で光に包まれ増殖しまるで矢の壁の様に空を覆った。

竜王「着弾した半径300メートルを無効化するんだっいたら300メートル以上の上空で爆発させる。そうすれば砲撃同士の効果によって勝手に打ち消し合うんだからな」

竜馬「そう言う事か」

「「助けてー!!!」」

竜王「あ、銃王 海さんの所より御坂美琴と島田美波が来ました」

美琴「匿ってちょうだい!!」

竜馬「……百合から逃げてるんだな」

美波「分かっているなら匿って!!」

竜王「オツケー、紅茶を出すから落ち着いてね？」

「「こんにちは!!」」

竜馬「ん？フレイス様の所よりキャラロとティアナが来ました」

キャラロ「あ、あのブルーアイズのデッキを作りたいんですが……」

ティアナ「私は遊星デッキを……」

竜王「分かってるよ、キャロにはこれ

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン×3

ドラゴンズ・ミラー  
竜の鏡×3

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン×3

未来融合フューチャーフュージョン

正義の味方 カイバーマン×3

ホワイト・オブ・レジェンド  
伝説の白石×3

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン  
Sin 青眼の白龍×3

異次元からの帰還×3

とりあえず便利そうなカードを集めておいたからここから他のカード達でデッキを組んでごらん」

キャロ「はい!!」

竜王「んで、ティアナには

ジャンク・シンクロン×3

クイツク・シンクロン×3

デブリ・ドラゴン×3

チューニング・サポーター×3

ボルト・ヘッジホッグ×3

レベル・ステイラー×3

ダンディライオン×2

調律×3

ジャンク・ウオリアー

ジャンク・アーチャー

ジャンク・デストロイアー

ニトロ・ウオリアー

ドリル・ウオリアー

スターダスト・ドラゴン

ライトニング・ウォリアー

かな？キャロと同じように他のカードでデッキを組んでごらん」

ティアナ「ありがとうございます」

竜馬「凄いカード達だな……」

竜王「気にすんな それよりも来たみたいだぞ？」

竜馬「へ？来たって誰が……！！！！！」

「こんにちは」

竜王「ユタ様の所より竜馬を鍛えるためにセイ、雷夏、ファイアが来ました」

セイ「では行きますよ」

竜王「あ、第4訓練室だから」 ハンカチを振りながら

竜馬「絶対に死ぬって……！！！」

雷夏「だいじょーぶ、だいじょーぶ。死んでも優がなんとかしてくれるから」

竜馬「死ぬ事は確定ですか！？」

ファイア「いちいちと五月蠅い奴だ」





この外見で先生って呼ばれるとは思わない。

side 織斑一夏

昨日の竜馬は何だったんだろうな？

あの後、千冬姉と一緒にどこかに行っちゃったけど…

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコットのために飛んでみる」

「分かりましたわ」

そう言っつてセシリアはISを起動させた。

よし俺も…

「ん？えつと…あれ？」

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開に一秒とかからないぞ」

俺が展開できずにもたついていると千冬姉がそう言った。

「集中…来い！白式！！」

そして俺はISを起動できた。

もつと早く起動できるようにならないとな…

side out

side 第3者視点

「よし、飛べ！！」

「はい！」

千冬言葉にセシリアは上空へと飛び上がった。

それに続こうと一夏も飛び上がったが何故か一回後方に吹き飛んでいた。

「遅い！スペック上の出力では白式の方が上だぞ！！」

「そう言われても…自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ？ううう、良くわかんね」

一夏は千冬の言葉に凹んでいた。

「イメージはしょせんイメージ自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

一夏の近くに寄りながらセシリアは言った。

「だいたい、空を飛ぶ感覚自体まだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ？これ」

「その…よろしければ放課後に指導して差し上げますわよ」

セシリアはおずおずと言った風に言った。

その言葉に一夏は頭に？マークを浮かべていた。

「織斑、オルコット急降下と完全停止をやって見せる」

「りよ、了解です」

不意に千冬の声が聞こえセシリアは表情を変えた。

「では、お先に」

そう言ってセシリアは地面に向かって急降下をした。

そして地面にぶつかると手前でブーストを使用し勢いを殺し停止した。

「上手いもんだな。よし、俺も」

セシリアの急降下と完全停止を見ていた一夏はそう言って急降下を始めた。

凄まじいスピードで白式は地面へと向かって行く。

「!?!う、うわ!うわあああ!?!」

どうやら途中でコントロールを失ったらしく一夏は悲鳴をあげた。そして地面へと勢いよく向かって行く。

「自殺願望か?多重風牢結界」  
シルフィード

竜馬の音がグラウンドに響き渡り魔法陣が現れた。

魔法陣から巻き起こる旋風により白式はゆっくりと地面に着地する事が出来た。

side out

side 魔神竜馬

何やってるんだ一夏は…

咄嗟に俺が多重風牢結界でスピードを殺したから良い物を。

「すまない、私の弟が」

「気にすんな」

千冬 of 言葉に俺は答えた。

すると生徒が一斉に俺を見た。

「え!?!せ、先生。その子って昨日の…」

「説明は織斑とオルコットが戻って来てからだ」

生徒の1人が質問をしたが千冬はそれを受け流した。  
俺も元の姿になろう。

俺はヴリトラから元の姿に戻った。

「織斑、オルコットさっさと戻ってこい。戦闘訓練の講師を紹介する」

千冬は一夏と女に連絡をした。

するとすぐに2人は戻ってきた。

「あれ？竜馬？どう言う事なんだ千冬姉？あだっ!？」

「学校では織斑先生だ。それでは紹介しよう。しばらくの間、戦闘訓練の講師をする魔神竜馬先生だ」

一夏を殴ってから千冬はそう言い放った。

生徒達の中から驚きの声が溢れている。

「いや、千冬？先生は止めてくれないか？」

「良いじゃないか。行くあてが無くここに住む代わりに講師をするのだから」

俺と千冬の会話で生徒達からさらに驚きの声がかかる。

中には千冬様を呼び捨て!？と叫んでいる者が何人かいた。

「はあ…仕方が無い。戦闘訓練を教える魔神竜馬だ、一応言っておくが戦闘訓練と言っても競技上の訓練だから」

「それでは、竜馬先生に質問はあるか？」

だから先生は止めてくれつての。  
千冬の言葉に何人かが……いや、全員が手をあげた。

「竜馬先生つて何歳ですか？見た所9〜10歳位だと思っんですけど……」

「正解だ。今の年齢は9歳だ」

質問に答えると生徒達は再び驚いていた。

「先生つて男の子ですよ？どうやって戦闘訓練をするんですか？」  
「武器があれば充分」

次の質問に答えると生徒達から笑い声が上がった。  
答えただけなんだが……

「せ、先生？ISを相手に……ぶっ……生身で勝てる人間なんて……くく……い、いませんよ……あははは……！」  
「いや、そうでもないぞ？」

笑う生徒に対して千冬が言った。  
すると次の瞬間、生徒達から笑いが消えた。

「それはどう言う事ですか？」  
「いや何、私は事実を言っているだけだ。おそらく竜馬先生は普通のISが相手なら余裕で勝ってしまうだろう」

そう言いながら千冬はこちらを向いた。  
うわ〜生徒達が物凄く疑ってる……

「それなら、先生の实力を見るために2人と戦ってもらおうのはどう

ですか？」

「ふむ…竜馬先生、それでどうかな？」

真耶は一夏とオルコットを指差しながら千冬に言った。  
腕を組みながら千冬は尋ねてきた。

「かまわないけど1人づつにしてくれ果てしなくめんどくさい」

「よし、織斑とオルコット以外の生徒は観戦スペースへ移動しろ。  
織斑、オルコットどちらから行く？」

2人に千冬が尋ねた。

「か他の生徒の動きがマジで早い。  
何ここ！？

軍隊なんじゃないの！？」

「決まったか、織斑準備をしてこい」

「分かった」

そう言つて一夏は走っていった。

どうやら射出口の様な場所に移動するらしい。

「あれ？他の授業とか大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、他の授業に関しては私が言っておく」

俺の問いに千冬はあっさりと答えた。

なんだそりゃ…

そして千冬と真耶は観戦スペースにオルコットは一夏と同じ場所に  
向かって行った。

この外見で先生って呼ばれるとは思わない。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、ルシフェル様、ユタ様、妖気様、空刀様、銃王 海さん、バラランシャ様感想ありがとうございます。

妖気様より竜馬に包帯と松葉杖を、

空刀様より蛇川君達のカード、私に強化された  
アルファ・ベータ・キヤ  
nを、  
・ c a n n o

銃王 海さんよりドライバーセットを、

バラランシャ様より死滅の黒薔薇を500本を、

いただきました。

竜王「攻撃が半端無いな…ちなみに竜馬は第4訓練部屋でセイ、雷夏、ファイアの地獄の訓練中です」

竜王は？黄昏？の武器を全て取り出した。

竜王「？黄昏？の武器 a l l f u s i o n」

？黄昏？と名の付いた武器が1つになる

竜王「合成完了？黄昏の極器？次は起きろ、？虚無と夢幻？」

虚無と夢幻「はい」

竜王・虚夢と夢幻「イリュージョン幻影!!!」

虚無と夢幻「書き加えた情報は主にギャグ補正と？黄昏の極器？に効果無効に対する絶対耐性ですがよろしいですか？」

竜王「充分だ。はあああああああああああ!!!」

・cannonを思い切り？黄昏の極器？でぶん殴った。

竜王「だつしゃあ!!!!!!!」

・cannonは角度を変え遠くに着弾した。

「こんにちは…ってぼろぼろ!？」

竜王「んあ？フレイス様の所より早苗とユウキが来ました」

早苗「大丈夫なんですか？」

竜王「まあね、次のコマになればこの通り」

早苗・ユウキ「!!!?」

竜王「つと来たみたいだ」

ユウキ「え？」

竜王「スタート!!!」ポーズをとる



早苗「ちよっ!?!」

竜王「~~~~~」 死滅の黒薔薇をかわしていく

ユウキ「すごっ!?!」

竜王「~~~~~」 さらに死滅の黒薔薇をかわしていく

早苗「こんな動き出来ましたっけ?」

竜王「~~~~~」 くどいようですが  
死滅の黒薔薇をかわしていきます

ユウキ「きつと?黄昏の極器?のお陰じゃないか?」

竜王「~~~~~」 :ぎゃああああああああ!  
!?!?!?!?!」 最後の死滅の黒薔薇が突きささる

早苗・ユウキ「あ……」

竜王「おお、痛かった」

早苗・ユウキ「それだけ!?!」

〜第4訓練部屋〜

セイ「これでどうです!?!」

竜馬「h r t s h x h r r j i b a k u e n e s s d e m y n o b 。 ー h 。 おー!  
!?!?!?!?!」



美波「そう言えばアキが来るはずなんだけど…」

「助けてー！！！！！！」

美琴「あれみたいよ…」

明久「何でこんな所にこんな巨大な狼が!？」

竜王「あゝ…リル!! 待て!!」

明久「と、止まった?」

リル「ぐるるる…」

竜王「ふむふむ…明久、お前いつも使う道とは別の道で来ただろ。リルは獲物だと思っただらしい」

明久「仕方ないじゃないか!! 久保君から逃げてるんだから!!」

早苗「と言うよりも狼から走って逃げる事自体良く考えると凄いのでは?」

竜王「気にしたら負けだ」

ユウキ「そう言えば竜王さん。いつ次のデュエルは行われるんですか?」

竜王「んゝ…もう少しで前篇が書き終わるからあと少しかな」

早苗「あの、次は霊夢さんと一緒に来てもよろしいでしょうか?」

竜王「霊夢？たぶん大丈夫だと思うぞ。あ、来る場合連絡してね？  
一応お賽銭を渡してみたいから」

早苗「分かりました」

竜王「それじゃあ明久締めてくれ」

明久「バカって呼ばれてない！！闇を狩る少年続くよ！！」

美波「……所でアキ、背中のそれは何？」

明久「え？何々??この子はバカすぎてバカにされている事も分かりません。優しい目で見てあげてください？って誰がこんな事を！！ん？雄二か！！！！！！！！！！」

全員「……」 優しい目

明久「やめて！！そんな目で僕を見ないで！！」

## 戦闘VS一夏

side 魔神竜馬

「あ、そう言えば千冬」

「何だ？」

俺はある事を聞くために千冬の元へ移動した。  
どうしたら勝ちなんだろう？

「どのくらいまで潰せば勝ちなんだ？」

「そうだな……ISが待機状態に戻るまで、と言いたいがそれでは危険すぎるな。よし、織斑が出てきてから私が放送しよう」

千冬は少し考えそう言った。

それなら大丈夫か。

「分かった、それと俺と会話する時位は弟を名前で呼んでやれ」

「ふむ、次からはそうしよう」

そう言っただけ俺はグラウンドの中央に向かった。  
さて、何の武器で相手をしよう。

side out

side 第3者視点

「先生、竜馬先生が武器を持ってないんですけど……」

「大丈夫だ、見ていれば分かる」

不思議そうに女子生徒の1人が千冬に尋ねた。  
他の生徒たちもそれに頷いた。

「ねえ！！竜馬先生の近く！！」

「え！？いつの間にあんな武器が！？」

何人かの生徒が驚きの声をあげ全員がグラウンドに目を向ける。

いつの間にか竜馬の近くには身の丈を超えた大鎌が出現していた。

「せ、先生！！あれは……」

「あれが竜馬先生の相棒？<sup>パートナー</sup>虚無と無限？だ」

驚き尋ねる生徒に千冬は説明した。

竜馬は千冬に無々の事を説明していたらしい。

そして射出口から白式を身に付けた一夏が登場した。

「エネルギー残量が100を下回った時点で負けとする、それでは模擬戦闘開始！！」

千冬が高らかにそう宣言し模擬戦闘が始まった。

side out

side 織斑一夏

「本当にその武器で戦うのか？」

「無々を物扱いするな、こいつは俺の相棒だ」<sup>パートナー</sup>

俺の言葉に竜馬の周囲から風のような物が起こった。

禁句だったのか？

「さつさと始めるぞ。かかってこい」

「そんじゃあ行かせてもらっぞ！！」

そう言っつて俺は竜馬に向かつて突っこんだ。  
しかし竜馬は動こうとしなかった。

「……太刀筋は悪くは無い、しかし直線的すぎるな。簡単にいなされるぞ」

「え？なあ！？」

竜馬の言葉が聞こえた瞬間に俺の視界は空を見ていた。  
どうやら踏み込んだ足を払われ地面に倒れたらしい。

「どうして浮かかない？常に飛んでいればひっくり返る事も無いのに」  
「いや、空を飛ばない相手に飛ぶのは卑怯だろ」

不思議そうに俺を見ていつた竜馬に俺は言い返した。

「だが、一夏。お前の武器はそれだけだろうか？だったら飛行しスピードを上げ攪乱した上で俺に斬りかかるべきだ。それに俺はまだ無々を手を持ってすらいないぞ？」

「それは…そうだけど…」

確かに竜馬の言う事は理解できる。

竜馬の武器…無々だったけ？を竜馬は地面に置いているのだ。  
そして素手で俺の攻撃をかわし尚且つ反撃に転じている。  
つまり竜馬はISのスピードを完全に見切っているのだ。

「その大鎌を持っている状態だったら俺は負けていたんだな…」  
「そう言う事だ。だから、本気で来い！！！」

竜馬の言葉に俺は飛行を開始した。

次は本気だ！！

side out

side 魔神竜馬

『マスター 自体本気で無いのに良く言いますね』

「良いだろ、結構避けやすかったんだぞ？ さっきの」

まあ、あれが一夏の良い所だろうけど…

さっきの攻撃が当たったら俺が死ぬと思ったのか無意識の内に振り下ろすスピードが落ちてたし。

「長所は短所であり短所は長所であるってことか…」

『そうですね。マスター 左後方です』

無々の言葉に俺は右に動き一夏の攻撃を避けた。

流石に無々のサポートは卑怯か？

「今のは完全に死角のはず!？」

「驚いて動きを止めるな、減点1。？ 閃天華?!！」

武器を振り下ろした状態で止まっている一夏に掌底を放った。

一夏は後方へと吹き飛んだが白式のお陰でほとんどダメージは無いだろう。

「さて、と。無々、サポートは無しにしてくれ」

『了解しました』

俺は無々を手に取りそう言った。

攻め方は充分に分かった。

次は防ぎ方だな。



「消えた!？」

「相手がいなくなった場合は周囲に気を配り続ける…」

瞬動術で一夏の背後に回り込み驚く一夏に斬りかかった。

「反応速度はまあまあか…」

俺の攻撃が当たる直前に前方に飛びダメージを軽減した一夏を見て俺は言った。

「これで反撃が出来れば完璧なんだが…」

『流石にそれを求めるのは無理なのでは?』

俺の呟きに無々は答えた。

それもそうだな。

「とりあえず一夏の実力は分かったし終わりにするか?」

『そうですね、もう1人の相手もしないといけませんし』

俺の意見が無々は了承した。

それじゃあちゃっっちゃと終わりますか。

「無々、形状変化。形状は双銃」

『了解しました大鎌センジャから双銃ダブルストウーリユ』

無々は大鎌から双銃に変化した。

一夏は接近戦しかできないみたいだしな。

side out

side 第3者視点

「せ、先生！？竜馬先生の武器が変化しましたよ！？」

「竜馬先生の相棒？<sup>パートナー</sup>虚無と無限？の能力らしい、様々な武器に変化出来ると言っていた」

無々が大鎌から2丁のデザートイーグルに変化した事に生徒達は驚いていた。

最も生身でIS相手に余裕で戦っている時点で驚いていたが…

「そ、それじゃあさつき竜馬先生が一瞬で織斑君の後ろに現れたのは？」

「あれは瞬動術と言っらしい修行の末、使用できるようになったと言っていたな」

真耶がおずおずと尋ねた。

その間グラウンドでは一夏が竜馬によって撃たれていた。

「山田先生、白式のエネルギー残量はどれくらいですか？」

「えっと…114ですね。あ、97に減りました」

真耶の言葉を聞き千冬は頷いた。

「模擬戦終了！！勝者は竜馬先生！」

千冬の言葉にグラウンドの2人は止まった。

そして一夏は竜馬に礼をし白式を解除して観戦スペースへ移動した。次はセシリアとの模擬戦である。

## 戦闘VS一夏(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、フレイス様、空刀様、銃王 海さん、バラランシヤ様、妖気様感想ありがとうございます。

空刀様より？破滅の 器 - ベルセルク？シリーズ、竜馬とクロノにキングダムハーツの？？機関着用のコート、双銃ドラギオン（属性・炎）、鞭アシュレイ（属性・光）、鎌ソルージュ（属性・氷）、剣ナイトウォーカー（属性・闇）、クロノに日本刀 刹那、双剣 蒼穹、ライフル 雷塔、鎖鎌 演武、私にリユークのリングゴ、夜神月 愛用時計（実写映画で高田清美殺害に使用した物）、弥海砂の『ヘヴンズドア』CD、Lがよく食べていたお菓子500年分（腐らない）、ニア愛用の人形素材で作った闇狩のキャラの人形、ドラゴンの卵を、

銃王 海さんより世界樹の枝を、

妖気様より私にヘヴィーオブジェクトに出てくるベイビーマグナムを、

いただきました。

クロノ「僕にも武器が来たんだね？」

竜王「これは俺に月ライトになってほしいってことかな？」

竜馬「？破滅？シリーズも酷いな」

「こんにちは！！！」

竜王「あ、来た来た。フレイス様の所よりティアナと霊夢が来ました」

霊夢「お賽銭をくれるって本当！！」

竜王「本当だよ。はい」 一万円を渡す

霊夢「ありがとうございます！！！！！」

ティアナ「良いんですか？そんな大金……」

竜王「大丈夫だよ。竜馬の貯金からおろしただけだから」

竜馬「ちよっ!?!」

「「「ここかああああ！！！！！！！！！！」」」

竜王「ん？」

竜馬「何だ？…ぎゃあああああああああああああああああああ  
あ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」 3人に踏まれた

竜王「銃王 海さんの所より百合が2名、薔薇が1名来ました」

黒子「お姉さまはどこですか！！！！！」

美春「こちらに来ているという情報がありました！！！！！」

利光「吉井君はどこだい!!!」

竜馬「……………」

竜王「あゝ…（一応匿うって約束したからなあ）起きろ？虚無と夢幻？」

竜王・虚夢と夢幻「イリュージョン幻影!!!」

3人「…………何でここに来たんだろう？」 帰っていく

美琴「何をしたの？」

虚無と夢幻「あの3人に普通の性癖という情報を書き加えました」

美波「それじゃあこれからは安全になるって事？」

竜王「いや、しばらくしたら元に戻る。あの3人なら…………3日もてば良い方か？」

明久「それじゃあ意味無いじゃん!!!」

竜王「良いじゃないか、3日位は平和に暮らせるんだぞ？」

美琴「…………それもそうね」

霊夢「そして3日後にまたここに来るのね」

ティアナ「と言うよりもあの3人、返り血まみれでしたよ？」

竜王「ああ、ヒマだったからゾンビを道に配置しておいたんだよ。  
2人が通った直後に」

霊夢・ティアナ「危な!!!!!!」

クロノ「竜王、貰った武器を試して来ても良いかな？」

竜王「良いぞ、えっと…第一訓練部屋だから」

クロノ「分かった」

竜王「じゃあ、締めるか霊夢よろしく!!」

霊夢「分かったわ、闇を狩る少年続きます。あ〜お茶が美味しい…」

竜王「だな〜」

ティアナ「ですね〜」

竜馬「……………俺、放置かよ」

竜王「あ、生きてた」

模擬戦VSセシリア、そして…

side 魔神竜馬

さして…次はオルコットだったな。  
俺は伸びをしながら射出口を見た。

「お待たせいたしましたわ、まさか本当に武器だけで一夏さんを倒すなんて思いませんでしたわ。私の力が通用するかは分かりませんが全力で行かせてもらいます」

射出口からISを纏ったオルコットが現れ俺に言った。

千冬の言葉だと一夏よりオルコットの方がISに慣れてるんだっただよな？

「準備は良いか？模擬戦闘2戦目、開始！！」

グラウンドに俺とオルコットがそろった事を確認した千冬がそう宣言した。

するとオルコットのISからビットが4つ飛び回った。

「…遠距離タイプだな」

オルコットの周囲のビットと手に持っているスナイパーライフルを見て俺はそう結論付けた。

遠距離タイプの弱点って…と…

「動き回る相手に当てられるか、もしくは如何いかにに相手を近付けないかな」

ビットのレーザーを避けながら俺は呟いた。  
さて、オルコットはどれくらいの強さかな…

「避けてばかりでは勝てませんわよ!！」  
「いや、こつちにエネルギー切れは無いからギリ貧になって負けるのはお前だぞ?」

オルコットの言葉を俺は冷静に返した。  
するとオルコットは顔を赤くした。

……恥か?

「っと危ね」

背後に配置されていたビットのレーザーをかわし俺はグラウンドの中央に移動した。

精密射撃は充分にできているな。  
特に問題となる事も無い。

「……ビットは壊しても良いのか?」  
『どつでしよう?修復できるのなら別ですが』

俺の呟きが無々は答えた。  
修復できないとしたら壊すわけにもいかないからなあ…

「…しゃーない無々、形状変化。形状は手甲」  
『了解しました。双銃から手甲』  
ダブルストウーリヤニフアー

俺の言葉に無々は手甲に変化した。  
それを見てオルコットは驚いていた。



「な！？遠距離射撃型の私に接近戦ですよ！？それでは一夏さんと同じですよ！！」

そう言えば俺がこの世界に来た時もこの2人が模擬戦をしてたな。確かに同じか。

「まあ、それでもあいつは刀、俺は拳だけだな」

「さらに無謀と言う訳ですわね」

笑いながらオルコットは言った。

とりあえずビットは壊さずに…

「無々、カートリッジロード」

『了解しました。翠旋 翠撫子』  
ミドリロタチキヤリディアンタウス

無々はカートリッジを1つロードし風を纏った。

「ふっ！！！！！！」

「な！？風でビットが！？」

俺が風でビットを遠くに吹き飛ばすとオルコットは驚いていた。これで一気に近付ける。

「ですが！！まだこちらがあります！！」

「正面からの攻撃を避ける事くらい造作も無い！！！！」

オルコットはスナイパーライフルを放って来たがそれを俺は左右に動く事でかわしていった。

これで終わり！！

「ビットが4つだけだと思いにならない事ですわね」  
「何!?!」

オルコットがそう言うのと俺に向かってミサイルが放たれたのは同時だった。

side out

side 第3者視点

「やりましたわ!!」

ミサイルによって起こった爆煙を見てセシリアは喜びの声を上げた。しかし爆煙が酷く煙の中の様子が分からない。

「不意打ちか…ふむ、加点2。ただし油断した為、減点1だ」

「え!?!ミサイルは直撃したはず!?!」

竜馬の声にセシリアは驚いた。

不意にグラウンドに風が巻き起こる。

「ミサイル系の武器は爆煙が無くなるまで離れておくべきだな」

「そんな!無傷だなんて!!」

爆煙が風によって吹き飛ばされるとそこには無傷の竜馬がいた。

その周囲は爆発によって抉れている。

「ミサイルの起動を風を使って逸らし爆風も風で防いだんだ。それじゃこれで終わりっつと」

「そんな…きゃあああああああああ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

竜馬の説明にセシリアは驚愕の表情を見せた。

そして竜馬はセシリアを殴り飛ばしエネルギー残量を100以下にした。

「それまで！勝者は竜馬先生！！！」

千冬は高らかにそう宣言し生徒達はグラウンドに降りてきた。

side out

side???

見つけた…

間違いないよ、私が間違えるはずなんて無い…

「ふふふ…絶対に離れないよ。私だけのお兄ちゃん……………」

観戦スペースで私は眩きました。

待っててね、お兄ちゃん。

模擬戦VSセシリア、そして…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、妖気様、空刀様、銃王 海さん、バラランシャ様、ルシフエル様、フレイス様感想ありがとうございます。

ユタ様より竜馬に夢喰いメリーのメリーの服を、妖気様より竜馬にフェンリルの剥製を、銃王 海さんよりピカチュウぬいぐるみを、いただきました。

竜馬「……これは俺に着ろって事か？」

竜王「だろうなあ」

「こんにちは！！！！！！」

竜王「あ、ユタ様の所より夜空が来ました」

夜空「さあ、竜馬着替えの時間だ！！！！」

竜馬「え！？ちよ！？」

竜王「第二訓練部屋を使ってくれ」

夜空「オッケー」



なのは「ありがとうございます」

臨也「まったく静ちゃんったら、あんなことで怒っちゃって」

竜王「何をやったんだ？」

臨也「ん〜？ちょっとからかって逃げただけだけど？」

竜王「（…嘘だろうなあ）」

「上上下下左右左右BA!!!!!!」

竜王・キャロ「くだらんくだらん！くだらん！非科学的だ！

！」「

「キャロ〜……」 号泣

竜王「フレイス様の所よりキャロとフェイトが来ました」

フェイト「竜王さん…キャロ、元に戻せませんか？」 涙目+小声

竜王「あ〜…ちょっと難しいかな。一応できる事は出来るけど、この雑談所の中限定だし…」

フェイト「それでも良いです!!!!!!」

竜王「りよーかい」

竜王・虚夢と夢幻「イリュージョン幻影!!!!!!」



修太「うえ！？なに！？急に！？」

フラン「？禁忌　フォーオブアカインド？！！！！！！！！」　四人  
に分裂

修太「うわ……」

フラン「……」　「うふふふふ……さあもつと遊ボウ？モットもつとモ  
ットもつともつと……あなたが壊れるまで！！！！！！！！！！」

〔雑談所〕

フェイト「キャラ〜良かったよ〜」　涙目でキャラに抱きついている

キャラ「あ、あの竜王さんこれはいつたい……」

竜王「そつとしておいてやね。じゃあキャラ締めて」

キャラ「はい、闇を狩る少年続きます」

ユイ「私の出番はこれだけですか！？」

竜王「さあ？」

ユイ「納得いかねえ！！！！」　竜王に延髄蹴りをかます

竜王「ぐふあああああ！！！！？」



模擬戦を終えて、千冬が食堂に行かない理由。

side 魔神竜馬

「さて、竜馬先生。2人と戦ってみてどうでした？」

「そうだなあ……」

グラウンドに降りてきて生徒を並べた後に千冬が尋ねてきた。とりあえずは2人の弱点でも言っておけばいいか。

「まず一夏、お前は攻撃を避ける事に慣れる。俺が放った遠距離攻撃を全部防いでいただろ？あれじゃあ、エネルギーを無駄に消費するだけだ、基本的には攻撃に当たらないように心掛けるんだ」

「分かった……だっ!？」

一夏が返事をした瞬間に千冬が一夏の頭を思い切り殴った。

「教師の言葉にははいと答える」

「は、はい」

頭を押さえながら一夏は返事をした。

気にしないんだがなあ……

「次にオルコット……と言うかお前の下の名前って何だ？」

俺はオルコットを見ながら言った。

するとオルコットは不思議そうな表情をした。

「私の名前ですか？セシリア・オルコットですわ」

「そうか、じゃあセシリア。戦闘中に油断する事を少なくしろ、自

分の撃ったミサイルの爆煙は時として自分の視界を邪魔する。だからミサイルを撃ったら即刻、敵から距離を…ん？どうした？」

俺が話していると生徒たちは驚いた表情で俺を見ていた。何だ？

「なあ千冬、こいつ等はどうしたんだ？」

「分かりません。織斑の説明の時からずっとこんな表情でしたが…」

俺の問いに千冬は答えた。

「一夏の時から？」

「どうかしたのか？」

「え、えつと…そう言う風に説明するとは思わなくて…」

生徒達に向かって俺が尋ねると生徒の1人がおずおすと答えた。

「…まあ、良いや。とりあえず2人は俺が言った事の克服を目指してくれ、間違ってると思った場合は迷わずに言ってくれよ？これで授業は終了だ、各々解散してくれ」

そう言って俺はグラウンドから瞬動術を使い出た。

side out

side 第3者視点

「織斑先生、竜馬先生行っちゃいましたけど良いんですか？」

「なに、竜馬先生とは同室だ気にしなくても会える」

生徒の1人が千冬に尋ねた。

それに千冬が答えると驚きの声が上がった。



「どうしたんだ？」

「先生、私と模擬戦をして！！」

俺の問いにスノウはそう答えた。  
模擬戦？

「もしかしてスノウも専用機とか言う奴を持っているのか？」

「うん、それで模擬戦は駄目かな？」

ん〜…今から晩ご飯を準備しないといけないからなあ。  
少し俺は考えた。

「明日で良いか？部屋に戻って晩ご飯を準備しないといけないんだ」

「明日だね？分かった！！」

そう言っつてスノウは頷いた。

…そうだ。

「スノウ、お前も来るか？人数がいる方が食事も楽しいし」

「良いの？…じゃあ、お邪魔します！！」

少し考えスノウは頷いた。

これは作り甲斐があるかな。

そして俺とスノウは千冬の待つ部屋に向かった。

「帰って来たか。ん？ブルーメンじゃないか、どうしたんだ？」

「明日、スノウと模擬戦の約束をしたんだよ。それでついでに晩ご飯を食べていかないか聞いて俺が連れてきたんだ。スノウ座ってくれ」

部屋に入り千冬が尋ねてきたので説明した。  
俺はスノウに待っているように言ってキッチンに向かった。

side out

side 第3者視点

「つか、何で食堂に行かないんだ？」

「あそこで食事をするとか何か私の周囲に生徒が集まって来て食べにくいんだ」

竜馬の問いに千冬は答えた。

その答えに竜馬は納得したように頷いた。

「ところで…どうして玉ネギを避けているんだスノウ」

「!?!?………苦手で」

自分の皿の玉ネギだけを残しているスノウを見ながら竜馬は言った。  
それに対しスノウは小声で言った。

「はあ……お前は俺の妹か？」

呆れながらスノウの皿から玉ネギを回収していく竜馬。

「前に言っていた雪と言う名の妹だな？」

「ああ、あいつも玉ネギが駄目なんだよ」

竜馬の呟きに千冬が反応し言った。  
それに対し竜馬は肯定した。

「あいつ元気かな…何も言わずにここに来ちゃったし…」

「……寂しいと思うよ。たった1人の家族だったのに死んじゃったんだから」

竜馬が物思いに耽りながら呟くとスノウが静かに答えた。

side out

side 魔神竜馬

「え？」

「私、もう行くね!!!ごちそうさま!!!」

待つ!!!

俺がスノウの方を見るとスノウが立ちあがりドアに向かうのは同時だった。

「それじゃ!おやすみなさい!!!」

「慌ただしい奴だ。ん?どうした?」

ドアを見ながら固まる俺に向かって千冬が尋ねてきた。

しかし俺は答える事が出来なかった。

あいつ...どうして俺が死んだ事を...?

模擬戦を終えて、千冬が食堂に行かない理由。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、フレイス様、空刀様、ユタ様、バラランシャ様、妖  
気様感想ありがとうございます。

空刀様より私と竜馬とフランに燃料切れを起こさない無限燃料と絶  
対にパンクしないタイヤ・オリハルコンで作ったバイクを、  
妖気様よりアースラに学園都市製洗濯機を、

いただきました。

竜馬「お〜バイクか〜」

竜王「だな、つとやべ起きてくれ？虚無と夢幻？」

竜王・虚夢と夢幻「イリュージョン幻影！！！！！」

虚無と夢幻「第四訓練部屋に自動修復の情報を書き加えました」

「こんにちは」

竜馬「ん？早苗とユウキ？」

竜王「フレイス様の所より早苗とユウキが来ました」

ユウキ「こんにちは」





フラン「？禁忌『クランベリートラップ』?!?!」  
フラン「？禁忌『カゴメカゴメ』?!?!?!」  
フラン「？禁忌『レーヴァテイン』?!?!?!?!」  
フラン「？禁忌『カゴメカゴメ』?!?!?!?!?!」

修太「あ亜唾阿ああア蛙嗚呼ア阿ああ嗚呼阿唾亜アああ嗚アアア蛙!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

（雑談所）

竜王「そろそろか…」

竜王・虚夢と夢幻「イリュージョン幻影!?!?!」

早苗「何をしたんですか？」

竜王「ちよつと、ね（第四訓練部屋とこの部屋の次元を少しずつらしただけだし）」

竜馬「もう締めても良いのか？」

ユウキ「良いんじゃないのか？」

竜王「良いよそれじゃあ…空言ってくれ」

空「ひゃ、ひゃい!!闇を狩る少年続きましたゆ//////」

竜馬「…噛んだ。…何だ!?!」  
爆音に驚く

竜王「安心しろこの部屋には関係ないし、勝手に治る」

ユウキ「何を知っているんだ？」

## 模擬戦VSスノウ 咲き誇って冰雪華

side 魔神竜馬

くそ、昨日のスノウの言葉が気になって眠れなかった。  
眼の下に薄く隅を作りながら俺はグラウンドに立っていた。

「眠そうですが大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、なんとかなる」

心配そうに尋ねてくる真耶に俺は答えた。  
そして射出口からスノウが現れた。

「来たか…それではこれより模擬戦を行う。勝利条件は竜馬先生が倒れるかブルーメンのエネルギーが100以下になるかだ。それでは、模擬戦開始!!」

千冬が開始の合図をした。

さて、スノウのISは…

「それじゃあよろしくね竜馬せんせー」

「ああ、かかってこい!!」

俺は頭を振って昨日の事を振り払いスノウを見た。

装備している武器は、大振りエネルギー刃のナイフとハンドガンか…

「まずは小手調べ!!!!」

「甘い!!」

スノウがハンドガンで何発か撃ってきたが俺はそれを無々で斬り捨てた。

現在、無々は双剣になっている。

「やっぱりだめか〜それなら…咲き誇って冰雪華!!」  
「げっ……………」

スノウが叫ぶとハンドガンが消えスノウの周囲に8つのビットが出現した。

換装システム!?

「いつけええええええ!!!!!!!!!!!!!!!!」  
「くっ!!!!!!」

8つのビットの内4つがブレード、2つがレーザー、2つが捕縛用のビットらしいな…

飛んでいるビットの細部を見ながら俺はそう結論付けた。

「隙ありだよ!!!!!!」  
「くぐっくぐっ!!?!」

ビットを避け続けているとスノウが背後から斬りつけてきた。しまった、ナイフは消えてないんだった。

「も〜隙ありまくりだよ…そうだ!私が勝つたらお願い聞いてくれる?」

「お願い?」

立ち上がる俺を見ながらスノウが言った。  
お願いって何だ?

「うん、お願い。私が勝つたら…私の物になってねお兄ちゃん」  
「……………」

その瞬間スノウが何者なのか俺は理解した。  
どうして…

「どうしてお前がいるんだ……………雪……………」

「どうして？そんなの決まってるじゃん、お兄ちゃんを追って来たんだよ」

スノウの…否、雪の言葉に俺は愕然とした。  
俺を追って死んだ？

「私ね寂しかったよ？だつていきなり2人だけの家族がいなくなっちゃうんだよ？耐えられないよ」

「それは……」

手に持ったナイフをいじりながら雪は言った。  
俺は何も言えずに俯くだけだった。

「それにね？私気付いちやっただ」

「何にだ？」

雪は嬉しそうに言った。

気付いた？

「私さ、お兄ちゃんが友達と遊んでいるといつも不機嫌だったよね？」

「あ、ああ」

確かに雪はいつも不機嫌だった。

俺がいる時は自分の友達に対しても悪口を言ったり…

「あれね？最初はつまらなかつたからだと思ってたんだ、でもお兄ちゃんがいなくなつてやつと気付いたの」

「俺が、いなくなつて？」

そう言いながら雪は一回転しこちらを見た。

「うん あれはねつまらないからじゃ無かったの、お兄ちゃんが私以外の人間を見ている事に不機嫌だったの。お兄ちゃんは私だけを見ていれば良いんだよ？なのに他の人間に目を向けてさ…だから私が勝ったら私の物になってねお兄ちゃん」

おかしい…

雪はこんな性格だったか？

「お、お前は本当に雪なのか？」

「あつたり前じゃん。それじゃあ、証拠を見せようか？ほら、ここ。覚えてる？お兄ちゃんと一緒に階段から落ちた時につけた傷だよ」

俺の問いに雪は髪の毛を掻きわけ額を出し切り傷を見せた。

あれは…

「…どうやら本当に雪みたいだな」

「ふふふ、お兄ちゃん 私の物になってね、それでずっと一緒にいよう」

そう言って雪はビットを周囲に配置し突っ込んできた。

ずっと一緒にいよう、か…

「悪いなそれは出来ない…」

『？カートリッジ。瞬氷 インスタントアイ 蒼穹蓮華』

俺が呟くのと同時にカートリッジが二つロードされ双剣の刀身が砕けた。

そして冷気による刀身が形成された。





雪は女の子に向かって叫んだ。  
すると女の子はどこから取り出したのか巨大な杖を持っていた。

「元の姿に戻す？どう言う事だ？」

「あなたは私の弟子達の転送ミスでその姿になったんですよ？」

弟子達！？

そして俺の体は光に包まれた。

「これでお兄ちゃんは元の姿に戻れるんだよね！？」

「はい！私はあの子達の師匠ですよ！こんな事朝飯前ですよ！」

そして徐々に俺の体を包んでいた光が収まっていった。

これは…

「俺の体が元の年齢に戻った？」

「改めまして挨拶をさせていただきます！オールノーレッジと言います！」

そう言っただけの子オールノーレッジは挨拶をした。

するとさかさず雪がオールノーレッジを自分の後ろに回した。

「あら？」

「お兄ちゃんの視界に入るのは私だけで良いの、十秒でもお兄ちゃんの視界に入ったら殺すよ」

雪はオールノーレッジの頭を掴みそう言った。

…こいつやっぱ性格変わってるって。

「お兄ちゃん！！！！」

「うお！？？」

いきなり雪が飛びついてきた。

展開していたISはいつの間にか十字架クロスのネックレスになり腕に巻き付けている

「な！？痛ッ！？？」

「ずっと一緒にいようねお兄ちゃん」

その言葉と同時に俺の意識は薄れていった。

最後にみた物は片手に注射器を持った雪だった…

模擬戦VSスノウ 咲き誇って冰雪華（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、バラランシャ様、フレイス様、ルシフェル様、妖気様、銃王 海さん感想ありがとうございます。

妖気様より竜馬に常盤台中学の制服を、銃王 海さんより腕時計を、

いただきました。

竜馬「これは俺に着ると言っているのか？」

「こんにちは」

竜王「お、ユタ様の所より…えつと？」

「ユタの所の？遊戯王（転生せし者の歩く道）？の主人公の黒羽恭夜だ」

「紅葉空…」

竜馬「…静かだな」

恭夜「まあな、所で竜馬はどんなふうデュエルを進めてるんだ？」

竜馬「そうだなあ…悪魔デッキなら攻撃力で押し通すタイプだしス





美琴「また匿ってもらわよ!!」

美波「平和が短い!!」

明久「ちょ!?美波!?どうして僕に八つ当たりするの!？」

〈第一訓練部屋〉

竜馬「そう言えば最近エンジェルパーミッションを作りたいんだよ」

恭夜「嫌なデツキを…」

空「無限ループよりは…マシ」

恭夜「そうか？」

竜馬「(仮)のデツキなら出来ただけだね」

空「ちなみに切り札は…?」

竜馬「?氷結界の龍グングニール?とかだよ」

恭夜「そこで天使じゃないのかよ!!」

〈第二訓練部屋〉

なのは「にゃああああああ!!……!!……!!」

ユイ「裏切りましたね竜王!!……!!」

臨也「おお怖い怖い」



い？」

竜王「なんとなく作ってみたカードだよ。効果は下に書いてある」

ブルーアイズエリア

・青眼の里

自分の手札かフィールドの？ブルーアイズ青眼の？と名の付いたカードのレベルを2つ下げる事が出来る。

このカードが存在する限り？ブルーアイズ青眼の？と名の付いたカードは戦闘では破壊されない。

キヤロ「ありがとうございます。デッキに入れても良いか聞いてきますね」

竜王「おう、それじゃあ締めるか闇を狩る少年続きます。雪の説明は近いうちにする予定です」



いもじゅ。

side 第3者視点

「さてと、それじゃあ行くところかお兄ちゃん」

そう言つて雪は竜馬を抱えた。

その光景を生徒や教師達は何も言わずに見ているだけだった。

「…ブルーメン、どう言う事が説明をしてくれないか!」

「千冬かよ…お断りだね。私はお兄ちゃんとずっと一緒にいるの、こんなところで時間を喰つてたらお兄ちゃんが起きちゃうじゃん、じゃあね!」

放送による千冬の言葉を聞くと雪は不機嫌な表情になった。

そしてISを起動して竜馬を抱えたままグラウンドから出ていった。

side out

side 織斑千冬

「ブルーメンさん行っちゃいましたね…」

「何がどうなっているんだ?」

私に向かつて山田先生が呟いたが私は気にとめられなかった。

同室だった少年がいきなり一夏よりも年上の青年に!?

「ち、千冬姉! さっきのはいったい!?! だあっ!?!」

「学校では織斑先生だ。私にもわからん…」

いきなりドアが開き一夏が入ってきた。

私は一夏の頭を殴り訂正させた。

「グラウンドでの会話の調整が終わりました。どうしますか？」  
「…聞かせてくれ」

山田先生の言葉に私はそう答えた。

グラウンドでの竜馬やブルーメンの表情を見た感じでは只事では無かったからな。

「うん、お願い。私が勝つたら…私の物になってねお兄ちゃん」  
「お兄ちゃん？どう見ても竜馬の方が年下だと思っただが…」

音声を聞いて一夏が呟いた。  
竜馬をお兄ちゃんと呼ぶ者…

「どうしてお前がいるんだ！！雪！！！！！」  
「やはり…か」

私の呟きに山田先生と一夏が私を見た。  
そうか、2人には説明していないのだったな。

「ブルーメンの行動理由が分かったぞ。いや、ブルーメンでは無かったな」

「どう言う事ですか？」

私の言葉に山田先生は問いかけた。

「彼女の本当の名前は雪、まがみゆき魔神雪。竜馬先生の妹だ」  
「…！？」

2人は驚愕の表情を浮かべた。

何せ私も信じられないからな。

「だけど！竜馬と、その雪？じゃあ竜馬の方が年下！！」

「俺の体が元の年齢に戻った？」

一夏が言った直後に流された音声で私達は理解した。

竜馬はある事情で外見年齢が下がっていたのだ。

「あれ？でもそうなると思斑先生は見た目子供でも男性と同居して  
いたって事ですか？」

「それもそうだよな」

山田先生の何気ない一言は私にとつてもないダメージを与えた。

わ、私が同居！？

思わず私は頭を抱えてしゃがみこんでしまった。

side out

side 魔神竜馬

ん……

こ…こ…は……？

『気が付きましたか？』

「無…々…きや…？」

呂…律が…回ら…ない…

俺はゆっくりと自分の状況を見渡した。

「こ…こ…は…ど…だ？」

『おそろくどこかの倉庫かと』

俺の問いに無々は答えた。  
倉庫？

「……！？」

暗闇に徐々に目が慣れていくと俺は自分が椅子に縛り付けられている事が分かった。  
これは…

「あ、お兄ちゃん起きたんだあ」

「ゆ…き…？」

不意に明かりがついたと思うとドアを開けて雪が現れた。

壁を見るとこの世界に来た瞬間からの俺の写真が壁一面に張られていた。

「えへへちよつとだけ痺れ薬が強すぎたみたいだね。あ、安心してね人体には無害だから」

俺に向かって笑顔で雪は言った。

無々はどうやら腕輪の状態に戻っているらしい。

「ここは…どこなんだ？」

「ここ？気になる？気になる？ここはね、私がお兄ちゃんと一緒に暮らすためのお城何だよ 私ね、この小説を何回も読んだりこの世界をすみずみまで調べたりしたんだよ。それで見つけたのがここ」

俺の問いに雪はターンをしながら言った。

どうする？

どうやら助け…が来るかは分からないがそれも期待できないようだ。

「それじゃあお兄ちゃんご飯にしよう」  
「…俺は動けないんだが」

雪はそう言って弁当箱を取り出した。  
「どうやって食べと？」

「分かってるくせに」 はい、あくん」  
「いや、俺を解放しろよ！！」

オカズを箸で掴むと雪は俺に向かって差しだしてきた。  
妹に何であくんをされなきゃいけないんだよ！！

「だって解放したらお兄ちゃん逃げるし」  
「……………」

オカズを掴んだ箸をそのままに雪は言った。  
否定が出来ない…

「ね？だから、はいあくん」  
「…雪、俺は…！！？」

不意に爆音が響き渡った。  
その衝撃で雪の手から弁当箱が落ちる。

「お兄ちゃんのために作ったのに……許さない！！……！！」  
「雪！？」

そう言っただけで雪はISを起動させて倉庫から出ていった。  
くそ……！！

何が起きてるんだよ！！

「無々!!」

『セットアップ』

side out

side 魔神雪

私がお城倉庫から出るとそこには三機の機体がいた。

あれは確か…

「Mk・III、V、VIIだったかな」  
マーク      ドライ      フュンフ      アハト

まったく…

お兄ちゃんのために作ったお弁当を駄目にした罪は重いからね…

「咲き誇って冰雪華!!」

私はハンドガンを消して冰雪華を換装した。

さっさと終わらせてもう一回お兄ちゃんに私の料理を食べてもらわないと!!!

いもつと。(後書き)

↳ 霊使い達の雑談

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、空刀様、ユタ様、バラランシャ様、フレイス様、妖気様、銃王 海さん、月光閃火様感想ありがとうございます。

空刀様より前回来たけど転送ミスで戻ってしまったバイクを、妖気様より竜馬に木原数多のコスプレを、

銃王 海さんよりココさくらのクロウカードのコピーを、

いただきました。

竜馬「あ、急に無くなってたのはそう言う事だったのか」

竜王「みたいだな。あ、一応バイクを走らせるトラックは向こうの扉だから」

竜馬「じゃあちよっと思つてくる」

「こんにちは」

竜王「お、ユタ様の所より優とセイが来ました」

優「なあ、何でここ次元が少しずれてるんだ？」

竜王「あれ？来る分には問題ないはずだけど」





「!!!!!!!!!!!!!!」

優「はい、ストップ」

飛んでいた弾幕などが全て消えフランと修太が気絶する。

（雑談所）

竜王「おお、流石は優。無傷で終わらせたよ、俺なら……一番良くて半殺し×2だな」

セイ「それは死んでるんじゃない」

「こんにちは」

竜王「えっと、銃王 海さんの所より秀吉と西村宗一が来ました」

西村「初めまして吉井達の担任をしている西村です。差しいれですがこれをどうぞ」

明久「げ！？鉄人！？」

西村「西村先生だ、あいつ等から逃げる事はかまわないが勉強はちやんとしておけよ」

秀吉「…竜王殿？何故わしの目の前にこんな服があるのじゃ？」  
目の前にメイド服

竜王「あれ？それって俺が雪に着せようと思ってたやつだ。なんで？」



セイ「……なんで扉に血の様な物が付着しているんですか？」

竜王「あそこの部屋は『……部屋』だからだよ」

秀吉「何故物凄い小声なのじゃ!？」

ティアナ「…嫌な予感がするんで言わないでください」

竜王「ティアナが賢明かな、どうしても知りたいなら入ってくれば?しばらく出てこれなくなるけど」

全員「入りません!!」

はやて「あれ?看板がついとるやん何々…?汚れてて読めへんなあ…」

竜王「気をつけろよ、んじゃ秀吉締めて」

秀吉「了解なのじゃ。闇を狩る少年続くぞ…!？」 悲鳴に驚き振り返る

竜王「あ…読んじやつたかあ」

はやて「な、なな、何で『拷問部屋』なんてもんがあるんや!」

竜王「よく読め、下に小さく?勉強?って書いてあるだろうが」

明久「拷問だあああああ!?!?!」

竜王「ちなみに他には?運動??肉体??精神?なんてものがある。

まあ、？肉体？はある特定の人間にはご褒美になるんだろうな」

全員「（どっどっでも良い……！……！）」



私の攻撃によつてMk・IIIの左腕は切断され消えました。  
そこにバリアを展開したMk・Vが突撃してきたので止めはさせま  
せんでした。

「後ちよつとだったのに!!」

バックステップでMk・Vを避けながら私は言いました。  
ん？

「雪!!」

「お兄ちゃん!?!」

不意に影が現れたかと思つたら翼の生えたお兄ちゃんが降りてきま  
した。

所々焦げてるのは何でだろ？

「こいつ等か…」

「私を助けるために来てくれたんだね 嬉しいよ!!!!」

そう言つて私はお兄ちゃんに飛び付きました。

side out

side 魔神竜馬

「だああああ!! 離れる!!!!!!」

「や〜だ〜!!!!」

しがみつく雪の頭を押さえながら俺は言った。  
多重炎牢結界インフェルノで脱出したから軽く火傷で痛い!!!

「うおっ!?!」  
「きゃっ!?!」

不意にMk・IEIとMk・Vが左右から突撃してきたので俺は雪を抱えて飛び上がった。  
結果2機は下でぶつかり合った。

「雪、一旦離れる。お前飛べるだろ」  
「え〜…は〜い」

雪は渋々と言った風に俺から離れた。  
さてと…

「久々に全力全壊で能力を使うか…」  
そう言っただけは伸びをした。  
雪はそれを不思議そうに見ている。

「全力全壊?」  
「ああ、あまり離れるなよ…インフェルノ多重炎牢結界・コキュートス多重氷牢結界・シルフ多重風牢結界・ホルテニクス多重雷牢結界…フォースツザメンゼイション強制合成」

俺の周囲に4色の魔法陣が現れ徐々に一つに重なっていく。  
ファフナー達はそれぞれ氷や旋風、雷と言った物で動きを止められ動く事はできない。

「合成完了…アスカルド無限天牢結界!!!!!!」

魔法陣が一つになるとそこには完全に球体の結界が出現していた。  
ファフナー達を戒めていた物質は消え3機は結界の壁に体当たりな

どをしている。

「次は…」

「ん？」

雪は不意に不思議そうに結界を覗き込んだ。

おそらく結界内に無数に浮遊している魔力球に気付いたのだろう。

「相手の武装の無力化」

「うわ…ぼろぼろだ」

魔力球を操作しファフナー達の武装を破壊していった。

…今気付いたけど？天？じゃ無くて？魔？を使えば楽だったかも。

「そして、止め。聖戦<sup>シハート</sup>!!!」

武装を全て破壊されたファフナー達は身を寄せ合うように結界の中心に集まっていた。

そこに結界内の魔力球が全て収束する。

「きゃっ!?!」

全ての魔力球が集束を終えると凄まじい爆発を引き起こした。

爆発は結界によって押し止められ再び内側へ向けて衝撃を飛ばす。

これが技の由来だ。

終わる事が無いダメージ、故に？無限？。

逃げる事の叶わぬ檻、故に？牢結界？。

「これで終わりだな…雪、俺はお前を大切に思っている。けどどな？俺は約束だけは破りたくないんだ」



「お兄ちゃん……それじゃあ、それじゃあお兄ちゃんは倒す奴がいなくなったらまた一緒に暮らしてくれる?」

俺の言葉に雪は涙目で尋ねた。  
これも、約束かな。

「ああ、?約束?だ。さあ、戻ろうIS学園に」  
「うん!!」

そして俺達は空を飛びIS学園へと向かった。

side out

side 第3者視点

「織斑先生!! 竜馬先生が帰ってきました!!」  
「そうか、分かった」

真耶の言葉を聞き千冬は校門へと向かった。  
その顔には誰にも分かるように緊張が張りついている。

「あ、千冬」  
「帰って来たか竜馬……」

校門に千冬が着くと竜馬と雪が立っており竜馬が千冬に声をかけた。  
それを見て雪は不満そうに離れていく。

「それがお前の本来の外見らしいな」  
「まあな、言わなくて悪かったな」

千冬という言葉に竜馬は苦笑いをしながら答えた。  
それを見ていた千冬の顔が赤くなつた事を竜馬は気付いていない。

「さて、俺は元の姿に戻ったし同じ部屋に住む訳にもいかんだろ…別の部屋ってあるか？」

「それなら私の部屋に来なよ！！私1人で2人部屋を使ってるからさー！！」

竜馬の言葉に雪は反応し言った。

その言葉に竜馬は少し固まった。

「い、いや妹とはいえ女子生徒と一緒に部屋つてのはちょっと…」

「……空き部屋は今の所どこにも無い。だから竜馬は部屋を移動する必要は無いぞ」

いきなり千冬はそう言った。

千冬 of 言葉を聞いて原作を知っている雪は驚いた。

「どうしたんだ？雪」

「な、なんでもない」

竜馬の問いに雪は慌てながらもそう言った。

side out

side 魔神雪

まさか千冬があんな事を言っなんて！！

予想外だわ…

こっとなったら千冬を…

「雪、今考えている事を実行しようとしたら二度と口を利かないよ？」

「……はい」

不意に私を見てお兄ちゃんが言いました。  
何で考えている事が分かったんだろ。  
千冬を闇打ちして消そうと思ったのに…

「後は、俺以外の人物に危害を加えても同じだからね？」  
「……………はい」

念を押すようにお兄ちゃんは私に言いました。  
…俺以外？

「お兄ちゃんなら良いの？」  
「良いぞ。ただし、反撃はするからね？」

だよね…  
私はお兄ちゃんの腕にしがみつきながら部屋に向かいました。

## 限り無い天の牢を結ぶ世界（後書き）

♪ 霊使い達の雑談♪

感想と贈り物ありがとうございます。

銃王 海さん、空刀様、ルシフェル様、White Seal様、  
フレイス様、妖気様、月光閃火様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより魔神雪のポスターを、

空刀様より双剣 ケルベロスを、

White Seal様より竜馬に「抗ヤンデレ剤」、自分では普通の服に見えるすけすけのコスプレ衣装一式（基本は網羅）、あとがき出演者全員（訓練室etc.にいる人含む）にSLB、魔砲『ファイナルスパーク』、エヌマ・エリシユ天地乖離す開闢の星をそれぞれ三十万発を、妖気様より雪に兄殺しの実（龍殺しの実の品種改良）を、

いただきました。

竜馬「つーかやっと俺の上級技が出せたな」

竜王「最上級ではないけどな。それより来たぞ」

竜馬「へ？ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

White Seal様の放ったSLB、魔砲『ファイナルスパーク』、エヌマ・エリシユ天地乖離す開闢の星が流星群の様に降り注ぐ

竜王「あゝ痛い痛い」 ギャグ補正と不老不死の情報を上書き済み

雪「あははは…で？何で私は無事なの？」

竜王「お前のISがチートだから」

IS名・氷雪月華<sup>ひょうせつげつか</sup>

ワソオフ・アビリティ

唯一仕様能力・???

武装・エネルギー刃のナイフ、ハンドガン（威力はセシリアのスターライトmkIEEと同等）、ビット（8つの内4つがブレード、2つがレーザー、2つが捕縛用）、???

空色と白で彩られたIS。

待機状態でもSLB程度なら防御する必要さえない。

武装名称はナイフが蒼穹<sup>ウエルキン</sup>、ハンドガンが黄昏<sup>トワイライト</sup>、ビットが氷雪華<sup>ひょうせつか</sup>、???

??はまだ出ていないため不明。

唯一仕様能力は発現しているがまだ使用していない。

エネルギーが100以下になった場合、5分程待機状態にすれば全快する。

竜王「な？」

雪「確かにチートだね。そう言えばお兄ちゃんの外見とかは書かなくて良いの？」

竜王「明日あたりにお前の外見と合わせて書くよ」

雪「そっか」

「こんにちは」

竜王「あ、銃王 海さんの所より木下優子、音無結弦、土屋康太、椎名、円堂守、泉こなたが来ました」

優子「秀吉はどこですか？」

竜王「そこで伸びてるよ。ちなみに拷問部屋はそこ」

優子「ありがとうございます」 秀吉を引きづり？ 肉体？と書かれた拷問部屋へ行く

結弦「ところでどうして全員……じゃないけど倒れてるんだ？」

竜王「砲撃が降ってきたから、ちなみに他の部屋にも降り注いだからほとんど伸びてるよ」

椎名「浅はかなり……」

康太「……………」 雪を写真に撮り続ける

竜王「まあ、確かに可愛いから撮りまくる理由も分かる」

こなた「ところでISは？」

竜王「雪、やってあげて」

雪「はいはい 来て冰雪月華！！」 ISを展開する

こなた「おおおおお！！！！かつこいいい！！！！！！」

守「特訓がしたいんですが良いですか？」

竜王「オツケー、え〜と…第四訓練部屋が開いてるなそこに行つて」  
守「分かりました」

椎名「分かった…」

竜王「あれ？椎名もなんだ」

竜馬「……………つあああああ」

雪「お兄ちゃんが起きたね」

竜馬「放置とか無いだろ！！」

竜王「気にすんな」

「お邪魔するわよ」

竜馬「ん？フレイス様の所から紫とティアナ？」

竜王「あ、咲夜来てくれ」

咲夜「何でしょうか？」

竜王「ティアナを時止め中でも動けるようにしてくれるか？」

咲夜「そうですね…難しいですがやってみます。ティアナさんこちらへ」

ティアナ「へ？へ？？へ！？」

竜王「それと紫、悪いんだけどフェイトに元気を出すように伝えてもらえる？何かやばそうだから」

紫「分かったわ、その代わりお酒を用意しておいてね？」

竜王「俺は飲めないけどな」

「？勉強？の拷問部屋」

西村「何を寝ている！！」

来也「寝てるんじゃない無くて気絶だと思っただが…」

この2人以外全員が砲撃によって気絶中。  
フランと修太はもとより気絶中である。

「雑談所」

「邪魔するぜ」

竜馬「え？誰？」

「俺は月光閃火だ。そしてこっちが俺の小説？WOLFANG・ウルファング・つきおみ きは狼男は不良青年？の主人公、月臣輝刃だ」

輝刃「よろしくな」

竜王「よろしく」

月光閃火「さて、と。それじゃあ竜馬の妹のお仕置きだ」



竜馬「いや、それはちょっと…」

輝刃「兄を誘拐したりしたんだ当然だろ？」

雪「誘拐じゃないよ。だって私とお兄ちゃんしか家族はいないもん」

竜王「確かに誘拐ではないが…」

月光閃火「とりあえずは4人で話し合おうか」

雪「それが良いかもね」

輝刃「異論は無い」

竜馬「…（何でだろう、参加した場合俺が一番嫌な目に合う気がする）いや、俺は…」

竜王「強制参加だ行ってこい。闇を狩る少年続きます」

オリキャラ紹介…私とお兄ちゃん (前書き)

成長した竜馬と雪の詳細です。

## オリキャラ紹介：私とお兄ちゃん

### ・魔神竜馬

身長 135? 178?

体重 36? 65?

魔力光等に変化は無い。

髪の毛が伸び腰くらいまでの長さになった。

体型は筋肉質ではなくどちらかと言えば痩せている方。

女顔のまま女装した場合、女性にしか見えない。(ただし本人は女装したがる周囲が強制的にさせている事が多い)

創った変身魔法の影響で感情によって髪の毛や瞳の色に変化が起きるようになった。

恥や照れ、慈愛の感情なら赤色の髪色と紅色の瞳に、寂しさや悲しみといった感情ならば白銀の髪色と紅色の瞳に、怒りや殺意といった感情で瞳が金色になる。

### ・魔神 雪 (まがみ ゆき)

年齢 15才

誕生日 3月3日

身長・体重 160? / ? 血で汚れていて読めない

性格 兄至上主義 ヤンデレ(死ぬ前は極度のブラコンだった)

外見 灼眼のシャナの吉田一美を黒眼黒髪で長髪にした感じ

魔力 無し

能力 兄に好意を持つ女性を見分けられる

竜馬を追って死んだ竜馬の妹。

死ぬ前は極度のブラコン程度だったが竜馬が死んでから悪化しヤンデレとなる。

現在は竜馬と一緒にいるのが嬉しいのか沈静中、ただし原作ではありえない行動をとった千冬を常に警戒中。

竜馬と遊ぶという目的のために遊戯王を覚えた。

兄に嫌われる事<sup>イコール</sup>死、という認識をしている。

ちなみに？死？とは兄を殺して自分も死ぬという意味である。

オリキャラ紹介：私とお兄ちゃん（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

まーさくん様、空刀様、フレイス様、バラランシャ様、ルシフェル様、妖気様、ユタ様感想ありがとうございます。

妖気様より雪に早めのクリスマスプレゼント（指輪）を、

いただきました。

竜馬「確かに早いな」

竜王「ほれ、お前が渡してやれ」

竜馬「あ、ああ。雪、良かったな」 雪の指にはめてあげる

雪「うん 妖気様ありがとうございます！！（お兄ちゃんにつけてもらっちゃった！！外せないよ／＼／＼／＼）」

「こんにちは」

竜王「お、空刀様の所より蛇川が来ました」

乱太「修太は？」

竜王「あの部屋」

乱太「オツケー」

「戦死者でなくともこの部屋に入った者は補習」

乱太「何イイイイイイイ!?」

「こんにちは……」

竜王「ああ……フレイス様の所より意気消沈したフェイトが来ました。フェイト、落ち着いて俺に付いて来てくれ」

フェイト「あ……はい……デスノートで私に……」

竜馬「大丈夫、か!?」 フェイトを見た直後に目の前に雪がいた事に驚く

雪「お兄ちゃんは見ちゃ駄目」

竜馬「わ、分かったから部分展開したビットを当てるな」

雪「なら良いけど」 ビットを離し消す

「助けてー！ー！ー！ー！」

竜馬・雪「!?!?!」

竜王「ん? ユタ様?」 フェイトをある部屋に入れて戻ってきた

竜馬「ってその後ろの攻撃は何だよ!?!」



西村「何をしている!!」

来也「(地獄だ...)」

乱太「何で俺まで!?俺は修太を迎えに来ただけだぞ!？」

西村「そんな事は関係無い!!この部屋は補習者の部屋つまりこの部屋に入った者は全員補習者だ!!」

〈第一訓練部屋〉

咲夜「……ふむ、結果は上々と言ったところですね」

ティアナ「あ、ありがとうございます…」

咲夜「(しかし時間停止をティアナさんに教えるとは…どう言った考えでしょう?)」

ティアナは時間停止が効かなくなった。

〈雑談所〉

竜馬「あゝ痛かった…」

雪「大丈夫?」

ユタ「……………」 雪によって攻撃された

竜王「お、ティアナが時間停止を覚えたみたいだな。これで大丈夫だろ」

竜馬「なにが?…まあ良いや締めちゃおうか、雪言って良いよ」



雪「はい 闇を狩る少年続くよ」

竜馬「…そう言えば俺、少年じゃ無くなったな」

竜王「タイトル変える？」

**番外編・紅魔VS機皇（前書き）**

区切りがついたので番外編です。

本文は前回の番外編同様フレイス様に書いていただきました。

ありがとうございます。

## 番外編・紅魔VS機皇

竜馬とユウキ、2人が向き合い立っている。  
2人共前回の引き分けが気に食わないので再戦をするのだ。

「ユウキ！今回こそ決着をつけるぞ！」

「ふうん、それは楽しみだな……。」

\* \* \* \*

なのは「ユウキ君、何か余裕そうな顔しているけど……」

フェイト「大丈夫だよ！！竜馬は新しいカードを手に入れたから絶対に勝てる！！」

はやて「そうや、みんなで竜馬君を応援しよう！！」

アリシア「そうだね。」

竜馬を応援する？闇を狩る少年？の面子。

\* \* \* \*

竜王「じゃあルールを確認をするぞ、今回のデュエルはユウキだけ禁止カード1枚デッキに入れても良い。ただし竜馬は禁止カードが使えない代わりにオリジナルカードを使用することができる。もちろんアニメオリジナルカードも使用しても良い。後、ユウキはアニメオリジナルカードを使っても良い。それでいいか？」

「ああ。」

「問題ない。」

竜王「よし、それじゃあ、ユウキ、竜馬デュエルディスクを展開し

てくれ。」

竜王の言葉にユウキと竜馬はデュエルディスクを展開する

竜王「これより竜馬VSユウキのデュエルを開始する！！ライフポ  
イントは4000！！」

\* \* \* \*

ティアナ「いよいよ始まるのね」

キャロ「お兄ちゃんガンバってください！！」

早苗「勝ってください！！」

紫「前は引き分けだったけど今回はどうなるかしら」

そしてユウキを応援する？魔法少女リリカルなのはStriker  
s未来を変えるスターロード？の面子。

\* \* \* \*

「じゃあ行くぜ！！」

「来いユウキ！！」

竜馬VSユウキ

「デュエル！！」

互いのプレイヤーがデッキから五枚カードを引く。

一瞬視線を交錯させた後、ユウキはデッキからドロウする。

「先攻は貰う！！俺のターンドロウ！！」

ユウキはドローカードを確認すると驚愕した

「（何：また手札事故だ！？対策カードを入れすぎたからか！？）  
」

ユウキはこのデュエルだけのために対策カードをたくさん入れすぎて手札事故を起こしやすいのだ…

「（だが、俺が引いたカードは、《手札抹殺》）  
」

《手札抹殺》  
てふだまじさつ

通常魔法（制限カード）

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

「（これで…）魔法カード《手札抹殺》てふだまじさつを発動！」

\* \* \* \* \*

なのは「1ターン目から手札交換!?!」

1ターン目から手札交換のカードを発動する事になのは達は驚いた。

フェイト「前回も手札交換カードを発動していたけど…そんなに手札が悪いのかな？」

フェイトの言うとおり手札事故を起こさない限りは手札交換を1ターン目で行う者は少ないだろう。

\* \* \* \*

「お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドロウする。さあ竜馬全ての手札を墓地に送ってもらおうか…」

ユウキと竜馬は手札を全て墓地に送りその枚数分カードをドロウした。

その後竜馬の墓地のカードが光った。

「…なぜ墓地のカードが光っているんだ？」

「……ユウキ……悪いが、墓地からモンスター効果を発動させてもらおう。」

「何!?まさか…。」

「ああ、そのまさかだ!!墓地に送られた、《暗黒界の狩人》あんこくかい かりうと ブラウ

ウ《×2》  
《暗黒界の尖兵》あんこくかい せんべい ベージ《×2効果を発動する!!》

《暗黒界の狩人》あんこくかい かりうと ブラウ《

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1400 / 守 800

このカードが他のカードの効果によって手札から墓地に捨てられた場合、デッキからカードを1枚ドロウする。

相手のカードの効果によって捨てられた場合、さらにもう1枚ドロウする。

《暗黒界の尖兵》あんこくかい せんべい ベージ《

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1600 / 守1300

このカードが他のカードの効果によって手札から墓地に捨てられた

場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「まずブラウの効果で俺はデッキからカードを4枚ドロー!!さら  
に俺のフィールド上に《あんどくかい暗黒界の尖兵 せんべいベージ》を2体俺のフイ  
ールド上に特殊召喚する!!」

竜馬のフィールドに《あんどくかい暗黒界の尖兵 せんべいベージ》が現れた  
ちなみに攻撃表示だ

「(…まさか竜馬の手札が一気に5枚から9枚になるとは…ハンド  
アドバンテージを与えてしまったか。だが、これでいい…それくら  
いのハンドが与えれば十分だしな。さあ早くシンクロモンスターを  
出すがいい進化したアンチデッキの力を!!)」

ユウキは、手札を確認しモンスターを召喚する

「俺は、手札より《カードガンナー》を守備表示で召喚!」

《カードガンナー》

効果モンスター（制限カード）

星3 / 地属性 / 機械族 / 攻 400 / 守 400

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送  
つて発動する。

このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカード  
の枚数×500ポイントアップする。

また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送  
られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「《カードガンナー》の効果が発動する!1ターンに1度、自分の

デッキの上からカードを3枚まで墓地へ送ることが出来る！この効果で墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする！よって、攻撃力は400から攻撃力は1900になる！」

《カードガンナー》

ATK400 ATK1900

「だが、《カードガンナー》は現在守備表示のため攻撃は出来ない、それに最初のターンは攻撃は出来ないからな…俺はカードを3枚伏せてターンエンドだそしてこのターンのエンドフェイズ  
《カードガンナー》の攻撃力は元に戻る。」

《カードガンナー》

ATK1900 ATK400

ユウキLP4000

手札1

リバーズカード3

「（手札を1枚残したか…ユウキは何を考えてるんだ？とりあえず、シンクロモンスターを出してダメージを与えないとな…）俺のターンドロロー！」

竜馬はドロローしたカードを確認し手札に加える

「俺は手札から《紅魔 - 十六夜咲夜》を召喚！」



《紅魔・十六夜咲夜》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守1300

相手のドローフエイズ、スタンバイフェイズ、メインフェイズ、バトルフェイズの内1つをスキップする。その後、自分の手札を2枚選択して墓地に捨てる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードは？紅魔・レミリア・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

咲夜「魔神様、私を使うのですか？」

「ああ、レミリアを召喚したい…いけるか？」

咲夜「はい、お嬢様の為になるのでしたら。」

「ありがとう…：…いくぞ！！レベル4《暗黒界の尖兵ベージ》2体にレベル4《紅魔・十六夜咲夜》をチューニング！！」

咲夜さんは光の輪になって8つの光の球が光の輪を潜る。

\* \* \* \*

アリシア「これは！！」

フェイト「やった！最初に竜馬がシンクロ召喚をする！！」

竜馬がシンクロ召喚を行う事を喜ぶアリシア達。

はやてに至ってはクラッカーを鳴らしておりそれをシグナム達が片付けていた。

\* \* \* \*

「紅に染まりし館の主よ、我が意に従いて現れよ！其は永遠に幼き

紅い月！！シンクロ召喚！！現れよ、《紅魔・レミリア・スカーレット》  
ツト》！！！！」

《紅魔・レミリア・スカーレット》

シンクロ・効果モンスター

星12 / 血属性 / 悪魔族 / 攻2800 / 守2500

チューナー+チューナー以外の悪魔族2体以上

自分フィールド上にこのカードが存在している時、発動した魔法、罫、効果モンスターの効果の対象を自分に変更することができる。対象をとらない効果や自分フィールド上及び、相手フィールド上に適用される効果の場合、効果が無効にするか選択し無効にする場合、破壊するか破壊しないかを選択する事が出来る。

このカードが墓地に送られた時、「コウモリトークン」（悪魔族・血・星1・攻/守1000）を可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時このカードが墓地に存在し自分フィールド上に「コウモリトークン」が1体以上存在する場合、「コウモリトークン」を全て破壊し、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果を使用したターンのエンドフェイズに自分の手札を全て捨てる。

レミリア「竜馬、さっさとユウキを倒しましょう。」

「ああ…（前回のことを思い出したのか…）」

レミリアは竜馬に向けてユウキを倒そうと言っているがユウキは…

「レミリアさん…いや、レミリア！！貴様に会えて本当に嬉しいよ。今回も色々と利用してやる…覚悟しな！！（このデュエルが終わったら俺はティアと一緒にデートをするんだ！！）」

ユウキはレミリアに向けてこう言っているが竜馬は心の中でこう思った

「（……絶対にユウキ、デュエルが終わったら、必ず暴行を受けることになるな、後で、ティアナと紫に治療させるように竜王に言うておこう。」

ユウキの死亡フラグに竜馬は、後で助けようと思いいデュエルを再開した

「さらに手札から魔法カード《デュアルサモン二重召喚》を発動!!」

《デュアルサモン二重召喚》

通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

「これによりこのターン俺は通常召喚を2回まで行う事ができる。手札から《紅魔・小悪魔》を召喚!!」  
小悪魔「こあー。」

《紅魔・小悪魔》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 悪魔族 / 攻1300 / 守1500

このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することができる。

この効果を使用したターン自分はバトルフェイズを行えない。

このカードは？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？のシンクロ素材にしか使用できない。

「さらに小悪魔さんの効果発動！このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することが出来る。いでよ《キラ・トマト》。」

《キラ・トマト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 植物族 / 攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚することができる。

「さらに手札から速攻魔法カード、《吸血鬼の晩餐》を発動！！」

《吸血鬼の晩餐》

速攻魔法

自分フィールド上に《紅魔・レミア・スカーレット》が表側表示で存在している時発動する事が出来る。

自分フィールド上に存在する《キラ・トマト》を1体をリリースすることで、デッキからレベル4以下のモンスター2体を特殊召喚することが出来る。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃することはできずこのターンのエンドフェイズに破壊される。

「このカードは、レミアが存在する時発動する事が出来る。俺の

フィールド上に存在する《キラー・トマト》を1体をリリースすること、デッキからレベル4以下のモンスター2体を特殊召喚することが出来る。」

「…《キラー・トマト》をリリースだと!?!」

\* \* \* \* \*

紫「良く食べられるわね?」

《キラー・トマト》を美味しそうに食べるレミリアを見ながら紫は呟いた。

ちなみにレミリアの口の周りは《キラー・トマト》の果汁?で赤くなっている。

\* \* \* \* \*

「俺のデッキから、《ジャイアント・オーク》と《終焉の精霊》ジ・エンド・スピリッツを特殊召喚!!!」

《ジャイアント・オーク》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2200 / 守 0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

次の自分のターン終了時までこのカードの表示形式は変更できない。

《終焉の精霊》ジ・エンド・スピリッツ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 ? / 守 ?

このカードの攻撃力・守備力は、

ゲームから除外されている闇属性モンスターの数×300ポイントになる。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、ゲームから除外されている闇属性モンスターを全て墓地に戻す。

「そしてレベル4《終焉の精霊<sup>ジ・エンド・スピリッツ</sup>》とレベル4《ジャイアント・オーク》にレベル4《紅魔・小悪魔》をチューニング!!」

「行きますよ!!」

小悪魔さんはそう言って光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「大いなる図書館の主よ、我が意に従いて現れよ!其は七曜の魔女!!シンクロ召喚!!現れよ、《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》!!」

《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》

シンクロ・効果モンスター

星12 / 血属性 / 魔法使い族 / 攻2500 / 守500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、手札を1枚墓地に送り効果を発動する。

墓地に送ったカードによって以下の効果を得る。

炎属性・相手に1500ポイントのダメージを与える。

水属性・デッキからカードを2枚ドローする。

風属性・相手のフィールド上のカードを3枚まで手札に戻す。

地属性・相手の手札を2枚墓地に送る。

光属性・このターン相手は魔法・罫・モンスター効果を1度だけしか発動できない。

闇属性・フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

魔法カード・自分の墓地のカードを3枚選択しデッキに戻しシャッ

フルする。

パチュリー「呼んでくれてありがとう竜馬…それよりレミィ、いつまで食べているのよ。」

レミリア「ごめんなさい…後もう少し…。」

「(そんなに《キラール・トマト》がおいしいのか?)」

竜馬は後でレミリアに《キラール・トマト》はどんな味なのか? 聞く事にするのはまた別の話。

「小悪魔の効果でこのターンはバトルフェイズを行えない…カード3枚伏せてターンエンド。」

竜馬LP4000

手札3

リバーズカード3

\* \* \* \*

なのは「バトルフェイズは行えないけど…。」

フェイト「今竜馬のフィールド上にはシンクロモンスターが2体。」

ティアナ「(…ユウキ、どうするの?)」

キャラ「お兄ちゃん…。」

竜馬の有利な状況に喜ぶなのは達とユウキを心配そうに見るティアナとキャラもしかするとこちらでも女の戦いが起きるかもしれない…

\* \* \* \*

「俺のターンだ、ドロー!!」

ユウキはドローしたカードを確認する。

「（よし…これで準備が整った。さあ竜馬、フランを呼ぶがいい！これにより絶望を与えることができる…。）俺は《カードガンナー》の効果を発動する！1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送ることが出来る！この効果で墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする！よって、攻撃力は400から攻撃力は1900になる！」

《カードガンナー》

ATK400 ATK1900

「そしてこのターンのエンドフェイズ《カードガンナー》の攻撃力は元に戻る。」

《カードガンナー》

ATK1900 ATK400

「ターンエンドだ。」

ユウキLP4000

手札2

リバースカード3

\* \* \* \*



アリシア「どうしてユウキは攻撃力をあげたんだろう?」  
文「誰か…あ、ユウキさんの行動理由は何の意味があると思いますか?」

文が紫にマイクを向けた。

紫「そうね…理由は分かったけれどそれじゃあ竜馬の情報になってしまっわ。だからここは黙秘権よ」  
文「そんな〜」

がつくりとうなだれる文。

\* \* \* \*

「(ユウキがターンを終了するなんて…何を考えているんだ?)俺のターンドロ〜!!」

竜馬はドロ〜したカードを確認し手札に加える。

「手札から永続魔法《吸血鬼の結束》を発動!!」

《吸血鬼の結束》

永続魔法

自分フィールド上に《紅魔・レミア・スカーレット》または《紅魔・フランドール・スカーレット》が表側表示で存在する時発動する事が出来る。

このカードがフィールド上存在する限り、「コウモリトークン」と「こつもりトークン」は特殊召喚することは出来ない。

またこのカードはカード効果で破壊することができない。

「このカードが存在する限り」「コウモリトークン」「コウモリトークン」は特殊召喚することができない。」

「トークンを特殊召喚しないカード…デメリットしかないカードをなぜ発動する必要がある？何が結束なのか分からないな。」

レミリア「フフフツ…ユウキ、あなたは勘違いしているみたいね…」  
パチュリー「このカードの効果だけだと、確かにデメリットしかない…でもね、これがあれば発動する事が出来る魔法カードがあるとしたら、どうかしら？」

「…まさか、このカードがあれば発動できる特殊魔法カードか!？」

「そう、《吸血鬼の結束》が存在する時発動できるカードがある…魔法カード《吸血鬼の開放》を発動!!」

### 《吸血鬼の開放》

#### 通常魔法

自分フィールド上に《吸血鬼の結束》が存在する時発動する事が出来る。

自分のエクストラデッキから《紅魔・レミリア・スカーレット》または《紅魔・フランドール・スカーレット》を自分フィールド上に特殊召喚する。ただしこの効果での特殊召喚はシンクロ召喚として扱う。

「このカード効果で《紅魔・フランドール・スカーレット》を特殊召喚する!!」

「何だと!?(しかもこのカードでの特殊召喚はシンクロ召喚として扱う…ということは、墓地からも蘇生できるということか。)」

「来てくれ!!フランドール!!」  
フランドール「やっほ」

《紅魔・フランドール・スカーレット》

シンクロ・効果モンスター

星12/血属性/悪魔族/攻4500/守2000

チューナー+チューナー以外の悪魔族2体以上

このカードが攻撃した場合ダメージ計算後に相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

このカードが墓地に送られた時、「こもりトークン」（悪魔族・闇・星1・攻/守1000）を可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時このカードが墓地に存在し自分フィールド上に「こもりトークン」が1体以上存在する場合「こもりトークン」を全て破壊し、このカードを墓地から特殊召喚する。このカードが攻撃したターンのエンドフェイズに自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

「行くぞバトル！！フランで《カード・ガンナー》を攻撃！！」

「いっくよ〜 禁忌？クランベリートラップ？！！」

フランは、《カードガンナー》に向けて攻撃を仕掛け破壊した

「クツ…《カードガンナー》の効果により俺はデッキからカードを1枚ドロウする！！」

ユウキはデッキからカードをドロウし、手札に加えた

「（今、ユウキのフィールド上にモンスターがない…攻めるチャンスだ！！）レミリア！！ユウキにダイレクトアタック！！」

レミリア「ユウキ、覚悟はいいわね…。」

「いや、俺はまだ何もしていないけど！？」

レミリア「前回の恨みよ！！神槍？スピア・ザ・グングニル？！！」

「ぎゃあああああああ!?!」

ユウキ

LP4000 1200

\* \* \* \*

竜王「最初にダメージを与えたのは竜馬だあああ!?!?!?!」  
ティアナ「ユウキ!」

紫「所で何であなたがここにいるのよ」

竜王に対して紫は言った。

竜王「え?あつちにいると被害がありそうだから」

竜王以外「(何で審判をやってるんだろっ…:」

竜王の言葉に全員の心は一つになった。

\* \* \* \*

「ユウキこれで止めだ!!パチュリー!!ユウキにダイレクトアタック!!」

パチュリー「これで終わりよ!!日符?ロイヤルフレア?!」

パチュリーのスペルカードでの攻撃にユウキは…

「畏発動、《ダッジ・ロール》」

《ダッジ・ロール》

通常畏 アニメオリジナル

プレイヤーへのダメージを1度だけ0にする。

「プレイヤーへのダメージを1度だけ0にする!!」

ユウキの罠によりパチュリー攻撃を阻止した。

パチュリー「クツ…ユウキを倒せると思ったのに…。」

「（どういうことだ？なぜユウキがレミアアの攻撃の時に《ダツジ・ロール》のカードを使ったんだ？発動すれば、ダメージを軽減できたのに…）」

ユウキの戦術に竜馬は読めないようだ…

それに対してユウキはと言うと…

「（少しでもライフを多く削らないとな…あのカードの発動条件は俺のライフが竜馬より低くないと…）」

どうやらあるカードのためにわざとダメージを受けたそうだし…さて、ユウキは何を考えているのだろうか？

「俺は、これでターンエンドだ。」

竜馬LP4000

手札2

永続魔法《吸血鬼の結束》

リバースカード3

\* \* \* \*

早苗「危なかったですね」  
なのは「あゝ惜しい」

ほっと胸をなでおろす早苗と悔しそうなのは。  
その後ろには少しだけぼろぼろになった竜王がいる。

フェイト「でもこれでユウキの残りライフは1200、次の竜馬の  
ターンが来れば!!」  
キャロ「お兄ちゃんは負けません!!」

\* \* \* \*

「俺のターン、ドロ―!!手札から速攻魔法、《トラップ・ブース  
ター》を発動!!」

《トラップ・ブースター》  
速攻魔法 アニメオリジナル  
手札を1枚捨てて発動する。  
このターン、自分は手札から罠カード1枚を発動する事ができる。

「手札を1枚捨てることで、このターン俺は手札から罠カードを発  
動する事ができる。手札から罠カード《活路への希望》を発動!!」

《活路への希望》

通常罠 アニメオリジナル  
自分ライフポイントが相手ライフポイントよりも少ない時、発動す  
る事ができる。

1000ライフポイントを払う事で、相手と自分のライフポイント

の差1000ポイント毎に、自分のデッキからカードを1枚ドロ―する。

「相手より自分のライフが少ない時、1000ポイントのライフを払う事で、相手とのライフポイントの差1000ポイント毎に1枚のカードをドロ―する!」

ユウキ

LP1200 200

「これで俺と竜馬との差は3000以上、よって3枚のカードをドロ―!」

ユウキはデッキからカードをドロ―して手札を確認する。

\* \* \* \*

ティアナ「ユウキ!？」

フェイト「自らライフを減らしてまで、手札補充するなんて…。」  
紫「…(ユウキは何を考えているのかしら…)」

ユウキの行動にティアナは驚きフェイトは不思議そうに考えた。  
この時、シグナムと竜王が後ろで戦っていたのは別の話である。

はやて「って審判をせえや!!!」

はやてによって竜王は思いつ切りハリセンでどつかれた。

\* \* \* \*

ユウキがデッキからカードをドロ―するのをみて竜馬は考えた

「（なぜ自分のライフを減らしたんだ？ユウキの手札は4枚、《トラップ・ブースター》を発動する前は手札は4枚のはず、つまりユウキは手札交換をしたということか………嫌な予感がする、このターンは守りを固める……）罨発動！《紅魔の砦》」

### 《紅魔の砦》

通常罨

自分フィールド上に《吸血鬼の開放》が存在する時発動する事が出来る。

このターン自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘及びカード効果では破壊されない。

その後、自分の墓地から、チューナーモンスター1体を選択して守備表示で特殊召喚することが出来る。

ただしこの効果で特殊召喚したチューナーモンスターはシンクロ素材に使用することが出来ない。

「このターン俺のフィールド上に存在するモンスターは戦闘及びカード効果では破壊されない。

さらに俺の墓地からチューナーモンスター1体を選択して守備表示で特殊召喚することが出来る！！《紅魔・十六夜咲夜》を墓地から特殊召喚！！」

咲夜

DE1300

咲夜「ありがとうございます、魔神様。」

「ああ……」



竜馬と咲夜が話をしているとユウキは…

「フフフフフツ…アハハハハハハ！！」

突然ユウキが笑いはじめ竜馬はユウキに聞いた

「ユウキ、どうした？」

「…ありがとよ、竜馬ようやくこれで紅魔館のメンバーを絶望を与えることが出来る！！」

レミリア「絶望？」

「そうだ、前回のデュエル…俺はどうやって竜馬のデッキに勝てるのか？それをずっと考えてきた！！そして、たどり着いた答えはこれだ！！俺は永続罫《無限牢》むげんろうを発動する！！」

《無限牢》むげんろう

永続罫 アニメオリジナル

自分の手札を1枚捨てる事で、自分の墓地に存在するモンスター1体を自分の魔法&罫カードゾーンに魔法カード扱いとしてセットする事ができる。

このカードを墓地へ送る事で、このカードの効果で魔法&罫カードゾーンにセットしたモンスターを自分の手札に戻す事ができる。

「手札を1枚捨てる事で墓地のモンスター1枚を魔法・罫カードゾーンに魔法カード扱いとしてセットする事ができる！俺は手札3枚墓地に送りこのカードをセットする！」

ユウキは手札を1枚捨て、墓地のモンスターカードを1枚

自分の魔法・罨ゾーンにセットする。

「さらに俺が今捨てたカードは、《暗黒界の狩人 あんこくかい かりうと ブラウ》それも3枚捨てた…よってデッキからカードを3枚ドロウする…！」

\* \* \* \*

なのは「えっ！？デッキから3枚ドロウできるの…？」

フェイト「《暗黒界の狩人 あんこくかい かりうと ブラウ》の効果発動できるのかな？」

紫「でもおもしろそうだし、OKにしましょう。竜王さんそれでいいかしら？」

竜王「うーん、今ユウキのライフがピンチだけど…まあOKにしようか。」

ティアナ「（もし発動できなかつたらユウキが絶望するかも…）」

《無限牢 むげんろう》の効果で

《暗黒界の狩人 あんこくかい かりうと ブラウ》を捨てた場合デッキからカードをドロウできるのか分かりませんが、このデュエルでは、ドロウをするにしています。

間違えたらごめんなさい…

作者フレイスより

\* \* \* \*

「（ユウキが3枚のカードをドロウしたか…でも何のカードを伏せただんだ？）」

竜馬は何のカードをセットしたのかわからなかった…

おそらく《カードガンナー》の効果で墓地に送ったカードをセット

したかもしれないと考えるが…ユウキは次の行動に移る。

「さらに、《無限牢》<sup>むげんろう</sup>の第2の効果を発動！！このカードを墓地へ送り、《無限牢》<sup>むげんろう</sup>の効果でセットしたカードを手札に戻す事ができる。」

ユウキが、《無限牢》<sup>むげんろう</sup>のカードを墓地に送るとユウキのフィールド上の魔法・罫ゾーンのカード3枚がユウキの手札に戻っていった。戻したカードは、この3枚のカード…

《スカイ・コア》 アニメオリジナルカード

星1 / 風属性 / 機械族 / ATK 0 / DEF 0

このカードがカードの効果によって破壊された時、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

その後、自分のデッキ・手札・墓地から「機皇帝スキエル」「スキエルT」「スキエルA」「スキエルG」「スキエルC」をそれぞれ1体特殊召喚する。

《ワイズ・コア》 アニメオリジナルカード

星1 / 闇属性 / 機械族 / ATK 0 / DEF 0

このカードがカードの効果によって破壊された時、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

その後、自分のデッキ・手札・墓地から「機皇帝ワイゼル」「ワイゼルT」「ワイゼルA」「ワイゼルG」「ワイゼルC」をそれぞれ1体特殊召喚する。

《グラウンド・コア》 アニメオリジナルカード

星1 / 地属性 / 機械族 / ATK 0 / DEF 0

このカードがカードの効果によって破壊された時、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

その後、自分のデッキ・手札・墓地から「機皇帝グランエル」「グランエルT」「グランエルA」「グランエルG」「グランエルC」をそれぞれ1体特殊召喚する。

「（ユウキがレベル1の効果モンスターを手札に加えた…何をする気だ？）」

レミリア「ユウキ、そんなカードで私達に絶望を与えられるのかしら？」

フラン「早く遊びたい！！」

パチュリー「落ち着きなさい…。」

咲夜「ユウキ、戦う気あるのですか？」

紅魔館のメンバーがユウキに向けて話しているがそれに対してユウキはというと…

「言いたい放題言いやがって…ならば、今から俺の切り札を見せてやる！！」

そう言つてユウキは3枚のカードを竜馬に見せる。

「……3つの絶望よ、新たな最強の力を降臨せよ！畏発動！《機皇創世》！！」

#### 《機皇創世》

通常罫 アニメオリジナル

手札から《スカイ・コア》《ワイズ・コア》《グランド・コア》を1枚ずつ墓地に送り、自分の手札・デッキ・墓地から《機皇神マシニクル 3》1体を特殊召喚する。

「手札の《スカイ・コア》、《ワイズ・コア》、《グランド・コア

《を墓地に送り、墓地から《機皇神マシニクル インファイニティ・キュービック 3》を特殊召喚！

「機皇神マシニクル、だと!?!」

ユウキは墓地から《機皇神マシニクル インファイニティ・キュービック 3》を取り出しデュエルデイスクに置くそう前回の出した機皇モンスターだ。

《機皇神マシニクル インファイニティ・キュービック 3》

星12 / 光属性 / 機械族 / ATK4000 / DEF4000 アニメオリジナル

1ターンに1度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

この時、このカードの攻撃力は装備したモンスターの元々の攻撃力分アップする。

手札の「トップT」「アタックA」「ガードG」「キャリアーC」と名のついたモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの効果を得る。エンドフェイズ時にこのカードに装備されたシンクロモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。また、自分の墓地に存在する「トップT」「アタックA」「ガードG」「キャリアーC」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、このカードの破壊を無効にする事ができる。

巨大に光るそのフォルム。

白く神々しい姿をしながらも、その存在感は全てを飲み込む…

それを見たレミリア達は、

レミリア「これは…!?!」

フラン「……怖い…」

パチュリー「(フランがこれを見るのが初めてだけど…まさか怖が

るなんて…）」

咲夜「あのロボットは!？」

レミリアは前回のことを思い出し体が震えており、フランはレミアアの後ろに隠れている。

パチュリーは、咲夜の近くにいた。

\* \* \* \*

なのは「あれは!！」

文「あのモンスターですね!!今度こそ中に入った人の感想を…」

驚く観客達の中、文だけが嬉々としてカメラ等を用意していた。

\* \* \* \*

「見たか…これが俺の切り札、《機皇神マシニクル インフイニティ・キュービック 3》だ!！」  
「クツ…まさか同じモンスターが出てくるとはな…。」

竜馬はユウキが出すモンスターを見てどう攻略するか考え始めるが先にユウキが動く。

「絶望の魔人、機皇神マシニクルの力を見るがいい!1ターンに1度、シンクロモンスターを吸収することが出来る!!俺は、フランドールを選択する!!」

マシニクルはフランに向けるが…

フラン「嫌だ…あの中に入りたくない!!」

フランはレミリアにしがみつき泣いてしまう  
その様子を見たレミリアは……

レミリア「大丈夫よ、私が守ってあげるから!!」

レミリアは妹を守ろうと竜馬にアイコンタクトをどうやらマシニクルの効果で自分が受けるようだ…  
それをみた竜馬は悲しい表情になり、レミリアに向けて謝った。

「(…ごめんレミリア…)レミリアの効果を発動!!自分フィールド上にこのカードが存在している時、発動した魔法、罠、効果モンスターの効果の対象を自分に変更することができる!!」  
レミリア「さあ私を吸収しなさい!!」

レミリアはフランの前に立ち守る体制に入る。  
だが…

「無駄だ!!機皇神マシニクルの効果により、手札の機皇帝のパーツを墓地に送る事でその効果を得る。《グランエルG3》を墓地に送り、そのモンスター効果を発動!!」

ユウキが《グランエルG3》のカードを墓地に送り、マシニクルはレミリアに向けて光を放つ

レミリア「…何…この光？」

レミリアは光に当たっているが何がおこったのか…分からなかった。  
そしてマシニクルが、レミリアに光を浴びるのを終わらせると…

フラン「きゃあああああああ!?!」

なんとフランが触手に絡まれていたのだ!!

レミリア「うそでしょ…。」

咲夜「フランドールお嬢様!」

パチュリー「どうして!? マシニクルはレミィの効果で吸収されるんじゃないかったの!?!」

パチュリーはユウキに向けて言うが、ユウキは説明をはじめた

「残念だが…《グランエルG3》の効果は、1ターンに1度、相手モンスターの効果を無効にする!つまり、レミリアの効果は無効になったと言うことだ!」

「何!?!」

《グランエルG3》

効果モンスター アニメオリジナル

星3/地属性/機械族/攻 800/守2000

「と名のついたモンスターが自分フィールド上に存在しない場合、このカードを破壊する。」

自分フィールド上に存在する「」と名のついたモンスター1体が相手モンスターの攻撃対象に選択された場合、そのモンスターに装備されているシンクロモンスター1体を選択して、攻撃対象をそのシンクロモンスター1体に変更する事が出来る。

この時、装備カード扱いのシンクロモンスターはモンスターカードとしても扱う。

1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体がモンスター効果を発動した時、そのモンスター効果を無効にする。



フラン「クツ…放して!!」

必死にフランはマシニクルの触手に抵抗をするが、触手はビクともしなかった。

そして…

フラン「きゃあああああ!?!」

フランはマシニクルに吸収されてしまった。

レミリア「そんな…。」

\* \* \* \* \*

文「これはすごい!!まさかフランドール・スカーレットがあその口ポットに入りましたよ!!これはスクープです!!」

写真を撮ろうとしている文だがふと見上げるとそこには竜馬がいた。

文「えつと…何でしょうか?」

竜馬「…文?レミリアが悲しんでる時にそんな無神経な発言は控えようね?」

ゆっくりと諭すような言い方だが竜馬からは既に大量の怒気と殺気が漏れていた。

文「ひ、ひいあああああああ!!!!!!!!!!ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!!!!!!!!だから殺さないでください!!!!!!!!」

竜馬「分かったなら良いよ」

そう言って竜馬はフィールドへと戻っていった。

\* \* \* \*

「そして、マシニクルの効果により…吸収したシンクロモンスターの攻撃力分攻撃力が上がる!!」

マシニクル

ATK4000 ATK8500

「攻撃力8500…!?!」

「竜馬が発動した罨カード《紅魔の砦》の効果で…戦闘では破壊できないが、今攻撃表示のモンスターが存在する、つまり今ダメージを与えるチャンスということだ!!行くぜ、バトル!!マシニクルでレミリアを攻撃!!」

マシニクルはレミリアに向けて攻撃を仕掛ける  
だが…

「そうはさせない!!罨発動!!《紅魔の門番》!!」

《紅魔の門番》

通常罨

相手モンスターが攻撃宣言した時に発動することができる。

自分のデッキから《紅魔・紅美鈴》を墓地に送り相手モンスターからの攻撃を無効にしバトルフェイズを終了させる。

その後、デッキからカードを1枚ドロウする。

《紅魔・紅美鈴》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守2000

このカードがカード効果によって手札に加わったとき特殊召喚することができる。

ただしこの効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上のモンスターを1体破壊し手札を1枚選択し墓地に捨てる。

このカードは？紅魔・フランドール・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

「デッキから《紅魔・紅美鈴》を墓地に送ることで相手モンスターからの攻撃を無効にする！！」

竜馬は、デッキから《紅魔・紅美鈴》のカードを墓地に送るとなぜか美鈴が竜馬のフィールドに出現した

いや、2回目だが…

美鈴「えっ！？何が起こったんですか！！ってまさかこのパターンは…」

咲夜「中国逝つてきなさい。」

レミリア「ごめんなさい…。」

パチュリー「…あなたのことは忘れないわ。」

美鈴「ちよつと！？逝つてきなさいってどういう意味ですか！？後中国は言わないでください！！最後にパチュ…」

「ザ・キューブ・オブ・ディスプレイー！！！」

紅美鈴が何か言おうとしたが、マシニクルの攻撃を受けた

「きゃあああああああああ！？どうして私はこんな役なんですかー！？」

紅美鈴はマシニクルの攻撃を受け意識を失ってしまった  
これで2回目である…

「《紅魔の門番》の効果によりカードを1枚ドローする！」  
「攻撃をかわしたか…無駄なことを…カードを3枚伏せる…！」

ユウキは伏せカードをデュエルディスクの魔法・罠ゾーンのスリッ  
トに差し込む。

すると、ユウキのフィールドリバーサカード3枚が出現した。

これで終わりかと竜馬が思ったが…ユウキは機皇神マシニクルの効  
果を発動する。

「そしてエンドフェイズ！機皇神マシニクルの効果が発動！！吸収  
したシンクロモンスター1体を墓地に送る事で、そのシンクロモン  
スターの元々の攻撃力分のダメージを与える…！」

「何！？スタンバイフェイズではなくエンドフェイズだと！？」

\* \* \* \*

なのは「そんな！？この効果ダメージを受けたら…！」

フェイト「ライフが0になる…！」

はやて「竜馬君…！」

マシニクルの効果を聞き驚く観客達。

ちなみに竜馬と竜王以外誰も美鈴の心配をしていない。

\* \* \* \*

「罠発動…！！《ピケルの魔法陣》」

《ピケルの魔法陣》  
まほうじん

通常罫

このターンのエンドフェイズまで、このカードのコントローラーへのカードの効果によるダメージは0になる。

「これにより俺が受ける効果ダメージは0になる!!」

フラン「竜馬、ごめんね……」

「（フラン、すまない）」

\* \* \* \*

なのは「よかった……」

竜馬がマシニクルの効果ダメージを回避した事になのは達は胸をなでおろした。

その横で竜王は紫に酒のおつまみを作っている。

\* \* \* \*

「ふうん、ターンエンドだ。」

ユウキLP200

手札0

リバースカード3

ユウキのエンド宣言に竜馬はカードをドローする。

「俺のターン！！（今の手札じゃ…何もできないおそろく次のターンレミリアを吸収するだろう…ならば…）」

「俺はレミリアとパチュリーを守備表示に変更！！！」

レミリア

ATK2800 DEF2500

パチュリー

ATK2500 DEF500

「さらにパチュリーの効果発動する！手札の水属性モンスター、《スノーマン・イーター》を墓地に送りカードを2枚ドロウする！！！」

《スノーマンイーター》

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 0 / 守1900

このカードがリバーした時、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

「そして、カードを4枚伏せてターンエンドだ！！！」

竜馬LP4000

手札0

リバーズカード4

\* \* \* \*

はやて「手札が0で相手の場には機皇神マシニクルかあ…きついなあ」  
アリシア「竜馬…」

はやての言葉にアリシア達は祈る事しかできなかった。

\* \* \* \*

番外編・紅魔VS機皇（後書き）

（霊使い達の雑談）

竜王「連続投稿だから感想は無いな」

雪「私もお兄ちゃんとデュエルしたい！！」

竜馬「お前のデッキ俺は苦手だけどな」

竜王「創ってアレだけどお前のデッキは酷い」

雪「何だよ！！それよりお兄ちゃん、次にデュエルする時は私も呼んでね？」

竜馬「絶対に人に攻撃しないって約束できるならね」

雪「する！！するから呼んでよ！！」

竜王「…一応これを付けておけ」

雪「何これ？」

竜王「誰かを攻撃しようとしたら気絶するように設定されたりボン」

竜馬「それを付けてるんだったら大丈夫か」

雪「……………まあ、良つか。お兄ちゃんのデュエルが見れるなら」

竜王「ふう、これでひとまずは安心と。闇を狩る少年続きます」



龍馬「タイトルはどじすのんや。」

龍王「なめ。」

番外編・紅魔VS機皇？

「竜馬このデュエル、俺は絶対に勝つ!!」

「……ユウキ、どうして俺に勝つ必要がある?」

「さあな、俺に勝てたら教えてやる……さあいくぞ!!」

ユウキはデッキからカードをドローする。

「俺のターン!!手札から魔法カード《アカシックレコード》を発動!!」

《アカシックレコード》

通常魔法 アニメオリジナル

デッキからカードを2枚ドローする。

ドローしたカードがこれまで使用したカードだった場合、そのカードをゲームから除外する。

「デッキからカードを2枚ドローする。そしてドローしたカードがこれまで使用したカードだった場合、そのカードをゲームから除外する。」

\* \* \* \* \*

なのは「えっと……どういう意味なの?」

ティアナ「つまりユウキがドローしたカードがこのデュエル中に同じカードを引いた場合ゲームから除外するという意味よ。」

「はやて「簡単にいえば、竜馬とユウキが使ったカードをドローを場合ゲームから除外するんや。」

なのは「……つまりユウキが使っているカード……《カードガンナー》

を引いたらゲームから除外するという意味なの？」

なのはは頭上に？マークを出しながらも理解したらしい。

はやて「そういうことや…（でも《カードガンナー》は制限やから引く確率は0やな。」

それを苦笑しながらはやては見ていた。

\* \* \* \*

「デッキからカードを2枚でドロー！！………新しいカードだ！！」  
そう言つてユウキは竜馬にドローしたカードを見せるそのカードとは…

《オーロラ・ドロー》と《埋葬呪文の宝札》のカードだった。

《オーロラ・ドロー》

通常魔法 アニメオリジナル

手札にこのカードしか無い場合に発動する事ができる。

デッキからカードを2枚ドローする。

《埋葬呪文の宝札》

通常魔法 アニメオリジナル

自分の墓地の魔法カード3枚をゲームから除外して発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「《オーロラ・ドロー》と《埋葬呪文の宝札》か…」

竜馬はユウキが引いたカードは何なのか考えようとしたがユウキは

竜馬に向けてこう話した。

「《埋葬呪文の宝札》を発動する前にまずはレミリア、マシニクルの餌食になってもらおうか！！」

レミリア「……竜馬。」

「ああ、分かっている。」

竜馬は4枚伏せたりバースカードを見る。

「マシニクルの効果発動！！1ターンに1度、シンクロモンスターを吸収することが出来る！！俺はレミリアを選択する！！」

マシニクルは、レミリアに向けて触手を放つが…

「畏発動！！《デストラクト・ポーション》！」

《デストラクト・ポーション》

通常畏

自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

「俺のフィールド上に存在するモンスターを1体選択する選択したモンスターを破壊する！！そして破壊したモンスターの攻撃力分だけ俺のライフポイントを回復する。選択するモンスターはレミリアだ！！」

レミリア「竜馬、咲夜、パチエ、後は頼むわよ！！」

咲夜「……はい、お嬢様。」

パチユリー「まかせて、ユウキは絶対に倒すから。」

そしてレミリアは竜馬が発動した《デストラクト・ポーション》

によって、マシニクルの触手を回避した。  
その後、竜馬はレミリアの攻撃力2800ポイントのライフを回復した。

竜馬

LP4000 LP6800

「まさか、レミリアを破壊するとはな…だが竜馬、お前が発動した永続魔法《吸血鬼の結末》によってコウモリトークンは出現しない…」

「分かっている…それにこのターン、マシニクルの効果でシンクロモンスターを吸収することはできない。」

「そうだな…でも俺のターンはまだ終わっていない！！手札から魔法カード《埋葬呪文の宝札》を発動！！俺の墓地の魔法カード3枚をゲームから除外することでデッキからカードを2枚ドロウする！！」

コウキが除外したカードは、この3枚だ。

《手札抹殺》

《トラップブースター》

《アカシックレコード》

コウキはドロウしたカードを確認する。

「（よし…いいぞこれがあれば…）」

どうやらいいカードを引いたようだ…

「機皇神マシニクルの効果発動！！手札の機皇帝のパーツを墓地に

送る事で、そのモンスター効果を得る。俺は《ワイゼルA5》を墓地に送る！！」

《ワイゼルA5》

効果モンスター アニメオリジナル

星5 / 闇属性 / 機械族 / 攻2000 / 守 0

「と名のついたモンスターが自分フィールド上に存在しない場合、

このカードを破壊する。

「と名のついたモンスターが攻撃を行う時、相手の罠カードの発動と効果を無効にして破壊する事が出来る。

また、自分フィールド上に存在する「と名のついたモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値の2倍だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「《ワイゼルA5》の効果を得たマシニクルは、守備表示モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃力が超えた分の2倍の貫通ダメージを与える！！」

「（だが、俺の伏せカードは《くず鉄のかかし》）」

《くず鉄のかかし》

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

「（これで攻撃を無効にすれば…）」

竜馬はこのカードで防御しようと考えたが…

ユウキはさらに言葉を続ける。

「…竜馬、お前の伏せカードの中にマシニクルの攻撃を封じるカードがあつたとしても、無駄だ！！《ワイゼルA5》は攻撃する時、相手が発動した畏カードを無効にして破壊する効果がある！」

「何！？（これじゃあ《くず鉄のかかし》で攻撃を止めることができなない！！）」

「さて、ここでパチュリーに攻撃すれば、貫通ダメージの2倍つまり、7000ポイントのダメージを受けることになるが…これでは面白くない…だから。」

ユウキはパチュリーから咲夜へと視線を移した。

「攻撃対象は咲夜！！お前だ！！」

咲夜「ッ！？」

マシニクルは咲夜に向けて攻撃体制をとる。

「いくぞ！！《機皇神マシニクル 3（インフィニティ・キュービツク）》で咲夜を攻撃！！ザ・キューブ・オブ・デイスペアー！！」

マシニクルは咲夜に向けて攻撃を仕掛けるが…竜馬は伏せカードを発動した。

「畏発動！《くず鉄のかかし》！！相手モンスターの攻撃を無効にする！！」

竜馬が発動した畏カード《くず鉄のかかし》は咲夜に前に出てくるが…

「無駄だ！！今の機皇神マシニクルに罨カードが効かない事を忘れたのか！？墓地に送った《ワイゼルA5》の効果により、相手が発動した罨は無効となり破壊される！」

マシニクルは竜馬が発動した罨カード《くず鉄のかかし》を破壊し咲夜に向けて攻撃を仕掛ける。

だが、竜馬はユウキに向けてこう言った。

「だが、破壊されるのは1枚だけだ！」

パチュリー「竜馬、今よ！！」

「罨発動！！《ましゅっほぅぎょけっかい魔術防御結界》！」

《ましゅっほぅぎょけっかい魔術防御結界》

通常罨

自分フィールド上に、《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》が表側表示で存在するとき発動することができる。

自分フィールド上に存在するモンスターの守備力はエンドフェイズまで400ポイントアップする。

その後自分のデッキから罨カードを2枚まで自分の魔法&罨カードゾーンにセットすることができる。

この効果でセットした罨カード1枚につき500ポイントのダメージを受ける。

「パチュリーが存在するとき発動することができる！！自分フィールド上のモンスターの守備力を400ポイントアップする。」

パチュリー

DEF500 DEF900

咲夜



DEF1300 DEF1700

「その後デッキから罠カードを2枚選択し魔法・罠カードゾーンにセットする。この効果でセットしたカードの枚数×500ポイントのダメージを受ける!!」

竜馬

LP6800 LP5800

「自分のライフを削ってまで罠カードをセットしたか…だがセットしたカードはこのターン発動することができない。」

「だが、俺には伏せカードが1枚残っている!!咲夜!!」

咲夜「いつでもいいですよ!!」

「罠発動!《リベンジ・ツイン・ソウル》!」

《リベンジ・ツイン・ソウル》

通常罠 アニメオリジナル

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する。

自分の墓地に存在するシンクロモンスター2体を除外する事で、エンドフェイズ時まで、自分フィールド上に存在する攻撃対象モンスター1体の守備力は、除外したモンスターのレベルの合計×100ポイントアップする。

この時、その守備力が相手の攻撃モンスターの攻撃力を超えていれば、その相手モンスターを破壊する。

咲夜「相手モンスターが攻撃した時、墓地にあるシンクロモンスター2体を除外する事で、モンスター1体の守備力を除外したモンスターのレベルの合計の100倍アップします!」

「墓地に存在する、レベル12のフランとレベル12のレミリアを除外し、咲夜の守備力は2400ポイントアップする!!」

咲夜

DEF1700 DEF4100

「これで機皇神マシニクルの攻撃力を上回った！」

パチュリー「さらに《リベンジ・ツイン・ソウル》は、守備力が攻撃してきたモンスターの攻撃力を上回っていた場合、そのモンスターを破壊する効果を持っているわ！」

\* \* \* \*

なのは「ということは…」

フェイト「ユウキの切り札機皇神マシニクルを破壊できる！！」

はやて「さすが竜馬や！！」

紫「(……ユウキが出したモンスターは簡単には破壊できない……)」

喜ぶなのは達を見ながら紫は冷静にフィールドを見ていた。

\* \* \* \*

咲夜はマシニクルの攻撃をかわし、攻撃を仕掛ける。

咲夜「お嬢様の仇を取らせてもらうわ！！傷魂「ソウルスカルプチュア」！！」

咲夜はスペルカードでマシニクルを破壊しようと攻撃を仕掛けたが…

「舐めるな！機皇神マシニクルの効果発動！！墓地にある機皇帝のパーツを1枚除外する事で、このカードの破壊を無効にする！《グランエルG3》を除外！」

ユウキは《グランエルG3》のカードを除外すると同時にマシンクルは咲夜の攻撃を防御した。

「だが反射ダメージを受けてもらっぞ。」  
「……………ッ。」

ユウキ

LP200 LP100

\* \* \* \*

ティアナ「ユウキ!!!」  
キャロ「お兄ちゃん!!!」

ユウキのライフが残り100になった事にティアナとキャロは不安そうに叫んだ。

その横で早苗は手を組み祈っていた。

\* \* \* \*

咲夜「クツ…破壊できなかった。」  
パチュリー「大丈夫よ、次のターンで反撃するわ。」  
「ああ、だからもう少し頑張ってくれ。」

咲夜はマシンクルを破壊できずにギョツと手を握っていた。  
竜馬とパチュリーは咲夜を慰めた。

「やるな…だがこれくらいの攻撃では俺に勝てない!!カードを1枚伏せる。」

ユウキは1枚のカードを取り出しデュエルディスクの魔法・畏ゾーンのスリットに差し込む。

ユウキのフィールド上にリバーズカードが1枚出現する

これでユウキのリバーズカードは4枚

「さらに手札から魔法カード《オーロラ・ドロー》を発動」

ユウキは《オーロラ・ドロー》のカードをデュエルディスクの魔法・畏ゾーンのスリットに差し込む。

すると、ユウキのフィールドに《オーロラ・ドロー》のカードが出現した。

「手札にこのカードしか無い場合に発動する事ができる。このカード効果によりデッキからカードを2枚ドロー!!」

ユウキはデッキからカードをドローし、ドローカードを確認する。

「（……この状況ではあまりモンスターを出さないほうがいいな、ここは温存するか）ターンエンドだ。」

ユウキ

LP100

手札2

リバーズカード4

ユウキのエンド宣言で咲夜とパチュリーの守備力は元に戻った、

咲夜

DEF 4100 DEF 1300

パチュリー

DEF 900 DEF 500

\* \* \*

なのは「あと少し…」

フェイト「でも、その少しが削れない…」

ユウキのライフを見てなのは達は悔しそうにしている。

\* \* \*

「俺のターン!!」

竜馬はドローしたカードを確認する。

「（よし!!）手札から魔法カード《吸血鬼の施し》を発動!!」

《吸血鬼の施し》

通常魔法

自分のライフを半分払い発動する事が出来る。

手札が6枚になるように自分のデッキからカードをドローする。

「俺のライフを半分払うことで、手札が6枚になるようにカードをドローする!!」

竜馬

LP5800 2900

竜馬はデッキからカードを6枚ドロし手札を確認する。

「さらに罨発動！《次元渡航》！！」  
次元メンジョン・ホヤージュ

次元メンジョン・ホヤージュ  
《次元渡航》

通常罨 アニメオリジナル

ゲームから除外されている自分のシンクロモンスターを可能な限り選択して自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターのモンスター効果は無効化され、攻撃する事ができない。

また、このモンスターはエンドフェイズ時にゲームから除外される。

「除外されているシンクロモンスターを、自分フィールドに可能な限り特殊召喚する！！来てくれ！！レミリア、フラン！！」

レミリア「分かったわ！！」

フラン「……ユウキ……遊びましょ……。」 殺気を放っています。

レミリア

ATK2800

フラン

ATK4500

「この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃できず、エンドフェイズに除外される。」

フラン「えー！？ユウキと遊べないじゃない！！」

レミリア「我慢なさい、フラン。」

レミリアはフランに向けて話しかけている間ユウキは考えていた。

「モンスター効果を無効にし、攻撃できない？何を狙っている竜馬……。」

ユウキはパチュリーの効果で伏せたカードを見ているとあることに気付いた。

「！？（まさか…あのカードを伏せて…）」

ユウキは自分の伏せカードを見る。

「咲夜さんを守備表示から攻撃表示へ変更！！」

咲夜

DEF1300 ATK1900

「さらに永続罫発動！！《トラスト・チェーン》！！」

《トラスト・チェーン》

永続罫 アニメオリジナル

自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は、自分フィールド上に存在するシンクロモンスターの攻撃力の合計分アップする。

このカードを破壊する事でバトルフェイズを終了する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、シンクロモンスターは攻撃する事ができない。

「このカードは、シンクロモンスターは攻撃できないかわりエンド

フェイズまでレミアとフランとパチユリーの攻撃力を咲夜さんに加える！」

咲夜

ATK1900 ATK11700

「攻撃力…11700だと!?!」

ユウキは驚愕した、攻撃力11700という数字に…

レミア「咲夜!!頼んだわよ!!」

パチユリー「ユウキを倒しなさい。」

フラン「私の代わりにユウキと遊んでね」

咲夜「お嬢様、パチユリー様、フランドールお嬢様…分かりました!!必ずユウキを倒します!!」

\* \* \* \*

アリシア「これが決まれば!!」

はやて「竜馬の勝ちや!!」

紫「どうするの?ユウキ…」

喜ぶアリシア達と不安そうにユウキを見る紫。

\* \* \* \*

「俺は咲夜さんで、機皇神マシニクルを攻撃!!」

咲夜「ユウキ…覚悟!!」

咲夜はユウキのモンスターマシニクルに向けて攻撃を仕掛けようと



スペルカードを取り出す…  
だが、ユウキは伏せカードを発動した。

「まだわかっていないようだな。本当の絶望がいかなるものかをな  
！！畏発動！《バニシング・クライム》。」

《バニシング・クライム》

通常罠 アニメオリジナル

バトルフェイズ中にのみ発動する事ができる。

フィールド上に存在するシンクロモンスターを全てゲームから除外  
する。

この効果でゲームから除外したモンスターは、バトルフェイズ終了  
時に、モンスター効果を無効にしてフィールド上に戻る。

「このカードはバトルフェイズにのみ発動することができ、フィー  
ルド上のシンクロモンスターを全てゲームから除外する！」

「シンクロモンスターを除外するだ！？」

ユウキが発動したカードは次元の狭間になりレミリア、フラン、パ  
チユリーは…

レミリア「きゃあああああ！？」

フラン「す、吸い込まれる！？」

パチユリー「なんで私まで！？」

咲夜「お嬢様！フランドールお嬢様！パチユリー様！！」

次元の狭間に吸い込まれてしまった…

咲夜

ATK11700 ATK1900

\* \* \* \*

なのは「そんな！？咲夜さんの攻撃力がマシニクルの攻撃力より低くなつちやつたよ！！」

フェイト「竜馬…」

驚くのはと心配そうに竜馬を見るフェイト。

キャロ「やつたあ！！！！」

ティアナ「流石ユウキ！！」

そして対照的に喜ぶキャロとティアナ。

\* \* \* \*

「クツ……《トラスト・チェーン》の効果で、このカードを破壊する事でバトルフェイズを終了する！」

竜馬は《トラスト・チェーン》のカードを墓地に送り咲夜は攻撃をやめた。

咲夜「ユウキ！！お嬢様を返しなさい！！」

咲夜はユウキを見て殺気を放っている。

それに対してユウキは…

「安心しろ、竜馬がバトルフェイズを終了したことによりレミリア達は戻ってくるぞ。」

咲夜「どういふこと…？」

「《バニシング・クライム》の効果により、ゲームから除外したモンスターはバトルフェイズ終了後にモンスター効果を無効にしてフィールドに戻る!!!」

「何!? フィールドに戻るだと!?!」

次元の狭間はヒビが割れ、レミリア、フラン、パチュリーが現れた

レミリア

ATK 2800

フラン

ATK 4500

パチュリー

ATK 2500

咲夜「お嬢様、怪我はありませんか!?!」

レミリア「ええ、大丈夫よ……でも……」

フラン「…嫌だ……あの中に入るのが嫌だよ!?!」

パチュリー「……………気持ち悪い……」

\* \* \* \* \*

はやて「あかん。今フィールドにいる《紅魔・レミリア・スカーレット》と《紅魔・フランドール・スカーレット》は《バニシング・クライム》の効果で《次元渡航》ディメンジョン・ホヤージュの効果が消されている……。」

文「それってどういう意味なんですか?」

はやての言葉に文が不思議そうに尋ねる。

アリシア「竜馬の使った《次元渡航》の効果でこのターンのみ、《紅魔・レミア・スカーレット》と《紅魔・フランドール・スカーレット》を特殊召喚し、エンドフェイズに除外されるはずだった。だけど……」

はやて「ユウキが発動した《バニング・クライム》によって、除外されフィールドに戻った事により、《紅魔・レミア・スカーレット》と《紅魔・フランドール・スカーレット》はフィールドに残る。」

文「という事は!?!」

アリシア「次のターン、機皇神マシニクルによって、シンクロモンスターは吸収されてしまう……。」

なのは「そんな!?!」

はやてとアリシアの言葉になのはは驚愕の表情を浮かべた。

\* \* \* \*

「竜馬：ターンエンドを宣言するがいい！本物の絶望がどういう事なのか教えてやろう!?!」

ユウキの言葉に竜馬は手札を確認する、その後竜馬は6枚ある手札から3枚を抜き取り、デュエルディスクにセットする。

「クツ……俺はカードを3枚伏せてターンエンド!?!」

竜馬

LP2900

手札3

《吸血鬼の結束》

リバーズカード3

\* \* \* \*

フェイト「竜馬…。」

なのは「竜馬君…。」

不安そうに竜馬を見ながら手を取り合う2人。

その後ろでははやてとアリシアも手を取り合っていた。

\* \* \* \*

「俺のターン!!」

ユウキはデッキからカードをドロし、手札に加えた。

「機皇神マシニクルのモンスター効果発動!1ターンに1度シンクロモンスター1体を吸収し、その元々の攻撃力分、攻撃力をアップする!俺はフランドールを吸収する!!」

マシニクルはフランへと触手を放つフランは触手から逃れようとするが…

フラン「きゃあああああああ!?!」

フランは触手に絡まれてマシニクルに吸収されてしまった。

マシニクル

ATK4000 ATK8500

咲夜「フランドールお嬢様!!」

レミリア「ユウキ…よくもフランを!!」

レミリアはユウキに向けて殺気を放っているがユウキはかまわずデユエルを続けた

「さらに、機皇神マシニクルは手札から機皇帝のパーツを墓地へ送る事でそのモンスター効果を得る！俺は《グランエルT5》を墓地へ送り効果を発動!!」

《グランエルT5》

効果モンスター アニメオリジナル

星5/地属性/機械族/攻 500/守 2000

「と名のついたモンスターが自分フィールド上に存在しない場合、このカードを破壊する。

1ターンに1度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスター1体を装備カード扱いとして、自分フィールド上に存在する」と名のついたモンスターに装備する事が出来る。

「1ターンに1度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスターを吸収する効果を得る!!」

「シンクロモンスターを2体とも吸収するだ!!?」

竜馬はユウキの言葉に驚愕するしかなかった…

それもそうだろう、1ターンにシンクロモンスターを2体吸収するのがこれが初めてだから…

そして、マシニクルはレミリアに向けて触手を放ち

レミリア「きゃあああ!?」

咲夜「お嬢様!」

パチュリー「そんな…レミイが…」

レミリアは触手に絡まれてマシンクルに吸収されてしまった。

「そして機皇神マシンクルは吸収したシンクロモンスターの元々の攻撃力分、攻撃力をアップする!」

マシンクル

ATK8500 ATK11300

「攻撃力11300!」

「どうだ竜馬、これが俺の力だ!」

\* \* \* \*

文「こ、これはすごいです!!スカーレット姉妹がロボットの中に入りましたよ!!これはスクープです!!さっそく写真を…」

そう言った瞬間、文は動きを止め壊れた機械の様にゆっくりと竜馬の方を向いた。

竜馬は無言に無表情で冷たく文を見ているのだ。

竜馬「……………」

文「すみませんでした!!!!!!」

竜馬の顔を見た瞬間、文は眼にも止まらないスピードで土下座をした。

それを確認すると竜馬は再び前を向いた。

\* \* \* \*

ユウキは竜馬から咲夜へ視線を移した

「咲夜、よくもマシニクルを破壊しようとしたな…その借りを返させてもらう!!」

マシニクルは咲夜に向けて攻撃体制に入った。

咲夜「…クツ。」

「機皇神マシニクルで咲夜へ攻撃!!ザ・キューブ・オブ・デイス  
ペアー!!」

マシニクルは咲夜へと攻撃を仕掛るが…

「そうはさせない!!罨発動!《ドレインシールド》!!」

《ドレインシールド》

通常罨

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

「相手モンスター1体の攻撃を無効にする!」

咲夜の目の前にバリアが現れマシニクルの攻撃を封じた

咲夜「ありがとうございます…魔神様。」

「無事でよかった…咲夜さん…さらに《ドレインシールド》の効果によりそのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイント



を回復する!!」

竜馬

LP2900 LP14200

「ライフポイントが14200だと!?!」

「ユウキがマシンニクルで攻撃をするのは読んでいた…だけど、フラ  
ンだけ吸収されると思ったらまさかレミリアを吸収するなんてな…。  
」

「…だが機皇神マシンニクルの効果を忘れていないよな?機皇神マシ  
ニクルはエンドフェイズに、吸収したシンクロモンスターを墓地に  
送る事でその元々の攻撃力分のダメージを与える!!」

マシンニクルは竜馬に向けて効果ダメージを与えようとしていた

「フランドールを墓地に送り、竜馬に4500ポイントのダメージ  
を受けてもらう!!」

マシンニクル

ATK11300 ATK6800

マシンニクルは竜馬に向けて効果ダメージを与える!!

フラン「避けて!竜馬!!」

「畏発動!《虹の光》!!」

《虹の光》

通常罫

自分の墓地に《紅魔・紅美鈴》が存在するとき発動することができ  
る。

このターン自分が受ける相手の効果モンスターの効果によるダメージを0にする。

発動後、自分の墓地に存在する《紅魔・紅美鈴》を自分フィールド上に特殊召喚し、自分ライフを1500ポイント回復する。

「俺の墓地に《紅魔・紅美鈴》が存在するとき発動することができる！！このターン自分が受ける相手の効果モンスターの効果によるダメージを0にする。」

竜馬のフィールドに紅美鈴が出現する。

美鈴

ATK1900

美鈴「……………何が起こったのですか!?!」

フラン「美鈴!!止めて!!」

美鈴はフランの声に反応し見てみると、なんとフランが竜馬の所へ向かっているの確認し、驚愕した。  
もちろんマシニクルの効果ですが…

美鈴「えっ…どうして、フラン様がかっちに向かっているんですか!?!」

「説明は後でする!!まずは、フランを受け止めてくれ!!」

美鈴「は、はい!!」

美鈴はあまり状況に慣れていないのだが、なんとか美鈴はフランを受け止めた

美鈴「クツ……大丈夫ですかフラン様？」

フラン「美鈴……うわあああああん！！」

美鈴「えっ！？どうして泣いているんですか！？」

フランが泣いてしまい美鈴は動揺していた。

なぜならフランが泣くのが驚いたからだ。

さすがの竜馬も驚愕していた。

「『虹の光』の効果で俺は1500ポイントのライフを回復する。

」

竜馬

LP14200 LP15700

「ライフが15700か……ならばレミリアを墓地に送り、2800ポイントのダメージを与える！！」

「何？そんな事しても、『虹の光』の効果でダメージは無効となり、マシニクルの攻撃力が下がるだけ……。」

マシニクル

ATK6800 4000

「マシニクル、竜馬に効果ダメージを与える！！」

マシニクルは竜馬に向けて効果ダメージを再び与えるが……

「『虹の光』の効果でダメージは無効となる！！」

竜馬は『虹の光』の効果で効果ダメージは無効になり……

代わりにレミリアが美鈴の所へ向かっていた。

レミリア「美鈴！！助けて！！」  
美鈴「えっ、ええええええええ！！？」

受け止めようとしたが、フランが美鈴に抱き着いて受け止めることができず結果…

レミリア「きゃあああああああ！？」

美鈴「どうして私はこんな役ですか！！きゃあああ！？」

フラン「うわあああん怖いよ！！」 美鈴に抱き着いている。

レミリアのリアルダイレクトアタックで美鈴は気を失ってしまった。その後ユウキは竜馬へと視線を移した。

「竜馬！！いくら足掻こうともお前などに俺は倒せない事を教えてやる！畏発動！！」むげんきやうえん《無限狂宴》！！」

《無限狂宴》  
むげんきやうえん

通常畏

エンドフェイズ時、このターン自分フィールド上に存在する「」と名のついたモンスターに装備カード扱いで装備されたシンクロモンスターが墓地に存在する場合、発動する事ができる。

墓地に存在するそのシンクロモンスターを自分フィールド上に存在する「」と名のついたモンスターにそのモンスターの効果扱いで装備する。

その後、このターン自分フィールド上に存在する「」と名のついたモンスターが装備したシンクロモンスターの数×600ポイントダメージを相手ライフに与え、自分ライフを600ポイント回復する。

「このターン、機皇神マシニクルに吸収されていたシンクロモンスターが墓地にある時、機皇神マシニクルは再び墓地からそのシンクロモンスターを吸収する!!」  
「墓地から吸収するだ?!」

マシニクルは、フランとレミリアに向けて触手を放ち

レミリア「きゃあああ!?!」

フラン「もういやだー!!」

咲夜「フランドールお嬢様!!」

パチュリー「レミィ…ごめんなさい。」

美鈴「……………」 気絶中

再び触手に絡まれてマシニクルに吸収されてしまった。

「そしてこのターン、機皇神マシニクルがシンクロモンスターを吸収した数の600倍のダメージを与える!!」

\* \* \* \* \*

なのは「えーと…機皇神マシニクルが吸収したのは…何体だった?」

ティアナ「ターンの開始にシンクロモンスターを2体吸収したですよ…」

文「後、ユウキさんの畏カードによって今レミリアさんとフランさんが吸収しているいますから…」

はやて「全部で4体やな。」

なのは「でも竜馬君が発動した《虹の光》の効果で効果ダメージは無効じゃあ…」

紫「それはできないわよ。《虹の光》は効果モンスターによる効果

ダメージを無効にする。でも、ユウキが発動したのは罠による効果ダメージ…」

なのはの言葉を紫は否定した。

なのは「ということとは…竜馬君が2400ポイントのダメージを受けるとのこと!?!?」

アリシア「ユウキはダメージを大きくするために、無駄だとわかっていながらわざとシンクロモンスターを墓地に送ったんだ!?!?」

アリシアはユウキの行動理由を理解し驚いた。

\* \* \* \* \*

「喰らうがいい! 竜馬!?!?」

ユウキの罠により竜馬は効果ダメージを与えた。

「うわああああ!?!?」

竜馬

LP15700 13300

竜馬は、効果ダメージを受けたが…なんとか大丈夫のようだ。

「さらに《無限狂宴》の効果でライフポイントは600回復する。」

ユウキ

LP100 700

「機皇神マシニクルの効果発動！！吸収したシンクロモンスターの元々の攻撃力分、攻撃力をアップする！！」

機皇神マシニクル

ATK4000 11300

「攻撃力が11300に戻ったか…」

「これで、俺はターンエンド。

竜馬、次のターンで決着をつけてやる！！

ユウキ

LP700

手札2

リバーズカード2

\* \* \* \*

はやて「次のターン…このドローに全てがかかっているんやね…」  
フェイト「竜馬、頑張ってる…」

はやては静かに呟きフェイトは眼を閉じ祈っていた。

\* \* \* \*

「（今俺のライフは13300…ライフは余裕がある、だがユウキは次のターンで決着をつけると言っていた…このターンで機皇神マシニクルを倒さないと勝機はない…頼む、俺のデッキよ…答えて

くれー！)」

竜馬は怯えるように瞼を閉じ、デッキからカードをドローする……  
恐る恐る瞼を開けてドローしたカードを確認。  
カードを確認した瞬間、竜馬の瞳に歓喜の光が宿った。

「ユウキ、このターンで機皇神マシニクルを破壊する……！」

「竜馬、機皇神マシニクルは破壊耐性を持っている……破壊できるはずがない……！」

「だったらそれ証明をするまで……魔法カード《魔術破壊》を発動……！」

### 《魔術破壊》

通常魔法

自分フィールド上に《紅魔・パチユリー・ノーレッジ》が表側表示で存在するとき発動することができる。

相手フィールド上に存在する表側表示の魔法・罠カードを全て破壊する。

「パチユリーが存在するとき、相手フィールド上の表側表示の魔法・罠カードを全て破壊する……！」

\* \* \* \* \*

なのは「ということとは……」

ティアナ「ユウキが装備カードとして吸収されたシンクロモンスターは……」

フェイト「破壊される……！」

ティアナとキャロは驚いていた、この局面でそんなカードを引く事



に。

\* \* \* \*

パチュリー「今助けてあげるわレミィ！！木符「グリーンストーム」」

パチュリーが発動したスペルカードによって吸収されたフランとレミリアは触手から解放された  
よってマシニクルの攻撃力は…

機皇神マシニクル

ATK 11300 4000

「よしマシニクルの攻撃力が落ちた！！」

「だが竜馬のフィールドに機皇神マシニクルを超えるモンスターはいない。それではこの機皇神マシニクルを倒す事などできない！！戦闘で破壊するのは不可能だ！！」

「だれが戦闘で破壊するといった？」

「何？」

「俺の目的はみんなの力で機皇神マシニクルを破壊することが目的だ！！」

「みんなの力で機皇神マシニクルを破壊するだと？笑わせる、そんなことは……」

「できる！！このカードで決着をつけてやる！！手札より魔法カード《死者蘇生》を発動！！」

《死者蘇生》  
ししやんせい

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動す

る。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「これにより俺の墓地からフランを特殊召喚する!!」  
フラン「ユウキ…壊れないよね?」

フラン

ATK4500

「さらに永続罨《リビングデッドの呼び声》を発動!!」

《リビングデッドの呼び声》

永続罨（制限カード）

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。  
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「これにより、墓地からレミリアを特殊召喚する!」  
レミリア「ユウキ、今度こそ決着をつけるわ!!」

レミリア

ATK2800

「これでみんな揃ったぞ!!」

竜馬の言葉にユウキは驚愕した  
なぜなら竜馬のフィールド上には紅魔館のメンバーが揃っているから

「竜馬…何をやる気だ?」

「これを発動するためさ…魔法カード《紅魔の希望》発動!!」

### 《紅魔の希望》

#### 通常魔法

自分フィールド上に紅魔と名のついたモンスターが5体存在するとき発動することができる。

相手フィールド上のモンスターをすべて破壊し破壊したモンスター1体につき500ポイントのダメージを与える。

このカードを発動したターン、バトルフェイズは行えない。

このカードを発動した場合、相手プレイヤーは魔法・罫・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

「このカードは紅魔と名のついたモンスターが5体存在するとき発動することができ、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する!!」

「忘れたか、機皇神マシニクルは墓地の機皇帝のパーツを除外することで破壊から免れる!!」

「残念だが、相手プレイヤーは魔法・罫・効果モンスターの効果を発動する事はできない。」

「なんだと!？」

「行け!!マシニクルを破壊するんだ!!」

竜馬の掛け声で紅魔館のメンバーはマシニクルに向けて攻撃を仕掛ける!!

フラン「壊れちゃえ!!禁弾「スターボウブレイク」!!」

レミリア「これで終わりよ!!神槍「スピア・ザ・グングニル」!!」

咲夜「よくもお嬢様を…傷魂「ソウルスカルプチュア」!!」

パチュリー「これが私の力よ!!火水木金土符「賢者の石」!!」

美鈴「ZZZZZZZZZZZZZZZZZZZZ」 寝ています。

そしてユウキのマシニクルは…破壊された。

\* \* \*

早苗「そんな…」

紫「まさかマシニクルを破壊するなんて…」

アリシア「これでユウキの切り札は無くなった!!」

なのは「竜馬君の勝ちだよ!!」

早苗達は絶対に破壊されないと確信していたマシニクルが破壊された事に驚きアリシア達は破壊できないと思っていたマシニクルを破壊できたことに喜んでいた。

ティアナ「…誰もつつこまないのかしら」

竜王「いや、全員が美鈴の存在を忘れてるだけだ」

1人だけ何もせず寝ている美鈴を見ながらティアナは呟いた。  
その呟きに竜王が答えた。

\* \* \*

「…マシニクルが破壊された!？」

ユウキは驚愕するしかなかった…

なぜなら絶対に破壊できないマシニクルを竜馬が破壊したからだ。

「さらに、『紅魔の希望』の効果でユウキに500ポイントのダメージを与える!!」

「…………ツ…」

ユウキ

LP700 LP200

「《紅魔の希望》を使ったターンはバトルフェイズを行うことができな  
ない俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

竜馬

LP13300

手札0

永続魔法《吸血鬼の結束》

永続罫《リビングデッドの呼び声》

リバーズカード1

\* \* \* \*

竜王「これは決まったか？」

ティアナ・キャロ・早苗「「まだユウキお兄ちゃん(さん)が負けるとは決  
まってる無い(ません)!!」「」

竜王の呟きに三人が反応し叫んだ。  
あまりの迫力に竜王は怯んでいた。

\* \* \* \*

レミリア「ユウキ、あなたはこのデュエルが終わったら破滅の運命が待っているわ。」

「破滅の運命だと…。」

レミリア「そう、あなたを生かせないようにするための運命…逃れる術は無いわ。」

レミリアの言葉にユウキはレミリアに向けて殺気を放つ

「それはどうかな…このデュエルに勝てば俺は破滅の運命を逃れられる。」

レミリア「それでも無理ね、もう決まった事よ。」

「いや、運命は、まだ俺の手にある！！俺のターン！！」

ユウキはデッキからカードをドロウして行動に移る

「俺は、《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚！」

《サイバー・ドラゴン》

効果モンスター

星5 / 光属性 / 機械族 / 攻2100 / 守1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

「このカードは相手フィールド上にモンスターが存在し、俺のフィールド上にモンスターが存在していない場合、特殊召喚することができる！さらに《ダーク・リゾネーター》を召喚！」

《ダーク・リゾネーター》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1300 / 守 300

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

\* \* \* \*

ティアナ「これは、シンクロ召喚？」

なのは「でも竜馬のフィールド上にモンスターが5体いるよ。ライフポイントは10000以上あるから逆転はできないよ。」

紫「それはどうかしら？ユウキはまだあきらめてはいないわ。」

なのはの言葉を紫はやんわりと否定した。

はやて「でもユウキの切り札はなくなったはずやどうしてあきらめていないんや…？」

\* \* \* \*

「行くぞ！レベル5《サイバードラゴン》に、レベル3《ダーク・リゾネター》をチューニング！」

ユウキの呼びかけに、《ダーク・リゾネター》は3つ緑の輪となりその中に《サイバードラゴン》が通る

すると、《サイバードラゴン》が透き通り、5つの星となる。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！」

そしてその星が1列になりユウキはシンクロ召喚をする

「シンクロ召喚！飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！」

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

\* \* \* \*

文「《スターダスト・ドラゴン》ですか!？」

なのは「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》じゃない!？」

なのは達は《レッド・デーモンズ・ドラゴン》ではなく《スターダスト・ドラゴン》が現れた事に驚いていた。

はやて「…あそこで寝とるアレを思い切りどつきたいわあ」

美鈴を指差しながらはやては呟いた。

\* \* \* \*

「さらに、墓地に存在する《スターダスト・シャオロン》の効果を発動!！」

《スターダスト・シャオロン》

星1 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 100 / DEF 100



自分が「スターダスト・ドラゴン」のシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

「《スターダスト・ドラゴン》のシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在する《スターダスト・シャオロン》を特殊召喚できる！」

ユウキは《スターダスト・シャオロン》のカードを墓地から加えデユエルディスクに置いた

《スターダスト・シャオロン》

ATK100

「どうして、墓地に《スターダスト・シャオロン》のカードが…？」  
「《カードガンナー》の効果で墓地に送っていたのさ…！」  
「!?（まさか、マシニクルが破壊されることを予測していたのか  
ということとは……。）」

竜馬はユウキの墓地を見て気づいた

「（まさか!?!）」

「俺は墓地に存在する、《グローアップ・バルブ》の効果を発動  
!?!」

《グローアップ・バルブ》

チューナー（効果モンスター）

星1/地属性/植物族/攻 100/守 100

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「デッキの1番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。来い《グローアップ・バルブ》!!!」

《グローアップ・バルブ》

ATK100

「レベル1《グローアップ・バルブ》にレベル1《スターダスト・シャオロン》をチューニング!!!」

《グローアップ・バルブ》が1つの緑の輪となり、《スターダスト・シャオロン》がその中を通る。

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ!」

そしてその星が1列になりユウキはシンクロ召喚をする

「シンクロ召喚!希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》!」

《フォーミュラ・シンクロン》

シンクロ・チューナー(効果モンスター)

星2/光属性/機械族/攻 2000/守1500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする事ができる。

また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存

在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる

ユウキのフィールド上に出てきたのは、F1のモンスターだ。

\* \* \* \*

文「シンクロチューナー？」  
ティアナ「ユウキ、もしかして…。」

聞いた事の無い単語に文は首を傾げティアナは何かを思い出したような表情をした。

\* \* \* \*

「《フォーミュラ・シンクロン》がシンクロ召喚に成功した時俺は、デッキからカードを1枚ドロウする！」

ユウキはデッキの上のカードをドロウした

「俺が破滅の運命を向かっているなら…その運命を変えてやる!! 行くぞスターダスト!!」

ユウキの呼びかけに、《スターダスト・ドラゴン》が咆哮する。

「俺はレベル8シンクロモンスター《スターダスト・ドラゴン》にレベル2シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング!!」

《フォーミュラ・シンクロン》が二つの輪になり、《スターダスト・

ドラゴン》はその輪を潜る。  
すると周りの景色が緑色に染まった。

\* \* \* \*

なのは「これは…!?!」

はやて「シンクロモンスター同士のシンクロ召喚!?!」

アリシア「今までのシンクロ召喚とは違う…これはいったい…。」

ユウキの行ったシンクロ召喚に驚くなのは達。

しかし紫とティアナはさほど驚いていなかった。

\* \* \* \*

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光差す道となれ!」

そしてその星が一行になりユウキはシンクロ召喚をする

「シンクロ召喚!!!<sup>こいつは</sup>生来せよ! 《シユールディング・スター・ドラゴン》!  
「ゴン」!

《シユールディング・スター・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星10/風属性/ドラゴン族/攻3300/守2500

シンクロモンスターのチューナー1体+「スターダスト・ドラゴン」

以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。

フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。

相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。  
エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「《シューティング・スター・ドラゴン》だと!？」

竜馬は驚愕した…

もちろん会場の観客は驚いていた

しかし紫とティアナは驚いてはいなかった。

前回ユウキは、紫とティアナにこのモンスターのことを教えており、次のデュエルこのモンスターを出すと…

そう言っていたことを思い出し驚かなかったのだ。

\* \* \* \*

ティアナ「これがユウキに教えてもらった、モンスター。」  
紫「綺麗ね。」

ティアナと紫は《シューティング・スター・ドラゴン》の美しさに見惚れていた。

それはなのは達も同じで全員が《シューティング・スター・ドラゴン》を見ていた。

\* \* \* \*

「でも攻撃力は3300、ライフは13300ある。戦闘ダメージは問題ない!!」

「それはどうかな？」

「何…?」

「《シユールディング・スター・ドラゴン》の効果発動!1ターンに1度、デッキの上からカードを5枚確認し、その中のチューナーモンスターの数だけ攻撃する事ができる!」

「(つまり、複数回攻撃か。)」

ユウキはデッキの上に手を置き瞼を閉じていた。

「(破滅の運命を俺は変える……だから、今この時に!!)」

ユウキはデッキからカードをドローしドローしたカードを言う。

「1枚目、チューナーモンスター《ジャンク・シンクロン》

《ジャンク・シンクロン》

チューナー(効果モンスター)

星3/闇属性/戦士族/攻1300/守 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。  
この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

ユウキは2枚目のカードをドローする

「2枚目、チューナーモンスター《デブリ・ドラゴン》」

《デブリ・ドラゴン》

チューナー(効果モンスター)

星4/風属性/ドラゴン族/攻1000/守2000

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を

攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。  
このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

また、他のシンクロ素材モンスターはレベル4以外のモンスターでなければならない

ユウキは3枚目のカードをドローする

「3枚目、チューナーモンスター《ニトロ・シンクロン》」

《ニトロ・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 炎属性 / 機械族 / 攻 300 / 守 100

このカードが「ニトロ」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

ユウキは4枚目のカードをドローする

「4枚目、チューナーモンスター《ロード・シンクロン》」

《ロード・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1600 / 守 800

このカードを「ロード・ウォリアー」以外のシンクロ素材とする場合、このカードのレベルを2つ下げたレベルとして扱う。

このカードが攻撃した場合、そのダメージステップ終了時にこのカードのレベルをエンドフェイズ時まで1つ上げる。

ユウキが4枚目がチューナーだと分かった時レミリアたちは体が震えていた

レミリア「これは…。」

咲夜「私たちは破壊確定ですね…っていつかいつまで寝ているのよ！！」

美鈴「痛ッ！？」

まだ美鈴は寝ていた、どんな状況でも寝れるのがすごいと竜王は思った。

「竜馬！これが最後のドローだ！」

ユウキは最後の5枚目のカードをドローして竜馬に見せる

「5枚目、チューナーモンスター《ハイパー・シンクロン》」

《ハイパー・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1600 / 守 800

このカードがドラゴン族モンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃力は800ポイントアップし、エンドフェイズ時にゲームから除外される。

「…合計5回の連続攻撃だと！？」

その言葉を聞くと竜馬は驚愕した

「行け！《シューティング・スター・ドラゴン》、スターダスト・



ミラージュ!!」

5色5影に浮かぶ《シューティング・スター・ドラゴン》

「1回目のバトルはレミリア!!貴様だ!!」

《シューティング・スター・ドラゴン》はレミリアへと攻撃を仕掛けるだが…竜馬は伏せカードを発動した。

レミリア「竜馬……今よ!!」

「ユウキこれで終わらせてやる!!畏発動!!《地縛霊の誘い》」

《地縛霊の誘い》

通常罫

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。攻撃モンスターの攻撃対象は俺が決める!!フラン遊んで来い!!」

「相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。攻撃モンスターの攻撃対象は俺が決める!!フラン遊んで来い!!」

\* \* \* \* \*

なのは「やった!!《シューティング・スター・ドラゴン》の攻撃力は3300。」

フェイト「それに対してフランの攻撃力は4500。」

はやて「このバトルが成立すれば竜馬の勝ちや!!」

ティアナ「それはどうかしら?ユウキの伏せカードはあと2枚残っているわ。」

アリシア「もしかしてあの伏せカードは!?!」

ティアナの言葉にアリシア達は伏せカードの存在を思い出した。

\* \* \*

レミリア「ユウキ!!これで終わりよ!!」

「レミリア、俺はあきらめない!!運命を変えてやる!!罠カード2枚オープン!《シンクロ・ストライカー・ユニット》!!」

《シンクロ・ストライカー・ユニット》

通常罠 アニメオリジナル

発動後このカードは攻撃力1000ポイントアップの装備カードとなり、自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体に装備する。

また、装備モンスターの攻撃力は自分のターンのエンドフェイズ毎に800ポイントダウンする。

「このカードは、シンクロモンスターの装備カードとなり、攻撃力を1000ポイントアップする!!俺が発動した《シンクロ・ストライカー・ユニット》の枚数は2枚、よって《シューティング・スター・ドラゴン》の攻撃力は2000ポイントアップする!!」

《シューティング・スター・ドラゴン》

ATK3300 5300

「攻撃力5300だと!?!」

レミリア「そんな...」

レミリアと竜馬は驚愕したなぜならフランが、戦闘で破壊されるの

が初めてだからだ。

「《シユールディング・スター・ドラゴン》……フランを攻撃……！」

《シユールディング・スター・ドラゴン》はフランの攻撃をかわし、  
そして……

フラン「きゃあああああああ……！」

フランは戦闘破壊された。

「フラン攻撃力は4500よって竜馬に800ポイント戦闘ダメージを受けてもらう……！」

「クツ…………。」

竜馬

LP13300 12500

「まだ俺のバトルフェイズ終了していないぜ……《シユールディング・スター・ドラゴン》の攻撃は後4回残っている……！」

\* \* \* \*

なのは「えー!?!」

はやて「そんなのありか!?!」

《シユールディング・スター・ドラゴン》の効果聞きなのは達は驚いた。

ティアナ「今、竜馬のフィールドに伏せカードはない……！」

紫「さらに永続魔法《吸血鬼の結束》の効果でトークンは特殊召喚することはできないわ。」

ティアナ「《シューティング・スター・ドラゴン》の攻撃力は5300ということは…。」

紫「連続攻撃でこのターンで竜馬に大きくダメージを与えられるわ！！」

\* \* \*

「2回目のバトル！！レミリアを攻撃だ！！」

《シューティング・スター・ドラゴン》は、レミリアに向けて攻撃を仕掛け破壊した。

レミリア「きゃあああああ！？」

パチュリー「レミィ！！」

咲夜「お嬢様！！」

美鈴「そんな…。」

「レミリア…。」

竜馬

LP12500 LP10000

竜馬はギュツと手を握りしめ悔しがっていた。

だがユウキの攻撃は終わっていない…

「3回目のバトル！！パチュリーを攻撃！！」

《シューティング・スター・ドラゴン》は、パチュリーに向けて攻撃を仕掛け破壊した。

パチユリー「きゃあああああああああ!?!」

咲夜「パチユリー様!?!」

「グッ  
」

竜馬

LP10000 LP7200

「4回目のバトル!?!中国を攻撃だ!?!」

《シューティング・スター・ドラゴン》は、美鈴に向けて攻撃を仕掛け破壊した。

美鈴「だから私は中国じゃありません… きゃあああああ!?!」

咲夜「…………美鈴!?!」

「ライフが…………」

竜馬

LP7200 LP3800

「咲夜、前回俺にダイレクトアタックをしたな!?!あの攻撃は痛かった…今回は俺の痛みを味わうがいい!?!5回目のバトル!?!《シューティング・スター・ドラゴン》で咲夜を攻撃!?!」

《シューティング・スター・ドラゴン》は咲夜に向けて攻撃を仕掛け破壊した。

咲夜「申し訳ございません…魔神様…………」

「咲夜……………」

竜馬

LP 3800    LP 400

\* \* \* \*

なのは「そんな竜馬のライフが…。」  
フェイト「たった1ターンで。」  
はやて「400になるなんて…。」

ユウキの攻撃によって竜馬のライフが一気に減った事なのは達は驚きの余り言葉を失っていた。

アリシア「戦闘ダメージの合計は12900…ユウキがここまでして戦闘ダメージを与えるなんて。」  
紫「これで勝負は分からなくなったわね。」  
ティアナ「ユウキ…頑張って…。」

\* \* \* \*

「そして、《シューティング・スター・ドラゴン》の攻撃力は俺のエンドフェイズ毎に800ポイントずつダウンする。カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

《シューティング・スター・ドラゴン》

ATK 5300    3700

ユウキ

LP 200

手札 0

《シンクロ・ストライカー・ユニット》×2

リバーズカード2

\* \* \* \*

なのは「どうしよう…竜馬君のフィールド上にモンスターがない  
！！」

フェイト「それに、手札が0…伏せカードがない。」

はやて「でも、竜馬はあきらめない…。」

はやては静かにそう言った。

それに続くようになのは達も竜馬を見た。

\* \* \* \*

「これが俺の運命を切り開く力だ！破滅の運命を打ち砕いた！」

「…ユウキ、破滅の運命は、デュエルのことじゃないと思うが…。」

竜馬の言葉にユウキは首を傾げる

「どういふことだ？」

「…デュエルが終わったらわかると思うぞ。」

「…竜馬、お前のターンだ。」

「…俺のターンドロー！！手札から魔法カード《紅き月の解放》  
を発動！！」

《紅き月の解放》

通常魔法

手札にこのカードしか存在せず、自分のフィールド上に、《吸血鬼の結末》しか存在しない時発動することができる。

自分のデッキから、《フォーチュン・オブ・スカーレット・ムーン運命の紅き月》

を墓地に送り、自分のデッキ、または墓地から《紅魔・レミリア・スカーレットノムーン》を

召喚条件無視して特殊召喚する。

このとき相手フィールド上にモンスターが存在するときこのターンのエンドフェイズまで相手が発動した効果モンスターの効果を無効する。

「このカードは手札にこのカードしか存在せず、自分のフィールド上に、《吸血鬼の結末》しか存在しない時発動することができる。

俺のデッキから、《フォーチュン・オブ・スカーレット・ムーン運命の紅き月》を墓地に送ることで、《紅魔・

レミリア・スカーレットノムーン》を召喚条件無視して特殊召喚する！！」

「レミリアを復活させるカードだと!？」

フォーチュン・オブ・スカーレット・ムーン  
《運命の紅き月》

通常罫

自分フィールド上に《紅魔・レミリア・スカーレット》が表側表示で存在する時、自分フィールド上にセットされているカードと自分の手札を全て除外し発動する事が出来る。

手札に《紅魔・レミリア・スカーレットノムーン》がある場合手札を除外しなくても良い。

自分フィールド上の《紅魔・レミリア・スカーレット》を墓地に送り自分の手札、デッキ、墓地から《紅魔・レミリア・スカーレットノムーン》を特殊召喚する。

このカードは相手の魔法、罫、モンスター効果によって無効化されない。



「来てくれ！！レミリア！！」

そして、竜馬のフィールド上に体型が変化したレミリアが現れた。具体的な変化をあげるとなるとまず背が伸び156？程になった。そして女性的な体型へとなっている。

《紅魔・レミリア・スカーレットノムーン》

効果モンスター

星12/血属性/悪魔族/攻4000/守3500

このカードは《フォーチュン・オブ・スカーレット・ムーン運命の紅き月》の効果でのみ特殊召喚できる。

1ターンに1度相手のドローフェイズ、スタンバイフェイズ、メイ  
ンフェイズ、バトルフェイズの内1つをスキップする事が出来る。  
自分フィールド上にこのカードが存在している時、発動した魔法、  
罫、効果モンスターの効果の発動を無効にするかしないかを選択で  
き、効果の対象を自分が選択できる。

このカードがフィールドから離れる時、必ず手札に戻り自分の墓地  
から？紅魔-？と名の付いたシンクロモンスターを墓地から3体ま  
で特殊召喚しさらに墓地から《フォーチュン・オブ・スカーレット・ムーン運命の紅き月》を手札に加える。

レミリア「ユウキ、これで終わらせてあげるわ…。」

「……お断りだ、俺はまだ負けるわけにはいかないんでね。」

レミリア「そう…なら、ここで決着をつけてあげるわ！！竜馬！！」

「ユウキ、これがラストバトルだ！！レミリアで《シューティング・  
スター・ドラゴン》を攻撃！！」

レミリアはスペルカードを発動し《シューティング・スター・ドラ  
ゴン》へと攻撃を仕掛ける。

だがユウキは《シューティング・スター・ドラゴン》の効果を発動  
する。

「《シユールディング・スター・ドラゴン》の効果発動！！相手モンスターへの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる！！」

《シユールディング・スター・ドラゴン》はレミアの攻撃を避けようとゲームから除外しようとしたが…

除外ができなかった。

「どうしてゲームから除外しないんだ!？」

「《紅き月の解放》の効果により相手はモンスター効果を発動することはできない!!」

「なんだと!？」

\* \* \* \*

なのは「やったー!!今度こそ竜馬君の勝ちだ!!」

ティアナ「(でもユウキには伏せカードが…)」

喜ぶなのは、そしてユウキのフィールドを気にするティアナ。

\* \* \* \*

「(…このデュエルで負けたら俺は…破滅……そうはさせない!!) 畏発動《ショック・ウェーブ》」

《ショック・ウェーブ》

通常畏 アニメオリジナル

自分のライフポイントが相手のライフポイントよりも少ない場合のみ発動する事ができる。

フィールド上に存在するモンスターを1体を破壊する。お互いのプ

レイヤーはそのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。

「俺のライフが相手のライフポイントよりも少ない時発動する事が出来る！！フィールド上に存在するモンスターを1体を破壊し、お互いのプレイヤーはそのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける！！！」

レミリア「そうはさせないわ！！！」

「このデュエルだけは絶対に引き分けにはさせない！！レミリアの効果発動！！相手が発動した魔法、罠、モンスター効果の発動を無効にする！！！」

ユウキが引き分けを狙おうとしたカードが…

レミリアの効果によって破壊されてしまった。

レミリア「これで。終わりよユウキ！！！」

「だが、破壊できるのは1枚だけ！！！」

「！？（しまったユウキにはもう一枚の伏せカードが）」

竜馬はユウキの伏せカードに気付くがもう遅い…

ユウキは伏せカードを発動する。

「俺の狙いはこれだ！！罠発動！！《破壊輪》！！！」

《破壊輪》はかいりん

通常罠（禁止カード）

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊し、お互いにその攻撃力分のダメージを受ける。

「《破壊輪》はかいりんはフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊し、お互いにその攻撃力分のダメージを受ける。」

レミリア「！？まさか…」

ユウキが発動した《破壊輪<sup>はかいりん</sup>》はレミリアに向かっていた。

「《破壊輪<sup>はかいりん</sup>》の対象はレミリア貴様だ！！」

そして《破壊輪<sup>はかいりん</sup>》が爆発して…

レミリアは破壊されユウキと竜馬のライフが0になった。

レミリア「きゃあああああああ！？」

「うわあああああああああ！？」

竜馬

LP400 LP0

「うわあああああああああ！？」

ユウキ

LP200 LP0

\* \* \*

竜王「終了！！結果は引き分け<sup>ドロー</sup>！！！！！！！！」

竜馬「またかよ…」

デュエルの結果を竜馬とユウキは残念そうに聞いていた。

ユウキ「だが俺は負けなかった！！つまり破滅の運命を免れたんだ

「……」

竜馬「……残念ながらそれは無理なようだぞ」

竜馬の言葉にユウキは振り向いた。

そこには頭上に怒りマークを大量に浮かべた紅魔館組がいた。

レミリア「さあユウキ…破滅の運命に絶望しなさい……」

ユウキ「あれ…？……だが断る……！！！」

そう言ってユウキは逃げ出した！！

しかしレミリア（成長したまま）は回り込んだ。

竜王「うわ…一応この空間自体にギャグ補正がかかってるから死にはしないけど……」

竜馬「げっ…？禁忌　フォーオブアカインド？を使ってるぞ」

ユウキ「m j t y 5 え v d x て s x w g x て z r g z ヴ k y つ h y  
v げ d え い j l j m き h j f x d ざ f s h f j y g j g o b g ぞ え あ、  
い y h f h t d s r r x r d y h c ヴ え あ z r 3 q ふ あ ……！！！！！！  
……！！！」

紅魔館組の攻撃によってグチャグチャになるユウキ。（ギャグ補正のため見た目は無傷）

あまりにも衝撃的な光景なため18歳未満は全員強制退場済み。

竜王「そろそろか…竜馬、ティアナの口の中に？治癒の焰？を待機させておいて」

竜馬「お、おう」

そう言って竜王は紅魔館組に近づいて行った。

紅魔館組は最初は無視していたがしばらくすると全員が竜王の後を

追って歩いて行つた。

竜馬「何を言つたんだ？まあ良いか、？治癒の焰？」

そう言つて竜馬は指先に？治癒の焰？を出現させた。

竜馬「ティアナ、これを口に含んでくれ」

ティアナ「これを？分かつたわ」

そう言つて？治癒の焰？をティアナは口に含んだ。

竜王「準備はオツケー それじゃあティアナ、教えた通りに」

ティアナ「／／／／／／／／」

いつの間にか戻つて来ていた竜王の言葉にティアナは赤面した。

竜王は暗に？治癒の焰？をユウキに口移ししろと言っているのだ。

竜馬「…俺はあっちに行つてるな？」

竜王「それじゃあごゆっくり」

そう言つて部屋から出ていく竜馬と竜王。

部屋に残つたのはユウキとティアナだけになった。

ティアナ「／／／／／／／／！！！！！！！」

その頃、別の部屋。

竜王「さてさて、どうなる事やら」

竜馬「お前も手伝えや！！」



番外編・紅魔VS機皇？（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想ありがとうございます。

ルシフェル様、月光閃火様、ユタ様、フレイス様、遊戯王様、妖気様、空刀様感想ありがとうございます。

竜馬「後半のラブコメは何だよ!？」

竜王「フレイス様に頼まれた。それと明日は今日の続きに近い話かな」

「こんにちは／＼／＼／」

竜王「フレイス様の所より…と言うよりも本文の所から赤面したティアナとユウキが来ました」

ユウキ「誰のせいで赤面してると!?!」

竜馬「ティアナじゃないのか？」

ティアナ「あれは竜王さんに教えてもらっただんです!?!?!」

竜王「気にすんなよ」

（?勉強?の拷問部屋）

「あああああああ!?!?!?!?!?!」



西村「ほう、自分からここに転移してくるとはこいつ同様見所がある」

蛇川「なっ！？空刀！？」

空刀「強制転移させられた…」

来也「帰りたい…」

修太「いつの間にかフランがいないし…」

フランは召喚されたため戻って来ない

〈雑談所〉

竜王「あれ？勉強？の拷問部屋に転移反応？えっと…空刀様だな。西村がいるから救出は無理…」と

明久「鉄人はいつまで補習するんだろ？」

美波「ここはまだ平和よね？」

美琴「そう信じたいわね…」

竜王「さて、次回の本編にもティアナ達が出るから早めに寝ておけよ〜」

竜馬「俺も出るのか？」

雪「私は？」

竜王「どっちも出るよ 闇を狩る少年続きます」

雪「とりあえず私のデッキはいつ出るの？」

竜馬「竜王に聞いてくれ」

竜王「本編で出るまで待て」

番外編・紅魔VS機皇　そして…

side 魔神竜馬

あゝ昨日は面白かった。

昨日のユウキとのデュエルを思い出しながら俺は歩いていた。

「ん？あれは…ユウキとティアナ？」

「デートかな？」

俺の呟きに雪が答えた。

「いつからいた？」

「朝お兄ちゃんが部屋から出てきてからずっと」

何でこいつ気配消せるんだろう…

俺は半ばあきらめて歩き始めた。

「どこに行くの？」

「読む物が無くなったから新しい本を探しにね」

雪の問いに俺は答えた。

そう言えば…

「雪、お前のデッキはどうしたんだ？」

「ちゃんと持ってるよ、お兄ちゃんと遊ぶためだもん」

そう言って雪はデッキケースを取り出した。

こいつのデッキの一軍が物凄くめんどくさかったなあ…



俺が喋っている途中でティアナは俺の手を掴み歩き始めてしまった。

side out

side 竜王

「良い感じに青春だねえ」

物陰に隠れながら俺は呟いた。

その後ろでは強風が起こったり物が消えたりしている。

「何やってるんだ？竜王」

「んお？竜馬か……重く無いの？」

声がかけられたので振り向くとそこには竜馬がいた。

「気にしたら負けかなと思ってね」

「ああそう」

竜馬の背中には雪がしがみついていた。

実際竜馬の髪が長いので後ろからは見えないうつが前からは肩に手が乗っているのが分かるのである。

「で？何やってるんだ？」

「ユウキとティアナのデートを追跡中」

竜馬の問いに俺が答えると竜馬は呆れていた。

「あ……まあ、頑張れ」

「おう、じゃあな」

そう言って俺達は追跡を再開した。

さあ、次はどこに行くんだ？

「あれは……」

「遊園地……ね」

ユウキとティアナを追跡すると2人は遊園地に入っただけで、  
そう言えばあつたなあ。

「そんじゃあ紫、追跡するからすき間を通して遊園地の中に入れて  
くれ」

「入園料を払いなさいよ……」

俺の言葉に呆れながらも紫はすき間を作ってくれた。  
だって昨日ティアナにここの無料券あげちゃったし……

「あまり金は使いたく無いじゃん」

「まあ、それは分かりますけど」

さて、2人は最初に何に乗るんだ？

ユウキとティアナが最初に向かったのはジェットコースターだった。

「初っ端からあれかあ……」

俺はジェットコースター乗り場に向かう2人を見ながら呟いた。

side out

sideティアナ・ランスター

「だ、大丈夫？ユウキ」

「あ、ああ……」

予想外だったわ。

私は10回転するジェットコースターを見ながら思った。

「まさかあんな位置で止まるなんて」

「血が上った…」

10回転している途中で逆さまに停止するなんて誰が予想できるのよ。

そのせいでユウキは気分が悪そうだ。

「私ジュース買ってくるね？」

「頼む…」

そう言っただけで私はジュースを買いに自販機に向かった。

side out

side ユウキ・ルナミス

うつつ…乗り物に弱い事を忘れていた。

ティアがジュースを買いに行っている内に酔い止めの薬を飲んでおこう。

俺はゆっくりとポケットから酔い止めの薬を取り出し近くの水道に行き薬を飲んだ。

「ふう……これでひとまずは安心か。にしてもティア遅いな」

もしかしてナンパされてたりしてな。

と俺が思いながら自販機に向かうと本当にティアがナンパされていた。

side out

side 竜王

「あ、ティアナがナンパされてる所にユウキが向かった」  
「でもナンパしている男達はユウキを無視しているわね」

うくん、とりあえずあのナンパ男達は肅清しないとな。

そう思い俺は？黄昏の弓器・ラグナロク？を取り出した。

「…何をするつもりですか？」

「ナンパ男達を撃ち抜く」

俺がそう言つと早苗と紫が物凄い勢いで止めてきた。

「せめて当たらないように威嚇にきなさいよ」

「ひ、人殺しは駄目ですよ」

しょうがないなあ…

そう思いながら俺は矢を放った。

矢は飛んでいる途中で無数に分裂しナンパ男達の周囲に突き刺さった。

「威嚇じゃ無いじゃない!!!」

「だっ!？」

紫に思い切りどつかれた。

ちなみにナンパ男達は恐怖の余り気絶している。

「つとやべ、急いで移動するぞ」

「何だよ?」

俺の言葉に紫は意味が分からないという表情をした。



「狙撃手の心得その一、狙撃は見つからない内が華。だ」  
「そんなのがあるんですか」

早苗は驚きながらもついてきた。  
紫のすき間に入っていれば楽だけどさあ。

「さくって次はどうなるかな？」

そんなこんなで俺達3人はユウキとティアナのデートを追跡し続けた。

side out

side 魔神竜馬

「……何かあったのか？」

「良く分からない、喧嘩を吹っ掛けてくる奴がいたらいきなりその周囲に矢が突き刺さって檻になったり、スカイシップが暴走して飛んできたと思ったら俺達の目の前で真っ二つに両断されたり…」

夕方になりユウキとティアナに遭遇したので尋ねるとそんな言葉が帰ってきた。

…… 竜王達だな。

「お前こそそれは良いのか？」

「気にすんな、俺は諦めてる」

ユウキの言うそれとは未だに背中に張り付いている雪の事だろう。  
本当にこいつ一日中張り付いてたよ…

「そうか、お前が気にしないならまあ良いけど」

「おう、そうしてくれ。あ、晩飯食ってく？」

ここで言う晩飯とは後書きに来るかどうかという問いです（by竜王）

俺の言葉にユウキとティアナは一度顔を見合わせた。

「そつだな、お邪魔するよ」

「お邪魔します」

そして俺達は帰路についた。

番外編・紅魔VS機皇　そして…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、フレイス様、妖気様、銃王　海さん、バラランシヤ様、ルシフェル様、空刀様、月光閃火様感想ありがとうございます。

銃王　海さんより無限に入るカードケース、こちらから西村先生を呼べるケータイを、

空刀様よりフェンリル（形状　ダガー）を、  
月光閃火様より特製惚れ薬が投げ込まれて、

いただきました。

竜王「さあて、よっとー!!」　特製惚れ薬をキャッチしていく

竜馬「使うのか?」

竜王「どうだろ?俺ってラブコメを書くのは苦手だしバトルの方が書いていて楽しい」

ユウキ「あれ?何で俺はこっちにいるんだ?」

竜馬「さあ?ユウキだけここに連れて来いって言われただけだし」

竜王「それじゃあごゆるり…」

ユウキ「へ!?ぎゃああああああああああああああああああああ



「勉強？の拷問部屋」

西村「何をやっている！！」

来也「あだあ！？」 頭を殴られる

「くうふう…天は我を見離した！！！！」

（雑談所）

「こんにちは」

竜王「おお、フレイス様の所より早苗とキャラが来ました」

キャラ「…私もお兄ちゃんと出かけたかったです」

竜馬「あ、じゃあこれあげる」 キャロに遊園地の券を渡す

竜王「あれ？転移反応？勉強？の拷問部屋に銃王 海さんの所からキュルケ・こなた・日向秀樹が飛ばされたのか」

「こんにちは」

竜王「あ、銃王 海さんの所からルイズ・涼宮ハルヒ・柊かがみ・園原杏理・立華奏・音無結弦・キョン・柊つかさ・龍ヶ峰帝人・紀田正臣・平賀才人が来ました」

竜馬「多いな！！」

雪「お兄ちゃんは見ちゃ駄目」

ハルヒ「何よあんたに妹なんていたの？」

竜王「あ、女性は近づかない方が身のためだぞ。竜馬に近づくと女性は攻撃対象らしいから」

「？勉強？の拷問部屋」

西村「何だあ！？」

「避けるとは流石だな！俺と戦え！！」

来也「（今の内に逃げられるか？）」

西村「仕方が無い。任せてもよろしいですか？」

咲夜「大丈夫です。蟻の子一匹逃がしません」

「フランの部屋」

フラン「ヒマだな」

「じゃあ俺と遊ぼう」

フラン「？本当？」

「ああ」

フラン「やったあ！！」

「雑談所」

竜王「ん？さらに転移反応？えっと？勉強？の拷問部屋に月光閃火様の所の輝刃でフランの部屋に月光閃火様だな。あの2人なら大丈夫

夫か」

ユウキ「死ぬかと思った」

竜王「あれ？もう復活したの？」

竜馬「俺が治したんだよ」

竜王「ふうん、じゃあ締めて」

ユウキ「軽いな…闇を狩る少年続くぞ!!」

かがみ「いつも通りの雰囲気ね…」

つかさ「あはは、そうだね」

**番外編・リオラとデュエル！！（前書き）**

大分遅れましたがバラランシャ様の所のリオラとのデュエルです。

本当はユウキの前に投稿するはずだったのに…（泣）

それではどうぞ。



## 番外編・リオラとデュエル！！

side 魔神竜馬

「…何でまたお前がいるんだ」

俺は目の前の人物にそう言った。

「気にすんなってそんな事は、それに番外編だし」

「いきなりメタ発言すんな竜王！！！」

目の前の人物：竜王のセリフに俺は怒鳴った。  
「…か今回は何なんだ？」

「それじゃあゲストの紹介です！！バラランシャ様の？神に何度も殺された青年？よりリオラ・エスペラ君だ！！」

「よろしくお願いします」

竜王の言葉の後に煙が巻き起こりその中からリオラが現れた。  
そう言えば何故かここって紅魔館っぽいな…

「それじゃあ竜馬、紅魔館組のデッキを装備してくれ」

「紅魔館組？って事はデュエルだな？無々、能力発動。形状は決闘<sup>デュエル</sup>」  
『了解しました。能力発動』

俺の言葉に無々はデュエルディスクに変化した。  
リオラも既にデュエルディスクを装着している。

「それじゃあよろしく」

「楽しいデュエルにしような！！」

「「デュエル!!!」」

side out

side 第3者視点

竜馬 LP8000 VS リオラ LP8000

「まずは僕からいきます!!!ドロー!!!モンスターを一枚セットしてターン終了です」

リオラ 手札5 LP8000

リオラのフィールドにカードが伏せられた。

「俺のターン!ドロー!!!手札から?暗黒界の雷?を発動!!!俺はリオラの場のセットモンスターを破壊する!!!」

「え!?!」

破壊されたモンスターはキラー・トマトだった。

キラー・トマト ATK/1400 DEF/1100

「くっ!戦闘以外で破壊された?キラー・トマト?の効果は発動しない」

「俺は?暗黒界の雷?の効果で手札から?暗黒界の尖兵ベージ?を墓地に捨てる。?暗黒界の尖兵ベージ?の効果を発動。このカードが効果によって墓地に捨てられた時フィールドに特殊召喚できる」

リオラは悔しそうに竜馬を見た。

竜馬のフィールドに槍をもった悪魔が現れた。

暗黒界の尖兵ベージ ATK/1600 DEF/1300

「さらに？暗黒界の尖兵ベージ？をリリースして？偉大魔獣ガージェット？をアドバンス召喚！！」

竜馬のフィールドの悪魔の腹を引き裂き別の悪魔が姿を現す。

偉大魔獣ガージェット ATK/0 DEF/0

「このカードの攻撃力はリリースしたモンスター一体の元々の攻撃力を倍にした数値になる！！」

偉大魔獣ガージェット ATK/0 3200 DEF/0

「攻撃力3200！？1ターン目で！？」

「行け！！グレートブレイク！！！」

偉大魔獣ガージェットはリオラを思い切り殴った。

リオラ LP8000 4800

「くうううううっ！！手札の？冥府の使者ゴーズ？の効果を発動！このカードは自分フィールド上にカードが存在しない時、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる！！」

「げっ！！！！！」

竜馬はしまったと言ったような表情をした。

リオラのフィールドに刀をもった青年が現れた。

冥府の使者ゴーズ ATK/2700 DEF/2500

「?冥府の使者ゴーズ?のもう一つの効果を発動!受けたダメージと同じ攻撃力、守備力を持つ?冥府の使者カイエントークン?を特殊召喚する!」

リオラのフィールドにさらに刀をもった女性が現れた。

冥府の使者カイエントークン ATK/DEF/0 3200

「厄介なのが出てきたなあ…カードを一枚セットしてターン終了」

竜馬 手札2 LP8000

竜馬のフィールドにカードが伏せられた。

「僕のターン、ドロロー!?冥府の使者ゴーズ?をリリースして?風帝ライザー?をアドバンス召喚!」

リオラのフィールド上の青年が光に包まれ光の中から緑色の鎧を着た人?が現れた。

風帝ライザー ATK/2400 DEF/1000

「?風帝ライザー?の効果でフィールド上のカードを一枚デッキトップに戻す!!僕が選択するのは?偉大魔獣ガーゼット?!!」

ライザーからガーゼットに向かって強風が放たれる。

「させるか!!!<sup>トラップ</sup>畏カードオープン!!!?闇の幻影?!!!フィールド

上に表側表示で存在する闇属性モンスターを対象にする魔法、畏、  
モンスター効果を無効にして破壊する！！」

ガーゼットは体を闇の衣に包まれた。

そして闇の衣はライザーへと向かって行きライザーを破壊した。

「くそっ！でも、墓地の闇属性モンスター1体と風属性モンスター  
1体をゲームから除外して手札から？ダーク・シムルグ？を特殊召  
喚！！カイエントークンでガーゼットと相殺！！」

リオラは墓地からキラー・トマトと風帝ライザーを除外し漆黒の鳥  
を特殊召喚した。

ダーク・シムルグ ATK/2700 DEF/1000

カイエントークンはガーゼットに殴られガーゼットはカイエントー  
クンに切り裂かれ破壊された。

「？ダーク・シムルグ？でダイレクトアタック！！ダークネスウイ  
ンド！！」

ダーク・シムルグから黒い風が巻き起こり竜馬を襲う。

竜馬 LP8000 5300

「ぐぐぐぐぐぐ！！」

「僕はこれでターン終了だよ」

リオラ 手札2 LP4800

竜馬は腕を交差して風から目を守った。

「俺のターン！ドロー！！俺は？紅魔・小悪魔？を召喚！！」

「こあ〜！！」

竜馬のフィールドに小悪魔が現れた。

紅魔・小悪魔 ATK/1300 DEF/1500

「？紅魔・小悪魔？の効果を発動！デッキからレベル4以下の闇属性モンスター、？暗黒界の斥候スカー？を特殊召喚！！」

小悪魔が手招きすると竜馬のフィールドに赤い体のナイフを持った悪魔が現れた。

暗黒界の斥候スカー ATK/500 DEF/500

「さらに手札から魔法カード？あくまで悪魔？を発動！！このカードは自分フィールド上に悪魔族のモンスターが存在する時に発動する事が出来る！！」

「こあ、私の事ですね」

竜馬の言葉に小悪魔は答えた。

「俺は墓地に存在する闇属性・悪魔族・攻撃力500以下のモンスター、？偉大魔獣ガーゼット？を特殊召喚する！！」

竜馬のフィールドに再びガーゼットが現れた。

偉大魔獣ガーゼット ATK/0 DEF/0

「これでそろった！レベル2？暗黒界の斥候スカー？とレベル6？偉大魔獣ガーゼット？にレベル4？紅魔・小悪魔？をチューニング！！」

「いつきまゝす！」

小悪魔はそう言つて光の輪になつた。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「大いなる図書館の主よ、我が意に従いて現れよ！其は七曜の魔女！！シンクロ召喚！！現れよ、？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？！！」

「読みたい本があつただけだ……」

竜馬のフィールドに紫もやしが現れた。

紅魔・パチュリー・ノーレッジ ATK/2500 DEF/500

「誰が紫もやしよ！！！！！！」

「ど、どうしたんだ？」

いきなり紫もやし、もといパチュリーが怒鳴つたので竜馬は驚いた。

「何でも無いわ……」

「そ、そうか。俺は？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？の効果を發動！手札の？クリエイト・リゾネーター？を墓地に送り？ダーク・シムルグ？を手札に戻す！」

竜馬は最後の一枚の手札を墓地に送つた。

「風ね…木符？シルフィホルン?!！」

この葉の様な弾幕が起こりダーク・シムルグはリオラの手札に戻った。

「俺はこれでターン終了だ」

竜馬 手札0 LP5300

「僕のターン、ドロー!!モンスターをセットしてターン終了です」

リオラのフィールドにカードが伏せられた。

リオラ 手札2 LP4800

「俺のターン、ドロー!!俺は？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？の効果発動する！手札の？スノーマン・イーター？を墓地に送りカードを2枚ドローする!!」

「次は水ね…水符？プリンセスウンディネ？」

水の様な弾幕が竜馬のデッキに向かって放たれた。

竜馬はデッキからカードを2枚ドローした。

「一応出しておくか。俺は？紅魔・十六夜咲夜？を召喚！」

「十六夜咲夜、呼ばれて参上しました」

竜馬のフィールドに咲夜が現れた。

紅魔・十六夜咲夜 ATK/1900 DEF/1500



「咲夜さん!!」

「な、何でしょうか？」

いきなりリオラが叫んだ。

咲夜は驚きながらも応対する。

「あ、あの！デュエルが終わったらサインください!!」

「か、かまいませんが…」

咲夜の答えを聞いてリオラはガッツポーズをとった。

「良いかな？」

「あ、ごめんごめん」

竜馬はリオラに尋ねた。

リオラは竜馬に向かって謝った。

「手札から？犬耳？を発動!!このカードは自分フィールド上に？  
紅魔・十六夜咲夜？が存在している時に発動する事が出来る!!？紅  
魔・十六夜咲夜？を墓地に送りデッキから？犬咲夜？を特殊召喚！  
！」

咲夜の頭上に犬耳が現れ光に包まれた。

光が収まると…

「わふ？」

犬耳を着け身長が低くなった咲夜がいた。

犬咲夜    ATK / 500    DEF / 500

「パチュリー、セツトモンスターに攻撃だ!!!」

「分かったわ。符の壱? セントエルモエクスプロージョン?」

パチュリーの弾幕がセツトモンスターに向かって放たれた。  
セツトモンスターはクリッターだった。

「? クリッター? の効果を発動!!! このカードが戦闘で破壊された時デッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える!!!」

リオラはデッキからカードを1枚手札に加えた。

「俺はこれでターン終了だ」

竜馬 手札0 LP5300

「僕のターン、ドロー! モンスターをセツトしてターン終了です」

リオラ 手札2 LP4800

「俺のターン、ドロー! 俺はライフを半分払い手札から? 吸血鬼の施し? を発動!!!」

竜馬 LP5300 2650

「デッキから手札が6枚になるようにカードをドローする」

「大分チートなカードですね」

竜馬の言葉にリオラは言った。

「気にすんな！カードを2枚セット！！」

竜馬のフィールドにカードが伏せられた。

「パチュリーでセットモンスターを攻撃！！」

「了解よ。符の式？デリュージユフォーティディ？」

セットモンスターにパチュリーは弾幕を放った。

セットモンスターはマシユマロンだった。

「？マシユマロン？の効果発動！！フィールド上に裏側表示で存在するこのカードを攻撃したモンスターのコントロールは、ダメージ計算後に1000ポイントダメージを受ける！」

「ぐっ！！」

マシユマロンは竜馬にかみついた

竜馬    LP 2650    1650

「そしてマシユマロンは戦闘では破壊されない」

「ちっ！俺は？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？の効果発動！手札の？フレア・リゾネーター？を墓地に送り相手に1500ポイントのダメージを与える！！」

「炎…火符？アグニシャイン？」

パチュリーがそう言うと炎の弾幕が出現しリオラに向かって飛んで行った。

「くっっ！！！！」

リオラ LP4800 3300

「俺はこれでターン終了」

竜馬 手札3 場 紅魔・パチュリー・ノーレッジ 犬吠夜 セツ  
トカード2 LP1650

「僕のターン、ドロー！モンスターをセットしてターン終了です」

リオラ 手札2 場 マシユマロン セットモンスター1 LP3  
300

「俺のターン、ドロー！ここは…俺は？紅魔・パチュリー・ノーレ  
ツジ？の効果発動する！手札の？ダーク・リゾネーター？を墓地に  
送りフィールド上に存在するカードを一枚破壊する。俺が選択する  
カードは？マシユマロン?!！」

「闇、だったら…月符？サイレントセレナ？」

漆黒の球体が出現しマシユマロンを飲みこんだ。  
そしてマシユマロンは破壊された。

「パチュリーでセットモンスターを攻撃!!」

「火&土符？ラーヴァクロムレク?!！」

パチュリーはセットモンスターへと弾幕を放った。  
セットモンスターはエア・サーキュレーターだった。

「?エア・サーキュレーター？の効果を発動！デッキからカードを  
一枚ドローする」

「？犬咲夜？でダイレクトアタック！」

ゆっくりと犬咲夜がリオラに近づいて行く。

「？」

「わふっ！！！」

不思議そうに見ているリオラに犬咲夜は体当たりをした。  
しかし威力が無いため跳ね返り地面に落ちた。

「ツツ~~~~！！！！！」

犬咲夜は涙目になりながらリオラを見上げた。  
頭を打ったのか頭を両手で押さえている。

「…あゝ、物凄い罪悪感が…」

「攻撃するように言っておいてあれだけど俺も…」

リオラ LP 3300 2800

「俺はこれでターン終了」

竜馬 手札3 場 紅魔・パチュリー・ノーレッジ 犬咲夜 セツ

トカード2 LP 1650

「僕のターン、ドロー！まだ足りないか…モンスターをセットして  
ターン終了です」

リオラ 手札3 場 セットモンスター1 LP 2800

「俺のターン、ドロー！何を待っているんだ？俺は？紅魔・パチユリー・ノーレッジ？の効果発動する！手札の？フレア・リゾネーター？を墓地に送り相手に1500ポイントのダメージを与える！」

「またなの？火符？アグニシャイン？」

パチユリーがそう言うのと再び炎の弾幕が出現しリオラに向かって飛んで行った。

「くっつー！！」

リオラ LP2800 1300

「パチユリーでセットモンスターを攻撃！！」

「土&金符？エメラルドメガリス？！！」

パチユリーはセットモンスターへと弾幕を放った。

セットモンスターはエア・サーキュレーターだった。

「またかよ！！」

「？エア・サーキュレーター？の効果が発動！デッキからカードを一枚ドローする」

リオラは再びデッキからカードを一枚ドローした。

「？犬咲夜？でダイレクトアタック。あ、もう体当たりはしなくて良いからね？」

竜馬の言葉に犬咲夜は頷きリオラに近づいて行った。

そして犬咲夜はリオラの手を叩いて戻ってきた。

リオラ LP1300 800

「これで俺はターン終了」

竜馬 手札3 場 紅魔・パチュリー・ノーレッジ 犬吠夜 セツ  
トカード2 LP1650

「僕のターン、ドロ―！これで充分かな。？デブリ・ドラゴン？を召喚！効果で墓地から攻撃力500以下のモンスター？エア・サーキュレーター？を効果が無効にして特殊召喚！！」

リオラのフィールドにデブリ・ドラゴンとエア・サーキュレーターが現れた。

デブリ・ドラゴン ATK/1000 DEF/2000

エア・サーキュレーター ATK/0 DEF/600

「まさか…ちいつ！！罨カード？ニュー・ウィーク新たな一週間？を発動！！自分フィールド上に？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？が表側表示で存在する時、自分フィールド上にセットされているカードと手札を全て除外し発動する！！手札に？紅魔・パチュリー・ノーレッジ/ウィーク？がある場合手札を除外しなくても良い。自分フィールド上の？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？を墓地に送り自分の手札、デッキ、墓地から？紅魔・パチュリー・ノーレッジ/ウィーク？を特殊召喚する。このカードは相手の魔法、罨、モンスター効果によって無効化されない！！」

悔しげに竜馬はセットカードを発動した。  
パチュリーを光が包み込む。

「これは…」

「パチュリーも成長するんだな…」

徐々に光が消えるとそこには元の体からさらに女性的に成長したパチュリーが立っていた。

紅魔 - パチュリー・ノーレッジ/ウィーク    ATK / 3500    D  
EF / 2500

「つと、レベル3? エア・サーキュレーター? にレベル4? デブリ・ドラゴン? をチューニング!」

デブリ・ドラゴンが4つ緑の輪となりその中にエア・サーキュレーターが通る。

すると、エア・サーキュレーターが透過通り、3つの星となる。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け! シンクロ召喚! 現れよ、? ブラック・ローズ・ドラゴン?!」

リオラのフィールドにブラック・ローズ・ドラゴンが現れた。

ブラック・ローズ・ドラゴン    ATK / 2400    DEF / 1800

「? ブラック・ローズ・ドラゴン? の効果を発動!! ブラック・ローズ・ガイル!!」

ブラック・ローズ・ドラゴンから薔薇が吹き荒れフィールドのカードを破壊していく。







「そつとつ喜んでるなあ」  
「だな」

リオラを見ながら俺と竜馬は呟いた。

番外編・リオラとデュエル！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

竜王「前日もそうだけど連続投稿って滅多に出来ないよな」

竜馬「最近やったじゃねえか…」

雪「だよねえ」

竜王「と言うよりもデュエルって展開を考えるのが難しいな。リオラとのデュエルを予定してたのってだいぶ前だぞ？」

竜馬「本編も進行してたしな」

雪「私に至っては出て無いはずだし」

竜王「まあ、気にせずに闇を狩る少年続きます」

出席簿って結構堅いよね？

side 魔神竜馬

「…雪、クラスに行け」

「やっだ」

俺は腕にしがみつくと雪を見ながら言った。

朝起きて部屋から出た途端に俺の腕にしがみついていたのだ。

「千冬が怒るぞ」

「そんなの関係無いもん、私はお兄ちゃんと一緒にいる」

今の時刻は7時45分。

朝のSHRがもうすぐ始まるという時刻だ。

「しゃーない、俺も行くからクラスに行くぞ」

「はっい」

俺がそう言つと雪はあっさりと返事をした。

そして俺達はそのまますぐクラスへと向かった。

「ん？あれは千冬？」

クラスに付くと入り口で知らない生徒が千冬に出席簿で頭を叩か  
れていた。

あれ結構堅かったと思うんだが…

「またあとで来るからね！！逃げないでよ、一夏！！！！」

入口からどき千冬がクラスに入った後に生徒は叫んだ。  
一夏の知り合いか？

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！！」

そう言っつて生徒は走って隣のクラスに入っつていった。  
隣のクラスに一夏の知り合いがいるのか。

「にしても千冬、あれは痛いんじゃないか？」

「見てたのか！？だ、大丈夫だ。あれは音ほど痛くは無い！！」

クラスに入り千冬に言っつと慌てながら千冬は答えた。  
いや、痛そうだったけど…

「ほれ、雪。自分の席に座れ」

「お兄ちゃんも一緒じゃなきゃだ」

おいおい…

クラスの生徒全員の視線が俺と雪に集まる。

「えつと…竜馬？」

「何だ？一夏」

恐る恐ると言っつた風に一夏が俺の名前を呼んだ。  
すると他の生徒から驚きの声上がる。

「？…ああ、この姿の事か。これが俺の本当の姿だ」  
「私達よりも年上でしたの！？」

俺の言葉にセシリアは声を上げた。  
まあ、普通なら驚くか。

「と、所でブルーマンはどうして竜馬先生の腕にしがみついているんですか？」

「お兄ちゃんだからだよ」

えっと…しゅのほのめ 篠ノ之箒、だったかな？彼女の問いに雪は答えた。

「お兄ちゃん？ですが名字が…」

「いや、合ってるんだ」

箒の疑問に千冬が答えた。

雪の話を何回かしたからなあ。

「ブルーマンは偽名で私の本当の名前は魔神雪だよ。別に覚えなくても良いから」

「さて授業を始める。魔神、席につけ」

しかし雪は俺の腕から離れようとしなない。

仕方なく俺は雪の席の近くに椅子を置きそこに座った。  
すると雪も自分の席に座った。

side out

side 第3者視点

「…なあ、俺部屋に戻っていいか？」

「だぐめ」

竜馬の言葉を雪は却下した。

分かり切っていた事実だが竜馬は頂垂れた。

「彼ノ之、答えは？」

「は、はいっ!？」

不意に箒が大きな声を上げた。  
生徒達の視線が集まる。

「どうしたんだ？」

「問題を聞いてなかったんだよ」

竜馬の問いに雪は答えた。

それを聞いて竜馬は呆れたような表情をした。

「答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

次の瞬間箒の頭を凄まじい衝撃が襲った。

千冬に出席簿で叩かれたのだ。

「痛そうだな……」

「しまっ!?!…んん!!SHRの前にも言ったが音ほど痛くは無い  
!?!」

竜馬の呟きに千冬は一瞬驚きながらも言った。  
しかし箒は軽く涙目である。

「でも、箒は涙目……」

「気のせいだ!?!」

竜馬の言葉を遮るように千冬は言った。



千冬のその慌てぶりに生徒達は驚いていた。

「だ、大丈夫です……」

「そうか？なら良いが」

篝の言葉に疑問を持ちながらも竜馬は追求を止めた。

追及が終わると同時に千冬はホツとしたような表情になったがすぐに元の凜々しい表情に戻った。

その後、セシリアも考え事をしていて頭を叩かれ同じ状況になったのは言うまでも無い。

side out

side 織斑千冬

くっ…何故竜馬の事がここまで気になるんだ！？

私はグラウンドで素振りをしていながらそんな事を考えていた。

「お〜い千冬〜」

「ん？竜馬か」

不意に声をかけられたので見ると竜馬が立っていた。

表面上は冷静を取り繕ってはいるが内心は慌てていた。

「どうしたんだ？」

「お昼だからご飯を持ってきたんだよ」

そう言いながら竜馬は弁当を取り出した。

もう片方の手には水筒を持っている。

「お前は食べたのか？」

「いや、渡してから食堂に行こうかと思ってな」

笑いながら竜馬は言った。  
まだ食べて無いのか。

「ならば私も食堂に行こう。なに、食べる場所が変わるだけだ」  
「そうか？じゃあ出口で待ってるな」

そう言っつて竜馬はグラウンドの出口に向かって歩いて行った。  
竜馬と一夏だけだな、私に対して対等に会話をしてくれるのは…

「さて、急いで着替えてくるか」

私はそう言っつてロッカールームに向かった。

side out

side 魔神竜馬

「ん？あれは…一夏にセシリア、それに箒と…誰だ？」

「あれは鳳鈴音フォウゼンインだよお兄ちゃん」

俺の問いにいつの間にか横にいた雪が答えた。  
いつからいたんだ？

「ところで…どうしてお兄ちゃんと一緒にいるの？千冬」

「教師を名前で呼ぶなよ…」

そう言っつて雪は千冬を睨みつけた。

「竜馬がまだ昼食を摂っていないというからな。私も同席するんだ」  
「そのお弁当は？」

千冬の手にある弁当箱を見て雪は尋ねた。

「俺が作ったものだよ。千冬が食堂であまり食事をしたくないって言うてたからどこでも食べられる弁当にしたんだ」

「だったら、ここに来なきゃいいじゃん」

そう言えばそうだな。

「まあ、俺が一人で食堂で食べるのを可哀想とか思ったんじゃないか？」

「……お兄ちゃんがそう言うならそうかもね」

そう言いながら雪は俺達の席に座った。

あれ？

「お前お昼喰って無かったっけ？」

「気にしっちゃ駄目だよ」

雪は片目を瞑り口元に人差し指を当てながら言った。  
そして俺達はお昼を食べ始めた。

出席簿って結構堅いよね？（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

空刀様、White Seal様、妖気様、フレイス様、銃王海さん、バラランシヤ様、ルシフェル様感想ありがとうございます。

妖気様より雑談所にロールケーキ全員分を、

いただきました。

竜王「あゝ…空刀様にオリカを貰ったけど悪魔族じゃないから組み込みづらいんだよね」

竜馬「確かに、全部戦士族だな」

竜王「まあ、これは？紅魔-？をメインに考えるデッキにするにはちょうどいいんだけどな」

竜馬「その代わりラビエルとかアバターを抜かないとな、他にも調整が…」

（？勉強？の拷問部屋）

咲夜「……………」

来也「危な！？」 ナイフの投擲を避ける

咲夜「誰がPAD長ですか！！！！！」

来也「(地獄耳か!?)」

〔雑談所〕

「粉砕 玉砕 大喝采!!!」

竜王「あ、フレイス様の所から紫とキヤロが来ました」

紫「あら?今日はキヤロと一緒に叫ばないのね?」

竜王「ああ、レムが怯えてるからね」

「お邪魔します!!!!!!」

竜王「銃王 海さんの所から黒子・はやて・利光・美春・高橋先生・  
福田先生・リンディ・ハラウン、シグナム・小萌先生が来ました」

美琴・美波・明久・ルイズ・ハルヒ・かがみ「「「「げっ!?!」」」」」

はやて・黒子・美春・利光「「「!!!!!!」」」」

竜馬「あ……」

竜王「お茶をどうぞ」

リンディ「あら、ありがとう」

美琴「ちよっ!!!助けなさいよ!!!」

竜王「…………騒ぐなよ？」　？黄昏？と名の付いた武器を全て展開する

竜馬「んな！？何でそんなに怒ってるんだよ！？」

竜王「あのね？俺の友達が大きな音にびっくりして隣の部屋に隠れちゃったんだよね。だから静かにね？じゃないと、？終わらない苦痛？を与えることになるから」

全員「…………！」　高速で頷く

竜王「つたく…ほら、出ておいでレム」

レム「は、はい…」

竜馬「その子は…」

竜王「銃王　海さんの記事の所から連れて帰ってきた友達の1人、キュレムのレムだよ。もう1人ディアルガのディルもいるんだけど寝てるみたいだ」

レム「……………」　たくさんの人に驚き竜王の後ろに隠れる

竜王「俺と一緒にいるから大丈夫だよ」　そう言ってレムの頭をなでる

「こんにちは……………」

レム「ひうつ！？」

竜王「あはは…空刀様の所から乱太と空刀様が来ました」

乱太「竜王、送ったカードは？」

竜王「ここにあるよ」

乱太「んじゃそれ渡してくれ。行くぞ竜馬」

竜馬「え？え？？え！？」

竜王「とりあえず竜馬にギャグ補正は書き加えてあるから大丈夫だろ」

（別世界）

竜馬「いきなりだなあ…無々！！」

無々『了解しました。セットアップ』デュエルディスクに変化する

乱太「さあ、戦おうか」

竜馬「ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、怒れる竜。

破壊の主にして暴君の象徴よ。其は強大にして凶暴なり。『竜魂転身』」

乱太「炎舞斬！！！！」

竜馬「ちいつ！！多重氷牢結界！！！！」

乱太「だつたら氷海斬！！！！」

竜馬「げっ！！多重雷牢結界！！！！」

乱太「二連刀にれんとう!!!!!!」

竜馬「竜帝の爪痕!!!!!!」

「?勉強?の拷問部屋」

咲夜「そして時は動きだす」

来也「それキャラが違う!!」 ナイフを避ける

咲夜「ちっ!!!!!!」

「雑談所」

竜王「所で竜馬はバトル中だからまだ治療できませんよ?どうします?」

空刀「あ、それじゃあしばらく待ちます」

竜王「分かりました。それじゃあレム、締めて」

レム「は、はい、闇を狩る少年、つ、続きます……」

竜王「オツケーだよ」 レムの頭をなでる

レム「はううう、……」

つかさ「…ラブコメ?」



人の逆鱗には気をつけよう。

side 魔神竜馬

目の前をピリピリとした雰囲気を纏った少女が歩いている。  
えっと…フオゼンイン 鳳鈴音だったか？

「おいそこの如何にも怒ってます風な生徒」  
「何よ！！…てかあんた誰！！」

俺が呼びかけると鈴音は怒鳴りながら振り向いた。  
そう言えば今日まで授業しててこいつの姿を見た事が無かったな…

「いや、どうしたのかと思ってな。前に一夏に向かって怒鳴ってたし」

「…あんた一夏の知り合いなの？」

一夏の名前が出た瞬間に鈴音の雰囲気はさらに悪化した。

「知り合いつつーか教師と教え子？かな」

「教師？ちなみに担当は？」

男の俺がここにいる事が不思議なのか鈴音は聞いてきた。

「主に戦闘訓練だな。と言うか授業でお前を見た事が無いんだが…」  
「そりゃそうよ、あたしは転校してきてまだ数日だもん」

俺の問いに鈴音は当然の様に答えた。  
転校生か。

「それよりもあなたが戦闘訓練の教師？全然強そうに見えないんだけど…あなたのISは？」  
「いや、持って無いぞ？」

俺が鈴音の問いに答えると鈴音は驚いたような表情をした。  
当たり前だろ？

「はあ！？…分かった！！元代表候補ね！！」  
「いや、違うが…それにISに乗れないし」

俺に向かって指を差す鈴音の言葉を俺は否定した。  
すると鈴音は驚愕の表情を浮かべた。

「ISに乗れない！？それじゃあどうやって戦闘訓練なんて教えて  
るのよ！！あんたみたいな女が！！」  
「…すまない、もう一回言ってくれ」

……はて？

今聞き捨てならない言葉が聞こえたな。

「だから！どうやって戦闘訓練なんて教えてるのよ！！！！」  
「そこじゃ無い、その次だ」

俺は鈴音に静かに言った。

鈴音は不思議そうに俺を見ている。

「あんたみたいな女が！！って言ったのよ！！」  
「ほう……………」

鈴音は呆れたように言った。



「構わないぞ…鈴音リンオンって呼びにくいから鈴音すずねって呼んでも良いか？」  
呼び捨てにさせてもらっているんだからそれぐらいは構わないわね。  
あたしは頷いた。

「んで？どうしてあんな雰囲気を出してたんだ？」

「あ…え」と…

言えない。

一夏と喧嘩したからだなんて…

「…もしかして一夏が原因か？」

「な！？どうしてよ！！」

ぽつりと竜馬が呟いた。

あたしは一言も一夏が原因だなんて言っただけなのに！！

「なんとなく？」

「…凄い勘してるのね。正解よ」

首を傾げながら言う竜馬にあたしは言った。

どんな勘してるのよ…

side out

side 魔神竜馬

あゝ…そう言う事か。

俺は鈴音からイラついている理由を聞いて納得した。

「だが鈴音、毎日酢豚を食べてくれるって聞いて日本人の一夏が分かるとは思えないんだが」

「そんな訳無いでしょ!!」

俺の言葉に鈴音は叫んだ。

どこからその自信は来るんだ？

「どちらにしる一夏は悪いけどな人の気にしてる事を言ったんだ。叩き潰せ」

「そうよね!!よし、竜馬!!あたしと戦闘訓練をしましょう!!」

そう言つて鈴音は俺の腕を掴みグラウンドに向かった。

戦闘訓練か…

side out

side 第3者視点

「それじゃ始めるわよ!!」

「分かった、無々」

『了解しました。セットアップ』

鈴音はISを竜馬は無々を装着した。

無々は重剣となつて竜馬の横の地面に突き刺さっている。

「…それどこから出したの？」

「俺の相棒が姿を変えた<sup>パートナー</sup>ただけだ気にするな」

突き刺さる重剣を指差しながら鈴音は尋ねた。

それに対し竜馬はさも当然という様に答えた。

「まあ、良いわ」

「んじゃ戦闘訓練開始!!」

そう言つて竜馬は重剣を地面から片手で引き抜いた。  
そして鈴音は大型の青龍刀、そうてんがけつ双天牙月を構えた。

「はあああああ!!!!!!」

そう叫んで先制攻撃を仕掛けたのは鈴音だった。

鈴音の双天牙月による連続攻撃を竜馬は重剣で流れるように防いでいく。

「ふむ：攻撃力は申し分無し、と」

「あなた本当に人間？」

攻撃の手を止め鈴音が距離をとった。

竜馬はその行動を見て理解した。

「鈴音、お前遠距離攻撃を持つてるだろ」

「何だよ!?!」

その言葉に鈴音は驚愕した。

「ん？一夏みたいに接近戦武器だけだったらそこまで離れないだろ」

そう鈴音は竜馬から大分距離をとっているのだ。

もし今手に持っている双天牙月だけならばここまで距離はとらないだろう。

「正解よ、でもこれは人間に使うには危険すぎるのよ」

「そうか」

鈴音の言葉に竜馬は聞く事を止めた。

少しばかり嬉しそうな表情で…

人の逆鱗には気をつけよう。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、ルシフェル様、妖気様、空刀様感想ありがとうございます。  
ます。

妖気様より雪に竜馬がフラグを建てた人名簿を、

いただきました。

雪「……………」 ISを起動し竜馬に銃口を押しつけている

竜王「あゝスプラッタは勘弁してくれ」

雪「お兄ちゃんの味方をするんですか…」

竜王「いや、血とかの掃除がめんどくさい」

竜馬「俺の命って…」

竜王「つかバトルは？」

竜馬「雪に途中で捕まってここまで引きずられてきた」

雪「連れて来るのを邪魔しようとした人がいたからちょっとOS  
H I O K Iしたけどね」



竜王「（この状態の雪には誰も勝てないな…）」

「？勉強？の拷問部屋」

咲夜「はあっ！！！」 ナイフを投擲

来也「負けねえ！！！」 ナイフをゴム弾の自動拳銃で撃ち落とす

こなた「おお、凄い！！！」

「雑談所」

「こんにちは」

竜王「ああ、フレイス様の所よりユウキとティアナが来ました」

ユウキ「あの、咲夜さんは…」

竜王「あゝ今戦闘中なんだよ…どうする？」

ティアナ「助けなくて良いんですか！？」

竜王「じゃあ頼んだ」

ユウキ・ティアナ「分かりました！！！」

竜馬「所でこれどうにかなんない？」

竜王「無理だね。あ、空刀様を治してくれ」

竜馬「あ、ああ。ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉



side 魔神竜馬

目の前の鈴音を見ながら俺は笑っていた。  
それは鈴音の言った言葉が原因だろう。

「人間に使うには危険すぎる、か」  
「? 何で笑ってるのよ」

そんな俺を見て不思議に思ったのか鈴音は尋ねてきた。

「ふふふ…いや、何だか嬉しいんだよね」  
「?」

俺の答えに意味が分からないと鈴音は首を傾げた。  
自分が? 闇? だと知ってから自分は人間じゃないと思っていた。  
それでもこの世界では俺を人間として見てくれる。  
だから嬉しいのだ。  
説明の必要性は感じないから教えなくても良いかな。

「俺だけの問題だから気にしなくても良いよ」  
「なら良いけど」

俺の言葉に鈴音は再び武器を構えた。

…そう言えば重剣のカートリッジって使った事無かったな。

「無々、カートリッジロード」  
『生徒相手に使用してよろしいのですか?』

俺の言葉に無々は静かに問い返した。  
前セシリアに使ってたけど…

「ああ、どうかしたのか？」

『マスターが良いのでしたら…』

その言葉と同時に重剣からロードした音が聞こえた。  
それと同時に俺の意識は刈り取られた。

s i d e o u t

s i d e 第3者視点

「はっ!?!」

ツツ!!!!

突然の竜馬の咆哮に鈴音は驚いた。

『一つ、意識は鬼神の如し…』

「きゃあああああああ!!!!!!!!」

無々の機械の様に冷たいはつきりとした言葉がグラウンドに響き渡ると同時に鈴音の悲鳴が響き渡る。  
竜馬が重剣を鈴音に叩きつけたのだ。

「ツツ!!!!!!何なのよ!!!!」

ISの性能のお陰か鈴音はすぐに起き上がり竜馬を見た。  
それと同時に重剣がカートリッジをロードする。

『一つ、力は極神の如し…』

ツツ!!!!

「！」

再び無々の言葉が響き渡ると今度は竜馬の持つ重剣に魔力が纏われた。

「な…何が…どうなってるのよ…」

竜馬の変貌に鈴音は驚いている。  
そして再び重剣がカートリッジをロードする。

『三つ、武は魔神の如し…』

「ッ！！！！」

ッ

無々の言葉が響き渡ると重剣に変化が起こる。

重剣に細かい線が入ると重剣は11本の細剣に分離した。

「細剣の合体したものだっただのね…」

「ッッ！！！！」

そして竜馬は重剣が分離してできた細剣を鈴音に向けて投擲した。  
それを鈴音は弾き落としたり避けたりして防いでいる。

『終焉、其は怒りし狂神なり』

「この程度！！私に効く訳…ッ！？」

飛んでくる細剣を防ぐ鈴音の眼前に竜馬が突如出現した。  
その両腕には一本ずつ細剣が握られている。

「

ツツ!!!」

「くっ!!!」

鈴音は咄嗟にそつてんがげつ双天牙月で攻撃を防いだ。  
しかし次の瞬間には竜馬は消えていた。

「な!?!ぐううううう!?!」

いつの間にか竜馬は鈴音の横におり鈴音を斬り付けていた。  
先程とは少しばかり違う細剣で…

「いつの間に!?!あああああ!?!」

鈴音が横を向くと再び竜馬の姿が消え別の方向から攻撃を受ける。  
竜馬は攻撃を与えるとすぐに細剣を地面に突き刺し移動し別の細剣  
を手にしていた。

「はあ…はあ…はあ…」

「

ツツ!!!」

満身創痍の鈴音と重剣を振り被った竜馬。

鈴音にはもはや戦闘意志…いや、戦うだけの体力は無かった。  
故に竜馬の攻撃は避けられずに直撃した……

side out

side 魔神竜馬

………俺は何をした?

カートリッジをロードして…

「う……」

「鈴音!?!」

呻き声が聞こえたので横を見るとそこにはぼろぼろになった鈴音がいた。

何があつたんだ!?!

「鈴音!鈴音!?!」

「あ……竜……馬?」

俺の呼び掛けに鈴音はゆっくりと口を開いた。

「カートリッジをロードしたら意識が無くなって……いったい何があつたんだ!?!」

「分からない……わよ……いきなりあんたが……攻撃……してきたんだから……」

俺が攻撃!?!

鈴音の言葉に俺は驚いた。

『重剣のロード魔法?怒りし狂神?です』

「ロード……魔法……?」

無々の言葉に俺は聞き返した。

そんな物を発動した覚えは無いぞ!?!

『はい、重剣のロード魔法?怒りし狂神?その名の通り発動者をただの狂神へと変える魔法です。故に邪魔となる感情などを封じ、ただ相手を破壊する。狂った魔法です』

「どうして…どうしてそんな魔法がある?!」

俺は無々に怒鳴った。

『分かりません…どうやら元々私に組み込まれていたようですが…すみませんでした』

「元々組み込まれていた!？」

無々の言葉に俺は驚いた。

それと同時に鈴音が呻いた。

「くっ!!話は後だ!ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

俺は呪文を唱えてフェニックスへと変身した。

「?治癒の焰?!?!」

鈴音を焰が包み込んだ。

すると徐々に鈴音の傷が治っていく。

「ふう……」

「良かった…」

そう小さく息を漏らして鈴音は眠った。

どうやら傷が治った事によって苦痛から解放され安心したらしい。

「…無々、重剣のカートリッジは封印だ。絶対に…」

『了解しました…すみませんでした』



何度も謝る無々を俺は撫でた。

そして俺は鈴音を抱きかかえ寮へと向かった。

途中、雪が鈴音に向かって飛び掛かってきたり、千冬が恨めしそうに見ていたが……

気にしない事にしよう。

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

バラランシャ様、銃王 海さん、妖気様、フレイス様、ユタ様、空  
刀様、月光閃火様、ルシフェル様感想ありがとうございます。

銃王 海さんから電子手帳、SOS団団長の印ワッペンを、  
妖気様より竜馬に松葉杖と包帯と輸血パックを、  
空刀様よりノートパソコン一式（ダイナブック）壁紙は東方の風見  
幽香を、

いただきました。

竜王「ほれ、治療してやれ」

雪「うん」

竜馬「傷つけた本人が治療って…」

「匿ってください!!!」

竜王「お〜、銃王 海さんの所より明久・美琴・美波・ルイズ・シ  
ヤナ・柊かがみ・涼宮ハルヒ・仲村ゆり・平沢唯・木之本桜・高町  
なのは・園原杏理・及川葉月・沢木直保・結城蛍が来ました」

直保「あれ？変な菌がいる…ぎゃあああああ!!!!!!」

蛭「ちょ！？沢木！？」

竜王「どうした？菌がなんかしたのか？」

直保「あ、えっと、はい。なんか見てたらいきなり砲撃を撃ってきました」

竜王「ああ、なのは菌だな」

なのは「なにそれ！？」

竜王「暇つぶしに創ってみた。他にもはやて菌とか…etc」

竜馬「また変な物を…」

竜王「まあ見えなきゃ害は無いぞ」

直保「俺だけ！？」

「？勉強？の拷問部屋」

咲夜「まだまだ！！！！」 ナイフを投擲する

来也「はあっ！！！！」 ナイフを撃ち落とす

ユウキ「ほらほら、戦闘を見てないで勉強勉強」

ティアナ「そこはこうなってるから…」

西村「どう言う状況だ…」

（雑談所）

「お邪魔するわよ」

竜王「おっす、フレイス様の所より紫が来ました」

紫「2人はどう？」

竜王「ちゃんと咲夜の手伝いをしているよ。迎えか？」

紫「ええ」

竜王「分かった、じゃあこれやる」

紫「これは？」

竜王「ケーキセット、皆で分けてくれ」

紫「分かったわ」

「こんにちは」

竜王「ん？ユタ様の所より優の妹の裕緋が来ました」

祐緋「雪ちゃん、お話しよ」

雪「良いね」

竜馬「友達が出来るかな？」

竜王「あ、聞かれたくなかったらあっちの部屋で話してね？」

祐緋・雪「は〜い」

「こんにちは」

竜王「ん？空刀様の所より空刀聖夜が来ました」

聖夜「それじゃあ竜馬、戦おうか」

竜王「あ、竜馬。変身魔法は無しだぞ、カートリッジロードだけだ」

竜馬「ああ魔法がコピーされるのか」

竜王「んじゃ頑張れ」

「？勉強？の拷問部屋」

紫「帰るわよ」

ユウキ・ティアナ「分かった」

咲夜「お手伝いありがとうございます！〜」  
イフを投げる  
そう言いながらナ

来也「ちいつ！〜！」  
ナイフを撃ち落とす

「第四訓練部屋」

無々『？カートリッジ！〜！瞬風 翠旋撫子』  
インスタントヌギリ垢タチオンティアンタウス

竜馬「瞬風 翠旋撫子！〜！」  
すいせんなでしこ

聖夜「雷竜の鉄拳！〜！」

無々『?カトトリツジ!瞬氷 蒼穹蓮華』  
竜馬「瞬氷 蒼穹蓮華!?!?!」  
ツヴァイ  
インスタント田イネウスアスユー  
しゅんひょう そうきゅうれんげ

聖夜「雷竜の碎牙!?!?!」

2人の攻撃は互いに相殺しあっていた。

「祐緋と雪」

祐緋「お兄ちゃんはね〜 ……」

雪「え〜!!凄い!!あ、私のお兄ちゃんもね〜 ……」

祐緋「それも良いね」

物凄く盛り上がっている

「雑談所」

竜王「にしても多いな」

ハルヒ「いつもの事でしょ?」

竜王「とりあえず俺はお茶とお茶菓子を配るから締めておいて」

ハルヒ「分かったわ、闇を狩る少年続くわよ!?!」

桜「ほええええええ!?!」

ハルヒ「うっさいわね ……」

明久「ちょ！？絞まってる絞まってるよ美波！？」

美波「五月蠅くいい！！あんたのせいだ！！！！！！」

謝罪…

side 魔神竜馬

「本当に悪かった！！！」

俺は鈴音すずねに向かって大きい声で言った。  
部屋を出てきた所だった鈴音は驚き目をパチクリさせている。

「え？え？何？何？」

「昨日の模擬戦でお前を傷つけてしまつて悪かった」

戸惑う鈴音を見ながら俺はもう一度頭を下げた。

「昨日の…ああ、大丈夫よ。竜馬がああのを治してくれたんでしょ？ならこれでチャラよ」

「いや、あれだけじゃ俺の気が済まない」

暴走とはいえ生徒…いや、仲間を傷つけたんだ。  
あの程度でチャラにして良いわけは無い。

「そ、そんな事言つたつて…」

「…すまない、いきなりで驚いたよな？とりあえず俺はお前に償いをしなくちゃいけないんだそれだけは覚えておいてくれ」

そう言つて俺は歩き始めた。

「無々、あの魔法の解析は出来た？」

『七割と言つた所ですが一応は』



周囲に誰もいない事を確認し俺は無々に尋ねた。  
あの魔法とは？【ソッドファクトウ・ドウルストウ】怒りし狂神？の事である。

「七割か…分かっている事を教えてくれ」

『はい…重剣のロード魔法？【ソッドファクトウ・ドウルストウ】怒りし狂神？はマスターの精神と既に結合リンクしていません。故に完全に消す事はできません』

最初の言葉を聞いた時点で俺は固まってしまった。  
俺の精神と結合している！？

「どう言う事だ…？」

『…どうやら重剣のカートリッジロードは発動の引き金でしかなく今現在、魔法本体はマスターの内部…つまり精神にあるようです』

俺の問いに無々は答え辛そうに言った。  
ん？

「待ってくれ、昨日はお前に組み込まれていたと言っていないなかったか！？」

『はい、ですがあの後私の内部を搜索しても見つからなかったのです。ですのでもしやと思いマスターの内部を調べた結果…』

そこで無々は言葉を区切った。

そうか…

「分かった。つまり今魔法は俺の内部なかにあるんだな？」

『はい…』

俺の最終確認に無々は静かに答えた。

「はあ………仕方が無いか、んで？この魔法の効果は？」  
『魔法効果ですね。？怒りし狂神？発動ユリフアクトウ・ドウリスツウするためにカートリッジを消費します現在判明しているのが一の鬼神、二の極神、三の魔神、終焉の狂神です。ちなみに四と五も存在するようです』

鬼神、極神、魔神、狂神、そして残る二つ…  
おそらくは神と付くのだろう。

『そして…』  
「？」

再び無々は言葉を切った。  
そこまで悪い効果があるのか…

『………そしてこの魔法はマスターの魔法？魔狼転身？とも僅かながら結合リンクしています。故に？魔狼転身？の最後のリミッターが外れるとこの魔法も同時に発動します』  
「フェンリルと！？」

無々の言葉に俺は再び驚いた。  
最後のリミッター…グレイプニルだったかな。

「つまりグレイプニルを解除しなきゃ良いんだな？」  
『はい、と言ってもリミッターの解除は私がやっていますけどね。どちらかと言えばマスターは感情を抑えるほうですね、マスターの負の感情、怒りや殺意と言った物で強制的にリミッターが外されてしまいますので』

感情を抑える…

申し訳なさそうに俺は無々を見た。

「すまん、善処する…」  
『はい』

俺の答えに無々は静かに答えた。

side out

side 魔神雪

私はお兄ちゃんを探して歩いていった。

「あ、お兄ちゃん!!」  
「ん?おわ!?雪!?!」

私が飛びつくとお兄ちゃんは驚いてよろけた。  
それでも倒れないのが凄いんだけどね。

「お兄ちゃん!!久々にデュエルしよう!!」  
「デュエルつたつてお前デッキは?」

私はポケットからデッキケースを取り出した。  
何のために覚えたと思ってるのかな?

「持つてるのか…」  
「当然!!お兄ちゃんと遊ぶために覚えたんだよ!!」

お兄ちゃんは呆れたように私を見た。  
どれを使おうかな?

「今ならお兄ちゃんの一軍、BFセイヴァー・スター・バスターに  
は負けないよ!!」

「あ、あゝあのデツキは今二軍なんだよ。今は？紅魔…？が一軍だ」  
紅魔？  
そんなカードあったかな？

「何そのカード？」  
「ん？友達から貰ったんだよそれで使えたから一軍になってるんだ」  
友達…貰う…私の知らないカード…  
オリカかな…

「ふ〜ん…まあ良いやデュエルだよ！！」  
「分かった、無々」  
『了解しました』

そう言ってお兄ちゃんの腕輪がデュエルディスクになった。  
やっぱりお兄ちゃんならそれを持ってると思ったよ

「それじゃあ、私も氷雪月華！！」  
すると私の腕にデュエルディスクが現れる。  
ISの武装の中に入れておいて楽チン楽チン

「そんじゃまあ久々に兄妹で…」  
「やろうか」  
「デュエル！！！！」

謝罪…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

銃王 海さん、空刀様、妖気様、フレイス様、バラランシャ様、月光閃火様、ルシフェル様感想ありがとうございます。

銃王 海さんよりSSSの制服男女各5着を、

空刀様より仮面ライダーカブトの変身ベルトとカブトゼクター・ハイパーゼクターを、

妖気様より雪に竜馬が今までどうやって女性キャラに対してフラグを建ててきたのかを解説した本を、

いただきました。

雪「

……………」

竜王「（あ、竜馬死んだな）……」

雪「？ISが展開できない…仕方が無いか…」 両手に包丁、腰にバールを装備

竜王「（おおおー！これぞ完璧なヤンデレの恰好！…！最高だ！…！）

「

雪「じゃ、行ってくるから誰も邪魔しないでね」



咲夜「はあ…はあ…」

来也「おらああああああ…！！！！！！」  
メタルイータMXを放つ

咲夜「くっ！！」

「させん！！ケリユケイオン！！」

咲夜「これは…！！！！」  
メタルイータMXを全て避ける

〈雑談所〉

竜王「あれ？転移反応？えっと第四訓練部屋に空刀様の所より乱太が？勉強？の拷問部屋にフレイス様の所よりキャロと早苗が…つか流石に咲夜を止めないとな」

レミリア「竜王、紅茶が飲みたいのだけど」

竜王「あ、ちょうど良い。咲夜を助けて来てくれないか？」

レミリア「構わないけど紅茶を用意しておいてよ」

竜王「ああ」

「ごんにちは」

竜王「ん？空刀様が来ました」

空刀「それでは戦いましょう」

竜王「あ、ちょっと待ってください。レミリアに紅茶を準備しない







## 番外編 雛祭り

side 魔神竜馬

「明かりをつけましょぼんぼりに〜 お花をあげましょ桃の花〜」

俺の前で雪が歌いながら雛人形を飾っていく。

……っって待て!!

「何でお前がここにいて、俺はまた拘束されてるんだ!!!」

「え?お兄ちゃんと一緒に雛祭りがしたいからだけど?」

俺の叫びに雪は不思議そうに答えた。

雪は俺と千冬の部屋におり雛人形を飾っているのだ。

そして俺は椅子に縛られている。

「はあ…んで?千冬は?」

「弟の布団に放り込んできた」

弟って〜と…一夏か。

あ、なんか叫び声が聞こえた。

「何だもう起きちゃったんだ」

「と言うかどうやら一夏が痛い目にあったらしいな…」

俺は呆れながら拘束から脱出した。

そんな俺を見て雪は笑っていた。

「やっぱり脱出しちゃうか〜」

「当たり前だ、一回拘束されたんだから対策くらいはするよ」

雪の言葉に俺が答えると同時に部屋のドアが勢いよく開けられる。

「まったく！誰があんな事を……っってお前か！！」

ぶつぶつと言いながら部屋に戻ってきた千冬は雪を見て叫んだ。  
まあ、普通にこの状況を見れば分かるよな。

「おはよう千冬」

「ああ、おはよう竜馬……じゃなくて魔神！お前の仕業だな！！」

俺の挨拶を千冬は返したがすぐに雪を睨みつけた。  
しかし雪はそんな事も気にせず雛人形を飾っていく。

「人の好意を無駄にしちゃって」

「何が好意だ！！」

ふと雪は人形を飾るのを止めて千冬に言った。  
あれがお前の好意なのか？  
怒鳴る千冬を見ながら俺は思った。

「まったく知ってるんだよ？千冬がブラクむぐ……」

「それ以上言うな！！！！」

雪が何かを言っている途中で千冬は雪の口を塞いだ。  
おお、気付けなかった。

何と言う早技。

「と言うか雪？雛祭りって具体的に何をするんだ？」

「むぐぐ……」

飾られている雛人形を見ながら俺が雪に問いかけるとぐぐもった声が聞こえてきた。

振り向くと未だに雪は口を掴まれていた。

「……千冬、雪が窒息しかけてる」

「ッ！！す、すまん！！」

俺の言葉に千冬は慌てて雪の口から手を離した。

雪は勢いよく息を吸い込んだ。

「こ、殺す気！？」

「だから謝っただろう！！」

2人共顔を赤くして（両者とも意味は全く違うが）言った。  
平和だなあ…

「で、もう一回聞けど雛祭りって何をするんだ？」

「さあ？」

俺の問いに雪は首を傾げた。  
知らないのかよ。

「あゝじゃあ、あれだ。俺の授業の時にイベントでもやるか」  
「それでは授業に支障がでるのではないか？」

俺の言葉に千冬は言った。  
ふふふ…

「心配しなさんな、おそらく一夏が最も鍛えられると思う方法だか

「ら

「ふむ、ならば良いか」

よし後は準備だな。

俺は急いで部屋を出て材料等を仕入れに向かった。

幸いにも今日の俺の授業は一番最後だ。

盛り上げてやろう!!!

side out

side 第3者視点

そして一気に時間は進み竜馬の受け持つ授業になった。

しかしグラウンドに生徒がそろったというのに竜馬の姿が無い。

「あれ？竜馬はどこだ？」

「さあ？」

一夏の問いに雪が答えた。

不意に生徒達を影が覆った。

「お、集まってるな」

「あ、お兄ちゃん？…何それ？」

竜馬の声を聞き雪が声のした方を見るとそこには巨大な雛壇を持った竜馬がいた。

どうやら影の正体は巨大な雛壇らしい。

「さしてそれじゃあ早速始めるか!!」

「始めるって何をですか？」

竜馬の言葉に筭が尋ねた。



お兄ちゃんの横に移動しながら私は思った。

「あれ？お前は良いのか？」

「まあね、お兄ちゃんと一緒に写れるなら別だけどさ」

やるわけは無いと思うけど私は言った。

「あゝ…一応は着るか？久々に兄妹の雛祭りだ」

「良いの!？」

予想外の答えに私は聞き返した。

私の問いにお兄ちゃんは笑って頷いた。

「ああ、ちょっと待ってな持ってくるから」

「うん」

そう言ってお兄ちゃんは歩いて行った。

あ、誰かにカメラで写真を撮ってもらわないと…

「持ってきたぞ、んじゃ着替えようか」

「分かった」

そして私は渡された着物を持って更衣室に向かいました。

side out

side 魔神竜馬

「ど、どう…かな? / / / / /」

「うん、似合ってるぞ」

そう言っただけ俺は雪の頭を撫でた。

すると雪は顔を赤くしてしまった。

「それじゃあ写真に撮るか」

「うん／＼／＼」

俺は雪と並びカメラを向けた。

「はいチーズ」

フラッシュが起こり俺と雪の姿が映された。  
これは大切な思い出かな。

「じゃ、後で現像して渡すから」

「わ、分かったよ」

さて、一夏はどこかな？  
そう思っただ俺は移動した。

「その格好で行くの？」

「着替えるのがめんどくさいしね」

雪の問いに答えて俺は一夏を探しに向かった。  
えっと…

「あれは…セシリアだな」

セシリアは校舎の屋上で双眼鏡を覗き込んでいた。  
どうやらセシリアは高い位置から搜索、発見次第向かうという戦法らしい。



「ふうん…まあスナイパーらしいっちゃらしいか」

これは評価にプラスだな。  
そして俺は移動した。

「っと今度は筈か」

目の前を凄く早さで走っている生徒がいたので眼で追うと筈だった。  
こちらはとにかくしらみつぶしに探すつもりらしい。

「効率が悪いかな…ちよっとマイナス」

ん？

あれは？

「あれ〜？綺麗な人がいる〜」

何で軽く寝ぼけてるんだ？

のほとけ 布ほんね仏本音通称【のほほん】はベンチの上から降りた。

「ありやりや〜寝てたら別の世界に来ちゃったかな〜？」

駄目だこりゃ。

授業中に睡眠、マイナスだな。

俺はのほほんを放置して歩き始めた。

「くっそおおおおお！！！！！！」

「あつちか…」

一夏の叫び声、おそらく隠れていたけど見つかったってところかな？

しばらく歩いていると女子生徒に追われている一夏を見つけた。

「うわっと!?!」

「うおっ!?!」

こちらに走って来る一夏が何かに躓いたかと思ったら俺を巻き込んで転びやがった。

そして周囲を女子生徒たちに囲まれた。

「終わりかな…?!」

すると女子生徒たちは頂垂れ始めた。  
なんだなんだ？

「一夏!! その女は誰だ!!」

「一夏さん!! その女性是谁ですの!!」

女子生徒たちをどかしながら箒とセシリアが一夏に向かって怒鳴った。  
ん？

「い、いや俺も知らないんだ。 転んでこの女の人にぶつかって…」

………言ったな？

俺はゆっくりと立ち上がり箒、セシリア、一夏を見た。

「誰が女だあああああああああ………!!!」

「!!!?!?!?!」

俺は怒声と共に3人の頭を殴った。

3人は頭を押さえて呻いている。

「え！？竜馬…先生？」

「他に誰がいる！！！」

女子生徒の問いに俺が答えると女子生徒たちは再び頂垂れた。  
何なんだよ本当に…

side out

side 第3者視点

頂垂れる女子生徒たちを説得し全員がグラウンドに集合した。

「あゝ…勝者が出なかったので全員その姿で写真に写れ。記念写真だ」

竜馬がそう言うとさっきまでの雰囲気はどこへやら歓声が湧いた。  
その後、生徒全員に写真を配る約束をしていた。

## 番外編 雛祭り（後書き）

〈霊使い達の雑談〉

感想と贈り物ありがとうございます。

バラランシャ様、ルシフェル様、フレイス様、空刀様、妖気様、月光閃火様感想ありがとうございます。

空刀様よりカードと雪に絶対にその人を手に入れることが出来る本を、

妖気様よりG - ウイルス（バイオハザード）を、

いただきました。

〈別世界〉

竜王「げほ…げほ…」

空刀「かは…かふ…」

竜王「さ、流石にきついんで終わりにしましょう」

空刀「さ、賛成です」

〈雑談所〉

「こんにちh…あれ？誰もいない？」

「本当ね。（あ、ちょうど良い物が）」

「何してるんだ？ティア」

ティアナ「ちょっと写真を撮りましょう。ほら、ユウキもこれに着替えて」

ユウキ「ああ」

少年少女着替え中

ティアナ「どうかな？」

ユウキ「似合ってるぞ」

ティアナ「あ、ありがと／＼／＼」

ユウキ「ほ、ほら写真撮ろっぜ!!」

ティアナ「う、うん!!」

「?勉強?の拷問部屋」

来也「あゝ…死ぬ」

こなた「いや、もう死んでるよね!?!」

西村「余裕そつだな、補習追加!!!!」

「第四訓練部屋」

雪「たあああああああああ!!!!!!」

乱太「おおおおおおおおお!!!!!!!!」

竜馬「(あははは…妖精が見えるよ)」 現実逃避中



## 兄妹でデュエル！！

### side 第3者視点

「私から行くよ！！ドロー！！？マッド・ロブスター？を召喚！！」

雪の場にエビの様なモンスターが現れた。

マッド・ロブスター ATK/1700 DEF/1000

「カードをセットしてターン終了」

雪 手札4 場 マッド・ロブスター セットカード1 LP8000

「俺のターン、ドロー！！？紅魔 - 十六夜咲夜？を召喚！！」

「十六夜咲夜、参上しました」

竜馬の場に咲夜が現れた。

紅魔 - 十六夜咲夜 ATK/1900 DEF/1500

「…お兄ちゃん、聞いても良い？」

「ん？何だ？」

咲夜を見て雪はゆっくりと尋ねた。

「その人って紅魔館のメイド長の十六夜咲夜？」

「ああ、そうだけど」

雪の問いに竜馬は頷いた。

「ふん……」

「さらに俺は手札から？メイド召集！？を発動！！このカードは自分の場に？紅魔・十六夜咲夜？がいる時に発動できる。自分の場にメイド妖精トークンを4体特殊召喚する！！」

「集合しなさい！！」

メイド妖精トークン 悪魔族・光・星2・ATK/DEF1000

×4

咲夜の呼び声とともに竜馬の場にメイド妖精が4人集まった。それぞれ外見は異なっている。

「？メイド召集！？を発動したターン特殊召喚は行えない。カードを1枚セットしてターン終了」

竜馬 手札3 場 十六夜咲夜 メイド妖精トークン×4 セット  
カード1 LP8000

「私のターン、ドロー！！私は？極星獣グルファクシ？を召喚！！」

雪の場に黒い馬の様なモンスターが現れる。

極星獣グルファクシ ATK/1600 DEF/1000

「レベル3？マッド・ロブスター？にレベル4？極星獣グルファクシ？をチューニング！！」

三つの光の球が光の輪を潜る。



「凍てつく翼が眼前の世界を凍結する。全てを氷結らせ破碎せよ！  
！シンクロ召喚！！降臨せよ！？氷結界の龍　グングニール？！！  
！！」

雪の場に蒼いドラゴンが現れた。

氷結界の龍　グングニール　ATK/2500　DEF/1700

「手札を2枚捨てて効果を発動！！？紅魔 - 十六夜咲夜？とそのセ  
ットカードを破壊！！」

「くっ！！罨カードオープン！！？威嚇する咆哮？！！」

竜馬の場のセットカードが開き凄まじい咆哮が響き渡る。

しかし効果で咲夜は破壊される。

「きゃああああ！！！！！！」

「すまない咲夜……」

破壊される咲夜を見て竜馬は拳を握りしめた。

「？威嚇する咆哮？でバトルフェイズは行えないからターン終了だ  
よ」

雪　手札1　場　氷結界の龍　グングニール　セットカード1　L

P8000

「俺のターン、ドロー！！俺は？紅魔 - 紅美鈴<sup>ホンメイリン</sup>？を召喚！！」

「……ZZZ」

竜馬の場に眠っている美鈴が現れた。

紅魔 - 紅美鈴     ATK / 1900     DEF / 2000

竜馬は呆れながら美鈴を起こした。

「寝てるなよ……」

「いや〜最近平和だったんでつい」

美鈴は頭をかきながら言った。

「まあ、良いや。頼むぞ」

「はい!!」

美鈴の周囲にメイド妖精が集まる。

「レベル2?メイド妖精トークン?4人にレベル4?紅魔―紅美鈴?  
?をチューニング!!」

「はあっ!!」

美鈴はそう言ってジャンプし光の輪になる。  
メイド妖精たちは光の輪を潜っていった。

「紅に染まりし館の禁忌よ、我が意に従いて現れよ!其は禁忌と万  
壊の申し子!!シンクロ召喚!!現れよ、?紅魔-フランドール・  
スカーレット?!!」

「ひっさしぶり〜」

そう言ってフランドールは竜馬に抱きついた。

紅魔・フランドール・スカーレット ATK/4500 DEF/  
2000

「そうだな。さて、？紅魔・フランドール・スカーレット？で？氷  
結界の龍 グングニール？を攻撃！」

「壊れちゃえ！！禁忌？クランベリートラップ？！！」

フランの放った弾幕がグングニールに当たり爆発する。  
爆煙が消えるとグングニールはどこにもいなかった。

雪 LP8000 6000

「俺はカードを1枚セットしてターン終了」

竜馬 手札2 場 紅魔・フランドール・スカーレット セットカ  
ード1 LP8000

「私のターン、ドロー！！…お兄ちゃんに抱きつくなんて。私は手  
札から？ソニックバード？を召喚！効果でデッキから儀式魔法を手  
札に加える！！私が手札に加えたのは？エンド・オブ・ザ・ワール  
ド？…！！」

雪の場にジェットを付けた鳥が現れた。

ソニックバード ATK/1400 DEF/1000

「手札から？エンド・オブ・ザ・ワールド？を発動！！場の？ソニ  
ックバード？をリリース、墓地の？儀式魔人ディザース？？儀式魔  
人プレコグスター？をゲームから除外！！現れて！！？終焉の王デ  
ミス？！！」

雪の場のソニックバードが消え新たに斧の様な物を持った悪魔が現れた。

終焉の王デミス ATK/2400 DEF/2000

「？終焉の王デミス？の効果を発動！！ライフを2000払いこのカード以外のカードを全て破壊する！！」

雪 LP6000 4000

「フラン！！！」

デミスから発せられる間に飲み込まれフランは破壊された。

儀式魔人たちはグングニールの効果の時に墓地に送られていたのだ。

「？紅魔 - フランドール・スカーレット？の効果を発動！！このカードが墓地に送られた時、自分フィールド上にこもりトークンを出せるだけ特殊召喚する！！」

こもりトークン 悪魔族・闇・星1・ATK/DEF1000

x5

「？終焉の王デミス？でこもりトークンに攻撃！！ジ・エン終焉！！」

こもりトークンは斧によって切り裂かれ破壊された。

「私はこれでターン終了」

雪 手札0 場 終焉の王デミス セットカード1 LP4000

「俺のターン、ドロー!!!スタンバイフェイス時に?紅魔・フラン  
ドール・スカーレット?の効果を発動!!!自分の場に一体でもこう  
もりトークンがいる場合、場のこうもりトークンを全てリリースし  
て墓地から?紅魔・フランドール・スカーレット?を特殊召喚する  
!!!」

紅魔・フランドール・スカーレット ATK/4500 DEF/  
2000

「インチキ効果!!!!」

「いや、知らねえよ!!!」

フランの効果聞いて雪は叫んだ。

「くっつ...発動しておくだった!!!罫カードオープン!!!?生贄  
封じの仮面?!!!!!!」  
「げっ!?!」

雪の場におどろおどろしい仮面が現れた。  
その仮面を見て竜馬は露骨に嫌そうな表情をする。

「...俺はカードを2枚セットしてターン終了」

竜馬 手札1 場 紅魔・フランドール・スカーレット セットカ  
ード3 LP8000

兄妹でデュエル！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

銃王 海さん、バラランシャ様、ルシフェル様、フレイス様、月光  
閃火様感想ありがとうございます。

銃王 海さんよりはいろんなものを封じ込められるカードを、  
いただきました。

竜王「あゝ…何故か前後半で分かれる事になった」

竜馬「おいおい…」

「「お姉さま吉井君！！！！」」

竜王「お？銃王 海さんの所より久保利光・白井黒子・初春飾利・  
佐天涙子・木下秀吉・木下優子が来ました」

優子「あら？竜馬はどこに行ったのかしら？それに知らない女の人」

竜馬「俺が竜馬だ！！！」 優子の頭を左右から挟み力を込める

優子「あだだだだだだだだだ！？」

秀吉「主も同じじゃったのか！！」 仲間を見つけて嬉しそうな眼



竜王「あ、そう言えばお茶っているのかな？」

小町「大丈夫ですよ。どうせ説教に集中して飲みませんから」

竜王「そうか」

「？勉強？の拷問部屋」

西村「そうですか、分かりました」

映姫「ありがとうございます。後は小町を待つだけですな」

小町「連れてきましたよ」

竜馬「えっと、何で呼ばれたんだ？」

映姫「……竜馬。」

竜馬「は、はい！！」

映姫「あなたは、フラグをたて続けている……そのことを自覚しなさい。」

竜馬「えっ！？俺フラグをたてて……。」

映姫「いい加減にしなさい！！！」

竜馬「は、はい！！！」

映姫「いいですか？あなたは、フラグを作るせいで毎日私の仕事が



2倍になるのですよ!!」

竜馬「どうして俺がフラグをたてるたびに仕事が2倍になるの!?  
ってというか俺関係ないよね!!」

映姫「それにあなたは雪に甘い!甘すぎです!!攫われたにもかかわらず怒りもしない!!それでは雪が成長できません!!」

竜馬「それは…」

映姫「次に来也!!」

来也「え!?俺!?!」

映姫「長々と咲夜と戦って、咲夜は疲労困憊でしたよ!!」

来也「それはあっちが攻撃してくるから…」

映姫「関係ありません!!!他にも……」

〈雑談所〉

竜王「うわあ…」

小町「やってるねえ」

竜王「あれ?お前はあっちにいらなくて良いの?」

小町「飛び火はごめんだからね」

竜王「そうか。あ、これお土産代りに持ってって」 ケーキやパン等

小町「お、ありがとう」

竜王「それじゃあ締めてくれるか？」

小町「オツケー。闇を狩る少年続くよ」

雪「お兄ちゃんに好きな人が出来たら攻撃しない…お兄ちゃんに好きな人が出来たら攻撃しない…お兄ちゃんに好きな人が出来たら攻撃しない…お兄ちゃんに好きな人が出来たら攻撃しない！！！！！！」

竜王「次回は空刀様から貰ったオリカを使う予定です」

オーバーキルって結構難しいはずなんだけどね…

side 第3者視点

「私のターン、ドロー！私は手札から？魔界の足枷？を発動！！？  
紅魔・フランドール・スカーレット？に装備！！」

「きゃっ！？重いよ〜」

フランの足に巨大な鉄球がつかねられフランは地面に落ちた。

紅魔・フランドール・スカーレット ATK/4500 100  
DEF/2000 100

「？終焉の王デミス？で？紅魔・フランドール・スカーレット？に  
攻撃！！終焉<sup>シ・ヘン</sup>！！」

「きゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

デミスの攻撃によってフランは破壊された。

そして竜馬の場にこうもりトークンが現れる。

竜馬「くっ…フラン」

竜馬 LP8000 5700

「私はこれでターン終了」

雪 手札0 場 終焉の王デミス 生贄封じの仮面 LP4000

「俺のターン、ドロー！！？生贄封じの仮面？があるせいでこうも  
りトークンはリリースできない…俺はこれでターン終了だ」

竜馬 手札2 場 こうもりトークン×5 セットカード3 LP  
5700

「私のターン、ドロー！？終焉の王デミス？でこうもりトークンに  
攻撃！！」

デミスの攻撃によりこうもりトークンが破壊された。

「これでターン終了」

雪 手札1 場 終焉の王デミス 生贄封じの仮面 LP4000

「俺のターン、ドロー！…ターン終了」

竜馬 手札3 場 こうもりトークン×4 セットカード3 LP  
5700

「私のターン、ドロー！私は？ソニックバード？を召喚。効果でデ  
ッキから儀式魔法を手札に加える！私が手札に加えたのは？高等儀  
式術？！！」

雪の場に再びジェットを付けた鳥が現れた。

ソニックバード ATK/1400 DEF/1000

「私は手札の？破滅の女神ルイン？を選択して？高等儀式術？を発  
動！！デッキから？セイバーザウルス？？マッド・ロブスター？？  
大木炭18？を選択して墓地に送る！来て！！？破滅の女神ルイン  
？！！」

雪の場に杖の様な槍の様な物を持った女性が現れた。

破滅の女神ルイン ATK/2300 DEF/2000

「？終焉の王デミス？？破滅の女神ルイン？？ソニックバード？で  
こもりトークンを攻撃！！」

「畏カードオープン！！？リアクティブアーマー炸裂装甲？！！？終焉の王デミス？を破  
壊！！」

竜馬の場のセットカードが開きデミスは破壊された。

しかしルイン、ソニックバードの攻撃でこもりトークンが2体破  
壊された。

「？破滅の女神ルイン？の効果を発動！このカードが戦闘によつて  
相手モンスターを破壊した場合、もう一度だけ攻撃できる！！」

ルインは再び杖を振りかぶつてこもりトークンを攻撃した。

「私はこれでターン終了」

雪 手札0 場 破滅の女神ルイン ソニックバード 生贄封じの  
仮面 LP4000

「俺のターン、ドロー！俺は手札から？暗黒界の雷？を発動。俺が  
破壊するのは俺のセットカード！」

「自分のカードを破壊…何を狙ってるのかな？」

竜馬の場のカードに雷が当たりセットカードが開く。

「俺が破壊したカードは？黄金の邪神像？！よって俺の場に邪神トークンを特殊召喚する！」

邪神トークン ATK/DEF1000

「そして手札を1枚墓地に捨てる。しかし俺が墓地に捨てるカードは？暗黒界の軍神シルバ？このカードは手札から墓地に捨てられた時、特殊召喚される」

暗黒界の軍神シルバ ATK/2300 DEF/1400

「これで俺の手札は2枚、そしてさらに手札から？吸血鬼の施し？を発動！ライフを半分支払手札が6枚になるようにドロウする」

竜馬 LP5700 2350 手札1 6

「よし！？デュアルサモン二重召喚？を発動！！？赤蟻アスカトル？と？スーパイ？を召喚！！」

竜馬の場に赤い蟻と仮面が現れた。

赤蟻アスカトル ATK/700 DEF/1300

スーパイ ATK/300 DEF/1000

「レベル5？暗黒界の軍神シルバ？にレベル3？赤蟻アスカトル？を、レベル4？邪神トークン？とレベル1？こもりトークン？にレベル1？スーパイ？をチューニング！！」

同時に五つの光の球が光の輪を潜る。

「太陽と月影、今ここに現れる！混沌導く礎こんとみちび いしずえとなれ！！シンクロ召喚！！現れよ！？太陽龍インテイ？！！？月影龍クイラ？！！」

竜馬の場に蒼と紅の龍が現れた。

太陽龍インテイ ATK/3000 DEF/2800

月影龍クイラ ATK/2500 DEF/2000

「：普通は同時にそろわないと思うよ？」

「そうか？？太陽龍インテイ？で？破滅の女神ルイン？を、？月影龍クイラ？で？ソニックバード？を攻撃！！」

インテイはルインに向けて炎を、クイラはソニックバードに向けて冷気を放った。

「きゃああ！！！！」

雪 LP4000 3300 2200

「俺はこれでターン終了」

竜馬 手札3 場 太陽龍インテイ 月影龍クイラ セットカード  
1 LP2350

「私のターン、ドロー！カードを1枚セットしてターン終了」

雪 手札0 場 生贄封じの仮面 セットカード1 LP2200

「俺のターン、ドロー！罫カードオープン？カース・オブ・スタチユー？！」

竜馬の場に一体の石像が現れた。

カース・オブ・スタチュー ATK/1800 DEF/1000

「そして？紅魔・小悪魔？を召喚！」

「こあゝ お久しぶりです」

竜馬の場に小悪魔が現れ礼をした。

紅魔・小悪魔 ATK/1300 DEF/1500

「？紅魔・小悪魔？の効果を発動！デッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る！！俺はデッキから？暗黒界の尖兵ベージ？を特殊召喚！！」

竜馬の場に槍を持った悪魔が現れた。

暗黒界の尖兵ベージ ATK/1600 DEF/1300

「レベル4？カース・オブ・スタチュー？とレベル4？暗黒界の尖兵ベージ？にレベル4？紅魔・小悪魔？をチューニング！！」

「頑張ってくださいね」

小悪魔は竜馬に投げキッスをしてから光の輪になった。  
八つの光の球が光の輪を潜る。

「大いなる図書館の主よ、我が意に従いて現れよ！其は七曜の魔女！！シンクロ召喚！！現れよ！？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？！！」



「久しいわね竜馬」

竜馬の場に方手に本を持ったパチュリーが現れた。

紅魔 - パチュリー・ノーレッジ ATK/2500 DEF/500

「?紅魔 - 小悪魔?の効果を発動したターン、バトルフェイズは行えない。俺はこれでターン終了」

竜馬 手札3 場 太陽龍インティ 月影龍クイラ 紅魔 - パチュリー・ノーレッジ LP2350

「私のターン、ドロー!モンスターをセットしてターン終了」

雪 手札0 場 セットモンスター1 セットカード1 LP2200

「俺のターン、ドロー!俺は手札から?雷の使途?を発動。デッキから?神咲紅葉?を特殊召喚する」

「呼んだ?」

竜馬の場に短髪の少女が現れた。

神咲紅葉 ATK/2600 DEF/2500

「ああ、?太陽龍インティ??月影龍クイラ??紅魔 - パチュリー・ノーレッジ??神咲紅葉?でダイレクトアタック!!!」

「明らかにオーバーキルだよね!?畏カードオープン!!!?進入禁止!No Entry!!!?」

雪の場のカードが開くと竜馬の場のモンスター（インティ、クイラ）と人間（パチュリー、紅葉）は防御態勢に変化した。

「ちっ！俺はこれでターン終了」

竜馬 手札3 場 太陽龍インティ 月影龍クイラ 紅魔・パチュリー・ノーレツジ 神咲紅葉 LP2350

「私のターン、ドロー！セットモンスターをリリースしてモンスターをセット、ターン終了」

雪 手札0 場 セットモンスター1 LP2200

「俺のターン、ドロー！……勝った」

「え、！？」

竜馬の言葉に雪は驚きの声を上げた。

むしろこの状態で逆転を狙っているあたりが竜馬の妹と言えるか……

「俺は手札から？サンダークラッシュ？を発動。このカードは自分の場に？神咲紅葉？と名の付くモンスター……と言うよりも人間がいる場合のみ発動できる。相手の場のカードを1枚破壊する！」

「雷斬！！」

雪の場のセットモンスターに紅葉は雷撃を放った。

セットモンスターは千年の盾だった。

千年の盾 ATK/0 DEF/3000

「危ね……さて、？太陽龍インティ？？月影龍クイラ？？紅魔・パ

チユリー・ノーレッジ?? 神咲紅葉? でダイレクトアタック!!!」  
「きゃああああああ!!!」

雪 LP2200 - 800 - 3300 - 5800 - 8400

side out

side 魔神竜馬

「あゝ面白かった」

「オーバークルにもほどがあつたよ!？」

俺の言葉に雪は反応し叫んだ。

「ところで竜馬? この子は？」

「ああ、俺の妹の雪だよ。雪、パチュリーノーレッジだ」

パチュリーに聞かれたので俺は雪を紹介した。

「よろしくパチュリー。それでお兄ちゃん、この人は？」

「ん? ああ、スネークバイトのメンバーの1人、神咲紅葉だよ」

「よろしく...」

俺が紹介すると紅葉は雪と握手をした。

さてと...

「俺は一旦部屋に戻って成績をつけてくるから話しててくれ。えつと...? 紅魔 - レミリア・スカーレット?? 紅魔 - 十六夜咲夜?? 紅魔 - 小悪魔?? 紅魔 - 紅美鈴?」

俺はそう言いながらカードをセットしていく、と言ってもこれで召喚した場合会話が出来る程度だが...

「それじゃあ、女子たちで話しててくれ」

そう言っつて俺は部屋に向かった。

背後から笑い声等が聞こえてきているので大丈夫だろう。

オーバーキルって結構難しいはずなんだけど…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、フレイス様、月光閃火様、空刀様、妖気様感想ありがとうございます。

空刀様より蛇川愛用の二丁拳銃 ベストロウリイ、蛇川愛用の双剣

黎明と修羅、絶望ノ乱舞の秘伝書、魔魚転身の秘伝書を、

妖気様よりなのはに竜馬と雪の雛祭り写真を、

月光閃火様より竜馬に技（奇跡ノ光刃）を、

いただきました。

竜王「ふ〜…デュエルを書くのって疲れる」

雪「オーバーキルが好きなの？」

竜王「いんや、ただ組むデッキのほとんどがオーバーキル出来るんだよね」

竜馬「無意識!？」

竜王「ちなみに、本編に出た神咲紅葉のほかにもスネークバイトのキャラのカードはあります」

竜馬「日毎に入れ替えてるしな」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所より映姫とティアナが来ました」

映姫「さて、来た理由は分かっていますね？」

竜王「おうよ!!」

竜馬「……………説教やだ」

雪「（お兄ちゃんが落ち込んでる!?!）」

映姫「では、……………雪!!」

雪「は、はい!!」

映姫「あなたの人生は浄玻璃の鏡を見ることでわかります…今から説教をします。」

雪「えっ!?!?説教!?!?嫌だよ説教なんて聞きたくないよ!!お兄ちゃん助けて!!」

竜馬「……………無理だ、もうあの説教を聞きたくない……………」  
落ち込んでいる。

そして映姫は浄玻璃の鏡を取り出し雪の人生を見る…

映姫「……………雪。」

雪「は、はい!!」

映姫「あなたの人生を見ましたが、？模擬戦VSスノウ 咲き誇って冰雪華？の件についての話です。」

雪「うつつ…。」

映姫「お兄ちゃんを追って来た結果は死ぬことはどういことですか!!！」

雪「だって…お兄ちゃん会いたかったから…。」

映姫「確かに、家族を失うのは一番つらいですが、竜馬に会うためだけに死んでしまったということは自分の命を失うということですよ!!なぜ竜馬の分まで生きようと思わなかったのですか!!！」

雪「うつつ…。」

映姫「あなたがした行為は、許さないことです。雪、あなたに判決を下す。有罪です。」

雪「……………」

竜馬「おい、有罪って…。」

竜王「竜馬、黙って聞いている。」

雪「……………閻魔様、私は地獄へ送るのですか?」

映姫「話はまだ終わっていません…雪。」

雪「は、はい……。」

映姫「あなたは確かに有罪と決まりました……ですが。」

雪「……………」

映姫「もう過ぎたことは仕方ありませんあなたができることは、自分の命を大切にすること……これが今の貴方が積める善行よ。」

雪「……自分の命を……大切に？」

映姫「竜馬來なさい!!」

竜馬「えっ?どうして俺が!？」

竜王「おい、早くいかないと勉強部屋に……………」

竜馬「……………行ってくる。」

竜馬は映姫のところに行き正座をする。

映姫「いいですか?竜馬、雪に向けていったことはあなたにも関係があるのですよ!!」

竜馬「えっ?」

映姫「あなたは自分のことより他人の命を優先する性格です。もしあなたが死んでしまったら雪は悲しみますよ!!」



竜馬「……………」

映姫「あなたに言えることは一つ…今日、明日は雪の近くにいなさい。」

雪「えっ?」

竜馬「!?!」 驚愕している

映姫「あなたはシスコンですが…今回は仕方ありません。雪を安心させるように傍にいなさいこれが今の貴方が積める善行よ。」

雪「…………閻魔様…………ありがとうございます。」

竜馬「…………本当にありがとうございます。」

映姫「さて、説教は終わりましたけど…まだありますよ!!特に雪についての説教です!!」

雪、竜馬「「えっ?」」

映姫「次は、?いもうと?の話です!!雪、あなたは竜馬がほしいからと言って痺れ薬を使うとは…………有罪です!!」

雪、竜馬「「もう!!説教はいやだ……………」」

竜王「ハハハハハ…………説教聞きたくないな。」

リユーク「俺も同感だはあ、俺はリンゴをたくさん食べればいいんだけどな…………」

映姫「！？あなた死神！！さあこっちにきなさいあなたも説教です！！言っておきますけど私は閻魔ですのでデスノートに書いても無駄ですよ！！」

リユーク「シドウー！！助けてくれ！！」

シドウ「……無理だよ。リユーク頑張ってくれ。」

リユーク「この裏切り者ー！！」

映姫「死神2、あなたも説教です。」

シドウ「えっ？」

映姫「いいですか？なぜデスノートを人間界に渡す必要が……」

竜馬、雪「……………」 気絶中

竜王「これはすごいな……閻魔様の説教で全員気絶しているぞ。あっ、ティアナ締めよろしく。」

ティアナ「そうですね……闇を狩る少年続きます！！」

映姫「いいですか！！あなたは、リンゴを食べすぎなのです！！竜王さんの気持ちを理解しなさい！！リユークあなたは有罪です！！」

リユーク「ご、ごめんなさい！！」

シドウ「なぜ私がリンゴについて説教を（泣）」



クラス対抗戦への乱入者？いや機か：

side 魔神竜馬

「鈴音、思いつ切り叩き潰してこい！！」

「あつたり前よ！！」

現在俺は鈴音のピットにいる。  
箒達は一夏の方にいる。

「にしても一夏の方を応援しなくて良いわけ？」

「ん？全然、だって俺生徒じゃないし」

鈴音の言葉に俺は首を振った。

むしろ俺は？闇？を待つだけでも良いんだけどな。

「それじゃ、行ってくるわね！！」

「おう！あ、勝ったら飯を奢ってやるよ」

俺の言葉に鈴音は親指をあげて答えた。

そして鈴音はアリーナに飛び立った。

「さて、と。俺も千冬達の所に向かうか」

そう言っつて俺は千冬達のいるスペースに向かった。

side out

side 魔神雪

「あ、お兄ちゃん」

部屋に入ってきたお兄ちゃんを見て私は飛び付いた。

「おお、雪か。んで？どんな状況？」

「今は…一夏が押されてるね」

うん、ここは原作通りだね。

ファフナーがいる事には驚いたけど流石にここには来れないでしょ。

「あ…：やっぱ鈴音は強いな」

「…お兄ちゃん？なんで鈴音リンネンじゃなくて鈴音すずねって呼んでるの？」

お兄ちゃんという言葉聞いて私は尋ねました。  
いつの間に会ってたんだろ。

「ん？前に廊下を歩いてる時に如何にも怒ってますって言う雰囲気  
だったから気になって声をかけてそれから戦闘訓練とかをしてた  
んだよ」

私の問いにお兄ちゃんはあっさりと答えました。

戦闘訓練…

「他には誰かいた？」

「いや、俺と鈴音だけだよ」

くうっ…

私がそこにいれば！！

「それがどうかしたのか？」

「う、ううん！！なんでもない！！」

でも鈴音は一夏に執着してる。  
お兄ちゃんに好意は無いね。

「さつきから何を話しているんだ？魔神、竜馬」  
「どうでも良い話だよ」

画面を見ていた千冬が聞いてきたので私は適当に答えた。  
そろそろかな？

「何だ！？」

「未確認のISがアリーナに侵入！！」

来たみたいだね。

「その数、31！！」

「え！？」

31！？

何その数！？

「くっ！無々！！」

『セットアップ』

お兄ちゃんが叫ぶとお兄ちゃんの服はバリアジャケットに変化した。

「待って、お兄ちゃん！！どうする気！？」

「決まってる！全部叩き潰す！！」

そう言ってお兄ちゃんはアリーナに向かって走って行ってしまいました。

お、落ち着こう。

こういう時はコーヒーだね、うん。

「…魔神、それは塩だ」

「千冬こそ、それ小麦粉だよ」

私と千冬は同時にスプーンを止めた。  
室内に気まずい雰囲気広がった。

「何で塩があるの」

「なぜ小麦粉があるんだ」

誰も答えようとはしません。

「「山田先生、どうぞ」

「へ！？あ、あの、それって塩が入ってるやつと小麦粉が入ってるやつじゃ…」

「「どうぞ」

真耶の言葉を見殺して私と千冬はカップを突きだした。

「熱いから」

「一気に飲むと良い」

私、千冬と続いて言った。

side out

side 魔神竜馬

「31機、叩き潰すぞ」

』ですな』

俺の言葉に無々は答えた。

俺は白い狼の面をつけ無々はナイフの形状である。  
そして俺はアリーナの射出口についた。

「一夏！！鈴音！！お前等は退避しろ！！」

「誰！？」

俺の言葉を聞いて鈴音が驚きの声を上げた。  
ひとまずは変身しておかないと…

「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』！！」

呪文を唱えて俺はフェンリルの姿に変身した。

「まずは2人を…影道！！」

「うわ！？」

「きゃあ！？」

2人は影から伸びてきた触手にからめとられ影に沈んでいった。  
送り先はさっきの部屋だ。

「さあ、覚悟はいいか？」

そう言っつて俺は敵の群れに飛び込んだ。

side out

side 第3者視点





竜馬の声が響き渡った瞬間、竜馬の姿は消え敵機は粉々に切り刻まれていた。

数秒後、敵機は爆発する。

「これで終わりだな」

そう言つて竜馬は千冬達のいる部屋に戻った。

side out

side 魔神雪

「……………てえい！！！」

「う……………」

私は立っている一夏の背後に回り込み一夏を気絶させた。部屋にいる人間は全員驚いている。

「んじゃ、鈴音。一夏を保健室に持ってって」

「あ、うん」

そして私は部屋から出た。

するとお兄ちゃんがさっきの恰好で戻ってきた。

「…お兄ちゃん。その格好は？」

「ん？説明して無かったな。俺の使える魔法の一つ？魔狼転身？だ、この姿の時はフェンリルって呼んでくれると助かる」

フェンリル？

確か大きな狼の名前だったかな。

「ふ〜ん…戻らないの？」

「それもそうだな」

するとお兄ちゃんの姿が元に戻りました。

「うーん、疲れたから部屋で寝るわ。千冬に伝えておいてくれないか？」

「うん、分かった」

そう言ってお兄ちゃんは部屋に向かって行きました。

またあの部屋に戻るのかあ…

「まあいつか」

私は来た道をUターンした。

途中で一夏を運んでいる鈴音に会ったけど気にしない。

クラス対抗戦への乱入者？いや機か…（後書き）

～霊使い達の雑談～

感想と贈り物ありがとうございます。

月光閃火様、妖気様、フレイス様、空刀様、ルシフェル様感想ありがとうございます。

空刀様より後書きメンバー全員に雛祭りの甘酒を、

いただきました。

竜王「…どうした？」

雪「お兄ちゃんが甘酒で酔った」

竜馬「あはははは」

～？勉強？の拷問部屋～

西村「と言う訳でお前の説教をする事になった！！！！」

来也「何故ええええええ！！！！！！！！！！」

～雑談所～

「春ですよ」

竜王「お？フレイス様の所よりリリー、フェイト、妖夢が来ました」

妖夢「初めまして魂魄妖夢と言います」

竜馬「あははは みよん!!」

雪「…所でリリーは何してるの?」

リリー「春ですよ」 竜王の肩に乗っている

フェイト「……………死にたい」

竜王「やべえ!!! フェイト来い!!!」 フェイトの腕を掴み癒しの部屋に向かう

妖夢「大変そうですね」

雪「あゝ…今日はお兄ちゃんも壊れてるからね」

竜馬「…この羊羹を作ったのは誰だ!!俺だ!!あはははは!!!」

妖夢「はあ…」

竜王「ただいま」

リリー「春ですよ」

雪「…懐かれた?」

竜王「違つと思つぞ?」

リリー・竜王「春ですよ」

雪「はもんな!!」

妖夢「あ、所で幽々子様はこちらに来てもよろしいでしょうか？」

竜王「大丈夫だよ。食料はいっぱいあるから」

雪「あれ？お兄ちゃんが静かだ…」

竜馬「スー…スー…」 睡眠

竜王「これだけ見ると女だな」

〈癒しの部屋〉

フェイト「……………キャロ」

〈？勉強？の拷問部屋〉

西村「ほかにも…聞いているのか!!」

来也「聞いているよ(何でこんな目に…)」

〈雑談所〉

竜王・リリー「春ですよ」

雪「駄目だこりゃ、締めちゃってくれる？」

妖夢「はい、闇を狩る少年続きます」

竜馬「誰が女だああ!!…ムニヤムニヤ…」

竜王「寝言でつつこんだ。しかし遅い」

転校生…生徒が増えるのか。

side 魔神竜馬

「お？どうかしたのか？真耶」

「あ、竜馬先生。実はクラスに転校生が来るんですよ、それも2人」

重そうに何かを持つ真耶を見て俺は声をかけた。  
2人も転校生が？

「それじゃあその手に持っている物は？」

「これは転校生の資料ですよ」

俺の問いに真耶は答えた。

…なんか危なっかしいな。

「貸せ、俺が持つ」

「え？で、でも…」

真耶は何かを言っていたが気にせず真耶の手から荷物をとった。

「さて、これはどこに運ぶんだ？」

「すみません。えっと、織斑先生の所です」

千冬の所か。

「千冬は今どこにいるか分かるか？」

「確か転校生の迎えに校門に」

今日かい！？

俺は驚いて資料を落としそうになった。

「…えっと、真耶？転校生の資料を転校生が来る日に出すのは遅いんじゃないか？」

「え？でも織斑先生は今日で良いと」

千冬が？

……まあ、良いか。

「それなら良いや。届けてくるよ」

「ありがとうございます」

そう言つて真耶は礼をして歩いて行った。

まだ何かあるのか？

「っと校門校門」

そして俺は校門に向かった。

「えっと千冬は…いたいた。おゝい千冬」

「む？竜馬か。おや？その資料は私が山田先生に頼んだものだが…」

千冬は振り向いて俺の手にある資料を見て言った。

後ろに2人いるのが転校生か？

「ああ、なんか危なっかしかったから俺が持ってきた。それでその2人が転校生か？」

「そうか。ああ、この2人が転校生だ。2人共、自己紹介をしる」

俺の問いに頷き千冬は2人に言った。



「シャルル・デュノアです。フランスから来ました」  
「男…?」

…いや、なんか変な気がする。

シャルルの自己紹介を聞きながら俺は何か違和感を感じた。

「はい、こちらに僕と似た境遇の方がいると聞いたので」  
「似た境遇…一夏の事か」

駄目だ、何でか分からないが違和感が消えない。

「んで?こつちは?」

「……………挨拶をしる。ラウラ」

一言も喋らずにこちらを見ている少女に千冬が言った。

「はい、教官」

「教官?」

少女の言葉を聞いて俺は千冬を見た。

「昔の話だ。ラウラ、ここでは教官と呼ぶな。私は教師でお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」  
「了解しました」

そう言って少女はこちらを向きなおした。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「そうか、この学園で戦闘訓練を教えている魔神竜馬だ」

短く少女、ラウラは名前を言った。

俺が名前と教えている事を言ったらシャルルとラウラは驚いた表情をした。

「何だ？」

「い、いえ。女性の先生かと思っただら男性でしたので……」

俺が尋ねるとシャルルが慌てて言った。

女性か……

「……髪切ろうかな」

「似合っているのだから切らなくて良いと思うが」

俺の呟きに千冬は答えた。

その様子をラウラは鋭く見ている。

「教か：織斑先生、その男性。魔神先生は何故戦闘訓練を？織斑先生が教えればよいのでは」

「他に出来る事が無いから」

ラウラの千冬に対する問いに俺は答えた。

「い、いや他にも出来るだろう！？少なくとも私は助かってるわけだし」

俺の言葉に何故か千冬が慌ててフォローした。  
何で？

「って千冬、時間は大丈夫なのか？」

「何？ふむ…ちょうど良いだろう。教室に向かう」

時間を指摘すると千冬は腕時計を見てそう言った。  
俺も教室に行くか、遅れたら雪が授業を受けねえ…

side out

side 魔神雪

びっくりしたなあ

転校生2人と一緒にお兄ちゃんが入って来るんだもん。

「お前が！！」

「！？」  
つとラウラが一夏を引つ叩くシーンだね。  
つてあれ？

「……何をする」  
「俺は何もしてないぞ」

ラウラが腕を振り被った瞬間、何故か動きを止めてお兄ちゃんを睨んだ。

何かしたのかな？

「ほら、自己紹介は終わったんだろ？各人かくじんすぐに着替えて第二グラウンドに来るように。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行うから」

そう言ってお兄ちゃんは教室から出て行った。

その間ラウラはずっとお兄ちゃんを睨んでいた。

side out

side 魔神竜馬

は…さっきは驚いた。  
いきなり一夏を叩こうとするんだから。

「いきなり教室で殺気を飛ばすな!!」  
「あで!?!す、すまん」

移動中に千冬に頭を叩かれた。

「いや、俺の知り合いがいきなり目の前で叩かれるのを見たらつい」  
「その割には私には殺気を飛ばさないな」

俺の言葉に千冬は問いかけた。

「そりゃまあ千冬はちゃんと手加減してるみたいだし、何より俺はお前を信頼している」  
「そ、そうかノノノノ」

千冬の間を見ながら俺が言ったら千冬は眼を逸らしてしまった。  
…嫌われてるのか?  
軽く傷つくなあ…

「っと徐々に集まってきたか」  
「そのようだな…ん？」

不意に千冬は歩きだした。  
どこに行くんだ?

「安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

あ、セシリアと鈴音か。

2人共結構でかい声で話してたからなあ。

「さーて、授業を始める。今日から実践訓練がメインだから全員気を付けるように!!」

「……………はい!!!!!!」「……………」

俺の掛け声に凄まじい返事が返ってきた。  
やっぱ人数が多いからかねえ？

「んじゃ、最初は戦闘を実演してもらうか。セシリア、鈴音2人共前に来てくれ」

「え……………」

俺の言葉に鈴音は不満そうな声を上げた。

「そう言うなって、後でケーキか何かを買ってやるから」

「しょうがないわね」

「それは、私にもあるんですよね？」

それで妥協したのか鈴音は出てきた。

セシリアの言葉に俺は頷く。

「それで。相手はどちらに？私は鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。<sup>セシリア</sup>返り討ちよ」

ちよつとは落ちつけよ……………」

俺は口には出さずに上空を指差した。

「上?」「上?」

上空を見上げて一夏が呟いた。  
それと同時に風を切る音が響き渡る。

「おい！？何か落ちてくるぞー!?」  
「避けるー!!」

箒が驚き声を上げ一夏が叫ぶ。

side out

side 第3者視点

凄まじい轟音がグラウンドに響き渡る。  
グラウンドは土煙が舞いあがり視界が悪い。

「何でこういつ時にドジをするかねえ?」  
「す、すみません…」

砂煙が晴れるとそこにはバリアジャケットを展開し真耶を抱きかかえた竜馬が立っていた。  
その周囲には真耶が装備しているISの武装がいくつも落ちていた。  
どうやら轟音の正体はこれらしい。

「山田先生?」  
「先生が相手ですか?」

真耶の登場に驚きながらセシリアと鈴音は聞いた。

「まあ、別に雪でも良かったんだが。あいつが辞退したからな」  
「だってやる気起きなかつたし」

竜馬の言葉を聞いて雪は答えた。

転校生…生徒が増えるのか。(後書き)

〈霊使い達の雑談〉

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、銃王 海さん、妖気様、空刀様、フレイス様、月光  
閃火様感想ありがとうございます。

銃王 海さんより火炎放射機を、

空刀様より甘酒を、

いただきました。

竜王「……一夏のイベントを潰した!!」

竜馬「俺は原作を知らねえ!!」

「こんにちは!!」

竜王「んお?銃王 海さんの所より吉井・坂本・島田・土屋・秀吉・  
姫路・はやて・知世が来ました」

竜馬「ひいつ!!!!」 土屋・はやてから距離をとる

竜王「さて、俺は来也に小麦粉入りコーヒーを渡してこよう」

「こんにちは!!」

竜馬「あ、空刀様の所より蛇川・神咲・空刀様が来ました」

蛇川「さあ飲もう!！」

竜馬「もごう!?!?むぐ…んぐ…ぷあ…」

雪「…(カメラを準備しなくちゃ)」

土屋「今の内…」 竜馬の口に何かを放り込む

竜馬「ふえ?あははは 女になっちゃった」 女体化

土屋「計画通り…」

雪「(ナイスだよムツツリーニ!!)」

「?勉強?の拷問部屋」

来也「これは…」

竜王「ご注文の品です」

来也「い、いただきます…くく…ぐふあああ!?!?」

竜王「これを真耶は飲んだんだよな」

「雑談所」

竜王「…雪も悪酔いしてるのか」

「…」

竜王「ん?フレイス様の所よりキャ口と紫が来ました」



キヤロ「竜王さん！私にデュエルディスクを作ってください！！」

竜王「デュエルディスクを？……良いよ。ちょっと待っててね、紫  
締めてくれ」

紫「分かったわ、その後は打ち合わせよ。闇を狩る少年続くわ」

竜馬「あははは ん…くふう…んく…んく…んん」

神咲「…エロい」

竜王「あゝ…多分女体化も原因の一つだな」

## 魔力と気のサポートって結構有能。

side 魔神竜馬

「おゝ…真耶を相手によくやるなあ」

「まあ、生徒にしては強い方だからね」

俺の言葉に雪が答えた。

っつておい。

「お前はちゃんと自分の場所に戻れ」

「はい……」

渋々と言った表情で雪は列に戻った。

「そうだな…ラウラ、今の戦況を説明してみろ」

「分かりました。山田先生はオルコットのビットを避けるのと同時にビットの停止位置を予測しその位置に手榴弾をセットしています。これによってビットの破壊、及び視界を悪くし攪乱およ出来ます。次にフォン凰ですが放つ衝撃砲の射線上に殆どオルコットがいます。これはオルコットの位置を山田先生が誘導し同士打ちを狙っているためだと思われれます」

俺が言うとラウラはすらすらと答えた。

うん、成績にプラスだな。

「っつとそこまでで良いぞ。もう終わる」

「はい」

それと同時に俺の横にセシリアと鈴音が落ちてきた。

真耶は殆ど無傷だ。

「さて？戦った感想は？」

「普段の様子とは段違いでしたわ…」

俺の問いに鈴音は俯きセシリアが答えた。

「あゝ！！悔しい！！！！」

「そうカッカすんなよ。自分の实力を見るのにちょうど良いだろ？」

不意に鈴音は顔をあげて叫んだ。

それに対し俺が言うと鈴音は俺を見た。

「そうよ！！竜馬、あんたが戦いなさいよ！！生身でISに勝てる

人間がいる事を転校生に見せるべきよ！！」

「俺が？」

鈴音の言葉に一組以外の生徒が驚いていた。

そう言えば一組以外の生徒には見せてないのか。

「しゃーないな、良いか？真耶」

「私は大丈夫です！」

いつものおどおどとした雰囲気は一切無かった。  
勝って自信がついたのか？

「はあ、殺るぞ無々」

『マスター、字が違います』

あ、間違えた。

これじゃあ殺しちゃうもんな。  
無々は日本刀と西洋剣の双剣に変化した。

「んじゃ始めるか。雪、開始の合図よろしく」  
「分かったよ」

俺の言葉に雪は了承した。  
そして俺と真耶は生徒たちから距離をとる。

「もう良いかな？それじゃあIS対人間の模擬戦闘、開始！！！！」  
「ふっ！！！！」

雪の開始の合図と同時に俺は瞬動術を使い真耶に接近し斬り捨てた。  
浅いな…

「せいっ！はっ！！たあっ！！！！」  
「きゃあああああああ！！！！！！！！」

俺は連続で瞬動術を行い真耶に擦れ違い様に斬り付けて行く。  
連続で起こる衝撃によって真耶は体勢を立て直せない。

「とどめー！！」  
「あ！？……っっっっ」

最後の攻撃によって真耶の操るISはエネルギーが無くなり動かなくなつた。

やりすぎたか？  
何かすっごい落ち込んでるし。

「終わったぞ」

「早すぎいわよ！！！！！」

俺が生徒たちの所に戻るといきなりセシリアと鈴音が怒鳴った。  
よく見れば一組の生徒たちも驚いている。

「りよ、竜馬。そんなに強かったのか？」

「え？これでもお兄ちゃんは全力じゃないよ？」

一夏の言葉に雪は自慢じまん気に言った。

そう言えばヴリトラの姿を見ているわけだしな。

「はいはい、そんなどうでも良い事は置いておいて授業を始めるぞ」

「……………はい！！！！！！！！！！」

明らかにさっきの返事よりでかくなってると  
しかも何人かは恐怖してるし…

「専用機持ちは一夏、セシリア、シャルル、ラウラ、鈴音、雪だったな。6人グループが2つに7人グループが4つだ。そうだな、一夏とシャルルを6人グループにしる。ちなみに出席番号順だから」  
「各自、迅速に行動するように！！」

俺の言葉の次に千冬が言った。

「うつつ…生身の人に負ける私は…」

「あ…すまん」

いつの間にかISを解除し横にいた真耶に俺は言った。

『せめて手加減するべきでしたね』

「手加減する余裕があったって事ですか…?」

無々の言葉に真耶はさらに落ち込んだ。

無々…!!

「あ、えっと…後でケーキか何かを奢りますんで元気出してください」

「あ…はい」

何故か敬語で俺は言った。

真耶は少しだけ落ち込み具合がゆるくなった。

side out

side 織斑一夏

「んじゃ午前の授業はここまで。午後は今日使った訓練機の整備だから各自格納庫で班ごとに集合。つーわけで訓練機は格納庫に戻すように」

竜馬がそう言うのと千冬姉は山田先生を連れて歩いて行ってしまった。

「ほらほら、早く運ばないと昼が食べないぞ」

「そう思うなら手伝いなさいよ…!」

のんびりとした竜馬の言葉に鈴がキレた。  
かく言う俺も軽くキレかかっている。

「え…しゃ…ないな…よ」と

「…え…?」

竜馬はめんどくさそうに鈴の所に行くとISを片手で持ち上げた。  
もう一度言おう。

「え？」

「ほれさっさと運ぶぞ〜」

そう言つて竜馬は走り出した。  
はええええええええええ！？

「ちょ！？IS持つてあの速度！？」

「流石お兄ちゃん」

何故か雪だけ納得していた。

雪の班は体育会系の生徒が多かつたらしくすでに運び終わっている。

side out

side 魔神竜馬

「ふう。無々、元に戻つて」

『了解しました』

そしてバリアジャケットは消え無々は元の腕輪に戻った。

「か全力で気を放出して魔力のサポートが無いと運べないな。」

「さて、さっさと戻つてお昼だお昼」

「私も一緒に食べるよ」

いつの間にやら雪が隣にいた。  
まあ、良いか。

「そんじゃあ食堂に行くか」

「うん」

そして俺と雪は食堂に向かった。





「こんにちは、キャラと紫を迎えに来ました」

竜王「お、フレイス様の所より映姫が来ました」

紫「あら、お迎え？仕方が無いわね」

キャラ「竜王さんありがとうございます！！！」

竜王「おう」

〈癒しの部屋〉

フエイト「すう…すう…」 日々の疲れからか睡眠中

〈雑談所〉

竜王「……………どうする？」

竜馬「飲むのか？」

雪「私は吐きたくないなあ」

3人は目の前の物体を見てそれぞれ呟いた。

そこには倒れた来也と小麦粉入りコーヒーが三つ置いてあった。

竜王「仕方が無い、闇を狩る少年続きます。全員で同時に飲むぞ！」

竜馬・雪「ああ(うん)」

3人「……………」

3人「」「」hgfdhtxjtふゆるtcddyて5yrせたらうき  
8い「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

人と化物…

side 魔神竜馬

さてと、訓練でもするか。

そう思つて俺はアリーナに来た。

「あれ？竜馬？」

「ん？おお、5人組か」

名前を呼ばれたのでそちらを向くと一夏、シャルル、セシリア、箒、鈴音すずねの5人がいた。

こいつらも訓練か？

「そう言えば竜馬！ケーキっていつ奢つてくれるわけ？」

「そうだな…まあ、次の休みかな。それに真耶にも奢らないと」

鈴音の言葉に俺は答えた。

確か奢るのは鈴音、セシリア、真耶の3人だったな。

「まあ、良いや。無々、頼む」

『了解しました。セットアップ』

無々はバリアジャケットを展開し双銃になった。

そして目の前にターゲットが現れる。

「設定ターゲット位置、ランダム。ターゲットの反撃、レベル最強。ターゲットの量、100」

これによりターゲットは出現位置を不規則にし出現と同時にレーザ

ーを放ってくる。

そして俺は眼前のターゲットを撃ち抜き訓練を開始した。

「ふっ……はっ……くっ……」

上下左右前後、あらゆる方向に現れるターゲットの攻撃を避けながら俺はターゲットを撃ち抜いていった。

side out

side 第3者視点

いつの間にかアリーナにいる人間は竜馬の動きに見惚れていた。それはまるで踊りを踊っているかのように攻撃を避けているのだ。

「……凄い」

誰が呟いたのだろう。

そんな事も気にならないほどに竜馬の動きは美しかったのだ。

まあ、本人にそれを言えば怒るのは目に見えて明らかだが。

「大分慣れてきたかな……」

そう言つて竜馬は左右のターゲットを同時に撃ち抜いた。

これで破壊したターゲットの数は50となった。

するとターゲットの出現の仕方に異変が起こる。

「撃ち抜く……」

同時に複数出現するターゲットの攻撃を避けながら竜馬は撃ち抜いていく。

時に前後、時に左右、時に上と前、ランダムに組み合わせられ出現す

るターゲット。  
そしてついには撃破数は90となった。

「止まった…？」

不意にターゲットの出現が止まった事に生徒の一人が呟いた。  
しかし竜馬は双銃を構えたままである。

「無々、形状変化。形状はナイフ」  
『了解しました。双銃からナイフ』  
ダブルストライク・リユメイサー

竜馬の言葉に無々は双銃からナイフへと変化した。

「カートリッジ連続ロード…」  
『ロウレイヌ・クリンゲル？ 途切れぬ刃？』

無々がカートリッジをロードすると竜馬の左手に全く同じナイフが出現した。

そしてカートリッジがロードされるたびにナイフは増えていく。  
増えていったナイフもカートリッジをロードするため増殖する量は  
どんどん増えていく。

「そこ……そしてそっち……」

そう言つて竜馬はナイフを投擲した。  
投擲されたナイフは出現したターゲットに突き刺さった。  
竜馬の手元には依然ナイフが大量に増殖している。

「後は……同時か……はっ！……！」

そう呟くと竜馬は大量のナイフの中から8本掴み様々な方向へと投擲した。

ナイフはそれぞれターゲットに突き刺さった。  
これでターゲット撃破数は100となった。

「…魔神先生って何者？」

シャルルの呟きを聞いて一夏たちも首を傾げた。  
そしてたたずむ竜馬の姿は美しく、そして……

……恐ろしかった。

side out

side 魔神竜馬

ふむ…まあまあかな。

ターゲット撃破と得点を見て俺は思った。

「ターゲットは全滅で得点が989点か…」

何個か中心から外したからなあ。

「あの…魔神先生って何者ですか？」

ん？

振り向くとそこには5人組がいた。

「どう言う意味かな？」

増殖したナイフを消しながら俺は尋ねた。

どうやらシャルルが尋ねたらしいな。

「えっと…ISを使用せずにここまでの戦闘能力を持っていましたので…」

「あ…でも修行すれば誰でもできるぞ？」

信じてない…いや、恐怖か…

生徒たちの表情を見て俺はそう認識した。



「まあ、信じる信じないはお前等の好きにしな」

そう言つて俺はアリーナを後にした。

あの5人は違つたが他の生徒の視線は明らかに人外はけものを見る様な眼だつたから…

「別に構わないんだがな……」

構わないんだ…

たとえ昨日まで普通に接してくれた生徒にそんな目で見られても…

「ん？竜馬か…どうした！？何故泣いている！？」

「え？千冬？」

部屋に戻ると千冬がいた。

俺が泣いている？

「あ、本当だ……」

「…何か、あつたのか？」

心配そうに千冬は尋ねてきた。

俺は手で涙を拭つた。

「…いや、ただ自分が化物なんだとつくづく思ったただだよ」

「化…物…？」

俺の言葉に千冬は頭上にハテナマークを出していた。

「なんでもないよ…お休み」

そうやって俺はすぐに布団にもぐり眠った。  
いずれは誰も俺に近づかなくなるだろうな…

人と化物…（後書き）

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、月光閃火様、ルシフェル様、妖気様、空刀様感想ありがとうございます。

空刀様より雪に塩クッキーを、

いただきました。

竜馬「俺は……………」

竜王「本編での事を引きずってるなあ……………」

「こんにちは〜」

竜王「お、フレイス様の所より幽々子、妖夢が来ました。ほら、ゲストが来たんだから元気になれ」

妖夢「だ、大丈夫ですか？」 「こっそりと竜王に言う」

竜王「たぶんな。それじゃあどうぞ」

幽々子「あら〜いただきます」

竜馬「凄い量だな……………」

妖夢「どうかしたんですか？元気が無いようですが…」

竜馬「ちよつとね……」

来也「とりあえず元気出せ」

雪「あ、小麦粉入りコーヒーから立ち直れたんだ」

来也「ああ」

「……………こんにちは！！！！」「……………」

竜王「お、空刀様の所より乱太、空、疾風、修太、紅葉、遼、聖夜、空刀様が来ました」

乱太「歌いに来たぞ！！」

紅葉「歌うのは私と空だけど」

空刀「蒼狼の力を試したい」

竜王「あ、んじゃこつちに。竜馬、元気出せよ？」

竜馬「……ああ」

〈癒しの部屋〉

フェイト「そろそろ帰らなくちゃ……」  
来た時に比べ大分顔色が良  
くなった

〈第四訓練部屋〉



生成されたナイフのカートリッジは生成時に基となったナイフのカートリッジ数と同じになる。

## 1113

side 魔神雪

お兄ちゃんどうしたんだろう…

お兄ちゃんの授業を千冬がやるようになって数日が経過した。

「千冬！お兄ちゃんは？」

「分らん。ただ数日前に部屋に戻って来てから何もしようとしな  
いんだ」

私の問いに千冬は答えた。

数日前？

「それじゃあお兄ちゃんはずっと部屋に居るの？」

「そつだ。会ってみるか？」

千冬言葉に私は大きく頷いた。

そして私と千冬は部屋に向かった。

「竜馬、魔神が来たぞ」

「お兄ちゃん？……！？」

ドアを開け中を見るとそこには布団に潜り込んでいるお兄ちゃんの  
姿があった。

「ゆ…き…？」

私の声が聞こえたのかお兄ちゃんは布団からゆっくりと出てきた。

「お兄ちゃん！？どうしたのその髪の色！？それに眼も！？」

布団から出てきたお兄ちゃんの髪の色は白銀で目の色は紅色だった。

「千冬どう言う事！？」

「私にもさっぱりでな、部屋に戻ってきた時からずっと髪と眼の色があのままなんだ」

私は千冬を睨みつけて聞いた。

「雪…千冬は何もしてないよ…ただ…俺が人外ばけものってだけだから…」

静かにお兄ちゃんは言った。

この喋り方…

「千冬、ごめん。2人だけで話をさせて」

「…分かった」

そう言っつて千冬は部屋から出ていった。

side out

side 魔神竜馬

「誰も…悪くは無いんだ…そう…誰も…」

だっつて悪いのは……



……人間ではない俺なのだから。

「お兄ちゃん…何でそんなに悲しんでいるの？」  
「……自分が人間じゃないからだ」

雪の問いに俺は答えた。

「お兄ちゃんが人間じゃ無い？誰が言ったの？」  
「誰も言っていないよ。でも、俺は人外だ……」

少し前はこんな事気にしなかったんだけどな…

俺は乱れている髪の毛を横に払い雪を見た。

「お兄ちゃん…お兄ちゃんは何なの？」

「俺は人g…」

俺が答えようとするすると雪は俺の唇に人差し指をあて制止した。

「そうじゃないよ、そうじゃない」

「……………」

雪は首を横に振りながら言った。

「例をあげるね？私にとってお兄ちゃんはお兄ちゃんなんだよ」

「俺が俺…？」

雪は笑顔で言った。

「どう言う事だ…？」

「俺は……………」

「分かりにくかったかな？それじゃあもう一つ例をあげるよ。私は自分が人外ばけものになってもお兄ちゃんを好きなままだよ」

俺の目を見て雪ははつきりと言った。

「変わっても変わらない…」

「俺は…俺は人外ばけものだ……………」

「お兄ちゃん…」

俺は目を伏せ言った。

「でも…でもそれ以前に俺は魔神竜馬だ!!」

そう言っただけ俺は立ちあがった。

すると髪の色が黒く染まっていた。

「これは…?」

「眼も黒くなってるよ!!」

俺の感情が関係してるのか?

「…ありがといな雪。お前のお陰で俺は自分を嫌わずに済んだ、ありがとう」

「良いんだよ、お兄ちゃんが元気なら」

言いながら俺は雪の頭を撫でた。

さて、と授業の準備をしなきゃな。

「雪、授業の準備をするから部屋から出てくれ」

「分かった。忘れないでね?お兄ちゃんが悲しいと私も悲しいって事を」

雪の言葉に俺は頷いた。

そして雪が部屋から出ると入れ替わりに千冬が入ってきた。

「…もう、大丈夫なのか?」

「ああ、すまなかつたな」

心配そうに尋ねる千冬に俺は力強く頷いた。

千冬のこんな表情は見た事が無かつたな…

「私の顔に何か付いているのか？」

「いや…ただ軽く涙目の千冬が可愛く見えて」

俺がそう言つと千冬は顔を真っ赤にして出席簿を振りかぶつた。

「ツ~~~~~／／／／／！！！！！！！！！！」

「ちよっ！？まっ！？やめっ！？」

千冬の出席簿の攻撃を俺は両腕で頭を守りながら防いだ。  
何をそんなに怒ってるんだ！？

「魔神先生はいらっしゃいますか？」

不意にドアをノックする音と声が聞こえた。

すると千冬は出席簿を机に置きシャワー室に行ってしまった。

「はあ…開いてるよ」

「失礼します」

そう言つて部屋に入ってきたのはシャルルだった。

「どうかしたのか？」

「魔神先生に謝りたいと思ひまして…」

俺の問いにシャルルは答えた。  
謝る？

「何をだ？」

「えっと…魔神先生に僕が質問をしてしまった事に対してです」

ああ、俺が何者かって言う質問か…

「あの時、僕があんな質問をしなければ先生はあんな目で見られなかった。それを謝りたいんです」

「…そうか」

シャルルは気付いていたのかあの後俺がどんな目で見られてたかを…

「魔神先生、すみませんでした」

「謝ってくれてありがとうな。一夏達も呼んでるが俺の事は竜馬と呼んでくれて構わない」

そう言いながら俺はシャルルの頭を撫でた。

「…何だろっ？」

「撫でた感じが女の子っぽい気が…」

「ッ！！！！き、ききき気のせいだよ！！！！」

俺の呟きが聞こえたのかシャルルは否定した。  
すると突然シャワー室の扉が開き千冬が出てきた。

「…何をしている」

「織斑先生！？し、失礼しました！！」

出てきた千冬を見てシャルルは急いで部屋から出ていった。  
何を慌てているんだ？

「まあ良い、明日からは授業に出られるな？」

「ああ、大丈夫だ」

ところで千冬の髪の毛がしっとり濡れていて何か綺麗だな…  
その後、その事を千冬に言ったらまた出席簿で叩かれた。  
何で？

1113 (後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

月光閃火様、フレイス様、銃王 海さん、ルシフェル様、妖気様、空刀様感想ありがとうございます。

銃王 海さんよりハロ×100を、

妖気様より竜馬に花束を、

空刀様より私に咲夜を犬咲夜化させる光線銃を、

いただきました。

竜王「……………てい！」

咲夜「!?」 音とともに犬耳が生える

竜馬「おま!?!」

犬咲夜「?」

竜王「可愛いなあ」

「こんにちは」

竜王「お、フレイス様の所よりティアナと早苗が来ました」

早苗「あれ?竜馬さんは元気になったんですね」

竜馬「まあね、雪に気付かされたよ」

ティアナ「どんな事を？」

竜馬「どんな事があっても俺は俺って事をね」

竜王「つと銃王 海さんのキャラをオリカにしないとな……」

竜馬「確か…… 12人だっけ？」

早苗「多くないですか？」

竜王「まあ、なんとかなるでしょ」

「こんにちは」

竜王「つと銃王 海さんの所より久保利光、清水美春、霧島翔子が来ました」

明久「久保君!?!」

美波「美春!?!」

雄二「げえ!?!翔子!?!」

竜馬「うわあ……」

竜王「ん……部屋が散らかる可能性があるから別の部屋に送ってくれ」



竜馬「酷いな…あいよ。ゼロ・インフィニティ…呪文省略…？魔狼  
転身？…！影道…！」

明久「うわ！？」

美波「何よコレ！？」

雄二「うわ、翔子…！眼を…ぎゃあああああ…！！！！！」

6人は影に沈み別の部屋に送られた。

早苗「…えつと」

ティアナ「良いんですか？」

来也「あれ？竜王さんは？」

竜馬「いない？」

早苗「あ、いました」 キッチンに立っている竜王を見つけた

竜王「ほい、クッキーだよ」

犬咲夜「」

ティアナ「…餌付け？」

「お邪魔します」

竜王「あ、空刀様が来ました」

空刀「3泊4日こちらに泊まります!!」

竜王「了解です」

フェイト「あ、竜王さん。私そろそろ帰りますね」

竜王「お、そうか。まあ、辛くなったらまた来い」

フェイト「はい」

竜馬「大分顔色が良くなったな」

竜王「だな、闇を狩る少年続きます」

## 黒い雨

side 魔神雪

「あ、お兄ちゃん。放課後第三アリーナに行こう」

「訓練をするのか？」

私の言葉にお兄ちゃんは聞き返した。

「ん〜それもあるけど、ちょっとした事が起きるんだよね」

「?…まあ良いか。分かった、放課後だな？」

お兄ちゃんが確認のために聞いてきたので私は頷いた。

あれは、危険だから一応私も止めに入りたいしね。

「さて、残り2限を頑張ろうかな」

「お〜頑張れ頑張れ。ついでに玉ネギを食べることも頑張れ」

私が言つとお兄ちゃんは私の皿を指差し言いつた。

私のさらには玉ネギが残っている。

「うぐう……………」

「苦手なくせに玉ネギが入ってる物を頼むんだからなあ……………」

私が小さく唸るとお兄ちゃんは呆れたように言いつた。

だって苦手なんだもん。

「しゃーない」

「あ……………」

そう言ってお兄ちゃんは私の皿の玉ネギを食べた。

「ありがとう…」

「気にすんな、さして授業の準備だな」

お兄ちゃんは伸びをすると立ちあがり部屋に向かって歩いていった。私も教室に行かないとね。

side out

side 魔神竜馬

チャイムがなり放課後になった。

雪と一緒に第三アリーナだったな。

「それじゃあ行くか」

「うん」

そして俺達は第三アリーナに向かって歩き出した。

ん？

あれは…

「一夏、シャルル、箒じゃないか。3人も訓練か？」

「あ、竜馬先生。はい、そうです」

俺の問いにシャルルが答えた。

つと何か騒がしいな。

「何かあつたのか？」

「みたいだね。こつちで先に様子を見る？」

俺の呟きに雪は観客席へのゲートを指差しながら言った。

それもそうだな。

「誰かが模擬戦をしているようですね」

観客席に入りアリーナ内部を見て箒が呟いた。  
するといきなり爆発音が響き渡った。

「……?!?」「」「」

俺達は驚き爆発した地点をみると爆煙からセシリアと鈴音すずねが飛び出してきた。

2人は苦い表情ですぐさま爆発の中心部を睨みつけた。

「鈴！セシリア！」

一夏はアリーナ内部の2人の名を呼んだ。

しかし、アリーナと観客席の間には防御用のシールドがあり声が届く事は無い。

「あれは…ラウラか」

するとラウラは一瞬、ほんの一瞬だが一夏の方を睨みつけた。  
気付いたのはおそらく俺だけだろう。

「…止めるぞ」

「竜馬!?!でもどうやって中に!?!今から向かったんじゃ間にあわないぞ!?!」

俺の言葉に一夏は驚き尋ねた。



「ラウラ、そのワイヤーを外して2人を解放しろ」

ラウラの近くに倒れるセシリアと鈴音を一瞥し竜馬は言った。  
よく見れば竜馬の髪の色は白銀に眼の色は金色に変化していた。

「それは出来ない。この2人は教官の弟の友人だと聞いた。故にこの2人も同罪だ」

「…………ラウラ、言う事を聞いてくれ」

ラウラの答えに竜馬は低く声を発した。  
その声を聞きラウラの頬に汗が流れる。

「頼む、でないと俺はお前を……………しまつかもしれない……………」

「くっ……………」

竜馬の言葉は途中でとても小さくなった。

その言葉が聞こえたのかラウラは2人を解放した。

「ありがとう。これより学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する……………」

竜馬はラウラにそう言った後アリーナに居る全員に聞こえるように言った。

side out

side 魔神竜馬

「全身打撲にかすり傷が多数、か」

セシリアと鈴音を保健室に連れていき怪我の様子を聞いた俺は呟いた。

流石に生徒とはいえ男の俺が包帯などを巻けないため真耶を呼んだが…

「ラウラが大人しく引いてくれて助かったかな…ん？」

ふと足音が聞こえたので廊下を見ると保健室に向かって走って来る生徒たちがいた。

もしかして…

「織斑君一（デュノア君）！！」

保健室に入ると生徒たちは2人の名前を呼んだ。

生徒たちの手には用紙が握られている。

あ、やっぱり。

「え？え？？え？？？」

「なんだなんだ！？」

いきなり囲まれて2人は困惑している。

「学年別トーナメントの相方を申し込みに来てるんだよ」

「は？なんで竜馬が知ってるんだ？」

俺の言葉に一夏は不思議そうに聞いてきた。

「ああ、俺が提案したから。一対一の戦闘も大事だけど仲間のいる戦闘も大事だと思ったからね」

「なるほど…」

どうやら納得したみたいだな。



「私と組もう！織斑君！！」

「私と組んで！デュノア君！！」

生徒達はじりじりと2人に近寄っていく。  
軽くホラーに見えるのは俺だけかな？

「え、えっと……」

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

戸惑うシャルルを見てから一夏は女子全員に向かってそう言った。  
やっぱり男同士の方が気楽なのか？

side out

sideラウラ・ボーデヴィツヒ

何なんだあいつは！！

私は壁を殴った。

「魔神竜馬だと…？」

私を見たあの目の色…あれはまるで私の左目と同じ…  
私はそこで考えを止めた。

「関係無いな、私がやる事に変わりはない」

しかし、そこで魔神の言葉が心に浮かび上がる。

「頼む、でないと俺はお前を…」

怒りを孕みながらも悲しげな言葉だった…

……殺してしまうかもしれない……」

## 黒い雨（後書き）

～霊使い達の雑談～

感想と贈り物ありがとうございます。

妖気様、空刀様、フレイス様、ルシフェル様、月光閃火様感想ありがとうございます。

妖気様より竜馬に白髪染めを、

空刀様より超・スペクタクルミラクル爆弾 を、

いただきました。

竜王「地震が怖い！！！！！！！！！！」

竜馬「うるせえ！！！！！！」

雪「きゃっ！？」 妖気様の所より謎の光線が飛来

竜馬・竜王「！！？」

雪「何が起きたの？」 男の娘になった

竜王「えっと…弟？になったな…」

竜馬「あ、ああ…」

犬咲夜「～」

空刀「揺れる揺れる」

来也「地震の揺れで軽く酔った…」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所よりユウキと妖夢が来ました」

ユウキ「どうも」

竜馬「!!!!!!」

妖夢「????どうかしたんですか？」 竜馬の表情を見て尋ねた

竜馬「おい、デュエルしろよ…あで!?!」

竜王「はいストップ」。ユウキとのデュエルはラウラの問題が終わってからね」

ユウキ「分かりました」

妖夢「物凄く痛そうですが…」

「こんにちは」

竜王「あ、月光閃火様」

月光閃火「何があっただんだ？」

竜王「地震があって部屋が軽くぐっちゃになって、その後に雪が男

の娘になったってだけですよ」

月光閃火「だけ、じゃないと思うんだが…」

空刀「それにしては部屋が綺麗な気が…」

竜馬「頑張りました…」

雪「同じく…」

竜王「まあ、後はお茶にしよう。竜馬締めて」

竜馬「ああ闇を狩る少年続きます」

来也「うつつ………」

雪「いつになったら戻るかな？」

## 治療と少年の決意

side 魔神竜馬

時刻は夕方、俺の目の前にはセシリアと鈴音すずねが立っている。

「何の用ですか？」

「打撲とか結構痛いんだから手短かにしてよ」

俺に向かって2人は言った。

まあ、そうだよな。

「無々、セツトアップ」

『了解しました。セツトアップ』

俺は無々をセツトアップした。

2人は不思議そうに俺を見ている。

「悪いがこれからやる事は他言無用な？ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

呪文を唱え俺はフェニックスへと変身した。

2人は驚きの余り口が開いている。

「な、ななな！？何ですか！？」

「りよ、りよりりよ！？竜馬！？」

次の瞬間2人は大きな声で叫んだ。

俺は咄嗟に2人の口を押さえた。

「むぐ……」

「声がでかい!!」

すると2人は静かになった。

「とりあえずお前等の傷だけは治せるから治すぞ？ 治癒の焰？」

俺は焰を灯し2人を包み込んだ。

2人の外傷（青あざ）がどんどん消えていく。

「ッ…… 2人分だからキツイか」

それと対照に俺の体に徐々に青あざが浮かび上がってきた。

「先生！その傷は!?!」

「気にするな。っとこれで終わりだな」

2人の体にあざが残っていない事を確認して俺は立ちあがった。  
痛……

「ちよっと」

「びぎいっ!?!?!?!」

いきなり鈴音が俺の腕を掴んだので痛みで俺は変な声を出してしま  
った。

鈴音は驚き腕を離れた。

「ッ~~~~~!?!?!?!」

「いっ!?!?!」

俺が怨みがましく鈴音を見ると鈴音は謝った。

まあ、？不死鳥転身？の効果であざは今も徐々に回復してるけど…

「りよ、竜馬。あんたって何者なのよ、こんな事が出来るなんて…」

「俺は俺だ、自分がやりたい事をやっている。ただそれだけだ」

そう言っただけ俺は歩き始めた。

うん、大分傷も治ったからもう大丈夫かな。

『マスター、そろそろ戻っても良いのでは？』

「ん、そうだな転身リリース」

無々の言葉に俺は自分の体を見て変身を解除した。

所々にあざは残っているが三日もすれば治るだろう。

side out

sideラウラ・ボーデヴィツヒ

「よお」

「魔神先生、何か用か」

私が廊下を歩いていると前方から魔神竜馬が歩いてきた。

何故か魔神竜馬は私に声をかけてきた。

「別に用は無いさ。ただ、何でお前が一夏を目の敵にしてるかを聞きたくてな」

そう言う魔神竜馬の体には所々にあざが見当たった。

あのおの位置、どこかで覚えが…



「で？教えてくれるのか？」

「断る。貴様には関係のない事だ。失礼する」

そう言つて私は魔神竜馬の横を通り過ぎた。

「関係無い、か。まあ良い、だが…俺の仲間には手は出すなよ」

「!?!」

横を通り過ぎる一瞬に魔神竜馬はそう言った。

その一瞬の内にとつともない殺気を受け私が振り向くとそこに魔神竜馬の姿は無かった。

「……思いだした。あのあざは私があ専用の機持ちの2人を殴った位置と同じだ」

私は記憶を手繰り呟いた。

あいつは何者なんだ…

見ると私の腕は震えていた。

side out

side 鳳 鈴音

えつと……

状況を整理しましょう。

- 1・竜馬が歩いていったので追いかけた。
- 2・幸い竜馬は気付いていないみたいだった。
- 3・しばらくするとラウラ・ボーデヴィツヒが前方から歩いてきた。
- 4・少し竜馬とラウラが会話をしていた。
- 5・こちらにラウラが歩いてきたので隠れた。
- 6・ラウラが通り過ぎて廊下を見ると既に竜馬はいなかった。

「忍者か！！！！！」

「うお！？鈴！？いきなり叫んでどうしたんだ！？」

私ที่ใหญ่い声でつつこむと背後から声がかかった。

「一夏！？どうしたのよ」

「いや、ちよつと竜馬を探してたんだよ」

振り向くとそこには一夏が立っていた。

竜馬を？

「っとそれより鈴！傷は大丈夫なのか！？」

「平気よ」

確か竜馬は他言無用って言ってたわね。

私は竜馬に傷を治してもらった事を黙っている事にした。

「竜馬なら部屋に居るはずよ」

「お、そうかありがとつな」

そう言つて一夏は歩いていった。

何の用があるのかしら？

あ、そう言えば竜馬にケーキ奢ってもらつて無いわね。

メモして忘れないようにしなくちゃ。

side out

side 織斑一夏

「竜馬、いるか？」

「ああ、開いてるから入つて良いぞ」

俺はドアをノックし尋ねた。  
中に入ると竜馬は何やらカードを見ていた。

「どうかしたのか？」

「あのさ、どうやってたら強くなれるんだ？」

竜馬を真っ直ぐに見ながら俺は言った。

「強く？…どうして強くなりたいんだ？」

「俺は…俺は鈴達が殴られているのに動けなかった。だから強くなりたいんだ！！」

仲間を守るほどに！！

竜馬の問いに俺は答えた。

「…強くなる、か。それは能力ちからがか？それとも精神しんじんがか？」

「能力と精神…」

竜馬の言葉に俺は俯いた。

そんな事を聞かれるとは思わなかったからだ。

「それが定まったらもう一度来い。その時は俺が千冬と協力して鍛えてやる」

「……ありがとう竜馬」

俺の目を見て竜馬は言った。

「ん？でもお前って筈とかに訓練してもらって無かったか？」

「えっと…何と言うか…シャルル以外説明が…」

竜馬の疑問に俺は答えた。  
本人がいないとはいえない難しい…

side out  
side 魔神竜馬

「まあ、良いか。俺と千冬がそこに混ざれば良いわけだし」

俺はそう結論付けた。

その後、一夏は部屋に戻っていった。

「さて、もうちょい弄るか」

もっとシンクロ召喚をやすくして、さらにいろんな所から特殊召喚して…

今日の分の成績をつけ終えた俺はデッキの構成を考え続ける事にした。

## 治療と少年の決意（後書き）

～霊使い達の雑談～

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、空刀様、フレイス様、月光閃火様、銃王 海さん感想ありがとうございます

銃王 海さんよりコタツを、

いただきました。

竜王「あつたけ〜」

竜馬「同意〜」

空刀「同じく〜」

「邪魔するわよ〜」

竜王「あ、フレイス様の所より霊夢となのはが来ました」

なのは「何だかのんびりしてるの」

竜王「コタツが暖かいんだよ〜」

霊夢「ふっ〜」

なのは「いつの間に!?!?」

竜馬「あれ？雪は？」

竜王「一軍の調整中。あ、霊夢お賽銭とお茶」

霊夢「あら、ありがとう」

月光閃火「俺も飲もう」

「こんにちは」

竜王「あ、銃王 海さんの所より吉井・坂本・土屋・木下姉弟・姫路・島田・久保・霧島・工藤・清水が来ました」

月光閃火「……………」 美春の元に行き頭をなでる

美春「な、なんですの!？」

来也「早技だな」

竜王「とりあえずここらで締めるか」

竜馬「だな」

竜王「闇を狩る少年続きます」

来也「ふう」

竜馬「つか？治癒の焰？とかの詳しい説明って必要なんじゃね？」

竜王「かもな。まあ、その内竜馬の魔法とかの説明を書くかな」

## 学年別トーナメント開始

side 魔神竜馬

「くあゝ…眠い」

俺は欠伸をしながら歩いていった。

えゝつと一夏とシャルルは…ここだな。

「おゝす」

「あ、竜馬先生」

俺が更衣室に入ると着替えを終えた一夏とシャルルがいた。

シャルルはすぐに俺に気付いたが一夏は何か考え事をしているらしく気付いていない。

「一夏はどうしたんだ？」

「えつと、ボーデヴィツヒさんの事が気になるらしくて…」

シャルルの言葉を聞き俺は一夏を見た。

「……」

俺はこつそりと一夏の背後に回り込んだ。

シャルルは不思議そうに俺を見ている。

「おらあ!!」

「おわあ!？何だ何だ!？」

大きな声を出しながら一夏の足を払うと一夏は転びながら眼を見開



き周囲を見渡した。

頭を床にぶつけないだけ反射神経は充分に向上してるな。

「りよ、竜馬！？何するんだよ！！」

「いや、考え込んでいる奴がいたらやるだろ」

俺がそう言いながらシャルルの方を見るとシャルルは苦笑していた。  
あれ？

俺だけか？

「普通はやらないと思っぞ…」

「僕もそう思います」

一夏がそう言つとシャルルもその後と言った。

「ふむ…まあ、良いか。そろそろ対戦相手が決まるだろ」

俺はそう言いながら画面を指差した。

すると画面にトーナメント表へと切り替わった。

「えっと…一年の部、Aブロック一回戦一組目、織斑一夏、シャルル・デュノアVS二組目、ラウラ・ボーデヴィツヒ、筱ノ之箒しのの、だ  
な」

「…え？」

俺が対戦相手の名前を言つと2人は同時に言った。

そこまで驚く事か？

「どうした？何を驚いてるんだ？」

「いや、ラウラと箒が組んでいるとは思わなくて…って何で竜馬は

驚いてないんだよ!!」

俺が尋ねると一夏は答えさらに聞いてきた。  
そこまで驚く事でもないしなあ…

「だってトーナメント表を作るために組み合わせは全部見たし、それに抽選ペアはラウラと篝だけだぞ？驚く理由がどこにも無い」  
「そうだろうけど…」

俺の言葉に一夏は不服そうだった。

「さあ、そろそろ時間だ」  
「え？うわ!？」

そんな一夏を見ながら俺が時間を指摘すると2人は慌てだした。  
一応教師らしい事を言ってみるか。

「一夏、シャルル落ち着いて戦えよ」  
「ああ(はい)!!」

俺の言葉に2人は元気よく答え更衣室から出ていった。  
さて、俺も移動しますか。

side out

side 第3者視点

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたという物だ」  
「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

ラウラと一夏は向かい合いながら口を開いた。

試合開始まであと5秒。四、三、二、一 開始。

「叩きのめす」

ラウラと一夏は同時に言い瞬間加速イケニツジョン・ブーストを行った。  
するとラウラは右手を突き出した。

「くっ……!!」

AICの網に捕らわれ一夏は動けなかった。

「開幕直後の先制攻撃か。分かりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかも分かるだろう」

一夏に向かってそう言いながらラウラは巨大なりボルバーの安全装置を解除した。

しかし一夏の表情に焦りは見えない。

「させないよ」

そう言いながらシャルルは一夏の上を飛び越えアサルトカノンによる爆破弾バーストの射撃を浴びせた。

「ちっ……!!」

肩のりボルバーを射撃によって逸らされたのが悔しいのかラウラは舌打ちをした。

さらに畳み掛けるシャルルの攻撃にラウラは急後退をして間合いを取った。

「逃がさない!!」

シャルルはそう言いながら左手にアサルトライフルを呼びだした。  
これこそがシャルルの得意とする戦法？ラビット・スウィッチ高速切替？である。

side out

side 魔神竜馬

おゝ…シャルルの？高速切替？良いなあ。

俺はアリーナの射出口の上に立って戦闘を見ていた。

「無々、あれくらい素早く変化って出来るか？」

『難しいですね。変化する武器を決めてもらわないといけませんので…』

俺の問いに無々は申し訳なさそうに言った。

「気にするなよ。一応聞いてみただけだから」

『はい。…どうやら箒さんがリタイアの様ですね』

アリーナの内部に視線を向けると箒はアリーナの隅で悔しそうに膝をついていた。

「ナイスコンビネーションってところかな？」

『ですね』

さて、残るは実力的に1年最強のラウラだ。

二対一でどこまでいけるかな？

「…っと、一夏が何かやったな？」

不意に一夏の持つ刀からエネルギー刃の様な物が伸びた。  
何だあれ？

「でもラウラも結構やるな。一夏とシャルル、結構強い2人を相手に1人で戦って…」

『ですが、いずれはジリ貧になりますね』

無々の言葉に俺は頷いた。

そう、結局は2対1なのだ。

同時に複数の人物を相手出来る者は少ないだろう。

「まあ、ラウラの戦闘能力なら相手に出来そうだから怖いよな」

『マスター程でもないですけどね』

俺と無々は2人して笑った。

その間もアリーナで3人は戦闘を続けている。

## 学年別トーナメント開始（後書き）

↳ 霊使い達の雑談

感想と贈り物？（いや、者か？）ありがとうございます。

ウイング様、フレイス様、ルシフェル様、月光閃火様、空刀様感想  
ありがとうございます。

空刀様より光帝こうてい 虎伍とごを、

いただきました。

竜王「……人間」

竜馬「人身売買!？」

虎伍「よお」

竜王「まあ、よろしく」

「こんにちは!！」

竜王「あ、ウイング様の所より遊里、闇遊戯、十代が来ました」

遊里「どうも」

空刀「クールだ」

闇遊戯「竜馬、俺とデュエルしようぜ」

竜馬「お、良いね。んじゃ？紅魔-？デッキで行くぞ-！」

十代「俺も混ぜてくれ-！」

遊里「…三人でバトルロワイアルすれば？」

竜馬・闇遊戯・十代「…それだ-！！！」

月光閃火「ふう」

美春「いつまで撫でているんですか-！！」      もがくが動けない

「こんにちは……」

竜王「うわあ…いきなり死にそうだ。フレイス様の所よりフェイト、  
ユウキ、ティアナが来ました」

フェイト「あはは…私なんて…」

竜王「だあああああ！！！！フェイト！あの部屋に行つてこい！  
！！！！！」

フェイト「はい……」

ユウキ「それじゃあ俺達は？勉強？の拷問部屋に行つて来ます」

ティアナ「さあ、頑張るわよ」

虎伍「俺はどうするか…」

竜王「さあ？デッキ持ってる？」

虎伍「いや、持って無い」

竜王「んじゃカードあげるからデッキ作って。んでデュエルしよう」

虎伍「分かった」

空刀「にしてもさっきのフェイトは死にかけてたな…」

竜王「あっちのキャラがちょっと…」

月光閃火「どうなったらあそこまで疲れるんだ…？」

虎伍「一応作ってみた」

作者三人「」「早！！！！」「」

竜王「まあ良いや。それじゃあためしでデュエルするから締めて」

虎伍「分かった。闇を狩る少年続く」

竜王「それじゃあ…」

竜王・虎伍「デュエル！！」





## 白き戦士と一陣の風

side 第3者視点

「これで決める!!」

? 零落白夜? を発動させた一夏はラウラへと直進する。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが…  
…それなら当たらなければ良い」

そう言つてラウラは一夏へ向けてAICを放つた。

その攻撃を一夏は急停止、転身、急加速でかわしていった。

「ちよろちよると目障りな……!!」

ラウラはAICに加えワイヤーブレードを使用し始めた。

一対一であればいずれ捕まるだろう。

一対一であれば…

「一夏! 前方二時の方向に突破!!」

「分かつた!」

シャルルの言葉に一夏はワイヤーブレードを潜り抜けた。

その間もシャルルは射撃でラウラを牽制し続けている。

「ちっ!! 小癩な!!」

シャルルを睨みつけながらラウラは悪態をついた。

side out

side 魔神竜馬

ふむむ…

俺はアリーナ内部を見ながら考えた。

「2人のコンビネーションは上々、対してラウラは一对多の戦闘に慣れ過ぎている節があるな。あいつの戦い方じゃ自分の方が複数いるってことも考えないらしい」

『篝さんの事ですね？』

無々の言葉に俺は頷いた。

確かにラウラは強いがそれは個人だけの能力を見ただけのものだ。

「組み合わせ的に……シャルルとラウラが最も強いかな？ラウラが接近戦、及び相手の封殺。シャルルが射撃によるサポート、及び封殺された相手へのショットガン等の高威力武器でとどめ」

『ワイヤーブレードで動きを妨害出来ますしね』

まあ、相手が速かったら無意味なんだけどな。

もしくは広範囲殲滅型の武装を装備している場合、他には異常に耐久力の高い機体って所か？

「……………あれ？よく考えたら俺、全部当てはまってね？」

スピードの？魔狼転身？フェンリル、広範囲攻撃と防御の？竜魂転身？ヴリトラ、不老不死で回復できる？不死鳥転身？フェニックス。

「……………まあ、良いか」

『どつやら決まる様ですよ』

無々の言葉に俺はアリーナ内部を見た。

見るとラウラに向かつて凄<sup>イグニッション・ブースト</sup>い早さで突撃するシャルルがいた。

「えつと…？瞬間加速？だったか？効果的には瞬動術だったかな？」

『はい、間違つてはいません』

ただどのままじゃラウラの…

あれ？なんて言つたっけ？

「ラウラのあれってなんて言つたっけ？」

『アクティブ・イナーシャル・キャンセラー、通称AICです。日本語で慣性停止能力です』

あゝ…それだそれ。

あのまま突撃したらラウラのAICで止められるよな。

『…どうやら一夏さんが射撃をするようですね』

「え？マジで？…あ、本当だ」

見ればラウラの背後でシャルルの捨てたアサルトライフルを構える

一夏がいた。

そして引き金が引かれた。

「おお、撃ちやがったよ。さほど練習して無いと思つたら…っつと危な…！」

一夏の放つた弾がラウラに命中した事に感心していると弾が俺の目の前を掠めていった。

危なすぎるだろ…！！

「油断してたわ。まさかこっちに飛んでくるとわ…ん？あれは…」

不意にシャルルの腕に付いている盾がはじけ飛び中にある武装が姿を現した。

リボルバーと杭の融合したような武器、そしてラファールリヴァイヴの武装って…と…

「確か、六九口径パイルバンカー？グレー・スケール灰色の鱗殻？。通称は？シールド・ピアース盾殺し？だったな」

真耶が使っているラファールリヴァイヴにも積んであるんだよな。

ISの武装にどんなものがあるのかを千冬に聞き教えてもらった武装の名を俺は呟いた。

「第二世代型の武装で最強と謳われているその威力、どこまで強いのか見る価値はあるか」

『ひょっとしたら技が創れるかも知れませんか』

そして一夏とシャルルの叫び声が重なる。

？瞬時加速？プラス？盾殺し？による点での攻撃。

一点に集中された攻撃力はどれほどのものだろうか…

「これは決まったか？」

『ですね。？盾殺し？はリボルバー機構、よって全弾のリロードに時間はかかりませんが速射性能と連射性能が高いので…』

その先は言わないでも分かった。

つまりは一発が決まれば残りの五発が決まったも同然なのだ。

「一点集中にさらに連続攻撃、よくよく考えると酷い攻撃だな」

『それはマスターも同じでしょうに、一発でも酷い？華？を三連続で放つんですから』

俺の言葉に無々はいった。

ここで言う？華？とは『紅蓮くれん 紅椿べにつばき 蒼穹そうきゅう 蒼蓮華あおれんげ 黄雷こうらい 黄おう 竜胆りんだん 翠旋すいせん 翠撫子みどりなでしこ』

この4つの技の総称である。

「良いんだよ、あれは気分なんだから。それに連続で放てるのは3つまでだし」

4つの内3つを選択して連続で放つ技を『連技れんぎ 百花繚乱ひゃっかりょうらん』と呼んでいる。

これの上位版もあるのだが、今はまだいいだろう。

「何だ!?!」

いきなり絶叫が響き渡ったので俺は驚きアリーナ内部を見た。見ればラウラのISから電撃が放たれシャルルの体が吹き飛んでいた。

「何だよ…ありゃあ…」

『解析をします!?!』

俺が見ているとラウラのISが変形…いや、溶けてラウラを包み込んでいった。

黒い、深く濁った闇がラウラを飲みこんでいく…

「仕方が無い…千冬! トーナメントを一時中断しろ! 生徒の避難を最優先だ!?!」

「分かっている。と言うより竜馬!! 貴様はどこに居るんだ!？」

俺は自分の目の前に携帯端末の画面を呼び出し千冬に指示を出した。千冬の言葉を気にせず俺はアリーナ内部へと飛び降りた。

「ど、っせい!?!?!」

足に気を込めて身体能力を強化し俺は着地した。普通なら折れてるな。

「それがどうしたあああああ!?!?!?!」

「一夏!?! ちいつ!?!?!」

見れば一夏が武装もせず黒いISへと向かって行っていた。俺は咄嗟に瞬動術を使い一夏の前へと移動した。

「どけ、竜馬!! 俺はあいつをぶっ飛ばす!!」

目の前に現れた俺に一瞬驚きはしたもののすぐさま一夏は怒鳴った。一回冷静にさせる必要があるな。

「はあ……いい加減にしろ!?!?!?!」

「!?!?!?!?!」

俺の怒声に一夏、箒の2人は驚き目を見開いた。

「お前は何がしたいんだ! 自分のISは待機状態になっているのに戦おうとして!?!」

「あいつは……あれは千冬姉のデータだ。それは千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ!?!」

一夏は俯きながら悔しげに言った。  
千冬のデータ…

『他人のデータを元に動きをトレースするシステムがありましたね』  
「なるほどVTシステムか…どこのクソ野郎だ……」

千冬から教えてもらった禁止されているシステム名を俺は呟いた。

「お前の怒りは分かった。しかし今のお前に何が出来る。ISのエネルギーは残っていないんだろう？」  
「ぐっ……」

俺の言葉に一夏は唸る。

一夏はISが起動できないから殴りかかろうとしたんだろうからな。

「先生の言うとおりで。お前がやる必要は無い」

「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要は無い、か？」

筈は一夏の言葉に頷いた。

「違うぜ筈。全然違う。俺が？やらなきゃいけない？んじゃないんだよ。これは？おれがやりたいからやる？んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いちゃったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃ無い」

…どうやら一夏は利口じゃないみたいだな。  
だが…

「だが、その理由は好きだぞ。一夏」



「ええい馬鹿者が！先生も煽らないでください！！ならばどうする  
というのだ！エネルギーはどのみち」

「無いなら他から持つてくればいい。でしょ？一夏」

どうやら電撃から回復したらしくシャルルが飛んできた。

「そいつは良いがどれぐらい時間はかかる？その間、俺はあいつを  
足止めしておくから」

「えっと…2分、いえ1分あれば僕のISのエネルギーを一夏に渡  
せます」

1分か。

遊べるか？

「分かった、じゃあ頼んだぞ。無々、セットアップ」  
『了解しました。セットアップ』

俺の言葉にシャルルと一夏は頷いた。  
そして無々は大鎌へと変化した。

「さあ、遊ぼうぜ？」

そう言って俺と黒いISは同時に動き始めた。



早苗「はもった!?!」

竜王「…康太、子供のスカートを覗こうとするのはどうかと」

康太「してない…」

雄二「さて翔子!!俺は何もしていな…ぎゃああああああああああああああ!!」

翔子「あの女の人を見ていたから」

月光閃火「ふう……」 美春の頭を撫でている

美春「もぐもぐ……」 月光閃火様に貰った閃火特製フルーツタルトを食べている

〈癒しの部屋〉

フェイト「……………」 無気力状態につき終始無言

〈雑談所〉

竜王「(フェイトはこの様子じゃ、今日を含めてあと6日位かな……)」

竜馬「どうしたんだ?」

竜王「何でもない、闇を狩る少年続きます」

キャラ「粉碎 玉砕 大喝采!!!!!!」

明久「何で僕がああああああ！？」

## 戦乙女と白き戦士と魔なる神

side 魔神竜馬

「せいっ!!!」

俺は大鎌を振るい黒いISへと攻撃した。  
しかし黒いISは持っている刀の形状の武装で防ぎさらに反撃を放ってきた。

「危なっ!?!」

咄嗟に後方へと飛び反撃の薙ぎをかわすが黒いISはさらに接近し突きを放ってきた。

「くっ!!!」

大鎌で弾き起動を下に変え地面へと誘導し俺は一旦距離を取った。

「……弱い。手加減はしているがここまで弱いか……」

『マスター、もうそろそろで一分です』

後ろを見るとシャルルのISが光の粒子となって消えていた。  
時間稼ぎは充分か…

「お遊びにもならなかったな…」

背後から迫っていた攻撃を防いで俺は呟いた。  
せっかく魔力と気を使わないで戦ってたのに…

「竜馬！」

「終わったな、一夏お前の番だ」

一夏が俺の名を呼んだので俺は一夏の元に行き言った。

「竜馬先生、一夏は大丈夫でしょうか？」

「ん？ 筈か。心配するな、一夏は強いあんなやつには負けない」

心配そうに筈が尋ねてきたので俺は断言した。

確かにあの黒いISは強いだろう。

しかしそれは所詮真似事まねごと、本人である千冬の強さとは天と地ほどの差がある。

「俺が手加減して勝てるんだ一夏なら余裕だろ」

「それに一夏なら信じていれば必ず勝ってくれるよ」

俺の言葉に続くようにシャルルが言った。

そして筈は静かに一夏の方を向いた。

side out

side 第3者視点

一夏は？ 雪片ゆきひら式型がた？を構え黒いISと対峙した。

「じゃあ、行くぜ偽物野郎」

黒いISを見ながら一夏は言った。

外見がいけん云々うんぬんはともかく元はラウラなのだから野郎と言っつのは間違っていると思っが…

「？ 零落白夜？」

発動」

一夏の言葉に小さく音を発し全てのエネルギーを消し去る絶対無効の刃が本来の刃の二倍近い長さとなって現れる。不意にエネルギー刃に変化が起こる。

強大なエネルギーを放出するだけだった？零落白夜？の刃が細く鋭い物へと変化していくのだ。

やがて変化が収まると？雪片二型？本来の実体部分は全て消え柄から上には日本刀の形状へと集約した？零落白夜？だけが残った。

「ありがとうよ……」

一夏の小さく呟いた言葉は誰の耳にも届かなかった。そして一夏は刀を腰に添え居合いの構えを取った。

「……………」

黒いISが刀を振り下ろす。

鋭く早い、それは千冬が放つものと全く同じ袈裟斬りけさぎりだった。

「ただの真似事だ」

そう言つて一夏は腰から抜き放ち横一線、黒いISの刀を弾く。そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ黒いISを断ち斬った。

「ぎ、ぎ……ガ……」

紫電が走り黒いISは真っ二つに割れ中からラウラが現れた。

しかし立っていたのは一瞬、ラウラは力を失って崩れた。

一夏は崩れるラウラを抱きかかえた。

side out

side 魔神竜馬

これで終わりかな？

一夏とラウラを見て俺は思った。

すると不意にラウラの待機状態のISから何かが排出された。

『シュヴァルツェア・レーゲン？黒き雨？の機能停止を確認。VTシステムの修正すべき点等の確認も完了』

不意にそんな音声が聞こえたかと思うとアリーナの上空から10機のISが現れた。

現れたISは全て？フル・スキン全身装甲？だった…

『？黒き雨？のパイロット、ラウラ・ボーデヴィツヒの生存を確認。及び目撃者を確認』

謎のISはアリーナ内部を見渡し音声を発した。

俺達は謎のISを見ていた。

目撃者…やべえ…！

「全員逃げる…！こいつは全員殺す気だ…！！」

『目撃者の抹殺、スタート開始』

俺が叫ぶと同時に10機の謎のISはそれぞれの武器で俺達を攻撃してきた。

俺はレーザーによって両足を撃ち抜かれた。

「ぐっつ…！？」

そして見ている目の前でシャルルの右腕が切り裂かれ宙を舞った。



箒は殴り飛ばされアリーナの壁へと叩きつけられ血を吐く。  
一夏は腹部を貫かれ倒れた。

「くっ！！ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』！！！！」

俺は痛みをこらえながら呪文を唱えフェニックスへと変身した。  
急がねえと3人が！！

「？治癒の焰？！！！！」

俺は飛び上がり3人に？治癒の焰？を放った。

これによりシャルルの右腕は繋がり、箒は内臓類が修復され、一夏の腹部が塞がった。

その代わり俺の右腕が半分千切れ吐血し腹部に小さな穴が開いた。

「がふっ……くっ！？治癒の焰？！！」

自分に？治癒の焰？を使い一気に傷を治療していく。

早めに4人を運ばないと…

「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』！！」

再び呪文を唱え俺はフェンリルへと変身した。

「影道！！」



……ここに怒り狂う狼神が誕生した。

戦乙女と白き戦士と魔なる神（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、月光閃火様、フレイス様、空刀様、妖気様感想ありがとうございます。

空刀様より薬品のニトログリセリンと、ロストロギア『王者の祈り』を、

妖気様より竜馬にウサギ（名前：フレンド）を、

いただきました。

竜王「流石に暴走中なんで竜馬は居ません」

月光閃火「暴走…か」

美春「心が弱いんですの？」

「お邪魔します」

竜王「あ、フレイス様の所からティアナ、さとり、こいしが来ました」

こいし「すごい！私に気付いてる！！」

竜王・さとり・こいし以外「え！？」　こいしの存在に気付いた

さとり「よくこいしに気付けたわね…（心が読めない!?!）」

竜王「なんとなく?結構のんびりしてたら気付けたよ」

さとり「（なんだ、何も考えていないだけか）」

こいし「よいしょっど」

竜王「…何で俺を背負っているんだ?」

こいし「面白いからペットにしよう」と

ティアナ「ちょっ!?!?流石にそれは!?!」

竜王「ん〜…別にペットになっても良いんだが…」

さとり「（ん???竜王を連れてかないで?誰の心かしら?）」  
部  
屋を見渡す

レム「!?!」 さとりと眼が合い隠れる

さとり「（ぶぶん）こいし、竜王さんは置いていきなさい」

こいし「え〜…」

竜王「いつでも来て良いよ?」

ティアナ「攫われそうになったのに優しいんですね」

さとり「何も考えてないだけよ」 心を読んだ

竜王「さ〜て（闇を狩る少年続きます）」

さとり「思うだけじゃ私しか分からないわよ。私が言っわ、闇を狩る少年続くわよ」

（癒しの部屋）

フェイト「キャロ……………」　ほんの少しだけ顔色が良くなっている

（雑談所）

竜王「と言っかティアナはこいしに気付いてなきやダメなんじゃないの?」

こいし「来る途中で私が能力を使ったからね」

ティアナ「……………気付かなかった」



残り8機…

シエドゥウバシタヨーンツヴァイ

「影槍 Ver?!!!!!!!!!!」

『四つ、体は戦神の如し…』

俺が発した言葉は何故かドイツ語へと変化していた。

さらに無々のカートリッジがロードされる。

「お お お お お お お お お お お お お お お  
お お お お お お お お お お お お お お お  
お お お お !!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

俺の体の皮膚が赤黒く染まっていった。

どうやら身体強化らしいな…

それと同時に俺に向けて全ての影槍が飛来する。

ウエグデアサクン シャドゥメイディエン

「影道……? 影の乙女?」

影道を使いISの内の一機と場所を交換した。

ISは様々な方向から飛来する影の槍によって身体を貫かれた。

残り…7機……

『敵戦闘能力、強大。全機による殲滅を開始します』

IS達はそう音声を発し装備していた武装を破棄し新たな武装を装備した。

関係無い…

『五つ、与えるは死神の如し…』





……機械の抱く恐怖とやらを!!

!!!!

side out

side 第3者視点

「う、あ……………」

小さな呻き声とともにラウラは眼を覚ました。  
彼女の隣のベッドには一夏、シャルル、箒が横になっている。

「気がついたか」

ラウラが起きた事に気付き千冬が尋ねる。

「私……………は……………!?!」

不意に起こった爆発音にラウラは身をすくませた。  
軍人とはいえ今身を守っているのは薄手のISスーツだけなので当然である。

「竜馬……………」

「魔神先生が……………どうかしたのですか?」

千冬がアリーナの方角を見て呟いた事にラウラは尋ねた。

「ああ、お前が気絶した直後に謎の？フル・スキン全身装甲？のISが10機現れてな。お前のISから排出されたこれを回収するために来たらしい」

そう言って千冬は小さな金属の筒の様な物を取り出した。それは気絶したラウラのISから排出されたものだった。

「それは…？」

「VTシステムは知っているな？」

「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。過去のモンド・グロッソヴァルキリーの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは……」

ラウラの言葉を聞き千冬は頷いた。

「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のISに積まれている」

そう言って千冬は小さな金属の筒をつまみあげる。

それと同時に再び爆発音が響き渡る。

「教か…織斑先生、その謎のIS10機は現在？」

「竜馬が戦っている……3人を傷つけられ怒り狂ってな」

そう言って千冬は小さく震えた。

「3人……と言うと今ここで横になっている3人ですか？」





怒り狂う狼神 <Raging Wolf Gott> (後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想ありがとうございます。

フレイス様、ルシフェル様、妖気様、月光閃火様感想ありがとうございます。  
ざいます。

竜王「……そう言えば雪の出番が無かったなあ」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所よりユウキ、早苗、こいしが来ました」

ユウキ・早苗「え!?!」 「こいしがいる事に驚く

こいし「面白かったから今日も来ちゃった」

〜癒しの部屋〜

フェイト「スー……スー……」 日々の疲れからか睡眠中

〜雑談所〜

月光閃火「と言うか竜馬の暴走は良いのか?」

美春「ですの」

竜王「気にしない、それに気を失ったし」

ユウキ「俺とのデュエルは大丈夫か?」



## ひかり

side 第3者視点

竜馬が謎のIS10機を殲滅してから1週間が経過した。  
気絶した竜馬は未だに目を覚まさず眠り続けている。

「「竜馬……」」

「「竜馬先生……」」

「「魔神先生……」」

「……」

眠る竜馬の見舞いに一夏、鈴音、シャルル、セシリア、箒、ラウラ  
がやってきた。

全員の顔を見て千冬はため息を吐いた。

「はあ…お前等、辛気臭い顔をするな。竜馬は生きている。だから  
起きるまで元気に待て、それが竜馬の望みだからな」

「そうだよ、それにお兄ちゃんが起きた時に皆がそんな表情じゃ笑  
われるよ」

続いて雪が言った。

side out

side 魔神竜馬

……ここはどこだ？

見渡す限り黒の空間に俺はいた。

「問おう……」



不意に声が響き渡った。

俺は驚き言葉を発しようとしたが何故か声が出なかった。

「言葉など必要ない。我が問いに心で答えよ……」

心で答える？

「問おう…汝、何を望む？」

俺が望むもの…

それは、俺の仲間が笑っていられる世界。

「問おう…汝が望む世界を創る為に多大な犠牲が必要となる。なればどうする？」

犠牲…

そんなものを出さずに俺は俺の望む世界を目指す。

「問おう…汝が欲すは？敵を滅ぼす力か？仲間を救う力か？」

俺の欲しい力…

……どっちを選んでも同じだ。

敵を滅ぼすのなら俺は仲間を救える。

仲間を救うのなら俺は敵と戦える。

「問おう…汝が死に汝の仲間を悲しみが包み込む。なればどうする？」

俺が死んで悲しむ…

だったら死ねないな。

俺は何が何でも生きて仲間の元に戻る。

「最後の問いだ…全てのものを失いし時、汝はどうする？」

全てのもの…？

「汝の仲間、地位、金…命以外のあらゆるもの全てだ」

つまりは孤独って事か…

何もかもが無くなったというのなら俺はもう一度集めるだけだ。  
何度でも諦めずに！！

「？怒れる狂神？の情報「ゴッドファクトウ・ドウルストウ」を完全書換「コンプリエトノウエゲシユリーベン」」

？怒れる狂神？！？

どう言う事だ！？

フォルステンディゲ  
「完了…：…新たな名前を入力を求めます」

俺の間の前に一人の少女が現れた。

誰だ？

わたくし  
「私は元？怒れる狂神？です。データを書き換えましたので新しい名前をください」

…もしかして。

俺が戦っている最中に無々が言っていた最適化「フィッティング」ってのはこれを行うための準備か？

「無々とは？虚無と無限？の事ですね。その通りです」

なるほどな。

新しい名前か…

データを書き換えたって言ってたな。

どんな魔法になったんだ？

「はい、カートリッジをロードすることに能力が発動していきます。さらにこの魔法はマスターの？護りたい？？救いたい？と言っ思いの強さに比例して強くなります」

基本的構造であるカートリッジの多数使用は残ってるのか…  
俺の思い…

「ただし、少しでも？憎しみ？？怨み？と言った負の感情があれば発動できません」

負の感情…

ん？

って事は…

「はい、？魔狼転身？との結合は解除リンクされています」

そうか、良かった。

「あの、マスター名前を…」

少女が涙目になって言った。

ああ、悪い悪い。

そうだな、？奇跡ノ光刃？でどうだ？

「？奇跡ノ光刃？…名称登録、完了しました。それでは現実あざむでもう一度会いましょう」

少女、？奇跡ノ光刃？がそう言つと同時に俺は光に包まれ意識を失つた。

side out

side 魔神雪

「う、あ……？」

「お兄ちゃん！？」

呻き声の様な物が聞こえると同時にお兄ちゃんの体が光を発した。何！？

「雪……？」

「お兄ちゃん……ん！？」

光が徐々に消えていくとお兄ちゃんと女の子がいました。歳は……10歳ぐらいかな？

「初めまして、マスターの妹の魔神雪さんですね」

「あ、初めまして。あなたは……？」

不意に女の子が話しかけてきたから私はつかえしてしまった。

「失礼しました。私わたくしは？奇跡ノ光刃？です」

「「は！？」」

それが名前！？

女の子の言葉に私とお兄ちゃんは驚きました。

「つてお兄ちゃんは驚いちゃ駄目じゃ無い!？」  
「いや、まさか現実に出てきてるとは思わなくて…」

私の言葉にお兄ちゃんは答えた。

現実に出てきてるってどう言う事だろう？

side out

side 魔神竜馬

「えつと纏めよう。？奇跡ノ光刃？で間違いないんだよね？」

「はい」

俺の問いに少女は頷いた。

「んで、俺は学年別アリーナから1週間寝てたんだな？」

「そうだよ」

俺の問いに雪は答えた。

「はあ……多分俺の授業は千冬がやってくれたんだろうな。後で何か奢ろう」

俺はため息を吐き言った。

「そう言えばお兄ちゃん。この子はいつたい…」

「ああ、この子は？奇跡ノ光刃？俺の魔法だよ。つっても何でこの姿なのかは俺にも分からん」

雪の問いに俺は首を振りながら答えた。

マジでどうなってるんだ？

「私がこの姿でいられる理由は単にマスターのお陰です。私の本体はマスターの内部にあります。それによって私に魔力供給が行われこの姿を保てるのです」

それですかよ…

「あゝ…？奇跡ノ光刃？…って何か呼びにくいな。えっと…光ひかりって呼んで良いか？」

「構いませんよ。愛称ニックネーム、光。登録しました」

名前を呼んで呼びにくかったので案をあげると？奇跡ノ光刃？、光は頷いた。

「さて、光はずっとその姿のままなのか？」

「いえ、マスターがお邪魔だと言うのでしたら待機状態、及び武装状態になりますよ」

待機状態に武装状態？

どう言う事だ？

「説明してもらえるか？」

「はい、私は元々魔法ですが？虚無と無限？無々さんのお陰でデバイスに近い状態なんです。勿論魔法も発動できますよ」

光は嬉しそうに話した。

「無々？」

『はい、彼女の言った事は事実です。私の形状の中から重剣のデータを全て引き継がせました。これにより魔法？奇跡ノ光刃？光さん

は効率的に魔法を発動できるんです』

人間だったら「えっへん」と言う言葉が付きそうな口調で無々は言  
った。

ふむ…

「つて事は光も腕輪なのか？」

「はい」

そう言つて光は俺の左腕を掴んだ。

すると次の瞬間、光は光を放ちながら腕輪の姿へと変化した。

「……ややこしいな」

「『？』」

俺の言葉に3人は首を傾げた。

明確には1人が首を傾げて他の2人はそんな雰囲気<sup>ひかり</sup>がした、だが。

「まあ、良いか。これからよろしくな。光<sup>ひかり</sup>」

「はい」

## ひかり（後書き）

〜霊使い達の雑談〜

感想ありがとうございます。

ルシフェル様、フレイス様、妖気様、月光閃火様感想ありがとうございます。

竜王「ふう…出せて良かったかな？」

光「出れて良かったです」

竜馬「俺も復活だ」

「お邪魔します」

竜王「あ、フレイス様の所より小町、<sup>チルノ</sup>？、さとりの3人が来ました」

チルノ「だから？って何？」

小町「知らなくても良い事だって」

さとり「（…相変わらず読めないわね）」

竜王「…小町、仕事は？」

小町「さぼり〜」

竜馬「（三途の川は大丈夫なのか？）」



光「うん…眠いから私は待機状態になります」　そう言って腕輪状態になる

竜馬「ああ、分かった」

美春「ひ、ひゃあああああ!？」

月光閃火「(可愛い)」　美春の背中を人差し指でなぞった

竜王「さて、光こと？奇跡ノ光刃？の紹介でもするか」

・奇跡ノ光刃　愛称　光(ひかり)

待機状態・銀の腕輪。ところどころに金色の装飾が付いている。

武装状態・両刃の重剣。

人間状態・外見は10歳前後の少女。髪の色は金色で瞳は黄色。服装は気分によつて変える事が出来る。

魔法・発動していないため現在不明。ただ？怒れる狂神？と同じでカートリッジを複数使用する。竜馬の？護りたい？？救いたい？？と言う思いの強さに比例して強くなり少しでも？憎しみ？？怨み？？と言った負の感情があれば発動出来ない。

備考・魔法本体は竜馬の内部にあるので破壊されてもしばらくすれば元に戻る。

竜馬「……何で少女？」

竜王「じゃあガチムチにする？」

竜馬「少女で………」

さとり「ロリコン？」

竜王「違うからね!？」

チルノ「あたい空気？」

竜馬「いや、氷」

月光閃火「それは違う気が…」

光「くあく…闇を狩る少年続きました…」  
そう言って再び腕輪に  
なる

竜王「……寝ぼけてたな」

竜馬「だな」

小町「あたいも寝ようかね」

竜王「あ、布団はあっちの部屋だから」

小町「はいよ」

竜馬「お茶でも飲むか」

さとり「私も飲みたいわ」

チルノ「あたいはアイス!!!!」

男が女？…くだらない理由で！！

side 魔神竜馬

「さて、授業の準備だな」

そう言っただけ俺は書類を纏め始めた。

一週間寝ていたから少し鈍ったか？

「竜馬か！？起きたんだな」

「ん？千冬か。ああ、心配掛けたな」

声かして振り向くと千冬がいた。

「それは良い。体は大丈夫なのか？」

「あゝ…一週間寝たから何か鈍ってる気がする位かな」

千冬言葉に俺は答えた。

「そうか、辛くなったらいつでも言ってくれ」

「分かった。後で何か奢るよ」

頷き歩いていく千冬に俺はそう言った。

さて、と。

「教室に行くか」

そして俺は教室に向かった。

side out



ここで言う光とは？正義？であり影は？悪？である。

どちらも相手が無ければ存在しない。

しかし竜馬は？正義？の『大罪<sup>悪</sup>』を持つ。

おそらく無意識の内に選んでしまったのだろう。

「　　」

そして歌が終わると同時に竜馬は教室のドアを開けた。

side out

side 魔神竜馬

「竜馬！！起きたんだな！！」

そう言って一夏が歩いてきた。

その後ろに篝、セシリア、ラウラ、シャル……ル？

「……一夏、その女子の制服を着てるのって」

「あ、そう言えば竜馬は寝てたんだっただな。シャルロット、説明してくれ」

一夏はそう言ってシャルルを呼んだ。

もしかして…

「竜馬先生、初めましてでは無いですがもう一度言います。シャルロット・デュノアです」

「……ああ、そう言う事が。つまりは男装してたんだな？」

俺の言葉にシャルルは頷いた。

本来女子であるシャルルを男としてここに来させた……

「……なるほど、シャルロット。お前の親父はどこだ、殴り飛ばす」  
「ちよっ！？どうしたんだよ竜馬！！」

一夏は驚き聞いてきた。

「……何でシャルロットが男装していたか分かったからだ。くだらない事を考えやがって……」  
「「「「！！！！！！」」」」

一夏とシャルロットは俺の言葉に、ラウラと箒は俺の漏らす殺気に驚いていた。

実の娘を利用するなあ？

ぶん殴る！！！！

「……お兄ちゃん。それ、私も行って良い？」

「ああ、一緒に来い。………いつそ会社を壊滅させてやるつか」

俺の言葉の最後の方の呟きが聞こえた者は一斉に俺を見た。

「ま、魔神先生！？そ、それはお止めになった方が！！」

「雪も何を言っている！！」

セシリアが俺に、箒が雪に言った。

「何で止める……俺は許せないんだよ……俺の仲間、まあ俺の勝手な解釈だが、を利用したクス野郎がな……」  
「で、ですが！！」



「あだあつ！？！？」

不意に俺は頭に強い衝撃を受けた。  
見れば千冬が出席簿を片手に立っていた。

「何するんだ千冬……」

「まったく、大変だろうと思いい様子を見に来て見れば……何故誰も竜馬を止めようとしなかった」

俺は怨みがましく千冬を見た。

しかし千冬は気にせずと言った。

「千冬、喰らって分かったけどそれ結構痛いぞ」

「しまっ！？……んん！！竜馬だから威力を上げただけだ」

俺だからかよ……

「仕方が無い、今回は諦めるか……すまんなシャルロット」

「いえ、僕のために怒ってくれてありがとうございます」

と言つか俺が感じていた違和感はこれだったんだな。

ん？

そう言えば……

「さっきラウラが一夏の事を嫁と言っていたが……どう言う事だ？」

「日本では気に入った相手を嫁にするというのが一般的な習わしだと聞きましたので」

俺の問いにラウラが答えた。

誰だ間違った常識教えたの……



「それが成立するなら俺は一夏の兄になるのか……」

「俺としては千冬姉と……あだあつ!!!!!!??」

ラウラの兄になってるからなあ。

俺の眩きに一夏が何かを言っていたが途中で千冬に殴られ上手く聞きとれなかった。

「余計な事を言つな馬鹿モノが//////」

何故か顔を赤くして千冬は言った。

……俺は平和を守れたんだな。

男が女？…くだらない理由で！！（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物（いや者もいるな）ありがとうございます。

ルシフェル様、フレイス様、月光閃火様、White Seal様、妖気様、バラランシヤ様、銃王 海さん、空刀様感想ありがとうございます。

銃王 海さんよりギターを、

空刀様より竜魂絶夜<sup>じゅうこんぜつや</sup>ロストロギア 暗黒の邪神（テスト使用済み）空刀作（）を、

いただきました。

竜王「抜き足、刺し足、忍び足とここでこれを……」

竜馬「何をしてるんだ？」

竜王「ん？White Seal様から送られてきた映姫の説教が録音されたテープを小町の耳元にセットしたただだよ」

竜馬「（悪夢につながれるかな…）」

月光閃火「鬼か…？」 美春を抱えている

「くんには」

竜王「あ、フレイス様の所よりユウキとティアナが来ました」

ユウキ「一段落はつきましたか？」

竜王「ああ、明日乗せるつもり」

ティアナ「そうですか」

絶夜「俺達は本編に出られるのか？」

虎伍「同じく」

竜王「どうだろう？上手く出せたら出そうと思ってるんだけどね」

「お邪魔します」

ユウキ「うわあああああああ！？」

ティアナ「モンスター！？」

竜王「いや、2人共。来也の心を攻撃しないであげて。妖気様の所より来也が来ました」

来也「右肩に目玉があるから仕方が無いけどさ…まあ良いや、竜馬。戦おう」

竜馬「良いぞ、鈍ってたから調子を取り戻したい」

絶夜「俺もやる」

虎伍「俺もだ」







**番外編 - 紅魔VS黒き翼（前書き）**

ラウラ編が終わりましたので番外編です。

本文は前回の番外編同様フレイス様に書いていただきました。

ありがとうございます。

## 番外編・紅魔VS黒き翼

「来たか……竜馬。」

「ユウキ、今回はアンチデッキじゃないと聞いたが本当か？」

竜馬はユウキの挑戦状を見て本当なのか聞いてみた

「ああ、本当だ俺のデッキには機皇カードは入っていない……」

\* \* \* \*

なのは「えっ！？機皇帝のカード入っていないの!？」

ユウキの言葉になのは達は驚きの声を上げた。

ティアナ「本当よ、今回ユウキが使うデッキはいつも使っているデッキよ。」

紫「ユウキと戦っていたけど……あのデッキは強いわよ。」

ユウキを見ながら紫は言った。

\* \* \* \*

竜王「ルールを説明するぞ、今回のデュエルは禁止カードは使えない。竜馬はオリジナルカードを使用することができる。もちろんアニメオリジナルカードも使用しても良い。

もちろんユウキはアニメオリジナルカードを使っても良い。それでいいか？」

「ああ。」



「問題ない。」

竜王「よし、それじゃあ、ユウキ、竜馬デュエルディスクを展開してくれ。」

竜王の言葉にユウキと竜馬はデュエルディスクを展開する

「竜馬……俺の本当の力を見せてやる。」

「ああ、かかってきな!!」

竜王「これより竜馬VSユウキのデュエルを開始する!!ライフポイントが4000!!」

\* \* \* \* \*

なのは「始まるんだね」

雪「お兄ちゃん頑張ってるね」

デュエルが始まるといっのに緊張感を雪が砕いてしまった。

\* \* \* \* \*

「いくぞ!!竜馬!!」

「来いユウキ!!」

「デュエル!!」

竜馬LP4000VSユウキLP4000

互いのプレイヤーがデッキから五枚カードを引く。

一瞬視線を交錯させた後、ユウキは竜馬に向けて声をかける

「竜馬、先攻は貰うぞ!!」

「ああ、（よく考えてみたら前回と前々回もユウキが先攻だったなまあこっちはどちらでもいいけど…）」  
「俺のターン、ドロー…！」

ユウキはデッキからカードをドローし手札に加える。

「（よし…手札事故は無い、まずはこいつだ…！）」

ユウキの手札は悪くないようだ…一方竜馬はというと…

「（…手札が悪い…ユウキが《手札抹殺》をしてくれたら助かるけど…そううまくいかないか…）」

どうやら竜馬はユウキの《手札抹殺》をまっていたが、手札事故を起こさないデッキのため《手札抹殺》はこのターンは無いようだ

「俺は、手札より《カードガンナー》を守備表示で召喚！」

《カードガンナー》

効果モンスター（準制限カード）

星3 / 地属性 / 機械族 / 攻 400 / 守 400

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。

このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする。

また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「《カードガンナー》の効果を発動する！1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送ることが出来る！この効

果で墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする！よって、攻撃力は400から攻撃力は1900になる！」

《カードガンナー》

ATK400 ATK1900

\* \* \* \*

ユウキはデッキからカードを3枚墓地に送る時紫はユウキが墓地に送ったカードを見た

紫「（あのカードは……）」

ティアナ「紫さんどうしたんですか？」

紫「いえ、何でもないわ……」

ティアナの問いに紫は首を振り答えた。

\* \* \* \*

「《カードガンナー》は現在守備表示のため攻撃は出来ない、それに最初のターンは攻撃は出来ない。俺はカードを5枚伏せてターンエンドだ。」

ユウキは伏せカードをデュエルディスクの魔法・罠ゾーンのスリットに差し込む。

すると、ユウキのフィールド上にリバースカード5枚が出現した。

「そしてこのターンのエンドフェイズ《カードガンナー》の攻撃力は元に戻る。」

《カードガンナー》

ATK1900 ATK400  
ユウキLP4000

手札0

リバーズカード5

\* \* \* \*

なのは「いきなり5枚のリバーズカード!？」

フェイト「(ユウキのデッキは畏しくないデッキなのかな?)」

ユウキの行動になのは達は驚いた。

ティアナ「(ユウキ、何を狙っているの?)」

\* \* \* \*

「(リバーズカードが5枚か……何を狙っている?)俺のターンドロー!！」

竜馬はドローしたカードを手札に加える

「手札より《紅魔・紅美鈴》を攻撃表示で召喚!！」美鈴「アチヨ  
ー!！」

《紅魔・紅美鈴》

チューナー(効果モンスター)

星4/血属性/戦士族/攻1900/守2000

このカードがカード効果によって手札に加わったとき特殊召喚する

ことができる。

ただしこの効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上のモンスターを1体破壊し手札を1枚選択し墓地に捨てる。  
このカードは？紅魔・フランドール・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

「……………最初のモンスターが中国かよ……………」

美鈴「そ、そんなこといわないでください！！竜馬さんあの機械を破壊すればいいんですよね？」

美鈴はユウキの《カードガンナー》に指を指す

「ああ、そうだけど……………美鈴。」

美鈴「はい、なんででしょうか？」

「じゅめん。」

美鈴「えっ？どうして謝っているんですか？」

「……………手札から魔法カード《お仕置き》を発動。」

《お仕置き》

通常魔法

自分フィールド上に《紅魔・紅美鈴》が表側表示で存在している時発動する事が出来る。デッキから《紅魔・十六夜咲夜》自分フィールド上に特殊召喚し、お互いのプレイヤーはカードを2枚ドロウする。

その後《紅魔・紅美鈴》を破壊する。

「俺のフィールド上に《紅魔・紅美鈴》が表側表示で存在している時発動する事が出来る。デッキから《紅魔・十六夜咲夜》自分フィールド上に特殊召喚。」

咲夜「……………美鈴……………」

《紅魔・十六夜咲夜》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守1300

相手のドローフエイズ、スタンバイフェイズ、メインフェイズ、バトルフェイズの内1つをスキップする。

その後、自分の手札を2枚選択して墓地に捨てる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードは？紅魔・レミリア・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

美鈴「えっ、咲夜さん！？どうして怒っているんですか!？」

咲夜「前回のことでね……どうしてあの時マシニクルを破壊するのを手伝わなかったの？」

美鈴「えと……それは……」

どうやら咲夜が怒っている理由は前回、美鈴がマシニクルを破壊するのに、なぜか眠っていたことを話しているのだ

その間ユウキと竜馬は《お仕置き》の効果でデッキからカードを2枚ドロージた。

咲夜「中国……お仕置きよ!! 傷魂「ソウルスカルプチュア」!」

美鈴「きゃあああああああ!? どうして私はこんな役ですか……!？」

\* \* \* \*

なのは「あははははは……」。」「  
フェイト「なんかこれ……お仕置きじゃなくて……」

はやて「確実に殺しているように見えるで。」

咲夜の行動になのは達は苦笑いを浮かべた。

早苗「なんだか可哀想ですな（汗）」

文「いつものことですよ。」

ティアナ「これ…さすがにやりすぎじゃ…。」

早苗の言葉に文は平然と言い放った。

\* \* \* \*

咲夜「竜馬、終わったわ。」

「ああ…（すまん美鈴、後で竜王に頼んで怪我を治すから！！）」

竜馬は心の中で美鈴に向けて謝った

「俺は手札より魔法カード《紅魔コール》を発動！！」

《紅魔コール》

通常魔法

自分のデッキから紅魔と名のついたカードを1枚手札に加える。

「紅魔コール」は1ターンに1枚しか発動できない。

「このカードは、俺のデッキから紅魔と名のついたカードを1枚手札に加える。」

「（紅魔と名のついたカードを手札に加えるか…竜馬何を手札に加えるつもりだ…？）」

竜馬はデッキから、《紅魔・小悪魔》のカードをユウキに見せて手

札に加える。

《紅魔・小悪魔》 チューナ（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 悪魔族 / 攻1300 / 守1500

このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することが出来る。

この効果を使用したターン自分はバトルフェイズを行えない。

このカードは？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？のシンクロ素材にしか使用できない。

「バトル！！咲夜さんで……。」

咲夜「待つてください、魔神様。」

竜馬は咲夜で攻撃宣言をしようとしたが咲夜の言葉に竜馬は咲夜に視線を向ける。

「なんだ？咲夜さん？」

咲夜「私のことは、咲夜とお呼びください。」

「で、でも……」

咲夜「……… お願いします魔神様。」

「……… 分かった、咲夜… 《カードガンナー》 に攻撃してくれ！！」

咲夜「はい！！」

咲夜はユウキの《カードガンナー》に向けてナイフを放つ《カードガンナー》はナイフに当たり破壊される。

「……… 《カードガンナー》の効果によりデッキからカードを1枚ドローする！！」

「俺は、カードを2枚伏せてターンエンド。」



竜馬LP4000

手札4

リバーズカード2

\* \* \* \*

なのは「うーん……。」

唸りながらなのはは首を傾げた。

フェイト「どうしたの、なのは？」

なのは「だっておかしいよ！！ユウキのフィールド上にリバーズカードが5枚あるのに発動しなかったんだよ！！」

はやて「確かに……。」

ユウキのフィールドを見ながらはやては頷いた。

\* \* \* \*

「俺のターン、ドロー！！」

ユウキはデッキからカードをドローし手札に加える。ドローカードを確認した後ユウキは竜馬へと視線を向ける。

「竜馬、今から俺のモンスターを紹介しよう。」

「それは楽しみだな。」

咲夜「ユウキさん、どんなモンスターが来ても…私は負けません！！」

咲夜は、ユウキに向けてこう話す。

実は前回のことからユウキは紅魔館メンバーに向けて謝っていた…。もちろんレミリアとフランとパチュリーはユウキに向けて攻撃を仕掛けユウキはまた気絶をってしまったのだ。

そんな中、咲夜と美鈴と小悪魔はそんなユウキを許したのだ。だからユウキと話すときは柔らかい表情で話しかけたのだ。

「じゃあ、今から俺のモンスターを見せてやるぜ！！」

ユウキは手札からモンスターカードを取り出しデュエルディスクに置いた。

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。来いブラックフェルカつき《BF - 暁のシロツコ》！！」

ブラックフェルカつき  
《BF - 暁のシロツコ》

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2000 / 守 900

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。

1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。

この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

「BFだと!?!」  
ブラックフェザー

「そつだ、俺のデッキはBFだ!?!」  
ブラックフェザー

\* \* \*

なのは「BF!?!」  
ブラックフェザー

フェイト「聞いたことがある、あのシリーズはインチキカードがた  
くさん入っているデッキ。」

はやて「フェイトちゃん、それ言ったらだめや。」

はやては自分がBFのデッキを使用しているため否定する。

早苗「これがユウキさんのデッキ。」  
ブラックフェザー

紫「そつよ。でもBFのほかにもいろいろなモンスターが入ってい  
るわよ。」

キャラ「ということはお兄ちゃんのデッキにはまだBF以外のカー  
ドが入っているということですか?」  
ブラックフェザー

紫「そついうことよ。」

キャラの言葉を紫は肯定した。

\* \* \*

「さらに俺のフィールド上にBFが存在するときこのカードは手札  
から特殊召喚することができる!!! 来い!!!」  
ブラックフェザー  
《BF - 黒槍のプラス

ト

《BF - 黒槍のプラス》  
ブラックフェザー

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守 800

自分フィールド上に「BF - 黒槍のプラスト」以外の「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「一気に2体のモンスターをそろえたか…。」

竜馬はユウキのモンスターを見て考える…

「バトル！！<sup>あかつき</sup>暁のシロッコで咲夜を攻撃！！」

<sup>あかつき</sup>暁のシロッコは咲夜に向けて攻撃を仕掛けるが…

「<sup>せい</sup>畏発動！！<sup>せい</sup>《聖なるバリア - ミラーフォース - 》」

《<sup>せい</sup>聖なるバリア - ミラーフォース - 》

通常畏（制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「《<sup>せい</sup>聖なるバリア - ミラーフォース - 》の効果によりユウキのモンスターは全滅だ！！」

「…ッ!？」

\* \* \* \*

なのは「やったー！！」

フエイト「さすが竜馬。」

はやて「まさかミラーフォースでユウキのモンスターを全滅させるとはな…。」

アリシア「これでユウキのモンスターはいなくなって、通常召喚できない、次のターンでダイレクトアタックが…。」

紫「こんなカードでユウキはやられるかしら？」

紫の言葉になのは達は紫のほうへ顔を向ける。

なのは「どういうこと？」

紫「ユウキのBFは止められないということよ。」

\* \* \* \*

竜馬の罫によってユウキのモンスターは全滅した…だがユウキは、竜馬に向けてこう言った。

「竜馬、まさか俺のモンスターを破壊すればバトルフェイズを終了すると思っていなかったか？残念ながら俺のBFを止めることはできないぜ…！」

「何？（ユウキのフィールド上にモンスターはいないそれに通常召喚は行っている、何を狙っているんだ…）」

「自分フィールド上に存在する「BF」がカードの効果によって破壊された時このカードは手札から特殊召喚する事ができる！！来い」

《BF - 流離いのコガラシ》

《BF - 流離いのコガラシ》

チューナー（効果モンスター）

星6 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2300 / 守1600

自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモン

スターがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

また、このカードをシンクロ素材としたシンクロ召喚に成功した時、相手は魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事ができない。

ユウキのフィールド上に新たなBFブラックフェザーが特殊召喚され竜馬は驚くしかなかった。

「どうだ竜馬！俺のBFブラックフェザーを簡単に封じられると思ったら大間違いだぜ！」

「…まさかユウキがそこまで俺に攻撃をするとはな…！」

「行くぜバトル！！流離たからひいのコガラシで咲夜を攻撃！！！」

流離たからひいのコガラシは咲夜に向けて攻撃を仕掛けるが、竜馬は罠を発動する。

「罠発動！！《ルナダイヤル》」

《ルナダイヤル》

通常罠

自分フィールド上に、自分フィールド上に《紅魔 - 十六夜咲夜》が表側表示で存在している時発動する事が出来る。

このターン、自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘では破壊されない。

バトルフェイズ終了時デッキからカードを1枚ドローする。

「このターン、自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘では破壊されない！！！」

流離たからひいのコガラシの攻撃を咲夜はナイフを使い防御をする

「だが、ダメージ計算は受けてもらうぞ。」  
「ッ……」

竜馬LP4000 LP3600

\* \* \* \*

雪「お兄ちゃん!!!!!!」

竜馬がダメージを受けた事に雪は叫んだ。

なのは「ユウキが先にダメージを与えてきたの」  
フェイト「防ぎきれなかったね……」

悔しそうな表情でなのは達は言った。

\* \* \* \*

「……《ルナダイヤル》の効果でカードを1枚ドロウする!!」

竜馬はデッキからカードを1枚ドロウし手札に加えた。

ユウキは竜馬がドロウをするのを確認した後次の行動を移る。

「俺は手札より、《BF - 追い風のアリゼ》<sup>ブラックフェザあ</sup>を守備表示で特殊召喚する!!」

《BF - 追い風のアリゼ》<sup>ブラックフェザあ</sup>  
効果モンスター

星5 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1200 / 守1800

自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスターが2体以上破壊されたターン、  
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。  
このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分は600ライフポイント回復する。

「このカードは、自分フィールド上に存在する。「BF」が2体以上破壊されたターンこのカードは手札から特殊召喚する事ができる。さつき竜馬が発動した罠カード、《聖なるバリア・ミラーフォース》を発動してくれたおかげだ。」  
「まさか俺の罠を利用するとはな…。」

そう、竜馬が言っているのは、罠カード《聖なるバリアミラーフォース》を発動したときと同時にユウキのBFブラックフェザーが展開されたのだ…  
竜馬は罠を発動するタイミングをミスったと心の中で思った。

「俺はこれでターンを終了する。」

ユウキLP4000

手札0

リバーズカード5

\* \* \* \*

なのは「竜馬の罠を利用するなんて…。」

アリシア「でもユウキの手札は0、リバーズカードは今発動する気配はない…」

雪「お兄ちゃん、どうするのかな…?」



竜馬を見ながら雪は言った。

\* \* \* \*

「俺のターンンドロー！！手札より《紅魔・小悪魔》を守備表示で召喚！！」

小悪魔「こあー。」

《紅魔・小悪魔》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 悪魔族 / 攻1300 / 守1500

このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することができる。

この効果を使用したターン自分はバトルフェイズを行えない。

このカードは？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？のシンクロ素材にしか使用できない。

「さらに小悪魔の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することができる。いでよ《キラールマト》。」

《キラールマト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 植物族 / 攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「さらに手札から魔法カード《魔力加速術》を発動!!」  
小悪魔「むむむ…えい!!」

小悪魔は竜馬に向けて魔法を使った。

### 《魔力加速術》

通常魔法

自分フィールド上に《紅魔 - 小悪魔》が表側表示で存在するとき手札から発動することができる。

自分フィールド上に存在するモンスター1体リリースする。  
デッキからカードを3枚ドローし、その後手札から2枚捨てる。

「自分フィールド上に存在する《キラートマト》1体リリースしデッキからカードを3枚ドローする!!その後、手札を2枚捨てる。」  
「……（完全に《天使の施し》の効果だね、何か嫌な予感が…）」

竜馬はデッキからカードを3枚ドローし手札を2枚捨てた。  
そして竜馬の墓地が光り始めた。

「墓地に存在する《暗黒界の尖兵》あんこくかい せんぺい ベージ》×2効果を発動する!!」

### 《暗黒界の尖兵》あんこくかい せんぺい ベージ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1600 / 守1300

このカードが他のカードの効果によって手札から墓地に捨てられた場合、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「俺のフィールド上に《暗黒界の尖兵あんこくかい せんべい ベージ》を2体俺のフィールド上に特殊召喚する！！」

竜馬のフィールドに《暗黒界の尖兵あんこくかい せんべい ベージ》が現れた

ベージ ATK 1600 x 2

咲夜はベージを見て理解した

どうやら竜馬はシンクロ召喚するということ。

咲夜「魔神様、私を使うのですか？」

「ああ、レミリアを召喚したい…いけるか？」

竜馬は咲夜にシンクロ召喚の許可を求める

もちろん咲夜は柔らかい表情で竜馬にこう答えた。

咲夜「もちろんです、お嬢様のことよろしくお願いしますね。」

「ありがとうございます…いくぞ！！レベル4《暗黒界の尖兵ベージ》2体にレベル4《紅魔・十六夜咲夜》をチューニング！！」

咲夜は光の輪になって8つの光の球が光の輪を潜る。

\* \* \* \* \*

紫「どうやら先に竜馬がシンクロ召喚をするみたいね」

雪「お兄ちゃんのデッキは？紅魔-？を出しやすくしてるからね！！」

紫の言葉に雪は大声で宣言した。

\* \* \* \*

「紅に染まりし館の主よ、我が意に従いて現れよ！其は永遠に幼き紅い月！！シンクロ召喚！！現れよ、《紅魔・レミリア・スカーレット》！！」

《紅魔・レミリア・スカーレット》

シンクロ・効果モンスター

星12/血属性/悪魔族/攻2800/守2500

チューナー+チューナー以外の悪魔族2体以上

自分フィールド上にこのカードが存在している時、発動した魔法、罫、効果モンスターの効果の対象を自分に変更することができる。

対象をとらない効果や自分フィールド上及び、相手フィールド上に適用される効果の場合、効果を無効にするか選択し無効にする場合、破壊するか破壊しないかを選択する事が出来る。

このカードが墓地に送られた時、「コウモリトークン」（悪魔族・血・星1・攻/守1000）を可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時このカードが墓地に存在し自分フィールド上に「コウモリトークン」が1体以上存在する場合、「コウモリトークン」を全て破壊し、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果を使用したターンのエンドフェイズに自分の手札を全て捨てる。

レミリア「竜馬、私を呼んでくれてありがとう…ユウキ覚悟はいいかしら？」

レミリアはユウキに向けて殺気を放っている、どうやら前回のことでかなり怒っているようだ。

「手札から永続魔法《吸血鬼の結束》を発動!!」

### 《吸血鬼の結束》

#### 永続魔法

自分フィールド上に《紅魔・レミア・スカーレット》または《紅魔・フランドール・スカーレット》が表側表示で存在する時発動する事が出来る。

このカードがフィールド上存在する限り、「コウモリトークン」と「こづもりトークン」は特殊召喚することは出来ない。  
またこのカードはカード効果で破壊することができない。

「このカードが存在する限り「コウモリトークン」「こづもりトークン」は特殊召喚することができない。」

「…デメリツトしかないカードだが、油断するとやられる。」  
ユウキは《吸血鬼の結束》のカードを見て前回のデュエルのことを思い出す。

「さらに手札から魔法カード《神槍スピア・ザ・グングニル》を発動!!」

### 《神槍スピア・ザ・グングニル》

#### 通常魔法

自分フィールド上に《紅魔・レミア・スカーレット》が表側表示で存在し《吸血鬼の結束》が存在するとき手札から発動することができる

相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

この効果で破壊したモンスター1体につき500ポイントのダメージを相手ライフに与える。

このカードを発動したターン《紅魔・レミア・スカーレット》は

攻撃宣言できない。

「俺のフィールドにレミリアが存在するとき発動することができる。相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！！」

レミリアはスペルカードを発動しユウキのBFブラックフェザーへと狙いを定める

レミリア「行くわよ…神槍「スピア・ザ・グングニル」！！」

レミリアが放った槍はユウキのBFブラックフェザーに襲い全て破壊された。

「クツ…俺のBFブラックフェザーが…」

ユウキは自分のモンスターが破壊されると同時に竜馬はユウキに向けてさらに説明をし始めた。

「さらにこの効果で破壊したモンスター1体につき500ポイントのダメージを相手ライフに与える《神槍スピア・ザ・グングニル》の効果で破壊したモンスターの数は2体よってユウキに1000ポイントのダメージを与える！！」

「（モンスターの除去にバースダメージがあるとは…）」

ユウキ

LP4000 LP3000

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

竜馬はリバースカードを2枚伏せエンド宣言をした。

竜馬LP3600

手札1

リバーズカード2

《吸血鬼の結末》

「クッ、まだ勝負はこれからだ！俺はあきらめない！！」

ユウキの言葉にレミリアは”フッ”と笑いユウキに向けて話をする。

レミリア「ユウキ……このデュエルは、あなたが負ける運命になっているわ。」

ユウキはレミリアの言葉に驚愕する。

ユウキ「何！？俺が負けるだと!?!」

レミリア「ええ、そうよ……ユウキのライフが0になるのはフランクの一撃でライフが0になる運命よ。」

\* \* \* \*

レミリアの言葉に全員驚いていた。

ティアナ「そんな…ユウキが…」

紫「……………」

紫は無言でレミリアを睨みつけた。

\* \* \* \*

「（どうする…次のターンあのカードを引かないとこのカードは発動することができない…それにしても俺が負ける運命か…）」

ユウキは前のデュエルのことを思い出し心の中でつぶやいた。

「（前のデュエルで俺が引き分けのカードを使っているから、本来負けるのは俺だろうな、だからレミリアは俺が負けるとそう言っているんだ。）」

ユウキはレミリアの言葉に反論はできなかった。

このデュエルは負ける運命かなとユウキは思った、次の瞬間…観客から声援が聞こえた

ティアナ「ユウキーーーーー!!!」

「ティア!?!」

ユウキはティアナの声に反応し観客へ視線へ移った。さらに早苗とキャラもユウキを応援している。

キャラ「お兄ちゃん!!負けないでください!!私はお兄ちゃんを信じますから!!」

早苗「ユウキさん!!」

「キャラ…早苗…。」

ユウキはキャラと早苗の声に反応しレミリアへと視線を移った。

「レミリア、俺にはまだ希望がある。」

レミリア「希望?」



「ああ、俺が負ける運命があつたとしても希望がある限り俺は負け  
ない!!」  
レミリア「ユウキ、あなたには希望があつても待っているのは絶望  
よ!!」

「だったら俺は絶望から希望へ変えてやる!!俺のターンドロ―!  
!」

ユウキはデッキからカードをドロ―する。

そしてドロ―カードを確認するとユウキはデュエルディスクにモン  
スターを置く

どうやらモンスターカードを引いたようだ。

「手札より《瓶亀》<sup>かめがめ</sup>を守備表示で召喚!!」

《瓶亀》<sup>かめがめ</sup>

効果モンスター

星4 / 水属性 / 爬虫類族 / 攻 2000 / 守 2100

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、「強欲な瓶」  
が発動する度に自分のデッキからカードを1枚ドロ―する。

「リバーズカード3枚発動!!《強欲な瓶》<sup>しうよく</sup>」

《強欲な瓶》<sup>しうよく</sup><sup>かめ</sup>

通常罫

自分のデッキからカードを1枚ドロ―する。

「この効果で俺のデッキからカードを1枚ドロ―する!!さらに《  
瓶亀》<sup>かめがめ</sup>の効果でさらに1枚ドロ―する!!よって俺の手札は6枚と  
なる!!」

ユウキはデッキからカードを6枚ドロシドロカードを確認する。

「（ドロカード1枚で手札を補充するとはさすがユウキだな…だが、俺にはこれがある。」

竜馬はどうやらユウキに対抗するカードがあるようだ。

「俺は手札から魔法カード《古のルール》を発動!!」

《古のルール》  
いにしえ

通常魔法

自分の手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

「俺の手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する!!手札から特殊召喚するのは………これだ!!」

ユウキはモンスターカードをデュエルディスクに置きモンスターを召喚する…

その名は…

「《青眼の白龍》  
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン!!!!」

ユウキのフィールド上に白銀に光る竜が出現し竜馬に向けて咆哮を放つ。

《青眼の白龍》  
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン

通常モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。



払わなければ、「メタルデビル・トークン」を破壊する。

「《デビルズ・サンクチュアリ》の効果により「メタルデビル・トークン」を特殊召喚。」

ユウキのフィールド上にメタルデビルトークンが出現する。

メタルデビルトークン

ATK0

「バトルフェイズに入る！！行くぞブルーアイズで、レミアアを攻撃！！！」

ブルーアイズはレミアアに向けて攻撃を仕掛けようとしていたが竜馬は伏せカードを発動する。

「レミアアは破壊させない！！畏発動《魔法防御結界》！！！」

《魔法防御結界》

通常畏

自分フィールド上に《紅魔・小悪魔》が表側表示で存在するとき発動することができる。

相手モンスターの攻撃を無効にしバトルフェイズを終了する。

その後自分フィールド上のモンスターを1体破壊する。

次のターンのスタンバイフェイズ、墓地に存在するこのカードを除外することで、

自分フィールド上に存在するモンスター1体選択しエンドフェイズまで攻撃力を1200ポイントアップする。

「相手モンスターの攻撃を無効にしバトルフェイズを終了させる！」

「クッ……。」

ユウキのブルーアイズは、レミリアに向けて攻撃をしたが小悪魔はレミリアの所に行き防御結界を作り、ブルーアイズの攻撃を防いだ。

「さらに《魔法防御結界》の効果で自分フィールド上のモンスターを破壊する…小悪魔すまない。」  
小悪魔「別にいいですよ…。」 出番がほしかった様子。

そして小悪魔は《魔法防御結界》の効果で破壊された。

「（ブルーアイズでもレミリアを破壊できなかった。クッ、俺はこのデュエル負けるのか…ん？）」

ユウキは手札を確認すると、1枚のカードに目をつける。

「（これは…よし、俺は、カードを3枚伏せてターンエンド！）」

ユウキは、全ての手札をデュエルディスクの魔法・罠ゾーンのスリットに差し込む。

ユウキのフィールド上にリバーズカードが3枚出現する  
これでユウキのリバーズカードは5枚

ユウキ

LP3000

手札0

リバーズカード5枚

\* \* \* \*

なのは「またユウキは五枚セットした」

フェイト「迂闊に攻撃すれば手痛い反撃を受けるね」

ユウキの場を見て2人は言った。

\* \* \* \*

「俺のターンドロー!!!この瞬間、墓地に存在する《魔法防御結界》の効果を発動!!」

「...!?!」

竜馬の墓地から《魔法防御結界》のカードが出現しユウキは驚愕する。

そして竜馬は《魔法防御結界》のカードを墓地から取り出しユウキに見せる。

「墓地に存在するこのカードを除外することで自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで1200ポイントアップする!!」

レミリア

ATK2800 ATK4000

「攻撃力...4000だど!?!」

このままではレミリアの攻撃でユウキのブルーアイズは戦闘破壊さ

れる……

だがユウキはこのとき罨カードを発動した

「クツ……だが俺はこのカードを発動させてもらおう！！永続罨《スキルドレイン》！！」

ユウキ

LP3000 LP2000

《スキルドレイン》

永続罨

1000ライフポイントを払って発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

「1000ポイントをコストにして発動する。このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。これでレミリアの効果は使用できない！！」

確かに、ユウキの言うとおり《スキルドレイン》のカードが存在する限り、レミリアの効果は発動することができない……だが……

「そうはさせない！！手札から速攻魔法サイクロンを発動！！」

《サイクロン》

速攻魔法（準制限カード）

フィールド上に存在する魔法・罨カード1枚を選択して破壊する。

「ユウキの《スキルドレイン》を破壊する！！」

竜馬が発動した《サイクロン》は、ユウキの《スキルドレイン》を破壊する。

「クツ……《サイクロン》か……」

ユウキは《スキルドレイン》のカードを破壊され苦しい表情になった。

さらに竜馬は手札から魔法カードを発動する。

「手札から魔法カード《吸血鬼の施し》を発動！！」

《吸血鬼の施し》

通常魔法

自分のライフを半分払い発動する事が出来る。

手札が6枚になるように自分のデッキからカードをドローする。

「俺のライフを半分払うことで、手札が6枚になるようにカードをドローする！！」

竜馬

LP3600 LP1800

「俺の手札は0枚よってデッキからカードを6枚ドローする！！」

竜馬はドロー強化カードを発動し手札補充をするがユウキは竜馬の行動ににやりと笑っていた。

「竜馬！！お前がドローする事は読めていた！」



「何!？」

竜馬はユウキの言葉に驚愕する。

そしてユウキは伏せカードを発動する。

そのカードは希望へつながるカード…

「畏カードオープン! 《逆転の明札》!!!」

《逆転の明札》  
めいさつ

通常畏 アニメオリジナル

相手がドローフェイズ以外にカードを手札に加えた時自分の手札が相手の手札と同じ枚数になるようにドローする。

「このカードは相手がドローフェイズ以外にカードを手札に加えた時、自分の手札と相手と同じ枚数になるようにドローする!」

\* \* \* \*

なのは「えつとどういう意味なの?」

フェイト「なのは、竜馬は《吸血鬼の施し》で手札が6枚になるようにドローしたよね。」

なのは「うん。」

フェイトの言葉になのはは頷く。

紫「ユウキが発動した《逆転の明札》は相手がドローフェイズ以外にカードを手札に加えた時自分の手札が相手の手札と同じ枚数になるようにドローする。つまり、ユウキの手札は竜馬と同じ手札になるようにドローするという意味よ。」  
「はやて」ということは「…」。

なのは「……ユウキは手札が6枚になるようにドローするってこと！？」

紫の説明を受けてなのはは驚いた。

キャロ「お兄ちゃんすごいです!!」

ティアナ「ユウキはまだ希望があると信じて戦っている。まだあきらめていない。」

早苗「ユウキさん、頑張ってください!!」

三人はユウキに向けて声援を送った。

\* \* \*

「俺はこのドローに逆転の道を託す！希望をつかみ、竜馬に勝ってやる!!」

レミリア「それはどうかしら？ユウキいくらカードを引いてもあなたの運命は敗北よ!!」

「そんなことはない!!デュエルは自分のデッキを信じれば運命を変えることができる!!俺は、希望をつかみ取りレミリアが言う運命を変えてやる!!」

ユウキはレミリアの向けて人差し指で指した。

レミリア「ならば、運命に抗ってみなさいユウキ・ルミナス!!」

「《逆転の明札》の効果でデッキからカードを6枚ドロー!!」

ユウキはデッキからカードを6枚ドローし、ドローカードを確認する。

「(来た!!!これであのモンスターを出す!!!)」

ユウキは先ほど《逆転の明札》の効果で手札に加えたカードを竜馬に見せる。

手札のモンスター効果を発動するために…

「このカードは、効果によってデッキから手札に加わった時に、特殊召喚できる!俺は《スカウティング・ウォリアー》を守備表示で特殊召喚!」

《スカウティング・ウォリアー》

星4 / 風属性 / 戦士族 / ATK1000 / DEF1000 アニメオリジナル

このカードが魔法・罫・効果モンスターの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ユウキのフィールド上にモンスターが出現し竜馬は驚愕する。  
なぜなら相手ターンでモンスターを特殊召喚をするからだ。  
さらにユウキは、手札からノンスターカードを取り出しデュエルデュエルに置いた。

「さらに手札からチューナーモンスター《スチーム・シンクロン》を特殊召喚!」

《スチーム・シンクロン》

星3 / 水属性 / 機械族・チューナー / ATK 600 / DEF800  
アニメオリジナル

自分フィールド上にモンスターが特殊召喚された時、手札のこのカードを特殊召喚する事ができる。このカードがフィールド上に存在

する場合、自分は相手ターンでもシンクロ召喚を行う事ができる。

「このカードは、自分フィールド上にモンスターが特殊召喚されたとき、手札から特殊召喚できる！」

次にユウキが出したのは、汽車みたいなモンスターが出現し表現は《スチームロイド》の子供と思えばいいだろう…

さらにユウキは《スチーム・シンクロン》の効果を発動する。

「そして、《スチーム・シンクロン》が自分フィールドにいる場合、相手ターンでもシンクロ召喚を行える！！」

「何……相手ターンでシンクロ召喚だと!?!?」

竜馬はユウキの言葉に驚愕する。

なぜなら相手ターンでシンクロ召喚するのはこれが初めてだからだ。

\* \* \* \*

なのは「えー!?!?相手ターンでシンクロ召喚できるの!?!?」

ユウキの言葉になのはは驚く。

雪「ふん」

紫「驚かないのね?」

雪「だって私の一軍だったら防げるもん」

紫「!?!?」

何気ない雪の言葉に紫は驚いていた。

\* \* \* \*

「レベル4の《スカウティング・ウォリアー》にレベル1のメタルデビルトークンにレベル3の《スチーム・シンクロン》をチューニングー！」

ユウキの呼びかけに、《スチーム・シンクロン》は3つ緑の輪となりその中に《スカウティング・ウォリアー》とメタルデビルトークンが通る

すると、《スカウティング・ウォリアー》とメタルデビルトークンが透き通り、5つの星となる。

「黒き疾風よ！秘めたる想いをその翼に現出せよ！」

そしてその星が1列になりユウキはシンクロ召喚をする

「シンクロ召喚！舞い上がれ、《ブラックフェザー・ドラゴン》！」

《ブラックフェザー・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守1600

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分がカードの効果によってダメージを受ける場合、代わりにこのカードに黒羽カウンターを1つ置く。

このカードの攻撃力は、このカードに乗っている黒羽カウンターの数×700ポイントダウンする。

1ターンに1度、このカードに乗っている黒羽カウンターを全て取り除く事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力を黒羽カウンターの数×700ポイントダウンし、ダウンした数値分のダメージを相手ライフに与える。

ユウキのフィールド上に《ブラックフェザー・ドラゴン》が現れ、  
竜馬は《ブラックフェザー・ドラゴン》を見ながら自分の手札を確  
認する。

「いきなりシンクロ召喚をしてきたか…だったら…。」

竜馬はあるカードを手札から発動しようとしたが発動をするのをや  
めた…

その理由はユウキのフィールド上の状態だ。

「（よくかんがえろ…今ユウキのフィールド上に《ブラックフェザ  
ー・ドラゴン》ATK2800《青眼の白龍フルフェイス・ホワイト・ドラゴン ATK3000《瓶かめ  
亀》DEF2100の合計3体のモンスター…）」

さらにリバースカードが3枚も伏せられており手札は4枚

「（今俺のフィールド上にはATK4000のレミリアがいる…も  
しこのカードを発動すればユウキに勝利することができる。だが今  
俺のフィールド上には永続魔法《吸血鬼の結末》がある。」

竜馬が考えているのは、もしレミリアが破壊された場合コウモリト  
ークンが出現しない為自身の効果で特殊召喚することができないの  
だ。

よってレミリアを蘇生させるには蘇生カードを発動するしか方法は  
無いのだ。

「（このカードは温存すべきだな…ユウキの伏せカードが気にな  
るけど、ここは攻める！）」

そして竜馬はバトルフェイズに入った



「竜馬、俺の罠にかかったな!!」

「何!?!」

「罠発動《極星宝レーヴァテイン》!!」

《極星宝レーヴァテイン》

通常罠

このターン戦闘によってモンスターを破壊した、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。選択したモンスターを破壊する。

このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

「このターン戦闘によってモンスターを破壊した、モンスターを破壊する!!さらにこのカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない!!」

「クッ……（俺の伏せカードじゃあ発動することはできない!!）」

ユウキが発動した罠は、剣となりレミリアを襲う!!  
そして…

レミリア「きゃあああああああ!?!」

レミリアはユウキのカードで破壊された。

この光景をみた竜馬は、手を握り締め悔しがっていた。  
だが竜馬は温存したカードを発動する。

「（レミリア……すまない…）俺は手札から魔法カード《吸血鬼の開放》を発動!!」



## 《吸血鬼の開放》

### 通常魔法

自分フィールド上に《吸血鬼の結束》が存在する時発動する事が出来る。

自分のエキストラデッキから《紅魔・フレンドール・スカーレット》または《紅魔・フレンドール・スカーレット》を自分フィールド上に特殊召喚する。

ただしこの効果での特殊召喚はシンクロ召喚として扱う。

「このカードの効果で《紅魔・フレンドール・スカーレット》を特殊召喚する！！」

フラン「やつほー」

## 《紅魔・フレンドール・スカーレット》

シンクロ・効果モンスター

星12/血属性/悪魔族/攻4500/守2000

チューナー+チューナー以外の悪魔族2体以上

このカードが攻撃した場合ダメージ計算後に相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

このカードが墓地に送られた時、「こもりトークン」（悪魔族・闇・星1・攻/守1000）を可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

次の自分のスタンバイフェイズ時このカードが墓地に存在し自分フィールド上に「こもりトークン」が1体以上存在する場合「こもりトークン」を全て破壊し、このカードを墓地から特殊召喚する。

このカードが攻撃したターンのエンドフェイズに自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

フランは竜馬に呼ばれてうれしいのか竜馬に抱き付いた。

「フラン頼むぞー!!」  
フラン「はい……あっ、ユウキ、前回のデュエルの恨み…壊してあげる……。」

フランは明るい表情から一変殺意がある表情へと変わりユウキは体が震えていた。

「（怖い……これがフランの殺気か…だが、俺は負けない!!希望がある限り!!）」

ユウキは希望があると信じ、デュエルを続ける。  
竜馬は手札から2枚のカードを取り出しデュエルディスクにセットした

「俺はカードを2枚伏せてターンエンド!!」

竜馬

LP1800

手札3

リバーズカード3

《吸血鬼の結末》

\* \* \* \*

キャロ「ブルーアイズを破壊した怨みだ!!……!!」  
早苗「お、落ち着いてください!!……!!」

レミリアが破壊された事にキャラは喜んでいた。

\* \* \* \*

竜馬のエンド宣言にユウキはカードをドローする。

「俺のターンドロー!!!」

ユウキはドローしたカードを確認し手札に加える。

「手札より《BF - 極北のブリザード》ブラックフェザーを守備表示で召喚!!!」

《BF - 極北のブリザード》ブラックフェザー

チューナー（効果モンスター）

星2 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守 0

このカードは特殊召喚できない。

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル4以下の「BF」と名の付いたモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「きよくほく極北のブリザードブラックフェザーが召喚に成功したとき俺の墓地からレベル4以下の「BF」を守備表示で特殊召喚する事ができる！来い！！」  
BF - 黒槍のブラスト!!!」

ブリザードの効果でブラストは守備表示で召喚され守りを固めた。

《BF - 黒槍のブラスト》ブラックフェザー

DEF800

「罨カードオープン！《ブラック・ブースト》！！」

《ブラック・ブースト》

通常罨 アニメオリジナル

自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが2体以上存在する場合に発動する事ができる。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「俺のフィールドにBFブラックフェザーが2体以上いる時、デッキからカードを2枚ドロー！！」

ユウキはデッキからカードを2枚ドローし確認する。

「手札から魔法カード《ライトニング・ボルテックス》を発動！！」

《ライトニング・ボルテックス》

通常魔法

手札を1枚捨てて発動する。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「手札を1枚捨てることで相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！！」

ユウキは手札を1枚捨て竜馬のフィールド上に存在するフランを破壊しようとするが竜馬は伏せカードを発動する。

「罨発動！！《紅魔の砦》」

《紅魔の砦》

通常罨

自分フィールド上に《吸血鬼の結束》が存在する時発動する事が出来る。

このターン自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘及びカード効果では破壊されない。

その後、自分の墓地から、チューナーモンスター1体を選択して守備表示で特殊召喚することが出来る。

ただしこの効果で特殊召喚したチューナーモンスターはシンクロ素材に使用することが出来ない。

「このターン自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘及びカード効果では破壊されない!!」

竜馬が発動したカードは、フランの破壊から免れた。

「さら俺の墓地から、チューナーモンスター1体を選択して守備表示で特殊召喚することが出来る!! 《紅魔 - 十六夜咲夜》を墓地から特殊召喚!!」

竜馬が発動した罫により咲夜は竜馬のフィールドに出現した。

咲夜

DEF1300

咲夜「ありがとうございます、魔神様。」

「ああ...」

竜馬と咲夜が話しているときユウキは考え始めた。

「(クツ、これじゃあ、竜馬のモンスターは破壊されない...だったら...)俺は《ブラックフェザー・ドラゴン》を守備表示に変更!!」

さらにカード4枚伏せてターンエンドだ!!」

《ブラックフェザー・ドラゴン》

ATK2800 DEF1600

ユウキ

LP1000

手札0

リバーズカード5

\* \* \* \*

なのは「どうしてユウキはシンクロ召喚をしなかったのかな？」  
雪「簡単だよ。お兄ちゃんの場のセットカードを警戒してるの」

なのはの呟きに雪は答えた。

ティアナ「それでもシンクロ召喚を妨害できるとは…」

雪「甘いよ。シンクロ召喚を防ぐ事は出来なくてもシンクロ召喚したモンスターを奪う事は出来るから」

ティアナの言葉を雪はあっさりと切り伏せた。

\* \* \* \*

「俺のターン、ドロー!!」

竜馬はカードをドロ―し手札に加える。

「（よし、このカードなら…）手札から魔法カード《大魔術の呪文式》を発動！！」

### 《大魔術の呪文式》

通常魔法

自分の墓地に存在する《紅魔・小悪魔》とレベル4モンスター2体をゲームから除外する。

その後自分のエクストラデッキから《紅魔・パチュリー・ノーレツジ》を自分フィールド上に特殊召喚する。（この特殊召喚はシンクロ召喚として扱う。）

「このカードは、自分の墓地に存在する《紅魔・小悪魔》とレベル4モンスター2体をゲームから除外することで、エクストラデッキから《紅魔・パチュリー・ノーレツジ》を特殊召喚する！！」  
「パチュリーを特殊召喚するだ…！」

竜馬は墓地に存在する、《紅魔・小悪魔》、《暗黒界の尖兵 あんこくかい せんべい ベー  
ジ》×2体をゲームから除外した  
竜馬のフィールド上にパチュリーが現れる。

### 《紅魔・パチュリー・ノーレツジ》

シンクロ・効果モンスター

星12/血属性/魔法使い族/攻2500/守500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、手札を1枚墓地に送り効果を発動する。

墓地に送ったカードによって以下の効果を得る。

炎属性・相手に1500ポイントのダメージを与える。

水属性・デッキからカードを2枚ドロ―する。

風属性・相手のフィールド上のカードを3枚まで手札に戻す。  
地属性・相手の手札を2枚墓地に送る。

光属性・このターン相手は魔法・罠・モンスター効果を1度だけしか発動できない。

闇属性・フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

魔法カード・自分の墓地のカードを3枚選択しデッキに戻しシャッフルする。

パチュリー「ありがとう竜馬…さてと、ユウキ覚悟はいいかしら？」

パチュリーの言葉にユウキは、苦しい顔になる。

「あの時のデュエルは、本当に悪かった、もう許してはくれ…。」「  
パチュリー「だめよ！レミイの敵を取らせてもらっわ。」

どうやらパチュリーは、ユウキのことを許さないようだ…

「さらに手札から魔法カード《死者蘇生》を発動！！」

《死者蘇生》

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「この効果で墓地からレミリアを特殊召喚する！！」

「(クツ…やっとの思いで破壊したのに、レミリアを復活させるだ  
と…)」

そして竜馬のフィールドにレミリアが出現し攻撃態勢を取る。



レミリア

ATK2800

レミリア「ユウキ…さっきはよくも私を破壊してくれたわね。覚悟しなさいー!」

「ッ……。」

ユウキはレミリアの言葉に体が震えており…ティアナはユウキの状態を見て心配していた。

\* \* \* \*

ティアナ「(ユウキ…頑張つて…)」

ティアナは手を合わせ祈りを捧げていた。

\* \* \* \*

「行くぞバトル!! フランでユウキの《ブラックフェザー・ドラゴン》を攻撃だ!!」

フラン「いくよー!!」

フランはユウキの《ブラックフェザー・ドラゴン》へと攻撃を仕掛けようとするがユウキは伏せカードを発動した。

「畏カードオープン! 《ブラック・ソニック》!」

《ブラック・ソニック》

通常畏 アニメオリジナル

自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。  
相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターを全て除外する。

「俺のフィールド上にブラックフェザーBFが存在し相手が攻撃してきた時、相手の攻撃表示モンスターを全て除外する！！」

\* \* \* \*

なのは「ゲームから除外！？」

フェイト「これじゃあトークンは出ない！？」

ユウキの発動したトラップカードになのは達は驚いていた。

\* \* \* \*

「これで竜馬のフィールド上のモンスターは除外する！！」

「…ユウキまさか、これで勝ったと思っっているのか？」

「何？」

「カウンター畏発動！《吸血鬼の威圧》！！」

《吸血鬼の威圧》

カウンター畏

自分フィールド上に《紅魔・レミア・スカーレット》または《紅魔・フランドル・スカーレット》が表側表示で存在する時発動する事が出来る。

相手の魔法・畏カードの発動を無効にし破壊する。

「俺のフィールド上にレミアまたは、フランが存在するとき発動することが出来る相手が発動した魔法・畏カードの発動を無効にし

破壊するー!!」

「何だと…。」

ユウキが発動した《ブラック・ソニック》は破壊されフランは《ブラックフェザー・ドラゴン》へ向けて再び攻撃を仕掛ける

「壊れちゃえ!!禁弾「スターボウブレイク」!!!」

フランが発動したスペルカードによって…なんとユウキのモンスターは全滅し、観客は驚愕するしかなかった。

\* \* \* \* \*

紫「モンスターが全滅した!?!」

ティアナ「どうなってるの!?!」

ユウキの場のモンスターが全滅した事に雪以外の全員が驚いていた。

雪「?紅魔・フランドール・スカーレット?の効果だよ。『このカードが攻撃した場合ダメージ計算後に相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。』って言うね」

はやて「つまり攻撃さえ通れば相手のモンスターを全滅できるって訳やな?」

はやての言葉に雪は頷いた。

\* \* \* \* \*

「これでとどめだ!!!レミリアでユウキにダイレクトアタック!!!」  
レミリア「これで終焉よ!!!紅符「スカーレットシユート」!!!」

レミリアの攻撃にユウキは伏せカードを発動した。

「畏発動!!!《アイアン・リゾルブ》!!!」

《アイアン・リゾルブ》

通常畏 アニメオリジナル

自分のライフポイントを半分払って発動する。

このターン、戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

その後、バトルフェイズを終了する。

「自分のライフを半分払うことで 戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。」

ユウキが発動した畏によってレミリアの攻撃を防いだ

だがその代償としてユウキのライフは1000から500になってしまった。

ユウキ

LP1000 LP500

レミリア「しぶといわね…もうあきらめたらどうかしら?」

「悪いが俺はまだあきらめない性格でね…」

ユウキにはまだ伏せカードが3枚残っており竜馬は、考えはじめる。

「(今ユウキのフィールド上には3枚のリバースカード…そして手札は0次のターンユウキがドロ―強化カードを引く可能性がある。)

」

なぜ竜馬がそう考えるのか？

理由はユウキとデュエルをしているときライフポイントが500以下になるとユウキは必ずドロ―強化カードをドロ―することを思い出したからである。

「（だったらこのカードで…）俺はリバーズカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

竜馬

LP1800

手札1

リバーズカード2

### 《吸血鬼の結末》

\* \* \* \*

紫「まずいわね…ユウキのライフは500、セットカードはあるけど手札が無いわ」

早苗「ユウキさん…」

ティアナ「ユウキ…」

紫の言葉に早苗達はユウキを見つめた。

\* \* \* \*

「（俺のライフは500…このドロ―に運命をかける…俺のターン

ドロー!!」

ユウキはデッキからカードをドローした瞬間竜馬は伏せカードを發動した。

「この瞬間カウンター罫 《強烈なはたき落とし》 を發動!!」

《強烈なはたき落とし》  
カウンター罫

相手がデッキからカードを手札に加えた時に發動する事ができる。  
相手は手札に加えたカード1枚をそのまま墓地へ捨てる。

「このカード効果でユウキドローしたカードを墓地に送ってもらおうか？」

「ッ……………」

ユウキがドローしたカードは《命削りの宝札》だった。

《命削りの宝札》

通常魔法 アニメオリジナル  
自分の手札が5枚になるよう、自分のデッキからカードをドローする。

このカードが發動してから5ターン目のスタンバイフェイズ時、自分の手札を全て捨てる。

\* \* \* \*

キャロ「そんな……………」

ティアナ「ユウキのドロー強化カードをそのまま墓地に……………」

「強烈なはたき落とし？によって墓地に送られたカードを見てキヤ口達は愕然とした。」

手札が0の時のドロー強化カードほど逆転への道標になるからだ。

\* \* \*

レミリア「ユウキ、これでわかったでしょう？あなたは竜馬に勝てないわ」

パチュリー「命がおしければサレンダーをしたほうがいいわよ。」

レミリアとパチュリーの言葉にユウキは二人のほうへ視線へ移した

「サレンダー？俺がそんなことをするわけないだろう？まだデュエルは終わっていない！！」

咲夜「ですが、今ユウキの手札は0残っているのは3枚のリバーズカードこれでどうやって戦うのですか？」

確かに今のユウキの手札は竜馬の《強烈なはたき落とし》によって手札は0残っているのは3枚のリバーズカードその中の1枚をユウキは発動した。

「希望をつなげるために俺は戦う！！永続罫《リビングデッドの呼び声》を発動！！」

《リビングデッドの呼び声》

永続罫（制限カード）

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「自分の墓地に存在するモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！！  
いでよ《プロト・サイバー・ドラゴン》！！！」

ユウキのフィールド上に《プロト・サイバー・ドラゴン》が出現する。

《プロト・サイバー・ドラゴン》

効果モンスター

星3 / 光属性 / 機械族 / 攻1100 / 守 600

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名を「サイバー・ドラゴン」として扱う。

「さらにリバーズカードオープン！！速攻魔法《地獄の暴走召喚》  
を発動！！！」

《地獄の暴走召喚》

速攻魔法

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

「このカードは相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚する。」



喚に成功した時に発動する事ができる！その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを俺の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する！！俺はデッキから《サイバー・ドラゴン》3体を攻撃表示で特殊召喚する！！」

《サイバー・ドラゴン》

効果モンスター

星5 / 光属性 / 機械族 / 攻2100 / 守1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

\* \* \* \* \*

なのは「どういう意味！？ユウキ君が蘇生したのは《プロト・サイバー・ドラゴン》でしょ！！どうして《サイバー・ドラゴン》を3体呼び出せるの！？」

ユウキの場に《サイバー・ドラゴン》が現れた事になのはは驚いていた。

フェイト「《プロト・サイバー・ドラゴン》の効果だよ。」

アリシア「《プロト・サイバー・ドラゴン》はフィールド上に存在する限り、カード名を「サイバー・ドラゴン」として扱う効果を持っている。」

紫「フィールド上で《サイバー・ドラゴン》として扱う効果は、ルール効果ではなく永続効果……よって《地獄の暴走召喚》（じじくくぼうそうしょうかん）によって特殊召喚するのは《サイバー・ドラゴン》3体という意味よ。」

なのはの疑問に3人が答えた。

文「でも、どうしてユウキさんの墓地に《プロト・サイバー・ドラゴン》のカードが？」

紫「《カードガンナー》の効果で墓地に送っていたからよ。」  
はやて「でもいくらモンスターを呼んでも竜馬のモンスターには勝てない。」

雪「うん、それにユウキが出すモンスターの表示形式はすべて攻撃表示…」

ティアナ「（ユウキ…何を考えているの？）」

はやての言葉に雪は頷いた。

ティアナはユウキを不安そうに見つめている。

\* \* \*

そしてユウキのフィールド上に《サイバー・ドラゴン》を3体特殊召喚する。

「ユウキ何を考えているんだ？」

レミリア「モンスターを並ばせてもフランのモンスター効果でユウキのモンスターはすべて破壊される…」

フラン「でもユウキのモンスターはすべて攻撃表示！！」

パチュリー「ユウキもう絶望したほうがいいんじゃないかしら？」

紅魔館メンバーがユウキに向けていろいろと言われているが…

ユウキは紅魔館メンバーのほうへ向けた

「俺は絶望などしない！ティアナ、キャロ、早苗、紫が与えてくれた希望がある限り！俺は負けるわけにはいかない！！レミリアが言っていた運命を変えるために！！畏発動！《ハイレート・ドロ》」

「!!」

《ハイレート・ドロー》

通常罫 アニメオリジナル

自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊して墓地に送る。  
破壊したモンスター2体につき1枚カードをドローする。

「自分フィールドに存在するモンスターを全て破壊し、破壊したモンスター2体につき、1枚カードをドローする！」

ユウキが発動した罫によって《サイバー・ドラゴン》《プロト・サイバー・ドラゴン》は破壊された。

\* \* \* \*

はやて「何やて!?!」

アリシア「自分のモンスターを破壊するなんて…」

ユウキが自分の場のモンスターを破壊する事に全員驚いていた。

紫「(このドローでユウキは何のカードを引くのかしら…)」

紫はユウキを見、次にユウキのデッキを見つめた。

\* \* \* \*

「俺が破壊したのは《サイバー・ドラゴン》3体と《プロト・サイバー・ドラゴン》1体よって俺のデッキからカードを2枚ドローする!」

ユウキは怯えるように瞼を閉じ、神経を集中する。

「（ 勝負はこのドローにかかっている……あのカードがくれば 希望は繋がる ……！）ドローー！！」

ユウキはデッキからカードをドローし恐る恐る瞼を開けてドローしたカードを確認。

カードを確認した瞬間、ユウキの瞳には希望へと繋がるカードを引いた。

「（来た。希望へ繋がるカードが ……！）」

そしてユウキはドローしたカードを発動する。

「俺は手札から永続魔法発動《暗黒の扉》！！」

《暗黒の扉》あんこく ていび

永続魔法

お互いのプレイヤーはバトルフェイズにモンスター1体でしか攻撃する事ができない。

「お互いのプレイヤーはバトルフェイズにモンスター1体でしか攻撃する事ができない！！」

レミリア「まさか、このカードを引くとはね…でもユウキ、あなたの手札にモンスターカードは無い。」

その言葉に観客は驚愕した。

なぜならレミリアがユウキの手札にモンスターカードが無いと宣言したからだ……

そしてユウキは、

「……………カードを1枚伏せてターン終了。」

ユウキ

LP500

手札0

リバーズカード1

《暗黒の扉》  
あんこく とびら

\* \* \* \*

キャロ「そんな……………」

ティアナ「ユウキが負ける運命になってしまっの……………」

早苗「ユウキさん……………!!」

ユウキの場にモンスターが現れない事に3人は愕然とした。

\* \* \* \*

「俺のターン!!」

竜馬はカードをドローし手札に加える。

レミリア「ユウキ、これで終わりよ……………フラン。」

レミリアはフランに声をかける

するとフランはレミリアの声に反応しユウキに向けて殺気を放つ。

フラン「ユウキ、これで終わりだよ…壊れちゃえ!!」  
「バトル!!フランでユウキにダイレクトアタック!!」

竜馬の声にフランはユウキに向けて攻撃を仕掛ける。

フラン「壊れちゃえ!!禁忌「レーヴァテイン」!!」

フランはスペルカード、禁忌「レーヴァテイン」を発動させユウキにとどめを刺そうとしていた。  
そしてユウキは…

「……………うわああああああ!!」

フランのレーヴァテインの攻撃を受けその衝撃で壁にぶつかりユウキは……………倒れてしまった。

レミリア「これで終わりよ…ユウキ私の運命に狂いはなかった。」

\* \* \* \*

ティアナ「そんな……………」

キャロ「お兄ちゃん……………」

早苗「ユウキ……………さん……………」

ユウキを応戦するティアナ、キャロ、早苗は今の光景を見て驚愕した。

なぜならレミリアの言っていた運命は現実になっているのだから。  
それに対してなのは達は

なのは「やったー!!」

フエイト「竜馬が勝った!!」  
はやて「でも、あれはさすがにやりすぎやで……。」  
アリシア「ユウキが希望って言ったけどやっぱり竜馬のほうが強かったね。」

竜馬の勝利に喜んでいた……

竜王「ユウキのライフが0になったためこのデュエルの勝者は……。」  
紫「待つて竜王!!ユウキのライフを見て!!」

竜王が勝利宣言をしようとするすると紫はそれを制止した。

ユウキのライフをよく見るとライフポイントは50になっていた。

\* \* \*

レミリア「なぜ……ユウキのライフが50?」

レミリアはユウキの運命を見たにもかかわらずユウキのライフが50になっているのが驚きを隠せなかった。

そしてユウキはフランの攻撃を受けたのだが痛みを耐えゆつくりと立ち上がった。

「罨を発動したのさ……。」

パチュリー「そんなはずは……!?!」

パチュリーはユウキのフィールドを確認するとユウキは伏せカードを発動していた。

そのカードは……

「罨カード《リダクション・バリアー》を発動した……」

《リダクション・バリアー》

通常罠 アニメモリジナル

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。  
自分が受ける戦闘ダメージを10分の1にする。

「俺が受ける戦闘ダメージを10分の1にする。」

\* \* \* \*

なのは「……10分の1?」

フェイト「フランの攻撃力は4500《リダクション・バリアー》  
の効果で10分の1にすると……。」

アリシア「ユウキに与えるダメージは450……。」

キャロ「お兄ちゃんのライフは500だったから……」

ティアナ「450ポイントのダメージを受けたユウキの残りライフ  
は50!!……」

早苗「すごい……ユウキさんがこのターンを防いだ!!」

早苗の言うとおりユウキのフィールド上には永続魔法《暗黒の扉》  
が存在しているため

このターンの攻撃は無い……よってこのターンの攻撃は防いだと言え  
る。

紫「（だけどユウキの手札は0、どうする気?）」

紫は他のメンバーほど喜ばずにユウキを見つめている。

\* \* \* \*



フラン「このターンを凌ぐなんて…」

レミリア「…でも、ユウキのフィールド上には《暗黒の扉》しかないわ。」

「（確かにレミリアの言うとおりユウキのフィールド上に永続魔法《暗黒の扉》1枚しかない…次のターンユウキがモンスターカードを引き当てたらユウキに戦闘ダメージを与えることができない…ならば…）」

竜馬は1枚のカードを取り出しデュエルディスクの魔法・罠ゾーンのスリットに差し込む。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

竜馬

LP1800

手札1

リバーズカード2

《吸血鬼の結束》

\* \* \* \*

雪「これはお兄ちゃんの勝ちだよ」

はやて「せやな、これで逆転が出来るとは思えへん」

雪の言葉にはやては頷いた。

しかし早苗達はユウキを信じている。

次のドロワーで逆転が出来るかと信じて…

\* \* \* \*

ユウキはデッキからカードをドローしようとするレミリアが声をかけた

レミリア「ユウキ、もうあきらめなさい待っているのは絶望よ…希望などあるわけがない。」

「そんな事はない！希望さえあれば必ず奇跡は起こる！そしてその希望とは自らの手で掴み取るもの！俺はその事を前回のデュエルから学んだ！！竜馬が発動したカード《紅魔の希望》のように！！」

\* \* \* \*

「竜馬…何をやる気だ？」

「これを発動するためさ…魔法カード《紅魔の希望》発動！！」

### 《紅魔の希望》

#### 通常魔法

自分フィールド上に紅魔と名のついたモンスターが5体存在するとき発動することができる。

相手フィールド上のモンスターをすべて破壊し破壊したモンスター1体につき500ポイントのダメージを与える。

このカードを発動したターン、バトルフェイズは行えない。

このカードを発動した場合、相手プレイヤーは魔法・罠・効果モンスターの効果が発動する事はできない。

「このカードは紅魔と名のついたモンスターが5体存在するとき発動することができ、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！！」



上には《暗黒の扉》のカードが1枚しか存在しなかった1枚のドローで、逆転できるとでもいうの?」

「ああ、だからこそ俺は奇跡を起こす!! 希望がある限り!! 俺のターンドロー!!」

ユウキはデッキからカードをドローする

希望を信じて…

だが……

「罨発動、《はたき落とし》」

《はたき落とし》

通常罨

相手のドローフェイズ時に発動する事ができる。

相手はドローフェイズでドローしたカード1枚をそのまま墓地に捨てる。

「これでユウキがドローしたカードを墓地に送ってもらう?」

「ッ…!?!」

ユウキは竜馬が発動した罨を見てドローしたカードを墓地に送った。

レミリア「ユウキ、これが絶望よ…これではあなたは何もできないわね。」

「……ターンエンド。」

ユウキ

LP50

手札0

リバースカード0

《暗黒の扉》

\* \* \* \*

ティアナ「無理よ……………」  
紫「!？」

ティアナの呟きに紫は驚いた。  
するとティアナの呟いた言葉に反応し早苗、キャロは頂垂れた。

紫「(まだまだだね、勝負は私達が決めるものじゃないわ。ユウキと  
竜馬、この2人が決めるのよ)」

紫は頂垂れずユウキを見つめた。

\* \* \* \*

「俺のターンドロー!!!手札より魔法カード《フォー・オブ・アカ  
インド》を発動!!!」

《フォー・オブ・アカインド》  
通常魔法

自分のフィールド上に?紅魔・フランドール・スカーレット?が存  
在する時に発動することができる。

以下の効果から一つを選択する。

?相手のフィールド上のカードを全て破壊する。

?相手の手札を全て破壊する。

？相手のライフに？紅魔・フランドール・スカーレット？の攻撃力の半分を与える。

？自分のライフを4000払いこのカード以外のカードを全て破壊する。破壊した相手のカードは全て除外される。

このカードを発動したターン自分はバトルフェイズを行えずエンドフェイズに？紅魔・フランドール・スカーレット？は破壊される。

「ユウキ、？の効果が発動すればユウキのライフが0になる…だが…」

竜馬はレミリアにアイコンタクトを取りレミリアはフランに指示を出す。

レミリア「とどめは私が決めるわ…フラン、ユウキのフィールド上のカードを破壊して。」

フラン「はい 禁忌「フォーオブアインド」!!」

そしてユウキのカードが破壊された。

「クッ……」

さらに竜馬は残りの伏せカードを発動する。

「さらに罠カード《気力回復》を発動!!」

《気力回復》

通常罠

自分の墓地に？紅魔・紅美鈴？が存在するとき発動することができる。

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「墓地から《紅魔・紅美鈴》を特殊召喚する!!」  
美鈴「アチヨー!」

美鈴

ATK1900

レミリア「あら、戻ってきたの」  
美鈴「あんまりですよ!」

レミリアの言葉に美鈴は涙目で叫んだ。

咲夜「中国、分かってるわね?」  
中国「だから私は中国じゃ…って名前が変わってます!」

咲夜の言葉に叫ぶ美鈴、いきなり叫んだ言葉に対してここに居る全員は…

( )( ) ああ、いつも盾にされてるからついにおかしくなっちゃったんだ( )( )

と涙を流しながら思っていた。  
そして竜馬は気を取り直した。

「これでユウキ俺が出す最後のカードだ!!魔法カード《紅魔の結束》を発動!!」

《紅魔の結束》

通常魔法

自分フィールド上に存在する「紅魔」と名のついたモンスター1体

選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「紅魔」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。

「《紅魔の結束》の効果でレミリアの攻撃力に集約させる!!」

そして紅魔館のメンバーはレミリアに攻撃力を与え…そしてレミリアの攻撃力は

レミリア

ATK2800 ATK13600

「攻撃力13600……」

「ユウキ、これで終わりにしようこのデュエル俺の勝ちだ!!」

\* \* \* \*

なのは「今度こそ竜馬の勝ちだね」

みんなが納得する中ユウキを応援するティアナ、キャロ、早苗はもう駄目だとあきらめていた…

だが紫は信じていた

紫「ユウキはまだあきらめていないあのカードが…」

\* \* \* \*

レミリア「ユウキ、これで終わりよ!!」

「悪いが、ここで終わらせるわけにはいかない!!俺はまだ希望が



ある！！墓地に存在する《BF - 陽炎のカーム》の効果を発動！  
「」

ユウキが墓地から《BF - 陽炎のカーム》のカードを取り出し竜馬に見せる

《BF - 陽炎のカーム》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 600 / 守 1800

相手のバトルフェイズ時、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する事ができる。

自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはバトルフェイズ終了時にゲームから除外される。

「何！？なぜ墓地に……」

「竜馬が発動した罫カード《はたき落とし》でこのカードが墓地に送られていたのさ！！」

レミリア「…しぶといわね……。」

\* \* \*

早苗「手札が0でも、伏せカードが0でも、まだ墓地が残っていません！！」

紫「眠れる伏兵ね……。」

先程までの頂垂れから一転して早苗は少しだけ元気を取り戻した。紫も頷きながら言った。

\* \* \* \*

「相手ターンのバトルフェイズ中、俺のモンスターがいない時、墓地からこのカードを除外する事で、墓地に眠るシンクロモンスター1体をバトルフェイズ終了時まで特殊召喚する事ができる！戻って来い！！《ブラックフェザー・ドラゴン》！！！！」

ユウキのフィールド上に《ブラックフェザー・ドラゴン》が現れ黒き翼を持ち合わせる龍は空に向かって咆哮を上げる

《ブラックフェザー・ドラゴン》

ATK2800

「まさか、墓地からモンスター効果を発動するとはな…だがレミアアの攻撃力は13600！！それに対して《ブラックフェザー・ドラゴン》の攻撃力は2800！！現実には変えられない！！」

レミアア「もう終わりにしましょうユウキ！！これでとどめよ！！」

レミアアはスペルカードを取り出しユウキの《ブラックフェザー・ドラゴン》へと狙いを定める

レミアア「神槍スピア・ザ・グングニル！！」

レミアアは《ブラックフェザー・ドラゴン》に向けて槍を放った…  
…竜馬を応援する人たちは喜びユウキを応援する人は、もう見たくないと目をつぶる…

これで終わりかと思ったその時

「……とどめになるのはお前のほうだ！！レミアア！！！！」

レミリア「何!？」

「畏カード! 《ブラック・ウィング》を墓地から発動だあああ! !!」

ユウキのフィールド上に《ブラック・ウィング》が出現しレミリアが放った槍は《ブラック・ウィング》によって攻撃を封じた。ユウキが発動した《ブラック・ウィング》のカードに観客は驚愕した。

\* \* \* \*

アリシア「嘘……………」

はやて「うそやろ!？」

フェイト「竜馬が勝ったんじゃないの!？」

なのは「そんな、墓地から畏なんて…………!？」

ユウキが墓地からカードを発動させた事に4人は驚きを隠せなかった。

紫「来たわね…………」

ティアナ「あのカードは!?!」

紫は小さく呟きティアナの表情は明るくなった。

\* \* \* \*

そしてユウキのフィールド上に2枚の《ブラック・ウィング》のカードが出現する。

《ブラック・ウィング》

通常罫 アニメオリジナル

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

自分の墓地に存在する「BF」と名のついたカードをゲームから除外する事で、このターン攻撃力2000以上の相手モンスターの攻撃を無効にする事ができる。

また、このカードを含む「ブラック・ウィング」2枚が自分の墓地に存在する場合、それらのカードをゲームから除外する事で、以下の効果を発動する事ができる。

自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体と相手フィールド上に存在するシンクロモンスター1体を破壊し、破壊した相手モンスター1体の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「あのカードは…まさか!？」

「そうだ、《ブラック・ウィング》は最初のターン《カードガンナー》の効果で墓地に送られていたのさ!!」

\* \* \* \* \*

文「じゃあ、あの時紫さんが驚いたのは…。」

紫「ええ、最初から《ブラック・ウィング》のカードが墓地に送られていたことに驚いていたのよ。」

\* \* \* \* \*

「《ブラック・ウィング》は墓地に2枚あってこそ、真価を発揮するカード。このカードを除外し、お互いのシンクロモンスター1体ずつを破壊する!そして、破壊した相手モンスター1体の攻撃力分のダメージを竜馬に与える!!つまり竜馬はレミリアの攻撃力13600ポイントのダメージを受けるとい事だ!!」

「何…だと……」

竜馬はユウキの言葉を聞き顔が青ざめていた。  
さらにレミリアも竜馬と同じ顔になっていた…

レミリア「そんな…馬鹿な…ユウキが…運命を変えた…？」

\* \* \* \*

早苗「凄い、ユウキさんの大逆転です！」

キヤロ「墓地から罨なんて、すごい……」

ティアナ「さすがユウキ、これを狙っていたのね。」

\* \* \* \*

「罨カード《ブラック・ウィング》の効果でレミリアを破壊し竜馬  
！！お前に13600ポイントのダメージを受けてもらう！！」

《ブラックフェザー・ドラゴン》の翼が赤くなりレミリアの方へ向  
いておりレミリアは体が震えていた。

そして《ブラックフェザー・ドラゴン》はレミリア達と竜馬に向け  
て攻撃を仕掛ける。

「竜馬、レミリアこれで終わりだ！！《ブラックフェザー・ドラゴ  
ン》ノーブルストリーム！！」

《ブラックフェザー・ドラゴン》は、レミリア達を襲い

レミリア「きゃあああああああ」

美鈴「きゃあああああああ」

咲夜「きゃあああああああ！！」



美鈴「あ、戻った!!」

( )( )( ) ああ、やっぱり頭が…( )( )( )

喜ぶ美鈴を温かい目で見える竜馬達。

ちなみに竜王はゼリーを作っていた。

はやて「んゝ…もうちょい濃い目に作った方が…」

竜王「でも濃すぎてもねえ」

「デュエルに興味なしかい!?!」

その光景に竜馬は叫んだ。

竜王「いや、終わったからおやつにと思ってね」

紫「お酒はあるかしら?」

紫の言葉に竜王は頷いた。

「はあ……もう良いや」

諦めた様子で竜馬はなのは達の元に向かった。

## 番外編・紅魔VS黒き翼（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、White Seal様、月光閃火様、フレイス様、妖気様、空刀様感想ありがとうございます。

White Seal様よりレナに橙子さん謹製ヒカリ1/1抱き枕、竜馬にFORTUNE ARTERIALで桐葉が着た（着せられた）猫耳メイド服（+女体化の呪い）、ヒカリに夜明け前より瑠璃色なの静寂の月光の司祭服（エステルが着てたようなやつ）を、いただきました。

竜馬「い、いやだ！！絶対に着ないぞ！！！！」

竜王「でも光は気に入ってるぞ？」

光「マスター、一緒に着てください！！」 上目遣い

竜馬「ぐ、ぐぐぐ……分かった」

竜王「んじゃ着替えて来い」

来也「戦闘途中で竜馬を連れてったのはそつ言う事か（せつかく森になって戦いやすくなってきたのに）」

レナ「可愛いよう可愛いよう」 光の抱き枕を抱きしめている



月光閃火「まったく…」

竜王「レナを押さえてくれて助かりました」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所より」さとこい『が来ました」

さとり「それじゃあアイドルグループかアニメのタイトルみたいよ」

こいし「やっぱり竜王には効かないね」

竜馬「着替えてきたよ…何でか女体化したけど……」

康太「!!!!!!!!!!!!!!」鼻血を吹き倒れる

月光閃火「似合ってると思うぞ?」

竜王「元の顔が女顔だからなあ。つーか9歳の時より胸でかくなっ  
てない?」

竜馬「うん…重い…それと口調がさ…」

光「」竜馬の腕にしがみつき嬉しそうにしている

「こんにちは…」

竜王「……風邪ですか?空刀様が来ました」

空刀「はい、一気に疲労が来まして…ごほ…」

〈睡眠部屋〉

小町「う〜ん……はっ！夢か…ん？これは…」 映姫の説教が流れるラジカセに気付く

〈癒しの部屋〉

フェイト「大分、良くなったかな……？」 立ちあがり伸びをする

〈雑談所〉

竜馬「死にたい……」 頂垂れている

竜王「くっくっく…雪に送ってやるっ」

空刀「面白そうなんで私も蛇川たちに…ごほごほ」

月光閃火「俺も輝刃に送ろうっ」

こいし「動画でばっちり」

さとり「(……竜馬が自殺しそうなほどに思い詰めてるわ)」

小町「竜王！あんたかこれを置いたのは…！」 ラジカセを片手に持っている

竜王「あ、おはよう。寝覚めはどうだ？」

小町「悪夢を見たよ…」

竜王「ん〜…早く帰らないとその悪夢が間もなく現実に」

小町「は!?!」

竜王「何でもない何でもない。こっちの話」

さとり「竜馬が自殺しそうだけど良いの?」

竜王「平気平気、映姫に説教されたからそう簡単に自殺なんてしないよ。闇を狩る少年続きます」

こいし「ふんふんふん」 無意識を使い竜馬のポーズを変えていく

来也「(……鼻血がすでに致死量に行ってる気がする)」 康太を見ている

週末、水着を買いに…行くはずなんだが。

side 魔神竜馬

「お兄ちゃん、水着を買いに行こう!!」

「……だから、どうしてお前は普通にこの部屋にいる。それと千冬はどうした?」

目の前に立っている雪に俺は尋ねた。

千冬はどうせいつものように一夏の所にも持ってたんだろ?が…

「弟の部屋に入れたよ さあさあ、水着を買いに行こう!!」

「……はあ、分かった。着替えるから部屋から出る」

俺は雪を部屋から出し着替えを始めた。

今日は……なんとなくこの黒と黄色の着物にでもするか。

そう思い俺は着物の着付けを始めた。

「……暇つぶしで作ったにしては良い出来かな?」

着付けを終え自分の恰好を見て俺は呟いた。

他にも色々作ったんだよなあ…

まあ、今は関係無いか。

「終わったぞ…」

「あ、今日は着物なんだね。それじゃあ行こっか」

部屋から出て俺と雪は歩き始めた。

「…かどこで水着を買った?」

side out

side ラウラ・ボーデヴィツヒ

「むづ…嫁がない」

IS学園の内部を調べて嫁がない事に私は首を傾げた。  
ふと前を見ると兄上と雪がいた。

「ラウラじゃないか。どうしたんだ？」

「兄上。いえ、嫁が見当たらないので…」

兄上の問いに私は答えた。

兄上は着物でどこに行くのだろうか？

「兄上はどこへ行くのですか？」

「ん？雪に言われて水着を買いにな。一緒に行くか？」

雪を指差し兄上は言った。

水着…

「そうですね。ご一緒します」

「分かった」

私は頷き兄上の近くへと行った。

side out

side 魔神竜馬

「……あれは何をしているんだと思う？」

俺は前方にいる自動販売機の陰にいる2人を指差し言った。  
何やってるんだあの2人は…

「セシリアと鈴だね。多分、一夏を見てるんだと思うよ」  
「一夏を？」

雪の言葉に2人の見ている先を見ると一夏とシャルロットが歩いて  
いた。

「……………よし！殺そう！！」  
「いきなり何を言っているんだ…」

鈴音<sup>すずね</sup>がISを部分展開して叫んだので俺は声をかけた。  
鈴音は驚き振り向いた。

「なっ！？竜馬に雪、それにラウラ！？あてっ！」  
「白昼の往来で堂々と殺人予告をするな」

そう言っつて俺は鈴音の頭を軽く叩いた。

「ラウラさん、どちらに行くつもりですか！？」  
「ん？決まっている。私も混ざる」

セシリアの問いにラウラは堂々と答えた。

「ま、待ちなさいよ！未知数の敵と戦うにはまずは情報収集が先決。  
そうでしょう？」  
「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

鈴音の言葉にラウラは頷いた。  
敵っつて…仲間だろうか…

「…雪、俺達はどつする？」

「ん〜…面白そうだけど水着を選びに行こう」

俺の問いに雪は少し考え答えた。

「分かった。3人とも追跡ストーカー頑張れよ」

そう言っただけで俺と雪は歩き始めた。

不意に目の前でひったくりが起こった。

「……………クラスメイトだな」

「だね」

荷物をひったくられていたのは？のほほん？だった。

……………とりあえず。

「ぶっ潰してくるよ」

「頑張つてね」

俺は木製の白い狼の面をつけて走り出した。

side out

side 第3者視点

？のほほん？の荷物を奪った犯人は笑いながら走っていた。

IS学園の生徒だと言つので警戒をしていたがあまりにもあっさり  
と荷物を奪えたからだ。

「…さて、ここで問題です。あなたが手に持っている荷物、それを  
渡して警察に行くか。地獄を見るか。どっちにしますか？」

「！？」

不意に冷淡な声が横から聞こえてきて犯人は驚いた。横を見れば白い狼の面をつけた着物の人間が並走しているのだから当然と言えば当然だが。

「どつちにしますか？」

あくまでも冷淡に感情の読めない言葉で竜馬は再度尋ねた。しかし犯人はひったくるのが上手く言った事に調子に乗っているのか鼻で笑った。

「お前を転ばせてその隙に逃げ切つてやるよ!!」

そう言つて犯人は竜馬の足元に向けて途中に有つた椅子を投げつけた。

「……………それがあなたの回答ですね」

次の瞬間、面から覗く竜馬の瞳の色が金色に染まった。おそらく怒りに殺意が少々の割合だろう。そして竜馬の足元に向けて投げられた椅子は上空へ向けて思い切り蹴り上げられた。

「はっ……………？」

「……………」

上空に吹き飛ぶ椅子を見て犯人は啞然とした。普通ならば椅子に足を取られて転ぶはずだからだ。

「……………」





週末、水着を買いに…行くはずなんだが。（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物（者も有ります）ありがとうございます。

フレイス様、バラランシャ様、月光閃火様、ウリア様、空刀様、ルシフェル様、妖気様、仮面ライダーディケイド様感想ありがとうございます。

空刀様より相馬聖奈とデバイス アクエリオンを、

妖気様より私にイグアナを、

仮面ライダーディケイド様より性転化薬を、

いただきました。

竜王「あれ？フェイトもう良いのか？」 頭にイグアナを乗せている

フェイト「はい、大分良くなったので」

竜馬「完全回復ではないのか」

フェイト「一週間迷惑をかけました」 そう言って帰っていく

「こんにちは！！」

竜王「フレイス様の所よりユウキとティアナが来ました」

ティアナ「水着……」



水着は機能性で充分だと思っ。

side 魔神竜馬

「つたく。下衆が……」

「お兄ちゃんまた目が金色になつてるよ……」

俺は木製の狼の面を斜めに顔に着けながら呟いた。  
目が金色になるのは？ 竜魂転身？ の影響だろうな。

「つとここが水着売り場か……何だ！？」

「真耶の悲鳴みたいだね」

水着売り場の中に入るといきなり悲鳴が聞こえ俺は驚いた。  
真耶の？

「つて事は……」

「うん。一夏が関係してるよ」

俺が雪を見ると雪は頷き答えた。  
行ってみるか。

「……………しませんよ。教育的にもダメです。」

「す、すみません………」

悲鳴のした方に向かうと一夏とシャルロットが真耶に怒られていた。  
何をしたんだ？

「おゝい、千冬。一夏とシャルロットは何をしたんだ？」

「竜馬！？………んん！何、この2人が一つの試着室に2人で入って

いたんだ」

千冬に声をかけると千冬は一瞬驚いた表情になった。  
2人で一つの試着室って…

「一夏、逮捕される？」

「ちよっ！？これは俺じゃ無くてシャルが！！」

俺の言葉に一夏は驚いて言った。

にしてもちゃんと追跡ストーカーしてるんだな、あの2人。

物陰に隠れているセシリアと鈴音すずねを見つけて俺は思った。

「と、ところで山田先生と千冬ね……織斑先生、竜馬と雪はどうしてここに？」

一夏は思い出したように尋ねた。  
話題を逸らしたな。

「私と織斑先生も水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中では無いですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

「俺は雪に水着を買おうって言われて来たんだよ。途中でセシリア、鈴音、真耶、千冬に会えたら何か奢ろうとも思ってたが…」

一夏の問いに俺と真耶が答えた。

すると一夏はセシリア達が隠れている方向を向いた。

「そろそろ出てきた方がいいんじゃないか？」

なんだ、気付いてたのか。

すると物陰から2人が出てきた。

「竜馬、教えたわけ？」

「いや、一夏は気付いてたみたいだぞ」

鈴音が俺を見ながら呟いた。

「なにをこそこそしているのかと思って、ずっと気になってたんだがな」

「女子には男子に知られたくない買い物があんの！」

「そ、そうですね！まったく、一夏さんのデリカシーの無さにはいつもながら呆れてしまいますわね」

不用意な発言をした一夏は非難の集中砲火を受けた。

ん？

「あれ？雪はどこに行った？」

「魔神さんでしたら先程水着を持って試着室に入っていましたけど」

俺の言葉に真耶が答えた。

水着が決まったのか？

「ところで竜馬、その頭の面はいつたい…」

「あ、これ？ひったくり犯を捕まえる時に顔を見られなくなかったからさ」

千冬の問いに俺は答えた。

俺の言葉に全員は顔を見合わせて頷いた。

「何だよ？」

「いや、なんでもない」

俺が尋ねると千冬は首を横に振った。

「夏達は苦笑いを浮かべていた。」

「お兄ちゃん、これなんかどうかな?」

「ん?……ちょっと露出が多すぎじゃないか?」

そう言っつて雪が着ていたのはオレンジのビキニだった。妹じゃ無かったら軽く倒れているな。

「うん……ちょっと待っててね」

そう言っつて雪は試着室に戻った。

他にもあるのか?

「うん?どうかしたのか?真耶」

「あのですね。織斑先生を姉弟水入らずにしたいんですよ」

不意に肩をつつかれたので振り向くと真耶がいた。

真耶は俺の問いに小さく答えた。

姉弟水入らず、か。

「分かった。頃合いを見て俺と雪もいなくなる」

「お願いしますね」

そう言っつて真耶はシャルロット、セシリア、鈴音を連れてどこかに行った。

「これならどうかな?」

「ん?…この位の露出ならまだオツケーかな」

次に雪が着ていたのは空色と白で彩られたセパレートタイプの水着だった。

上は右が空色で左が白。

下は空色の水着に白のパレオが着いている。

「んじゃ俺も水着を選ぶか」

「だね」

雪は素早く着替えて試着室から出てきた。

さて、真耶に言われたとおりに退散しますか。

「あ、魔神先生。上手く行きましたか？」

「ああ、これで良いんだよな？」

自分の水着を買い歩いていると真耶達を見つけた。

俺の言葉に真耶は頷いた。

……そうだ。

「ちょうど良いからケーキを奢るぞ。前に約束してたよな？」

「……本当（ですか）！！」「……」

鈴音、セシリア、真耶の3人が物凄い勢いで喰い付いてきた。

あ、でも……

「あと三日で臨海学校だったな。女性はダメか？」

「……う……ッ……」「……」

俺の言葉に3人は呻いた。



「どうするか？」

「あの、ケーキじゃ無くてお昼を払うというのはどうでしょう？」

俺が首を傾げているとシャルロットが手をあげて答えた。

お昼か…

「ん〜… 3人ともそれで良いかな？」

「はい……………」

となると…

「織斑姉弟も呼ぶか？」

「そうですね、流石に買い物も終わったでしょうし」

そう言つて真耶はケータイを取り出し電話をかけた。

んじゃ俺は店を探すか。

そう思い俺は歩き始めた。

「あ、あなた！！」

「へ？」

不意に背後から声をかけられた。

振り向くとスーツを着た女性が立っていた。

「バイトしない！？」

「はい？」

いきなりの言葉に俺は固まってしまった。

「えっと…いきなりどう言う事ですか？」

「ごめんなさい、慌ててたわ。実は今日、うちの店に重要なお客様が来るのよ。それなのに店員が1人事故を起こして入院しちゃって…お願い!!」

つまり、俺にその人の代わりに働いて欲しいと？  
女性の話を聞いて俺は理解した。

「はあ。俺が出来る事でしたら」  
「俺?…もしかして男?」

女性は驚きながら尋ねた。  
他に何に見えるんだらう?

「……………うん!いけるわ!!お願い!!」  
「分かりました」

俺は嫌な予感がしながらも頷いた。

side out  
side 織斑千冬

「ふむ、全員で昼食か。なら予約している私の知り合いの店に行こう。変わった趣味をしているが上手い飯を出す。いい人物だ」

山田先生に私はそう言った。

「ですが魔神先生が店を探しに行っちゃいましたよ?」  
「なに、連絡すれば大丈夫だらう」

そう言って私達は歩き始めた。

水着は機能性で充分だと思う。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、フレイス様、妖気様、バラランシャ様、月光閃火様、空刀様感想ありがとうございます。

妖気様より腹痛に効く丸薬(惚れ薬)を、

空刀様より私に邪剣ネクロマンサーと聖剣ネクロマンサーを、

いただきました。

竜王「おお、すごい力を秘めてるな」 邪剣と聖剣を手に持っている

竜馬「飲み込まれるなよ？」

竜王「お前じゃないから大丈夫」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所よりキャラとこいしが来ました」

竜馬「やっぱり俺はこいしが来た事に気付けないな」

こいし「竜王はお姉ちゃん的能力も効かないみたいだしね」

キャラ「竜王、私とデュエルだ!!」

竜王「…おそろくキャロのデッキの天敵だよ？詳しいデッキはユタ様の所でコラボしているから見れば分かるけど」

月光閃火「天敵を倒せてこそ強くなれるがな」

竜王「まあ、他にも面白そうなデッキはたくさん作ってるけどね」

竜馬「所でよ。物凄く嫌な予感がするんだが…」

竜王「気のせい気のせい」こいし締めて」

こいし「は〜い闇を狩る少年続くよ〜 ねえねえ竜王もペットにならない？」

竜王「う〜ん…前にも言ったけどごめんね？」

バイト、見られなくなかった…

side 第3者視点

「着いたぞ。ここが私の知り合いの店だ」

「……織斑先生、このお店はいつたい」

千冬の言葉に店を見て真耶は尋ねた。

その店は喫茶店…否、特異な喫茶店であった。

「先生、どうしてこのお店の店員さんはメイドや執事の恰好をしますの？」

「店長の変な趣味だ」

セシリアの疑問に千冬は即答した。

そう、この喫茶店はメイド（&執事）喫茶なのだ。

「変な趣味って酷くないかしら？」

「おお、いたのか。人数が少し増えたが予約通り来たぞ」

千冬の言葉に1人の女性が反応した。

どうやら彼女が店長らしい。

「結構増えてないかしら？最初は確か2人じゃなかった？」

「なに、途中で教え子たちに会ったから昼食を。と、思ってな」

女性は人数を数えて答えた。

しかし、すぐさま席を準備できるのだから相当に手慣れているのだらう。

「それじゃあ、しばらくお待ちを」  
「分かった」

女性はお辞儀をして歩いて行った。

「…先生、この店の名前って何ですか？」  
「確か…@クルーズだな」

シャルロットの言葉に千冬はしばし逡巡し答えた。  
そこにメニューが運ばれてきた。

「メニューになります。ごゆっくりどうぞ」  
「ああ、ありが…竜馬!？」

目の前に料理を運ばれ例を言う一夏は目の前の人物を見て驚いた。  
何故なら、髪の毛が赤く瞳の色が紅い竜馬がメイド服で料理を運んでいたからだ。

時は遡ること30分……

side 魔神竜馬

「で、バイトってどこですか？」  
「もう少し…ここよ」

女性に連れられて着いた店は見た所、喫茶店だった。  
ここでバイト？

「はあ、この店の名前は何ですか？」  
「お客様、@クルーズへようこそ」

俺の問いに女性は笑みを浮かべてスカートをつまみあげ可愛らしい

お辞儀をした。

「それじゃあこっちに来て、制服を渡すわ」  
「分かりました」

少年移動中

「……………あの、これh……………」  
「似合うと思うのよ」

渡された制服を見て俺は尋ねようとしたが遮られた。

「でも、これh……………」  
「似合うと思うのよ」

再び俺が声を発そうとして遮られた。

俺の手にあるのはどう見てもメイド服だった。

【マスター、これは諦めた方がいいのでは？】  
【うっうっ……………せつかく身体が元の年齢に戻ったってのに……………】

無々との念話で軽く涙しながら俺は諦めてメイド服を着ることにした。

ちなみに木製の狼の面は着けたままである。

「っとどうやら来たみたいね。私は応対してくるから料理を運んでちょうだい」

「はい」

店のドアの開く音に女性は反応し言った。

さて、頑張るか。

side out

side 第3者視点

「お兄ちゃん、何してるの？」

「……」ゆっくりどうぞ

雪の言葉に何も聞こえないと言った風に竜馬は答え歩きだそうとした、が…

「りょうちゃん？ちゃんとお客様に答えなきゃ」

「ぐ……はい」

女性の言葉に呻き足を止め席の近くへと戻った。

「兄上、何をしていますか？」

「バイトです。今日、本来来る人が事故を起こしたらしく道を歩いていたら頼まりました…」

ラウラの問いに竜馬は答えた。

その横では千冬が笑いを堪えている。

「それではごゆっくりどうぞ…」

「ああ、すまないがコーヒーを追加で頼む」

去ろうとする竜馬に千冬が注文をした。

「…かしこまりました」

そう言って竜馬はカウンターに行きコーヒーを持ってきた。



ちなみに竜馬がコーヒーを取りに行く隙について雪と千冬が竜馬を写真に納めていた。

side out

side 魔神竜馬

なんだ、なんだよ、なんですか!?

なんなのこの公開処刑の様な状況は!!!

「りょうちゃん……ぷっ」

シャルロットに笑われた!

でも何故か篝とセシリアが落ち込んだ。

「どうかしたんですか?」

「いえ……」

「ちよつとした敗北感にですね……」

俺が尋ねると2人はさらに落ち込んだ。

何で?

「あはははは!! 似合ってるわよ!!」

限界だったのか鈴音が大きく笑い声を上げた。

正直嬉しくない……

「むっ……姉上と呼んだ方が良いのか?」

ラウラを見るとラウラは顎に指をあて呟いていた。

真面目な顔で何を悩んでるんだよ……

その後も俺は8人に弄られた。

もう、ここでバイトはしたくない…

バイト、見られなくなかった…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、ルシフェル様、空刀様、妖気様、月光閃火様感想ありがとうございます。

空刀様よりIS女子組に『フェアリーテイル空の刀が目指すは雷神』シリーズにでてきた並行世界の織斑一夏とラウラの息子の織斑瞬のデータを、妖気様より竜馬にオオサンショウウオを、

いただきました。

竜馬「オオサンショウウオって…何だっけ、あの…ほら絶滅危惧？  
だったかな？」

竜王「あれ？天然記念物だったと思ったけど」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所よりユウキに抱きついているティアナが来ました」

ユウキ「俺は付属品じゃないよ!？」

ティアナ「ユウキ」 頬をすりよせる

ユウキ「ちよっ！？ティア！？」

竜馬「完全にデレてるな」

雪「あ、温風はもう大丈夫です」

月光閃火「そうか」 起こしていた風を止める

「魔神兄妹ぶっ潰す！！！！」

竜王「ありやりや、暴走状態の乱太が来ました」

雪「どうするの？」

竜馬「武器を外させればいいんじゃないか？」

竜王「頑張れよ。っとそう言えばティアナとユウキが静かな……」

ユウキ「むぐう……」

ティアナ「ん」 ユウキとキスをしている

竜王「……うん。気のせいだな、とりあえず2人を別の部屋に転送」

？黄昏の刃器？でユウキとティアナを影で別の部屋に送る

「こんにちは」

竜王「お、空刀様の所より空刀様、聖奈、瞬が来ました」

空刀「あれ？蛇川はどこに？」

竜王「2対1だからもうすぐ正気に戻ると思いますがよ」

聖奈「蛇川が？」

竜王「ああ、力に飲み込まれてるんだから負けないでしょ」

月光閃火「力は飲み込まれずに抑えるものだからな」

瞬「俺はどうしたら…」

竜王「竜馬が戻ってきたら模擬戦でもしなよ」

瞬「……そうする」

竜王「そんじゃ闇を狩る少年続きます」

海に着いたら準備運動を。

side 第3者視点

「そんじゃあ、後から合流するから先に行っていてくれ」

バスに乗った生徒たちに向かって竜馬は言った。  
どうやら最後に見回りをしようだ。

「分かった。出発してくれ」

生徒数人で雪を取り押さえながらバスは出発した。  
そして竜馬は伸びをした。

「何の用だ？」

「おや、気付かれていたか」

竜馬の立っている近くの木から扇子を手に持った女子生徒が現れた。

「えっと、確か生徒会長の……」

「更識楯無さらしきたてなしですよ。魔神竜馬先生」

現れた女子生徒はIS学園で最強を誇る生徒会長、更識楯無だった。

「そつだそつだ。んで？何の用だ？楯無」

「いえいえ、未確認アンノウンのIS3機を1人、しかも生身で破壊する先生に興味を持って」

楯無は笑みを浮かべながら竜馬に言った。

「興味…ねえ。まあ、いいや。敬語はいらなから普通に喋っていいぞ楯無」

「そう、じゃあお言葉に甘えて。あなたのその武器について聞きたい事があったね」

そう言つて楯無は竜馬の右腕…正しくは無々を見つめた。

「……楯無、一つ言っておく。好奇心は猫をも殺すぞ?」

「…おや、何やら逆鱗に触れそうな予感。それじゃあ、今回はこの辺でお暇いひやすしようかな」

楯無の?武器?という言葉に反応し微量ながらも漏れる殺気に気付いたのか楯無は苦笑いを浮かべながら歩いて行った。

side out

side 魔神竜馬

「つたく。どいつもこいつも無々を物扱いしやがって…」

『私は気にしませんが』

『マスター、時間は良いんですか?』

光の言葉に俺は時計を見た。

時刻は…8時か。

「充分間に合うな。無々、セットアップ」

『了解しました。セットアップ』

俺の言葉に無々はバリアジャケットを展開した。  
無々の形状は手甲である。

「さて、ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。

黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

呪文を唱えて俺はフェンリルに変身した。  
この足なら追いつくからな。

「疾ッ！！！」

そう言つて俺は全速力で走つた。

side out

side 第3者視点

「海まだかな？」

「いや、まだだろ？気が早いなシャルは」

シャルロットの言葉に一夏は答えた。

ちなみにバスの一角で異様な雰囲気を出している席がある。

「……………」

「（誰か助けて！！！！）」

言うまでもなく雪の席である。

可哀想に隣の席の生徒は涙目である。

「！？」

不意にガンツ！という音とともに幕が窓に頭をぶつけていた。  
何事かと思いきラスメイト達が窓を見るとそこにはバスと並走する  
竜馬の姿があつた。



「何をしているんだ竜馬!!」  
「バスの横を走っている」

窓を開け千冬が叫ぶと竜馬はあっさりと返した。  
すると雪が窓を開けた。

「お兄ちゃん！受け止めて…もがもがが…!!」  
「死ぬ気か…!!!!」

窓から竜馬に向かって飛ぼつとする雪を押さえこみ口に猿ぐつわを  
つける千冬。

その光景に竜馬は苦笑している。

「つと、ちよつと楽しさせてもらっぞ」  
「は？」

そう言つて竜馬は跳躍しバスの上に着地した。

side out  
side out  
魔神竜馬

バスの上に座りながら俺は歌い始めた。

「~~~~~」

なんかバスの中が騒がしいな。  
ざわざわと下から話声が聞こえてきたので俺は思った。

「~~~~~」



海に着いたら準備運動を。(後書き)

〜霊使い達の雑談〜

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、妖気様、フレイス様、空刀様、月光閃火様、ウイング様、バラランシヤ様感想ありがとうございます。

空刀様よりIS組に空刀ゲームセンターのチケットを、

いただきました。

雪「今回お兄ちゃんが歌ってたのは？超電磁砲レールガン？のOPだね」

竜王「気に入ってるからね」

「こんにちは」

竜王「あ、妖気様の所より来也が来ました」

来也「雪さん、お届け物です」

雪「う、これは…!!」

竜王「この前の竜馬の写真か、しかも全アングル」

雪「ありがとうございます!!」

来也「あれ？竜馬さんは？」

竜王「あつちで月光閃火様に貰ったガトーショコラを食べてるけど」

月光閃火「涙を流しながらだけどな…」

竜王「でもケーキが美味しいから少しだけ元気みたいだ」

「お邪魔するわよ」

竜王「お、フレイス様の所より紫と映姫が来ました」

映姫「……竜馬はどうかしたのですか？」

雪「ちよつと…ありまして」

紫「ふ〜ん、まあ良いわ。打ち合わせをしましょう」

竜王「オツケー」

「雪殺す!!!!!!」

竜馬「……人の妹に手を出すたあいい度胸だな」

来也「（あれ？元気になった？）」

雪「空刀様の所から来た聖夜みたいだね。なんでか私を狙ってるけど」

竜馬「ちよつど良いや…最近イライラしてたんだよね…ここいらで鬱憤を晴らさせてもらつよ」



すいよね」

闇遊戯「うわあああああああ……!!」

竜馬「ドロー！モンスターカード！」

銀河「ドロー！モンスターカード！」

雪・遊戯「もう止めて！とっくに闇遊戯（もう1人の僕）のライフは0よ（だよ）」

竜馬・銀河「H A N A S E!!!」

十代「（こつちでからかわなくて良かった）」

遊星「あの、竜王さんは……」

竜馬「あつちの部屋で打ち合わせしてるからなあ」

聖夜「…何でこんなに全身が痛いんだ？」

雪「あ、起きた」

遊星「これを竜王さんから銀河に渡してほしかったらしいんですが……」

竜馬「じゃあ俺が渡すか…!？」 服装が変化した

雪「おお!!かっこいいよお兄ちゃん!!」

銀河「お、俺も俺も!!」

竜馬「ん？渡すと元の服に戻るみたいだな」

銀河「なんじゃこりゃあああああ!!!!!!」

竜馬「どうし……た……?」

銀河「どうなってるんだ!？」 黒のゴスロリ服に変化

遊戯「(…うわあ、絶対に怒られるぞ)」

聖夜「傷薬ってありますか?」

来也「ここにあるぞ」

↳別の部屋

竜王「この日は?」

映姫「すみません。その日は『女性の下着2000枚を盗んだ』という罪の魂の説教の日です」

紫「じゃあこの日は?」

映姫「この日も『女湯を3047回覗いた』という罪の魂の説教の日です」

竜王「難しいなあ」

映姫「すみません」

紫「うん…あら？この日はどうかしら？」

映姫「ああ、その日でしたら大丈夫です」

竜王「（あの日は……確か竜馬の……まあ、大丈夫だよな？）」

（雑談所）

雪「やっぱりお兄ちゃんのこと？紅魔？デッキは酷いって！！」

竜馬「んな訳あるか。それにこれは俺の仲間がくれた大切なカードだ！絶対に抜かない！！」

遊戯「（僕にとってはシンクロ召喚を使わないからそこまで関係が無いかな？）」

十代「お？これって竜王のデッキか？」

竜馬「え？ああ、確かにそうだけど」

十代「見てみよ…あれ？何かレベルの低いモンスターがいっぱいだ」

遊星「十代さんの様に融合を使うんですか？」

十代「いや、融合のカードは入って無いぜ。それに一番レベルが高くて2だ」

竜馬「（まあ、あのデッキは所謂スライムデッキだから分かりにくいよな）」



雪「確かデツキ名は…？無限の粘製？だったよね？」  
アムロミッド・スライム・ワークス

竜馬「ふざけて付けたデツキ名だって言ってたけどな。闇を狩る少年続きます」

地球割りは無理でも海割りは出来る。

side 魔神竜馬

「ほらほら、迅速に並べ〜」

バスから降りてくる生徒に向かって俺は言った。  
流石に千冬で慣れているのか行動が素早いな。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、  
従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願ひしまーす」「」」

千冬の言葉に生徒達は挨拶をした。  
そう言えば俺、変身解いてないな。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」  
三十代ほどの年齢の女性が笑顔で答えた。

【無々、バリアジャケットだけ解除できるか？一応フェンリルは維持したいからさ】

【分かりました】

念話で伝えると無々はバリアジャケットを解除してくれた。  
なんか最近、着物を着てる気がする。

俺の服装は朱と藍の着物である。  
ちなみにいつも通り狼の面は斜めに顔に着けている。

「……お兄ちゃん、着物が気に入ってるの？」

「ん〜：最近気に入ってきたって感じかな。ほら、列に戻れ」

雪の問いに答えて俺は列に戻るように促した。

そして説明が終わったのか生徒たちが旅館の中に入って行った。

「さて、と。俺はする事が無いから水着に着替えて海に行くか」

そう呟き俺は自分に割り当てられた部屋に向かった。

確か織斑姉弟は同室だったと思う。

side out

side 第3者視点

「ね〜ね〜。たつつん〜、その尻尾どうなってるの〜？」

フエンリルの姿の竜馬にのほほんは尋ねた。

ちなみに呼び方の由来は、竜馬 竜 たつ たつつん、と言う訳である。

「企業秘密だ。ほれ、一夏が来たぞ。絡んで来い」

「あ、本当だ〜。じゃあ行ってくるね〜」

竜馬が指差すとのほほんは水着…と言うよりもキツネの着ぐるみの尻尾を揺らしながら歩いて行った。

どのような原理で動いているのかは不明である。

「にしても海か。……そう言えば水切りなんて言う修行方法があったな」

海を見ながら竜馬は呟いた。

その口元には薄い笑みが浮かんでいる。

「疾ッ！！」

そう言つて竜馬は海上を走り始めた。  
どうやら沖に行くようだ。

「右足が沈む前に左足を、左足が沈む前に右足を……言葉では単純だが実際に行く人間は初めて見たぞ……」

その光景に生徒達は口を開け千冬は呆れていた。  
唯一、雪だけが真似をしようとして沈んでいたが……

「ここらへんで良いかな。よつと……」

そう言つて竜馬は虚空瞬動を使い上空に飛び上がった。  
竜馬の右足が気によつて淡く光を放つ。

「轟天裂覇！！！！」  
こうてんれいぱ

その言葉と同時に竜馬は海面に踵落としを放つた。  
気で強化されている所為か海が割れ海底が現れた。

「無々、形状変化。形状は刀」  
マニファー シュヘアート  
『了解しました。手甲から刀』

竜馬の言葉に無々は手甲から刀へと変化した。

「？彩華・紅？！！」  
ツヴァイ  
『？カートリッジ。瞬間 紅蓮椿』  
モメンタンナクヲムソウカメリア

刀の形状の無々からカートリッジをロードする音が聞こえる。  
刀身が砕け焔によって刀身が形成される。

「周りに被害が出にくいから海は良いな。劫竜火灰塵ごうりゅうかかいじん!!」

竜馬は海底に立ち迫りくる海水を横に一閃した後に縦に振り下ろし切り裂いた。

その後、地面に刀身を突き立てた。  
すると竜馬を中心に火柱が巻き起こった。

「…………ヤバいか?」

『はい、水蒸気が密集していますのでかなり危険です』

竜馬の言葉に無々はあくまで冷静に答える。

風がそこまで無く水蒸気が密集している迂闊な事をすれば水蒸気爆発が巻き起こるだろう。

「形状変化。形状は双剣。んで?彩華・蒼?」

『了解しました。刀から双剣。シュベアートツインシュベツダアイ?カートリッジ。瞬氷インスタントアイス 蒼穹蓮華ソウキョウレンカ』

無々の形状が刀から双剣へと変化し刀身が砕け冷気による刀身が形成される。

冷気あに中てられ水蒸気が徐々に凍り付いていく。

「オマケだ。絶竜氷双撃ぜつりゅうひょうそうげき!!」

そう言つて竜馬は双剣による連続攻撃を行った。

双剣が振るわれるたびに刀身から無数の氷の礫つぶてが飛んで行く。

そして攻撃がやむと周囲の水蒸気は完全に凍り付き崩れて海に沈んでいった。

side out

side 魔神竜馬

「うーん…少しは技の練習になったかな？」

俺は砂浜で腕を組みながら首を傾げた。

？劫竜火灰塵？は一夏の使ってた？一閃二断の構え？を元に構築したから大丈夫だと思うけど…

？絶竜氷双撃？がオリジナルの技だからなあ…

「お兄ちゃん、さつき軽く津波が起こったから千冬が怒ってたよ」

「マジで？被害出さないようにと思ってたんだけどなあ」

雪の言葉に俺は頭を掻いた。

『マスター、魔力反応があります。おそらく？闇？かと』

「そうか、と言う訳で行ってくるよ」

無々の言葉に俺は頷き雪に言った。

久々に出てきた気がするけど油断せずに行くか。

「ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、怒れる竜。破壊の主にして暴君の象徴よ。其は強大にして凶暴なり。『竜魂転身』」

俺は呪文を唱えてヴリトラの姿に変身した。

地球割りは無理でも海割りは出来る。(後書き)

～霊使い達の雑談～

感想と贈り物ありがとうございます。

妖気様、フレイス様、空刀様、ルシフェル様、銃王 海さん、バラ  
ランシャ様、月光閃火様感想ありがとうございます。

妖気様より竜馬に写真の売上で買ったメロンパンを、  
銃王 海さんより性転換薬を、

いただきました。

竜王「お、マグダラの聖骸布？」

竜馬「消えた!？」

～無人世界～

竜王「おゝ…まあ、動きを封じるだけなら無問題 ? 黄昏の刃器 -  
ラグナロク？」

透明な刃を持つナイフが竜王の手に現れる。

これは竜王の能力等を封じても武器本体の能力が封じられているわけではないからである。

竜王「よっこいしょ」 影に潜っていく

先程まで竜王がいた地点に死滅の黒薔薇が500本突き刺さる。  
ゲイ・バルカロール

竜王「まあ、刺さつても死なないけどさあ。(主にギャグ補正のお陰で)…とりあえず帰ろう」

影を経由して雑談所に戻る。

〈雑談所〉

竜王「ただいま」

「お邪魔してます」

竜馬「お前がいなくなつてた間に2人来たぞ」

竜王「?何言つてるんだ?フレイス様の所よりキャロ、エリオ、こいしの3人が来ました」

竜馬「はい!?!」

こいし「いえ〜い」

キャロ「竜王さん、それ何ですか?」

竜王「これ?これに包まれてると動けなくなるんだ」

こいし「(今の内に!!)」

エリオ「え!?!あれ!?!なんで竜王さんを背負つてるんですか!?!」

竜馬「そんな堂々と」

こいし「あ、能力使うの忘れてた」



竜王「ドジだなあ あははは」

竜馬・エリオ・キャラ「(ドジで済ませちゃうんだ…)」

「竜馬!!!」

竜王「あ、空刀様の所より空刀様、蛇川、聖夜、瞬が来ました」

乱太・聖夜「さあ、戦うぞ!!!」

竜馬「は!?!ちよっ!?!」

月光閃火「2対1か…負けるだろうな」

竜王「でしょうね。とりあえずマグダラの聖骸布に関しては放置しておいて」

エリオ「動けないのにですか!?!」

キャラ「流石です!」

こいし「(早くペットにしたいな)」

空刀「ん?誰か来たみたいですよ」

「こんにちは」

竜王「あ、銃王 海さんの所より銃王 海さんの書く逃走中の版權キャラが来ました」

一夏「あれ？竜馬は？」

竜王「あつちで戦闘中」

瞬「父さん！！」

IS女子「！？」

一夏「は！？」

空刀「ああ、瞬は並行世界の一夏とラウラの子供だからね」

ラウラ「私と一夏の………／／／／／／／／／／」

IS女子（ラウラを除く）「……………」（激怒）

リンク「修羅場ですね…」（汗）

銀河「これは見てるこっちもキツイ…」（汗）

竜王「つーかすごい人数だな…」 銃王 海さんの書く逃走中の版權キアラを見て呟いた。

〈別世界〉

乱太「おらあああああああああ！！！！！！！！！！」

聖夜「滅竜奥義 雷竜絶牙！！！！！！」

竜馬「危ね！！！！つてぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！」



竜王「……とりあえず締めちやおう。闇を狩る少年続きます」

〈別世界〉

乱太「はあ……はあ……」

聖夜「ふう……」

竜馬「あが……が……が……」

乱太・聖夜「勝った……」

〈雑談所〉

こいし「（こっそり残っちゃおう）（）」

エリオ「兄さああああああん……！！！！！！！！」

竜王「……一回全員強制送還してリセットした方が良いかな？」

## 6番目の翼と蒼穹に咲く華、切り裂かれし黒翼

side 魔神竜馬

「あれか…」

俺は海上を飛び飛行している機体を見つけた。

その機体は背部に飛行用スラスタを装備している白い機体だった。

「ファフナーのMk・VIだな」  
マークゼクス

武装はハンドガンとナイフ状の短刀。

デュランダルとマインブレードか…

「とにかく沈めるしかないよな。多重炎牢結界<sup>インフェルノ</sup>!!」

俺はそう言って周囲に魔法陣を展開した。

どうやらMk・VIもこちらに気づいたらしく方向転換しこちらに向かってきた。

「先手必勝!!」

俺はMk・VIに掌を向けて握りしめた。

するとMk・VIの周囲に炎で創られた槍が出現し飛来していった。

「避けられるのかよ…」

Mk・VIは炎槍の合間を縫って避けていった。

「だったら…」

双剣を持ち直し俺は構えた。  
直でぶつ潰すしか無いな…

「おらあつ!!!」

俺の攻撃をMk・VIはマインブレードで防いだ。  
おいおい、結構力を込めたんだぞ？

side out

side 第3者視点

海上に響くのは金属がぶつかり合う音と爆発するような音だった。  
金属がぶつかり合う音は勿論、竜馬の握る双剣とMk・VIの持つ  
マインブレードの音。

そして爆発音はMk・VIの持つデュランダルの射撃音である。

「ちいっ!!!」

竜馬は即座に身体を捻りデュランダルの攻撃を避ける。  
それと同時に焰を操り火球を撃ち出す。

「思考が読めないのが辛いな…」

そう竜馬は呟いた。

そう、人間であれば視線や仕草しぐさ等で次に何をしようとしているかが  
読めるのだ。

が、今竜馬が戦っているのは機械なのだ。  
故に思考などは存在せずに仕草等も無い。  
だから戦い辛いのだ。

「一気に力で潰す。無々、形状変化。形状はナイフ」  
『了解しました。双剣ツインシユベアタからナイフメイサー』

竜馬の言葉に無々はナイフへと変化した。  
そして竜馬はナイフをバリアジャケットのポケットにしまう。

「頼むぞ、光」

『分かりました。武装状態』

竜馬の左腕の腕輪が光を放つと竜馬の手に両刃の重剣が出現した。  
？奇跡ノ光刃？光の武装状態である。

「魔法は発動できないだろ？」

『はい』

竜馬の言葉に光は答えた。

？奇跡ノ光刃？は守護の魔法、つまりは守護まもる対象がない場合は殆ど意味をなさないのだ。

なのに何故ここで光を武装状態にしたかと言うと単純に無々の形状では攻撃力不足なのだ。

故に魔法は発動できないが一撃の威力の高い光を装備したという訳である。

「っせいー！」

掛け声とともに竜馬は重剣を振るった。

しかしそれをMk・VIは持ち前の機動力でかわす。

「ちょこまかと…」

Mk・VIを睨みつけて竜馬は呟いた。

『マスター、さらに二つの魔力を感知しました』  
「増援かよ……」

無々の言葉に竜馬は苦々しく答えた。

するとMk・VIの近くに青い重装甲の機体と赤い軽装甲の機体が現れた。

「確か…メガセリオンとベイバロンだったか？」

『マスター！！左右から熱源反応です！！』

光の言葉が終わった瞬間、竜馬を爆煙が包み込んだ。

side out

side 魔神竜馬

「ぐあ……」

爆煙を吹き飛ばし左腕を押さえながら俺は呻いた。  
ミサイル…？

「そんなもん積んでなかったと思っただがな……」

『すみません…私の反応が遅れたばかりに……』

光がすまなそうに言った。

「気にするな…まだ戦える……」

俺は光に言った。

不意にファフナー達が向きを変えた。





不意に私のIS？ひみつげつげつか冰雪月華？から警告の表示とアラームが鳴りました。

「警告！！高速で謎の機体が接近中！！武装の展開を申請！！」

？冰雪月華？は『謎のIS』とは表示しなかった。

その表示が示すのは暗にお兄ちゃんが倒されたという事実だった。

「お兄ちゃん……」

「雪！？」

一夏が何か叫んだけど気にしない。  
私はISを起動して飛び上がった。

「咲き誇って冰雪華！！」

私はハンドガン？トワイライト黄昏？を消し八つのビット？冰雪華？を呼びだしました。

「見えた！！」

海の方を見て私はこちらに向かってくる三機のファフナーを見つけました。

あいつ等がお兄ちゃんを…

「許さない！！」

私は？冰雪華？を展開し三機に突撃した。

## 6 番目の翼と蒼穹に咲く華、切り裂かれし黒翼（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、ルシフェル様、月光閃火様、空刀様、妖気様感想ありがとうございます。

空刀様より黙ってスプラッタ器を、妖気様より竜馬にスイカを、

いただきました。

竜王「……………うん、動けない」

竜馬「いつまでマグダラの聖骸布に包まれてるんだよ」

竜王「だって、取れないし」

こいし「あ、このお茶おいしい」

竜王「良かった良かった」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所よりスバルと？さとりん？が来ました」

さとり「最後に『ん』を付けないでちょうだい。こいし、帰るわよ」

こいし「え〜… 竜王をペットにしたいよ〜」

スバル「ペットって…とこで竜王さん。どうして布に包まれてるんですか？」

竜王「自分で外せないから」

月光閃火「と言うよりも男だから外せないんだよな」

竜馬「さらには自分で外す気も無いからな」

こいし「だからほら、動けないんだから私達のペットに…」

さとり「こいし!」

竜王「あはははは〜」

スバル「笑い事!？」

月光閃火「笑い事が…」

竜馬「はあ…なんか疲れる。闇を狩る少年続きます」

こいし「じゃあさ、じゃあさ…私が呼んだら絶対に来るって言ったけども…」

さとり「それは迷惑でしょう!？」

竜王「面白そうだな」

スバル「いやいやいや!」

## 黒き覇竜の剣翼

side 魔神雪

「？氷雪月華？唯一仕様能力？ワンオフ・アビリティー 魔物憑神？モンスター・アバター 発動！！」

私はナイフ？ウエルキン 蒼穹？を消してデュエルディスクを呼びだした。  
そしてデッキを装着する。

「墓地にモンスターはいない！よって手札から？ガーディアン・エアトス？を特殊召喚！！そして憑着！！」

私がデュエルディスクに？ガーディアン・エアトス？のカードをセツトするとISのウイングが？ガーディアン・エアトス？の翼に変化した。

これでスピードが上昇する。

「行つて！！」

ビット？氷雪華？を操作して私はファフナー三機に攻撃を仕掛けた。  
絶対に勝つんだ！！

side out

side 魔神竜馬

「くそお……」

海を泳ぎ呻きながら俺は呟いた。

ヴリトラの姿のままなので切り落とされた翼の傷口が海水で沁みる。

『マスター！早く魔法を解除してください！！傷口が！！』

『急がなければ出血多量で死んでしまいます!!』

無々と光が叫んだ。

……………どうでも良い。

「どうでも良いんだ。俺は…………俺は仲間を助ける！多重氷牢結界！  
コキュートス

!!」

『マスター!?!』

俺は魔法陣を展開し傷口を凍結させた。

フェニックスは羽が濡れて飛べない、フェンリルは海上に立てないから意味は無い。

『…………マスター、?奇跡ノ光刃?が発動できます』

「分かった。発動してくれ」

不意に光の口調が変わった。

まるで母親の様な優しい口調になったのだ。

『?奇跡ノ光刃?発動』

そして光の言葉と同時に重剣に細い線が入り12本の細剣に分離した。

これは…

「翼…………?」

『?守護と救済の十二剣翼?』

分離した細剣はまるで翼のように俺の背中に展開された。

そして俺の体は海から空へと舞い上がった。





に近付いていた。

故にその結果……… ISが解除され雪は倒れた。

「魔神!!??」

「は、早く逃げなさいよ!!」

駆け寄って来る千冬に向かって雪は叫んだ。

憑着していた? マシユマロン? のお陰か雪にそこまでのダメージは見られなかった。

そして、ファフナー達は再び銃口を向け無情にも放った。



「もう……遅いよ。お兄ちゃん」

「ああ、ありがとう。たった1人の俺の大切な妹」

無数の閃光を放った人間を見て雪は嬉しそうに言った。  
その言葉に竜馬は笑顔で答えた。

## 黒き覇竜の剣翼（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

White Seal様、妖気様、フレイス様、ルシフェル様、空  
刀様、月光閃火様感想ありがとうございます。

妖気様より私に灰色の包帯を、

いただきました。

竜王「さて、200話突破記念の祝砲（偽）としてWhite Seal様よりSLB一万発みんな（訓練室etc.にいる連中含む）に撃ち込まれました」

雪「笑えるんだ……」

竜馬「防ぎようが無い……」

月光閃火「俺はなんとかなる」

「こんにちは」

竜王「ちょ！？タイミング悪！！フレイス様の所よりユウキとテイアナが来ました！！」

竜馬「おい！！どうすんだ！！もう迫って来てるぞ！！」



竜馬「……………」

雪「お兄ちゃあああああ………ん!!!!!!」

「こんにちは」

竜王「あ、空刀様の所より虎伍、乱太、聖夜、瞬、空刀様が来ました」

虎伍「……………何があつた？」

竜王「かくかくしかじか」

乱太「まるまるつまつま…ってか？」

ティアナ「会話が成立してる!？」

聖夜「いや、してないよ」

ユウキ「してないの!？」

空刀「あ、瞬が行っちゃった。で、結局何があつたんですか？」

竜王「かくかく……………」

ティアナ「それはもう良いわよ!?!」

竜王「むう……………White Seal様よりSLB一万発を受けました。以上」



## 極雷の大槍

side 魔神竜馬

「無事で良かった…」

「りよ、竜馬！？今、何をしたんだ！？」

俺が地面に着地すると千冬が尋ねてきた。  
今のっていうと…

「これのことか？」

そう言つて俺はファフナー達に向けて一筋の閃光を放つた。  
閃光がMk・VIの肩に突き刺さりMk・VIの肩の装甲は熔解した。

「そうだな…千冬、？電磁加速砲？つて知ってるか？」

「？電磁加速砲？…確か、物体を電磁誘導により加速して撃ち出す装置だったはずだが…まさか！？」

俺の問いに千冬は答え驚いた表情をした。

「ご明察だ！！！」

そう言つて俺は増殖していくナイフを？多重雷牢結界？によつて撃ち放つた。

？電磁加速砲？によつてメガセリオンとベイバロンの足は熔解し倒れた。

不意にMk・VIが千冬と雪に向けて発砲した。



「させねえよ」  
『守護封剣』

俺は細剣を操り2人の盾にした。  
これで防御は充分だな。

「とどめ行くぜ！」

俺はナイフを3本つつ集めた。  
3本のナイフに雷が走り1つになる。

「？極雷の大槍？！！！！！！」  
レイル・ザ・グングニル

次の瞬間、俺の周囲には雷で形成された大槍が3本出現した。  
そして俺は雷の大槍を振りかぶった。

「抉り穿て！！！！」  
えく うが

俺は？極雷の大槍？を投擲した。

- 1 本目、メガセリオンの胴体を貫き周囲に雷を撒き散らした。
- 2 本目、ベイバロンの頭部を貫き完全に溶解させた。
- 3 本目、Mk・VIの頭上から胴体を貫き爆散した。

「……………終わった。っておわ！？」  
「お兄ちゃん！！」

地面に着地すると雪が飛びついてきた。  
危うく倒れる所だった…

「危ないからいきなり飛び付かないでくれ」

「はい」

俺の言葉に返事をしながらも雪は離れない。  
そう言えば他の生徒がいないな。

「千冬、他の生徒たちは？」

「退避させて旅館の中だ。最後に魔神を呼びに来てこうなった」

俺の問いに千冬は答えた。

つまりは俺が来るまで雪が守っていたんだな。

「ご苦労さま」

「えへへへ…／＼／＼／」

そうやって俺は雪の頭を撫でた。

雪は気持ちよさそうに笑顔になる。

「まあ、これで一段落はついただろ。自由時間を再開してくれ」  
「分かった。竜馬はどうする？」

千冬は頷き聞いてきた。

俺か……

「そつだな…一旦部屋に行くよ」

「そつか…」

俺の答えに千冬が一瞬暗くなった気がしたが…  
気のせいだろ。

そして俺は旅館の自分の部屋に向かった。

side out

side ラウラ・ボーデヴィツヒ

「兄上！？どうしたのですか！？」

「ん？ラウラか…ちよつとな…」

旅館の廊下を歩いていて私は背中が凍り付いている兄上と遭遇した。  
良く見れば瞳の色が金色だ。

「大丈夫、なのです…？」

「ああ、少し休めばなんとかなるだろう。楽しんでこいよ」

そう言つて兄上は歩いていった。

片足を引きずつて……

side out

side 魔神竜馬

思ったよりもダメージが深刻かな…？

俺はグルグルと廻る視界にそう思った。

『マスター、私が結界を展開します。ごゆっくりお休みください』

「ああ、すまん。頼んだ、光」

光の言葉に俺は敷いてあつた布団に横になり意識を手放した。

無茶はするもんじゃないな……

side out

side 第3者視点

竜馬は死んだように眠り始めた。

指先すら動かさずに……

それもそうだろう。

変身していたとはいえヴリトラの両翼を失い大量の出血。さらにその状態で海水に浸かり軽度だがショック状態。そしてとどめに背中を凍結させての止血。むしろこの程度で済んだ事に感嘆すら覚えられる。

『マスターは大丈夫でしょうか……』

『大丈夫です。マスターはすぐに元気になります』

不安そうな光の言葉に無々はきっぱりと言いつつ放った。その言葉には信頼と自身に満ちていた。

「うっ……！？」

『マスター！？』

不意に竜馬が呻く。それに驚き光が叫ぶ。

『光、落ち着いてください。……どうやら魔まされているようです』  
『ど、どうしたら……』

無々は光を落ち着かせ竜馬の状態を説明した。一方、光は混乱している。

『光、人間状態になってください。その後、そこにあるタオルを濡らしてマスターの額へ』

「は、はい！！」

無々の言葉に光は少女の姿になった。そして部屋の水道に向かいタオルを濡らす。

「こ、これで大丈夫ですね？」  
『いえ、まだですよ。……それよりも光、あなた普段と大分違くないですか？』

竜馬の額にタオルを置きホツとしている光に無々は言った。

確かに竜馬の意識がある時等の光の雰囲気と現在の雰囲気がまるで違っている。

「え、えつと…マスターと喋るのに緊張しちゃって…その…あつ…  
／／／／／／」  
『なるほど…』

光は赤くなりながら話すのが徐々に語尾が小さくなっていった。

光の言葉に無々は納得した様に呟いた。

『さて、今はマスターの看病です。額のタオルはこまめに取り替えてください』  
「はい！！」

無々の言葉に光は頷いた。

## 極雷の大槍（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想ありがとうございます。

フレイス様、月光閃火様、ルシフェル様、妖気様感想ありがとうございます。

竜王「ふう…今日は特に難しかった」

雪「と言うかお兄ちゃんは大丈夫なの？」

竜馬「……………」

竜王「返事が無い、ただのしかb……………」

竜馬「言わせねえよ！！！！」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所よりキャラ口と早苗が来ました」

キャラ口「どうかしたんですか？」

竜王「いや、竜馬がイライラしてるんだよ」

竜馬「お・ま・え・が原因だろうが！！！！」

早苗「まあまあ落ち着いてください」

「やあ、引導を渡しに来たよ」

竜王「お？妖気様の所よりミイラが来ました」

竜馬「は！？」

竜王「あゝ…戦うのは良いけどここでやらないでくれ」

ミイラ「分かった」

雪「お兄ちゃん大丈夫かな？」

竜王「まあ…大丈夫だろ……………多分」

キャロ「最後の方聞こえましたよ！？」

早苗「逃げてください！！！！」

月光閃火「大丈夫だ。竜馬を信じていればな」

〔第四訓練部屋〕

竜馬「ちよっ！？蝙蝠が！？」

ミイラ「避けるなよ。めんどくさくなる」

竜馬「避けなきゃ死ぬから！！」

ミイラ「だから引導を渡しに来たって言っただろ」

〈雑談所〉

竜王「そろそろ締めるよ〜」

雪「いきなりだね!？」

竜王「あ、それと最近いろいろとごたつくので連日投稿は難しいです。四月からは短期大学が始まりますので……」

月光閃火「だからか……」

竜王「はい、闇を狩る少年続きます」



## 過去の傷

side 魔神竜馬

気が付けば俺は立っていた。

ここは…

「俺の元いた世界…？」

でも、何か変だ…

俺は近くにあった店の近くに向かい首を傾げた。

「この店は確か…俺が小学4年生の時に潰れたはず…」

そう呟き俺は周囲を見渡した。

良く見れば周囲の景色は微妙に古いものだった。

「ん？」

不意に俺は走っていく子供たちを見つけた。

子供たちにはどこかしら見覚えがあった。

「早く行こうよ！」

「待ってよ！！竜馬君！！」

！？

子供の言葉に俺は驚き子供の顔を凝視した。

「彰宏…？それに健太、瑞穂、結衣…？」

俺は子供たちの顔を見て友達の名前を呟いた。  
また…

「元の世界… 4年生より前… 5人…」

これまでの情報を俺は呟いた。

なんだ？

何があつた？

「うつ… …！？」

俺は頭痛に呻き膝をついた。

『俺… …んでも… …だか… …』

『ば… …ろ… …！』

不意に誰かの声が聞こえた気がした。

だがノイズが多くて聞きとれなかった。

「今の… …は… …？」

何故か判らないがこれ以上この場所にはならない気がした。

俺は立ちあがり歩き始めた。

「そつだ」

そう呟き俺は学校に向かった。

学校に着き校舎を見た。

「人がいない… …？」

校舎の中に入り俺は眩いた。

どう言う事だ？

いくら休日とはいえ教師が1人くらいはいてもおかしくないはずだが…

「ん？日付が…三月三十日か」

春休みの後半か。

ッ！？

またか！？

『早……け……！』

『竜…君……ぬこ……い……！』

先程とは違う言葉だったがノイズによってやはり詳しくは聞きとれなかった。

「なんなんだ…この腹の奥底から冷えてくるような感覚は…」

俺は軽く身震いし誰もいない学校を後にした。

その後も様々な場所を歩き回ったが人がいつころに見当たらなかった。

「最後がここか…」

俺は平凡的な一軒家の前で眩いた。

自分の家を最後に見るとはな…

「ぐぐっ！？」





え……………？

俺は今、なんて言った…？

「思い…出したく…ない…？」

どう言う事だよ……………

不意に小さい俺が動き始めた。

虚ろな瞳のまま電話の受話器を取り110番を押し警察を呼んだ。

「……………た。……………た。……………た。……………た。」

小さな俺は再び虚空を見つめ何かを呟き始めた。

俺はゆっくりと近づき呟いている言葉を聞いた。

「知らない子供が死んでいた。知らない子供が死んでいた。知らない

子供が死んでいた。……………」

「……………！！……………！！……………！！……………！！……………！！……………」

俺は……

自分からこの記憶を消そうとしていたのか……  
不意に俺の脚を何かが掴んだ。

「ひっ！！！???」

見ればそれは血まみれの四人の友達だった。

「どう……して、忘……れてた……の……?」

「私達……友……達……でしょ?」

「ねえ……竜……馬……君」

「痛いよ……とて……も、痛……いよ……」

友達はゆっくりと俺に這いずりよってきた。  
皆……

「ごめん……なさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

俺は目を瞑り耳を塞ぎ謝り続けた。

こんなことで許されるはずはないだろうが……

side out

side 第3者視点

「無々さん!!マスターが!!!」

『落ち着いてください。どうやらダメージが大きかったせいで軽い走馬灯を見ているようです』

竜馬が謝り続けているのを見て光は叫び、無々は冷静に分析した。  
良く見れば竜馬の閉じられた目からは涙が流れていた。





## 過去の傷（後書き）

～霊使い達の雑談～

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、刀鍛冶様、妖気様、フレイス様、月光閃火様、空刀様感想ありがとうございます。

妖気様より竜馬に十字架を、

空刀様より後書きメンバーにモンハン3とPSPを、

いただきました。

竜王「今回はシリアスです」

月光閃火「これが竜馬の過去か…」

「こんにちは」

竜王「あ、フレイス様の所よりユウキとティアナが来ました」

ティアナ「ユウキ」

ユウキ「ちよっ！？ティアー！！今回は空気を読んで！！」

竜王「流石に今回は…ね」

～第四訓練部屋～

竜馬「ん？十字架？これで！！」

ミイラ「どうした？行くぞー！」

竜馬「これでも喰らえー！」

ミイラ「それがどうした？」

竜馬「な！？効果なし！？」

〈雑談所〉

「こんにちは」

竜王「あ、空刀様の所より空刀様・瞬・聖夜・乱太が来ました」

乱太「竜馬にこんな過去があつたのか…」

聖夜「今回は何だか鬱ルートな感じですね」

瞬「目の前で友達が殺されてたらな」

竜王「むしろ狂わなければ異常だから」

空刀「確かに…」

ユウキ「あんな事をする奴は許せない！！」

ティアナ「ええ、絶対に許しちゃいけないわ」

竜王「締めます。闇を狩る少年続きます」



忘れない…

side 第3者視点

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

うわ言の様に眠りながら何度も竜馬は謝り続けていた。

その隣では光が竜馬の額のタオルを濡らしていた。

「マスター……」

「……光、雪を呼んで来てください。そうすればあなたの負担が減ります」

タオルを乗せ不安そうに竜馬を見つめる光に無々は言った。

「分かりました。行ってきます」

そう言っつて光は部屋から出ていった。

side 魔神雪

「お兄ちゃんどうしたんだろう」

旅館を見つめながら私は呟きました。  
すると一人の少女が走って来ました。

「どっつしたの？光」

走りよつてきた光に周囲の視線が集まりました。

「マスターの看病を手伝ってほしいんです」  
「お兄ちゃんのこと……って看病!？」

「どう言う事!？」

不意にクラスメイト達が集まってきました。

「何々? どうかしたの?」

「あれ? 雪ちゃん、その子誰?」

クラスメイトは光を見て口々に尋ねてきました。

「急ぐから説明出来ない!!」

そう言っただけで私は走り出しました。

光も私を追って走っています。

そしてお兄ちゃんがいる部屋に入りました。

「お兄ちゃん……!!!!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

部屋に入った途端、お兄ちゃんの謝罪の言葉が呪詛のように耳に届きました。

「そっか……」

「思い出しちゃったんだね……」

『雪? 思い出したとはどういう事ですか?』

私の言葉に無々が尋ねてきました。

「……詳しくは私の口からは言えないよ。でも一つだけ、お兄ちゃんは小さい頃の記憶を少しだけ消していたの。でも、今それが元に戻っている」

『記憶を消すほどの心的外傷トラウマですか？』

無々の言葉に私は頷いた。

ともあれこれは危ない状態だね。

「無々、お兄ちゃんを起こせない？もしくはお兄ちゃんの見ている夢を別の物にすり替えるか……」

『……どちらも難しいですね。前者は眠り、というよりも意識が深いところに潜っているようなので。後者は私にそういった機能がありません』

私の問いに無々は答えました。  
どうしたら……

「あの……私がマスターの精神に介入しましょうか？」

考え込む私に光が話し掛けてきました。

「出来るの!？」

「はい、私の魔法本体はマスターの精神と結合リンクしています。ですのでそれをたどればマスターの精神に介入出来るはずですよ」

私は驚き光を見ました。

「お願い!!!急いでお兄ちゃんを起こして!!!」

「分かりました!」

私の言葉に光は頷き腕輪になりました。

side out

side 光

ここがマスターの精神ですね。

薄暗い迷宮を見回し私は思いました。

「早くマスターの元に向かわなくては」

そう呟いて私は走りだしました。

side out

side 第3者視点

薄暗い迷宮を走る光は不意に視線の様なものを感じ足を止めた。

「……………!?!」

周囲を見回すが見えるのは迷宮の壁ばかり……………では無かった。

光の走ってきた道に一人の少年が体育座りで座りながら見つめてきていたのだ。

「マ…マスター……………?」

「……………」

光の言葉に少年は何も答えずに消えていった。  
体勢も変えず、音も立てずに……………

「今のは……………」

少年の消えた空間を見つめ光は呟いた。

どうやら先程の竜馬似の少年が気になるようだ。

「……………今はマスターの元に向かうのが先ですね」

しばし考え顔をあげ光はそう言った。

そして再び走り始めた。

side out

side 魔神竜馬

何も見たくない、聞きたくない、存在したくない……………

両手で耳を塞ぎ目を瞑り身体を縮めこんでいた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………」

どれだけ耳を塞いでも聞こえてくる呼び声……………

どれだけ堅く目を瞑っても浮かぶ血まみれの友達の姿……………

「許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して許して……………」

耳を引き千切れれば聞こえなくなるのかな……………

目を潰せば見えなくなるのかな……………

頭を壊せば何も考えなくてすむのかな……………

俺はゆっくりと手を動かし親指を立て勢いよく目に突き立てた……………



……はずだった。

「くうっ……」

俺の目に親指が突き刺さる直前に横から手が伸び遮った。  
手の主は痛みに呻いた。



俺の言葉を遮り光は叫んだ。

「なんだと!?!」

「マスター! 目を潰せば事実が無くなるんですか! それはずただの逃げです!」

怒鳴り返したが光の激昂に俺は思わず目を逸らしてしまった。

「だが……俺のせいで俺の友達が……」

「だから!! あなたが死んでその事実は無くなるんですか!! 結局はあなたが逃げたいだけでしょう!!」

光の言葉が俺に突き刺さる……

俺が……逃げる……

「マスター、過ぎた事を悔やみ、自分を責め、立ち止まる事は誰にでも出来ます。ですが、そこでその辛さに押し潰されて死ぬ事はただの逃げです。あなたがするべき事は自分の悔しさを踏み締めて絶対に忘れない事です」

諭すように光は言った。

絶対に忘れない……か。

「ふん……仲間気付かされたか」

「誰だ!?!」

不意に光以外の声が聞こえてきた。  
するといつの間にか俺にそっくりな女が現れた。

「誰だ、とはご挨拶な。前にも会ったでしょうに」

「前にも?.....まさかフェンリルの時の.....?」

俺の言葉に女は頷いた。

マジかよ...

「マスター、この方は?」

「もう1人の俺...らしい」

光の問いに俺は答えた。

「ですが.....女性ですよ?」

「ああ...分かってる」

光の疑問は最もだ。

「久しぶりだね、私」

「ああ、久しぶり...だな。つーかなんで女!?!」

俺はもう1人の俺に叫んだ。

「ふん、気にするな。些細なことだ。それに、もう悩みは吹っ切れたようだな」

「まあな、光のお陰だ」

もう1人の俺の言葉に俺は光を見て答えた。

その言葉にもう1人の俺は無言で聞いていた。

「そうか...なら一つだけ良い事を教えてやろう。お前の本質は?不  
死鳥?では無い.....もっと強力で凶悪、最凶にして最狂...そんな本  
質<sup>から</sup>だよ」

「俺の本質…？」

もう1人の俺は笑いながら言った。  
どう言う事だ？

「お前の使う？不死鳥？の変身魔法。その魔法は本当の力では無い、  
本当の力の欠片だ」

「フェニックスが欠片…？」

そう言ってもう1人の俺は消えた。

「マスター、忘れないでください。あなたが死んで悲しむ人がいる  
事を…さあ、目を覚ましましょう」

「ああ、絶対に忘れない。俺の悔しさも、俺が守れなかった仲間の  
事も、そして…俺が死んで悲しむ人がいる事も…」

そして周囲が光に包まれていった。

side out

side？虚無と無限？無々

どうやら落ち着いたようですね。

マスターの脈拍などを測り私はそう思いました。

「無々、お兄ちゃんはどう？」

『大丈夫です。どうやら落ち着いたようですので』

雪の言葉に私は答えました。

不意に光が人間状態に戻りました。

「光！お兄ちゃんは…！」

「大丈夫です。マスターは乗り越えました」

雪の問いに光は笑顔で答えました。  
乗り越えた…つまりもう大丈夫ですね。

「ん……」

その時マスターが小さく声を発しました。

side out

side 魔神竜馬

ん!?

イタ!?

そして重い!?

「うう……って、なんだよ!?!」

「お兄ちゃん!?!?!」

目を開けると俺の上に雪が乗っかり抱きついていた。

「降りろ!?!?!?!」

「きゃー」

俺が怒鳴ると雪は笑いながら降りた。  
つたく。

「マスター、大丈夫ですか?」

「大丈夫だ。俺は決めたからな」

無々の言葉に俺は頷いた。

そうだ。

決めたんだ。

「絶対に忘れない……………」

俺は小さく誰にも聞こえないように呟いた。

忘れない…（後書き）

〈霊使い達の雑談〉

感想と贈り物ありがとうございます。

フレイス様、ルシフェル様、妖気様、月光閃火様、刀鍛冶様、空刀様、マーボー様感想ありがとうございます。

妖気様より後書きにいる全員にロールケーキを、  
刀鍛冶様より後書きにいる全員に『新約 とある魔術の禁書目録』  
を、

いただきました。

〈第四訓練部屋〉

竜馬「流石に死ぬ!!」

ミイラ「さつさと死ぬ!!」

「させるか!!」

ミイラ「!？」 右腕が爆ぜた

竜馬「来也!？」

来也「助けに来たぞ」

〈雑談所〉

竜王「ん??? 第四訓練部屋? に転移反応?... ああ、妖気様の所から



来也が来たようです」

月光閃火「…うん、やっぱり『とあ禁』は面白いな」

「お邪魔します」

竜王「あ、フレイス様の所より映姫と妖夢と早苗が来ました」

妖夢「みよんって呼ばれていません!!」

早苗「泣くほどですか?」

映姫「竜馬はどこですか?」

竜王「竜馬なら?第四訓練部屋?でバトル中だよ」

映姫「そうですか、では終わり次第お話でもしましょう」

早苗「ところでこのロールケーキは食べてもいいんですか?」

竜王「良いよ」

〈第四訓練部屋〉

竜馬「おらああああああああ!!……!!……!!……!!……!!」

来也「はああああああああ!!……!!……!!……!!……!!」

ミイラ「甘い!……!!」

竜馬・来也「ぐああああああああ!!……!!……!!……!!……!!……!!」

ミイラ「死ね」

竜馬「断る!!!」

〈雑談所〉

竜王「なんだかなあ…仕方が無い。？作者権限？発動。？気絶？」

月光閃火「そんな事ばっかしてないか？」

妖夢「？第四訓練部屋？の三人が気絶しましたよ!？」

映姫「これではお話できませんね。仕方がありません。竜馬が起きるまで休暇を引き延ばしましょう」

早苗「出来るんですか!？」

竜王「まあ、次までには起きてるよ。闇を狩る少年続きます」

## 男同士(?)の約束(前書き)

新しく別の小説のアイデアが大量に出てきます。

遊戯王や怪物王女、アクセル・ワールド等…

まあ、他にも短編が思いついて来ていますね。

機会があったら書こうと思います。

では、本編をどうぞ。

## 男同士(?)の約束

side 魔神竜馬

どうやら大分寝てたみたいだな…  
外の景色を見て俺はそう結論付けた。

「…………お兄ちゃん、どうするの?」

不意に雪がまじめな口調で聞いてきた。

「どうするのって何をだ?」

「はぐらかさないで。思い出したんでしょ!!」

俺が尋ねると雪は口調を荒げて言った。

ああ…………

「そうか、俺が何も違和感を感じなかったのは、何も忘れていただけじゃないんだな?」

「……………」

俺の言葉に雪は静かに頷いた。

おそらく雪が俺の記憶が戻らないように事件の事を隠し続けたのだらう。

「ありがとうな。克服した訳じゃないけど俺は大丈夫だ」

「…………お兄ちゃん」

そう言って雪は俺にしがみついてきた。

どうやら泣いているらしく嗚咽が聞こえてくる。

「ほら、もうこんな時間だ。晩ご飯を食べに行こう?」  
「ん……でも、もう少しだけお願い」

俺の言葉に雪はしがみついたまま頷きそう言った。  
仕方が無いな。

俺はしばらくの間雪の頭を撫でていた。

side out

side 第3者視点

「あ、竜馬。昼間、途中からいなかったけどどこに行っていたんだ?」

「少し疲れたから寝てた」

一夏の問いに竜馬はさらりと嘘を答える。

その横には先程竜馬にしがみついたのを思い出して恥ずかしくなってきたのか顔の赤い雪がいた。

「お前はどこに行くんだ?」

「ん?汗をかいたからもう一回風呂に行こうと思って」

竜馬が聞くと一夏は風呂場を指差し言った。

「風呂か…よし、俺も入るかな」

「じゃあ私はお兄ちゃん部屋の待ってる」

竜馬が呟くと雪は素早く答えた。

「あ、だったら俺達の部屋に行っていたらどうだ?今、千冬姉と篁達がいるんだ」

「ん〜…まあ、面白そうだし行くよ。待ってるからね？お兄ちゃん」

そう言っつて雪は歩いていった。

その様子に軽く苦笑しながら竜馬は風呂場に向かった。

side out

side 織斑一夏

現在、俺と竜馬は服を脱いでいる。

…………… 竜馬っつて本当に男か？

隣にいる竜馬を見ながら俺はそう思った。

「……………一夏、かなり失礼なことを考えていないか？」

「い！？いや、なにも！？」

不意に竜馬が振り向き聞いてきた。

勘が鋭いな…

「なら良いが…」

そう言っつて竜馬は風呂を見に行った。

ふう…

「さっさと風呂に入ろう…」

そう呟いて俺は風呂に向かった。

「……………なあ、その背中傷ってどうしたんだ？」

「ん？これか？」

竜馬の背中に二筋の切り傷みたいなものを見つけ俺は尋ねた。

「ん〜…良く分からないな。たぶん翼の跡だと思っぞ」  
「翼…？」

竜馬の言葉に俺は首を傾げた。  
翼なんてあつたかな？

「まあ、気にするな。ところで一夏、お前好きな奴とかいないのか？」

「なあっ！？／／／／／／／」

いきなりの竜馬の言葉に俺は驚いた。  
なんだって千冬姉と同じ質問を！？

「い、いきなりなんだよ！？」

「いや、なんとなく…な。……………一夏、俺はさ……………お前が好きなんだよな」

……は！？え！？

風呂の天井を眺めながら竜馬は静かに呟いた。  
俺を好き！？！？

「い、いや……！竜馬！？俺達は男同士だ……」

「他にも、千冬が好きだ。箒、セシリア、鈴音、ラウラ、シャルロ  
ット、雪、真耶……皆好きだな」

……なんだ、そっちの好きか。

竜馬の言葉の続きを聞いて俺は落ち着いた。

「それは俺だつて同じだぞ？」

「……そうだな。だから一夏、もし俺がいなくなっても全員を守り  
抜けよ。これは男同士の約束だ」

竜馬は俺の目を真っ直ぐに見ながら言った。

「ああ、分かった。約束だ」

「んじゃ、俺は出るよ。一夏はどうする？」



不意に表情を崩し竜馬は聞いてきた。  
うん……

「……まだ少しだけ入ってるよ」  
「そうか、のぼせるなよ？」

そう言つて竜馬は風呂から出て行つた。  
水気を含んだ髪を揺らしながら歩く後ろ姿はやはり男には見えなかつた。

side out  
side 魔神竜馬

…なんだろう？

風呂から出る時にまた失礼なことを思われた気がした。

「つと一夏たちの部屋に雪がいるんだつたな」

そう呟き俺は部屋に向かつた。

「じゃあ千冬も磨かなきゃね」  
「なっ！？わ、私は別に！！」

何を騒いでいるんだ？  
しかも千冬まで一緒になつて。

「何を騒いでいるんだ」

俺は呆れながらドアを開けた。

「あ、お兄ちゃん」

「一応は教師がいるんだから静かにしろよ」

俺は雪に言った。

何故か千冬が頂垂れていたが……

「どうした？」

「……いや、なんでもない」

俺が問いかけると千冬は首を横に振った。

……まあ、なんでもないなら良いか。

「ところでこいつらはどうしたんだ？」

呆ぼうけている筈、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラを順番に指差し俺は尋ねた。

「ん……たぶん千冬が慌てたのを見て驚いてるんじゃない？」

「……あゝ。なんか納得した」

雪の言葉に俺は頷いた。

すると千冬がさらに落ち込んでいた。

「ふう……ってどうしたんだ？」

「おお、一夏か」

ドアを開けて一夏が入ってきた。

まあ、この光景を見たらそう思うよな。

「まあ、気にすんな」

「あ、ああ」

その後、俺達は他愛のない話をし一日が終了した。

男同士(?)の約束(後書き)

♪ 霊使い達の雑談♪

フレイス様、バラランシャ様、妖気様、月光閃火様、刀鍛冶様、ルシフェル様、マーボー様、空刀様感想ありがとうございます。

妖気様より竜馬にフェイトと竜馬のキスシーンの写真を、

いただきました。

映姫「いいですか、そもそも貴方は……」

竜馬「うっう」

竜王「きっちり絞られてるな」

雪「あれ？それは？」

竜王「妖気様から貰った写真」 雪に渡す

雪「……………」 背後に黒いオーラが現れる

竜王「映姫の説教が終わったら殺れよ」

雪「当然」

「お邪魔します」

竜王「あ、フレイス様の所よりシンとキャロが来ました」



キャロ「私もです」

シン「あの4人は良いんですか？」

竜王・月光閃火・キャロ「大丈夫だ、問題無い」

シン「え……………」

## 天才と天災

side 第3者視点

合宿二日目。

四方を切り立った崖に囲まれた秘密のビーチの様な場所にIS学園の生徒達は集まっている。

二日目は丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りを行うのだ。

「篠ノ之<sup>しのの</sup>。お前はちよつとこっちに來い」

「はい」

千冬に呼ばれ等はそちらに向かう。

その近くで竜馬は光と一緒に水辺で遊んでいる。

「どうだ？光」

「はい、冷たすぎず熱すぎず、とてもちょうど良いです」

竜馬の問いに光は笑顔で答えた。

その光景を見て雪が遊ぼうとしたが千冬にバレたら班全体に被害が来るので班員達は全力をもって押さえ込んでいた。

「……………さて、篠ノ之。お前には今日から専用……………」

「ちーちゃ~~~~ん!!!!!!」

不意に砂煙を上げながら人影が千冬に向かって走ってくる。  
しかもその人影はウサミミを着けていた。

「……………束<sup>たばね</sup>」

「誰だ？」

人影を見て筈は顔を少しだけ顰めた。

千冬の呟きが聞こえたのか竜馬は首を傾げた。

side 魔神竜馬

走って来ている人影を見て千冬が小さく呟いたが…

あんな恰好で良く走れるな。

人影の恰好は青と白のワンピースで頭に機械のウサ耳を着けていた。  
1人不思議の国のアリスってところか？

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ……ぶへっ」

女性はそう言いながら千冬に抱きつこうとしたが顔面を掴まれて固定された。

言動からして変態か？

「うるさいぞ、束……竜馬、こいつを遠くに飛ばせ。私が許可する」「ん？良いのか？」

千冬言葉に周囲に確認をとるも全員が啞然としており気付かない。千冬が頷いているから良いのか？

そう思っていると千冬が女性を放り投げてきた。

「俺は知らんぞ。淵冥脚えんめいきやく!!!」

「げぶううううううう!!!……?」

片足を軸にして俺は女性に足底で蹴りを放った。  
女性は叫びながら放物線を描き海えがに落ちた。



「良くやった竜馬」

「知り合いみたいだったが……」

女性が着水した場所を眺めながら千冬はサムズアップした。

千冬にしては珍しい行為だが俺としてはさっきの人が千冬の知り合いだったことが気になる……

「むむむ…ひどいよ、ちーちゃん」

「うお!？」

いつの間にやら先程俺が蹴り放った女性が背後に立っていた。

「千冬…この人は？」

「彼ノ之東、彼ノ之の姉だ」

篤の姉？

えっと…

「ああ。確かISの開発者だっけ？」

「そうだ」

似て無い姉妹だな…

ふと気付けば束が篤に日本刀の鞘で殴られていた。

「……………千冬、何かあいつと関わりたくないんだけど」

「諦める、おそらくお前の相棒パートナーに興味を持つだろうからな」

俺の言葉に千冬は静かに宣言をした。

やだなあ…

俺は小さくため息を吐いた。

「もう良いや、遊ぼう光」  
「はい」

諦めて俺は光の元に向かった。

その後も束が色々とか何を言っただ騒がせたらしいが俺には関係が無い。

side out

side 第3者視点

「ところでちーちゃん」

「なんだ」

不思議そうに竜馬を見ながら束が口を開いた。

「あそこで女の子と遊んでいる痛い子ってだ！……痛い！？痛いよ！？」

束の口から『痛い子』と言う単語が出た瞬間に千冬は束の頭を掴み力を込めていた。

よほど力を込めているのか指がめり込んでいる。

「痛い子言っな、あいつはおそらく1人で全ISを破壊できるんだぞ」

「！？それはビックリ！！」

いつの間にか千冬のアイアンクローを脱出した束は大袈裟に驚いていた。

しかしそれも一瞬ですぐさま科学者の瞳に変化する。

「ちーちゃんにそこまで言わせる人間…面白そうだね」

「……何をするか知らんがほどほどにしておけ」

束の言葉に千冬は呆れながら言った。

「あの…それで、頼んでおいたものは……？」

ややためらいがちに箒が尋ねた。

それを聞いた束の瞳が輝く。

「うっふっふっ。それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ  
！！」

そう言つて束は上空を真っ直ぐ指差した。

それにつられて箒も、そして他の生徒たちも空を見上げる。

しかし竜馬と光、そしていつの間に着替えたのか水着の雪は気にせず  
に遊んでいた。

すると突然、大きな衝撃と轟音を響かせながら金属の塊が落下して  
きた。

「ひゃ！？」

音と衝撃に驚き光が小さく飛び上がる。

その光景に竜馬は苦笑していた。

side out

side 魔神竜馬

「なんだあれ？」

「あれは箒のIS、『紅椿』だよ」

音と衝撃の正体に目を向け俺は呟いた。  
紅椿？

「ふ〜ん…ん？」

ふと耳を澄ますと生徒たちの中からざわめきが聞こえた。

「あの専用機つて筱ノ之さんがもらえるの……？身内っただけで」  
「だよねえ。なんかずるいよねえ」

不平等ってか？

聞こえた言葉に俺は苦笑した。

「おやおや、歴史の勉強をしたことが無いのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度も無いよ」

「だろうな。だけど人は平等を求める。それがどちらにとっても酷く傲慢な事でもな」

束の言葉に俺は答えた。

俺が答えた事が意外なのか全員が俺を見た。

「どちらにとつても、ってどういう意味かな？」

「そのままの意味だ。力の無いモノが力の有るモノに対して唱える平等。力の有るモノが力の無いモノに対して唱える平等。これを傲慢と言わずに何と言う？」

興味深そうに束が尋ねてきた。

その間も手が止まってないのが凄いな。

「ふ〜ん…」

「まあ、くだらない話は終わりだ。で？幕の方は終わったのか？」

無理やりにも会話を終了させて俺は尋ねた。

「まだのようです」

「そうか」

まあ、指して興味もそこまで無いし良いか。  
適当に一夏あたりを生贄にして脱出するか。

「つーわけで後は任せたぞ一夏」

「は！？ちょ！？ええ！？」

俺は素早く一夏の背後に回り込み束の前に運んだ。

さて、光と遊ぶか。

……その前に雪を班に戻さないとな。

## 天才と天災（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

妖気様、刀鍛冶様、ルシフェル様、空刀様、フレイス様、月光閃火様、銃王 海さん感想ありがとうございます。

銃王 海さんより激辛タルトを、

空刀様よりフリーダムストライクガンダムを、

いただきました。

映姫「……………以上です。これからは気をつけなさい」

竜馬「……………はい」

竜王「お、終わったか。じゃあこれお土産ね」 ケーキと紅茶の葉を渡す

映姫「ありがとうございます」

竜馬「終わった」

雪「ワケナイヨ」

竜馬「!?!」

竜王「それじゃあ次は雪による竜馬の処刑ショー」

竜馬「断r…って何だこれは!？」

ミイラ「逃がさない」

雪「ナイスだよ!！」

月光閃火「おや、逃走方法が全て潰されたみたいだな」

竜王「まあ、今回は運が無かったって事で」

「こんにちはー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

竜王「ん?空刀様の所より空刀様・伊吹萃香・チルノ・遼・空が来ました」

遼・空・チルノ「我等、チーム?!?!?!?!?!」  
「何故かバツクで爆発が起こる」

竜王「……チルノ、背中が軽く溶けてるぞ」

チルノ「しまった!！」

萃香「酒が無いぞ」

空刀「なんだろこれ?」  
「激辛タルトを見て言った」

竜王「あ、それ食べたら死ぬらしいですよ」

空刀「兵器!？」

「お邪魔します」

竜王「つと今度は、フレイス様の所よりユウキ、ティアナ、早苗、こいしが来ました」

ユウキ「早苗……………」

早苗「仕方が無いじゃないですか!!」

こいし「能力使ってるんだけどね?」

ティアナ「なんかもう色々諦めてきたわ…」

チルノ「ぎゃあああああああああああ!!……………!!」

竜王「は!?何だ!?!…つてヲイ。誰が喰わせた?」 空になつて  
いる激辛タルトの皿とチルノを指差す

遼「いや、美味しそうだよつて言ったらいきなり…」

竜王「つまりは話を聞かずに自爆か…」

「うわあああああああああああ!!……………!!……………!!」

竜馬「え!?むぎゆ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」 上空から落ちて  
きた11人に潰される



竜王「おゝ、こりやまた凄いな。銃王 海さんの所より日向秀樹・山田麻耶・平沢憂・御坂美琴・鳴海まどか・折原空・木下優子・岩沢まさみ・アイク・平賀才人・坂井悠二が来ました」

ユウキ「竜馬が潰されたが……」

ティアナ「大丈夫なのかしら？」

悠二「いたたた…ご、ごめん!!」 積み重ねられた一番上にいた

真耶「魔神先生!? 魔神先生!?」 竜馬の真上に落下した

美琴「早くどきなさいよ!!!!」 上下の人間に電撃を流す

まどか「あばばばあばばば!?!!?!?!?!」 電撃の被害者1

空「きゃあああああああ!!!!!!!!!!」 電撃の被害者2

憂「きゃあああ!!!!」 悠二の手がちょうど胸に当たっていた

アイク「早くどいてくれ!!!!!!」

才人「そんな事を言われても!!」 落ちた拍子にアイクと抱き合う形で潰されている

優子「……………いけるわ!!」 アイクと才人の姿を上から見ていた

まさみ「ギターが!!!!ギターが!!!!」 ギターが壊れていないか



**どたばた騒ぎと事件（前書き）**

久々の更新です。

遅れてしまつて申し訳ありませんでした。

## どたばた騒ぎと事件

side 第3者視点

「雪、班に戻れ」

「え〜…もうすぐ授業どころじゃ無くなるのに?」

竜馬の言葉に雪は不服そうに答えた。

雪の言葉に竜馬は首を傾げた。

「どう言う事だ?」

「それは〜…って、お兄ちゃん。なんかミサイルが飛んできてるよ?」

見れば竜馬に向かって20から30のミサイルが飛んできていた。

「はっ!?!」

『形状変化しますか?』

驚く竜馬に無々は冷静に尋ねた。

その間に雪は離れていた。

side out

side 魔神竜馬

「頼む!形状は手甲!」

『了解しました。形状変化、<sup>マニプラー</sup>手甲』

俺の言葉に無々は手甲へと変化した。

とにかくここで爆発させたらまずい!

「?彩華・翠?！」

『?カートリッジ!瞬風 翠旋撫子』  
インスタントヌチゲ母ヲチオンティアンタウス  
ツウアイ

無々はカートリッジを2つロードした。

そして手甲が弾け俺の両腕に旋風が巻き起こる。

「?瞬風 翠旋撫子?!吹き飛べ!!!」  
しゅんぷう すいせんなでしこ

俺は旋風を操りミサイルを上空へと吹き飛ばした。  
あの位置なら被害は無いだろ。

「次!手甲から大鎌!」  
『了解しました。手甲から大鎌』  
マニファア ゼンジャ

無々は手甲から大鎌へと変化した。  
双銃だとミスが出来ないからな。

「?彩華・黄?！」  
『?カートリッジ。瞬雷 黄雷竜胆』  
モメンタンナヌイガフングゲーウァエンツイアン  
ツウアイ

無々はカートリッジを2つロードした。  
そして大鎌が爆ぜ雷の刃が形成された。

「?瞬雷 黄雷竜胆?!!」  
しゅんらい かつらいりんとん

俺は大鎌を振るい雷撃を飛び散らせた。  
大鎌を構え上空にあるミサイルを見据える。

「?竜雷閃空鎌・散?!!!!」  
りゅうらいせんくつれん ちり

大鎌を振るい大鎌に込められた雷をミサイルに向けて撃ち放った。刃状の雷はミサイルの広がる空間の中心に辿り着くと弾け周囲に雷を撒き散らした。

ミサイルは雷によって全て爆発した。

「おー！さすがちーちゃんが認めてるだけはあるね」

拍手が聞こえてきた方向を見るとそこには束が笑顔でこちらを見ていた。

「……何か用か」

「うん？ちーちゃんが認めるほどだからどれくらい強いのか気になつてね」

俺がウンザリしながら尋ねると束はウインクをしながら答えた。そんな理由で生徒達（こども）を巻き込もうとしたのかよ……

「ふ……ふふふ……千冬……束（こいつ）を吹き飛ばしても良いか……」

「構わん」

「ちよ！？ちーちゃんそこは助けてよー！」

俺は笑みを浮かべながら千冬に尋ねた。

千冬表情が若干強張っていたが気のせいだな……

「さあ、良く眠ったか？歯は磨いたか？飯は食ったか？遺書は残したか？家族への挨拶は済んだか？この世への挨拶は済んだか？部屋の隅でガタガタ震えるのは済んだか？自分の体への別れの挨拶は済んだか？ならば……死ね」

そう言つて俺は束へと大鎌を振り下ろした。

しかし束はその攻撃をかわし俺から距離を取った。

「おお、怖い怖い。何をそんなに怒っているのかな？」

「自分のやったことに対する危険性を考えやがれ！！！」

おどけた様子で言う束に俺は怒鳴った。

「やったこと？ただ単に君にミサイルを撃っただけだよ？」

「それが問題なんだ！！！」

再び俺は束に接近し大鎌を振るった。

束はそれをあつさりと避ける。

全力で攻撃してるんだぞ！？

「ん？わっかんないな」

「っっ！！！！！！！」

束の態度に俺は力を込めた。

「ぶっ潰さ」

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！竜馬先生っ！！！」

俺の言葉を遮り真耶が慌てた様子で走ってきた。

何だいったい……

「どうした？」

「こっ、こっ、これをつ！！！」

そう言いながら真耶は千冬に小型端末を手渡した。  
その画面を見て千冬の表情が曇った。

「どうした？」

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

特命任務！？

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働していた」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

真耶が何かを言おうとしたのを千冬は遮った。

その後、2人は手話で話し始めた。

全く分からねえ……

「ってアイツは……ちっ！逃げられたか！！」

束が立っていた場所を見るとすでにそこに束はいなかった。

「そ、そ、それでは、私は他の先生達にも連絡してきますのでっ！」

「了解した。 全員注目！！」

真耶が走り去ると千冬は手を叩いて生徒全員を振り向かせた。

俺は千冬の横に移動した。

光も俺の横にいる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え………？」

「ちゅ、中止？なんで？特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」



千冬の言葉に女子達はざわめいた。

「とつとと戻れ！以後、許可無く室外に出た者は我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「はっ、はっ、はっ！！！！」

千冬の一喝に女子達は姿勢を正し返事をした。

その姿は千冬の怒声に怯えているかのようでもあった。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボ―デヴィツヒ、<sup>ファン</sup>鳳！　それと、<sup>シス</sup>筱ノ之も来い」

「はいつ！！！！」

箒は妙に気合の入った返事をした。

これは……？魔狼転身？を覚えた時の俺と似ている？

「何事も無ければ良いが……」



竜王「つーか落ちてきた何人が気絶してるな」

「こんにちは」

竜王「ん？フレイス様の所より紫、シン、早苗が来ました」

紫「竜王、デュエルの事で相談があるのだけど…」

竜王「分かった。こっちの事は竜姫に任せる」

竜姫「分かったよ」

空刀「あれ？竜馬は？」

萃香「あそこで雪（状態）に抱き着かれて複雑な表情してるよ」

秀吉「竜馬はワシの仲間じゃな！」

ユーノ「なのは、恭也さんが気絶してるけど…」

なのは「起きてたらユーノ君を攻撃しようとするからちよつど良いの」

アンリエッタ「ルイズ、起きてくださいルイズ！」

結弦「銀河達まで…」

竜姫「気にせずお茶にしよう」

月光閃火「いただくよ」

シン「僕も貰います」

早苗「お茶よりも出番が欲しいです……」

遼「自分の欲望に忠実な……」

空・チルノ「うわあ!?!」

竜姫「あ、クロチャン（刀鍛冶）に貰ったゲーム？最初は驚くよね」

（別の場所）

紫「心配事？」

竜王「ああ、竜馬とユウキがデュエルする日がちょうど……」

紫「それは……一応の保険は用意しておきましょう」

竜王「ああ、頼む」

（雑談所）

竜姫「それじゃ？闇を狩る少年？続くよん」

作戦開始まで…

side 魔神竜馬

あの後、千冬達は旅館の宴会用の大座敷・風花の間に入っていった。どうして雪は呼ばれなかったのだろうか？

「無々、一応だが警戒をしておいてくれるか？」  
『分かりました』

俺が出来ることも無いし旅館の周りを警護してるかな。そう思い俺は旅館の外に出た。  
ん？

「……………はあ。なにをやっているんだ、雪」  
「あ、お兄ちゃん」

旅館の外に出て少し歩いた先に雪がいた。

「室内待機のはずだが？」  
「いやあ、なんで専用機を持っている私が呼ばれなかったのかが気になって、つい」

俺の問いに雪は舌を出して答えた。  
まったく…

「見逃してやるから早く部屋に戻れよ？」  
「はい」

俺の言葉に雪は返事をして旅館の横に回りISを起動して窓から部

屋に入っていった。

ああやって出てきたのか…

「って、あれは……千冬？」

雪が完全に部屋に戻ったのを確認し海を見ると千冬が立っていた。海を見ているのか。

「どうしたんだ？」

「竜馬か……何、自分が戦えないことが辛くてな」

俺が尋ねると千冬は悲しげに答えた。

成る程、教師という立場上戦いに行くことも出来ないし、仮に行けたとしてもISが無いから戦えないのか…

「確かに辛いな……」

「ああ……」

俺の呟きに千冬は短く答えた。

そういえば…

「一夏達はどうしたんだ？」

「作戦の内容は伝え終わったからな。作戦時刻まで自由にした」自由か。

一応様子を見てみるかな。

「無々、形状変化。形状はナイフで」

『了解しました。形状変化、ナイフ<sup>メイス</sup>』

俺の言葉に無々はナイフに変化した。

次は…

「ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

俺は呪文を唱えフェンリルに変身した。

潜って様子を見る必要は無いよな？

「えっと…？影見？」

俺が呟くと足元の影が起き上がり鏡のようになった。

「えっと…一夏は、っと。見つけた」

起き上がった影の鏡を操作して画面を変えていると岩場に座る一夏と箒を見つけた。

ラブコメ中だったか？

「千冬、なんだか一夏と箒が話しているみたいだぞ？」

「一夏と篠ノ之が？」

千冬言葉に俺は頷いた。

っと画面に変化が起きたな。

「あ………」

「？…どうかしたのか？」

画面を見て固まる俺に千冬が尋ねてきた。

「えっとだな？一夏が箒にキスをしそうになったところいつもの

4人が来てな……」

「ふむ、つまり？」

あくまでも冷静に俺は千冬に状況を説明していった。

「それでだな？4人がキレて一夏がもれなくブルー・ティアーズ、竜砲、盾殺し、ワイヤーブレードで襲われているんだよ……」

「バカ者共が……」

俺の言葉に千冬は頭を抱え呟いた。

「それで？一夏はどうなった？」

「ちよつと待つてくれ？えつと……あ、死んだ」

画面を見て俺は答えた。

画面には撃墜されて海に落ちていく一夏が映っていた。

「は？………一夏あああああ！?!?!？」

俺の言葉に千冬は一瞬呆けすぐに叫んだ。

「ば、場所はどこだ！」

「場所だな？………ん？ちよつと落ち着いてくれ」

場所の特定をしようと画面を見るとある人間が現れた。  
これは……

「俺………？」

「ど、どうした竜馬！早く場所の特定を……！」



疑問に思い俺は画面を動かし旅館の中のカレンダーを確認した。  
もしかして…

「……………あゝ、千冬。落ち着いてくれ」

「お、落ち着けるはずがないだろう！」

俺の言葉に千冬は若干顔を青ざめて叫び返した。  
とにかく事実を伝えないと。

「落ち着け、大丈夫だ、一夏は死んでないよ」

「これが落ち着いてなど！……………なに？」

千冬は俺の言葉を聞いて少しだけ落ち着いたのかこちらを見た。

「実はな？画面のカレンダーを見たら明日の日付だったんだよ。だから一夏は無事だ」

「そうか……………ん？ちょっと待て。明日の日付と言ったな？つまり一夏は明日死ぬのか！？」

そういえばそうだな。

千冬の言葉に俺は納得した。

「まあ、未来が分かったんだからなんとかするよ」

「あ、ああ。頼んだぞ？」

未来が見えたんだからなんとか防げるしな。

「にしても、まさか未来が見えるとはな」

俺は自分の影を見つめて呟いた。

影の中は自分が入らない限り時間軸が乱れるみたいだな。  
次からは気を付けよう。

side out

side 第3者視点

時刻は11時半。

空は晴れ渡り砂浜には一夏と箒が僅かに距離を置いて並んで立っている。

「来い、白式」くわい、びやくしき

「行くぞ、紅椿」いこぞ、べにつばき

2人の言葉に全身が光に包まれISアーマーが構成される。

PICによつて2人の身体は浮いている。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

作戦の性質上、移動のすべてを箒に任せるので、一夏は箒の背中に乗っかる形になるのだ。

そこに近づく人影が現れた。

「一夏、箒。気を付けるよ」

「竜馬、分かっているよ」

「私がいるのだから作戦は必ず成功します。安心してください」

近づく人影は竜馬だった。

竜馬の言葉に一夏は頷き、箒は大きく言った。

箒の様子に竜馬は顔を曇らせた。

「……………一夏、ちょっと来い」  
「あ、ああ。分かった」

竜馬は箒に気付かれないように一夏を近くに呼んだ。

「一夏、箒の動向に常に目を光らせておけ。今の箒は危険だ」  
「……………ああ、分かっている」

竜馬の言葉に一夏は頷き答えた。  
そう言って竜馬は2人から離れ旅館に戻っていった。

作戦開始まで…（後書き）

（霊使い達の雑談）

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、空刀様、カイ（海）・R・銃王さん、月光閃火様、妖気様感想ありがとうございます。

空刀様よりインフィニットジャスティスを、

カイ（海）・R・銃王さんより束ぶつ飛ばし用ロケランを、

いただきました。

竜王「さて、ここで報告します。現在ケータイで更新しているため後書きが書きにくくなっています。ですのでゲストで喋れない方が出るかもしれませんがご了承ください」

竜姫「お願いしまーす」

月光閃火「PCが壊れるとはな」

「邪魔するぞ」

竜王「あ、カイ（海）・R・銃王さんのところより大道克己が来ました」

竜姫「メモリってことはダブルだったよね？」

克己「ちょうど2人いるわけだから変身するか？」

竜王「出来んの!？」

竜姫「変身した〜い」

竜馬「ぶっ飛べ!!」

束「私は何度でも蘇る〜」

月光閃火「銀 か？」

竜王「あまり伏せ字の意味無い気がしますよ」

克己「これとこのメモリで……」

竜姫「ふんふん。なるほど〜」

空刀「どんどんカオスになっていく気がする……」

竜王「気にしないようにしましょう。闇を狩る少年、続きます」

銀の翼と紅の翼(前書き)

久々の更新、遅くなってしまいました申し訳ありませんでした！

## 銀の翼と紅の翼

side 魔神竜馬

飛んでいく二機のISを俺は見つめていた。

「無々、形状変化。決闘<sup>デュエル</sup>」

『了解しました。形状変化』

俺の言葉に無々はデュエルディスクに変化した。

「水に濡れると飛べなくなるから嫌なんだが……ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

呪文を唱え俺はフェニックスに変身した。

水鳥の羽根じゃないから墜ちれないな…

「竜馬！」

「千冬か、やっぱり心配だから行ってくるな？」

名前が呼ばれ後ろを見ると千冬が肩で息をしながら立っていた。走ってきたのか…

「……………」

「大丈夫だって、ちゃんと一夏と篝は守るから」

なにも言わずに見つめてくる千冬に俺は言った。  
絶対に2人は墜とさせない…

「……………だ」  
「え？」

千冬の口から小さく声が聞こえ俺は聞き返した。

「お前もだ！お前を含めた3人きっちり全員が帰ってこい！」

「千冬……………ああ、分かった！行ってくる！！」

そして俺は翼を羽ばたかせ上空に飛び上がり一夏達の向かった方向に向かった。

side out

side 第3者視点

「見えたぞ、一夏！」

「！！」

ハイパーセンサーの視覚情報によって目標

シルバリオ・ゴスヘル  
『銀の福音』の姿を

2人は捉えた。

『銀の福音』はその名に相応しく全身が銀色をしている。

そして何より異質なのが、頭部から生えた一対の巨大な翼だ。

「加速するぞ！目標に接触するのは10秒後だ。一夏、集中しろ！」

「ああ！」

筈はスラスタと展開装甲の出力を上げさらに加速していった。

その速度はすさまじく、高速で飛翔する福音との距離をぐんぐんと縮めていく。

「うおおおおっ！！！！」



一夏は零落白夜を発動し、それと同時に瞬間加速イグニッション・ブーストを行って間合いを一気に詰めた。

光の刃が銀の福音に触れる、その瞬間

「なっ!?!」

福音は最高速度のまま反転し後退の姿となって身構えた。驚いた一夏は一瞬、ほんの一瞬動きを止めてしまった。しかし、すぐに雪片式型を強く握りしめ接近をしようとした。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。『銀の鐘』シルバー・ベル、稼働開始」

「!?!」

オープンチャンネルから聞こえた抑揚のない機械音声に「明らかな敵意」を感じとり一夏は顔を強張らせた。そして数秒と経たずに事態は悪くなっていった。ぐりん、と。

いきなり福音が体を一回転させ、零落白夜の刃をわずか数ミリの精度で避ける。

それは慣性制御機能を標準搭載しているISであっても、かなり難度の高い操縦である。

「くっ……！あの翼が急加速をしているのか！？」

高出力の多方向推進装置マルチスラスターというのは他にも多く存在しているが、ここまで精密な急加速というのは類を見ない。

その事実に一夏は改めて『重要軍事機密』の意味を思い知った。

「一夏！！！」

「竜馬！？何でここに！？」

名前を呼ばれた一夏は竜馬がいることに驚いた。

「心配だったからな！」

「しかし、これは重要軍事機密では！？」

答える竜馬に箒は尋ねた。

「知るか。俺にとって国よりも仲間が大切だ！」

「な……！？」

竜馬の答えに箒は啞然としてしまった。

side out

side 魔神竜馬

あれが『銀の福音』……

不意に福音が何故か俺を見つめているような気がした。

………気のせいかな？

「一夏、箒。俺が……いや、俺達があいつの動きを止める。そこを2人で叩け！」

「俺……達ですか？」

「竜馬しかいないんじゃない……」

俺の言葉に2人は疑問を感じたらしい。  
説明するよりも見せた方が早いな。

「行くぜ、無々」

『はい！マスター！』

そして俺はデッキからカードを5枚引いた。  
よし、これならパチュリーを呼べる！

「？二重召喚？を發動！そして？ランサー・デーモン？？紅魔・小悪魔？を召喚！！」

「こあ〜！？」

いきなり空中に呼び出されたことに驚いたのか小悪魔さんは大きな声を出した。

「りよ、竜馬さん！？いきなり空中に呼び出さないでくださいよ！？」

「すみません、小悪魔さん」

小悪魔さんは慌てて飛び上がり俺に言った。

「小悪魔さん、パチュリーを呼ぶんでお願いします」

「はい、分かりました」

俺の言葉に小悪魔さんは頷いた。

………なんか、いつもこんな感じだな。

あとでなにか手伝えることがあったら手伝おう。

「？紅魔・小悪魔？の効果を発動！このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから閥属性のレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る！俺は？ジャイアント・オーク？を特殊召喚！！」  
「来てください！」

小悪魔さんが手招きをすると俺のデッキから光の玉が現れ場に出てきた。

光の玉は骨棍棒を持ったオークになった。  
これで準備はオツケー！

「レベル4？ランサー・デーモン？とレベル4？ジャイアント・オーク？にレベル4？紅魔・小悪魔？をチューニング！！」  
「パチュリー様をお願いします！」

小悪魔さんはそう言って光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「大いなる図書館の主よ、我が意に従って現れよ！其は七曜の魔女！！シンクロ召喚！！現れよ、？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？！！」

「久しぶりn……キャアアア！?!？」

パチュリーが現れたかと思ったらいきなり落ちていった。  
お願いしますってこう言うことかよ！

俺は慌てて、落ちていくパチュリーに追いつき抱き抱えた。

「すまん」

「つ、次からは気をつけてちょうだい……！」

俺はパチュリーの腰と足に手を添えて抱き抱え直し謝った。

「それで？私の力が必要なのかしら？」

「ああ、あいつの動きを止める」

パチュリーの問いに俺は福音を見て答えた。

「分かったわ。ちゃんと抱えててちょうだいね？」

「分かってるよ」

パチュリーは頷き言った。

レミリアやフランも召喚した方が良いのか？

「竜馬、私を海面近くまで運んでちょうだい」

「ん、分かった」

パチュリーの指示に従い俺は下降していった。

「海水…通常の水とは勝手が違うけど仕方がないわね」

「どうする気なんだ？」

パチュリーは海水を見て難しそうに呟いた。

そして俺の問いに微笑を浮かべた。

「知っているかしら？水ってダイヤモンドを切り裂けるのよ」

「それは、知っているが………って、まさか！？」

パチュリーの言わんとしていることを理解し俺は驚いた。

「ええ、翼を切り落とすわ」

「一応、中に人がいるから気を付けてくれよ？」

俺の言葉にパチュリーは「善処するわ」と呟き海面に立った。  
なら今の内に誰かを呼ぶか…

「ドロー！美鈴か…」

だったら、このカードとこのカードを…  
この間、約10秒くらいである。

「福音はあまり動いてない……………と云うよりはこちらを観察しているみたいだな。まあ、都合が良いけど」

空中には停滞しこちらを見ている福音がいた。  
その間に一夏と篤は啞然としていた。

大方、小悪魔さんやパチュリーが現れたことに驚いているのだろう。

「カードを1枚セット、さらに手札から？暗黒界の雷？を発動！さつきセットしたカードを破壊！破壊された？黄金の邪神像？の効果で場に邪神トークンを特殊召喚！そして？暗黒界の雷？の効果で手札を1枚墓地に捨てる。捨てた？暗黒界の尖兵ベージ？の効果で発動！このカードが他のカード効果によって手札から墓地に捨てられた場合、場に特殊召喚する！」

俺の周囲に雷が落ち金色の銅像と槍を持った悪魔が現れた。

「そして？紅魔・紅美鈴？を召喚！」

「あ！竜馬さん……………がばぶぶお！？」

美鈴が現れたかと思っただら海に落ちた。  
海面が近かったため途中で助けることが出来なかった…

「けほっ…えほっ…」

「えっと…その…すまん」

海から引き上げた美鈴に俺は謝った。

後で聞いた話だが幻想郷には海がないらしく泳げる場所は川や湖だけで泳げる者は少ないらしい。

「だから小悪魔さんも驚いていたのか…」

「次やったら泣きますからね!？」

俺の手に掴まりぶら下がる美鈴は涙目で叫んだ。

「気を付けるよ。フランを呼んでも良いか？」

「…分かりました。頑張ってくださいね」

俺の言葉に美鈴は頷いた。

「レベル4？邪神トークン？とレベル4？暗黒界の尖兵ベージ？にレベル4？紅魔・紅美鈴？をチューニング!！」

「頑張ってください!！」

美鈴はそう言っただけで光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「紅に染まりし館の禁忌よ、我が意に従って現れよ！其は禁忌と万壊の申し子！！シンクロ召喚！！現れよ、？紅魔・フランドール・スカーレット?!！」

「あ、竜馬」

フランは最初から飛びながら現れたので海に落ちることはなかった。これで手札は0、どうにかして咲夜さんを引かないと…

「竜馬、準備が整ったわ！」

「分かった！やってくれ！！」

海面に立つパチュリーがこちらを見て言った。

そして俺の言葉にパチュリーはどこからかカードを取り出した。

「水符合成」？プリンセスウンディネ？+？ベリーインレイク？  
！！」

カードが発光したかと思っただけなら海面に変化が起きた。

「なんだこりゃあ……………」

「パチュリーすごい！」

起こった事象に俺は驚きフランは喜んでいた。

何故なら海面から大量の水で創られた竜が現れたからだ。

「スペルカード名称をつけるとしたら……………水竜符？ウォーター・ドラグニティ？ってどこかしら」

水竜の一匹の上に乗りながらパチュリーは呟いていた。

一夏と等は驚きすぎて口をパクパクさせていた。

「まあ、どうでも良いわね。やりなさい！」



パチュリーの掛け声とともに水竜達は福音に顔を向けた。そして水竜達は口を開き水を……否、高圧力で圧縮された水をレーザーの様に吐き出した。しかし、福音には掠りもせず全てかわされてしまった。

「スピードが厄介ね」

「私も遊ぶよ」

そうやってフランは福音に近付いていった。

その瞬間、銀色の翼が広がっていった。

こいつは……！！！！

「フラン！離れる！！パチュリーも攻撃に備えるんだ！！」

「え……？」

いきなり俺が叫んだことに一夏と箒は疑問を抱いたらしい。

幸いにも福音はアレをこちらだけに向けている。

情報と言つ名のアドバンテージを一夏と箒に与えるにはちょうど良い。

そして福音の翼が一斉に羽ばたいた。

「？守護天翼？！！」

「ッ！？防ぎなさい、水竜達！」

俺は自身の翼を広げ自分とフランを包み込みパチュリーは水竜達に指示を出した。

翼に福音の放った羽のような形状の弾丸が突き刺さった。

「ぐぐぐぐぐぐぐ……？」

弾丸は高密度に圧縮されたエネルギーだったらしく突き刺さると同時に爆発した。

「竜馬!?!」

「先生!?!」

「一夏と箒が何かを叫んだようだが爆発音が酷くて全く聞こえない。つーか途切れない!?!」

「くっ! フラン、下から抜けて攻撃できるか!?!」

「分かった! やってみるね!」

俺の言葉にフランは頷き、下海面と翼のすき間から抜けた。

とりあえずデッキからカードを引かないと…

「ドロー! …… ナイスタイミングだな。? 吸血鬼の施し? を発動!」

本来ならライフを半分支払うんだがこれはデュエルじゃないから関係ないな。

そして俺はデッキからカードを6枚引いた。

引いた中に咲夜さんのカードはなかった。

「? メイド召集!?! も使えないから…くっ!」

さらに一際強い衝撃に俺は呻いた。

早く手を考えないと…!!

「? 紅魔コール? を発動して? 紅魔 - 十六夜咲夜? を手札に加える」

魔法カードを発動し俺はデッキからカードを1枚手札に加えた。  
これなら…

「カードを1枚セット、そして？暗黒界の雷？を発動してセットしたカードを破壊！」

破壊したカードは？メイド召集！？である。

場にパチュリーとフランがいる時点でこのカードは意味を成さないからだ。

「手札を1枚墓地に捨てる。捨てた？暗黒界の軍神シルバ？の効果を発動！シルバを特殊召喚！」

翼の内部には現れなかったが背後に現れたのを気配で察知した。

「そして？二重召喚？を発動！？メタボ・サッカー？と？紅魔・十六夜咲夜？を召喚！」

「お呼びでしょうか」

俺の目の前に咲夜さんが現れた。

先の2人　小悪魔さんと美鈴とは違い素早く状況を理解したのか俺の腕に掴まった。

「はい、レミリアを呼びたいんです。良いですか？」

「お嬢様をですね？分かりました」

俺が尋ねると咲夜さんは頷き了承してくれた。

だったらさっさと攻撃から抜け出さないとな…

……………ん？

不意に翼にかかる衝撃が消失した。

おそろおそろ翼を広げて外を見るとパチュリーとフラン、一夏と箒が福音の注意を引いてくれていた。どうやら俺が召喚していることからレミリアを呼ぼうとしていることが分かったらしい。

「今の内だな！レベル5？暗黒界の軍神シルバ？とレベル3？メタボ・サッカー？にレベル4？紅魔・十六夜咲夜？をチューニング！」  
「お気をつけてください」

咲夜さんはそう言って光の輪になった。  
8つの光の球が光の輪を潜る。

「紅に染まりし館の主よ、我が意に従いて現れよ！其は永遠に幼き紅い月！！シンク口召喚！！現れよ、？紅魔・レミリア・スカーレット？！！」

「ふふふ、ようやく私の出番のようね」

レミリアは笑みを浮かべながら現れた。

「レミリア、あいつを倒したいんだ。手伝ってくれ」  
「竜馬の頼みなら仕方がないわね」

俺の言葉にレミリアは頷き答えた。

「よし、行くぞー！！」  
「ええー！！」

そして俺とレミリアはパチュリー達のもとに向かった。

## 銀の翼と紅の翼（後書き）

（霊使い達の雑談）

ルシフェル様、霊宮空刀様感想と贈り物ありがとうございます。

霊宮空刀様よりAEUIナクトとガンダムダブルオークアンタとブラスタを、

いただきました。

竜王「やっぱ間が空いたからか感想が激減したな」

竜馬「連載を増やしたからだろ……」

竜姫「それもあるけど、どちらかと言うと学校が大変なんだよ。しかもPCが使えないし……」

雪「うわぁ……」

「「「うわぁあああああああああ！！！！！！！！！！」」」

竜王「うお！？霊宮空刀様のところから霊宮空刀様とパトリックが転がってきました」

「匂いが途切れた……？」

竜姫「さらにお金の匂いを嗅いだのか分からないけどクロウも来ました」



天騷のSilver the Gospel(前書き)

また、前回と大分期間が空いてしまいました。

すみません。

## 天騷のSilver the Gospel

side 魔神竜馬

「なんつー連射速度と数だよ…」

飛来してくる羽のような形状のエネルギー弾丸を避けながら俺は悪態を吐いた。

一夏、箒、パチュリー、フラン、レミリアも辛うじて弾丸を避けている。

「くっ！キリがないわね！」

「まだまだいつくよ」

パチュリーは水竜を操り弾丸を回避していく。

フランは上機嫌だな…

「一夏、箒、レミリア！前後左右から攻めるぞ！レミリアは後ろから、2人は左右から攻めるんだ！」

「分かった！」

「了解しました！」

「分かったわ！」

俺の指示に3人はそれぞれ所定の場所に着き四面から攻撃を仕掛けた。

しかし俺達4人の攻撃は掠りもしなかった。

福音は回避に特化した動きで回避したと同時に反撃を行ってくる。

この翼、兼砲口は予想に反して実用レベルが高いようだ…

「私達を忘れてもらっては困るわね」





二つの力が込められているからか普段よりもスピードが速く感じる。しかしそれでも福音に攻撃が当たるとは無かった。レミリアの攻撃は避けるか防御され俺の攻撃は全てかわされてしまった。

「まだ足りないのか!？」

「La……………」

俺が福音を睨み付けるのと同時に福音から甲高いマシンボイスが聞こえた。

その刹那、福音の翼の砲門全てが開かれる。

その数、36。

しかも全方位に向けられているためフランやパチュリーまで攻撃範囲に含まれている。

そして全方位に向けての一斉射撃が放たれた。

「やるなっ……………だが、押し切る!!」

「断ち切る!!」

「撃ち抜きなさい!!」

俺は翼で、箒は二本の刀で、レミリアは槍で、フランは炎の剣で、パチュリーは水竜達で弾幕を叩き落としていった。

俺、箒、レミリアの後ろに一夏は飛んでいる。

そして一瞬の隙が生じた。

「今がチャンスd……………ッ!？」

俺が振り返るとそこに一機の機体が座していた。

機体の色は漆黒。

さらに言えば威圧感が福音の比ではない。



飛ばされてしまった。

レミリア、フラン、パチュリーは突然の事態に混乱し動いていなかった。

そして…

「ぐあああつー!!」

箒を庇うように抱きしめた一夏の体に羽の形状の爆発光弾が一斉に降り注ぎ爆発した。

エネルギーシールドで相殺しきれないほどの衝撃に一夏は襲われた。そしてついにはアーマーが破壊され熱波で肌が焼けていった。

「一夏っ、一夏っ、一夏あつー!!」

「う……………あ……………」

一夏は箒の呼び掛けに答えずぐらりと傾いていった。

その光景に竜馬は絶望した表情を浮かべた。

しかしその表情も一瞬のことですぐに憤怒の形相に変わった。

『マスター!!怒りに囚われてはいけません!!』

「無々……………ああ、分かっている…分かっているんだ…」

無々の言葉に竜馬はゆっくりと表情を落ち着かせていった。

「レミリア、フラン、パチュリー!!すまないが一夏と箒を旅館に運んでくれ!旅館には雪がいるから分かるはずだ!!」

「分かったわ。水竜よ、2人を掴まえなさい」

竜馬の言葉にいち早く復帰したパチュリーが頷き2人を海から引き上げた。

そしてレミリアは箒を、パチュリーの操る水竜が一夏を運んでいった。

フランは2人に攻撃がいかないように防御役を担っていた。

side out

side 魔神竜馬

3人が離れていくのを確認し俺はMk・Nichtと福音を睨み付けた。

そして俺は腰にさしていた贅にえとのじよつが殿嫦娥を鞘から引き抜き構えた。

無々の形状変化が使えないのが辛いところだ。

光の方は今の俺の心が守りたいなどの心からかけ離れているから使うことが出来ない…

「いいぜ、屑鉄ども…さらにスクラップにしてやるよ…」

そう言つて俺はMk・Nichtと福音に斬りかかっていった。

するとMk・Nichtはどこからか両肩に大口径ビーム砲を出現させ装備した。

そして福音も翼を広げいつでも撃てるように砲口をこちらに合わせている。

「La……………」

「ツツツツ！！！！」

甲高いマシンボイスと言葉にならない咆哮、2つの音が混じり合い歪な歌が出来上がる。

それと同時にMk・Nichtは大口徑ビーム砲からビームを、福音は翼の砲口から大量の羽型の光弾を放ってきた。

「喰らうかよ！！！！！！」

俺はそれを贄殿嫦娥で切り裂き掻き消した。  
ビームと光弾が消えると同時に俺の身体なかの魔力が脈動し増加する。  
贄殿嫦娥、この刀の特性は物理攻撃以外の力を全て吸収し使い手の  
力に変換することである。

「はあああああああああ！！！！！！！！！！」

増加した魔力をさらに翼に込め俺は突き進んだ。  
それでも2機は攻撃を止めずに放ち続けてきている。

「  
ツツツ！！！！」

「はんっ！！鉄屑が！！！！」

M k . N i c h t に接触し俺は胴体を一閃した。  
M k . N i c h t はそれにより上半身と下半身に別れ声にならない  
咆哮を上げた。

「とどめd      ！！？」

「L a ..... L a L a L a .....」

不意の背後からの声に俺は驚き距離をとった。  
いつの間にか背後に福音が接近していたのだ。  
そして福音は素早く俺に向けて光弾を放ってきた。

「ちいっ！！！！！！！！！！」

再び俺は飛来してくる光弾を贄殿嫦娥で切り裂き掻き消した。

「うぐっ！？.....がはあっ！！！！！！！！！！げほっ...げほっ.....」



見ると斬り落とした下半部が蠢き球体へと変化していった。  
そして球体は上半部と混ざり合い一つの漆黒の球体へと変貌してい  
く…

「La…LaLaLa… : La」  
「くっ!!」

Mk・Nichtに気を取られている内にいつの間にか福音が接近  
しており翼を広げて光弾を放ってきた。

「うおおおおお!!!」

一発、また一発と被弾していくが俺は光弾を切り捨てていった。  
全ての光弾を掻き消したときには俺の体は光弾によってボロボロに  
なっていた。

『マスター!あの球体の内部で魔力が急上昇しています!!』  
「なあっ!?!」

光の言葉に俺は叫んだ。  
さらに強くなるのかよ!?!

「くっそ、がああああああ!!!」  
「La… : L !?!」

俺が叫びながら突撃したことが予想外だったのか福音のマシンボイ  
スが途中で止まり動きが止まった。  
単にMk・Nichtが出てくる前に破壊しようと思っただけの突撃だ  
が…



「つらあ!!」

福音が動きを止めた隙を突き俺は贅殿嫦娥で福音の片翼を切り裂いた。

片翼を失い福音は海に向かって墜ちていった。

『魔力反応増大!?!』

『黒球、動きます!!』

無々の驚愕の言葉と光の言葉に俺は驚き黒球を見た。

黒球はいきなり左右にぶれると凄まじい速さで海中に潜っていった。何が起きるんだ!?!

『黒球、依然として魔力の増大を確認!浮上してきます!』

無々の言葉と同時に海中に潜っていた黒球が再び現れた。

そして黒球は蠢き姿を変えていった……

生えてきたのは漆黒の翼……

それに加えて両肩に大口径ビーム砲が装備されていた。

不意に黒球から何かが排出された。

それはISスーツを着た女性だった。

この場において俺以外の人間は福音のパイロットしかいない。

つまりこいつは……

「福音を……取り込んだ喰ったのか……?」

俺は女性をキャッチし呟いた。

「

ッ

ッッ!!!!!!!!!!」

「！！！！」

今までとは違う咆哮。

その咆哮に俺は怯み、翼に魔力をありつたけ込めて旅館に向かった。幸いにもまだMk・Nichtは動けなかったのか追尾され攻撃を受けることは無かった。

天騷のSilver the Gospel (後書き)

〔霊使い達の雑談所〕

感想と贈り物ありがとうございます。

カイ(海)・R・銃王さん、ルシフェル様、月光閃火様、妖気様、  
霊宮空刀様感想ありがとうございます。

妖気様より犬耳尻尾の小年シヨタのリリオを、

頂きました。

竜姫「可愛い子」

リリオ「うひゃあ!？」 竜姫に抱き着かれ驚く

竜王「次は俺だからな？」

竜姫「分かってるって」

竜王「あイタ!？なんだこれ……ってガイアメモリ!？」

「「「「「うわあああああああああ!?!?!?!」」」」」

竜王「んな!？カイ(海)・R・銃王さんのところより中身がまだ  
入っていないガイアメモリ26本と、西京圭・本田直也・カイ・時  
任巧・波畑柊・黒石謎・折原和・折原空・本田克己・本田風香・テ  
ィア・ラルト・リュウナ・時任歩・泉こなた・木下秀吉が落ちてき



聖夜「自分との対話？」

瞬「意味がよく分からないな…」

竜真「というかすごい人数だ」

竜王「さすがにケータイで書くには限界もあるな…よし、次からP  
Cが直るまではゲストは作者さん一人につき2人までにしたいと思  
います。私の我が儘ですが何卒よろしくお願いします」

竜姫「闇を狩る少年続きます！」

リリオ「離して〜!!」 未だに竜姫に抱き着かれています

## 女心と漆黒の翼

side 魔神竜馬

「竜馬！一夏が！」

「分かっている！こいつを頼む、福音の乗り手だ！」

旅館に着くと千冬が今にも泣きそうな表情で俺に言ってきた。俺はすぐに抱えていた女性を千冬に渡し一夏のもとに向かう。

「無々！一夏の場所は！」

『このまま直進して角を左に曲がり右の手前から二番目の部屋です！そこから白式の信号をキャッチしました！』

いつの間になんかことが出来るようになったのか気になるが構わずに俺は指示された部屋に入る。

「「「竜馬！」「」」

「3人とも、お疲れ様。疲れただろうから帰って休んでくれ」

部屋に入るとレミリア、パチュリー、フランの3人がいた。

俺の言葉に3人は頷いたので俺は無々からカードを抜き3人を紅魔館に帰した。

「とにかく一夏の傷の治療だな…？治療の焰？」

一夏の身体を癒しの焰が包み込む。

そして、一夏の身体の傷が消え、俺の身体に傷が現れる。

ぐううう…！！

「こ…こんな攻撃を受けてたのか…」

心なしか一夏の表情が和らいた気がする。  
それでも一夏は目覚めない。

……まあ、今は一夏の傷を治したただけでも良しとしよう。

「……………ゲホツ…ゲホツ……………ガフツ…!!」

咳き込み俺は血を吐く。

どうやら一夏の傷は内蔵器官にまで届いていたらしい。

しばらくすると傷は消え俺は吐いた血を綺麗に拭い去った。

「さすがに疲れた……………無々、光、悪いがアイツが動き出したら起こしてくれ」

『分かりました』

『お休みなさい』

無々と光にそう告げ俺は眠った。

side out

side 第3者視点

旅館の一室、壁の時計は4時前を指している。  
そこに1人立ち上がる影が現れる。

『…!?!?』

「静かに、もう1人の私が起きてしまう」

人影は驚く無々、と光に静かに言った。

『どうしてあなたが…』

「どうして？そつだねえ……」

光の言葉に人影は顎に手をあて首をかしげた。

「言つなれば、女心を理解していないこいつに後悔をさせないためかな？」

『それはどういう……？』

人影の言葉に無々は問いかける。

「うん……じゃあ聞くよ？好きな相手が誰かに傷つけられて倒れました。さて、その子が最初に思うことは？そして、その子に力があつた場合は？」

『それは、当然……』

『自分の力で……』

無々と光は当然と言つた風に続けようとして言葉が途切れた。

『まさか……』

『でも、あり得ます……』

「そう言うこと。だから私が出てきたの、こればかりは男には分からないのかな？」

驚いたような無々と光の言葉に人影は頷き呟く。

そして、人影から翼が生え、左腕が筒のようなものに変化した。

「それじゃあ行きますか」

その言葉と同時に翼が動き始め人影は空に舞い上がった。



海上200m。

そこには膝を抱え、まるで胎児のような格好で『銀の福音』を取り込んだMk・Nichtが静止していた。

「……………」

不意に到底理解できない言葉を発しながらMk・Nichtは顔を上げる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

5km離れた場所に浮かんでいるIS『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

その姿は通常装備と大きく異なり、80口径レルカノン《ブリッツ》を二門左右それぞれの肩に装備している。

さらに遠距離からの砲撃・狙撃に対する備えとして、4枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。

これが、砲戦パッケージ？パンツァー・カノニア？を装備したシュヴァルツェア・レーゲンであった。

しかし、Mk・Nichtは素早く体勢を立て直しラウラへと迫っていく。

その間もずっと砲撃を行っているものの、Mk・Nichtは翼から放たれるエネルギー弾と両肩の大口徑ビーム砲から放たれるビームによってほぼ全てを打ち落としながらラウラへと接近していた。

「ちいっ！」

砲戦仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい。

対して元々性能が高いMk・Nichtに、吸収した福音の翼。

これによりMk・Nichtの機動力は非常に高くなり300m地点からさらに急加速を行いラウラに両肩のビーム砲を向ける。しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた。

「セシリア！」

両肩のビーム砲が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる。

青一色の機体　ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲だった。

side out

side???

これはまずい状況かな…

Mk・Nichtと戦う5人の少女達を見ながら私は思った。

「?アンノウン・ブレイカー?の情報を上書き。掌握」

ピシィッ…ピシピシピシ……パキィン!!!

私は無々から渡してもらった?アンノウン・ブレイカー?の情報を上書きし左腕の円筒に取り込ませた。

?アンノウン・ブレイカー?は魔方陣となり左腕の円筒に刻み込まれる。

「それじゃあ助けないとね…」

腕に巻いてあるワイヤーを見ながら私は眩き漆黒の翼を羽ばたかせた。

「くうっ！」

「はあああああああああ！！！！！！」

Mk・Nichtに殴り飛ばされる鈴音、そして叫びながら箒がMk・Nichtの右腕を踵かかとのエネルギー刃で切り落とした。それでも足りない…

「さあ…子ども達はもう帰りなさい。ここからは、殺し合いの時間…」

「誰だ！？」

ラウラが不信そうに私を見る。  
流石に分らないみたいね…

「ただの通りすがりの邪まじしゆな正義だよ」

「邪まじしゆな…正義ですの…？」

結構余裕があるみたいね…

私の言葉にセシリアが不思議そうに尋ねてきた。

「ほら、話している暇はないよ。もう、腕が生えてきた」

「なっ！？再生だと！？」

Mk・Nichtの方を見ながら私は言う。

その光景にラウラは驚愕の表情を浮かべる。

「？闇？を殺すなら完膚なきまでに叩き潰すか、エネルギーが切れるまで戦い続けることね…」

私はそう言い放ってMk・Nichtに向かった。

最初から飛ばしていくわ！！

「来たれ劫焰、万物を焼き付くし全てを浄化しなさい。？天照？！アマテラス」

私は左腕の円筒を掲げ、呪文を唱える。

円筒に刻み込まれた魔方陣が光を放つ。

掲げた円筒の先端、私の頭上に焰球が出現した。

焰球から発せられる熱と光は太陽のそれと非常に酷似している。

「

ツツツツ！！！！！！」

「喋れもしないの…こんなのと私が同じだなんて嫌すぎるわね」

眩きながら私は焰球を放つ。

焰球が近付くだけで、Mk・Nichtの体は徐々に溶けていく。

「まだまだいくわよ。？天照陽輪？！！！！アマテラスヒノワ」

再び私は左腕の円筒を掲げる。

しかし出現したのは焰球ではなく焰輪。

焰輪は円筒の先端で高速回転している。

「焼き切りなさい！」

そうやって私は焰輪を放った。

焰輪はMk・Nichtから生えている両翼を焼き切り裂く。

しかし、両翼を失ってもMk・Nichtは飛び続けている。

「

ツツツツ！！！！！！」

「やっぱり……」

あの程度じゃ、あまり意味はないよね。  
M k・N i c h tは咆哮をあげて両腕を広げる。  
すると切り落とした翼が生えてきた。

「  
ツツツツ！！！！」

「くっ！」

叫びながら光弾を放ってくるM k・N i c h t。  
私は光弾を左腕で弾き、防ぎ、叩き落としていく。

「いい加減に……してよねっ！！！！」

言いながら私は右手に握る贄殿嫦娥で光弾を全て切り払った。  
それと同時に私の体内なかの魔力が脈打つ。  
これが贄殿嫦娥の感覚なのね……？  
確かに容量を超えたらまずい……

「あまり多用は出来ないわね……」

眩きながら私はM k・N i c h tを見据えた。

s i d e o u t

s i d e ラウラ・ボーデヴィツヒ

「ら、ラウラ……あの人の、なんだか竜馬先生に似てない？」

「シャルロットもそう思うか……」

シャルロットの言葉に私は頷き答える。

いつの間にか近くに箒、セシリア、鈴音も来ていた。

「ISを使用せずにあそこまでの戦闘能力を……」

「あの翼は………」

不意に鈴音が呟く。

何か知っているのか？

「1つ言えるのは……あの女性は私達よりも遥かに強い………」

悔し気に拳を握り締め箒が呟く。

その言葉は私達に重くのし掛かる。

「私は、何も出来ないのか…力を手に入れても、私は…」

「……箒<sup>さん</sup>………」

箒の気持ちはよく分かる。

専用機を手にし、力を得たと言うのに何も出来ない自分が悔しいの  
だろう…

かく言う私も同じ感情を抱いているが…

side out

side 第3者視点

「

ッ  
ッ  
ッ

!?!?!」

「ちゃんと分かるように言いなさいよ!?!?!」

Mk・Nichtの咆哮に女性は怒鳴りながら焰球を放つ。

しかし学習したのかMk・Nichtは焰球を全て距離をとりなが  
ら時に回避し、時に撃ち落としていく。

「

「ツツツ！！！」

「遠距離じゃ分が悪くなったからって接近戦？単純ね」

Mk・Nichtが叫びながら折り畳み式の長剣、ロングブレードを呼び出したのを見て女性は呆れたように呟く。

「言っても無駄だろうけど教えてあげる」

言いながら女性は贗殿嫦娥を鞘にしまい腰にさし、自身の翼から羽根を2枚引き抜く。

「私はね、接近戦の方が得意なんだよ」

そして2枚の羽根を親指と中指で挟む。

「パチインツツ！！！」

羽根を指で挟みながら指を鳴らす。

次の瞬間、2枚の羽根は2本の大太刀に変化する。さすがに指で挟むのは無理だったのか手で掴んでいる。

「

ツツツ！！！」

「五月蠅いわね……」

鬱陶しそうにしながら女性は睨む。

女性の左腕の円筒に光が走り3つ穴が開く。女性はその穴に大太刀を差し込んでいった。

「

「ツツツツ！！！！」

「食らわないわよ」

M k・N i c h tの振り下ろすロングブレードが女性に当たる直前で弾き返される。

いつの間にか女性の手には大太刀が握られていた。

左腕の円筒を見ると差し込んでいた大太刀の内の1本が鞘だけになっ  
っている。

視認できないほどの速度で居合いあひを放ったのだ。

「

ツツツツ！

?!?!?」

意味が分からないと言った風にM k・N i c h tは咆哮をあげる。  
その隙に女性は大太刀を鞘にしまい肩の力を抜く。

「次で、終わりにする……」

女性は眩きながらM k・N i c h tを見据える。

「

ツツツツ！！！！」

咆哮をあげ、M k・N i c h tは光弾とビームを放ちながら斬りか  
かる。

そこに1つの影が割り込む。

「何もせずに終わるなど耐えられない！せめて一太刀与える！！」  
「なっ！?」



割り込んだ人影。

それは深紅の装甲に身を包んだ少女

篠ノ乃箒であった。

「こっの、馬鹿が！」

現れた影が箒だと気が付いた女性は怒鳴る。

それもそうだろう、今まさに攻撃してこよつとする相手の目の前に  
自ら現れたのだから。<sup>みずか</sup>

「はあああああつっつ！！！！！！」

箒は『紅椿』の展開装甲を全開にしMk・Nichtの攻撃を捌いていく。

それでも徐々に攻撃を食らっているが…

キユウウウン……

不意に『紅椿』から止まっていくような音が発せられる。

それと同時に『紅椿』の武装、<sup>あまじき</sup>雨月と<sup>からわれ</sup>空裂が光の粒子となり消失する。

「なっ！また、エネルギー切れだと！？　ぐあっ！！！」

その隙を見逃さずにMk・Nichtはロングブレードを持っていない左腕で箒の首を捕まえる。

そして、ゆっくりと両肩の大口径ビーム砲、福音の翼、ロングブレードを全て箒に向ける……

## 女心と漆黒の翼（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、月光閃火様、霊宮空刀様、カイ（海）・R・銃王さん、妖気様感想ありがとうございます。

霊宮空刀様より、鏡音レン（ヘタレン）バージョンの写真を10枚を、

妖気様より、リリオの大好物のとうもろこし入りドックフードを、

いただきました。

竜姫「シヨタツ子の写真」

リリオ「助かった……」

竜馬「残念、次は俺のターン！」

リリオ「へ！？うひゃあ！」

竜馬「おいおい……」

竜王「もふもふもふ……」

リリオ「ひゃあう！あまり強く尻尾を握らないで……」

竜王「ふむふむ……敏感、と。次は、はむ。はむはむ……」

リリオ「ひゅんっ／＼／＼耳を食<sup>は</sup>まないでっ！／＼／＼／

竜馬「その内、十八禁になりそうだな…（呆）」

「きゃあああああああ！……！！……！！」

竜王「え？」

竜姫「あ痛！？……メ、メダル？」

竜馬「落ち着いてないで2人を助けるよ！？」

竜王「よし、ガンバ！」

竜馬「お前もやれよ！」

竜姫「ねえ？もう、見える距離だよ？」

竜王「あ、ホントだ。あれは…柊と…？」

竜姫「とりあえずネットを張ろっか？」

竜馬「急げよ…」

リリオ「ひゃうっ！ひいんっ！あうっ／＼／＼／

竜王「うん、反応が完全に女の子だわ」

竜姫「はい、ネット張り終わったよ」

竜馬「早!?!」

柊「た、助かった…」

竜王「やつほ そちらさんは?」

「本田風香です」

竜姫「風香だね?よろしく!」

リリオ「はあ…はあ…はあ…」

竜王「あれ?息切れしちゃった?」

竜姫「激しかったの?」

柊「男同士なのに?」

竜王「可愛いは infinite justice って言うだろ?」

風香「言わない気が…」

リリオ「お嫁にいけない…(涙)」

竜姫「お嫁?せめてお婿じゃないの?」

「邪魔をする」

竜馬「おわあっ!?!」

竜王「どうした？つてミイラじゃないか。妖気様のとこるよりミイラが来ました」

竜姫「とりあえず私は落ちているメダルを全部拾うね」

ミイラ「……………何があつたんだ？」

竜王「リリオの尻尾を握ったり耳を食んだり…色々？」

ミイラ「だからぐったりしているのか」

竜馬「明らかにそんな行為をしている声じゃなかったけどな…」

竜王「気にしない！コーヒーでも飲んでくか？」

ミイラ「なら、一杯だけ貰おう」

竜王「分かった。それでは？闇を狩る少年？続きます」

決着、陽の光の砲撃と地獄の雷…

side女性

最悪っつ!!!

まさか筈が飛び込んでくるなんて!?

「ぐっ、うっ……!!」

首を締め上げられ、圧迫された筈の喉から苦しげな声が漏れる。

Mk・Nichtの手は硬く筈の首を掴んで離さず、両肩の大口徑  
ビーム砲、福音の翼に光が集まっていく。

一斉射撃への秒読みが始まっているのだ。

「筈を離しなさい!!? フォトン・バレット 光束閃弾?!?!」

言いながら私は指先から魔力球を生成し撃ち放つ。

しかし、私の放った魔力球をMk・Nichtはロングブレードで  
切り捨てた。

精密射撃を行う技でこれ以上の威力は出せないのに!!

「いち、か……」

耳を澄まさなければ聞こえないほどの小さな声。

キイイイインツ!!

風を切る音ともに私の横を高速で通り抜けるものがあつた。  
あの機体は……!!

「一夏！！！」

そして、Mk・Nichtは一夏の放った荷電粒子砲によって吹き飛ばされる。

side out

side 魔神竜馬

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

……………ん？

一夏の声か？

そう思い俺はゆっくりと目蓋まぶたを開ける。

【……………は？】

俺が目蓋を開けると何故か俺は半透明になっていた。

【なんじゃこりゃあ！？！？】

「やっと起きたのね？」

俺が叫ぶと女性が話しかけてきた。

ってこいつは……

【もう1人の俺！？なんでお前が！？つーかどうなってるんだこれは！！】

「一気に聞かないで、今はあれを倒すのが先よ」

言いながら女性　もう1人の俺、はMk・Nichtを指差した。  
ちっ！

【後で説明しろよ！】  
「分かってる」

俺の言葉にもう1人の俺は頷いた。  
とにかくただ見てるわけにはいかない！

【おい、俺も戦いたいんだが】  
「私が今出てるから完全に出てこられないけど良い？」

完全に出てこられない？  
どういうことだ？

【よく分かんが構わない】  
「分かった。身体の右半身を使って」

不意に俺の身体が引つ張られもう1人の俺の中に入る。  
するともう1人の俺の身体に変化が起こり、右半身の胸がなくなり  
髪の毛の右半分が赤髪に、翼が茜色に変化、そして右手首からは炎  
が出てくる。

勝手にフェニックスになった？

「あ、兄上！？」  
「ん、ラウラか」

驚く声が聞こえてきたので俺は声のした方を向く。  
そこには驚いた表情のセシリア、鈴音<sup>すずね</sup>、シャルロット、ラウラが  
Sを身に纏い飛んでいた。

「り、竜馬！？その姿は何よ！？」  
「半分だけ女性で、もう半分が魔神先生ですよ！？」



驚きながら鈴音とセシリアが聞いてきた。  
シャルロットに至っては目を白黒させている。

「俺にも分からん。とにかく、あいつをさっさと叩き潰すぞ！」

不意に左腕の円筒に差し込まれている大太刀が贄殿娵娥を残して消失した。

「悪いけど贄殿娵娥を引き抜いてちょうだい」

口が勝手に動き言葉を発する。

俺は円筒に差し込まれている贄殿娵娥を抜き腰にさした。

「来たれ劫焔、万物を焼き付くし全てを浄化しなさい。？天照？」  
アマテラス

再び口が勝手に動き、左手が掲げられ頭上に焔球が出現する。

これがもう1人の俺の魔法か？

「無々、形状変化。ナイフ」

『了解しました。形状変化、ナイフ』  
メイサー

俺の言葉に無々はワイヤーからナイフに変化し右手に現れた。

力強い息吹きを俺の体内なかから感じる。

おそらくだがヴリトラの翼が治癒して生えてきたのだろう。

「半分だけだが変身させてもらおう！ゼロ・インフィニティ、契約に従い、我に宿れ、怒れる竜。破壊の主にして暴君の象徴よ。其は強大にして凶暴なり。『竜魂転身』！！」

赤かった髪は黒くなり、瞳の色も金瞳に変化する。  
髪は腰ぐらいの長さになり、背中には茜色の翼から、漆黒のドラゴンの翼に変わっており右腕は竜鱗に包まれ鋭い爪が生える。  
よし、上手くいった！

「無々、カートリッジ連続ロード！！」

『了解しました。ロレイヌ・クリンゲル？途切れぬ刃？』

俺の言葉に無々は答え、カートリッジをロードする。

そして、カートリッジがロードされ、人指し指と中指の間に全く同じナイフが出現する

「悪いな、無々。こんな使い方して……」

『気になさらずに、私はマスターの力になれるのが嬉しいのですから』

俺が謝ると無々は優しい氣に言う。

もしも人間の姿であれば微笑んでいるであろう。

「？多重雷牢結界？」

俺は眼前に魔法陣を出現させる。

魔法陣の内部では常に雷が奔っている。

その間もどんどん無々はカートリッジをロードしナイフの数を増やしていく。

俺は素早く上下に+極と-極を造り出し極を入れ換え続ける。

これによってナイフは俺の周囲に停滞していく。

「

ッ  
ッ  
ッ

「!!!!!!」

不意にMk・Nichtが咆哮をあげる。

「荷電粒子砲でも威力が足りないみたいね」

もう1人の俺が喋る。

荷電粒子砲？

誰か使ったのか？

「竜…馬……だよな？」

「ああ、半分は女だが俺だ」

一夏の問いに俺は答える。

「一夏、悪いが時間を稼いでくれ。その間にアイツを叩き潰す準備をする」

「アイツを？分かった！」

俺の言葉に一夏は頷き左手の爪のような物を握り締め拳にした。

あんな武装はあったか？

「これが戦いの再開の合図よ！」

再びもう1人の俺が喋りながら、左腕の円筒をMk・Nichtに向けた。

その動きに連動して頭上の焰球がMk・Nichtに向かって飛んでいった。

side out

side 第3者視点

？零落白夜？を発動させた？雪片ゆきひらにがた式型？を右手に構え、一夏は斬りかかる。

「 ツツツツ！！！」

しかしそれを難なく回避するMk・Nichtを左手の新兵器？雪羅？で迫った。

第二形態に移行したことで現れたこの装備は、状況に応じて形状を変えることが可能なよう指先からエネルギー刃のクローが出現する。

「逃がさねえ！」

1m以上伸びたクローがMk・Nichtの手に握られているロングブレードを切り裂く。

切り裂かれたロングブレードは細かな粒子となり空气中に霧散した。

「 ツツツツ！！！」

Mk・Nichtは咆哮をあげながら両肩の大口径ビーム砲と翼を一夏に向け、撃ち放つ。

「食らってたまるかよー！！」

一夏は？雪羅？を盾のような形状に変化させ攻撃を防ぐ。

Mk・Nichtの放つ弾幕は？雪羅？に触れた瞬間、跡形もなく消えていった。

そう、これはつまり、エネルギーを無効化する？零落白夜？のシールド。

「 ツツツツ?!?!? 」

弾幕が消えたことに驚いたのかMk・Nichtの動きが止まる。  
その隙を見逃さずに一夏は斬りかかった。

「 ツツツツ!?!?! 」

そしてMk・Nichtの左腕が中を舞う。

Mk・Nichtは叫び斬った体勢で硬直していた一夏を蹴り抜き  
吹き飛ばした。

「 くっ……………」

少し離れた地点。

そこで筈は齒噛みする。

力の無い自分に、一夏を助けることのでき無い自分に悔しがりなが  
ら。

既に他の4人は一夏の元に向かい戦っている。

不意に『紅椿』の展開装甲から赤い光りに混じって黄金の粒子が溢  
れ出す。

「 これは…………?!? 」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復し  
ていくのがわかる。

? 絢爛舞踏?、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構  
築……………完了。

項目に書かれているのはワンオフ・アビリティーの文字。  
それを見た篤は目を瞑り、頭をあげる。

「私は……まだ、戦えるのだな？」

誰に言うでもなく篤は眩く。

そして目を開き静かにMk・Nichtを見据える。

「ならば……ならば、行くぞ！紅椿！」

赤い光りに黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮れの空を裂くように駆けた。

side out

side 魔神竜馬

「悪いけど暫く詠唱をするわよ」

「分かった。こっちは念じるだけでなんとかなる」

もう1人の俺の言葉に俺は答える。

端から見れば独り言を言う人間だろう。

「眩き光、輝く光、全てを照らし、全てを救済せん……………」

もう1人の俺が詠唱を始めると左腕の円筒に変化が起こる。

この時、一夏の方から金色の光りが見えた気がしたが…

「力は正義であり、力は悪である。故に、力は善では無く、力は悪でも無い……………」

詠唱に呼応し左腕の円筒は線が走り左腕から外れる。

そして左腕から外れた円筒は眼前で八角形の巨大な輪になる。

「紅鏡は等しく全てを助け、近づくモノ全てを焼き尽くす。浄化と破壊、異なる力は一つに合わさり新たな力を呼び覚ます……………」

巨大な八角形の輪の前方に幾重にも魔方陣が現れる。

さらにその周囲を取り囲むように、無数の魔方陣がまるで華のように並ぶ。

「綺羅星は光の道導となり万物を導く。光は集いて闇を討ち払い、闇は集いて光を討ち払う……………」

魔方陣が淡い光を放つ。

それと同時に俺もナイフを3本ずつ纏めていく。おそらく発動準備が揃ってきたのだろう。

「今ここに、我が敵を滅する力を創り出せ!!」

こちらもやるかな。

レール・ザ・クングニル  
? 極雷の大槍? ……

3本のナイフは雷を纏い雷撃の大槍となる。

そして雷撃の大槍が合計101本並ぶ。

【一夏に合図を送るぞ】

俺が問いかけるともう1人の俺が頭を動かし頷いた。

俺は右腕を動かし? 極雷の大槍? を1本握り締める。

狙うは上空。

そして俺は右腕の力だけで? 極雷の大槍? を上空に放った。

? 極雷の大槍? は上空に放たれしばらく突き進むと徐々にスピード







俺の言葉に反応したのはラウラだけで他の5人は呆けていた。  
そして、俺達は旅館に向かって飛んだ。

side out

side 第3者視点

「作戦完了　　と言いたいところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……………はい」

「……………俺は？」

腕組みをして待っていた千冬にきつく言われ、6人は静かに答える。場所は大広間で全員が正座しており千冬の後ろに竜馬は立っている。

「竜馬はこの6人が無事に帰ってくるように手伝ったのだから特に何もないだろう。それに教員なのだから特に違反もしていない」

「ふうむ……………」

柔らかな笑みを浮かべながら言う千冬の言葉に竜馬は頷いた。

ちなみに、一夏たちは正座を始めてから約30分が経過しており、セシリアの顔色が真っ青になっている。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……………。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……………」

真耶の言葉に千冬は短く鼻を鳴らす。

その行動を了承と取り真耶はおろおろわたわたしながら救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと動き回っている。不意に千冬は竜馬の近くに行き服の裾を引っぱり部屋の外に向かっ

ていった。

「どうかしたのか？」

「た、大したことではない、ただ礼を言いたくてな／＼／＼／」

竜馬が尋ねると千冬は照れながら答える。

【ホントに鈍いわね…】

竜馬の後ろに半透明のもう1人の竜馬が現れ眩く。

しかし、千冬はそれには気付かない。

この状態の竜馬、及びもう1人の竜馬の姿は無々と光、そしてその時に出ているもう1人にしか見えないのだ。

「俺はなにもしていないんだが…」

「いや、言わせてくれ。一夏たちを無事にここに連れ帰ってくれてありがとう」

竜馬にしてみれば目が覚めた瞬間にいきなり戦闘が起きていたので、完全に自分は何にもしていないと言う認識なのだろう。

しかし、千冬はもう1人の竜馬の姿を見ていないため竜馬に礼を言った。

「むう………」

頭を下げる千冬に竜馬は若干困ったような表情を浮かべる。

「こんなことのために部屋の外に連れてきてすまなかった」

「気にしないよ。………で？そこら中の部屋から見ている生徒達はどつする？」

「「「「「ツツ！！！！！」「」「」「」

バタン！バタン！！バタン！！！！

竜馬の言葉に千冬は周囲を慌てて見る。

それと同時に一斉にドアが閉まる。

どうやらほとんどの生徒が見ていたようだ。

ちなみに、ドアが閉まる音は竜馬と千冬の背後のドア  
大広間  
のドアからも聞こえてきた。

「で？どうする？」

「ふ、ふふふ…良いだろう…全員、IS学園に戻り次第特別トレーニング＋説教だ…」

竜馬の問いに千冬は底冷えするような笑みを浮かべながら宣言をした。

ちなみに千冬の指す全員とは見ていなかった生徒も含む全員である。

side out

side 魔神竜馬

女子5人の診察が始まったので俺は部屋にいる。

さて、今の内に聞いておくか。

「なあ、どうしてお前が出てこれたんだ？」

【どうしてと聞かれても…出てこれたから。としか言えないわね】

俺の問いに半透明のもう1人の俺が答える。

「いやいやいや、出てこれたからには理由があるはずだろ？」

【そう言われても……】

うん…

どうやら本当に分からないみたいだな。

「じゃあ…お前のあの力。あれはなんだ？」

【ああ、あの力？あれは前に言った、強力で凶悪、最凶にして最狂の本質よちから】

もう1人の俺はあっさりと答えた。

あれが！？

「……………つかお前、なんか喋り方がだいぶ変わったよな？」

【そりゃあ私だって女らしい喋り方にするわよ】

俺の言葉にもう1人の俺は腕を組み頬を膨らませて答える。  
なんかキャラも違うし…………

「そうかい。……………にしても、毎回毎回？もう1人の俺？って言うのはめんどくさいな…………」

『私としてもマスターと呼ぶのに若干抵抗があります』

『私ものです…………』

俺が呟くと無々と光も答える。

【そうは言われても……………あ！それならば、もう1人の私が考えてよ。私の名前をさ】

「俺が？」

もう1人の俺はしきりに頷いた。

名前、ねえ？

【あ、ちなみに私は？魔神竜馬？の中の正義の大罪も司ってるから】  
「いきなり爆弾発言！？」

もう1人の俺の言葉に俺は驚き叫んだ。  
俺の大罪を司る！？

つまり、？闇？の部分ってことか…？

【一応、名前を考えるのに役立つかと思って】  
「その前に驚いたわ…」

もう1人の俺に答えながら俺は思考する。

正義…

8番目の大罪…

「……………よし、もう1人の俺の名前は又夜でどうだ？」

【又夜？理由を聞いても良い？】

俺の出した名前にもう1人の俺は尋ねてきた。  
あまり捻ってはいないんだがな。

「別に良いけど笑うなよ？」

【それは聞いてから決めるわよ】

それは笑う可能性があるってことだな…

「まあ、良いけどよ。又夜、転じて夜叉となり八邪となる。八つ目の邪とは即ち正義なり……………」

【ふうん……………良いじゃない】

どうやら気に入ったらしい。

もう一人の俺　　又夜は軽く跳び跳ねた。

【それじゃ、改めて…私の名は魔神又夜。もう一人の竜馬よ】

「ああ、よろしく頼むよ」

俺は又夜と握手した。

まだ、最終日が残っているしもう眠ろう。

「お休み。無々、光、又夜」

『お休みなさい、マスター』

『お休みです。マスター』

【お休み、竜馬】

そして、俺は布団に横になり眠りについた。

## 決着、陽の光の砲撃と地獄の雷：（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想と贈り物ありがとうございます。

月光閃火様、ルシフェル様、妖気様霊宮空刀様感想ありがとうございます。

霊宮空刀様より真ゲッター1（真ゲッター2、真ゲッター3に変形可能）を、

いただきました。

竜王「ロボット!？」

竜馬「でかつ!」

雪「私の出番が無い…」

竜姫「大丈夫!次で出るよ!」

竜王「さて、新しく出た竜馬の魔法の説明です」

レイル・ザ・クアトロ・ゲンゲニル  
・獄雷の死連槍

100本の?極雷の大槍?を25本ずつ収束させ、?極雷の大槍?よりも威力、スピード、大きさ、全てにおいて上の雷の槍を創り上げる。

「?極雷の大槍?抹殺移行キリングシフト」とは?極雷の大槍?を収束させるための始動キ!。



竜馬「？極雷の大槍？の発展系の1つだな」

竜王「ちなみにサイズは、？極雷の大槍？が約2m、？獄雷の死連槍？が約25mの長さで太さは？極雷の大槍？が6cm、？獄雷の死連槍？が約20cmとなっております」

叉夜「私の説明はいつかしら？」

竜姫「しばらくしたらちゃんとキャラ説明として投稿するよ」

叉夜「分かったわ」

竜王「それでは、？闇を狩る少年？続きます」

## ENJOY OF THE SUMMER

side 魔神竜馬

「お兄ちゃん！」

「うお！？雪！？沈む沈む！！ガボガボ！？」

海に浮き輪を浮かべその上に寝そべっていると雪が飛び付いて来て、バランスを崩し海に転落した。  
鼻から海水が入ってきてかなり痛い…

『マスター、大丈夫ですか？』

『雪さん、気を付けてください』

光が心配そうに言い、無々が人間であれば眉をしかめているであろう口調で言う。

それに対し雪は笑顔を浮かべている。

「えへへ〜 ごめんなさ〜い」

「いきなり何なんだ？」

俺は海面に顔を出し雪を見た。

【昨日、戦ったなんて嘘みたいに平和ね  
(そつだな)】

半透明の叉夜が現れ呟いたので俺は心で答える。  
これは、俺と叉夜の間でのみ使用できる会話方だ。

「！……お兄ちゃん。今、他の女の事を考えてたでしょ」

「なあっ!?!」

不意に雪の目のハイライトが消失した。  
他の女って…… 叉夜は俺の別人格だぞ!?!

「私が目の前にいるのに他の女の事を考えるなんて……」

(や、ヤバくないか!?!)

【そんなことより早く逃げなさいよ!】

俺が心で呟くと叉夜が慌てながら叫んだ。

確かに早く逃げないとヤバイ!!

「!?!?!?!………また、他の女の事を考えたでしょ?」

【何で分かるのよ!?!?!】

「考えてない! 考えてないから! そして、その包丁はどこから出した!?!」

いつの間にか雪の右手には包丁が握られており、左手は俺の右手首を力強く握り締めていた。  
その光景に叉夜は青ざめている。

「……………本当に?」

「本当に本当に本当だ!?!」

俺が何度も頷くと雪は包丁を光の粒子にしてしまった。

ISの武装にしているのかよ!?!

「……………今はそう言うことにしてあげる」

【今は、って…!】

又夜の言葉に激しく同意したいが考えたらまた雪が包丁を出しそうだな…

仕方無しに俺は浮き輪の上によじ上った。

「んで？なんのようなんだよ？」

「別に？ただ、お兄ちゃんを見つけたから来ただけだよ」

俺の問いに雪は当たり前だとしても言うかのように答える。  
それで俺は沈められたのか…

「……………よし、お前も沈め！！」

「きゃあ〜」

雪を捕まえようと動くが雪は素早く動き避ける。

【素早いわね…】

「待てや、コラー！！」

逃げる雪を俺は泳いで追いかける。

その少し上では半透明の又夜が呆れたように呟いていた。

side out

side 織斑千冬

竜馬は……………

なにやら魔神と楽しそうに追いかけてっこ？（泳いでいる場合はなんと言っのだろうか？）をしているな。

「……………はあ」

「どうかなさったんですか？織斑先生」

不意に山田くんが問いかけてきた。  
表情に出してしまったのか？

「いや、なんでもない」

「ですが先程……ああ、そう言うことですか」

山田くんは私の顔を見るなり何か分かったかのような表情を浮かべた。  
なんだというんだ？

「なにが、？そう言うこと？なのだ？」

「いえいえ、つまりは水着姿を竜馬先生に誉めてもらっていなくて溜め息を吐いていたんですよね？」

「んな！？！？」

山田くんの発言に私は狼狽してしまった。

どこからそんなことに！！？！？

「それじゃあ竜馬先生を呼ばないといけませんね。竜馬先生  
むぐぐう！？」

山田くんが竜馬を呼ぼうとするのを私は素早く背後に回り込み口を  
手で塞いだ。

「はあ……はあ……はあ……ん？何やってるんだ千冬？」

「なあっ！？り、竜馬！？！？」

いつの間にか軽く肩で息をしている竜馬が背後に立っていた。  
さっきまで向こうで魔神を追いかけていたはずじゃ！？

「い、いつの間に!？」

「いや、雪を追いかけていたら真耶に呼ばれた気がしてそっちを見て、その間に雪に逃げ切られたからとりあえず、ここに来てみたんだよ」

つ、つまりは山田くんの口を塞いでも遅かったと言っことなのか!？  
竜馬の言葉に私は軽く愕然とした。

「んで？呼んだか？」

「はい！呼びました！」

尋ねてくる竜馬に山田くんは手をあげて返事をする。

その瞬間に胸が揺れていることに気づいたのか竜馬は素早く明後日の方向を向いた。

「ツツツ／＼／＼／＼で…？何で呼んだんだ？」

私の視線に気づいたのか竜馬は顔を赤くして尋ねてきた。  
可愛いと思ったのは秘密だな。

「それはですね……竜馬先生、織斑先生を見てどう思いますか？」  
「千冬を見て？」

山田くんに言われて竜馬は私を見る。  
なんだか恥ずかしいな…

「そうだな……似合ってる。綺麗だと思うぞ／＼／＼／」  
「そ、そうか／＼／＼／」

赤くなりながら言う竜馬の姿に私もつい恥ずかしくなって俯いてし

まった。

その横で山田くんがニヤニヤしていたので学園に帰ったら組み手をすることに決めた。

勿論、休憩無しの100本連続組み手だ。

「つと、そう言えば一夏達はどうしたんだ？見当たらないけど…」

「あいつ等なら部屋で達は寝ているだろう。よほど疲れたらしい」

私の言葉に竜馬はなるほどと頷く。

side out

side 魔神竜馬

【みんな寝ているんだね】

(みたいだな)

又夜の呟きに俺は短く答える。

何気に又夜も水着を着ているので直視ができない。

千冬や真耶の水着姿もキツいと言っのに…

「竜馬、その…なんだ、ビーチバレーでもしないか？」

「ビーチバレー？構わないけど人数は？」

千冬の言葉に俺は千冬の胸などを見ないようにしながら尋ねる。

「なに、心配はいらん。あそこで生徒達がやっているからな」

そう言いながら千冬は砂浜を指差した。

指の先にはビーチバレーをする女子生徒達がいた。

「つか、マジでのほんのあれは水着なのか？」

まあ、肌が出てないから照れなくて済むけど。

ビーチバレーをする女子生徒達の中にのほほんを見つけ俺は思った。

「あ、私はちょっとやることがあるので失礼しますね」  
「分かった」

不意に真耶がそう言い旅館に向かって走っていった。

「ふむ。まあ、良いや。おーい！そのビーチバレーに俺と千冬も混ぜてくれ！」  
「ありや、たつつんと織斑先生？良いよ〜」

俺が尋ねるとのほほんがゆっくりと動きながら答えた。  
何故か千冬が頭を抱えている。

「どうした？」  
「生徒にあだ名で呼ばれて良いのか？」

ああ、その事に頭を抱えていたのか。  
千冬の言葉に俺は合点がいった。

「別に気にしないさ。さ、ビーチバレーをやるうぜ」  
「あ、ああ」

俺が促すと千冬は少し呆れながらも頷いた。  
そしてビーチバレーのチームは俺と千冬の教師コンビVSのほほん達、女子生徒の生徒チームに別れてやることになった。  
何故、俺と千冬だけなのかと言うと単純に？パワーバランスがおかしくなる？と女子生徒達に言われたからだ。

「それじゃあ、行きますよ！七月のサマーデビルと言われたこの私  
の実力を……見よ！」



然り気無く敬語が抜けてるな。  
ジャンピングサーブをいきなり放つ女子生徒に俺は余計なことを思  
考した。

「千冬、頼む！」

「分かった！」

俺は素早くボールを上空に打ち上げ千冬に言う。

千冬は落ちてくるボールを的確に打ち上げ丁度よい場所にあげる。

「まずは1点を先にいただくよ！」

丁度よい場所に打ち上げられたボールを、俺はジャンプして跳び上  
がり一回転し踵落<sup>かかと</sup>として相手コートに叩き込んだ。

「ちよっ!?!?!?これなんてムリゲー!?!?!?」

「たっつん手加減してよ」

「竜馬……ビーチボールは蹴るものじゃないと思うが……」

その後、ルールに?ボールを蹴るの禁止?が追加された。

「それじゃあ再開するか」

「ああ」

そして俺達はビーチバレーを再開し楽しんだ。

side out

side 第3者視点

「ね、ね、結局なんだったの?教えてよ」

「……………ダメ。機密だから」

夕食時、シャルロットの周囲に一年女子が群がりあれやこれやと質問をする。

関係者の中で取っつきやすいシャルロットになれば訊けると判断したのだろう。

「ちえ〜。シャルロットってばお堅いなあ」

「あのねえ、聞いたら制約つくんだよ？いいの？」

「それ以前に機密をしゃべるようなやつは専用機を持っていないんじゃない？」

シャルロット、雪と続いて答える。

他の女子生徒は不満そうにシャルロットから離れていく。

「うん、やっぱり旨いな」

「うむ、この刺身は特に美味しいな」

竜馬の言葉に千冬は頷き答える。

教師達の夕食のメニューも生徒達の物とそこまで違いはないのだ。

【ずるいなあ……………私も食べたいよ】

竜馬の背後に半透明の叉夜が現れ呟く。

（仕方がないな。口の部分だけ入れ替わるとか出来ないか？）

【ちよっと難しいわね……………残念だけど諦めるわ】

竜馬の言葉に叉夜は残念そうに答え部屋の中を飛び回る。

勿論、その姿は誰の目にも映らない。

ちなみにビーチバレーの勝敗は竜馬と千冬の教師コンビの勝利で終わった。

【あ、そうだ。食べ終わったら海に行つてね？私だって泳ぎたいんだから】

(分かったよ)

思い出したように言う叉夜に竜馬は頷き答える。  
そして夕食の時間は過ぎていく。

side out

side 魔神叉夜

「さて、と。こちら辺で良いか？」

【うん、大丈夫よ】

竜馬の言葉に私は頷く。  
今いるのは岩場付近だ。

【それじゃあ入れ替わるね】

「おう。あ、そう言えばこの辺りで一夏を見かけたら入れ替わるか助けるかしてくれ」

入れ替わる最中に竜馬は言った。

この辺りに来るのかな？

「……………ん。これでよし」と

【ああ……………つてえ！？】

いきなり竜馬が大きな声を出した。  
なんなのよ？

「なに？」

【胸を隠せ！！俺が水着だったのが原因だろうけども！！】

ああ、なんだそんなこと？

私は別に気にしないわよ。

私の今の格好を簡単に言うと、下に男物の水着を着て上は何も着ていない、ってところね。

「さして、泳ぐわよ」

【体を隠せええええええええええ！！！！】

『マスターも大変ですね…』

『私でも同じ反応をしてくれるでしょうか…？』

竜馬、うるさい。

無々、今は私の体なんだから自由よ。

光、たぶん私以上に言うんじゃないかしら？

まあ、今は泳ぐことを楽しむとしましょう。

「」

冷たい海水が肌に触れてきもちいい。

水の中ってこんなにも気持ちが良いんだ。  
ん？

「あれって……一夏？」

私達が海に入った岩場とは別の岩場に一夏が座っていた。  
あ、簞が来た。

【一夏が来たか……たぶんもうそろそろだな。入れ替わってくれ  
「え？特に何も起こらなそうよ？」

竜馬の言葉に私は首を傾げる。

別に2人が良い雰囲気なだけじゃないの？

「ほら、良い雰囲気じゃない？」

【……………そうだな。じゃあ、あの映像の未来は変わったのか？】

隠れてみると一夏と篤は良い雰囲気で会話をしていた。

ふむふむ……

「あ………竜馬。鈴音にセシリア、ラウラとシャルロットが来たよ？」

【げっ！？最悪のタイミングじゃねえか！！】

私の言葉に竜馬は慌てた。

なんだろう……？

次に起こることが予想できるわ。

ズバシュツ！！

「！？」

【今のは…ブルー・ティアーズのレーザー光……か？】

一夏と篤のいた場所から少し行った場所で青い光が瞬き私は驚く。

はあ、予想通り過ぎるよ……

私はのんびりと泳いじゃダメなのかしら？

そんなことを思いながら私は竜馬と入れ替わった。

side out

side 第3者視点

「はいはい、一夏を追い回すの一旦ストップ」

「「「「「「!?!?!?」「」「」「」

いきなり現れた竜馬に一夏達6人は驚き停止する。

【素直に止まるのね?】

『周りが見えていないかと思っていたのですが…』

その様子に又夜と無々が眩く。

「んで?お前らは何で一夏を追い回していたんだ?」

「止めないでください兄上。一夏の浮気は早目おちに対処しなければなりません」

ラウラの言葉と先程までの一夏の行動から大体のことを再理解した竜馬はため息を吐く。

「それは別に構わないが……せめて殺傷性の高い武器は使つなよ。

もしくはISで、一夏VSお前ら4人のバトルでもしろ。あ、あと早目に戻らないと千冬に見つかって説教か?」

「「「「「ツツ!!!!」「」「」「」

竜馬の言葉に6人はハツと思い出したように顔をあげる。

特に一夏は千冬と同室なだけに最も危ないだろう。

「くっ!一夏さん、学園に戻ったら覚えていなさい!」

「逃げたりしたら承知しないからね!」

「一夏、手加減はしないからね」

「一夏よ、浮気をしたことを後悔させてやるっ」

そう言い放つて4人はISを展開しながら旅館に文字通り飛んで帰った。

後に残された一夏は疲れたように夜空を見上げ、篝はなにやら顔を赤くしている。

「ほら、2人もさつさと戻れよ？イチャつくのは別に構わないが、前の行動によつては家族が……千冬が悲しむかもしれないんだからな」

『……………マスター、岬の方にてあの人物の反応をキャッチしました』  
不意に無々の発した言葉に竜馬は目を細め岬を睨み付ける。  
見れば拳を固く握りしめていた。

side out

side 魔神竜馬

「見つけたぞ！篠しのの之束たばね！！」

「ん？おやおやく？ちーちゃんよりも先に私を見つけるとは中々やるね」

俺が怒鳴ると束はおどけたように答える。

こいつと会話しているとイライラしてくるな…

「おい、ISの暴走事件を引き起こしたのはお前だろう……………」

「あれま？何でそう思うのかな？かな？」

鉦を持って追い回してきそうな感じで束は問いかける。

理由だと？

「生徒がいてもミサイルを放ってきて自分の興味を満たそうとする

お前のことだ、どうせなにか理由があったんだろ。例えば……一夏の『白式』に興味を持ち調べるため……で、どうだ」

「ふむ、そんな考えもあったか」

ん？

この声は…

「千冬？」

「まさか竜馬がいるとは思わなかったが…」

振り向くとそこに千冬が立っていた。  
いつの間にか……

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

東の言葉に千冬は短く答える。

まあ、長年の友人らしい雰囲気ではあるか。

「東、1つたどえ話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

千冬の言葉に東はおどけて答える。

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

「なるほど……」

俺は千冬の言葉に腕を組み頷く。

つまりは第の『紅椿』と今回の暴走事件か……



つまりは俺の考えはハズレだったわけか。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ。まあ、そこにISを吸収するイレギュラーや、ISを使用せずに事件を鎮圧できる者が現れるとは想定していなかったようだがな」

言いながら千冬は俺を見る。

ISを使用せずに事件を鎮圧できる者、つてのは俺のことだろうな。んで、ISを吸収するイレギュラー、つてのが？闇？か……

つーか筈を華々しくデビューさせるためだけに事件を起こしたのかよ……

「やつぱ殺すか…？」

「んふふ〜？そんなわけにはいかないかな〜　ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

俺の言葉に束は笑いながら答え千冬に尋ねる。

「そこそこにな」

「そうなんだ」

岬に吹き上げる風が、一度強く唸りを上げた。

「」

その風の中、何かを呟いて……束は消えた。  
くそっ！

まだ、2回しか会っていないがアイツが異常に厄介だったことは充分に理解できた！

「……………ふう」

「千冬…？」

【動かないの。そこは静かに頭を撫でてあげるのが男ってもんよ？】

ため息を吐き千冬が俺に体重を預ける。

どうしたら良いのか分からないしていると又夜が答えた。

とりあえず又夜の言う通りにして見るか…

そう考え俺は千冬の頭に手を置く。

「ツツ／／／／／」

(ちなみにこれはいつまでやれば良いんだ?)

【撫でてる間は他のことを考えないの！相手が満足するまでよ】

俺が尋ねると又夜は答え、消えてしまった。

無々はこの岬に着いたときから眠っており、光もとつくに眠っている。

実質的に今この場にいるのは俺と千冬だけとなる。

……………ヤバイ、考えた途端になんだか恥ずかしいぞ。

「……………／／／／／」

どうしたら良いんだろう……………

耳まで顔を赤くする千冬と頭を撫で続ける俺。

そんな状況が続く。

ガシャンツツ！！

「……………」

不意に何かがロードされるような音が響いた。  
驚き俺と千冬が音のした方を見るとそこにはISを展開し右手に包丁、左手に大振りなエネルギー刃を持つナイフを持った雪が飛んでいた。  
しかも目のハイライトが消失している。

「部屋で待ってても戻って来ないから心配になって見に来てみたら……ナンデコンナ所デ2人キリニナツテルノ？ナンデオ兄ちゃん八千冬ノ頭ヲ撫デテルノ？ネエ、ナンデ？ネエ、ネエネエ」

部屋で待っていたこと事態がおかしいのに雪の雰囲気それを言わせない。

ど、どうしたら良いんだ!?

先程とは違う意味で俺は困り果てていた。

(さ、又夜！緊急事態発生!!どうしたら良い!?)

【緊急事態?……えっと、死なないでね!】

呼び掛けると又夜はすぐに出てきたが雪の姿を見るや否や素早くその言い消えてしまった。

逃げやがった!!

「ソレジャア、オ兄ちゃん??オハナシ?シヨウカ……」

「絶対に嫌だあああああああ……!!……!!」

俺の叫び声が岬から海に広がっていった。

そして、俺と雪、兄妹の鬼ごっこが始まった。

ENJOY OF THE SUMMER (後書き)

〔霊使い達の雑談所〕

感想と贈り物ありがとうございます。

カイ・R・銃王さん、ルシフェル様、月光閃火様、霊宮空刀様、妖気様感想ありがとうございます。

カイ・R・銃王さんよりかき氷を大量に、  
霊宮空刀様よりフランの人形を、

頂きました。

竜王「フランの人形おおおおお!!!」

竜馬「速攻で抱き着きに行ったな…」

「ほとんどの人はあのスピードは見えない気が……」

竜王「あれ？いつの間にかイ・R・銃王さんのところよりカイと海道海里が来ました」

カイ「かき氷に紛れてきたから」

竜馬「寒かったんじゃないか？」

カイ「絶対零度が使えるからそれくらいは無問題だよ」

竜姫「凄いね」

「よつと、こんにちわ〜」

竜馬「お、来たのか」

竜王「霊宮空刀様のところより蛇川乱太が来ました」

乱太「まあな。あ、このかき氷食って良いか？」

竜馬「いっぱいあるから大丈夫だぞ」

又夜【食べ過ぎたらお腹を壊すかもね】

竜王「俺は腸が弱いからあまり食えないな」

雪「私は食べるよ〜」

「はぁ……………」

竜馬「!?!?!?」

竜王「あ、妖気様のところよりミイラが来ました」

竜馬「ど、どうしたんだよ!?!」

ミイラ「……………知り合いが2人死んでしまったんだ」

竜馬「!?!?!……………それは」

ミイラ「あの時、俺が無理して動いていれば…!」

竜馬「知り合いが死んだのか……」

ミイラ「ああ……俺が守れなかったせいだな」

竜馬「なら……なら、その悔しさや悲しさは絶対に忘れちゃならない。その辛さが自分を強くする糧になるのだから」

竜王「結構いい台詞かな？」

竜姫「さあ？まあ、とりあえず？闇を狩る少年？続きます」

番外編・タッグデュエル！！ 前編（前書き）

今回の話しもフレイス様に書いていただきました。

本当はもっとはやくに出す予定でしたがなかなか区切れが悪くて…

それではどうぞ

番外編・タッグデュエル！！ 前編

「ティア、準備はいいな」  
「もちろんですよ」

ユウキとティアナはお互いのデッキを確認しデッキ調整をしている。  
そして向こうには

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だ、（さてと今回のデュエルは勝てるか？）」

竜馬と雪もデッキの調整をしていた

\* \* \* \*

なのは「もう少しで始まるね！！」

フェイト「そうだね」

はやて「竜馬、勝てるやろうか…」

雪の威圧に軽く震えながら3人は竜馬達の勝利を願う。

早苗「ユウキさん大丈夫でしょうか…」

紫「大丈夫よ」

キャロ「お兄ちゃん！！頑張ってください！！」

こちらの女性（少女を含む）達も雪に同様に威圧されているが特に  
気にした様子はない。

\* \* \* \*



映姫「これより、ルールを説明します!!」

今回ルールを説明…審判をしてくれるのは映姫と竜王だ。

映姫「ライフポイントは4000そしてバトルロワイヤルルールとなっています。フィールド魔法については全体で1つとする。」

竜王「相手に効果が及ぶ効果（各種バースン効果など）については、効果を発動したプレイヤーが相手のうち1人を選択し、その相手にのみ効果が及ぶものとする。」

映姫「同様に、自分と相手に効果が及ぶ効果<sup>メタモルホットなど</sup>についても、効果を発動したプレイヤーが相手のうち1人を選択し、その相手と自分のみ効果が及ぶものとする。」

竜王「フィールド全体に効果が及ぶ効果や、ルール介入型<sup>ブラック・ローズ・ドラゴンなど</sup>の効果（王宮のお触れなど）については、全てのプレイヤーに効果が及ぶものとする。」

映姫「LPが0になる、またはデッキがゼロになると敗北となります」

竜王「さらにフェイス様から伝言が預かっている…このルールではライフが0になっても相手の墓地のカードを使用することができる…要するに《死者蘇生》で復活できるということだ。後、オリジナルカードに関しては相手フィールド上のカードを破壊する効果は…発動したプレイヤー以外、適用される」

映姫「それより、アニメ効果の《天よりの宝札》はお互いのプレイヤーがカードをドローする、つまり味方は手札補充することになります…危険だと思いませんか？」

竜王「そうだな…、ということでお互いと名のついたカードはカードによつて全員…または二人のどちらかを選択するので注意だ。後、禁止カードは全員1枚入っていることになっている」

映姫「では両者!!デュエルディスクを展開してください!!」

映姫の声にユウキとティアナと竜馬と雪はデュエルディスクを構えデュエルディスクを展開する。

竜王「これより！！ユウキ、ティアナVS竜馬、雪のバトルロワイヤルデュエルを開始する！！」

映姫「ユウキ、ティアナのライフが0になれば竜馬、雪チームの勝利になり逆に竜馬、雪のライフが0になった時ユウキ、ティアナチームの勝利にします」

\* \* \* \*

なのは「いよいよなの…」

はやて「にしても、兄妹仲がええなあ…」

はやての言葉にはやてに対する威圧が少しだけで緩和される。

キャラ「がんばってくださいーい！」

キャラが精一杯大きな声をだし応援をする。

\* \* \* \*

「いくぞ竜馬！！」

「前回の借りを返させてもらおう！！」

「ユウキ行くわよ！！」

「お兄ちゃん行くよ！！」

「……デュエル！！」「」「」

ユウキLP4000

ティアナLP4000

竜馬LP4000

雪LP4000

ユウキ達はデッキからカードを5枚ドロし手札を確認する。

「先攻はどうする、竜馬？」

「俺は後攻でも構わない」

「私もいいよ」

「ユウキが先でいいわよ」

「じゃあ先攻は俺がもらう！！俺のターンドロ！！俺は手札より儀式魔法《高等儀式術》を発動！！」

《高等儀式術》

儀式魔法（制限カード）

手札の儀式モンスター1体を選択し、そのカードとレベルの合計が同じになるように自分のデッキから通常モンスターを墓地へ送る。  
選択した儀式モンスター1体を特殊召喚する。

「さらにデッキより《ブラッド・ヴォルス》を墓地に送り！！」

《ブラッド・ヴォルス》

通常モンスター

星4 / 闇属性 / 獣戦士族 / 攻1900 / 守1200

悪行の限りを尽くし、それを喜びとしている魔獣人。手にした斧は常に血塗られている。

「儀式召喚！！いでよ《白竜の聖騎士》」

ナイト・オブ・ホワイトドラゴン

ナイト・オブ・ホワイトドラゴン  
《白竜の聖騎士》

儀式・効果モンスター

星4 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻1900 / 守1200

「白竜降臨」により降臨。フィールドか手札から、レベルが4以上になるようカードを生け贄に捧げなければならない。このカードが裏側守備表示のモンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わず裏側守備表示のままそのモンスターを破壊する。また、このカードを生け贄に捧げる事で手札またはデッキから「青眼の白龍」1体を特殊召喚する事ができる。（そのターン「青眼の白龍」は攻撃できない。）

「さらにモンスター効果を発動！！白竜の聖騎士をリリースし……  
いでよ《青眼の白龍》！！」

ナイト・オブ・ホワイトドラゴン

《青眼の白龍》

通常モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。どんな相手でも粉碎する、その

破壊力は計り知れない。

「《青眼の白龍》だと!?!」

「そうだ、今回のデッキはブルーアイズのデッキだ!?!俺の力を見せてやる!?!」

「おもしろい……なら見せてもらおうかユウキ!?!」

「さらに俺はリバーズカードを3枚伏せてターンエンドだ!?!」

ユウキ

LP4000

手札1

リバーズカード3

ユウキのターンが終了し雪のターンになる。  
順番は最初から決めているようだ。

「お兄ちゃん、私が先に行ってもいい?」

「ああ、頼むぞ雪」

「うん!?!私のターンドロ!?!」

雪はデッキからカードをドロし手札に加える  
そして雪はドロしたカードを手札に加えた後、手札を見る。

「(よし、これなら...)」

雪はカードを取り出しディスクの上に置いた

「私は、《マッド・ロブスター》を攻撃表示で召喚!!！」

《マッド・ロブスター》

通常モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻1700 / 守1000

世界中のグルメモンスター達に愛されている高級食材として有名。凶悪な味が刺激的という。

「私はカードを2枚伏せてターンエンド!! バトルロワイヤルルルにより最初のターンは攻撃できない!!！」

雪

LP4000

手札3

リバーズカード2

雪がエンド宣言した後次はティアナのターンになる

「私のターンドロ―!!！」

ティアナはデッキからカードをドロ―し手札に加える

「手札より永続魔法《守護神の宝札》を發動するわ！！」

《守護神の宝札》

永続魔法 アニメオリジナルカード

自分の手札から5枚捨てて發動する。その後、このカードの發動時にデッキからカードを2枚ドローする。このカードが表側表示で存在する限り、次の自分のターンのドローフェイズ時にデッキからカードを1枚ドローする。

「私の手札を5枚捨てることでデッキからカードを2枚ドローするそして次の私のターンのドローフェイズ時にデッキからカードを2枚ドローする！！」

\* \* \* \*

なのは「えー！？手札を5枚捨てる！？」

フェイト「手札増強カード…ティアナは手札をたくさん増やすつもりだね…」

ティアナの発動したカードになのはは驚きフェイトは冷静に分析をする。

\* \* \* \*

「私はモンスターを裏側守備表示で召喚」

ディスク板状の五つの枠の真ん中に、横向きにしたカードを裏面を

上にしてセットする。

すると、ティアナの正面足元に横長長方形の青白い光が発生し、光が収まると、そこには二十倍近く巨大化した裏面を上に向きになったカードが出現した。

「さらにリバーズカードを1枚セットしてターン終了よ」

ティアナ

LP4000

手札0

リバーズカード1

《守護神の宝札》

「（手札増強カード……しばらく置くとやばいかもな……）」

竜馬はティアナが出したカードを見てどう攻略するか考えた  
ティアナのターンが終了し竜馬のターンになる

「俺のターンドロー！！手札より《暗黒界の斥候 スカー》あんどくかいを守備  
表示で召喚！！」

《暗黒界の斥候 スカー》あんどくかい

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 500 / 守 500

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、自分のデッ



キから「暗黒界」と名のついたレベル4以下のモンスター1体を手札に加える。

「さらにリバーズカードを1枚伏せてターンエンドだ!!」

竜馬

LP4000

手札4

リバーズカード1

\* \* \* \*

なのは「最初のターンで激しいデュエルだね…」

フェイト「それにしても、ユウキがブルーアイズのデッキを使うなんて…」

はやて「(あのモンスターを出したら負けフラグやな)」

最初のターンにユウキがブルーアイズを召喚したこととティアナの発動した手札補充のカード。

この2枚だけで1ターン目から白熱している。

キャロ「フフフフフフ…アハハハハハ!!ブルーアイズよ竜馬を叩くんだ!!」

早苗「落ち着いてください!!」

文「紫さん、手伝って!!」

紫「しょうがないわね…」

紫はやれやれと言って文の指示に従い手伝つことに…  
だがこのバトルロワイヤルが大きな事件になることを予想はしなかつた。

\* \* \* \*

「俺のターン！！」

ユウキはデッキからカードをドローしドローカードを確認する  
その頃、雪は次のターンのことを考えていた

「（このターンさえ凌げば……このデュエルは私たちの勝ちになる  
！！）」

ちなみに雪の手札はこれだ

### 《終焉の王デミス》 しゅうえんのおう

儀式・効果モンスター

星8 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2400 / 守2000

「エンド・オブ・ザ・ワールド」により降臨。フィールドか手札から、レベルの合計が8になるようカードを生け贄に捧げなければならぬ。2000ライフポイントを払う事で、このカードを除くフィールド上のカードを全て破壊する。

### 《高等儀式術》 こうとうぎしじゆつ

儀式魔法（制限カード）

手札の儀式モンスター1体を選択し、そのカードとレベルの合計が同じになるように自分のデッキから通常モンスターを墓地へ送る。選択した儀式モンスター1体を特殊召喚する。

《封印されしエクゾディア》

効果モンスター（制限カード）

星3 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻1000 / 守1000

このカードと「封印されし者の右足」「封印されし者の左足」「封印されし者の右腕」「封印されし者の左腕」が手札に全て揃った時、デュエルに勝利する。

「（そして私が伏せたカードは、罠カード《補充要員》」

《補充要員》

通常罠

自分の墓地にモンスターが5体以上存在する場合に発動する事ができる。自分の墓地に存在する効果モンスター以外の攻撃力1500以下のモンスターを3体まで手札に加える。

「（このターンさえ凌げば、手札の《高等儀式術》を発動して、デッキからエクゾディアパーツ4枚とレベル4の通常モンスターを墓地に送る。もちろん今の手札だと勝てない……でも……次のカードは分かるわ次のターンでドロウするのは……《ダーク・バースト》！）」

《ダーク・バースト》

通常魔法

自分の墓地に存在する攻撃力1500以下の闇属性モンスター1体を手札に加える。

「（次のターン…勝利は確定する…）」

自身の勝利への道順を確認し雪は誰にもわからないように笑みを浮かべる。

「雪、お前のフィールド上には雑魚モンスターが1体それにリバーカードが2枚…つまり俺を罫をかげようとしていることが分かる。だが、大事なことを一つ忘れているぞ…」

「何…？」

ユウキの言葉に雪はうろん気にユウキを見る。

「それは…このターンで雪のライフを0にすることだ！！俺は手札より魔法カード《調和の宝札》を発動！！」

《調和の宝札》

通常魔法

手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「手札の《伝説の白石》ホワイト・オブ・レジェンドを墓地に送りデッキからカードを2枚ドロウする！！さらに《伝説の白石》ホワイト・オブ・レジェンドの効果発動！！デッキから2枚目のブルーアイズを手札に加える！！」

ホワイト・オブ・レジェンド  
《伝説の白石》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻 300 / 守 250

このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから「青眼の白龍」1体を手札に加える。

「まだだ！！2枚目の《調和の宝札》ちようわのほうさつを発動！！再び手札の《伝説の白石》おふ・れじェントを墓地に送りデッキからカードを2枚ドロウする！！さらにデッキから3枚目のブルーアイズを手札に加える！！」

ユウキはデッキからブルーアイズのカードを手札に加え手札はこれで合計4枚だ

「これで最後だ！！魔法カード《融合》ふごうを発動！！」

《融合》ふごう

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札と場に3体のブルーアイズを融合！！来い《青眼の究極竜》ブルーアイズ・アルティメットドラゴン！！」

《青眼の究極竜》

融合モンスター

星12 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻4500 / 守3800

「青眼の白龍」 + 「青眼の白龍」 + 「青眼の白龍」

ユウキのフィールド上に三つ首を持つ青眼の竜が雄たけびをする

\* \* \* \*

なのは「青眼の究極竜……」

フェイト「最初のターンから攻撃力4500……」

はやて「でもこのターンでライフは0にならないはずや……まだ序盤だし……」

紫「それはどうかしら……ユウキならこのターンで雪のライフを0にしそうだけど……」

はやての言葉に紫は素早く反応し答える。

\* \* \* \*

「クツ……ですが、《マッド・ロプスター》に攻撃されても私のライフは残る……！」

「それはどうかな？なら青眼の究極竜の攻撃を受け止めるがいい！

！青眼の究極竜で雑魚モンスターを攻撃……！」

青眼の究極竜は雪の《マッド・ロプスター》に向けて攻撃を仕掛けようと三つの口内に白き破壊の奔流を溜め込んでいく。

もちろん雪はこの攻撃を通すわけにはいかない

「罨発動《次元幽閉》!!!」

《次元幽閉》

通常罨

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができるカード…その攻撃モンスター1体をゲームから除外する!!!残念だけどユウキのモンスターは退場を願うわ!!!（次のターンで私たちの勝ち!!!）」

決まった。

雪はそう思ったのか笑みを浮かべ宣言した。

「甘いわ!!!カウンター罨発動!!!《魔宮の賄賂》」

《魔宮の賄賂》

カウンター罨

相手の魔法・罨カードの発動を無効にし破壊する。

相手はデッキからカードを1枚ドロウする。

「相手が発動した魔法・罨カードの発動を無効にしそのカードを破壊する!!!」

「そんな…!!?」

雪が仕掛けたカードはユウキの罫によって破壊された

「でも私のライフは残るわ!! 次のターンで…」

「何勘違いしているんだ? このターンで雪のライフを0にすると宣言したはずだ!! 手札から《オネスト》のモンスター効果を発動!」

《オネスト》

効果モンスター（制限カード）

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1100 / 守1900

自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。また、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

「手札のこのカードを墓地に送り… エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする!!」

「嘘…でしょ…」

\* \* \* \*

なのは「ということとは…」

フェイト「アルティメットドラゴンの攻撃力に《マッド・ロブスター》の攻撃力を加えるから」



はやて「攻撃力6200!？」

3人はアルティメットドラゴンの攻撃力を計算し驚愕する。

アリシア「これってまさか…」

紫「1ターンキルね…」

早苗「さすがユウキさん!！」

キャラ「喰らうがいい!!雪!!」

未だにキャラは社長状態らしく高笑いをしている。

\* \* \* \* \*

「とどめだ!!アルティメットバースト!!」

青眼の究極竜は雪のモンスターを破壊しライフを0にした。

「きゃあああああああああああああ!？」

雪

LP40000

「雪……!？」

「お兄ちゃん……ごめん……なさい……」

雪はアルティメットの攻撃を受け気絶をしたこの光景をみた竜馬は、

「……………ユウキ……………よくも……………よくも雪を……………!！」

怒りをユウキにぶつけるが、ユウキは無視をした

「ふうん、これが現実だ竜馬、最初からライフを0にすれば、俺の勝利に揺るぎはない……俺はこれでターンを終了する」

ユウキ

LP4000

手札0

リバーズカード2

\* \* \* \*

なのは「ま、まさか雪ちゃんが負けるなんて……」

フェイト「これじゃあ2対1だよ!？」

はやて「竜馬君! 頑張るんや!！」

雪が負けたことにより竜馬が不利になることを悲観する3人。

\* \* \* \*

「ユウキ、やりすぎじゃない……」

「作戦だからしょうがないよ、ティア頼むぞ」

「まあいいけど……私のターンドロー!!」

ティアナはデッキからカードを2枚ドローし手札に加える

「…私はカードを1枚伏せてターンエンドよ」

ティアナ

LP4000

手札1

リバーズカード2

《守護神の宝札》

\* \* \* \*

映姫「雪のライフが0になったのでユウキ ティアナ 竜馬の順になります」

竜王「これはユウキ達の勝ちかな……ん？」

竜王は竜馬の様子を見ると雰囲気が変わるように見えた  
竜王「なんだ……竜馬の様子がおかしくないか？」

映姫「……こ、これは……!？」

映姫は竜馬の放つ気配に驚き瞳を見開く。

\* \* \* \*

「ユウキ……よくも……雪を1ターンキルしてくれたな……生かせ

ておくかー！ー！ー！ー！！」

「何……これは……」

「……どうなっているの！？？」

「……ドロー……！！」

竜馬の周りは黒いオーラが包んでおり、デッキからカードをドロースする

「ユウキお前だけは絶対に許さねえ！！発動せよ！！」《オレイカルコスの結果》――！！」

《オレイカルコスの結果》<sup>けっかい</sup>

フィールド魔法 アニメオリジナル

このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上のモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。また、自分フィールド上の魔法・罨カードゾーンはモンスターカードゾーンとしても扱い、自分は魔法・罨カードゾーンにモンスターカードを召喚できる。自分フィールド上のモンスターカードゾーンと魔法・罨カードゾーンにモンスターカードが存在する場合、相手はモンスターカードゾーンのモンスターを攻撃対象に選ばなければならない。

「何！？《オレイカルコスの結果》<sup>けっかい</sup>だと！？」

そして竜馬のフィールド上に《オレイカルコスの結果》<sup>けっかい</sup>が出現し、ユウキとティアナの周りに張られる

\* \* \* \* \*

映姫「まずい……この結界は……」

紫「知っているわ……この結界の中でライフが0になったものは……魂を抜かれ……死に至る……」

なのは「そんな！？じゃあ竜馬が負けたら死んじゃうの！？」

はやて「うそやろ……どうしてこうなったんや……」

紫の言葉に2人は反応し叫ぶ。

紫「私の推測だけど……ユウキが雪に1ターンキルをしたからだと思  
うわ。その衝撃で竜馬は怒り、憎しみが表に出ているのよ……」

フエイト「助かる方法は無いんですか!？」

映姫「……助かる方法はありません、私の能力「白黒はつきりさせる  
能力」でユウキとティアナのどちらかが竜馬に勝つことができれば  
この結界は消える」

竜王「これじゃあ、竜馬は消えるんじゃないあ……」

映姫「大丈夫ですよ、私の能力を使えば竜馬はこのデュエルで負け  
ても魂は抜かれませんか……」

早苗「ただ……なんですか?」

映姫「……ユウキとティアナのライフが0になった時、魂は抜かれ……  
死にます」

キヤロ「!?そんな……」 もとに戻った

竜王「じゃあ、紫の隙間で脱出すれば……」

紫「……それができないのよ、悔しいけど……この結界に入ることはで  
きないわ。たとえ、あなたの能力でも……」

竜王「ッ……」

自分で試して無理だったことを見破られ竜王は齒噛みする。

アリシア「このデュエルは……闇のデュエル……見守るしかないの……」

紫「そうね…今回はユウキ達を応援しましょう。いいわね」

紫の言葉で観客は頷きユウキ達のデュエルを見守る

\* \* \*

「ティアナ…ごめん、巻き込んでしまった…」

「いいわよ、別に…でもこの結界嫌な予感がするわ…」

「そのとおり、このデュエルで敗北したものは魂は抜かれ…死になる…」

「「なっ!?!」」

ユウキとティアナは竜馬の言葉に驚愕する

「この結界から抜け出すには俺のデュエルで勝つしか方法はない…ユウキ、覚悟するがいい、雪の敵をとってやる!」

「(…竜馬の目には憎しみがあふれている…俺のせいで…ティアナを巻き込んだ…この責任は…これしか…)」

ユウキがリバーカードを見つめる中、ティアナはユウキに話しかける。

「ユウキ!」

ユウキが考えているときティアナはユウキに話しかける

「なんだ、ティアナ?」

「もしかして…私を助けるために《ショックウェーブ》を使ってライフを0にするんじゃないでしょうね!」

「……………」

ティアナの推測にユウキは黙ってしまい  
ティアナの瞳には涙があふれていた

「いやよ……私のためにライフを0にしたら、私は……私は……」  
「……ティア……」

涙を流すティアナにユウキは静かに名を呼ぶ。

「ユウキ、お願い自分の命を大事にして！！私のためだけに命を捨てないで！！」

「……分かった、ティア……竜馬のライフを0にして正気を取り戻そう……」  
「……うん……」

ティアナは涙を拭きデュエルに集中する

ユウキとティアナは竜馬のライフを0にして正気を取り戻すことにするようだ

「さあ、デュエル続行だ！！フィールド魔法《オレイカルコス<sup>けっ</sup>の結<sup>かい</sup>界》は自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃力を500ポイントアップする効果を持っている！！手札から魔法カード《メイドコール》を発動！！」

《メイドコール》

通常魔法

自分フィールド上に存在するモンスター1体リリースすることでデッキまたは墓地から《紅魔・十六夜咲夜》自分フィールド上に特殊召喚する。

「俺のフィールド上に存在するモンスターをリリースしデッキから《紅魔 - 十六夜咲夜》を攻撃表示で特殊召喚!!」

《紅魔 - 十六夜咲夜》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守1300

相手のドローフェイズ、スタンバイフェイズ、メインフェイズ1、メインフェイズ2、バトルフェイズの内1つをスキップする。その後、自分の手札を2枚選択して墓地に捨てる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。このカードは？紅魔 - レミリア・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

竜馬のフィールド上に存在する《あんこくかい暗黒界の斥候 せつこうスカー》をリリースし竜馬のフィールド上に咲夜が現れた

咲夜「…これは…!?!」

「咲夜、オレイカルコスの力を得るがいい!!」

咲夜「魔神様…何を…:…きゃあああああああ!?!」

咲夜

ATK1900 ATK2400

「うそだろ…竜馬…あんな性格だっけ…」

「仲間のことを考えていない…ユウキ、普段の竜馬と考えないほうがいいわ」



ティアナが言い終わると咲夜は竜馬のほうへ向いて指示を待つているようだ

咲夜「……………魔神様……………指示を……………」

「ああ、そうだな……………まずはユウキを倒したいところだが…まずは彼女から殺るとしよう…咲夜でティアナの裏モンスターを攻撃！」

咲夜はティアナの裏モンスターを攻撃する

破壊した裏モンスターは《ボルト・ヘッジホッグ》だ。

《ボルト・ヘッジホッグ》

効果モンスター

星2/地属性/機械族/攻 800/守 800

自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

「《ボルト・ヘッジホッグ》か……………墓地にいると厄介なモンスターだな。俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

竜馬

LP4000

手札1

リバーズカード3

\* \* \* \*

なのは「こんなの…竜馬君じゃないよ…」

早苗「咲夜さんが苦しい表情になっているのがわかります…」

紫「ユウキ、このデュエル絶対に勝ちなさい…そうじゃないと…私  
やここにいるみんなが悲しむわよ…」

アリシア「ユウキ、ティアナ…頑張って!!」

怒りと憎しみに囚われ仲間を全く思わない竜馬の行動に全員はユウ  
キとティアナの勝利を祈る。

竜王「（くそっ…確かに今日はアノ日だったが…予想外すぎる!）

」

\* \* \* \*

「俺のターンドロ―!!手札より魔法カード《オーロラ・ドロ―》  
を発動!!」

《オーロラ・ドロ―》

通常魔法 アニメオリジナル

手札にこのカードしか無い場合に発動する事ができる。デッキから  
カードを2枚ドロ―する。

「手札がこのカードしかないとき発動することができないカードだ。  
この効果によりデッキからカードを2枚ドロ―する!!」

ユウキはデッキからカードをドロートドロカードを確認する

「竜馬、お前のライフを0にして正気を戻してやる！！青眼の究極竜で咲夜を攻撃！！」

青眼の究極竜は咲夜に向けて攻撃を仕掛けようとするが…

「その攻撃を通すわけにはいかない！！畏発動《咲夜の世界》！！」

《咲夜の世界》

通常罨

自分フィールド上に《紅魔・十六夜咲夜》が攻撃対象にされたとき発動することができる。相手フィールド上のモンスターを1体破壊し、そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える

2258

「このカードは、咲夜が攻撃対象になった時発動することができるカード…その効果により、ユウキの青眼の究極竜を破壊する！！」

「何！？」

ユウキの青眼の究極竜は突然苦しみだし破壊された

「さらに破壊したモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージをユウキが受けることになる！！」

咲夜「ユウキ…喰らいなさい！！」

咲夜は、ユウキに向けてナイフを投げユウキは左腕にナイフが命中しユウキは悲鳴をあげた

「うわああああああああああああ！！」

ユウキ

LP4000 LP1750

「ユウキ!?!」

ティアナはユウキが刺さったナイフを見てみると…

ユウキの左腕には血が流れていた

「これは……本物のダメージ……」

「そうだ、これから受けるダメージは現実と同じになるライフが0になる前に気絶するかもしれないな……」「そんな……」

ティアナはいづれ自分もダメージを受けたらユウキのようになると思つた。

ユウキは右手を使いナイフを抜きティアナに話しかける

「大丈夫だ、ティア…俺は平気だ。もし、ダメージを受けることになつたら…俺が代わりにダメージを受ける……」

「そんな……私はユウキが傷つく姿は見たくない!!」

「黙つてる!!ティア!!このデュエルは闇のゲームだ!!ティアは年頃の女の子だから…男の俺に頼っておけばいいんだよ!!」

「でも…それじゃあ……」

ティアナの言葉にユウキは無視をしてデュエルをつづけた

「俺は《カイザー・シーホース》を守備表示で召喚!!」

《カイザー・シーホース》

効果モンスター

星4 / 光属性 / 海竜族 / 攻1700 / 守1650

光属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ!!」

ユウキ

LP1750

手札0

リバースカード3

ユウキのターンが終了しティアナのターンになる

「ティア、まずはこのデュエルを終わらせることが優先だ。俺のことは気にするな...」

「...ッ...私のターンドロー!!」

ティアナはデッキからカードを2枚ドローし手札に加える

「（.....これ以上、ユウキの傷つく姿を見たくない...まずは、この

状況をなんとかしないと……) 手札より《ロックストーン・ウォリアー》を攻撃表示で召喚!!」

《ロックストーン・ウォリアー》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 岩石族 / 攻1800 / 守1600

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。このカードの攻撃によってこのカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上に「ロックストーン・トークン」(岩石族・地・星1・攻/守0)2体を特殊召喚する。このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

「攻撃力1800……何を仕掛けるつもりだ？」

「こういうことよ!!バトル!!《ロックストーン・ウォリアー》で咲夜さんを攻撃するわ!!」

《ロックストーン・ウォリアー》 は咲夜に向けて攻撃を仕掛ける

「何を考えているのか知らないが…攻撃力は咲夜のほうが上だ!! 迎撃しろ!!」

咲夜「了解…」

咲夜はティアナのモンスターを戦闘破壊した

「……ツ……《ロックストーン・ウォリアー》の効果発動!!このカードは戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる!! さらにこのカードの攻撃によってこのカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、私のフィールド上に「ロックストーン・トークン」

2体を特殊召喚する！！」

ティアナのフィールド上に「ロックストーン・トークン」が出現し  
竜馬はなるほど呟いた

「《ロックストーン・ウォリアー》の自爆はこの為の伏線だったわけか…だが、守ってばかりじゃ、俺に勝つことはできない！！」

「それはどうかしら…手札から《ワンショット・ブースター》を特殊召喚！！」

《ワンショット・ブースター》

効果モンスター

星1/地属性/機械族/攻 0/守 0

自分がモンスターの召喚に成功したターン、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。このカードをリリースする事で、このターン自分のモンスターと戦闘を行った相手モンスター1体を破壊する。

「このカードは私がモンスターを召喚したターン手札からこのカードを特殊召喚することができるわ。さらにこのカードをリリースすることでこのターン私のモンスターと戦闘を行った相手モンスター1体を破壊する！！」

「何！？」

\* \* \* \*

フェイト「うまい！！これなら、ティアナのフィールドにモンスター

ーを残したまま竜馬のモンスターを破壊できるー!!」  
紫「これをかんがえるなんて…さすがね」

ティアナの行った作戦に手を上げ喜ぶもの、頷くものとそれぞれの反応を示す。

\* \* \* \* \*

ティアナが《ワンショット・ブースター》をリリースすると同時に  
咲夜は破壊された

咲夜「きゃあああああああー!!」

「(ごめんなさい、咲夜さん…)」

ティアナは咲夜さんを破壊したことを謝った

「チィ…こつもあつさり破壊されたか、使えないな…」

「竜馬、お前咲夜のこと使えないというのか!？」

「当たり前だ!!破壊されるのは雑魚モンスターと同じだ!!まあ、このカードの発動条件がそろったからいいけどよ…畏発動《従者の逆襲》!」

《従者の逆襲》

通常畏

自分フィールド上に表側表示で存在する

《紅魔・十六夜咲夜》がカード効果で破壊されたとき発動すること  
ができる。自分のライフを1000払うことで自分のエクストラデ  
ッキから《紅魔・レミリア・スカーレット》を自分フィールド上に



特殊召喚する。ただしこの効果での特殊召喚はシンクロ召喚として扱う。

「このカード効果により俺のライフを1000払うことでレミリアを特殊召喚する!!」

「そんな……」

「いでよレミリア!!」

竜馬

LP4000 3000

《紅魔・レミリア・スカーレット》

シンクロ・効果モンスター

星12/血属性/悪魔族/攻2800/守2500

チューナー+チューナー以外の悪魔族2体以上

自分フィールド上にこのカードが存在している時、発動した魔法、罫、効果モンスターの効果の対象を自分に変更することができる。

対象をとらない効果や自分フィールド上及び、相手フィールド上に適用される効果の場合、効果を無効にするか選択し無効にする場合、破壊するか破壊しないかを選択する事が出来る。

このカードが墓地に送られた時、「コウモリトークン」（悪魔族・血・星1・攻/守1000）を可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。次の自分のスタンバイフェイズ時このカードが墓地に存在し自分フィールド上に「コウモリトークン」が1体以上存在する場合、「コウモリトークン」を全て破壊し、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果を使用したターンのエンドフェイズに自分の手札を全て捨てる。

レミリア「ユウキ、前はよくも……何だ!?この結果は!?!」  
竜馬「レミリア、オレイカルコスの結果の力を得るがいい!」

レミリア「竜馬……何を……フッフッフ……アハハハハ!れみりあ……うー」

レミリア

ATK2800 ATK3300

レミリアはいきなり笑い出したかと思うとポーズをとり高らかに言った。

\* \* \* \*

文「これは…写真撮ったほうがいいのでしょうか？」  
映姫「そうですね、オレイカルコスの結果を使えばこのようになるということを説明するにはちょうどいいですね」  
文「では早速写真を…」

そう言い文はカリスマ性を全く感じないレミリアを写真に納めていった。

竜王「オレイカルコスでカリスマブレイクするのか…」

\* \* \* \*

「ティアナ…エンド宣言がまだだが？」  
「…ターンエンドよ」

ティアナ

LP4000

手札1

リバーズカード2

《守護神の宝札》

「俺のターンドロ―！手札より永続魔法《吸血鬼の結束》を発動」

《吸血鬼の結束》

永続魔法

自分フィールド上に？紅魔・レミア・スカーレット？または？紅魔・フランドール・スカーレット？が表側表示で存在する時発動する事が出来る。このカードがフィールド上存在する限り、「コウモリトークン」と「こ우もりトークン」は特殊召喚することは出来ない。またこのカードはカード効果で破壊することができない。

「このカードがフィールド上存在する限り…「コウモリトークン」と「こ우もりトークン」は特殊召喚することは出来ない。」

「またあのカードか…デメリットしかないカードだが…あのカード

があれば強力なカードを発動することができる…」

「さらに手札から魔法カード《神槍スピア・ザ・グングニル》を発動！！」

《神槍スピア・ザ・グングニル》

通常魔法

自分フィールド上に《紅魔・レミリア・スカーレット》が表側表示で存在し《吸血鬼の結束》が存在するとき手札から発動することができる。相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。この効果で破壊したモンスター1体につき500ポイントのダメージを相手ライフに与える。このカードを発動したターン《紅魔・レミリア・スカーレット》は攻撃宣言できない。

「俺のフィールドにレミリアが存在するとき発動することができる。相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！！」

「何だと…」

「このルールはバトルロワイヤルルールだが…このカードの効果はユウキとティアナのモンスターを全て破壊する！！行けレミリア！！」

レミリアはスペルカードを発動しユウキとティアナのモンスターに狙いを定める

レミリア「行くわよ…神槍「スピア・ザ・グングニル」！！」

レミリアが放った槍はユウキのモンスターとティアナのモンスターに全て命中し破壊された

「そんな……私のモンスターが……」

ユウキとティアナはモンスターがすべて破壊される光景を見て驚愕するしかなかった

さらに竜馬はティアナとユウキに向けてこう話した。

「さらに、破壊したモンスター1体につき500ポイントの追加ダメージを与える！！つまり、ユウキはモンスターが1体、ティアナは2体。よってユウキは500ポイント、ティアナに1000ポイントのダメージを与える！！」

「クッ……」

「……ッ……」

ユウキ

LP1750      LP1250

ティアナ

LP4000      LP3000

「俺はこれでターンエンドだ……！」

竜馬

LP3000

手札0

リバーズカード1

《吸血鬼の結束》

\* \* \* \*

アリシア「そんな……」

早苗「モンスターが全滅……!？」

ユウキとティアナの場のモンスターが全滅したことに見ている全員が口を開け驚愕する。

\* \* \* \*

「（このターンは耐えた……だが、次のターン竜馬は間違いなく俺を狙う確率が高いだが俺はティアを守りたい……俺のデッキよ……答えてくれ）俺のターンドロー……!」

ユウキはデッキからカードをドローする

「（来た……!）魔法カード《命削りの宝札》を発動……!」

《命削りの宝札》

通常魔法 アニメオリジナル

自分の手札が5枚になるよう、自分のデッキからカードをドローする。このカードが発動してから5ターン目のスタンバイフェイズ時、自分の手札を全て捨てる。

「この効果でデッキから新たに5枚のカードをドロロー！！そのリスクとして5ターン後すべての手札を墓地に送る！！」

ユウキはデッキからカードを5枚ドロローし、ドロローカードを確認する

「俺は手札より魔法カード《デビルズ・サンクチュアリ》を発動！！」

《デビルズ・サンクチュアリ》

通常魔法

「メタルデビル・トークン」(悪魔族・闇・星1・攻/守0)を、自分のフィールド上に1体特殊召喚する。このトークンは攻撃をする事ができない。「メタルデビル・トークン」の戦闘によるコントローラーへの超過ダメージは、かわりに相手プレイヤーが受ける。自分のスタンバイフェイズ毎に1000ライフポイントを払う。払わなければ、「メタルデビル・トークン」を破壊する。

「この効果で俺のフィールド上に「メタルデビル・トークン」を特殊召喚！！」

「メタルデビル・トークン」

ATK0

「さらにメタルデビル・トークンをリリースし！！《カイザー・グライダー》を守備表示で召喚！！」

《カイザー・グライダー》

効果モンスター

星6 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2200

このカードは同じ攻撃力を持つモンスターとの戦闘では破壊されない。このカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す。

「俺はこれでターンエンドだ!!」

ユウキ

LP1250

手札3

リバーズカード3

\* \* \* \*

早苗「どうしてメタルデビル・トークンを残さなかったのでしょうか?1ターンだけ耐えられると思いますが…」

紫「いいえ、ユウキの戦い方は間違っていないわ《カイザー・グライダー》は破壊されたときフィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す効果を持っているのよ」

なのは「ということは……ユウキの狙いは…」

フェイト「竜馬のモンスターを戻すということだね」

はやて「でも……うまくいくか不安や…」



早苗の疑問に対する紫の言葉に、なのは、フェイトは頷くがはやては心配そうに見る。

\* \* \* \*

「（今、私のフィールド上にモンスターがない。それに私の伏せカードは今の状態だと発動できない…ここは耐えるしかない…）私のターンドロー！！」

ティアナはデッキからカードを2枚ドローし手札に加える

「私は、《スターダスト・シャオロン》を守備表示で召喚してターンエンド！！」

《スターダスト・シャオロン》

効果モンスター

星1 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻 100 / 守 100

自分が「スターダスト・ドラゴン」のシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

ティアナ

LP3000

手札2

リバーズカード2

《守護神の宝札》

竜馬はティアナのモンスターを見て考えた

「（《スターダスト・シャオロン》は1ターンに1度だけ戦闘では破壊されないモンスターのはず……だが…カード効果で破壊すれば怖くない！！）俺のターンドロー！！手札から魔法カード《吸血鬼の施し》を発動！！」

《吸血鬼の施し》

通常魔法

自分のライフを半分払い発動する事が出来る。手札が6枚になるように自分のデッキからカードをドロウする。

「俺のライフを半分払うことで、手札が6枚になるようにカードをドロウする！！」

竜馬

LP3000 LP1500

竜馬の手札は0枚なのでデッキからカードを6枚ドロウし手札を確認する

「さらに俺は手札から魔法カード《吸血鬼の開放》を発動！！」

## 《吸血鬼の開放》

### 通常魔法

自分フィールド上に《吸血鬼の結束》が存在する時発動する事が出来る。自分のエクストラデッキから《紅魔・レミア・スカーレット》または《紅魔・フランドール・スカーレット》を自分フィールド上に特殊召喚する。ただしこの効果での特殊召喚はシンクロ召喚として扱う。

「このカード効果で《紅魔・フランドール・スカーレット》を特殊召喚する！！」  
フランドール「やっほー」

## 《紅魔・フランドール・スカーレット》

シンクロ・効果モンスター

星12/血属性/悪魔族/攻4500/守2000

チューナー+チューナー以外の悪魔族2体以上

このカードが攻撃した場合ダメージ計算後に相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。このカードが墓地に送られた時、「こもりトークン」(悪魔族・闇・星1・攻/守1000)を可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。次の自分のスタンバイフェイズ時このカードが墓地に存在し自分フィールド上に「こもりトークン」が1体以上存在する場合「こもりトークン」を全て破壊し、このカードを墓地から特殊召喚する。このカードが攻撃したターンのエンドフェイズに自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

フラン「ユウキ……前はよくも……ってこの結果は!？」  
「フラン! オレイカルコスの手を得るがいい!!」フラン「オレイカルコスの手? ……フフフ、アハハハハ!!」

フラン

ATK4500 ATK5000

レミリア「フラン……どうだオレイカルコスの手は？」

フラン「気分がいいわ……みんな壊してもいいんだね……」

普段は平常のはずのフランはオレイカルコスの手に呑まれ狂気を発動させる。

\* \* \* \*

なのは「ひいっ!」

文「なんですか……殺気が強すぎます……」

フランの放つ殺気になのは達は悲鳴を上げる。

悲鳴を上げなかったのは竜王、竜姫、紫、映姫の4人だ。

竜姫はお菓子作りをしており先程やって来た。

\* \* \* \*

「……この殺気……ッ」

ティアナはフランの殺気に体が震えていた。

それに気づいたユウキは…

「ティア、近くにいてもいいか？」

「！？だ、駄目よ！！デュエル中に移動は…」

フラン「別にいいよ！あなた達が一気に壊せるからね　いいよね竜馬」

「ユウキはティアナのダメージを代わりに受けるからな…これは好都合だ、いいだろう。ティアナの近くに移動してもいいぞ…なんなら傍でも構わんぞ」

フランの言葉に竜馬は普段ならば絶対に浮かべないような歪な笑みを浮かべ答える。

竜馬の別人格である又夜が出てこないのはおそらくオレイカルコスによるものだろう。

「交渉成立だな…」

「えっ！？う、うそでしょ！？私の傍にいたらデュエル中に邪魔になるんじゃない…」

「大丈夫だ、問題ない」

ユウキはそういつてティアナの傍に来る

竜馬はこの光景を見て楽しんでいた

「フフフツ、どうだユウキ、ティアナの近くにいた気分は？」

「今回はかりは感謝するよ竜馬。ティアは強がりだから正直に話してもらえないんだがな…」

「ちよつとユウキ、今はデュエル中よ！！そんな話をしている暇があつたら私から離れて！！」

「断る、今俺がティアの傍から離れるとやばい気がするからな…」

ユウキの言葉にティアナは…

「……ユウキ、私のために無茶をしないでよ……そうじゃないと私…」

「分かっている、俺はティアナから離れない…」

「（ありがとう…ユウキ…）」

ティアナはユウキの傍にすることを許可したようだ

「さあ、デュエルを再開するぞ…！」

竜馬の声にユウキとティアナはデュエルディスクを構える

「俺は手札から魔法カード、《フォー・オブ・アカインド》を発動  
！…」

《フォー・オブ・アカインド》

通常魔法

自分のフィールド上に？紅魔・フランドル・スカーレット？が存在する時に発動することができる。以下の効果から一つを選択する。？相手のフィールド上のカードを全て破壊する。？相手の手札を全て破壊する。？相手のライフに？紅魔・フランドル・スカーレット？の攻撃力の半分を与える。？自分のライフを4000払いこのカード以外のカードを全て破壊する。破壊した相手のカードは全て除外される。このカードを発動したターン自分はバトルフェイズを行えずエンドフェイズに？紅魔・フランドル・スカーレット？は破壊される。

「このカード効果で……ティアナにフランドルの攻撃力の半分の

ダメージを受けてもらおう！！もちろん？の効果を使つてな！！行け  
フラン！！」

フラン「フッフフ…行くよ！！禁忌「フォーオブアサインド」！！」  
「クツ……」

フランはティアナに向けて攻撃を仕掛ける

ティアナは同時に腕を交差して防御する

この様子を見ていたユウキは…ティアナの前に立った  
そして…

「うわあああああ！！」

「ユウキ！！」

ユウキはティアナが受けるはずだった効果ダメージを代わりに受けた  
その衝撃でユウキは倒れそうになるがティアナがユウキを支える

「無理しないで！！私は……」

「…俺はティアナを守りたいから行動をしただけだ……」

「ユウキ……」

傷つきボロボロになるユウキの言葉にティアナは言葉を失う。

「ユウキ、悪いがこの効果ダメージはティアナのダメージだ。よっ  
て2500ポイントのダメージを受けてもらおう」

ティアナ

LP3000 LP500

「さらに俺は場から畏発動！！《吸血鬼の暴走》！！」

## 《吸血鬼の暴走》

通常罫

自分フィールド上に《紅魔・レミリア・スカーレット》または、《紅魔・フランドール・スカーレット》が表側表示で存在し《吸血鬼の結束》が存在するとき発動することができる。フィールド上にセツトされている魔法・罫カードを全てゲームから除外する。

「このカードは俺のフィールド上に《吸血鬼の結束》とレミリアまたはフランが存在するとき発動できる特殊罫だ。このカード効果によりフィールド上に存在するセツトカードを全てゲームから除外する!!!」

「何!? ゲームから除外だと!？」

「そんな…」

竜馬の言葉にユウキとティアナは驚く。

「行くわよフラン!」

「アハハハ! ウン!」

レミリアの言葉を合図に2人の吸血鬼は飛び回る。

地を引き裂き、空には無数の筋が生まれる。

「はははは! 良いぞ! もつとやるんだ! 完膚なきまでに!!!」

暴れまわるレミリアとフランを見ながら竜馬は笑う。

レミリア、フランによってユウキの伏せカードとティアナの伏せカードは全てゲームから除外されてしまった。



「（…俺の伏せカードの3枚は《ショック・ウェーブ》）」

《ショック・ウェーブ》

通常罠 アニメオリジナル

自分のライフポイントが相手のライフポイントよりも少ない場合にのみ発動する事ができる。フィールド上に存在するモンスターを1体を破壊する。お互いのプレイヤーはそのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。

「（このカードを使ったらティアが悲しむからな……ゲームから除外してくれたほうが助かる…）」

ユウキはティアナの涙を見たくないため《ショック・ウェーブ》のカードを使わなかったのだ

「（私の伏せカードは、《リミッター・ブレイク》と《ガード・ブロック》の合計2枚のカード…）」

《リミッター・ブレイク》

通常罠

このカードが墓地へ送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から「スピード・ウォリアー」1体を特殊召喚する。

《ガード・ブロック》

通常罠

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。  
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「（今まで竜馬は私たちに効果ダメージを与える戦術に切り替えている…何か方法は…）」

竜馬の戦術にティアナは思考しどう対処するかを考える。

「俺は、カードを2枚伏せてターンを終了する…さらに《フォー・オブ・アカインド》の効果でフランは破壊される…」  
フラン「フフフフフツ、ユウキとティアナを壊してね？お姉さま」  
レミリア「任せなさい」

竜馬

LP1500

手札2

リバーズカード2

《吸血鬼の結束》

\* \* \* \*

なのは「竜馬君…」

フェイト「フランちゃんが破壊されても何も言わないなんて……」  
キャロ「やはり、いつもと違いますね」

フランが破壊されても何も言わない竜馬に全員は悲し気な表情を浮かべる。

\* \* \* \*

ユウキはティアナから離れデュエルを続ける。  
ティアナはユウキを見て大丈夫なのか心配をしていた  
そのことを気付かないユウキはターンを開始する。

「俺のターンドロロー!!」

ユウキはデッキからカードをドロローし手札に加える

「……竜馬は《カイザー・グライダー》を破壊しなかった……ということは、次のターンで手札に戻す、またはゲームから除外する可能性があるな……」

ユウキは竜馬の場を見てどうすればいいのか考えたその時、ユウキはあることに気付いた

「（待てよ、このカードを使えば……ティアを守ることができる、  
だったら俺は……）魔法カード《強欲な壺》を発動!!」

《強欲な壺》

通常魔法（禁止カード）

自分のデッキからカードを2枚ドロローする。

「デッキからカードを2枚ドロ―しさらに手札から魔法カード《コストダウン》を発動!!」

### 《コストダウン》

通常魔法

手札を1枚捨てる。自分の手札にある全てのモンスターカードのレベルを、発動ターンのエンドフェイズまで2つ下げる。

「このカードは、手札を1枚捨てることでモンスターレベルを2下げる!!この効果により、《異次元竜 トワイライトゾンドラゴン》を守備表示で召喚!!」

### 《異次元竜 トワイライトゾンドラゴン》

効果モンスター

星5 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻1200 / 守1500

このカードは対象を指定しない魔法・罠カードの効果では破壊されない。また、攻撃力1900以下のモンスターとの戦闘では破壊されない。

「トワイライトゾンドラゴンは攻撃力1900以下のモンスターとの戦闘では破壊されないモンスターだ!!さらにこのカードは対象を指定しない魔法・罠カードの効果では破壊されない!!そして、手札から装備魔法《明鏡止水の心》をトワイライトゾンドラゴンに装備して発動する!!」

《明鏡止水の心》  
めいきょうしずい じゆん

装備魔法

装備モンスターが攻撃力1300以上の場合このカードを破壊する。  
このカードを装備したモンスターは、戦闘や対象モンスターを破壊するカードの効果では破壊されない。

(ダメージ計算は適用する)

「このカードを装備したモンスターは、戦闘呼び対象モンスターを破壊するカードの効果では破壊されない。よって、トワイライトゾーンドラゴンはカード効果で破壊することができないモンスターになったということだ」

「さらに戦闘でも破壊されないとはいな…だがユウキ、守ってばかりじゃ俺にダメージを与えることができないぞ？」

鉄壁の守りを行うユウキを竜馬は嘲う

「……………俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

ユウキ

LP1750

手札2

リバーズカード1

《明鏡止水の心》  
めいきやうじすい こころ

ユウキのターンが終了しティアナのターンになる。

「私のターン…ドロー…」

ティアナはデッキからカードを2枚ドローし手札に加える

「（このままだと…ユウキはまた私のためにかばうかもしれない、でも今の手札は何もすることができない…）…私のターンは終了よ」

「ティア…」

ティアナはこのターン何も行動を行えずにターンを終了した

ティアナ

LP500

手札4

《守護神の宝札》

\* \* \* \*

早苗「守ることしかできないなんて…」

紫「それでも期を待つのは大切よ」

フェイト「ティアナはなにもしないで…うっん、ティアナも何もで

きないんだね」

場を見、ユウキとティアナの状況が悪いことに全員が悲観する。

竜姫「お菓子食べる？」

竜姫以外「」「」「空気を読んで!?!?!」「」「」

……………台無しである

\* \* \* \* \*

番外編・タッグデュエル！！ 前編（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、カイ・R・銃王さん、霊宮空刀様、月光閃火様、妖気様、フレイス様感想ありがとうございます。

霊宮空刀様よりレミアの人形を、

いただきました。

竜王「そろつたああああ！！」

竜馬「テンションたけえ……」

「うわああああああ！！！！」

竜馬「へ！？危ない！」

竜王「おお、ナイスキャッチ。だが何故にお姫様だっこ？」

竜姫「は！……まさか、竜×海なの！？」

竜馬「（竜姫は無視だな）落ちてくる人間を助けるとしたらこうなるだろ」

竜王「まあ、良いや。カイ・R・銃王さんのところより海里が来ました」



海里「助かった。ありがとう」

竜馬「どういたしまして」

竜王「と言うか後書きにお前は出てていいのか？」

竜姫「いいんじゃない？」

シュウンツ！

竜王「のわっ！？」

「つと後書きに着いたのか」

竜姫「あらま。月光閃火様が来ました」

竜王「確か束を探してるんだっただな…」

束「呼んだかい？」

竜馬「！！」

竜王「落ち着け！ここでは殴ろうとするな！」

竜馬「くっ…」

竜姫「あれ？月光閃火様は…っって、いた。なんだか束の頭を撫でてるね」

「邪魔をする…」

竜馬「ミイラ……」

竜王「あゝ……妖気様のところよりミイラが来ました」

ミイラ「また聞きたいことがある。これは相談料だとも思っ  
てくれ」

竜王「白い恋人か、旨いんだよな」

竜馬「分かった。答えられる限り答えよう」

ミイラ「それで充分だ………人を蘇らせるのは罪だと思うか？」

竜馬「!?!?!?!?!」

竜姫「ねえ？竜馬って確か……」

竜王「言うな」

竜馬「人を生き返らせる……俺はすでに1人生き返らせているんだ  
よな……あれは正しいことだったのか？」

ミイラ「……………」

竜馬「仮に……仮に生き返らせていなかったらフェイトはアリシアの  
ことを知らなかったんだよな……なら、俺は良いことをしたのか？だ  
が……アリシアは俺の寿命を分け与えたにすぎない……つまり人よりは  
やく死ぬ……」竜姫「普通に出してない設定を言ったね」

竜王「しっ!」

竜馬「悪い、ミイラ…こればかりは言えることが1つしかない」

ミイラ「聞かせてくれ…」

竜馬「人を生き返らせるなら、その人の命すべてにおいて責任を持ち大切に守るんだ」

ミイラ「……………そうか」

「失礼します」

竜王「お、フレイス様のところよりユウキ、こいしが来ました」

ユウキ「はっ!?!」

こいし「バレちゃった」

竜姫「可愛い」

竜王「悪かったな。なかなか区切れが悪くて投稿できなかった」

ユウキ「いえ、ところで本当になんでこいしに気付けるんですか?」

竜王「この小説の作者だから。とかじゃダメか?」

ユウキ「ダメだと思います」

こいし「〜」

竜姫「（ユウキの頭の上でジャンプしてるけど…重くないのかな？）

」

「お邪魔します！」

竜王「はえっ！？霊宮空刀様のところより園咲霧彦 空刀聖夜 霊宮空刀 相馬聖奈 光帝虎伍、竜魂絶夜が来ました…って！1人の作者につき2名までだから何人が帰ってくれ！」

「『『『『え〜』』』』」

竜王「え〜、じゃないから！とりあえず2名に絞ってね。それでは闇を狩る少年続きます」

番外編・タツグデュエル！！ 後編（前書き）

後編になります。

番外編・タッグデュエル！！ 後編

「フフフツツ…このターンは何もできないか…俺のターンドロ―！  
」

竜馬はデッキからカードをドロ―し手札に加える

「畏カード《紅魔の絆》を発動！！」

《紅魔の絆》

通常畏

自分フィールド上に《紅魔・レミア・スカーレット》1体しか存在しない時発動する事が出来る。自分のデッキ、墓地から「紅魔」と名の付くモンスターを1体ずつ自分フィールド上に特殊召喚する。このカードは自分のターンでしか発動する事が出来ない。

「このカードは俺のフィールド上にレミアしか存在しないとき発動することができるカードだ。俺のデッキ、墓地から「紅魔」と名の付くモンスター2体を特殊召喚することができる！！俺はデッキから《紅魔・小悪魔》、墓地から《紅魔・十六夜咲夜》を攻撃表示で特殊召喚する！！」小悪魔「こあー」  
咲夜「フフフツツ」

《紅魔・小悪魔》 チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 悪魔族 / 攻1300 / 守1500

このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから

闇属性のレベル4以下のモンスターを自分フィールド上に特殊召喚  
することが出来る。この効果を使用したターン自分はバトルフェイ  
ズを行えない。このカードは？紅魔 - パチュリー・ノーレッジ？の  
シンクロ素材にしか使用できない。

咲夜

ATK1900

小悪魔「何ですか…この結界は…うつ…」

「咲夜、小悪魔…オレイカルコスの結果の力を得るがいい!!」

小悪魔「うつ、うつ、うわあああああ!?!」

咲夜「ありがとうございます魔神様…」

咲夜

ATK1900 ATK2400

小悪魔

ATK1300 ATK1800

「（小悪魔までオレイカルコスの結界の力を…）だが、竜馬は小  
悪魔の効果を発動してシンクロモンスターを出すつもりか？」

「ユウキ、今までの俺とは違う小悪魔の効果を使わなくても、お前  
を倒せる方程式ができているんだよ!!」

「方程式だ…」

「そつだ、俺がティアナに向けて攻撃をすると必ずお前はかばうの

だろう？ならば、それを利用してユウキを倒す！！さらに俺は罠カード《禁断魔術》を発動する！！」

### 《禁断魔術》

通常罠

自分フィールド上に《紅魔・小悪魔》が表側表示で存在するとき発動することができる。自分フィールド上に存在する「紅魔・」と名のついたモンスター1体選択し相手の手札に加える  
この効果で加えたモンスターは通常召喚することができない。その後自分のエクストラデッキから《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》を自分フィールド上に特殊召喚する。（この特殊召喚はシンクロ召喚として扱う）

「《禁断魔術》だと!？」

竜馬の罠カードにユウキは驚愕する

「ユウキ、このカードが分かるの？」

ティアナはユウキに質問しユウキはティアナに向けて頷く

「ああ、あれは小悪魔が存在するとき発動することができるカード…発動条件は簡単だが、あのカードは危険なんだ」

「そのとおり、ユウキにはこのカードの存在を教えたがな…《禁断魔術》の効果で俺のフィールド上に存在する咲夜をユウキの手札に移動させることでエクストラデッキからパチュリーを特殊召喚することができる…!」



この言葉にティアナは驚愕した。  
竜馬はこの戦術を披露をしたくない。  
と、言ったことを思い出しユウキは竜馬に話しかける

「そんな……竜馬！　咲夜を相手の手札に加えることは……」

「そんなことはどうでもいい、咲夜、ユウキの手札に移動だ」

咲夜「了解しました」

竜馬が言い終わると咲夜が消え、ユウキの手札に加えられた

「竜馬、お前このカードは使わないって言ったんじゃないのか!？」

「俺はお前を倒すためだけならどんなカードを使ってでもユウキを倒してやる……ただそれだけだ」

「クッ……」

竜馬の言葉にユウキは歯噛みする。

もはやユウキの言葉は竜馬に届いていない。

「デュエルをつづけるぞ……《禁断魔術》の効果でパチュリーを攻撃表示で特殊召喚する!!」

小悪魔「来てください……わが主!!」

竜馬のフィールド上にパチュリーが現れる。

《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》

シンクロ・効果モンスター

星12 / 血属性 / 魔法使い族 / 攻2500 / 守500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、手札を1枚墓地に送り効果を発動する。墓地に送

ったカードによって以下の効果を得る。炎属性・相手に1500ポイントのダメージを与える。水属性・デッキからカードを2枚ドロ―する。風属性・相手のフィールド上のカードを3枚まで手札に戻す。地属性・相手の手札を2枚墓地に送る。光属性・このターン相手は魔法・罫・モンスター効果を1度だけしか発動できない。闇属性・フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。魔法カード・自分の墓地のカードを3枚選択しデッキに戻しシャッフルする。

パチュリー「ありがとう竜馬…さてと、ユウキ覚悟は…！?何…この結果は…うつ…」

「さあ、パチュリーよオレイカルコスの結果の力を得るがいい!!」  
パチュリー「うつ…きゃああああああ!!」

パチュリー

ATK2500 ATK3000

レミリア「パチュエ…気分はどうかしら？」

パチュリー「…ええ、とても気分がいいわ」

レミリアの言葉にパチュリーは歪に笑みを浮かべる。

その瞳には明らかに狂気が渦巻いている。

「さらにパチュリーの効果!手札の水属性モンスター、《スノーマン・イーター》を墓地に送りカードを2枚ドロ―する!!」

《スノーマンイーター》

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 0 / 守 1900

このカードがリバースした時、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

竜馬は《スノーマンイーター》を墓地に送りカードを2枚ドロウする

「手札から魔法カード《魔術破壊》を発動」

《魔術破壊》

通常魔法

自分フィールド上に《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》が表側表示で存在するとき発動することができる。相手フィールド上に存在する表側表示の魔法・罫カードを全て破壊する。

2298

「パチュリーが存在するとき相手フィールド上の表側表示の魔法・罫カードを全て破壊する！！つまりユウキが発動した《めいきょうすい明鏡止水の心こころ》ティアナが発動した《守護神の宝札》は破壊されるということだ！！」「何！？」

パチュリー「行くわよ…木符「グリーンストーム」！！」

パチュリーが発動したスペルカードによってユウキとティアナの表側表示の魔法・罫カードが破壊された

「ッ……大丈夫か？ティア？」

「なんとか……」

「まだまだ！！手札を1枚捨てることで魔法カード《魔術師の暴走》を発動！！」

### 《魔術師の暴走》

#### 通常魔法

自分フィールド上に《紅魔・パチュリー・ノーレッジ》が表側表示で存在するとき発動することができる。手札を1枚捨てて発動する。フィールド上に表側表示で存在する紅魔と名のついたモンスター以外全て破壊する。この効果で破壊されたモンスターの効果は無効になる。

「これでユウキとティアナのモンスターを破壊する！！」

「（…容赦ないな、このターンで魔法・罫、モンスターをほとんど破壊している…）」

パチュリー「火&土符「ラーヴァクロムレク」！！砕け散りなさい！！」

パチュリーはスペルカードを発動させ叫ぶ。

ユウキとティアナのモンスターが破壊されたが、トワイライトゾーンドラゴンはモンスター効果により無事だった

さらにユウキは墓地のモンスター効果を発動する。

「だが…この瞬間墓地に存在する《カイザーグライダー》のモンスター効果を発動！！フィールド上に存在するモンスター1体を手札に戻す！！」

「残念だが、《魔術師の暴走》の効果で破壊されたモンスター効果は無効になる」

「なっ！？（これじゃあ、竜馬のモンスターを戻すことができない

「!!」

「さて、ここでバトルと行きたいところだが……どう戦おうかな？」

現在ユウキのフィールド上にはトワイライトゾーンドラゴン1体守備表示、リバースカードは1枚伏せられている

それに対して、ティアナのフィールド上にはカードが存在しない

「ここは……彼女を葬ったほうがいいかもな……」

「竜馬、俺を狙うんじゃないのかよ？」

「ふん、まずは弱いほうから倒しておくほうが得だからな……さあ覚悟はいいか!!」

「……ッ」

「レミリア!!ティアナにダイレクトアタックだ!!」

レミリア「終わりよ!!神槍「スピア・ザ・グングニル」!!」

レミリアはスペルカードを発動しティアナに向けて攻撃を仕掛ける

\* \* \* \*

早苗「ティアナさん!!」

はやて「あれが通ったらマズイで!!」

全員が悲痛な叫びを上げ慌てる。

\* \* \* \*

「(ごめん……ユウキ……もう少し……素直になればよかったな)」

ティアナはもう無理だと目を閉じた…  
だが……ユウキは伏せカードを発動する

「俺がティアを守る！！罨発動！！」  
《攻撃誘導バリア》！！」

《攻撃誘導バリア》

通常罨 アニメオリジナル

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃対象を自分フィールド上の守備表示モンスター1体に変更する。発動ターンのエンドフェイズ時まで、その守備表示モンスターの守備力は600ポイントアップする。ダメージ計算後、バトルフェイズを終了する。

「このカードは相手が攻撃したときに発動することができる罨カード！！その攻撃対象を自分フィールド上の守備表示モンスター1体に変更し、さらにその守備表示モンスターの守備力は600ポイントアップする！！」

「だが、トワイライトゾンドラゴンが破壊されるのは確実だ！！」

トワイライトゾンドラゴン

DEF1500 DEF2100

「それくらいわかっている！！手札から《ガード・ヘッジ》のモンスター効果を発動！！」

《ガード・ヘッジ》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 植物族 / 攻 0 / 守 2100

戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から墓地へ送って発動する。自分フィールド上に存在するモンスターはその戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで半分になる。

「このカードを墓地に送ることで俺のモンスターは戦闘では破壊されない!!」

レミリアが放った槍はユウキのトワイライトゾンドラゴンへと向かったが、途中が出現しレミリアの攻撃を封じた

「《ガード・ヘッジ》の効果により攻撃力は半分になる」

トワイライトゾンドラゴン

ATK1200 ATK600

\* \* \* \*

映姫「なんとか耐えたようですね……」

竜王「ああ、それにしても竜馬がここまでやるとはな……」

早苗「ユウキさん……ティアナさん……」

首の皮一枚と言った様子に映姫はホッとした様子だった。

竜姫「……ああ、アノ日なんだ」

\* \* \* \*

「さらに《こうげきゆうだん攻撃誘導バリア》の効果でバトルフェイズは終了だ！  
！」

「命拾いしたなティアナ、だがこのまま守ってばかりだと俺に勝てないぞ？」

「……………」

嘲るような竜馬の言葉にティアナは固く拳を握りしめ、唇を噛む。唇は切れて血が滲んでいた。

「バトルフェイズを終了されたら何もできないな…俺はここでターンエンドだ」

竜馬

LP1500

手札1

リバーズカード0

《吸血鬼の結束》

「この瞬間トワイライトゾンドラゴンの攻守は元に戻る」

トワイライトゾンドラゴン

ATK600 ATK1200



DEF2100 DEF1500

\* \* \*

なのは「ここはなんとか耐えた……」  
フェイト「でもこのままだと……」

たった1ターン……

しかし、この1ターンを耐えることはとても辛いものだった。

\* \* \*

「ユウキ……ごめんなさい、私のために……」  
「別にかまわんさ俺がティアを守るからな……」

ユウキの言葉にティアナは不安な表情になる

「（ユウキ……）」  
「俺のターン!!」

ユウキはデッキからカードをドロ―し手札に加える

「（だが俺の手札に召喚するモンスターがない……竜馬が発動した  
畏カード《禁断魔術》の効果で咲夜を通常召喚することができない  
……ならば……）」

ユウキは2枚のカードを取り出しデュエルディスクにセットする

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ!!」

ユウキLP1750

手札1

リバーズカード2

「私のターン…ドロー!!」

ユウキはカードを2枚伏せてターンを終了すると同時にティアナはデッキからカードをドローする

「…手札より《デッド・ガードナー》を守備表示で召喚」

《デッド・ガードナー》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 戦士族 / 攻 0 / 守 1900

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、このカードに攻撃対象を変更する事ができる。このカードが破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで1000ポイントダウンする。

「さらにカードを2枚伏せてターンエンド」

ティアナ

LP500

手札2

リバースカード2

\* \* \* \*

キャロ「守ることしかできないなんて…」

紫「次も耐えられるかなんて保証はない……でも、祈るしかないのよ」

ユウキとティアナが守ることしかできないことにキャロは悲しみ、紫は静かに答える。

竜姫「竜王、あれ……」

竜王「ああ、お前の予想通りだよ」

竜姫は誰にも気づかれないように竜王の近くに行き問う。  
それに対して竜王は頷く。

\* \* \* \*

「やはり守るしか無いようだな……俺のターンドロウー!」

竜馬はデッキからカードをドロウし手札に加える

「手札から《強欲な壺》<sup>しつよく</sup>を発動！！デッキからカードを2枚ドロ―する」

さらにデッキからカードを2枚手札に加える

「俺は手札から魔法カード《魔力加速術》を発動する」

### 《魔力加速術》

通常魔法

自分フィールド上に《紅魔 - 小悪魔》が表側表示で存在するとき手札から発動することができる。自分フィールド上に存在するモンスター1体リリースする。デッキからカードを3枚ドロ―し、その後手札から2枚捨てる。

「このカードは小悪魔が存在するとき発動することができる魔法カード。だがそのコストとしてモンスター1体リリースするわけだが……俺は小悪魔をリリースする！！」

小悪魔「了解しました……」

小悪魔の出番はここまで

「何！？竜馬が小悪魔を墓地に送るだど！？」

そして竜馬は小悪魔をリリースしデッキからカードを3枚引き、手札を2枚捨てた

「（来た……この罫はレミアアが存在するとき発動できる特殊罫……これでユウキを……うっ……なん……だ）クッ……！！」

竜馬はドロートしたカードを見てみると突然苦しみだした  
この光景を見たユウキとティアナは驚愕する

「どうした竜馬？」

「……………ユウキ……………頼む……………俺の……………闇人格を……………」

「！？闇人格……………」

「うっ……………とんだ邪魔が入ったな……………デュエルを再開するぞ」

「（竜馬……………お前は自分自身と戦っているんだな……………俺もここで……………！）」

苦しみながら言う竜馬の言葉にユウキは固く拳を握りしめ決意する。

\* \* \* \* \*

紫「闇人格！？」

なのは「竜馬君にそんなものが！？」

早苗「せ、説明してください！」

苦しみながら言う竜馬の言葉に全員は驚き竜王と竜姫に詰め寄る。

竜王「仕方がないか……………」

竜姫「教えてあげるよ」

全員の剣幕に圧され竜王と竜姫はゆっくりと口を開く。

竜王「竜馬の体にはある周期があるんだ」

フェイト「周期？」

竜王の言葉にフェイトは首をかしげる。

竜姫「そ、周期。女の子で言う？月経？みたいなものね」

早苗「それは分かりますが…」

紫「竜馬は男よ？？月経？なんてないわ」

竜王「その通り。ただし、その代わり竜馬には？月閻げつあゐ？がある」

全員「「「「？月閻？？」」「」」」

聞き慣れない単語に全員が不思議そうに尋ねる。

文「その？月閻？が今回のこれを引き起こしている原因だと？」

竜王「そうだ。？月閻？は竜馬が意識しなくても閻を溜める性質を指している。そして、竜馬が1ヶ月の内に最も閻を溜め込む日、それが？閻溜あんにゅうび日？。まあ、つまりは今日だな」

竜姫「この日に強い恨みや憎しみ、怒りを感じるとああなるのよ」

言いながら竜姫は竜馬を指差す。

竜王「普段なら？閻溜日？でもあそこまで怒りなどの感情を抱かないんだが……」

竜姫「どうやら雪に会えたことによつて軽くシスコン？が強くなつてきたのよ。まあ、会わ死ぬなくなる前も雪に対してはなんやかんやで甘かったみたいよ？」

はやて「い、今は関係ないやろ！？」

途中話が脱線したが全員が竜馬の説明を受けた。

\* \* \* \* \*

レミリア「大丈夫、竜馬？」

「安心しろ、俺は大丈夫だ…俺は手札より《紅魔・紅美鈴》を攻撃表示で召喚！！」

美鈴「アチヨー！！」

《紅魔・紅美鈴》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 血属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守2000

このカードがカード効果によって手札に加わったとき特殊召喚することができる。ただしこの効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上のモンスターを1体破壊し手札を1枚選択し墓地に捨てる。このカードは？紅魔・フランドール・スカーレット？のシンクロ素材にしか使用できない。

美鈴「…あれ？この結界はなんでしようか？」

「中国よ…オレイカルコスの結果の力を得るがいい！！」

美鈴「竜馬さん私は中国ではありません！！それにオレイカルコスの結界は何ですか？」

美鈴

ATK1900 ATK2400

「何…馬鹿な、オレイカルコスの結界の力を得ても正気に保っているだ！？」

竜馬はそのことに驚愕するが当の本人はまったく影響を受けていな

いようだ

美鈴「!?!?なんですか…この気は…あなたは竜馬さんじゃありませんね!!それにレミリア様とパチュリー様に何をしたんです!?!」  
レミリア「中国、私は正気よ…うー」  
パチュリー「私もよ…むきゅー」  
美鈴「何が起こったんですかー!?!?」

普段、見られない行動をみて美鈴は驚くしかなかった

\* \* \* \*

なのは「凄い!中国さん!!」  
紫「中国にしてはやるわね」

全員が口々に中国と呼ぶので美鈴は涙目になった。

\* \* \* \*

「(この状態じゃあ、中国は役に立たない…くそっ、ならば先にユウキを倒すまで!)俺はパチュリーの効果を発動する!!手札の《プロミネンス・ドラゴン》を墓地に送りユウキに1500ポイントのダメージを与える!!」

《プロミネンス・ドラゴン》

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 炎族 / 攻1500 / 守1000

自分フィールド上にこのカード以外の炎族モンスターが存在する場



合、このカードを攻撃する事はできない。自分のターンのエンドフ  
エイズ時、このカードは相手ライフに500ポイントダメージを与  
える。

パチュリー「フッフッフ行くわよ!」

美鈴「やめてください!!パチュリー様!!」

パチュリー「うるさい!!黙ってる!!居眠り門番中国!!」

美鈴「そ、そんな……」

パチュリーの言葉に美鈴ショックを受けいじけてしまい、止めるこ  
とができなくなった。そして

パチュリー「喰らいなさいユウキ!!火符「アグニシャイン」!!」

ユウキ「!?ティア来るな!!」

ティアナ「!?ユウキ!!」

ユウキはティアナから離れパチュリーのスペルカードの攻撃をつける

「うわああああああ!!」

ユウキ

LP1750 LP250

「ユウキ……!!」

炎の弾幕を受け叫ぶユウキの姿にティアナは涙を流し叫ぶ。

\* \* \* \*

なのは「もうやめて竜馬君ー!!」  
フェイト「もとに戻って!!」

アリシア「……こんなの……デュエルじゃない……」  
はやて「……そうやな……闇のデュエルやから……」

誰かが傷つくことを嫌うアリシアは涙を流しポツリと呟く。

紫「ユウキの能力はどんな攻撃しても跳ね返す程度の能力を持っているけど……オレイカルコスの結果の中では普通の人間よ!!」

映姫「!?では、ナイフが刺さった時も能力は……」

紫「ここまでダメージを受けているユウキはもう……」

早苗「そんな……」

キャラ「お兄ちゃーん!!」

紫の言葉に映姫は驚愕の表情を浮かべ、早苗とキャラは悲痛な表情を浮かべる。

\* \* \* \*

パチュリー「少しやりすぎたかしら?」

「十分だ、これくらいでなければユウキは……!?」

パチュリーのスペルカードで受けたユウキは……  
ポロポロになってもまだ立っていた

「まだ、俺のライフは……残っている……」

「ユウキ!!」

ティアナはユウキに駆け寄り抱きしめる

「もう無茶しないで!!後は私が何とかするから!!」

「...ティア、俺は大丈夫だ...離れてくれ...」

「嫌よ!!私は...私は...!!」

途切れ途切れに言葉を発しながらユウキは言うがティアナは離れようとしない。

「なら俺が離してやるよ!!バトル!!レミリアでトワイライトゾーンドラゴンを攻撃!!」

レミリア「行くわよ!!神槍「スピア・ザ・グングニル」!!」

レミリアはスペルカードを発動しユウキのモンスターを破壊する。これを見たユウキはティアナを離れたいが、さっきのダメージで力が入らなかった...

「!?!まずい...ティア!!俺から...」

「大丈夫よ...今度は私がユウキを守る!!」

「ほう...ならば見せてもらおうか!!パチュリーでユウキにダイレクタアタック!!」

パチュリー「再びこのスペルカードで終わらせてあげるわ!!火符「アグニシャイン」!!」

パチュリーのスペルカードでユウキとティアナに向けて攻撃をしかけるが...

ティアナは伏せカードを発動する

「畏発動！！《マジックアーム・シールド》！！」

《マジックアーム・シールド》

通常畏

自分フィールド上にモンスターが存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在する攻撃モンスター以外のモンスター1体のコントロールをバトルフェイズ終了時まで得て、そのモンスターに攻撃を受けさせる。

「このカードは私のフィールド上にモンスターが存在し相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができるカード！！相手フィールド上に表側表示で存在する攻撃モンスター以外のモンスター1体のコントロールをバトルフェイズ終了時まで、そのモンスターに攻撃を受けさせる！！」

\* \* \* \*

なのは「ということは……」

映姫「パチュリーの攻撃は、竜馬のモンスターになるといことです  
すね」

はやて「あれ……もしかしてこの展開って……」

はやては似たような展開を思い出し呟く。

\* \* \* \*

「私が選ぶモンスターはごめんなさい!!…美鈴さん!!」  
美鈴「えっ!? 私ですか!!」

そしてティアナが発動した畏カードによってパチュリーの攻撃対象は美鈴になり…結果

美鈴「きゃあああああああ!! どうして私はいつも壁役ですか…!! 私も活躍したいのに…!!」

パチュリーによって戦闘破壊された

「くそっ…中国を召喚するのが仇となっただか…」

竜馬

LP1500 LP900

ユウキはティアナからようやく離れることができたがまだ自分一人では立つことができず、今ユウキはティアナに支えられている状態だ

「ティア…」

「話さないで!! (ひどい火傷……応急処置しかできないけど…やれることはやらないと…このままじゃあ…)」

ユウキの状態を見て、ティアナは素早く携帯している医療キットで応急措置をする。

「(まあいい、次のターンユウキは必ずレミアを攻撃するはずだ、これで…)俺はカードを1枚伏せてターンを終了する!! さあユウキ、お前の最後のターンだ!!」

竜馬

手札0

リバーズカード1

《吸血鬼の結束》

\* \* \* \*

紫「ユウキ……………」

竜王「落ち着け紫、今の俺たちじゃあ何もできない……………」

心配そうにユウキを見る紫に竜王は悔しそうに言う。

その後ろでは竜姫が自分で作ったお菓子を食べている。

なのは「なんで！なんでそんなにのんびりしてるんですか！……」  
フェイト「心配じゃないんですか！……」

そんな竜姫になのはとフェイトが怒鳴る。

見ると竜王以外の全員が怒りの表情を浮かべている。

竜王「……………フツ、確かにそうだな。俺にも1つくれ」

竜姫「良いよ」

はやて「竜王！？」

いきなりの竜王の行動に全員が驚く。

早苗「何しているんですか！……」

竜王「いやな、竜姫は俺だから考えとかが伝わるんだよ。それで伝わってきた竜姫の感情は……………？信頼？」  
映姫「？信頼？……………ですか」

竜姫「そつ、絶対に竜馬とユウキとティアナは助かるもん」

事も無げに竜姫は言った。

\* \* \* \* \*

「ティア…………俺から離れてくれ」

「嫌よ！！私は！！」

「これで終わらせる、だから俺は…………」

ユウキはデュエルディスクに手を伸ばし…………デッキからカードをドロ―する

「（来た…………このカードで竜馬を…………救う！！）ティアこれを発動してくれ」

「でも…………」

「頼む…………」

「…………分かったわ」

ティアナはユウキがドロ―したカードを手に取りユウキの魔法・畏ゾーンのスリットに差し込む。

「魔法カード…………トランス・ミラー《龍の鏡》を発動…………！！」

トランス・ミラー  
《龍の鏡》

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによつ

て決められたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「このカードは、俺のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって…決められたモンスターをゲームから除外し…ドラゴン族の融合モンスター1体を…エキストラデッキから…特殊召喚する!!」

「何!? ドラゴン族の融合モンスターだと!?!」

竜馬はユウキのカードに驚愕した

この状況で上級モンスターが来るとは予想をしていなかったから…

「俺は墓地に眠る3体のブルーアイズを除外し…今、再び現れよ!!青眼の究極竜!!!!!!」

ユウキが叫んだ次の瞬間ユウキとティアナの前に青眼の究極竜が出現し竜馬に向けて咆哮する

青眼の究極竜

ATK4500

「青眼の究極竜…出てきたか…」

\* \* \* \*



なのは「ここでアルティメットドラゴンなの！」

アルティメットドラゴンが召喚され全員が大喜びする。

早苗「この攻撃でユウキとティアナの勝ちです!!」

嬉しそうに早苗は言う。

\* \* \* \*

「とどめだ、竜馬!!青眼の究極竜で……レミリアを攻撃!!」

青眼の究極竜はレミリアに向けて攻撃を仕掛けようとするが…

突然竜馬が笑い出しユウキとティアナは驚愕する

「フッフファツハハハハ!!かかったなユウキ!!これでお前のライフは0になったも同然!!罫カードオープン!!《紅き月の咆哮》を発動!!」

《紅き月の咆哮》

通常罫

自分フィールド上に《吸血鬼の結束》と《紅魔・レミリア・スカーレット》が表側表示で存在し、相手モンスターが攻撃宣言したとき発動することができる。フィールド上に表側表示で存在する紅魔と名のついたモンスター以外全てゲームから除外する。その後相手プレイヤーに《紅魔・レミリア・スカーレット》の攻撃力分のダメージを与える。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズまで《紅魔・レミリア・スカーレット》のモンスター効果は無効になる。

「このカードは、《吸血鬼の結束》とレミリアがで存在し相手モンスターが攻撃宣言したとき発動することができる罠カード!!ファイールド上に存在する紅魔と名のついたモンスター以外全てゲームから除外する!!」

「何!?!」

「そんな……」

ユウキが出した青眼の究極竜と《デット・ガードナー》がゲームから除外される光景を見てユウキとティアナは驚愕するしかなかったさらに竜馬は言葉を続ける

「まだまだ!! 《紅き月の咆哮》の効果でユウキはレミリアの攻撃力分のダメージを受けてもらっ!!」

「うそ……」

つまり、攻撃宣言したユウキはレミリアの攻撃力3300ポイントのダメージを受けることとなる

\* \* \* \*

キヤロ「そんな…お兄ちゃん!」

はやて「あかん!止めるんや竜馬君!」

ユウキが負ける…

そんな思いと共に全員は驚愕の表情を浮かべる。

\* \* \* \*

「ティア……ごめん」

「何よ！！ユウキ伏せカードがあるでしょう！！この効果を防げるんでしょ！！冗談はやめて！！」

「……無理だ俺の伏せカードの1枚は《収縮》」

《収縮》

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる。

「レミアアの攻撃力を下げても俺のライフは0になる……」

「そんな……」

ユウキは静かに首を振る。

その行動にティアナは絶句する。

レミアア「これで終わりよ！！紅符「スカーレットシユート」」

レミアアがスペルカードを宣言しユウキに向けて攻撃を仕掛ける  
ティアナはユウキを守ろうと前に出ようとしたが…

「えっ……」

「ティア……ありがとう……」

ユウキは最後の力を振り絞りティアナをレミアアの攻撃に当たらな

い場所まで飛ばした。  
そして…

「うわああああああああああ！？」

ユウキのライフが……

ユウキ

LP250 LP0

0になった…

\* \* \* \*

紫「そんな……」

映姫「……………」

早苗「ライフが……0……」

ライフが0になったことを知らせるブザーを聞きながら全員が言葉を失った。

\* \* \* \*

「ユウキ……？」

ティアナはユウキのライフが0になったのを確認する

「そんな……ユウキ…ユウキ!!」

ティアナはユウキに駆け寄ろうとしたが近づくことができなかった

「どうして!!ユウキの近くに行けないの!!」

「ライフポイントが0になった時オレイカルコスの結界がデュエリストを囲むのさ。つまりユウキの周りにオレイカルコスの結界によって魂を抜く作業が始まるうとしていているんだよ!!」

「やめて!!私は……」

「もう遅い、これでユウキの魂を……!!?」

オレイカルコスの結界がユウキを囲もうとした次の瞬間、竜馬は驚愕したなぜなら…

咲夜「時符「プライベートスクウェア」……」

「何だと……!!?」

「咲夜……さん…?」

なんとユウキの手札にいた咲夜がスペルカードを使い、ユウキの周りのオレイカルコスの結界を消した…

\* \* \* \*

紫「……どういうこと?」

映姫「ライフが0になったはずが……なぜ?」

キャロ「……!!?あれは!?!」

キヤロはユウキのフィールドを確認すると1枚の罠カードが発動していた

\* \* \* \*

「なぜだ…ユウキのライフが0になったはず…どうして咲夜が…」  
咲夜「ユウキさんが罠を発動したからです…」  
「罠だと…？」

竜馬の言葉に咲夜は？はい？と答えた

「でも…ユウキは負けたんじゃない…」  
「大丈夫です、ユウキさんはまだ負けていませんよ。ただ…デュエルを続けるのは無理ですが…」  
「負けてない？」

ティアナは涙を拭きユウキのフィールドを確認すると1枚の罠カードが発動していた

そのカードは……《魂（たましい）のリレー》のカードだ

《<sup>たましい</sup>魂のリレー》

通常罠 アニメオリジナル

自分のライフが0になるダメージを受ける直前に発動する。「自分のライフポイントが0になったらこのデュエルは相手が勝利する。」というルールが無効になる。その後、自分の手札からモンスター1体を選択して自分フィールド上に特殊召喚する。そのモンスターがフィールドから離れた時、自分はこのデュエルを敗北する。

「《魂たましいのリレー》……？」  
咲夜「魔神様が発動した罠カード《紅き月の咆哮》でライフが0になる直前に私はユウキさんの罠でオレイカルコスの結果を振り払ったのよ」

咲夜

ATK1900

咲夜はティアナに説明し竜馬は…

「まさか《禁断魔術》をこんな形で利用されるとはな、だが咲夜を排除すれば問題ない。ユウキが気絶をしているなら、ティアナのターンになるな…まあいい……、次のターンでユウキを倒す」  
「……！？」

竜馬の言葉にティアナは驚愕するがすぐに冷静になる  
そしてユウキの前に移動しデュエルディスクを構える

「私は…ユウキを守る！！咲夜さんを破壊はさせない！！」  
「ならば…足掻くがいい！！ティアナ、俺の力を見せる！！」

ユウキが気絶をしたためティアナのターンになる

「私のターンドロー！！魔法カード《強欲じやうよくな壺つぼ》を発動！！デッキからカードを2枚ドローし…《ロードランナー》を守備表示で召喚  
！！！」

《ロードランナー》

効果モンスター

星1/地属性/鳥獣族/攻 3000/守 3000

このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

「（このターンはユウキを守らないといけない私が…）さらにリバーカードを2枚セット！！ターンを終了するわ！！」

ティアナ

LP500

手札1

リバーカード2

「なるほどな、《ロードランナー》は攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。俺が発動しているオレイカルコスの結界の中では攻撃力を500ポイントアップする効果がある…戦闘で破壊するには少し難しいな」

「（これなら戦闘で破壊される心配はないはず…）」

ティアナの言うとおり竜馬のデッキは攻撃力が高いモンスターをたくさん入れているためこの状態では破壊することは難しい。

だが…



「忘れたか？俺の目的はユウキを倒すこと…つまり咲夜を倒せば俺の目的は達成される！！俺のターン！！」

竜馬はデッキからカードをドローしドローカードを確認した後バトルに入る

「バトルだ！！レミリアで咲夜を攻撃！！」

レミリア「神槍「スピア・ザ・グングニル」！！」

レミリアは咲夜に向けて攻撃を仕掛ける…

もちろんその攻撃は通すわけにはいかない

「墓地から魔法カード発動！！《まいぼつしん きゅうさい埋没神の救済》！！」

《埋没神の救済》

速攻魔法 アニメオリジナルカード

自分の墓地からこのカードを含む5枚のカードをゲームから除外する。発動ターンのバトルフェイズを無効にしてバトルフェイズを終了させる。

「何…墓地から発動する魔法カードだと！？」

「そうよ、このカードの効果で私の墓地から5枚のカードを除外しこのターンのバトルフェイズを終了する！！」

\* \* \* \*

なのは「このターンはなんとか耐えた……」

紫「最初のターンに《守護神の宝札》で5枚墓地に送られたのはこのためだったのね……」

ティアナの発動した魔法カードになのは達はホツとし、紫はいつ墓地に送ったのかを推察した。

\* \* \* \*

「まさか墓地から魔法カードを発動するとはな…俺はカードを1枚伏せてターンを終了する!!！」

竜馬

LP900

手札0

リバーズカード1

《吸血鬼の結束》

竜馬のエンド宣言にティアナは次はどうするか考える

「（このターンは何とか耐えた……でもあのカードを引かないと、ユウキを助けることができない、次のターンあのカードをドロースれば……）私の……ターン!!！」

ティアナは怯えるように瞼を閉じ、デッキからカードをドローする…  
恐る恐る瞼を開けてドローしたカードを確認。  
カードを確認した瞬間、ティアナの瞳に歓喜の光が宿った。

「……竜馬、このターンで終わらせてあげるわ!」

「何?このターンで終わらせると?」

ティアナの言葉に竜馬は眉をひそめる。

「私は、手札より《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》を召喚するわ  
!」

《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》  
チューナー（効果モンスター）  
星1/光属性/ドラゴン族/攻 0/守 0  
このカードをシンクロ素材とする場合、「セイヴァー」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

「《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》……だが攻撃力は0……何を  
仕掛けるつもりだ?」

「このカードを発動するためよ!!畏カード《激流葬》を発動する  
わ!」

《激流葬》

通常罨（制限カード）

モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動する事ができる。フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「このカードはモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動する事ができる罫カード。フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する!!!」

\* \* \* \*

キャロ「そんな!!!このカードを使った咲夜さんが破壊されてお兄ちゃんは……」  
紫「いえ…違うわ……」

叫ぶキャロを紫は冷静に落ち着かせる

\* \* \* \*

「ティアナ…フィールド上のモンスターを破壊して何になる?このままだ咲夜は破壊され、ユウキの敗北が決まる……」  
「残念だけど、私が《激流葬<sup>げきりゅうそう</sup>》を発動したのはこのカードを発動するためよ!!!罫カードオープン《スターライト・ロード》」

《スターライト・ロード》

通常罫

自分フィールド上に存在するカードを2枚以上破壊する効果が発動

した時に発動する事ができる。その効果を無効にし破壊する。その後、「スターダスト・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

「このカードは自分フィールド上に存在するカードを2枚以上破壊する効果が発動した時に発動する事ができる罫カード、その効果を無効に破壊する……その後私のフィールド上に《スターダスト・ドラゴン》を特殊召喚することができる!!!」

「何…まさか《激流葬げきりゅうそう》の発動したのは《スターダスト・ドラゴン》を呼び出すため……」

「来て…《スターダスト・ドラゴン》!!!」

ティアナの声に反応し《スターダスト・ドラゴン》が出現する

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「さらに私は、レベル1《ロード・ランナー》とレベル8《スターダスト・ドラゴン》にレベル1の《救世竜 セイヴァー・ドラゴン

《をチューニング！》

ティアナの呼びかけに、《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》は1つ緑の輪となりその中に《スターダスト・ドラゴン》と《ロード・ランナー》が通る

すると、《スターダスト・ドラゴン》と《ロード・ランナー》が透き通り、9つの星となる。

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！」

そしてその星が1列になりティアナはシンクロ召喚をする

「シンクロ召喚！<sup>リクメイ</sup>光来せよ、《セイヴァー・スター・ドラゴン》！」

《セイヴァー・スター・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星10/風属性/ドラゴン族/攻3800/守3000

「救世竜 セイヴァー・ドラゴン」+「スターダスト・ドラゴン」  
+チューナー以外のモンスター1体

相手が魔法・罫・効果モンスターの効果を発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし、相手フィールド上のカードを全て破壊する。1ターンに1度、エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター1体の効果を無効化できる。また、無効化したモンスターに記された効果をこのカードの効果として1度だけ発動できる。エンドフェイズ時にこのカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地に存在する「スターダスト・ドラゴン」1体を特殊召喚する

\* \* \* \*

竜王「セイヴァースター……闇を照らすにはいい光か」

竜姫「ほらね。これなら勝つでしょ」

紫「そのようね」

セイヴァースターを見、竜王は静かに呟く。

その横では竜姫が紅茶を飲み、紫は扇子を開いて口元を隠している。

\* \* \* \*

「《セイヴァースター・ドラゴン》の効果を発動！！ターンに1度、このターンのエンドフェイズまで相手の表側表示モンスター1体の効果を無効にすることができる！！私はパチュリーのモンスター効果を無効にするわ！！サブリメーション・ドレイン！！」

「（モンスター効果を無効にするだと…レミアとパチュリーはモンスター効果を無効にしても何も意味がない…何を考えている？）」

《セイヴァースター・ドラゴン》はパチュリーに向けて光を放つ  
この光景を見たティアナは竜馬に話しかける

「この効果で無効化になったモンスター効果は《セイヴァースター・ドラゴン》の効果として1度だけ使用することができる！！」

「何だと……」

セイヴァースターの効果を聞き竜馬は愕然とする。

「手札にある《スピード・ウォリアー》を墓地に送り《セイヴァー・スター・ドラゴン》の効果を発動!!」

《スピード・ウォリアー》

効果モンスター

星2 / 風属性 / 戦士族 / 攻 900 / 守 400

このカードの召喚に成功したターンのバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる。

「風属性モンスター墓地に送った時、相手のフィールド上のカードを3枚まで手札に戻すことができる!! 私は竜馬のフィールド上にいるパチュリーとレミリアと伏せカードを手札に戻す!!」

《セイヴァー・スター・ドラゴン》は竜馬に向けて風を起こし…

レミリア「きゃあああああああ!!」

パチュリー「きゃあああああああ!!」

咲夜「(お嬢様…申し訳ありません)」

竜馬の伏せカードは手札に戻った

「これで終わりよ!!! 《セイヴァー・スター・ドラゴン》で竜馬にダイレクトアタック!!!」

シューティング・ブラスター・ソニック!!!

《セイヴァー・スター・ドラゴン》は竜馬に向けて攻撃を仕掛け…



「うわあああああああああー!!」

竜馬のライフは…0になった…

竜馬

LP900 LP0

\* \* \* \*

竜王「終わった、か…」

竜姫「ね、勝ったでしょ」

デュエルが終わり倒れている竜馬を見ながら竜王と竜姫は呟く。

雪「ううん……お兄ちゃん!？」

気を失っていた雪が目を覚まし倒れている竜馬を見、叫ぶ。

竜王「竜馬は運んで寝かせておく。ゆっくり休めよ」

そう言っつて竜王は竜馬を背負い部屋から出ていく。

ティアナ「……………ユウキ」

ユウキ「ん…?」

ティアナに名を呼ばれユウキはふらつきながら振り向く。

ティアナ「ユウキ、もう絶対に無茶なんてしないで……」  
ユウキ「いや……今回は無茶じゃなくてあれしか出来なかったわけで……」

ティアナの言葉にユウキはドギマギとしながら答える。

ティアナ「それでも私のために無茶をしようとしたでしょ!!私  
ユウキが傷つく姿を見たくないのよ!!」

ユウキ「テイ、ティア!？」

叫びながらティアナが抱きついてきたのでユウキは目を白黒させる。

ユウキ「……………すまん。約束する、絶対に無茶はしない。でも、今は寝かせてくれ……」

ティアナ「ユ、ユウキ!？……………寝ちゃった」

抱きついてきたティアナの頭を撫でながらユウキはゆっくりとティアナに体重を預け寝息をたてていった。

別室

竜馬「う……………あ…………？」

短く声を発し竜馬は目を覚ました。

竜馬「ここは……………俺はいつたい……」

叉夜【起きたのね?】

呟く竜馬の目の前に半透明の叉夜が現れる。



竜馬「俺は…おれは…オレは…おれは…おれは、はは八葉は八齒は八破八八は……………」

竜馬は狂ったように言葉を発する。

無々『マスター……………』

光『気に病んでいるのですね……………』

又夜「はあ……………竜馬！」

竜馬「!!！」

溜め息を吐き又夜が一喝すると右半身、竜馬は目を開き驚いたような表情を浮かべる。

又夜「悪いことをしたと思うならまずは謝る！それが友達ってもんでしょ！それとも竜馬はいちいち誰かに助けてもらわなきゃいけないの!!！」

竜馬「又夜……………」

又夜の言葉に竜馬は静かに答える。

その瞳からは自責の念が少なからず薄れていた。

竜馬「そうだな…ありがとう又夜。俺は生きているんだから謝ることが出来るんだ」

又夜【気づけばいいのよ】

いつのまにやら又夜は竜馬の中から出てきて竜馬の前に現れ笑っている。

竜馬「そうと決まったら、すぐに謝りに行くか」

又夜【思い立ったが吉日ね!!】

そして竜馬は立ち上がり全員に謝りに向かった。  
紅魔組やなのは達、竜王、竜姫は快く許してくれ、ユウキ達には謝  
るのお詫びの品（翠屋のケーキ全種類、日用で役立つ洗剤などの  
セット）を渡し許してもらった。

番外編・タツグデュエル！！ 後編（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想と贈り物ありがとうございます。

月光閃火様、ルシフェル様、霊宮空刀様、カイ・R・銃王さん、妖  
気様感想ありがとうございます。

竜王「ふう…」

竜姫「何に疲れてるの？」

竜王「いや？月闇？とかを考えるのに苦労して」

竜姫「あゝ本編に出してないもんね」

月光閃火「出してよかったのか？」

竜王「ん〜…まあ、いずれは本編に出るからオツケーです」

聖夜「このお菓子は美味しいな」

空刀「そうだな」

竜姫「自信作だよ！エッヘン」

竜馬「つかお菓子を作っていてデュエルを途中から見るとか…」

竜王「竜姫だから」

「失礼します」

竜王「おお、カイ・R・銃王さんのところより海里が来ました」

海里「あ、お土産です」

竜姫「アルバム？……わゝ 私達の写真だね！」

竜王「どれどれ？」

雪「えつと…？」

竜馬「何で俺は女体化、もしくはコスプレの写真ばかりなんだ…

orz」

雪「可愛いからオツケーだよ！」

竜王「お前だからな。つとお疲れ様ミイラ」

ミイラ「あまり警戒する必要はなかったな」

竜姫「あつたりまえだよ！」

竜王「さて、次は本編が進むか又夜の説明になるか？闇を狩る少年続きます！」

もう1人の竜馬、又夜の説明。(前書き)

タイトル通り説明です

あ、一応質問です。

竜馬の使用した魔法の説明は出した方がいいですか？



## もう1人の竜馬、又夜の説明。

・魔神 又夜 (まがみ さや)

年齢 18才

誕生日 12月21日

身長・体重 175? / 48?

性格 楽観的(戦闘時、及びキレた場合は非情になる)

外見 瞳の色が無く、腰まである漆黒の髪。

どちらかと言うとたれ目だが戦闘時、及びキレた場合はつり目になる。

胸が大きく、だいたいFカップ(誤差は0.5〜1cm)くらいある。(子供の時に竜馬が女体化したときはC〜Dカップ辺りだったため成長している)

左腕が円筒になり背中には漆黒の翼がある。(どちらも着脱が可能)

魔力 EX

魔力光 漆黒

能力 自身の羽根を刀に変換する

竜馬のもう1つの人格。

竜馬が子供の姿の時は又夜も子供の外見だったがもとの年齢に戻っ

たことにより体が成長。

竜馬と入れ替わることによって肉体を持つ。

その時、竜馬は通常の叉夜の状態になり叉夜、無々、光にのみ認識できる。

左腕の円筒は居合や焰球、焰輪を創るために必要なものであり、翼は刀を創るために必要なものである。

以下使用した技、魔法の説明

・居合

左腕の円筒の3つの穴に刺し込んでいる刀から1本を使い居合い斬りを放つ。

・天照  
アマテラス

頭上に太陽と同等の焰球を創り出し相手に叩き込む。

・天照陽輪  
アマテラスヒノワ

左腕の円筒の先に高速回転する焰輪を創り出し相手を切り裂く。

・光束閃弾  
フォトン・バレット

魔力球を生成し放つ。

精密射撃などには向いているが威力はあまり無い。

・サンライト・フォトン・ブレイカー

2つの魔法を合成した詠唱を必要とする広域殲滅集束魔法。

左腕の円筒を分離させ巨大な八角形の輪にし、自身の前方に配置。巨大な八角形の輪の前方に幾重にも魔方陣が現れる。

さらにその周囲を取り囲むように無数の魔方陣が華のように並ぶ。

八角形から砲撃が放たれ魔方陣を通り抜けるたびに強化ブーストされていく。取り囲むように展開されている無数の魔方陣からも砲撃が放たれ1

つに合わさる。

また、取り囲むように展開されている無数の魔方陣から放たれる砲撃は合わせずに周囲に向けて発射も可能。

メインとなつてチャージされるものは光であるため魔力は補助程度。詠唱を途中で止めた場合、行き場を失つた光が暴走し爆発する。

詠唱【眩き光り、輝く光り、全てを照らし、全てを救済せん。力は正義であり、力は悪である。故に、力は善では無く、力は悪でも無い。紅鏡は等しく全てを助け、近づくモノ全てを焼き尽くす。浄化と破壊、異なる力は一つに合わせり新たな力を呼び覚まさん。明星は光りの道導となり万物を導く。光りは集いて闇を討ち払い、闇は集いて光りを討ち払う。今ここに、我が敵を滅する力を創り出せ！  
！陽ノ華、光リ束ネシ閃ク劫ヲ経タ砲口 サンライト・フォトン・ブレイカー】

ここに記した技、魔法は一部でありまだ使用していないものもある。

もう1人の竜馬、又夜の説明。(後書き)

〔霊使い達の雑談所〕

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、ルシフェル様、カイ・R・銃王さん、妖気様感想ありがとうございます。  
うございます。

カイ・R・銃王さんより竜馬と雪の性転換写真集を、  
いただきました。

竜馬「ぎゃああああああ!!!」

雪「そこまで女体化が嫌なんだね」

竜王「お前はなにも感じないんだな…」

雪「私は私だもん。お兄ちゃんを好きなのに変わりはないよ」

竜姫「ま、それもそうね」

「お邪魔します」

竜王「ん？ユタ様のところより…」

「性が博、名が麗、字は真名と一緒にで霊夢よ」

「私は性は曹、名は操、字は孟徳よ」

竜馬「真名？なんだそりゃ？」

竜姫「あつちでの風習じゃない？」

霊夢「そんなものよ。あと、私は男だから」

雪「やっぱり？そんな気がしてたんだよね」

竜王・竜姫・竜馬「（いや、分からないだろ……）」

竜馬「ん、なんだこの紙？えっと……華琳？」

華琳「！！」

竜馬「へ！？ちよっ！？なにになに！？」

竜王「どこの文字を読んだんだ？」

竜姫「あ、たぶんさつきどっかから投げ込まれた紙を読んだのよ」

霊夢「まあ、頑張りなさい」

竜馬「いや、今まで戦った奴よりは弱いけど……」

華琳「なんですって！！」

竜王「自分から火に油を注いだな」

「こんにちは」

竜王「おお、カイ・R・銃王さんのところよりカイとレヴィ・ザ・スラッシャーが来ました」

カイ「竜馬さんは大丈夫ですか？」

竜王「まあ、普段戦ってる人外やっよりは楽じゃないか？人間だから疲労とかあるし」

レヴィ「僕もいつくよ〜！！」

竜馬「乱入者！？つーか2対1！？もう変身していいか！？」

竜王「つまらなくなるから却下」

雪「戦うお兄ちゃんもかつこいいよー！」

「邪魔をする」

竜姫「あ、妖気様のところよりミイラが来ました」

ミイラ「持っていくように言われたんだが」

竜王「ん？作文？なにになに…？大切なもの？魔神竜馬」竜馬の作文か！読んでみよう」

《俺の大切なものは妹の雪です。なぜならたった1人の妹だからです。お父さんとお母さんはいなくなっちゃったので俺が雪を守らなといけないんです。このまえ、雪が誰かにつけられている、と言ってきました。だから、雪にいつも通りに家に帰るように言いまし

た。俺は隠れながら雪の回りを見張りました。すると1人の少し太った気持ちの悪いメガネの？（あまりにも汚く書かれており読めない）がハアハア言いながら雪を追いかけていました。俺はつい（??）近くにあった木とゴムを組み合わせて即席のボウガンを作ってしまった。ボウガンの矢は枝を折って鋭くしたものを使いました。矢が刺さると男は痛かったのか倒れて叫び出しました。雪をつけているのだから当然の報いだと思います。これからも雪を守っていいことと思います》

竜王「……………」

竜姫「……………」

霊夢「……………」

カイ「……………」

雪「お兄ちゃんが私をこんなに思ってくれてなんて嬉しいな〜」

ミイラ「大切なものを守るためには何でもやる、か」

竜王「……………まあ、感じ方は人それぞれだな。それでは、闇を狩る少年続きます」

華琳「倒れなさい!」

レヴィ「食らえ〜!」

竜馬「ああ、もう面倒くさい!」

たつ鳥あとを濁さず、忘れ物は無いように

side 魔神竜馬

「つ、疲れた……」

「あ、ああ……」

近くにIS『打鉄』の近接武装のブレードを突き立て俺と千冬は背中合わせに座っている。

見れば朝日が上ってきており少し向こうには雪が倒れて目を回していた。

「千冬がこれを持ってきてくれなかったらヤバかったな……」

「いや、竜馬が時間を稼いでくれたからだ……」

『打鉄』の近接武装のブレードを指差しながら俺は言う。

このブレードは俺が雪の気を引いている間に千冬が持ってきてくれた物だ。

無々と光はいまだに眠っている。

「とりあえず少しだけでも……寝……るか……ZZZ」

「そうだな……旅館……に……ZZZ」

動こうとしたが体が動かず俺の意識は途絶えた。

side out

side 第3者視点

朝、朝食に竜馬と千冬の姿が見えないことに騒ぎが起き旅館内を騒然とさせた。

ちなみに雪に関しては誰も騒がずに（教師を含む）？ああ、またか



?といった反応だった。

「織斑先生!? 竜馬先生!?!」

「竜馬! 千冬姉!」

特に眼鏡の教師と弟が慌てていたことをここに記す。

『マスター、なにやら旅館内が騒がしいようですよ?』

「んう…? くあゝ… つつ。こんなところで寝ちまったのか」

「んん…」

無々の言葉に竜馬は寝ぼけながらゆっくりと目を開ける。

背中合わせに座っている千冬を起こさないように気を付けながら竜馬は周囲を見る。

その近くには雪が転がって眠っていた。

( 又夜、これは千冬を抱き抱えて連れていった方が良いのか? )

【そうね、でも雪はどうするのよ?】

竜馬の心での言葉を聞き半透明の又夜が竜馬の背後に現れる。

又夜は軽く首をかしげながら尋ねた。

千冬を抱き抱えて行くと言うことは雪は運ばないと言うことなのだろうか?

( 雪は背負っていいのかなと思ってているが… )

【そう、なら抱き抱えて行くと良いんじゃないかしら?】

雪を見ながら竜馬は答える。

あまり会話をしているとまた雪が反応するのでは?と言う思いから2人(1人?)は会話もそこに切り上げた。

ちなみに竜馬が又夜と会話をしている時に微妙にだが雪の肩が動いていたことに2人は気づいていない。

「さて、今の時間は……IS及び専用装備の撤収だな」

そう呟き竜馬は雪を背負い、千冬を抱き抱え立ち上がった。

時刻はだいたい9時を回ると言ったところだ。

竜馬は座って眠ったせいで軽く固まった体に鞭を打ち全員がいる場所に向かう。

「お、織斑先生!？」

「真耶か、静かに千冬は疲れてるみたいだからな」

竜馬が雪を背負い、千冬を抱き抱えて行くと生徒や教師達から驚きの声とケータイのカメラのフラッシュが起った。

驚く真耶に竜馬は静かに言う。

「竜馬、何があつたんだ？」

「一夏か。いや、雪が…な」

一夏の問いに竜馬は背負っている雪を見ながら呟く。

その動作でほとんどの生徒と教師は納得したらしく頷いていた。

「それじゃあ千冬ね　織斑先生は？」

「俺に巻き込まれた形だ。無々と光が寝てたから『打鉄』のブレードを持ってきてもらって2人で雪を鎮圧した。そこまでは良かったんだが予想外に疲れてな、気がついたら寝ていて今に至る。ってわけだ」

竜馬は雪と千冬を降ろしながら答える。  
その言葉に何人かの教師は『打鉄』のブレードがなかった理由を理  
解し納得していた。

side out

side 魔神竜馬

「ん……」

「お？起きたか？」

小さく呻いて千冬がぼんやりと目を開ける。

俺が顔を覗き込むと千冬は寝惚け眼でジッと見つめ返してきた。

「……………／／／／！？！？」

「？…どうかしたのか？」

いきなり千冬は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「まあ、とりあえず起きたみたいだな。そろそろISの撤収作業も  
終わるだろ」

【結局、雪は起きなかったわね】

近くに無造作に寝かされている雪を見ながら又夜が眩く。  
確かにずっと寝てたな…

「っと、撤収作業が終わったみたいだな」

【じゃあ雪を起こしましょうか】

撤収作業が終わるのを確認し俺は雪の肩を揺する。

雪は短く声を発するとゆっくりと目を開け、俺にしがみついていた。

「動きたくない〜……」

「離れるっつ！！暑いし動き難いわ！！」

寝起きがだらしないのは相変わらずのようだ。

雪は死ぬ前も、こんな風に起きてこないのを起こそうとするとしがみついてきていた。

まあ、その後に毎回キツチリ頭を殴って起こしていたが…

「いい加減に……起きろ！！」

「キャンツ！？」

俺は拳を固く握りしめ雪の頭を殴った。

雪は涙目になりながら俺を見返す。

「い、痛いよお兄ちゃん……」

「すぐに離れないならもう一発落ちるが？」

離れようとしないうちにそう言つと雪は渋々と言つた表情で離れた。千冬はいつの間にか身嗜みを整えて生徒達の指揮をとっていた。

「ほれ、バスに乗るみたいだぞ？」

「お兄ちゃんも乗るんでしょ？」

並ぶ生徒達を見ながら俺は雪に言う。

俺は忘れ物とかが無いかのチェックがあるから乗れないんだよな…

「悪いが無理だ。忘れ物とかが無いかのチェックがあるからな」

「そっか……じゃあ、追い付いたら私の隣の席に座ってね？」

雪の言葉に俺は頷いた。

フエンリルになれば余裕で追い付くからな。  
それに昼食は帰り道のサービスエリアで取る予定だからそこで合流  
するのも手の1つだろう。

「ん？」

ふと気が付けばバスの中に見知らぬ女性……ん？  
いや、どっかで見たな……

「あ、千冬。さっきバスの中に入った女性って……」

「ん？ああ、彼女は福音のパイロットだ」

福音のパイロット……

ああ、道理で見た覚えがあるわけだ。

不意にバスの中からゴツ！となにかがぶつかる音が4つほど聞こえ  
てきた。

中を覗くと一夏が4本のペットボトルを持ちながら頭を擦っていた。  
さらにバスの中を見渡すと機嫌の悪そうな篤、セシリア、シャルロ  
ット、ラウラの姿が見えた。  
なんとなく一夏が4人を怒らせたのが分かったな……

【あれ？千冬が福音のパイロットと話をしてる】

（お、本当だ。まあ、俺には関係無いな。旅館の中に忘れ物とかが  
無いかのチェックに行くぞ）

呟く又夜の言葉に返し、俺は旅館の中に入った。

さて？

忘れ物は無いよな…？

.....

.....

.....

.....

結論。

忘れ物が結構あった。

ハンカチだとか開いてないお菓子とかはまだ良いけどさ……  
普通に下着とか18禁の本とかまで忘れ物としてあった……  
下着などが見つかつたときは本当に倒れるかと思つたな……  
一応全部フェンリルに変身して影にしまつたが……

【とりあえず全部千冬に渡しましよう】

「ああ、そうだな……」

俺としては下着とかのことを忘れたいがな……

とりあえずこれで忘れ物の確認は終わったな。

さっさとバスに追い付こう。

「無々、形状変化。形状はナイフ」

『了解しました。形状変化、ナイフ<sup>メイサー</sup>』

俺の言葉に無々は了承し形状を腕輪からナイフに変化させた。

「さて、ゼロ・インフィニティ契約に従い、我に宿れ、魔なる狼。黄昏の主にして縛めの象徴よ。其は狡猾にして凶悪なり。『魔狼転身』」

【あ、フェンリルに変身するのね？】

俺が詠唱をすると又夜が現れ言った。

変身が終わると又夜は耳を触ったり掌の肉球を触ったりしてきた。尻尾の時にギュって握られて声が出たのは仕方がないと思う。

【ふふふ〜 可愛い声だったね〜】

「う、うるせえ…／＼／＼／＼」

又夜の言葉に俺は顔をそらし呟く。

おそらく今の俺の顔は林檎よりも赤いだろう。

「さつさとバスに行くぞ……」

【顔を赤くしながら怒った口調でも可愛いだけよ？】

つーか自分の人格に可愛いとか言われても自分の首を絞めるだけな気がする……

「……………？影道？」

【あら、無視？】

俺は静かにそう呟き影に潜っていった。

side out

side 第3者視点

「いたたた……」

頭を擦りながら一夏は眩く。  
先程、投げつけられたペットボトルの痛みがいまだに引かないらしい。

「お兄ちゃんはまだかなあ……」

一方、窓の外を見つめ雪は恋しげに呟いた。  
行きとは違い竜馬と一緒に座ると約束したからか幾分かは機嫌が良  
いようだ。

不意にバス内部の屋根付近の影が泡立つ。

「何々!？」

「何が起こるの!？」

「くそっ!白s」

「こんな密閉された空間でISの発動はしない方がいい!！」

「ああ、お父さんお母さん。先立つ不幸をお許してください!！」

「綺麗に人生を締め括ろうとしてる娘がいるよ!？」

「ZZZ……」

「何で寝ていられるのよ!？」

「何か……来るぞ……!！」

いきなりの事態にバスの内部は騒然とした。  
そして、影の泡立つのが止む……

「……」

クラスの全員が息を呑む。

唾を呑む音でさえ大きく響く。

そして……



ズルンッ!!

突如として白銀の毛で覆われた腕が影から垂れ下がり現れた。

「ヒイツッ!!」

「い、いやああああああ!!!!!!」

「なんなのだこれは!?!」

「……………なあんだ」

「ZZZZ…………」

「いい加減に起きなさいよ!?!」

白銀の毛で覆われた腕が影から垂れ下がり現れたことによって、バスの内部は完全にパニックに陥っていった。

ある1人を除いて……

ズズズズズ…………

垂れ下がる腕が動き徐々に影から出てくる。

この光景にパニックに陥ったバスの内部は言葉を失い見つめており、何人かは気絶した。

「……………ふう」

影から現れた人物はバスの床に着地し、それと同時に両腕、両足を覆っていた白銀の毛、犬を連想させる耳と尻尾が消失し、髪の色が黒く変化する。

そして、影から現れた人物は一息をついてバスの内部を見渡し呟く。

「……………どうしたんだ? 涙目ばかりじゃないか。怖い思いでもし

たのか？」

「……魔神先生（竜馬先生）（竜馬）が原因です（だよ）！！！！！！」

影から現れた人物　竜馬の言葉にクラス全員（雪以外）は全く同じタイミングで叫んだ。

ちなみに千冬は影が泡立った時からIS『打鉄』のブレードに手を伸ばしていたが、現れたのが竜馬だと理解するとブレードから手を離し席に着いていた。

「俺が何かしたか？」

『皆目検討もつきません』

『マスターはただ移動して現れただけですよ？』

さっぱり分からないと言った風に竜馬は呟き、無々と光が答える。その光景に叫んだのがバカらしくなったのか全員が席に着き各々自由話し始めた。

「ちゃんと来てくれたね」

「まあ、約束したからな」

嬉しそうに雪は竜馬に言う。

と、そこで竜馬は思い出したように椅子から立ち上がる。

「千冬、忘れ物がいくつかあったんだが……」

「そうか、ではサービスエリアに着いてから持ち主を探すことにしよう」

竜馬の言葉に千冬は頷き答える。

忘れ物はいまだに竜馬の影の中だが問題はなく、竜馬がフェンリル

に変身すればいつでも取り出すことが可能だ。

「分かった」

【雪が怒ったら怖いから私は消えてるわね】

半透明の叉夜が現れ竜馬にそう言い消えていった。

たつ鳥あとを濁さず、忘れ物は無いように(後書き)

〔霊使い達の雑談所〕

感想と贈り物ありがとうございます。

ユタ様、ルシフェル様、カイ・R・銃王さん、霊宮空刀様、月光閃  
火様感想ありがとうございます。

カイ・R・銃王さんより別作品含むオリキャラ+ のポスターを、  
霊宮空刀様よりF a t e / s t a y n a g h tの世界行きのチケ  
ットを、

いただきました。

華琳「はあ…はあ…」

竜馬「い、いい加減に諦めるよ…」

竜王「ずっと戦ってたのかよ」

霊夢「よくやるわね」

竜姫「でも疲労の度合いが明白だよ？」

竜馬「まあ、気と魔力で体力の代用や底上げしてるし」

華琳「ひ…ハア…卑怯…ハア…:…よ」

竜王「息も絶え絶えってか？」

竜姫「諦めたら良いのに」

「お邪魔します」

竜王「あ、ユタ様のところより……えつと？」

「私は性が徐、名が晃、字が公明で、真名は教えることはできません」

竜姫「じゃあ公明ちゃんて良いね」

霊夢「それで？なにかあったの？」

公明「いえ、ただ御2人を御迎えに行くようにと」

竜王「つてもいまだに戦う気みたいだしな……」

竜馬「おい、迎えが来たみたいだぞ！」

華琳「関係ないわ！」

竜姫「……………気絶させても大丈夫？」

霊夢「大丈夫だと思うわ」

竜王「よし、竜馬く気絶させて連れてきてくれ〜！」

竜馬「気絶させるったって……」

無々『背後に回り込み殴るのはどうですか？』

光「魔力ダメージで気絶させるのはどうでしょう?」

竜姫「なんか悩んでるみたいね?」

竜王「あ、動いた。……………砲撃!?!?!」

霊夢「あの砲撃は安全なの?」

竜王「インフィニティの方だから気絶するくらいかな」

竜姫「当たったみたいね」

竜馬「疲れた…」

霊夢「お疲れ様。それじゃあ帰りましょう」

公明「はい、それでは」

竜王「行ったみたいだな。そついや雪は?」

竜姫「なんかアルバムから写真を何枚か抜いて自分の部屋に入っていたが…」

竜王「分かった、絶対に近づくな」

「こんにちは」

竜王「おお、カイ・R・銃王さんのところよりカイが来ました」

カイ「だいぶオリキャラが増えましたね」

竜王「実際こんなに出るとは思わなかったからな」

カイ「そうなんですか？」

竜姫「うん。最初は竜馬と雪、あと無々だけだったからね」

又夜「私はいなかったの？」

竜王「ああ、又夜は最初はただの竜馬の変身した姿の1つの予定だった」

竜姫「まあ、そのときに勢いで書いてるようなものだから」

又夜「不安すぎることを言わないでよ……」

カイ「あははは……」

「こんにちはー!!」

竜王「お、霊宮空刀様のところより？銃王さんの小説、とある永遠の仮面騎士の聖夜が来ました……あれ？この場合はどっちから来たことになるんだ？」

聖夜「気にしなくて良いんじゃないか？」

竜馬「気にしても疲れるだけだろ」

カイ「もともとは空刀さんのキャラなので良いのでは？」

竜姫「グチャグチャになってきた〜……」

又夜【私は寝よう】

竜馬（待てやコラ。俺だつて戦いっぱで眠いんだぞー！）

又夜【それは竜馬の自爆じゃないの】

竜馬（知るか！ともかく又夜も起きてろ！）

竜王「つーか最近は何が来てもやるのがなくなってきたな」

竜姫「だね。ケータイで書いてるから効率も悪いし」

聖夜「ネタ切れってわけか？」

竜王「そんなとこだよ。まあ、暇潰しにバカテストを出題して締め  
るわ」

バカテスト

・次の四字熟語を漢字にし意味を答えよ。

《しりめつれつ》

《かいとうらんま》

《あびきようかん》

《がりよつてんせい》

《えいこせいすい》

竜王「さて？どんな答えが来るかな？闇を狩る少年続きます」



## 忘れ物を届けに

side 織斑千冬

さて、全員サービスエリアで昼食を採り終えたな？

「竜馬、忘れ物を持ち主に渡すぞ」

「あ、ああ……」

私の言葉に竜馬は気乗りしないのか呟く。  
どうしたと言っただけ？

「実は……忘れ物の中に下着やら18禁の本やらがあったんだよ」  
「な！？……はあ。竜馬、お前が取り出して問題ないものだけ出してくれ」

竜馬の言葉に私は一瞬驚き溜め息を吐く。  
さすがに下着などを竜馬が手に持ったら変態扱いを受けてしまうからな。

「分かった。？影蔵？<sup>かげくら</sup>」

竜馬がそう言うのと竜馬の足元の影から様々なものが出てきた。  
便利なものだな。

「っと、まずはハンカチだな。これは……布仏本音のものだな」  
「？のほほん？のハンカチだったのか　いだあっ！？」

布仏をあだ名で呼ぶ竜馬の足を私は思わず踏み潰してしまった。

……うん、私は悪くないよな。

次にいこう。

「次は開いていないお菓子だ。これは分かるのか？」

「……………どうやら、ティナ・ハミルトンの物のようだ。見る、こんなところに名前が書いてある」

言いながら私は菓子袋の下の方を指差す。

そこにはマジックで『ティナ・ハミルトン』と書いてあった。

「マジか……………あ、本当だ」

「太る太る、とぼやいているようだが痩せる気はあるのか？」

名前を見、竜馬は呆れていた。

こんなカロリーの高いものを食べていては痩せるものも痩せないだろうに……………

「まあ、良い。竜馬、この2つを2人に届けてきてくれ。他にも忘れ物で今出せるものがあつたら出していつてほしい。届けてくる間に持ち主を把握する」

「分かった、頼むぞ。？影蔵？」

竜馬は私の目の前にいくつか荷物を置くとハンカチと菓子袋を手に取り届けに向かった。

さあ、手早くどの生徒の者かを把握してしまおう。

side out

side 魔神竜馬

えっと、ハンカチを？のほほん？に菓子袋をティナにだったな。

「確か……………ティナは鈴音と同室だったな。つーことは同じクラスな

のか？……いや、違うクラスの組み合わせもあったよなあ……」

呟きながら俺は2人を探す。

サーブスエリアにいるから苦労はしないはずだが……

「つと、あれは鈴音とティナだな。おーい！」

「ん？なによ、竜馬」

俺が声をかけると2人は立ち止まりこちらを向く。  
そして鈴音が尋ねてきた。

「忘れ物があつてな。はい、ティナのお菓子だ」

「あ、ありがとうございます！」

お菓子を渡すとティナは嬉しそうに受け取った。  
お菓子好きなのか……

「うっし、後は？のほほん？のハンカチだな」

鈴音とティナの2人と別れ俺は辺りを見渡し呟く。

【あ、後ろから雪が走ってきてるわよ？】

「なっ！？」      かつはあっ！？」

又夜の言葉に慌てて振り向くのと雪が俺の鳩尾に突撃してくるのは  
全く同時に俺の身体はくの字に折れ曲がった。  
あまりの痛みに俺は膝をつき鳩尾を押さえる。

「きゃああああ！？ゴメンね！ゴメンね、お兄ちゃん……！」

どうやら雪としても俺が振り向くのは予想外だったらしく目に涙を浮かべて謝っていた。

身体を揺すらないでくれ……

鳩尾に響く……

「ゆ…雪…俺は…な…何か…怒ら…せる…こと…を…したの…か…?」

「違う、違うの！ただ、お兄ちゃんに抱き着きたくて……ごめんなさああああい！！」

俺の言葉に雪は慌てて答え、泣き出し抱き着いてきた。

だ、だから揺すらないでくれ…

マジで鳩尾に響くから…

しばらくの間、うずくまる俺と泣きながら抱き着く雪の姿がその場にあった。

「……ふう。なんとか治まった…」

「ゴメンね！ゴメンね、お兄ちゃん！！」

額に浮かんでいた汗を拭い俺は立ち上がる。

いまだに雪は泣いて俺に抱き着いている。

「落ち着け、もう大丈夫だから」

「でも…でも…」

雪の頭に手を置きなだめるが一向に雪は泣き止まない。

「俺が大丈夫だって言ってるんだ。俺の言葉が信じられないのか？」

「そうじゃないけど……でも、私のせいで……」

また、泣き出しそうだし……

「はあ……雪、俺は本当に大丈夫だから。そんなに気に病むな」  
「うん……」

ダメだ。

すごく気に病んでやがる……

雪が元気じゃないと調子が狂うし……

「……雪、お前はたった1人の大切な人なんだ。だから、そんな悲しそうな表情をしないでくれ」  
「た、大切な人……！！／／／／／」

俺の言葉を聞き雪はすぐにこちらを見、顔を赤らめた。

間違ったことは言っていないし純然たる俺の思いだ。

「わ、分かったよお兄ちゃん！私、いつも笑顔でいるね！」

「お、おお……」  
「は、速いですね……」

そう言っつて雪は笑顔を浮かべながら走っていった。

その光景に俺は答える隙がなく、俺の心情を無々が代弁した。

『あの、マスター。？のほほん？さんは探さないんですか？』  
「あ、忘れてた。っても、探したら時間はかかるし……使いたくはなかったが……？影道？」

俺は自分の影に手をつき影に沈んでいった。

side out

side 第3者視点

「おりむー、おりむー。こんなのがあったよ」  
「え？」

？のほほん？こと本音は見つけたものを手に取り一夏に見せる。  
その手にはどこで見つけたのか芋虫とチヨココロネが合体したようなキーホルダーが握られていた。

「こ、これはどうだろう…？」  
「可愛くないかな？」

苦笑いを浮かべながら一夏は答える。  
それに対し本音は不思議そうに手に持つキーホルダーを見る。

「きゃっ!?!」  
「どうかしたのか？」

いきなり短い悲鳴をあげる本音に一夏は不思議そうに尋ねた。

「何かが足をつついたんだよ」

言いながら本音は横に動き先程まで立っていた場所を見る。  
すると本音の影が少しだけ分離しその場に停止する。

「これは…たつつん(竜馬)？」

分離した影を見、2人は眩く。  
その言葉に答えるように竜馬が影から現れた。

「すまん。あのまま出てたらお前のスカートの中に出てたから…」

…  
「うづん〜気にしてないよ〜」  
「と言うか、本当にどうやってるんだ？」

竜馬の言葉に本音は首を横に振る。

一夏は腕を組み首をかしげていた。

「こればかりは俺にしかできないと思うぞ。っと、忘れ物だ」

一夏の疑問に答えながら竜馬は本音にハンカチを渡す。

「あ〜、ありがとう〜」

「気を付けるよ？さて、一旦戻るか。時間になったらバスに集まれよな」

そう言い竜馬は影に手をつき沈んでいった。

side out

side 織斑千冬

「よつと、渡してきたぞ」

「遅い。2人を探すだけなのにどれだけ時間をかけているのだ」

影から現れた竜馬に私は言った。

『マスターは雪に突撃されて鳩尾にダメージを受けたんです』

『だから、ダメージが引くまで動けなかつたんですよ』

私の言葉に無々と光が反応し答える。

魔神が？

「それは大丈夫だったのか？」

「ダメージが引くのに時間がかかったくらいで他は大丈夫だ。……  
…まあ、雪が落ち込んだからそれをなだめていたのもあるが」

魔神が落ち込む…？

……………想像がつかないな。

「まあ、良い。残りの忘れ物なんだが……………」

「持ち主の把握が済んだのか？」

竜馬の言葉に私は頷く。

だが、少し問題が……………

「どうした？」

「どうしたもこうしたも無いだろう……………明らかにおかしいものではないか！」

尋ねる竜馬に私は忘れ物　一夏の写真（おそらく盗撮したもの）  
を突きつけた。

他にも？禁断の恋！！　気になる先生は男の娘！？ 『竜馬×一夏』  
？と言ったタイトルの薄い本まで忘れ物としてある始末……………

「いや、まあ、見つけた時はそう思ったけどよ……………もう、諦めよう  
かなと」

私の言葉に竜馬は遠い目をしながら空を見上げる。

なにか触れられたくないことでもあったのか？

「んで？持ち主は？」

「ん…ああ、写真がボーデヴィツヒ、デュノア、<sup>ファン</sup>鳳の3人で、こっ



ちの薄い本がオルコット、篠ノ之しのの2人だ」

写真には名前が、薄い本には名前の書かれた葉のような物が挟まれていたのですぐに分かった。

「あの5人が……」

「他の忘れ物は私も届けに行く、頼むぞ」

微妙に顔をしかめる竜馬に私はそう言い他の忘れ物を手に取った。

「分かった。あ、あと20分くらいでバスに集合だったよな？」

「ああ、そうだ」

頷き歩いていこうとして竜馬は足を止め振り返り尋ねた。

私の答えを聞き竜馬は頷き再び歩き始めた。

さあ、私も忘れ物を届けに行くとするか。

side out

side 魔神竜馬

【あの5人が忘れ物をするなんてね？】

(ああ、確かに意外だったかな)

俺の後ろを飛ぶ半透明の又夜の言葉に俺は答える。

と言うか、こんな本を書いたのは誰だ？

薄い本をチラリと見ながら俺は嘆息する。

「っと、最初はラウラか」

「どうかしたのですか兄上？」

前を横切ろうとしたラウラに気づき俺はラウラを止める。

呼び止められたことに不思議そうにラウラが問う。

「旅館に忘れ物をしただろ？ほれ」

「これは！！」

俺がラウラの名前の書かれた一夏の写真を取り出すとラウラは慌ててポケットの中を探す。

しかし、目的の物が見つからなかったのか少し頂垂れていた。

「あの、兄上……この事はどうか誰にも……」

「分かってるよ」

瞳を潤まし見上げるようにこちらを見るラウラに俺は写真を渡す。

そうになると、他の4人も秘密にした方が良いのか？

「まあ、良いか。他にも忘れ物を届けにいけないといけないから後でな」

「はい！」

そう言い俺はラウラと別れ他の4人を探しに向かう。

【次は誰かしらね？】

（さあな。ただ、鈴音は渡した瞬間に衝撃砲を撃たれそうな気がするんだよな。他には筭が斬りかかってきそうだし……）

子供のようにコロコロと笑いながら又夜は言う。

実際、本当に危ない気がする。

「ん？」

『あれは……シャルロットですね』

ふと見ればサービスエリアの売店でシャルロットが何かを物色していた。

あれは、キーホルダーか…？

「やっぱりこっちの……でも、こっちも……」

シャルロットは何やらキーホルダーを見比べているようだ。

あまりにも集中しているのか俺が近づいてもシャルロットは気づく素振りを見せない。

「シャルロット？」

「うひゃあい!？」

俺が声をかけるとシャルロットは変な声をあげてこちらを見た。

その手には色違いのキーホルダーが2組ずつの計4つ握られていた。

「な、なんでひゅか!？」

「いや、忘れ物を届けに来たんだが……お土産か？」

慌てたのかシャルロットは囁んでいた。

慌てすぎじゃないか？

【ふ〜ん…？一夏と2人で着けたいんだね】

「忘れ物ですか？……もしかして!」

「これだが？」

シャルロットは少し思案顔になりすぐに顔をあげる。

俺はその目の前にシャルロットの名前が書かれた一夏の写真を取り出す。

「あー！よかった…ありがとうございます！」

「……なあ、その写真ってどこから手に入れたんだ？」

シャルロットは写真を受け取り嬉しそうに言う。

俺は気になったことを尋ねた。

「えっと…すみません。この写真をもらったときに絶対に人に言わないようにと言われてましたので…」

「そうか。まあ、気になっただけだから気にしなくて良いぞ」

謝るシャルロットの頭に手を置き俺は答える。

残りは…写真が1枚に薄い本が2冊か。

シャルロットと別れ俺は再び歩き始めた。

【誰があの写真を渡したのかしら？】

(さあな？俺に実害はないが一応注意はしておくべきか…？)

腕を組ながら呟く又夜に俺は答える。

管理局で流行ってたあれよりはマシだが…

【実害があつたのは管理局で何故か配布されてた？年下に苛められる執務官 嫌よ嫌よも好きのうち！？ 『竜馬×クロノ』？と？探

索物は彼の心 僕の欲しいものは… 『竜馬×ユーノ』？だよね】

(何で知っているのかはあえて聞かないがその通りだ)

又夜の言葉に俺は顔に手を当て答える。

あの2冊が配布されていることに気づいたのは偶然なのは達が持っていたのを見つけたからだ。

2冊とも内容がB.L本で、何故か俺が受け (挿入れられる側を指

す) でクロノやユーノを攻め立てる役だったのも疑問だが……  
これはBLとして成立するのか？

……………誰だ。

今、『読んでる上に詳しいじゃねえか』とか思った奴。

『どうしたのですか？』

「いや、電波みたいなものが……気のせいかな？」

辺りを見回していた俺に無々が尋ねてきたので俺は答えた。  
まあ、良いや。

さっさと残りの3人に渡して来ちまおう。

「っと思った矢先に箒とセシリアが」

【2人は同じものを忘れたのよね】

2人は俺に気がついたのか歩いてきた。

「2人とも旅館に忘れ物をしただろ？」

「っっっっっっっっ」

俺の言葉に2人は短く声を発し俯く。

「まあ……年頃だしな」

「すみません……」

「一生の恥ですわ……」

静かに呟く2人に俺は余り何も言わずに本を渡した。

そのまま2人は沈鬱に歩いていった。

すぐに本を、見えないように隠しているのはすごいと思う。

「最後は鈴音だな」  
『さつき会ったんですけどね』

気をとりなおして俺が言うと光が苦笑するような声音で言った。  
確かに……

「気にせずに探しに行くぞ」  
『はい』

そう言い俺は再び歩き始めた。

side out

side 第3者視点

「パパ、変なのがあるよー？」

「おー、凄いな。誰が創ったんだ？こんな見事な機械の竜なんて」

仲の良さそうな父娘は目の前にある機械の竜を見て話す。

他にもカップルや老夫婦など何人も人が機械の竜を見ている。

ギツ……ギギギ……

「おや？変な音がしませんでしたか？」

「気のせいじゃないか？」

老夫婦はそんなことを話ながら首をかしげる。

「パパ、なんかこれ首が動いたよ？」

「ははは、そんなことあるわけないだろ。気のせいだよ」

機械の竜の頭を指差し女の子は父親に尋ねる。

ギギギツ……ガチンツ……

「何かしら今の音？」

「どっか壊れてきてるとかか？」

音が聞こえたのかカッブルは首をかしげながら機械の竜を見上げる。そして機械の竜を見るのに飽きたのかそれぞれ歩き始めた。

「ほら、行くよ」

「うん！」

手をつなぎ機械の竜に背を向け離れていく父娘。

「すごかったね、パ」

ガチンツ！！

不意に女の子の言葉が途切れ何かがつかり合う音が辺りに響く。父親はいきなり途切れた娘の言葉と握った手から感じる重さが一気に消失したことに驚き振り返る。

グチャツグチャツグチャツ……

？振り返らなければ良かった？そんな思いが父親の頭を過った。振り返って最初に見たものは肘までしかない娘の腕と脹ら脛ほどで切断された両足、そして咀嚼するかのようには顎を動かす機械の竜だ。

「あや……」……？

ヴウウンッ

現実を理解できないのか父親は娘の名を呼ぶ。

しかし、その呼び掛けに答えるものはすでに人の形をしておらず返事はなかった……

機械の竜は次なる獲物を見つけ眼を光らせる。

そして、父親が最後に見たものは迫り来る巨大な機械の竜の口と機械の竜の体躯に映る、娘の腕を掴み呆然とする自分の姿だった。



忘れ物を届けに（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想ありがとうございます。

月光閃火様、ルシフェル様、カイ・R・銃王さん、妖気様感想ありがとうございます。

竜姫「さて前回のバカテストの解答をするよ 問題は以下の通り！」

バカテスト

・次の四字熟語を漢字にし意味を答えよ。

《しりめつれつ》

《かいとうらんま》

《あびきようかん》

《がりようてんせい》

《えいこせいすい》

竜王「まずは月光閃火様の答えだ。意味の方は無回答だったぞ」

月光閃火様 答え

《支離滅裂》

《快刀乱麻》

《阿鼻叫喚》

《画竜点睛》

《荣枯盛衰》

答え（ボケver.）

《尻滅烈》

《怪盗乱馬》

《阿尾凶漢》  
《餓漁転生》  
《映湖精粹》

竜姫「ポケver. が凄いな。一番目なんて自分のお尻を破壊して  
るよ?」

竜王「他もすごいだろ? 餓えた漁師が転生してるんだぞ?」

竜馬「さて次の解答者はルシフェル様だ」

ルシフェル様 答え

《死裏滅劣》  
《解答欄間》  
《吾美共感》  
《雅量天性》  
《英子精粹》

竜王「一番目で死んでる!？」

竜姫「確かに変換したら出るかもねwww」

竜馬「じゃんじゃんいくぞ。カイが答えたみたいだ」

カイ「最初の2つは分かったけど…」

《支離滅裂》  
《画竜点睛》  
《怪盗欄間》  
《浴び共感》

《栄枯盛衰》

カイ「後の3つをPSPで変換したらこんなことに…」

竜王「つと栄枯盛衰はあってるな…」

竜姫「何を浴びて共に感じるのかな？」

カイ「と言うよりも三番目は基本的に怪盗ばかりですね？」

竜王「いいんじゃないか？つと来たみたいだな。妖気様のところよりミイラが答え合わせに来ました」

ミイラ「意味も書いたぞ」

竜王「どれどれ…？」

《支離滅裂、追い詰められた政治家の成れの果て》

竜馬「間違っではないいな…」

竜王「一応詳しい意味は？物事に一貫性がなく、ばらばらで、まとまりのないこと。また、そのさま？だから…正解か？」

ミイラ「次だ…」

《快刀乱麻、そんな人は政治の世界にあまりいない》

竜姫「確かにいないわね」

竜王「これは？よく切れる刀で、もつれた麻を切る。もつれた事柄を、もののみごとに処理することのたとえ？だな。と言うかこれはミイラの意見じゃないか？」

ミイラ「ふむ、次だ」

《阿鼻叫喚、戦場の地にて》

竜馬「ああ、聞いた聞いた。こつちの場合、魔族たちのやつだけど」

竜王「詳しい意味は？悲惨な状況に陥り、混乱して泣き叫ぶこと……つて、これも意味じゃなくてもしかしてミイラの経験したことじゃね？」

カイ「怖いのはかりですが……」

ミイラ「次だ……」

《画竜点睛、力を得た転生者達》

竜王「ふむ、おそらく調子に乗ってるとかの意味としてとつたのかな？最後の大事な仕上げ。また、ほんの少し手を加えることで全体が引き立つこと？が正しい意味だから意味の方は間違いだな」

竜姫「力を得た転生者達だったら？有頂天？とかかな？」

ミイラ「そうか……最後だ」

《栄枯盛衰、もう少しでガ〇フィ政権も無くなるだろう》

竜王「政治に興味あったのか…」

竜姫「意味としてはどうだろう?」

竜王「えつと? 栄えたり衰えたりすること? だからその答えだとガ  
○ファイ政権が再盛するみたいになっちまうな」

ミイラ「これも違うのか」

竜王「ああ、まあお茶でも飲んで。カイも飲むでしょ?」

ミイラ「頂く」

カイ「いただきます」

竜姫「さうして次のバカテストの問題を出すよ」

バカテスト

・次の計算式の答えを求めよ。

$$\langle\langle 1 + 2 + 3 + 4 + \dots + 98 + 99 + 100 = ? \rangle\rangle$$

$$\langle\langle 98 - 32 + 128 = ? \rangle\rangle$$

$$\langle\langle 42 \times 3 \div 6 \times 8 - 58 = ? \rangle\rangle$$

竜姫「じっくり考えたら簡単だよな? それじゃあ闇を狩る少年続きます」

## 悲しき魂に救済を

side 魔神竜馬

『マスター！！魔力反応です！！』

【これは……強欲の？闇？よ！！】

「分かった！場所はどこだ！！」

無々と又夜の言葉に俺は尋ねる。

すると又夜はサービスエリアの駐車場を指差す。

【あっちの方向！かなり近いわ！】

「「「うわああああ！！」「」」

又夜の言葉とほぼ同時に悲鳴が響き何人もの人が走ってくる。

『急ぎましようー！』

「ああ！！」

無々の言葉に俺は走り出した。

side out

side 第3者視点

「いやあああああ！！！！」

「誰か助けてくれええええ！！！！」

叫び、脇目もふらずに逃げる人、人ヒトひと人ヒトひと……  
中には子供の手を引き逃げる親の姿も見られる。

ガチンッ！ガチンッ！！ガチンッ！！！！



に突き刺し全て喰らっていく様は、まさに命を欲す？強欲？<sup>グリード</sup>と言え  
るだろう……

「なん……だよ……これ……」

「そんな……人が……」

「何が……起きてる……つてのよ……」

「くっ……」

悲鳴を聞き来たのか一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラ  
ウラは惨劇を見る。

一夏は眼前に広がる光景に絶句し、箒は吐きそうになるのを必死に  
堪え、鈴音は広がる光景に憤りと衝撃を受け、ラウラは悔しげに瞳  
を逸らす。

セシリアは顔色が悪く、その近くではセシリア程でなくとも顔色の  
悪いシャルロットが必死に落ち着こうとしている。

「う……うっ……」

「生存者か!？」

不意に聞こえた呻き声にラウラが反応し周囲を見渡す。  
見ると瓦礫の隙間に少年の姿が見えた。

「生存者を確認!迅速に救助する!」

少年の姿を確認したラウラはいち早く瓦礫に近づく。  
その後、一夏たちも手伝いなんとか瓦礫を除去する。

「大じよ　なっ!？」

「これは……くそっ!」



瓦礫の下から救助した少年の姿を見て一夏は驚愕し、ラウラは地面を殴る。

何故ならその少年は両腕が無く、足も左足の太股ふとももから下が完全に千切れていたからだ。

はつきり言っつてしまえばここで止血をし、迅速に病院に搬送しても生存できる可能性はほぼ皆無であろう。

「母さん……」

その言葉を最後に少年は言葉を発さなくなってしまった。

「ちっ……くしょおおおおおー！！！」

そう叫び一夏はIS『白式』を起動させ飛んでいく。

side out

side 魔神竜馬

【酷い……】

「ツツツ！！！」

ズガアアアンツツ！！

口を隠し泣きそくな表情で又夜は呟く。

俺は目の前に広がる惨劇に思わず？影爪？を纏わせ巨大な爪となった拳を地面に叩きつけた。

「無々、これをやった？闇くはどこに行きやがった……」

『分かりません。いきなり魔力反応が消失しました』

俺の言葉に無々は申し訳なさそうに答える。

くそっ…！

【竜馬……これ……】

又夜は涙を流しながら俺の足元を指差す。

そこには手を繋いだ大人と子供の腕だけが無造作に転がっていた。

（大きさの違いからして……恐らくは親子か…）

【竜馬、お願い。フェニックスの？あの技？を使って…】

怒りに飲み込まれそうになったとき、又夜がそんなことを言った。

あの技…

「……分かった。ゼロ・インフイニティ契約に従い、我に宿れ、死なずの鳥。不死の主にして、再生の象徴よ。其は永遠にして終焉なり。『不死鳥転身』」

怒りを抑え込み呪文を唱え、俺はフェニックスへと変身する。

又夜の言う？あの技？とは恐らく？メクリムカイシテンツインミコト廻向天坏命？のことだろう。

「すう……輪廻りんねの輪わに囚とらわれし傀儡かいらいよ。今、この時においてその戒いまじめとなりし糸から解とき放たれよ……」

息を吸い魔力を高め詠唱を始める。

そして俺の周囲の地面から煙が吹き出す。

「天あまの坏つぎに注つがれし神水かみづは傀儡かいらいに自我じがを与える。汝なんじが望みを叶えしは我が望みなり……」

翼を広げ膝をつき修道女のように瞳を閉じる。

煙が渦巻き一点に収束していく。

「命は再び新たな地にて生を得る。焔は生命を司り哀しき記憶を忘れたまえ……」

煙が徐々に人の形に変化していく。

そして煙は父娘や老夫婦…何人もの人になった。

はつきり言って幽霊みたいなものだから物凄く逃げたい。

「あなた達は自分が死んでしまったことを知っていますか？」

俺の問いに人々は頷く。

ただ1人、女の子だけは泣きながら父親にしがみついていた。手を繋いでいた大人と子供の腕はたぶんこの2人だろう。

「泣かないで、大丈夫。皆一緒の場所に送ってあげるから…」

泣いている女の子に近寄り俺は言う。

女の子は涙を拭いながらこちらを見た。

「御霊よ、新たな旅路へと向かいたまえ。願わくは汝らの旅に幸福あることを……？ 廻向天坏命？」

呪文の最後の一文を俺が言つと人々は光に包まれ消えていった。

？ 廻向天坏命？ は死んだものの魂を癒やし、浄化させる技だ。

ただし、1度発動するために使用する魔力の最低量はSSS+近く。多目に魔力を使用すれば転生させることができるが、転生する先は俺でも分からない。

しかも俺自身、幽霊が嫌いだからこの技はあまり使いたくない。

【あの子達は幸せになれるのかな…】  
(分からない。それを決めるのは俺たちじゃないからな…っど)

又夜の言葉に答えながら俺はよろける。

人数が多かったから結構な量の魔力を消費したらしい。

「竜馬!？」

「ん?おお、一夏か」

名前を呼ばれ横を見るとISを身に纏った一夏がいた。

「大丈夫か?」

「ああ、少し疲れたただけだ。一夏、全員に連絡してくれ『俺の敵』  
が現れた。バスに速やかに乗って避難せよ」

心配そうに尋ねる一夏に俺は笑いかけながら言った。

side out

side 第3者視点

「竜馬を見捨てろって言うのかよ!」

「そうじゃない。この敵は俺の問題なんだ。巻き込むわけにはい  
かない」

叫ぶ一夏に竜馬は首を振り答える。

キイイイインッ……

不意に小さな金属がぶつかる音が響く。

見ると竜馬の足元に血に塗れた指輪が転がっている。

「これは……ぐあああああつ!?!」

ガチイイインツツ!!

落ちてきた指輪を拾おうと手を伸ばしたのは果たして幸運か…

身を屈めたことによつて竜馬は左半身だけを消失……否、左半身だけを喰い千切られたのだ。

身体との繋がりを見失い左腕は地面に落ちる。

「竜馬!?!何だこいつは!?!」

『魔力反応!?!嘘……さつきまでは何も……!?!』

グチャツグチャツグチャツ……ギギギ…

咀嚼するように顎を動かす機械の竜は動きを止め不思議そうに首をかしげる。

その口内からは炎が吹き出していた。

「痛つつ……いくら死ななくても痛いもんは痛いんだぞ?」

いつの間にか竜馬の左半身は再生し傷はおろか汚れすらなかった。

「な!?!」

平然と喋る竜馬に一夏は驚き、あり得ないものを見るかの様に見るいや、これが普通の反応なのだろう。

誰でも目の前で知り合いが半身を喰い千切られ、それなのにその知り合いは何事もなかったかの様に話しかけてくる。

この光景に異常さを感じないものは本当の?化物?か?狂人?だけである。

【どうやら？強欲？が苛立ってきたみたいね】  
(俺を喰えなかったことに対してか？)

機械の竜を見ながら又夜は呟く。

それに対し竜馬はあくまで冷静にかえす。

どうやら喰い千切られた時に多少なりとも血が抜けて冷静さを取り戻したらしい。

「一夏、全力での『死合』をするからバスに乗って先に帰ってろ。  
もうすぐ集合時間だろ」

「けどよ！竜馬を置いていくなん　　！！！」

竜馬の言葉に反論する一夏を竜馬は睨み黙らせる。

「2度言わせるな……いいか、これから俺は全力での『死合』をするんだ。邪魔になるからとっと帰って寝てろ」

「……………ツツ！！！」

少々の殺気とともに発せられた言葉に一夏は畏縮し歯噛みする。  
その場において最も弱いのが自分だと理解はしている。

しかし、仲間を見捨てることはできない。

これが一夏の思いだった。

しかし、その思いはこの場において竜馬の足枷でしかない。

「ちく…しよ…！！！」

そう叫び一夏はバスに向かう。  
自分の弱さを嘆きながら。

side out

side 魔神竜馬

「……………手前てめえがこの人達を喰ったのか」

ギ、ギギギギ…

俺の問いに機械の竜は首をかしげる動作をする。  
言葉が通じてないみたいだな。

「まあ、良い……………いや、良くはないが。お前が？闇？で、この人達を喰ったのは分かってんだ。だから……………」

ナイフとなっている無々を構え、俺は機械の竜を見据える。

「……………苦しみ、絶望し、叫喚して死んでいけ！」

その言葉と同時に俺は刃の弾丸となる。

翼に気を込め加速し機械の竜の腹部を狙う。

ガキイインツツ！！

くっ…

ナイフじゃ切れ味が足りないのか。

俺の攻撃は機械の竜の腹部に当たった瞬間に弾かれた。

「な！？　ぐうううう！！」

機械の竜の腹部を見、驚き俺は固まってしまった。

そのすきを相手が見逃す筈もなく機械の竜は右手で俺を殴り飛ばす。

「まさか……まさかまさかまさか……!!」

【どうしたのよ竜馬!?】

壁にめり込みながら俺は呟く。

又夜が慌てながら俺に問いかけてくる。

どうやら又夜は気づかなかつたらしい。

あの機械の竜の腹部で光る十字架クロスのネックレスに……



## 悲しき魂に救済を（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想ありがとうございます。

ユタ様、カイ・R・銃王さん、月光閃火様、霊宮空刀様、妖気様、ルシフェル様、感想ありがとうございます。

竜王「さて、バカテストの答え合わせだな。問題はこちら」

バカテスト

・次の計算式の答えを求めよ。

$$\langle\langle 1 + 2 + 3 + 4 + \dots + 98 + 99 + 100 \rangle\rangle?$$

$$\langle\langle 98 - 32 + 128 \rangle\rangle?$$

$$\langle\langle 42 \times 3 \div 6 \times 8 - 58 \rangle\rangle?$$

竜姫「最初の解答者はユタ様です」

$$\langle\langle 5050 \rangle\rangle$$

$$\langle\langle 27124 + 42 \rangle\rangle$$

$$\langle\langle 110 \rangle\rangle$$

竜王「うん、二番目以外はあってるな。ユタ様は一番目をこつやっ  
て解いたらしい」

『50と100を除いて計算して100になるのが49あるから4  
900。それに150足せば5050になる』

竜姫「それじゃあ次の解答者！」

「お邪魔します」

竜王「あ、カイ・R・銃王さんのところよりカイが来ました」

カイ「これが解答です」

$$\begin{array}{l} 1 \quad 101 \times 50 = 5050 \\ 2 \quad 7\sqrt{2} - 4\sqrt{2} + 8\sqrt{2} \\ \quad = 11\sqrt{2} \\ 3 \quad 126 \div 6 \times 8 - 58 \\ \quad = 21 \times 8 - 58 \\ \quad = 168 - 58 \\ \quad = 110 \end{array}$$

竜王「うん、全部正解。流石は学校で『脳内電卓』と呼ばれているだけある」

竜姫「こっちは『ピュアボーイ』と『お父さん』。んで、他には『学校に知らない奴はいない』だったからね」

カイ「いったい何をしたんですか……」

竜王「気にせず次行ってみよう！次の解答者は月光閃火様！」

$$\begin{array}{l} \langle 1 + 2 + 3 + 4 + 5 \dots \dots \dots 98 + 99 + 100 = \text{たくさん} \rangle \\ \langle 98 - 32 + 128 = 194 \rangle \\ \langle 42 \times 3 \div 6 \times 8 - 58 = 12.6 \rangle \end{array}$$

竜姫「……えっと、わざとだよね？」

竜王「……………たぶんな」

竜姫「つ、次の解答者に行こっか？」

竜王「あ、ああ。次の解答者は霊宮空刀様のところのホワイトロックシメチヤケロックシWRS、ライターBRS、マズマだ」

第一問、 $1 + 2 + 3 + \dots + 98 + 99 + 100 = ?$

WRS「1000」

マズマ「1000」

BRS「わからない」第二問  $981 + 32 + 128 = ?$

WRS「194」

マズマ「124」

BRS「無理難題orz」

第三問  $42 \times 3 \div 6 \times 8 - 58 = ?$

WRS「1111」

マズマ「1999」

BRS「誰だこのテスト考えたの、殺す、葬る、抹殺する」

「殺す…」

竜姫「当たらない当たんない」

「ふむ、お茶が美味しいな」

竜王「霊宮空刀様のところよりBRSとWRSが来ています。っー  
かなんでBRSは攻撃してるんだ？」

WRS「テストの答えが分からなかったかららしい」



1 + 2 + 3 + 4 + 5 ..... 98 + 99 + 100 = 5050  
98 - 32 + 128 = 401408  
42 × 3 ÷ 6 × 8 - 58 = 110

竜王「これは一番と三番を太一郎が解いて二番をルシフェル様が解いたらしい」

来也「二番の桁がおかしい」

カイ「と言うか竜姫さんはいつまで避け続けるんでしょう?」

竜王「はっはっは、さうして次のバカテストを出題するか」

来也「答えない気が…」

竜王「だって予測できないし。今回のバカテストはこれ」

バカテスト

・以下の英文を諺にせよ

《None knows what may happen tomorrow》

《Love me, love my dog》

《Even Homer sometimes nods》

竜王「こんなところかな?それでは?闇を狩る少年?続きます」

## 半分の翼（前書き）

いつの間にか、この？闇を狩る少年？を書いて一年が経っていました。

なんだか実感が湧きません。

ですが、一年もこの小説についてきてくださった読者の皆様にはとても感謝しています。

これからも？闇を狩る少年？をよろしくお願いします。

## 半分の翼

Side 第3者視点

ギインツ！ギインツ！！

片や右手に握られたナイフ、片やその身を包む機械の体皮<sup>たいひ</sup>。双方がぶつかり合う度に火花と音が響き渡る。

【竜馬！？ なんで一気に倒さないのよ！？】  
「倒さないんじゃない……倒せないんだ！」

又夜の言葉に竜馬は悔しげに答える。  
その顔には疲労と苦悩の色が伺える<sup>うかが</sup>。

ズダンツ！！

「くっ…！」

振るわれた尻尾による一撃に竜馬は吹き飛ばされ着地する。  
おそらく疲労の色は？ 廻向天坏命<sup>メクリムカインテンツイノミコト</sup>？を使用したためである。苦悩の色は機械の竜の腹部で光る十字架<sup>クロス</sup>のネックレスを見つけてから見られるようになった。

「はあっ…！」

気合いとともに竜馬は機械の竜の腕を弾き<sup>はじ</sup>体勢を崩させる。

『今なら腹部を防ぐ手段はないはずです！』

【チャンスよ！】

「くっ……」

光と叉夜は同時に叫ぶ。

しかし竜馬は悔しげに呻き、攻撃をせずに距離をとった。

【だから、なんで攻撃しないのよ！】

「出来るわけねえだろ！！ あの中には雪がいるんだぞ！！」

叉夜の苛立たし気な叫びに竜馬は怒鳴り返す。

その言葉には明確な怒りが見えた。

【『えっ……？』】

「どつ言つことかはさっぱり分からないがあいつの腹で光ってる十字架クロスは雪のIS『氷雪月華』の待機状態なんだよ！」

又夜、無々、光は竜馬の言葉に愕然とする。

機械の竜の腹部など全く注視していなかったのだろう。

【だから攻撃しなかったのね？】

「そう言うこと……だ！！」

ギインツ！ギインツ！！ギインツ！！

答えながら竜馬は飛来する鉄片をナイフで叩き落とす。

機械の竜が口から無数の鉄片を吐き出し放ったのだ。

「攻撃手段が多彩ですこと！！」

無数の鉄片を弾き、避けながら竜馬は言う。



side out

side 魔神竜馬

「ちいっ！ きりがない！」

ギギギイイインツッ！！！！

機械の竜の尻尾による一撃をナイフで受け止めぼやく。

「手数だけじゃ意味がない！ 無々、形状変化。形状は槍！」  
『了解しました！ ナイフから槍』ナイフから槍

俺の言葉に無々はナイフから槍に変化した。

無々の槍の形状は初めて見たが扱あつかえないことはなさそうだ。

まあ、使えても使えなくても殺ることに違いはないが。

「っせい！」

ギヤギイイインツッ！！

機械の竜が再び尻尾を振るってきたので俺は槍を斜めに地に突き刺し軌道をずらした。

ズガアアアアンツッ！！

機械の竜の尻尾は止まらずに俺の頭上を越え壁にぶつかる。  
その衝撃で機械の竜は動きを止めた。

「今しかない！」

俺はその隙を見逃さずに空へと飛び上がった。  
どうやら機械の竜は俺を見失ったらしく辺りを見渡している。

「無々、悪いが投擲するぞ」  
『構いません。マスターがそれを望むのでしたら』

俺が言つと無々は気にしないと云った風に答えた。  
本当に俺なんかには勿体無い相棒だ……

「行くぞー!!」

声を出し俺は槍を振りかぶる。  
狙うは一点……

「つらああああああ!!!!」

弓のように体を反らし力を溜め最大点で解き放ち、単純にして強力な一撃を機械の竜に撃ち込む。  
投擲した槍は機械の竜の尻尾の付け根を貫通し地面に固く突き刺さった。

ギギギギギギツツ!?!?!

気付かぬ内の一撃により動きを封じられた機械の竜は慌てて動くとするが撃ち込まれた槍はビクともしなかった。  
その間に俺は機械の竜に接近する。

「光! 武装状態!」

『はい!』



どうやら目立った外傷は無いみたいだな。

「良かった……あが!？」

ドスツツ!

安堵の言葉を呟くと同時に身体に衝撃が走り、次いで激痛が走る。自分の腹を見ると歯車や鉄片によって象<sup>かたど</sup>られた刃が後ろから突き刺さって貫通していた。

背後にあるのは斬り落とした機械の竜の頭だけ、俺は痛みをこらえながら振り返る。

ギギギギギギツツ……

振り返った先には瞳を紅く光らせ、こちらに向けて口内から鉄片の槍を伸ばす機械の竜の頭があった。

「ちいつ……くそ……があ!？」

舌打ちをし機械の竜の頭を破壊しようとした瞬間、俺は機械の竜の尻尾に殴り飛ばされた。

殴り飛ばされた先には機械の竜の頭があり俺の身体に思い切り噛みついてきた。

「ぐぎゃあああああああああ……!!……!!……!!」

骨が碎ける、筋肉が磨り潰される、内蔵が完全に破裂する、その全ての強烈な痛みが俺に襲いかかる。

あまりの痛みには俺は意識を手放した。

side out

side 魔神叉夜

『マスター!!!』

【まずい!】

完全に雪に意識を向けていた私達は竜馬の叫び声を聞いて驚き反応ができずにいた。

【竜馬の意識がない!? 変身が解けちゃう!】

徐々にもとの姿へと戻っていく竜馬に私は叫ぶ。

変身が解けたら確実に竜馬は死んじゃう!

こうなったら半分だけ入れ替わって無理矢理フェニックスを維持するしかない!

「つつあ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ  
あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ  
!!!」

半分だけ入れ替わると同時に竜馬の体感している痛みが私にも流れる。

痛い、いたいイタイ痛いイタイ痛いいたい痛い痛いいたいイタイ  
痛いイタイ痛いイタイ痛いいたい痛いいたいイタイ痛いいたい痛い  
イタイ痛いイタイ痛いいたいイタイ痛いいたいイタイ痛いイタイ痛  
いいたい痛いイタイいたい痛いいたい痛いイタイ痛いいたい痛いイ  
タイ痛いいたい痛いいたい痛いイタイ痛いイタイ痛いいたい痛いイ  
タイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いいたい痛いイタイ痛い  
いたい痛いいたい痛いイタイ痛いいたい………

私まで意識が飛びそうになるほどの痛み。

普段なら無意識の内に竜馬が使う魔力の膜があるけど今は大量に

魔力を消費したばかり。  
だからいつもよりも痛みを鮮明に感じるのだろう。

「くっ……！！？天鎧獄装？！！！」  
てんがいごくそう

痛みをこらえ私は魔法を発動させた。

竜馬と魔力の共有はしていないから竜馬の魔力が少なくても関係なく発動できる。

機械の竜の歯は私の身を包む？天鎧獄装？に触れた瞬間、音もなく消え去っていった。

その隙について私は身体を動かし距離をとる。

「動き……にくい！！」

意識がなく完全に力の抜けている竜馬は重りにしかならず邪魔でしかない。

しかし、竜馬が出ていることによって？不死鳥轉身？の恩恵が受けられるのも事実。

状態で言えば4：6でギリギリマシだと言えるくらいかしら。

「無々、光。2人は竜馬の目が覚めるように呼び掛けて！ その間の時間は私が稼ぐから！！」

『はい！』

私の言葉に無々と光は答え、無々はワイヤーとなって腕に巻き付き、光は重剣から腕輪へとなる。

さて、？天鎧獄装？も切れ始める頃よね？

「半分しかないけど……全力で時間を稼ぐわ。でも……倒してしまっても構わないでしょう？」

誰かに言うでもなく私は呟く。  
そして私は地を蹴った。

半分の翼（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想ありがとうございます。

ユタ様、White Seal様、ルシフェル様、カイ・R・銃王  
さん、霊宮空刀様、妖気様感想ありがとうございます。

竜王「そんじゃあ回答を出しますか？」

竜姫「ちなみに本編で竜馬が気絶しているからここにはいないよ」

バカテスト

・以下の英文を諺にせよ

《No one knows what may happen  
tomorrow.》

《Love me, love my dog.》

《Even Homer sometimes nods.》

竜王「はつきり言って俺は英語が嫌いだ」

竜姫「じゃあなんで英語の問題!？」

竜王「気紛れ。それじゃあ最初はWhite Seal様だな」

- 1 「明日は明日の風が吹く」
- 2 「い、妹狙いで近付いてきたの!？」
- 3 「そんな!？お母さん狙いだなんて……っ!！」



竜姫「ロリコン！？ それとも年上好き！？」

竜王「どこぞの昼ドラ並みにドロドロしそうだな」

竜姫「絶対にみたくないよ…次はルシフェル様」

1 『一寸先は闇』

2 『私が好きならば、私の犬も好きになってください』

3 『弘法も筆の誤り』

竜王「やっぱり二番目が難しいか」

竜姫「実際、見つけて驚いたもんね」

竜王「だっておかしいだろ…次はカイ・R・銃王さん」

1 『

2 『あなたが好き、私の犬も好き』

3 『

竜姫「難しかったみたいね？ とりあえず二番をそのまま訳したって感じかしら？」

竜王「ゲストとしてカイと圭が来ています」

カイ「英語は難しいですよ」

圭「なんだか久しぶりだな」

竜姫「確かにそうだね」

竜王「最近来ていたのはカイだったからな。次は……って、危なっ  
！……！」

「ちっ……」

竜姫「あら、霊宮空刀様  
のところからBRSが来たみたいね？」

BRS「逃がさない！」

竜王「竜姫は後は任せた」

竜姫「え？ ちょ！？ …………… 行っちゃった。じゃあ、最後は妖  
気様のところのミイラ！ まあ、ミイラは死体を見に行つたみたい  
で来也が答えに来たけどね」

来也「これだ」

《No one knows what may happen  
tomorrow》

「一寸先は闇。例でたとえると、強欲に食われた人たち」

《Love me, love my dog》

「俺は死体の方が好きだ。人間だけでなく犬とか猫も」

《Even Homer sometimes nods》

「そんなことより強欲の食い残しの死体を見に行く」

カイ「途中から答えてないですね」

圭「死体を見に行くって……」

来也「ミイラらしいけどよ…」

竜姫「やっぱり二番目が難しかったみたいね？ 答えは」

1 一寸先は闇

2 坊主憎けりや袈裟まで憎い

3 弘法も筆の誤り

竜姫「です」

カイ「二番目は本当なんですか？」

竜姫「辞典で調べたから間違っていないはずだよ。今回のバカテストはこちら！」

バカテスト

・次の言葉を言った人物を答えよ。

《まずはその幻想をぶち殺す！！！！》

《回しますか？ 回しませんか？》

《少し……頭、冷やそうか……？》

《アイテムなんぞお……使ってんじゃ……ねええええー！！！！》

《お隣を守り続けて400年！！》

《うるさいうるさいうるさい！！》 複数回答可

《《躯は剣で出来ている》I am bone of my sword.  
ord.

《血潮は鉄で、心は硝子》Steel is my body, a

nd fire is my blood .  
《幾度の戦場を越え不敗》 I have created over  
r a thousand blades .  
《只一度の敗走もなく》 Unknown to Death .  
《只一度も理解されない》 Nor known to life .  
《彼の者は常に独り》 Have withstood pain .  
《剣の丘で勝利に酔う》 To create many weapons .  
《故に生涯に意味はなく》 Yet , those hands will  
never hold anything .  
《その軀は、きつと剣で出来ていた》 So as I pray ,  
unlimited blade works .  
《女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨  
けよ、ガキども》  
《私を殺した責任。ちゃんと取ってもらうんだから》  
《アバよ……ダチ公……》  
《クリリンのことかああああー！！！！》  
《ドロー！ モンスターカード！ 魔導戦士ブレイカーの追加攻撃  
！！！！》  
《あんだバカあ？》

竜姫「まだまだ出したいけどこれくらいにしとくよ」

竜王「うっぎゃああああああー！！！！」

BRS「勝った……」

竜王「ふう……」

BRS「!?!?」

竜姫「ギャグ補正のお陰で竜王と私は絶対に死なないよ？ 痛みもあまり感じないし」

BRS「そんな……」

竜王「？闇を狩る少年？続きます」

陽華、乱れ咲く

Side 魔神叉夜

魔力を放出し翼を動かさずに私は飛ぶ。

左半身しか使えないから他に動く手段がないのだ。

「さて？ ああは言ったものの、どうやって攻めようかしら？」

砲撃？ いや、そんなものを撃てば雪に当たってしまうかもしれない。

ない。

刀？ 左手しか使えない時点で満足に振るえるわけがない。

体術？ 刀と同じ理由で満足に動けない。

「とりあえずは……？ フォトン・バレット 光束閃弾？！！」

私は小型の魔力球を創り出し停滞させる。

一応はこれで戦うことにしましょう。

「ファイヤ 発射！！」

左手の人差し指を真っ直ぐに伸ばし親指を立て私は言い放つ。

その言葉に反応して周囲に停滞している魔力球が前方に射出された。

ガガガガガガアアンツッ！！！！

凄まじい音と共に魔力球が機械の竜の放つ鉄片にぶつかり爆発を巻き起こす。

とは言っても？ 光束閃弾？ は私の使える技の中で最も威力の低い

技。

せいぜい鉄片の軌道を逸らすのがやっとだ。

「威力の調節ができないのも困りものよね」

こちらに向かつて飛んでくる鉄片を紙一重でかわしながら私は呟く。

アマテラス  
アマテラスヒノワ  
「天照？ や？ 天照陽輪？ だと威力が高すぎて中の雪まで殺しちゃ  
うし……」

「？ 居合？ に至っては両手が使えなかったら撃てないし…… かつ言  
って完全に私が出たら竜馬を起こすことができないのよね」

一応、攻撃手段がない訳じゃない……

しかし、その攻撃手段のどれもが雪に多大な被害を加えてしまう  
のだ。

「仕方がないわね。？ 天鎧獄装？」

さつき発動してから既に10分は経過しているから問題なく発動  
できるわね。

私の身を魔力が包み込み淡く光る。

「これなら……」

呟きながら私は機械の竜の頭に近づく。

機械の竜の頭が放つ鉄片は私の身体にぶつかった瞬間、衝撃を与  
えずにまるで砂糖の様に崩れ去っていった。

「せーのっー」

掛け声と共に私は機械の竜の頭に左腕の円筒を叩き込む。  
すると機械の竜の頭は先程の鉄片と同じ様に崩れ去っていった。  
？天鎧獄装？の性質を利用したただけだけど見た感じ生き物以外に  
威力は絶大みたいね？  
それと同時に私の身を包む魔力が消えていく。

「やっぱり、どんなに頑張っても30秒が限界リミットよね……」

？天鎧獄装？は確かに強力だけど欠点が無い訳じゃない。  
1つ、最長でも30秒しか発動できない。  
2つ、だいたい2分ほど時間を置かないと再び発動できない。  
たった2つだけとても辛い欠点だ。

ズドンッ！！

「ぐうっ！？」

余所見をしながら考え事をしていたせいか機械の竜の身体に接近  
を許してしまい、私は尻尾で殴り飛ばされた。

「いったいわね……ッ！？」

呟きながら前を見ると頭の無い機械の竜がこちらに向かって跳ん  
できていた。

あまりにも突然なことに私は少しだけ反応が遅れてさらに吹き飛  
ばされる。

「くっ！ あんな凶体をして結構素早いわね……」



頭がないのにどうして私の位置がわかるのかも気になるけどそれは些細なことね。

とにかく雪を無傷で助けるって方針で動くことにしましょう。

「一応あの魔法なら調整が利くしまだマシかしら？」

思い浮かべるのはある魔法。

威力は高いが当たる位置を微妙に調整できるからなんとかなるでしょう。

「そうと決まったら距離をとらないと……」

今から私が行う魔法は少しだけ魔力の集束が必要で時間がかかるのだ。

「竜馬よりも魔力の集束が得意だからマシなのよね……」

竜馬の、魔力集束に時間が？かかり過ぎる？のこそおかしいんだけどアレは仕方がないか……

呟きながら私は機械の竜との距離を置いていく。  
目算でだいたい2〜300mは離れたかしら？

ジャラララララッ！！！！

「は………？」

いきなりの音に私は啞然とする。

機械の竜が突然、全身から鎖を出して放ってきたのだ。

「くうっ！ あがつ！！」

咄嗟にいくつかは避けたが1本だけかわしきれずに左腕の円筒で防いだ。

しかし鎖を防いだ所で鎖は左腕の円筒に張り付くように折れ曲がり私の顔を横殴りに打ち払った。

「女の子の顔を攻撃するなんて最低よ！」

言っても無駄だろうけど私は怒鳴った。

さすがに今はイラツときたわ。

「雪を助けたら絶対に消す!!!」

頬を押さえながら私はさらに距離をとる。

これくらいあれば充分かしら？

「天壤を埋め尽くす紅鏡の華……」

私が詠唱を始めると左腕の円筒に細い光の線が走り分離していった。

分離した円筒はいくつにもわかれそれぞれが独立して浮遊していく。

そして浮遊している円筒は魔法陣をそれぞれ造りあげていった。

私の周囲を無数の魔法陣が埋め尽くしていく。

「百重千重と重なりて、総てを浄化せよ！」

魔法陣に光が集められていき機械の竜の腹部以外に狙いを定めていく。

機械の竜は私が何かをしていると見えたのか、感じ取ったのか分



どうやら眼を覚ましたみたいね。

(気がついた?)

【あ、ああ……………ッッ!??】

私が問いかけると竜馬は返事をし短く息を吸った。

【さ、又夜!?? この砲撃はなんだ!??】

(え? ああ、? サンライト・ブラスター? って言っていくつもの魔法陣から同時に砲撃を撃つ魔法よ。まあ、一発の威力が? フォトランサー? 一発と同じくらいしかないけど……………)

それでも? フォトランサー? より利点は多いけどね。

魔法陣で身を守れるし、相手を完全に包囲して脱出不能にしてから砲撃を撃ち込めるし、詠唱中に移動も一応できるし、なんと言っても光を集めるから魔力をそこまで使わないし(?? デイバインバスター? 一発分程度)。

【それよりも雪は!??】

(大丈夫よ、当たる位置の調整はしたから掠りもしないはず)

しばらくし砲撃が止むと若干残った機械に囚われたままの雪が現れた。

これなら私の出番はおしまいかしらね?

(私は抜けるわよ)

【ああ、気絶したせいで戦わせて悪かったな】

私の言葉に竜馬はすまなそうに答える。

別に気にしないのに。

そして私は竜馬の身体から抜け、半透明になり浮遊した。

Side out

Side 魔神竜馬

「雪、大丈夫か？」

「う、ううん……………」

俺が声をかけると雪は短く声をあげゆっくりと眼を開ける。

「お兄……………ちゃん……………？」

「つたく、心配させんじゃねえよ……………でも」

無事で良かった。

声に出さずに俺は思う。

「え……………？ 私……………あ！ そうだ、私。いきなり現れた機械の竜に捕まって……………」

「分かってるよ。んで、機械の竜はもう原型無くして今、お前の身体にくつついてる分だけだ」

ボンヤリとした表情から一転し涙を滲ませながら雪は言った。

いきなり襲われたのなら反応できずに捕まっても仕方がないか。

「ツツ！？ マスター、魔力反応あり！ まだ闇は破壊されてません！！！」

「なに！？」

突然の無々の言葉に俺は慌てて後方に跳んだ。

ブウウンッ！！！！

風を切る音と共に先程まで俺が立っていた場所を機械の腕が薙ぐ。無々の言葉がなければ殴り飛ばされていただろう。

「え？ か、身体が勝手に!？」

「本体かなんかが無事だったってことか……」

機械に身を包まれた雪は身体が勝手に動いたことに驚き声をあげる。

くそっ、やり難にくくなつたな……

(叉夜! 本体がどこかにないか探してくれ!)

【分かったわ!】

俺の言葉に叉夜は頷き雪に近づく。

その間にも機械の腕は俺を殴ろうと接近してくる。

「お兄ちゃん……ごめんなさい……」

「気にすんな。妹は兄に迷惑をかけてなんぼだろ、っと!」

謝る雪をなだめながら俺は攻撃を避ける。

まあ、問題はそこじゃないな……

『マスター、これ以上魔力を消費すれば私は貴方を取り込んでしまいます。そんなことは絶対にしたくありません。どうか……』  
「だろうな……」

分かっていたことだがやっぱりか。

懇願する無々の言葉に俺は短く答える。

「少ないけど気で代用するしかないか」

【竜馬！ たぶんだけど見つけたよ、雪の背中！】

俺が使える残りの気は魔力総量のだいたい3割くらい、死ぬ気でいけば持つか？

俺が咳くと叉夜が戻ってきて言った。

背中、回り込んで破壊するしかないな。

早く雪を解放しないと、何が起こるかも分からないし……

『……………守りたいと言う強い意思を確認しました。？奇跡ノ光刃？フルドライブ  
完全起動』

「はい……………」

不意に光が優しく言った。

聞き慣れない単語に俺は聞き返す。

完全起動？

オートエフェクト

失われ

た聖域

チェインエフェクト

すくえずなし

『自立発動？ L O S T    S A N C T U A R Y ？ 連結発動？ 不救無・

かたな？』

「な！？」

聞き返す俺を無視して光は強烈な光を放つ。

どうなってるんだ！？

確かに俺は雪を助けたいと思った。

しかし、光が……………？奇跡ノ光刃？が発動するほどじゃないはずだ。

「くっ……………ん？」

そして徐々に光が収まっていく。

そこで俺は不思議な感覚に自分の身体を見る。

『マスター、魔力の回復が7割ほど完了しました』  
「マジかよ……」

光の言葉を確認するために体内の魔力の巡りに集中する。  
確かに、回復してる。

「しかし何故だ？　そこまで強く思ってなかったと思うんだが……」  
『マスター。マスターは気づいてなかったのでしょうが唯一の家族である雪への思いは強大でしたよ』

俺が疑問を口にするのと光が優しく答えた。  
なんだか恥ずかしいものがあるな。

「まあ、魔力が回復したなら問題はないか。雪、お前の身体を操ってる機械の本体が背中にあるらしい」  
「そうなの……？」

地面に突き刺さっている刀（光の形状が変わったもの）を引き抜き構え俺は言う。

「ああ。雪、少しだけ……痛いのが我慢できるよな……？」  
「うん！　お願い、私を助けて！」

俺の言葉に雪は力強く答えた。  
そして俺は地を蹴り接近する。

side out

side 第3者視点



ギヤキイイイインツツ!!

機械の腕と竜馬の握る刀がぶつかり合いすさまじい音とともに火花が散る。

「ちつ……にしても、やり難い」

【雪の身体を傷つけたくないもんね】

竜馬の呟きに又夜が頷き答える。

魔力が回復したとしても雪が囚われていることに変わりはない。

むしろ身体を覆っている程度の機械で攻撃を当てられる範囲が狭まり悪くなったと言えるだろう。

「せめて無人だったなら破壊できるんだが……」

「つつ……!」

言いながら竜馬は機械の腕を刀で受け流し、峰<sup>みね</sup>を返して殴る。

殴られた衝撃を受け雪は顔を少しだけしかめた。

「大丈夫か……?」

「ぜ、全然平気だよ! ガンガンやっちゃって!」

心配そうに尋ねる竜馬に雪は答える。

しかし、いくら大丈夫なように振る舞っても声が震えている時点であまり意味をなさない。

「どつすれば……」

【危ない!】

「え……?」

竜馬が少しだけ考えていた隙を突き機械の腕が振るわれたが、素早く叉夜が竜馬の左半身に入り片手で受け流す。

いきなり竜馬の左半身が女性に変化したことに雪は驚き声をあげた。

(すまん、助かった)

【心配するのはいいけど自分の身も安じなさい。あと……バレちゃったわね】

礼を言う竜馬に叉夜は諭すように言い、雪を見た。

雪は竜馬の左半身が女性に変化したことにいまだに混乱している。

「えっと!? お兄ちゃんがお姉ちゃん!? 女がお兄ちゃんで

!? 男がお姉ちゃん!? お兄ちゃんに悪い女が!? 女が、

かが…ガガガガガガ……」

「雪が混乱していても関係ないみたいだな。つーか止めないとマジでヤバイ」

【みたいね】

呟きながら雪は徐々に眼のハイライトを消していく。

その間も機械の腕は殴りかかって来、時折蹴りも放つようになった。

「雪! 後で必ず説明するから落ち着け!」

「……約束だからね!」

竜馬の言葉に雪は少しだけ間をおき答える。

そして竜馬と叉夜は終わってからのことを思い苦笑いを浮かべながら受け流し続けた。

## 陽華、乱れ咲く(後書き)

〜霊使い達の雑談所〜

感想ありがとうございます。

月光閃火様、White Seal様、ルシフェル様、カイ・R・銃王さん、妖気様、霊宮空刀様感想ありがとうございます。

竜王「それじゃ、回答にいくZE」

竜姫「なんか魔理沙っぽい？ 問題はこちら」

バカテスト

・次の言葉を言った人物を答えよ。

《まずはその幻想をぶち殺す!!!》

《回しますか？ 回しませんか？》

《少し……頭、冷やそうか……？》

《アイテムなんぞお……使ってんじゃ……ねええええー!!!  
!!!》

《お隣を守り続けて400年!!!》

《うるさいうるさいうるさい!!!》 複数回答可

《《躯は剣で出来ている》I am bone of my sword.

《血潮は鉄で、心は硝子》Steel is my body, and fire is my blood.

《幾度の戦場を越え不敗》I have created over a thousand blades.

《只一度の敗走もなく》Unknown to Death.

《只一度も理解されない》Unknown to life.

《彼の者は常に独り》Have withstood pain.  
《剣の丘で勝利に酔う》To create many weapons.

《故に生涯に意味はなく》Yet, those hands will never hold anything.

《その軀は、きつと剣で出来ていた》So as I pray, unlimited blade works.》

《女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども》

《私を殺した責任。ちゃんと取ってもらうんだから》

《アバよ……ダチ公……》

《クリリンのことかああああー！！！！！！》

《ドロー！ モンスターカード！ 魔導戦士ブレイカーの追加攻撃！！！！》

《あんだバカあ？》

竜王「……うん、出しすぎだ阿呆」

ポカリッ！

竜姫「あイタア！！」

竜王「最初は月光閃火様の回答だな」

《上条当麻》

《真紅達》

《冥獄凶砲魔王（高町なのは）》

《バルバトス・ゲーティア（ぶるっあああマン）》

《ルイズ・シャナ・大河・アリア》

《アーチャー（アミヤシロウ・衛宮士郎）》

《もしかして…坂田銀時？》

《アルクエイド・ブリュンスタッド（ネコミミお似合い真祖）》

《カミナ》

《孫悟空》

《惣流（式波）ⅡアスカⅡラングレー》

竜姫「答えられなかったのが《お隣を……》と《ドロ！……》  
で間違いが？坂田銀時？だね」

竜王「やっぱり《お隣を……》はマイナーなのかな？」

竜姫「どうなんだろ？ 次はWhite Seal様だね」

「まずはその幻想をぶち壊す！」

そっぴいなながらFFのデータ消さないで！？（泣）

「まわしますか？まわしませんか？」

……………（ティーカップ回しすぎてダウン中）

「少し……頭、冷やそうか……？」

ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ  
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

「アイテムなんぞお……使ってんじゃ……ねえええええー！

！』  
使ってねえええええ！？（右手に回復薬Gの空きビン）

『お隣を守り続けて400年！』

……うわぁ……………。

先祖代々ストーリーカー……………？

『うるさいうるさいうるさいー！』  
いやあんだのほづがうるさいからじく

『血潮は鉄で、心は硝子』

ガラスハートwww

たぼ氏のマンガは面白かった。

『女ならな、奪つくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども』

そついう貴女も独り身……………ウワナニヲスルヤメロ

『私をやった責任、ちゃんとして貰うんだから』（注：学校の教室。しかも昼休み）

……………（…。口）

（まさかアイツがそんなことを……………）（ヒソヒソ）

（うらやましいぜ……………）（ヒソヒソ）

（ボクには真似できないや）（ヒソヒソ）

（フケツ〜）（ヒソヒソ）

（と、遠野くんのバカ……………！！）（泣）（ダダダダダダ）

（なぜオレを誘わなかつてグホオ！？）

『あんだバカあ？』

バカじゃねえ！



竜王「《回しますか？ ……》と《あはよ……》が分からなかったみたいだな」

竜姫「でも《お隣を……》は唯一なんの漫画が当ててるよ」

竜王「……あ、千冬が？ 打鉄？ のブレード持って走ってた」

竜姫「たぶん羞恥だね。顔赤かったし」

竜王「次いくか。次はカイ・R・銃王さんの回答。まあ、何人がが答えたみたいだ」

竜姫「ゲストにカイと克己が来てるよ」

圭「『その幻想を』は上条当麻。」

柊「『少し頭』は高町なのは。」

直也「『体は剣で』は衛宮士郎。」

克己「俺！？ 『うるさい』はシャナか？」

カイ「最後のは惣流アスカですね。」

竜王「音声テープだから分かりやすいな」

竜姫「………やっぱり多かった？」

竜王「今さらか」

カイ「本編で新しい光の形態が出ましたね」

克己「説明してくれないか？」



竜王「あゝ……答えられる限りでな。えっと次は……!!」

竜姫「確保ー!!」

「こんにちは…うわああああ!?!?!」

竜王「妖気様のところよりリリオが来ました!」

リリオ「た、助けてー!!」

竜王「だが断る!」 撮影中

竜姫「モフモフだあゝ」

カイ「完全に暴走してませんか?」

竜王「気のせい気のせい。次は霊宮空刀様だな」

- 1、上条当麻
- 2、さあ?
- 3、高町なのは
- 4、WAKARAN
- 5、知らないの
- 6、シャナ
- 7、アーチャー
- 8、知らない
- 9、アルクエイド
- 10、カミナ
- 11、孫悟空

1 2、闇遊戯

1 3、御坂美琴

竜姫「有名なのとそうじゃないので分かりやすいね」

リリオ「離してください〜!」

竜王「っと、そういえば…」

「死ね…」

竜王「うぐうおっ!?!」

竜姫「あ…竜王がミンチになった」

BRS「やっと殺せた…」

聖夜「ギャグ補正無効のお陰だな」

竜姫「まあ、意味ないけど? ?魂の片割れに力を、汝は我、我は

汝、此度の死は汝の運命に非ず。<sup>あら</sup>黄泉<sup>リハース</sup>帰り?」

竜王「よっと。サンクス　まあ、放っておいても再生したけどな

」

竜姫「見えて気持ち悪いからやだ」

リリオ「ゾンビですか?」

竜王「ちと違うな」

竜姫「と言うかこの場において私と竜王を殺すことは不可能なんだから諦めたら？」

BRS「そんな…」

聖夜「ギャグ補正無効は意味がないのか!？」

竜王「あれは発動しようとして発動するものじゃないし、フルオ完全自動発動トリの無効及び、破壊不可能な性質があるから」

竜姫「どうにかしようなんて考えが無駄だね。んじゃ、本編で出た光の新しい能力と形態の大まか説明だよ。詳しく説明するのは後日、一番上の？竜馬の技？で説明するから」

・？LOST SANCTUARY? (失われた聖域)

？奇跡ノ光刃?の発動する能力の中で最上級に位置する能力。対象の魔力を完全に回復する。

今回は時間が少なかったために全快はしなかった。

・？すくえすすなし不救無・かたな？

？奇跡ノ光刃?の発動する形態の中で最上級に位置する形態。

「かたな」が平仮名の理由は…???

竜王「こんなもんかな？ 今回はバカテストは休みです。ちなみに前回のバカテストの回答はこちら」

《まずは……》上条当麻

《回しますか?……》『ローゼンメイデン』薔薇乙女たち

《少し……》高町なのは

《アイテムなんぞお……》バルバトス・ゲイティア

《お隣を……》『陰から守る！』陰守一家

《うるさい……》『釘宮さんのキャラ』ルイズ・シャナ・大河・ア  
リア

《《軀は剣で出来ている》I am bone of my sword  
ord……》アーチャー（エミヤシロウ・衛宮士郎）

《女ならな……》織斑千冬

《私を殺した……》アルクエイド・ブリュンスタッド

《アバよ……》カミナ

《クリリン……》孫悟空

《ドロー！……》闇遊戯<sup>アイテム</sup>

《あんたバカあ？》惣流（式波）|| アスカ || ラングレー

竜王「あきらかに多すぎる……それでは？闇を狩る少年？続きます」

決着と説明とお説教？（前書き）

大分遅れました。

それではどうぞ。

## 決着と説明とお説教？

Side 第3者視点

キイイイインツ！

白刃が閃き機械の腕を弾く。  
不意に雪の身体を操っている機械が動きを止めた。

ジャラララララッ！！！！

機械は身体中から無数の鎖を周囲に放っていく。

【あの鎖！！】

「近く中距離武器か……そういやそこら辺に散らばってたな」

機械の行動に叉夜は大きな声を出し、竜馬は辺りを軽く見回す。  
辺りには叉夜の？サンライト・ブラスター？によって削り取られた鎖が散らばっていた。

『マスター、私も形状変化しますか？』

「そう……だな。無々、形状変化。形状は手甲」

『了解しました。形状変化、手甲<sup>マスター</sup>』

【私も着けるわね】

竜馬の言葉に無々は光を放ち形状を手甲に変化させ右手に装着される。

叉夜は言って左腕に円筒を展開し装着した。

【「ハアツツ!!!」】

次の瞬間、竜馬は飛来してきた鎖を刀で払い、手甲で弾き、又夜は左腕の円筒で打ち抜き弾いた。

鎖を払った直後、刀が僅かに歪んだことに竜馬は気づかなかった。その間にも機械は雪の身体を操り接近する。

「くっ……？閃天華?!?!」

「あぐうっつ!!!」

竜馬が右手で放った？閃天華？により機械は吹き飛ばされる。衝撃により雪は声をあげた。

「外装だけを破壊する手段は……あつた!!!」

【本当？】

吹き飛ばす雪を見ながら竜馬は思考し声をあげる。

竜馬の言葉に又夜は尋ねた。

「又夜、身体を俺だけにしてくれ。じゃないと技が打てない」

【打ち込む？ 左手……なるほど、黒蓮こくれんを打つのね。分かったわ】

竜馬は素早く又夜に伝えた。

その間に吹き飛ばされた雪の身体は起き上がり機械に操られ接近してくる。

「行くぞ……」

【任せたわよ】

『すくえすな不救無・かたな？フーステッドギア増強』

又夜が竜馬の身体から抜け、竜馬は構える。

光が言葉を発すると刀が瞬き形状を変えていく。

？かたな？それは？刀？ではない。

？型無？いわゆる？型を持たない？形状なのだ。

「考えるのは後だな」

光の変化に驚いた表情を浮かべたが竜馬はすぐに構え直す。  
そして機械が鎖を振るい攻撃を仕掛けてくる。

「砕ける……？黒式 黒蓮？！！」

左手に気を込め短く息を吐き竜馬は攻撃を避ける。

直後、技名を言いながら左手による掌底を機械の前面の中心、腹部に打ち込む。

すると機械は攻撃を受けた体勢で動きを止めた。

【終わったみたいね？】

「お、お兄ちゃ」

ピキピキピキ……

動きが止まったことに恐る恐る雪が口を開き尋ねようと身体を揺らすと細かな罅が機械に走った。

近接外装破壊気技、黒蓮の直撃により機械の本体が砕かれ姿を維持できなくなったのだ。

やがて機械はサラサラと音もなく雪の身体から崩れ去っていった。

「お兄ちゃん！」

「無事で良かった」



機械から解放された雪はすぐに竜馬のもとに駆け寄る。  
それに対して竜馬は言葉を発しようとしたが雪が素早く腕を掴み  
力強く固定し、ハイライトが若干消えている眼で見てきたので言葉  
が途切れた。

「それじゃ、さっきのこと。説明してもらつよ」

【「ですよねー」】

腕を掴む雪の言葉に竜馬と又夜は諦めたように答える。

「教えるからそう怖い顔すんな」

「むう……」

竜馬の言葉に雪はゆっくりと手を離す。

そして竜馬は話し出した。

又夜が自分のもう1つの人格であることを。

side out

side 魔神竜馬

「それじゃあ、教えるぞ。まあ、見た方が早いな。又夜、半分だけ  
出てきてくれ」

【確かに見た方が早いもんね。分かったわ】

俺の言葉に又夜は頷き身体に入ってくる。

途端に俺の左半身は女の身体に変化した。

「初めまして。で、良いのかしら？ 竜馬のもう1つの人格の又夜  
よ」

「お、お兄ちゃんのもう1つの人格!？」

又夜が話すと雪は驚き慌ててISを起動させようとした、が

「私を殺したら竜馬も死ぬわよ？」

「！！！！」

又夜の言葉に雪は動きを止めこちらを見る。

「つか、移動した方が良いよな。」

又夜と雪の様子を見ながら俺はそんなことを考えていた。

「……………あんた、お兄ちゃんのもう1つの人格なんだってね？　なんで女なのよ」

「さあ？　私は竜馬で竜馬は私としか」

「俺にも分からん」

雪の言葉に又夜、俺の順に答える。

雪の疑問はもっともなんだが分からないんだよな。

「……………」

無言で雪は俺と又夜を見る。

「とまあ、そんなわけだ。分かったか？」

「……………うん」

俺の言葉に雪は苦々しく答えた。

女であれば誰でもアウトなのかよ…………

【そう言えば増強……………あれは助ける力よね？】

『増強は無々さんの形態に私が融合することを指します』

『もとより光の姿は私から譲ったもの、だから相性は最高ですからね』

又夜がいつの間にか光、無々と話をしていた。  
お前の問題だろうに……

(又夜、何してるんだ)

【だって、ずっと出てるって明らかに雪の機嫌が悪くなるじゃない】

又夜は言いながら雪を見る。  
それは確かにそうだが。

「はあ。とりあえずはバスの場所に行くか。いないかもしれないが

……」  
「いなかったら一緒に飛んで行こうね」

ため息を吐き俺が言つと雪は言った。

side out

side 第3者視点

竜馬の腕にしがみつき鼻唄を歌いながら雪は歩く。

「あまりしがみつくなよ」

「良いじゃん良いじゃん兄妹なんだし」

【……………明らかに兄妹以上の感情がありそうだけど】

雪の言葉に又夜はボソリと呟く。

その言葉は誰の耳にも届かなかった。

「バスは……あ、あった」

「ちえっ……じゃあ隣に座ってね？」

竜馬がバスを見つけると雪は残念そうに言う。  
不意にバスが揺れ中から生徒達が出てくる。

「竜馬！」

「一夏か、さつきは悪かったな」

バスから降りた一夏は竜馬の名を呼ぶ。

一夏の姿を見、竜馬は謝った。

「気にしないでくれ。役に立てなかったのは………事実なんだ」

「一、かあ!？」

拳を握りしめ悔しげに一夏は言った。

その様子に竜馬は声をかけようとしたが何やら腹部に衝撃を受け倒れる。

「痛ててて………」

【いったい何かしら?】

竜馬がいきなり倒れたことに対して不思議に思ったのか半透明の状態の叉夜が現れた。

見ると竜馬が千冬に押し倒されている。

「えっと……千ふ」

「竜馬、なぜ1人で戦った」

竜馬の言葉を遮り千冬は問う。

生徒達は千冬の行動に驚き啞然としていた。

「なぜと言われても……巻き込みたくなかったとしか……」  
「巻き込みたくなかった、だと？ その考えが人の心をどれ程に傷つける可能性があるか分かっているのか？」

口ごもりながら竜馬は答える。

その答えに千冬は苛立ちを隠さずに言った。

「それは……」

「お前が1人で戦い傷を負ったとする。少なくとも、私やこのクラス全員の心は傷つくだろう。他には鳳も傷つくはずだ」

千冬の言葉に竜馬は何も言えなかった。

そこに畳み掛けるように千冬は言葉を繋げる。

「お前のことだ。どうせ自分はこの街の人間じゃないから傷ついて  
も誰も気にしない、とでも考えたのだろう」

「うぐ……」

どうやら凶星だったらしく竜馬は呻いた。

雪は千冬が竜馬を押し倒した瞬間、千冬に飛びかかるうとしたが  
専用機持ちの5人、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラに  
よって全力で拘束され押さえられている。

「だからお前はバカなんだ。この街の人間じゃないから？ はっ、  
そんなものは関係ない。お前がこの街の人間で有ろうと無かろうと、  
お前は私達と会話をし、同じ場所にいる。この時点でお前は私達と  
関わりを持っているんだ。だから」

千冬は一息に言い、言葉を一旦切り俯く。

千冬の言葉に竜馬は何も言えず、千冬を見返すだけだった。

「だから、私を不安にさせないでくれ……」

「千冬……」

ポタリ、ポタリと竜馬の顔をしょっぱい水が濡らす。

それは千冬の顔を伝って落ちた涙だった。

Side out

Side 魔神竜馬

千冬が泣いている……

俺はそれをただ茫然と見ていた。

何を言えば良いのか、何をすれば良いのか、全く分からない。

「……すまなかった」

「バカ者が……」

ただ、謝らなければいけない気がして俺は謝った。

俺が謝ると千冬はいつもより弱い口調で言った。

【あゝあ、泣かせた】

『マスターは自覚無しに相手を助けたり、傷つけ泣かせたりしますからね』

『あの、雪さんが……』

又夜、無々、光の順に話す。

……え？

光の言葉に俺は押し倒された状態で首を動かし雪の方に視線を向ける。







つつ！！！！！！！！！」

（雑談所）

なのは「最近の本編に出てないけど良いのかな？」

フェイト「た、たぶん大丈夫だよ」

竜姫「似合ってるよ」

竜王「さて、とお！？」

「ちっ！」

竜王「またか。霊宮空刀様の所から―BRSKH《ブラック・ロック・シューター・キックホッパー》と―WRSPH《ホワイト・ロック・シューター・パンチホッパー》が来ました」

BRSKH「殺せないならいたぶる！」

竜王「わざわざご苦労なことで」

WRSPH「こちらも忘れるな！」

竜姫「あらら、バトルを始めちゃったよ」

「「こんにはー」

竜姫「あ、カイ・R・銃王さんの所から高木和人がきました」

和人「なんでバトルをしてるんだ？」

竜姫「さあ？ あ、BRSの顔を蹴り飛ばして反動を利用してWR  
Sを殴った」

和人「人の動きじゃないな。つとこつちから問題を持ってきたぞ」

「 $y \parallel ax^2$ のグラフで $x \parallel 3$ のとき $y \parallel 36$ である。aの値を求めよ。」

竜姫「グラフだけど作図じゃないなら得意だよ えっとxが2乗  
されていて3だから9でyが36なら逆算して4だね」

和人「正解だな」

竜馬「うわあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああつつつつつ！！！！！！！！」

竜姫「なにになに！？」

竜馬「青白い生首が！ 這いずる黒い影が！！」

竜姫「幽霊を見てる？ …… あ、なんか魔法の痕跡がある」

和人「どんな魔法なんだ？」

竜姫「えつと……竜馬が常に幽霊を引きつける効果と常に幽霊が見える効果を半永久的にみたいね。発動者は妖気様みたい」

竜馬「ひっく……ひっく……うわああああ~~~~~ん！！！！」

和人「泣いた!？」

竜姫「お化けが嫌いだから仕方がないのよ。悪いんだけど落ち着かせてくるから締めてもらえないかしら？」

和人「分かった。？闇を狩る少年？続くぞ」

バカテスト

・もしも無人島に1つだけものを持っていけるとしたら？（船や飛行機、潜水艦などの島から脱出できるものは不可とする）

凛々しい彼女も女の子（前書き）

最初に一言。

今日から数話ほど千冬の性格が少し変わる可能性があります。

それが嫌だと思う方は戻ってください。

受け入れられる方は進んでください。

それでは本編をどうぞ。

## 凜々しい彼女も女の子

Side 魔神竜馬

「昨日は死ぬかと思った」

「まったくもって同感だな」

俺の呟きに千冬が頷きながら答える。

昨日、雪に追い回され最終的には雪を気絶させバスに乗り、学園まで帰ってきたのだ。

今現在、俺達は部屋で横になっている。

「うーん、ずっと部屋にいるのもな……」

「そう……だな。確かに不健康だ」

横になりながら腕を組み俺は呟く。

……部屋を片付けないのも不健康だ、とか思ったらダメなんだろうなあ。

「なんだ……」

「いや、なんでもない」

【明らかに失礼なことを考えてたわね】

こちらを向き尋ねる千冬に俺は首を振り答える。

俺の考えが分かったのか又夜が現れ呟いた。

「んじゃ、適当に出かけるか。行くぞ」

「私が同行しても良いのか？」

起き上がり言うと千冬は不思議そうに聞き返してきた。

「当たり前だろ。それに不健康だと言ったのは千冬じゃないか」  
「そ、そうか。なら着替えるから部屋の外で待っててくれ」

千冬が嬉しそうに言ったので俺は部屋から出た。

今日の俺の服装は黒地に所々黄色の線が走っている着物だ。  
最近ホントに着物を着てるな。

『マスター、時間がかかりましたがこの世界の残存する？闇？のサ  
ーチが終了しました』

「そうか。どうだった？」

無々の言葉に俺は問い返す。

「闇？のサーチは昨日の夜に頼んだのだが……  
無々の言った通り時間がかかったな。」

『確認はありませんがもう？闇？はいないと思われます』  
「そうか。ありがとうな」

確認がないとしても十分な情報だ。  
お礼を言いながら俺は無々を撫でた。

『いえ、ありがとうございます／＼／＼』  
「なんで無々がお礼を言うんだ？」

不思議に思いながら俺は無々を撫でる。

……ん？

不意に右手の袖を引かれそちらを見ると、袖を掴んでこちらを見  
上げる光の姿があった。

「どうした？」

「……………」

『マスター、私だけでなく光も撫でてあげてくれませんか？』

問いかけても光は喋らずにこちらを見上げている。

無々の言葉を不思議に思いながらも俺は光の頭に手を置き撫でた。

「……………」

『良かったですね』

俺の手が動くとき光はくすぐったそうに目を細めながら俺にしがみついていた。光の金色の髪の毛は俺の手が動く度に金糸のようにさらさらとしてとても撫で心地が良い。

「竜馬、待たせたな」

「着替え終わったのか。千ふ…………ゆ!？」

部屋の扉が開き現れた千冬の姿に俺は一瞬言葉を失った。

「な、なんだ？ ど、どこがおかしいのか？」

「い、いや、おかしくなんてない。むしろ…………可愛いんじゃないかな」

不安そうにこちらを見、尋ねる千冬に俺は答える。

千冬の服装は普段のきつちりしたスーツ姿からは想像できない白のワンピースにピンク色の上着を軽く羽織ったものだった。

普段の千冬とは違い凛々しさよりも可愛らしさが強く出ている。

「そうか、可愛いのか。…………良かった」

「そ、それじゃあ行くこうか／＼／＼／」

なんとなく恥ずかしくなった俺は千冬の手を掴み歩き始めた。  
どこに行くか……

side out

side 第3者視点

「どこか行きたい場所ってあるか？」

「いや、竜馬に任せよう。お前といるだけで退屈はしないからな」

聞きようによってはカップルの様な会話をしながら竜馬と千冬は歩く。

そこで竜馬は何かを思い出したかのように着物の懐ふところを探る。

「確かここに……あつた」

懐から取り出された竜馬の手には何やら文字の書かれた紙が2枚握られていた。

その紙には？IP遊園地1日無料チケット？と書かれていた。

「遊園地のチケット？ どうしたんだ？」

「……前に俺が@クルーズで働いただろ？ その後であそこの店長と偶然また会った時にキャンペーンで余ったから、って言われて貰ったんだ。確か今日までだったはずだぞ？」

竜馬は言いたくなさそうだったが千冬に見つめられゆっくりと答えた。

チケットには確かに今日の日付までと書かれている。

「そうか。遊園地に行くのは久しぶりだが良いかもしれないな」

「んじゃ、行くか。IP遊園地インプレザートに！」



そして竜馬と千冬は遊園地に行くために電車に向かった。

side out

side 織斑千冬

休日だからか電車が混んでおり私達は座れずに立っていた。

馴れない格好だから落ち着かないが竜馬が褒めてくれたからな。

「……っ」

不意になにかが私のお尻の辺りに触れてきた。

痴漢かと思つたが人が多くて動くことが出来ず、私は後ろを見れない。

「……っっ!」

そして二度、三度と再び私のお尻を撫で回すような動きを感じた。あまりにも突然なことと目の前にいる竜馬に心配をかけたくないことから私は声を出せずにいた。

「千冬?」

「な、なん……だ?」

竜馬が不思議そうに私を見て尋ねてくる。

出来ているかは分からないが私は出来るだけ平静を装い聞き返す。

「つつつ!!!」

そして痴漢は私のお尻をわし掴んできた。

声にならない悲鳴を私は上げる。

普段の私であればなんとも思わずに反撃できただろう。しかし、馴れない格好、竜馬と2人で出かける。この2つの要因で私は浮かれていたのかもしれない。今の私はとても無力で、ただただ声を殺し堪えることしか出来なかった。

「つつつ~~~~~!!!!!!」

背後でハアハアと気持ちの悪い呼吸が聞こえる。出来るのなら悲鳴を上げてしまいたい。痴漢の手は徐々に下に降りていく。目を瞑り、服を強く握りしめ、口を強く結ぶ。これが今の私に出来る最後の抵抗だった。

「ひつつ.....いやっ!!」

そして痴漢の手が私の足を撫で始めた。直に肌に触れてくる得体の知れない人間の体温。そのあまりにも気持ちの悪い感覚に私は小さく悲鳴を上げてしまった。

「我慢する姿も可愛いねえ？」

「!!!!!!」

ニヤニヤと気持ちの悪い笑みが連想できそうな声が耳に届く。これが私の身体を触っている痴漢の声だろう。

「ああ、いい触り心地だよ。我慢できない、君の奥の方も触ってあげるね」

痴漢の言葉と同時に手が動き私の下着に向かってくる。

「つつ~~~~!!!! やめっ ~~~~~!!!!」

「ぎゃっ!?!」

私が堪えきれずに叫ぶのと痴漢が叫び声を上げるのは同時だった。何事かと思っっていると私の身体を柔らかいものが包み込んだ。

「え……?」

「大丈夫か、千冬」

目を開けると髪の色が白銀に染まり、紅い瞳で私の後ろを睨み付ける竜馬の姿があった。

私の身を包み込んでいる柔らかいものは竜馬から伸びた白銀の尻尾で、なんだか落ち着く。

「気づけなくて悪かったな。大丈夫だ、これからは守るから」

「竜馬……」

そう言っつて竜馬は私を尻尾で強く、そして優しく包み込み引き寄せた。

side out

side 魔神竜馬

くそっ!

千冬が痴漢に襲われていたなんて、もっと早くに気づいていれば  
!!

安心したのか、落ち着いたのか、千冬は俺の尻尾に包まれて寝息をたてている。

(教えてくれて助かった。ありがとう)

【当然の事をしたままでよ。それで？ あの塵芥ちかんは？】

千冬が痴漢に襲われていることに気づいたのは偶然出てきた又夜に教えてもらったからだ。

又夜の言葉に俺は口角をあげる。

(仲間を襲ったんだ。それ相応の報地獄いは必要だろう？)

【なるほど。生かさず殺さずね？】

俺の言葉に又夜は頷き呟く。

又夜の視線の先にあったのは緑色の服の切れ端。

痴漢は俺が影に墜としたからもう二度と戻ってくることはない。

痴漢に襲われて千冬は相当に疲れたのか遊園地に着くまで起きなかつた。

## 凛々しい彼女も女の子（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想と贈り物ありがとうございます。

White Seal様、月光閃火様、カイ・R・銃王さん、紅神牙様、ルシフェル様、妖気様感想ありがとうございます。

紅 神牙様より竜馬にドットハックジーユーからスケイス因子、斬魂刀全部、ハガレンから賢者の石、死の恐怖の鎧は鎌装備の時に強制的に装備される、クロノに『KYと呼ばれない為には』の本、『バインド付きスターライトブレイカー』、雪に純白のウエディングドレス、

妖気様より妖気様の血液とクロノに蒼穹のファフナーの「あなたは、そこにいますか」の攻撃、

をいただきました。

竜馬「おお！ 武器が大量に！」

竜王「スケイスの因子も来たがな。鎧とかは本編でも使えるようにしてみようかな」

雪「さ、結婚式だよ。お兄ちゃん」

竜馬「は！？ ちょ、まつ！！！」

竜姫「さて、前回のバカテストの回答を見ていこっか」



竜馬「明らかにおかしいものがあつただろ!？」

竜王「気のせいだ」

雪「気のせいだよ」

竜姫「あれ？ 雪が持つてるのって大分前に来た竜馬の写真集？」

竜王「さて、今回は遊園地に着いた竜馬と千冬。どんなことが起きるのか？ 出てきていない雪達は？ 次回もお楽しみに。？ 闇を狩る少年？ 続きます」

竜姫「ちなみにバカテストはこちら」

バカテスト

・「0」「1」「2」の3つの数字を1回ずつ使って作ることできる、最も大きい数はいくつ？。

・A君は10階建てのビルの8階に用事があり、エレベーターを使おうとしたが、あいにく停電で動かない。

そこで階段を使うことにした。

1階から階段を上がり、4階まで来るのに48秒かった。

同じペースでこのまま8階まで同じペースで上るとすると、8階まで来るのには、上り始めてから何秒かかる？

・一辺の長さが6cm、3cm、2cmの三角形のすべての頂点を通る円の半径を求めよう。

## 男にだって怖いものはある

side 第3者視点

「い、いつまで走れば……良いん………ですの………?」

「織斑先生………が、良いって言うまでじゃ………ないかな………?」

肩で息をし、セシリアが呟く。

それを近くにいたシャルロットが答えた。

2人はアリーナの周りを走っており、他にも一年生がクラスに係なく走っている。

しかし全員が走っているわけではない。

何人かは走らずにアリーナ内で?打鉄?を身に纏い真耶と模擬戦を行っているのだ。

これが千冬の言っていた特別トレーニングである?無限走行組手?  
(命名:竜馬)だ。

「ふむ、喋る余裕があるとは。兄上と教官に報告しておこう」

「「ら、ラウラ(さん)!?」」

不意打ちのようにつけられた言葉にセシリアとシャルロットは驚き、声をあげ視線を向ける。

視線を向けられたラウラは気にしない、と言った様子で2人の横を走り抜けていった。

「さすがに………体力がありますの………ね」

羨ましそうにセシリアはラウラを見ていた。

「たあああああ!?!」



「甘いですよ」

ところ変わってアリーナ内。

「打鉄？を身に纏った一夏が真耶に斬りかかるが真耶はそれをサイドステップでかわしアサルトライフルを撃ち放つ。

「隙あります！」

「良い判断ですが、まだまだですよ？」

アサルトライフルを撃つ真耶の横から同じく？打鉄？を纏った箒が斬りかかったが真耶は先読みをしていたらしく手榴弾を放り投げた。

結果、一夏と箒はエネルギーが0になり敗北した。

何故2人が専用機を使わないのかと言うと、専用機持ちは全員専用機を今日1日没収されているからだ。

ちなみに没収された専用機は全て竜馬の影の中にしまっている。

「はい、エネルギーが0になった人は？打鉄？から降りて走っている人と交代してきてくださいね」

他の生徒を相手にしながら真耶は言う。

その言葉に一夏と箒は？打鉄？から降りアリーナの出入り口から外に出た。

「お兄ちゃんがないなんて……早く終わらないかな……」

「文句を言っているも始まらないでしょ！ ほら、走るわよ！」

ところ変わって再びアリーナの外。

全くやる気のない雪に鈴音は苛立たし気に言う。

雪が物凄くゆっくり走っているので2人は走っている生徒達の中

で最後尾に位置している。

本来なら鈴音が一緒にいる必要はないのだが、誰か1人が見張っていないと雪はすぐに竜馬を探しに行ってしまうため、一周毎に見張りを交代する事になっているのだ。

その後、雪が一周走り終えたのは一時間後だった。

side out

side 織斑千冬

「さて、まずは何にする？」

「ふむ、そうだな。あれはどうだ？」

遊園地に入り尋ねてくる竜馬に私はコーヒーカップを指差し言う。  
そう言えばあれの名称を知らないな。

「分かった。んじゃ、行くか」

「ああ」

竜馬は頷き私の手を引く。

元の姿に戻っていないから白銀の毛に覆われた手がフサフサとして柔らかく触り心地が良い。

「どうした？」

「いや、なんでもない」

竜馬の手を握ったり離したりしていると竜馬が聞いてきた。

そんなことをしている間にコーヒーカップの前に着く。

空いていたのはピンク色でハートが大量に散りばめられたコーヒーカップだった。

「これは…… / / / / /」

「恥ずかしいな／＼／＼」

乗っしておいてなんだがこれは恥ずかしい。  
せめてハートかピンク色のどちらかが無ければ……  
私達は揃って顔を赤くし俯いて終わるのを待った。

「精練イント最初からSPが削られたんだが……」  
「私もだ……」

コーヒークップから降りてしばらく歩いたが私達の顔は依然赤い  
ままだった。

このままでは気まずいだけだな。  
なにか別のものを……！！

「竜馬、あれならどうだ？」  
「あれ？ あれって、なん……だ……」

私が指差したのを見ると竜馬はビキッ！ と言つ音が聞こえて  
きそうな勢いで固まった。  
どうしたと言つのだ？

「どうした？」  
「い、いや。なんでもない、うん……なんでもないんだ」

語尾が震えていたが大丈夫なのだろうか？  
そして私は、何故か細かく震動している竜馬の手を引きお化け屋  
敷に向かった。

side out

side 魔神竜馬

どうする！？ どうする！？！？

千冬に手を引かれながら俺は心の中で叫ぶ。

千冬はお化け屋敷に入るのに乗り気だし、又夜もさつきから呼び掛けているのに返事がない。

「ふむ、ここのお化け屋敷はとても怖いらしいな。TVでも放送されていたらしいぞ？」

「そ、そーなのかー」

お化け屋敷の前に立てられていた看板を読み千冬が言う。  
それにたいして俺の表情は半笑いで固まった。

「……………本当に大丈夫か？」

「大丈夫だ……………うん。大丈夫だ、問題ない」

これは強がりだ。

本音を言ってしまうえば今すぐにこの場を離れたい。

しかし、千冬はお化け屋敷に入りたいらしいから離れる訳にはいかないし……………

「それでは行くとするか？」

「ああ、分かった……………」

断頭台に向かう死刑囚かSLBを受ける直前のフェイトのように、俺はお化け屋敷の中に入っていった。

この時、俺達の前にテンションの高い一組のカップルが入っていった。一言も喋らずに出てきたことを俺達は見ておらず気づかなかった。

side out

side 第3者視点

「なかなか雰囲気があるな」

「そ、そうだな……」

壁やセツト等を見ながら千冬が言つが竜馬は千冬の後ろに隠れて何も見ていない。

「む？ なになに……当お化け屋敷は3つの内容から成っております。極上の恐怖をお楽しみください……か」

「長そうだな」

ポツンと置かれていた机の上にあったプリントを千冬は手に取り読み上げた。

千冬 of 言葉に竜馬は震えながらも言つ。

「さて、最初はどんな内容かな」

「これは……病院？」

そう言いながら千冬は扉を開ける。

開いた扉の先を見て竜馬が呟いた。

扉の先は若干暗いだけで、長い廊下に車椅子が置いてあり、スライド式の扉がいくつもある病院のよくある光景だった。

「最初は病院か。では、行くとしよう」

「ああ……」

千冬の手を強く握り竜馬は頷く。

その様子をこっそりと又夜は見ていた。

『……………大丈夫でしょうか？』

【錯乱しないか不安ね。まあ、せつかくの2人の外出だから出る気はないけど】

小さく呟く無々の言葉に又夜は首を横に振り答える。

あまりにも小さい声だったのと、恐怖により震えていることにより竜馬の耳に声は届かなかった。

「診察の時間ですよー……」

「ひいつつ!!?」

いきなり流れた音声に竜馬の肩が跳ね千冬の手を掴む手に力が入る。

すると突然廊下のスライド式の扉がすべて開きパジャマ姿の患者が現れた。

「い、だい、よ、お……」

「ぐるじい、い、い……」

現れた患者が口々に苦痛の声をあげ、竜馬と千冬の方を見る。

患者達は腕がない者、顔が焼け爛れている者、喉が切り裂かれ首が揺れている者と様々な種類がいた。

「い……い、い、いやあああああ!!!!」

「竜馬!?!」

患者達の姿を見るなり竜馬は悲鳴をあげて走り出した。

ご丁寧に全身に影を纏わせ姿を隠し患者達を吹き飛ばして進んでいく。

その光景に千冬は唾然としたがすぐに竜馬の後を追った。

男にだって怖いものはある（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想と贈り物ありがとうございます。

カイ・R・銃王さん、霊宮空刀様、妖気様、White Seal様、月光閃火様、ルシフェル様、紅 神牙様感想ありがとうございます。

カイ・R・銃王さんよりクロノに絆創膏、竜馬と雪に竜夫妻の性転換写真を、

妖気様より竜馬に消費期限の切れた生卵を、

White Seal様よりホワイトラビットに『織斑千冬寝顔写真』を、

紅 神牙様より千冬に竜馬の女装のアルバム&痴漢抹殺ツールを、痴漢&クロノに『ビッグバンかめはめ波』を、リ  
ンデイ&クロノに『亡き夫からの手紙』を、竜馬に勇者王  
ガオガイガーシリーズのプレミアムプラモを、雪に『兄妹でも結婚  
出来る方法の本』&結婚式場を、

いただきました。

竜姫「私たちの性転換写真？」

竜馬「……………格好が入れ替わっただけみたい」

竜王「もともと一人だからな」

雪「結婚式場」

竜馬「なんだこの卵？」

竜姫「食べなきゃ竜馬の女装写真をネットで公開します  
だつて  
さ」

竜馬「なっ!?! フライパン、フライパン!!」

雪「卵焼きかな？」

竜王「いやいや、炒り卵かもよ？」

竜姫「あえてのホットケーキ」

竜王「その間に回答いくか」

バカテスト

・「0」「1」「2」の3つの数字を1回ずつ使って作ることで  
きる、最も大きい数はいくつ?。

・A君は10階建てのビルの8階に用事があり、エレベーターを使  
おうとしたが、あいにく停電で動かない。  
そこで階段を使うことにした。

1階から階段を上がり、4階まで来るのに48秒かかった。  
同じペースでこのまま8階まで同じペースで上るとすると、8階ま  
で来るのには、上り始めてから何秒かかる?

・一辺の長さが6cm、3cm、2cmの三角形のすべての頂点を  
通る円の半径を求めよう。

竜姫「問題文が長いわね」



竜王「最初はカイ・R・銃王さん」

1、210

2、112秒

3、まず三角形が作れない

雪「うん、一番が間違いだね」

「そうですか」

竜王「圭とカイが来ました!」

圭「お化けに怖がり過ぎな気が……」

竜姫「あれでもまだ軽度だよ? 本気で怖がったらお化け屋敷なんて消えてるし」

カイ「ちよ!?!」

雪「次いくよ」次は霊宮空刀様」

210

96秒、分単位に換算して1分36秒  
半径25センチ

「邪魔をする」

竜王「霊宮空刀様の所より慈円炎忌と結城奏が来ました」

竜姫「！」

奏「うひゃあああああ!？」

竜王「速攻で抱きついたな」

炎忌「頑張れよ」

奏「投げやり!？」

竜王「さー次行ってみよー次は妖気様」

210

96

不明

雪「3番は分からなかったみたいだね」

「しよーがくせーですからー」

竜馬「!!!!!!!!!!!!!!」

竜王「来た……か」

雪「だれ？」

竜王「妖気様の所よりミイラが組み合わせたゾンビのあやこが来ました」

あやこ「おかーさんはどこですかー？」

竜王「ッッ……」

竜馬「竜王？」

竜姫「竜馬、父娘だけで出掛けると思っ？」

竜馬「いや、普通は家族全員で

ツまさか!？」

竜王「(起きろ?虚夢と夢幻?……幻影起動、竜馬の外見をあやこの母親に)」

竜姫「(調べたから分かっていたことだけど……)」

竜馬「なっ!？」

あやこ「わーい、おかーさん」

竜王「良かったね、あやこちゃん……」

竜姫「(竜馬も竜王も泣きそう……)」

竜馬「どうしたの? あやこ」

あやこ「あのねーわたし、しんじやったんだー」

竜馬「そう……」

あやこ「でもね、おかーさんにいたいことがあるのー」

竜馬「なに？」

あやこ「……………わたし、おかーさんのごどもに生まれちゃうのか  
つたよ」

竜馬「ツツツツツ！！」

あやこ「それがいいかったんだー」

竜王「……………あやこちゃん。そろそろ時間じゃないかな？」

あやこ「あー、そーですねー。それじゃーありがとーございました  
ー。……………本当にありがとう、優しい天使さん」

竜馬「！！！！」

竜王「行っちゃったか……………どうした？」

竜馬「いや、なんでもなし。（バレてたのか……………）」

竜姫「うーん……………いつの間にかシリアスになっているから回答を  
気にします」

White Seal様

・CCX

・テレポートすれば0.1秒で着けるぜ！！

・そんな三角形は存在しない。万が一あったとしても二次元では表  
現不可能。

月光閃火様

・  $1 + 2 + 0 = 3$   
・  $48 \div 4 = 12$      $12 \times 8 = 96$      $96 = 00 : 01 : 36$   
不明

ルシフェル様

- ・ 2の10の累乗
- ・ 112秒
- ・ 三角形ができない

雪「CCXは210らしいよ!」

竜姫「2問目を間違える人が多いみたいね」

竜王「これが正解だ」

- ・ 2の10乗
- ・ 1階から4階までは3階登るので  $48 \div 3 = 16$  で16秒  
1階から8階までは7階登るので、  $16 \times 7 = 112$  秒
- ・ その三角形は存在しない  
三角形を作る上で、一番長い辺は、他の短い2辺の長さの和よりも  
短くないと三角形は作れない。  
よって存在しない

竜王「さて、次のバカテストです」

バカテスト

・ 次の漢字の読みを書け。2つ以上読みがあると思うものは全て書  
け。

《仙人掌》

《戊》

《己》

《唯々諾々》

《魔王》

竜姫「最後の魔王って……」

竜王「はっはっはあ！ それでは？闇を狩る少年？続きます」

乗り越えられないモノ

side 第3者視点

「はぁ……はぁ……」

壁にぶつかり、お化けにぶつかり、天井を走り、そんなことを繰り返している内に竜馬は病院とは違う景色の場所に着いていた。少しだけ古ぼけた木の廊下、スライド式の扉の窓を覗くと少し小さな机と椅子が並んでいる。

「小……学校……!?!」

周囲の景色を確認し竜馬は驚く。

カタンツ……

いきなりの物音に竜馬は身体を強張らせゆっくりと音のした場所に眼を向ける。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝ………」  
「ひいつ!?!」

現れたのは血に染まり赤くなった服を着た小学生のゾンビ。そのあまりにも不気味な姿に竜馬は思わず短い悲鳴をあげる。

「あ……ああ……あぐうつ!?!」  
「マスター!?!」

不意に竜馬は頭を押さえ<sup>つかへ</sup>踞る。





《なんで生きているんだ。辛いのなら、罪悪感があるのなら死んで謝ればいい。なのになんでお前は生きてるんだ》

小学4年生の時の俺は光の無い瞳で俺を見ながら言い放つ。  
なんで……生きているのか……

《どうして生きている？》

《罪の意識はないのか？》

《友達のことを忘れるのか？》

《無かったことに出来るとでも？》

いつの間にか人数が増え俺を取り囲みながら言葉を放つ。  
耐えきれずに俺は耳を塞ぎ眼を閉じた。

ゴシヤツ！

ガシヤンツツ！！

不意に何かを破壊する音が連続して響く。  
直後、俺の肩に手が置かれた。

「やっと……追いついた……」

「ちふ……ゆ……？」

顔をあげると巨大な鉄槌ハンマーを肩に乗せ、呼吸を乱している千冬の姿があった。

周囲には機械の残骸がいくつも転がり火花を出しているものもある。

「……………器物損壊。刑法第261条、他人の物を損壊、又は傷害

した者は、三年以下の懲役又は三十万円以下の罰金若しくは科料に処する……」

「待て待て待て待て待て待て……!!!!」

周囲を見、言いながら俺はケータイを取り出す。

すると千冬は慌てて俺の手からケータイを奪おうと密着してきた。

「ちよっ！ まっ!?!」

「早く、それを、渡せ!!」

腕に当たる柔らかい感触に俺は慌てて離れようとしたが千冬はそれを許さず、さらに力を込めて俺の身体を固定していく。

どうやら千冬は動揺のあまり自分の体勢に気づいていないらしい。

「分かった！ 分かったから一旦落ち着け！」

「……………!?!?」

叫ぶように俺が言うと千冬はゆっくりと俺の顔を見る。

どうやら自分の今の体勢に気づいたらしく、驚いていた。

「あ……その、なんだ……周りが見えてないと危ないぞ？」

「そ、そのようだな……」

物凄く場違いな台詞なのだろうが他に何も思いつかず、仕方がなかった。

まだ若干フリーズしているのか千冬はカクカクとした動きで俺から離れる。

その手に握られている鉄槌で殴り飛ばされなかっただけ幸せか。

「と、とここでその鉄槌ハンマーはどうしたんだ？」

「あ、ああ。これか？　これはこのエリアに入る直前に置かれていてな。このエリア内に現れるゾンビをこれで破壊しても良いし、全て避けても良い。とのことだ」

俺の問いに千冬は思い出したように言う。

「どうやら走り回っていたせいで見落としていたらしいな。」

となると俺は……

「無々、形状変化。形状は槍」

『了解しました。形状変化、槍』ランツェ

俺の言葉に無々は槍に変化した。

そう言えば槍のカートリッジって使うとなにが発動されるんだ？

「無々、この状態でのカートリッジはなにが発動されるんだ？」

『槍ですか？　？　スパラローレンナイトウーメル？　日本語訳で？　螺む穿せん疾しゅく空？　です』

？　螺穿疾空？？

名前からして回転と加速か？

「ん……まあ、使わなくていいか」

「会話は済んだか？　来たぞ」

千冬の言葉に周りを見ると、そこかしこからゾンビが現れてきた。破壊ができるのと機械であることが分かったのだから怖がる道理はない！

そう思い俺は前傾姿勢を取り無々を構えた。

それと同時に周囲の影を操りゾンビ達の足を貫き動きを止めていく。

「撃ち抜く！」  
「碎ける！」

俺が無々を構えて突撃し、千冬が鉄槌チャージで左右のゾンビを破壊していく。

こんなに破壊して遊園地は大丈夫なのか？  
そんなことを考えながら俺は50体目を破壊した。俺と千冬はどちらも25体ずつ破壊している。

何か加工をしているからか破壊したゾンビの火花で火の気はあがらない。

「道は開けた、行くぞ！」  
「応！」

千冬の掛け声に俺は頷き答える。

俺達はゾンビ達に開いた隙間を縫うように走り抜けた。

しばらく走ると急にゾンビ達が現れなくなった。

小学校のエリアを抜けた訳じゃないから何かあるのだろう。

不意に千冬が足を止める。

「どうした？」  
「いや、その、なんだ。ちょっと……／＼／＼／」

千冬はなにやらモゾモゾと足を擦り合わせながら歯切れ悪く答える。

その表情は若干ながら赤くなっていた。

「……………？」  
「う、う、う、う……／＼／＼／」

俯きながら千冬は呻き始めた。  
もしかして……

「トイレ、か　　ごふうツ!？」  
「ツツ!!　　// // //」

俺がそう尋ねると千冬は顔を真っ赤にして俺の鳩尾を殴り抜いた。いきなりの事に反応が遅れ俺は鳩尾の痛みに悶えながら崩れ落ちる。

そんな俺を尻目に千冬は走って行ってしまった。  
それから俺が回復して立ち上がったのは10分後で、その間に走っていった千冬は赤い顔のままでゆっくりと戻ってきた。

「女性にトイレという言葉を使うな!　　// // //」  
「す、すまん……」

いまだに残る鈍い痛みで顔を歪めながら俺は謝る。  
フェンリルの姿でしかも油断していたところに容赦のない一撃。意識を失わなかったのが不思議な位だ。

「っと、どうやら現れたようだな」  
「は?　　うお!？」

千冬は言葉に俺は何のことを言っているのか分からず気の抜けた言葉を返す。

次の瞬間、俺の左右の地面に巨大な手が叩きつけられた。  
見れば巨大な石造魔人<sup>ゴレム</sup>が俺達の前にいた。  
なんでゾンビから石造魔人?

「ん？ ……なあ、千ふ」  
「破壊するぞ、竜馬」

ふと、石造魔人の頭におかしな飾りがついていることに気がつき  
千冬に尋ねようとすると千冬は俺の言葉を遮り言った。

千冬の顔を見ると呆れと苛立ちあきの表情が確認できた。

まあ、確かに石造魔人の頭についているものに関しては俺も苛立ちを覚えるが……

あの　　ウサミミのカチューシャには……

乗り越えられないモノ（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想と贈り物ありがとうございます。

ルシフェル様、カイ・R・銃王さん、霊宮空刀様、妖気様感想ありがとうございます。

竜王「いやあー……随分空いたなあ」

竜姫「ホントだねー」

竜馬「呑気だな……」

竜王「さて、ゲストも来るしお茶だお茶」

竜姫「りょーかい」

「「こんにちはー!」」

竜王「さっそく来たね。カイ・R・銃王さんの所よりカイと直也が来ました」

カイ「久し振りの気がします」

竜馬「事実、そうだしな」

直也「約……半月？」

竜王「よりも多いかな」

竜姫「幼稚園実習が入らなかったらもう少し早かったかな？」

竜王「分からないな」

竜馬・カイ・直也「……分からないの（かよ）！？」「」

竜姫「人は未来が分からないから全力で生きるんだよ？」

カイ「いきなり何だか意味深な言葉を！？」

竜馬「それはいつものことだから」

直也「いつも起きてたらダメなんじゃ……」

「失礼します」

竜姫「あ、妖気様の所より美鈴が来ました」

竜馬「美鈴？ ……いや、俺が知ってるのと違うな」

美鈴「ええ、こちらの私は幸せそうですね」

竜王「（あれ？ なんだか落ち着いた雰囲気だ）」

竜馬「幸せそう……？ すまん。俺がメインで不幸にしてる気がするんだが……」

美鈴「いえいえ、あんな風に騒いだり出来ることこそ幸せなんです



よ

龍姫「なんだか達観してるね」

美鈴「さて、妖気さんからの依頼ですので。龍馬さん、お手合わせを」

龍馬「……気を纏ってたのはそう言うことか。分かった、お手柔らかに頼む」

龍王「お？ 部屋を移すか」

パチイイイインツッ！！

美鈴・龍馬「へ？ きゃ（うわ）あああああ！？！？」

カイ「落ちていつちやいましたよ？」

龍姫「あの2人なら大丈夫大丈夫」

直也「バトルを見ることは？」

龍王「ちよつと待つてて……」

く荒れ地く

「いきなり落とすか普通……」

「行きますっ！！」

文句を言う龍馬に美鈴は構え突撃する。

そして竜馬の眼前で身を屈め左手の掌底で顎を狙う。

「くっ!!! くあっ!?!」

それを竜馬は頭を右に動かすことによつてギリギリ回避するが美鈴は素早く掌底から腕を曲げ竜馬の横顔に肘を打ち込む。

それをモロに喰らつた竜馬は右に吹き飛ばされる。

「どうしました? あなたの實力はその程度なんですか?」

「く、くくく……ははははは!」

不意に竜馬は笑い声をあげる。

不思議そうに見ている美鈴の前で竜馬は跳ね起きた。

「この感覚、美鈴に稽古をつけてもらったことを思い出す! 今度はこっちからだ!」

そう言つと竜馬の右腕についている無々が光を放ち手甲に変化した。

「疾ッ!!!」

「速い!?!」

魔力を足に回し地を蹴り竜馬は加速する。

そして美鈴の腹部に肘を打ち込んだ。

「ぐうううううう!!!」

竜馬の一撃を受け美鈴の身体はくの字に曲がり後方に飛ぶ。しかし美鈴は倒れることなく着地し構えた。

「やりますね。しかし気になることが」  
「なんだ？」

構えながら美鈴は尋ねる。

「あなたの戦い方、いくつか私と似たようなものを見かけるのですが」

「そりゃあ、そうだ。俺の体術の基盤は美鈴の動きだからな。まあ、その前は思い付きでやっていたものだが」

むしろ思い付きで美鈴に会うまで戦えていたことの方が奇跡なくらいである。

〈雑談所〉

カイ「つまり美鈴が師匠、と？」

竜王「まあね、裏話だな。気を扱えるようになってから教わったらしい」

直也「師匠を呼び捨てってのは……」

竜姫「美鈴が、自分は師匠なんて呼ばれるのはむず痒いって言ったから呼び捨てらしいよ？」

竜王「それに基本は見稽古で型を覚えて組み手で合ってるかの確認。こんな感じの繰り返しだったらしいし」

カイ「修行と言うよりは技を盗ませる感じですね」

竜王「だな。？闇を狩る少年？続きます」

バカテスト

- ・金を溶かすことのできる液体の名を答えよ
- ・紅茶を淹れるのに適した温度を答えよ。
- ・コーヒー、紅茶、緑茶に入っており中毒性のある物質の名を答えよ。

番外編 L e t ' s ハロウィン (前書き)

時間ギリギリ!?

危うく更新できないところだった。

あ、次話はこの前に割り込み投稿をしますので間違えないように  
お願いします。

## 番外編 Let's ハロウィン

Side 第3者視点

「さて、これで準備オツケーか？」

【うん。テーブルも終わってるし、後は皆が来るのを待つだけだよ】

部屋の飾りつけを終え竜馬が呟くと又夜が現れ頷いた。

カレンダーを見ると日付は10月31日、所謂ハロウィンでIS学園は休校である。

しかし、竜馬の服装は普段と変わらず着物だった。

ちなみに光は黒いマントと帽子をかぶり先端に星がついた杖を持つて魔女の格好をしている。

【竜馬は仮装しないの？】

「俺には変身魔法があるから大丈夫だろ」

又夜の問いかけに竜馬は答えた。

コンコンッ

不意に扉を叩く音がする。

「竜馬、準備が終わったのか？」

「ああ、まあな」

扉を開け入ってきたのは白い着物に身を包み青いカラーコンタクトを着けた千冬だった。

「着物？ 青い眼……………雪女か？」

「正解だ。サイズの合う仮装が他に無くてな」

少しだけ頬を朱に染め千冬は答える。

その姿には雪女のように冷たい雰囲気はなく、雪ウサギのように可愛らしい雰囲気があった。

『そろそろ時間でしょうか？』

「いえ、まだ少し早いみたいですよ？」

千冬が来たから時間になったのか無々が尋ねると光が時計を見て答えた。

無々に時計は内蔵されていないから当たり前だが。

「私が少し早かったみたいだな」

光の言葉を聞いた千冬が呟く。

その千冬の顔に若干だが黒い笑みが浮かんでいたことに竜馬たちは気づかなかった。

「……………遅いな？」

「20分は過ぎましたよ？」

『急な予定でも入ったのでしょうか？』

【退屈】

時刻はもうすぐ11時50分を指す。

開始時刻は11時半だったのだが未だに千冬以外現れないのだ。

「来ないのならば仕方がないな我々だけで行おう」

「そつ……………だな。来ないのなら仕方がないか」

千冬の言葉に竜馬は寂し気に扉を見、頷いた。  
そして竜馬と光、千冬はそれぞれコップを手にとる。

「人数が少なくて寂しいけどハロウィンパーティーを始めま」

ドンドンドンツツ!!!

不意に言葉を遮り扉が強く叩かれる。

いきなりのことに竜馬は驚きコップを落としそうになり光は慌て腕輪に姿を変えた。

不思議に思いながらも竜馬は扉を開ける。

「Trick or Treat (Brother)  
!!!」

大きな声と共に肩で息をしながら一夏、篝、セシリア、鈴音、シヤルロット、ラウラ、雪、真耶の8人が仮装をして現れた。

若干1名おかしなことを言ったのだが誰も気にしていない。

8人の姿を確認すると光は腕輪から人の姿に変わった。

「ま、まだ始まってないよな？」

「そうだが……どうしたんだ？」

西洋鎧を着て？雪片式型？を模した剣を杖のようにしている一夏の問いに竜馬は答える。

竜馬の問いに7人は一斉に千冬を見た。

「俺は千冬ね　織斑先生に？お前はまだ弱い、だからトレーニングを考えてきてやった。これを今日から毎日やれ？って言われて、さっき終わったんだ」



最初に口を開いたのは一夏だった。

ちなみにトレーニングの内容は障害物を置いての高速機動や瞬間<sup>イクニッシュ</sup>加速を用いての連撃など、速度を生かして戦うための内容だった。

「私も織斑先生に？お前が先日の戦いで戦えたのは常日頃の肉体の鍛練とISの性能があったからであり、まだまだISの操作ができていると言えるレベルではない。このトレーニングを今日から毎日やれ？と言われて先程終えました」

着物に身を包み金色の耳を生やし、腰の辺りから9本の金色の尻尾を揺らしながら箒が続いて答える。

こちらのトレーニングの内容は障害物を置いての高速機動や多方面からの攻撃の回避訓練など、IS操作に馴らすことを主軸に置いた内容だった。

「あら？<sup>わたくし</sup> 私も織斑先生に？お前はビットを操作しているときに無防備過ぎる。このトレーニングを今日から毎日やれ。？と言われて先程終わりましたのよ？」

箒の言葉に白いワンピースで背中に羽根を着け弓矢を片手に持ったセシリアは首を傾げ言う。

こちらのトレーニングの内容はビットを操作しながらの移動や同時に複数のことを考える並列思考など、ビットの効率使用を主軸に置いた内容だった。

「あんた達も？ あたしも織斑先生に？お前は威力などに関して問題は無いが動きに若干無駄がある。このトレーニングを今日から毎日やれ？って言われてさっき終わらせたのよ？」

続いて民族衣装に身を包み、顔の前に垂れている札を持ち上げながら鈴音が答える。

こちらのトレーニングの内容は設定された攻撃をギリギリの位置での回避や障害物を置いたコースを設定されたタイムで抜けるなど、IS操作の向上に主軸を置いた内容だった。

「そうなんだ？ 僕は？ ボーデヴィツヒに仲間がいる状態での戦闘をさらに経験させておきたい。ペアとなってトレーニングをしてこい？ って言われたよ？ うっかりハロウィンパーティーのことが頭から抜けちゃってたけど……」

「うむ、私も教か 織斑先生に？ 仲間がいる状態での戦闘の経験をさらに積んでおいて損はない。デュノアとペアとなってトレーニングをしてこい？ と言われたな。新しい連繋が思い付いて熱中してしまっただが……」

4人の言葉を聞き白い猫の耳と尻尾を着けたシャルロットと黒いマントを着て白い仮面と大きな鎌を持ったラウラは顔を見合わせて答える。

2人は新しい連繋などが思いついて熱中してしまっただことに申し訳なさそうにしている。

「私は織斑先生に頼まれた書類の整理をしていたら……アレが outcome して。駆除に時間がかかりました」

身体全体に包帯を巻き顔の部分だけ出した状態の真耶は思い出したくないのか自分の身体を抱き答えた。

ちなみにアレの駆除を行った部屋の壁には？ ガルム？ による穴が幾つか開いている。

「お兄ちゃんの布団で寝てたらいつの間にかこんな時間になっちゃ



「5人までしか呼べないんだよな」

『では、咲夜さんに誰が来れるか聞いてみては?』

なるほど、その手があったか。

無々の言葉に俺は頷きデッキを取り出した。

「じゃあ頼むぞ」

『了解しました。形状変化』

俺の言葉に無々はデュエルディスクに形状を変化させた。  
そして俺はデッキをセットしカードを5枚引く。

「つと、初手に来てないな。となったら……」

俺は手札を見て咲夜さんのカードが無いことからサーチの方法を  
探す。

「手札から？暗黒界の斥候スカー？を召喚」

カードをセットし目の前にナイフを持った赤い悪魔が現れる。

暗黒界の斥候スカー ATK500

「次に、手札から魔法カード？メイドコール？を発動。スカーをリ  
リースしてデッキから？紅魔 - 十六夜咲夜？を特殊召喚」

「お呼びでしょうか？」

紅魔 - 十六夜咲夜 ATK1900

スカーが光の粒子となり咲夜さんが恭しく礼をしながら現れる。

「今、ハロウィンパーティーをしてるんですがレミリア達を呼んでも大丈夫ですか？」

「はい、問題ありませんよ」

俺が尋ねると咲夜さんは頷き答えた。

つと、これも聞いておかないと。

「あと、5人までしか呼べないんですが……」

「でしたら私が紅魔館に残ります。お嬢様方をよろしくお願い致します」

おずおずと再び俺が尋ねると咲夜さんは俺に向かって礼をした。

咲夜さん以外の5人か。

「分かりました。でも、咲夜さんだけが参加しないのも寂しいので少し経ったら誰か1人と変わってもらえるように言いますね」

「ありがとうございます」

1人だけ紅魔館にいるのも寂しいからな。

とりあえず最初はレミリアを召喚だな。

「手札から魔法カード？メイド召集！？を発動。自分フィールド上に？紅魔・十六夜咲夜？が存在している時に発動する事ができ、自分フィールド上にメイド妖精トークン（悪魔族・光・星2・ATK / DEF 1000）を4体特殊召喚する。このカードを発動したターン自分は特殊召喚を行えないが、まあ大丈夫だな」

「集まりなさい！」

メイド妖精トークン×4    ATK1000

咲夜さんが左手に懐中時計を持ち指を鳴らすとどこからともなく4人のメイド妖精が現れた。

メイド妖精たちはそれぞれ外見が異なり金髪の者もいれば白髪の者もあり、背が高い者もいれば背が低い者もいる。

だが4人とも共通して全く同じメイド服を着ていた。

「さて、レベル2？メイド妖精トークン？4人にレベル4？紅魔十六夜咲夜？をチューニング！」

「それではお嬢様方のことをよろしくお願い致しますね」

咲夜さんはそう言って光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「紅に染まりし館の主よ、我が意に従いて現れよ！ 其は永遠に幼き紅い月！！ シンクロ召喚！！ 現れよ、？紅魔・レミリア・スカーレット？！」

「あら、竜馬。……そう言えば今日はハロウィンだったわね？ Trick or Treat」

紅魔・レミリア・スカーレット    ATK2800

レミリアは周囲を見て今日がハロウィンだと言っことを確認し笑顔で言った。

さて、次に呼べるのは……

「ドロー、手札から？デュアル・サモン二重召喚？を発動。？紅魔・小悪魔？と？スナイプストーカー？を召喚！」

「こあ？ ハロウィンですか？」

紅魔 - 小悪魔 ATK1300

スナイプストーカー ATK1500

飛び跳ねるようにして現れた小悪魔さんは周囲を見回し尋ねてきた。

「はい、パチュリーを呼んでも大丈夫ですよね？」

「はい」

頷き問い返すと小悪魔さんは羽根をパタパタと動かし答えた。

「？紅魔 - 小悪魔？の効果を発動。このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功したときデッキから闇属性のレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る。俺は？ランサー・デーモン？を特殊召喚」

「来てくださーい」

ランサー・デーモン ATK1600

小悪魔さんが手招きをすると俺のデッキから光の玉が現れ場に出してきた。

そして光の玉は槍を持った悪魔に姿を変える。

「では、レベル4？スナイプストーカー？とレベル4？ランサー・デーモン？にレベル4？紅魔 - 小悪魔？をチューニング！」  
「それでは」

小悪魔さんはそう言って光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「大いなる図書館の主よ、我が意に従って現れよ！ 其は七曜の魔女！ シンクロ召喚！！ 現れよ、？紅魔・パチュリー・ノーレッジ？！」

「……あら、ハロウィン？ Trick or Treatね」

紅魔・パチュリー・ノーレッジ ATK2500

パチュリーは少しだけ視線を周囲に向け言っ。

これで残るシンクロ召喚はフランだけだな。

「ドロー、手札の？フォース・リゾネーター？を墓地に送りパチュリーの効果を発動。水属性のためデッキから2枚ドロー」

あまり良いとは言えない手札のため俺はパチュリーの効果を使用した。

まあまあかな？

「カードを1枚セットして手札から？紅魔・紅美鈴？を召喚」

「………はッ！ ね、寝てませんよ？」

紅魔・紅美鈴 ATK1900

美鈴は現れるなりそう言った。

……絶対に寝てたな？

「えっと……まだ、呼べないな。ドロー」

手札がフランをシンクロ召喚するために必要なレベルが揃えられ



ないことを確認した俺はデッキからカードを引いた。

引いたカードは？スノーマンイーター？か……

「手札から？スノーマンイーター？を墓地に送りパチュリーの効果を発動。水属性のためデッキから2枚ドロ―」

一応揃ったか。

引いた2枚のカードと手札を見て俺は思った。

「手札から？暗黒界の雷？を発動。セットしたカードを破壊。破壊したカードは？黄金の邪神像？よって邪神トークンを特殊召喚」

邪神トークン ATK1000

セットカードが破壊され目の前に金色の異形が現れる。

「？暗黒界の雷？の効果で手札を1枚捨てる。カード効果によって捨てられた？暗黒界の尖兵ベージ？を効果で特殊召喚」

暗黒界の尖兵ベージ ATK1600

空間に亀裂が入りそこから槍を手にした悪魔が現れた。

「これでよし。レベル4？邪神トークン？とレベル4？暗黒界の尖兵ベージ？にレベル4？紅魔 - 紅美鈴？をチューニング！」

「じゃおおおーっ！」

変な叫び声をあげながら美鈴は光の輪になった。

8つの光の球が光の輪を潜る。

「紅に染まりし館の禁忌よ、我が意に従いて現れよ！ 其は禁忌と万壞の申し子！！ シンクロ召喚！！ 現れよ、？紅魔・フランドール・スカーレット？！！」

「咲夜から聞いたよ」 えっと……Death or Glory  
y？」

現れると同時にフランは俺の肩に座った。

言ってる言葉が全く違うんだが……

「いや、Trick or TreatだからDeath or  
Gloryじゃないから」  
栄光

「あれ？ そーだっけ？」

俺の言葉にフランは首をかしげた。

残るは小悪魔さんと美鈴だな。

「ドロー、カードを1枚セットして手札から？ライトニング・ボルトックス？を墓地に送りパチュリーの効果を発動。魔法カードのため自分の墓地のカードを3枚選択しデッキに戻しシャッフルする」

「そう言っただけ俺は墓地の？フォース・リゾネーター？？紅魔・十六夜咲夜？？紅魔・小悪魔？の3枚をデッキに戻しシャッフルした。」

「そしてドロー、引いた？フォース・リゾネーター？を墓地に送りパチュリーの効果を発動。水属性のためデッキから2枚ドロー」

使った1枚を戻したから引きやすくなっただけかもしれないが、まさかこのドローで引くとは思わなかったな。

俺は？フォース・リゾネーター？を墓地に送りながらそう思った。

「罨カード発動？気力回復？自分の墓地に？紅魔・紅美鈴？が存在するとき発動することができる。墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する」

「咲夜さんから聞きましたよ！ 八口ウィンパーティーなんですよね！」

紅魔・紅美鈴 ATK1900

興奮した様子で美鈴が現れた。

「どうやら墓地に送られて紅魔館に戻ったときに咲夜さんから話を聞いたらしい。」

「ああ、そうだよ。えっと、手札から？紅魔コール？を発動。デッキから紅魔と名のついたカード？紅魔・小悪魔？を手札に加える。そして？紅魔・小悪魔？を召喚」

「呼んでいただきありがとうございます」

紅魔・小悪魔 ATK1600

小悪魔さんは軽く飛び上がり礼をした。

残った手札は1枚だが、これで一応は揃ったかな。

「えっとコップ、コップはと……」

「竜馬？ その5人はいったい？」

レミリア達のコップを探していると千冬が尋ねてきた。

「そう言えば教えてなかったな。」

「彼女らは紅魔館に住む主とその仲間達だよ。俺の仲間だ」

「そうなのか。しかし羽根がついている者もいるが？」

レミリア、フラン、小悪魔の3人を見ながら千冬は呟く。  
確かに普通の人間が見たら不思議に思うか。

「ああ、吸血鬼と魔女と小悪魔と正体不明の妖怪だからな」  
「人じゃないのか!？」

そらまあ、そうだろ。  
千冬の言葉に俺は頷く。

「なんだか他にも変わった仲間がいそうだな……」  
「えっと……魔法少女に使い魔、デバイスに美術学校の生徒……」

俺が自分の仲間を簡単に説明していくと千冬は手を前に出し俺の言葉を止めた。

そこまで変わってるか？  
自分が一番変わってるからなんとも思わないんだが。

「つと、一応。ドロー、手札から？増援？を発動してデッキから戦士族の？紅魔・十六夜咲夜？を手札に加える」

俺はデッキからカードをドローし、発動させ咲夜さんを手札に加えた。

「竜馬」  
「ん？ フラ　むぐ!？」

名前を呼ばれそちらを向くとフランにチキンを口に押し込まれた。  
見るとフランはワクワクしながらこちらを見ている。

「ね、ね、美味しい？ 美味しい？」  
「……………ああ」

羽根をパタパタとさせながら聞いてくるフランに俺は口の中のチキンを飲み込み頷く。

いきなりどうしたんだ？

さっきまでレミリア達と一緒にいたと思ったんだが…………

「パチエにねー好きな人に食べ物を食べさせるのはその人が好きな証だって聞いたの 竜馬は私と遊んでくれるから好きだよ」

「そうか、ありがとうな」

たぶん、パチュリーの言う好きな人とフランの言う好きな人は違う意味なんだろうなあ。

そんなことを思いながら俺はフランの頭を撫でた。

きめ細かい髪の毛はサラサラとして撫で心地が良かった。

そう言えばレミリア達は…………

そう思って部屋を見渡すとすぐに見つけられた。

美鈴は一夏と早食い勝負をし、小悪魔さんは全員のコップに飲み物を注いで、レミリアとパチュリーはこちらをチラチラと見ていた。

「ん？ 千冬、どうした？」

「いや、何でもない。飲み物をとってくる」

なにかを言いたそうだったが千冬はすぐに顔を逸らし行ってしまった。

さて、どうするか？

「竜馬、次はこれ」

「お、おお。ありがとうな」

俺が撫でるのを止めた途端に再び肩に座ったフランは俺の頭上から口に食べ物を差し出してくる。

俺はそれをありがたく食べていった。

「ほら竜馬、お前の分だ」

「あ、ありがとう」

戻ってきた千冬から俺はコップを受け取った。

さてと、そろそろ咲夜さんと誰かを入れ換えないと。

「おい、誰か咲夜さんと入れ替わってくれないか？」

「あ、それなら私が替わります。門番の仕事もありますから」

俺が尋ねると美鈴が手をあげ言った。

仕方がないが他に方法はないし……

「手札の？ダーク・リゾネーター？を墓地に送りパチュリーの効果を発動。閻属性のため場のカードを1枚破壊する」

「へ……？」

足元の影に美鈴は飲み込まれた。

あとで謝ろつ。

「手札から？紅魔 - 十六夜咲夜？を召喚」

「お呼びいただき感謝します」

咲夜さんは礼をしながら現れ言った。

そしてすぐにレミリアの一步後ろに移動する。

あそこが定位置なのか？

そう思いながら俺は千冬の持ってきた飲み物を飲んだ。

「!?!? げぼげぼっ!?!」

瞬間、すさまじいアルコールの臭いが口腔内に広がり俺は咳き込んだ。

「さ、酒!?!? う……………」

肩からフランを降ろしたところで俺は意識を失った。

翌日、頭が痛くなったので今後絶対に酒は飲まないことに決めた。

番外編 Let's ハロウィン (後書き)

〔霊使い達の雑談所〕

感想と贈り物ありがとうございます。

カイ・R・銃王さん、White Seal様、霊宮空刀様、ルシフェル様、妖気様感想ありがとうございます。

カイ・R・銃王さんより霊が見えるメガネとP4の竜馬シャドウを、妖気様よりサバミソを、

いただきました。

竜王「それじゃあバカテストの回答だな」

バカテスト

・次の漢字の読みを書け。2つ以上読みがあると思うものは全て書け。

《仙人掌》

《戊》

《己》

《唯々諾々》

《魔王》

竜姫「まずはカイ・R・銃王さん！」

一 せんじんこぶし(分かるかああああ!!)

二 ぼ、いぬ、八時から十時、十一月

三 こ、おのれ、自分、き、つちのと



四 ただもろもろ  
五 まおう、SLBの人、ギアスの人、ザケルガの人、DQのボス、  
魔界探偵な人他

「こんにちは……」

竜王「さらに謎とカイも来ています！」

カイ「一番は読めないです」

竜姫「難しいからね 次はWhite Seal様！」

《仙人掌》ノクタス、トゲモン

《戊》全身青タイツの人

《己》オ、ノーレ！！

《唯々諾々》イエスマン

《魔王》高町なのh……おやSLBが飛んできたようだ

竜王「わかってる、全部わかってる回答だ！」

竜姫「そしてお次は霊宮空刀様！」

一 がせんになけん

二 が宇宙キター……！！

三 がおのれデイケイド！！

四 がウソダンドコドーン！

五 がまおうと書いてなのはと読む

「おらあ！」

竜姫「ざんねん。この程度じゃ竜姫さんは倒されないのだ」

竜王「あー、霊宮空刀様のところから零時と奏が来ました」

奏「と、止められなかった…」

竜王「まあ、きにすんな。次はルシフェル様」

1はサボテン

2ぼ

3うぬ、おの

4いいだくだく

5ハクシヨンの魔王やピッコロな魔王

竜王「ハクシヨンとかだいぶ古い気がするな」

竜姫「そだねー」

竜王「あれ？ 零時は？」

竜姫「寝てもらってるよ 最後は妖気様」

《仙人掌》 センニンシヨウ

《戊》 ボ

《己》 オノレ コ

《唯々諾々》 ユイユイタクタク

《魔王》 ミイラ

竜王「ミイラがランクインした!？」

竜姫「あははは」

竜王「さて回答を出すか」

仙人掌さぼてん

つちのえ

戌つちのえ

己つちのと

唯々諾々いいたくたく

魔王まおう

竜姫「と言っても殆どあつてる人が多かつたよね？」

竜王「だな。今回はバカテストは無しです。？闇を狩る少年？続きます」

粉碎！玉砕！微塵に砕ける！（前書き）

だいぶ遅れました…orz

年内に少なくとももう一話は更新したいです。

粉碎！玉砕！微塵に砕ける！

side 第3者視点

「にゅっふっふ」 まさか暇潰しに人工衛星をハッキングしてたら、ちーちゃんのデートに遭遇するなんて。さっすが束さんたばねだね」

頭に着けたウサミミを動かしながら、篠ノ之束しんのかは、上機嫌に鼻唄を歌う。

彼女の周囲には、何やら用途の分からない機械や、配線コード等が所狭しと広がっていた。

束は、目の前の空間に展開されているディスプレイに注意を向ける。

そこには、石造魔人ゴレムを相手に戦う竜馬と千冬の姿が映っている。

「……それにしても、意識を持っていて自在に形状を変化させる武器、ね」

束の視線は竜馬の手に握られている槍、無々へと向けられており、その表情は玩具を目の前にした子どもか、はたまた肉を目の前にした肉食獣か……

「面白い 弄らせてもらえないかな？ かな？」

そんなことを呟きながら束はキーボードを叩いていく。

side out

side 魔神竜馬

ズガアアアアンッ！！

振り下ろされる石造魔人の腕を無々でなんとか受け流し、俺は踏み込む。

一撃の威力が高すぎるな……

一発でももらったらフェンリルじゃ終わるか？

そんなことを考えながら俺は石造魔人の足に攻撃していく。

「はああああああっ！！！！！！」

俺が穿ち、千冬が砕く。

そして、ついに石造魔人の足が砕け、石造魔人は倒れる。

ズズウウウウンッ……

倒れた隙を見逃さずに俺は地を蹴り、天井に足を着く。

それと同時に周囲の影を操り足に纏った。

影は密度を増して、増して、増していく。

やがて足に纏う影は漆黒をも越える深淵の闇へと色を変えた。

足に纏う影の踵部分から影の刃が生え黒く輝く。

「？刈絶影脚？！！」

俺は天井を蹴り、倒れている石造魔人に踵落としを放った。

影の刃が石造魔人の外装を砕き、首を飛ばす。

直後、身体を反転させ槍の無々を投擲し、石造魔人の頭を撃ち貫いた。

機械の骨格に岩石などで肉付けをしたものだったらしく、石造魔人は火花をあげたかと思うと爆発した。

「一丁上がり、っと……」

『……言うわけにも行かないみたいですね』

俺の言葉に続けるように無々が答える。

見ればついさっき倒した物とまったく同型の石造魔人が、待ち切れないとでも言うかのように肩を震わせ、こちらを見ていた。

それも4体も。

「千冬……」

「分かっている……」

俺の言葉に千冬は短く答え、息を吐く。

俺と千冬は頷き石造魔人4体を見据える。

「「さつさと終わらせてウサギ狩りに行くぞ！」」

瞳に怒りの炎を猛々しく燃やしながら俺と千冬は宣言した。

side out

side 第3者視点

「3体は俺が潰す、千冬は1体を潰してくれ！」

「なっ!?! それではお前が」

千冬は驚き、すぐに竜馬を見るが、直後に石造魔人3体と竜馬が闇に包まれた。

慌てて闇の中に入ろうとしたが、闇は壁のようになり千冬の侵入を拒むように弾く。

「くっ……またなのか! また、お前は!?!」

話しも聞かずに勝手に行動する竜馬に、千冬は闇を殴り、呟く。

その後ろでは観察しているかのように石造魔人が立っていた。  
そこで千冬は振り返り鉄槌ハンマーを握り直す。

「時間が惜しい、手早く終わらせてもらうぞ、束！」

そう叫び千冬は石造魔人へと突撃チャージした。

石造魔人は千冬を迎撃すべく、その腕を振りかぶり、叩きつける。  
千冬はそれをサイドステップで素早く回避し、接近していく。

そして、千冬は鉄槌で石造魔人の、左腕の間接部分を思い切り打ち上げた。

衝撃で鉄槌は僅かに弾かれるも、石造魔人の腕に亀裂が生まれ、動作が悪くなる。

さらに千冬は弾かれた勢いをそのまま利用し、身体を回転させ右腕の間接部分を打ち上げた。

これにより、石造魔人の両腕に亀裂が走り、動かす度に崩れていくようになる。

もう一度、勢いを利用して打ち抜くかと思いきや、千冬は石造魔人の背後に素早く回り込み、鉄槌を背中の凹凸に引っかけ、ピッケルのように扱いながらスカートとは思えない速度で石造魔人の真上に着地した。

「はあっつっ!!！」

気合いの込もった鉄槌による十連撃に、石造魔人の頭は完全に碎かれ、石造魔人は力を失い倒れ伏した。

「? 絶舞・忌塵狂花?!!！」

不意に闇の中から竜馬の声が発せられる。



ギユガガアアアアンツツ！！！！

次の瞬間、闇の中から凄まじい音が響き渡った。そして、音が止むと闇が消え、竜馬と辺りに散らばる石造魔人の物と思われる破片が現れる。

「さて、ウサギはどこに居やがる？」  
「……………」

そう言っただけを睨み付ける竜馬に、千冬は無言で歩み寄る。  
竜馬が千冬を見たときには、千冬は既に竜馬の眼前に立っていた。

「？ どうし　くおっ！？」

何も言わない千冬を不思議に思い竜馬が尋ねると、千冬は言葉を遮り、無言で竜馬の頭を殴った。  
相当に力が込められていたのか竜馬は頭を押さえ、半泣きで千冬を見る。

「な、何をするんだ……………」  
「私の言ったことを微塵も覚えていない奴に話す言葉はない」

竜馬の言葉に千冬はキツパリと言い放つ。  
涙を瞳に溜め、竜馬は首をかしげる。  
どうして殴られたのか分からないらしい。

「……………　はあ、私は言ったはずだ。？私を不安にさせないでくれ  
？」  
「それは……………だが、アレくらいなら俺は別に……………」

千冬の言葉に竜馬は狼狽<sup>うづた</sup>えながら答える。  
その言葉を聞き、千冬は竜馬を睨み付ける。  
その視線に耐えきれずに竜馬は俯いた。

「だとしても、だ。確かにお前は強い、仲間を必要としないほどに  
な。それは認めよう。だが、それでは仲間は守られるためだけにい  
るみたいだろうが。そんなことは私が許さん」

「俺は……ただ、仲間に傷ついて欲しくなくて……」

竜馬は口ごもりながら千冬に返す。

その言葉に千冬の瞳がっり上がる。

「傷ついて欲しくない、だと？ 何度言わせるつもりだ。お前が傷  
つくことで仲間の心に傷がつく、何故それを理解しない！ それに、  
ただ守られるだけならそれは仲間ではなく人形だ！」

「……………すまん」

千冬の激昂に竜馬は萎縮し謝罪する。

ズガアアアアンツツツ！！

不意に、機械で造られた人參がお化け屋敷の天井をぶち破って床  
に突き刺さった。

「やつはっはっ！ 流石の強さだねっ 東さんは嬉しくて嬉しく  
て、ついついいろんな国の空域を犯しながらここに来ちゃったよっ  
」

人參からスピーカーが生えたかと思うと、そこから東の声が発せ  
られた。

突然の出来事に竜馬と千冬は啞然としている。

バシユウウウウツツ……

人參が開き、大量の蒸気と共に中から束が現れた。

相も変わらず白と青のワンピースに、機械のウサミミを着けた1人不思議の国のアリスな格好の束は、一昔前のSFに出てきそうな光線銃のような物を取り出す。

「せーのっ      ? シンデレラ・ストーリー 灰被りはお姫さま?!」

「「な!?!」」

言いながら束は、竜馬と千冬に銃口を向け、引き金を引いた。

これまた一昔前のSFに出てきそうなジグザグの光線が放たれる。驚きのあまり動くことのできなかつた2人は避けることができなかつた。

光線が当たり、2人の身体を光が包み込む。

「キラキラ、キラキラ      綺麗にしちゃうよ、ドレスアップ」

腰に手をあてて腰を振り、自作の歌を歌いながら束は楽しそうに踊る。

元の素材が良い為に、そんな行動がとても可愛らしく見えた。

そして2人の身体を包み込んだ光が徐々に収まり始める。

「何が……」

「いきなり何をしゃがる……」

眩しさで眼を瞑った状態の2人は眩く。

その2人の姿に束は満足そうに頷く。

「うんうん　2人とも似合ってるよ」　思わず、今ここで服を脱がせて襲い掛かりたくなるくらいに」

「は？……………はあ！？」

束の言葉を不思議に思い、2人は眼を開け自身の格好を見、互いの格好を見る。

そして2人は驚きの声を上げる。

それもそのはず、2人の格好が先程までの物と明らかに変わって来たからだ。

竜馬は黒地に所々黄色の線が走っている着物から、赤いタキシードのような服装になり、様々な帽子の特徴を無理矢理組み合わせたような赤い帽子で、まるでイカれた帽子屋のような格好に変わる。

千冬は白のワンピースにピンク色の上着を軽く羽織った格好から、黒のワイシャツに赤のチョッキ、白いロングスカートと言った服装になり、度の入っていない眼鏡をかけ、右手には懐中時計を持ち、まるで慌てん坊の白兔のような格好に変わる。

「いきなり何をしてくれてやがる！！」

「ふっふっふ　バツチリでしょ。なんとこの銃、？灰被りはお姫さま？は撃った相手の服装を自由自在に変えることができるのだ」

怒鳴る竜馬に束は楽しそうに答えた。

その際に束が胸を張った体勢を取ったため、束の大きな胸を竜馬は見てしまい、千冬につねられたのは余談である。

束の行動に怒りを通り越して呆れ始めた2人は顔を見合わせ、ため息を吐く。

この時、竜馬は既に変身魔法を解いて元の姿に戻っていた。



る。

「ん……2人がアレを体験するまで、かな」

「アレ……？」

俺と千冬は東の指差す方を見る。

そこにあるのは城のような建物だった。

何かやってるのか？

「あそこは確か……」

「にゅっふっふっ　ちーちゃん、どうかな、どうかな？　東さん

のこの粋な計らいは」

千冬は何をやっているのか思い出そうと顎に手を当てる。

俺はと言えば遊園地で起きるイベントを行き当たりばったりに進むタイプなので全く知らない。

「ふむ……まあ、服のことに關しては許してやる。いくぞ」

「お、おう」

そう言っつて千冬は城のような建物に向かって歩き始めた。

よく分からずに俺は千冬の後を追い、東はニヤニヤ笑みを浮かべながら俺の後をついてきた。

粉碎！玉砕！微塵に砕ける！（後書き）

（霊使い達の雑談所）

感想ありがとうございます。

ルシフェル様、カイ・R・銃王さん、White Seal様、  
宮空刀様感想ありがとうございます。

竜王「大分遅れた……orz」

竜姫「時間が無さすぎるよ……」

竜馬「デッキを作ってたやつが言う台詞か？」

竜王・竜姫「うぐうっつ！」「」

竜王「と、とりあえずバカテストの回答にいくぞ……」

バカテスト

- ・金を溶かすことのできる液体の名を答えよ
- ・紅茶を淹れるのに適した温度を答えよ。
- ・コーヒー、紅茶、緑茶に入っており中毒性のある物質の名を答えよ。

竜姫「最初はルシフェル様の答え」

1 王水やヨードチンキ

2 確かできるだけ高い方が良かったはず……

予想は100度？

3 カフェイン

竜王「ヨードチンキは分からないけど王水とカフェインが正解で」

竜姫「2番も正解と言えば正解かな？」

竜馬「どう言うことだ？」

竜姫「温度一点じゃないってこと」

竜王「次はカイ・R・銃王さん」

一 王水

二 80度？

三 カフェイン

竜王「こちらも王水とカフェインが正解かな」

竜姫「んー……2番はちょっと温ぬるいね。この温度は緑茶の適温よ」

「こんにちはー！」

竜王「あ、カイ・R・銃王さんのところより柊と克己が来ました」

柊「2番は不正解でしたか」

竜姫「緑茶なら適温だから間違いとは言い難いんだけどね？」

克己「一応は同じ葉っぱだから……」



竜馬「まあ、完全に同じわけではないけどな」

竜王「次はWhite Seal様の答え」

- ・アルカヘスト（万物溶解剤）
- ・『紅茶を入れるのに適した温度』
- ・カフェ淫

竜姫「間違っではないんだけど……」

竜王「万物融解剤って名称ですでにヤバ!？」

竜馬「3番目に触れない気が……」

竜王「明らかに媚薬っぽいじゃん……」

竜姫「私的には面白そうだけどね」

竜王「最後に霊宮空刀様の答え」

- 1 王水
- 2 60度
- 3 カフェイン

竜姫「こっちは低すぎるわね」

竜王「やっぱり1と3は分かりやすい、か」

「回答中しつづれいー!」

竜馬「のわ!？」

竜王「お、霊宮空刀様のところより火音と空刀様が来ました」

火音「リア充は……」

空刀「爆発だ!!」

竜馬「俺のどこがリア充だあああああ!？」

竜王・竜姫・火音・空刀「……」

竜馬「な、なんだよ……」

竜王・竜姫・火音・空刀「……誰がどう見てもリア充だろうが!  
!」

竜馬「なぜにいいいい!？」

竜王「ふう、<sup>リア充</sup>悪は滅びた。? 闇を狩る少年? 続きます」

バカテスト 回答

- ・ 王水
- ・ 95度以上
- ・ カフェイン

バカテスト

- ・ 冬至に食べると良いものは?
- ・ 土用の丑の日に食べると良いものは?

・？なのはシリーズ？の、使い魔アルフの素体となっている動物は？

## TRUBLE WEDDING EXPERIENCE!?

side 第3者視点

「で？ ここは何をやっているんだ？」

「ふっふっふっ　　ここではなんと！　本日限りで結婚式体験ができるのです！」

東は楽しそうに竜馬の問いに答える。

東の言葉に竜馬は啞然とし、すぐに千冬を見た。

しかし、すでに千冬の視線は城のような建物に固定されており、竜馬の視線には気づかない。

「千冬？」

「……………ツ／／／／／」

不思議そうに竜馬は千冬の名を呼ぶが、千冬は反応せず、城を見ながら顔を赤らめるだけだった。

東はそんな千冬を気にせず引きずり、城の中に向かって進んでいく。

竜馬は諦めたように息を吐き、東の後を追った。

side out

side 織斑千冬

「ちーちゃん、ちーちゃん。どのドレスが良〜い？」

「わ、私にドレスは似合うのだろうか……………」

いくつものドレスを手にしながら尋ねてくる東に私は呟く。

私は背も低くないし、力も強い、それに可愛い顔とは言えない。

そんな私にドレスは似合うのだろうか……………

「ちつつち……ちーちゃん、良い？ 男性は普段とのギャップを好むものなんだよ！」

「ふ、普段とのギャップ!？」

東の言葉に私は衝撃を受けた。

普段とのギャップ……

確かに今日、ワンピースを着たら可愛いと言ってくれたな。

……まさか、東とこんな会話をするなんてな。

「どしたの、ちーちゃん？ とりあえずギャップを出すために黒系の色は抜くからね。」

「なんでもないさ、分かった」

笑みを浮かべた私を不思議に思ったのか東が尋ねてきた。それに対して私は首を横に振りながら答える。早めにドレスを決めなくてはな。

side out

side 魔神竜馬

「結婚式体験、か……」

俺なんかじゃ千冬には役不足だと思っただがなあ……  
そんなことを思いながら俺はスーツに腕を通していく。

【乗り気じゃないみたいね？】

(まあな。千冬には俺よりも良い奴がいると思っただよ)

急に現れた叉夜の言葉に俺は肯定する。

すると叉夜は腕を組み、俺を見る。

何か不満でもあるのか？

【……………はあ。千冬も報われないわね】  
「は？」

溜め息を吐きながら又夜は呟く。

それに対して俺が言葉を発すると、又夜は何でもないと云った風に首を横に振った。

何なんだいったい？

【ほらほら、さっさとしなさい。男が後からなんて格好悪いわよ】  
(分かってるさ)

急かす又夜の言葉に俺は頷き着替える。

着替え終わり部屋から出ようとすると不意にスーツの下の方を引っ張られた。

不思議に思い視線を向けるとスーツの端を掴んだ光と眼が合う。

光は少しだけ恥ずかしそうに下を向くが、またすぐにこちらを見つめてくる。

「光…………？」  
……………／／／／／

名前を呼ぶと光は何も言わずに顔を赤らめた。  
ん？

よくよく観察してみると光の服装がよく着ているワンピースではなく純白のドレスになっていた。

『マスター、どうか光も連れて行ってくれませんか？』  
「ん、構わないぞ」

無々の言葉に俺は頷き光の手を握る。

光の手は一瞬だけ強張ったが、すぐに俺の手を強く握り返してきた。

娘ができたらこんな感じなのかな？

「さて、それじゃあ改めて行くか」

「は、ははは、はい！」

【頑張りなさいよー】

『私も人の姿になれば……』

俺の言葉に光は嘸みながら、又夜は適当に、無々は何かを呟いた。そして、俺は部屋から出、結婚式体験の場に向かった。

side out

side 第3者視点

「とうちゃーく、と。千冬はまだみたいだな」

「い、いえ、そちらに……」

教会の内部のような部屋に着いた竜馬は周りを見、呟く。

そんな竜馬に光はおずおずと扉の方を指差し言った。

見ると扉からドレスの端っこがはみ出しており、何やら話し声が出ている。

「……ら……って……ーち……」

「……かし……こ……準……ま……」

竜馬は途切れ途切れに聞こえてくる言葉に首を傾げ、扉からはみ出して揺れているドレスを見つめる。

するといきなり扉が物凄い勢いで開けられた。

「あーもうつつっ！！ 焦れたいよちーちゃん！！」  
「ま、待て束！ まだ心の準備ができ」

どうやら扉から出ていかない千冬に、束が我慢の限界になり扉を思いきり開けたらしい。

束の突然の行動に千冬は驚き止めようとした様だが時既に遅く、扉は全開になり、扉を開けた体勢で堂々と仁王立ちする束と、ピンク色のドレス姿に身を包み、束を止めようとした体勢で竜馬の方を見て固まる千冬の姿があつた。

「あれあれ？ ねーねー、その子さっきまでいなかっただよね？」

光を指差し束は尋ねる。

確かに、先程まで自分達だけだったはずなのに何時の間にかドレスを着た幼い少女が知り合いのスーツの端を掴んで隣に立ってれば誰でも尋ねたくはなるだろう。

「この子は光、俺の相棒パートナーの1人だ」

「はじめまして？ 奇跡ノ光刃？ の光です」

「ふーん？ まあ、いつか。ほらほらちーちゃん、いつまで固まってるの？」

竜馬の簡単な説明と光の自己紹介に束はさして気にした様子もなく千冬の方を見る。

千冬はまだ恥ずかしらしく開け放たれた扉の影に隠れるようにしていた。

しかし扉が大きく、ほんの僅かしか身体が隠れていないため、あまり意味はない。



「ほらほら、全然隠れてないから出ておいで」  
「う……うむ……／＼／＼」

東の言葉に千冬は顔を朱に染めながらゆっくりと現れた。  
一瞬だけ見た後とは言葉、千冬がピンク色のドレスを着ていること  
に改めて竜馬は言葉を失い、まじまじと千冬を見る。

「は、恥ずかしいからあまり見るな／＼／＼」  
「ああ、すまん」

顔を赤くしながら千冬が言つと竜馬は頷き答えた。  
その光景を東はニヤニヤと笑みを浮かべながらビデオカメラで撮  
影していく。

「それじゃあ、始めよっか」

そう言いながら東は身体を回転させる。  
10回転ほどしただろうか、いつの間にか東の服装は1人不思議  
の国のアリスから神父服へと変わっていた。  
その間、いきなり東の服装が変化したことに驚き竜馬と千冬は何  
度も眼を擦り首を傾げていた。

「（いつの間に……？）」「」

そんな2人を尻目に東は用意を進めていく。

「え〜つと………なんかめんどくさいからちやちやっつと聞いちや  
うよ 貴女は生涯この者を旦那として病めるときも、健やかなる  
ときも共にあることを誓いますか？」

「……飛ばしても良いのか？」

「ち、誓います……」

東の言葉に竜馬は呆れながら尋ね、千冬は答える。

光はそんな様子を見ながら部屋の隅で片腕を重剣に変えて床を叩きいじけている。

「次はりよー君だね。貴方は生涯この者を妻として病めるときも、健やかなるときも共にあることを誓いますか？」

「勝手にあだ名つけてるし……誓います」

東のついたりよー君と言うあだ名に竜馬は溜め息を吐き答える。

この時、部屋の隅からバガンツ！と言う音が聞こえてきたのは気のせいだと思いたい。

「それではお待ちかね　誓いのキスを」

「さて、結婚式体験だよな？　そこまでしたら体験じゃないよな？」

「き、ききき、キス!？」

東の言葉に竜馬はすかさず聞き返し、千冬は赤面する。  
そんな2人を無視して東は2人の身体を拘束していく。

「おい、こら!？」

「き、キス……キス……」

竜馬は慌てて逃れようとしたが後の祭り、すでに固く固定され動くことは叶わない。

千冬に至っては赤面したままうわ言のように呟いている。

「はい　準備はオツケー」

「ほ　ど　き　や　が　れ　!?!」

竜馬は全力で殺気を放つが東はそれを全く無いものとして受け流してしまう。

ちなみに千冬は一瞬、ほんの一瞬だけ身体を震わせたが、すぐさま赤面しうわ言のように「キス……キス……」と呟いていた。

「ではでは　誓いのキスを」  
「させ、るか!!」

東が背後に回らないように竜馬は身体を捻って横を向く。  
しかし、東は竜馬ではなく千冬の背後に回り込んだ。  
東のその行動に竜馬は不審そうに眉をひそめる。

「せゝの、えい」  
「うお、危なっ!?!」

掛け声と共に東は千冬の身体を背後から押す。  
勿論、千冬は呟いていて自分が押されたことに気づいていない。  
東の行動に驚きながら竜馬は拘束された身体を無理矢理に動かして千冬の前に移動する。

「ありやりや、口と口じゃなくてちーちゃんがりよー君のほっぺにキスになっちゃった」

「う……あう……／＼／＼／＼」

ビデオカメラを構えながら千冬は残念そうに呟く。  
竜馬と千冬は互いに顔を見合わせ赤面する。

この時、再び部屋の隅からバガンツ!と言う音が聞こえてきたが2人の耳には入らなかった。

こうして、2人の結婚式体験は終わる。

side out

side 魔神竜馬

「／／／／」

帰りの電車で俺と千冬は無言で顔を赤くしていた。

あんなことがあったせいで何だか気まずい。

こんな時どんなことを言えばいいんだ。

口と口じゃなくて良かったな、とかか？

いや、それは当たり前すぎるし……

と言うか俺とキスするなんて千冬は嫌だったんじゃない……

「……竜馬／／／／」

「な、なんだ……？」

思考の海に潜っていると千冬が名前を呼んできた。

俺はできるだけ平静を装い答える。

「その……なんだ……い、嫌ではなかったからな？」

「え……」

千冬の言葉に俺は呆けてしまい、どうやってIS学園に戻ったのか覚えていない。

ただ、学園に着くと同時に眼のハイライトが消えた雪が走ってきた、ISを装備していないはずなのに俺に追い付いて詰問してきたのは軽く恐怖だった。

〜霊使い達の雑談所〜

感想ありがとうございます。

ウイング様、ルシフェル様、カイ・R・銃王さん、妖気様、霊宮空  
刀様、蒼影様、月光閃火様、鉄槌の騎士様感想ありがとうございます。  
す。

竜王「ラブコメ？は書きにくいや……」

竜姫「ホントだね」

竜馬「にしても、感想が多かったな？」

竜王「確かに。さて、バカテストの回答に行ってみよう」

バカテスト

- ・冬至に食べると良いものは？
- ・土用の丑の日に食べると良いものは？
- ・？なのはシリーズ？の、使い魔アルフの素体となっている動物は？

ルシフェル様

・確か『ん』がつく方がいいですよね  
南瓜とか定番ですね

・こつちは『う』がつく食べ物がいんですよ  
まあ代表はうなぎ

・狼ですねw

竜王「やっぱり簡単だったみたいだな」

竜姫「たまに冬至を知らない人もいるけどね」

カイ・R・銃王さん

一 かぼちゃ

二 うなぎ

三 おおかみ

竜王「こちらも正解」

竜姫「ひらがなだと可愛く見えるよね」

「こんにちは！」

竜王「あ、カイ・R・銃王さんのところよりカイと空が来ました」

カイ「束さんは……（呆）」

空「誰にも止められないわね」

竜王「それが束クオリティWWW」

妖気様

・冬至に食べると良いものは？

ミイラ「……なんだっけ？」

・土用の丑の日に食べると良いものは？

ミイラ「うなぎだったかな。」

・？なのはシリーズ？の、使い魔アルフの素体となっている動物は？

ミイラ「ティンダロスの獵犬。」

竜姫「いつのまにかミイラが答えてる!?!」

竜王「最後のティンダロスとか言うのはクトゥルフ神話らしいな」

竜馬「……………」

竜王「どうした?」

ミイラ「たぶん俺に着いてきた執務官の幽霊が…………」

竜馬「いいやああああ!!!!」

竜姫「全速力で逃げたね」

ミイラ「反応が面白いからか追いかけてったぞ?」

竜王「そのうち大規模魔法を使うかもな」

蒼影様

・冬至に食べるといいのは南瓜だったはず  
・丑の日に食べるといいのは鰻だったよつな  
・アルフの素材は狼、塩、胡椒、オリーブオイル、夢、希望、いい加減さ、愛情

竜王「アルフが3分間クッキングレベルWWW」

竜姫「それのできるなら私も創りたいな」

竜王「確かにな」

月光閃火様

- 1 ・かぼちゃ、漢字では『南瓜』
- 2 ・うなぎ
- 3 ・狼

竜王「こちらも正解」

竜姫「束に撃たれたのに平気みたいだね？」

竜王「頑丈な身体だな。さて、今日は誕生日でした」

竜姫「記事にて祝いの言葉ありがとうございます」

竜王「それでは？闇を狩る少年？続きます」

バカテスト

・新年に向けて抱負を四字熟語で答えよ。(例・一意専心)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6527n/>

---

闇を狩る少年

2011年12月21日23時50分発行